神宮司廳藏版

古事類苑

官位部一

古事類苑刊行會

古事類苑

官位部第一冊目錄

官位部一

古代官職一

古代官職總載　一

名稱　官職起原　祭政一致

官分文武　世襲官職　雜載

大臣大連　二

申食國政大夫　棟梁之臣

執政　大夫　侍臣[併入]

名稱　初見　並置大臣大連　專置大連　專置大

臣　雜載　○申食國政大夫　棟梁之臣　執政

大夫

侍臣

官位部二

古代官職二

伴造上　二五

名稱　中臣部　忌部　猨女　神服部長幡部　神麻績部　倭文部　卜部　神部　祝部　巫部　日祀部　日置部　神宮部　語部　大伴部　久米部　靫部　門部　物部　大刀佩部　隼人　解部　海部海人　山部　田部　春米部　税部　民使　園部園人　藏部藏人倉人女　商長　船長　史部　國史

官位部三

古代官職三

伴造下　御名代　御子代〔併入〕

膳部膳夫　大炊部　水取部氷部　酒部酒人、　網部江人　鳥取部　鳥養部　鵜養部　鷹甘部　犬養部　猪甘部　宍人部　馬飼部馬工　服部臭服　錦部　衣縫部　染部　漆部　畫部畫師　鏡作部　鍛部　玉作部　弓削部　矢作部　的部　楯縫部　靫編部　猪部　爪工　鞍部　車持部　船官　猪名部木工　土師部贄土師部　陶部　石作部　遊部　藥師　吉志部　譯語　私部　乳部　湯坐部湯人　掃部　部曲品部　家部　民部

○御名代　御子代

官位部四

古代官職四

國造 一三九

君別 縣主 稻置 村主 東國都督 筑紫大宰 國宰 任那宰 新羅宰 百濟宰 夷守〔併入〕

名稱 廢置 職掌 補任（大國造 縣造 女國造 贈國造 島造）
兼職（帶神主 帶兵衞 帶郡司） 敍位 賜姓 待遇 領地
領民 國造田 資人 相爭國造 貶姓 國造記
雜載 ○君別 縣主（大縣主） 稻置 村主 東國
都督 筑紫大宰 國宰 任那宰
吵喇國守 新羅宰 百濟宰 夷守

官位部五

令制官職一

令制官職總載 一八七

官位名稱 官制參酌唐制 官有官省職寮等別
職有左右大中少別 四等官 品官 雜任 史生
掌 雜色 使部（伴部） 令外官 文武官 內外官
職事官 權官 兼官 前官 別當 撿挍 攝判
總官 總省 管隸 被管 被攝官 勅任奏任判
任判補 官位相當 唐名 劇官 閑官 重任

重職　温職　冷官　顯官　要籍駈使　世職　任

官新舊稱呼　武家官位　人名用官職名　工匠用官職名

贈官位　名稱贈官位制贈官位儀贈位記贈位井賜封贈生前當賜之官位贈本官本
位年忌贈官位累贈官位侍讀贈官位書述贈位長吏贈位成功贈位死事贈位告害贈
位戰功贈位遣外國使贈位外國使贈位歸化人贈位慰怨魂贈官位傷冤贈
位親王諸王贈官位帝戚贈官位爲立后贈官贈官位例婦女贈位雜載

官位部六

令制官職二

神祇官

名稱　所在　沿革　廳舍　齋院正廳南廳西廳東舍南廳代曹
司柏殿御帶殿齋部殿官庫東院東院正廳後廳御卜所小忌殿　官地

官印　職員　職掌　伯大少副大少祐大少史史代史生官掌年預公文
政所職中臣忌部中臣女忌部代神部宮主宮主代龜卜長上龜卜得業生卜部
神琴師神琴生神笛生御巫御巫代猿女戸座御火炬炊女
使部卜部厮丁　補任　用途　供給　雜載

二七五

官位部七

令制官職三

太政官上　三六九

名稱　初見　沿革　殿舍　官廳　東廳　四廳　辨官廳　宮曹司　大臣直廬　納言曹司　辨官曹司　朝所　文殿　官庫　官厨　造曹司　外記廳　外記曹司　結政所　外記文殿

官印　職員　職掌　三公　太政大臣　大師　太政大臣禪師　左右大臣　內大臣　紫微內相　內臣　忠臣　准大臣　知太政官事　大臣禪師　大納言　權大納言　中納言　權中納言　員外中納言　參議　權參議　准參議　參議代　非參議　少納言　員外少納言　權少納言　例少納言　少納言代　非少納言　外記　權外記　外記代　辨　權辨　員外辨　辨代　史　史生　史生代　官掌　官掌代　政官使部　召使　官厨家別當　及預主　官文殿別當　及公文預案　外記文殿役

官位部八

令制官職四

太政官下　四八一

國事御用掛　總裁　議定　參與　參豫[併入]

補任　座次　待遇　用途　雜載　○國事御用掛　總裁　議定　參與　參豫

官位部九

令制官職五

攝政　五二九

名稱（政不帶大臣）　上古攝政　職掌　補任（天皇元服以後爲攝政歷爲攝政攝）　讓攝政　辭攝政　准攝政　待遇　雜載

關白　內覽附　五六〇

名稱　阿衡　關白起源　補任（歷爲關白關白不帶正官）　讓關白　罷關白　待遇　攝關渡領　雜載

附內覽　六二四

名稱　內覽作法　內覽例　關白不內覽　去關白後仍爲內覽　雜載

官位部十
令制官職六

議奏　六四三

名稱　始見　職掌　任免　役料

傳奏　六四八

名稱（奏南都傳奏大德寺傳奏長講堂傳奏）　武家傳奏　寺社傳奏（神宮傳奏賀茂傳奏石清水傳奏稻荷傳奏）　學習院傳奏　元服傳奏　踐

祚傳奏　即位傳奏　讓位傳奏　改元
傳奏　八講傳奏　凶事傳奏　雜載

官位部十一

令制官職七

中務省　六八三

名稱　廳舍　省印　職員職掌　補任　侍從　次侍從
擬侍從　非侍從　出居侍從　侍從所　侍從　酒番侍從　侍從厨　內舍人　內記　內記
史生　監物　監物主典　監物史生　主鈴　主鈴直丁　典
鎰　史生　省掌　扶省掌　使部　用度

官位部十二

令制官職八

中宮職　七四一

皇后宮職　皇太后宮職　太皇太后宮職
紫微中臺　坤宮官〔併入〕

名稱　廳舍　職印　職員職掌　補任　舍人　女
孺　史生　職掌　使部　作器手　中宮官屬
○皇后宮職　皇太后宮職　太皇
太后宮職　紫微中臺　坤宮官

大舍人寮　七五五

名稱　沿革　廳舍　職員職掌　補任　大舍人
史生　寮掌　大歌生　使部　直丁　用度

圖書寮　七六六
名稱　廳舍　寮印　職員職掌　補任　史
生　寮掌　工人　雜色生　使部　用度

內藏寮　七七三
名稱　廳舍　寮印　職員職掌　補任　史生　寮
掌　藏部　御藏守　舍人　工人　使部　直丁
驅使丁　仕丁　別
當　用度　雜載

縫殿寮　七九一
名稱　沿革　廳舍糸所　寮神　職員職掌　補任
史生　寮掌　宮人　女孺　染手　縫部　使部
仕女　猿
女　用度

陰陽寮　八〇〇

內匠寮　八〇〇
名稱　沿革　廳舍　職員職掌　補任　史
生　寮掌　工人　使部　雜戶　雜載

畫工司 八〇八
內藥司 八〇八
內禮司 八〇八
職員職掌 補任 主禮 直丁 廢司

官位部十三

令制官職九

式部省 八一一
名稱 沿革 廳舍 省印 職員職掌 補任 史生 書生 省掌 扶省掌 使部 直丁 用途 雜載

大學寮 八三二
散位寮 八三二
名稱 沿革 職員職掌 補任 史生 直丁

治部省　八三四
名稱　沿革　廳舍　省印　職員職掌　補任　史生　書生　省掌 省掌扶掌　使部　解部

雅樂寮　八四一
名稱　廳舍　寮印　職員職掌　補任　雅樂諸師　歌人　歌女　笛吹　樂生　樂戸　史生　使部　直丁　用途

內教坊　八五一
名稱　所在　職員職掌　妓女　女孺　用途

大歌所　八五五
所在　職員　用度　雜載

樂所　八五七
名稱　所在　職員 樂所生　樂所始　雜載

玄蕃寮　八六二
名稱　廳舍　職員職掌　補任
史生　寮掌　使部　寮丁

諸陵寮　八六八
名稱　沿革　廳舍　寮印　職員職
掌　補任　土部　史生　使部

葬儀司　八七一
職員職掌　直
丁　廢司

官位部十四

令制官職十

民部省　稟院〔併入〕　八七三
名稱　沿革　廳舍　圖帳　省印　職員職掌
補任　史生　省掌省掌扶　使部　仕丁　○稟院

主計寮　八八六
名稱　廳舍　寮印　職員職掌　補
任　算師　史生　寮掌　使部

主稅寮　八九二
名稱　廳舍　寮印　職員職掌　補任　算師　史生　寮掌　使部

兵部省　八九七
名稱　沿革　廳舍　省印　職員職掌　補任　史生　書生　省掌 扶掌書　使部

隼人司　九〇九
名稱　沿革　廳舍　司印　職員職掌　補任　史生　使部　隼人　用途　領地

兵馬司　九二三
職員職掌　補任　史生　廢司

造兵司　九二四
職員職掌　補任　史生　工戸　才長上　司印　廢合

鼓吹司　九二六
職員職掌　補任　史生　樂師　吹部　鼓吹戸　直丁　廢司　雜載

主船司 九二九
職員職掌 補任 船守戶 廢絕
主鷹司 九三〇
沿革 職員職掌 史生 司丁 犬飼 餌取 鷹戶

官位部十五

令制官職十一

刑部省 九三三
名稱 沿革 廳舍 省印 職員職掌 補任 史生 判事 判事 判事 大屬 判事 少屬 判事 史生 解部 省掌 使部 仕丁 雜載
贓贖司 九四六
職員職掌 補任 廢司
囚獄司 九四七

名稱　廳舍　職員職掌　補任
史生　物部　使部　仕丁

大藏省　九五一
名稱　沿革　廳舍長殿率分所　省印　職員職掌
補任　史生　藏部　價長　典履　典革　縫女
省掌扶省掌　使部
雜戶　雜載

典鑄司　九六七
職員職掌　雜工戶　廢司

掃部司　九六八
沿革　職員職掌
史生　仕丁

漆部司　九六九
沿革　職員職掌
補任　雜戶

縫部司　九七〇
職員職掌　補任
廢司

織部司　九七〇
名稱　廳舍　寮神　司印　職員職掌　補任　史生　物受　挑文師　織手　使部　雜色　雜戶　用途

官位部十六

令制官職十二

宮內省　九七七
名稱　沿革　廳舍　省神　省印　職員　職掌　補任　史生　省掌　使部　雜載

大膳職 醬院【併入】　九八八
名稱　沿革　廳舍　職神　職印　職員職掌　補任　史生　職掌　主醬　主菓餠　膳部　網曳長　江長　使部　仕丁　大膳職率分勾當　調庸進物勾當　造器手　筑摩御厨長　雜戶　用途　雜載
○醬院

筥陶司　一〇〇三

職員職掌　直丁
宮戸　廢司

木工寮　一〇〇四
名稱　沿革　廳舍　職員職掌　補任　別當　史
生　寮掌　算師　諸工　鍛冶戸　使部　仕丁
駈使丁　用途　職
員供給　雜載

鍛冶司　一〇一八
沿革　職員職掌
補任　鍛戸

土工司　一〇一九
職員職掌　泥
戸　廢司

大炊寮　供御院併入　一〇二〇
名稱　廳舍　寮神　職員職掌　補任　史生　寮
掌　使部　炊部　仕丁　女丁　雜戸　用途　雜
載○
供御院

官位部十七

令制官職十三

主殿寮　一〇三一
名稱　沿革　廳舍　寮神　職員職掌　補任　史生　女官　殿部　使部　仕丁　火炬小子　用途
官奴司　一〇四四
職員職掌　補任　直丁　廢司
主油司　一〇四五
職員職掌　補任　廢司
典藥寮　一〇四六
掃部寮　一〇四六
名稱　廳舍　職員職掌　補任　史生　寮掌　女孺　使部　掃部　作手　雜色　用途　雜載
內掃部司　一〇五四
職員職掌　補任　駈使丁　廢司

正親司 一〇五五
名稱 司印 職員職掌 補任 別當 史生 使部 用途 雜載
內膳司 御厨子所 進物所併入 一〇五九
名稱 沿革 廳舍 司神 職員職掌 補任 史生 膳部 食長上 料理長上 網曳長 江長
御炊 炊夫 作器手 使部 仕丁 別當 御厨別當 筑摩御厨 贄殿 用途 ○御厨子所 進物所
園池司 一〇七八
職員職掌 史生 使部 園戶 直丁 司神 司印 廢司 雜載
造酒司 酒殿併入 一〇八〇
名稱 廳舍 司神 職員職掌 補任 史生 酒部 使部 直丁 酒戶 用途 雜載 ○酒殿
釆女司 一〇八六
名稱 沿革 廳舍 職員職掌 補任 釆部 史生 使部 用途

主水司　一〇八八
名稱　廳舍　司神　司印　職員職掌　補任　史生　使部　水部　御井守　運氷丁　水戸　用途　領地

內染司　一〇九六
職員　職掌　補任　司丁　廢司

官位部十八

令制官職十四

女官　一〇九七
名稱　女房品格　內侍司（職員職掌　尚侍　典侍　權典侍　掌侍　權掌侍）　女史　用途　藏司　書司　藥司　兵司　闈司　殿司　掃司　水司　膳司　酒司　縫司　采女　得選　氏女　女孺　命婦　御櫛笥殿別當　刀自　女藏人　東豎子　樋洗　長女　御厠人　半物　雜仕　女官厨　雜載

古事類苑

官位部一

古代官職一

古代官職總載

本朝官職ノ制、時運ノ推移ト共ニ、時ニ變態ナキコト能ハズ、固ヨリ古今ヲ通ジテ一編ト爲シ難キモノアリ、今之ヲ大別シテ公家武家ノ二トシ、公家ヲ分チテ又二編トス、卽チ神代ヨリ孝德天皇ノ卽位三年マデヲ古代官職編トシ、同天皇ノ大化元年ヨリ孝明天皇ノ慶應三年マデヲ令制官職編トス、而シテ又別ニ武家ヲ分チテ三編トス、卽チ後鳥羽天皇ノ元曆元年ヨリ後醍醐天皇ノ元弘三年マデヲ鎌倉職員編トシ、同天皇ノ延元元年ヨリ正親町天皇ノ天正元年マデヲ足利職員編トシ、後陽成天皇ノ慶長五年ヨリ孝明天皇ノ慶應三年マデヲ德川職員編トス、而シテ建武中興特置ノ官ノ如キハ、令制官職編ノ後ニ載セ、織田豐臣二氏ノ職員ノ如キハ足利職員編ノ後ニ載セタリ、但シ事實ノ前後二編ニ貫聯スルモノニ至リテハ、固ヨリ其一方ニ併載シテ、必シモ此限ニ拘ハラザルモノアリ、

官職ノ起原、遠ク神代ニアリ、天祖天照大神ノ、天石窟ニ幽居シ給フヤ、群神大ニ憂懼シ、天高市ニ會シテ祈請ノ方ヲ議ス、是ニ於テ中臣氏ノ祖天兒屋命ハ祝辭ヲ宣ベ、忌部氏ノ祖天太玉命ハ幣帛ヲ造リ、猿女ノ祖天鈿女命ハ神樂ヲ奏シ、以テ諸神各〻其職ニ供ス、是レ天上ノ事タリト雖モ、乃チ臨時分職ノ濫觴トス、天孫瓊々杵尊ノ、葦原中國ニ降臨シ給フヤ、五部神其左右ニ配侍シ、各〻其職ニ奉ズルコト、一ニ天上ノ儀ノ如シ、時ニ大伴氏ノ祖天忍日命、來目部

ノ祖天津久米命ノ二人、仗ヲ帶シテ其前後ヲ衞護ス、而シテ諸神ノ裔孫永ク其職ヲ襲ギ、世世王事ニ勤ム、本邦官職ノ制、實ニ此ニ原クモノト謂フベシ、

泰古官職ノ制、一族一職ニシテ、各族永ク其業ニ安ンジ、世職世官ニシテ、敢テ他ヲ顧望セザリシカバ、職卽チ氏ニシテ、姓卽チ官ナリキ、例ヘバ神人ノ中ヲ和諧スル一族ノ長ヲ、中臣連ト云ヒ、神祇ニ齋戒奉仕スル一部ノ首ヲ、忌部首ト云フガ如キ是ナリ、而シテ各部族必ズ其姓氏アリ、中臣忌部ハ其氏ニシテ、連首ハ其姓ナリ、姓ハ爵ノ如ク、氏ハ官ノ如シ、尙ホ姓氏ノ事ハ別ニ其部アリテ之ヲ詳ニセリ、

名稱

〔類聚名義抄 六七〕官 古寛反 ツカサ ミヤツカヘ ミヤツカサ 和クヮン

〔伊呂波字類抄 地儀部 付居處〕官 ツカサ 司 同

〔日本書紀 神代一〕是時素戔嗚尊、自天而降、到於出雲國簸之川上、〇中略 因勅之曰、吾兒宮首(シヤノツカサ)者、卽脚摩乳、手摩乳也、

〔倭訓栞 前編 十六〕つかさ 神代紀に首をよみ、常に官司をよめり、萬葉集に、山のつかさ、野づかさ、岸のつかさ、屋づかさ、市のつかさなどいふは、高き所をいふなれば、もとは積重るの義にて、そこを目當とし本處とするより、官司も名づくる成べし、

〔伊呂波字類抄 辭字部〕掌 ツカサドル 劭 司 管 主 尙 典 領 尸 職 已上同

〔倭訓栞 中編 十五〕つかさどる 掌、主、典、司等をよめり、官を乘〇乘恐乗誤の義なるべし、今物のつかさをとるといへり、

〔延喜式 八祝詞〕廣瀨大忌祭

王等臣等〇〇百官人(モヽノツカサヒト)等、倭國乃六御縣能刀禰男女爾至萬氏、〇下略

〔倭訓栞 前編 十六〕つかさびと 日本紀に吏をよめり、官人の義也、六月祓に諸臣百官人、道饗祭

祝詞に、臣等(マチキンタチ)百官人等(ツカサヒトタチ)といへるは、臣は一位より五位までをいひ、官人は六位以下の諸官人をいふなるべし、

〔古事記中 應神〕爾大雀命、○中略詐以舍人爲王、露坐吳床、百官恭敬、往來之狀、既如王子之坐所、

〔古事記傳三十三〕百官は、都加佐豆加佐(ツカサヅカサ)と訓べし、續紀九宣命に官々(ツカサヅカサ)、また百官人(ツカサビト)ともあり、大祓詞に、天皇我朝廷爾、仕奉留官官人等などあり、書紀に、百官、百僚、有司など、皆如此訓り、又もゝのつかさとも訓り

〔類聚名義抄一人〕位 胡愧反 クラヰ 和、井、

〔倭訓栞前編八〕くらゐ 位をよめり、續日本紀に座坐と書せり、

〔古事記下 履中〕即造假宮、忽爲豐樂、乃於其隼人賜大臣位、百官令拜、

〔古事記傳三十八〕大臣位、大臣は位には非るを、位と云は古言なり、官と位と別れて、後の心を以て思へばいかゞなれども、其は後世の心なり、古は位は即官に在て、別には有らず、況や大臣は、古は官には非ず、此由は上に委云り、褒稱にて、其にも自其位在しなり、書紀皇極卷に、擬大臣位、天智卷に、授大織冠與大臣位、續紀廿五詔に、本乃大臣乃位仁仕奉之武流事乎、廿七詔に、右大臣藤原朝臣遠娑、左大臣乃位授賜比云々、吉備朝臣仁右大臣之位授賜、卅一詔に、太政大臣之位爾上賜比など、官と位とは別にある世になりてすら、なほ古言のまゝに如此言り、三代實錄卅三に、辱大將之位など見え、物語文などにも、官を某位と云ること多し、

〔古事記下 允恭〕天皇愁天下氏氏名名人等之氏姓忤過而、○中略定賜天下之八十友緒氏姓也、

〔古事記傳三十九〕古は氏々の職業各定まりて、世々相繼て仕奉りつれば、其職即其家の名なる故に、氏々の職業は、もと其先祖の德功に因て、うけたまはり仕奉るなれば、是も賛たる方にて名なり、即其職業を指ても名と云り、さて其は其家に世々に傳はる故に、其名即又姓の如し、

〔十訓抄十一〕第十可庶幾才能事

或人云、本より其道々の家に生れぬればさる事也、さなき類も程々に付ては、能はかならず有

官職起原

べき也、中にも氏をうけたる者、藝をろかにして、氏をつがぬ類あり、道にあらざる類、能により
て道にいたる德もあれば、氏をつがんが爲、道にいたらんがために、彼も是もともにはげむべ
し、〇中略
賴政三位は多田滿仲が末にて、武藝其氏を繼りといへども、和歌の浦波立をくれざりけり、

〔古今著聞集〕十六興言利口〕順德院御位の時、或所の格勤者、よりあひて雜談しけるに、內裏の番かは
り、此たびは以の外にきびしくてなどいふを、ひとりが云やう、いかにきびしくとも、我は高あ
しだはきてとをりてん、すこしもとゞめらるまじといひければ、のこりのともがら、なりかゝ
りておこづきけり、〇中略此主ことにたかきあしだはきて、二條油の小路を南へ通るに、あんの
ごとく大番のもの、あの男のあしだはなどいふを、すこしもきゝ入ぬやうにて、にらみまはし
てなを行を、大番の者はしり出てとらへんとする時、此ぬしきしよくかはりたる事もなくて、
さもあらず、あたらしき事いふ大番かな、南圓堂の寄人の、陣口ものはきて通る事をばしらざ
りけるか、大番をうけたまはる程のものにて、いかでかはわが氏をば存ぜざりけるといひて、
こともせざりければ、主人の武士、やそれ〳〵南圓堂の寄人は、物はきて通るくるしからぬ
事、それとゞまれとなまり聲にて高聲にをきてければ、はしりたちてとゞめけるもの歸りに
けり、

〔公卿補任〕公卿傳序
蓋上古風淳、化レ民以レ德、雖レ有二輔弼一、猶無二官名一、後世漸澆、莅レ人以レ禮、始分二職務一、遂建二台司一、於レ是任重二棟梁一、効
深二舟楫一、上輔二元首一、下撫二黎蒸一、用レ能安レ上治レ民、時康世泰、實知二燮理之德盛一矣、獻替之功大焉、〇下略

〔延喜式〕一〕歷運記今名二公卿記一
神武天皇御世有二爪牙之臣一、無二臣連之任一、初天皇東征之時、勅二大伴氏遠祖日臣命一、帥二大來目一、督二將元戎一、

遂誅諸虜、忠功尤盛、而未立官號、

〔日本書紀神代一書曰、○中略乃以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子、又因定天邑君、卽以其稻種始殖于天狹田及長田、

〔釋日本紀六述義〕天邑君

私記曰、問、此號如何、答、所說天者是例文、美大之辭也、言此時初定居邑之君也、是在地下而所定也、非謂在天上也、是官職初置之本也、

〔日本書紀神代一〕素戔嗚尊自天而降、到於出雲國簸之川上、○中略遂到出雲之淸地焉、○中略於彼處建宮、○註略乃相與遘合、而生兒大己貴神、因勅之曰、吾兒宮首者、卽脚摩乳手摩乳也、故賜號於二神曰稻田宮主神、

〔釋日本紀七述義〕稻田宮主神

先師申云、今世天子后宮主職者、此濫觴也、攝問云、當時宮主者、非稻田宮主神之苗裔歟、大仰云、素戔嗚尊兒宮首、賜宮主之號、唯官職之濫觴也、必不可爲彼神之苗裔者也、

〔新撰姓氏錄序〕蓋聞、天孫降襲、西化之時、神世伊開、書記靡傳、神武臨夏、東征之年、人物漸滋、梟帥間起、洎乎神劒下授、靈烏于飛、歸首星陳、群凶霧散、膺受明命、光宅中州、泰階平齊、海內淸謐、既而謹德考功、胙土命氏、國造縣主始號於斯、

〔古史徵一夏開題記〕國造縣主、始號於斯、と有れど、此兩號などは、決めて神世よりの稱なるべく所思ゆ、

〔大日本史職官一〕職官之制、其所由來者久矣、泰古天祖之御天原也、八十萬神同寅協恭、各執其事、以翼亮天業、職官之象、於是乎見矣、天孫之蒞中國也、天祖命天兒屋命、天押日命諸神、翼衛道從、自後神裔世承其職、以輔贊天子、文武世官之制、自是而興矣、及太祖平定中原、封功臣爲國造縣主、封建之制、

祭政一致

於是乎始矣、

〔古事記傳二十九〕官職の事、神代より此ありて、宮之首、膳夫、齋主などあるたぐひ、皆官也、又五部祖神は、いはゆる文官、大伴連久米直二氏祖神などは、いはゆる武官なり、又中臣忌部など云稱も即官職なり、さて大倭京となりて、ます〳〵品々の職見えたり、某部某部と云もの、中に官職なる多し、後世の官の中にも辨、掃部、大炊、主殿、主水、靱負など云は、後にまうけたる名に非ず、古の官名ののこれるものなり、さて八十伴緒と云しは、即漢籍に百官と云が如し、然れどもかの戎國の、時時にあらぬ人を擇び擧て官に任すとは、大く異にして、皇朝の上代には、各其職を世々に傳へて仕奉りし故に、其家の職を即姓氏に負るぞ多かりける、かゝれば、官職は神代よりしてありつるを、後世とそのさまの異なるを以て、後人官職なることを知らず、上代には官職なかりしが如く思ふめり、さて上代には、末の品々の官職はありしかども、主たる天下の大政の官の名は無りしなり、其は如何と云に、末の種々の官職こそ各其名はあるべきことなれ、大政を執申す人におきては、天下の諸の事を統掌て何と局れる事なければ、其と分て官名はあるまじきことわりなればなり、故御世々々に、其人はありながら、其官名はなかりしなり、書紀に景行天皇の御世に、建内宿禰を爲棟梁之臣とあるなども、官名には非ず、其由傳廿二の十七葉に委云るが如し、又大臣大連も、上代のは官名に非ること、上に云るが如し、舊事紀に記せるは、論ふに足らざることなり、

〔神皇正統記皇極〕上古は神と皇と一にまし〳〵しかば、祭をつかさどるは、すなはち政をとれるなり、政の字の訓にても志るべし

〔神皇正統記神武〕人皇第一代神日本磐余彥天皇と申す、後に神武と名つけ奉る、○中略天下ことごとくたいらぎにしかば、大和國橿原にみやこをさだめて宮づくりす、その制度天上の義のごとし、天照大神よりつたへたまへる三種の神器を大殿に安置し、床をおなじく志まします、皇宮神

宮ひとつなりしかば、國々の御調物をも齋藏にをさめて、官物神物のわいだめなかりき、天兒屋根命の孫天種子命、天太玉命の孫天富命、もつはら神事をつかさどる、神代の例にことならず、

〔職原抄上〕昔人皇最初、神武天皇定都於大和國橿原、○中略此時天兒屋根命孫天種子命、專主祭祀事、是乃執朝政之儀也、第十代崇神天皇漸畏神威、鑄改鏡劒、奉安置神代之靈器於別所、是皇居神宮相分之初也、垂仁天皇御宇天照太神鎭坐伊勢國度會郡五十鈴河上之時、命中臣祖大鹿島命爲祭主、其後葉代代爲祭主、○中略然乃祭官之職者、上古之重任也、

〔大日本史職官一〕泰古天祖之孫于天窟也、八十萬神大懼、會於天高市、使天兒屋命宣祝辭、天太玉命造和幣、天鈿女命掌神樂、群神奔走咸供其職、以致祈請焉、(日本書紀、古語拾遺、)天祖還御瑞殿、迺使大宮賣命侍御前、豐磐間戸神、櫛磐間戸神、護衛殿門、(古語拾遺、)天孫之莅葦原中國也、經津主命、建御雷命、膺將帥之任、蕩夷妖兇、天祖迺詔五部神、陪侍天孫、各奉其職、一如天上儀、又令天忍日命、天津久米命掌戎衛焉、職官之制、實原于此、而名分一定、不可復紊矣、(參取日本書紀、古事記、古語拾遺、)太祖平定中州、御橿原宮、天富命奉天璽鏡劒、安置正殿、天種子命奏神代故事、天神壽詞、道臣命、大久米命率大伴來目二部、守衛宮門、(大久米以下、考諸書書之、證見兵志、)可美眞手命率内物部、爲儀衛、四方國人來朝、以觀天位之尊、朝廷百官之制、於是始備矣、蓋神聖之道、重祀與戎、列祖列宗於此最致意焉、故太祖東征、祭禱天神、道臣命以上將爲齋主、綏靖即位、神八井耳命以皇兄爲忌人、若中臣齋部祖掌祭祀、大伴久米祖掌兵政、皆天祖所命、世居宰輔之職、是時神人未遠、祭政維一、事神臨民、官聯相屬、凡所以總攝内外、統御海寓、無不本乎敬神尚武之意、及後世、神祇官尙居百官之首者、亦其遺意也、(隱括日本書紀、古事記、舊事本紀、古語拾遺、職原鈔大意、)

〔古事記傳二十九〕後世に、國造と云號の、まれ〳〵に神社に遺れることは、まづ古は、神事國政一ッなりしを、孝德の御世より、國政は國司の知ことゝなれゝども、國の神事は、なほ元のまゝに、國造の知行ふ御制にて、續紀二に、爲班大幣、馳驛追諸國國造入京なども見え、其外にも國造の神事に預

官分文武

かゝること、諸書に多く見えたり、されば、其御制の遺りて、後終には、全神職の如くなれるなり、故既く類聚國史にも、此を神祇部にぞ收られたりける、

〔職原抄 下〕將帥之職、古今重之、所以分閫外之權也、〇中略本朝將帥之任、起於神代也、其初天照大神欲降天孫於豐葦原中國之時、遣經津主神、(又云、齋主神、香取神是也、)健雷神(鹿島神是也、)令平諸不順者云々、大物主神帥八十萬神昇天、天神勅曰、宜領八十萬神永爲皇孫奉護、乃使還降之云々、一書曰、事代主神八萬四千鬼類大神將也云々、又云、大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天槵津大來目、背負天磐靫、臂著稜威高鞆、手提天梔弓、天羽羽矢、及副持八目鳴鏑、又帶頭槌劍、而立天孫之前云々、神代之制粗可見矣、至于人代、神武天皇東征之日、物部氏祖道臣命爲軍帥、(古稱武士云物部、起於此云々、)崇神天皇十年、命四道將軍遣四方云々、將軍之號正起於此歟、其後景行天皇四十年、以皇子日本武尊爲大將軍、以武日命武彥命爲左右將軍、東征蝦夷云々、爾來征行之日、命將軍不可勝計、

〔大日本史 兵一〕太祖神武、恢弘天業、猛將謀臣、咸會風雲、奮其智勇、而道臣命掌大伴部之兵、大久米命掌來目部之兵、咸以世職、督將元戎、翦滅兇渠、元勳偉蹟、邈焉罕儔、及天下既平、大伴來目衞護宮門、掌其開闔、後世衞府之兵、自是而始矣、(參取古事記、日本書紀、古語拾遺、續日本紀、)

世襲官職

〔古事記傳 十五〕大伴連、〇中略此氏は、祖神天忍日命よりして、世々もはら武事を以て、皇朝の御守衞とある職なり、(後世の左右近衞大將、左右衞門督、左右兵衞督などの職の如し、然れば後の稱を以ていはゞ、かの中臣忌部五部などは文官、此大伴久米などは武官なり、然るを後には、文を尊ばるゝ故に、六衞府は、太政官より卑きを、上代には、武を尊ばれし故に、此氏など甚貴かりき、)

〔職官志 一〕王者之道、禮以成之、禮在官得其職、名位無忒、粵自天皇受命、君臣分定、淳古之世、猶有名位、蓋在文官曰臣、武官曰連、〇註略、下同、侍衞之官曰宿禰也、外任有伴造、糾合其種姓、有國造、鎭撫其民社、有縣主、勸課其農功、有吉士、知典其屬國、建官率如是、而官族皆世其祿、是以家存故事、子孫不忘、古史所載、尚可考見、昔大祖之方定中國也、乃有中臣及齋部之遠祖、以祀之與政其致維一、典宗社之禮、佐天

子于神器之側矣、物部連之遠祖、以宿禰掌環列之尹、董刑興兵、大伴連之遠祖、統率元戎、警衛宮城、及其他佐命功臣、莫不胙土分疆、長于國縣、以藩王畿、共其貢職、於是官族之世、克率舊服、纂厥祖考、無廢王命、賜姓命氏、姓因以官、氏乃以職、或以土邑、崇神帝愈勤王業、肇國服遠、而四方承道主之軍制、所在歸皇化、景行帝時、武內宿禰乃以材雄一世、號棟梁臣、益用於成務之朝、而爲大臣、冲哀帝之初、大伴連武持爲大連、大臣大連分職文武、其得賢相良將、於斯爲盛、宜哉世能濟其美、而有成功也、應神及仁德之際、實賴其力焉、烈烈而中國方致治、海外有截也、厥後大臣蘇我氏、大連物部氏、世官而爭權樹朋而相軋、用明、崇峻、推古、舒明、皇極之朝、以是陵夷而不振、靡靡而自萎、物部亡而蘇我專、宗社危難、其如累卵、然天顯明德、篤生葛城、佐以鎌子、鎌子中臣氏、其先實有功於國初矣、又能修祖德、遂奉天孫以討元凶、翼戴孝德再造帝室、天日之嗣罔絕、其功大矣、藤原氏之世祀也宜哉、孝德中興、置左右大臣、尋置八省百官、鎌子時猶以內臣用事於樞要、天智登極、遂昇爲內大臣、薨乃罷之、重其有功所嘗任、不輕授人也、當是時制令、又置太政大臣、以皇子爲之世方重名爵、故諸臣不得居是官也、太政大臣、左大臣、右大臣、所謂三公也、天武遵奉、益修典章、當時臣連宿禰之家、以其世官而職有弊、不可復用、乃因厥號分爲八姓、姓有登降、以寵世族、別制新官、頗擬唐焉、蓋亦時使然也、

〔古史徵一冬開題記〕いと上古には、其御依しの隨なる道の大同ひ行はれし故に、百八十の氏人、各々その家職を世々に傳へ來て、よく守り、その儀式のある時々事ごとに、豫て持分たる事の風を遂へず、大御命を待ちも待ずも仕奉りしかば、各々其業に精く、其場に集へば、やがて其儀式は自然のごと整ひて、諸司式儀式の典は錄し設け給ふまでも無りしを、○中略推古天皇の御世に、厩戸皇子の攝政の御擧として、漢風の威儀禮式を交へ行ひ給ひしより、えも知らぬ文飾儀のうち混り、稍稍に故實の舊式は變り初たるに、孝德天皇の御代に至りては、上古の舊より仕奉れる氏人の家家の職を改め去ちて、他人を訪ひ求めて、新に百官人を任給ひしかば、諸職の氏人、互に其職の替

雜載

れる故に、其事にたゞ〳〵しく、其度ごとに新なるが如有けむこと、其御代の史に記されたる趣、また制條官符の多有を見通して想像らるゝなり、

〔大日本史職官一〕凡太祖至中宗、官職之制、大連、大臣、臣、連、伴造、百八十部、國造、縣主、及山海之官、田牧之司、鎭蕃之宰、内外大小之員、建設措置、莫所不備、故能經綸締構、致千百年之隆治也、唯歷世綿邈、世官之家、或墜其職、貴族大姓、時匪其人、法制紊亂、積弊滋生、則不得不變通也、故大化更革、建八省百官、置國司郡領、一變封建而爲郡縣之治矣、然如中臣齋部之於神祇、大伴佐伯之於衞府、高橋阿曇之於内膳、國造縣主之於郡領、類名變而實不變、蓋兼封建郡縣之制而用之、所以斟酌古今、損益法度、施時措之宜也、參酌日本書紀、古事記、姓氏錄、續日本紀大意、

〔宋史四百九十一外國日本國〕

雍熙元年、日本國僧奝然、與其徒五六人浮海而至、獻銅器十餘事、幷本國職員令、王年代紀各一卷、○中略太宗召見奝然、存撫之甚厚、賜紫衣館于太平興國寺、上聞其國王一姓傳繼、臣下皆世官、因歎息謂宰相曰、此島夷耳、乃世祚遐久、其臣亦繼襲不絶、此蓋古之道也、中國自唐季之亂、寓縣分裂、梁周五代、享歷尤促、大臣世冑、鮮能嗣續、朕雖德慙往聖、常夙夜寅畏、講求治本、不敢暇逸、建無窮之業、垂可久之範、亦以爲子孫之計、使大臣之後、世襲祿位、此朕之心焉、

〔日本書紀十五顯宗〕元年四月丁未、詔曰、凡人主之所以勸民者、惟授官也、國之所以興者、惟賞功也、

〔日本書紀十七繼體〕二十四年二月丁未朔、詔曰、自磐余彥之帝、○神武水間城之王、○崇神皆賴博物之臣、明哲之佐、故道臣陳謨、而神日本以盛、大彥申略、而膽瓊殖用隆、及乎繼體之君、欲立中興之功者、曷嘗不賴賢哲之謨謀乎、爰降小泊瀨天皇之王天下、幸承前聖、隆平日久、俗漸蔽而不寤、政浸衰而不改、但須其人各以類進、有大略者不問其所短、有高才者不非其所失、故獲奉宗廟、不危社稷、由是觀之、豈非明佐、朕承帝業、於今二十四年、天下淸泰、内外無虞、土脈膏腴、穀稼有實、竊恐元々由斯生俗、藉此成驕、故令、

人擧廉節、宣揚大道、流通鴻化、能官之事、自古爲難、爰暨朕身、豈不愼歟、
〔日本書紀推古二十二〕十二年正月戊戌朔、始賜冠位於諸臣、各有差、　四月戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、○中略　七曰、人各有任、掌宜不濫、其賢哲任官、頌音則起、奸者有官、禍亂則繁、世少生知、剋念作聖、事無大少、得人必治、時無急緩、遇賢自寬、因此國家永久、社稷勿危、故古聖王、爲官以求人、○拾芥抄此下有爲人二字、太子傳、政事要略同、不求官、○中略　十三曰、諸任官者、同知職掌、或病或使、有闕於事、然得知之日、和如曾識、其以非與聞、勿防公務、

大臣大連　申食國政大夫　執政大夫　棟梁之臣　侍臣　併入

大臣ハ、オホオミト訓シ、臣姓ノ諸氏ヲ統領シ、大連ハ、オホムラジト訓シ、連姓ノ諸族ヲ統率ス、而シテ共ニ臣連二造ノ上ニ在リテ、天下ノ庶政ヲ總攬スルコト、後世ノ左右大臣ノ如シ、今其始ヲ尋ヌルニ、大臣ハ、成務天皇ノ朝ニ、武内宿禰ガ大臣ト爲リシニ起リ、其子孫相繼ギテ、世々之ニ任ジ、大連ハ、垂仁天皇ノ朝ニ、物部氏ヲ以テ之ニ任ジ、仲哀天皇ノ朝ニ、大伴氏ヲ以テ之ニ任ゼシヨリ、常ニ此二氏ヲ以テ此職ニ居ラシメタリ、時ニ大臣ヲ置ケバ大連ヲ置カズ、大連ヲ置ケバ大臣ヲ置カザリシニ、雄略天皇ノ朝、始テ大臣大連相並ビテ朝政ヲ執レリ、用明天皇ノ朝ニ、物部氏夷滅セラレ、大伴氏亦勢ヲ失ヒ、蘇我氏獨リ大臣トナリシヨリ、又大連ヲ置カズ、皇極天皇ノ朝ニ、蘇我氏亦亡ブルニ至リ、大臣モ亦廢セラレ、孝德天皇ノ朝、更ニ左右大臣及ビ内臣ヲ置ケリ、此餘申食國政大夫、棟梁之臣ノ如キハ、其實ニ就キテ之ヲ稱セシノミ、當時此官名アリシニハアラザラン、

〔日本書紀成務七〕三年正月己卯、以武内宿禰、爲大臣也、

〔日本書紀通證十二成務〕為大臣（倭名鈔、大臣、於保伊万宇智岐美、論語所謂大臣者、以道事君、不可則止、）

〔古事記中成務〕建內宿禰為大臣

〔古事記傳二十九〕大臣は、意富淤美と訓べし、（古の大臣は、皆知此訓べきなり、和名抄に、大臣の訓、於保伊万宇智岐美、太政大臣は、於保万豆利古止乃於保万豆岐美とあるは、後の制なり、凡て麻宇知岐美と云は、麻閉都岐美の音便に頼れたる唱なり、万豆岐美は、侍従の訓にも、於毛比止万知岐美とあれば、麻閉都岐美の、閉を略きたる唱なり、さて麻宇知岐美を、北山抄江次第などに、末不千君とあるは、宇の音を誤りて、不と假字を書るなり、此にもと音便なれば、必字と書べき例なるをや、さて寛幣苑の書綱と云ことは、書紀景行巻の歌に見えて、前君の意にて、天皇の御前に候ふ、公と云ことにて、臣等のことなり、萬葉一に、物部乃大臣とあるは、オホマヘツギミと訓べし、こは和銅元年、天皇（元明）の大御歌なり、そのかみ、既く如此唱へしにこそ、さて後世には、大臣をおとゞと云、そは殿舍をも云と一にて、大殿の訛れるなり、又物語書などに、おほいどのと云るも大殿なり、）書紀に三年春正月、以武內宿禰為大臣也、初天皇與武內宿禰同日生之、故有異寵焉とあり、さて大臣と云號は、師（〇賀茂眞淵）も云れたる如く、後世の如き官名には非ず、たゞ臣と云に大てふ美稱を加へて、尊み賜へるにて、（漢籍に大臣と云ことあるを取れるなりなど云は、古を知らぬ者のみだりごとなり、）連姓の人に大連と云號を賜へると同じ、（大連も官名には非ず、故此號は連姓の人に限れることなり、なほ大連の號の事は、下巻玉穗宮段、荒甲大連の下、傳四十四の十六葉に委云べし、なほ尸に大てふ言を加へたる例は、伊邪河宮段、又朝倉宮段に、大縣主と云見え、續紀には大國造、大忌寸、大宿禰など云も見ゆ、）されば此號は、古は何れの御代のも臣姓の人に限れり、（建內宿禰は、いまだ姓氏を云ること見えざれども、其子等の子孫、皆臣姓なるを以て見れば、必此人も臣と云しなるべし、そは必しも姓に著たる尸ならでも、然呼ぶことは固のことぞかし、〇中略）孝德巻初に、以阿倍內麻呂臣為左大臣、蘇我倉山田石川麻呂臣為右大臣、（阿倍內麻呂臣は、倉橋麻呂とも云し人なり、）是左右の大臣を置れし始なり、（大臣の號、何時よりともなく、やうやくに官の如くなり來つるを、）此時より全く官名となれり、然れどもなほ此人たちも、臣姓の人にてありしを、（これまで他の尸の人の、大臣になれる例なし、然るに舊事紀に、尾張連の祖建諸隅命、孝昭天皇御世に大臣となり、其後にも、其氏人大臣になりしことを記し、又物部連の祖出石心大臣命も、同御世に大臣となり、又同氏の鬱色雄命も、孝元天皇の御世に大臣となりしよし記せるは、皆古を知らざる者の妄なる僞なり、又此記遠飛鳥宮段に、大前小前宿禰大臣と云あり、物部氏の人なり、こは大使主の紛れたるにて、大臣には非ること、彼處に委く辨ふるが如し、さて皇極天皇御世までの大臣を考るに、皆建內宿禰の子孫にして、其他の氏人は一人も見えざるを思へば、此人の子孫に限れりし如くに見ゆれども、大連の一氏には限らざりしを以て思へば、大臣も彼人の子孫の氏に限れることにはあらざりけむを、御世々々の間に、他の氏人のなれるが見えざるは、偶然のことなりけむ、其は彼人の殊なる世の長壽忠

（臣にて、御世々々を重ねて政申し給ひし餘烈にて、其子孫の氏々、殊なる威勢にてありしかば、御世々々に大臣になるべき人は、おのづから此子孫の内の氏々の人にぞありけむ、其が中に、蘇我氏の殊に世をかさねてなりしも、又其時のおのづからの勢なり、されば此孝德の御世に、阿倍氏の人のなれるは、なほ古の例に違へることなきなり、）同御世大化五年夏四月、巨勢德陀古臣爲二左大臣一、大伴長德連爲二右大臣一、この長德連は臣姓に非るを、（連姓なり）大臣とせられしは古の意に非ず、（同御世此より先にも、既に中臣鎌子連爲二内臣一、こは大臣には非れども、連姓の人に此號を賜へり、此人つひに天智天皇八年に、内大臣とし給へり、）同十年春正月、以二大友皇子一拜二太政大臣一、以二蘇我赤兄臣一爲二左大臣一、以二中臣金連一爲二右大臣一、これ太政大臣の始なり、抑皇子にして大臣になし賜へることと、王と臣との差別なく、いよ〱古の意は亡はてたり、（されど後々は、又親王の大臣になり給ふことは侍ぬ、）

〔古史徵一秋開題記〕此に熟々、皇朝に重き臣等を拜給へる古の有狀を稽ふるに、まづ神世に、中臣連遠祖天兒屋命、忌部首遠祖天太玉命なも、天祖命の御依しのまに〱、左右の大臣のごと、邇々藝命を扶翼奉りて、御祭事と御前の事とを執奏し、大伴連遠祖天忍日命は、御前に立て攘ひ平つゝ、天降り坐ける、火々出見命、葺不合命、二御代の狀は傳なけれど、兒屋命、太玉命の子たちの、左右に仕奉りけむこと、言まくも更なり、其は神武天皇の御世に、兒屋命孫天種子命、太玉命の孫天富命、二人祖神たちの當昔の狀を違へず、仕奉れるもて知べし、かくて神武天皇の倭國に征入り給ふ時に、忍日命の孫道臣命、督將元戎（イクサノキミツハモノ）を帥て、兇渠を剪除ひて佐け奉れる勳し、肩を比ぶる者なく、また物部連遠祖櫛玉饒速日命は、虜を殺し、天物部を帥て仕奉れる功によりて、殊に褒寵を蒙れるより、此二命の裔とある大伴氏物部氏の、代々次々に外を平治め内を守護り仕奉れりしかば、神事と政事と二方に別れし後は、自然に中臣忌部二氏は神事をのみ掌り、大伴物部二氏は、天下を政（マツロ）へ給ふ御事の方に仕奉る定まりの如くなも成來にける、故日本紀に後の御々世々に、此二氏人の大連に任れたるが多かり、但し此は大條理の論なるが、此外に皇子たちの御裔の氏人をも、當時に器量あるは、外を治め内を護る擧にも仕ひ給へるが、其は大

かた臣の加婆泥の人々なる故に、其が中に大御心に應へるは大臣に任給ひて、大臣と大連とを並べ置れたる御世も多かり、大臣は大連より少高く聞ゆるは、大臣に任れたるは皇別の氏なれば、然有べき謂なり、然るを此御世〇孝德に、其古き例を廢て、左右大臣を置れたる其狀は、神世に天兒屋命、天太玉命と左右に任奉り、後の御世に大連と大臣とを並べ置れたる趣に本づかれたるなれど、左と云ひ右と云は、職原鈔に記されたる如く、西土の左右丞相の號に倣はれしならむ、さて同鈔に、皇極天皇四年、始置左右大臣、止大連と有る如く、始國治看し神武天皇の御世より事始れる古例の大連を止て、後に始まれる大臣をのみ置給へる故に、大連に任べき大伴物部の二氏は、彌降ちに衰へて、後には聞えずなも成にける、皇美麻邇々藝命の天降坐す時に、天祖大御神の、殊更に八百萬神の中より拔出て任し副賜へる、本の御契を思ひ奉れば、此氏々のえか衰へもて來しを、天よりいかに見行すらむと、甚畏しや、

〔職官考三上古〕大臣ハ、臣姓ノ諸氏ノ主帥トシテ、コレヲ統領ル者ナルニ因テ、大臣ト云リ、景行朝ニ、武內宿禰ヲ棟梁之臣トセシコトミユ、成務朝ニ、大臣ト爲トアリ、日本紀、古事記、雄略朝ニ、其後平群臣眞鳥ヲ大臣トセラレシヨリ、大連ト相並テ政ヲ申ス事始テミエタリ、繼體朝許勢男人、宣化朝蘇我稻目、敏達朝蘇我馬子宿禰、並ニ大臣タリ、舒明皇極朝蝦夷臣大臣タリシガ、僭竊ノ罪ヲ以テ父子誅戮セラレシカド、孝德朝ニ阿部內麻呂ヲ左大臣トシ、蘇我倉山田石川麻呂ヲ右大臣トセシモ、尙舊制ニ仍リシ也、

〔爲房卿記〕永保二年三月十三日甲午、談治部卿經季卿之次、被示云、故小野右府實資命云、村上御宇、爲侍臣祗候間、主上於晝御座有喚、于時御文机御仰云、於ホンミヤ候不、於ホンミハ大臣之號者、于時小野宮殿清愼公被候殿上、仍令申候由、還殿上告申喚由、小野宮殿正笏、跪被候戸前、隨御目唯稱、被參進、懷忠卿此時候殿上、示云、只今聖主賢臣、令相逢給、定無僻事歟者、

往古人稱大臣者、又法家之讀者可尋之、於ホンミ

〔古事記 下安康〕天皇爲伊呂弟大長谷王子、而阪本臣等之祖根臣、遣大日下王之許

〔日本書紀 十三安康〕元年二月戊辰朔、天皇爲大泊瀨皇子欲聘大草香皇子妹幡梭皇女、則遣阪本臣祖根使主、請於大草香皇子、〇下略

〔日本書紀 十五顯宗〕穴穗天皇三年十月、〇中略帳內日下部連使主、使主日下部連之名也、使主此云於瀰、〇下略

〔古事記傳 四十〕臣は意美にて、後世にオンと訓は、音便に頽れたるにて、正しからず、又オンノコとも訓るは、子と云ることを添たるなり、大身の意なり、朝倉宮段に、葛城の神の顯れ坐るを、宇都志意美とあるも、現大身にて、言は同じ、さて此は朝廷に仕奉る人を、傍より尊みて云稱なり、朝廷に仕奉る人なるを以て、臣字は書なれども、君に對へて云臣の意には非ず、君に對へて云臣は、夜都古と云て、書紀などにも然訓り、此事傳七の八十葉にも云り、然るに夜都古と云は、たゞ賤き者の如くなりて、後には君臣をも使美夜都古とは訓ずて、使美意美と訓ことにはなれりけむ、

〔日本書紀 六垂仁〕二十六年八月庚辰、天皇勅物部十千根大連、〇下略

〔職官考 三上古〕大連ハ、連姓ノ諸氏ノ主帥トシテ、其ヲ治ル者ナルニ因テ、大連ト云リ、物部連ハ、內物部ノ兵ヲ掌ル職ニシテ、垂仁朝物部連十千根大連トミエシヨリ後、履中朝ニ伊莒弗、雄略朝ニ目、欽明朝ニ尾輿、敏達朝ニ守屋、並ニ大連タリ、大伴連モ、大伴ノ兵ヲ掌ル職ニシテ、雄略朝ニ大伴連室屋大連タリシヨリ、武烈、繼體、安閑、宣化、欽明ノ朝ニ、金村又大連タリ、日本紀蓋物部守屋、蘇我氏ノ爲ニ亡ボサレシ後、大連ヲ置レザルハ、馬子大臣政ヲ專ニセシ故也、

〔古事記 下繼體〕此御世、竺紫君石井、不從天皇之命、而多无禮、故遣物部荒甲之大連、大伴之金村連二人、而殺石井也、

〔古事記傳 四十四〕大連と云號は、書紀垂仁卷二十六年に、物部十千根大連とある、是に始めて見えたり、但し此大連の初と云ことは見えず、又大連に爲られし事も見えず、然るに延喜式一歷運記に、仲哀天皇始置大連、元年詔大伴建持爲大連とあるは如何ならむ、書紀仲哀卷九年に、大伴武以連と云は見えたれども、大連とは見えず、若此延喜式の說正しくば、かの物部十千根を大連と記されたるは、書紀の

誤か、詳ならざることなり、さて舊事紀に、尾張連祖瀛津世襲命を、孝昭天皇の御世に、大連とする由云、又物部連祖大新河命、垂仁天皇御世に元爲㆓大臣㆒、次賜㆓物部連公姓㆒、則改爲㆓大連㆒、其大連之號始起㆓此時㆒と云るは、共に信がたき說なり、○中略そも〱此號は、連の尸なる姓の人に限れること、中卷志賀宮段、大臣と云號の下に云るが如し、考合すべし、

〔古事記上〕綿津見神者、阿曇連(ムラジ)等之祖神以伊都久神也、

〔倭訓栞前編三十一〕むらじ　日本紀に連をよめり、もと官にて姓(カバネ)になれり、群主の義也といへり、臣連とならびて大連大臣なども見えたり、

○按ズルニ、臣連ノ解說ハ、姓名部姓氏篇加婆禰解說條ニ詳ナリ、參看スベシ、

初見

〔二中歷一公卿〕臣下始起

大臣 成務天皇三年、以㆓武内宿禰㆒改立㆓大臣號㆒、

〔濫觴抄上〕大臣

景行四十九年八月壬子、始以㆓武内宿禰㆒任㆓大臣棟梁臣㆒、

〔日本書紀七成務〕三年正月己卯、以㆓武内宿禰㆒爲㆓大臣㆒也、初天皇與㆓武内宿禰㆒同日生之、故有㆓異寵㆒焉、

〔先代舊事本紀五天孫〕大禰命 ○中略

弟出雲醜大臣(オミ)命

此命、輕地曲峽宮御宇天皇 ○懿德 御世、元爲㆓申食國政(スノクニノマツリゴトマウス)大夫㆒、次爲㆓大臣(オホイマウチギミ)㆒、奉㆑齋㆓大神㆒、其大臣之號、始起㆓此時㆒也、

弟出石心大臣(オミ)命

此命、掖上池心宮御宇天皇 ○孝昭 御世、爲㆓大臣㆒奉㆑齋㆓大神㆒、

〔先代舊事本紀五天孫〕建諸隅命

此命、掖上池心宮御宇天皇 ○孝昭 御世、爲㆓大臣(オホヒマウチギミ)㆒供奉、

〔先代舊事本紀五天孫〕鬱色雄命

此命、輕境原宮御宇天皇〇孝元御世、拜爲大臣、奉齋大神、

〔古事記中成務〕若帶日子天皇、坐近淡海之志賀高穴穗宮治天下也、〇中略故建內宿禰爲大臣、

〔延喜式一〕歷運記今名公卿記

成務天皇第十三天皇改立大臣之號、三年以武內宿禰爲大臣、自此年至今年(弘仁二年)六百七十九年、

〔公卿補任〕成務天皇御世

大臣　武內宿禰三年正月己卯、爲大臣、年五十、大臣之號於此而起、

〔帝王編年記四成務〕大臣武內宿禰天皇三年正月、改棟梁爲大臣、大臣之始也、此大臣、天皇同日生、故有異寵、

〔水鏡上成務〕武內、この御時三年と申しにぞ、大臣になり給へりし、大臣と申事は、これよりぞはじまれる、もとは棟梁の臣と申き、これもたゞ大臣おなじことなり、つかさの名をかへ給へりしばかりなり、

〔二中歷一公卿〕臣下始起

大連仲哀天皇元年十月、詔大伴健持爲大連、

〔濫觴抄上〕大連

仲哀元年壬申、以大伴宿禰武持始任之、

〔日本書紀六垂仁〕二十六年八月庚辰、天皇勅物。部。十。千。根。大連曰、屢遣使者於出雲國、雖撿校其國之神寶、無分明申言者、汝親行于出雲、宜撿校定、則十千根大連校定神寶、而分明奏言之、

〔先代舊事本紀五天孫〕瀛津世襲命〇註略

此命、池心朝〇孝昭御世、爲大連供奉、

〔先代舊事本紀五天孫〕建膽心大禰命〇中略

並置大臣大連

弟大新河命

此命、纏向珠城宮御宇天皇〇垂仁御世、元爲大臣、次賜物部連公姓、則改爲大連、奉齋神宮、其大連之號、始起此時、

弟十市根命

此命、纏向珠城宮御宇天皇御世、賜物部連公姓、元爲五大夫一、次爲大連、奉齋大神、

〔延喜式一〕歷運記今名公卿記

仲哀天皇第十四天皇　始置大連、元年詔大伴建持爲大連云々、自此年至今年(弘仁二年)六百廿年、

〔公卿補任〕仲哀天皇御世

大連　大伴健持連元年正月、天皇即位、冬十月、詔大伴健持始爲大連、(中略)大連之號、始於此也、

〔帝王編年記四仲哀〕大連大伴武持天皇元年、始置大連、

〔日本書紀十四雄略〕三年庚〇安十一月甲子、天皇命有司、設壇於泊瀬朝倉、卽天皇位、遂定宮焉、以平群臣眞鳥爲大臣、以大伴連室屋、物部連目爲大連、

〔古事記傳二十九〕これ大臣と大連と並置れしことの、物に見えたる始なり、〇中略大臣と大連との列は、何れ上とも定まれることはなかりしと見えて、大連を先に列ね云る處もあり、其時其人によれるにや、

〔古事記傳四十四〕正しく爲大連と云ことは、是に始めて見えたり、室屋連は、武持大連の子なり、目連は、伊莒弗大連の子なりと、一代要記、公卿補任などに見えたり、

〔公卿補任〕仲哀天皇御世

大臣　武內宿禰九年、天皇崩、后詔攝行、武內宿禰、殯豐浦宮、

大連　大伴健持連元年正月、天皇即位、冬十月、詔大伴健持始爲大連、(中略)大連之號、始於此也、

○按ズルニ、大伴健持連大連タリシコト、日本書紀ニ其文ナシト雖モ、帝王編年記、公卿補任等ニハ、始置大連ト見エタリ、是信ニ當時ノ實ヲ傳ヘバ、大臣大連ヲ並置セシコト、此ヲ以テ初見トスベシ、

〔日本書紀 十二 履中〕二年十月、都於磐余、當是時、平群木菟宿禰、蘇賀滿智宿禰、物部伊莒弗大連、圓(圓此云豆夫羅)大使主共執國事、

〔公卿補任〕安康天皇御世

大臣　葛城圓大臣 三年八月、眉輪王殺天皇、逃入葛城圓大臣家、因此爲大泊瀬天皇(雄略)所殺、但初任年未詳、淸寧天皇外祖也、

大連　大伴室屋連 本紀無置大連之文、但先帝(允恭)時、及後大泊瀬天皇時、並有室屋大連、即知此時爲大連、更疎略耳、

〔日本書紀 十五 淸寧〕元年正月壬子、命有司設壇場於磐余甕栗、陟天皇位、遂定宮焉、○中略以大伴室屋大連爲大連、平群眞鳥大臣爲大臣、並如故、臣連伴造等、各依職位焉、

〔公卿補任〕顯宗天皇御世

大臣　平群眞鳥臣

大連　大伴室屋大連 大連行事、此時以後無見書、幾年未詳、小泊瀬天皇三年十一月、尙爲大連、初歷五代、未詳、

仁賢天皇御世

大臣　平群眞鳥大臣 十一年八月、天皇崩、十二月爲小泊瀬天皇所殺、大臣男鮪有無君之心、大伴金村大連將兵圍大臣家、縱火燔之、十一年逢戮子孫、

大連　大伴金村連 五年壬申二月天皇詔大伴金村大連曰云々、十一年八月、天皇崩、十二月、小泊瀬天皇即位、是日以大伴金村連爲大連、

〔日本書紀 十七 繼體〕元年二月甲午、是日、即天皇位、以大伴金村大連爲大連、許勢男人大臣爲大臣、物部麁鹿火大連爲大連、並如故、是以大臣大連等、各依職位焉、

〔日本書紀 十八 宣化〕元年二月壬申朔、以大伴金村大連爲大連、物部麁鹿火大連爲大連、並如故、又以蘇我稻目宿禰爲大臣、

專置大連

〔日本書紀十九欽明〕四年〇宣化十二月甲申、天國排開廣庭皇子卽天皇位、〇中略大伴金村大連、物部尾輿大連爲大連、及蘇我稻目宿禰大臣爲大臣、並如故、

〔日本書紀二十敏達〕元年四月甲戌、皇太子〇敏達卽天皇位、〇中略以物部弓削守屋大連爲大連如故、以蘇我馬子宿禰爲大臣、

〔日本書紀二十一用明〕十四年〇敏達九月戊午、天皇卽天皇位、〇中略以蘇我馬子宿禰爲大臣、物部弓削守屋連爲大連、並如故、

〔日本書紀十六武烈〕十一年〇仁賢八月、億計天皇崩、大臣平群眞鳥臣、專擅國政、欲王日本、陽爲太子營宮了、卽自居、觸事驕慢、都無臣節、〇中略十一月戊寅朔戊子、大伴金村連謂太子曰、眞鳥賊可擊、請討之、太子曰、天下將亂、非希世之雄不能濟也、能安之者其在連乎、卽與定謀、於是大伴大連率兵自將、圍大臣宅、縱火燔之、所撝雲靡、眞鳥大臣恨事不濟、知身難免、計窮望絕、廣指鹽詛、遂被殺戮、〇中略十二月、大伴金村連平定賊訖、反政太子、〇中略於是太子命有司、設壇場於泊瀨列城、陟天皇位、遂定都焉、是日以大伴金村連爲大連、

〔公卿補任〕允恭天皇御世

大連　大伴室屋連七年、天皇詔大伴室屋大連定藤原部、但初任年未詳也、又圓大臣、穴穗天皇(安康)三年所誅、然此時猶執國政、但既有大連、仍更不注執政、

專置大臣

〔日本書紀十八安閑〕二十五年〇繼體春二月辛丑朔丁未、男大迹天皇、立大兄爲天皇、卽日男大迹天皇崩、是月以大伴金村〇金村二字原无、據書紀集解補、大連、物部麁鹿火大連爲大連、並如故、

〔日本書紀二十一崇峻〕二年〇用明七月、〇中略蘇我馬子宿禰大臣、勸諸皇子與群臣謀滅物部守屋大連、〇中略爰有迹見首赤檮、射墮大連於枝下、而誅大連並其子等、〇中略八月癸卯朔甲辰、炊屋姬尊與群臣勸進天皇、卽天皇之位、以蘇我馬子宿禰爲大臣如故、卿大夫之位亦如故、

〔古事記傳四十四〕崇峻天皇の御世の初に、此守屋大連滅され賜ひて後は大連見えず、さるは、思ふに蘇我

大臣馬子、己が權勢を專にせむために、大連をば停しめたるなるべし、

〔公卿補任〕推古天皇御世

大臣　蘇我馬子宿禰 卅四年五月薨

蘇我蝦夷臣 卅四年任、(中略)于時大臣男入鹿臣、自執國政、威勝於父、

舒明天皇御世

大臣　蘇我蝦夷

〔日本書紀皇極二十四〕元年正月辛未、皇后卽天皇位、以蘇我臣蝦夷爲大臣如故、大臣兒入鹿 更名鞍作 自執國政、威勝於父、　二年十月壬子、蘇我大臣蝦夷緣病不朝、私授紫冠於子入鹿、擬大臣位、復呼其弟曰物部大臣、大臣之祖母、物部弓削大連之妹、

〔古事記下〕於是其伊呂弟水齒別命、○中略 欺所近習墨江中王之隼人、名曾婆加理云、若汝從吾言者吾爲天皇、汝作大臣、治天下、那何、曾婆訶理答白、隨命、爾多祿給其隼人曰、然者殺汝王也、於是曾婆訶理、竊伺己王入廁、以矛刺而殺也、○中略 是以詔曾婆訶理、今日留此間、而先給大臣位、明日上幸、留其山口、卽造假宮、忽爲豐樂、乃於其隼人、賜大臣位、百官令拜、隼人歡喜、以爲遂志、

〔古事記傳三十八〕令拜は、古の定まれる式なるべし、後に江家次第に、任太政大臣事云々、新任大臣先到本家、公卿以下列於中門外、主人當南階東柱立、尊者入自中門外立、再拜畢云々、また新任大臣大饗處に、群卿於中門外徘徊、主人降南階、當座下方立、尊者以下、入自中門、列立階前、再拜、訖云々などある、此にあたるべきか、但しこれらは、大饗によりての拜か、

○

〔先代舊事本紀七神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、詔宇摩志麻治命曰、汝之勳功矣、念惟大功也、公之忠節焉、思惟至忠也、因斯先授神靈之劒、崇酬不世之勳、今配股肱之職、永傳不貳之美、自今已後、生生

世世、子子孫孫、八十聯綿、必胤此職、永爲龜鏡、則宇摩志麻治命、天日方奇日方命、倶拜爲申食國政大夫、其申食國政大夫者、今之大連、亦云大臣也、但天日方奇日方命者、皇后之兄大神君祖也、

〔先代舊事本紀七綏靖〕三年正月、宇摩志麻治命之兒彥湯支命爲申食國政大夫也、

〔先代舊事本紀七安寧〕四年四月、以出雲色命爲申食國政大夫也、復以大禰命爲侍臣、並宇摩志麻治命之孫也、

〔先代舊事本紀七懿德〕二年三月、申食國政大夫出雲色命爲大臣、

棟梁之臣

〔二中歷一公卿〕臣下始起

棟梁臣　凡公卿起始棟梁臣、謂景行天皇五十一年辛酉八月、以紀武內宿禰始爲棟梁臣、公卿稱臣名初起于此、

〔日本書紀七景行〕五十一年八月壬子、立稚足彥尊爲皇太子、是日命武內宿禰爲棟梁之臣、

〔釋日本紀十述義〕棟梁之臣　私記曰、可謂大臣之始歟、

〔古事記傳二十二〕棟梁之臣とは、欽明卷に、任那者、爾國之棟梁、如折棟梁誰成屋宇、推古卷に、兩僧弘演佛教、並爲三寶之棟梁、續紀八に、道藏寔惟法門袖領、釋道棟梁、同廿三に、臣父及叔者、並爲聖代之棟梁、共作明時之羽翼、と見え、漢籍にも固よりある字にて、股肱などゝも云と同意なり、さておのづから群下を統帥る意になりて、長などゝ云に同じ、故近世俗匠の中の長なる者をも棟梁と云めり、此も然る意を得て書れたるなれば、訓は字には拘るべからず、臣連八十伴緒之加美と定め賜ひきなどゝ訓べし、然るを字に依て、ムネマチギミ、ムネトルマチギミなど訓るは古の意言に叶はず、ひがごとなり、又是を官名などの如く心得るも誤なり、

〔帝王編年記四景行〕大臣棟梁臣武內宿禰　天皇五十一年八月、始置棟梁臣、孝元天皇曾孫也、

〔延喜式一〕歷運記　今名公卿記

至景行天皇　第十二天皇　始置棟梁之臣、五十一年、以武內宿禰爲棟梁之臣、計自始置年至今上弘仁二年、歷卌一帝、六百九十一年、始置斯王年、准漢地年代、當後漢天安十年、

五年、

【公卿補任】景行天皇御世

棟梁之臣　武內宿禰 五十一年八月、立稚足彥尊爲皇太子、是以武內宿禰命爲棟梁之臣也、棟梁臣之名、初起於此時、

執政

【二中歷一公卿】臣下始起

執事 履中天皇二年、始有執事四人、又譽田天皇代、平群木菟宿禰爲執事、是武內子云々、

【公卿補任】履中天皇御世

執政　平群木菟宿禰 大臣武內宿禰息

蘇我滿知宿禰 如爲執事四人之內也、但初任及薨年未詳、

物部伊久佛 或伊莒弗

大連　葛城圓使主

已上二年十一月記云、時執政平群木菟宿禰等四人、初任年及薨年未詳、

【日本書紀 十二履中】二年十月、當是時平群木菟宿禰、蘇賀滿智宿禰、物部伊莒弗大連、圓 圓、此云豆夫羅、大使主、共執國事、

【公卿補任】反正天皇御世

執政　葛城圓使主 穴穗天皇三年、圓大臣爲大泊瀨天皇所殺、然則此時猶爲執政、武內宿禰曾孫、葛城襲津彥孫、玉田宿禰子也、

大夫

【日本書紀 十八宣化】元年二月壬申朔、阿倍大 ○大原作火、據一本改 麻呂臣爲大夫、

【日本書紀 二十一崇峻】二年 ○用明 八月癸卯朔甲辰、炊屋姬尊與群臣勸進天皇、卽天皇之位、以蘇我馬子宿禰爲大臣如故、卿大夫之位亦如故、

侍臣

【日本書紀 三神武】是年也太歲甲寅、其年冬十月、勅以菟狹津媛賜妻之於侍臣天種子命、天種子命是中臣氏之遠祖也、

〔日本書紀通證八〕侍臣今按、大前ツ公也、魔幣菟耆彌、見武烈紀歌、又云麻宇知、又云麻都、語之轉也、大臣、大夫、群卿、群臣等所訓、意皆同、言侯君前傳君命之公等也、是則神代紀所謂、侍殿內之意、倭名鈔、侍從、於毛止比止萬知岐美、

〔先代舊事本紀五天孫〕天香語山命天降名手栗彦命、亦名高倉下命、此命、隨御祖天孫尊自天降坐於紀伊國熊野邑之時、○中略皇師趣中州、天孫得劒日增威稜、勅高倉下褒爲侍臣也、

〔日本書紀景行七〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、彌槪能佐烏麼志、魔幣菟耆彌、伊和哆羅秀暮、彌開能佐烏麼志、

〔日本書紀通證十二〕魔幣菟耆彌群臣也、孝德紀、上臣訓多加伎末邊都伎美、侍從君前之意、末邊都轉云末宇知、萬葉集、臣女訓末宇登米、又略云末都、文選、臣等訓末久貝、古今集序用之、久與都通、

古事類苑

官位部二

古代官職一

伴造上

伴造ハ、トモノミヤツコト訓ズ、伴トハ群ヲ云ヒ、造トハ長ヲ云フナリ、蓋シ上世ニ在リテハ、人皆其職ヲ世襲シ、以テ朝廷ニ奉ゼシカバ、必ズ其長アリテ之ヲ統領セリ、是ヲ伴造ト云ヒ、又伴緒(トモノヲ)トモ云フ、緒(ヲ)ハ長(ヲサ)ノ義ニシテ、亦部民ニ長タルノ謂ナリ、又八十伴男、或ハ百伴造ト呼ブコトアリ、其部族ノ多キヲ總擧スルモノニシテ、猶ホ後世ニ百官ト曰フガ如シ、而シテ大化改新以後、世職ノ習漸ク廢レ、官姓ノ制全ク改マリ、伴造終ニ其職ヲ失ヘリ、

伴造ノ概略ヲ記スレバ、中臣、忌部ノ祭祀ヲ主リ、物部、大伴部ノ兵刑ヲ督シ、山部、海部ノ山海ヲ掌リ、藏部、史部ノ府庫文書ヲ監スルヲ始メ、膳羞ニハ、膳部、大炊部、水取部、酒部、宍人部ノ諸部アリテ、網部、鳥養部、鵜養部、鷹甘部、猪甘部、犬養部等亦其職ニ從ヒ、閑馬ニハ馬飼部アリ、車輿ニハ車持部アリ、灑掃ニハ掃部アリ、衣服ニハ服部アリ、衣縫部アリ、而シテ手工ノ職ニハ玉作部、鏡作部、鍛部、猪名部、弓削部、矢作部、的部、楯縫部、靫編部、鞍部等ノ諸部アリテ、各〻其業ヲ世襲シ、王事ニ從フ、其他樂官アリ、葬官アリ、藥師アリ、通譯官アリ、今悉ク列擧スベカラズ、

部曲ハ、一ニ品部トモ云フ、卽チ民部、家部等ノ總稱ニシテ、常ニ臣連二造等ニ統率セラレテ、其世職ヲ修ムル部民ヲ云フナリ、

御名代ハ、天皇、皇后、及ビ皇子ノ御名ヲ後世ニ傳ヘンガ爲ニ、其御名ヲ名トシタル部民ヲ置

名稱

クヲ云フ、御子代ト云フモ、略ボ之ニ同ジク、御子ノ在サズシテ、御名ノ後世ニ泯滅センコトヲ恐レテ、其御名ヲ負ヒタル部民ヲ置クヲ云フ、是等ノ制ハ、共ニ我國ノ古風ナリシガ、大化改新ノ時、全ク其跡ヲ絕ツニ至レリ、

〔日本書紀雄略十四〕二年十月丙子、幸御馬瀨、命虞人縱獵、○中略臣、連、伴造、國造、又隨續貢、

〔書紀集解雄略十四〕按姓臣姓連者、於諸姓之中所顯也、故首曰臣連、謂伴造者、伴猶謂部、造猶謂長、世承其所典職名而奉仕之長者、職員令所載內藏寮藏部、諸陵司土部之類此也、又謂八十伴男、見延喜式祝詞六月大祓詞、序先國造者、以內官之故、

〔日本書紀雄略十四〕二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、○中略崩于大殿、遺詔於大伴室屋大連、與東漢掬直曰、○中略臣、連、伴造、每日朝參、國司、郡司、隨時朝集、何不罄竭心府誡勅慇懃、

〔日本書紀清寧十五〕元年正月壬子、命有司設壇場於磐余甕栗、陟天皇位、遂定宮焉、○中略臣、連、伴造等、各依職位焉、

〔日本書紀顯宗十五〕二年三月上巳、幸後苑曲水宴、是時盛集公卿大夫臣連國造伴造為宴、群臣頻稱萬歲、

〔日本書紀敏達二十〕十二年十月、遣阿倍目臣、物部贄子連、大伴糠手子連、而問國政於日羅、日羅對言、○中略仕奉朝列、臣連二造、二造者國造伴造也下及百姓、悉皆饒富、令無所乏、

〔日本書紀孝德二十五〕天萬豐日天皇、○中略由是輕皇子不得固辭、升壇卽祚、○中略百官臣、連、國造、伴造、百八十部羅列匝拜、

大化元年七月己卯、天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問大夫與百伴造等以悅使民之路、　八月庚子、是日設鍾匱於朝、詔曰、若憂訴之人、有伴造者、其伴造先勘當而奏、有尊長者、其尊長先勘當而奏、若其伴造尊長不審所訴、收牒納匱、以其罪罪之、其收牒者、昧旦執牒奏於內裏、朕題年月、便示群卿、或懈怠不理、或阿黨有曲、訴者可以撞鍾、由是懸鍾置匱於朝、天下之民咸知朕意、

〔令集解 職員五〕土工司

泥部廿人 穴云、泥部者、古言波都加此乃友造。

〔日本書紀 雄略十四〕十六年十月、詔聚漢部、定其伴造者、賜姓曰直、一本云、漢使主等、賜姓曰直、

〔日本書紀通證 雄略十九〕伴造 訓登母乃美夜都古、垂仁紀品部訓同、推古紀曰、伴造本紀、

〔日本書紀 仁賢十五〕五年二月辛卯、普求國郡散亡佐伯部、以佐伯部仲子之後爲佐伯造。

〔日本書紀 欽明十九〕元年八月、高麗、百濟、新羅、任那、並遣使獻〇此間恐有脫字並修貢職、召集秦人漢人等諸蕃投化者安置國郡、編貫戸籍、秦人戸數總七千五十三戸、以大藏掾爲秦伴造、

〔倭訓栞 前編十八〕とものみやつこ　日本紀に伴造と見えたり、國造に對していへり、八十伴緒の職掌ある部類をすべをさむる任をいふ也、よて孝德紀に若憂訴之人、有伴造者、其伴造先勘當而奏せと見えたり、

〔古史傳 八〕美夜都古と云言の本は、御屋之子にて、屋之子之を都と云は常ある例なりとは、君の屋に親く侍仕ふる子と云義にて、世にも家子など云めり君を親の意に取て、臣をひろく言へるなり、或説に、夜都古の夜は、發語にて、都古は附子の意にて、君に附る子の義なり、附を都とのみ云るは、體言なりとて、國造をクニノツコ、伴造をトモノツコと訓て、師のクニノミヤツコ、トモノミヤツコと訓れしを非と云れど、却りて非説なり、此は書紀に、稀に國造を、クニツコと訓る所もあるより云るなるべけれど、此も國之子の意とせむに妨なし、予前には此クニツコの訓に依て、國造は久留都古と訓み、伴造は登母能美夜都古と訓べし、其は宮之子、國之子と對ひたる稱にて、伴造は大御許に在て親く仕奉れば、宮之子といひ、國造は各國に在て、親く大御許に仕奉らぬもの故に、國之子とは云ならむと思へりしかど、師(本居宣長)言に、書紀に國造伴造と並べ云、またこれを二造ともあるを、一をばミヤツコ、一をばたヤツコと訓の變るべき由なきをやと言れし説の然ることなれば、此考は立がたし、按また宮能賣てふことの有て、大殿祭の祝別文、また姓氏錄の神宮部造の處合せ考ふべし、古語拾遺に、今世內侍、善言美詞、和君臣間、令宸襟悅懌也とあると、古は男を廣く云言なることを合せて按に、美夜都古、美夜能賣と對たる稱にて、卽宮之子、宮之女なり、共に大宮內に侍仕へて、天皇と人草との中に立て事を掌る故に、男を宮之子、女を宮之女と云るより轉りて、美夜都古と云稱の廣くなりて、君に對へて臣

を云名とは爲れるならむ、

○按ズルニ、伴造ノ解釋ハ、姓名部姓氏篇加婆禰解説、造ノ條下ニアリ、參看スベシ、

〔古事記 上〕爾天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、幷五伴緒矣支加而天降也、

〔古事記傳 十五〕伴緒、凡て伴とは、官職にまれ何にまれ、一部ともなふを云、某伴某伴(ナニノトモクレノトモ)と云是なり、登母賀良など云も此意、又何となくて交り親む人を友と云も同意なり、伴造と云は、其部の長を云、(此事、傳七の八十葉に委く云、)緒は長の本語にて、袁佐(ヲサ)と云は長兄名の意なり、書紀に魁帥渠帥などを伊佐袁と訓るも、勇長(イサヲ)なり、然れば伴緒は、其部屬の長を云稱なり、(師(賀茂眞淵)說に、此處の文を引て、此五伴緒の中に、二柱は女神なることを云、又祝辭に、比禮懸伴緒と云るも女なれば、伴男など、書る男は、皆借字にて、男女にわたる稱なる由云れたるは、信にさることなりかし、)さて緒と云意は、師說に、一の緒に數の玉を貫くに譬へて云なれば、伴緒と書る正字なり、貫首など云貫も、意通へりと云れたるは然ることなれども、今少し精しからず、其故は玉緒などを袁と云も、多の玉などを總縛る故の名、又物の長を袁と云も、此徒屬を統帥る故の稱にて、本同言なり、然れども何方を本とも末とも定むべきに非れば、玉緒は例には引べけれども、其に譬へて云とは云べきに非ずなむ、(さて又右の師說の意は、伴緒を、たゞ其部類のことゝ心得て云れたる物にして、其長の意に云るには非ず、是も又精しからず、其故は次に云べし、)さて今右の五柱神を指て、五伴緒と云るは、石屋戸段に見えたる如くに、此神たち各掌れる職ありて、其職々の部屬を帥る長神なればなり、(五神を指て五伴緒と云れば、一伴緒は一神なり、然れば伴緒とは其長を云て、其部類を云に非ること明けし、書紀に、此を五部神と書れば、五伴緒は、たゞ五部の意とも聞ゆるに似たれども、彼も五神を擧て云れば、其意に非ず、五部の長神といふこゝろなり、)

〔日本書紀 神代二〕一書曰、○中略時天照大神勅曰、若然者、方當降吾兒矣、且將降間、皇孫已生、號曰天津彥彥火瓊々杵尊、時有奏曰、欲以此皇孫代降、故天照大神乃賜天津彥彥火瓊々杵尊、八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍三種寶物、又以中臣上祖天兒屋命、忌部上祖太玉命、猨女上祖天鈿女命、鏡作上祖石凝姥命、玉作上祖玉屋命、凡五部神(イツトモノヲノカミタチ)使配侍焉、

〔日本書紀纂疏七〕五部者、諸神之統領、而各爲部黨者也、○中略中臣等後世神孫、各賜姓氏、五神乃其太祖者也、

〔古事記下允恭〕於是天皇、愁天下氏々名々人等之氏姓忤過、而於味白檮之言八十禍津日前、居玖訶瓮、而玖訶二字以音定賜天下之八十友緒氏姓也、

〔古事記傳十五〕八十伴緒とは、所有諸の伴緒を總云なり、さて是は長に限らず、部屬までにわたる如く聞ゆめれど、これらは朝廷に仕奉る官人たちを大凡に云る、其はいづれもほど〳〵に帥る部屬あれば、此も皆長なり、此外にも部字などを書て、廣く其屬を云る如く聞ゆるも、皆くはしくいへば其長なり、

〔倭訓栞前編三十四〕やそとものを　八十伴緒の義、伴は百官各相伴なふ部類をいへり、緒は統率ゐる首領よりいふ、よて舊事紀には伴領をよめり、古事記に、定賜天下之八十友緒氏姓也と見えたり、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓十二月准之

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣、天皇朝廷爾仕奉留、比禮挂伴男、手襁挂伴男、靫負伴男、劒佩伴男、伴男能八十伴男乎始氏、官官爾仕奉留人等乃、過犯家牟雜雜罪乎、今年六月晦之大祓爾、祓給比清給事乎、諸聞食止宣、

〔大祓詞後釋上〕とものをのをは長にて、もと其部の長を、とものをとはいへる也、此事は古事記傳十五の巻に委く云り、考に緒と書るを正しとせられたるはとらず、緒も借字也、○中略さてこゝに四つの伴長を擧たるは、多くの中にていさゝか摘出ていふ古文の例にて、是に諸の伴長をこめたり、次の文にて知べし、○中略官々は、すなはち上の八十伴なり、仕奉る人は、その長々の下に屬て、仕奉る官人どもなり、

中臣部

〔萬葉集十九〕挽歌一首幷短歌

天地之、初時從、宇都曾美能、八十伴男者、大王爾、麻都呂布物跡、定有、官爾之在者、〇下略

〔大日本史職官一〕凡大小臣工、皆襲官姓、世修其職、故無論中臣連、齋部首之供祭祀、物部連、大伴連之掌武事、至膳臣、多米連掌膳羞、水取造掌水漿、酒部君掌釀酒、服部造掌衣服、車持公掌車徒、爪工連掌造蓋、玉作連掌攻玉、鏡作造掌造鏡、石作連掌攻石、土師臣掌凶儀、及掃守連之灑掃、船史之船賦、藏部之府庫、文首之記載、商長首之貿易、曰佐之通譯、姓與官無異、女官供奉御饌者、謂之采女、男女親近左右者、謂之舍人、代吠狗守衞宮門者、謂之隼人、出使外蕃、接遇賓客者、謂之吉士、按隋書、東國通鑑、吉士本新羅國官名、蓋國家平定三韓、用蕃人掌外國事、官名仍舊、不改其職、奉事朝廷、如王仁阿直岐等、皆是也、又有國人爲吉士者、子孫因以爲姓、如難波吉士是也、又按姓氏錄、蕃別多以史爲姓者、蓋皆以其所掌爲姓也、管田部者曰田部連、管山部者曰山部公、管海部者曰阿曇連、管屯倉者曰屯倉首、下至狗馬鳥獸類、皆有馬飼鳥養等諸部、以掌其事、其它如日祀部、楯部、神弓削部、神矢作部、大刀佩部、武部、佐伯部、倭文部、宍人部、衣縫部、舂米部、猪名部、刑部類、品部甚衆、今不能殫紀矣、日本書紀、古事記、姓氏錄、古語拾遺、令義解、〇中略自神功蕩平三韓、後定內官家、建日本府於任那、置行軍元帥、以撫定韓地、威靈之及、實震動海外矣、日本書紀、古事記、故五經、曆、醫博士、採藥師、畫師、樂人等、畫師據姓氏錄皆三韓所貢、朝廷亦隨而賜姓、以世其職、朝廷以下、參取姓氏錄、

〔古事記上神代〕天兒屋命者、中臣連等之祖

〔古事記傳十五〕中臣連、萬葉十七の歌に、奈加等美と書り、名義は中執臣なり、登理の理を省けり、其例は、のりたまふなのたまふ、假字をかなと云たぐひにて、なほ多かり、又臣の意を省くも常なり、此なたゞ那加都意美の約まりたるとするはわろし、又或人、孝德紀に、上臣下臣と云こともあれば、其に對へたる中臣なり、又大臣小臣に對へたる稱なりなど云るもみな非なり、其由は、伊勢齋內親王奉入時宣命に、祝詞式に見ゆ御杖代止進給布御命乎、大中臣、茂桙中取持弖、恐美恐美毛申給久止申、延喜奏覽大中臣本系に、按依去天平寶字五年、撰氏族志所之宣、勘造所進本系帳云、高天原初而皇神之御中、皇御孫之御中執持、伊賀志桙

不レ傾二本末一中良布留人、稱レ之中臣一者、復二舊之由一、惟其義也、康治大嘗會中臣壽詞に、(台記別記に見ゆ)本末不レ傾、茂槍(イカシホコ)乃中執持弖、奉仕留中臣云々などある如く、祖神天兒屋命よりして、神と君との御中を執持て申す職なるよしなり、(茂桙云々と云るは、桙の柄の眞中を、首尾を傾けず、正しく平かに執持を以て、神と君との御中に立て、宜きさまに執持申すを譬へたるなり、舒明紀の詔に、亦大臣所レ遣群卿者、從來如二嚴矛一取レ中事一而奏請人等也とあるも中臣にはあらねど、事は同じ、これ古言と聞えたり、中を取とは、職員令大納言の義解に、納二下言於上一宣二上言於下一也、とあると同じ心ばへにて、諸の祝詞などを申すは、君の御言を神に納るなり、太占の卜事を掌るは、神の御言を君に宜申すなり、これみな中臣の職にて、書紀に、天兒屋命、主二神事之宗源一者也、故俾下以二太占之卜事一而奉仕上焉、とあるが如し、)

〔古語拾遺〕天地剖判之初、天中所レ生之神名曰二天御中主神一、次高皇産靈神、○註略次神皇産靈神、(是皇親神留彌命、此神子天兒屋命、即中臣朝臣祖也、)

〔中臣氏系圖〕延喜本系解狀○中略

同本系云、黑田大連公生二二男一、

中臣姓始 中臣常磐大連公(氏上、一云常齒大連、鐘屋牟漏連之女都夫羅古娘也、)

右大連始賜二中臣連姓一、磯城島宮御宇天國押開廣庭(欽明)天皇之代、特蒙二令譽一、○下略

〔古事記傳十五〕本系帳には、欽明天皇の御世に、常磐大連公に始めて中臣連と云姓を賜ふとあれども、然には非じか、さて欽明卷に、中臣連鎌子と云人も見えたり、さて又後世までも、姓のみならず、中臣と云職もあり、神祇官中臣などある是なり、

〔新撰姓氏錄和泉國神別天神〕中臣部　大中臣朝臣同祖天兒屋命之後也

〔常陸風土記香島郡〕古老曰、難波長柄豐前大朝馭宇天皇(○孝德)之世、己酉年、大乙上中臣□子、大乙下中臣部兎子等、請二總領高向大夫一、割二下總國海上國造部內、輕野以南一里、那賀國造部內、寒田以北五里一、別置二神郡一、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年三月丙子、常陸國鹿島郡中臣部二十烟、占部五烟、賜二中臣鹿島連之姓一、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

都久比夜波、須具波由氣等毛、阿母志々可、多麻乃須我多波、和須例西奈布母、

右一首都賀郡(○下野國)上丁中臣部足國

〔日本書紀一神代〕是後素戔嗚尊之爲行也甚無狀、○中略見天照大神方織神衣居齋服殿、則剝天斑駒、穿殿甍而投納、是時天照大神驚動、以梭傷身、由此發慍、乃入于天石窟、閉磐戶而幽居焉、故六合之內常闇、而不知晝夜之相代、于時八十萬神會合於天安河邊、計其可禱之方、○中略中臣連遠祖天兒屋命、忌部首(○首字原无、據一本補、)遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡(一云、眞經津鏡、)下枝懸青和幣(和幣、此云尼枳底、)白和幣、相與致其祈禱焉、

〔先代舊事本紀七神武〕辛酉爲元年春正月庚辰朔、都橿原宮、肇卽皇位、○中略天種子命奏天神壽詞、卽神世古事類是也、○中略復天兒屋命孫天種子命、(天押雲命子、)解除天罪國罪之事也、○中略復命中臣齋部二氏、俱掌祠祀之儀者矣、

〔令義解二神祇〕祈年月次祭者、百官集神祇官、中臣宣祝詞、(謂宣者、布也、祝者、贊辭也、言以告神祝詞、宣聞百官、故曰宣祝詞、)忌部班幣帛、(謂班猶頒、其中臣忌部者、當司及諸司中取用之、)

〔日本後紀十四平城〕大同元年八月庚午、先是中臣忌部兩氏、各有相訴、中臣氏云、忌部者本造幣帛、不申祝詞、然則不可以忌部氏爲幣帛使、忌部氏云、奉幣祈禱、是忌部之職也、然則以忌部氏爲幣帛使、以中臣氏可預祓使、彼此相論、各有所據、是日勅命、據日本書紀、天照大神閉天磐戶之時、中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、下枝懸青和幣白和幣、相與致祈禱者、然則至祈禱事、中臣忌部並可相預、又神祇令云、其祈年月次祭者、中臣宣祝詞、忌部班幣帛、踐祚之日、中臣奏天神壽詞、忌部上神璽鏡劍、六月十二月晦日大祓者、中臣上御祓麻、東西文部上祓刀、讀祓詞訖、中臣宣祓詞、常祀之外、須向諸社供幣帛者、皆取

五位以上卜食者充之、宜常祀之外、奉幣之使、取用兩氏、必當相半、自餘之事、專依令條、

〔古事記上神代〕布刀玉命者忌部首等之祖

〔古事記傳十五〕忌部首は、伊美辨能意毘登と訓べし、和名抄に、阿波國麻殖郡の忌部は、伊無倍とあれども、それはやゝ後の音便のまゝに書るものにて、正しからず、必伊美辨と書て、口には、インと聞ゆる如く讀むも、音便なれば、さもあるべし、凡て忌某と云たぐひ、皆此格なり、神を加牟と云とは異なり、こは諸忌部を率て、其長なる由の姓なり、自の職を以て名くるには非ず、かの中臣氏などの、即其職を以て名るとは異なり、

〔古語拾遺〕天地剖判之初、天中所生之神名曰天御中主神、次高皇產靈神、古語、多賀美武須比、是皇親神留伎命、次神皇產靈神、是皇親神留彌命、此神子天兒屋命、即中臣朝臣祖也、其高皇產靈神所生之女名曰栲幡千千姬命、天祖天津彥尊之母也、其男名曰天忍日命、大伴宿禰祖也、又男名曰天太玉命、齋部宿禰祖也、太玉命所率神名曰天日鷲命、阿波國忌部祖也、手置帆負命、讚岐國忌部祖也、彥狹知命、紀伊國忌部祖也、櫛明玉命、出雲國忌部(忌部二字原无、據一本補)玉作祖也、天目一箇命、筑紫伊勢兩國忌部祖也

〔新撰姓氏錄右京神別上天神〕齋部宿禰 高皇產靈命子、天太玉命之後也、

〔日本逸史十二桓武〕延曆二十二年三月乙丑、右京人正六位上忌部宿禰濱成等、改忌部爲齋部、古記引國史云

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年十月廿九日癸丑晦、神祇大祐正六位上忌部宿禰高善、改忌部○改忌部三字據一本補爲齋部、其先出自高御魂命也、

〔古語拾遺〕天照大神、赫怒入于天石窟、閉磐戶而幽居焉、○中略爰思兼神、深思遠慮議曰、宜令太玉神率諸部神、造和幣、○中略其物既備、掘天香山之五百箇眞賢木、古語、佐禰居自能禰居自、而上枝懸玉、中枝懸鏡、下枝懸青和幣白和幣、令太玉命捧持稱讚、亦令天兒屋命相副祈禱、

〔古事記傳八〕凡て御幣を取持ことは、此時の例の隨に、後の御代々々まで忌部氏の職業なり、次に引る書どもにあまねく見ゆ、又書紀神代下卷に、乃使太玉命以弱肩被太手繦、而代御手以祭此神者、始起於此矣、此神とは、大物主神なり、又代御手とは、御孫命に代り奉て、御幣を取持を云なり、御手と云に心を付べし、たゞ代て祭とのみ見は精しからず、又祈年月次大嘗等祭祝詞辭別にも、忌部能弱肩爾太多須支取掛氏、持由麻波利仕奉禮留幣帛乎、神

主祝部等受賜氏、事不過捧持奉登宣と見ゆ、諸の御幣を造り備ることも、此氏の職なり、書紀に、忌部遠祖太玉者造幣云々、古語拾遺に、宜令太玉神率諸部神、造和幣、（これは和幣と書たれど、諸物を云り、丹寸手に限らず、）また、令天富命率日鷲命之孫云々、殖穀麻種云々、天富命更云々、分阿波齋部率往東土、播殖麻穀云々、（天富命は布刀玉命の孫なり）また令天富命率供作諸氏、造作大幣、四時祭式に、祈年祭云々、前祭十五日、充忌部八人木工一人、令造供神調度など見えたり、

〔古語拾遺〕妖氣既晴、無復風塵、建都橿原、經營帝宅、仍令天富命（大玉命之孫）率手置帆負、彥狹知二神之孫、以齋斧齋鉏、始採山材、構立正殿、所謂底都磐根宮柱（布都之利）立、高天乃原爾搏風高互、（之利）御戶排、皇孫命乃美豆乃御殿乎造奉仕也、故其裔、今在紀伊國名草郡御木麁香二鄕、（古語、正殿謂之麁香、）採材齋部所居、謂之御木、造殿齋部所居、謂之麁香、是其證也、又令天富命率齋部諸氏、作種々神寶、鏡、玉、矛、盾、木綿、麻等、櫛明玉命之孫造御祈玉、（古語、美保伎玉、言祈禱也、）其裔今在出雲國、每年與調物貢進其玉、天日鷲命之孫、造木綿及麻幷織布、（古語、阿良多倍、）仍令天富命率日鷲命之孫、求肥饒地、遣阿波國、殖穀麻種、其裔今在彼國、當大嘗之年、貢木綿麻布及種種物、所以郡名爲麻殖之緣也、天富命更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻穀、好麻所生、故謂之總國、穀木所生、故謂之結城郡、（古語、麻謂之總也、今爲上總下總二國是也、）阿波忌部所居、便名安房郡、（今安房國是也、）天富命卽於其地立太玉命社、今謂之安房社、故其神戶有齋部氏、又手置帆負命之孫、造矛竿、其裔今分在讚岐國、每年調庸之外、貢八百竿、是其事等證也、爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、所謂高皇產靈、神皇產靈、魂留產靈、生產靈、足產靈、大宮賣神、事代主神、御膳神、（已上、今御巫所奉齋也、）櫛磐間戶神、豐磐間戶神、（已上、今御門巫所奉齋也、）生島、（是大八洲之靈、今生島巫所奉齋也、）坐摩、（是大宮地之靈、今坐摩巫所奉齋也、）日臣命帥來目部衞護宮門、掌其開闔、饒速日命帥內物部、造備矛盾、其物既備、天富命率諸齋部、捧持天璽鏡劍、奉安正殿、幷懸瓊玉、陳其幣物、殿祭祝詞、（其祝詞文在於別卷、）次祭宮門、（其祝詞亦在於別卷、）然後物部乃立矛盾、大伴來目建仗、開門令朝四方之國、以觀天位之貴、當此之時、帝之與神、其際未遠、同殿共床、以此爲常、故神物官物亦未分別、宮內立藏號

曰齋藏、令齋部氏永任其職、又令天富命率供作諸氏、造作大幣、訖令天種子命〈天兒屋命之孫〉解除天罪國罪事、所謂天罪者、上既設〈○設恐說字誤〉訖、國罪者、國中人民所犯之罪、其事具在中臣祓詞、爾乃立靈時於鳥見山中、天富命陳幣祝詞、禋祀皇天、徧秩群望、以答神祇之恩焉、是以中臣齋部二氏、俱掌祠祀之職、猨女君氏供神樂之事、自餘諸氏各有其職也、〈○中略〉至於小治田朝、〈○推古〉太玉之胤不絕如帶、天恩興廢繼絕、纔供其職、至于難波長柄豐前朝、〈○孝德〉白鳳〈○鳳一本作雉〉四年、以小華下諱齋部首作賀斯〈○斯一本作期、下同〉、拜神官頭、〈今神祇伯也〉令掌敍王族宮內禮儀、婚姻卜筮事、夏冬二季御卜之式、始起此時、作賀斯之胤不能繼其職、陵遲衰微以至今、至于淨御原朝、〈○天武〉改天下萬姓而分爲八等、唯序當年之勞、不本天降之績、其二曰朝臣、以賜中臣氏命以太刀、其三曰宿禰、以賜齋部氏命以小刀、其四曰忌寸、以爲秦漢二氏及百濟文氏等之姓、〈蓋與齋部共預齋藏事、因以爲姓也、今東西文氏獻祓太刀、蓋亦此之緣也、〉至大寶年中、初有記文、神祇之簿猶無明案、望秩之禮未制其式、至天平年中、勘造神帳、中臣專權、任意取捨、有由者小祀皆列、无緣者大社猶廢、敷奏施行當時獨步、諸社封稅總入一門、起自天降、洎乎東征、扈從群神名顯國史、或承皇天之嚴命、爲寶基之鎭衞、或遇昌運之洪啓、助神器之大造、然則至於錄功酬庸、須應同預祀典、或未入班幣之例、猶懷祕介推之恨、況復草薙神劒者、尤是天璽、自日本武尊凱旋之年、留在尾張國熱田社、外賊偸逃不能出境、神物靈驗以此可觀、然則奉幣之日可同致敬、而久代闕如不脩其禮、所遺一也、夫尊祖敬宗禮敎所先、故聖皇登極、受終文祖、類于上帝、禋于六宗、望于山川、徧于群神、然則天照大神者惟祖惟宗、尊無二、因自餘諸神者、乃子乃臣、孰能敢抗、而今神祇官班幣之日、諸神之後敍伊勢神宮、所遺二也、天照大神本與帝同殿、故供奉之儀、君神一體、始自天上、中臣齋部二氏相副奉禱日神、猨女之祖亦解神怒、然則三氏之職不可相離、而今伊勢宮司、獨任中臣氏、不預二氏、所遺三也、凡奉造神殿者、皆須依神代之職、齋部官率御木麁香二鄕齋部、伐以齋斧、掘以齋鉏、然後工夫下手、造畢之後、齋部殿祭及門祭、訖乃可御坐、而造伊勢宮及大嘗由紀主基宮、皆不預齋部、所遺四也、又殿祭門祭者、元太玉命供奉之儀、齋部氏之所職

也、雖然中臣齋部共任神祇官、相副供奉、故宮内省奏詞、稱將供奉御殿祭、而中臣齋部候御門、至寶龜年中、初宮内少輔從五位下中臣朝臣常恣改奏詞曰、中臣率齋部候御門者、彼省因循永爲後例、于今未改、所遺五也、又肇自神代、中臣齋部供奉神事、無有差降、中間以來、權移一氏、齋宮寮、主神司、中臣齋部者、元同七位官、而延曆初、朝原內親王奉齋之日、殊降齋部爲八位官、于今未復、所遺六也、凡奉幣諸神者、中臣齋部共預其事、而今太宰主神司獨任中臣、不預齋部、所遺七也、諸國大社亦任中臣、不預齋部、所遺八也、〇中略凡造大幣者、亦須依神代之職、齋部之官率供作諸氏、准例造備、然則神祇官神部、可有中臣、齋部、猨女、鏡作、玉作、盾作、神服、倭文、麻續等氏、而今唯有中臣齋部等二三氏、自餘諸氏不預考選、神裔亡散、其葉將絕、所遺十也、又勝寶九歲左辨官口宣、自今以後、伊勢大神宮幣帛使、專用中臣勿差他姓者、其事雖不行、猶所載官例未刊除、所遺十一也、

〔疑齋〕吾嘗讀古語拾遺、喟然廢卷而嘆曰、古人有言、曰水行者表深、表不明則陷、此書無表也、恐童蒙之儔、倀々乎陷於詐僞焉、美也雖不敏、請事斯語、廼竊論曰、廣成之奏此書、不過乎愬訴齋部氏之衰廢也已、蓋言、昔在中臣齋部兩家曩祖、竝執祭祀、無復雌雄、中世已來、唯中臣氏專奉其職、或行險以儌幸、擢至台位、瓜瓞之蕃、緜々般隆、齋部則不然、逐世頹壞、子孫孽庶、僅々不絕、喪狗之憂、𢘆々無已、方今國家降詔群臣、制造洪範、將以傳於不朽焉、冀主上因已所奏、眇復皇祖創業垂統之往躅、顧念臣下守官供職之前勳、而繼絕與廢、更與中臣相並而掌其職、是臣之所望也、其然也豈其然乎、太古之世、天兒屋命、太玉命、掌祭祀、而兒屋命爲之司長、〇中略故及寶龜中、供大殿祭、改奏辭曰、率齋部、雖非舊式、是其勢也、然廣成不自揣、漫欲相抗、何其誣也、朝家斥其奏而弗用、不亦宜乎、且齋部氏上古已來、未始有居顯々之職者、不翅至當時而然也、而自稱陵遲衰微、乃巧說衺辭、動躋鼻祖、以爲愬訴張本、遂曰、起自天降、洎乎東征、扈從群神名顯國史、或承皇天之嚴命、爲寶基之鎭衞、或遇昌運之洪啓、助神器之大造、然則至於錄功酬庸、須同預祀典、未入班幣之例、猶懷介推之恨、其雖訴陳乃祖之

預冥而陰希已躬之擢用、胡可不謂黠謫便佞耶、〇中略齋部頗厭、亦有命哉、夫皇帝始卽位也、大嘗於神祇、王公百寮羅列匝拜、中臣奏天神之壽辭、齋部奏神璽之鏡劒、國家之大禮也、累葉聯綿、以至當時、而天長中、有司奏曰、朝家寶器、莫重焉、然輙令齋部奉之、事涉於褻黷也、伏請從停廢、長元卽位、其裔爲賀復舊典、纔供奉之、蓋爲一時之榮、自茲已來、無復聞矣、齋部至此終失其職、嘗碌々備員而已、曁於晩近、子孫蔑爾、祝典攸秩、儻逢當用其人、則假代以他姓、謊曰齋部代、旣爲恒範、其傾替緊天也、亦未如之何已矣、

〔疑齋辨〕疑齋の書、まことによく論せられて、悉く當れることなり、然れども其當れりと云ふは、世間おしなべたる漢人流の議論の當れるにて、古への意をもて見れば、又當らざる事も有とぞ思はるゝ、そも〳〵古語拾遺の書、宣長が思ふは、古へにあらざる誤も多けれども、又中にはめづらしき事の古事記書紀には漏れたるが、此書に傳はれりとおぼしき事もなきにあらず、正史に違へりとて、必是を非とすべきに非ず、古傳說は正史に漏れたる事もなどか無からむ、また正史は違ひて、かへりて傍の書に正しく殘れる事もなどか無からむ、偖また宣長がこの書を論せむには、此論に出ざる外になほ誤はこれかれありて、これに論せられたる事には、かへりて然も非じと思ふ事多し、まづ此書、忌部を上げ過て、實に違へりと見ゆる事はまことに多し、然れども、是は必然も有べきおのづからの勢なり、いかにと云ふに、まづ神世におきて、中臣と忌部との上下のけぢめは、この論に云れたる如く、忌部はやゝ下れり、然れども、また大かた相並びて、等しく聞ゆる事もあるを、中臣の榮えは云ふばかりもなくして、忌部の衰へはこよなし、かの神代のけぢめの比ならむや、然れば他より見てだに此忌部の衰へは、いと〳〵悲しく歎かはしき事なれば、況て其家の人の歎きはいとことはりなる事にて、それに付ては、いさゝかいひ過したる事も、おのづから有るべきわざなり、またまことに此書に云へる如く

猨女

なる事もなどかなからむ、中臣の勢におされて、曲れりし事も有るまじきに非ず、朝廷に奉る書に、ひたすら理なき事を申すべきに非ざれば、後世の今よりまてはみだりに論じがたき物有り、〈中略〉この疑齋の論、其漢意の議論にのみ泥みて、人情を思ひはからず、まことの道にうときことあり、此書忌部を上げ過たるは、少しいかゞなるやうなれども、廣成の身になりて見れば、さも有べき事なれば、深く咎むべきに非ず、もろ共にかの家のおとろへをこそ歎くべき事なるに、此論は廣成の忌部を上げ過たるを憎むあまりにおのづからまた忌部を下し過ぎ、廣成を訕り過たりと見ゆることなむ多かりける、同じ過したる中に、廣成の過したるは理りにて順なるを、此論の過したるは、逆にして理なくぞおもはるゝ、

〔古事記 上神代〕天宇受賣命者〈猨女君等之祖〉

〔日本書紀 一神代〕天照大神驚動、〈中略〉乃入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、〈中略〉猨女君遠祖天鈿女命、則手持茅纒之矟、立於天石窟戸之前、巧作俳優、亦以天香山之眞坂樹爲鬘、以蘿〈蘿、此云比舸礙〉爲手繦、〈手繦、此云多須枳〉而火處燒、覆槽置、〈覆槽、此云于該〉顯神明之憑談、〈顯神明之憑談、此云歌牟鵝可梨〉

〔古事記 上〕爾日子番能邇邇藝命、將天降之時、居天之八衢、而上光高天原、下光葦原中國之神於是有、故爾天照大御神、高木神之命以、詔天宇受賣神、汝者雖有手弱女人、與伊牟迦布神〈自伊至布以音〉面勝神、故專汝往將問者、吾御子爲天降之道、誰如此而居、故問賜之時答白、僕者國神名猨田毘古神也、所以出居者、聞天神御子天降坐故、仕奉御前而參向之侍、〈中略〉故爾詔天宇受賣命、此立御前所仕奉猿田毘古大神者、專所顯申之汝送奉、亦其神御名者、汝負仕奉、是以猨女君等、負其猨田毘古之男神名而女呼猨女君之事是也、

〔古事記傳 十六〕仕奉は、皇朝に仕奉にて、〈猨田毘古神に仕奉と心得るは甚く違へり〉卽後まである猨女の職これなり、さて是は猨田毘古神、躬づから皇朝に侍て仕奉り賜ふべきを、此神は幽契ありて、罷退て伊勢

に坐べきが故に、宇受賣命此神の代として、其御名を負持て（近世に身の代を、名代と云は、此義によく當れり、）仕奉れこと詔ふなり、汝負二其神御名一（とは云ずして、其神御名者汝負とある語の勢に、心を著てよく味ふべし、其神の代には、汝仕奉れと詔ふ意おのづから含めり、）猨女君等、これは後の猨女君氏の人等を指て云り、男神の名を負てとは、猨田毘古神の代として、其御名を負む者は男なるべきことなるに、然はあらで、宇受賣命よりして、後までも皆女にして其職に供奉る故に、女にして男の代を供奉ると云意にて、男神とはことわれるなり、○中略さて此處、書紀には、時皇孫勅天鈿女命、汝宜以所顯神名爲姓氏焉、因賜猨女君之號、故猨女君等、男女皆呼爲君、此其縁也、○註略古語拾遺にも、天鈿女命者、是猨女君遠祖、以所顯神名爲氏姓、今彼男女、皆號爲猨女君、此縁也とあり、○註略さて書紀に依れば、此號は卽宇受賣命に賜へる號にして、其を後々まで嗣々傳へたる物なり、上に、天宇受賣命者、猨女君等之祖、書紀に、猨女君遠祖天鈿女命、また猨女上祖天鈿女命とあり、さてかくあれば、猨女君と云は、尋常の姓氏の如聞ゆれども、鏡作連祖伊斯許理度賣命と、此宇受賣命とは女神なるに、子孫の氏のあらむこと疑はし、（天照大御神の皇統の御祖神に坐など は、殊なる所由のましく〳〵て、殊に天上の事なれば、例には申しがたし、同じき神代といへども、御天降の後は、萬の事やう〳〵に人代のさまと近ければ、此神たち、夫なくして子孫のあらむこといぶかし、若くは夫神ありつれども、其夫神は功なくして、此婦神ぞ功ありて、皇朝に仕奉給ひ、後までも其家の職業は、世々女子の仕奉る氏なる故に、殊に妣神を以て、祖とはせるにやあらむともいふべけれど、なほ然にはあらじ、）故思に、これらは尋常の姓の如く、必しも其子孫にはあらざれども、此職業を相嗣て仕奉る女等を、猨女君と號て、此神を祖神とせるにやあらむ、○中略されば此記書紀を始めて、世々の史どもに、猨女君と云姓の人も見えたることなく、天武天皇の御世に、此同列の氏々（中臣忌部玉祖など）は、みな加婆泥を賜はれるに、其中にも見えず、又姓氏錄にも見えざるも、然る故にやあらむ、○中略さて猨女といふ職は、後まで大嘗會鎭魂祭などに見えたり、

〔古語拾遺〕妖氣既晴、無復風塵、建都橿原、經營帝宅、○中略爾乃立靈時於鳥見山中、天富命陳幣祝詞、禋祀皇天、徧秩群望、以答神祇之恩焉、○中略媛女君氏供神樂之事、自餘諸氏各有其職也、

〔先代舊事本紀五天孫〕宇摩志麻治命

十一月〇神武元年丙子朔庚寅、初齋瑞寶、奉爲帝后、鎭祭御魂、祈請壽祚、其鎭魂之祭自此而始矣、〇中略每年仲冬中寅爲例、有司行事、永爲鎭祭矣、所謂御鎭祭是也、凡厥鎭祭之日、猨女君等主其神樂、擧其言、大謂一二三四五六七八九十、而神樂歌儛、尤緣瑞寶、蓋謂斯歟、

〔古語拾遺〕凡鎭魂之儀者、天鈿女命之遺跡、然則御巫之職、應任舊氏、而今所選不論他氏、所遺九也、

〔古史徵開題記一冬〕皇祖邇々藝命の天降す時に、五部神を悉副たまへるは、上にも云る如く、高天原に始め給ひし儀のまに〳〵供奉れとの御事なり、然れば諸氏各々天壤と無窮に、其職に供奉しめ給はでは得有らぬわざなりと云意を含みて云へる中にも、鎭魂祭は、神世に天鈿女命の供奉れる儀なれば、必その裔たる御巫を任し給ふべきに、今は他氏を論はず任給ふことは、元に違へる事ぞと言れしなり、〇中略註かく歎き訴られつれど、遂に用ひ給ふことなくて、延喜臨時祭式に、凡御巫、取庶女堪事充之、但考選准散事宮人と有て、猿女氏の庶女といはず、甚も歎かはしき事なり、

〔類聚三代格一〕太政官符

應貢猿女事

右得從四位下行左中辨兼攝津守小野朝臣野主等解偁、猿女之興、國史詳矣、其後不絕、今猶見在、又猿女養田、在近江國和邇村、山城國小野鄕、今小野臣和邇部臣等、既非其氏、被供猿女、熟捜事緖、上件兩氏、貪人利田、不顧恥辱、拙吏相容、無加督察也、亂神事於先代、穢氏族於後裔、積日經年、恐成舊貫、望請令所司嚴加捉搦、斷用非氏、然則祭祀〇祀一本作禮無濫、家門得正、謹請官裁者、捜檢舊記、所陳有實、右大臣宣、奉勅、宜改正之者、仍兩氏猿女、從停廢、定猿女公氏之女一人、進縫殿寮、隨闕卽補、以爲恒例、

弘仁四年十月廿七日

〔政事要略八十四〕伊賀國百姓解　申進雜愁文事〇中略

一箚

讀申右少史猨女副雄〇中略

弘仁十三年七月廿二日

神服部

〔日本書紀二十九天武〕十三年十二月己卯、神服部連〇中略賜姓曰宿禰、

〔倭訓栞中編四加〕かんはとり　神服をよめり、神護慶雲中に、奉神服天下諸社と見ゆ、

〔新撰姓氏錄和泉國神別天孫〕綺連　津守連同祖、天香山命之後也、

〔姓氏考十加〕綺連

綺は、和名抄に、俗云、岐之於利毛能、又一訓加無波太、似錦而薄者也といへり、綺を織れることを奉るにやありけん、綺は神事に用ひられしものにて、神機の義にて、加牟波多といへるにもあるべし、

〔倭名類聚抄十二錦綺〕綺　蔣魴切韻云、綺虚彼反、俗云岐、一云於利毛能、又一訓加無波太、似錦而薄者也、釋名云、綺棊也、謂方文如棊也、

〔古事記傳二十二〕苅幡戸辨、和名抄に、山城國相樂郡蟹幡加無波多鄕、神名式に、同郡綺原坐健伊那太比賣神社あり、此地なり、今は綺田村と云、和名抄錦綺類に、綺加無波太、上代には加理婆多と云しを、ゝ後に轉て加爾婆多とも云しなるべし、鄕名に蟹字を書るを以て知べしかくて其を音便に加牟婆多とは云なり、

長幡部

〔古事記中開化〕神大根王者、三野國之本巣國造、長幡部連之祖、

〔古事記傳二十二〕長幡部連、神名帳に常陸國久慈郡長幡部神社あり、此地なり、

〔常陸風土記久慈郡〕郡東七里太田鄕、長幡部之社、古老曰、珠賣美萬命、自天降時、爲織御服、從而降之神名綺日女命、本自筑紫國日向二神之峰、至三野國引津根之丘、後及美麻貴天皇〇崇神之世、長幡部

神麻績部

遠祖多氏命、避自三野、遷于久慈、造立機殿、初織之、其所織服、自成衣裳、更無裁縫、謂之内幡、或曰、當織絁時、輒爲人見、故閉屋扉、闇内而織、因名烏織、强兵利劒、不得裁斷、今毎年、別爲神調而獻納之、

〔類聚國史 五十四 人〕弘仁八年閏四月戊子、常陸國人長幡部福良女授少初位上、免其戸田租、終身以有節行也、

〔延喜式 二十四 主計〕凡諸國輸調、〇中略 長幡部絁、長七丈、廣一尺九寸、

〔古語拾遺〕于時天照大神、赫怒入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、〇中略 爰思兼神、深思遠慮議曰、宜令太玉神、率諸部神造和幣、仍〇中略 令長白羽神、伊勢國麻續祖、今俗衣服謂之白羽、此緣也、種麻以爲青和幣、古語爾伎氏

〔倭訓栞 前編 五〕をみ　日本紀に麻績をよめり、うを略せし詞也、麻績とも見えたり、をうみともいひしにや、

〔日本書紀 五 崇神〕七年八月己酉、倭迹速神淺茅原目妙姫、穗積臣遠祖大水口宿禰、伊勢麻績君、三人共同夢而奏言、昨夜夢之、有一貴人誨曰、以大田田根子命爲祭大物主大神之主、亦以市磯長尾市爲祭倭國魂神主、必天下太平矣、

〔新撰姓氏錄 右京神別 上 天神〕神麻續連　天物知命之後也

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
具爾具爾乃、佐伎毛利都度比、布奈能里氏、和可流乎美禮婆、伊刀母須敝奈之、
右一首河内郡〇下野上丁神麻續部島麿

爾波奈加能、阿須波乃可美爾、古志波佐之、阿例波伊波々牟、加倍理久麻氏爾、
右一首帳丁若麻續部諸人

〔延喜式 四 伊勢大神宮〕四月九月神衣祭

大神宮和妙衣廿四疋、〇中略荒妙衣八十疋、〇中略荒祭宮和妙衣十三疋、〇中略荒妙衣卌疋、〇中略

右和妙衣者服部氏、荒妙衣者麻續氏、各自潔齋、始從祭月一日織造、至十四日供祭、

〔古語拾遺〕于時天照大神、赫怒入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、〇中略爰思兼神、深思遠慮議曰、宜令太玉神、率諸部神造和幣、仍〇中略令天羽槌雄神(倭文遠祖也)織文布、

〔日本書紀六垂仁〕三十九年十月、一云、(中略)是時楯部、倭文部、(中略)幷十箇品部、賜五十瓊皇子、

〔新撰姓氏錄大和國神別天神〕倭文宿禰　出自神魂命之後、大味宿禰也、

〔新撰姓氏錄河内國神別天神〕倭文宿禰　角凝魂命之後也

〔新撰姓氏錄攝津國神別天神〕倭文連　角凝魂命男、伊佐布魂命之後也、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十二月己卯、倭文連、(倭文、此云之頓於利、)〇中略賜姓曰宿禰、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、〇略歌

右一首、倭文部可良麿、

〔三代實錄二十一清和〕貞觀十四年四月廿四日癸亥、宮主從五位下兼行丹波權掾伊伎宿禰是雄卒、是雄者壹岐島人也、本姓卜部、改爲伊伎、始祖忍見足尼命、始自神代供龜卜事、厥後子孫傳習祖業、備於卜部、

〔新撰姓氏錄〕不載姓氏錄姓〇中略　卜部

〔神道問答〕卜部氏　問云、卜部氏は吉田家也、こはいづれの神孫なるや、　答云、卜部氏は忍見足尼命の後胤にて、龜卜の家也、〇中略壹岐島人卜部宿禰是雄に、伊岐宿禰といふ氏姓を賜ひしこと三代實錄にあり、もと壹岐の國より出たる人也、また同書に、始自神代供龜卜事、厥後子孫傳習祖業、備於卜部とありて、龜卜の家ながら、神祇官の下に屬すべき故ありしにや、令に、卜部爲解除とあり、四時祭式に、召中臣、稱唯率文部四國卜部入、また臨時祭式に、卜部取三國卜術優長

者などあり、三國は、伊豆、壹岐、對馬也、四國は右の三國に在京の卜部を合て也、

〔延喜式 三臨時祭〕凡宮主、取卜部堪事者任之、其卜部、取三國卜術優長者、（伊豆五人、壹岐五人、對馬十人、）若取在都之人者、自非卜術絶群、不得輙充、

〔龜卜秘傳〕兼魚奥書云、按、壹岐、對馬、伊豆之人、預卜術者、卜部姓也、是皆雷大臣裔、而不可據中臣藤原也、

〔新撰姓氏錄 右京神別上天神〕壹伎直　天兒屋九命世孫、雷大臣之後也、

〔日本書紀 二神代〕一書曰、○中略、天兒屋命主神事之宗源者也、故俾以太占之卜事而奉仕焉、

〔正卜考 二〕主神事之宗源とは、太占卜事もて、神慮を竊知りて、天皇に告奏して仕奉ることを主る由なり、然仕奉るが、神と君との御中執て仕奉る職なるが故に、中執臣の義にて、中臣と稱ひて、此神の子孫の職として神事仕奉り、やがて氏の名にも呼ぶことゝなれるなり、

〔神代卷家傳聞書 九〕唯一神道相承血脈

天兒屋命（攝家之元祖、春日大明神是也、）―天押雲命―天種子命……宇佐津臣命―大御食津臣命―伊香津臣命―梨津臣命―神聞勝命―久志宇賀主命……國摩大鹿島命―巨狹山命―雷大臣命（始賜卜部姓、○下略）

〔釋日本紀 五述義〕龜兆傳曰、凡述龜誓、皇親神魯岐（天照大神之謚也）神魯美命、（高御産巣日神之謚也）荒振神者掃々平、石木草葉斷其語、詔群神、吾皇御孫命者、豐葦原水穗國安平知食、天降事寄之時、誰神、皇御孫尊朝之御食夕之御食、（尋常之御膳也、）長之御食遠之御食之間、（聞食大嘗會昏曉御膳也、）故事也、已上告以卜食、可仕奉神問問賜之時、取（○取一本作仕）天香山白眞名鹿、（白眞男鹿、一説云、）吾將仕奉、我之肩骨内拔拔出、火成卜以問之、問給之時已致火爲、太詔戸命進啓、（又按、持神女、仕天香山也、龜津比女命、今稱天津詔戸太詔戸命也、）白眞鹿者、可知上國之事、何知地下之事、吾者能知上國地下天神地祇、況復人情憤悒、但手足容貌不同群神、故皇御孫命、放天石座、別八重雲天降坐、立御前下

神部

來也云々、

○按ズルニ、平田篤胤ハ、其著古史傳ニ、太詔戸命ト天兒屋命トヲ、異名同神トシタリ、

〔古事記傳八〕卜部氏、もと壹伎國より出づれば、彼氏人ぞ韓國より龜卜は傳へけむ、欽明天皇十四年、百濟に仰て、卜書暦本などを獻らしめたまひしこと書紀に見ゆ、このころよりや漢ざまの卜を用ひられけむ、然るに書紀の釋に、龜兆傳と云書を引て、龜卜の神代よりある事の起をことごとしく云れど、彼書は古より傳はれる鹿の卜を廢て、龜卜をあまねく世に用ひしめむために作れる虚言にて、古書に非ること著し、

〔袖中抄十七〕うらへかたやき

童蒙抄云、かたぬくしかとは、むかし天照大神、あめのいはとをうちふさひて、あめのいはやにこもりいまし丶時に、思兼の神、ふかくはかりごとをくたばかりて、天香來山の鹿をいけながらとらへて、そのかたをぬきて、しかをばはなちやりて、あまのかご山のまさか木をねこじにこじて、そのかたのほねやきて、かの大神のいでまさむことをうらなふ、〇中略彼の思兼の神は今の卜部氏の遠祖也、

○按ズルニ、平田篤胤ハ、其著古史傳ニ、思兼神ト天兒屋命トヲ、異名同神トシタリ、

〔令義解一職員〕神祇官

卜部廿人謂、案考課令、占候醫卜、效驗多者爲方術最、而於此令、長上番上、色制不分、卽知、卜部廿人、長上約在其中、其員數者、依式處分、

〔日本書紀二十二推古〕十年二月己酉朔、來目皇子爲撃新羅將軍、授諸神部、及國造、伴造等、幷軍衆二萬五千人、

〔古語拾遺〕凡造大幣者、亦須依神代之職、齋部之官、率供作諸氏、准例造備、然則神祇官神部、可有中臣、齋部、猿女、鏡作、玉作、盾作、神服、倭文、麻續等氏、而今唯有中臣齋部等二三氏、自餘諸氏不預考選、神裔

亡散、其葉將絕、所遺十也、

〔令義解 職員 一〕神祇官　神部卅人

〔令集解 職員 二〕朱云、此令云神部與衞禁律云神部、各別者、讃說、於此司尤是名負色也、故置卜部上也、案衞禁律神部者、卽祝也、異於此條神部也、監神者神主也、此條無其色、臨時處分耳者、未知此令神部職掌何事、讃云、問神部不注職掌者、爲何行事、答、官內雜驅使耳、不見行事、問、神部本何色人、答、神祇令忌部班幣帛者、所謂忌部是神部耳、但定氏耳歟、不見明文也、

祝部

〔日本書紀 神代 一〕一書曰、○中略素戔嗚尊勅蛇曰、汝是可畏之神、敢不饗乎、乃以八甕酒每口沃入、其蛇飲酒而睡、素戔嗚尊拔劍斬之、至斬尾時、劍刃少缺、割而視之、則劍在尾中、是號草薙劍、此今在尾張國吾湯市村、卽熱田祝部所掌之神是也、

〔神職考〕神部職號

齋主、神宮司、權宮司、神主、祝、祝部、禰宜、祠官、宮司、宮主、宮首、神部、神官、神家、神長、神人の號は、國史幷に類聚國史、類聚三代格、延喜式等にしたがひに見えたり、○中略其職號、いづれ重くいづれかろかりしや、今はさだかにはしられざれども、國史にも、延喜式にも、みな神宮司神主をさきに、禰宜祝をつぎにしるされたり、文德實錄には、神主及禰宜祝と、及の字をいれてわかてるところあり、しかれば禰宜祝はかろく、神主神宮司は重かりし事知べし、○中略しかれども、また祝部、あるひは祝とのみありて、神宮司神主禰宜等をすべいへりと見ゆるところあり、日本紀云、劍在尾中、是號草薙劍、此今在尾張國吾湯市村、卽熱田祝部所掌之神是也、續日本紀云、天下諸社之祝、不勤洒掃、以致穢者、收其位記與替、又云、諸社祝部、賜爵一級、この外御代々々に事とある時、百官をつらねしるされたるに、諸社祝とあり、是みな日本紀に神部とあるとおなじく、神宮司神主などをかねていひたるものか、

巫部

〔職官考上古一〕上古ニ祝部ト云ルハ、皆ソノ仕フル神社ノ神胤ニテ、世々其祖神ヲ祀リシモノニテ、後ニ神戸ヨリ庶人ヲ簡取テ定ムル類トハ、甚ク異ナリ、

〔古事記開化中〕日子坐王、〈○開化皇子、中略、〉又娶近淡海之御上祝以伊都玖〈此三字以音〉天之御影神之女、息長水依比賣、

〔古事記傳二十二〕此御上祝は、たゞ御上社の祝部と云とはいさゝか異にして、上卷に胸形君等之以伊都久、三前大神者也などある類なれば、姓なり、姓氏錄に、鴨部祝、紀祝、波多祝、三歲祝など云姓もある、其類なるべし、

〔新撰姓氏錄山城國神別天神〕祝部(ハフリベ)　鴨縣主同祖、建角身命之後也、

〔新撰姓氏錄右京諸蕃下漢〕祝部　工造同祖、吳國人田利須々之後也、

〔新撰姓氏錄山城國諸蕃漢〕祝部　吳國人田利須々之後也

〔令義解一職員〕神祇官

伯一人〈掌神祇祭祀、祝部、〈謂爲祭主贊辭者也、其祝者、國司於神戸中簡定、卽申太政官、若无戸人者、通取庶人也、〉神戸名籍、〈謂祝部名帳、神戸戸籍也、〉○下略〉

〔令集解二職員〕師記云、或國司選定、或神祇官遣使卜定也、有神戸者取神戸內、無神戸者取庶人也、民部例免課役、若犯罪差替、遭喪服闋復任也、

〔寫本令集解二職員〕問、神祇令云、仲冬上卯相嘗祭、義云、大倭住吉云々等也、神主各受官幣帛而祭之、衞禁律云、神部不覺減二等、監神亦減二等、物記云、禰宜波布里是神部也、神主是爲監神、假於多社者、多朝臣者、今按、此等之文、可有禰宜神主、而唯擧祝一色、若約祝部之句乎、

〔新撰姓氏錄和泉國神別天神〕巫部連　神饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也、雄略天皇御體不豫、因玆召上筑紫豐國奇巫、令眞椋率巫仕奉、仍賜姓巫部連、

〔姓氏考十加〕巫部宿禰

巫部は、和名抄に、説文云、巫(無反、和名加牟奈岐)祝女也とあり、則加牟奈岐倍と訓べし、祝女のみにもあらず、覡等をも主れる職なりしが氏になれる也、

〔續日本後紀 十五 仁明〕承和十二年七月己未、右京人中務少録正五位下巫部宿禰公成(中略)賜姓當世宿禰、公成者神饒速日命苗裔也、昔属大長谷稚武天皇(雄略)時、公成始祖眞椋大連奏、迎筑紫之奇巫、奉救御病之膏肓、天皇寵之、賜姓巫部、後世疑謂巫覡之種、故今申改之、

〔新撰姓氏錄 右京神別上 天神〕巫部宿禰　神饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也、

〔新撰姓氏錄 山城國神別 天神〕巫部連　饒速日命十世孫、伊己布都乃連公之後也、

〔日本書紀 二十 敏達〕六年二月甲辰朔、詔置日祀部、

〔新撰姓氏錄 左京神別中 天神〕日奉(ヒマツリ)連　高魂命之後也

〔姓氏考 七達〕他田日奉直

日奉は職號なり、(ことの由は、日奉連の條にいふべし、)比麻都理と訓べし、是は他田氏より日奉の職を仕奉りしが氏になれるに、海上國造を給へるなるべし、

〔新撰姓氏錄 右京神別上 天神〕佐伯日奉造　天押日命十一世孫、談連之後也、

〔新撰姓氏錄考證 九〕日奉は、ヒマツリと訓べし、敏達紀六年二月、詔置日祀部私部とある日祀是なり、さて日祀とは、日々に神祀に仕奉る由の名歟、また用明紀元年、酢香手姫皇女歷三代以奉日神ともあれば、日神に仕奉る由にて日奉とは云ふ歟、詳らかならねど、我郷の里俗に、日まち月まちといふ事あり、こは其月の幾日とさだめて、親戚知己などを會へて、酒のみ物食ひしてうち興ずる事なるが、實は日待月待にはあらで、日祭月祭の義の轉りたるものなり、之によりていはゞ、日々の祭り仕ふるにもあらず、また日神の御祭りに仕奉るよしにもあらずして、其祭日の定れる日に祭る由なり、

日置部

〔出雲風土記神門郡〕日置郷、〇日字原无、今據二倭名類聚抄一補、下同、中略、志紀島宮御宇天皇之御世、〇崇神日置伴部等所レ遣來宿停而爲レ政之所、故云二日置郷一、

〔延喜式二十二民部〕凡諸御巫、各賜二畿内田一町一、中宮東宮御巫亦准レ此、

凡出雲國、置二内外日置田二町一、

〔倭名類聚抄五國郡〕薩摩國管十三〇中略日置比於木

〔倭名類聚抄七國郡〕能登國珠洲郡日置比岐

〇按ズルニ、日置ハヒオキ、又ハヘキト云フ、置トハ即チ行フコトニテ、稻置、玉置、笠置ノ置ト同ジカラン、稻置ハ稻穀ヲ司ル職ナリ、玉置トハ玉ヲ造ルナリ、笠置トハ笠ヲ造ルナリ、皆其行事ヲ擧グルナリ、而シテ日置トハ、毎日ニ之ヲ行フコトニテ、即チ祭祀ヲイフナラン、故ニ日置ハ全ク日祀ニ同ジクシテ、日祀ヲ以テ職トセルモノナラン、而シテ日置田ハ日祀ニ供スベキ料田ナルベシ、

〔日本書紀六垂仁〕三十九年十月、命二五十瓊敷命一、俾レ主二石上神宮之神寶一、一云、五十瓊敷皇子居二于茅渟菟砥河上一、而喚二鍛名河上一、作二太刀一千口一、是時、(中略)日置部、(中略)井十箇品部、賜二五十瓊敷皇子一、

〔新撰姓氏錄未定雜姓和泉國〕日置部 天櫛玉命男、天櫛耳命之後者、不レ見、

〔古事記中應神〕是大山守命者、土形君、幣。岐。君。榛原君等之祖、

〔新撰姓氏錄右京皇別下〕日置朝臣 應神天皇皇子、大山守王之後也、續日本紀合、

〔新撰姓氏錄左京諸蕃下高麗〕日置造 男馬王裔孫、萇古君之後也、

〔新撰姓氏錄右京諸蕃下高麗〕日置造 高麗國人、伊利須使主之後也、一名伊和須

〔新撰姓氏錄大和國諸蕃高麗〕日置造 高麗國人、伊利須使主之後也、

〔新撰姓氏錄攝津國諸蕃高麗〕日置造 鳥井宿禰同祖、伊利須使主之後也、

神宮部

〔新撰姓氏錄(大和國諸蕃高麗)〕日置倉人。　伊利須使主兄、計呂使主之後也、

〔大三輪神三社鎭座次第(社傳)〕腋上池心宮御宇天皇(○孝昭)御世、神明憑吉足日命曰、吾國造大己貴命也、大初己命之和魂取託八咫鏡、名曰倭大物主櫛瓺玉命、鎭座大三輪神奈備云々、令造瑞籬奉齋焉、隨神託立瑞籬於大三輪山、遣吉足日命令崇齋大己貴命、大物主命詔吉足日命、自今已後、可爲宮能賣、是神宮部造先祖也、

〔新撰姓氏錄(山城國神別天神)〕神宮部造

葛木猪石岡天下神(○恐有脫誤)天破命之後也、六世孫吉足日命、磯城瑞籬宮御宇崇神天皇御世、天下有災、因遣吉足日命令齋祭大物主神、災異卽止、天皇詔曰、消天下災、百姓得福、自今以後、可爲宮能賣神、仍賜姓宮能賣公、然後庚午年籍、注神宮部造也、

語部

〔新撰姓氏錄(右京神別上天神)〕天語連。　縣犬養宿禰同祖、神魂命七世孫、天日鷲命之後也、

〔姓氏考(阿二)〕天語連(神別天神　右京)

天語は、古事記下卷朝倉宮の段に、伊勢國之三重婇歌、大后歌、天皇御歌の三歌を、天語歌なりとあり、さて天語のこゝろばへを思ふに、天上語と云ことなるべし、(○中略)天神の歌ひませしさまをうつして、其聲ぶりをさへ學べるから、天語歌といへるにぞあらん、三重婇も此こはぶりを傳へしなべに、其科をゆるし給へることゝすべし、天語氏は此歌のこはぶりを、こふ〴〵く傳へしもて氏に負へるならめ、(天語は天神語と云にて、神代のことばをつたへしにやと思へりしが、猶然にはあらじ、)天語は阿麻許止と師(○本居宣長)の訓れたるぞ然なるべき、拾芥抄姓尸錄部に、天語連とみえたり、(又思ふに、後世に神樂歌と云は、則天語歌のなごりならん、こを傳へしも天語氏なるべし、かゝればかゝづらへるなべ、其氏人も多からず、官位賜へることもなければ、國史にも神事にのみかゝづらへる也、)

〔古史傳(十)〕天語連、(○中略)天語と云ことは、雄略天皇卷に、伊勢國の三重釆女が、天皇の御怒にふれて詠ける歌、また其時の大后の御歌、天皇の大御歌の處に、此三歌者天語歌也とあるは、釆女が

歌に、天地初發の時に、二柱神の、漂へる國を許袁呂許袁呂に畫成たまへりし故事を、詠あはせたる故に、其時の三歌を天語歌と云りと通ゆれば、略〇註此姓も天上の故事を語る部の連なりし故に、かくは負にけむと所思るに就て考るに、貞觀儀式大嘗會の處に、物部、門部、語部者、左右衞門府、九月上旬申官、預令量程參集云々、語部美濃八人、丹波二人、〇二人、儀式作一人丹後二人、但馬七人、因幡三人、出雲四人、淡路二人、旬伴宿禰一人、佐伯宿禰一人、各引語部十五人云々、就位奏古詞とあり、然れば此語部てふ部は、天上の古事を語る部なること疑なく、また部あらむには、其を掌る群主の有けむことも疑なければ、天語連はその群主なりけむと所思ゆ、其は天武天皇紀に、十二年九月、語造賜姓曰連と見え、元正天皇紀に、養老三年十一月、少初位上朝妻子手人龍麻呂、賜海語連姓、除雜戸號とあるを以て、元はたゞに語連と云りしが、後に天語連と賜へることと知べし、海は天の借字なりさて天日鷲命の裔として、語部の群主を持たることは、如何なる因緣ありけむ、其はいまだ考得ず、

〔新撰姓氏錄和泉國神別天神〕語。〇語字原作許、或評、今據姓氏考說改、連。　大中臣朝臣同祖、天兒屋命之後也、

〔姓氏考十加〕語連

天武紀下に、十二年九月丁未、語造賜姓曰連、姓氏錄和泉國神別天神、語連、大中臣之同祖、天兒屋命之後也とみえしのみなり、既に天語連二の卷廿五右の條に云しごとく、此氏々は古事どもをかたり傳ふるの職業なりしが、氏になれるなり、天語氏は天上のかたりごとをつたへ、此氏は皇孫の御言をかたり傳ふるなり、故加多理基登と訓べし、加多羅比と訓べく思へれど、なほ然にはあらず、拾芥抄姓尸錄部に語連とみゆ、

〔出雲風土記意宇郡〕安來鄉、略〇中北海有毘賣埼、飛鳥淨御原宮御宇天皇天〇武御代、甲戌七月十三日、語臣猪麻呂之女子遙〇遙上恐脫逍字件埼、邂逅遇和爾、所賊不切、〇切恐歸字誤爾時父猪麻呂、所賊女子斂毘賣

大伴部

埼上大發聲憤、號天踊地、行吟居嘆、晝夜辛苦、無避歛所作、是之間經歷數日、然後興慷慨志、麻呂簫鋭鋒撰、便處居即擡訴云、天神千五百萬、地祇千五百萬、並當國靜坐三百九十九社、及海若等、大神之和魄者靜而荒魄者皆悉依給猪麻呂之所乞、良有神靈坐者、吾所傷助給、以此知神靈之所神者、(中略)安來鄉人語臣等之父也、自爾時以來、至于今日、經六十歲、

〔儀式二踐祚大嘗祭儀〕左右衞門府申官、令諸國量程進物部、門部、語部等、(中略)語部者、美乃國八人、丹波國一人、丹後國二人、但馬國七人、因幡國三人、出雲國四人、淡路國二人、

〔儀式三踐祚大嘗祭儀〕伴佐伯宿禰各一人、率語部十五人、著青摺衫亦入就位奏古詞、

〔古事記上〕故爾詔天津日子番能邇邇藝命、而離天之石位、押分天之八重多那此二字以音雲、而伊都能知和岐知和岐弖自伊以下十字以音於天浮橋宇岐士摩理蘇理多々斯弖、自宇以下十一字亦以音天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣、自久以下六字以音故爾天忍日命、天津久米命二人、取負天之石靫、取佩頭椎之大刀、取持天之波士弓、手挾天之眞鹿兒矢、立御前而仕奉、故其天忍日命、此者大伴連等之祖

〔古事記傳十五〕大伴連、大伴とは、多くの伴を帥るを以て云か、又此氏の伴の、多く廣き由か、萬葉七四丁に、靫懸流伴雄廣伎大伴爾とあり、又八十伴緒の中にも、此伴を、殊に崇め稱美て、大伴とは云か、萬葉廿五十一丁に、大伴乃宇治等名爾於敝流宇治は氏なりと、家持卿のよまれたるなどを思ふべし、

○中略 此氏は、祖神天忍日命よりして、世々もはら武事を以て、皇朝の御守衞とある職なり、後世の左右近衞大將、左右衞門督、左右兵衞督などの職の如し、然れば後の稱を以ていはゞ、かの中臣忌部五部などは文官、此大伴久米などは武官なり、然るを後には、文を尊ばるゝ故に、六衞府は、太政官より卑きを、上代には武を尊ばれし故に、此氏など甚貴かりき、さて書紀垂仁卷に、大伴連遠祖武日と云人見ゆ、此人、倭建命の東國征たまふ時にも、御從せられたり、垂仁卷に出たるは、廿五年なるを、其より景行天皇の四十年までは、百十五年なり、命長かりし人なりけむ、雄略卷、御世始に、大伴連室屋、物部連目、爲大連、大連も後世の大臣の如し、上代には、臣姓の人をば大臣とし、連姓の人をば大連として、政を執しむ、大連てふ號は、垂仁卷に始めて見ゆ、此御代に、大伴氏より分れて、佐伯氏と云出來たり、姓氏錄に見えて、下に引り、其より大伴佐伯と相並べり、

〔職官志五〕姓氏錄、大伴氏、佐伯氏之先曰天之押日、（道臣是其子孫也）從天孫將其大來目、（訓師衆）前導而降于日向高千穗嶺、因號大來目曰天之靫負云、（靫負、衞門也、後世衞門府、亦稱靫負府、）雄略帝之時、賜大連公（大伴室屋）靫負部、以衞宮門、（靫負部自天之押日、世隸其家、賓是王臣、今云賜者、蓋入其私、）大連公奏曰、開闔之務職已重矣、若臣一身、殆其不堪、請與臣子左右供之、於是別爲二宗、一曰大伴氏、一曰佐伯氏、世官衞門、而護宮城、其府官僚猶稱靫負、爲官故事、

〔古事記中神武〕故爾於宇陀有兄宇迦斯、（自宇以下三字以音、下效此也、）弟宇迦斯二人、○中略弟宇迦斯先參向拜曰、僕兄兄宇迦斯、射返天神御子之使、將爲待攻而聚軍、不得聚者作殿、其內張押機、將待取、故參向顯白、爾大伴連等之祖道臣命、久米直等之祖太久米命二人、召兄宇迦斯罵詈云、伊賀（此二字以音）所作仕奉於大殿內者、意禮（此二字以音）先入、明白其將爲仕奉之狀、而卽握橫刀之手上、矛由氣（此二字以音）矢刺而追入之時、乃己所作押見打而死、

〔日本書紀三神武〕戊午年六月、天照大神訓于天皇曰、朕今遣頭八咫烏、宜以爲鄉導者、果有頭八咫烏、自空翔降、○中略是時大伴氏之遠祖日臣命、帥大來目督將元戎、蹈山啓行、乃尋烏所向、仰視而追之、遂達于菟田下縣、○中略于時勅譽日臣命曰、汝忠而且勇、加能有導之功、是以改汝名爲道臣、

〔古語拾遺〕神武天皇、○中略建都橿原、經營帝宅、○中略日臣命、帥來目部、衞護宮門、掌其開闔、

〔新撰姓氏錄左京神別中天神〕大伴宿禰　高皇產靈尊五世孫、天押日命之後也、初天孫彥火瓊々杵尊、神駕之降也、天押日命、大來目部、立於御前、降于日向高千穗峯、然後以大來目部、爲天靫部、靫負之號起於此也、雄略天皇御世、以入部靫負、賜大連公、奏曰、衞門開闔之務、於職已重、若有一身難堪、坐與愚兒語、相伴奉衞左右、勅依奏、是大伴佐伯二氏、掌左右開闔之緣也、

佐伯宿禰　大伴宿禰同祖、道臣命七世孫、室屋大連公後也、

〔令集解五職員〕弘仁二年十一月廿八日官符云、○中略今得散位從五位下大伴宿禰眞木麿、右兵庫頭從

五位下佐伯宿禰金山等解偁、己等之祖室屋大連公、領靫負三千人、左右分衞、是以衞門開闔、奕葉相承、望請改衞士字、以爲衞門者、被右大臣宣偁、奉勅、勘撿右記、所申有理、宜依件改、

〔古史傳二十七〕佐伯連、〇中略大伴宿禰の條に、上に引たる文に連けて、雄略天皇御世、以天靫負部賜大連公、奏曰、衞門開闔之務、於職已重、若一身難堪、望與愚兒語相伴奉衞左右、勅依奏、是大伴佐伯二氏、掌左右開闔之緣也とあり、大連公とは、即室屋大連公を云へり、語とは、雄略天皇紀に、大伴談連とありて、談此云箇陀利とある人なり、佐伯氏はかく室屋大連の時に分れたる故に、上に引たる文に、其後也と云るなり、此文ふと見ては、大伴氏の靫負部の長として、衞門開闔を務むること、此天皇の御世より始れる事の如く聞ゆれども、靫負は元より此家に屬たる職にて、衞門開闔も此職に屬る元よりの務なり、其は古語拾遺に、神武天皇の即位の事を記せる處に、日臣命帥來目部衞護宮門、掌其開闔と有るにて知るべし、然るに此御世まで御門の左右を一人して務め來しを、室屋大連公に是職を賜へる時に、一人にては堪がたき重職なれば、其兒語連と二人にて、左右を務めむと奏せる故に、奏しの任に許し賜ひしより、大伴佐伯兩氏にて、左右の開闔を掌る事と成れる由なり、天武天皇紀に、十三年十二月戊寅朔己卯、大伴連、佐伯連、賜姓曰宿禰とあり、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對像、皇后太子並侍焉、群臣百寮、及士庶分頭行列殿後、勅遣左大臣橘宿禰諸兄白佛、三寶乃奴止仕奉流、天皇羅我命、盧舍那像能大前仁奏賜部止奏久、〇中略又大伴佐伯宿禰波、常母云如久、天皇朝守仕奉事顧奈伎人等爾阿禮波、汝多知乃祖止母乃云來久、海行波美豆久屍、山行波草牟須屍、王乃幣爾去曾死米、能杼爾波不死止云來流人等止奈母聞召須、是以遠天皇御世始氏、今朕御世爾當氏母內兵(ウチノイクサ)止心中(オモホシメシテ)古止波奈母遣須、故是以、子波祖乃心成(ナス)伊自子爾波可在、此心不失自底明淨心以氏仕奉止自氏奈母、男女幷氏一二治賜夫、〇中略天皇大命衆聞食宣、

〔萬葉集十八〕賀陸奥國出金詔書歌一首幷短歌

葦原能、美豆保國乎、安麻久太利之良志賣之家流、須賣呂伎能、神乃美許等能、御代可佐禰、天乃日嗣等之良志久流、伎美能御代御代、○中略御食國波、左可延牟物能等、可牟奈我良、於毛保之賣之弖、毛能乃布能、八十伴雄乎、麻都呂倍乃、牟氣乃麻爾麻爾、老人毛、女童兒毛、之我願、心太良比爾、撫賜、治賜婆、許己乎之母、安夜爾多敷刀美、宇禮之家久、伊余與於母比弖、大伴能、遠都神祖乃、其名乎婆、大來目主登、於比母知弖、都加倍之官、海行者、美都久屍、山行者、草牟須屍、大皇乃、敝爾許曾死米、可敝里見波勢自等許等大弖、大夫乃、伎欲吉彼名乎、伊爾之敝欲、伊麻乃乎追通爾、奈我佐敝流、於夜能子等毛曾、大伴等、佐伯氏者、人祖乃、立流辭立、人子者、祖名不絶、大君爾、麻都呂布物能等、伊比都獵流、許等能都可佐曾、梓弓、手爾等里母知弖、劒太刀、許之爾等里波伎、安佐麻毛利、由布能麻毛利爾、大王能、三門乃麻毛利、和禮乎於吉弖、且比等波安良自等、伊夜多弖、於毛比之麻左流、大皇乃、御言能左吉乃、一云乎聞者貴美、一云、貴久之安禮婆三〇反歌首略

天平感寶元年五月十二日、於越中國守館、大伴宿禰家持作之、

〔萬葉集二十〕喩族歌一首并短歌

比左加多能、安麻能刀比良伎、多可知保乃、多氣爾阿毛理之、須賣呂伎能、可未能御代欲利、波自由美乎、多爾藝利母多之、麻可胡也乎、多波左美蘇倍弖、於保久米能、麻須良多祁乎乎、佐吉爾多弖、由伎登利於保世、山河乎、伊波禰左久美弖、布美等保利、久爾麻藝之都都、知波夜夫流、神乎許等牟氣、麻都呂倍奴、比等乎母夜波之、波吉伎欲米、都可倍麻都里弖、安吉豆之萬、夜萬登能久爾乃、可之婆良能、宇禰備乃宮爾、美也婆之良、布刀之利多弖氐、安米能之多、之良志賣之祁流、須賣呂伎能、安麻能日繼等、都藝弖久流、伎美能御代御代、加久佐波奴、安加吉許己呂乎、須賣良弊爾、伎波米都久之弖、都加倍久流、於夜能都可佐等、許等太弖氐、佐豆氣多麻敝流、宇美乃古能、伊也都藝都岐爾、美流比等乃、可多里都藝弖氐、伎久比等能、可我見爾世武乎、安多良之伎、吉用伎曾乃名曾、於煩呂加爾、

己許呂於母比弖、牟奈許等母、於夜乃名多都奈、大伴乃、宇治等名爾於敝流、麻須良乎能等母、之奇志麻乃、夜末等能久爾々、安伎良氣伎、名爾於布等毛能乎、己許呂都刀米與、都流藝多知、伊與餘刀具倍之、伊爾之敝由、佐夜氣久於比弖、伎爾之曾乃名曾、

右緣淡海眞人三船讒言、出雲守大伴古慈悲宿禰解任、是以家持作此歌也、

〔萬葉集七雜歌〕詠月

靫懸流、伴雄廣伎、大伴爾、國將榮常、月者照良思、

〔萬葉集三挽歌〕十六年甲申○天平春二月、安積皇子薨之時、內舍人大伴宿禰家持作歌六首、○中略

大伴之、名負靫帶而、萬代爾、憑之心、何所可將寄、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年六月甲辰、至是從四位上山背王復告、橘奈良麻呂備兵器、謀圍田村宮、正四位下大伴宿禰古麻呂亦知其情、　七月戊申、皇太后詔曰、○中略又大伴佐伯宿禰等波、自遠天皇御世、內乃兵止爲而仕奉來、又大伴宿禰等波、吾族爾母在、諸同心爾爲而、皇朝乎助仕奉牟時爾、如是醜事者聞曳自、汝多知乃不能爾依弖志、如是在良志、諸以明淸心、皇朝乎助仕奉禮止宣、

〔古史傳二十七〕天平寶字元年に、橘奈良麻呂朝臣の、藤原惠美仲麻呂が姦惡を擯はむと謀れる時に、大伴古麻呂、佐伯大成、大伴古慈悲、佐伯全成など云ひし宿禰等の、黨せること發覺れて、誅はれし事あり、○註略是よりして此氏人の大き家々は、漸々に勢ひを失ひ、衰へもて來て、遂に其家々の絶々に成りて、今しは御卽位大嘗會を始め、神代の故實を逐賜ふ大御禮儀には、大伴代、佐伯代とて、他氏人を雇ひ給ふ事と成ぬるは、最も悲しき事なりかし、

〔日本書紀三十持統〕四年十月乙丑、詔軍丁筑紫國上陽咩郡人大伴部博麻曰、○中略朕嘉厥尊朝愛國、賣己顯忠、故賜務大肆、○中略以顯其功、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿米都之乃、以都例乃可美乎、以乃良波加、有都久之波々、爾麻多己等刀波牟、

右一首、埴生郡(○下總國)大伴部麻與佐、

〔古事記上〕故爾詔天津日子番能邇邇藝命、而離天之石位、(中略)○天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣、(自久以下六字以音)故爾天忍日命、天津久米命二人、取負天之石靫、取佩頭椎之大刀、取持天之波士弓、手挾天之眞鹿兒矢、立御前而仕奉、故其(中略)○天津久米命、(此者久米直等之祖也)

〔古事記傳十五〕天津久米命、書紀には、大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天槵津大來目とあり、(古語拾遺も同じ)此事いとうたがはし、此神は此記にては、天忍日命と相並ばして、同列なる趣にして、白檮原朝段にも、大伴連之祖道臣命、久米直之祖大久米命二人云々と相並べ云て、其大久米命の事、なほ處々に見えたり、然るを書紀には、彼卷にも、大伴氏之遠祖日臣命、帥大來目督將元戎、また大伴氏之遠祖道臣命、帥大來目部などありて、(これらの大來目は、人の名とも聞えず、)一大久米命と云人も無し、此にも天槵津大來目とあるは、(此は一人の名とは聞ゆれども、)命とも云ず、たゞ天忍日命の下に屬る神にて、共に此記の趣と異なり、此二の傳、何れか正しからむ、知がたけれども、此記に依て考るに、久米直は、白檮原御世、大久米命などまでは、大伴と相並びたる氏なりしを、其子孫に至りては、痛く衰へて、(後の御世々々には、大伴と相並びたること見えず、いと微にして、世々に聞えたる人もなし、)大伴氏のみ榮えたりしほどに、久米は其下に屬る者になれりしを、(書紀雄略卷に、詔大伴室屋大連、使來目部云々など、あるを見れば、當時既く、大伴の下に屬りと見ゆ、)書紀は、神代卷をも、神武卷をも、後に其子孫の衰へたる時の趣を以て記されたる物と見えたり、萬葉十八、(二十一丁)家持卿歌に、大伴能、遠都神祖乃、其名乎婆、大來目主登、於比母知弖、都加倍之官とよまれたるも、大伴の祖神の、大久米を帥主れる由にて、書紀の趣なり、姓氏錄の趣は此記と合へり、

〔職官考二上古〕久米トハ、思フニ組ニ同ジク、兵士ニ一隊二隊ナド云フガ如ク、其一隊ノ部屬ヲ久米ト云ヒ、其部屬ノ長ヲ直トハ云ヘリ、而ルヲ舊說ニ、美都々々斯久米トアルヲ、美都ハ圓ニテ、

靫部

久米ハ久流目ナリ、人目ノ圓ク大ナルヲ、目ノクル〳〵シタルト云フ是ナリ、古事記傳ト云ルハ信ガタシ、

〔日本書紀 三神武〕戊午年十月癸巳朔、天皇○中略先擊八十梟帥於國見丘、破斬之、○中略既而餘黨猶繁、其情難測、乃顧勅道臣命、汝宜帥大來目部、作大室於忍坂邑、盛設宴饗、誘虜而取之、辛酉年正月庚辰朔、天皇卽帝位於橿原宮、是歲爲天皇元年、○中略初天皇草創天基之日也、大伴氏之遠祖道臣命、帥大來目部、奉承密策、能以諷歌倒語、掃蕩妖氣、倒語之用始起乎茲、二年二月乙巳、天皇定功行賞、○中略亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地、今號來目邑、此其緣也、

〔日本書紀 十四雄略〕二年七月、百濟池津媛違天皇將幸、婬於石河楯、舊本云、石河股合首祖楯、天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫婦四支於木、置假庪上、以火燒死、

〔日本書紀 十五淸寧〕二年十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室、見市邊押磐皇子子億計弘計、畏敬兼抱、思奉爲君、○下略

〔日本書紀 七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○中略至甲斐國、居于酒折宮、○中略居是宮、以靫部（ユルシヒヘ・トモノヘ）賜大伴連之遠祖武日也、

〔日本書紀通證 十二景行〕靫部（ユルシヒヘ・トモノヘ）訓未詳、一訓伴部也、續日本紀、陸奧國白河郡人、靫大伴部繼人、靫部、卽靫負部也、六月晦祓所謂、靫負伴男是也、淸寧紀、白髮部靫負、卽後世所謂衛門兵衛也、

〔日本書紀 十五淸寧〕二年二月、天皇恨無子、乃遣大伴室屋大連於諸國、置白髮部舍人、白髮部膳夫、白髮部靫負、冀垂遺跡、令觀於後、

〔日本書紀通證 二十淸寧〕靫負後世衛門兵衛也、倭名鈔鄕名、靫負、由介比、

〔日本書紀 十八安閑〕二年四月丁丑朔、置勾舍人部、勾靫部（ユキベ）、

〔豐後風土記 日田郡〕靫編（ユギアミ）鄕在郡東南、

門部

昔者磯城島宮御宇天皇（〇欽明）之世、日下部君等祖邑阿自、仕奉靫部、其邑阿自、久就於此村、造宅居之、因斯名曰靫負（ユゲヒ）村、後人改曰靫編郷、

〔新撰姓氏錄（大和國神別天神）〕門部連　口牟須比命兒、安牟須比命之後也、

〔姓氏考（十加）〕神名式に、大和國宇陀郡門僕神社とあるは、此祖神を祀るならん、門部は加杼毛理倍と訓べし、（門僕は、加杼毛理とよむべし、）則職號の氏になれるなり、

〔古史傳（二十七）〕門部連、（〇中略）牟須比命とは、高御魂、神御魂命をかねて稱せるなり、然れば浮穴直條なる、移受牟受比命と申すは、皇產靈神の御兒にて、天忍日命（亦名天津久米命）は其子なること灼し、其は門部とは、御門を衞る部にて、連は其を掌る職なれば、必ず御門の開闔を掌る大伴氏の同族なるべき由緒をも思ふべし、

〔令義解（一職員）〕衞門府　門部二百人

〔延喜式（二十八兵部）〕凡衞門府門部、先簡負名入色人補之、若不足者、三分之一通取他氏、

物部

〔先代舊事本紀（三天神）〕正哉吾勝勝速日天押穗耳尊

天照大神詔曰、豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者、吾御子正哉吾勝勝速日天押穗耳尊、可知之國、言寄詔賜、而天降之時、高皇產靈尊兒、思兼神妹、萬幡豐秋津師姬栲幡千々姬命爲妃、誕生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊之時、正哉吾勝勝速日天押穗耳尊奏曰、僕欲將降、裝束之間、所生之兒、以此可降矣、詔而許之、（〇中略）高皇產靈尊勅曰、若有葦原中國之敵拒神人而待戰者、能爲方便、誘欺防拒、而令治平、令三十二人、並爲防衞、天降供奉矣、（〇中略）

副五部人爲從、天降供奉、

物部造等祖天津麻良　笠縫部等祖天曾蘇　爲奈部等祖天津赤占　十市部首等祖富富侶

筑紫弦田物部等祖天津赤星

五部造爲伴領、率天物部、天降供奉、

二田造　大庭造　舍人造　勇蘇造　坂戸造

天物部等二十五部人、同帶兵仗、天降供奉、

二田物部　當麻物部　芹田物部　鳥見物部　横田物部　嶋戸物部　浮田物部　巷宜物部

足田物部　酒人物部　田尻物部　赤間物部　久米物部　狹竹物部　大豆物部　肩野物部

羽束物部　尋津物部　布都留物部　住跡物部　讃岐三野物部　相槻物部　筑紫聞物部

播磨物部　筑紫贄田物部

〔大日本史兵一〕本書曰、饒速日命降于中州、高皇產靈尊屬之以防衞三十二人、及五部造、二十五物部、下文又云、天照大神詔令五部神陪天忍穗耳尊、及皇孫降于中國、諸部神皆從焉、而其五部神名、與饒速日防衞三十三人重複、一書兩說可疑、且本書以饒速日爲瓊瓊杵尊同母兄、已屬附會、說詳可美眞手傳、然則防衞三十二人、及五部造、二十五物部、實從皇孫者、本書設兩說、以爲饒速日事、蓋亦附會也、故今姑係于此、

〔職官志三〕物部有二種、一曰內物部、謂其隸於內、而常執儀仗、治刑辟也、自宇麻志麻遲所率時然、一曰、二十五物部、略。註以其族分在諸國、蓋令之講武所在、有事則徵、後世刑部兵部分其職、而刑部囚獄之屬、及衞門之屬、尙有物部矣、惟兵部之屬無復其族、是當時所簡點、兵衞兵士已非復其族之出也、兵衞者、良家子弟分配宮闈宿衞是職、兵士出於農、乃擬唐之折衝府、以置軍團、選其有材藝、充之衞士防人也、

〔古事記中神武〕故爾邇藝速日命參赴、白於天神御子、聞天神御子天降坐、故追參降來、卽獻天津瑞以仕奉也、故邇藝速日命、娶登美毘古之妹登美夜毘賣、生子宇摩志麻遲命、此者物部連、穗積臣、婇臣祖也、

〔古事記傳十九〕抑物部は、母能々布部と云ことにて、布辨を約て母能々辨とはいふなり、さて其母能々布と云は、名義は未考得ず、總て武勇職を以仕奉る建士の稱にして、萬葉歌に、是を宇治の枕

詞に云るも、いちはやしといふ意なり、（此事冠辭考に委し、）又三巻には武夫とも書り、（五十一丁）後世までも武士をもの丶ふと云り、さて又朝廷に仕奉る人等を凡ても母能々布と云て、母能々布之八十伴緒などよめるも、萬葉に多きは、上代に武勇職を主とせられし世の古言の遺れりしなり、○中略註さて部物と云者は、一部の武士にて、其は上代に、殊に勇て武事の勝れたる輩なりし故に、其部を殊に武士部とは名けられしなり、（されば母能々布と云は、凡て武き人の稱、物部と云は、一部の武人の稱にて、差別あるを、萬葉などに、母能々布にも物部と書る故に、まぎらはしきことあるなり、）

〔倭訓栞前編三十三毛〕もの丶ふ　物部と書り、もの丶べともいふ、されど少しは差別ある事なり、神武帝東征し給ひし時、饒速日命をもて内物部を率ひて、武威を示させたまひしより、物部氏の任となれるをもて、後世に至ても、武士をもはら物のふといへる也、

〔職官考上古二〕今按ニ、母能ハ兵器ヲ云ヒ、（神武紀ニ、凶器チツハモノ、又崇神紀ニ兵器チツハモノトモ、モノ丶クトモ訓リ、）倍ハ部ヲ云ルニテ、兵器ヲ佩テ健キ職ニ仕フル部曲ノ稱ナリ、（母能々布ト云ハ、即チ物部ヨリ轉レルナルベシ、）後ニ鎧甲ヲ物具ト云ヒ、兵士ノ長ヲ物頭ト云モ是ナリ、サテ物部ノ連ノ率ル兵士ハ、上代ニ殊ニ勇ミテ、武事ノ勝レタル輩ナリシ故ニ、其部ヲ物部ト云シガ、終ニ武キ人ノ稱トナリシナルベシ、

〔日本書紀三神武〕戊午年十有二月丙申、皇師遂擊長髓彥、○中略時長髓彥乃遣行人、言於天皇曰、嘗有天神之子、乘天磐船自天降止、號曰櫛玉饒速日命、（饒速日、此云儞藝波揶卑、）是娶吾妹三炊屋媛、（亦名長髓媛、亦名鳥見屋媛、）遂有兒息、名曰可美眞手命、（可美眞手、此云于魔詩莽耐、）故吾以饒速日命爲君而奉焉、○中略饒速日命本知天神慇懃唯天孫是與、且見夫長髓彥稟性愎佷、不可敎以天人之際、乃殺之、帥其衆而歸順焉、天皇素聞饒速日命是自天降者、而今果立忠效、則褒而寵之、此物部氏之遠祖也、

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、○中略物部氏遠祖饒速日命、殺虜帥衆歸順官軍、忠誠之効、殊蒙褒寵、○中略爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、○中略饒速日命、帥內物部造備矛盾、

〔日本書紀雄略十四〕七年八月、官者吉備弓削部虛空取急歸家、吉備下道臣前津屋、（或本云、國造吉備臣山、）留使虛空、經月不肯聽上京都、天皇遣身毛君丈夫召焉、虛空被召來言、前津屋以小女爲天皇人、以大女爲己人、競令相鬪、見幼女勝、卽拔刀而殺、復以小雄雞呼爲天皇雞、拔毛剪翼、以大雄雞呼爲己雞、著鈴金距、競令鬪之、見禿雞勝、亦拔刀而殺、天皇聞是語、遣物部兵士三十人、誅殺前津屋幷族七十人、　十二年十月壬午、天皇命木工鬪雞御田、（一本云、猪名部御田、蓋誤也、）始起樓閣、於是御田登樓、疾走四方、有若飛行、時有伊勢采女、仰觀樓上、恠彼疾行、顚仆於庭、覆所擎饌、（饌者、御膳之物也、）天皇便疑御田姧其采女、自念將刑、而付物部、○下略

〔職官志三〕古者兵刑不分職、兵農不分業、兵人古謂之物部、（讀爲茂能乃觚、後俗轉語爲茂能乃不、）物部連之遠祖、（宇麻志麻遲）以宿禰掌環列之尹、釐刑與兵、至其子孫受官姓、而官屬之物部、亦能世其役、故曰、兵刑不分職、○中略後世刑部兵部分其職、而刑部囚獄之屬、及衞門之屬、尙有物部矣、

〔日本書紀雄略十四〕十三年九月、木工猪名部眞根、以石爲質、揮斧斲材、終日斲之、不誤傷刃、天皇遊詣其所、而恠問曰、恒不誤中石耶、眞根答曰、竟不誤矣、乃喚集采女、使脫衣裙而著犢鼻、露所相撲、於是眞根暫停、仰視而斲、不覺手誤傷刃、天皇因嘖讓曰、何處奴不畏朕、用不貞心、妄輙答、仍付物部、使刑於野、

〔日本書紀舒明二十三〕豐御食炊屋姫天皇（推古、）○中略、以三十六年三月、天皇崩、九月葬禮畢之、嗣位未定、當此時蘇我蝦夷臣爲大臣、○中略大臣將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲子阿椰、出于門、坐胡床而待、時軍至、乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、

〔令義解一職員〕囚獄司

物部卌人（謂此伴部之色、故式部補任、其衞門府門部亦同也、）掌主當罪人決罰事、物部丁廿人（謂諸國仕丁、帶仗守獄者、卽自民部省所充也、）

衞門府

物部卌人（謂此名爲內物部、爲決罪人特置此府、當決罰時、皆帶刀劍、）

大刀佩部

〔日本書紀垂仁六〕三十九年十月、五十瓊敷命、居於茅渟菟砥川上宮、作劒一千口、是時（中略）大刀佩部、幷十箇品部賜五十瓊皇子、一云、五十瓊敷皇子、居于茅渟菟砥河上、而喚鍛名河上、作大刀一

隼人

〔古事記上〕故後木花之佐久夜毘賣參出白、妾妊身、今臨產時、是天神之御子、私不可產、故請、爾詔、佐久夜毘賣、一宿哉妊、是非我子、必國神之子、爾答白、吾妊之子、若國神之子者、產不幸、若天神之御子者幸、卽作無戸八尋殿、入其殿內、以土塗塞而方產時、以火著其殿而產也、故其火盛燒時所生之子、名火照命、此者隼人阿多君之祖、

〔古事記傳十六〕隼人は波夜毘登と訓べし、和名抄にも、隼人司、波夜比止乃豆加佐とあり、後世に、波伊登と云は、夜毘は伊と約まれども、なほ訛なるべし、又書紀の訓などに、ハイトンとあるは、いよゝ正しからず、又今世に波夜登とも云は、波伊登と云たぐひなり、隼人と云者は、今の大隅薩摩二國の人にて、其國人は、絶れて敏捷く、猛勇きが故に、此名あるなり、古言に、猛勇きを、波夜志とも、登志とも云れば、波夜と云に猛勇き意もあるなり、隼字を書ことは、迅速きこと此鳥の如く、又波夜夫佐てふ名も合へればなり、

〔新撰姓氏錄大和國神別天孫〕大角隼人　出自火闌降命也

〔新撰姓氏錄山城國神別天孫〕阿多隼人　富乃須佐利乃命之後也

○按ズルニ、隼人ノコトハ、令制官職隼人司篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

解部

〔釋日本紀十三述義〕筑後國風土記曰、上妻縣縣南二里有筑紫君磐井之墓墳、○中略當東北角有一別區、號曰衙頭、○衙一本作衙、註同、頭一本無、衙頭政所也、（炊　其中有一石人、假容立地、號曰解部、前有一人、躶形伏地、號曰偸人、生爲偸猪、仍擬決罪、○罪恐罪誤、側有石猪四頭、號贓物、贓物、盗物也、

〔令義解一職員〕刑部省

大解部十人、掌問窮爭訟、中解部廿人、掌同大解部、少解部卅人、掌同中解部、

海部

〔古事記中應神〕此之御世、定賜海部、山部、山守部、伊勢部也、

〔古事記傳三十三〕海部は阿麻と訓べし、部字を、別に辨とよむは非なり、和名抄に、尾張、紀伊などの郡名の海部

も、阿末とあり、さて海部は、下巻甕栗宮〇清寧段御歌に、斯毘都久阿麻などあり、上巻又此下、又書紀、萬葉などに、海人と書り、又書紀、萬葉に、白水郎、萬葉には、泉郎、礒人、海夫、海子なども書り、和名抄に、辨色立成云、白水郎、今按日本紀云、用漁人二字、一云、用海人二字、和名阿萬とあり、白水とは、泉字を分て云なるべし、即泉郎ともあり、また漁子、和名伊乎止利、漁父、無良岐美、潜女、加豆岐米などあるも、皆海部の屬なり、

〔日本書紀應神十〕五年八月壬寅、令諸國定海人及山守部、

〔日本書紀欽明十九〕十七年十月、遣蘇我大臣稻目宿禰等、〇中略紀國置海部屯倉、

〔古事記上〕此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也、伊以下三字以音、下效此、故阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也、宇都志三字以音、

〔古事記傳六〕阿豆美といふ由は、阿曇と書く曇字に、ドムの音を轉じて用るなり、書紀應神天皇三年、處々海人訕哤之不從命、則遣阿曇連祖大濱宿禰、平其訕哤、因爲海人之宰、又履中卷に、對曰、淡路野島之海人也、阿曇連濱子云々、此段をも考ふべし、是も海人を掌れる據なり、とあるを考るに、此氏は海神の子孫なるから、固より海人のことを執し故に、其訕哤を平げしめたまひ、さて其宰に爲ては、いよ〳〵其事を掌りつるを以て、海人つ持と負せしが約りたるなるべし、麻を略き、母智を約て美と云へり、其例は既に前にいへり、かの志訶の海人の名高き、書紀神功卷にも見え、萬葉歌にも多くよめり、も此由なるべく、又姓氏錄に、海犬養、海神綿積命之後也、凡海連、同神男穗高見命之後也、なども、海人に依れる姓なるべし、又高橋朝臣と此姓と、世々御膳のことに與れり、高橋の然る由緒は、景行天皇の御世の故事、書紀にも姓氏錄にも見えたるを、此姓のことは、如何なる由とも物に見えず、是も海人を掌るより事起しなるべし、海人は御饌物を取者なればなり、和名抄に、筑前國糟屋郡に阿曇郷あり、今本曇を雲に誤れり、こは此氏人の住し故の地名なるべし、さて此氏は、連の加婆泥にてありしを、書紀卷々に出たる、みな阿曇連とあり、天武卷十三年十二月戊寅朔己卯、阿曇連賜姓曰宿禰、持統卷五年に詔して、祖墓記を上進らしむる十八氏の内にも入れり、

〔新撰姓氏錄未定雜姓河內國〕安曇連　于都斯奈賀命之後者、不見、

〔日本書紀応神十〕三年十一月、處處海人訕哤之不從命、(訕哤、此云佐麼賣玖)則遣阿曇連祖大濱宿禰、平其訕哤、因爲海人之宰、故俗人諺曰、佐麼阿摩者、其是緣也、

〔日本書紀履中十二〕八十七年春正月、大鷦鷯天皇(○仁徳)崩、皇太子(○履中)自諒闇出之、(○中略)發當縣兵、令從身、自龍田山踰之、時有數十人執兵追來者、太子遠望之曰、其彼來者誰人也、何步行急之、若賊人乎、因隱山中而待之、近則遣一人問曰、曷人、且何處往矣、對曰、淡路野島之海人也、阿曇連濱子、(一云、阿曇連里友、)爲仲皇子、令追太子、於是出伏兵圍之、悉捕得、(○中略)是日捉阿曇連濱子、元年四月丁酉、召阿曇連濱子詔之曰、汝與仲皇子共謀逆、將傾國家、罪當于死、然垂大恩而免死科墨、卽日黥之、因此時人曰阿曇目、亦免從濱子野島海人等之罪、役於倭蔣代屯倉、

〔播磨風土記揖保郡〕石海里、土惟上中、右所以稱石海者、難波長柄豐前天皇(○孝徳)之世、是里中有百便之野、生百枝之稻、卽阿曇連百足、仍取其稻獻之、爾時天皇勅曰、宜墾此野作田、乃遣阿曇連太牟、召石海人夫令墾之、故野名曰百便、村號石海也、

〔新撰姓氏錄右京神別下〕安曇宿禰　海神綿積豐玉彥神子、穗高見命之後也、

〔新撰姓氏錄攝津國神別地祇〕阿曇犬養連　海神大和多罪命三世孫、穗己都久命之後也、

〔延喜式宮内三十一〕供奉神事諸司行列(○中略)
次内膳司(○中略)安曇宿禰一人(執海藻汁漬)

〔新撰姓氏錄右京神別下地祇〕凡海連　同神(○海神綿積命)男穗高見命之後也、

〔新撰姓氏錄攝津國神別地祇〕凡海連　安曇宿禰同祖綿積命六世孫小栲梨命之後也、

〔古事記孝霊中〕娶意富夜麻登玖邇阿禮比賣命、生御子夜麻登登母母曾毘賣命、次日子刺肩別命、(○中略)日子刺肩別命者、(中略)角鹿海直之祖也、

〔姓氏考阿二〕角鹿海直(皇別)

海氏は海部氏と同じからず、海部氏は海氏の部曲なり、さるから後までも海氏を海部とかき、海部氏を海氏とかくことなきにて思別べし、猶其證を云ば、古事記中卷明宮の段に、此之御世、定₂賜海部、山部、山守部、伊勢部₁也、とみえしを、應神紀に、五年秋八月庚寅朔壬寅、令₂諸國定₁海人及山守部₁とあるは、海部は海人にて、直に其事をなすものなるを知れ、たゞ海と負へるは、其部曲を主るのみにて、其事をなせるにはあらず、

〔新撰姓氏錄左京神別下天孫〕但馬海直。。。　火明命之後也

〔姓氏考二阿〕但馬海直　神別天孫　左京、

神名式に、但馬國城埼郡海神社とある地に由ある氏なるべし、海神社は火明命を祭れるにて、此氏神にはあらずや、彼國人に尋ぬべきこと也、火明命は、師〇本居宣長の云れしごとく、火照命と同神なれば、海幸おはしませしなべに、海人をも主り給へるにぞあべき、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年六月癸卯、播磨國明石郡人外從八位下海直。。溝長等十九人賜₂姓大和赤石連₁、

〔古事記下仁德〕爾天皇聞₂看吉備海部直。。。之女名黑日賣、其容姿端正、喚上而使也、

〔日本書紀十四雄略〕七年、于₂時新羅不₁事₂中國₁、天皇詔₂田狹臣子弟君與₁吉備海部直赤尾₁曰、汝宜往罰₂新羅₁、

〔日本書紀二十敏達〕二年五月戊辰、高麗使人泊₂于越海之岸₁、破₂船溺死者衆、朝廷猜₂頻迷₁路、不₂饗放還₁、仍勅₂吉備海部直難波₁、送₂高麗使₁、

〔三代實錄八清和〕貞觀六年四月廿二日戊寅、阿波國名方郡人從八位上海直。。豐宗、外少初位下海直千常等、同族七人、賜₂姓大和連₁、

〔新撰姓氏錄攝津國神別地祇〕大和連　神知津彥命十一世孫、御物足尼之後也、

〔日本書紀十五仁賢〕六年、有₂女人₁、〇中略答曰、難波玉作部鯽魚女、言₂鯽魚女₁、此云₂浮儺謎₁、嫁₂於韓白水郎暵、言₂韓白水郎暵₁、此云₂柯羅

摩能波陀該、喚耕參田之也、

〔新撰姓氏錄 攝津國 未定雜姓〕韓海部首。武内宿禰男平群木兎宿禰之後者、不見、

〔姓氏考 阿二〕韓海部首 皇別 攝津國

仁賢紀に、韓白水郎暵、(韓白水郎暵、此云柯羅摩能波陀該、)とあれば、此氏は加羅摩と訓べし、則韓國より歸化し、海部等の首を賜へりしが氏になりしならん、拾芥抄姓尸錄部に、韓海部首とみえたり、

海人

〔日本書紀 九 神功〕秋九月(○仲哀九年)庚午朔己卯、令諸國集船舶練兵甲、時軍卒難集、皇后曰、必神心焉、則立大三輪社、以奉刀矛矣、軍衆自聚、於是使吾瓮海人烏摩呂出於西海、令察有國耶、還曰、國不見也、又遣磯鹿海人名草而令視、數日還之曰、西北有山、帶雲橫絚、蓋有國乎、

〔日本書紀 十 應神〕二十二年三月丁酉、爰天皇戚兄媛篤温凊(○清原作清、據書紀集解說改)之情、則謂之曰、爾不視二親、既經多年、還欲定省、於理灼然、則聽之、仍喚淡路御原之海人八十人為水手、送于吉備、

〔日本書紀 十二 履中〕元年四月丁酉、免從濱子野島海人等之罪、役於倭蔣代屯倉、

〔日本書紀 十三 允恭〕十四年九月甲子、爰更集處々之白水郎、以令探赤石海底、海深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、

山部

〔古事記 中 應神〕此之御世、定賜海部、山部、山守部、伊勢部也

〔古事記傳 三十三〕山部、書紀顯宗(○清寧誤)卷に、云々、嘖讓於上道臣等、而奪其所領山部と見え、(安閑卷に、筑紫國膽狹山部とあるは、豐前國に、謙山鄉あれば、其處の部にて、膽狹の山部にはあらじ、)山部連と云姓もあり、なほ次に云、山守部は、山を守るを職とする一種の部の民なり、(大山守命、此等の部を督賜ふ、上に爲山海之政とありし是なり、後の山部連と云姓も、此部を掌れる由なり、)書紀に、五年秋八月、令諸國定海人及山守部とあり、顯宗卷に云々、小楯謝曰、山官宿所願、乃拜山官、改賜姓山部連氏、以吉備臣為副、以山守部為民、(以山守部為民は、小楯と吉備臣と二方にわたれり、)また狹々城山君、韓帒宿禰云々、充陵戶、兼守山、削除籍帳、隷山部連など見ゆ、これらの趣を思ふに、山部と山守部と二は

あらず、同物と聞ゆるを、此に別に擧たるは、いかにぞや、書紀に、山部と無きぞ正しかるべき、

〔日本書紀 十應神〕五年八月壬寅、令諸國定海人及山守部、　四十年正月甲子、立菟道稚郎子爲嗣、卽日任大山守命、令掌山川林野、以大鷦鷯尊爲太子輔之、令知國事、○又見古事記

〔日本書紀 十四雄略〕二年十月丙子、幸御馬瀨、命虞人(ヤマノツカサ)縱獵、凌重巘赴長莽、未及移影獮什七八、

〔日本書紀通證 十九雄略〕虞人 見孟子註、掌山澤者、

〔日本書紀 十五淸寧〕二十三年八月、大泊瀨天皇崩、○雄略中略是月吉備上道臣等、聞朝作亂、思救其腹所生星川皇子、率船師四十艘來浮於海、旣而聞被燔殺、自海而歸、天皇卽遣使嘖讓於上道臣等、而奪其所領山部、

〔日本書紀 十五顯宗〕元年四月丁未、詔曰、凡人主之所以勸民者、惟授官也、國之所以興者、惟賞功也、夫前播磨國司來目部小楯、更名磐楯求迎擧朕、厥功茂焉、所志願勿難言、小楯謝曰、山官、宿所願、乃拜山官、改賜姓山部連氏、以吉備臣爲副、以山守部爲民、褒善顯功、酬恩答厚、寵愛殊絕、富莫能儔、

〔播磨風土記 宍禾郡〕安師里 本名酒加里　土中上、大神飡於此處、故曰須加、後號山守里、所以然者、山部三馬任爲里長、故曰山守、

〔新撰姓氏錄 攝津國皇別〕山守　垂仁天皇皇子、五十日足彥命之後、

〔新撰姓氏錄 和泉國皇別〕山公　垂仁天皇皇子、五十日足彥別命之後也、

〔新撰姓氏錄 山城國神別天神〕宇治山守連　饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也、

〔新撰姓氏錄 大和國神別天神〕長谷山直　石上朝臣同祖神饒速日命六世孫、伊香我色男命之後也、

〔新撰姓氏錄 大和國皇別〕山公　內臣同祖、○孝元天皇皇子、彥太忍信命、味內宿禰之後也、

〔日本書紀 四孝元〕七年二月丁卯、立鬱色謎命爲皇后、后生二男一女、第一曰大彥命、第二曰稚日本根子彥大日日天皇、○中略兄大彥命、是阿倍臣、膳臣、阿閉臣、狹狹城山君、筑紫國造、越國造、伊賀臣、凡七族之

始祖也、

〔新撰姓氏錄 攝津國皇別〕佐々貴山君 阿倍朝臣同祖、大彥命之後也、

〔日本書紀 十五顯宗〕元年五月、狹狹城山君韓帒宿禰、事連謀殺皇子押磐、臨誅叩頭、言詞極哀、天皇不忍加戮、充陵戶、兼守山、削除籍帳、隸山部連、惟倭帒宿禰、因妹置目之功、仍賜本姓狹狹城山君氏、

〔古事記 中垂仁〕凡此天皇之御子等十六王、○中略 次落別王者、小月之山君、三川之衣君之祖也、次五十日帶日子王者、春日山君、高志池君、春日部君之祖、

〔新撰姓氏錄 大和國神別〕大田祝山直 天村命子天爾支命之後也、

〔新撰姓氏錄 未定雜姓攝津國〕山首 火明命十一世孫、尾張屋主都久代命之後者、不見、

〔日本書紀 七景行〕五十七年十月、令諸國興田部屯倉、

〔古事記傳 二十六〕田部は多辨と訓べし、(ベタノベと、ノを添て訓は非なり、凡て某部と云に、之と云はをさ〱見えず、) 和名抄、長門國筑前國などの、鄉名の田部にも多倍とあり、さて田部と云物は、役(エダ)て、屯家の御田を(屯家、又其御田の事は、次なる倭屯家の下に委云べし、)佃(ツク)らしむる料に、定置る、民の部なり、(そは尋常の如く、其田を己が田として佃りて、租稅を出すには非ず、公の御田を役て佃るなり、是漢國の古にいはゆる井田の法とて、公田を耕りしと似たり、されば其御田に出來たる稻は、みながら屯家に收まるなり、かくて田部の佃れる勞の代には、其內を分て賜へるか、或は免さる、事などありしか、さる類なる事どもは知がたし、) 書紀に、五十七年冬十月、令諸國興田部屯倉とあり、(此は田部と、屯倉となり、さればタベノと訓るは非ず、)

〔播磨風土記 揖保郡〕佐岡、所以名佐岡者、難波高津宮天皇○仁德之世、召筑紫田部、令墾此地之時、常以五月集聚此岡飮酒宴、故曰佐岡、

〔日本書紀 十八安閑〕元年十月甲子、天皇勅大伴大連金村曰、朕納四妻、至今無嗣、萬歲之後朕名絕矣、大伴伯父今作何計、每念於茲憂慮何已、大伴大連金村奏曰、亦臣所憂也、夫我國家之王天下者、不論有嗣無嗣、要須因物爲名、請爲皇后次妃、建立屯倉之地、使留後代、令顯前迹、詔曰、可矣、宜早安置、大伴大連

金村奏稱、宜以小墾田屯倉與每國田部、給貺紗手媛、以櫻井屯倉(一本云、加貺茅渟山屯倉)、與每國田部、給賜香香有媛、以難波屯倉與每郡钁丁(クハヨホロ)、給貺宅媛、以示於後、式觀乎昔、詔曰、依奏施行、

〔日本書紀十八安閑〕元年七月辛巳朔、詔曰、皇后雖體同天子、而內外之名殊隔、亦可以充屯倉之地、式樹椒庭、後代遺迹、廼差勅使、簡擇良田、勅使奉勅宣於大河內直味張(更名黑檢)曰、今汝宜奉進膏腴雌雉田、味張忽然悋惜、欺誑勅使曰、此田者天旱難漑、水潦易浸、費功極多、收穫甚少、勅使依言復命無隱、　閏十二月己卯朔壬午、行幸於三島、大伴大連金村從焉、天皇使大伴大連問良田於縣主飯粒、縣主飯粒、慶悅無限、謹敬盡誠、仍奉獻上御野、下御野、上桑原、下桑原、幷竹村之地、元合肆拾町、大伴大連奉勅宣曰、○中略今汝味張、率土幽微百姓、忽爾奉惜王地、輕背使乎、宜旨味張、自今以後、勿預郡司、○中略於是大河內直味張、恐畏永悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百姓、罪當萬死、伏願、每郡以钁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絕、藉此祈生、永爲鑒戒、別以狹井田六町、賂大伴大連、蓋三島竹村屯倉者、以河內縣部曲爲田部之元、於是乎起、

〔日本書紀十九欽明〕十七年十月、遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭國高市郡、置韓人大身狹屯倉(言韓人者、百濟也、)高麗人小身狹屯倉、紀國置海部屯倉、(一本云、以處々韓人爲大身狹屯倉田部、高麗人爲小身狹屯倉田部、是卽以韓人高麗人爲田部、故因爲屯倉之號也、)　三十年正月辛卯朔、詔曰、量置田部、其來尙矣、年甫十餘脫籍免課者衆、宜遣膽津(膽津者王辰爾之甥也)檢定白猪田部丁籍、　四月、膽津檢閱白猪田部丁者、依詔定籍、果成田戶、天皇嘉膽津定籍之功、賜姓爲白猪史、尋拜田令、爲瑞子之副、

〔日本書紀二十敏達〕三年十月丙申、遣蘇我馬子大臣於吉備國、增益白猪屯倉與田部、卽以田部名籍授于白猪史膽津、

〔日本書紀二十三舒明〕元年四月辛未朔、遣田部連(闕名)於掖玖、

〔日本書紀十一仁德〕十三年九月、始立茨田屯倉、因定舂(ツキ)米(ヨネ)部(ベ)、

稅部

〔新撰姓氏錄左京神別上天神〕舂米宿禰　石上同祖、〇神饒速日命後也

〔新撰姓氏錄山城國神別天神〕稅部　神魂命子、角凝〇角凝二字據一本補魂命之後也、

〔日本書紀十八安閑〕二年九月丙午、詔櫻井田部連、縣犬養連、難波吉士等、主掌屯倉之稅、

〔釋日本紀十述義〕稻置

公望私記曰、案今稅〇稅原作祝、據一本改長也、

民使

〔日本書紀十四雄略〕八年二月、遣身狹村主靑、檜隈民使博德、使於吳國、

〔新撰姓氏錄山城國諸蕃漢〕民使首　高向村主同祖、寶德公之後也、

〔新撰姓氏錄考證二十〕民は已に云へる如く、美多三と訓むべく、使は都加比と訓むべし、坂上系圖に引る姓氏錄に、七姓漢人を擧て七姓者、第一段、古記、尖公、字直等、一云員姓、是高向村主、高向史、高向調使、評首、民使王首等祖也とあるをもて考ふるに、調使とは、蕃人の調物の事に使する官にて、民使は、其蕃民の事につきて、種々の事を執まかなふ使命の官なるべし、さらば官名を氏の名に負りしなり、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年正月丙辰、左京人位子從八位下役連豐足等二人、賜姓弘村連、纏向日代宮〇景行役民之長口鳥之枝別也、故以役爲姓〇爲下恐脫若字名字焉、

〔新撰姓氏錄河內國神別天神〕役直　高御魂命孫天押〇押原作神、據一本改立命之後也

〔續日本紀八元正〕養老四年十月丙申、始置養民、造器、及造興福寺佛殿三司、

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年四月庚申、太上天皇〇元正崩於寢殿、辛酉、從五位上阿倍朝臣島麻呂、外從五位下丹比間人宿禰若麻呂爲養役夫司、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后〇聖武后安宿媛崩、〇中略以從五位下大藏忌寸麻呂、外從五位下上毛野公眞人爲養民司、

〔萬葉集雜歌一〕藤原宮之役民作歌

天地毛、緣而有許曾、磐走、淡海乃國之、衣手能、田上山之、眞木佐苦、檜乃嬬手乎、物乃布能、八十氏河爾、玉藻成、浮倍流禮、其乎取登、散和久御民毛、家忘、身毛多奈不知、鴨自物、水爾浮居而、吾作、日之御門爾、〇中略

右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月、幸藤原宮地、八年甲午春正月、幸藤原宮、冬十二月庚戌朔乙卯、遷居藤原宮、

園部

〔新撰姓氏錄和泉國神別天神〕民直　大中臣朝臣同祖、天兒屋命之後也、

〔新撰姓氏錄和泉國神別天孫〕民直　天穗日命十七世孫、若桑足尼之後也、

〔新撰姓氏錄右京諸蕃下百濟〕民首　百濟國人努利使主之後也

〔新撰姓氏錄山城國諸蕃百濟〕民首　水海連同祖、百濟國人努理使主之後也、

〔新撰姓氏錄左京諸蕃下高麗〕河内民首　高麗國人安卿〇卿一本作劉王之後也

〔新撰姓氏錄右京皇別下〕薗部　多朝臣同祖、神八井耳命之後也、

園人

〔令義解職員一〕園池司　園戶

〔新撰姓氏錄右京諸蕃下百濟〕苑部首　百濟國人知豆神之後也

〔古事記下安康〕於是大長谷王、以矛爲杖、臨其內詔、我所相言之孃子者、若有此家乎、爾都夫良意美、聞此詔命、自參出解所佩兵、而八度拜白者、先日所問賜之女子訶良比賣者侍、亦副五處之屯宅以獻、所謂五村屯宅者、今葛城之五村苑人也、

〔古事記傳四十〕苑人は御苑に役はるゝ民なり、職員令に、園池司〇中略園戶とある園戶、卽苑人にて、其戶皆園池司に屬るなり、かくて此は葛城の內に在し苑人の戶五村なり、さるはもと屯家なりしが、後に其民苑人にてありしなり、和名抄に、大和國忍海郡に園人鄕ある、是其五村の地

藏部

なるべし、

〔新撰姓氏錄大和國諸蕃百濟〕國人首　百濟國人知豆神之後也

〔日本書紀履中十二〕六年正月辛卯、始建藏職、因定藏部、

〔古語拾遺〕至於後磐余稚櫻朝〇履中三韓貢獻、奕世無絶、齋藏之傍、更建內藏、分收官物、仍令阿知使主與百濟博士王仁記其出納、始更定藏部、

〔扶桑略記履中二〕阿智直始任大藏官、今大藏氏之祖是也、此時始建藏官、

〔倭名類聚抄考證官職十一〕扶桑略記履中天皇條云、阿智直始任大藏官、此時始建藏官、古語拾遺云、至長谷朝倉朝、秦氏云々、自此而後、諸國貢調年々盈溢、更立大藏、二說不同、未知孰是、

〔續日本紀桓武三十八〕延暦四年六月癸酉、右衞士督從三位兼下總守坂上大忌寸苅田麻呂等上表言、臣等本是後漢靈帝之曾孫、阿智王之後也、〇中略臣苅田麻呂等失先祖之王族、蒙下人之卑姓、望請、改忌寸蒙賜宿禰姓、〇中略詔許之、坂上、內藏、平田、大藏、文、調、文部、谷、民、佐太、山口等忌寸十姓、一十六人、賜姓宿禰、

〔古事記履中下〕伊邪本和氣命、坐伊波禮之若櫻宮、治天下也、〇中略本坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也、爾其弟墨江中王、欲取天皇、以火著大殿、於是倭漢直之祖阿知直、盜出而乘御馬令幸於倭、〇中略天皇於是以阿知直始任藏官、亦給粮地、

〔古事記傳三十八〕書紀には、たゞ六年春正月、始建藏職、因定藏部とありて、阿知直を此官に任し事は見えず、〇中略姓氏錄に、攝津諸蕃藏人、阿智王之後也、阿智王は、卽阿智直なり、又右京諸蕃漢內藏宿禰、都賀直四世孫、東人直之後也都賀直は、阿知直の子なり、と見ゆ、大藏氏は、姓氏錄には見えざれども、續紀、續後紀に見えて、同く阿知直の後なり、〇中略註かゝれば、阿知直より初めて、子孫に至るまで、藏官に任れしなり、

〔新撰姓氏錄右京諸蕃上漢〕內藏宿禰　都賀直四世孫、東人直之後也、

〔日本書紀 天武二十九〕十三年正月庚子、內藏衣縫造(中略)賜姓曰連、

〔古語拾遺〕至於長谷朝倉朝、(雄略)秦氏分散寄隸他族、秦酒公進仕蒙寵、詔聚秦氏、賜於酒公、仍率領百八十種勝部、蠶織貢調、充積庭中、因賜姓宇豆麻佐、(言隨積埋益也、所貢絹綿軟於肌膚、故訓秦字謂之波陀、仍以秦氏所貢絹、纒祭神劔首、今俗猶然、所謂秦機織之緣也矣、)自此而後、諸國貢調、年々盈溢、更立大藏、令蘇我麻智宿禰撿校三藏、(齋藏、內藏、大藏、)秦氏出納其物、東西文氏勘錄其簿、是以漢氏賜姓爲內藏大藏、令秦漢二氏爲內藏大藏主鑰藏部之緣也、

〔職官志 三〕應神帝十四年、百濟弓月君、率其部來歸、乃分置諸國、使之業蠶織、稱秦氏、其後秦氏之部離散、臣事他族、秦之伴造曰酒公、有寵於雄略之朝、方其十五年、詔聚其人以賜之、旣而其供貢絹帛充積庭內、因賜姓禹豆麻佐、古語拾遺亦載之、(中略)欽明帝幼時、夢有人云、愛秦大津父者、必有天下矣、寤求之、乃得於山背紀伊郡深草里、擧爲近臣、及卽位、拜大藏省官、大藏省初見於此、而官名未定爲卿輔丞錄、故稱大津父曰大藏掾也、元年、以大藏掾爲秦伴造、使秦人七千五十三戶隸焉、此復舊職也、姓氏錄、秦氏之族或爲大藏氏、蓋以其世官而氏焉歟、

〔日本書紀 雄略十四〕十五年、秦民分散、臣連等各隨欲駈使、勿委秦造、由是秦造酒甚以爲憂、而仕於天皇、天皇愛寵之、詔聚秦氏、賜於秦酒公、公仍領率百八十種勝部、奉獻庸調御調(御調二字恐傍註攙入也、)絹縑充積朝庭、因賜姓曰禹豆麻佐、(一云、禹豆母利麻佐、皆盈積之貌也、)

〔古事記傳 三十三〕秦民とは、弓月君が率て來つる百廿七縣の民なり、仕字は白などの誤か、又此字の上に文脫たるか、秦酒公は姓氏錄になほ處々見ゆ、賜姓は賜號とこそあるべけれ、禹豆麻佐は姓には非ず、此後も姓はなほ秦なるをや、さて此號の意、禹豆は、今言にも物を多く積たる貌などを、宇豆高しと云に合り、萬葉十五に、名爾於布奈流門能宇頭之保爾と云るも、高き潮ときこゆ、母利と云るも、盛又森などの意と同く通ひて聞ゆ、麻佐は卽百八十種勝部とある勝なるべし、姓氏錄諸蕃に勝と云姓もあり、又上勝、不破勝、茨田勝など、戶にもありて、卽秦勝と云も

あり、是らみな加知と訓は誤にて、麻佐と訓べきなり、其は韓國にて一種の號にぞありけむ、其に此方にて勝字を用るは、麻佐流と云訓を取たる借字なるべし、さて禹豆麻佐に太秦の字を書は、何時よりのことならむ、

〔播磨風土記揖保郡〕大法山、今名勝部岡品太天皇、○應神於此山宣大法、故曰大法山、今所以號勝部者、小治田河原天皇○推古之世、遣大倭千代勝部等令墾田、卽居此山邊、故號勝部岡、

〔新撰姓氏錄山城國諸蕃漢〕秦忌寸

太秦公宿禰同祖、○秦始皇帝物智王、弓月王、應神天皇十四年來朝、上表、更歸國、率百廿七縣狛、○狛原作伯、據一本改、姓歸化、幷獻金銀玉帛種々寶物等、天皇嘉之、賜大和朝津間腋上地居之焉、男眞德王、次普洞王、古記云浦東君仁德天皇御世、賜姓曰波陀、今秦字之訓也、次雲師王、次武良王、普洞王男秦公酒、雄略天皇御世、倂普洞王時、秦氏總被劫略、今見在者十不存一、請遣勅使撿括招集、天皇遣使小子部雷率大隅阿多隼人等搜括鳩集、得秦氏九十二部一萬八千六百七十人、遂賜於酒、爰率秦氏養蠶織絹盛䈅詣闕貢進、如丘、○丘原作岳、據一本改、如山積蓄朝廷、天皇嘉之、特降寵命、賜號曰禹都萬佐、是盈積有利益之義、役諸秦氏構八丈藏於宮側、納其貢物、故名其地曰長谷朝倉宮、是時始置大藏官員、以酒爲長官、秦氏等一祖子孫、或就居住、或依行事、別爲數腹、天平廿年在京畿者、咸改賜伊美吉姓也、

〔日本書紀十五清寧〕二十三年、○雄略八月、大泊瀨天皇○雄略崩、吉備稚媛陰謂幼子星川皇子曰、欲登天子之位、先取大藏之官、長子磐城皇子聞母夫人敎其幼子之語曰、皇太子雖是我弟、安可欺乎、不可爲也、星川皇子不聽、輒隨母夫人之意、遂取大藏官、鏁閉外門、式備乎難、擁○擁一本作權字、勢自由、費用○用原作由、依先代舊事本紀改、官物、

〔日本書紀十九欽明〕天國排開廣庭天皇○欽明男大迹天皇○繼體嫡子也、母曰手白香皇后、天皇愛之、常置左右、天皇幼時夢有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寐○寐舊事本紀作寤驚遣使普求、得自山背國

紀伊郡深草里、姓字果如所夢、於是所〇所一本作忻喜遍身、歎未曾有〇有字一本補據夢、乃告之曰、汝有何事、答云、無也、但臣向伊勢商價來還、山〇山下恐有背字逢二狼相鬪汚血、乃下馬洗漱口手、祈請曰、汝是貴神而樂麤行、儻逢獵士見禽尤速、乃抑止相鬪、拭洗血毛、遂遣放之、倶令全命、天皇曰、必此報也、乃令近侍優寵日新、大致饒富、及至踐祚、拜大藏省、八月、召集秦人漢人等諸蕃投化者、安置國郡、編貫戸籍、秦人戸數總七千五十三戸、以大藏掾爲秦伴造、

〔書紀集解欽明十九〕按、前年所任秦大津父也、

〔新撰姓氏錄左京諸蕃上漢〕秦長藏連。。。　大秦公同祖、融通王之後也、

〔日本書紀齊明二十六〕二年八月庚子、高麗遣達沙等進調、大使達沙、副使伊利之、總八十一人、　九月、遣高麗大使膳臣葉積、〇中略小判官大藏衣縫造麻呂、

〔新撰姓氏錄左京神別中天神〕大椋置始連。。。。　縣犬貝同祖、阿居太都命〇神魂命八世孫之後也、

〔令義解職員一〕内藏寮　藏部卌人

大藏省　藏部六十人

〔新撰姓氏錄攝津國諸蕃漢〕藏人　坂上大宿禰同祖、阿智王之後也、

〔姓氏考久十二〕藏人

藏人は職號にて、藏に奉仕る人の義なり、則久羅比止と訓べし、稱德紀第廿九に、攝津國菟原郡人正八位下倉人水守等十八人、賜姓大和連といへり、此倉人も同氏なるべし、倉藏かよはしいへり

〔新撰姓氏錄大和國諸蕃高麗〕日置倉人。。。　伊利須使主兄、許呂使主之後也、

〔新撰姓氏錄河内國諸蕃漢〕河原藏人。。。　河原連同祖、陳思王植之後也、

〔新撰姓氏錄未定雜姓左京〕池上椋人。。。　敏達天皇皇子、百濟王之後也、

〔姓氏考伊三〕池上椋人皇別　左京

椋人は藏人にて、職の號なり、（椋倉藏の三は、相通じてかけり、其證を云ば、椋垣氏を、文武紀第三に倉垣椋垣とかき、光仁紀第廿二には藏垣とかきしにて思ふべし、）則御倉物を掌りしなべに重職にせられしから、此號を直に氏に負るもあなり、（財穀をとりあつかへる事をなせり、猶委に職任考にいふべし、）

（こと、卑賤のことゝいせるは、漢土心にて、こなたの心ばへにあらず、穀を作り出る農民をさして、おほみたからといへるにても思ふべし、藏人の職は後世まであれど、舊職を失ひて、あらぬ）

倉人女

〔古事記下仁德〕於是大后御綱柏積盈御船還幸之時、所駈使於水取司吉備國兒島之仕丁、是退己國於難波之大渡遇所後倉人女之船〈○下略〉

〔古事記傳三十六〕倉人女、此名稱此より外に古書に見あたらず、後に女藏人と云物ならむか、（女藏人の職を仕奉る者なり、古今集雜上に、寬平御時に、上のさぶらひに侍ける藏人どもに、云々、藏人ども笑ひて云々とあるも、后の宮の女藏人なり、）但し其は後の事とおぼしければ、藏司の內の女なるべきか、後宮職員令に藏司〈○中略〉とあり、此司上代よりありけるなるべし、

商長

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕商長首

上毛野同氏、多奇波世君之後也、三世孫久比、泊瀨部天皇〈謚崇峻〉御世被遣吳國、ロ雜寶物等獻於天皇、其中有吳權、天皇勅此物也、久比奏曰、吳國以懸定萬物令爲交易、其名云波賀理、天皇勅之、勿令他人司、〈○原作同、據姓氏錄考證說改〉久比男宗麻呂、舒明天皇御代負商長姓也、日本紀漏、

〔令義解一職員〕內藏寮　價長二人、〈掌平物價市易、謂、猶言評價、餘價長准此、直而市買也、〉

大藏省　價長四人

東市司　價長五人

船長

〔日本書紀十九欽明〕十四年七月甲子、幸樟勾宮、蘇我大臣稻目宿禰奉勅、遣王辰爾數錄船賦、卽以王辰爾爲船長、因賜姓爲船史、今船連之先也、

〔日本書紀二十敏達〕元年五月丙辰、天皇執高麗表疏授於大臣、召聚諸史令讀解之、是時諸史於三日內皆

不能讀、爰有船史祖王辰爾、能奉讀釋、由是天皇與大臣俱爲讚美曰、勤乎辰爾、懿哉辰爾、汝若不愛於學、誰能讀解、宜從今始近侍殿中、既而詔東西諸史曰、汝等所習之業何故不就、汝等雖衆、不及辰爾、又高麗上表疏書于烏羽、字隨羽黑、既無識者、辰爾乃蒸羽於飯氣、以帛印羽、悉寫其字、朝庭悉異之、

〔日本書紀二十四皇極〕四年六月己酉、蘇我臣蝦蛦等臨誅、悉燒天皇記、國記、珍寶、船史惠尺卽疾取所燒國記、而奉中大兄、

〔續日本紀四十桓武〕延曆九年七月辛巳、左中辨正五位上兼木工頭百濟王仁貞、治部少輔從五位下百濟王元信、中衞少將從五位下百濟王忠信、圖書頭從五位上兼東宮學士左兵衞佐伊豫守津連眞道等上表言、眞道等、本系出自百濟國貴須王、貴須王者、百濟始興第十六世王也、夫百濟太祖都慕大王者、日神降靈、奄扶餘而開國、天帝授籙、總諸韓而稱王、降及近肖古王、遙慕聖化、始聘貴國、是則神功皇后攝政之年也、其後輕島豐明朝御宇應神天皇、命上毛野氏遠祖荒田別、使於百濟、搜聘有識者、國主貴須王、恭奉使旨、擇採宗族、遣其孫辰孫王、一名智宗王隨使入朝、天皇嘉焉、特加寵命、以爲皇太子之師矣、於是始傳書籍、大闡儒風、文敎之興、誠在於此、難波高津朝御宇仁德天皇、以辰孫王長子太阿郎王爲近侍、太阿郎王子亥陽君、亥陽君子午定君、午定君○午定君三字據一本補生三男、長子味沙、仲子辰爾、季子麻呂、從此而別、始爲三姓、各因所職以命氏焉、葛井、船、津連等卽是也、逮于他田朝御宇敏達天皇御世、高麗國遣使上烏羽之表、群臣諸司○司一本作史莫之能讀、而辰爾進取其表、能讀巧寫、詳奏表文、天皇嘉其篤學、深加賞歎、詔曰、勤乎懿哉、汝若不愛學、誰能解讀、宜從今始近侍殿中、既而又詔東西諸史曰、汝等雖衆、不及辰爾、斯並國史家牒、詳載其事矣、伏惟皇朝則天布化、稽古垂風、弘澤浹乎群方、叡政覃於品彙、故能修廢繼絕、萬姓仰而賴慶、正名辨物、四海歸而得宜、凡有懷生、莫不抃躍、眞道等先祖、委質聖朝、年代深遠、家傳文雅之業、族掌西庠之職、眞道等生逢昌運、預沐天恩、伏望改換連姓、蒙賜朝臣、於是勅因居賜姓菅野朝臣、

史部

〔新撰姓氏錄攝津國諸蕃百濟〕船連　菅野朝臣同祖、大阿郎王之後也、

〔新撰姓氏錄右京諸蕃下百濟〕船連　同祖、〇菅野朝臣、百濟國都慕王十世孫貴首王之後、大阿郎王三世孫智仁君之後也、

〔日本書紀十四雄略〕二年十月、是月、置史戶河上舍人部、天皇以心爲師、誤殺人衆、天下誹謗言、大惡天皇也、唯所愛寵、史部身狹村主靑、檜隈民使博德等也、

〔倭訓栞前編二十六不〕ふびとべ　文部又史部をよめり、神祇令に、東西文部、義解に、謂東漢文直、西漢文首と見ゆ、

〔日本書紀十應神〕十五年八月丁卯、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、〇中略阿直岐亦能讀經典、卽太子菟道稚郎子師焉、於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶、對曰、有王仁者、是秀也、時遣上毛野君祖荒田別、巫別於百濟、仍徵王仁也、其阿直岐者、阿直岐史之始祖也、　十六年二月、王仁來之、則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達、故所謂王仁者、是書首等之始祖也、

〔古事記中應神〕百濟國主照古王、以牡馬壹疋牝馬壹疋、付阿知吉師以貢上、此阿知吉師者、阿直史等之祖、亦貢上橫刀及大鏡、又科賜百濟國、若有賢人者貢上、故受命以貢上人名和邇吉師、卽論語十卷、千字文一卷、幷十一卷、付是人卽貢進、此和邇吉師者、文首等祖、

〔古語拾遺〕至於輕島豐明朝、百濟王貢博士王仁、是河內文首始祖也、〇中略至於長谷朝倉朝、〇雄略、自此而後、諸國貢調、年々盈溢、更立大藏、令蘇我麻智宿禰檢校三藏、齋藏、內藏、大藏、秦氏出納其物、東西文氏勘錄其簿、

〔令義解三學〕凡大學生、取五位以上〇中略子孫、及東西史部、謂居在皇城左右、故曰東西也、前代以來、奕世繼業、或爲史官、或爲博士、因以賜姓、總謂之史、子爲之、

〔倭訓栞前編三十四也〕やまと　東西をやまとかふちとよむは、學令に、東西史部、義解に、謂居在皇城左右、故曰東西也、前代以來、奕世繼業、或爲史官、或博士、因以賜姓、總謂之史也と見え、東文忌寸

部は大和國に居、西文忌寸部は河内國に居をもて、皇城よりさして、東西を義訓せし也といへり、

〔古事記傳三十三〕さて此氏にまぎらはしきことども多し、其はまづ、此氏の外に、別に文直と云氏あり、其は和邇が後には非ず、漢直より別れたる氏にて、尸も直にて、姓氏錄に、文忌寸、坂上大宿禰同祖、都賀直之後也とあり、書紀に、其氏人もこれかれ見えたり、首と直との尸を以て辨ふべし、さて其氏人は、世々倭國に居りし故に、倭文直と云、此和邇が後なるをば、河内文首と云り、右に引る續紀などに、東文とあるは、倭文直なり、西文とあるは、河内文首にて、東西を卽やまとかふちと訓ことなり、學令に、東西史部とある義解に、居在皇城左右、故曰東西也とあり、但し此注はまぎらはし、皇城の左右には拘らず、河内は西、倭は東なる故に、東西と云なり、たとひ皇城の左に居ても、倭國なるをば東と云るをや、さて天武天皇の御世に至て、文首も文直も、共に連になり、又忌寸になれるより、兩氏いよ〳〵紛はしければ、たゞ東西を以て辨ふるなり、續後紀三に、左京人文忌寸歳主、同姓三雄等、賜姓淨野宿禰、河内國人文忌寸繼立、改忌寸賜宿禰焉、歳主三雄繼立等之先、並百濟國人也とある繼立は、河内人とあれば、西文なるべく、歳主等も一に擧たれば、西文なるべし、さて文氏の先は、漢國人なれども、百濟を經つれば、其國人と云るもたがはず、

〔日本書紀十四雄略〕九年七月壬辰朔、河内國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、

〔日本書紀二十六齊明〕二年九月、遣高麗大使膳臣葉積、○中略中判官河内書首、闕名、○下略

〔日本書紀二十八天武〕元年六月甲申、是日發途入東國、○中略是時元從者、草壁皇子、忍壁皇子、○中略書首根麻呂、書直智德、○中略調首淡海之類二十有餘人、女孺十有餘人也、

〔古語拾遺〕至于淨御原朝、改天下萬姓、而分爲八等、唯序當年之勞、不本天降之績、○中略其四曰忌寸、以

爲秦漢二氏、及百濟文氏等之姓、(蓋與齋部共預齋藏事、因以爲姓也、今東西文氏、獻祓太刀、蓋亦此之縁也、)

〔令義解 神祇二〕凡六月十二月晦日大祓(謂祓者、解除不祥也、)者、中臣上御祓麻、東西文部(謂東漢文直、西漢文首也、)上祓刀、讀祓詞、(謂文部、漢音所讀者也、)訖百官男女聚集祓所、中臣宣祓詞、卜部爲解除、

〔日本書紀 天武二十九〕十二年九月丁未、文首、(中略)賜姓曰連、　十月己未、阿直史、(中略)賜姓曰連、　十四年六月甲午、書連、(中略)賜姓曰忌寸、

〔新撰姓氏錄 左京諸蕃上〕文忌寸　文宿禰同祖、宇爾古首之後也、

〔新撰姓氏錄 右京諸蕃上〕文忌寸　都賀直之後也

〔新撰姓氏錄 左京諸蕃上〕文宿禰　出自漢高皇帝之後鸞王也

〔續日本紀 桓武四十〕延暦十年四月戊戌、左大史正六位上文忌寸最弟、播磨少目正八位上武生連眞象等言、文忌寸等、元有二家、東文稱直、西文號首、相比行事、其來遠焉、今東文擧家既登宿禰、西文漏恩猶沈忌寸、最弟等幸(幸字據一本補)逢明時、不蒙曲察、歷代之後申理無由、伏望同賜榮號、永貽孫謀、有勅責其本系、最弟等言、漢高帝之後曰鸞、鸞之後王狗、轉至百濟、百濟(百濟二字據一本補)久素王時、聖朝遣使徵召文人、久素王卽以狗孫王仁貢焉、是文武生等之祖也、於是最弟及眞象等八人、賜姓宿禰、

〔新撰姓氏錄 攝津國諸蕃〕史戶　漢城人韓氏劉德之後也

〔新撰姓氏錄 右京皇別上〕田邊史　豐城入彥命四世孫、大荒田別命之後、

〔日本書紀 雄略十四〕九年七月壬辰朔、河內國言、飛鳥戶郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、

〔新撰姓氏錄 右京諸蕃上〕田邊史　漢王之後知惣之後也

〔新撰姓氏錄 左京皇別下〕上毛野朝臣

下毛野朝臣同祖、豐城入彥命五世孫、多奇波世君之後也、大泊瀨幼武天皇(諡雄略)御世、努賀君男百尊、爲阿女產向聟家、犯夜而歸、於應神天皇御陵邊、逢騎馬人、相共語話、換馬而別、明日看所換馬是

土馬也、因負姓陵邊君、百尊男德尊、孫斯羅、謚皇極御世、賜河內山下田、以解文書、爲田邊〇邊一本作部史、

〔古事記傳二十三〕姓氏錄に、左京皇別上毛野朝臣、下毛野朝臣同祖、豐城入彥五世孫多奇波世君之後也云々、此つゞきに、雄略天皇の御世、百尊と云人、應神天皇の御陵の邊にて、馬を換たる事を擧たるは、雄略紀九年、河內國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫云々の事と一ッにて、此上毛野君氏に關れる事には非るを、此に出せるは、ひがことなり、此伯孫は豐城入彥命の御末の內にも、田邊史と云氏ある故に、其とまぎれつるものなるべし、かの伯孫は右京諸蕃田邊史漢王之後、知總之後也とある氏にて、甚異なり、漢人の子孫なればこそ百尊德尊など云名はありつれ、さて又かの豐城命の御末なる田邊氏の史かばれなることは、上野氏の祖のうち、韓國に渡て由緣ありし事ども、彼此見えたれば、然る由よりぞ出けむ、かくて彼漢王の後の田邊氏も、此田邊氏と由緣ありし事ありしか、其は知らず、

〔日本書紀十九欽明〕三十年正月辛卯朔、詔曰、量置田部、其來尙矣、年甫十餘、脫籍免課者衆、宜遣膽津膽津者、王辰爾之甥也、檢定白猪田部丁籍、四月、膽津檢閱白猪田部丁者、依詔定籍、果成田戶、天皇嘉膽津定籍之功、賜姓爲白猪史、

〔日本書紀二十敏達〕三年十月丙申、遣蘇我馬子大臣於吉備國、增益白猪屯倉與田部、卽以田部名籍授于白猪史膽津、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十二月癸未、大唐學生土師宿禰甥、白猪史寶然、及百濟役時沒大唐者、猪使連子首、筑紫三宅連得許、傳新羅至、

〔日本書紀二十一用明〕二年四月丙子、是日天皇得病還入於宮、群臣侍焉、〇中略是時押坂部史毛屎、急來密語大連曰、今群臣圖卿、復將斷路、

〔日本書紀三十持統〕六年十月壬申、授山田史御形務廣肆、前爲沙門學問新羅、

〔新撰姓氏錄右京皇別下〕御立ミタチノフムヒト史
御使、同氏、氣入彥命之後也、持統天皇御代、依居參河國青海郡御立地、賜御立史姓、日本紀漏、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字二年六月乙丑、大和國葛上郡人、從八位上桑原史年足等、男女九十六人、近江國神埼郡人、正八位下桑原史人勝等、男女一千一百五十五人、同言曰、伏奉去天平勝寶九歲五月

二十六日勅書、偁、内大臣(藤原○鎌足)太政大臣(藤原○不比等)之名不得稱者、今年足人勝等先祖、後漢苗裔鄧(鄧○一本作劉)言興、幷帝利等、於難波高津宮御宇天皇(仁○德)之世、轉自高麗歸化聖境、本是同祖、今分數姓、望請依勅、一改史字、因蒙同姓、於是桑原史、大友桑原史、大友史、大友部史、桑原史戸、史戸(戸○一本作部)六氏、同賜桑原直姓、船史、船直姓、

〔新撰姓氏錄(山城國諸蕃高麗)〕桑原史　狛國人漢胷之後也、

〔新撰姓氏錄(攝津國諸蕃高麗)〕桑原史　高麗國人萬德使主之後也

〔新撰姓氏錄(未定雜姓河內國)〕大友史　百濟國人白猪奈世之後者、不見、

〔新撰姓氏錄(右京諸蕃下高麗)〕島岐史　高麗國能劉(劉○一本作郡)王之後也

島史　同國和興之後也

〔新撰姓氏錄(左京諸蕃下高麗)〕高史　高麗國人元羅郡杵王九世孫、延挐王之後也、

〔新撰姓氏錄(山城國諸蕃新羅)〕眞城史　新羅國人金氏尊之後也

〔新撰姓氏錄(未定雜姓右京)〕朝明史　高麗帶方國主氏朝法史之後者、不見、

〔新撰姓氏錄(左京諸蕃下百濟)〕沙田史(マサコタ)　百濟國人意保尼王之後也

〔新撰姓氏錄(右京諸蕃下百濟)〕大縣史(オホアガタ)　百濟國人和德之後也

道祖史(フナト)　百濟國王族、(族原作挟、一本作孫)許里公之後也、

〔新撰姓氏錄(攝津國諸蕃百濟)〕林史　林連同祖、百濟國人木貴之後也、

〔日本書紀(二十二推古)〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本、及天文地理書、幷遁甲、方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、(○中略)皆學以成業、

〔新撰姓氏錄(左京諸蕃上漢)〕楊(楊○一本作陽)胡史　出自隋煬帝之後、達率楊侯阿子王也、

〔新撰姓氏錄(和泉國諸蕃漢)〕楊侯(侯○一本作公)史　楊侯忌寸同祖、達率楊公阿了之後也、

〔新撰姓氏錄左京諸蕃上漢〕丹波史　後漢靈帝八世孫、孝白〇白一本作日王之後也、

大原史　漢人西姓令貴之後也

〔新撰姓氏錄攝津國諸蕃漢〕大原史　漢人西姓令貴之後也

〔新撰姓氏錄右京諸蕃下百濟〕大原史　漢人木姓阿留素、西姓令貴之後也、

〔新撰姓氏錄左京諸蕃上漢〕筑紫史　陳思王植一名東阿王之後也

〔新撰姓氏錄攝津國諸蕃漢〕竺志史　廣階連同祖、陳思王植之後也、

〔新撰姓氏錄河内國諸蕃漢〕三宅史　同祖〇魏司空王昶忠意之後也

大里史　同上

八戸史　後漢光武孫、章帝之後也、

武丘史　下村主同祖、後漢光武帝七世孫、愼近王之後也、

〔大日本史職官一〕按、姓氏錄蕃別、多以史爲姓者、蓋皆以其所掌爲姓也、

國史

〔日本書紀履中十二〕四年八月戊戌、始之於諸國置國史、記言事、達四方志、

〔春秋左史傳序〕周禮有史官、掌邦國四方之事、達四方之志、諸侯亦各有國史、大事書之於策、小事簡牘而已、

古事類苑

官位部三

古代官職三

伴造下 御名代　御子代　併入

〔日本書紀 孝元四〕七年二月丁卯、立鬱色謎命爲皇后、后生二男一女、第一曰大彥命、○中略兄大彥命、是阿倍臣、膳○膳原作膳、據諸本改、臣、阿閉臣、狹狹城山君、筑紫國造、越國造、伊賀臣、凡七族之始祖也、

〔倭訓栞 前編 六〕かしはで　日本紀に、饔膳、膳夫、柏手等を訓せり、大古は、凡そ飮饌皆木葉をもて器とす、よて葉盤(ヒラテ)、葉椀(クボテ)、折敷などの名あり、北史倭國傳にも、俗無盤爼、以槲葉と見えたり、槲はくぬき也、されど神代より百机飮食と見えたれば、もはら盤爼なきにはあらず、

〔北史 九十四 倭國〕至開皇二十年、○天皇八年我推古倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕、上令所司訪其風俗、使者言、○中略俗無盤爼、藉以槲葉、食用手餔之、

〔日本書紀 二十九 天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　甲子、是日肇進奠、卽誄之、○中略直廣肆紀朝臣眞人誄膳(カシハデノツカサ)職事、

〔倭訓栞 中編 四 加〕かしはでのつかさ　日本紀に膳職をよめり、倭名抄に、大膳職、おほ、内膳司、うちの、主膳監、みこのみやのと見えたり、

〔倭名類聚抄考證 十一 官職〕天武紀、膳職、訓加之波天乃豆加左、蓋當時未有大膳內膳之別也、安閑紀、有內膳卿者、疑史筆之意增、

〔職官考 三 上古〕安閑紀ニ內膳卿、持統紀ニ奉膳ナドアリテ、古ヘニモ內膳司アルガ如クナレド、大

膳モ內膳モ差別ナク、膳職ニテ總掌リシモノナルベシ、

〔古事記中孝元〕大倭根子日子國玖琉命、坐輕之堺原宮治天下也、此天皇、娶穗積臣等之祖內色許男命(色許二字以音、下效此、)妹、內色許賣命生御子大毘古命、○中略其兄大毘古命之子、建沼河別命者、(阿倍臣等之祖)次比古伊那許志別命、(自比至志六字以音、此者膳臣之祖也、)

〔新撰姓氏錄和泉國皇別〕膳臣　宇多臣、松原臣、阿倍朝臣同祖、大鳥膳臣等幷大彥命之後、

〔古事記中景行〕此之御世、○中略定膳之大伴部、

〔古事記傳二十六〕膳は加斯波傳と訓べし、膳夫を云、○中略書紀に五十三年云々、○中略故美六雁臣之功、而賜膳大伴部とあり、大伴部と云は、膳夫どもの多く、其伴の廣き由の稱なり、賜とは其多くの膳夫部を悉く率掌らしめて、其部の帥と爲給ふを云なり、(膳大伴部と云姓を賜ふには非ず、此事よくせずば混ふべし、然るに姓氏錄に、別に膳大伴部と云姓の有て、彼故事を擧たるはいかにと云に、此姓は膳臣氏より分れたる姓にて、後の事なるを、先祖六雁の膳大伴部を帥し由緣を以て、其姓に負ひたるなり、さて此氏の下に、彼故事を擧たるも、膳大伴部と云ことの由緣を顯せるなり、)なほ此事、境原宮段膳臣の下(傳廿二の八葉)と考合すべし、(貞觀儀式、神今食儀に膳伴造燧火、御飯とあるは、右の膳大伴部氏なるべし、)定とは、彼多くの膳夫等を、此時に始めて膳之大伴部と號けて、磐鹿六雁命に屬賜へるを云なるべし、

〔日本書紀七景行〕五十三年八月、是月乘輿幸伊勢、轉入東海、十月、至上總國、從海路渡淡水門、是時聞覺賀鳥之聲、欲見其鳥形、尋而出海中、仍得白蛤、於是膳臣遠祖名磐鹿六雁、以蒲爲手繦、白蛤爲膾而進之、故美六雁臣之功、而賜膳大伴部、

〔新撰姓氏錄左京皇別上〕膳大伴部

阿倍朝臣同祖、大彥命孫、磐鹿六雁命之後也、景行天皇巡狩東國、至上總國、從海路渡淡水門、於海中得白蛤、於是磐鹿六雁爲膾進之、故美六雁賜膳大伴部、

〔新撰姓氏錄左京皇別上〕高橋朝臣

阿倍朝臣同祖、大稲輿命之後也、景行天皇巡狩東國、(○此間恐脱磐鹿六雁四字)供獻大蛤、于時天皇喜其奇美、賜姓膳臣、天渟中原瀛眞人天皇(諡天武)十二年、改膳臣賜高橋朝臣、

〔日本書紀 二十九天武〕十三年十一月戊申朔、膳臣(○中略)賜姓曰朝臣、

〔古事記傳 二十二〕膳臣の外に、膳大伴部と云氏のあるは、後に所以ありて、彼景行紀の文によりて、別に賜へるものなるべし、此姓のあるを以て、かの景行紀なる賜膳大伴部とあるを、此姓を賜へることゝ思誤るべからず、姓氏錄の此條の文は、即景行紀文をそのまゝに取て、氏の由緒にしたるものなり、

〔本朝月令 六月〕朔日内膳司供忌火御飯事

高橋氏文云、掛畏卷向日代宮御宇、大足彥忍代別天皇(○景行)五十三年癸亥八月、詔群卿曰、朕顧愛子何日止乎、欲巡狩小碓王(又名倭武王)所平之國、是月行幸於伊勢、轉入東國、冬十月、到于上總國安房浮島宮、爾時磐鹿六獦命、從駕仕奉矣、天皇行幸於葛飾野令御獦矣、太后八坂媛(波)借宮(爾)御坐、磐鹿六獦命亦留侍、此時太后詔磐鹿六獦命、此浦聞異鳥之音、其鳴駕我久久、欲見其形、即磐鹿六獦命、乘船到于鳥許、鳥驚飛於他浦、猶雖追行、遂不得捕、於是磐鹿六獦命詛曰、汝鳥戀其音、欲見貌、飛遷他浦、不見其形、自今以後、不得登陸、若大地下居必死、以海中為住處、還時顧舳、魚多追來、即磐鹿六獦命、以角弭之弓、當遊魚之中、即著弭而出、忽獲數隻、仍號曰頑魚、此今諺曰堅魚、(今以角作釣柄釣堅魚、此之由也、)船遇潮涸(天)渚上(爾)居(奴)、堀出(止)為(爾)得八尺白蛤一貝、磐鹿六獦命捧件二種之物、獻於太后、即太后譽給(比)悅給(氏)詔(久)、甚味清、造欲供御食、爾時磐鹿六獦命申(久)、六獦令料理(天)將供奉(止)白(天)、遣喚無邪(○邪下恐脱志字)國造上祖大多毛比、知々夫國造上祖天上腹天下腹人等、為膾及煮燒雜造盛(天)、見河曲山梔葉(天)高次八枚(爾)刺作(利)、見眞木葉(天)枚次八枚(爾)刺作(天)、取日影(天)為縵、以蒲葉(天)美頭良(乎)卷、採麻佐氣葛(天)多須岐(爾)加氣為帶、足纏(乎)結(天)、供御雜物(乎)結飾(天)、乘輿從御獦、還御入坐時(爾)為供奉、此時勅(久)誰

造所進物問給、爾時太后奏、此者磐鹿六獦命所獻之物也、卽歡給比譽賜天勅久、此者磐鹿六獦命獨我心耳波非矣、斯天坐神乃行賜倍留物也、大倭國者、以行事負名國奈利、磐鹿六獦命波、朕我王子等爾、阿禮子孫乃八十連屬爾、遠久長久、天皇我天津御食乎、齋忌取持天仕奉止負賜天、則若湯坐連等始祖物部意富賣布連乃佩大刀乎令脫置天副賜支、又此行事者、大伴立雙天應仕奉物止在止勅天、日竪日横、陰面背面乃諸國人乎割移天大伴部止號天、賜於磐鹿六獦命、又諸氏人東方諸國造十二氏乃枕子各一人令進天平次比例給天依賜支、山野海河者、多邇久久乃佐和多流美岐波加弊良乃加用布岐波美、波多乃廣物、波多乃狹物、毛乃荒物、毛乃和物、供御雜物等、兼攝取持天仕奉止依賜、如是依賜事波、朕我獨心耳非矣、是天坐神乃命叙、朕我王子、磐鹿六獦命諸友諸人等乎催率天、愼勤仕奉止仰賜誓賜天依賜支、是時上總國安房大神乎、御食都神止坐奉天、爲若湯坐連等始祖、意富賣布連之子、豐日連乎令火鑽天、此乎忌火止爲天、伊波比由麻閉天供御食、幷大八洲爾像天、八乎止古八乎止咩定天、神嘗大嘗等仁仕奉始支、（但云安房大神爲御食津神者、今大膳職祭神也、今令鑽忌火大伴造者、物部豐日連之後也、）以同年十二月、乘輿從東還、坐於伊勢國綺宮、五十四年甲子九月、自伊勢還坐於倭纏向宮、五十七年丁卯十一月、武藏國知々夫大伴部上祖三宅連意由、以木綿代蒲葉天美頭良乎卷寸、從此以來、用木綿副日影等蔓天爲用矣、自纏向朝廷歲次癸亥、始奉貴詔勅、所賜膳臣姓、天都御食乎伊波比由麻波理天仕奉來、迄于今朝廷〇桓武歲次壬戌、幷卅九代、積年六百六十九歲、（延曆十九(九恐一誤)年〇原本有誤脫、據年中行事祕抄、高橋氏文考註改、）

〔高橋氏文考註〕そも〳〵膳夫といへば、後世の人意には、賤職のごと聞ゆれど然らず、上古には凡て御膳を嚴重みせられつるから、膳夫もことに其人を選ばれて、輕からざる職になもありける、さるは神世よりの故實にて、古事記に、大國主神國避の段に、櫛八玉神を膳夫として、天御饗奉らるゝ時、火を鑽出でゝ云々して供奉りし狀委しく見え、また同記に、此幸行より前、倭建命平國に廻行しゝ時、久米直祖七拳脛いつも膳夫にて、從に仕奉りし由記されたるは、諸司は

多かるべき中に、殊さらに此職をのみ擧記せる趣をもても、其輕からざるほど知られたり、ま かありけるに、此時六雁命、よく其道に仕奉れるを賞美たまひて、新嘗祭の奉物、また膳職の御饌の事も、さらに其式を定始めさせ給ひ、薨たる後には、その魂を膳職に齋ひて、永世に仕奉らしめたまひ、子孫等をば、長世に其職の長として、仕奉らしめむと詔せさせ給ひたりき、

〔政事要略二十六〕高橋氏文云、六鴈命、七十二年之秋八月受病、同月薨也、時天皇〇景行聞食而大悲給、准親王式而賜葬也、於是宣命使遣藤河別命、武男心命等宣命云、天皇加大御言良麻止宣波久、王子六鴈命不思保佐佐流外爾、卒上太利止聞食迷之、夜晝爾悲愁給比川々大坐須、天皇乃御世乃間波、平爾天之相見曾奈波佐牟止思保須間爾別由利介、然今思食須所波、十一月乃新嘗乃會毛、膳職乃御膳乃事毛、六鴈命乃勞始成流所奈利、是以六鴈命乃御魂乎波、膳職爾伊波比奉天、春秋乃永世乃神財止仕奉志迷牟、子孫等乎波長世遠世乃膳職乃長止毛、上總國乃長止毛、淡國乃長止毛定天、餘氏波萬介太麻波天、乎佐女太麻波牟、若之膳臣等乃不繼在、朕加王子等乎志天、他氏乃人等乎相交天波亂良之女之、和加佐乃國波、六鴈命爾永久子孫等可遠世乃國家止爲止定天、授介賜天支、此事波世世爾之過利違波志、此志乎知太比天、吉久膳職乃內毛外毛護利、守利太比天、災患乃事等毛无久在志女給太戶奈毛度思食止申止宣太麻不天皇乃大御命良麻乎、虛川御魂毛聞太戶止.申止宣太麻不、〇原本有誤脫、據年中行事秘抄、高橋氏文考註改、

〔日本書紀十二履中〕三年十一月辛未、天皇泛兩枝船于磐余市磯池、與皇妃各分乘而遊宴、膳臣余磯獻酒、時櫻花落于御盞、〇中略號膳臣余磯曰稚櫻部臣、

〔日本書紀十四雄略〕二年十月癸酉、幸于吉野宮、　丙子、幸御馬瀨、命虞人縱獵、〇中略問群臣曰、獵場之樂、使膳夫割鮮、何與自割、群臣忽莫能對、於是天皇大怒、拔刀斬御者大津馬飼、〇中略語太后曰、今日遊獵、大獲禽獸、欲與群臣割鮮野饗、歷問群臣、莫能有對、故朕嗔焉、皇太后知斯詔情、奉慰天皇曰、群臣不悟陛下因遊獵場置宍人部、降問群臣、群臣嘿然、理且難對、今貢未晩、以我爲初、膳臣長野能作宍膾、願以此

膳夫

貢、

〔日本書紀 十八 安閑〕元年四月癸丑朔、內膳卿膳臣大麻呂、奉勅遣使求珠伊甚、伊甚國造等詣京遲晩、踰時不進、膳臣大麻呂大怒、收縛國造等推問所由、

〔日本書紀 十九 欽明〕三十一年四月乙酉、幸泊瀨柴籬宮、越人江渟臣裙代詣京奏曰、高麗使人辛苦風浪、迷失浦津、任水漂流、忽到著岸、郡司隱匿、　五月、遣膳臣傾子於越、饗高麗使、(傾子、此云舸柁(柁原作拖、據一本改、)部古、)

〔新撰姓氏錄 左京皇別 上〕雀部(サヽキベノアソミ)朝臣

巨勢朝臣同祖、建內宿禰之後也、星河建彥宿禰、謚應神御世、代於皇太子大鷦鷯尊、繫木綿襷、掌監御膳、因賜名曰大雀臣、日本紀合、

〔新撰姓氏錄 河內國神別 天孫〕襷多治比宿禰

火明命十一世孫、殿諸足尼命之後也、男兄男庶、其心如女、故賜襷爲御膳部(ミカシハベ)、

〔令義解 一 職員〕大膳職　膳部一百六十人、掌造庶食、

內膳司　膳部卌人、掌造御食、

〔令義解 一 東宮職員〕主膳監　膳部六十人

〔古事記 中 神武〕故爾於宇陀有兄宇迦斯、〇中略自其地幸行、到忍坂大室之時、〇中略故爾天神御子之命以饗賜八十建、於是宛八十膳夫(ヤソノカシハデ)、毎人佩刀、誨其膳夫等曰、聞歌之者、一時共斬、

〔古事記 上〕爾答白之、僕子等二神隨白、僕之不違、此葦原中國者、隨命既獻也、唯僕住所者、如天神御子之天津日繼所知之登陀流、(此三字以音、下效此、)天之御巢而、於底津石根宮柱布斗斯理、(此四字以音、)於高天原氷木多迦斯理、(多迦斯理四字以音、)而治賜者、僕者於百不足八十坰手隱而侍、〇中略如此之白、而於出雲國之多藝志之小濱、(多藝志三字以音、)造天之御舍、而水戶神之孫、櫛八玉神爲膳夫(カシハデ)、獻天御饗之時、〇下略

〔古事記傳 十四〕膳夫は、加志波傳と訓む、中卷にも見ゆ、書紀にも多し、繼體卷には供膳ともあり、

和名抄に、大膳職、於保加之波天乃豆加佐、内膳司、宇知乃加之波天乃官、主膳監、美古乃美夜乃加之波天乃豆加佐とあり、名義は、先いと上代には、凡て饌を木葉に盛ける、其葉をば何木にまれ、總て加志波と云り、(其加志波の事は、中卷輕島宮段、傳卅二、髮長比賣の條下に委くいふべし、)故饌の事を執行ふ人を加志波傳とは云なり、傳は手なり、凡て物を造る人を手人といひ、今世にも事を行ふ人を某手と云類多し、

〔日本書紀 七景行〕十八年八月、到的邑、(○筑紫)而進食、(○景行)是日膳夫等遺盞、故時人號其忘盞處曰浮羽、今謂的者訛也、昔筑紫俗、號盞曰浮羽、

〔古事記 中景行〕凡此倭建命平國廻行之時、久米直之祖、名七拳脛、恒爲膳夫、以從仕奉也、(○又見日本書紀)

〔古事記傳 二十九〕爲膳夫は、加斯波傳登志氏と訓べし、膳夫遷氏と云意なり、(倭建命の、此人を膳夫と爲たまふと云意とは少し異なり、又膳夫となりてと云とも少し異なり、これら云もてゆけば、一に落るに似たれども、語の意ばおの〳〵いさゝかけぢめあるなり、○中略)さて膳夫と云へば、唯賤き職の如聞ゆめれど然らず、上代には、凡て御膳を嚴重みせられつるからに、膳夫も其人を選ばれて、輕からざる職にぞありけむ、上卷櫛八玉神の事、(傳十四)又書紀に、景行天皇の東の淡水門にて、白蛤を得給ひし時に、磐鹿六鴈の膳夫仕奉し事、應神卷に、吉備臣祖御友別が、兄弟子孫を以て膳夫として、御饗奉りしことなどを思ふべし、此倭建命の御平國の時など、諸の司々は多かるべき中に、此にかく殊に其職をのみ擧たるを以ても、其輕からざるほど知られたり、

〔日本書紀 十應神〕二十二年九月丙戌、天皇狩于淡路島、(○中略)天皇便自淡路轉以幸吉備、遊于小豆島、庚寅、亦移居於葉田、(葉田此云簸娜)葦守宮、時御友別參赴之、則以其兄弟子孫爲膳夫、而奉饗焉、

〔日本書紀 十一仁德〕三十八年七月、猪名縣佐伯部獻苞苴、天皇令膳夫以問曰、其苞苴何物也、

〔日本書紀 二十九天武〕十一年三月辛酉、詔曰、(○中略)膳夫采女等之等之(○等之二字恐衍)手繦肩巾、(肩巾此云比例)並莫服、

〔高橋氏文考註〕おもふに、當時までは膳夫は手繦、采女は肩巾を禮服として嬰る御定なりしこ

大炊部

と知られたり、然るに續紀慶雲二年四月の下に、先是諸國采女肩巾、曰依令停之、至是復舊焉と見えたり、(此時膳夫の手襁も舊に復されたりけむを、紀には漏されたるなるべし、)さて女の比例は、もと手襁の料に常に項に嬰をりて、手業する時、手襁に嬰るものなるが、おのづから飾のごとく、禮服にもなれるものなるべし、〇中略かくて大殿祭祝詞に、皇御孫命朝乃御食、夕乃御膳仕奉流比禮懸伴緒、襷懸伴緒乎手蹟足蹟不令爲氏云々と、(伴緒の緒は長にて、其部屬の長なりと、古事記傳に說はれたるがごとし、)とあるは、御食造仕奉る膳部の男女をいへる文なり、これをおもへば、大祓詞に、天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男、手襁掛伴男といへるも同じかるべし、

〔政事要略二十六〕多米宿禰本系帳云、天皇〇成務御躬爲國歒、然之時供御大飯、已不聞食、仍召氏人等令作御飯、特被詔勅小長田命、作備御飯、進御之日平吉聞食、卽垂詔偁、仕奉御飯甚有香美、平服聞食、故召小長田命者、特賜嘉名、朕御多米負賜、被詔定多米連也、爾時賜大歒政、亦任御田之職、天皇御贖之政掌以仕奉也、姓氏錄云、多米宿禰、出自神魂命五世孫天日鷲命也、四世孫小長田、稚足彥天皇〇諡成務御世、仕奉大炊寮、御飯香美、特賜嘉名、負朕御多米、六世孫三枝連男倭古連之後、天渟中原瀛眞人天皇〇諡天武御世、改賜宿禰姓、同氏系圖云、志賀高穴大宮御宇、若帶天皇〇成務御世、小長田命以米入大籠而獻天皇也、因改命宗賜多米連姓、爾時天皇御命贖乃人乎四方國造等獻支、

〔新撰姓氏錄右京神別上天神〕多米宿禰

神御魂命五世孫、天日鷲命之後也、成務天皇御世仕奉大炊寮、御飯香美特賜嘉名、

〔新撰姓氏錄左京神別中天神〕多米連

多米宿禰同祖、神魂命五世孫、天日和志命之後、成務天皇御世仕奉炊職、賜多米連也、

〔古事記傳九〕味物は多米都母能と訓べし、中卷明宮段〇應神の末に、種々之珍味とあるも如此よむべし、其故は、貞觀儀式大嘗祭儀に、辨大夫入自儀鸞門、就版跪、奏兩國所獻多米都物色目、(江次第に

水取部

もかくあり、兩國は、悠紀主基兩國を云、と有て、其詞に、御酒缶代缶物、多米都物雜菓子飯などの色目見え、又大多米津酒、大多米酒波、多米御酒、多毎米、大多米院と見え、延喜式にも、多明米、多明酒、多明酒屋、多明料理屋などゝ見えたればなり、但如此く大嘗祭の所にのみ多く出て、他には一も見えれば、彼祭に供神物に限れる名目かとも聞ゆれど、さに非ず、古に凡て美味飲食を云ふ云なり、凡て上代の事は、物名も何も、神事にのみのこれる例なれば、此名目もたま〳〵大嘗にのみのこれるなり、姓氏錄多米連條に成務天皇御世、仕奉炊職、賜多米連也、又多米宿禰條に、成務天皇御世、仕奉大炊寮、御飯香美、特賜嘉名とあるを以て知べし、供神物に限らざること、此にて明けし、書紀の話酒も、本の訓は多米邪部なりげむを、後人のさかしらに、宇音と心得て、多武とはよみなしつらむ、

〔新撰姓氏錄右京神別下天孫〕大炊刑部造　火明命三世孫、天礪目命之後也、

〔新撰姓氏錄左京神別下天孫〕大炊刑部造　火明命四世孫、阿麻刀禰命之後也、

〔新撰姓氏錄右京皇別上〕御炊朝臣　武內宿禰六世孫、宗我馬背宿禰之後也、日本紀漏、

〔新撰姓氏錄考證四〕御炊は朝廷の御食を炊き奉る職にて、大炊などに同じきなるべけれど、他にみえざれば考ふべき由なし、氏人は續紀八卅二に、御炊朝臣人麻呂あるのみ、

〔令義解一職員〕大炊寮　大炊部六十人

〔古事記中神武〕故爾於宇陀有兄宇迦斯、自宇以下三字以音、下效此也、弟宇迦斯二人、○中略故其弟宇迦斯、此者宇。陀。水。取等之祖也、

〔古事記傳十九〕水取は毛比登理と訓べし、○中略宇陀なるは、當昔宇陀に仕て水部の職を奉仕し者のありしなり、

〔日本書紀三神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、○中略給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、是菟田主水部遠祖也、

〔神宮雜例集一〕第三御井社事

一始事　本記云、皇大神宮、皇御孫之命、天降坐時爾、天牟羅雲命、御前立天、天降仕奉時爾、皇御孫

命、天牟羅雲命乎召テ詔久、食國乃水波未熟、荒水爾在介利、故御祖命御許爾參上、此由申天來止詔、卽天牟羅雲命參上天、御祖御前爾、皇御孫命乃申上給事乎、子細申上時、御祖命詔久、雜爾奉牟政波、行奉下天在止毋、水取政遺ハワスレ天在介利、何神加乎奉下牟止思間爾、勇天乎志參上來止詔天、天忍石乃長井乃水乎取八盛天誨給支、此水持下天、皇大神乃御饌爾八盛、又皇御孫命乃御水ミモヒ仁八盛獻天、遺ル水波、天忍水止天、食國乃水於ウヘ爾灌和天、獻初○初恐禮誤、又御伴爾天降奉仕神等、八十友乃諸人仁モ斯水乎令飲ト詔天下奉支、卽受賜天、持參下天獻時仁、皇御孫命詔天、從何道ノ曾參上志止問給、申久大橋波須賣太神並皇御孫命乃天降坐乎恐天、從小橋參上支止申時詔久、後仁モ恐仕奉事勇乎志止詔天、天牟羅雲命、天二上命、後小橋命止三名賜也、

〔古史傳二十八〕此水取の御擧はも、主と大嘗祭の料なりし故に、後までも其政の時ごとに、其處をトひて、井を掘しめ賜ふ例なり、○註略谷川士淸說に、或云、春日若宮、天押雲命坐焉、所謂水取祭蓋有以也、春雨抄歌に、鹿島より鹿に乘りてぞ春日なる三笠の山に浮雲の宮、と云へり、○中略さて水取の政の此命に始まり、後に主水と云ふ司の出來しも、是より起れるを思ふに、神名式に、主水司坐神一座、鳴雷神社と有るは、疑なく是天忍雲根命なるべし、

〔常陸風土記茨城郡〕郡東十里桑原岳、昔倭武天皇停留岳上、進奉御膳、時令水部新掘淸井、出泉淨香、飮喫尤好、勅曰、能停水哉、俗曰、與久多麻禮留彌津可奈、由是里名謂田餘、

〔古事記下仁德〕大后○仁德后石之日賣命爲將豐樂、而於採御綱柏、幸行木國之間、天皇婚八田若郎女、於是大后御綱柏積盈御船、還幸之時、所駈使於水取司、吉備國兒島之仕丁、是退己國、於難波之大渡、遇所後倉人女之船、○下略

〔新撰姓氏錄左京神別上天神〕水取連　速日命六世孫、伊香我色乎之後也、

〔新撰姓氏錄右京神別上天神〕水取連　同神○神饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也、

氷部

〔新撰姓氏錄攝津國皇別〕伊賀水取　阿倍朝臣同祖、大彥命之後也、

〔續日本後紀仁明一〕天長十年二月戊子、是日賜典藏從四位下大宅水取臣繼主等三人朝臣姓、繼主臣、八腹木事命後也、

〔令義解職員一〕主水司　水部卅人

〔延喜式主水四十〕釋奠料

享日、官人一人率水部六人、仕丁四人、汲花水六斗供祭、

〔新撰姓氏錄河內國神別天神〕氷連　石上朝臣同祖、饒速日命十世孫、伊己燈宿禰之後也、

〔日本書紀天武二十九〕十三年十二月己卯、氷連、〇中略賜姓曰宿禰、

〔新撰姓氏錄左京神別上天神〕氷宿禰　石上同祖〇神饒速日命後

〔新撰姓氏錄考證八〕この氏は、供御の氷を掌るより負し姓なるべく覺ゆ、其は水取連も此同祖にて、御水(しもと)とりの事を掌り、延喜主水式に、其供御氷者云々、凡供中宮氷者云々、凡東宮氷者云々などみえ、氷室云々、河內國讚良郡讚良一所とあるも由あればなり、

〔日本書紀仁德十一〕六十二年、是歲額田大中彥皇子獵于鬪鷄、時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬、仍遣使者令視、還來之曰、窟也、因喚鬪鷄稻置大山主、問之曰、在其野中者何窟矣、啓之曰、氷室也、皇子曰、其藏如何、亦奚用焉、曰掘土丈餘以草蓋其上、敦敷茅荻、取氷以置其上、既經夏月而不泮、其用之即當熱月、漬水酒以用也、皇子則將來其氷獻于御所、天皇歡之、自是以後、每當季冬必藏氷、至春分始散氷也、

〔令義解職員一〕主水司　正一人掌樽水、饘粥、〇中略及氷室事、〇中略氷戶

〔古事記傳十九〕令の同司〇主水下に、氷戶と云ものあり、是も一本には水戶とあり、水戶ならば、此も水取の戶なるべし、氷戶ならば、氷室に因る戶なり、

〔古事記中景行〕凡此大帶日子天皇之御子等、所ㇾ錄廿一王、不ㇾ入ㇾ記五十九王幷八十王之中、○中略次神櫛王者、木國之酒部阿比古、宇陀酒部之祖、

〔新撰姓氏錄和泉國皇別〕酒部(サカベ)公　讃岐公同祖、神櫛別命之後也、

〔新撰姓氏錄右京皇別下〕酒部公

同皇子○神櫛別命三世孫、足彥大兄王之後也、大鷦鷯天皇○仁德御代從ㇾ韓國ㇾ參來人、兄曾曾保利、弟曾曾保利二人、天皇勅有ㇾ何才、白ㇾ有ㇾ造ㇾ酒之才、令ㇾ造ㇾ御酒、於ㇾ是賜ㇾ麻呂號ㇾ酒看都子、賜ㇾ山鹿比咩號ㇾ酒看都女、因以ㇾ酒看都ㇾ爲ㇾ氏、

〔古事記傳二十六〕同皇子とは、此氏の右に擧たる讃岐公條に、五十香足彥命之後とある其なり、然れども此は誤にて、讃岐公も神櫛命の後なり、次に引たる、和泉國皇別、酒部公の條の如し、なほ次にも云べし、さて右文の內、印本には人兄を兄人に誤り、曾々の曾字を一ッ脫し、都字は、三ッながら、卽に誤れり、今は皆古本に依れり、皆字は、白の誤なるべし、さて賜麿と云より下の文、まぎらはしき記しざまなり、考るに、麿又山鹿比咩と云人は、足彥大兄王の末にて、此氏人なりけむを、酒看都古、酒看都女と云名賜て、曾々保利が造りたる御酒を、所聞看す事に、供奉らしめ給へるなるべし、看字、メシとも訓べし、御酒を所聞看事に供奉る由の稱なり、みと訓ても、意は同じ、さて萬葉十六に、云々、高坏爾盛机爾立而、母爾奉都也、目豆兒乃負、父爾獻都也、身女兒乃負とある負は、設なり、此目豆兒、身女兒、看都子、看都女と同じさまに聞ゆ、又大嘗祭式に、造酒兒、神語、佐可都古、又酒波など云者あれど、これらの稱の意は異なり、

〔續日本紀五元明〕和銅四年八月丙午、酒部君大田、粳麿、石隅三人、依ㇾ庚寅年籍ㇾ賜ㇾ鴨部姓、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十月辛未、行ㇾ幸紀伊國、　庚辰、敍ㇾ牟婁釆女正五位上、熊野直廣濱從四位下、女孺酒部公家刀自等、各有ㇾ差、

酒人

〔令義解 職員一〕造酒司　酒部六十人（掌供行觴）

〔新撰姓氏錄 大和國皇別〕酒人眞人　繼體皇子兎王之後也、日本紀合也、

〔日本書紀 崇神五〕八年四月乙卯、以高橋邑人活日爲大神之掌酒、（掌酒、此云佐介弭苔）　十二月乙卯、天皇以大田田根子令祭大神、是日活日自擧神酒獻天皇、仍歌之曰、許能瀰枳破、和餓瀰枳那羅孺、椰磨等那殊、於朋望能農之能、介瀰之瀰枳、伊句臂佐、伊句臂佐、如此歌之宴于神宮、

〔新撰姓氏錄 河內國皇別〕酒人造　日下部同祖、（彦坐命子狹穗彦命之後）日本紀不見、

網部　江人

〔新撰姓氏錄 和泉國神別天神〕網部　同神（饒速日命）六世孫、伊香我色雄命之後也、

〔姓氏考 阿二〕網部（神別天神　和泉國）

網部は阿比伎倍と訓べし、思ふに是は網引公の部曲の氏なるべし、（中略）此二氏は神代よりの網曳なれど、氏上ははやくより衰へしなべに、八網田命の末に漁捕にたへしものゝありしに、其業をなさしめられたれど、神代よりの網曳に云別べくて、天皇の御末なるには文字をかへて書來しことゝすべし、

〔新撰姓氏錄 河內國皇別〕江首（江人附）　彥八井耳命七世孫、來目津彥大雨宿禰命之後也、

〔新撰姓氏錄考證 七〕江首は職名なり、河江につきて漁りをする人の長なる故に、首姓を負り、人も首の義と聞ゆ、（中略）膳職につけるを以て、漁獵に預る職名なる事を知るべし、

〔令義解 職員一〕大膳職　雜供戶（謂鵜飼、江人、網引等之類也、）

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲二年二月壬辰、備後國葦田郡人網引公金村、年八歲喪父、哀毀骨立、

鳥取部　鳥養部

〔日本書紀 垂仁六〕二十三年九月丁卯、詔群卿曰、譽津別王、是生年既三十、髯鬚八掬、猶泣如兒、常不言何由矣、因令有司而議之、（○令原无、據一本補、）　十月壬申、天皇立於大殿前、譽津別皇子侍之、時有鳴鵠、度大虛、皇子仰觀鵠曰、是何物耶、天皇則知皇子見鵠得言而喜之、詔左右曰、誰能捕是鳥獻之、於是鳥取造祖天

湯河板擧奏言、臣必捕而獻、卽天皇勅湯河板擧（板擧此云拕儺）曰、汝獻是鳥、必敦賞矣、時湯河板擧、遠望鵠飛之方、追尋詣出雲而捕獲、或曰、得于但馬國、十一月乙未、湯河板擧獻鵠也、譽津別命弄是鵠、遂得言語、由是敦賞湯河板擧、則賜姓而曰鳥取造、因亦定鳥取部、鳥養部、譽津部、

〔古事記 中垂仁〕於是天皇因其御子（○本牟知和氣）定鳥取部、鳥甘部、品遲部、大湯坐、若湯坐、

〔古事記傳 二十五〕鳥甘部、部字諸本に無し、今は延佳本に依れり、甘は加比と訓、書紀には、鳥養部と作り、凡て古は、某養と云養に、多く甘字を用ひたり、記中には御馬甘、猪甘、書紀にも、鷹甘、猪甘など見え、其外の書どもにも多し、（略）○（註）さて此部は、まづ彼捕得來たる鵠を飼ふ者を云べく、又別にも此名を負せて、定められたるもあるか、何れも彼鵠の事に依てにはあるなり、書紀雄略卷、養鳥人あり、また鳥官之鳥、爲菟田人狗所囓死、天皇瞋黥面、而爲鳥養部、（鳥官とは、御膳料の鳥を養ひ置所かとも思へど、此天皇の御膳の事を以見れば、さにはあらで、御翫の鳥なるべし、）また直丁等云々、仍詔爲鳥養部とあるなどは、鳥を飼人なり、和名抄に、大和國添下郡鳥貝（止利加比）郷あり、（貝は借字なり、萬葉十二に、取替川とよめるも此なり、）此外も鳥養てふ地、此彼にあり、

〔新撰姓氏錄 右京神別上 天神〕鳥取部連
角凝魂命十（○十字原无、據一本補、）三世孫、天湯河桁命之後也、垂仁天皇皇子譽津別命、年向三十不言語、于時見飛鵠、問曰、此何物、爰天皇悅之、遣天湯河桁尋求、詣出雲國宇夜江捕貢之、天皇大嘉、卽賜姓鳥取連、

〔日本書紀 十四雄略〕十年九月戊子、身狹村主青將呉所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬所囓死、（別本云、是鵝爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所囓死、）由是水間君恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十隻與養鳥人、請以贖罪、天皇許焉、十月辛酉、以水間君所獻養鳥人等、安置於輕村磐余村二所、十一年十月、鳥官之禽、爲菟田人狗所囓死、天皇瞋黥面、而爲鳥養部、於是信濃國直丁與武藏國直丁侍宿、相謂曰、嗟乎我國積鳥之高、同於小墓、旦暮而食、尚有其餘、今天皇由一鳥之故、而黥人面、太無道理、惡行之主也、天皇聞而使聚積之、直丁等不能

鵜養部

忽備、仍詔爲鳥養部、

〔日本書紀三神武〕戊午年八月、天皇欲省吉野之地、〈○中略〉及縁水西行、亦有作梁取魚者、〈梁此云揶奈〉天皇問之、對曰、臣是苞苴擔之子、〈苞苴擔、此云珥倍毛菟、〉此則阿太養鸕部始祖也、

〔古事記中神武〕故隨其敎覺、從其八咫烏之後幸行者、到吉野河之河尻、時作筌有取魚人、爾天神御子問、汝者誰也、答曰、僕者國神、名謂贄持之子、〈此者阿陀之鵜養之祖〉〈○中略〉擊兄師木弟師木之時、御軍暫疲、爾歌曰、多多那米氐、伊那佐能夜麻能、〈○中略〉志麻都登理、宇〈上〉加比賀登母、伊麻須氣爾許泥、

〔古事記傳十九〕宇加比賀登母は、鵜養之徒なり、萬葉十七〈四十五丁〉安由波之流、奈都能左加利等、之麻都等里、鵜養我登母波、由久加波乃、伎欲吉瀨其登爾、可賀里左之、奈豆左比能保流、十九〈十二丁〉に、島津鳥、鸕養等母奈倍などあり、古は鵜を使て魚を捕こといと多かりき、故公に供奉る鵜養も有て、職員令大膳職の下に、雜供戶と云あるを、義解に、謂鵜飼江人網引等之類とあり、

〔新撰姓氏錄未定雜姓和泉國〕鵜甘部首　武内宿禰男、己西男柄宿禰之後者、〈○者、一本作也〉不見、

〔令義解一職員〕大膳職　雜供戶〈謂、鵜飼、江人、網引等之類也、〉

〔令集解五職員〕釋云、別記云、鵜飼卅七戶、江人八十七戶、網引百五十戶、右三色人等、經年每丁役、爲品部、免調雜徭、

鷹甘部

〔日本書紀十一仁德〕四十三年九月庚子朔、依網屯倉阿弭古捕異鳥、獻於天皇曰、臣每張網捕鳥、未曾得是鳥之類、故奇而獻之、天皇召酒君示鳥曰、是何鳥矣、酒君對言、此鳥類多在百濟、得馴而能從人、亦捷飛之掠諸鳥、百濟俗號此鳥曰俱知、〈是今時鷹也〉乃授酒君令養馴、未幾時而得馴、酒君則以韋緡著其足、以小鈴著其尾、居腕上獻于天皇、是日、幸百舌鳥野而遊獵、時雌雉多起、乃放鷹令捕、忽獲數十雉、是月、甫定鷹甘部、故時人號其養鷹之處、曰鷹甘邑也、

〔播磨風土記揖保郡〕鈴喫岡、所以號鈴喫者、品太天皇之世、田於此岡、鷹鈴墮落、求而不得、故號鈴喫

犬養部

岡、

〔日本書紀十八安閑〕二年八月乙亥朔、詔置國々犬養部、

〔古史傳十二〕犬養とは、犬を養ひ走して、獵を爲る職號の姓になれるなるべし、其は、高野天皇紀、天平神護元年五月の處に、馬養造人上祖、以能養馬仕上宮太子、被任馬司、庚午籍、編馬養造云々とあるに准へて知るべし、

〔古史傳十九〕天皇の御獵し給へる事は、今數へも盡されず、御遊にものし給へるげなるも、實には食物の料なりけむ、犬養など云姓あるも、御獵の犬を養へる氏人と聞えたり、

〔新撰姓氏錄攝津國神別天神〕犬養　神魂命十九世孫、田根連之後也、

〔日本書紀十八安閑〕二年九月丙午、詔櫻井田部連縣犬養連、難波吉士等、主掌屯倉之稅、

〔姓氏考三伊〕縣犬養宿禰神別天神　左京

縣犬養は職より負へる氏なり、縣は每國の縣々を云ひ、犬養は字の如く、犬を養をいへり、犬を養ふは、則諸鳥獸を獵りせんのためなり、鷹てふ鳥もて狩することは、漸百濟酒君よりなり、是より前代には獵犬のみ重くせられたり、西國の國々に、今現にも家内に犬を養へり、縣々に獵犬を置て、獵に備ふる由を其國人のいへり、養備る由は、天皇の大食饌に備奉るべきの爲なり、仁德紀に、猪名縣佐伯部の鹿苞苴を奉りしことをも思合すべし、安閑紀に、國々に犬養部を置るゝこともあり、是は後にいふべし、獸肉を大食饌に奉ること廢れ、天皇御獸獵のこと絕にたるから、犬養の職もすたれ行きて、唯氏號にのみ殘れることゝなれり、舊犬養の職は、天皇の御食饌に仕奉ることとなるから、重職にせられしことなるを、此ことを廢停られて後は、賤人の業になりしなべに、賤職と思ふは、今の目うつしにて、古趣にたがへりとすべし、安閑紀に、二年九月甲辰朔丙午、詔櫻井田部連縣犬養連難波吉士等、主掌屯倉之稅とみえしも、此云る氏々は、每國に在るなれば、屯倉稅をも主掌せぬる也、故縣犬養氏は賤職の號ならざるを思へ、

〔新撰姓氏錄左京神別中天神〕縣犬養(アガタノイヌカヒ)宿禰　神魂命八世孫、阿居太都命之後也、

〔古史傳十二〕縣犬養宿禰、〇中略此姓は、元は犬養とのみ稱けむを、御縣に居たりし故に、縣犬養とは云ならむ、天武天皇紀に、十三年、縣犬養連賜姓曰宿禰とあり、然れば此より前には、連の加婆禰にて有しなり、〈是に就て思へば、犬養部の群主とありし職號を、やがて尸とは爲たるなり、〉

〔新撰姓氏錄河內國神別天孫〕若犬養宿禰。。。。。　火明命十六世孫、尻調根命之後也、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十二月己卯、縣犬養連、稚犬養連、〇中略賜姓曰宿禰、

〔新撰姓氏錄右京神別下地祇〕海犬養。。。　海神綿積命之後也

〔日本書紀二十九天武〕十三年十二月己卯、海犬養連、〇中略賜姓曰宿禰、

〔姓氏考三伊〕海犬養宿禰

貞雄按に、海犬養氏は、火明命の後なる但馬海氏より出しなるべし、海氏は綿積命の末なるが、名だゝるなべに混同せしならめ、文武紀第二に、大寶二年六月甲子、震海犬養門とあるは、安嘉門のこと也、拾芥抄門號起事部に、安嘉門〈海犬養氏造之、號兵庫寮御門、〉とあるにて思へ、故太古には此氏の榮しことをみるべし、

猪甘部

〔新撰姓氏錄攝津國神別地祇〕阿曇犬養連。。。。　海神大和多罪命三世孫、穗巳都久命之後也、

〔新撰姓氏錄未定雜姓和泉國〕猪甘首。。　天足彥國押人命之後者、不見、

〔播磨風土記賀毛郡〕猪養野、右號猪飼者、難波高津宮御宇天皇〇仁德之世、日向肥人朝戶君、天照大神坐舟於猪持參來進之、可飼所求申、仰仍所賜此處、而放飼猪、故曰猪飼野、

〔古事記下安康〕於是市邊王之王子等、意富祁王、袁祁王、〈二柱〉聞此亂而逃去、故到山代苅羽井、食御粮之時、面黥老人來、奪其粮、爾其二王言、不惜粮、然汝者誰人、答曰、我者山代之猪甘也、

宍人部

〔日本書紀十四雄略〕二年十月癸酉、幸于吉野宮、　丙子、幸御馬瀨、命虞人縱獵、〇中略語太后曰、今日遊獵、大獲禽獸、欲與群臣割鮮野饗、歷問群臣、莫能有對、故朕嗔焉、皇太后知斯詔情、奉慰天皇曰、群臣不悟陛

馬飼部

下因遊獵場置宍人部、降問群臣、群臣嘿然、理且難對、今貢未晩、以我爲初、膳臣長野、能作宍膾、願以此貢、天皇跪禮而受曰、善哉鄙人所云、貴相知心、此之謂也、皇太后視天皇悅、歡喜盈懷、更欲貢人曰、我之厨人菟田御戸部眞鋒田、高天、以此二人、請將加貢爲宍人部、自茲以後、大倭國造吾子籠宿禰、貢狹穗子鳥別、爲宍人部、臣連伴造國造又隨續貢、

〔釋日本紀八述義〕宍人(シヽヒト)

私記曰、問、此何人哉、答、師說、包丁之類也、

〔日本書紀十四雄略〕七年、或本云、吉備臣弟君、還自百濟、獻漢手人部、衣縫部、宍人部、

〔新撰姓氏錄左京皇別上〕宍人朝臣　阿倍朝臣同祖、大彥命男彥背立大稻腰命之後也、日本紀合、

〔新撰姓氏錄考證二〕宍人は獸肉を調理て、御膳に供ふる職なり、古へは獸をシヽとよみ、また猪鹿をもシヽと云り、○中略古の宍人氏は、膳臣の別にて、御膳に由緣あれば、其職に仕奉りしものなり、

〔古事記中仲哀〕故其御船之波瀾、押騰新羅之國、既到半國、於是其國主畏惶、奏言、自今以後、隨天皇命而爲御馬甘、毎年雙船、不乾船腹、不乾柂檝、共與天地無退仕奉、故是以新羅國者定御馬甘、

〔古事記傳三十〕御馬甘(ミマカヒ)は、かひに甘字を書ことは、傳廿五の卅九葉に云り、穴穗宮段にも馬甘(ウマカヒ)と見え、書紀雄略卷に、典馬此云于麻柯毘と見え、飼部、馬飼などもあり、外宮儀式帳に、御馬甘内人と云もあり、

〔日本書紀十四雄略〕八年二月、高麗王遣精兵一百人、守新羅、有頃高麗軍士一人、取假歸國、時以新羅人爲典馬、典馬、此云于麻柯毘、

〔日本書紀九神功〕九年○中略十月辛丑、從和珥津發之、○中略新羅王遙望以爲、非常之兵、將滅己國、讋焉失志、○中略卽素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降王船之前、因以叩頭之曰、從今以後、長與乾坤、伏爲飼部、其不乾船柂、而春秋獻馬梳及馬鞭、復不煩海遠、以毎年貢男女之調、○中略時或曰、欲誅新羅王、於是皇

后曰、〇中略今既獲財國、亦人自降服、殺之不祥、乃解其縛、爲飼部、

〔日本書紀十應神〕十五年八月丁卯、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、卽養於輕坂上廐、因以阿直岐令掌飼、故號其養馬之處曰廐坂也、

〔日本書紀十二履中〕五年九月壬寅、天皇狩于淡路島、是日河內飼部等從駕執轡、先是飼部之黥、皆未差、時居島伊奘諾神託祝曰、不堪血臭矣、因以卜之、兆云、惡飼部等黥之氣、故自是後頓絕以不黥飼部而止之、

〔書紀集解十二履中〕按此時制、凡爲飼部者、黥面爲識也、黥非墨刑之黥也、

〔和歌の浦鶴一〕馬飼部の目さきせしは、故ありげながら思ひ得られざりしなるべし、おのれおもふに、市邊忍齒命の御子、二人山城にてメサキセル翁にあひ給へるとあり、みづから猪養なりとなのれり、此馬飼部のことゝ合せおもふに、すべて畜類などをかふ者は、賤役にて、良民と混せざらしめむ爲に、メサキして類をわかち給ひしなるべし、今の世の穢多などのごとくにやありけむとおもはるゝなり、

〇按ズルニ、雄略天皇十一年紀ニ、兎田人ノ面ヲ黥シテ鳥養部ト爲シヽコトアリ、山城猪甘ノ黥セルト合セテ、共ニ參考スベシ、

〔日本書紀十七繼體〕元年正月甲子、大伴大連金村大連更籌議曰、男大迹王性慈仁孝順、可承天緖、丙寅、遣臣連等、持節以備法駕、奉迎三國、然天皇意裏尙疑、久而不就、適知河內馬飼首荒籠、密奉遣使、具述大臣大連等所以奉迎本意、留二日三夜、遂發、乃喟然而歎曰、懿哉馬飼首、汝若無遣使來告、殆取嗤於天下、〇下略

〔日本書紀二十九天武〕十二年九月丁未、川內馬飼造〇中略賜姓曰連、

〔日本書紀十三允恭〕四十二年十一月、新羅弔使等喪禮既闋而還之、爰新羅人、恒愛京城傍耳成山、畝傍山、

馬工

則到琴引坂、顧之曰、宇泥咩巴椰、彌々巴椰、是未習風俗之言語、故訛畝傍山謂宇泥咩、訛耳成山謂瀰瀰耳、時倭飼部從新羅人、聞是辭而疑之、以爲新羅人通采女耳、乃返之啓于大泊瀬皇子、○雄略

〔日本書紀二十九天武〕十二年九月丁未、倭馬飼造、○中略賜姓曰連、

〔日本書紀十四雄略〕二年十月癸酉、幸于吉野宮、丙子、幸御馬瀬、命虞人縱獵、○中略問群臣曰、獵場之樂、使膳夫割鮮、何與自割、群臣忽莫能對、於是天皇大怒、拔刀斬御者大津馬飼、二十三年、是歲、百濟調賦益於常例、筑紫安致臣、馬飼臣等、率船師以擊高麗、

〔日本書紀二十二推古〕元年四月己卯、立厩戸豐聰耳皇子、爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、橘豐日天皇○用明第二子也、母皇后曰穴穗部間人皇女、皇后懷妊開胎之日、巡行禁中、監察諸司、至于馬官、乃當厩戸而不勞忽產之、

〔日本書紀二十九天武〕十二年十月己未、娑羅々馬飼造、菟野馬飼造、○中略并十四氏、賜姓曰連、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年二月丙午、免天下馬飼雜戸人等、因勅曰、汝等今負姓、人之所恥也、所以原免同於平民、但既免之後、汝等手伎如不傳習子孫、子孫彌降前姓、欲從卑品、

〔新撰姓氏錄大和國皇別〕馬工連　平群朝臣同祖、平群木菟宿禰之後也、

〔拾芥抄中本姓尸錄〕連　馬工

〔古事記中孝元〕平群都久宿禰者、平群臣、佐和良臣、馬御樴連等祖也、

〔周禮註疏十九〕大祭祀、展犠牲、繫于牢、頒于職人、註、展省閲也、職讀爲樴、樴可以繫牲者、此職人謂充人及監門人、

〔史記四十七孔子世家〕孔子貧且賤、○中略嘗爲司職吏、而畜蕃息、

〔新撰姓氏錄考證六〕古事記に、平群都久宿禰者、馬御樴連之祖也とありて、此の馬工連と同じきが如く思はるれど、未だ其證を得ず、馬御樴は、細井貞雄云く、○中略御馬の進退を指揮る職なら

め、猶よく考べしとあり、されど宇末美加伊といふ進馬の具ありといふ事、證なければ信がたし、己また考ふるに、馬御檝は御馬檝にて、朝家の御馬を繋ぐ檝にはあらじか、若然らば神功紀に、新羅王の降服奉りし時の事を、降於王船之前、因以叩頭之曰、從今以後、長與乾坤伏爲飼部、其不乾船柁而、春秋獻馬梳及馬鞭云々、また重誓之曰云々、殊闕春秋之朝、怠廢梳鞭之貢、天神地祇共討焉とある、馬梳は馬串にて、馬を繋ぐ檝とも聞ゆれば、新羅王の貢ぎに奉る御馬檝を掌る職を置くに、殊に武内宿禰の氏人に其事を任されしにやあらむ、字書に、檝之石切、音炙、係牛杙也と云るも由あり、さて後々は馬飼の氏々多くなれるを思ふに、馬數も多かりしと見ゆれば、其を繋ぐ杙を造らしむる職工をも置れしから、其馬檝連をやがて馬工連とも云ひけむ、故馬御檝連と云はものにみえざるなり、

服部

〔新撰姓氏錄攝津國神別〕服部連

熯之速日命十二世孫、麻羅宿禰之後也、允恭天皇御世、任織部司、總領諸國織部、因號服部連、

〔倭訓栞前編二十四波〕はとり　服部をよめり、日本紀に織をよみ、又織部とも見えたり、はたおりの義、たお反となり、古語拾遺に秦機織とも見ゆ、大神宮式に織部女あり、神名秘書に、以女子號織子、以男子稱人面といへり、

〔新撰姓氏錄大和國神別〕服部連　天御中主命十一世孫、天御桙命之後也、

〔新撰姓氏錄河內國神別〕服連　熯之速日命之後也

〔新撰姓氏錄河內國諸蕃百濟〕呉服造（クレハトリ）　百濟國阿漏史之後也

呉服

〔倭訓栞前編八久〕くれはとり　日本紀に呉織をよみ、古事記に呉服をよめり、歌の序辭に、くれはとりあやといふは、呉織穴織と見えて、あなはあやと通ず、漢の義なり、

〔古事記中應神〕百濟國主照古王、〇中略貢上手人〇手人原作人手、據古事記傳改韓鍛名卓素、亦呉服西素二人也、

錦部

〔日本書紀雄略十四〕七年、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以〇中略錦部定安那錦、譯語卯安那等、遷居于上桃原下桃原眞神原三所、

〔和訓栞前編二十爾〕にしごり　錦織をよめり、にしきおり也、きお反こ也、錦服、又錦部をよむも同じ、にしきべも同じ、

〔新撰姓氏錄山城國神別天神〕錦部首　神饒速日命十二世孫、物部目大連之後也、

〔姓氏考七〕錦曰佐

錦は、和名抄に、近江國淺井郡錦部爾之古利とある地にて、則錦織部等の住居の、やがて地號になれる也、此錦織部等は漢土の人なりしなべに、譯語者をおかれしを錦曰佐とぞいへりしならめ、錦曰佐は爾之古利乃哀佐と訓べし、

〔新撰姓氏錄河內國諸蕃百濟〕錦部連　三善宿禰同祖、百濟國速古〇速古、一本作近宵古、太王之後也、

〔新撰姓氏錄和泉國諸蕃百濟〕錦部連　三善宿禰同祖〇本書右京諸蕃下云、三善宿禰、百濟國速古大王之後也、

衣縫部

〔日本書紀應神十〕十四年二月、百濟王貢縫衣工女、曰眞毛津、是今來目衣縫之始祖也、　三十七年二月戊午朔、遣阿知使主、都加使主於吳、令求縫工女、〇中略吳王於是與工女兄媛、弟媛、吳織、穴織四婦女、四十一年二月、是月阿知使主等自吳至筑紫、時胷形大神乞工女等、故以兄媛奉於胷形大神、是則今在筑紫國御使君之祖也、既而率其三婦女以至津國、及于武庫而天皇崩之、不及、即獻于大鷦鷯尊、〇仁德是女人等之後、今吳衣縫、蚊屋衣縫是也、

〔日本書紀雄略十四〕七年或本云、吉備臣弟君還自百濟、獻漢手人部、衣縫部、宍人部、　十四年正月戊寅、身狹村主靑等共吳國使、將吳所獻手末才伎漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等、泊於住吉津、〇中略以衣縫兄媛奉大三輪神、以弟媛爲漢衣縫部也、漢織、吳織、衣縫、是飛鳥衣縫部、伊勢衣縫之先也、

〔新撰姓氏錄左京神別上天神〕衣縫造　石上同祖〇神饒速日命後

染部

〔新撰姓氏錄和泉國神別天神〕衣縫　同神〇饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也、

〔日本書紀二十六齊明〕二年九月、遣高麗大使膳臣葉積、〇中略小判官大藏衣縫造麻呂、

〔日本書紀二十九天武〕十三年正月庚子、三野縣主、內藏衣縫造、二氏賜姓曰連、

〔令義解一職員〕縫部司

縫部四人、〇中略縫女部、謂、檢前令、縫女部在使部上、而新令在直丁下者、凡新令之體、縫女皆在男下、所以在直丁下、其考者依舊更无改張、

〔新撰姓氏錄未定雜姓河內國〕狛染部　高麗國須牟祁王之後者不見、

〔姓氏考十三許〕狛染部

狛は河內國にある地號ながら、〇中略註是は高麗國染色の法を傳へて職とせしの號なるべし、則古末乃曾女倍と訓べし、

〔令集解四職員〕古記及釋云、別記云、忍海戶狛人五戶、竹志戶狛人七戶、合十二戶、役日無限、但年料牛皮廿張以下令作、村村狛人三十戶、宮郡狛人十四戶、大狛染六戶右五色人等爲品部、免調役也、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月甲申、是日發途入東國、〇中略到積殖山口、高市皇子自鹿深越以遇之、民直大火、赤染造德足、〇中略從焉、

〔姓氏考二阿〕赤染造諸蕃漢

赤染は、職を以て氏に負る也、さて赤染てふものは紅藍なるべし、赤色の古きものは茜染にて、是は神代より有しことは、古事記上卷、八千矛神御妻問の段の歌に、夜麻賀多爾麻岐斯阿多泥都岐、曾米紀賀斯流邇、斯米許呂母云々とあるにて思へ、もと紅藍は吳國より參來しものなれば、久禮乃阿井の名あるなるべし、〇中略赤染氏は漢土人なれば、此染方を傳へしから氏にさへ負ひしならむ、此氏は姓氏錄に脫せり、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年八月丙寅、賜正六位上赤染造廣足、赤染高麻呂等九人常世連姓、

漆部

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年三月辛酉、遠江國(〇中略)蓁原郡主帳無位赤染造長濱、(〇中略)各以私物養窮民廿人已上、賜爵人二級、

〔先代舊事本紀天孫五〕大木食命(〇中略)弟三見宿禰命(漆部連等祖)此命、秋津島宮御宇天皇(〇孝安)御世、並縁近宿元爲足尼、次爲宿禰、(〇下略)

〔伊呂波字類抄(字植物)〕本朝事始云、倭武皇子、遊獵宇陁阿貴山之時、以手牽折木枝、其木汁黑美、染于皇子之手、爰皇子召舍人床石足尼曰、此木汁塗干而可獻之、床石塗干而獻之、皇子大悅、取其木汁而塗翫好之物、以床石足尼、任於漆部官、

〔日本靈異記上〕女人好風聲之行食仙草以現身飛天緣第十三

大和國宇太郡漆部里有風流女、是卽彼部內漆部造麿之妾也、

〔日本靈異記攷證上〕漆部里(和名抄鄕名、宇陁郡漆部、奴利倍、大和志云、漆部鄕今存、)漆部造(姓氏錄不載、用明紀有漆部造兄、天武紀有漆部支背、又漆部連、文武紀有漆部造道麻呂、元正紀有漆部造君足、聖武紀有漆部駒長、漆部伊波、廢帝紀有漆部直伊波、漆部宿禰道麻呂、)

〔令義解職員一〕漆部司　漆部廿人

畫部

〔日本書紀雄略十四〕七年、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以(〇中略)畫部(エカキ)因斯羅我(〇中略)等、遷居于上桃原下桃原、眞神原、三所、

畫師

〔令義解職員一〕畫工司　畫師四人、畫部六十人、

〔日本書紀推古二十二〕十二年九月、是月始定黃書畫師、山背畫師、

〔聖德太子傳曆上〕推古天皇十二年十二月、爲繪諸寺佛像莊嚴、定黃文畫師、山背畫師、簀秦畫師、河內畫師、楢畫師等、免其戶課、永爲名業、

〔新撰姓氏錄左京諸蕃漢上〕大崗忌寸

出自魏文帝之後安貴公也、雄略天皇御世、率四部衆歸化、男龍(一名辰貴)善繪工、小泊瀨稚鷦鷯天皇美其

能、賜姓首、五世孫勤大壹惠尊、亦工繪才、天智天皇御世賜姓倭畫師、高野天皇神護景雲三年、依居地改賜大崗忌寸姓、

〔新撰姓氏錄 河内國諸蕃 漢〕河内畫師 河原連同祖、陳思王植之後也、

〔古事記 上〕是以隨白之科、詔日子番能邇邇藝命、此豐葦原水穗國者、汝將知國言依賜、故隨命以可天降、○中略爾天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命幷五伴緒矣支加而天降也、○中略伊斯許理度賣命者、鏡作連等之祖、

〔古事記傳 十五〕鏡作連、書紀に、天武天皇十二年十月乙卯朔己未、鏡作造賜姓曰連とあり、此につきて疑はしきことあり、凡て此記の諸姓を記せる例、當時の加婆泥にはかゝはらず、皆上代の隨に記せるに、此なる中臣連、忌部首、玉祖連なども然なり、此鏡作氏を、連と記せるは如何ぞや、若はもと造とありけむを、後に連字には誤れるにや、中臣玉祖などの例を見て、妄にさかしらに、改めしにもあらむ、書紀神代巻、古語拾遺などには、たゞ鏡作、また鏡作部などのみ有て、加婆泥を擧たること、餘には見えず、さて此氏の事、古語拾遺瑞垣朝段に、更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏、更鑄鏡造劒とある、是にも唯某裔とのみ云て、姓をも其人の名をも擧ず、又同書に、神祇官神部可有中臣、齋部、猨女、鏡作、玉作、盾作、神服、倭文、麻續等氏、而今唯有中臣、齋部等二三氏、自餘諸氏、不預考選、神裔亡散、其葉將絶と云、世の史にも、此氏人見えたることなきを思へば、甚く衰へたるなめり、さて姓氏錄にも載ざれば、そのかみ既く畿内には、此氏絶たりしにや、いとも畏き大御神の御靈實をしも造奉りし神の子孫の、かく絶けむことは、甚哀きわざなりかし、和名抄に、大和國城下郡鏡作、加加都久利、加々の下に美字脱たるか、はたもとより美を省きて云るか、式に、同郡鏡作坐天照御魂神社、大、月次新嘗、鏡作伊多神社、鏡作麻氣神社、或説に、伊多神社は石凝姥、麻氣神社は天糠戸を祭ると云るは、古き傳へあることにや、又抄に、伊豆國田方郡鏡作、加々美豆久里、

〔日本書紀 神代 一〕一書曰、○中略及至日神當新嘗之時、素戔嗚尊則於新宮御席之下、陰自送糞、日神不知、

鏡作部

徑坐席上、由是日神擧體不平、故以恚恨、迺居于天石窟、閉其磐戶、于時諸神憂之、乃使鏡作部遠祖天糠戶者造鏡、○下略

〔古語拾遺〕至于磯城瑞垣朝、○崇神 漸畏神威、同殿不安、故更令齋部氏、率石凝姥神裔、天目一箇神裔二氏、更鑄鏡造劒、以爲護身御璽、是今踐祚之日、所獻神璽鏡劒也、

〔釋日本紀秘訓十六〕鏡作部

私記曰、問、部字可讀否如何、答、師說不讀部字、一部之內、諸姓部等並同之、但忌部齋部殊讀部字、

〔日本書紀纂疏五〕鏡作部、姓氏也、以業爲姓、天糠戶、則石凝姥之父也、

〔古事記上〕故於是天照大御神見畏、閉天石屋戶而刺許母理此三字以音坐也、○中略 是以八百萬神於天安之河原神集集而、訓集云都度比高御產巢日神之子思金神令思、訓金云加尼而集常世長鳴鳥令鳴、而取天安河之河上之天堅石、取天金山之鐵而求鍛人天津麻羅而、麻羅二字以音科伊斯許理度賣命自伊下六字以音令作鏡、

〔古事記傳八〕故思に、次の伊斯許理度賣、玉祖などの例に依ば、此も科とあるべきに、求とあるは、麻羅は一神の名には非で、鍛人の通名などにや、此名のみは神とも命とも云ぬをも思べし、○中略 さて鏡をば伊斯許理度賣命に作らしむとあれば、此麻羅を求たるは、何物を造しめむとてにか、甚も意得難し、古語拾遺に、令天日鷲神、以津咋見神、穀木種殖之、以作白和幣とあるが如き例とも見えず、又麻羅を鍛人の通名と見て、伊斯許理度賣即其神とせむか、されど此文のさま、さる意とも見えず、故考るに、書紀に、白曰、宜圖造彼神之象、而奉招禱也、故卽以石凝姥爲冶工、採天香山之金以作日矛、又全剝眞名鹿之皮以作天羽鞴、用此奉造之神象、是卽紀伊國所坐日前神也、○註略 とあるを合て思に、彼は矛と鏡と共に石凝姥に造らせ、此記は矛をば別に、此天津麻羅に造らせたりといふ傳なるべくや、然ば此名の下に、矛を作しむることの有しが脫たるなるべし、如此く見るときは、此記も書紀も共に明かなり、下文に鏡を用たることは見えて、矛を用たることは、此記には見えざれども、書紀に、天鈿女命、則手持茅纏之矟云々、古語拾遺に、令手置帆負彥狹知二神云々、兼

作御笠及矛楯、令天目一箇神作雜刀斧及鐵鐸古語佐那伎とありて、次に天鈿女命云々、手持著鐸之矛、而於石窟戶前覆誓槽云々〇中略註とあれば、矛をも持ること明けし、此記には其を略るなり、註〇略 されば其料の矛をぞ、今麻羅には造らせけむ、此矛は、他雜物の並にあらず、玉鏡にならびて、殊に貴き寶なる由ありけるなるべし、其故は、古語拾遺、皇孫命に三種の神寶を授たまふ所に、以八咫鏡及草薙劍二種神寶、授賜皇孫、永爲天璽、矛玉自從とあるは、三種の神器の一傳なり、さて此鏡も玉も此石屋戶の時の物なれば、矛と云も此時の矛なること知し、さて三種の寶と並て如此言、又後までも日前國懸と並び坐神御靈なれば、おぼろげの物ならめや、故今此を遺れることを云るならむ、矛の料なる故に、其加尼にも鐵字は書るなるべし、鏡ならば鐵とは書じ 又堅石も、矛を打料とこそ聞ゆれ、

〔日本書紀神代一〕一書曰、〇中略故天照大神、謂素戔嗚尊曰、汝猶有黑心、不欲與汝相見、乃入于天石窟、而閉著磐戶焉、〇中略時有高皇產靈之息思兼神云者、有思慮之智、乃思而白曰、宜圖造彼神之象、而奉招禱也、故卽以石凝姥爲冶工(タクミ)、採天香山之金以作日矛、

〔日本書紀綏靖四〕太歲己卯冬十一月、神渟名川耳尊與兄神八井耳命陰知其志、而善防之、至於山陵事畢、乃使弓部稚彥造弓、倭。鍛。部。(カヌチ)天津眞浦造眞麛鏃、矢部作箭、及弓矢既成、神渟名川耳尊、欲以射殺手研耳命、

〔先代舊事本紀天神三〕誕生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊之時、正哉吾勝勝速日天押穗耳尊奏曰、僕欲將降裝束之間、所生之兒、以此可降矣、詔而許之、〇中略船長同共率領梶取等天降供奉、〇中略
船子倭。鍛。師。等祖天津眞浦

〔倭訓栞前編六加〕かぬち　日本紀に鍛をよめり、金打の義、ねう反ぬ也、新撰字鏡には鍇字をよめり、二合字成べし、

〔古事記應神中〕百濟國主照古王、〇中略貢上手人韓。鍛。名卓素、亦吳服西素二人也、

〔古事記傳三十三〕手人は、諸の物作る工を云稱なり、今俗に職人と云物なり〇中略さて此は、韓鍛冶と吳服とを指ていへり、

玉作部

〔令義解 職員一〕鍛冶司 鍛部廿人、〈〇中略〉鍛戸、

〔令義解 職員一〕造兵司 雜工部廿人〈謂此取雜工戸充之、其鍛冶司鍛部、土工司泥部等、如此之類者、皆自鍛戸泥戸內而取充、但戸內无人者、通取佗人、〉

〔古事記 上〕玉祖命者〈玉祖連等之祖、〉

〔古事記傳 十五〕玉祖連、書紀に、玉作上祖玉屋命〈玉作を、タマスリと訓はわろし、〉と見え、又其石屋戸段にも、玉作また玉作部とあり、〈此玉作部、垂仁紀にも見ゆ、記玉垣宮段に、玉作人、〉又仁賢卷に、難波玉作部鯽魚女と云人見ゆ、〈今も難波に玉造と云地名あり、〉大殿祭祝詞に、齋玉作等我、持齋波利、持淨麻波利、造仕禮留、瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉爾〈云々〉古語拾遺に、櫛明玉命、出雲國玉作祖也、〈傳八の廿八葉考合すべし、拾遺に、又神武段に、櫛明玉命之孫、造御祈玉、其裔今在出雲國、毎年與調物貢進其玉とある、此は臨時祭式、出雲國造奏神壽詞とき獻る物の中に、玉六十八枚云々と見えて、彼詞に、此玉の事見え、又同式に、凡出雲國所進御富岐玉六十連云々、毎年十月以前、令意宇郡神戸玉作氏造備、差使進上と見ゆ、拾遺に、毎年貢進とあるも、大殿祭詞に云るも是なり、〉式に、出雲國意宇郡玉作湯神社、風土記に、同郡に玉造川と云もあり、又式に、近江國伊香郡玉作神社、和名抄に、陸奥國玉造〈太萬都久里〉郡、駿河國駿河郡玉造〈多萬都久里〉土佐國安藝郡玉造〈多萬都久利〉さて右の書どもには、みな玉作とのみありて玉祖と云ことは見えざるに、此に玉祖連と擧げ、書紀にも天武卷十三年十二月戊寅朔己卯、玉祖連賜姓曰宿禰とあるは、此氏本はみな玉作と云けむを、やゝ後に祖神の御名を取て、玉祖とは改められたるなるべし、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、〈〇中略〉日神〈〇中略〉恚恨、迺居于天石窟、閉其磐戸、于時諸神憂之、乃使〈〇中略〉玉作部遠祖豐玉者造玉、〈〇下略〉

〔新撰姓氏錄 右京神別上天神〕玉作連

高魂命孫天明玉命之後也、天津彥火瓊々杵命、降幸於葦原中國時、與五氏神部陪從皇孫降來、是時造作玉璧以爲神幣、故號玉祖連、亦號玉作連、

〔新撰姓氏錄 右京神別上天神〕玉祖宿禰　高御牟須比乃命十三世孫、大荒木命之後也、

〔新撰姓氏錄河内國神別天神〕玉祖宿禰　高御魂乃命十三世孫建荒木命之後也、

〔古事記傳十五〕これらに祖神玉祖命を擧ずして、大荒木命之後也とあるは、此人の時に、中ごろ家門を興せしなるべし、然れば玉作を玉祖と改められしも、此人の時などにやありけむ、仁賢紀に、玉作部鯽魚女が生る子に倉寸と云あり、されど其父は山寸とありて、姓は見えず、式に、大和國宇智郡荒木神社あり、大荒木森と云は是なり、さて兵範記の久安五年の處に、木工允玉祖親宗と云人見えたり、後世には此姓の人めづらし、

弓削部
矢作部

〔日本書紀四綏靖〕其庶兄手研耳命、行長已長、久歷朝機、○中略遂以諒闇之際、威福自由、苞藏禍心、圖害二弟、于時也太歲己卯冬十一月、神渟名川耳尊與兄神八井耳命陰知其志、而善防之、至於山陵事畢、乃使弓部稚彥造弓、倭鍛部天津眞浦造眞麛鏃、矢部作箭、

〔日本書紀六垂仁〕三十九年十月、一云、五十瓊敷皇子、居于茅渟菟砥河上、而喚鍛名河上、作大刀一千口、是時(中略)神弓削部神矢作部(中略)賜五十瓊敷皇子、

〔新撰姓氏錄左京神別下〕弓削宿禰　高魂命孫、天日鷲翔矢命之後也、

〔新撰姓氏錄河内國神別天神〕弓削宿禰　高御魂乃命孫、天毗和志可氣流夜命之後也、

〔新撰姓氏錄未定雜姓河内國〕矢作連　布都奴志乃命之後者、不見、

〔令集解四職員〕古記及釋云、別記云、○中略弓削三十二戶、矢作廿二戶、○中略自十月至三月、每戶役一丁、爲雜戶、免調役也、

〔令集解四職員〕穴云、雜工部者、簡取雜工戶之中人、或云、不依別取良人、雜戶此卑人、不可預得考之例、故之說、釋云、取雜工戶內也、或云、雜工部不在雜戶、取良人爲之、假令弓削宿禰等是也、可校、

的部

〔播磨風土記神前郡〕的部里石坐神山高野社土中々、右的部等居於此村、故曰的部里、

〔拾芥抄中末宮城〕門號起事云々取佳名

郁芳門的氏遺之

楯縫部

〔日本書紀 垂仁 六〕三十九年十月、〈一云、五十瓊敷皇子居于茅渟菟砥河上、(中略)是時楯部(中略)賜五十瓊敷皇子、〉

〔出雲風土記 楯縫郡〕所以號楯縫者、神魂命詔、五十足天日栖宮〈○出雲大社〉之縱横御量、千尋栲縄持而、百結結、八十結結下而、此天御量持而、所造天下大神之宮造奉詔而、御子天御鳥命楯部爲而、天降下給之、爾時退下來坐而、大神宮御裝束楯造始給所是也、仍至今楯桙造而奉於皇神等、故云楯縫、

〔令集解 職員 四〕古記及釋云、別記云、〈○中略〉楯縫卅六戶、〈○中略〉臨時召役、爲品部、取調免徭役、

〔儀式 踐祚大嘗祭儀 二〕左右衞門府申官、令兵庫寮作大嘗宮南北門神楯四枚、〈(中略)丹波國楯縫氏作之〉

靫編部

〔新撰姓氏錄 未定雜姓 河内國〕靫編首　神志波移命之後者、不見、

〔令集解 職員 四〕古記及釋云、別記云、〈○中略〉靫作五十八戶、〈○中略〉自十月至三月、每戶役一丁、爲雜戶、免調役也、

狛部

〔日本書紀 仁賢 十五〕六年九月壬子、遣日鷹吉士、使高麗召巧手者、　是歲、日鷹吉士還自高麗、獻工匠須流枳、奴流枳等、今倭國山邊郡額田邑熟皮高麗是其後也、

〔釋日本紀 秘訓 十七〕工匠　熟皮高麗

〔令義解 職員 一〕大藏省　典革一人、〈掌雜革染作、撿挍狛部、〉狛部六人、〈掌雜革染作、〉

爪工

〔新撰姓氏錄 和泉國神別 天神〕爪工連　神魂命男、多久豆玉命之後也、雄略天皇御世、造紫蓋爪、幷奉飾御座、仍賜爪工連姓、

〔古史傳 十〕爪工連〈○中略〉多久豆玉命は手置帆負命なり、〈この雄略天皇の御世に、紫蓋爪を造云々の事は、後に有し事を始ての如く心得たる文なり、外にも例ある事なり、其は此爪工に並べて擧られたる掃守連をも、雄略天皇の御世に、掃守の事を監すとあれど、實は葺不合命の時なるを思ふべし、○中略〉和名抄に、本朝式云、齋王行具翳二枚〈翳和名波〉とあり、大殿祭詞に、天之御翳日之御翳と有を、〈御鎭座傳記にもかくあり〉天之御蔭、日之御蔭と云義なり、然れば笠と爬とは大抵同物なるべし、

〔令集解 職員 四〕古記及釋云、別記云、〈○中略〉爪工十八戶、楯縫卅六戶、幄作十六戶、右三色人等、臨時召役

爲品部、取調免徭役、

〔東大寺正倉院文書成卷之餘本書紙背翻用雜書〕寫後經所解申請布施事

合奉寫一切經壹仟壹伯漆拾肆卷〇中略

右起天平十九年四月一日盡六月廿九日、奉寫經幷經飾裝潢校生等給物具錄顯請如件、以謹解、

天平十九年七月一日

爪工家万呂

伊福部男依

〔三代實錄六清和〕貞觀四年七月廿八日乙未、伊勢國安濃郡人、右辨官史生正七位上爪工仲業賜姓安濃宿禰、神魂命之後也、

鞍部

〔日本書紀十四雄略〕七年、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以〇中略鞍部堅貴〇中略等、遷居于上桃原、下桃原、眞神原三所、

〔日本靈異記攷證上〕鞍部姓氏錄不載、按雄略七年紀有鞍部賢貴、敏達十三年紀有鞍部村主司馬達等、用明二年紀有鞍部多須奈、司馬達等子也、推古十三年紀、十四年紀有鞍作鳥、多須奈子也、法隆寺釋迦佛銅像光後銘、作司馬鞍首止利佛師、推古十五年紀有鞍作福利、皇極四年紀有鞍作得志、

車持部

〔日本書紀十二履中〕五年十月甲子、葬皇妃、既而天皇悔之不治神祟而亡皇妃、更求其咎、或者曰、車持君行於筑紫國、而悉校車持部、兼取充神者、必是罪矣、天皇則喚車持君、以推問之、事既實焉、因以數之曰、爾雖車持君、縱檢校天子之百姓、罪一也、既分寄于神祇車持部、兼奪取之、罪二也、則負惡解除善解除而出於長渚崎、令祓禊、既而詔之曰、自今以後、不得掌筑紫之車持部、乃悉收以更分之、奉於三神、

〔倭訓栞前編八久〕くらもち　姓に車持あり、古來かくよめり、るま反ら也、

〔姓氏考十久〕車持朝臣

車持は職號なり、則久留末毛知と訓べし、

船官

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕車持公クラモチ 上毛野朝臣同祖、豐城入彥命八世孫、射狹君之後也、雄略天皇御世、供進乘輿、仍賜姓車持公、

〔新撰姓氏錄攝津國皇別〕車持公 同豐城入彥命之後也

〔日本書紀二十九天武〕十三年十一月戊申朔、車持君○中略賜姓曰朝臣、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年十二月廿五日癸亥、聽主殿寮殿部十人、以異姓入色○入色原作入充、依一本及類聚國史改、加補其闕、先是宮內省言、主殿寮申請、撿職員令、殿部三十人、○三十人、令義解作卅人以日置、子部、車持、笠取、鴨五姓人為之、今代或氏擧家絕滅、或氏無心直寮、因茲差役雜事、常煩人乏、為濟公事、假補異姓、功積勞成、移式部省、而稱不載考帳、常事勘却、望請承和六年八月十四日、補異姓白丁五人之外、充補十人、其遺二十五人、待五姓人以補之、從之、

〔先代舊事本紀三天神〕天照大神詔曰、豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者、吾御子正哉吾勝勝速日天押穗耳尊可知之國、言寄詔賜、而天降之時、高皇產靈尊兒、思兼神妹萬幡豐秋津師姬栲幡千々姬命為妃、誕生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊之時、正哉吾勝勝速日天押穗耳尊奏曰、僕欲將降裝束之間所生之兒、以此可降矣、詔而許之、○中略

船長同共率領梶取等天降供奉

船長、跡部首等祖天津羽原、　梶取、阿刀造等祖天麻良、

船子、倭鍛師等祖天津眞浦、　笠縫等祖天津麻占、

曾曾笠縫等祖天都赤麻良　為奈部等祖天都赤星

〔日本書紀十四雄略〕九年五月、紀大磐宿禰聞父既薨、乃向新羅、執小鹿火宿禰所掌兵馬船官及諸小官、專用威命、

〔令義解一職員〕主船司　船戶

猪名部

〔令集解職員四〕別記及釋云、船守戸百、津國以十戸一番役、爲品部免調役、

〔日本書紀應神十〕三十一年八月、諸國一時貢上五百船、悉集於武庫水門、當是時、新羅調使共宿武庫、爰於新羅停忽失火、卽引之及于聚船而多船見焚、由是責新羅人、新羅王聞之、讋然大驚、乃貢能匠者、是猪名部等之始祖也、

〔日本書紀雄略十四〕十八年八月戊申、遣物部菟代宿禰、物部目連、以伐伊勢朝日郎、○中略由是菟代宿禰羞愧不克、七日不復命、天皇問侍臣曰、菟代宿禰何不復命、爰有讚岐田虫別、進而奏曰、菟代宿禰怯也、二日一夜之間、不能擒執朝日郎、而物部目連率筑紫聞物部大斧手、獲斬朝日郎矣、天皇聞之怒、輒奪菟代宿禰所有猪名部、賜物部目連、

〔新撰姓氏錄左京神別上〕猪名部造　伊香我色男命之後也

〔新撰姓氏錄攝津國諸蕃百濟〕爲奈部首　百濟國人中津波手之後也、

木工

〔日本書紀雄略十四〕十二年十月壬午、天皇命木工鬪鷄御田、一本云、猪名部御田、蓋誤也、○書紀集解云、蓋誤也三字、私記攙入、始起樓閣、於是御田登樓、疾走四方、有若飛行、時有伊勢采女、仰觀樓上、怪彼疾行、顚仆於庭、覆所擎饌、饌者、御膳之物也、天皇便疑御田奸其采女、自念將刑、而付物部、

〔倭訓栞中編十三〕たくみ　日本紀に匠者をよめり、巧人の意、和名抄に、內匠をうちのたくみ、木工をこたくみとよめり、萬葉集にひだのたくみも見えたり、

〔古事記下淸寧〕爾袁祁命、亦立歌垣、於是志毘臣歌曰、意富美夜能、袁登都波多傳、須美加多夫祁理、如此歌而乞其歌末之時、袁祁命歌曰、意富多久美、袁遲那美許曾、須美加多夫祁禮、

〔日本書紀舒明二十三〕十一年七月、詔曰、今年造作大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處、是以西民造宮、東民作寺、便以書直縣爲大匠、

〔日本書紀孝德二十五〕白雉元年十月、爲入宮地、所壞丘墓、及被遷人者、賜物各有差、卽遣將作大匠荒田井

土師部

直比羅夫、立官堺標、

〔古事記 中垂仁〕其大后比婆須比賣命之時、定石祝作、又定土師部、

〔古事記傳 二十五〕土師部は、波遲斯辨と訓べし、和名抄國々の郷名の土師、多く波爾之とあれば なり、(下に引が如し)又黃櫨は、同書に波爾之とあるを、其木の弓を、此記に波士弓と云、書紀にも訓注に 波茸とある、此例を以見れば、土師をも古より波士とも云けむかし、さて斯とは、土物を造る者 と云ことにて、爲の意なり、凡て工人の屬に、某師と云みな然なり、(今世にも、某師と云こと多し、皆同じ、)然るに漢 國にても、某師と云こと多きに因て、卽某師字を用ひたるのみなり、(されば師字は、漢意にて書るにはあれども、斯は爲の意にして、字音にはあらず、又假字にも非ず、又師木などの如く、訓にして用ひたる借字にも非ず、思ひまがふべからず、)

〔日本書紀 六垂仁〕三十二年七月己卯、皇后日葉酢媛命(一云、日葉酢根命也、)薨、臨葬有日焉、天皇詔群卿曰、從死之 道、前知不可、今此行之葬、奈之爲何、於是野見宿禰進曰、夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉 乎、願今將議便事而奏之、則(○則下一本有遣字)使者喚上出雲國之土。部。壹佰人、自領土部等、取埴以造作人馬 及種々物形、獻于天皇曰、自今以後、以是土物更易生人、樹於陵墓、爲後葉之法則、天皇於是大喜之、詔 野見宿禰曰、汝之便議寔洽朕心、則其土物始立于日葉酢媛命之墓、仍號是土物謂埴輪、亦名立物也、 仍下令曰、自今以後、陵墓必樹是土物、無傷人焉、天皇厚賞野見宿禰之功、亦賜鍛地、卽任土部職、因改 本姓、謂土部臣、是土部連等主天皇喪葬之緣也、所謂野見宿禰是土部連等之始祖也、

〔續日本紀 三十六光仁〕天應元年六月壬子、遠江介從五位下土師宿禰古人、散位外從五位下土師宿禰 道長等一十五人言、土師之先、出自天穗日命、其十四世孫、名曰野見宿禰、昔者纏向珠城宮御宇垂 仁天皇世、古風尚存、葬禮無節、毎有凶事、例多殉埋、于時皇后(○日葉酢媛命)薨、梓宮在庭、帝顧問群臣曰、後 宮葬禮、爲之奈何、群臣對曰、一遵倭彥王子故事、時臣等遠祖野見宿禰進奏曰、如臣愚意、殉埋之禮、 殊乖仁政、非(○非字原无、依一本補、)益國利人之道、仍率土師三百餘人、自領取埴、造諸物象進之、帝覽甚悅、以

代殉人、號曰埴輪、所謂立物是也、此即往帝之仁德、先臣之遺愛、垂裕後昆、生民賴矣、式觀祖業、吉凶相半、若其諱辰掌凶、祭日預吉、如此供奉、允合通途、今則不然、專預凶儀、尋念祖業、意不在茲、望請因居地名、改土師以爲菅原姓、勅依請許之、

〔類聚三代格七〕太政官符

應停土師宿禰等預凶儀事

右太政官今月十四日論奏偁、臣等謹檢故事、上古淳朴、葬禮無節、屬有山陵之事、每以殉埋生人、鳥吟魚爛、而不忍見聞、爰及纏向珠城朝廷垂仁天皇御世、皇后薨逝、梓宮在庭、天皇甚傷、顧問群臣、後宮葬禮爲之奈何、于時土師宿禰等遠祖野見宿禰進奏曰、神聖之德、伏濟民命、殉埋之禮、殊乖仁政、因即喚來出雲國土師部三〇三、一本作一、百餘人、自領〇領原作頒、據一本改、取埴、造諸物象進、天皇甚悅以代殉人、號曰埴輪、所謂立物是也、自茲厥後、歷代相沿、緬尋古風、野見宿禰、獻策往帝、弘仁政於昔年、停殉陵次、垂遺愛於後世、傳曰、善善及子孫、惡惡止其身、然則野見宿禰苗裔、應霑延賞之澤、而顧掌凶儀、不預吉禮、夫喪葬之事、人情所惡、專定一氏、爲其職掌、於事論之、實爲不穩、臣等伏望、永從停止、縱有吉凶、同於諸氏、其殯宮御膳誄人長、及年終奉幣諸陵使者、普擇所司及左右大舍人雜色人等充之、伏聽天裁、謹以申聞者、畫〇畫原作盡、據一本改、聞既訖、省宜承知、年終幣使者、依治部省移、差蔭子孫散位位子等充之、自今以後、永爲恒例、

延曆十六年四月廿三日

〔日本書紀十一仁德〕六十年十月、差白鳥陵守等充役丁、時天皇臨于役所、爰陵守目杵忽化白鹿以走、於是天皇詔之曰、是陵自本空、故欲除其陵守、而甫差役丁、今視是恠者甚懼之、無動陵守者、則且授土師連等、

〔日本書紀十四雄略〕九年五月、采女大海從小弓宿禰喪到來日本、遂憂諮於大伴室屋大連曰、妾不知葬所、

贄土師部

願占良地、大連即爲奏之、〇中略於是大連奉勅、使土師連小鳥、作冢墓於田身輪邑而葬之也、

〔日本書紀推古二十二〕十一年二月丙子、來目皇子薨於筑紫、仍驛使以奏上、爰天皇聞之大驚、則召皇太子蘇我大臣謂之曰、擊新羅大將軍來目皇子薨之、其臨大事而不遂矣、甚悲乎、仍殯于周芳娑婆、乃遣土師連猪手、令掌殯事、故猪手連之孫曰娑婆連、其是之緣也、

〔日本書紀皇極二十四〕二年九月丁亥、吉備島皇祖母命薨、　癸巳、詔土師娑婆連猪手、視皇祖母命〇命原缺、據一本補喪、

〔日本書紀孝德二十五〕白雉五年十月壬子、天皇崩于正寢、仍起殯於南庭、以小山上百舌鳥土師連土德、主殯宮之事、

〔新撰姓氏錄右京神別下〕土師(ハシ)宿禰　天穗日命十二世孫、可美乾飯根命之後也、光仁天皇天應元年、改土師賜菅原氏、有勅改賜大枝朝臣姓也、

〔新撰姓氏錄山城國神別〕土師宿禰　天穗日命十四世孫、野見宿禰之後也、

〔新撰姓氏錄大和國神別〕土師宿禰　秋篠朝臣同祖、天穗日命十二世孫、可美乾飯根命之後也、

〔新撰姓氏錄和泉國神別〕土師宿禰　秋篠朝臣同祖、天穗日命十四世孫、野見宿禰之後也、

土師連　同上

〔令義解一職員〕諸陵司　土部十人、掌贊相凶禮、謂凶禮者、送終之禮、即土師宿禰年位高進者、爲大連、其次爲少連、並紫衣刀劍、世執凶儀、其文多、故不載也、

〔日本書紀雄略十四〕十七年三月戊寅、詔土師連等、使進應盛朝夕御膳清器者、於是土師連祖吾笥仍進攝津國來狹狹村、山背國內村、俯見村、伊勢國藤形村、及丹波、但馬、因幡私民部、名曰贄土師部(ニヘノハシベ)、

〔日本書紀通證十九雄略〕贄(ニヘノ)土師部又見安閑紀、延喜式有贄土師、坏作土師、玉手土師等名、

〔日本書紀安閑十八〕元年閏十二月、是月廬城部連枳莒喩女幡媛、偸取物部大連尾輿瓔珞、獻春日皇后、事

至發覺、枳莒喩以女幡媛獻采女丁、是春日部采女也 幷獻安藝國過戸廬城部屯倉、以贖女罪、物部大連尾輿、恐事由己、不得自安、乃獻十市部、伊勢國來狹狹、登伊、來狹狹登伊二邑名也 贄土師部、筑紫國膽狹山部也、

〔新撰姓氏錄 大和國神別天孫〕贄土師連　同神〇天穗日命十六世孫、意富曾婆連之後也、

〔東大寺正倉院文書 三〕大膳職解　申請仕丁公粮事〇中略

天平十七年四月十七日　從七位下行少屬贄土師連佐美万里〇下略

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年正月壬子、授正六位上贄土師連沙彌麻呂外從五位下、

〔日本書紀 六垂仁〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、(中略)一云、(中略)天日槍、自菟道河泝、北入近江國吾名邑而暫住、復更自近江經若狹國、西到但馬國、則定住處也、是以近江國鏡谷陶人、則天日槍之從人也、

〔日本書紀 五崇神〕七年八月己酉、布告天下、求大田田根子、卽於茅渟縣陶邑得大田田根子而貢之、

〔倭訓栞 前編十二〕すゑ　日本紀に、陶をよむも居の義也、萬葉集に、哭澤の神社に三輪すゑの意、すゑつきは陶坏也、すゑうつはものは陶器也、すゑものつくりは陶者也、すゑつくりともいへり、

〔日本書紀 十四雄略〕七年、新羅不事中國、天皇詔田狹臣子弟君與吉備海部直赤尾曰、汝宜往罰新羅、於是西漢才伎歡因知利在側、乃進而奏曰、巧於奴者、多在韓國、可召而使、天皇詔群臣曰、然則宜以歡因知利副弟君等、取道於百濟、幷下勅書、令獻巧者、於是弟君銜命、率衆、行到百濟、而入其國、國神化爲老女、忽然逢路、弟君就訪國之遠近、老女報言、復行一日、而復〇復字書紀集解作後可到、弟君自思路遠、不伐而還、集聚百濟所貢今來才伎於大島中、託稱候風、淹留數月、〇中略 天皇聞弟君不在、遣日鷹吉士堅磐固安錢、堅磐此云柯陀之波 使共復命、遂卽安置於倭國吾礪廣津邑、廣津此云比盧岐頭 而病死者衆、由是天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴、鞍部堅貴、畫部因斯羅我、錦部定安那錦、譯語卯安那等、遷居于上桃原、下桃原、眞神原三所、

〔新撰姓氏錄左京神別下天孫〕石作連

火明命六世孫、建眞利根命之後也、垂仁天皇御世、奉ㇾ爲皇后日葉酢媛命、作ㇾ石棺獻之、仍賜姓石作連
○連上一本有二大字一公也、

〔姓氏考三伊〕石作連神別天孫　左京

石作は舊は石棺作と云ひしを、棺字を忌て省きしにこそあらめ、然から、ことばにも以之都久利とのみいへり、文字の多きを省きしは、ことばには舊のまゝにいへる例なり、かく字を忌て省きたるは、ことばにも云ざる例なり、石もてくさぐ〳〵の物をしも作れゝど、棺は終身の宅にて、ことにむねとせるものなれば、其事をもて氏にさへ負せ給ひいと愛たきことなるを、事忌多かる御代に止められしならん、

〔古事記中垂仁〕此天皇御年壹佰伍拾參歲、御陵在二菅原之御立野中一也、又其大后比婆須比賣命之時、定二石祝作一、

〔古事記傳二十五〕石祝作、祝字は棺の誤なりと師の云れたる、信に然るべし、草書より誤れるならむ、棺と祝とよく似たり伊斯紀都久理と訓べし、和名抄に、四聲字苑云、槨周レ棺者也、和名於保土古とあり、此棺も槨も、共に上代には比登紀と云、於富登許と云は、やゝ後の名と聞ゆ、又比都紀と云は、比登紀の轉れるなるをもヒツキと訓り、櫃とは棺に屍を納たるを云、又櫬又常には紀とのみも云り、書紀景行卷に、棺キ櫬、ミは御なり孝德卷に棺キ槨、また棺キなどあり、同卷に轜車キグルマとあるも、槥車キグルマの謂なり、轜字喪車とも注す、紀は奧津城などの城にて、屍を藏むる構を云、奧津城は、萬葉に多く見えて、人を葬せる處を云、天智紀に、丘墓とあり、奧とは地下を云なり、比登紀とは、人屍を納るゝ故に云なり、さて書紀神代卷に、素戔嗚尊云々、被可三以爲二顯見蒼生奧津棄戸將臥之具一とあるに依るに、內棺は上代より木以造れりと見ゆれど、此に石棺とあるは、外槨なるべし、已さきに大和國を見めぐりし時、十市郡安部村の近き處に窟のある、やゝ深く入て奧に、石槨の上は屋根の形に作りて、高さも、竪も、横も、六尺ばかりなるが立るを見つ、此は正しく上代の貴人の墓と見えたれば、石槨と云るはかゝる物なるべし、なほ外なる總ての石構までをかけて、皆伊斯紀とぞ云けむかし、○中略さて石棺

を造る工は、世に舊よりも有つらむを、此御世に更に其部を定められたるなり、(此御世に、始めて石棺を作れりと云にはあらず、)

〔新撰姓氏錄 攝津國神別 天孫〕石作連 同神(○火明命)六世孫、武椀根命之後也、

〔新撰姓氏錄 和泉國神別 天孫〕石作連 火明命男天香山命之後也

〔新撰姓氏錄 山城國神別 天孫〕石作部(○部字原无、據一本補、) 火明命之後也

遊部

〔令集解 四十 喪葬〕釋云、(○中略)遊部、隔幽顯境、鎭凶癘魂之氏也、終身勿事、故云遊部、古記云、遊部者在大倭國高市郡、生目天皇(○垂仁)之苗裔也、所以負遊部者、生目天皇之孽圓目王、娶伊賀比自支和氣之女爲妻也、凡天皇崩時者、比自支和氣等到殯所而供奉其事、仍取其氏二人、名稱禰義・余比也、禰義者負刀並持戈、余比者持酒食並刀、並入內供奉也、唯禰義等申辭者、輙不使知人也、後及於長谷天皇(○雄略)崩時、而依𨶳比自支和氣、七日七夜不奉御食、依此阿良備多麻比岐、爾時諸國求其氏人、或人曰、圓目王娶比自岐和氣爲妻、是王可問云、仍召問、答云、然也、召其妻問、答云、我氏死絕、妾一人在耳、卽指負其事、女申云、女者不便負兵供奉、仍以其事移其夫圓目王、卽其夫代其妻而供奉其事、依此和平給也、爾時詔、自今日以後、手足毛成八束毛遊詔也、故名遊部君是也、但此條遊部、謂野中古市人歌垣之類是、

〔令義解 九 喪葬〕凡(○中略)發喪五日、以外葬具、及遊部、(謂、葬具者、帷帳之屬也、遊部者、終身勿事、故云遊部也、)並從別式、

藥師

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字二年己巳、(○己巳上、恐脫四月二字、)內藥司佑兼出雲國員外掾正六位上難波藥師(クスシ)奈良等一十一人言、奈良等遠祖德來、本高麗人、歸百濟國、昔泊瀨朝倉朝廷(○雄略)詔百濟國、訪求才人、爰以德來貢進聖朝、德來五世孫惠日、小治田朝廷(○推古)御世、被遣大唐、學得醫術、因號藥師、遂以爲姓、今愚闇子孫、不論男女、共蒙藥師之姓、竊恐名實錯亂、伏願改藥師字、蒙難波連、許之、

〔新撰姓氏錄 和泉國諸蕃 漢〕蜂田藥師(ハチタノクスシ) 吳主孫權王之後也

〔新撰姓氏錄 左京諸蕃下 漢〕和藥使主

出自吳國主照淵孫智聰也、欽明天皇御世、隨使大伴佐氐比古、持內外醫藥書、明堂圖等百六十四卷、佛像一軀、伎樂調度一具等入朝、男善那使主、孝德天皇御世、依獻牛乳、賜姓和藥使主、奉度本方書一百卅卷、明堂圖一、藥臼一、及伎樂一具、今在大寺也、

〔政事要略九十五〕又云、○醫疾令醫生、按摩生、呪禁生、藥園生、先取藥。部。及世習、(謂藥部者、姓稱藥師者、即蜂田藥師、奈良藥師類也、)○下略

〔令集解五職員〕典藥寮　藥戶、乳戶、(古記云、及釋云別記云、藥戶七十五戶、經年一番役廿七丁、乳戶五十戶、經年一番役十丁、右二色人等爲品部、免調雜徭、)

吉志部

〔古事記仲哀〕於是息長帶日賣命、於倭還上之時、因疑人心、一具喪船、御子載其喪船、先令言漏之、御子既崩、如此上幸之時、香坂王忍熊王聞而思將待取、○中略此時忍熊王、以難。波。吉。師。部。之祖伊佐比宿禰爲將軍、

〔古事記傳三十一〕難波吉師部、此難波は、吉師部の鄕里を云るなり、姓には非ず、○中略吉師部は姓なり、姓氏錄攝津國皇別に、吉志、難波忌寸同祖、大彥命之後也、(難波忌寸、大彥命之後也とあり、)とあり、此なるべし、大彥命は、孝元天皇の御子にて、阿倍氏の祖なれば、(上に見ゆ)此氏も阿倍氏の支別なるべし、さて吉師部と負ることは、本地名より出たるか、○註略はた吉志舞より出たるか、續紀十一に、(四天王寺に、食封を施入せられし時、)に、攝津職奏吉師部樂とある是なり、(阿倍氏の人、昔新羅國より大嘗會の日に歸參りて、始て吉志舞を奏し事、傳廿二の入葉に云るが如し、さて吉志舞と名けし由は、先吉志と云稱は、もと新羅より出たれば、此舞も其吉師の舞なるを、新羅より傳來つる故に、吉師舞と云か、さて其此舞を舞し人の子孫、相傳へて大嘗會のごとに舞けるなる故に、其氏を吉師部と負るか、若然らば、かの津國に、吉志部と云地名のあるは、其氏人の鄕里なる故に負るなり、然れども又吉師部と云を、地名より出たりとせば、彼舞も吉師部氏の祖なりし人の始めて舞て、其氏に傳へたる故に吉志舞と云とも聞ゆ、)されば此本末(地名より出たるか、舞より出たるか、)決めがたし、

〔大日本史職官一〕按、隋書、東國通鑑、吉士本新羅國官名、蓋國家平定三韓、用蕃人掌外國事、官名仍舊、不改其職、奉事朝廷、如王仁阿直岐等皆是也、又有國人爲吉士者、子孫因以爲姓、如難波吉士是也、

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕吉田連

昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彥天皇〇崇神御代、任那國奏曰、臣國東北有三巳汶地、〇中略與新羅國相爭、〇中略天皇令鹽乘〇乘一本作垂津彥命遣、奉勅而鎭守、彼俗稱宰爲吉、故謂其苗裔之姓爲吉氏、

〔新撰姓氏錄攝津國皇別〕吉志(キシ) 難波忌寸同祖、大彥命〇阿倍氏祖之後也、

〔北山抄五〕大嘗會事

頭書、一本裏書、吏部王記云、昔安部氏先祖、含勅伐新羅有功、大嘗會日、報命、故今同〇同一本作因奏此舞、〇吉志舞故相傳、爲大嘗會之舞云々、

〔古事記傳二十二〕此氏〇阿倍の先祖に新羅を伐しめ賜しは、天智紀に、前將軍後將軍等五人を遣はして百濟を救しむ、阿倍引田比邏夫臣其一人なり、又二年三月、前將軍中將軍後將軍六人を遣し、二萬七千人を率て新羅を伐しむ、此時も彼比邏夫臣後將軍の一人なり、これらの時なるべし、

〔日本書紀十四雄略〕七年、弟君之婦樟媛、國家情深、君臣義切、忠踰白日、節冠青松、惡斯謀叛、盜殺其夫、隱埋室內、乃與海部直赤尾、將百濟所獻手末才伎在大島、天皇聞弟君不在、遣日鷹吉士堅磐固安錢、堅磐此云柯陀之波使共復命、

〔日本書紀十七繼體〕二十三年三月、是月遣物部伊勢連父根、吉士老等、以津賜百濟王、二十四年十月、調吉士至自任那、奏言、毛野臣爲人傲狠、不閑治體、

〔日本書紀二十四皇極〕元年九月戊申、詔大臣曰、以津守連大海可使於高麗、以國勝吉士水鷄可使於百濟、水鷄此云俱比那以草壁吉士眞跡可使於新羅、以坂本吉士長兄可使於任那、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉四年五月壬戌、發遣大唐大使小山上吉士長丹、副使小乙上吉士駒、〇駒更名糸〇下略

〔日本書紀十四雄略〕七年、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以〇中略譯語卯安那等、遷居于上桃原、下桃原、

譯語

私部

眞神原三所、

〔釋日本紀 秘訓十七〕譯語卯安那(ヲサウノアンナ)

〔新撰姓氏錄 山城國皇別〕曰佐(ヲサ)〇曰原誤曰、今據一本改、紀朝臣同祖、武內宿禰之後也、欽明天皇御世〇此下恐有脫字率同族四人國民卅五人歸化、天皇矜其遠來、勅珍勳臣爲卅九人之譯、時人號曰譯氏、男諸石臣、次麻奈臣、是近江國野洲郡曰佐、山代國相樂郡山村曰佐、大和國添上郡曰佐等祖也、

〔新撰姓氏錄 大和國皇別〕曰佐　紀朝臣同祖、武內宿禰之後也、

〔新撰姓氏錄 河內國諸蕃百濟〕調曰佐　百濟國人、努理使主之後也、

上曰佐　百濟國人、久爾能古使主之後也、

〔新撰姓氏錄 河內國諸蕃漢〕下曰佐　漢高祖男、齊悼惠王肥之後也、

〔日本書紀 三十持統〕九年三月庚午、遣務廣貳文忌寸博勢、進廣參下譯語諸田等於多禰、求蠻所居、

〔日本書紀 二十敏達〕六年二月甲辰朔、詔置日祀部、私部、(キサイチ)

〔漢書 五十九張湯列傳〕延壽〇中略薨、子放嗣、鴻嘉中上欲遵武帝故事、與近臣游宴、放以公主子開敏得幸、放取皇后弟平恩侯許嘉女、上爲放供張、賜甲第、充以乘輿服飾、號爲天子取婦皇后嫁女、大官私官並供其第、服虔曰、私官皇后之官也、

〔後漢書 二十七百官〕中宮私府令一人、六百石、本注曰、宦者、主中藏幣帛諸物、裁衣被、補浣者皆主之、

〔播磨風土記 印南郡〕含藝里本名瓶落土中上、所以號瓶落者、難波高津御宮〇仁德御世、私部弓取等遠祖、他田熊千、瓶酒着於馬尻、求行家地、其瓶落於此村、故曰瓶落、

〔播磨風土記 飾磨郡〕少川里〇註略土中々本名私里右號私里者、嶋宮御宇天皇世、私部弓束等祖田久利君鼻留志貴、請此處而居之、故號私里、

〔古事記下仁德〕此天皇之御世、○中略爲太子伊邪本和氣命之御名代、定壬生部、

〔古事記傳三十五〕壬生部、壬生は書紀皇極卷に、乳部此云美文とあるに依て、美夫と訓べし、○註略さて美夫辨は御產部にて、字を書く生坐る時の御產殿に仕奉る諸部を云、

〔拾芥抄宮城中末〕門號起事取佳名云々

美福門壬生氏造之

〔日本書紀推古二十二〕十五年二月庚辰朔、定壬生部、

〔日本書紀皇極二十四〕元年、是歲蘇我大臣蝦夷、○中略悉聚上宮乳部之民、乳部、此云美文、役使塋兆所、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、甲子、是日肇進奠、卽誄之、第一大海宿禰蔦蒲、誄壬生事、

〔新撰姓氏錄河內國皇別〕壬生臣　大宅○宅下恐脫臣字同祖○天足彥國押人命之後

〔日本書紀神代二〕一云、○中略彥火火出見尊、取婦人爲乳母、湯母、及飯嚼、湯坐、凡諸部備行以奉養焉、于時權用他婦、以乳養皇子焉、此世取乳母養兒之緣也、

〔釋日本紀八述義〕湯坐

私記曰、問、此何物哉、答、師說、坐或作人、是謂湯之人也、

〔古事記傳二十四〕右の神代卷に、湯母と湯坐とあるは、湯母は、兒に湯を飲しむる婦なるべし、飯嚼は、飯を嚼て、兒に食しむる者なるべければ、湯を飲しむる者もあるべきなり、

〔日本書紀通證七〕倭名鈔曰、唐式皇子乳母、皇孫乳母、和名米乃止、辨色立成云、嬭母、和名知於毛、按卽乳母也、今按、神武紀母樹、萬葉集母山、皆訓於毛、兒思之也、今朝鮮語亦云於母、又與阿母通、阿母見史倉公傳、註乳母也、萬葉集下野國防人歌、阿母志志、又阿母刀自同云、綠兒之、爲杜乳母者、求云、乳飮哉、君之於毛求覽、

〔古事記中垂仁〕天皇命詔其后言、凡子名必母名、何稱是子之御名、爾答白、今當火燒稻城之時、而火中所生、故其御名宜稱本牟智和氣御子、又命詔何爲日足奉、答白、取御母、定大湯坐若湯坐、宜日足奉、故隨其后白、以日足奉也、

〔古事記傳二十四〕大湯坐、若湯坐、湯坐は由惠と訓、ゆざと訓はひがことなり、〇中略湯坐は兒に湯を浴する婦と聞えたり、〇中略註其にとりて惠と云義も、坐字を書る由もいかならむ、未思得ず、若くは由須惠なるを、由須を切て由なれば、由惠と云か、若然らば兒を湯中に坐る由にて、然云にや、なほさだかならず、大若は、大小と云むが如し、

〔古事記中垂仁〕於是天皇因其御子、定鳥取部、鳥甘部、品遲部、大湯坐、若湯坐、

〔古事記傳二十五〕大湯坐若湯坐、此も上に既に出、傳廿四の五十六葉但し上なるは、此御子を治養奉れる時の役人を云、此なるは、其に因て又別に其名を負せて、部を定められたりと見ゆ、又書紀雄略卷に、湯人廬城部連武人、湯人此云臾衞とあるは、當時に此役を仕奉し人と聞ゆ、又孝德卷に湯部とある十五丁も、由惠と訓べく、此は此部を云りと聞えたり、又姓にも負り、

〔新撰姓氏錄右京神別下天孫〕丹比宿禰

火明命三世孫、天忍男命之後也、男武額赤命七世孫、御殿宿禰男色鳴、大鷦鷯天皇〇仁德御世、皇子瑞齒別尊〇反正誕生淡路宮之時、淡路瑞井水奉灌御湯、于時虎杖花、飛入御湯瓮中、色鳴宿禰、稱天神壽詞、奉號曰多治比瑞齒別命、乃定多治比、〇比字原无、據一本補、部於諸國、爲皇子湯沐邑、卽以色鳴爲宰、令領丹比部戸、因號丹比連、遂爲氏姓、其後庚午年、依作新家、加新家二字、爲丹比新家連也、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月甲申、越大山至伊勢鈴鹿、爰〇中略湯沐令田中臣足麻呂、高田首新家等、參遇于鈴鹿郡、

〔新撰姓氏錄左京神別上天神〕若湯坐宿禰　石上同祖〇神饒日命後也

〔日本書紀二十九天武〕十三年十二月己卯、大湯人連、若湯人連、〇中略賜姓曰宿禰、

湯人

〔日本書紀 孝德二十五〕大化二年三月辛巳、詔東國朝集使等曰、〇中略今問朝集使及諸國造等、國司至任、奉所誨不、於是朝集使等具陳其狀、〇中略其阿曇連闕名所犯者、德史有所患、時於國造使送官物、復取湯部之馬、

〔日本書紀 雄略十四〕三年四月、阿閉臣國見更名磯特牛譖栲幡皇女與湯人(エヱ)廬城部連武彥曰、武彥汙皇女而使任身、湯人此云臾衞

掃部

〔古語拾遺〕天祖彥火尊娉海神之女豐玉姬命生彥瀲尊、誕育之日、海濱立室、于時掃守連遠祖天忍人命、供奉陪侍、作箒掃蟹、仍掌鋪設、遂以爲職、號曰蟹守(カニモリ)、今俗謂之掃守(カモン)者、彼詞之轉也、

〔古事記傳 十七〕和名抄に、掃部寮、加牟毛理乃豆加佐とあり、加牟毛理てふ官名は、信に蟹守なるべし、和泉國和泉郡の鄕名の掃守は、加爾毛利とあり、さて姓氏錄に、掃守連、振魂命四世孫、天忍人命之後也、雄略天皇御代監掃除事、賜姓掃守連とあるは異なる傳なり、

〔新撰姓氏錄 和泉國神別天神〕掃部首〇首一本作連　振魂命四世孫、天忍人命之後也、雄略天皇御代監掃除事、賜姓掃守連、

〔新撰姓氏錄 左京神別中天神〕掃守連　振魂命四世孫、天忍人命之後也、

〔新撰姓氏錄 河內國神別天神〕掃守宿禰　振魂命之後也

掃守連　同神四世孫、天忍人命之後也、

掃守造　同神四世孫、天忍人命之後也、

〔新撰姓氏錄 大和國神別天神〕掃守　振魂命四世孫、天忍人命之後也、

〔新撰姓氏錄 河內國神別天神〕守部連　振魂命之後也

部曲　品部　民部　家部

〔日本書紀 垂仁六〕三十九年十月、一云、五十瓊敷皇子居于茅渟菟砥河上、而喚鍛名河上、作大刀一千口、是時楯部(タテヌヒ)、倭文部(シトリ)、神弓削部(カンユケ)、神矢作部(カンヤハキ)、大穴磯部(オホアナシ)、泊橿部(ハツカシ)、玉作部(タマスリ)、神刑部(カンオサカヘ)、日置部(ヘキ)、大刀佩部(タチハキ)、幷十箇品部(トモノヽヤツコ)、

賜五十瓊皇子、

〔日本書紀通證垂仁十一〕品部（トモノミヤツコ）與伴造訓義同

〔日本書紀雄略十四〕九年五月、釆女大海從小弓宿禰喪到來日本、遂憂諮於大伴室屋大連曰、妾不知葬所、願占良地、大連即爲奏之、天皇勅大連曰、大將軍紀小弓宿禰龍驤虎視、旁眺八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀矜、充視喪者、又汝大伴卿與紀卿等同國近隣之人由來尚矣、於是大連奉勅使土師連小鳥、作冢墓於田身輪邑而葬之也、由是大海欣悅不能自默、以韓奴（カラヤツコ）室、兄麿、弟麿、御倉、小倉、針六口、送大連、吉備上道蚊島田邑家人（ヤケヒト）部是也、

〔日本書紀雄略十四〕十七年三月戊寅、土師連祖吾笥、仍進攝津國來狹狹村、山背國內村、俯見村、伊勢國藤形村、及丹波、但馬、因幡私民部（ワタクシノカキベ）、名曰贄土師部、

〔日本書紀通證雄略十九〕民部（カキベ）下文訓同、蓋以民人爲藩籬也、唐代沿革曰、東晉而下有民部、版部、皆戶部人曹、

〔日本書紀雄略十四〕二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、○中略遺詔於大伴室屋大連與東漢掬直曰、○中略今星川王、心懷悖惡、行闕友于、○中略此雖朕家事、理不容隱、大連等、民部（カキベ）廣大、充盈於國、皇太子地居上嗣、仁孝著聞、以其行業、堪成朕志、以此共治天下、○下略

〔日本書紀安閑十八〕元年閏十二月壬午、大河內直味張恐畏永悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百姓、罪當萬死、伏願每郡以钁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絕、藉此祈生、永爲鑒戒、別以狹井田六町賂大伴大連、蓋三嶋竹村屯倉者、以河內縣部曲（ウヂヤツコ）、爲田部之元、於是乎起、

〔日本書紀通證安閑二十三〕部曲（ウヂヤツコ）釋曰、氏奴也、孝德紀、部曲之民、魏志、時郡內李朔等、各擁部曲害于平民、晉書、本瀆徒部曲百餘家、吏學指南曰、此等幼無所歸、投身衣飯、其主以奴畜之、別無戶籍、唯隨本主籍貫、若此之類、名爲部曲、

〔倭訓栞中編三上〕うぢやつこ　日本紀に部曲をよめり、氏奴の義也、又かきのたみともよめり、

〔姓序考〕部曲

部曲は、既云しごとく、各氏の下に在りて、其職業をなせるものを云り、部は其伴を云ひ、曲は章也といへる意のごとく、其伴のあらはるゝものを云號なり、故部曲をば、止毛倍、又は牟禮と訓べし、止毛倍は伴部の意、牟禮は群の義也、すべてもの丶多く集へるを牟禮、牟良などいへるは古言也、群居、打集、群鳥、村山、家群などいふにて知るべし、

〔唐律疏議 名例六〕諸官戸部曲 稱部曲者、部曲妻及客女亦同、○中略

疏議曰、官戸、隷屬司農、州縣元無戸貫、部曲、謂私家所有、

〔日本書紀 皇極二十四〕元年、是歳蘇我大臣蝦蛦、○中略又盡發擧國之民、幷百八十部曲、預造雙墓今來、一曰大陵、爲大臣墓、一曰小陵、爲入鹿臣墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上宮乳部之民、乳部、此云美父、役使塋兆所、於是上宮大娘姫王、發憤而歎曰、蘇我臣專擅國政、多行無禮、天無二日、國無二王、何由任意、悉役封民、自茲結恨、遂取俱亡、

〔倭訓栞 前編六上〕かきのたみ　日本紀に部曲をよめり、民部をかきべとよめる意、藩屏となるをいふなり、

〔日本書紀 孝德二十五〕大化元年九月甲申、遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、每天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等伴造國造、各置己民、恣情駈使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼幷數萬頃田、或者全無容針少地、及進調賦時、其臣連伴造等、先自收斂、然後分進、修治宮殿、築造園陵、各率己民、隨事而作、易曰、損上益下、節以制度、不傷財害民、方今百姓猶乏、而有勢者、分割水陸以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後、不得賣地、勿妄作主、兼幷劣弱、百姓大悅、　二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處々田莊、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛賜官人百姓、有差、又曰、大夫所使治民也、能盡其治、則民賴之、故重其祿、所以爲民也、　八月癸酉、詔曰、原夫天地陰陽、不使四時相亂、惟此天地生

乎萬物、萬物之內、人是最靈、最靈之間、望爲人主、是以聖主天皇、則天御寓、思人獲所、暫不發胸、而始王之名名臣連伴造國造、分其品部、別彼名名、復以其民品部交雜、使居國縣、遂使父子易姓、兄弟異宗、夫婦更互殊名、一家五分六割、由是爭競之訟、盈國充朝、終不見治、相亂彌盛、粤以始於今之御寓天皇、及臣連等、所有品部、宜悉皆罷爲國家民、其假借王名爲伴造、其襲據祖名爲臣連、斯等深不悟情、忽聞若是所宣、當思祖名所借滅、由是預宣、使聽知朕所懷、王者之兒、相續御寓、信知時帝與祖皇名、不可見忘於世、而以王名輕掛川野、呼名百姓、誠可畏焉、凡王者之號、將隨日月遠流、祖子之名、可共天地長往、如是思故宣之、始於祖子、奉仕卿大夫臣連伴造、氏氏人等、（或本云、名名王民、）咸可聽聞、今以汝等使仕狀者、改去舊職、新設百官、及著位階、以官位敍、今發遣國司幷彼國造可以奉聞、去年付於朝集之政者、隨前處分以收數田、均給於民、勿生彼我、

〔日本書紀二十七天智〕三年二月丁亥、天皇命大皇弟、宣增換冠、倍位階名、及氏上民部家部等事、〇中略其大氏之氏上賜大刀、小氏之氏上賜小刀、其伴造等之氏上賜干楯弓矢、亦定其民部家部、

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月丁未、先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀨於對馬嶋、冶成黃金、至是詔、〇中略獲金人家部宮道授正八位上、幷賜絁綿布鍬、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年六月丁酉、丹波國人家部人足、以私物資養飢民五十七人、賜爵二級、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年六月壬戌、備前國〇中略赤阪郡人外少初位上家部大水、美作國勝田郡人從八位上家部國持等六人石野連、　癸亥、美作備前兩國家部、母等理部二氏人等、盡賜姓石野連、

〔日本書紀二十九天武〕四年二月己丑、詔曰、甲子年、〇天智三年諸氏被給部曲者、自今以後除之、

○

御名代
御子代

〔古事記中垂仁〕次伊登志和氣王者、因無子而爲子代定伊登志部、〇原無登志二字、據古事記傳說補、

〔古事記傳二十四〕子代は、美古斯呂と訓べし、列木宮段に、此天皇无太子、故爲御子代定小長谷部と見ゆ、此は天皇又后皇子等など御子坐ざれば、其御名を後世まで遺さむ爲に、其御名を負せて、某部と云物を立置るゝなり、故又御名代とも云なり、書紀景行卷に、欲錄功名、卽定武部、此は日本武尊の御爲なり、安閑卷に、天皇勅大伴大連金村曰、朕納四妻、至今無嗣、萬歲之後、朕名絕矣、毎念於茲、憂慮何已、大伴大連金村奏曰、亦臣所憂也、夫我國家之王天下者、不論有嗣無嗣、要須因物爲名、請爲皇后次妃、建屯倉之地、使留後代、令顯前迹、詔曰、可矣、宜早安置云々、孝德卷、大化元年詔に、自古以降、毎天皇時、置標代民、垂名於後云々、同卷に、子代離宮と云も見えて、或本云、壞難波狹屋部邑、子代屯倉而起行宮とあるは、地名なり、同二年春正月朔、宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民云々、同年三月云々、昔在天皇日、所置子代云々などありて、此孝德天皇の御世に、皆罷られにき、凡て彼御世より、萬の御制、漢國ぶりにならひ賜ひて、古樣の事はみな廢れたり、なほ高津宮段なる、御名代の下傳三十五の十葉に、委云る考合すべし、

〔古事記中垂仁〕今當火燒稻城之時、而火中所生、故其御名、宜稱本牟智和氣御子、〇中略故其御子、令拜其大神宮、將遣之時、〇中略出行之時、毎到坐地、定品遲部也、〇日本書紀作譽津部、

〔日本書紀景行七〕四十年、日本武尊、〇中略既而崩于能褒野、時年三十、〇中略因欲錄功名、卽定武部也、是歲天皇、踐祚四十三年焉、

〔出雲風土記出雲郡〕健部鄕、郡家正東一十二里二百廿四步、先所以號宇夜里者、宇夜都弁命其山峰天降坐之、卽彼神之社、主〇主恐至誤今猶坐此處、故云宇夜里、而後改所以號健部之〇之恐者誤纏向檜代宮御宇天皇〇景行勅不忘朕御子倭健命之御名、健部定給、爾時神門臣古禰健部定給、卽健部臣等、自古至今、猶居此處、故云健部、

〔古事記下仁德〕此天皇之御世爲大后石之日賣命之御名代定葛城部、亦爲太子伊邪本和氣命之御名

代、定壬生部、亦爲水歯別命之御名代、定蝮部、亦爲大日下王之御名代、定大日下部、爲若日下部王之御名代、定若日下部、〇又見日本書紀

〔釋日本紀十二述義〕私記曰、師説、凡定御名代之部、或取御名、或取所居之地名乎、兼方案之、皇后葛城襲津彥之女也、故定葛城部、〇原本有錯簡、據一本改、

〔日本書紀十四雄略〕十四年四月甲午朔、根使主逃匿至於日根、造稻城而待戰、遂爲官軍見殺、天皇命有司、二分子孫、一分爲大草香部民、以封皇后、一分賜茅渟縣主、爲負囊者、

〔古事記下仁德〕故爲八田若郎女之御名代、定八田部也、

〔先代舊事本紀八神皇〕八十二年〇仁德二月乙巳朔、詔侍臣物部大別連公曰、皇后久經數年、不生皇子、以爾大別定皇子代、后號爲氏、以爲氏造、改賜矢田部連公姓、

〔古事記下履中〕此御世〇中略亦定伊波禮部也

〔古事記傳三十八〕伊波禮部は、大宮地の石村に依れる部なるべし、

〔古事記下允恭〕又爲木梨之輕太子御名代、定輕部、爲大后御名代、定刑部、爲大后之弟田井中比賣御名代、定河部也、

〔日本書紀十三允恭〕二年二月己酉、立忍坂大中姬爲皇后、是日爲皇后定刑部、十一年三月丙午、先是衣通郎姬居于藤原宮、時天皇詔大伴室屋連曰、朕頃得美麗孃子、是皇后母弟也、朕心異愛之、冀其名欲傳于後葉、奈何、室屋連依勅而奏、可、則科諸國造等、爲衣通郎姬定藤原部、

〔古事記下雄略〕故爲白髮太子之御名代、定白髮部、又定長谷部舍人、又定河瀨舍人也、

〔古事記傳四十一〕長谷部舍人は天皇の大御名代なり、姓氏錄に、長谷部造と云姓も見えたり、書紀武烈卷に、依天皇舊例、置小泊瀨舍人、使爲代號萬歲難忘、〔これも彼天皇の大御名代なり〕舍人の事は上に見ゆ、〔傳卅三の五十四葉〕河瀨舍人、書紀に、十一年夏五月、近江國栗太郡言、白鸕鷀居于谷上濱、因詔置川瀨舍

人とあり、此は世に、希見き事なりし故に、後世まで語傳へしめむために、一␣の舍人の號に負せて遺し賜へるなり、其に取ては、河瀨とのみにては、事違きがごと聞ゆれども、さるべき由ぞありけむ、師は川の魚を守る人を云と云れつれど、されては此に由なく、又舍人にも由なし、天武紀に、川瀨舍人造と云姓も見ゆ、姓氏錄に、川瀨と云姓もあり、舊事紀にも、川瀨造といふあり、

〔日本書紀 雄略十四〕十九年三月戊寅、詔置穴穗部、

○按ズルニ、皇兄安康天皇ノ爲ニ、此部ヲ置カレシモノ歟、

〔日本書紀 清寧十五〕二年二月、天皇恨無子、乃遣大伴室屋大連於諸國、置白髮部舍人、白髮部膳夫、白髮部靫負、冀垂遺跡、令觀於後、○又見古事記

〔日本書紀 繼體十七〕元年二月庚子、大伴大連奏請曰、臣聞、前王之宰世也、非維城之固、無以鎭其乾坤、非掖庭之親、無以繼其趺萼、是故白髮天皇無嗣、遣臣祖父大連室屋毎州安置三種白髮部、言三種者、一白髮部舍人、二白髮部供膳、三白髮部靫負、以留後世之名、

〔日本書紀 仁賢十五〕三年二月己巳朔、置石上部舍人、

〔日本書紀 武烈十六〕六年九月乙巳朔、詔曰、傳國之機、立子爲貴、朕無繼嗣、何以傳名、且依天皇舊例、置小泊瀨舍人、使爲代號萬歲難忘者也、○又見古事記

〔古事記 下 武烈〕此天皇无太子、故爲御子代定小長谷部也、

〔日本書紀 繼體十七〕八年正月、太子妃春日皇女、晨朝晏出、有異於常、太子意疑、入殿而見、妃臥床涕泣、惋痛不能自勝、太子恠問曰、今旦涕泣有何恨乎、妃曰、非餘事也、唯妾所悲者、飛天之鳥、爲愛養兒、樹巓作巣、其愛深矣、伏地之蟲、爲護衞子、土中作窟、其護厚焉、乃至於人、豈得無慮、無嗣之恨、方鍾太子、妾名隨絶、於是太子感痛、而奏天皇、詔曰、朕子麻呂古、汝妃之詞、深稱於理、安得空爾無答慰乎、宜賜匝布屯倉、表妃名於萬代、

〔日本書紀 安閑十八〕元年十月甲子、天皇勅大伴大連金村曰、朕納四妻、至今無嗣、萬歲之後、朕名絶矣、大伴

伯父今作何計、毎念於茲、憂慮何已、大伴大連金村奏曰、亦臣所憂也、夫我國家之王天下者、不論有嗣無嗣、要須因物爲名、請爲皇后次妃、建立屯倉之地、使留後代、令顯前迹、詔曰可矣、宜早安置、　二年四月丁丑朔、置勾舍人部、勾靫部、

〔播磨風土記 揖保郡〕越部里 舊名皇子代里 土中々、所以號皇子代者、勾宮天皇 閑○安 之世、寵人但馬君小津蒙寵賜姓、爲皇子代君、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化元年九月甲申、遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、毎天皇時、置標代民、垂名於後、○中略 方今百姓猶乏、而有勢者、分割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後、不得賣地、勿妄作主、兼幷劣弱、百姓大悅、　二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連、伴造、國造、村首、所有部曲之民、處處田莊、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛、賜官人百姓、有差、　三月壬午、皇太子使使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下而治、及逮于今、分離失業、謂國業也 屬天皇我皇可牧萬民之運、天人合應、厥政惟新、是故慶之尊之、頂戴伏奏、現爲明神御八島國天皇問於臣曰、其群臣連、及伴造國造所有、昔在天皇日所置子代入部、皇子等私有御名入部、皇祖大兄御名入部、謂彥人大兄也 及其屯倉、猶如古代而置以不、臣卽恭承所詔、奉答而曰、天無雙日、國無二王、是故兼幷天下、可使萬民、唯天皇耳、別以入部及所封民、簡充仕丁、從前處分、自餘以外、恐私駈役、故獻入部五百二十四口、屯倉一百八十一所、

〔古事記傳 三十五〕入部は、入は、御子たちの御名に入毘古、入毘賣と多くある、入と同くて、御こゝたしみうつくしみ給ふ意にて、伊呂母などの、伊呂、郎子の、伊良など皆同言なること、上に云るが如し、されば后又御子たちなどをうつくしみて定め賜ふ部と云意を以て、入部とは云なり、されば此類も、御名代なり、さて大かた名と云物は、貴きも賤きも、皆其人を美稱へたる方にて名を呼は、其人を敬ひ賞る意なり、然るを後世になりては、人名を呼を無禮として、諱憚ること、

なれるは、漢國の俗にならへるものなり、古の御世々々に御名代を定置れしは、右に引る書紀の巻々にも見えたる如く、其御名を物に因せて、後世に廣くのこし賜はむとての御所爲なるを、此孝德天皇の御世に、其御名を輕々しく呼ことを可畏しとして、是を罷られしは、漢意にして古の御意とは反なり、これらを以ても皇國と漢國と、よろづに心ばへの異なることをさとるべし、

古事類苑

官位部四

古代官職四

國造

君 別 縣主 稻置 村主 東國都督 筑紫大宰
國宰 任那宰 新羅宰 百濟宰 夷守 併入

國造ハ、伴造ニ對シテ、クニノミヤツコト訓ス、則チ地方ニ在リテ國郡ヲ治メ人民ヲ牧スル者ヲ云フ、神武天皇ノ中州ヲ平定シテ、肇メテ都ヲ橿原ニ建テ給フヤ、功臣ヲ封ジテ、國造縣主ト爲ス、國造縣主ノ號始テ此ニ見ユ、成務天皇ノ朝ニ、大ニ郡國ノ疆場ヲ正シ、大國小國ノ國造ヲ定メ、大縣小縣ノ縣主ヲ置キ、以テ中區ノ藩屛ト爲シタリ、國造本紀ニ當時ノ國造ヲ擧ゲテ、總テ百四十四ト云ヘリ、以テ其概數ヲ知ルベシ、其職掌ハ、土地ヲ領シ、人民ヲ治メ、神祇ヲ祭リ、田賦ヲ貢スルニ在リテ、子孫世襲スルモノニテ、其制、略封建ノ治ニ似タリ、故ニ大罪惡アルニ非レバ、廢黜セラルヽコトナシ、孝德天皇ノ大化改新ニ至リ、古代封建ノ治ヲ廢シテ、一ニ郡縣ノ制ニ革ムルヤ、先ヅ國司郡司ヲ置キ、國造ノ封職ヲ奪ヒ、更ニ國造中ヨリ選拔シテ郡領ト爲セリ、是ヨリ後國造ニシテ郡司ニ任ジ、神主又ハ兵衞ヲ帶シ、或ハ京官國守ヲ兼ヌルモノアリ、桓武天皇ノ延暦以後ニ至リテハ、國造ノ家漸クニ亡ビ、僅ニ出雲紀伊都下ノ如キ、二三ノ國造ヲ存スルニ過ギズ、

國造ノ外ニ、君、別、縣主、稻城、村主等ノ職號アリ、其領知ノ廣狹ハ、必ズシモ同ジカラズト雖モ、土地ヲ管シ貢職ヲ奉ズルコト、彼此率ネ異ナラズ、

古ニ東國都督ト云フモノアリ、尋常ノ國造ノ比ニアラズシテ、永世ノ制ニ非ズト雖モ、亦出

名稱

デヽ地方ヲ治ムルヲ以テ、今此ニ併載ス、筑紫大宰ハ、後世ノ謂ユル大宰府ニシテ、外蕃ノ朝貢ヲ主宰スル官司ナリ、新羅宰、百濟宰、任那宰等モ、是其國ヲ主宰スル官人ニシテ、謂ユル內官家ノ宰ナリ、今併セテ此ニ附載ス、

〔日本書紀三神武〕太歲甲寅、其年冬十月丁巳朔辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、○中略行至筑紫國菟狹、菟狹者地名也、此云宇佐、時有菟狹國造祖、號曰菟狹津彥菟狹津媛、

〔日本書紀通證八神武〕國造　今按、訓爲國宮司、蓋主社稷而書、秦漢官爵有上造、

〔日本書紀二十二推古〕十二年四月戊辰、皇太子○厩子親肇作憲法十七條、○中略十二曰、國司國造、勿斂百姓、

〔倭訓栞前編八〕くにのみやつこ　日本紀に國造をよめり、後世の國司の如し、其國の宮社を祭れば、みやつこの名ありといひ、またもと其地を開き造りたる意成べければ、くにづことよみて事足ぬともいへるは、ともに非るべし、日本紀に、諸の仕奉る人等を總擧るには、必ず臣連伴造國造と並べいへり、國造は、諸國にて其國を治るをいふ、今音をもて呼り、其絕ざるは、出雲にのみ遺れり、紀州日前、備中吉備津宮、因州宇都部○都恐誤宮なども同じ、

〔古事記傳七〕國造は、何れも久邇能美夜都古と訓べし、其由はまづ上代に諸仕奉人等を總擧るには、臣連伴造國造と並云り、書紀卷々に數しらずおほし又敏達卷に、臣連二造とも有て、二造者國造伴造也と註せり、さてその國造は、諸國にて其國の上として、各其國を治る人を云戸なり、○中略されば二の造同義にて、都領をも、許本乃美夜都許と訓り、此訓のこと、北山抄にも懸に記されたり、此も字は異なれども、同言同意なり、名義は御臣なり、稱德紀詔に貞久浄伎心乎以天朝廷乃御奴止奉仕之米天云々、また丈部姉女乎波內都奴止爲弖冠位擧給比などあるを以て、夜都古は臣の意なることを知るべし、推古紀には、國造をクニノヤツコとも訓り、夜都古といへば、甚賤き者の如く聞ゆれども、本然に非ず、君に對へて臣を云名なり、故君臣の意なる臣なれば、書紀などにも皆ヤツコと訓り、又官奴を美夜都古と云は別なり、其はもと私家の奴婢より起て、公の奴婢を云なり、されどその私家の奴婢も君臣の臣の意なれば、云もてゆけば本は一なり、又とのもりのとものの御奴など云も此なり、此等

名の本の意は一におつめれど、造は天皇に對へて臣の意なる故に、其部の上たる人を云、御奴とは、下に付者を云なれば、用ふる所に至りては甚異なり、さて國造を國宮司と云る意とする説は大誤なり、又師(賀茂眞淵)は、國造を久爾都許と訓て、其説に、國造は其國を草創し意にて、即造と云言なり、又たゞの造は、宮を造れる功に因れる尸なりと云れつれど、わろし、今考るに、書紀などに、多くは久爾能美夜都許と訓、又久爾都許と訓る所も稀にはあり、造字に就て思へば、此師説當れるには似たれども、造も宮を造れる功に負れることも未其證を見ず、孝德紀に、進調賦時、其臣連伴造國造等、先自收斂、然後分進、修治宮殿云々など云ることあれど、此は別事なり、さて若造作る意ならば、國造の例にて、美夜都古も宮造と書べきことなるに、然書ることなし、造字のみにては、宮を造ることには取がたし、そのうへ右に引る書紀に、國造伴造と並べ云、又これを二造ともあるを、一をばミヤツコ、一をばたゞヤツコと訓の變るべき由なきをや、されば天皇の御臣として、書紀推古卷に、國司國造云々、所任官司、皆是王臣、其國々を治る人を國御臣と云、各其部々を掌る人を伴御臣とは云なり、さて造字を書所由は未思得ず、漢國秦官に大良造大上造とも云と云あり、又北史に、新羅國官十七等の中の第十七を造位と云といへり、此等に由有て書始たるか、猶考ふべし、さて國造は、上代には職にて、卽加婆禰なりしを、やゝ後には、加婆禰は別に有て、其氏の中に國造あり、部民のころに至ては、其氏人の中にて、國造を任じたまふが常なり、然るに某國造と云姓を賜ひしことも、續紀卅三の二葉などに見えたり、又大寶二年には、諸國國造の氏を定めて、國造記に載られしことも、同書に見え、又陸奥國に、大國造國造と並べ任ぜられしことも、同廿八卷に見ゆ、さて國々に宰を置れて後、古國造は、世々傳て其國を治めたり、漢國の古の、封建の制と云も、此に似たり、然るに孝德天皇の御世より、彼國の郡縣の制と云なり、まれびて、京より國司をかはる〱に遣て、國々を治めしめ賜ふことに爲れり、其より前にも、宰と云者は有つれど、毎國に必定めて置れたるは、彼御代よりなり、國造は、國司の下に立て、多くは郡領などに任れり、さて漸々に衰ゆきて、後世には遂に國々の國造絶て、今世まで其名の殘れるは、出雲さては紀國などのみなり、

〔古史傳入〕造字を書く所由は、師は未思得ずと言つゝ、なほ書れし説も有れど、大國主神を國造大名牟遲神或は國作ともかけりとも稱して、此は國造り坐るよしの稱名なるを思ふに、國の上として、その國々を領たらむには、狹國は廣く、峻國は平けく、損はれし所は修理堅めなどもすべければ、彼國造云々の御名の例に準へて、國御臣にあてゝ、國造の字は書たるを始にて、伴美夜都古の美夜都古も、唱の同きまゝに、やがて此字を書ならへるなるべし、彼漢國の大眞造、また新羅國の造位などに依れるには有べからず、

〔職官志 一〕上古有國作大己貴、國作國造也、蓋自有生民、所在人材傑出、堪君長者、衆推戴之、以奉政令、號爲國造、因其造邦國也、始其號出於自然、所從來久矣、

〔白石遺文 上 史論〕孝德改新詔 收新之詔前後凡三、當通考已、
太古以來、歷世綿邈、文獻無徵、不可考信已、大抵上世之制、猶三代封建之時也、中世已降、亦猶漢初兼有封建郡縣之制也、迨及孝德世、天下盡變爲嬴秦郡縣之制矣、昔在上世、五方之國、各有君長、散在山海間、大小强弱、不能相統一、神武開國之初、封其有功、乃命爲國造者凡八、爲縣主者凡三、當是之時、王畿獨有中州之地、國造縣主頗受封於其中、其餘諸國、唯與之正始耳、崇神之世、始封皇子、鎭撫東方、後定男女調役、皇子分封、邦國貢賦、皆自此始、景行丕承基緖、以揚前烈、四征弗庭、大拓土宇、而帝八十餘子、受封者七十七人、更封宗室、爲東山十五道都督、犬牙相臨、統制天下、於是國亦有別焉、所謂別王是也、成務嗣德、始分天下國郡縣邑、各置官長、其爲國造者、凡九十又四、餘則不可詳考、蓋猶周有五等國、上足以奉貢職、下足以供祭祀、以藩輔京師、古事記云、天皇定大國小國之國造、大縣小縣之縣主、日本紀作令諸國國郡立造長、縣邑置稻置、國造縣邑所來尙矣、蓋成務所制國郡則有國造伴造、縣邑則有縣主稻置、爲與別通爲五等、魏志云、官曰多摸、副曰卑奴母離、多摸卽伴造也、卑奴母離卽夷守也、夷守見景行帝紀、北史云、官有軍尼一百二十人、猶中國牧宰、八十戶置一伊尼冀、如今里長也、十伊尼冀屬一軍尼、軍尼卽國造也、伊尼冀卽稻置也、據舊事紀、古者國造有一百二十餘人、北史所書頗與此合、稻置之制、我史不詳、北史所書最爲詳悉、所謂天子失官、學在四夷耳、伊尼冀之冀、或作翼者訛、

〔北史 九十四 倭國列傳〕倭國、○中略有軍尼一百二十人、猶中國牧宰、八十戶置一伊尼翼、如今里長也、十伊尼翼屬一軍尼、

〔大日本史 職官 一〕若夫所以治國郡牧人民者、封建之制、寔防於太祖、太祖已定中原、分封功臣、爲國造縣主、至成務朝、大有建置、定國郡造長、縣邑稻置、爲中區藩屛、賜楯矛以爲標識、於是乎封建之制益備、皆世官世職、自非有大罪惡、則無有廢黜也、日本書紀、古事記、舊事本紀、續日本紀、皆世官以下、參酌、仲哀應神以後、時有增置、凡國造之員、一百四十四、其在島者稱島造、舊事本紀至如崇神帝命豐城入彥命治東國、景行帝使彥狹島命都

督十五國、則皆以皇子皇孫受任、管轄甚大、非尋常國造之比、然亦非永世之制也、(日本書紀)

〔玉勝間六〕國造

いにしへに國造(クニノミヤツコ)といひしは、今の世のごと、大きにこそあらざりけめ、大かた何事も、大名の如くなる物にて、國々に多く有し也、それが中に、國造(クニノミヤツコ)、また君(キミ)、また別(ワケ)、又直(アタヘ)、又稲置(イナギ)、また縣主(アガタヌシ)などいふ色色の有て、尊き卑きけぢめも有つるを、そのけぢめは、さだかに記せる物なければ、いづれ尊く、何れ卑かりけむ、今ことごとくはわきまへがたけれど、大かたは皆國造と同じさまなる物にて、此色々を一つにすべても、國造といへりき、書紀などに、伴造(トモノミヤツコ)國造(クニノミヤツコ)などあるは、かの色々をすべて、一つに國造といへる也、さてもろこしの國にも、いにしへ封建の制とかいひし代の、諸侯といふ物これによく似たり、其諸侯に五等の爵とて、公侯伯子男と、五きざみのしな有し、それはた國造君別などの色々ありしににたり、其五しなの中の一つの名をとりて、すべて諸侯といひしも、又すべてをも國造といひしに似たり、もろこしの事は、かの國のまなびするともがらは、此諸侯の五しなの事など、たれもよくしれるを、皇國のいにしへのさまをば、かへりてよくしれる人なくて、國造の中にかのくさ〴〵のしな有しをもしらず、又かの色々は、いかなるさまの物なりしともしらであるはいかにぞや、

〔禮記三王制五〕王者之制、祿爵、公侯伯子男、凡五等、○中略天子之田方千里、公侯田方百里、伯七十里、子男五十里、不能五十里者不合於天子、附於諸侯曰附庸、

〔古史傳八〕國造、縣主、稲置などは、皆國々に在て、其處々を治むる氏人の職號の尸と爲れるなり、(臣、連、)(國造、伴造とすべ云ときは、縣主稲置のたぐひをば、國造中にこめたるべし、師も既く然云れき、)さて然國々に在て、其趣も似たる中にも、つらつら事狀を見通すに、色々に分れたる、其高下差別は(師は、今ことごとく委曲には辨へがたしと云れつれど、)大抵見えて、國造、縣主、稲置と順次べく所思たり、其由は、成務天皇紀四年大詔に、國郡立長、縣邑置首とあると、五年

縣置

九月の處に、令諸國立造長縣邑置稻置、とあるを合せて考るに、五年の處の文に、諸國立造長とあるは、四年大詔の國郡立長とあるを受たれば、此は古事記(同天皇の段)に、定賜大國小國之國造とあるに當りて、國とは、古事記に所謂大國を云ひ、郡とは、古事記に所謂小國にあたりて、國造を定賜へるなること著く、縣邑置稻置とあるは、四年大詔に、縣邑置首とあるを承たれば、此は古事記に、定賜大縣小縣之縣主と云に當りて、縣とは、古事記に所謂大縣を云、邑とは、古事記に所謂小縣を云るなり、

〔新撰姓氏錄序〕蓋聞、天孫降襲西化之時、神世伊開、書紀靡傳、神武臨夏、東征之年、人物漸滋、梟帥間起、洎乎神劒下授靈鳥于飛、歸首星陳、群凶霧散、膺受明命、光宅中州、泰階平齊、海內淸謐、旣而謹德考功、胙土命氏、國造縣主、始號於斯、

〔日本書紀 三神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、〇中略以珍彥爲倭國造、(珍彥此云于磐吡故)又給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、是菟田主水部遠祖也、弟磯城名黑速、爲磯城縣主、又以劒根者、爲葛城國造、

〔先代舊事本紀 十國造〕天孫天饒石國饒石天津彥火瓊瓊杵尊孫磐余尊、發自日向、赴向倭國、〇中略遂治平天下、旣而初都橿原、卽天皇位、勅褒其功能、寄賜國造、誅其拒逆者、亦定縣主、卽是其緣也、以椎根津彥命爲大倭國造、卽大和直祖、以劒根命爲葛城國造、卽葛城直祖、以彥己蘇根命爲凡河內國造、卽凡河內忌寸祖、以天目一命爲山代國造、卽山代直祖、以天日鷲命爲伊勢國造、卽伊賀伊勢國造祖、以天道根命爲紀伊國造、卽紀河瀨直祖、誅宇陀縣主兄猾、以弟猾爲建栯縣主、誅志貴縣主兄磯城、以弟磯城爲志貴縣主、凡厥簡遣三臣、巡察治否、則有功者、隨其勇能、定賜國造、誅戮逆者、量其功能、定賜縣主者矣、總任國造百四十四國、

〔格物餘話〕舊事記第十卷曰、總任國造百四十四國、篤信竊謂、古昔日本有一百四十四國、而以壤地褊小故、漸々幷隷減之、然其大者、復逐世而割分者、亦往々有之、至嵯峨帝、割越前置加賀、而後爲六

十六州、此後無分割之事、

〔國造本紀考一〕百四十四國、下文に載する所百三十四國にて、十國闕たるが如くなれど、四十は舊印本卌に作りたれば、卌は卅の誤なりと黑河氏春村いへり、實にさる事なるべし、そが中に、又和泉、攝津、山背、山城と同じ胸刺、无邪志と同じ出羽、丹後、美作、多褹島の八國などは、本書の書法と異なるもあり、また重複なれる雜糅たるもあるを、今は除く、總算ふるに百二十六國なり、

〔古事記傳二十九〕諸國の總ての數は、古に幾許とも云ること物に見えず、舊事紀の國造本紀に擧たる國々なども、なほ漏たるも多かるべければ、據としがたし、これも孝德天皇の御世には、僃に定まりつらむ、

〔先代舊事本紀十國造〕大倭國造　橿原朝神武御世、以椎根津彥命初爲大倭國造、

葛城國造　橿原朝御世、以劒根命初爲葛城國造、

凡河內國造　橿原朝御世、以彥己曾保理命爲凡河內國造、○中略

山城國造　橿原朝御世、阿多根命爲山代國造、○中略

伊勢國造　橿原朝、以天降天牟久怒命孫天日鷲命勅定賜國造、○中略

素賀國造　橿原朝世、始定天下、時從侍來人名美志印命定賜國造、○中略

紀伊國造　橿原朝御世、神皇產靈命五世孫天道根命定賜國造、○中略

宇佐國造　橿原朝、高魂尊孫宇佐都彥命定賜國造、○中略

津島縣直　橿原朝、高魂尊五世孫建彌己己命改爲直、

〔先代舊事本紀十國造〕三野前國造　春日率川朝開化皇子彥坐王子八爪命定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕知知夫國造　瑞籬朝崇神御世、八意思金命十世孫知知夫彥命定賜國造、拜祠大神、○中略

科野國造　瑞籬朝御世、神八井耳命孫建五百建命定賜國造、○中略

久比岐國造　瑞籬朝御世、大和直同祖、御戈命定賜國造、

高志深江國造　瑞籬朝御世、道君同祖、素都乃奈美留命定賜國造、○中略

出雲國造　瑞籬朝、以天穂日命十一世孫宇迦都久怒定賜國造、

〔菅家御傳記〕天夷鳥命十二世孫鸕濡渟(ウカヅクヌノ)命、飯入根命子磯城瑞籬宮御宇崇神天皇御世、勅定出雲國造、

〔先代舊事本紀十國造〕石見國造　瑞籬朝御世、紀伊國造同祖、蔭佐奈朝命兒大屋古命定賜國造、○中略

吉備中縣國造　瑞籬朝御世、神魂命十世孫明石彦定賜國造、○中略

波久岐國造　瑞籬朝、阿岐國造同祖、金波佐彦孫豐玉根命定賜國造、○中略

波多國造　瑞籬朝御世、天韓襲命依神教云定賜國造、○中略

火國造　瑞籬朝、大分國造同祖、志貴多奈彦命兒遲男江命定賜國造、○中略

阿蘇國造　瑞籬朝御世、火國造同祖、神八井耳命孫速瓶玉命定賜國造、

〔古事記中景行〕凡此大帶日子天皇○景行之御子等、所錄廿一王、不入記五十九王、幷八十王之中、若帶日子命與倭建命、亦五百木之入日子命、此三王負太子之名、自其餘七十七王者、悉別賜國國之國造、亦和氣、及稻置、縣主也、

〔先代舊事本紀十國造〕甲斐國造　纏向日代朝○景行世、狹穂彦王三世孫臣知津彦公、此子鹽海足尼定國造、○中略

上毛野國造　瑞籬朝皇子豐城入彦命孫彦狹島命初治平東方、十二國爲封、○中略

須羽國造　纏向日代朝御代、建沼河命孫大臣命定賜國造、○中略

吉備穴國造　纏向日代朝御世、和邇臣同祖、彦訓服命孫八千足尼定賜國造、○中略

穴門國造　纏向日代朝御世、櫻井田部連同祖、邇岐都美命四世孫速都鳥命定賜國造、

阿武國造　纏向日代朝御世、神魂命十世孫味波波命定賜國造、○中略

葦分國造　纏向日代朝御代、吉備津彥命兒三井根子命定賜國造、○中略

薩摩國造　纏向日代朝御代、伐薩摩隼人等鎭之、仁德朝代、日佐改爲直、

〔古事記中成務〕定賜大國小國之國造、亦定賜國國之堺、及大縣小縣之縣主也、

〔日本書紀七成務〕四年二月丙寅朔、詔之曰、我先皇大足彥天皇、聰明神武、膺籙受圖、治天順人、撥賊反正、德侔覆燾、道協造化、是以普天率土、莫不王臣、稟氣懷靈、何非得處、今朕嗣踐寶祚、夙夜兢惕、然黎元蠢爾、不悛野心、是國郡無君長、縣邑無首渠者焉、自今以後、國郡立長、縣邑置首、卽取當國之幹了者、任其國郡之首長、是爲中區之蕃屛也、　五年九月、令諸國、以國郡立造長、縣邑置稻置、並賜楯矛以爲表、

〔職原抄下〕諸國

第十三代成務天皇四年、始定國造、同六年、始分國境、國造乃國司之名、後改云守也、

〔古事記傳二十九〕書紀に、四年春二月、詔之曰云々、自今以後、國郡立長、縣邑置首、○中略とあるは、文をひたぶるに漢ざまに書なされたる故に、國造縣主など云名は見えざれども、實は此記の如く、國造縣主の類を定め賜へる謂なり、右の文中に、造長とある造と稻置とのみは、古の號にして、其他は皆、たゞ意を得て、漢文ざまに書れたるものにて、國郡縣邑などあるも皆漢文なり、古の實の名には非ず、たゞ意を取て、文には拘るまじきなり、並賜楯矛以爲表と云ことは、古の傳なるべし、舊事紀なる國造本紀と云物に、國々の國造を擧たるにも、多く此御世に定賜へる事を云り、此國造本紀、全くは信がたき事もあれども、ひたぶるに由なき事とは見えず、據はありけむかし、○中略さて國造と云物を、此時初めて定賜ふには非ず、是より前にも有つれども、此時に更に廣く多く定賜へりしなるべし、さて國造とのみ云て、是に其同類の、君、直、別、稻置などをも包たり、凡て伴造國造など云るも、國造に此等を包て云るなり、皆國々にある御臣なればなり、かくて其國造等國造、君、直、別、稻置等、の古のさまは、傳七卷の末に云るが如し、然れば纏ては、これを國造と云、分て云ときは、國造、君、直、別、稻置などなり、是漢國の古に諸侯を公侯伯子男と、五等に定めたると、おのづからよく似たり、然るを後世人は、たゞ國造をのみ、漢國の諸侯と似たる者と心得て、其餘はたゞ姓の尸とのみ思ふめるは、精しからず、古に昧きなり、さて國造、直、別、君、稻寸など、尊卑き差等ありつと見ゆれども、其次序は、今詳に知がたきを、國造は其中には、最上なり、

しとは見えたり、又必しも右の五品に局れるにも非ず、其外にもなほ國々に、此彼と長の號はありしなり、

〔先代舊事本紀十國造〕山背國造　志賀高穴穗朝〇成務御世、以曾能振命定賜國造、

伊賀國造　志賀高穴穗朝御世、皇子意知別命三世孫武伊賀都別命定賜國造、難波朝御世隸伊勢國、飛鳥朝代、割置如故、〇中略

島津國造　志賀高穴穗朝、出雲臣祖、佐比禰足尼孫出雲笠夜命定賜國造、

尾張國造　志賀高穴穗朝、以天別天火明命十世孫小止與命定賜國造、

參河國造　志賀高穴穗朝、以物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命定賜國造、〇中略

遠淡海國造　志賀高穴穗朝、以物部連祖伊香色雄命兒印岐美命定賜國造、〇中略

珠流河國造　志賀高穴穗朝世、以物部連祖大新川命兒片堅石命定賜國造、

廬原國造　志賀高穴穗朝代、以池田坂井君祖吉備武彥命兒意加部彥命定賜國造、〇中略

相武國造　志賀高穴穗朝、武刺國造祖神伊勢都彥命三世孫弟武彥命定賜國造、

師長國造　志賀高穴穗朝御世、茨城國造祖建許呂命兒意富鷲意彌命定賜國造、

无邪志國造　志賀高穴穗朝世、出雲臣祖名二井之宇迦諸忍之神狹命十世孫兄多毛比命定賜國造、〇中略

須惠國造　志賀高穴穗朝、茨城國造祖建許侶命兒大布日意彌命定賜國造、

馬來田國造　志賀高穴穗朝御世、茨城國造祖建許呂命兒深河意彌命定賜國造、

上海上國造　志賀高穴穗朝、天穗日命八世孫忍立化多比命定賜國造、

伊甚國造　志賀高穴穗朝御世、安房國造祖伊許保止命孫伊己侶止直定賜國造、

武社國造　志賀高穴穗朝、和邇臣祖彥意祁都命孫彥忍人命定賜國造、

菊麻國造　志賀高穴穗朝御代、无邪志國造祖兄多毛比命兒大鹿國直定賜國造、

阿波國造　志賀高穴穗朝御世、天穗日命八世孫彌都侶岐命孫大伴直大瀧定賜國造、〇中略

新治國造　志賀高穴穗朝御世、美都呂岐命兒比奈羅布命定賜國造、

筑波國造　志賀高穴穗朝、以忍凝見命孫阿閉色命定賜國造、〇中略

仲國造　志賀高穴穗朝御世、伊豫國造同祖、建借馬命定賜國造、

久自國造　志賀高穴穗朝御代、物部連祖伊香色雄命三世孫船瀬足尼定賜國造、

高國造　志賀高穴穗朝御世、彌都侶岐命孫彌佐比命定賜國造、

淡海國造　志賀高穴穗朝御世、彥坐王三世孫大陀牟夜別定賜國造、

額田國造　志賀高穴穗朝御世、和邇臣祖彥訓服命孫大直侶宇命定賜國造、〇中略

三野後國造　志賀高穴穗朝御代、物部連祖出雲大臣命孫臣賀夫良命定賜國造、

斐陀國造　志賀高穴穗朝御世、尾張連祖瀛津世襲命〇此下恐脫孫字大八埼命定賜國造、〇中略

阿尺國造　志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖、天湯津彥命十世孫比止禰命定賜國造、

思國造　志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖、十世孫志久麻彥定賜國造、

伊久國造　志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖、十世孫豐島命定賜國造、

染羽國造　志賀高穴穗朝御世、阿岐國造祖、十世孫足彥命定賜國造、

浮田國造　志賀高穴穗朝、瑞籬朝五世孫賀我別王定賜國造、

信夫國造　志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖、久志伊麻命孫久麻直定賜國造、

白河國造　志賀高穴穗朝御世、天降天由都彥命十一世鹽伊乃己自直定賜國造、

石背國造　志賀高穴穗朝御世、以建許侶命兒建彌依米命定賜國造、

石城國造　志賀高穴穗朝御世、以建許呂命定賜國造、〇中略

高志國造　志賀高穴穗朝御世、阿閉臣祖屋主田心命三世孫市入命定賜國造、

三國國造　志賀高穴穗朝御世、宗我臣祖、彥太忍信命四世孫若長足尼定賜國造、

角鹿國造　志賀高穴穗朝御代、吉備臣祖、若武彥命孫建功狹日命定賜國造、○中略

能等國造　志賀高穴穗朝御世、活目帝皇子大入來命孫彥狹島命定賜國造、○中略

伊彌頭國造　志賀高穴穗朝御世、宗我同祖、建內足尼孫大河音足尼定賜國造、○中略

佐渡國造　志賀高穴穗朝、阿岐國造同祖、久志伊麻命四世孫大荒木直定賜國造、

丹波國造　志賀高穴穗朝御世、尾張同祖、建稻種命四世孫大倉岐命定賜國造、○中略

但遲麻國造　志賀高穴穗朝御世、竹野君同祖、彥坐王五世孫船穗足尼定賜國造、

二方國造　志賀高穴穗朝御世、出雲國造同祖、遷狛一奴命孫美尼布命定賜國造、

稻葉國造　志賀高穴穗朝御世、彥坐王兒彥多都彥命定賜國造、

伯岐國造　志賀高穴穗朝、御世、牟邪志國造同祖、兄多毛比命兒大八木足尼定賜國造、○中略

針間國造　志賀高穴穗朝、稻背入彥命孫伊許自別命定賜國造、

針間鴨國造　志賀高穴穗御世、上毛野同祖、御穗別命兒市入別命定賜國造、○中略

吉備品治國造　志賀高穴穗朝、多遲麻君同祖、若角城命三世孫大船足尼定賜國造、

阿岐國造　志賀高穴穗朝、天湯津彥命五世孫飽速玉命定賜國造、

大島國造　志賀高穴穗朝、无邪志國造同祖、兄多毛比命兒穴倭古命定賜國造、○中略

熊野國造　志賀高穴穗朝御世、饒速日命五世孫大阿斗足尼定賜國造、○中略

長國造　志賀高穴穗朝御世、觀松彥色止命九世孫韓背足尼定賜國造、○中略

伊余國造　志賀高穴穗朝御世、印旛國造同祖、敷桁彥命兒速後上命定賜國造、○中略

都佐國造　志賀高穴穗朝御代、長阿比古同祖、三島溝杭命九世孫小立足尼定賜國造、

筑志國造　志賀高穴穗朝御世、阿倍臣同祖、大彥命五世孫田道命定賜國造、

竺志末多國造　志賀高穴穗朝、息長公同祖、稚沼毛二股命孫都紀女加定賜國造、

豐國造　志賀高穴穗朝御代、伊甚國造同祖、宇那足尼定賜國造、〇中略

國前國造　志賀高穴穗朝、吉備臣同祖、吉備都命六世午佐自命定賜國造、

比多國造　志賀高穴穗朝御世、葛城國造同祖、止波足尼定賜國造、〇中略

末羅國造　志賀高穴穗朝御世、穗積臣同祖、大水口足尼孫矢田稻吉定賜國造、〇中略

天草國造　志賀高穴穗朝御世、神魂命十三世孫建島松命定賜國造、〇中略

葛津立國造　志賀高穴穗朝御世、紀直同祖、大名草彥命兒若彥命定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕久努國造　筑紫香椎朝〇仲哀代、以物部連祖、伊香色男命孫印播足尼定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕伊豆國造　神功皇后御代、物部連祖、天蕤杵命八世孫若建命定賜國造、難波朝御世隸駿河國、飛鳥朝御世分置如故、〇中略

怒麻國造　神功皇后御代、阿岐國造同祖、飽速玉命三世孫若彌尾命定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕印波國造　輕島豐明朝〇應神御代、神八井耳命八世孫伊都許利命定賜國造、

下海上國造　輕島豐明朝御世、上海上國造祖、孫久都伎直定賜國造、〇中略

茨城國造　輕島豐明朝御世、天津彥根命孫筑紫刀禰定賜國造、〇中略

道奧菊多國造　輕島豐明御代、以建許呂命兒屋主乃〇乃恐刀誤、下同、禰定賜國造、

道口岐閇國造　輕島豐明御世、建許呂命兒宇佐比乃禰定賜國造、〇中略

意岐國造　輕島豐明朝御代、觀松彥伊呂止命五世孫十挨彥命定賜國造、〇中略

明石國造　輕島豐明朝御世、大倭直同祖、八代足尼兒都彌自足尼定賜國造、〇中略

大伯國造　輕島豐明朝御世、神魂命七世孫佐紀足尼定賜國造、

上道國造　輕島豐明朝御世、元封中彥命兒多佐臣始國造、

三野國造　輕島豐明朝御世、元封弟彥命、次定賜國造、

下道國造　輕島豐明朝御世、元封兄彥命亦名稻建別定賜國造、

加夜國造　輕島豐明朝御世、上道國造同祖、元封中彥命、改定賜國造、

〔日本書紀十應神〕二十二年九月丙戌、天皇狩于淡路嶋、○中略天皇便自淡路轉以幸吉備、遊于小豆嶋、庚寅、亦移居於葉田葉田、此云簸娜、葦守宮、時御友別參赴之、則以其兄弟子孫爲膳夫而奉饗焉、天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀、而有悅情、因以割吉備國、封其子等也、則分川嶋縣、封長子稻速別、是下道臣之始祖也、次以上道縣、封中子仲彥、是上道臣香屋臣之始祖也、次以三野縣、封弟彥、是三野臣之始祖也、復以波區藝縣、封御友別弟鴨別、是笠臣之始祖也、卽以苑縣、封兄浦凝別、是苑臣之始祖也、卽以織部縣、賜兄媛、是以其子孫於今在于吉備國、是其緣也、

〔先代舊事本紀十國造〕笠臣國造　輕島豐明朝御世、元封鴨別命八世孫笠三枚臣、定賜國造、○中略

周防國造　輕島豐明朝、茨城國造同祖、加米乃意美定賜國造、○中略

粟國造　輕島豐明御世、高皇產靈尊九世孫千波足尼定賜國造、○中略

讃岐國造　輕島豐明朝御世、景行帝兒神櫛王三世孫須賣保禮命定賜國造、○中略

久味國造　輕島豐明朝、神魂尊十三世孫伊與主命定賜國造、

小市國造　輕島豐明朝御世、物部連同祖、大新川命孫子致命定賜國造、○中略

風速國造　輕島豐明朝、物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定賜國造、○中略

日向國造　輕島豐明朝御世、豐國別皇子三世孫老男定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕下毛野國造　難波高津朝○仁德御世、元毛野國分爲上下、豐城命四世孫奈良別初賜國造、○中略

加宜國造　難波高津朝御世、能登國造同祖、素都乃奈美留命定賜國造、○中略

都怒國造　難波高津朝、紀臣同祖、都怒足尼兒田鳥足尼定賜國造、○中略

淡道國造　難波高津朝御世、神皇產靈尊九世孫矢口足尼定賜國造、○中略

松津國造　難波高津朝御世、物部連祖、伊香色雄命孫金連○金連、天孫本紀作金弓連、定賜國造、○中略

大隅國造　纏向日代朝御世、治平隼人同祖初小、仁德帝代者伏布爲日佐、賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕江沼國造　柴垣朝○反正御世、蘇我臣同祖、武內宿禰四世孫志波勝足尼定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕若狹國造　遠飛鳥朝○允恭御代、膳臣祖、佐白米命兒荒礪命定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕穗國造　泊瀨朝倉朝○雄略以生江臣祖葛城襲津彥命四世孫兔上足尼、定賜國造、○中略

賀我國造　泊瀨朝倉朝御代、三尾君祖、石撞別命四世孫大兄彥君定賜國造、難波朝御代隸越前國、嵯峨朝御世弘仁十四年、割越前國分爲加賀國、

羽咋國造　泊瀨朝倉朝御世、三尾君祖、石撞別命兒石城別王定賜國造、

〔先代舊事本紀十國造〕伊吉島造　磐余玉穗朝○繼體伐石井從者新羅海邊人、天津水凝後上毛布直造、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十一月十一日辛巳、先是正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏言、書博士正六位下佐伯直豐雄款云、先祖大伴健日連公、景行天皇御世、隨倭武命平定東國、功勳蓋世、賜讃岐國、以爲私宅、健日連公之子、健持大連公子、室屋大連公之第一男、御物宿禰之胤、倭故連公、允恭天皇御世、始任讃岐國造、倭故連公、是豐雄等之別祖也、孝德天皇世、國造之號、永從停止、○下略

〔古事記傳二十九〕三代實錄五に、孝德天皇世、國造之號永從停止とあるは違へり、彼御世に、其制を改められたるにこそあれ、國造と云號は、なほ其後も國々にありしをや、

職掌

〔國造本紀考別記〕宇遲加婆禰の大意

頭註春村○黑川春村云、上古の國造、縣主、稻置等は職名にて、必員數限りありしなるべし、又君直は、其員かぎりなく多く有て、其中より撰出て、彼國造等をば補せられし事と思はる、但孝德帝の御世以後は然らず、國造等も後の揚名の類にて有けん、

〔白石遺文上史論〕孝德改新詔

夫自太古以來、有土之主、皆神明之後、其他亦皆社稷功臣、帝室懿親、世有令德、以襲其封、一尺之土、一民之衆、祖宗不以賞私德、君長不敢貳于己、亦何私己之有、帝疾其兼幷、而欲以天下奉於一人、則其爲兼幷孰大焉、昔秦併天下以爲郡縣、帝亦併天下以爲郡縣、其事雖同、其義大異、秦滅六國、諸侯猶其敵國也、廢三代制度、猶其異姓也、帝之所滅者、社稷世臣也、其所廢者、祖宗舊制也、秦之創制、天下皆知其惡矣、帝之變法、天下皆稱其善焉、何則後之長國家而務財用者、以其利爲自利之也、故其流之弊、以傳乎萬世、天下亦皆不能知之也、悲哉、請試擧其一二而論之、古者國郡縣邑之主、皆神明之後、奉其先祀者、其後既亡、其祀既絕、不可得而考、天下神祠、著在祀典者、凡三千一百三十二所、此自非山林川谷丘陵、能出雲爲風雨、則古之神人有功烈於民者也、帝家宗廟置而不論、其神明之後、以奉其祀者、獨有出雲國造焉耳矣、其餘則不知其祀是何神、而其後是何人也、蓋此無他、帝變法之後、如其神明之後、雖承世官、其所食世祿、月給官廩而已、非若前代有食邑采地圭田之制也、況其衰門舊族、散往四方者、歲時欲祭其先、則其祠且不知何在、又安有行禮之地哉、而其著在祀典者、官命有司祭古之明神在其地、而無主後者也、上世以來、胙土賜姓、其載在史籍者、凡一千一百八十二氏、事漏舊典、稽所不及者不與焉、此皆古者神明之胄、帝出之裔、冠冕之緖、保姓受氏、以守宗祊、世不絕祀者、而今其姓氏以傳于世、僅存十一於千百、豈其君子化鶴、小人亦化爲猿者也耶、

〔常陸風土記〕常陸國司解　申古老相傳舊聞事

問國郡舊事、古老答曰、古者自相模國足柄岳坂以東諸縣、總稱我姬國、是當時不言常陸、唯稱新治、筑波、茨城、那賀、久慈、多珂國、各遣造別令撿挍、其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇〇孝德之世、遣高向臣、中臣幡、織田連等、總領自坂以東之國、于時我姬之道分爲八國、常陸國居其一矣、

〔續日本紀 四十 桓武〕延暦十年九月丙子、讃岐國寒川郡人正六位上凡直千繼等言、千繼等先星直、譯語田朝庭〇敏達御世、繼國造之業、管所部之堺、於是因官命氏、賜紗拔大押直之姓、而庚午年之籍、改大押字、仍注凡直、是以星直之裔、或爲讃岐直、或爲凡直、方今聖朝、仁均雲雨、惠及昆蚑、當此明時、冀照覆瓫、請因先祖之業、賜讃岐公〇公字原无、據一本補、之姓、勅千繼等戸二十一烟、依請賜之、

〔日本書紀 二十五 孝德〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、〇中略若有求名之人、元非國造、伴造、縣稻置、而輙詐訴言、自我祖時、領此官家、治是郡縣、汝等國司、不得隨詐便牒於朝、審得實狀而後可申、

〔日本書紀 二十二 推古〕十二年四月戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、〇中略十二曰、國司國造勿斂百姓、國非二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公賦斂百姓、

〔政事要略 二十六〕同日〇十一月中丑日宮內省奏御宅田稻數事

多米宿禰本系帳云、〇中略同氏系圖云、志賀高穴太宮御宇若帶天皇〇成務御世、小長田命、以米入大瓮而獻天皇也、因改命宗、賜多米連姓、爾時天皇御命曠乃人乎、四方國造等獻支、

〔日本書紀 二十九 天武〕五年八月辛亥、詔曰、四方爲大解除、用物、則國別國造輸祓柱馬一匹、布一常、以外郡司各刀一口、鹿皮一張、钁一口、刀子一口、鎌一口、矢一具、稻一束、且每戸麻一條、　十年七月丁酉、令天下悉大解除、當此時國造等各出祓柱奴婢一口而解除、

〔令義解 二 神祇〕凡諸國須大祓者、每郡出刀一口、皮一張、鍬一口、及雜物等、戸別麻一條、其國造出馬一疋、

〔延喜式 二十三 民部〕凡諸國大祓馬、若無國造國者、以正稅買用、其價不得過五十束、但太宰府、及肥前、肥後、

日向三國、並以二牧馬一充レ之、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不レ差、崩二于正宮一、丙寅、國々造等、隨二參赴一各誄之、仍奏二種々歌舞一、

〔續日本紀二文武〕大寶二年二月庚戌、爲レ班二大幣一、馳レ驛追二諸國國造等一入レ京、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣二筑紫諸國一防人等歌、

可之古伎夜、美許等加我布理、阿須由利也、加曳我伊牟多禰乎、伊牟奈之爾志氐、

右一首、國造丁長下郡物部秋持、○中略

伊閉爾之氐、古非都々安良受波、奈我波氣流、多知爾奈里氐母、伊波非氐之加母、

右一首、國造丁日下部使主三中之文○文當作レ母歌、

多良知禰乃、波々乎和加例氐、麻許等和例、多非乃加里保爾、夜須久禰牟加首、

右一首、國造丁日下部使主三中、

〔萬葉集略解二十上〕この國造丁、幷次にみえたる主帳丁は、國造主帳より出せる人足歟、防人の上る時の道中の人足なるべし、

〔延喜式三臨時祭〕凡座摩巫、取二都下國造氏童女七歲已上者一充レ之、若及二嫁時一、申二辨官一充替、

○按ズルニ、都下ハ、允恭紀ニ闘鷄トアルニ同ジク、倭名抄ニ、大和國山邊郡都介郷トアル地ナリ、

〔古事記傳二十九〕孝德天皇の御世に至て、古の御制をば皆改められて、國造等をば擇びて、其國國の郡の大領少領などに任されしこと、書紀の彼御卷に見えて、其より後多く然なり、(中略)さて又後世に、國造と云號の、まれ〴〵に神社に遺れることは、まづ古は神事國政一なりしを、孝德の御世より、國政は國司の知ことゝなれゝども、國の神事は、なほ元のまゝに、國造の知行ふ御制にて、續紀二に、爲レ班二大幣一、馳レ驛追二諸國國造一入レ京なども見え、其外にも、國造の神事に預かること、諸書に多く見えたり、されば其御制の遺りて、後終には、全神職の如くなれるなり、故既く類聚國

史にも、此を神祇部にぞ收られたりける、天武紀に、天皇崩坐し時に、國國造等隨參赴、各誄之、仍奏種々歌舞とある
などは、猶古の儀の遺りて、然る時にも參上て、かゝる禮典にも仕奉りしなりけり、

〔屠龍工隨筆〕總て國造其國にしづめ祭る所の神の子孫をして、始祖の神とまつらしむるなり、
今は皆絶へて、出雲に計兩國造殘りたるも、國司などのつくにはあらず、近き比國主の物頭の
格に、官より令下りしなり、しかりといへども出雲には餘國に異なり、穗日命の子孫にして、朝
庭御取あつかひもめでたく、ことに出雲の國造、神にことを奉る日は、令の小儀の内にして、其
式は延喜式に見えたり、

〔儀式十〕太政官曹司廳任出雲國造儀
當日早旦、掃部寮預設座、（辨大夫西廳、式部東廳西廂、）式部錄率史生省掌等、進置版三枚於中庭、（自尋常版南去五尺、置宣命版、南去四許丈、更東折一許丈、置國司版、自此西去一丈、當宣命版置國造版、）訖參議已上就座、大臣喚召使、稱唯就尋常版、大臣宣喚式部省、召
使稱唯、出而喚之、輔稱唯、丞代進就版、大臣宣參來、丞稱唯而上至大臣座前、大臣賜國造名簿、丞受退
出、訖輔丞各一人、錄三人、入就座、訖國守入就版、次省掌引任人參入、（任人就版、省掌差南而立、）參議已上辨大夫降
立、及式部起座、立定辨大夫一人就版、宣制曰、天皇（我）詔旨（良麻止）宣（久）、其位其出雲國造（爾）任賜（天）冠位
上賜（比）、御手物賜（久止）宣、國司任人共稱唯、再拜兩段、拍手四段、參議已上及辨大夫以下還就本座、掃部
寮進敷簀中庭、式部史生置位記筥、錄一人進就簀賜位記、錄一人留位記、史生進撤位記筥、次掃部寮
撤簀、次錄一人進錄所唱賜、毎賜一物拍手、（大藏省預積絁庭中、絁十匹、絲廿絇、布廿端、）任人持絁十匹退出、絲布藏部相隨
持出、訖各退出、

〔古事記傳七〕出雲國造、まづ天菩比命の、此葦原中國を言向に天降て、出雲に留坐つる由は、末に
も書紀にも見え、又書紀に、高皇產靈尊、勅大己貴神曰云々、汝應住天日隅宮者、今當作造云々、又
當主汝祭祀者天穗日命是也、（此出雲國造、又大社の神主たる起なり、○中略）さて延暦十七年三月廿九日太政官符に、

昔者國造と郡領と別なりしを、慶雲三年よりして、出雲國造に意宇郡大領を帶しめけるを、又舊例の如く國造と郡領と別に任ぜられしこと見ゆ、さて今世まで國造の殘れるは、此國と紀國とのみにて、中にも此國造名高し、此二國造は、昔より他に異なりしにや、貞觀儀式に、此を任す儀を載られたり、さて此出雲國造、京に上りて神壽辭（神賀辭とも云）を奏事あり、何れの御世より始まりしにか、物には續紀七、靈龜二年二月に始めて見えて、御世々々絶ることなし、延暦十四年二月、緣遷都奏神賀事ことも類聚國史に見えたり、其事、又獻物のこと、賜物の品などは、臨時祭式に見え、彼詞は祝詞式に載れり、

○出雲國造ノコトハ、神祇部出雲大社篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔儀式十〕太政官曹司廳任紀伊國造儀

當日早旦、掃部寮預設座（辨大夫西廳、式部東廳西廂、）式部錄率史生省掌等、進置版三枚於中庭、（自尋常版南去五尺、置宣命版、南去四許丈、更東折一許丈、置國司版、自此西去一丈、當宣命版置國造版、）訖參議已上就座、大臣喚召使、召使稱唯、就尋常版、大臣宣喚式部省、召使稱唯、出而喚之、輔稱唯、丞代進就版、大臣宣參來、丞稱唯、而上至大臣座前、大臣賜國造名簿、丞受退出、訖輔丞錄各一人入就座、訖國守入就版、次省掌引任人參入、（任人就版、省掌差南去立、）訖辨大夫已下式部錄已上、皆起自座立于庭中、（辨大夫東面、式部西面、丞錄北面、）參議已上在座不下、于時辨大夫一人進就版、宣制曰、官姓名（乎）紀伊國造任賜（波久止）宣、國造稱唯、再拜兩段、拍手四段、宣命者復本列、訖任人退出、辨大夫幷式部錄已上就本座、訖更立退出、

〔古事記傳二十二〕木國造、○中略貞觀儀式に、出雲國造と、紀伊國造とを任式を載られたり、他國造とは殊なる由あるなるべし、（殊なる大神を齋祭る故なるべし、此國造は、日前國懸二大神の祠官にて、今に至るまで、此氏相續て紀國造と稱ふ、其系圖を見るに、天道根命を始祖として、日前國懸兩大神天降坐之時、御從奉仕と記せり、）

○紀伊國造ノコトハ、神祇部日前國懸神宮篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年閏八月癸丑、以從四位上上道朝臣斐太都爲吉備國造、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年十二月甲申、外從五位下武藏宿禰不破麻爲武藏國國造、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年二月戊寅、從五位下勳六等漆部直伊波賜姓相模宿禰、爲相模國國造、六月戊寅、以從四位上外衞中將兼造西隆寺長官參河守勳四等伊勢朝臣老人〇中略爲本國國造、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年三月庚寅、丹後國丹波郡人正六位上丹波直眞養任國造、十二月甲辰、阿波國人正六位上粟凡直豐穗、飛驒國人從七位上飛驒國造祖門並任國造、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年四月戊申、駿河國駿河郡大領正六位上金刺舍人廣名爲國造、

〔類聚國史十九神祇〕延曆十四年十二月戊寅、武藏國足立郡大領外從五位下武藏宿禰弟總爲國造、

大國造

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年十二月甲申、正四位上道嶋宿禰嶋足爲陸奥國大國造、從五位上道嶋宿禰三山爲國造、

〔續日本紀考證九〕大國造始見

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國白河郡人外正七位上丈部子老、賀美郡人丈部國益、標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人賜姓阿倍陸奥臣、安積郡人外從七位下丈部直繼足、阿倍安積臣、信夫郡人外正六位上丈部大庭等阿倍信夫臣、柴田郡人外正六位上丈部嶋足安部柴田臣、會津郡人外正八位下丈部庭虫等二人阿部會津臣、磐城郡人外正六位上丈部山際於保磐城臣、牡鹿郡人外正八位下春日部奧麻呂等三人武射臣、亘理郡人外從七位上宗何部池守等三人湯坐亘理連、白河郡人外正七位下靫大伴部繼人、黑川郡人外從六位下靫大伴部弟虫等八人靫大伴連、行方郡人外正六位下大伴部三田等四人大伴行方連、苅田郡人外正六位上大伴部人足、大伴苅田臣、柴田郡人外從八位下大伴部福麻呂大伴柴田臣、磐瀨郡人外正六位上吉彌侯

部人上磐瀨朝臣、宇多郡人外正六位下吉彌侯部文知上毛野陸奧公、名取郡人外正七位下吉彌侯部老人、賀美郡人外正七位下吉彌侯部大成〇成下恐脱等字九人上毛野名取朝臣、信夫郡人外從八位下吉彌侯部足山守等七人上毛野鍬山公、新田郡人外大初位上吉彌侯部豐庭上毛野中村公、信夫郡人外少初位上吉彌侯部廣國下毛野靜戸公、玉造郡人外正七位上吉彌侯部念丸等七人下毛野俯見公、並是大國造道島宿禰島足之所請也、

〔類聚國史十九神祇〕延暦廿一年十二月庚寅、鎭守軍監外從五位下道島宿禰御楯、爲陸奧國大國造、

女國造

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年三月戊寅、命婦從五位下尾張宿禰小倉授從四位下、爲尾張國國造、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年六月戊寅、以〇中略掌膳常陸國筑波采女從五位下勳五等壬生宿禰小家主、尚掃從五位上美濃直玉虫、掌膳上野國佐位采女外從五位下上野佐位朝臣老刀自、並爲本國國造、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年二月丙申、因幡國高草采女從五位下國造淨成女等七人賜姓因幡造、閏三月己酉、授外從五位下伊豆國造伊豆直乎美奈從五位下、十二月丙寅、從五位上因幡國造淨成女爲因幡國國造、

〔續日本紀三十八桓武〕延暦四年正月癸亥、授正六位下海上國造他田日奉直德刀自外從五位下、

島造

〔類聚國史十九神祇〕天長五年正月丁丑、從五位下壹岐直戈麻呂任壹岐島造、

〇按ズルニ、伊吉島造ハ、廢置條ニ載スル所ノ國造本紀ニモアリ、

縣造

〔倭姬命世記〕十四年乙巳〇垂仁遷幸于伊勢國桑名野代宮、四年奉齋、〇中略川俣縣造祖大比古命參相支、汝國名何問賜、白久、味酒鈴鹿國奈其波志忍山白支、然神宮奉造奉、令幸行、又神田并神戸進支、次阿野縣造祖眞桑枝大命爾、汝國名何問賜、白久、草蔭阿野國白氐、進神田并神戸、次市師縣造祖建呰古命爾、汝國名何問賜、白久、害行阿佐賀國白、進神戸并神田、廿二年癸丑、遷飯野高宮、四箇年奉齋、

于時飯高縣造祖乙加豆知命〔曰〕、汝國名何問賜、白〔久〕、意須比飯高國〔止〕白而、進神田幷神戶、倭姬命、飯高〔止志〕白事貴〔止〕悅賜〔支〕、次佐奈縣造祖彌志呂宿禰命〔曰〕汝國名何問賜、白〔久〕、許母理國志多備之國、眞久佐牟毛久佐向國白〔氏〕、進神田神戶、

〔東大寺正倉院文書二十四〕御野國加毛郡半布里大寶貳年戶籍〔○中略〕

中政戶縣造紫戶口卅二〔○中略〕

下々戶主紫〔年卅正丁○中略〕　戶主弟功志〔年十八少丁○中略〕　戶主妻縣造都牟自賣〔年廿二正女〕　功志妻縣造廣庭賣〔年廿少女〕

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年四月甲申、伊勢國飯高郡采女正八位下飯高君笠目之親族、縣造等、皆賜飯高君姓、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年四月庚午、外從五位下縣造久太良爲志摩守、

贈國造

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、〔○中略〕淸麻呂之先出自垂仁天皇皇子鐸石別命、三世孫弟彥王、從神功皇后征新羅凱旋、明年忍熊別皇子有逆謀、皇后遣弟彥王於針間吉備堺山誅之、以從軍功封藤原縣、因家焉、今分爲美作備前兩國也、高祖父佐波良、曾祖父波伎豆、祖宿奈、父乎麻呂墳墓、在本鄉者、拱樹成林、淸麻呂投竄之日、爲人所伐除、歸來上疏陳狀、詔以佐波良等四人幷淸麻呂爲美作備前兩國國造、

兼職

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十月癸亥、大和國造正四位下大和宿禰長岡卒、〔○中略〕寶字初、仕至正五位下民部大輔兼坤宮大忠、四年遷河內守、政無仁惠、吏民患之、其後授從四位下、以散位還第、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年二月癸巳、以〔○中略〕外從五位下飛驒國造高市麻呂、橘部越麻呂並爲造西大寺大判官、

〔日本後紀十七平城〕大同三年四月庚午、外從五位下飛驒國造祖門爲主計助、

帶神主

〔神宮雜例集一〕本記云、皇大神御鎭座之時、大幡主命物乃部八十友諸人等率、荒御魂宮地乃荒草木根苅掃、大石小石取平天、大宮奉定支、爾時大幡主命白久、已先祖天日別命、賜伊勢國内礒部河以東、神國定奉、飯野多氣度會評也 即大幡主命神國造幷大神主定給支、

〔類聚三代格二〕太政官符

禁出雲國造託神事多娶百姓女子爲妾事

右被右大臣宣偁、奉勅、今聞承前國造兼帶神主、新任之日、卽棄嫡妻、仍多娶百姓女子、號爲神宮采女、便娶爲妾、莫知限極、此是妄託神事、遂扇淫風、神道益世豈其然乎、自今以後、不得更然、若娶妾供神事、不得已者、宜令國司注名密封、卜定一女、不得多點、如違此制、隨事科處、筑前國宗像神主准此、

延曆十七年十月十一日 ○又見類聚國史

帶郡司

〔類聚三代格七〕太政官符

應聽以同姓人補主政主帳事

右撿天平七年五月廿二日格偁、終身之任、理可代遍、宜一郡不得幷用同姓、如於他姓中无人可用者、僅得用於少領已上、以外悉停任、但神郡國造、陸奥之近夷郡、多褹島郡等、聽依先例者、今被右大臣宣偁、奉勅、一郡之人、同姓尤多、或身有勞効、或才堪時務、而被拘格旨、不蒙撰擢、人之爲憂、莫甚於此、宜改斯例、依件令補、不得因此任譜第人、自今以後、永爲恒例、

弘仁五年三月廿九日

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、○中略 其二曰、○中略 凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、其郡司、並取國造性識清廉、堪時務者、爲大領少領、强幹聰敏、工書筭者、爲主政主帳、

〔令義解四選敍〕凡郡司、取性識清廉、堪時務者、爲大領少領、强幹聰敏、工書計者、爲主政主帳、其大領、外從

八位上、少領、外從八位下敍之、其大領少領才用同者、先取國造、謂取下見爲國造者上、卽神祇令、國造出馬一疋是也、

〔古事記傳二十九〕孝德紀に、凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡云々、これに里とあるは、村里の數なり、途程を云には非ず、さて類聚國史にも、延曆十七年の詔に、昔難波朝廷始置諸郡と見えたり、此御世には、凡て萬の御制を改められて、漢ざまになれる事多し、諸國の定めも、かく國を分て郡として、古より國造、別、直、君、稻寸、縣主などの治め來つる地をも、ことごとく公に收められて、國ごとに國司を任、郡ごとに郡司を置る、類聚三代格、弘仁二年の詔に、郡領者、難波朝廷置其職とある是なり、然るに書紀の雄略卷、安閑卷、欽明卷などに、郡司と云者の見えたるは、例の撰者の文のみにこそあれ、當時の稱にはあらず、

〔姓序考〕郡司

郡司は、京より任來し官人にあらず、國造を任るゝこと也、孝德朝廷大化二年春正月甲子朔の詔に、其郡司、並取國造性識清廉、堪時務者爲大領少領と見えたり、如此職號を郡司にかへられたれど、猶太古のごとく國政に預りしなへに、其人の性識を撰ばれしならめ、於是國造の號は姓の如なりゆける也、物のつぎ〳〵にうつり行ことは、少ばかりのけぢめなれど、はて〳〵はいたくたがひて、終を始にかへしてみがはしぬれば、それしも然うつるまじく思ふことの、いと多きわざなり、郡司と云は大號にて、こと別て云ば大領小領のけぢめぞありける、

〔古京遺文〕那須直韋提碑

永昌元年己丑四月、飛鳥淨御原大宮、那須國造、追大壹那須直韋提、評督被賜、歲次康子年正月二壬子日辰節殄故、意斯麻呂等立碑銘偲云爾、○中略

碑在下野國那須郡湯津上村、俗稱笠石、○中略蒙齋曰、永昌元年當作朱鳥四年、蓋係洗者改作、今審覲之、字樣不類、其說似可信、○中略追大壹、天武天皇所制爵位、四十八階之第三十三等、那須直姓也、所謂胙之土而命之氏者、姓氏錄不載其祖、未詳韋提名也、佐々氏釋作那須宣事提非是、評。督。官名、

猶後世郡領也、既於妙心寺鐘跋詳之、白石新井先生云、評督是都督之誤、亦不知古時有評督之職也、康子卽庚子、係文武天皇之四年、○中略蒙齋以是碑爲持統天皇時物、則誤矣、

〔古事記傳二十九〕許富理と云は、古よりありし名には非ず、新井氏云く、こほりは韓語より出たり、今の朝鮮語に、郡縣をこほると云と云り、此説さもあるべし、書紀繼體卷に、韓國の地名に、熊備己富里また背評と云あり、評は彼國の方言にて郡を云、故コホリと訓り、漢籍梁史にも、新羅俗、其邑在內曰啄評と云ることあり、さて皇國にても、韓言にならひて、郡に評字を用ひたりしことあり、續紀一に、衣評督衣君縣助督衣君弖自美とあり、衣評は、薩摩の頴娃郡なり、又廿五に氷高評とあるは、紀伊國の日高郡なり、又廿八にも評督とあり、大神宮儀式帳に、難波朝廷天下立評給時云々、新家連阿久良督領、磯連牟良助督仕奉云々、また評督領仕奉など見えたり、督また督領とあるは大領、助督とあるは少領と聞えたり、

〔出雲風土記〕天平五年二月卅日勘造　秋鹿郡人　神宅臣金太理

國造帶意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣島

〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國天平六年計會帳

節度使符參拾貳條

天平五年八月○中略

一廿日符壹道上國造帶意宇郡大領外正六位勳十二等出雲臣廣島追狀　以八月廿五日到國

〔東大寺正倉院文書四十四〕謹解　申請海上郡大領司仕奉事

中宮○聖武母后、藤原宮子媛、舍人左京七條人從八位下海上國造他田日奉部直神護我、下總國海上郡大領司爾仕奉止申故波、神護我祖父小乙下忍、難波朝庭少領司爾仕奉支、父追廣肆宮麻呂、飛鳥朝庭少領司爾仕奉支、又外正八位上給氏藤原朝庭爾大領司爾仕奉支、兄外從六位下勳十二等國足、奈良朝

帶兵衞　敍位

庭大領司爾仕奉支、神護我仕奉狀、故兵部卿從三位藤原卿〇麻呂位分資人、始養老二年至神龜五年十一年、中宮舍人、始天平元年至今廿年、合卅一歳、是以祖父父兄良我仕奉祁留次爾在故爾、海上郡大領司爾仕奉止申、

〔類聚三代格 七〕太政官符

應任出雲國意宇郡大領事

右被大納言從三位神王宣偁、奉勅、昔者國造郡領、職員有別、各守其任、不敢違越、慶雲三年以來、令國造帶郡領、寄言神事、動廢公務、雖則有闕怠、而不加刑罰、乃有私門日益、不利公家、民之父母、還爲巨蠹、自今以後、宜改舊例、國造郡領分職任之、

延曆十七年三月廿九日〇又見類聚國史

〔類聚國史 十九神祇〕延曆十七年三月丙申、詔曰、昔難波朝庭、始置諸郡、仍擇有勞補於郡領、子孫相襲、永任其官云々、宜其譜第之選、永從停廢、取藝業著聞堪理郡者爲之云々、其國造兵衞同亦停止云々、四月甲寅、勅、依去三月十六日勅云々、郡領譜第既從停廢、國造兵衞同亦停止、但先補國造、服帶刀杖、宿衞之勞不可不矜、宜除國造之名、補兵衞之例、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

停國造補兵衞事

右撿去三月十六日勅書偁、郡領譜第既從停廢、國造兵衞同亦停止者、今中納言從三位壹志王宣偁、奉勅、先補國造、造〇造一字恐衍服帶刀仗、仕奉宿衞、勤官之勞不可不矜、宜除國造之名、補兵衞之例、

延曆十七年六月四日

〔日本書紀 三十持統〕六年三月辛未、天皇不從諫、遂幸伊勢、　壬午、賜所過神郡、及伊賀、伊勢、志摩國造等冠位、幷免今年調役、

〔續日本紀 三文武〕慶雲三年九月丙寅、行二幸難波一、十月壬午、還宮、攝津國造從七位上凡河內忌寸石麻呂、山背國造外從八位上山背忌寸品遲、〇中略各進レ位一階、

〔續日本紀 九元正〕神龜元年十月辛卯、天皇幸二紀伊國一、壬寅、名草郡大領外從八位紀直摩祖爲二國造一、進二位三階一、

〔續日本紀 十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、飛驒國大野郡大領外正七位下飛驒國造高市麻呂、〇中略獻二當國國分寺知識物一、並授二外從五位下一、

〔續日本紀 三十稱德〕寶龜元年四月癸巳朔、美濃國方縣郡少領外從六位下國造雄萬、獻二私稻二萬束於國分寺一、授二外從五位下一、

〔續日本紀 四十桓武〕延曆十年六月甲寅、授二正六位上因幡國造國富外從五位下一、

〔日本後紀 十三桓武〕延曆廿四年十月癸卯、正六位上笠臣田作、千葉國造大私部直善人、授二外從五位下一、

〇按ズルニ、千葉國造、國造本紀ニ見エズ、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年六月己酉、安房國國造正八位上伴直千福麻呂授二外從五位下一、

〔三代實錄 四十七光孝〕仁和元年閏三月十九日甲辰、下總國海上郡大領外正六位上海上〇上原无、據二一本一補、國造他〇他原作レ池、據二古事記傳說一改、田日奉直春岳、借二外從五位下一、以レ代二百姓濟一調庸上也、

賜姓

〔續日本紀 十一聖武〕天平五年六月丁酉、多褹嶋熊毛郡大領外從七位下安志託等十一人、賜二多褹後國造姓一、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十四年四月甲申、賜二外從五位下日下部直益人、伊豆國造伊豆直姓一、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜五年二月壬辰、因幡國八上郡員外少領從八位上國造寶頭賜二姓因幡國造一、

待遇

〔日本書紀 二十九天武〕五年四月辛亥、勅、〇中略又外國人欲二進仕一者、臣連伴造之子、及國造子聽レ之、唯雖二以下庶人一、其才能長亦聽レ之、

〔續日本後紀 仁明十九〕嘉祥二年閏十二月庚午、先是紀伊守從五位下伴宿禰龍男、與國造紀宿禰高繼不愜、於是不忍怒意、輒發兵捕高繼幷黨與人等、仍可勘申狀、官符下知已畢、而今日擬林朝臣並人馳來申云、〇中略又高繼〇高繼當作龍男所進之國符偁、國造紀宿禰高繼犯罪之替、擬補紀宿禰福雄者、勅、國。造。者。非。國。司。解。却。之。色。而輒解却之、推量意志、稍涉不臣、宜停釐務、任法勘奏、

〔大神宮諸雜事記 一〕垂仁天皇

天皇卽位廿五年丙辰、天照坐皇大神天降坐於大和國宇陀郡、于時國造進神戶等、今號宇陀神戶是也是巳皇大神宮始天降坐本所也、其後奉令鎭坐伊勢國度會郡宇治鄕五十鈴川上下都磐根御宮所也、抑皇大神宮勅託宣偁、我天宮御宇之時、天下四方國攝錄可天下宮所、放光明見定置先畢、仍彼所可行幸御之由宣、倭姬內親王奉載天、先伊賀國伊賀郡一宿御坐、卽國造奉其神戶、次伊勢國安濃郡藤方宮御坐三年之間、國造奉寄神戶六箇處也、所謂安濃、一志、鈴鹿、河曲、桑名、飯高神戶等也、次尾張國中島郡一宿御坐、國造進中島神戶、次三河國渥美郡一宿御坐、國造進渥美神戶、次遠江國濱名郡一宿御坐、國造進濱名神戶、〇下略

〔日本書紀 十三允恭〕十一年三月、科諸國造等、爲衣通郞姬定藤原部、

〔日本書紀 十八安閑〕元年四月癸丑朔、內膳卿膳臣大麻呂奉勅、遣使求珠伊甚、伊甚國造等、詣京遲晚、踰時不進、膳臣大麻呂大怒、收縛國造等、推問所由、國造稚子直等、恐懼逃匿後宮內寢、春日皇后不知直入、驚駭而顚、慚愧無已、稚子直等兼坐闌入罪、當科重、謹專爲皇后獻伊甚屯倉、請贖闌入之罪、因定伊甚屯倉、今分爲郡、屬上總國、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化元年九月甲申、遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、每天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等、伴造國造、各置己民、恣情駈使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼幷數萬頃田、或者全無容針少地、及進調賦時、其臣連、伴造等、先自收斂、然後分進、脩治宮殿、築造園

國造田

陵、各率己民、隨事而作、易曰、損上益下、節以制度、不傷財、害民、方今百姓猶乏、而有勢者分割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後、不得賣地、勿妄作主、兼幷劣弱、百姓大悅、　二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣、連、伴造、國造、村首所有部曲之民、處處田莊、

〔政事要略五十三〕太政官符民部省

應行雜事五箇條事〇中略

國造田四百十一町五段

伊勢國七町　尾張國六町　參河國四町六段　遠江國十三町　駿河國六町　伊豆國六町　相模國十三町　武藏國十二町　上總國十八町　下總國十八町　常陸國十三町　近江國八町　美濃國廿四町　飛驒國六町　信濃國六町　下野國六町　若狹國六町　越前國六町　加賀國十一町　能登國六町　越中國十二町　隱岐國一町八段　丹波國六町　因幡國六町　伯耆國五町　石見國十二町　美作國六町　備中國十八町六段　備後國十八町　安藝國六町　長門國六町　淡路國六町　讚岐國六町　伊豫國六町　土佐國十一町五段　筑前國六町　筑後國十二〇二一本作三町　豐前國六町　肥前國□□　肥後國十九町　日向國六町　壹岐島六町〇中略

以前條事、所定如件者、宜承知依宣行之、符到奉行、

右中辨藤原朝臣　　左〇左一本作右少史錦宿禰

延喜十四年八月八日

〔令集解十二田〕凡郡司職分田、古記云、輸租也、射田、國造田、采女田亦同、

〔令集解十二田〕凡〇中略段租稻謂田賦爲租二束二把、町租稻廿二束、(中略)民部例、(中略)无主位田、闕郡司職田、闕國造田、闕采女田、射田、公乘田、已

（上不輸租田、爲地子田、見任國造田、郡司職田、采女田、位田、口分田、墾田、已上爲輸租田也、）

〔延喜式民部二十二〕凡諸國健兒、（中略）其食、畿內用桑田（○桑田恐乘田誤）地子、餘以國營健兒田充之、出羽國出擧給之、隱伎國以國造田三町地子充之、

〔延喜式主稅二十六〕凡勘租帳者、皆據當年帳、（中略）其位田、職田、國造田、采女田、膂力婦女田、賜田等、未授之間、（中略）並爲輸地子田、

貢人

〔續日本後紀仁明三〕承和元年十一月癸亥、依兵部省所請、以國造田廿町地税、永充親王已下五位已上廿人、試習內射之資、

〔三代實錄清和二十八〕貞觀十八年三月九日丁亥、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事、其一事、請營壹岐島水田一百町、使充對馬島年粮、（中略）又同島水田六百十六町、而沒八十六步、就中除百姓口分田、幷雜職田等之外、死者口分、幷疫死口分、國造田等、一百餘町也、今商量役十（○十字千誤）人丁營百町田、其勢易於反掌、（下略）

〔續日本後紀仁明八〕承和六年九月癸卯、制、選敍令、帳內資人者、並以八年爲限、神龜五年格、外五位資人、十年成選、自今而後、外五位資人選限者、宜依令行之、唯神宮司、禰宜、祝、國造、外散位郡司、及俘夷之類、不在此限、

相爭國造

〔日本書紀安閑十八〕元年閏十二月、武藏國造笠原直使主與同族小杵相爭國造、（使主、小杵皆名也、）經年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君小熊、而謀殺使主、使主覺之、走出詣京言狀、朝廷臨斷、以使主爲國造、而誅小杵、國造使主、悚喜交懷不能默已、謹爲國家、奉置橫渟、橘花、多氷、倉樔四處屯倉、

貶姓

〔日本書紀允恭十三〕二年二月己酉、立忍坂大中姬爲皇后、（中略）初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪鷄國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎汝者也、（汝此云那鼻苦也）且曰、壓乞戶母、（壓乞、此云異提、戶母、此云覩自、）其蘭一莖焉、皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠛也、（蠛此云摩愚那岐、）時皇

后結之意裏、乘馬者辭无禮、卽謂曰、首也余不忘矣、是後皇后登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪以欲殺、爰乞蘭者額搶地、叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓謂稻置、

○按ズルニ、闘鷄國造、國造本紀ニ之ヲ載セザルハ、此時貶セラレテ稻置トナリシニ因ルカ、而シテ延喜臨時祭式ニ、都下國造見エタリ、然レドモ國造ニ復セシコト、諸史所見ナシ、故ニ都下國造ハ別族ナランモ知ルベカラズ、

國造記

〔日本書紀推古二十二〕二十八年、是歲皇太子、島大臣○蘇我馬子共議之、錄天皇記、及國記、臣、連、伴造、國造、百八十部、幷公民等本記、

〔先代舊事本紀序〕大臣蘇我馬子宿禰等奉勅修撰

夫先代舊事本紀者、聖德太子且所撰也、于時小治田豐浦宮御宇豐御食炊屋姬天皇○推古卽位廿八年、歲次庚辰春二月甲午朔戊戌、○中略謹擬勅旨、因循古記、太子爲儒釋說次錄、而修撰未竟、太子薨矣、撰錄之事、輟而不續、因斯且所撰定、神皇系圖一卷、先代國記、神皇本紀、臣、連、伴造、國造本紀十卷、號曰先代舊事本紀、

〔續日本紀文武二〕大寶二年四月庚戌、詔定諸國國造之氏、其名具國造記、

〔古事記傳二十九〕國造本紀、全くは信がたき事もあれども、ひたぶるに由なき事とは見えず、據はありけむかし、書紀推古卷二十八年、皇太子、島大臣、共議之、錄天皇紀、及國記、臣、連、伴造、國造、百八十部幷公民等本記とある中に、國造本紀もあれば、此名を取て記せるなるべし、續紀二に、詔定諸國國造之氏、其名具國造記とある書には、諸國の國造の姓名など、正しくぞ記されけむ、

〔國造本紀考一〕この本紀はしも、世に舊事本紀と名づけて、上宮太子の撰び給へりと云十卷の記ある、其十の卷なり、さてかの舊事紀は、後人の贋書なる事は、旣く我西山公の論ひ定め給へ

るが如く、信られぬものなる事はさら也、○註略されど其が中に、第三の巻、饒速日命天降の段五の巻尾張氏物部氏の世次と、此國造本紀などは、何の書にも見えず、日本紀、古事記、姓氏錄にも多く符合るを思ふに、必ず僞書ならじと、後の識者のいはれたるも、また宜なり、因て本紀の原始を考るに、允恭天皇紀に、四年秋九月戊申、詔曰、群卿百寮及諸國造等皆各言云々、天降以來、多歷萬歲、是以一氏蕃息、更爲萬姓、難知其實、故諸氏姓人、沐浴齋戒、各爲盟神探湯、○中略自是之後、氏姓自定、更無詐人、と見えて、そを即て書に記せる事は漏たれども、古事記序に、正姓撰氏、勒于遠飛鳥、とあるがうへに、是より先世、履中天皇の朝に、諸國置史とあれば、既く此御世頃より朝廷にも史を置給ひて、必其氏人の語り傳ふるまに〳〵記されけむこと推測るべし、かくて後々にも承繼ませりと思しくて、弘仁私記序に、くがたちの事をいひて後世帝王、見彼覆車、毎世令獻本系、藏圖書寮也とも見えたれど、當時氏々名々を唯あら〳〵と記され給へるにて、撰錄といふことも無りしを、推古天皇の朝に、始て整理しるされしなり、○中略いかなる書さまにか、今詳ならねど、國造本記の書に見えたるは、此ぞ始にはありける、さるを皇極天皇の朝、蘇我蝦夷戮さるゝ時に、悉燒天皇紀、國紀、珍寶、船史惠尺即疾取所燒之國記、而奉獻中大兄、中大兄は即天智天皇也とありて、悉くその書どもは、焚毀ぬべかりしを、船史の功によりて、燼餘りて世に傳はれるもありしなり、されば此の國造本紀も、即當時の本紀の傳はれるものと思はる、○中略かくて文武天皇御紀に、大寶二年四月庚戌、詔定諸國國造之氏、其名具國造記、とあるは、推古の御世なるとは別なれど、猶其をも國造記と云りしなり、さてこの記を作らしめ給へる事は、思ふに孝德天皇御世に、古の制度を改めて、國造といふは、唯神祭をのみ掌る官人の如く制給へるより、稍々に其勢威も減り、家も痛く衰へしかば、其家系の辨別なく、終は滅亡なむ事を最惜み給ひての御行なるべく聞えたり、其は後世其氏人ならぬ者に、國造の姓を給ひ、和氣朝臣是也また昔國造を賜へりしなど云る讃岐佐伯直是也類の、甚

雜載

甚紛亂はしき事の有つるに合せて、大寶の頃も似たる事などの有けむと、推測らるればなり、

〔古事記上〕天菩比命之子建比良鳥命、(此出雲國造、无邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津島縣直、遠江國造等之祖也、)次天津日子根命者、(凡川內國造、額田部湯坐連、茨(茨字原无、據古事記傳說補、)木國造、倭田中直、山代國造、馬來田國造、道尻岐閇國造、周芳國造、倭淹知造、高市縣主、蒲生稻寸、三枝部造等之祖也、)

〔古事記中神武〕神八井耳命者、(意富臣、小子部連、坂合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫三家連、雀部臣、雀部造、小長谷造、都祁直、伊余國造、科野國造、道奧石城國造、常道仲國造、長狹國造、伊勢船木直、尾張丹羽臣、島田臣等之祖也、)

○按ズルニ、長狹國造、國造本紀ニ見エズ、

〔常陸風土記筑波郡〕古老曰、筑波之縣、古謂紀國、美萬貴天皇(○崇神)之世、遣采女臣友屬筑波命於紀國之國造、時筑波命曰、欲令身名者著國而後世流傳、卽改本號、更稱筑波者、(風俗說曰、握飯筑波之國、)

〔古事記中景行〕爾天皇、亦頻詔倭建命、言向和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人等、(○中略)故爾到相武國之時、其國造詐白、於此野中有大沼、住是沼中之神、甚道速振神也、

〔古事記中孝昭〕此天皇娶尾張連之祖奧津余曾之妹名余曾多本毘賣命、生御子天押帶日子命、(○中略)天押帶日子命者、(春日臣、大宅臣、粟田臣、小野臣、柿本臣、壹比韋臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟邪臣、都怒山臣、伊勢飯高君、壹師君、近淡海國造之祖也、)

○按ズルニ、國造本紀ニ淡海國造トアルハ、近淡海安國造ノ誤脫ニシテ、景行天皇記ニ、近淡海之安國造之祖意富多牟和氣云々トアル是ナルベケレバ、此ニ近淡海國造トアルトハ別祖ナラン、

〔古事記中孝元〕此天皇之御子等幷五柱、故(○中略)比古布都押之信命、(○中略)娶木國造之祖宇豆比古之妹山下影日賣、生子建內宿禰、

〔日本書紀敏達二十〕十二年七月丁酉朔、詔曰、(○中略)今在百濟火葦北國造阿利斯登子達率日羅、賢而有勇、故朕欲與其人相計、乃遣紀國造押勝與吉備海部直羽島、喚於百濟、

〔常陸風土記行方郡〕古老曰、難波長柄豐前大宮馭宇天皇(○孝德)之世、癸丑年、茨城國造小乙下壬生連

麻呂、那珂國造大建壬生直夫子等、請總領高向大夫、中臣幡織田大夫等、割茨城地八里、合七百餘戸、別置郡家、

〔東大寺正倉院文書二十六〕御野國肩縣郡肩々里大寶貳年戸籍

下政戸國造川島戸口廿六〇中略　下々戸主川島年廿八正丁〇中略　上政戸國造大庭戸口九十六〇中略

中下戸主大庭年卌一正丁〇下略

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿加等伎乃、加波多例等枳爾、之麻加枳乎、己枳爾之布禰乃、他都枳之良受母、

右一首、助丁海上郡海上國造他田日奉直得大理、〇中略

可良己呂茂、須會爾等里都伎、奈苦古良乎、意伎氐曾伎怒也、意母奈之爾志氐、

右一首、國造〇信濃少縣郡他田舍人大島、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月庚申、美濃國安八郡人國造千代妻加是女、一產三男、給稻四百束、乳母一人、

〇

〔古事記上〕多紀理毘賣命、〇中略市寸島比賣命、〇中略田寸津比賣命、〇中略此三柱神者、胷形君等之以伊都久三前大神者也、

〔倭訓栞前編七〕きみ　神代紀に、君、主、公、侯、王、皇代紀に、元首等をよみ、古事記に夫子もよめり、諸冊二尊の名を合せたる義也といへり、令義解に、君謂天子也と見えたり、されど周の時に、諸侯より大夫までも君と稱するをもて、倭訓も通じてよべる成べし、儀禮注に、天子諸侯及卿大夫、有地者皆曰君と見ゆ、

〔姓序考〕公

公姓は、舊は君と云ひしを、天平寶字三年冬十月辛丑、天下諸姓著君字者、換以公字とみえしより、公字を用ることゝなれり、公は伎美と訓べし、舊は諸國處々にありて、其地に公として治めし人を云り、さるから皇子達に諸國を賜へるに、此姓を負へるが多く、公姓なるは地號をもて氏とせしもの多し、古事記中に皇子達に君姓をいへるもの、三十九氏なるに、みな地號を以て氏とせられし也、○中略太古はいと重きものにせられしなべに、古事記中には皇子達に多くこの姓見えたり、其國に在ては、ことにいきほひありしものにやありけん、筑紫君石井筑紫君は、大彦命の後なることは、孝元紀及國造本紀等に其ことを委にみえたり、のをゝしかりしさまは、繼體紀にみゆ、○中略故思ふに諸國の君は、其地々を標て、心のまゝにことを行ひたりしものならむ、されば君はしも姓ながら官にたぐひたるもの也、

〔古事記繼體下〕此御世竺紫君石井、不從天皇之命、而多无禮、故遣物部荒甲之大連、大伴之金村連二人、而殺石井也、

〔日本書紀繼體十七〕二十一年六月甲午、筑紫國造磐井、陰謨叛逆、猶豫經年、二十二年十一月甲子、大將軍物部大連麁鹿火、親與賊帥磐井交戰於筑紫御井郡、旗鼓相望、埃塵相接、決機兩陣之間、不避萬死之地、遂斬磐井、果定疆場、十二月、筑紫君葛子、恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

〔釋日本紀述義十三〕筑後國風土記曰、上妻縣、縣南二里、有筑紫君磐井之墓墳、高七丈、周六丈、墓田南北各六十丈、東西各卅丈、石人石盾各六十枚、交陳成行、周匝四面、當東北角、有一別區、號曰衙頭、衙頭政所也、其中有一石人、假容立地、號曰解部、前有一人、裸形伏地、號曰偸人、生爲偸猪、仍擬決罪、側有石猪四頭、號贓物、贓物盜物也、彼處亦有石馬三匹、石殿三間、石藏二間、古老傳云、當雄大迹天皇○繼體之世、筑紫君磐井、豪強暴虐、不偃皇風、生平之時、預造此墓、俄而官軍動發欲襲之間、知勢不勝、獨自遁于豐前國上膳縣、終于南山峻嶺之曲、於是官軍追尋失蹤、士怒未泄、撃折石人之手、打墮石馬之頭、

〔玉勝間六〕筑紫君石井が事

むかしつくしの國に、筑紫君石井といへる國造ありけり、君といふは、上の件にいへる國造の中の一色なる君也、書紀にはすなはち國造としるされたり、されど其子の葛子といひしをば、筑紫君と記されたれば、君にてぞ有ける、繼體天皇の御世に、皇朝にそむきて无禮(ヰヤナ)かりければ、討手の使をつかはしてほろぼし給ひき、此石井いけりし世に、かねて墓をなん造りまうけたりける、そのかまへのいみじく大きにいかめしかりける事、筑後國の風土記にしるせるやう、上妻縣、縣南二里、有筑紫君磐井之墓墳、高七丈、周六丈、〇中略周六丈は高さにかなはざれば、六の上に卅などいふ字の有けむが、おちたるなるべし、かくて此石井が造りおきたりし墓のかまへは、今の世にものこりて、現にあるよしにて、ちかきほどその圖をしるし、考へをもそへたるを見しに、まことに風土記にしるせるごとくにぞ有けむとぞおぼゆる、そも〳〵石のかぎりして、かばかりいかめしく大きなるかまへを物せんことは、今の世の國持大名などのちからにも、いとたやすくは出來がたかるべし、これを思へば、そのかみ國々の國造の身のほども思ひはかられて、けしうはあらざりけむかし、かの圖は寫しおきたりしを、今え見出ず、見出たらむ時に、又もいひてんとす、

〔日本書紀七景行〕四年、夫天皇之男女、前後幷八十子、然除日本武尊、稚足彥天皇、〇成務五百城入彥皇子之外七十餘子、皆封國郡、各如其國、故當今時、謂諸國之別者、卽其別王之苗裔焉、

〔日本書紀通證十二景行〕諸國之別、今按、別卽姓氏錄所謂皇別而後爲姓、故孝德紀列言別、臣、連、伴造、國造、村首、海東諸國記曰、景行天皇十三年癸未、賜諸國人姓氏、別(ワカレ)王(ミコ)、孝德紀所謂始王之名名是也、禮大傳別子爲祖、繼別爲宗、杜氏通典註、諸侯庶子別爲後代始祖者也、

〔倭訓栞前編四十二〕わけ　上古の名に、別といへるもの多し、わかれて始祖となれるをいふ成べし、釋に、嫡子繼之、庶子封諸侯王、故曰別と見えたり、

縣主

〔古事記 中景行〕凡此大帶日子天皇〇景行之御子等、所錄廿一王、不入記五十九王、幷八十王之中、〇中略七十七王者、悉別賜國國之國造、亦和氣。及稻置縣主也、

〔古事記傳 二十六〕和氣は、國造稻置などの類にて、諸國處々にありて、此より以前には、境岡宮(懿德)段に、血沼別、多遲麻竹別、伊邪河宮(開化)段に、葛野別、近淡海蚊野別、若狹耳別、三河穗別など、其次々にも、此より下にも、多く某別とある、皆是なり、此段(日代宮)の内に、三野之宇泥須和氣と、假字にも書たり、上として、其地を治むる人を云、名義は、別と書るは借字にて　吾君兄の意なるべし、此類に、君と云尸もあり、又兄なること、傳七に云るが如し、同直と云もある、其も阿多比類を以て知べし、宿禰も少兄なり、凡て諸の尸、みな崇めて呼稱なり、さて此因に、此に云べきことあり、御世々々の皇子等の御名、及さらぬ人の名にも、某別と云が多き、かの諸國の尸の別は、某之別と云を、人名の別は、たゞに某別と云て、之とは云はず、其も名意は、吾君兄なり、天皇の、己命の御子たちを、君と名けたまはむことは、いかゞと思ふ人もあるべけれど、そはひが心なり、應神天皇の御言に、大雀命を佐邪岐阿藝と詔へることなどもあるをや、然れども、此に擧たる、國々の尸の別と、人名の別とは、本より異なり、思ひ混ふべからず、

〔新撰姓氏錄 右京皇別下〕佐伯直

景行天皇皇子稻背入彥命之後也、男御諸別命、稚足彥天皇諡成務御代、中分針間國給之、仍號針。間別。

〔日本書紀 三神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、〇中略給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、是菟田主水部遠祖也、弟磯城名黑速爲磯城縣主、〇中略又頭八咫烏亦入賞例、其苗裔卽葛野縣主主殿部〇縣主主殿部、原作主殿縣主、部、據書紀集解改、是也、

〔倭訓栞 前編阿二〕あがた　縣主は、神武天皇の御代より見えたり、縣邑を治むる者をいふ、後かばねとなれり、

〔職官志 一〕縣是官家所班田、讀爲安賀多、大祖〇神武始置縣主、若磯城縣主黑速、猛田縣主弟猾是也、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化元年八月庚子、詔國司等曰、〇中略其於倭國。六。縣。被遣使者、宜造戶籍、幷挍田畝、謂檢墾田頃畝、及民戶口年紀、

〔延喜式八祝詞〕廣瀨大忌祭

倭國能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾母、○中略初穗者汁爾母穎爾母、𤭖乃閉高知、𤭖乃腹滿雙氏如横山打積置氏奉乎登王等、臣等、百官人等、倭國乃六御縣能刀禰男女爾至萬氏、今年某月某日諸參出來氏、皇神前爾宇事物頸根築拔氏、朝日乃豐逆登爾稱辭竟奉久乎、神主祝部等諸聞食止宣、

〔古事記中成務〕故建内宿禰爲大臣、○中略定賜國國之堺、及大縣小縣之縣主也、

〔古事記傳二十九〕縣主は、倭國内なるを始め、國々に在る縣を掌れる者の號なり、此縣は、上に云る如く、朝廷の御料の縣なり、此御世のほどなどは、たゞ何となき、なべての地を縣と云ことは、いまだあらざりき、されば縣主と云物も、凡ての地にあるにはあらず、其記中に見えたるは、高市縣主、師木縣主、十市縣主などあり、書紀神武卷に、給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、こは倭國十市郡なる猛田にて、其邑を賜ひて、其處にある御縣の司とし賜へるなり、同き猛田の内に御縣の地と、此人に賜へる地とあるなり、此文に依て縣主と云は、たゞ其地を領ける者ぞと勿思ひまがへそ、弟磯城名黑速、爲磯城縣主など見ゆ、神武天皇の御世よりありし物なり、さて此も國造、君、直、別などの類なる者にて、日代宮段に、自其餘七十七王者、悉別賜國々之國造、亦和氣、及稻置縣主とあり、書紀安閑卷に、津國の三島縣主飯粒が、眞田四十町を、天皇に奉獻しこと見ゆ、又天武卷に、高市郡大領高市縣主許梅と云人あり、孝德御世の御制よりして、縣主なども、郡司に任しがありしと聞えたり、此も其職を子孫世々に傳ふるからに、其縣主と云即姓なり、縣主の姓は、此記にも書紀にも見えたるいと少し、姓氏錄にも甚少し、御縣にのみありし物なればなるべし、姓氏錄に、たゞ縣主とのみの姓もあるは、然る由ありけむ、○中略さて此に縣主を定賜ふとあるも、初めて此職を置れたりとには非ず、かの國造を定賜へると同じことなり、

〔碩鼠漫筆三〕縣名義追考

阿賀多は、生方にして、班田には非ざる所以を猶委曲に辨ふべし、抑班田は、孝德天皇の御時、郡縣の御制に革めさせ給ひしより後にて、既く神武天皇の御世に縣主あるに協はず、されば阿賀多は班田ならぬ事、とかく論ふにもたらざるにあらずや、又既に引く記傳の說に、上田と見えたるこそ宜からね、此御縣は、朝廷の御料の陸田物を作りて、貢進る地なり以上とあるは、さら

に動かぬ説なり、〇略 註なほ記傳の註に、縣主は倭國內なるを始め、國々に在る縣を掌れる者の號なり、〇略 註如此見えたるは殊に委し、上古の阿賀多は、御菜園にて、たゞ朝廷近き地にのみ在れば、たま〳〵遠き國々にも在るは、行宮に屬たるなり、彼國造稻置などの如く、毎國にはあらざりしなり、成務天皇の御世、皇國を百二十箇國に制め給ひ、毎國に國造を定め給ひ、其下にも稻置十人づゝ置給ひけむ事、考ふるところありて、墨水鈔卷十六北史國語考に明しおけり、披き見て了知すべし、之か御菜園を生方(アガタ)と稱し、縣字に泥む事勿れ其地を掌る者を縣主と稱し事、鈴屋翁の説の如し、此縣主の古典に見えしは、磯城縣主、神武紀、安寧紀、孝元紀、天武紀下、又古事記には、師木縣主、志幾之大縣主、國造本紀には、志貴縣主とあり、猛田縣主、大和國十市郡、神武紀、又國造本紀には、建桁縣主と有、高市縣主、古事記、姓氏錄、天武紀上下、十市縣主、古事記、孝靈紀、孝安紀にみゆ、春日縣主、綏靖紀山邊縣主、天孫本紀宇陀縣主、國造本紀添縣主、姓氏錄、以上大和國なり、山代縣主、天孫本紀賀茂縣主、姓氏錄鴨縣主、同書葛野主殿縣主部、神武紀、以上山城國、但賀茂鴨は下上兩社の縣主なり、三野縣主、清寧紀、天武紀下、河內國交野郡三野村あり、珍縣主、姓氏錄、和泉國、三島縣主、安閑紀、攝津國、など何れも朝廷の縣主なり、また水沼縣主、景行紀、筑後國三潴郡、岡縣主、仲哀紀、筑前國遠賀郡、伊覩縣主、同紀、同國怡土郡、沙麽縣主、神功紀、周防國佐波郡、等は、行宮の御設けなり、猶壹伎縣主、顯宗紀犬上縣主、姓氏錄且波(タニハノ)大縣主、古事記邇波縣君などもも、さるべき所以ある事なるべし、又倭姬命世記に、美濃縣主、河俣縣造、阿野縣造、市師縣造、飯高縣造、佐奈縣造とあるども、伊勢皇大神宮の御設けなり、かゝれば阿賀多は班田(アガタ)ならず、上田(アガタ)にも非ずして、生方(ナリカタ)なること必定なるをや、但萬葉の淡海縣、古今集、土佐日記などのは、國々の公田にて、既く轉りたるかたと聞えたり、

〔古事記 中開化〕此天皇、娶旦波之大縣主名由碁理之女竹野比賣、生御子比古由牟須美命、

〔古事記 下雄略〕初大后坐日下之時、自日下之直越道、幸行河內、爾登山上、望國內者、有上堅魚作舍屋之家、天皇令問其家云、其上堅魚作舍者誰家、答白、志幾之大縣主家、爾天皇詔者、奴乎、己家似天皇之御舍而造、卽遣人令燒其家之時、其大縣主懼畏、稽首白、奴有者、隨奴不覺而過作、甚畏、故獻能美之御幣物、〇下略

大縣主

〔古事記傳二十二〕大縣主、縣主の事は、上（傳七の八十三葉）に云り、其に大と云は、臣に大臣、連に大連と云類の例にて、加へ稱べたる號なり、朝倉宮（○雄略）段に、志幾之大縣主と云も見え、續紀には、坂上大忌寸、縣犬養大宿禰、陸奥大國造なども見えたり、是ら皆同例にて、大は殊に稱へたるものぞ、又一の考あり、其は志賀宮（○成務）段に云べし、（傳廿九の六十四葉）姓氏錄、河內國神別に、大縣主と云姓あり、其は別なるべし、

〔古事記傳二十九〕伊邪河宮段に、旦波大縣主、朝倉宮段に、志幾之大縣主と云もあり、此は臣に大臣、連に大連と云如く、大を加へて稱へたる物か、又思ふに、此に大縣小縣ともあれば、こは其縣の大なるを云るにもあらむか、（若然らば、大は其縣に附たるにて、縣主には係らず、）

〔新撰姓氏錄（河內國神別天孫）〕大縣主。　天津彥根命之後也

〔日本書紀（七成務）〕五年九月、令諸國以國郡立造長、縣邑置稻置、並賜楯矛以爲表、

〔釋日本紀（十述義）〕稻置

公望私記曰、案今稅長也、

〔古事記傳七〕稻寸は、多くは稻置と書り、（置は、於伎の於を省て取れり、日置、玉置などの例なり、）何れも借字なるべし、名義いまだ思得ず、伎は君なるべし、書紀成務卷、五年、國郡に立造長、縣邑置稻置、また孝德卷に、國造、伴造、縣稻置などもあり、さて然國々に在て、其趣相似たる中にも、國造、縣主、君、直、稻寸など、色々に分れたること、其所由も高下も、今ことごとく委曲には辨へがたし、（續紀に、天平寶字三年冬十月辛丑、天下諸姓、著君字者、換以公字とある、此よりして、君姓みな公字をかけり、）

〔古事記傳二十六〕稻置は、伊良君（イラキ）の意ならむか、良と那とは通へる例あり、（此記に、比亘島命と云名を、他書には夷島命となどあるなり、）さて伊良は郞女などの伊良なり、

〔古史傳八〕稻置は、（また稻寸とも書り、置は於伎の於を省て取れり、日置、玉置などの例なり、但し此字を書く由は下に云、）もとは職號なりしが姓に

村主

なれりしなり、其は成務天皇卷(五年の處)に、縣邑置稻置とあるは、此稱の史に見えたる始にて、名義は彼處に云如く、諸國にある屯倉(此は稻を積置所なること、垂仁天皇卷廿七年の處に委く注ふべし、)の司として、其事にあづかる謂に依て、稻君と云意の稱なるを、其意を得て稻とは書るならむ、(師も既く、置は君なるべしとは云れたりき、)

〔日本書紀 神代一〕一書曰、(中略)于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子、又因定天邑君、

〔釋日本紀 述義六〕天邑君(アマノムラキミ)

私記曰、問此號如何、答所說天者、是例文美大之辭也、言此時初定居邑之君也、是在地下而所定也、非謂在天上也、是官職初置之本也、

〔日本書紀 神武三〕及年四十五歲、謂諸兄及子等曰、(中略)遼邈之地、猶未霑於王澤、遂使邑有君、村有長、各自分疆、用相凌躒、

〔日本書紀 成務七〕四年二月丙寅朔、詔之曰、(中略)自今以後、國郡立長、縣邑置首、卽取當國之幹了者、任其國郡之首長、是爲中區之蕃屛也、

〔姓序考〕村主

村主は、成務朝廷四年春二月丙寅朔の詔に、是國郡無君長、縣邑無首渠者焉、自今以後、國郡立長、縣邑置首、(中略)とみえしとき置れし也、舊は職號なりしものゝ姓になれる也、村主の號の正しくみえしは、孝德朝廷大化二年春正月甲子朔の詔に、別臣、連、伴造、國造、村首、所有部曲之民、處處田莊云々とあるぞ始なりける、(村主なるこゝに村首とかけるにて、成務紀に縣邑置首とあるは、縣主村主の二の首なるを思ふべし、)村主をしも孝德紀に村首とかゝれしは、主首相通へるもて然かゝれたる也、そは姓氏錄に縣使主を縣使首とかけるにて知るべし、(民使首は民使は氏にて首は姓なり、此例にて、縣使首をも縣使を氏とし、首を姓なりと思ふべけれど、縣使といふ氏、太古よりありしことなし、)村主は須久理と訓べし、和名抄に、伊勢國安濃郡村主(須久利)とみえたれば也、其義は佐都久

理にて、得物撰の意なり、佐都を約れば須となれり、故須久理といへり、○中略すべて佐都と云はよくものをみとゝめて、其美物を擇りとれるの古言也、村主は諸國の邑里の長として、各地の美物を撰定て貢進れるものをさしての美稱なりしが、則姓になれる也、姓氏錄に、村主姓を負る氏々廿五氏ありつろに、諸蕃人廿四氏、神別には春日部たゞ一氏也、是は漢土人はこゝろさかしかれば、この職に置れしことの多きなべに、諸蕃の氏々に多く殘れるなり、須久理は韓語にて、韓國の官名なりしがこなたに移りしを、やがて姓にせられしから、諸蕃にのみ多しと思ひしかど、猶定かにはあらじ、故其美物を撰得るをもて、佐都に得物字を當しならめ、今も物を撰り出ることを須具流と云は、この事のなごりなるを思へ、久理はつぎ〳〵に物をみるにいふことながら、撰定むるの意こもれり、ものを久理かへし〳〵いふは、ことをよくとゝのふべきことにて、彼丁寧反復の義也、又糸を久流、書籍を久流などいふも、ことのもとは同きをや、須久理は諸國の各邑に居て、其職をなせれば、意を得て村主字を當られし也、

〔氏族考上〕村主は須久理と訓む、○中略成務紀四年の詔に、國郡立長、縣邑置首とみえし時置れし職號なるが、姓になれる也、○中略さて村主は、諸國の邑里の長として、其地を治る職なりしが、後に姓となれるなるべし、○註略名義は、俊秀の義なるを、文字は其村中の主首となる俊秀人を撰て、村の主とする由にて、村主とは書るなめり、一説に、須久理は漢語にて、漢國の官名なりしが、こなたにうつりしを、やがて姓にせられしから、此姓諸蕃にのみ多しと云るに因て、又按ふに、天智紀二年に、白村江あり、然らば新羅の地名なるが、村をスキと訓み、又欽明紀二年、皇極紀元年、ともに主をニリムとも訓り、然らば村主はスキニリムの合語なるを、キニを、キに約め、キをクに轉じて、スクリとなれるにはあらじ歟、なほよく考ふべし、

〔日本書紀七景行〕五十五年二月壬辰、以彥狹島王拜東山道十五國都督、是豐城命之孫也、然到春日穴咋邑、臥病而薨之、是時東國百姓、悲其王不至、竊盜王尸、葬於上野國、　五十六年八月、詔御諸別王曰、汝父彥狹島王、不得向任所而早薨、故汝專領東國、是以御諸別王承天皇命、且欲成父業、則行治之、早得善政、時蝦夷騷動、卽擧兵而擊焉、時蝦夷首帥足振邊、大羽振邊、遠津闇男邊等、叩頭而來之、頓首受罪、盡獻其地、因以免降者而誅不服、是以東久之無事焉、由是其子孫於今在東國、

筑紫大宰

〔日本書紀崇神五〕四十八年正月戊子、天皇勅豐城命、活目尊曰、汝等二子、慈愛共齊、不知曷爲嗣、各宜夢、朕以夢占之、二皇子於是被命、淨沐而祈寐、各得夢也、會明、兄豐城命以夢辭奏于天皇曰、自登御諸山、向東而八廻弄槍、八廻擊刀、〇中略則天皇相夢、謂二子曰、兄則一片向東、當治東國、四月丙寅、立活目尊爲皇太子、以豐城命令治東、是上毛野君、下毛野君之始祖也、

〔日本書紀推古二十二〕十七年四月庚子、筑紫大宰奏上言、百濟僧道欣、惠彌爲首一十人、俗人七十五人、泊于肥後國葦北津、

〔秇苑日涉一〕國號一

按、在昔筑紫置太宰府、蓋在推古天皇以前、日本書紀曰、推古天皇十七年夏四月、筑紫太宰奏上、筑紫太宰始見于茲、然其所創、不可得而稽矣、

〔日本書紀皇極二十四〕二年六月辛卯、筑紫大宰馳驛奏曰、高麗遣使來朝、

國宰

〔古事記下清寧〕爾山部連小楯、任針間國之宰時、到其國之人民名志自牟之新室樂、

〔釋日本紀十一述義〕宰ミコトモチ

私記曰、師說、令持天皇御言之人也、故稱美古止毛知、

〔古事記傳四十三〕宰は、美許登母知と訓り、御命持にて、天皇の大命を承賜はり持て、往て其國の政を執行ふよしの名なり、萬葉二十四丁に、君之御言乎、持而加欲波久、これは宰のことにはあらねど、言は同じ、五十三一丁に、勅旨、戴持氐、唐能、遠境爾、都加播佐禮、これは遣唐使の事なり、十七四十二丁に、須賣呂伎能、乎須久爾奈禮婆、美許登母知、多知和可禮奈婆、これは宰の事なるを、みこともちを用言に云り、又同巻に、於保伎美乃、美許等可之古美、乎須久爾能、許等登里毛知氐、これは御命を持てと云には非ねども、事は同じ、などあるが如し、さて宰の始は詳ならず、上代より有しものなるべし、書紀神功巻に、新羅宰、應神巻に、海人之宰などあり、國司と云も是なり、仁德巻に、遠江國司、雄略巻に、任那國司などあり、さて古は後世の如く、國毎に常に必置れたりとは見えず、國別に必置て、後世の如くに定められたるは、孝德天皇の御世よりの事と見えたり、孝德紀の記しざま、しどけなき故に、慥には聞えざれども、

大かた然聞ゆるなり、大化元年八月に、拜東國等國司、仍詔國司等曰云々、これ東國とあれども、畿內、七道諸國の國司に詔ありし趣と聞ゆるなり、天武卷に、詔曰、凡任國司者、除畿內陸奥長門國以外、皆任大山位以下人、などあり、さて後世の書どもに、或は國造と國司とを同じことに云、或は皇極天皇の御時に、國造を國司と改めらると云、或は國造と國司とを並置るなど云るみな古のさまを委くも考へずして、みだりに云るひがことなり、凡て後世の書どもに、古の事を云るは、何事も皆此類にて、いとうひ〳〵しきことのみなり、そも〳〵國造の事は、上に委く云る如くにて、代々傳へて、其處に在て動くことなき物なり、國司は、時々に人をえりて、朝廷より任たまふ物にて、もとより國造とは甚く異なる物なり、

〔姓序考〕國司

國司は宰にて、各時に任れて職號也、後代のごとく、年限ありて、各國にあるものにはあらず、國司は久。邇。乃。美。許。止。毛。知。と訓べし、古事記下卷甕栗宮の段に、山部連小楯任針間國之宰時、到其國之人民名志自牟之新室樂云々とあるを、顯宗紀には、白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡、親辨新嘗供物、適會縮見屯倉首、縱賞新室、以夜繼晝云々といへり、故國司は、朝廷より國事を辨べきために下し給へることなるを知れ、こゝに親辨新嘗供物とかゝれし六字を、巡行郡縣收斂田租の八字にかきかへし書もありとみえしもて、太古國司と云しものは、收斂のために、任れしを思ふべし、皇極朝廷二年冬十月丁未朔己酉の詔に、國司如前所勅、更無改換、宜之厥任、愼爾所治、又孝德紀に、大化元年八月丙申朔庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰云々、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戶籍、及校田畝、其薗池水陸之利、與百姓俱、又國司等在國不得判罪、不得取他貨賂、令致民於貧苦、上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、但以公事往來之時、得騎部內之馬、得飡部內之飯云々、其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人、若違限外將者、主與所從之人、並當科罪とあるにて、當時の國司の狀を知るべし、國司は國造郡司の上にありながら、部內の事をこゝろにまかせてなすことなかりしをや、在國不得判罪とあるにて、收斂のこと外の事にはかゝはらざることを思へ、こゝに在國とあるをもて、思ふべけれど、然ならず、つぎにいへるをみて、其狀を知るべし、二年三月癸亥朔甲子、詔東國國司等曰云々、故前以良家大夫、使治東方八道、既而國司之任、六人奉法、

二人違令云々、以去年八月、朕親詔曰、莫因官勢取公私物、可喫部内之食、可騎部内之馬、若違所誨、次官以上降其爵位、主典以下決其苔杖、入己物者倍而徵之、詔既若斯、今問朝集使及諸國造等、國司至任奉所誨不、於是朝集使等具陳其狀云々、前詔曰、國司等莫於任所自斷民之所訴云々、又諸國造違詔送財於己國司、遂倶求利云々、自今以後、國司郡司、勉之勗之、勿爲放逸とあるにて、その狀をおしはかり思ふべし、さて書紀に、諸國の國司のみえしものは、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯清寧紀、河内國司崇峻紀、播磨國司岸田臣麻呂天智紀、對馬國司忍海造大國天武紀下、美濃國司同上、下野國司同上、出雲國司持統紀、相模國司布勢朝臣色夫智同上、越前國司同上等也、國司郡司の序次のみえしは、孝德紀に、國司、國造、郡領、天武紀に、國司國造郡司などあり、されど何代より置れしにや考得ず、

〔日本書紀十五顯宗〕白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡親辨新嘗供物、一云、巡行郡縣收斂田租也、適會縮見屯倉首、縱賞新室、以夜繼晝、

元年四月丁未、詔曰、凡人主之所以勸民者、惟授官也、國之所以興者、惟賞功也、夫前播磨國司來目部小楯更名磐楯、求迎擧朕、厥功茂焉、所志願勿難言、○下略

〔日本書紀二十二推古〕十二年四月戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、○中略十二曰、國司國造勿斂百姓、

〔日本書紀二十四皇極〕二年十月己酉、饗賜群臣伴造於朝堂庭、而議授位之事、遂詔國司、如前所勅、更無改換、宜之厥任、愼爾所治、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉元年二月戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉曰、國造首之同族贄、正月九日於麻山獲焉、

〔古事記傳七〕國々に宰(ミコトモチ)を置れて後、古國造は、世々傳て其國を治めたり、漢國の古の封建の制と云も、此に似たり、然るに孝德天皇の御世より、彼國の郡縣の制と云をまねびて、京より國司(クニノミコトモチ)をかはる〴〵に遣て、國々を治めしめ賜ふことに爲れり、其より前にも、宰と云者は有つれども、毎國にに必定めて置れたるは、彼御代よりなり、國造は

國司の下に立て、多くは郡領などに任れり、

〔古事記傳二十九〕世に國造と國司とを、一ッ物の如く心得たるも非なり、國造は世々其職を傳へて、其國に在し者、國司は京より下されて、年の限ありて替る者にて、趣異なるをや、又孝德御世に、國造を改めて國司とせらると云も違へり、其は國造の治を改めて、國司の治にせらるとこそ云べけれ、

任那宰

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕吉田連
大春日朝臣同祖、觀松彥香殖稻天皇諡孝昭皇子、天帶彥國押人命四世孫、彥國葺命之後也、昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彥天皇○崇神御代、任那國奏曰、臣國東北有三巴汶地、上巴汶、中巴汶、下巴汶、地方三百里、土地人民亦富饒、與新羅國相爭、彼此不能攝治、兵戈相尋、民不聊生、臣請將軍令治此地、卽爲貴國之部也、天皇大悅、勅群卿令奏應遣之人、卿等奏曰、彥國葺命孫鹽乘津彥命○乘一本作垂、頭上有貴三岐、如松樹、因號松樹君、其長五尺、力過衆人、性亦勇悍也、天皇令鹽乘津彥命遣、奉勅而鎭守、彼俗稱宰爲吉、故謂其苗裔之姓爲吉氏、男從五位下知須等、家居奈良京田村里間、仍天璽國押開豐櫻彥天皇諡聖武神龜元年賜吉田連姓、吉本姓、田取居地名也、今上○嵯峨弘仁二年、改賜宿禰姓也、續日本紀合、

〔日本書紀十四雄略〕七年、是歲吉備上道臣田狹、侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰、天下麗人莫若吾婦、茂矣綽矣、諸好備矣、曄矣溫矣、種相足矣、鉛花弗御、蘭澤無加、曠世罕儔、當時獨秀者也、天皇傾耳遙聽、而心悅焉、便欲自求稚媛爲女御、拜田狹爲任那國司、(ミマナノミコトモチ)

哆唎國守

〔日本書紀十七繼體〕六年十二月、百濟遣使貢調、別表請任那國上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁四縣、哆唎國守(クニノミコトモチ)穗積臣押山奏曰、此四縣、近連百濟、遠隔日本、旦暮易通、鷄犬難別、今賜百濟合爲同國、固存之策、無以過此、○下略

新羅宰

〔日本書紀九神功〕九年春二月、足仲彥天皇○仲哀崩於筑紫橿日宮、(中略)一云、禽獲新羅王、詣于海邊、拔王臏肋、令匍匐石上、俄而斬之、埋沙中、則

留一人爲新羅宰而還之、

〔日本書紀神功九〕於是高麗百濟二國王、聞新羅收圖籍、降於日本國、密令伺其軍勢、則知不可勝、自來于營外、叩頭而歎曰、從今以後、永稱西蕃、不絶朝貢、故因以定内官家、是所謂之三韓也、

百濟宰

〔日本書紀敏達二十〕六年五月丁丑、遣大別王與小黑吉士、宰於百濟國、王人奉命、爲使三韓、自稱爲宰、言宰於韓、蓋古之典乎、如今言使也、餘皆倣此、

夷守

〔日本書紀景行七〕十八年三月、天皇將向京、以巡狩筑紫國、始到夷守、是時於石瀨河邊、人衆聚集、於是天皇遙望之、詔左右曰、其集者何人也、若賊乎、乃遣兄夷守弟夷守二人令覩、乃弟夷守還來而諮之曰、諸縣君泉媛、依獻大御食、而其族會之、

〔三國志魏志三十倭人傳〕倭人、在帶方東南大海之中、〇中略始度一海、千餘里、至對島國、其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、〇中略又南渡一海千餘里、名曰瀚海、至一大國、官亦曰卑狗、副曰卑奴母離、〇中略東南至奴國、百里、官曰兕馬觚、副曰卑奴母離、有三萬餘戸、東行至不彌國、百里、官曰多模、副曰卑奴母離、

〔白石遺文上史論〕孝德改新詔

魏志云、官曰多模、副曰卑奴母離、多模卽伴造也、卑奴母離卽夷守也、夷守見景行帝紀、

古事類苑

官位部五

令制官職一

令制官職總載

官ニ官、省、職、寮、司ノ別アリ、官ハ神祇、太政ノ二官ニ止ル、神祇官ハ所管ノ官衙ナク、太政官ハ中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内ノ八省ヲ管セリ、省ノ下ニ職、寮、司アリ、八省ハ太政官ニ管セラレ、職、寮、司ハ省ニ管セラルヽヲ以テ、被管ト稱シ、被管ニ對シテ、官、省ヲ總官、總省ト稱セリ、官、職、寮、司ノ外ニ坊、監、署、臺、府、使アリ、坊ハ春宮ノアル時ニノミ置カレ、其下ニ監、署アリ、臺、府、使ハ之ヲ管スル所ヲ擧ゲザレドモ、蓋シ倶ニ太政官ニ直隷スルナリ、而シテ大寶制令ノ時、置レザルモノヲ令外官ト稱ス、職名ニ左、右、大、中、少ヲ冠シテ別テルモノアリ、左右大臣、大中少納言ノ如シ、

凡テ官員ニハ、長官、次官、判官、主典ノ別アリ、其用字ハ官衙ノ品ニ由リテ、之ヲ分チタレド、其稱呼ニ至リテハ、均シク、カミ、スケ、ジヨウ、サクワント云フ、是ヲ四等官ト稱ス、然レドモ官衙ノ小ナルモノハ、必ズシモ此四等官ヲ具備セズ、官員ニ文武内外ノ別アリ、文武官ハ帶仗スルト、然ラザルトヲ以テ別チ、内外官ハ京ノ内外ヲ以テ別ツ故ニ内官ヲ又京官ト云フ、又職事官、散官アリ、執掌アル者ヲ職事官ト云ヒ、執掌ナキ者ヲ散官ト云フ、凡テ官員ヲ補スルニ、勅任、奏任、判任、判補ノ別アリ、勅旨ヲ以テ補任スルヲ勅任ト云ヒ、太政官ノ奏聞ヲ經テ任ズルヲ奏任ト云ヒ、式部銓擬シ太政官ニ申シテ補スルヲ判任ト云ヒ、式部省ニ於テ判シテ補

官位名稱

スルヲ判補ト云フ、正官以外ニ任ズルヲ、員外官ト稱シ、後ニ權官ト稱ス、一官ニ任ジテ、又他官ヲ兼ヌルヲ兼官ト云ヒ、官ヲ去リテ後、原任ヲ稱シテ前官ト云フ、一官ヲ有シテ、別ニ一職ヲ擔當スルヲ別當ト稱ス、後世官職ヲ世襲スルモノアリ、小槻ノ官務、中原ノ大外記ノ類是ナリ、

官位ニハ、歿後ニ加贈スルモノアリ、贈官ハ文武天皇大寶元年、大納言正廣參大伴宿禰御行ニ、正廣貳右大臣ヲ贈リシヲ以テ初見トシ、贈位ハ天武天皇二年、大錦上坂本財臣ニ小紫ノ位ヲ贈リシヲ以テ初見トス、而シテ大寶ノ律令ニハ、贈位ハ子孫ヲ蔭スルコトヲ得テ、其出身スルニハ、王事ニ死セシ者ノ子孫ノ外ハ、正位ニ一等ヲ降シテ敍シ、犯罪ノ時ハ、議請減贖ノ恩ヲ蒙ルコト、全ク正位ト同ジ、是ヨリ後、或ハ其勞効治績戰功ヲ褒シ、或ハ絶域ニ使シテ歿セシヲ追悼シ、或ハ遷謫ノ人ノ怨魂ヲ慰スル等ニテ、其類固ヨリ一ナラズ、而シテ葬日ニ勅使ヲ遣シ、其第ニ就テ宣命位記ヲ讀マシム、若シ葬後ノ贈位ナレバ、大臣以上ハ其墓所ニ於テセシム、自餘ハ時宜ニ依リテ斟酌アリ、而シテ贈官贈位ニハ、歿後ニ卽チ贈ルアリ、年ヲ經テ後ニ贈ルアリ、生前ニ授クベキヲ、歿後ニ至リテ贈ルアリ、一タビ贈リテ後ニ更ニ之ヲ累贈スルアリ、位ヲ贈リテ幷ニ位封ヲ賜フアリ、

神階ノ事ハ神祇部ニ、僧官ノ事ハ釋敎部ニ、女官ノ事ハ別ニ其篇アレバ、宜シク參看スベシ、

〔伊呂波字類抄〕久疊字官位

〔官職難儀〕官位とも位官とも申候也

位官とも云也、聞よきゆへ、官位と常に申也、自然人の官位と申たりとも、おかしき事にてはなき也、

〔官職知要〕上官與職如何

官制參酌唐制

官は職の名なり、以二其官號一可レ知二其職一也、官位令義解曰、大臣以下書吏以上を官といふ、職員令義解曰、職者職司也云々、是は諸の官號をあげて、其職掌をわかち給ふ也、畢竟官には職あり、位には職なし、故に官職一なり、或人云、攝政關白及檢非違使藏人を職といひ、其外を官といふといへり、去かりといへども和名鈔に職名部とあげて、大臣以下もろ〳〵の長官、次官、判官、主典をのせられたり、去からば官又職といふべし、職原抄にも例あり、又諸官舍を官とも云、和名抄に官名部とあげて、神祇官、太政官、八省、諸職、諸寮、諸司、彈正臺、春宮坊、近衞府、衞門府、兵衞府以下のつかさづかさを載られたり、是も略していふ時は、官、省、職、寮、司、臺、坊、府などゝいふ、職原抄にみえたり、

〔本朝官制沿革圖考序〕及二推古之世一制二冠位十二一、至二孝德之時一置二八省百官一、其後沿革不レ一、而多率二舊章一、參二之周漢之制一、專遵二李唐之法一、品秩惟叙、職任惟分、文章粲然、至レ今有レ賴、

〔制度通三〕唐三省　本朝太政官ノ事

本朝三公ノ職、唐官ニ配當スルトキハ、周ノ制並ニ唐ノ三公ヲ以テイヘバ、太師、太傅、太保ニ準ズ、孝謙帝ノ時、改號コレヲ以テ稱セラル丶ナルベシ、唐ノ制ヲ以テイフトキハ、尙書省ハ太政官ニアタル、尙書省ノ長官貳官ヲ、尙書令、左僕射、右僕射トイフ、實ニ本朝三公ノ任ナリ、然ドモ唐ノ時ニハ、尙書令ハ三省ノ長官ニテ、宰相ノ任ナレドモ、三公ノ員數ニアラズ、宰相ハ必僕射ヲ兼レドモ、僕射ハ宰相ノ官ニアラズ、本朝ノ法ト同カラズ、大抵本朝唐ニヨリテ官制ヲ立ラレタレドモ、此等ノ事ハ、唐ノ法ヨリ簡ニシテ正シク、三公卽宰相ノ任ナリ、名實相副フテ重複虛設ノ弊ナシ、

〔職官志七〕諸官廢置、按、制レ官省二其冗一、爲レ政理二其煩一、是經國之要、而民之所二由息一焉、本朝制レ官、雖レ效レ唐也、咸省二其冗一、令レ就二簡要一、乃在二太政一自有二三公一、〇註略 三公三師不二復別設一空名一、〇註略 是蓋所三以重二侍宰相一執政大臣通稱也、而望レ有二實效一也、且以二京官一而概レ之、彼唐建二官司之目一、既多且重矣、有二六省一、曰二尙書一、總二其六官一以理二二十四司一、〇中略 當時或以論二其冗一、〇註略 則省レ之、是理當然也、今如二太政官一卽唐尙書也、〇註略 而幷二門下一焉、〇註略

中務省、卽以中書、亦兼併門下之屬、略○註而同隷七省以總於官、所謂七省、卽尙書六官也、惟兵部刑部仍其舊稱、而改吏部曰式部、戶部曰民部、禮部曰治部、工部兼殿中曰宮內、略○註且加之以大藏也、大藏取名於大府、略○註二十四司、惟戶部之度支作主計寮、倉部作主稅寮、乃廢其餘屬、而以省及寺監與其屬官更加焉、夫宮內以其己當工部、故管木工寮、木工寮采之將作、略○註然而其實爲殿中、故殿中之尙舍局作主殿寮、略○註尙食局作內膳司、略○註並屬於宮內、而尙藥局作內藥司、略○註尙衣局作縫殿寮、註○略並屬於中務、蓋以中內之與中務、職頗同焉、中宮職采之內侍、略○註圖書寮來之秘書、略○註而秘書之大史局作陰陽寮、略○註亦屬於中務、旣有八省、若加之寺監、如唐則其職紛錯疑似、臨時煩亂、是故惟大常爲神祇官、略○註大府爲大藏省、併司農于民部、併衞尉大僕大兵部、併大理于刑部、併光祿于宮內、而宗正爲正親司、略○註以屬於宮內、且光祿之大官署爲大膳職、略○註良醞署爲造酒司、略○註司農之大倉署爲大炊寮、略○註上林署爲園池司、略○註大常之大醫署爲典藥寮、略○註亦屬焉、鴻臚爲玄蕃寮、略○註以屬於治部、大常之諸陵署爲諸陵司、略○註大樂署爲雅樂寮、略○註鴻臚之司儀署爲司喪寮、略○註亦屬焉、大常之鼓吹署爲鼓吹司、略○註以屬於兵部、大僕之諸牧監爲兵馬司、略○註亦屬焉、典廐署爲左右馬寮、略○註以屬於左右兵衞府、衞尉之武庫署爲左右兵庫寮、略○註亦屬焉、大府之諸市署爲東西市司、略○註以屬於左右京職、國子爲大學寮、略○註以屬於式部、而六學不建、猶置大學、略○註及音書算博士、少府不擬設、然屬其掌治署、織染署於大藏、而曰典鑄司、織部司、略○註軍器不擬設、然屬其甲坊署、弩坊署於兵部、合作造兵司、略○註鑄錢監、是爲鑄錢司、不常置之、將作已爲木工寮、且以其甄宮署作宮陶司、略○註而屬於宮內、都水其可擬防鴨河使防葛野使、亦不常置之、然屬其舟楫署於兵部、而曰主船司、略○註御史臺、卽作彈正臺、而省其三院、略○註凡其所省、大率居大半云、二十四司省十六、秘書之二署省一、殿中之六局省二、內侍之五局皆省之、御史之三院皆省之、九寺省五、而大常之八署省四、光祿之四署省二、衞尉之三署省二、宗正之一署省、大僕之四署省一、二監有一、鴻臚之二署省一、司農之四署省二、大府之五署省四、五監省三、而國子之六學皆省之、少府之五署省三、一監亦省、軍器之二署二監省一、將作之四署省三、一監亦省、都水之二署皆省之、通計之是省七十也、六省以下、官司之目、凡百二十三、則其省、雖纔及其半、而官屬之省、亦已不少、蓋有三

官有官省職寮等別

十餘矣、故曰大半、如彼軍衞州縣之員、以其甚多、不復敢校、

〔倭名類聚抄 五官名〕官 本朝式職員令云、神祇官加美豆加佐 大政官於保伊萬豆利古止乃官

〔倭名類聚抄 五官名〕省 職員令云、中務省奈加乃萬豆利古止乃豆加佐 式部省乃利乃豆加佐 治部省乎佐牟留豆加佐 民部省多美乃豆加佐 兵部省都波毛乃乃都加佐 刑部省宇多倍多々須都加佐 大藏省於保久良乃都加佐 宮內省美夜乃宇知乃都加佐

〔段注說文解字 四上眉〕省 視也、省者察也、察者覈也、漢禁中謂之省中、師古曰、言入此中者、皆當察視、不可妄也、釋詁曰、省善也、此引伸之義、大傳曰、大夫有大事、省於其君、謂君察之、而得其大善也、从眉省、从屮、屮音徹、木初生也、財見也、从眉者、未形於目也、从屮者、察之於微也、凡省必於微、故引伸爲減省字、說文有渻媘二字、然經傳多作省、所景切、亦息井切、十一部、

〔故實拾要 十二〕八省

是八省トハ官人ノ集リ居ル舍ヲ名付也、省ハツカサト讀テ、此官職ヲ司トルト云心也、此官八有、故八省ト云也、

〔倭名類聚抄 五官名〕職 職員令云、中宮職奈加乃美夜乃豆加佐 大膳職於保加之波天乃豆加佐 修理職乎佐女豆久留豆加佐 左京職比多利乃美佐止豆加佐 右京職美岐乃美佐止豆加佐

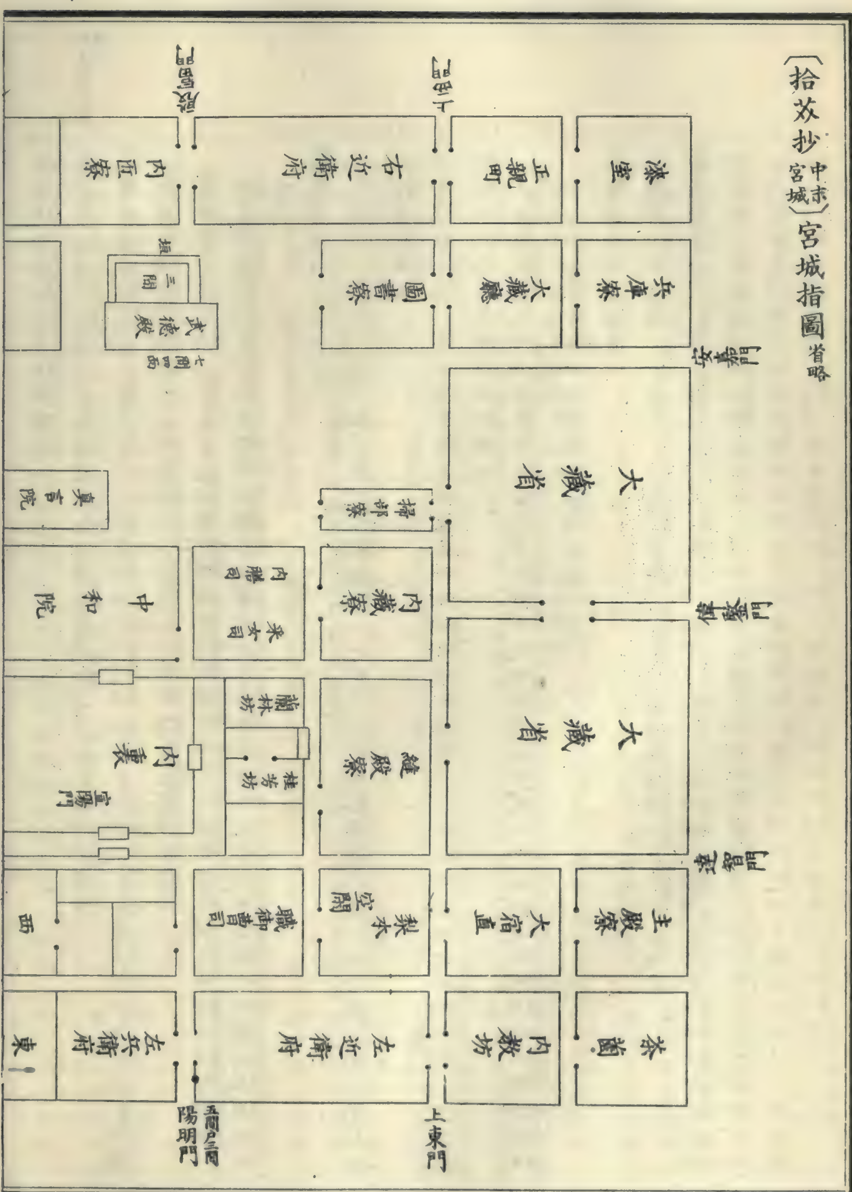
〔段注說文解字 十二上耳〕職 記微也、徵舊作微、今正、記猶識也、纖微必識、是曰職、周禮太宰之職、大司徒之職、皆謂其所司、凡言司者、謂其善伺也、凡言職者、謂其善聽也、釋詁曰、職主也、毛傳同、見詩悉蟀十月之交、周禮職方亦作識方、从耳戠聲、之弋切、一部、

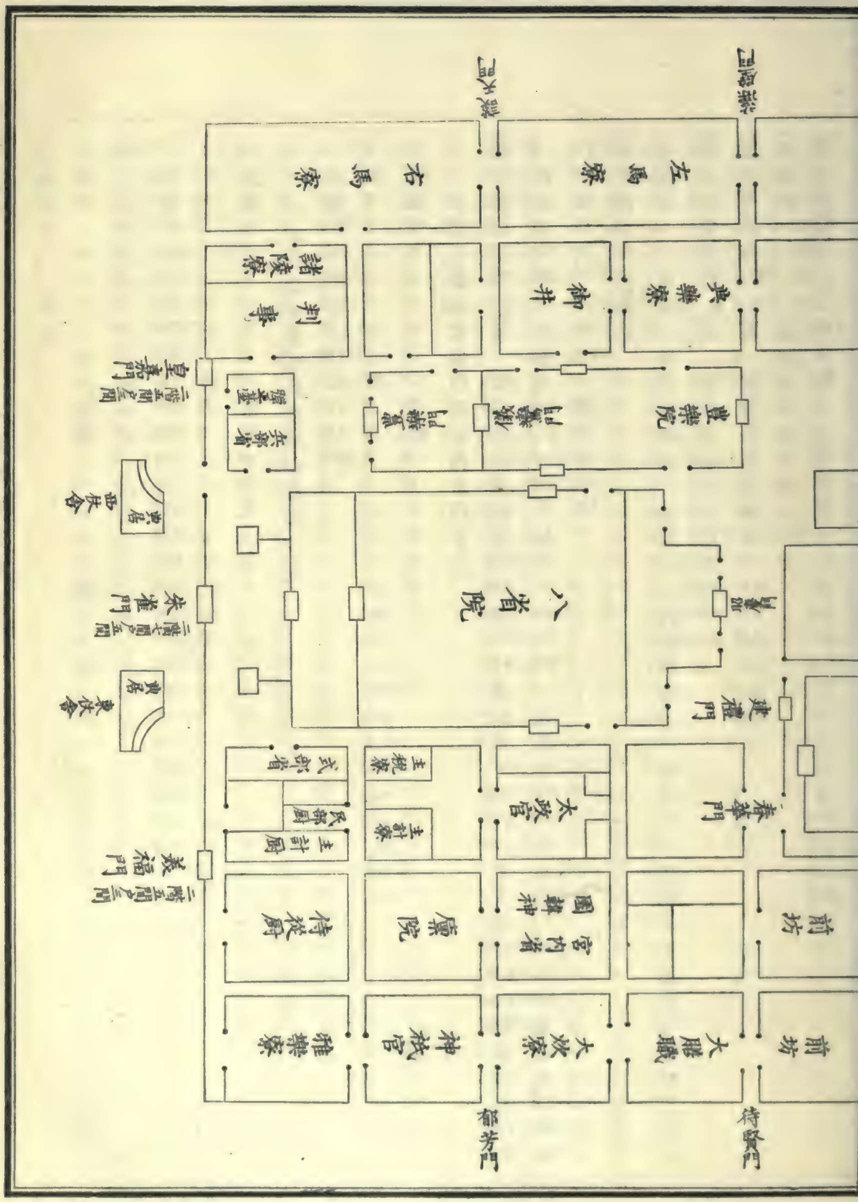
〔故實拾要 十二〕諸職

是諸職トハ八省ノ下、諸寮ノ上也、故諸職ノ大夫ハ從四位也、職ハツカサト讀也、

〔倭名類聚抄 五官名〕寮 職員令云、齋宮寮以豆岐乃美夜乃豆加佐 大舍人寮於保止禰利乃豆加佐 圖書寮不美乃豆加佐 內藏寮宇知乃久良乃豆加佐 縫殿寮奴比止乃々豆加佐 陰陽寮於牟夜宇乃豆加佐 內匠寮宇知乃多久美乃豆加佐 雅樂寮宇多末比乃豆加佐 玄蕃寮保宇之萬良宇止乃豆加佐 諸陵寮美佐々岐乃豆加佐 主稅寮知加良乃豆加佐 掃部寮加牟毛里乃豆加佐 木工寮古多久美乃豆加佐 大炊寮於保爲乃豆加佐 主殿寮止乃毛里乃豆加佐 典藥寮久須里乃豆加佐 兵庫寮豆波毛乃々久良乃官 右馬寮美岐乃牟萬乃豆加佐 左馬寮比多里乃牟萬乃豆加佐

拾芥抄（中末宮城）宮城指圖 省略




左馬寮
右馬寮
典藥寮
御井
諸陵寮
判事
皇嘉門
八省院
朱雀門
建禮門
春華門
太政官
主税寮
主計寮
式部省
前坊
大膳職
大炊寮
神祇官
雅樂寮
待賢門
郁芳門
宮内省
美福門

〔故實拾要十三〕諸寮

是諸寮トハ八省ノ被官也、寮ハツカサト讀テ、八省ノ職ノ内ヲ分テ掌之也、

〔職原鈔辨疑私考下〕大寮小寮ノ頭助允屬ノ差各左ニ記ス

大寮大舍人寮、圖書寮、内藏寮、縫殿寮、内匠寮、大學寮、雅樂寮、玄蕃寮、諸陵寮、主計寮、主税寮、木工寮、左右馬寮、兵庫寮、以上謂二之大寮一、

頭相當從五位上　助相當正六位下　大允相當正七位下　小允相當從七位上

大屬相當從八位上　少屬相當從八位下

以上大寮相當如此、權官相當同二正官一、

小寮陰陽寮、大炊寮、主殿寮、典藥寮、掃部寮、以上謂二之小寮一、

頭相當從五位下　助相當從六位上　允相當從七位上、按令式不レ分二大少允一、但後世雖レ分二大少一、共相當同、

大屬相當從八位下　少屬相當大初位上

以上小寮相當如此、權官相當同二正官一、

〔倭名類聚抄五官名〕司　職員令云、主神司、以豆岐乃美夜乃加美乃官　齋院司、以豆岐乃院乃官　隼人司、波夜比止乃豆加佐　囚獄司、比止夜乃官　織部司、於里倍豆加佐　正親司、於保岐無太知乃司　内膳司、宇知乃加之波天乃官　造酒司、佐希乃司　主水司、毛比止里乃豆加佐　東市司、比牟加之乃以知乃官　西市司、爾之乃以知乃豆加佐　鑄錢司、樹漸乃司

〔故實拾要十三〕諸司

是諸司トハ八省ノ被官也、此正ハ相當正六位也、但當司ハ職掌少キ故助ナシ、正、佐、令史ノ三分也、

〔倭名類聚抄五官名〕坊　職員令云、春宮坊美古乃美夜乃豆加佐

〔倭名類聚抄五官名〕監　職員令云、主膳監美古乃美夜乃加之波天乃豆加佐

〔令義解一東宮職員〕春宮坊管二監三署六一○中略

舍人監○中略　主膳監○中略　主藏監

〔倭名類聚抄五官名〕署　職員令云、主殿署、美古乃美夜乃止乃毛里乃豆加佐　主馬署、美古乃美夜乃牟萬乃豆加佐

〔令義解一東宮職員〕春宮坊管二監三署六一○中略

主殿署○中略　主書署○中略　主醬署○中略　主工署○中略　主兵署○中略　主馬署

〔倭名類聚抄五官名〕臺　職員令云、彈正臺、和名太々須豆加佐

〔倭名類聚抄五官名〕府　職員令云、近衞府、兵衞府、衞門府、由介比乃豆加佐　太宰府、於保美古止毛知乃司　鎭守府、

〔倭名類聚抄五官名〕局　職員令云、侍從局、於毛止比止女宇知岐美○中略　俗謂局如所、侍從所、内舍人所等是也、内舍人局、職員令云、中務省内舍人、宇知止禰利　内記局、職員令云、中務省内記、宇知乃之流須豆加佐、有二大少一、監物局、職員令云、中務省監、有二大少一　内竪局、二方品員云、令外置二之省一、寶龜三年廢レ之、今内竪三百人、俗云、知比佐和夏波、

〔箋注倭名類聚抄十一官名〕監物局、職員令云、中務省監物、於呂之毛乃々豆加佐、有二大少一、舊脱二下物字一、今依レ令増、舊脱二訓九字一、今依二持統紀一増、

〔年山紀聞一〕官底。

職原鈔准大臣の下、擬階奏連署之時、被レ尋二問官底一ヲと點したり、官底ニと點すべし、其故は公卿補任弘安六年、源基資下、擬階奏連署之時、被レ尋二問家法一とあり、小右記、寛仁二年十二月廿日文、賀茂神領叙山領相論所、抑天台四至官府在二天台一歟、又官府之案在二官底一歟、同記大嘗會事、官底無二前例一と云文もあり、山槐記、仁安二年四月廿三日文、叙負廳年始政始于今懈怠、廳。底。陵遲之基也、長秋記、后宮大夫師時記長承元年五月十五日陣定文、長和官符、粟田左大臣長者云云、符案皆在二官底一など、見えたり、されば官底、底字を誤、官位の程ライヲ被レ尋二問一と心得るはあし、、舊記に官底と指は外記局の事也、職原抄の文も、公卿補任のごとく、被レ尋二問法家一と改め見れば不審なし、後日、佐治理平次毘云、底字韻會引二海錄碎事一宋人所レ編曰、凡公文中書謂二之草一、樞密院謂二之底一、三司謂二之檢一、秘府有二梁朝宣底三卷一、コノ梁ハ五代ノ梁ナリ、五代史安重誨傳論曰、予讀二梁宣底一云云、コノ傳論ハ歐陽永叔所レ編ナリ されば、案すなはち底なり、本朝にても、もとは唐の用ひやうなるべきを、後にあやまられたるなるべし、

〔標注職原抄別記下〕官底

官底は太政官の事なるよし、標注に云るが如し、古注云、以神祇官及太政官云官底、以八省云省底、以諸寮云寮底、餘司准之、其證云、三代格云、貞觀十年六月廿八日太政官符、祭日諸社祝部等、理須未祭之前會集官底、各請幣帛、依例供祭云々、又本朝文粹第二、延喜十四年四月廿八日、三善朝臣淸行上封事意見十二箇條之中、請置諸國勘籍人定數事之篇、三省史生書生等爲奸、不觸本主、不依國解、僞稱勘籍、獨截季符、其最甚者、本主未補一人、省底已盈其數云々、又勘籍解文必二通進官、其一通留官底、一通加外題、即下式部省、省進季符之日、與官底解文勘合、然後請印云々、この注に引る三代格なる官底は、神祇官なり、本朝文粹なるは太政官なり、(標注にも引けり)底の字義は、正字通に、文案曰底、宋敏求春明退朝錄、公家文書稾、中書謂之草、樞密院謂之底、三司謂之檢、秘府有梁朝宣底二卷、即貞明中崇政院書也とあるを以て見れば、底は文書の稾の事なり、夢溪筆談云、唐曰宣底者即口宣案也云々、これまた文書の稾を底といふ證なり、然るに本朝にては、底字を官司の事に用たり、上に引く所の古注の文にて知べし、小右記の寬仁二年十二月廿日の件に、賀茂神領叡山領爭論の事をいへるに、天台四至官符在天台歟、又官符之案在官底歟、また山槐記仁安二年四月廿三日の件に、叡負廳年始政始于今懈怠、廳底陵遲之基也、また長秋記長承元年五月十五日陣定の件に、長和官符、粟田左大臣長者云々符案、皆在官底などの廳底官底も、共に官司をさせり、また永昌記の嘉承元年十二月十五日の件に、梅宮社に盜賊の入し事を云るに、承曆年中、有盜奉動御體云々、彼時正家朝臣爲辨官、參社之由、社司令申、相尋官底之處、伊家朝臣爲行事、又不參向者、また符宣抄に、公鑒朝臣參入局底、可行例務、また淸方朝臣參入局底、また宣仰國宰令勘進之、若無國底、探求部內とある、また玉葉承安二年閏十二月三日、(中略)於今者於官底被注分なども、皆官司を底といへる證文なり、但符宣抄なる局底は、外記局也、もし然らむには、此抄なる官底も外記に問るゝ事なれば、局底

ところ書給ふべく思はるれど、かく官底とあるは、御所より太政官に問せたまふ事なるゆゑ、まことは外記の撿索して申す事なれ共、外記には係ずして、汎く官底といへるもの也、彼符宣抄なる局底は太政官に居て、其内なる外記局をいへる詞也、混ずべからず、

職有左右大中少別

〔古京遺文〕威奈眞人大村墓志

小納言正五位下威奈卿墓誌銘幷序

卿諱大村、○中略藤原聖朝小納言闕、於是高門貴冑、各望備員、天皇特擢卿除小納言、○中略慶雲二年命兼太政官左小辨、○下略

〔標注職原抄上本〕少納言威奈大村墓碑に、藤原聖朝小納言とあり、大村は慶雲四年に卒せる人なり、然るに小字を用たるをおもへば、今の少納言もふるくは、小納言とやかきけん、大中小と對せるをおもへば、小のかた然るべからん歟、また同碑に兼太政官左小辨とも見えたり、

〔令義解一職員〕太政官

左大臣一人、○中略右大臣一人、○中略大納言、○註略四人、○中略少納言三人、○中略大外記二人、○中略少外記二人、○中略左大辨一人、○中略右大辨一人、○中略左中辨一人、○中略右中辨一人、○中略左少辨一人、○中略右少辨一人、○中略左大史二人、右大史二人、左少史二人、右少史二人、○下略

〔令義解一職員〕中務省

大輔一人、○中略少輔一人、○中略大丞一人、○中略少丞二人、○中略大錄一人、少錄三人、○中略大内記二人、○中略中内記二人、○中略少内記二人、○中略大監物二人、○中略中監物四人、○中略少監物四人、○中略大主鈴二人、○中略少主鈴二人、○中略大典鑰二人、○中略少典鑰二人、○下略

四等官

〔政事要略六十一糺彈雜事〕禮儀非違分別事

名例律曰、同司犯公坐者、長官爲一等、次官爲一等、判官爲一等、主典爲一等、注曰、同司者、謂連判之官、

及主典、疏云、假如刑部省斷レ事有レ違、卽卿是長官、輔是次官、丞是判官、錄是主典、是爲二四等一、

〔唐律疏議 名例五〕諸同職犯二公坐一者、長官爲二一等一、通判官爲二一等一、判官爲二一等一、主典爲二一等一、各以二所由一爲レ首、○註疏略 其闕無所承之官、亦依二此四等官一爲レ法、卽無二四等官一者、止準二見官一爲レ罪、

〔朝野群載 二十二 諸國雜事〕國務條々事

一爲レ政之處、必具二官人一事、

被レ置二四等官一皆是爲レ政也、必可レ具二其人一、

〔令義解 職員十〕凡公坐相連、○義解略 右大臣以上、及八省卿、諸司長、並爲二長官一、大納言、及少輔以上、諸司貳、皆爲二次官一、少納言、左右辨、及諸司糺判、皆爲二判官一、諸司勘署、皆爲二主典一、

〔職原抄 上〕太政官

凡諸官有二長官、次官、判官、主典一也、假令太政官大臣爲二長官一、納言爲二次官一、少納言、辨爲二判官一、史爲二主典一也、餘可レ准レ之、

〔標注職原抄 上本〕官は大かた四分にわかてるものにて、長官をカミ、次官をスケ、判官をショウ、主典をサクワンといふ、

〔倭訓栞 前編十一 し〕しぶ○中略 四分は長官、次官、判官、主典也、

〔庭訓往來諺解大成 四〕諸國に、守介掾目の四分あり、

〔倭名類聚抄 職名五〕長官　本朝職員令二方品員等所レ載、神祇曰レ伯、省曰レ卿、彈正曰レ尹、勘解由使曰二長官一、鑄錢司同、勘解由使、職曰二大夫一、寮曰レ頭、司曰レ正、主膳監同 内膳司曰二奉膳一、今案、令有二奉膳二人一、後停二奉膳一人一爲レ正、署曰レ首、近衞府曰二大將一、兵衞衞門等四府曰レ督、内侍司曰二尙侍一、太宰府曰レ帥、鎭守府曰二將軍一、國曰レ守、郡曰二大領一、家曰レ令、已上皆加美

〔令義解 職員一〕神祇官

伯一人、掌（中略）總判官事、謂卜兆以上、皆既大事、是故別注供神之人、自外諸事不可具顯、故稱總而兼之、問、總判糺判、其別如何、答、考課及他司移送諸事、不待判官、而長官得獨行、故曰總判、判官者、唯知官內尋常之事、故曰糺判、餘長官判事准此、

〔有職問答 四〕不審條々

一八省の卿には、親王の外何家迄御成候哉、

中式二省ハ、親王之外、近代不任之候、其外何ニテモ、皆任來之候、後醍醐院御宇ニハ、大臣モ皆八省ノ卿チ兼任之事候キ、是ハ邂逅ノ例候哉、

〔倭名類聚抄 五職名〕次官　本朝職員令二方品員等所載、神祇曰副、有大少、省曰輔、有大少、彈正曰弼、有大少、勘解由使曰次官、職曰亮、寮曰助、近衛府曰中少將、兵衛衛門曰佐、內侍曰典侍、太宰府曰貳、有大少、國曰介、郡曰少領、家曰扶、已上皆須介、

〔令義解 一職員〕神祇官

大副一人、掌同伯、餘次官不注職掌者、掌同長官、謂以下諸司、多不注者、故立此例、文云不注、恐似注者不同長官、此有別掌者注、无別掌者不注、故下條云抄寫判文、其主典之職掌、豈唯抄寫判文、餘皆准此條例、故特注其別掌、餘次官注職掌者、亦皆准此、少副一人、掌同大副、

〔倭名類聚抄 五職名〕判官　本朝職員令二方品員等所載、神祇曰祐、省曰丞、彈正曰忠、勘解由曰判官、餘使准此、職曰進、寮曰允、司曰佑、主膳監同、內膳曰典膳、近衛曰將監、兵衛衛門四府曰尉、內侍曰掌侍、太宰府曰監、鎭守府曰軍監、國曰掾、郡曰主政、家曰從、皆萬豆利古止比止、

〔令義解 一職員〕神祇官

大祐一人、掌糺判官內、審署文案、謂審署者、審察主典勘造文案而署之也、文案者施行曰文、補置曰案也、勾稽失、謂勾、勘也、稽、稽留也、失、失錯也、依律、公事及文書、並有稽留失錯之罪、即知稽留失錯者、行事文書皆兼之也、知宿直、餘判官准此、少祐一人、掌同大祐、

〔日本靈異記 下〕沙門誦持方廣大乘沈海不溺緣第四

諸樂京有一大僧、名未詳也、〇中略帝姬阿陪天皇代之時、聟任於奧國掾、〇中略掾音乘反

〔倭名類聚抄 五職名〕佐官　本朝職員令二方品員等所載、神祇曰史、與大政官同、省曰錄、彈正曰疏、勘解由曰

品官

主典、(餘使准レ此)職寮曰レ屬、司曰二令史一、近衞府曰二將曹一、兵衞衞門四府曰レ志、大宰府曰レ典、鎭守府曰二軍曹一、國曰レ目、郡曰二主帳一、家曰二書史一、(皆佐官)

〔倭訓栞(中編九)〕さくわん　佐官也、史錄屬目などをよむ是也、西土にも隷屬の官人を稱せり、

〔令義解(職員一)〕神祇官

大史一人、(掌下受レ事上抄、謂上者、職也、抄者、錄也、言受二判官以上處分一、而載錄也、勘二署文案一、謂勘二造文案一、而署レ之也、撿二出稽失一、謂依レ律、同司犯二公罪一、主典以上、節級連坐、故知判官以上稽失、主典皆得二撿出一、讀二申公文一、餘主典准レ此、)少史一人、(掌同二大史一、)

〔令義解(職員一)〕畫工司(〇中務省被管)

正一人、(〇中略)佑一人、令史一人、

〔令義解(職員一)〕主鷹司(〇兵部省被管)

正一人、(〇中略)令史一人、

〔令義解(職員一)〕贓贖司(〇刑部省被管)

正一人、(〇中略)佑一人、大令史一人、少令史一人、

〇按ズルニ、司ハ官衙ノ小ナルヲ以テ、判官ヲ置カズ、而シテ主鷹司ノ如キ、助、判官ノ二官ナキハ異例ナリ、ナホ四等官ノ事ハ、法律部法律總載篇連坐條ニアリ、參看スベシ、

〔續日本紀(四元明)〕和銅二年六月癸丑、勅自二太宰卒一已下、至二于品官一事力半減、

〔唐律疏議(二名例)〕諸犯二私罪一、(〇中略)以レ官當レ流者、三流同、比徒四年、

疏議曰、品官犯レ流、不レ合二直配一、既須二當贖一、所二以比徒四年一、

〔律疏(名例)〕凡犯二私罪一、(〇中略)以レ官當レ流者、三流同比徒四年、(八位以上犯レ流、不レ合二眞配一、既須二當贖一、所二以比徒四年一、)

〔三代實錄(二十一清和)〕貞觀十四年五月十九日戊子、勅遣二參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人、向二鴻臚館一、賜二渤海國使一、授二位階告身一、(〇中略)授二大使楊成規從三位一、(〇中略)品官以下

幷首領等授位各有等級、

〔類聚三代格八〕太政官符

太宰府貢上調綿一十萬屯事

右被大納言正三位藤原朝臣是公宣偁、奉勅件綿年常所貢廿萬屯、今減其數定十萬屯、宜簡差主典已上幹了者、期月貢上、不得妄差品官以致稽留、及綿代輸米交關京下、只除水脚粮之外、輙載私物深(〇深恐漂誤)失官物、若有違此制者、依法科罪、

延暦二年三月廿二日

〔日本後紀十四平城〕大同元年六月己亥、公卿奏言、量事制宜、聖皇茂典、隨時分職、哲后良規、頃年令太宰府帶筑前國、兼廢品官、庶存簡要、而今管攝多事、充用少人、伏望增置官員、得濟繁劇者、勅增加大少監、大少典各一員、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

廢品官一員、

大主城(正七位上官〇中略)

置品官二員、

主厨一員(正八位上官〇中略)

主船一員(正八位下官〇中略)

以前太宰大貳從四位上南淵朝臣永河等所謂如件、(〇中略)臣等商量廢置如右、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

承和七年九月廿三日

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月戊午、集廢坊諸人等於右衛門陣庭、詔曰、今詔久、不慮外(爾)太上天皇

雜任

崩賜比奴、此隙留乘天春宮乃帶刀舍人伴健岑伊與橘逸勢合力天國家平傾亡止謀利〈礼中略〉〇坊司幷品官乃佐官以上及侍人藏人諸近仕者等、又司乃長以上平波皆流罪留當給不、就中留自先有官留人平波皆配所乃員外官留任給不、但品官乃判官以下波不在任限、〇下略

〔延喜式五春宮〕凡從行群官以下給馬、主神司、中臣、忌部、宮主各二疋、頭四疋、助三疋、諸司主典以上各二疋、番上各一疋、〇中略品官不要者、在前發遣、

〔延喜式四十三春宮〕凡十二月晦日戌時追儺、坊官率品官舍人等候南門外、

〔除目大成抄七〕陰陽寮

請被殊蒙天恩停止他非巡望任道理次第轉任官人品官等狀

正六位上行少屬中原朝臣相則

右相則爲屬第一、年勞漸積、轉任之理、自以相當、仍申請允闕、

正六位上行陰陽師大中臣朝臣爲兼

右爲兼爲陰陽師第一、勤勞共允、仍申請少屬相則轉允之替、

前陰陽得業生正六位上惟宗朝臣忠成

右忠成成業之後、年勞久積、任陰陽師、其運自至、仍申請陰陽師爲兼轉少屬之所、

以前官人品官等任道理次第、可被轉任之狀、擧奏如件、望請天裁一々被轉任、將令勤職掌、仍勒事狀、謹請處分、

永久四年正月廿五日

從五位下行權助賀茂朝臣

正五位下行兼主計權助賀茂朝臣家榮

從四下行雅樂頭安倍朝臣泰長

〔令義解一職員〕職員令第二〈中略〉員者、員數也、官省寮司等各有員數也、細而言之、則司別長官以下、雜任以上也、

史生

〔唐律疏議（職制十一）〕諸監臨之官、私役使所監臨、及借奴婢牛馬駝騾驢車船碾磑邸店之類、各計庸賃、以受所監臨財物論、（○疏議略）即役使非供已者、（非供已、謂流外官及雜任應供官事者、）計庸坐贓論、罪止杖一百、其應供已驅使、而收庸直者、罪亦如之、（供已求輸庸直者不坐、）

疏議曰、非供已謂流外官者、謂諸司令史以下、有流外告身者、雜任、謂在官供事、無流外品、

〔令義解（賦役三）〕凡應免課役者、皆待蠲符至、（謂蠲除課役之符也、○中略）其雜任被解應附者、（謂舍人、及兵衛資人等被解却、其衛士仕丁等解下者亦同也、）皆依本司解時日月據徵、

〔令義解（選敍四）〕凡官人至任、若無印文者、不得受代、（謂此爲主典以上立文、其雜任亦准此、）

凡官人、年七十以上、聽致仕、（謂主典以上、即雜任亦准此也、）

〔令義解（公式七）〕辭式

年月日位姓名（○註略）辭、（此謂雜任初位以上、謂无位雜任亦准此、若庶人稱本屬、）

其事云々、謹辭、

右內外雜任以下、申牒諸司式、

〔令義解（公式七）〕凡國司使人、送解至京、（謂其爲國司所差遣者、郡司及雜任皆是、）十條以上、限一日申了、（○下略）

〔日本後紀（平城十七）〕大同三年七月乙未、是日詔曰、（○中略）七衛府雜任已下、員伍稠疊、思慥減省、卿等詳議、定數奏聞、

〔名目抄（人體）〕史生（シシヤウ）

〔倭名類聚抄（職名五）〕史生　職員令云、史生（俗二音如賞）今案、官局以上及諸國一分皆謂之史生、一分者蓋俸料之分法、長官五分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分之義也、

〔令義解（職員一）〕太政官

史生十人、（掌下繕寫公文、行署文案上、謂行官人所取文案署也、餘史生准此、）

〔令集解職員二〕古記云、問繕寫與造若爲別、答造謂自親案成並上鈔也、繕寫謂承案成轉治寫裝潢等也、〇中略釋云、賷公文而往官人邊取署、案伴云、古記云、未知退家如何、答猶行家令署也、跡云、行署謂往主典以上許取署、讃云、行署文案者、賷公文而往主典以上邊取署、是案之行者行廳上、不行其家也、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、神祇官四人、太政官十一人(權一人)、左右辨官各十八人(各權二人)、中務省廿人、內記二人、監物中宮職各八人、大舍人寮四人、圖書寮五人(權一人)、內藏寮十人(權二人)、縫殿寮陰陽寮各四人、內匠寮七人(權一人)、式部省廿人、大學寮八人(權四人、其二人以省掌兼任)、治部省十人、雅樂寮、玄蕃寮、諸陵寮各四人、民部省廿人、主計寮十一人(權一人)、主稅寮七人(權一人)、兵部省廿人、隼人司五人(權三人、其二人以兵部省掌兼任)、刑部省十人、判事四人、囚獄司二人、大藏省廿人、織部司四人(權二人)、宮內省十八人、大膳職八人、木工寮十一人(權一人)、大炊寮、主殿寮各五人(各權一人)、典藥寮四人、掃部寮五人(權一人)、正親司、內膳司各二人、造酒司四人、采女司、主水司各二人、彈正臺六人、左右京職各十一人(各權一人)、東西市司各二人、東宮坊四人、舍人監、主膳監、主藏監、主殿署、主馬署各二人、齋宮寮五人(權一人)、齋院司三人、修理職十人(權二人)、勘解由使十二人、施藥院使四人、其式部、民部、兵部三省史生者、試諫景迹、然後取用、亦不得輙補畿外人、但太政官左右辨官、內記、中宮、內藏、織部、木工、主殿、掃部、修理、春宮等官職坊寮司史生、待宣旨補任、勘解由、齋院、施藥院等使司史生、待從官下名簿、不試直補之、兵部省、春宮坊監署等史生、待本司移補之、大學寮權史生、待寮進名簿、不試直補、

凡在外國諸司史生、准諸國史生、申補任、

凡雜色輩、頗有耐書算者、省課試補任諸司史生、

凡主計主稅勘解由等寮使史生、勞十年爲限、以外諸司史生、廿年爲限、並補諸國史生、

凡大舍人勞廿年爲限、每年一人任諸國史生、

凡諸國史生者、大國五人、上國四人、中國三人、下國二人、但遠江、美濃、讚岐等國准大國、甲斐、出羽、安藝、周防、紀伊等國准中國、土佐國准上國、若狹、佐渡等國准下國、並不得任當國人、〇中略

凡新補諸國史生、皆先身自向省申本色位姓名、然後比校考帳、知實申官、〇中略

凡陰陽寮寫曆書手者、簡取諸司史生充、

〔延喜式 式部十九〕試補諸司史生

諸司番上有讀律令格式維城典訓并工書筭者、省召其身試之、被召之人就省掌東座、丞錄史生轉命、省掌承傳、並如上儀、候人稱唯進立屏下、錄披簿唱之、候人稱唯就版位、錄讀申身才、訖丞命曰、侍座、候人稱唯昇就座、史生置所試書於丞座側、直丁置被試人前、若工書筭者、陳紙筆筭等、丞命讀某篇、候人稱唯披書而讀、略問綱例、訖丞判命之、候人稱唯退出、其試書筭者、寫書乘除、訖監試之官、具錄其狀連署爲記、隨才擢用諸司史生、試圖書寮雜色生、亦准此、

〔名目抄 人體篇〕官掌 クハンジヤウ

〔倭名類聚抄 五職名〕官掌　職員令云、官掌 俗音如管掌、〇如管掌三字恐註文、今案、隨司有名、官掌、省掌、臺掌、職〇下恐脱掌字之類是也、

〔令義解 一職員〕太政官

左官掌二人、掌通傳訴人、檢校使部、守當官府、廳事舖設、右官掌二人、掌同左官掌、

〔令集解 二職員〕釋云、通傳訴人、謂導示訴人、進止言辭也、〇中略 跡云、守當猶守也、府者治公文舍、並官人所居等也、〇中略 釋云、廳事者、官司所聽政事之處、謂之廳事也、

〔令義解 一職員〕中務省

省掌二人、掌通傳訴人、檢校使部、守當省府、廳事舖設、餘省掌准此、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年十一月癸未、是日被任官者、多不會庭、省掌代之稱唯、於是詔式部兵

雜色

部省掌、始賜把笏、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、官掌、省掌、臺掌、職掌、坊掌、寮掌、使掌、司掌各二人、但中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正、中宮修理等、並待本司移補之、自餘者判補之、

凡內外諸司、史生、官掌、省掌、臺掌、職掌、坊掌、寮掌、使掌、司掌、〇中略筑摩長等、以雜色人補之、並把笏、

〔延喜式十八式部〕凡省掌之外、置扶省掌二人、令習儀式、以備其闕、卽任大學寮權史生、把笏行事、

凡中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正等省臺正員之外、扶省掌臺掌以入色者各置二人、令習儀式、皆待本司所送名簿乃補之、若正員有闕者、以扶省掌補之、但兵部省扶省掌二人、本省便任隼人司權史生令把笏、自餘不把笏、

〔令義解一職員〕式部省

卿一人、掌內外文官名帳、謂任授簿外更有名帳、其雜色亦可有名帳也、

〔令義解四選敍〕凡帳內資人等、本主亡者、朞年之後、皆送式部、〇註略若任職事者、卽改入內位、〇註略其雜色任用者、考滿之日、聽於內位敍、

〔類聚國史百七職官〕天長八年二月壬辰、雜色一十人、充織部司、以支雜事也、

〔延喜式十八式部〕凡賀正之日、〇中略諸司雜色人、諸國四度使雜掌及入京郡司、皆聽朝拜、〇中略

凡諸司官人、及雜色等擬使、直申太政官、其後若稱病者、省勘虛實相換更申、若有欺詐者、依法科罪、

凡雜色輩、頗有耐書算者、省課試補任諸司史生、

凡白丁緣才伎補諸司雜色、遭喪解退者、服闋復補、不得輙聽留省更取白丁、但預把笏者、不用此例、

凡官省判補雜色之輩、遭喪解任、若有才用者、聽奪情復任、

凡諸國雜色人、近江國卅人、越前國廿人、石見國二人、每年各與考、載朝集帳言上、但與兵部省通計、

凡飛驒、陸奧、出羽及太宰府所管諸國人、皆不得補帳內職分位分資人、亦陸奧人不聽補雜色、

凡諸國雜色人死亡帳、毎年附₂朝集使₁送₂省、

凡省内雜色毎年進新限₂一千擔₁、

凡雜色之輩、願₃習₂醫療₁、下₂典藥寮₁、令₃學₂醫術₁、

凡織部司雜色十人、掃部寮雜色五十人與₂考、

〔延喜式 四十三 春宮〕凡雜色人百五十人、式兵二省相通與₂考、

〔枕草子 十〕身をかへたらん人などは、かくやあらんとみゆるもの、

ざうしきの藏人に成たる、めでたし、

〔空穗物語 俊蔭〕御せん御馬ぞひのをのこどもは、つかへどころにつかはし、こゝ所にさぶらはせんとかんだうせられ、とねりざうしきは、うちしばらせなどし給ふ、

使部

〔令義解 一 職員〕神祇官

使部卅人

〔令集解 二 職員〕讚云、問、使部不₂注₁職掌₁、何爲行事、答、官内雜使耳、不₂見₁行事₁、

〔令義解 四 選敍〕凡散位、身才劣弱、不₂堪₁理務₁者、式部判補₂諸司使部₁、謂、其出仕之道、進漸爲₂榮、若先任₂職事₁者、不₃可₂復更補₁使部伴部₁也、

〔令義解 五 軍防〕凡内六位以下、八位以上嫡子、年廿一以上、見無₂役任₁者、毎₂年京國官司、勘₂撿知實₁、責₂狀簡試₁、分爲₂三等₁、〇中略身材劣弱、不₂識₁文算₁、爲₂下等₁、十二月卅日以前、上等下等送₂式部₁簡試、上等爲₂大舍人₁、下等爲₂使部₁、〇下略

〔延喜式 十八 式部〕凡諸司使部者、神祇官十五人、太政官卅三人、左右辨官各卅人、中務省卅人、中宮職廿人、大舍人寮、圖書寮、縫殿寮、内藏寮、陰陽寮、内匠寮各十人、式部省卅人、大學寮十人、治部省廿人、雅樂寮、玄蕃寮、諸陵寮各十人、民部省卅人、主計寮、主税寮各十人、兵部省卅人、隼人司四人、刑部省卅人、囚獄司六人、大藏省廿人、織部司四人、宮内省廿人、大膳職十五人、木工寮、大炊寮、主殿寮、典藥寮、掃部寮各

伴部

十人、正親司、内膳司、造酒司、采女司、主水司各六人、彈正臺、左右京職各十五人、東西市司各六人、春宮坊廿人、舍人監六人、主膳監、主藏監、主殿署、主工署各四人、主馬署六人、勘解由使二人、齋院司六人、齋宮寮十人、

〔延喜式 式部十八〕凡諸司伴部者、各以負名氏入色者補之、不得輙取白丁、若其氏无入色者、本司録狀請官處分、但主殿寮殿部、掃部寮掃部、主水司水部、並取負名外異姓白丁五人、預勘籍例、亦主殿寮殿部十人、造酒司酒部廿人、並負名外取異姓入色補之、

〔令集解 賦役十三〕朱云、○中略伴部謂諸司友御造也、

〔令集解 職員四〕典鑄司　跡云、雜工部謂友造、玉○友造玉恐玉造友造誤、鍛冶司唯習此、自餘諸司伴部等皆直稱友造耳、

〔拾遺和歌集 雜春十六〕延喜御時南殿にちりつみて侍ける花をみて　源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな

令外官

〔令目抄 諸公事言說篇〕令外(りやうげ)

〔官職難儀〕令外官とは、○中略大寶元年官位令を定られ候時に、職員令にのらざるを以、令外と申也、大寶以前其號ある官も、令の時除かれたるは令外也、まして其後新加の官勿論也、

〔官職秘鈔 後附〕令外官云新加官是也

内大臣、大寶以前有此號、天智天皇八年十月、始被任之、此時其位在左右大臣上、其後此官久絶、然後寶龜八年正月、又被任之、始次左右大臣之下、　中納言、大寶已前有此號、持統天皇御宇以來見此任、然大寶元年三月、罷之、其後慶雲二年三月、又被置之、　參議、大寶二年五月、始置五人、宜參議朝政云々、　監物主典、置年不分明、　中宮職、所載職員令中宮職者、大皇太后宮、皇太后宮、皇后宮等職也、此三宮之外、桓武天皇天應元年五月、別被置中宮職、仍今號四宮云々、　内匠寮、神龜五年八月、新置内匠寮、管於中務省、　文章博士、無令條、蓋聖武朝被置之歟、見格文、　直講、無令條、子細同上、　問者生、或云俊士、正暦四年始置之、　女醫博士、養老六年十一月、始被置女醫博士、　彈正大弼、弘仁十四年、被加置件官、元無大少、　修理職、嵯峨天皇御宇以來有此號、元造宮、　伊勢齋宮寮、元齋宮司也、大寶已前有此號、然不載令條、蓋大寶元年八月、改司爲寮、　賀茂齋院司、弘仁九年五月、始被置齋院司、

文武官

職、勘解由使、延暦十七年七月、被置之歟、粗有所見、鑄錢司、大寶已前有此職、然不載令條、修理宮城使、被置年未勘、承和六年三月十五日、修理宮城使員左右各二員、今省、定置各一員云々、造寺使、東大、興福寺兩寺造立之時、令置件使掌之、防鴨河使、被置年未勘、葺防鴨河葛野河兩所、以四箇年遷替之事、見天長八年格文、施藥院司天平二年四月、被置之、檢非違使、承和元年正月七日、始被置之、藏人所、弘仁元年三月、始被定置之、按察使、養老三年七月、始被置之、秋田城、天平五年十二月、置出羽國柵於秋田村高清水岡、中國介、令條中國無介、貞觀七年三月、能登、丹後、石見、長門、土左、日向、右中國介被置之、下國掾、令條下國無介掾、貞觀七年三月、飛驒掾被置之、左右近衞府、元近衞中衞也、神龜五年八月、置中衞府、又天平寶字三年十二月、置授刀衞、然而天平神護元年二月、改授刀衞爲近衞府、大同二年四月、以近衞爲左近衞、以中衞爲右近衞、左右衞門府、令條有衞門府、右曁左左右衞士府、大同三年正月、併衞門府於左右衞士府、然而弘仁二年十一月、改左右衞士府爲左右衞門府、鎭守將軍、神龜元年、大野朝臣東人爲此任、見坪石文、征夷大將軍、上古者臨時被任之、源賴朝卿以來連綿常被任之、太爲重任云々、

右之外新加之官、難勝計者也、雖然後代不被任之者、略不記之、詳見國史、

〔續日本紀 七 元正〕養老元年二月丙申、制曰、除造宮省之外、令外諸司判官、例無大少、官品宜准令員判官一人之例、

〔續日本紀 七 元正〕養老元年三月乙丑、制、令外諸司史生等、一季賜祿、降當司主典祿一等、是當少初位官祿、自非才伎別勅、一同此例也、

〔續日本紀 三十 稱德〕寶龜元年九月壬戌、令旨、比年、令外之官、其員繁夥、徒費國用、無益公途、省官簡務、往聖嘉典、除要司外、宜悉廢矣、

〔令義解 七 公式〕凡○中略五衞府、軍團、及諸帶仗者爲武、謂馬寮兵庫等是也、太宰府、三關國、及內舍人、不在武限、謂文云不在武限、即知合帶仗、既擧內舍人亦中務丞以准而須知、自餘並爲文、

〔令集解 三十四 公式〕古記云、問、諸帶仗者爲武、未知其色、答、馬寮兵庫諸物部等也、防人亦爲武、○中略釋云、太宰三關國雖非武官、准令帶劒、何者文云、太宰三關國及內舍人不在武限、故其太宰官人及軍毅等在京之日不帶劒者、別有處分耳、朱云、太宰府者、未知摠諸國等皆約不、答、依文不可約、但一端擧太宰耳、攝國皆可帶仗、問、太宰府三關國者、未知史生並郡司皆可帶仗不、答、皆可帶者、額同、但依文

内外官

只太宰府官人耳者、穴云、太宰府者九國三島及郡司三關國者、亦至郡司並皆帶仗、以此條知耳、自餘並爲文、

〔職原抄上〕中務省

當省卿已下雖文官、帶劒之職也、

〔令義解七公式〕凡在京諸司爲京官、自餘皆爲外官、

〔令集解三十四公式〕跡云、問、攝津職有選位否、朱云、攝津職可爲京官、但參朝事者可同外官者未明、穴云、問、攝津職者爲京官哉、答、然也、又問下符攝津者、捺内印哉、答、預百姓事者捺也、預攝津事者、捺外印耳、一云、下攝津公文猶捺内外印、爲政所在京内故也、又問、攝津下符郡者、未知捺内印捺外印哉別何、答師云、可捺職印、不可請内印、尙未審耳、問攝津職者在津國奉了、未知如何、開門前上閉門後下哉、答云、於上下者准外官耳、

職事官

〔令義解四考課〕凡内外文武官謂、依公式令、在京諸司爲京官、自餘皆爲外官、○中略初位以上○註略每年當司長官、○註略考其屬官、

〔令義解七公式〕凡内外諸司、有執掌者、爲職事官、无執掌者爲散官、

〔令集解三十四公式〕跡云、有執掌、謂官位令有文是、以外雖有執掌爲散官、朱云、執掌者、未知何、答、私如言職掌耳、郡司可爲職事官者、額同、又家司等同者、穴云、内外諸司有執掌、謂官位令有文、職員令有職掌也、何者職事三位家令補家令職事者、則在官位令是也、諸司謂主典以上、内舍人者善最如長上、故注別顯耳、師云、於此條家令亦同、問、郡司不載官位令者何、答、亦須同、何者職員令有職掌之故也、○中略穴云、謂本心職事人解任爲散官、故云爾、

○按ズルニ、職事官ハ執掌アル者ヲ云ヘドモ、選敍令ニ以別勅及伎術直諸司長上者、考限敍法並同職事トアリ、又凡帳内資人等、本主亡者、朞年之後、皆送式部、若任職事者、卽改入内位トアル文ニ據レバ、才伎長上、帳内資人ノ如キ、職事官ト稱セザリシナリ、

又按ズルニ、散官ハ散位ナルコトハ、位階篇ニ辨ジタリ、

〔續日本紀 文武一〕二年二月癸卯、賜百官職事已上、及才伎長上祿、各有差、

〔續日本紀 元正八〕養老三年八月己丑、有司處分、別勅才伎長上者任職事、貫與初任同、

〔續日本紀 桓武三十七〕延暦元年閏正月壬寅、左大辨從三位大伴宿禰家持、右衞士督正四位上坂上大忌寸苅田麻呂、散位正四位下伊勢朝臣老人、從五位下大原眞人美氣、從五位下藤原朝臣繼彥等五人、職事者解其見任、散位者移京外、並坐川繼事也、

〔菅家文草 奏狀 九〕請參議之官定爲職事事

右伏見今之參議、古之觀察使也、考祿無法、官位不明、謹案續日本紀曰、大寶二年四月、從三位大伴宿禰安麻呂、正四位下粟田朝臣眞人、從四位上向〔○向上恐脫高字〕朝臣麻呂、從四位下下毛野朝臣古麻呂、小野朝臣毛野參預朝政、本官如故、又省去大同二年五月四日問曰、觀察使無官位相當、仍不注兼字、而或云可注兼字、何以爲正、明法博士讚岐廣直答曰、雖無相當、官員既備、仍須注兼字、弘仁七年六月廿五日問曰、未得解由之參議者預釐務以不、大判事物部敏久答曰、參議之號不載令條、但太政官去延暦八年八月廿日、下民部省符偁、得省今月十三日解偁、被太政官去六月一日符偁、參議正三位佐伯宿禰今毛人、去月十日致仕已畢、省宜承知、依例施行者、仍撿案內、無有依致仕賜收參議封之例、今不知行狀、謹請處分者、被右大臣宣偁、奉勅宜准職封減半、自今以後永爲恒例者、今據此符參議准職事例、然則未得解由不預釐務、同十三年四月十三日問曰、前太宰帥參議從三位多治比眞人身帶參議不預他職、考祿之法未知所行、明法博士貞江繼人答曰、大寶二年、始勅任參議朝政、然則可謂職事、准據令條可預考祿、但相准官位、事須處分、夫則大寶初置之日、卽云本官如故、大同決疑之時、又曰須注兼字、又未得解由之人不預釐務、不帶他職之輩可給考祿之狀、明法曹司勘申先畢、加之頃年之例、自職事拜參議者、至兼本官必有宣旨、遭喪解任之徒、奪情復任、亦降勅旨、況所食者、職事之封、所載者除

權官

目之簿、號之職事、所據非少、但格式未立考祿馬斷料〇斷恐字誤之法、官猶無相當行守之文、此其或可論非職事之故也、若果謂非職事、則三位參議不帶餘官者、當無家司、所以爲非職事三位也、爰知可稱職事、所據已多、論非職事、或有牴牾、望請被定官位考祿等之式、永爲職事之官、謹奏、

元慶六年七月一日、爲式部少輔爲省修此狀、

〔故實拾要十〕權官　正官

是大中納言ニ限リテ、權官ヲ正官トス、自餘ノ於官ハ、正官ヨリ權官ヲ輕シトス、往古ハ官ニ正官權官アリ、中古以來ハ、正官ヲ闕キ置ルヽニ由テ、權官ヲ正ノ代リトシテ、官ノ上ニ置也、大中納言ヨリ以下、諸官何レモ權官アリ、又權ヲ官ノ上ニ書時ハ、譬バ權大納言權中納言ト書也、是ヲ唱ル時、中納言ハ權中納言ト、中ノ字ヲ濁テ訓ズ、故實也、

〔鼠璞下〕權行守試

本朝職事官、並以寄祿官品高下、爲權行守試、侍郎尙書始必除權、卽眞後始除試守行、予考之、漢試守卽權也、年紀令吏二百石以上滿秩如眞、如淳曰、諸官吏初除者試守、一歲爲眞食全俸、趙廣漢守京兆、韓延壽守馮翊、尹翁歸守扶風、皆滿歲爲眞、是守試卽權、未得爲眞也、權字唐始用之、韓愈權知國子博士、三歲爲眞、今以權與守試分眞假、全無意義、

〔延喜式十八式部〕凡正員之外、特任權官者、不論正權、依位階次、

〔職原抄上〕太政官

大納言

令正員四人也、寬平御宇、爲正二人、權一人、其後權官加增、

〔職原抄上〕中宮職

大夫一人略〇中　權大夫一人略〇中　亮略〇中　權亮

〔職原抄上〕大舍人寮

頭一人〇無權官中略　助權助

〔職原抄上〕內藏寮

頭一人〇中略　權頭一人〇中略　助權助

〔續日本紀八元正〕養老二年八月庚戌、以從四位上藤原朝臣武智麻呂爲式部卿、〇中略從五位下波多眞人與射爲員外少輔、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年十二月壬戌、外從五位下阿倍朝臣虫麻呂爲皇后宮亮、外從五位下中臣熊凝朝臣五百島爲員外亮、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年九月己巳、正五位上石川朝臣年足爲春宮員外亮、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年八月己巳、從五位下橘宿禰綿裳爲上野員外介、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月丁巳、以從五位下賀茂朝臣淨名爲員外少納言、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年正月甲戌、唐人大學權大屬正六位上李法琬、大炊權大屬正六位上清川忌寸斯麻呂、造兵權大令史正六位上榮山忌寸千島、〇中略鼓吹權大令史正六位上清根忌寸松山等給月俸、愍其羈旅也、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿三年二月癸亥、春宮權亮從五位下藤原朝臣眞夏爲亮、中衞權少將如故、

〔伊呂波字類抄計疊字〕兼官

〔故實拾要十〕兼官

是兼官トハ、其當官ノ外ニ、何レノ官ニテモ、又官ヲ兼ルヲ兼官ト云也、譬大臣ニテ兼大將、大納言ニテ兼大將類也、諸官何レモ兼官アリ、都テ如此也、又兼官ノ中ニ其兼ル官ヲ唱フル事アリ、譬大納言ニテ太宰帥ヲ兼、或彈正尹ナドヲ兼ル時ハ、帥ノ大納言、尹ノ大納言抔ト云也、高位ノ人卑キ官

職ヲ兼ル時ハ帶ト兼之云、或帶之云也、兼官兼帶同義ナレドモ、品ヲ替テ唱ル也、

〔令義解選敍四〕凡任兩官以上者、一爲正、謂官位相當者爲正、若皆不相當者、以一高者爲正、餘皆爲兼、

〔令集解選敍十六〕釋云、官位相當爲正也、不論先後高下者、諸說以高官爲正者非、何者至署記爲難辨之故者未明、問、此條主典以上并同不、若史生等何、跡云、穴云、或說以相當爲正、並劣或說以高爲正、爲長私案從一高官上考者、以是案以高官爲正无以得理、私案以相當爲正、見官位同者、依古私記、以尊爲正、見原作長、據上文改、尊卑等者以官位令之列次爲次也、讀同但官位令已以尊上件尙未可、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年七月乙卯、以紫微少弼從三位巨勢朝臣堺麻呂爲兼左大辨、從四位上紀朝臣飯麻呂爲右大辨、春宮大夫從四位下佐伯宿禰毛人爲兼右京大夫、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年六月庚午、尙藏兼尙侍正三位藤原朝臣宇比良古薨、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年八月己巳、以中納言從三位氷上眞人鹽燒爲兼文部卿、○中略營城監從四位下佐伯宿禰今毛人爲兼肥前守、

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年八月乙酉、大納言正二位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房抗表言、臣稟性愚蒙、聲花寂莫、陛下陳席不弃、故劒無遺、遂先時髦、頻登淸顯、未堪一職、兼帶四官、○中略陸奧國新任守從五位下藤原朝臣大津此良房之叔父也、雖皇家舊儀無有明制、而遙撿行事、不異同官、嫌疑之門、實所可避、又三官以上有司執聞、蓋忌榮聚一門、寵歸一己、伏願停兼外秩、守拙內官、

○按ズルニ、三官以上ヲ兼ヌルトキ、其一官ヲ辭スルコトハ、太政官篇補任條ニ引ク宗建卿記ニ、參議藤原定家ノ例アリ、宜シク參看スベシ、

〔本朝文粹六奏狀〕請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀　橘直幹

右直幹謹撿案內、去天曆三年、自大學頭大內記拜當職之日、所帶兩官、皆被停止、朝家自被始置文章

博士之後、未聞其例、又至同四年三統元夏從式部少輔除儒職之日、不能少輔被賜兼字、拜除之恩惟一、榮枯之分不同、依人而異事、雖似偏頗、代天而授官、誠懸運命、獨守一職、爰歷七年、○中略

天曆八年八月九日　正五位下行文章博士橘朝臣直幹誠惶誠恐謹言

〔有職問答〕一諸官に受領を兼任事

參議より以下は兼國號、上古以來當時此分候拜任あるよしを被仰出候畢、大中納言兼任例希有ノ事候なき由に候、平家氏族大中納言たるべき人、多く受領を兼し候、○下略

〔除目大成抄五〕勘申兼國例事

參議兼國例○中略

藤原家政　歷二年

康和四年正月任參議、同五年正月兼近江權守、

〔本朝文粹六奏狀〕請殊蒙天恩依撿非違使勞兼任越前尾張等國守闕狀　大江匡衡○中略

策家居內官兼受領例

文章博士菅原是善兼伊豫守、

式部少輔大江音人兼丹波守、

東宮學士高階成忠兼大和守、

大學頭大江齊光兼近江守、

式部權大輔菅原輔正兼太宰大貳、

左近衛權少將、大藏權大輔、常陸權介、藤原朝臣佐世兼陸奥守、○下略

〔故實拾要十〕前官

是前官ト云ハ、何レノ官職ニテモ、其官ヲ辭表ノ後ヲ云也、譬バ前關白、前左大臣、前攝政、前太政大

臣、前大納言、前參議、前左大辨、前左中將、諸官何レモ如此書也、

〔官職知要〕中略以前官號稱如當官之品

或人問、前大中納言前宰相たる人を、或如當官只大納言殿、中納言殿、宰相殿などゝ、他人は稱し、或消息にも間々有之如何、答云、前官は散官ともいひて、無官なれば、公卿補任にも、非參議之列に載られたり、雖然各官重寄異于他、仍雖前官、内々の事には、其號を稱せられ、或加前一字、或不加もあり、可依時宜也、但和歌懷紙位署書等式正の物には、前官の號を書給はず、假令散位從三位藤原朝臣某などゝみえたり、

〔細川家書札抄〕一前近江守近江前司書事

前の字の事、不歷四ヶ年者、不可然候、四ヶ年以後は、前何守とも、又近江前司とも可書之、其子細條條在之、

〔枕草子〕二ぢもくにつかさえぬ人の家、ことしはかならずときゝて、〇中略物まうでする供にも、我も我もとまゐりつかふまつり、物くひ酒のみのゝしりあへるに、はつるあかつきまで、かどたゝくおともせず、〇中略ものぎきに宵よりさむがり、わなゝきをりつる、げすをのこなど、いとものうげにあゆみくるを、をるものどもは、とひだにもえとはず、外よりきたるものどもなどぞ、殿は何にかならせ給へるなどいふ、いらへには、なにのぜんじにこそはと、かならずいらふる、

〔枕草子春曙抄〕二なにの前司にこそはと　前司とはさきの國司也、もと受領して其後、他の國をも給はらぬを、前の守といふ其心也、

〔公卿補任〕一條永延二年戊子

中納言從二位藤文範民部卿、正月日辭、中納言、〇中略

前中納言從二位藤文範　正月五日辭民部卿

〔百練抄 四後冷泉〕治暦四年四月十七日、以左大臣教通為關白、前太政大臣（頼通○藤原）讓也、

〔興福寺緣起〕昌泰三年歲次庚申六月廿六日　　從二位致仕左大臣藤原朝臣良世

〔運歩色葉集 遍〕別當（藏人頭ヲ云、唐名大事）

〔官職今案〕別當（ベタウ）　專當（セントウ）

與清（○小山田）按、別當ハ職號也、已ニ有官ノ人、別ニ其職ニ當ルヲ以テ別當ト云、玉篇ニ當任也、國語、晉語註當猶任也、又左傳襄公廿六年ニ、主ノ字ノ義ニモ用タレバ、サル心アリトモスベシ、良辨東大寺ノ別當トナリショリ、代々其職ヲ補ス、大歌所ノ別當、檢非違使別當、藏人所別當ナド餘多聞ユ、職原抄ニ、穀倉院別當洩タリ、又大別當、中別當、小別當、俗別當ノ名アリ、吾妻鏡ニハ、遊女別當、諸司別當、侍所別當、染殿別當アリ、顯密威義便覽下卷ニ、顯密僧官有別當者、孝謙天皇天平勝寶間、良辨始為東大寺別當、嵯峨帝弘仁中、空海亦為東大寺別當、自良辨至空海為別當凡十四人、按南齊書、正官之外、別當統領、僧家有此稱、想必據之ト云ヘリ、唐書（卅三上卷）ノ儀衞志第十三上、唐制ニ天子居曰衙、行曰駕、皆有衞有嚴云々、衙門左右廂、廂有五門、執夾人同上、第一門云々、第五門居左右武衞白質歩甲隊之後、黑質歩甲隊之前、五門別當歩甲隊黃麾使前馬隊後、各六人分左右、戎服大袍帶弓箭橫刀云々、此文中ニモ別當ノ字アリ、三代實錄（貞觀十二年二月廿三日ノ條）延喜式（式部ノ下）ニナドニ、專當ノ名アリ、專當ノ丞、專當錄ナド云ヘリ、

〔東大寺正倉院文書 二〕玄蕃寮解　申請月料事（○中略）

天平十七年二月廿日　　大初位上守少屬秦大藏連道成（○中略）

正八位下守少允榎井朝臣（別當）

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

省太宰府監典各二員、置筑前國司事（○中略）

右謹案令條、太宰府帶筑前國、自爾已來或別或隷、至延暦十六年又廢國隷府、今得府解偁、臨交替事細加撿挍、未進調庸并欠失正税器仗戎具等類、毎物有數、此是攝行之日、彼此相讓、無心國政之所致也、望請分置官人以爲別當、專一其心、令濟國務、然則帶國之名不乖令條、欠負之煩絶於國內者、臣等商量、承前府帶之時、或下官符而定別當、或府司相量分置其人、同僚之官兼預國務、勸責雖怠不同比國、望請省大同元年所增監典、便充補國司、庶令所守有別各濟繁劇、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

大同三年五月十六日

〔職原抄下〕內豎所別當

一人必爲其仁、他人不望之、

內教坊別當

大中納言中、堪其道之人補之、

內膳別當

大中納言中補之

御厨子所別當

內藏寮頭補之

大歌所別當

納言已上補之、上古親王之中又補之、

〔中右記〕嘉保二年二月廿七日癸巳、今日依爲吉日、初樂所、(左兵衞陣)(樂所初)先仰藏寮穀倉院、聊辨備饗饌、樂人等參集、又地下召人等參集、以藏人頭左中辨師頼朝臣爲別當、(先例多藏人頭也)以藏人宮內丞宗仲爲六位別當、

檢按
攝判

摠官
摠省

管隷
被管
被攝官

〔令義解 七公式〕凡內外官、勅令攝他司事者、皆爲權檢按、(謂假令式部丞攝兵部丞者、卽注云、式部丞位姓名權檢按兵部丞姓名之類也、)若比司者、則爲攝判、(謂比司者、一管之內、假令主計助、判主稅助者、卽注云、主計助並判主稅助姓名之類也、此等皆非正職、亦不可稱行守、但案唐令、判官有假使、當司長官、令比司攝之、此旣不依勅、長官自令攝之、故律云、其有勅符差遣、及比司攝判、今案此令、非依勅符、而无長官判令攝之文、故知除大宰之外、皆依勅處分也、)

〔三代實錄 四十三〕元慶七年四月廿一日丁巳、以從五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣道眞權行治部大輔事、從五位上行美濃介嶋田朝臣忠臣權行玄蕃頭事、爲對渤海大使裴頲故爲之矣、

〔吉續記〕文永八年九月十五日丙子、今夜不被定僧名、檢°按°宰°相°(左大辨藤原資宣)○今日天王寺御幸供奉、可被定其替歟、不被尋先例於官云々、檢按宰相一人、於陣被定事無例之由申之云々、廿一日壬午、今日依仁王會闕請定、午刻參陣、(兼自奉行、職事檢按上卿、午刻可參陣、可早參之由依相催也、)檢按上卿(春宮新大夫公孝)奉行、職事等未參、

○按ズルニ、攝判ノ例ハ、太政官篇判少納言條ニ、又檢按ノ解說ハ、神祇部社僧篇ニアリ、宜シク參看スベシ、

〔延喜式 十一太政官〕凡被管諸司解由、及不與解由狀、摠官押署進之、(太宰管內、陸奧鎭守府、諸國講讀師等准此、○又見內外官交替式)

〔延喜式 十八式部〕凡考選文者、太政官長上番上、並作符下省、(○中略)其被管考選文、皆摠官長官押署、便以司印印之、

凡被管史生解由、造以解進摠省、(○進摠省三字、內外官交替式作兼字、)摠省押署送省、(○省、內外官交替式作式部省、)其署一准移式、

〔延喜式 四十四勘解由使〕凡勘內外諸司所進不與前司解由狀令任用分付實錄帳、檢交替使帳等者、辨官外題下於使局、卽率解文紙數、令本司本國進料紙、(○註略)諸國七通、(○註略)諸司五通、(○註略)先書其草案、而隨解文所載事條、召緣事所司令勘申之、(被管諸司不經摠官、直喚令勘、)主典已上次官已下次第勘判、(○下略)

〔伊呂波字類抄 比疊字〕被管

〔職原抄述解三〕凡被管ト云ハ、假令中宮職、大舍人寮等ハ中務省ノ被管ナリ、大學寮ハ式部省ノ被管ナリ、又被接官ト云ハ、假令侍從、内記、監物等ハ中務省被接官ナリ、文章博士、助教等ハ、大學寮被接官也、自餘コレニ准ジテ知ルベシ、

〔令義解七公式〕移式〈○中略〉

右八省相移式、内外諸司、非相管隷者、皆爲移、〈謂假如、衛府、京職、兵庫等之類、既无所管、是爲非相管隷、其大宰向省臺、及管内向大宰、並爲解、以外皆爲移、〉〈凡被管者、不得以移直向他司、皆先申所管、所管更修移向他司、其出符亦准此、但追攝人者、不由所管、直向他司、依律勘獄官、停囚待對問者、雖職不相管、皆聽直牒追攝故也、即〉若因事管隷者、〈謂八省、及内外諸司因事相管隷者、假如、文官於式部、武官於兵部之類、是爲因事管隷也、〉以以代故、其長官署准卿、〈○義解略〉〈長官無則次官判官署、○下略〉

〔享祿本類聚三代格四〕〈○上文缺〉

頭一人　助一人　大允一人　少允一人　大屬一人　少屬□□　史生四人

右太政官去年〈○寛平九年〉二月廿八日下兵部省符偁、去年〈○寛平八年〉九月七日下式部省□□□太政官去八月廿九日奏偁、左右兵庫造兵鼓吹等四司、摠爲一寮、使爲兵部省管隷者、右大臣宣、奉勅依請者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平□□□□□□□隷爲被官者、今被大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣偁、奉勅、宜改被管復舊爲管隷、

□□□□□月五日〈○據時平官銜推、知是昌泰元年官符、〉

○按ズルニ、管隷トハ、衛門兵衛ノ諸府ノ如ク、兵部省ニ總管セラルヽヲ云ヒ、被官トハ直ニ兵部省ニ管セラルヽヲ云フナルベシ、

〔令義解一職員〕太政官

左大辨一人〈掌管中務、式部、治部、民部、謂其餘不被管諸司、亦各隨事分隷左右也、○下略〉

〔類聚三代格一〕太政官符

勅任奏任判任判補

齋宮主神司

右被右大臣宣偁、奉勅、件司令外特置、未有所管者、考校功過、無由取決、宜自今以後令神祇官管攝。

延曆十九年十一月三日

〔官職秘抄 後附〕令內被減省之官

中務省被官　中內記（所載令條、大內記、中內記、少內記、大同元年七月停中內記、）　中監物（所載令條、大監物、中監物、少監物也、後世不被任之、但停之時未勘、）

左右大舍人寮（大同三年八月、併左右大舍人寮為一寮、）　畫工司（大同三年正月、併內匠寮、所謂內匠寮者令外官也、被置之年記下篇、）　內藥司（寬平八年、併典藥寮、）　內禮司（大同三年正月、併彈正臺、）

〔職原抄 上〕凡八省被官諸寮（○寮一本作司字）助者、內藏、陰陽、玄蕃、諸陵、典藥等者、所任已有其道、

〔標注職原抄 上本〕管を官とかけるもたがへり、被管とは、中務の內藏、民部の主計などの如く、管せられたる司をいふ、

〔官職秘鈔 下〕春宮坊

被官監署等　又撰人（○下略）

〔職原抄 上〕內記局

大一人（○中略）上下諸人位記悉內記所奉行也、故雖為中務被官、別云內記局、

〔中右記〕嘉承二年十二月廿二日、晚頭參內、除目終也、（○中略）

裏書云

除目任人皆以道理也、但以道言朝臣被任陰陽博士條如何、本陰陽頭光平道言之子也、子為本寮頭、父為陰陽博士事、頗不被甘心、陰陽博士依為陰陽寮所。攝之。官。也、

〔令義解 四選叙〕凡任官、大納言以上、左右大辨、八省卿、五衞府督、彈正尹、大宰帥、勅任、（謂皇太子傅、官位高於七省卿、故准為勅任、）餘官奏任、（謂內外諸司主典以上、其郡領軍毅亦為奏任也、）主政、主帳、及家令等、判任、（謂依軍防令、內舍人亦為判任、其文學才伎長上亦同、）舍人、史生、使部、伴部、帳內、資人等、式部判補、

〔令集解十六選敍〕跡云、〇中略勅任謂勅旨補任也、穴云、女官不見文、但今行事勅任、〇中略釋云、餘官奏任、神祇伯以下官吏省錄亦是奏任、古記云、問、餘官奏任、未知辨官、史、內外記、五衞府志、諸司長上、太宰典、大少毅等類若爲、答、除載文外皆入餘官、但內舍人一色、依軍防令、式部選充耳、然今行事此亦奏任耳、才伎長上亦同、問、郡大領以下式部銓擬、若爲其意、答、擢盡才能、責狀試練職掌、省故銓擬申官耳、跡云、謂官任定奏聞耳、皆爲奏任、穴云、文學奏任、內舍人、軍毅亦同、兵衞如先私記式部選充、然今行事此亦奏任、一云、判任合稱、私案依軍防令以判任爲長、大舍人、東宮舍人、式部充故、兵衞亦兵部充也、〇中略穴云、自餘寫文手等得考人、皆式部判補、朱云、問、勅任、判任之人、任官簿何司可有若問〇問恐爲字誤勅任、奏任、奏〇奏恐判字誤任、判補、其行事何、答、私職員令式部卿注云、補任家令、義解云、謂先銓擬申官、然後乃補任也、〇中略穴云、國博士、國司簡取申上、式部判補耳、私下條云、凡國博士、醫師者、幷於部內取用、義解云、謂國司簡擇才術之可用者、申太政官、卽式部判補也、

〔通典十五選擧〕凡諸王及職事正三品以上、若文武散官二品以上、及都督、都護、上州刺史之在京師者冊授、諸王及職事二品以上、若文武散官一品、並臨軒冊授、其職事正三品、散官二品以上、及都督、都護、上州刺史、並朝堂冊訖、皆拜廟、冊用竹簡、書用漆、五品以上皆制授、六品以下、守五品以上、及視五品以上皆勅授、凡制勅授及冊拜、皆宰司進擬、自六品以下旨授、其視品及流外官皆判補之、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月戊戌、凡遷任之人、奏任以上者、以名籍送太政官、判任者、式部銓擬而送之、〇中略又畫工及主計、主稅、筭師雅樂諸師、如此之類、准官判任、

〔續日本紀八元正〕養老二年四月癸酉、太政官處分、凡主政主帳者、官之判補、出身灼然、而以理解任更從白丁、〇下略

〔職原抄上〕史生二十人唐名行署　大臣以下判授之職也、〇中略官掌四人唐名掌國　太政官被官也、大辨以下判授之、

〔標注職原抄上本〕判補の補字、板本授に作る誤也、官掌の下補字また同じ、授は位階にいひ、任は官にいふ、みだりに字を用がたし、官掌の注あはせ考べし、

〔官職難儀〕判授とは、不奏して大臣以下計ふを云也、官にも位にも有也、○中略八位初位は判授也、官にも其をゝり有也、職原抄に史生官掌は判授官也と記せり、此事にて侍り、准知あるべき者也、

〔令義解官位一〕官位令第一謂大臣以下、書吏以上曰官、一品以下初位以上曰位、凡位有貴賤、官有高下、階貴則職高、位賤則任下、官位相當各有等級、故曰官位也、令謂教令也、教以法制、令其不相違越、故曰令也、第一、謂第者次第也、一者數之始也、既居諸篇之首、故曰第一也、 凡壹拾玖條

親王

一品謂品位也、親王稱品者、別於諸王、公式令云、應叙者、親王四品、諸王五位、諸臣初位以上是也、

太政大臣

二品

左右大臣

三品　四品

大納言　大宰帥　八省卿

諸王　諸臣

正一位　從一位

太政大臣

正二位　從二位

左右大臣

正三位

大納言　勳一等謂此條擧勳一等者、以顯相當正三位故也、下皆准之、依公式令、文武職事散官、朝參行立、各依位次爲序、故知一等以下、皆著當色之服、立文官之列、假如一等行列

者、立正三位之下、從三位之上類也、然案衣服令勳位服色、其制不顯、即知一等以下、不帶文位者、皆著黃袍也、

從三位

大宰帥　勳二等

正四位

皇太子傅　中務卿

以前上階

七省卿　勳三等

從四位

彈正尹　左右大辨

以前上階

神祇伯　中宮大夫　春宮大夫　勳四等

正五位

左右中辨　大宰大貳　中務大輔　左右京大夫　大膳大夫　攝津大夫　衞門督　左右衞士督

以前上階

左右少辨　七省大輔　彈正弼　大判事　勳五等

從五位

中務少輔　左右大舍人頭　大學頭　木工頭　雅樂頭　玄蕃頭　主計頭　主稅頭　圖書頭

左右兵衞督　左右馬頭　左右兵庫頭　大國守

以前上階

神祇大副　侍從　少納言　大宰少貳　七省少輔　大監物　中宮亮　春宮亮　左右京亮　大膳亮　攝津亮　衞門佐　左右衞士佐　皇太子學士　內藏頭　縫殿頭　大炊頭　散位頭　陰陽頭　主殿頭　典藥頭　上國守　一品家令　職事一位家令　勳六等

正六位

神祇少副　大內記　彈正大忠　左右辨大史　正親正　內膳奉膳　造酒正　兵馬正　鍛冶正　造兵正　畫工正　典鑄正　掃部正　內藥正　東西市正　官奴正　鼓吹正　園池正　諸陵正　贓贖正　囚獄正　二品家令

以前上階

大宰大監　八省大丞　彈正少忠　中判事　左右大舍人助　大學助　木工助　雅樂助　玄蕃助　主計助　主稅助　圖書助　左右兵衞佐　左右馬助　左右兵庫助　內兵庫正　土工正　葬儀正　采女正　主船正　染部正　縫部正　織部正　隼人正　內禮正　內藥侍醫　大學博士　大國介　中國守　勳七等

從六位

神祇大祐　大宰少監　八省少丞　中監物　中宮大進　春宮大進　內藏助　縫殿助　大炊助　散位助　陰陽助　主殿助　典藥助　主水正　主油正　內掃部正　筥陶正　內染正　舍人正　主膳正　主藏正　上國介　一品家扶　三品家令　職事一位家扶　職事二位家令

以前上階

神祇少祐　少判事　大宰大判事　中宮少進　春宮少進　左右京大進　大膳大進　攝津大進　衞門大尉　左右衞士大尉　大藏大主鑰　主鷹正　主殿首　主書首　主漿首　主工首　主兵首　主馬首　下國守　勳八等

正七位

中內記　大外記　大宰大工　大宰少判事　左右辨少史　大宰大典　八省大錄　彈正大疏
左右京少進　大膳少進　攝津少進　衞門少尉　左右衞士少尉　內藏大主鑰　防人正　二
品家扶　四品家令

以前上階

大宰主神　彈正巡察　左右大舍人大允　大學大允　木工大允　雅樂大允　玄蕃大允　主
計大允　主稅大允　圖書大允　左右兵衞大尉　左右馬大允　左右兵庫大允　少監物　大
主鈴　判事大屬　助敎　醫博士　陰陽博士　天文博士　主醬　主菓餅　大國大掾　勳九
等

從七位

少外記　左右大舍人少允　大學少允　木工少允　雅樂少允　玄蕃少允　主計少允　主稅
少允　圖書少允　左右兵衞少尉　左右馬少允　左右兵庫少允　內藏允　縫殿允　大炊允
散位允　陰陽允　主殿允　典藥允　音博士　陰陽師　曆博士　書博士　筭博士　呪禁博
士　大國少掾　上國掾　一品家大從　一品文學　三品家扶　職事一位家大從　職事正三
位家令

以前上階

正親佑　內膳典膳　造酒佑　兵馬佑　鍛冶佑　造兵佑　畫工佑　典鑄佑　掃部佑　內藥
佑　東西市佑　官奴佑　鼓吹佑　園池佑　諸陵佑　贓贖佑　四獄佑　大解部　大宰博士
大典鑰　大藏少主鑰　醫師　漏尅博士　針博士　一品家少從　二品家從　二品文學　四
品家扶　職事一位家少從　職事從三位家令　勳十等

正八位
少內記　大宰少典　八省少錄　彈正少疏　內兵庫佑　土工佑　喪儀佑　釆女佑　主船佑　漆部佑　縫部佑　織部佑　隼人佑　內禮佑　少主鈴　內藏少主鑰　呪禁師　針師　藥園師　典履　典革　大宰陰陽師　大宰醫師　大宰少工　大宰竿師　中國掾　防人佑　大宰主船　大宰主厨

以前上階

神祇大史　中宮大屬　春宮大屬　左右京大屬　大膳大屬　攝津大屬　治部大解部　刑部中解部　衞門大志　左右衞士大志　判事少屬　主水佑　主油佑　內掃部佑　筥陶佑　內染佑　舍人佑　主膳佑　主藏佑　按摩博士　衞門醫師　左右衞士醫師　三品家從　三品四品文學　職事二位家從　勳十一等

從八位
神祇少史　中宮少屬　春宮少屬　左右京少屬　大膳少屬　攝津少屬　衞門少志　左右衞士少志　左右大舍人大屬　大學大屬　木工大屬　雅樂大屬　玄蕃大屬　主計大屬　主稅大屬　圖書大屬　左右兵衞大志　左右馬大屬　左右兵庫大屬　少典鑰　按摩師　雅樂諸師　左右兵衞醫師　馬醫　四品家從　大國大目

以前上階

刑部少解部　治部少解部　左右大舍人少屬　大學少屬　木工少屬　雅樂少屬　玄蕃少屬　主計少屬　主稅少屬　圖書少屬　左右兵衞少志　左右馬少屬　左右兵庫少屬　內藏大屬　縫殿大屬　大炊大屬　散位大屬　陰陽大屬　主殿大屬　典藥大屬　主計竿師　主稅竿師　大國少目　上國目　一品家大書吏　職事一位家大書吏　勳十二等

大初位

內藏少屬　縫殿少屬　大炊少屬　散位少屬　陰陽少屬　主殿少屬　典藥少屬、正親大令史　內膳令史　造酒令史　兵馬大令史　鍛冶大令史　造兵大令史　畫工令史　典鑄大令史　掃部令史　內藥令史　東西市令史　官奴令史　鼓吹大令史　園池令史　諸陵令史　贓贖大令史　囚獄大令史　畫師　大宰判事大令史　一品家少書吏　二品家大書吏　職事一位家少書吏

以前上階

正親少令史　兵馬少令史　鍛冶少令史　造兵少令史　典鑄少令史　鼓吹少令史　贓贖少令史　囚獄少令史　內兵庫令史　土工令史　葬儀令史　采女令史　主船令史　漆部令史　縫部令史　織部令史　隼人令史　內禮令史　挑文師　大宰判事少令史　防人令史　中國目　二品家少書吏

少初位

主水令史　主油令史　內掃部令史　筥陶令史　內染令史　舍人令史　主膳令史　主藏令史　染師　下國目　三品四品家書吏　職事二位家書吏○註略

以前上階

主鷹令史　主殿令史　主書令史　主漿令史　主工令史　主兵令史　主馬令史　職事三位家書吏

〔令義解〕四選敍　凡任內外文武官、（謂其郡司軍毅者、雖是外文武官、既非官位相當職、故不關此條也、）而本位有高下者、若職事卑爲行、高爲守、（謂若以無位人任長上官者、亦須注守、）

〔古京遺文〕小野朝臣毛人墓志

飛鳥淨御原宮治天下天皇〈〇天武〉御朝、任太政官兼刑部大卿位大錦上〈以上面文〉小野毛人朝臣之墓營造歳次丁丑年〈〇天武天皇六年〉十二月上旬卽葬、〈以上背文〉

〇按ズルニ、此時ニ官位相當ノ事ナキ事、此文ヲ觀テ知ルベシ、

〔槐記〕享保九年九月廿二日、職原ノ唐名ノコトハ、後人ノ附會ノ由承候、然リヤ、最前ノ御咄ノ御本ニモ、コレナキヤト申シ上シニ、イカニモ舊キ本ニハナシ、附會ノ說ナルベシ、漢ノ職名、和ノ官名トモニ、唐名ニハアハザルコト多シ、亦ヒタトアヒタルコトモアリ、高ニテハ迚モ、アハザルコト也、譬ヘバ頭立タル官名ノ、大常寺ナドハ、大方ニアヒテモ、下役附官ニナリテ高ニテ日本ニテハ、タラヌガチ也、スレバ迚モ、アハセテアハズ、且ツ大ニチガイタル名モアリ、昔シ延喜ノ時分ニモ、此銓議アリテ、今日本ノ太政大臣ノ職ハ、何ナルベキゾ、大相國ト稱セラルベキヤ、唐ノ相國トハ、各別譯チガイタリ、スレバ相國ニハ配シガタキヨシ、奏議問難ノヲビタヾシキコトニテ、ナルマジキ由見ヘタリ、此時菅丞相ナド此中也、昔ノ人ノ詮議各別也、イツモ云テ笑コト也、唐名ハ江戶鑑ニ職付ヲシテ見タキモノ也、官人ノ分ニテハ、高ニテ人タラズト仰ラル、

〔官職知要上〕唐名大意

諸官に唐名を配合する事、いにしへよりなきにはあらず、いかんとなれば、本朝令は唐開元令をもとゝして、書給へりと、故に公式令の天皇、皇帝、陛下、至尊、太上天皇の御號、皆唐名なりと云々、又諸官の號、唐名の配合あれども、公事政事に至りては、しゐてから名を用ひ給ふことなし、但僧尼度牒、〈今世絕擧〉又詩文之類ごときは、正しく唐名を書給ふ歟、凡唐名とは中華代々の官號を、假令本朝諸官に配するのみ、三公を大師大傅大保とは周世の官號なり、相國左右丞相は、秦漢世の官號なり、周世には文事を專につかさどり、秦漢以來武事をもつて事とせり、故に和漢事每に必規矩を合たるがごとくならず、譬ば以御史大夫如當大納言又彈正尹、餘も又准じてしるべし、爰に參議

左大辨橘廣相卿、朝官當唐官路鈔を作り給ひ、又島田忠臣百官唐名鈔を作りて、悉諸官に配合せり、蓋此兩書今絕て所見なし、拾芥鈔に兩本を合て、唐名之部をのせ給ひしを、正しく所見あるやうに、引書にあぐるはあやまり也、いにしへより故實をわきまへたるは、書目二重三重にも引用る事習ひなり、事の次をもつて志るしぬ、又云、今世可敬方へ書通するに、宛所唐名をもちひて敬ひとすといへり、是其よるところいかゞ覺束なし、正しく本朝の官號をさしをきて、異朝の官號を用る事、豈本意にたがはざるや、志からば唐名をもちひたり共、志ゐてうやまひとは申がたし、雖然世に流布しければ、强あらたむるにも及ばざる歟、又唐名と訓によむことならひ也といへり、

〔標注職原抄別記上〕唐名

諸官の下に異朝の官名を記したるを唐名といふ、唐土の官名といふべきを、かく略きていへるものなり、皇朝より彼方に御使を遣はされて、文物を取り渡したまへりし事は、隋の開皇三年に始まれり、○註略され共隋はほどなく亡びたれば、唐の代に至り、いよ〳〵睦しくならせたまひて、御使を志ば〳〵遣されしかば、彼方の官名を以て、此方の官名に當いふことも、むねと李唐の制に依たりけり、故に唐名とはいへるになむ、然るに錦所翁の所藏本なる藤原貞幹の奧書凡例に引たりに、各官下不注本位及唐名、是爲准后公舊と見えたれば、相當の位と唐名とを記せるは、後人の志わざなる事疑ひなし、さては論するに足ずといへども、中古より或は式部卿親王を李部王といひ、或は定家中納言を京極黄門といへる類の事ども多くて、これらたゞ文雅のうへの私稱なるを、後人その由を辨へず、公事に用るうるはしき位署にも、唐名を記せるがまゝ見え、殊に武家ざまなどにては、中將少將といはむよりも、羽林次將といひ、侍從といはむよりも、拾遺補闕といふが正しとおぼえたる人多し、忝くもわが皇朝より賜はれる所の美稱を、みだりに異國の官名に

劇官
閑官

換むとするは、抑いかなる僻事ぞ、それも誠に彼方の稱の、此方の官にかなはゞこそはあらめ、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給職事四位已下初位已上要劇料事〇中略

右承前特簡劇官給件料錢、准其官位多少有差、〇中略

大同四年閏二月四日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給時服并番上粮米事〇中略

右被太政官去三月十五日符偁、被右大臣宣偁、奉勅、承前諸司番上及雜色人、劇官以外不給衣食、〇中略

大同四年四月一日

〔本朝文粹六奏狀〕請被殊蒙天恩拜大内記紀伊輔木工頭源方光申他官所并淡路國守闕狀

藤原篤茂〇中略

秘書〇圖書者閑官之至極也、只供香火之法筵、丹州者兼任之虚名也、〇中略

天祿四年正月十五日　從五位上行圖書頭兼丹波介藤原朝臣篤茂誠惶誠恐謹言

重任
重職

〔官職知要中〕重職　重任

重職、重任同じ心也、是は職のおもき事也、

〔官職難儀〕重任とは　諸國守以下重任と申は、一任はて、又いま一任其まゝなさるゝを申也、一任とは四ヶ年を申也、〇中略重任と讀也、重任と讀は別の事也、てうにんと云は、此官は重職にて重きと云心也、是を或人の何をも重任とよむべきよし申侍る、文字のやうはさにてあれども有職の口傳の六借はかやうの事にて侍り、何にてもてうにんと讀て心ゆかず、此類多ある也、清濁に

温職冷官

つきてのよみくせこそ、日本のならひにて侍るよし、古人も申侍る也、

〔故實拾要 十〕温職冷官

職原云、温職ノ中尤膏腴也トアリ、職掌ニ依テ得利德言也、無利德冷官ト云也、膏腴トハ、漢書曰、高祖在洛陽、婁敬云、秦ノ地ハ被山帶河、四塞以爲固、卒然トシテ有急、可備百萬衆由、秦故資其美、膏腴之地、是所謂天府也、故高祖從婁敬諫、後都於關中、腴小補韻會腹下肥也、言心ハ當寮ノ所得ノ賄多シテ富リ、故ニ膏腴ト云也、

〔職原抄 上〕大炊寮

頭一人〇註略　五位諸大夫任之、〇中略　温職中尤膏腴也、

〔本朝文粹 六奏狀〕正六位上行民部大丞大江朝臣朝綱誠惶誠恐謹言

請殊蒙鴻慈拜任温職狀

右謹撿先例、自此省丞、關榮爵者、皆無賢愚、併任受領、朝綱虎門聚雪、鳳闕戴星、方寸之勤、歲月多積、然而天性素頑、吏幹亦疎、分憂之寄、非敢所樂、方今慈母在堂、春秋八九、老病暗期、湯藥不靜、朝綱盡忠於天朝之年長、致孝於私門之日短、所謂家貧親老、不擇官而任者也、望請鴻慈將任温職、且競祿養於風樹、且爭貞心於霜松、朝綱誠惶誠恐謹言、

延長二年二月十五日

〔本朝文粹 六奏狀〕請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀　橘直幹〇中略

至于算明法等博士、皆帶顯職、温官或兼二寮、〇主計主稅之頭助、爲一朝之要樞、〇中略

天曆八年八月九日　正五位下行文章博士橘朝臣直幹誠惶誠恐謹言

〔本朝文粹 六奏狀〕請特蒙鴻慈因准先例兼任辨官左右衛門權佐大學頭等申他官替狀　大江匡衡

顯官　要籍駈使

右匡衡歷文章生文章得業生、對策及第、歷撿非違使彈正少弼、拜除當職、叙位勞十箇年、博士勞五箇年、以儒學爲業、以風月爲貴、貧而樂道、未叅温官、賤而嗜文、難耐寒苦、家徒四壁、耻文籍之漸散、母已八旬、悲祿養之猶遲、(中略)

正暦四年正月十一日從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

〔官職知要 中〕顯官(ケングワン)顯職

顯官顯職、同じ事なり、顯者明也、著也、職原抄曰、顯職者、外記、官史、式部民部丞、彈正忠、勘解由判官等也、左右衛門尉、猶雖爲顯官、於今者不及沙汰とみえたり、

〔江家次第 正月 四〕除目

令公卿擧顯官　外記　史　式部丞　民部丞　左右衛門尉

〔官職秘抄 下〕勘解由使(令外官)

次官　名家五位任之、依爲顯官能撰其人、

〔菅家文草 奏狀 十〕爲大學助敎善淵朝臣永貞請解官侍母表

臣永貞言、(中略)臣弟少外記愛成身居顯官、才亦可用、爲大學助敎、十五年來、圓冠非中身之服、函丈是遊手之資、羊質虎皮、名留實去、(下略)

〔秉燭譚 二〕要籍驅使ノコト

按ズルニ、要籍ト云ハ、唐人ノ語、亦官ノ名ニモアリ、通鑑唐德宗紀ニ、要籍謝遵トアリ、註ニ要籍官ハ唐ノ時節度衙前之職、又曰節度使之腹心也、朱滔王武俊ノ相王タル要籍ヲ改メテ承令ト云、又通鑑ニ都不要籍ト、注ニ云、要者須其用、籍者借其力ト、コレニテ要籍ノ字義明ナリ、

〔令義解 四 選敍〕凡職事官、(中略)父母合侍者、(中略)並解官、(其應侍人、才用灼然、要籍驅使者、令帶官侍、)

〔職原抄 下〕藏人所

世職

六位中又撰補四人、謂之職事、又爲要籍驅使、〇使原作仕、據標注職原抄改、六位中撰良家子令候殿上、

〔菅家文草九奏狀〕請令議者反覆撿税使可否狀

右臣某謹言、〇中略又令所點使者、在京七人之中、左中辨平季長者、宮中要須之人也、聖主所照、不更具陳、式部少輔紀長谷雄者、北堂文選講説未畢、諸道學生課試有員、勘解由次官大藏善行者、勘不與解由狀、并修貞觀以來國史、主税頭善世有友者、勘諸國公文之職、不可一日無此人、大膳大夫紀清躬者、是可爲官長者也、而明年闕國其大者有數、推計可任之人、兩三人之內清躬其一人也、左大史望材者、本職忩劇之上、山崎橋事是急務也、近日催促殊加恪勤、今日如使者等所申者、經一年餘、僅可窮使事者、件等要籍之人、東西出去、經一年餘、假令萬分之一無所實得、各各所預之事、共有擁滯、人人所思之謗、遂無排却、是爲公私可無取得、其否三也、〇中略

寬平八年七月五日　中納言從三位兼行左大辨春宮大夫侍從菅原朝臣

〔職原抄上〕神祇官

伯一人〇中略　昔者諸氏混任、或又大中臣氏任之、中古以來、花山院御子、彈正尹淸仁親王後胤相續、他人不任之〇中略

大副〇中略　大中臣、齋部、卜部、三姓之人任之、〇少副、又同、中略、

祐大少〇中略　以前三姓及中臣氏等任之

〔官職秘抄上〕太政官

大夫史　近代以小槻氏必居此職、往年強不然、

〔職原抄上〕太政官

外記〇中略　近代淸〇淸原中〇中原兩家任其職、於少外記者、彼兩家輩、同門生等依器量任之、〇中略

史八人

左右大史各二人〇中略

中古以來小槻宿禰爲一史、行官中事、謂之官務、

〔言繼卿記〕永祿十三年〇元龜元年五月廿五日壬辰、早旦自新大典侍殿、倉部可參候由有之間參之處、內內申入候上階之事、昨日勅許分云々、但內藏頭之事、如何之由仰云々、近代闕連綿也、應永十八年鹿苑院殿〇足利義滿御判、子々孫々一家〇山科可存知之由有之以來、不渡他家之由申入云々、

〔官職秘抄下〕竿

博士　兩人之中、五位史必兼之、凡此職中古以後以小槻三善氏等任之、

頭註長寬中、官務職、竿博士兩職事、隆職流官務職、廣房流竿博士可相續之由、被下綸旨云云、

〔職原抄上〕大炊寮

頭一人〇中略　近代大外記中原師遠子孫相傳之、

〔職原抄上〕主殿寮

頭一人〇中略　近代小槻家隆職流也相傳任之、

〔嘉永七年雲上明覽大全下〕壬生小槻官務輔世宿禰　主殿頭　修理東大寺大佛長官

〔官職秘抄上〕諸司正

正親　內膳　已上王氏任之、內膳奉膳、高橋氏中撰其人任之、

〔職原抄上〕內膳司

正一人　奉膳一人

近代奉膳乃爲正、高橋氏相傳任之、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年二月癸巳、從五位下布勢王爲內膳正、〇中略是日勅、准令以高橋安曇二氏、任內膳司者爲奉膳、其以他氏任之者宜名爲正、

〔官職今案〕新本氏之字（シンホンウヂ）

與清按、新中納言、新三位中將、新藏人、新内侍、本三位中將、氏藏人、氏内侍ナド、、新、本、氏ナドノ字ヲ蒙ラセテ呼ハ、新ニ成タル下臈ノ官人ニ、新ノ字ヲ稱スル也、三位中將二人有レバ、上首ヲ本三位中將、下臈ヲ新三位中將トワケテ呼コト、本院新院ナド云ニ同ジ、氏藏人、氏内侍ナドハ、極臈差次、氏藏人、新藏人トヨブ、氏トハ源藏人、平藏人ナド云類也、内侍モ第一ハ勾當内侍、第二第三ハ氏内侍、第四ハ新内侍也、氏内侍トハ源内侍、藤内侍ナド云是也、

〔職原抄下〕藏人所

六位藏人四人　重代諸大夫中、不放埒有器量之輩補之、○中略藏人者不依年齒老少、以當參次第定上下、至于極臈者、必預巡爵、○中略第二臈稱之差次、第四稱之新藏人也、

〔達幸故實鈔一〕雖位階上臈依新任號新宰相例

嘉應二十一十六、彝姫參上之後、人々被來訪、三條大納言、實房左衛門督、實國權中納言、兼雅別當、成親源中納言、雅賴源宰相、資賢新平宰相、敎盛平宰相親範等也、

○按ズルニ、嘉應二年ニハ敎盛ハ正三位、親範ハ從三位ニシテ敎盛位階ノ上臈ナリ、

〔中右記〕康和五年正月二日壬午、未刻許御出南殿、○中略公卿列立南庭、○中略權大納言、家忠藤大納言、公實新大納言、經實○下略

〔平家物語十一〕だいり女ばうの事

同き十四日○壽永三年二月いけどり本三位の中將しげひらの卿、都へ入て、大路を渡さる、

○按ズルニ、公卿補任ニ據ルニ、平重衡ハ、治承五年五月十六日、從三位ニ敍シ、左近權中將ニ還任シ、平惟盛モ亦同年十二月四日、從三位ニ敍シ、右近中將故ノ如シ、故ニ本ノ字ヲ冠シテ、之ヲ別チシナリ、

〔平家物語七〕惟盛都おちの事

わか君ひめ君はしり出て、○中略我も行かんとこたひなき給へば、うき世のきづなとおぼえて、三位中將、いとゞせんかたなげにぞ見えられける、御弟新三位の中將すけ盛○中略兄弟五き馬にのりながら、○下略

〔公卿補任安德〕壽永二年癸卯

非參議從三位平資盛 七月三日敍、元藏人頭、右中將如レ元、八月六日、解官、依レ赴二西海一也、

〔平家物語十一〕ときを矢の事

時の聲もこづまりしかば、新中納言知盛の卿、船のやかたにすゝみ出、○下略

〔玉海〕建久四年四月廿日丙辰、出座、○中略註次公卿次第相分著奥端座、○中略藤宰相雅長　左宰相中將實教○中略　新宰相中將成經　右宰相中將公繼　花山院三位中將忠經　新三位中將兼良

〔武家嚴制錄一〕一禁中幷公家衆諸法度○中略

一武家之官位者、可レ爲二公家當官之外一事、○中略

右可レ被レ相二守此旨一者也

慶長廿乙卯年七月日　二條關白殿昭實公在判　秀忠公御判　家康公御判

〔光臺一覽一頭註〕御當代官位之規矩

有二先途之官位一　尾張、紀州、從二位大納言　水戶、從三位中納言　加賀、從三位宰相　薩、奥、正四位下中將　御老中　京所司代、大坂御城代、御側御用人、右各從四位上侍從　國主方之内　越前、越後、從四位下少將　御三家加賀之二男三男ハ四品ノ侍從、　細川、黑田、淺野、毛利、鍋島、備前因幡、兩國共池田　蜂須賀、土佐、山內　有馬、久留米　佐竹、秋田　久松、松平隱岐守、松平越中守、柳澤、郡山　榊原、本多平八郎、小笠原、小倉　厩橋、酒井　小濱、若州　庄內、酒井　立花、柳川　丹羽、二本松　戶

田采女正（大垣）、堀田（山形）、宗（對馬）、本庄（濱松）、織田（上野小幡）、上杉、越前（松岡）、出雲（松江）、奥州（白川）、明石（播磨）、會津、宇和島（伊豫）、長門（長府）、京極、　右之分四位侍從也、但此內有國主格者、　津、彥根二家者、任中將少將、　右國主之內有御譜代國主格有、御譜代何モ上使等ニテ上洛ノ時、四品ノ侍從少將御推任、少將又中將御推任也、但シ御老中之上使者、官位不被下也、列座違故也、兎角四位ノ侍從也、又關東御暇必御刀歟、御馬ヲ被下也、其內石川者御馬ハ雖被下、官ハ諸大夫也、　此餘者從五位諸大夫限也、　御旗本之中爲諸大夫人之務役者　高家ハ四品（少將侍從）有、又有無官從五位ノ諸大夫、　大御番頭、御書院番頭、御小姓組番頭、大目付、町奉行、御勘定頭、御普請奉行、鐵砲改役、西丸御留守居、宗門改頭、道中奉行、御儒者、堺政所、奈良、山田、長崎之町奉行、駿河久能山、下野日光山御宮奉行、右此分非諸大夫者、不叶御役也、此外ハ入雜リ也、又醫師、歌學方、花下、繪師方ハ有法印法眼法橋也、扨又御臺所御用人ハ極而諸大夫也、御部屋方有御官位、御方ノ御用人者諸大夫也、　不參內而官位昇進スルヲ、消息宣下ト名目セリ、

〔光臺一覽　一〕武家の昇進は、國取郡取御旗本に不限、從五位下諸大夫とて、何之守と昇進仕候事、將軍樣の御心任也、是全御權勢には非ず、將軍樣の御官途に屬せる餘威なり、彼砌は一人々々宛御諸司へ御奉書到來せり、其御奉書の御文言は、

一翰致啓達候、然ば酒井直三郎事、從五位下諸大夫被仰付候、位記口宣相調候樣に、傳奏衆迄宜被申達候、恐々謹言、

極月幾日　連名御老中不殘如例

土屋相模守（諱書判）

松平紀伊守殿

右は國取郡取にても、御旗本にても、此格式之御文言也、扨御諸司ゟ兩傳奏へ口上書被遣、

口上之覺

酒井直三郎事、從五位下諸大夫被仰付候、位記口宣相調候樣に、宜有御沙汰候、則年寄共奉書入

人名用官職名

御披見候、以上、

十二月十幾日　　松平紀伊守

高野大納言殿

柳原前大納言殿

如斯也、諸旗本郡取之從五位下諸大夫は、官限僅にて相濟六拾目也、國取は達申候、此外は郡取之四品、郡取之侍從、國取之四品、國取之侍從、同少將、同中將、國取之從三位、(御三家加判計)(御三家樣)國取之宰相、(同斷)同中納言、同大納言等、各官祿相違有之、兩傳奏祿物帳に委敷有之、品多精は是に不申候なり、右之御奉書にて相濟候也、一ヶ年之內には數多有之事也、總別御所方にても、關東にても、御目出度事は、御上使大禮事にて、御老中か國取か、又は高家衆一分之御入洛之砌、從禁中官位を被下事有之候、夫は御推任とて官限は入不申候、

〔殿居袋三欄〕敍任之次第

一凡官位被仰付以後、老中より所司代江被申越、所司代より傳奏衆江被申達、位記口宣出る、

諸大夫　位記貳通　口宣貳通

一官金　大納言　中納言　中將　少將　侍從　四品　五位　諸大夫

禁裏江黃金壹枚　公家衆江金三十兩

右何れも高家衆取次被申

〔官職難儀〕源內平內など云は、いかゞなたる官にか候ぞ、

內舍人に成たるを云、源氏の者の成たるをば源內と申、平氏は平內、藤內、善內など申候、みな其姓を付てよび侍るなり、位署には內舍人某と書べき也、平內左衞門など申は、內舍人より左衞門尉に成たるを、もとの官を付てよぶ也、太郎など申仁の左衞門尉に成たるを、太郎左衞門と申もお

なじ事也、勘解由左衛門、彈正左衛門など皆同事なり、勘解由判官、彈正忠などより、左衛門尉に成たる事也、

○按ズルニ、人名ニ官職ヲ用キルコトハ、姓名部名篇ニ載セタリ、

工匠用官職名

〔年山紀聞 三〕市人稱官名

本朝にても、末の世には、冶工筆工のたぐひまでも、官名を稱する事になりぬ、もろこしも同じ事なり、陸容菽園雜記曰、吏人稱外郎者、古有中郎外郎、皆臺省官故僭擬以尊之、今人稱郎中、鑷工稱待詔、磨工稱博士、師巫稱太保、茶酒稱院使、皆然、此艸率名分不明之舊習也、國初有禁、

〔兼胤公記〕寶暦二年十月廿日、諸職人受領守掾之類、父祖蒙勅許候へば、子孫更不蒙勅許、其儘もちつけに、看板等に書付候、此儀武邊へ申達、可遂吟味哉之段、攝政殿へ申入、尤之儀宜取計被命、讚岐守へ此段申達、先京中計遂吟味、書付可被越之由、御附江示含了、廿三日讚岐守へ申達、承知之段御附示了、

〔德川禁令考 四十五〕明和三戌年十一月廿八日

諸職人受領國名官名等之事

諸職人受領蒙勅許候者共、繼目之受領不相願、父或祖父蒙勅許候受領を、其子孫名乘候もの共も有之趣相聞候、若右體之もの共有之候はゞ、向後國名幷官名共、自分と相名乘候儀は、可爲無用候、尤繼目之受領相願候儀は、勝手次第たるべく候、

右之通御料は御代官、私領は領主地頭より可相觸者也、

十一月

右之通可被相觸候

別紙相觸候趣、於當地受領蒙勅許名乘候もの共、名前幷此度國名官名爲相止候者共之名前、遂吟味可被書出候、

右之通御書付二通、松平右京大夫殿御渡被成候間、寫遣し候、御代官所幷知行有之面々、御書付之趣相糺、來月十日迄御殿江可被差出候、以上、

明和三戌年十一月廿八日

伊備前守
小日向守
牧大隅守
安彈正少弼
石備後守

〔德川禁令考四十五〕安永元辰年十月廿七日

諸職人國名呼名復古

勸修寺宮、仁和寺宮、大覺寺宮門跡、古來より永宣旨ニ而、諸職人受領呼名等迄差免候處、去戌年諸職人國名官名等、自分と相名乘候儀、可爲無用旨御觸、以後國名呼名被差留候處、此度三門跡願に付、古來之通國名呼名差免候筈候間、此旨可相心得候、尤以來三門跡江受領願候者、早速屆可申出旨、町中江可觸知候、

辰十月廿七日

〔憲法類編二官制〕醫師其外諸職人等位階及國名受領廢止ノ事

己巳明治二年五月八日御布告

是迄醫師畫工諸職人等、位階及國名受領之儀、仁和寺、大覺寺、勸修寺ヨリ差許來候處、向後被廢止、且從來許置候向モ總テ可爲停止旨、被仰出候事、

贈官位名稱

〔名目抄諸公事言說〕贈官(ソウクワン) 贈位(ソウイ)

〔貞丈雜記四官位〕一贈位贈官(ソウイソウクワン)と云は、死したる人に位を被仰付を贈位と云、官を被仰付を贈官と云、

贈官位制

贈はをくるとよむ字也、死人に官位を送り給也、

〔律疏名例〕凡贈位及外位與正位同、○中略用蔭者存亡同、

〔令義解選敍四〕凡贈官、死王事者、與生官同、餘降一等、謂得死然者也、降一等者、降其子孫之蔭位也、

〔新儀式五〕薨卒人加諡號幷贈官位事

太政大臣薨、有詔命、加諡號、贈正一位、給食封國、亦大臣贈位階、或贈太政大臣職、又納言已下有功之者、幷僧綱、或有諡號、後宮女官、天皇外戚、男女間蒙贈位之恩、

贈官位儀

〔儀式十〕贈品位儀

葬日遣勅使二人、臨時定之、随亡者品位、勅使到門外、喪家設榻二基於殯室堂上、北面東上、随處便而設之、不必用此制、前立高机一基、其上置筥、訖喪家行事者開門、左右相分迎之、勅使二人、一人持宣命文、一人持位記、依次就座、勅使一人宣制、其詞臨時制之、訖行事者二人相共進、一人留机邊、一人受位記函、納筥訖共舁机、進置靈柩前、訖復本座、勅使下座、擧哀三度、喪家答哭、勅使引出、靈柩卽發、

〔北山抄六〕薨奏事

若有贈位、其位記等、位記幷宣命、召内記令作、奏下如恒、授使、使出敷政門、給内豎、内豎納柳筥、或外記以筥置上前、上入位記等、給使、天慶元年五月十九日、實賴卿依舊例所定行也、勅使不向骸骨之所、就第宣制、依有例也云々、

〔禁秘御抄下〕薨奏

上卿著陣、外記申其由、上卿以職事奏薨奏之由、○中略可有贈官位人、被仰職事、○中略有贈官位時、上卿奏位記宣命、入筥御覽之後返給、請印後又奏宣命、位記使諸大夫相具内豎一人向彼家也、薨奏幷位記宣命不内覽也、

〔柱史抄下后宮〕贈官位事

母后幷外祖父母多有此事、上卿召内記、内記參軾仰云、某人可贈(虫損)后宮某人可叙其位、詔書宣命位記任例可奉仕者、被仰下准據之例、卽各成草參進、内覽奏下如恒、(若於位記者、直清書進之、自餘草許也、)上卿於本座召大内記仰清書事、清書覆奏如例、詔書有御畫、上卿召中務輔賜之、贈后宮宣命使參議、次官五位殿上人也、上卿召少納言給贈位位記宣命、(告文於墓所燒之、至位記者、持向彼子息許之、或以少納言差遣、依人可有其事、)

〔貞信公記〕承平二年八月十四日、中宮大夫云、去十一日、被差故右大臣(○藤原定方)贈位使、仍欲向彼墓所間、副使國淵朝臣遲來、入夜又令問孝子所在、卽來本家授宣命位記等、是北邊大臣(○源信)例也云々、

〔中右記〕嘉承二年十二月十三日甲午、今夜有贈后贈位事、(○中略)予(○藤原宗忠)著奥座、頭爲房來仰云、前女御茨子贈皇太后、后父前大納言(○藤原實季)贈太政大臣正一位、移著端座、令官人敷膝突、(膝突本在上間、左大臣依被行公事也、仍令下數、)召大内記、則敦光來、贈后贈位事仰含、詔宣命位記等、可令草之由仰下、大内記敦光奉仰歸出之後、頃而持參、(入筥)予見之、文書五通、(詔書二通、贈后、贈大臣、宣命二通、贈后、贈大臣、位記一通、贈正一位、件位記本先作草可奏也、而近代位記入眼之後所奏也、或奏草文入眼之後奏、請印之後奏、仍三箇度可奏也、又或說、奏草入眼請印之後奏云々、但近代只入眼之後奏、請印之後奏、以件二箇度奏爲善也、)令大内記内覽、(殿下御直廬也、)予御覽之後返給、則令持内記參御前、付藏人辨奏聞、(又覽殿下也、)仰云、令清書、歸本座、内記置筥、返給大内記、仰可清書之由、(入筥)取留位記一通、大内記歸出了、召外記令進筥入位記詔書等、清書之間、且令請印位記、仍内々尋諸司具否者、予仰云、近衞司、將(サ)監一人稱唯、居前庭、仰云、印(オシテ)、稱唯歸入、此間掃部寮立案於前庭、少納言時俊、近衞將監、主鈴等、相共取出印置案上、予召中務(ナカツカサ)少輔源通季入從陣座末戸、居膝突、給位記、(入筥給之、)作就案下、少納言請印了、通季重置位記退下、少納言以下歸出、次撤案了、大内記敦光令清書持來、(入筥、書黃紙也、但草度書紙屋紙也、)又以大内記欲内覽之處、仰云、今度内覽所免給也者、(敦光申也、)仍分入二筥、(一筥贈后詔宣命、一筥贈官詔宣命位記、)先令持大内記、(贈后筥、)次召加外記兼弘令持、(贈官筥、)進御所、付藏人辨顯隆令奏、(秀才藏人尹通、取殘一筥覽殿下也、)返給披見詔書御畫日了、(十三日三字也、此間執柄殿下令書給也、殿上南廂邊擬弓場殿也、)歸著本座、内記外記、置筥歸出了、次召官人、令召中務、則少輔通季著膝突、給詔書、(詔書二通、作入内記筥給之、)通季歸出了後、目使參議藤宰相俊

忠、本在仗座進來、給贈后宣命了、宰相退出之後、召少納言、(時後)則著膝突、給贈官宣命幷位記了、使參議幷少納言等、相共向木幡墓所讀之云々、(宰相使次官相具刑部權、少輔忠清人政上)

〔朝野群載 内記 十二〕贈太政大臣

詔、酬德賞功、列代之茂典斯著、悼往追遠、時時之勝躅長傳、朕(○鳥羽)外祖父故正二位行大納言藤原朝臣(○實季)嶽瀆吐精、珪璋挺耀、致獻替於帷扆、盡忠勤於闕庭、謂其氣韻則如蘭芬之逬秋風、論其節操亦似竹筠之負寒雪、於是降年不永、徂暮難留、未見選納於宮掖、早斷德音於朝端、前事在耳、朕甚慟焉、今當皇運之昌期、盍得人位之高極、懷舊心深、縱隔拜覲於温樹之露、飾終禮備、宜增榮耀於宿草之煙、贈以太政大臣正一位、普布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

嘉承二年十二月十三日(御畫)　中務少輔從五位上源朝臣　宣奉行

〔本朝世紀〕久安二年十月四日庚子、有故權中納言藤長實卿、並室家源方子贈官位事、仍權中納言藤家能卿參仗座、藏人左少辨源師能、就膝突傳勅命、上卿以官人令召內記、大內記藤長光參仕、上卿仰云、外祖父權中納言卿贈正一位幷左大臣、外祖母源方子贈正一位、各任先例可作進詔告文位記狀等者、長光入草於筥持參、上卿各見畢、返給云、早可內覽、長光令持使部、參攝政直廬、攝政返給云、只今可參禁裏、至清書者於內裏可被奏、長光歸參傳上卿、上卿仰云、卽以少內記藤爲盛令書清書五通、盛筥奉上卿、上卿付藏人辨師能內覽、御畫畢返給、次上卿召中務少輔藤賴輔給詔書、次有位記請印事、次位記幷告文等賜少納言藤能忠、能忠賜之向各墓所畢、

詔、尊祖敦族之禮、旁載常篇、悼往飾終之義、長貽彝範、朕外祖父故正三位行權中納言藤原朝臣、家門積善、宮闕竭忠、貞操無移、久持松柏之節、爵位旁備、早繼金紫之蹤、爰命是有涯、身歸重壤、外祖母源氏、出槐鼎之種族、擅蘭猷之芳譽、餘慶相承、雖傳勞績於戚里之風、靈魂空逝、不見榮輝於后房之月、惻隱之心、宸襟尤切、編訪恒規於朝典、令加崇號於夜臺、外祖父可贈左大臣正一位、外祖母可贈正一位、普

告遐邇俾知朕意主者施行、

久安二年十月四日 御畫

天皇我詔旨止、万故權中納言藤原朝臣仁詔止倍勅命乎聞食止宣、尊外祖天追飾給布道波、禮典乃常毛所存奈利、故是以、左大臣乃官正一位乃冠遠贈給比崇賜布勅命遠聞食止宣、

久安二年十月四日

天皇我詔旨止万宣勅命遠聞食止宣、尊外祖天〇尊外祖天四字原无、據前文補追飾給布道波、禮典乃常毛所存奈利、故無位源朝臣方子波朕加外祖母奈利、國乃恒規奈止志天故是以、正一位乎贈給止詔布天皇我詔旨遠聞坐止宣、

久安二年十月四日

〔師守記〕貞治四年六月十日丁酉、今夕自殿下被尋下局務云、延文故贈左府贈官時者、勅使不被立之由被思食候、引勘可被進候、又近年勅使不候贈位贈官例可被注進云々、載請文被申了、注左、〇中略

殿下御 延文に故贈左府〇足利尊氏そうくわんの時は、勅使はたてられ候はぬよし、おぼしめし候きと、ひきかんがへ候て、まいらせられ候べく候、又近年勅使の候はぬ贈位贈官のれいきと〳〵えるし候てまいらせられ候べく候よしおほせ事候、

局務請文 おほせ下され候むね、かしこまり候てうけ給候、さて延文贈左府贈官位之時、勅使をたてらるる有無の事、引見候處、延文三年六月三日、贈左大臣從一位被宣下候、件度少納言藤原信家宣命位記持向本所三條坊門萬里小路等持寺之由注置候、凡近年勅使向候はぬ贈位贈官例、入道左兵衞督延文三年二月十二日、贈二位の時、在所關東之間不及少納言參向、内々被遣武家、入道讃岐守貞治二年八月十四日、贈一品之時、宣命位記、參陣六位良種内々渡三寶院僧正よし注置候、そのよしうち〳〵御ひろう候べく候、あなかしこ、

十一日戊戌、入夜武家奉行依田左近大夫時朝、內々以彈正忠延兼自等持寺尋申候間、所見分被注遣了、大樹命云々、

贈官位宣下勅使參向時申次事

淨妙寺殿

康永二年八月廿一日、贈從三位事宣下、宣命位記勅使少納言平惟清持參本所三條坊門高倉等持院、置宣命位記於佛前机上退出、無出逢人云々、

此外等持寺殿、康永二年三月四日、贈從二位事宣下、勅使少納言平惟清宣命位記等、持參本所等持院、贈左大臣殿、延文三年六月三日、贈左大臣從一位事宣下、勅使少納言藤原信家宣命位記等持參本所等持寺、件兩度申次事無所見、若不及出逢歟、

大外記師茂

今夜少納言菅原秀長朝臣故大方ハ、卽贈從一位宣命位記等、持參本所三條坊門萬里小路等持寺、置佛壇、讀宣命退出、無出逢人、禪僧二人引道ハ燭一挺立兩方云々、不及祿沙汰云々、

〔建內記〕嘉吉元年六月廿九日、故室町殿(征夷大將軍從一位前左大臣義敎公、去廿四日薨御、奉號普廣院殿、)贈太政大臣宣下也、未刻著束帶參內、候陣座、(奧)藏人左少辨俊秀來座下、仰、仰詞征夷大將軍從一位源朝臣、可被贈太政大臣宣命令作ヨ、予聊居直承之、(微唯、氣色許也、)次予移著端座、其作法如例、(縫、稍居向南面、直、容以笏之擧、)次召官人令敷軾、次召官人召內記、大內記在豐朝臣不參、以宣命內々付職事、職事給少內記、件淸書不加日、予入魂返給令加了、少內記安倍盛久參小庭召軾仰、仰詞云、征夷大將軍從一位源朝臣可被贈太政大臣宣命令草進ヨ、稱唯退、次入宣命草於筥持參之、予置笏披見之、如元入筥返給內記、次予起座、次就弓場付職事(俊秀)奏聞、次被返下、次淸書於弓場乍立仰內記令取替之奏聞、(次歸著陣之處、爲早遣、如此、非無傍例、)卽被返下、次歸著陣、次內記置筥退、次召官人召內記、內記取筥退、此次予盛久云、地下六位召之時、先跪小庭、上卿曰

之時、參軾例也、乍罄折候小庭無禮也、猶可跪也、如何、盛久云、忘却仕候、可有御免云々、〇此間有缺文日比仰含計也、次召官人令撤軾、次起座、揖等如例、自初不記候、依例事也、退出、少納言持參宣命於等持院、於御龕前讀之、二拜歟、其儀可尋記、

贈官本儀有詔書、有宣命、兼招大外記業忠相談之處、詔書事近例無之、宣命許也云々、職事又存其旨、詔書事不仰之、仰宣命事許了、今日陣儀了、業忠正長元年記寫送之、續左猶可有詔書之處、內記稱近例不及詔書宣命許也、仰詞又無詔書事、皆先例之趣記之、如此事可復舊儀之條可安事也、今度詔書猶可申行歟、而臨期參陣不具、故障計無之間、物忩非本意也、爲後日記之、

宣命案可續之

正長元年度記

中務輔不參、但近年不見詔書、然者無所役歟、尤可有詔書之由、人々存之處、柱下稱近例無之由不作進、

上卿仰詞

以故從一位源朝臣宣命詞如此可贈太政大臣令作進宣命了、

此仰詞令作進詔書宣命ヲト、可有之歟、如何、

〔贈官宣下記〕清原宗賢卿記

康正三年二月廿七日、贈官宣下也、長得院被贈從一位左大臣上卿勸修寺中納言教秀卿奉行、職事頭左大辨高清朝臣、少納言宗賢、少外記忠種等參陣也、大內記不參、宣命位記等、兼付職事、當日少外記忠種進之、次奏聞了、上卿歸著陣座、內記持參宣命位記於上卿前、次上卿以陣官人召少納言宗賢、入宣仁門參軾、上卿先取出宣命給之、次給位記、宗賢置笏於地賜之、不結退出畢、直持參等持院、此儀、兼自鹿苑院、被申送等持院也、於門前下車、即撤帶劍、依侍從用文車、長老出門前被接之、於門下被揖之、作持西面、宗賢東面、宗賢答揖、下車時兩通取副笏、次長老前行、行者四人、內二人持挑燈前行、次侍者一

贈位記

人從右方、次宗賢從長者後入佛殿、出同後門入昭堂、兼置卓幷拜筵、次宗賢進御影前讀宣命、(其由也、此間位記僧中之、勞指展、)畢位記等安於卓、次二拜、次立曲彔前、(兼立居東面、)長老一揖、(西面)宗賢答揖、(東面)次經本路退出、次住持進出佛殿戸外、宗賢答揖、其後於總門外乘車畢、

〔延喜式内記十二〕凡納贈位記料柳筥、臨時受內藏寮、

〔續日本後紀仁明十一〕天長十年三月乙卯、詔曰、(○中略)宜外祖父(○橘清友)及外祖母(○田口氏)並追贈正一位也、橘朝臣位記狀曰、地居貴戚、爵既隆而加榮、德蘊餘芳、人雖謝而追遠、宜申朝典、式賁泉扃、田口氏位記狀曰、曾慶潛行、誕茲婉嫕、汾川行閲、蘭郁猶流、欽若舊章、睦親斯在、宜崇寵贈、允迪追榮、

〔本朝續文粹位記二〕位記　　菅原忠貞朝臣

從二位藤原朝臣嬉子

右可贈正一位

中務、柔儀遠覃、淑問高聞、秋風告別、雖隔芬芳於靑闈、曉月尋蹤、猶添光輝於黃壤、宜申其禮、以賁其終、可依前件、主者施行、

萬壽二年八月廿九日

〔朝野群載雜文二十一〕贈官位(付贈物)

正二位藤原朝臣實季

右可贈正一位

中務、朝之泉藪、世之國華、抽精誠於魏宮、流餘慶於娰幄、嗟乎音徽長隔、歲月其徂、睦親之義、惻隱于懷、宜遵飾終之禮、式申贈爵之恩、可依前件、主者施行、

嘉承二年十二月十三日

〔本朝世紀〕久安二年十月四日庚子、有故權中納言藤長實卿幷室家源方子贈官位事、(○中略)

正三位藤原朝臣長實
右可レ贈二正一位一
中務、德範光二古今一、勳績格二天地一、久列二忠臣一、早備二獻替之職一、旣爲二外祖一、宜レ鍾二慶賞之恩一、考二舊典一而高贈二一品之好爵一、施二朝章一而式賁二九泉之遊魂一、可レ依二前件一、主者施行、
久安二年十月四日
無位源朝臣方子
右可レ贈二正一位一
中務、儀範德茂、肅雍譽傳、蘭室露泣、戀二遺芬一而搖レ心、松墳風悲、聞二往事一而傷レ思、宜レ降二紫泥之詔一、用光二黃壤之榮一、可レ依二前件一、主者施行、
久安二年十月四日
〔兵範記〕保元三年十二月廿九日乙卯、依レ催參レ陣、可レ被レ行二贈后贈官位事一之故也、
寫書贈位記狀
正二位藤原朝臣經實
右可レ贈二正一位一
中務、天爵相議、人望早著、仕レ朝昔爲二忠臣一、於レ朕亦○亦下恐脫二爲字一外祖、宜レ從二追飾之典一、用申二尊親之情一、可レ依二前件一、主者施行、
保元三年十二月廿九日
以下狀公卿連署、制書可レ告、贈如レ例位記、
〔續日本紀聖武十二〕天平九年十月丁未、贈二民部卿正三位藤原朝臣房前正一位左大臣一、幷賜二食封二千戶於其家一、限以二二十年一、

〔三代實錄二十二清和〕貞觀十四年十月十日丁未、正三位守右大臣兼行左近衞大將藤原朝臣基經、抗表辭故太政大臣忠仁公(〇藤原良房)封邑曰、(〇中略)臣謹讀去月四日詔書、贈於故太政大臣藤原朝臣、以正一位、又以美濃國封之、爲美濃公、謚曰忠仁、食封資人、並同平日、太政大臣之官、亦如故矣、(〇中略)謹拜表以聞、十六日癸丑、右大臣重抗表曰、(〇中略)國封職封、不敢妨國用、唯位封所加、公損無幾、望准人存、略在聖旨、然亦不過服紀之闋年、將同朝廷之恒跡、(〇中略)謹重拜表以聞、勅答曰、(〇中略)其位封者存日所食、今之加增亦是細塵、宜同之銍平、永々莫絕、豈足爲飾幽之榮、聊須寄追遠之念、餘依來請、(〇下略)

贈生前當賜之官位

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年二月己酉、左大臣正一位藤原朝臣永手薨、(〇中略)石川朝臣豐成宣曰、(〇中略)朕大臣(乃)仕奉狀(毋)勞(美)重(美)、太政大臣之位(爾)上賜(比)授賜時(爾)、固辭申而不受賜成(岐爾)、然後(毋)將賜(止)思(之宮坐何之奈良)、太政大臣之位(爾)上賜(比)治賜(久止)詔大命(乎)宣、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年二月丙午、三品能登內親王薨、(〇中略)遣參議左大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂、就第宣詔曰、(〇中略)治賜(牟止)所念(之)位(毛止奈)一品贈賜(不〇下略)

贈本官本位

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年七月乙巳、詔曰、疇庸敍功、彰于舊典、赦過宥罪、著自前經、故太宰帥正二位藤原朝臣魚名、乃祖乃父、世著茂功、或盡忠義而事君、或宣風猷以伏時、言念於此無忘于懷、今故贈以本官、酬其先功、宜去延曆元年六月十四日所下詔勅官符等類、悉皆燒却焉、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年五月丁亥、贈正五位上伴宿禰益立本位從四位下、益立寶龜十一年爲征夷持節副使、發京之日、敍從四位下、厥後遺讒奪爵、其男越後大掾野繼、上書寃訴久矣、遂明得雪父恥、

年忌贈官位

〔建內記〕文安元年五月六日乙卯、今日贈位贈官事、於陣有宣下、上卿中御門中納言、(宗繼)少納言繼長朝臣云々、故綾小路羽林經有朝臣被贈左大臣從一位、當年彼卅三年(十五日云々)也、南御方(伏見殿女中禁裏御實母)親父也、仍被申請云々、

〔康富記〕寶德二年六月九日辛巳、是日故日野中納言義資卿十七年忌也、依之贈位贈官事、被申請之、

累贈官位

昨日被宣下、但月次祭御神事中也、可爲何樣哉、又少納言業忠眞人被相催之處、月次祭神今食就卜合可有出仕、仍參陣難治之由被申之、彼是陣儀儀不可事行之間、可爲消息宣下之由治定、贈官以口宣宣下例、未無先規、先年故少納言入道（眞賢眞人）贈三位之時、非陣儀、消息宣下也、以件例可被准據歟之由、淸少納言向頭右大辨亭被申意見、昨夕大內記在治朝臣入來此亭、少內記康顯參陣事、雖相催之、俄頃參仕難叶之由令返答、所詮昨日藏人權右中辨綱光爲奉行、以消息被宣下之、存生時從二位權中納言也、仍先被贈正二位、又被贈權大納言者也、宣旨案可尋注也、

〔和長卿記〕大永八年七月五日乙亥、今朝有贈官宣下云々、上卿帥大納言、奉行職事左中辨、使少納言範久朝臣也、勸修寺故儀同敎秀公者、當今之外祖、東洞院殿父公也、今月十一日卅三回云々、依之被贈官、陣儀下行幷使祿物等禁裏御沙汰也、一家之光輝不過之歟、

〔續史愚抄（中御門）〕寶永七年八月廿三日丙辰、贈權中納言（綱重、元在甲斐、將軍家宣實父、）有贈征夷大將軍宣下、（慶長年、大炊助源朝臣義重、贈鎭守府將軍例云、）上卿權中納言、（共方）奉行藏人頭左中辨尙長朝臣、廿七日甲申、贈征夷大將軍（綱重、贈權中納言正三位、）有贈太政大臣正一位等宣下、（來九月十四日卅三回）上卿西園寺大納言、（致季）奉行藏人頭左中辨尙長朝臣、贈太政大臣（綱重）號淸揚院、

〔續日本紀（三十八桓武）〕延曆四年五月丁酉、詔曰、（中略）○宜追贈朕外曾祖贈從一位紀朝臣（諸人）○正一位太政大臣、

〔日本後紀（十四平城）〕大同元年六月辛丑、詔曰、尊祖追榮、先王之茂範、敦親贈號、曩哲之嘉猷、朕以菲薄嗣守洪基、思欲率修舊章、篤崇典禮、宜朕外祖父贈從一位內大臣藤原朝臣良繼追贈正一位太政大臣、外祖母贈從一位尙藏安倍朝臣古美奈贈正一位、

〔續日本後紀（八仁明）〕承和六年九月癸未、詔曰、親王（伊豫）○母故无位藤原朝臣吉子屬遇轗軻、墜失爵位、時移事貸、追悼營魂、宜贈本班、照之窀穸、可贈從三位、　十月乙卯、贈從三位藤原朝臣吉子更贈從二位、

以有崇也、

〔續日本後紀 十七 仁明〕承和十四年十月丁酉、詔、贈大納言從三位橘朝臣奈良麿更贈太政大臣正一位、崇帝戚也、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄕、

〔文德實錄 五〕仁壽三年五月甲寅、加贈正五位下橘朝臣逸勢從四位下、

〔日本紀略 一 醍醐〕延長元年四月廿日甲子、詔、故從二位太宰權帥菅原朝臣本官右大臣、兼贈正二位、宜弃昌泰四年正月廿五日詔書、

〔政事要略 二十二〕八月四日北野天神會事

延喜四年二月廿五日、薨於任所、年六十一其後號天滿天神、庶人皆歸之、廿三年四月廿日詔曰、追而賞之往聖遺訓、過而宥之、先王格言、故太宰權帥從二位菅原朝臣在朕童蒙、勞其侍讀、自從震宮之日、至于寢位之朝、久爲近臣、非无勤苦、而身從謫官、命殞遐鎭、雖積多歲、何有相忘、故贈本職、兼增一階、爰示舊意、以慰幽靈、宜弃去昌泰四年正月廿五日宣命、燒却之、大內記三春文以作

從二位菅原朝臣

右可賜正二位

中務、昔侍龍樓之闥、又趨鳳闕之庭、久仕之間、歲月多積、而遙沒山川之外郊、不歸京城之舊里、故訪幽魂深存懷古、宜贈先華之朝章、以照古昔之夜隧、可依前件、主者施行、

年　月　日

贈左大臣正一位詔

詔、褒賢之義、无渝乎始終、尙德之規、已貫于存沒、故右大臣贈正二位菅原朝臣、才高冊府、効著廊堂、挹九流以涉儒津、登三强以助帝道、於戲象岳之蹤、隔淸塵而雖迥、牛山之淚、想往事而猶新、朕嗣膺寶曆、

祇奉璿圖、欲施錄舊之仁、以原追遠之典、可賜正一位左大臣、庶分恩渙於北闕之震波、將照寵光於遐鎭之幽墓、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

正曆四年五月廿日

〔帝王編年記 十七 一條〕正曆四年五月廿日、被奉勅使菅原幹正朝臣於太宰安樂寺、贈左大臣正一位、讀宣命退出之間、自珠簾之内有青紙書、隨風出來、其詞云、

忽驚朝使排荊棘　官品高加拜感成　雖悅仁恩覃邃窟　但羞存沒左遷名

件正文詩、于今在外記局、非彼御手跡、似道風云々、　閏十月廿日、重被奉菅原朝臣爲理、贈太政大臣、讀宣命之間、御託宣云、昨日爲北闕被悲士、今西都爲雪恥尸、生恨死歡其奈我、今須望足護皇基、

〔百練抄 四 一條〕正曆四年閏十月廿日、菅丞相贈太政大臣、依内大臣 道兼○藤原 夢也、

〔本朝世紀〕正曆四年閏十月廿日甲辰、午後權中納言源伊陟卿著左仗座、召權少外記菅野敦頼、仰云、召内記、爰大内記巨勢朝臣爲時參入、著膝突、于時上卿仰云、進菅丞相贈官位太政大臣宣命詔書等者、爲時朝臣入件宣命詔書等於筥持參、于時起座參弓場殿、付藏人奏聞、移二剋奏聞畢之後、還著同座、召權少外記菅野敦頼、仰云、召中務少輔、于時敦頼承此由、召中務少輔藤原朝臣統理、參入奉詔書、次使菅原朝臣爲理、參入奉宣命、其後戌一剋各退出、但今日有一分召之事、仍局奉如例、

詔、寵章表德、綿篇載而長傳、縟禮旌賢、素簡編而不朽、故贈正一位左大臣菅原朝臣、鐘石銘勳、旂常紀績、和鹽梅乎台鉉、韜風雲乎牙籤、朕前加追榮、令昭徽烈於百代之後、今申駿命、愈崇靈魂於九原之中、嗟乎馬鬣年深、蒼煙之松雖老、龍光露暖、紫泥之草再新、贈以太政大臣、蓋增褒貢之故也、宜極人臣之職、式照泉壤之蹤、布告天下、俾知此意、主者施行、

正曆四年閏十月廿日　從五位下守中務少輔兼春宮權大進藤原朝臣統理宣奉

〔言繼卿記〕天文二年九月十二日、今日大樹父公贈法住院 元宰相中將 贈左大臣從一位義澄、被贈太政大臣 贈相國宣下、前大

侍讀贈官位

納言被申候、豐後之大友申沙汰也、東坊城申次也、抑贈相國之事、等持院以後今是也、又聖忌日之外、不時之贈官初例歟之由云々、九時分參集、上卿三條大納言(公頼)、辨頭辨(奉行、兼秀朝臣)、少納言(長淳朝臣)業賢朝臣參、內記は英名也、

〔扶桑略記 二十二字多〕寬平二年五月十六日、參議左大辨前勘解由長官文章博士橘朝臣廣相薨、十七日、詔贈中納言從三位、由侍讀勞也、

〔朝野群載 二十一雜文〕贈官位(付賻物)

詔

天皇我詔旨良万止故權左中辨藤原朝臣義忠仁詔倍止勅命聞坐止宣、近會任國仁罷下止所聞食給天、何時歸參供奉无止旦暮仁待賜間仁、不慮溘然止天之長罷退止聞食天、驚賜比悲大坐須、大命坐詔天、汝朕止青閑之日世利紫宮之時末天、多以經史、久奉傳授利、善誘之舊勞、一日忘給波須、而天皇朝廷遠登離天、長罷退波、再相見留由毛無奈利奴、自今日波誰復朕前仁、侍講无止加止、仁御淚哭事大坐須、仍藤原朝臣仁賜天、令供奉无止所念行事止、官止天奈毛、參議從三位仁上賜比贈賜比、幷賻物宛給波久止詔、天皇大命遠聞食止宣、

長久二年十月十九日(○中略)

正四位下藤原朝臣義忠

右可贈從三位、

中務、三代傳業、九園執經、其功最高、顧寵光而蔑爾、其位猶淺、恭鴻漸而悵然、宜飾終禮於黃壚、式報侍講於丹地、可依前件、主者施行、

長久二年十月十九日

〔康富記〕文安元年十月廿三日戊辰、來廿九日、故大少納言入道殿常十三回正忌也、(○中略)抑大少納言

入道殿現存之時、正四位下少納言也、被聽内昇殿、仍三品事、故鹿苑院殿（〇足利義滿）可在申御沙汰之由、有御約束、見應永二年五月故賴季眞人御記（但入道殿□相代子息、此時分被記錄者也、）然間大少納言殿者、後光嚴院、後圓融院、後小松院三代御侍讀也、又崇光院（仙洞御時）大通院（親王御時）兩代爲御侍讀、於彼等賞者、既令浴朝恩給、當時大外史爲當今（〇後花園）御侍讀、全經悉有御傳授、以此賞可有贈位御沙汰之由被申、先就殿下（〇藤原持基）被申入之間、自關白殿御書被付傳奏尹大納言（親定卿）尹亞相卽今夜被奏聞、申於彼一流者、未無上階之例、廣被聞食合之後、可有御返事之由有勅答云々、　廿四日己巳、參伏見殿、大少納言入道（俗名良賢眞人、法名常宗、）贈位所望事、昨日殿下御狀付傳奏尹大納言、可有披露也、殊更自竹園被申禁裏可被下也、彼入道參崇光院、大通院、爲御侍讀、近則武家之時宜、就便宜致奉公之上者指合被申、可被下之由申入了、不可有御等閑、可被申入之由、以庭田中將被仰下了、應永二年家記、又依御侍讀贈官位例、明經儒依御侍讀加階例等註進了、崇光院宸筆御書、（正文）同進上了、大外史唯今令來給、有此談合者也、

應永二年五月二日、（大外記賴季眞人被記分、常安自筆也、）良賢令向萬里小路大納言（嗣房）亭、有對面、被相語云、去月賀茂祭棧敷、室町殿入御、令參會處、上階可有御沙汰之由、被尋仰之間、昇殿之上者、上階不可有豫儀之旨申上了、此上者定可有御沙汰歟、且先珍重之由被仰之、不出所望之處、及此御沙汰之條、爲身面目者哉、

依御侍讀贈官位例

寛平二年五月十七日、參議正四位上橘廣相、贈從三位中納言、（御侍讀）

延喜八年十月十七日、參議從四位上藤原菅根贈從三位、（御侍讀）

應和三年六月十五日、權中納言從三位大江維時贈從二位、（御侍讀）

長久二年十月十九日、權左中辨正四位下藤原義忠贈參議從三位、（御侍讀）

廿六日辛未、今日藏人左中辨俊秀爲勅使、參前攝政殿、淸外史申請常宗贈位事、御意見可被申之由有勅問、御返事於彼家者未雖無其例、依御侍讀勞、可有贈□之條、始註申先例者、無子細事歟、於申分

著述贈位

良吏贈位

者無豫儀候口口可在時宜之由被申云々、又以同辨爲勅使被申殿下云、常宗贈位事、雖被執申候、被一流無先規候、又御書被申分、御約束云々、此何樣事候哉、御侍讀賞事、常宗者既被聽昇殿、被任少納言了、無不足歟、業口御侍讀之賞可讓之由申候歟如何、重可被執申分候哉云々、二條殿御返事は、御約束事、鹿苑院殿御約束也、御侍讀賞事、當時大外史之賞ヲモテ、可相讓之由申歟、自初可被執申分、堅被思食了、彼家雖爲新儀可有何事哉、醫陰諸社神主既御免之傍例、連綿之上者、可被借候分、無其理歟、已代々昇殿ト云、少納言ト云、御免之上者、至上階又不苦之由、堅被申了、　廿八日癸酉、入夜傳奏中山大納言以使者被示、外史贈位事不可有子細之由、有勅許、女房之奉書如此云々、被送之、拜見之、所詮常宗事者、賞無不足分候歟、外史之勞尤可被賞也、相讓可被申請之由、被申之間、御免之由被遊載、返々珍重々々、仍口宣事、以今日之日付、明日可執進之由被申者也、今夜奉件、大外史參伏見殿、彼贈位事、勅許之御返事、只今被仰下、畏入之由以庭田殿申入了、　廿九日甲戌、常宗禪門十三回之正忌日也、〇中略贈位之口宣案今朝到來、外史懷中之、於御影前被讀申之、又於墳墓前同被讀申之由也、正文被納彼亭、案文又寫之、被置塔頭了、

上卿萬里小路大納言

文安元年十月廿八日　　宣旨

正四位下清原良賢眞人

宜賜贈從三位位記

藏人左中辨藤原俊秀奉

後日大内記在治、贈三品位記書送之、文章明經儒之由、不見之間書直可給之由示之、先返遣之、

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月辛酉、詔贈從五位下調忌寸老人正五位上、以預撰律令也、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年閏五月甲申、贈故河内守正五位下佐伯宿禰國益正五位上、幷賜稻千束、

褒廉勤也、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十一月二日己卯、詔贈正五位下道公首名從四位下、首名是良吏也、今追賞焉、

成功贈位

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年六月乙酉、武藏國入間郡人大伴部直赤男、以神護景雲三年、獻西大寺商布一千五百段、稻七萬四千束、墾田四十町、林六十町、至是其身已亡、追贈外從五位下、

死事贈位

〔續日本紀九聖武〕神龜元年四月壬辰、陸奥國大掾佐伯宿禰兒屋麻呂贈從五位下、賻絁一十匹、布二十端、田四町、爲其死事也、

告密贈位

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十月壬午、彈正尹三品阿保親王薨、遣從四位上藤原朝臣助、從四位下田口朝臣佐波主、從五位上藤原朝臣宗成、從五位下路眞人永名等、監護喪事、葬日遣參議從四位上和氣朝臣眞綱等、贈位曰、天皇大命良万止阿保親王爾宣久、往者逆人結黨天不善留事謀利、而乎親王乃至誠有天、白顯留爾依氏伏罪天國家不亂奈理太里、爾依此氏伊都志賀參入坐牟冠位上賜牟止念行支、而間爾不虞外爾、忽爾朕我朝廷乎置天罷坐奴止聞念天奈毛、驚賜比、悔賜比哀賜比都都大坐、然毛治賜比授奉牟止所念之位爲天奈毛、一品贈賜比治賜布、又遺禮留親母幷子等乎毛殊矜治賜牟、罷坐留道間波、平久幸久宇志呂毛輕久罷坐止詔不天皇我大命乎宣、

戰功贈位

〔日本書紀二十九天武〕二年五月癸丑、大錦上坂本財臣卒、由壬申年之勞、贈小紫位、　五年七月、是月村國連雄依卒、以壬申年之功、贈外小紫位、　九月、是月坂田公雷卒、以壬申年功、贈大紫位、　八年二月甲寅、紀臣堅麻呂卒、以壬申年之功、贈大錦上位、　三月丙戌、兵衞大分君稚見死、當壬申年大役、爲先鋒之、破瀨田營、由是功、贈外小錦上位、　十二年六月己未、大伴連望多薨、天皇大驚之、則遣泊瀨王而弔之、仍擧壬申年勳績、及先祖等、每時有功、以顯寵賞、乃贈大紫位、發鼓吹葬之、　十四年五月甲子、是日直大參當麻眞人廣麻呂卒、以壬申年之功、贈直大壹位、

遣外國使贈位

〔續日本紀一文武〕二年六月丁巳、直廣參田中朝臣足麿卒、詔贈直廣壹、以壬申年功也、　三年五月辛酉詔曰、圖勳之義、肇自前修、創功之賞、歷代斯重、蓋所以昭壯士之節、著不朽之名者也、汝坂上忌寸老、壬申年軍役、不顧一生、赴社稷之急、出於萬死、冒國家之難、而未加顯秩、奄爾隕殂、思寵往魂、用慰冥路、宜贈直廣壹、兼復賜物、

〔續日本紀二文武〕大寶元年正月癸卯、直廣壹縣犬養宿禰大侶卒、遣淨廣肆夜氣王等、就第宣詔、贈正廣參、以壬申年功也、　六月癸卯、正五位上忌部宿禰色布知卒、詔贈從四位上、以壬申年功也、

〔續日本紀三文武〕大寶三年七月壬子、贈從五位下民忌寸大火正五位上、正六位上高田首新家從五位上、並遣使弔賻、以壬申年功也、

慶雲三年二月庚辰、左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒、以壬申年功、詔贈從三位、大華上利金之子也、

〔續日本紀四元明〕慶雲四年十月戊子、從四位下文忌寸禰麻呂卒、遣使宣詔、贈正四位上、幷賻絁布、以壬申年功也、

〔古京遺文〕文忌寸禰麻呂墓版

壬申年將軍、左衞士府督正四位上文禰麻呂忌寸、慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒、

〔續日本紀五元明〕和銅三年十月辛卯、正六位上黃文連大伴卒、詔贈正四位下、幷弔賻之、以壬申年功也、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年二月乙未、外從七位下丈部善理贈外從五位下、善理陸奧國磐城郡人也、八年從官軍至膽澤、率師渡河、官軍失利、奮而戰死、故有此贈焉、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年二月乙亥、贈故入唐大使從三位藤原朝臣清河從二位、副使從五位上小野朝臣石根從四位下、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年五月戊申、便附聘唐使、贈遣往歲銜本朝命入唐使、幷留學等在彼身歿者

八人位記、以慰幽魂、其詔詞曰、故入唐大使贈正二位藤原朝臣清河、可贈從一品、昔膺帝簡、遠効皇華、不利歸帆、還苦漂梗、終在殊域、俄從閲川、睠彼云亡、良深嗟悼、宜加異代之寵、以申追遠之恩、故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿、大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡、可贈正二品、身涉鯨波、業成鱗角、詞峰聳峨、學海揚漪、顯位斯昇、英聲已播、如何不憖、莫遂言歸、唯有掞天之章、長傳擲地之響、追賁幽壤、旣隆於前命、重敍崇班、俾洽於今詔、故入唐使贈從四品下石川朝臣道益、可贈從四品上、忘軀徇節、奉使先朝、履義賓忠、修聘唐國、路嘗艱苦、泊遘沈痾、未達於中京、奄淪於下夛、興言及此、追以悼傷、傳聞靈芝產兮墳裏、蓋由幽感、克致之歟、宜錫寵章、式旌泉壤、故入唐判官贈從五品下紀朝臣馬主、可贈從五品上、故入唐判官從五品下勳十二等田口朝臣養年富、可從五品上、餘如故、故入唐判官從五品下甘南備眞人信影、可贈從五品上、故入唐判官贈從五品下紀朝臣三寅、可贈從五品上、故入唐判官從七品下播守宿禰明可贈從五品上、馬主以下至明五人位記、共用同詞、往參高選、出使大邦、俄淹泉臺、不歸本土、仁惻念舊、彝典无愆、義不忘勞、朝章斯在、宜申寵渥、用慰亡魂、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年九月丙午、詔曰、天皇我詔旨良萬止宣大命乎衆聞食與止宣、○中略在唐天身罷太留判官藤原豐並平毛哀愍賜比、追天冠位賜久度詔不天皇我大命乎衆聞食止宣、○中略贈在唐身亡判官正六位上藤原朝臣豐並從五位上、

外國使贈位

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年正月丙辰、遣使就客館、贈渤海大使忠武將軍胥要德從二位、首領無位已閼棄蒙從五位下、并賜調布一百十五端、庸布六十段、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜四年二月乙丑、渤海副使正四位上慕昌拜卒、遣使弔之、贈從三位、賜物如令、

〔日本後紀 二十四嵯峨〕弘仁六年六月癸丑、渤海大使從三位王孝廉薨、詔曰、○中略宜可正三位、○下略

歸化人贈位

〔日本書紀 二十九天武〕二年閏六月庚寅、大錦下百濟沙宅昭明卒、爲人聰明叡智、時稱秀才、於是天皇驚之、降恩以贈外小紫位、重賜本國大佐平位、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年九月癸未，中使就故贈二品伊豫親王墓，詔曰，早捐栢館，長掩泉臺，悼福祿之不融，悲倚伏之難測，雖既追榮於前詔，遂欲增飾於當年，宜贈榮班，以賁幾窀，可贈一品，又詔曰，親王母故无位藤原朝臣吉子屬遇轗軻，墜失爵位，時移事貸，追悼彎魂，宜贈本班，照之窀穸，可贈從三位，

十月乙卯，贈從三位藤原朝臣吉子，更贈從二位，以有祟也，

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年八月辛未，是日詔曰，无位橘朝臣奈良麻呂，倚伏難測，既爲夜臺，悼福祿之不長，悲忠貞之未遂，宜寛典式，賁幽墳，可贈從三位，

〔百練抄 八高倉〕治承元年七月廿九日，讚岐院奉號崇德院，宇治左府贈官位 太政大臣正一位 事宣下，天下不靜，依有彼怨靈，

〔玉海〕安元三年 〇治承元年 七月廿九日丙寅，巳剋右中辨親宗爲院御使來，〇中略 親定語事等，

一讚岐院院號，幷宇治左府 〇藤原賴長 贈官贈位等事，來月三日可被行，此事左府被申行云々，以天神御例爲蹤跡云々，此例不似歟，已是朝家大事也，尤可有謂，而無左右被行之，如何之由，世人傾奇云々，余 〇藤原兼實 案，此事偏可在叡慮，他人不可申，是非事也，〇中略

後聞，今日被行贈官位幷院號等事，使惟基，詔書位記宣命等尋取切續也，

詔，宥過而後優者，聖代之彝訓，褒賢而追賞者，明時之舊蹤也，故左大臣從一位藤原朝臣，器韜珪璋，才叶廊廟，陰陽燮理之昔，漢牛無春喘焉，臚句奏宜之時，胡馬不南牧矣，朕聞其徽猷，綵綸惟新，更播榮輝於青鳥之曉露，故可贈太政大臣正一位，庶極人臣之職位，式照泉壤之幽冥，宜去保元元年丑九月宣命等燒却之，主者施行，

安元三年七月廿九日

位記文 用綠紙 中務權大輔經家 少納言惟基 左近將監藤原宗量等役之

從一位藤原朝臣賴長

右可贈正一位

中務、智究淵識、任秉國鈞、百寮仰寅亮之化、兆庶歸具瞻之仁、而早隨逝水、以抛舟楫之用、空閉麥臺、以推棟梁之材、追聞徽音、今加哀策、宜施朝章、式賁夜壑、可依前件、主者施行、

安元三年七月廿九日

〔親長卿記〕文明四年七月十日、參內、(下袴)自廣橋大納言許可參之由申送之故也、命云、多田廟所(滿仲朝臣廟堂)也、今月兩三度有鳴動、鳴動事雖及度々今度之儀超過先蹤云々、可有贈位歟、可尋申諸卿(一條大閤、關白政嗣公、日野前內大臣、右大將、中院、新大、廣橋、予等也、)之由可仰元長云々、何樣各可被計申之由可申旨返答仰詞即注之、見廣亞相了、　八月十一日、晝以後參內、(直衣)新大納言、(敦秀)廣橋大納言(綱光)等祗候、(各下袴)條々談奏聞、

一可被定故滿仲朝臣(元正四位下)位階事

一雖可被副位記於宣命、請印之儀、當時不叶、然者可被副案文、但案文陵遲之由、大閤被申、但雖為幽玄之例、應永廿二年、同三十三年、贈位宣下、(共女階也)宣命許云々、可為時宜事、(○中略)

仰位階事、今度公卿等、關白、右大將、(公敦)從一位前內府、(勝光)新大納言、從二位、正三位、廣橋大納言、予等申二品、中院大納言武家就御佳例可為正三位(故貞氏贈從三位、從五位下)歟云々、就多分之儀奏可為從二位之由叡慮也、但就大樹之先規佳例、可為三位歟、宜申談武家云々、

位記事副案文事無先規者、雖為幽玄之例、宣命許可進云々、(○中略)

贈位方兩條事、仰兩傳奏、猶正二位可然之由存之、為二品者、正二位可然歟之由、廣橋大納言申之、重奏聞、仰云、只可為從二位云々、兩人參武家申之、二品之由就諸卿多分之意見叡慮又無相違之條、投入之由被申之、予書仰詞遣兩人了、　十七日、今日有多田廟所(故正四位下源滿仲朝臣)贈位宣下并親王宣下等事、件贈位事、去月十日可申沙汰之由、可仰元長、元長先書仰詞、

就故滿仲朝臣廟所鳴動事、可有贈位否、若有贈位者、階級同可被計申矣、

私申鳴動雖及度々、今度事無比類之由、注進之趣、依被公武驚思食、及此御沙汰候、內々被得其意候哉、

折宿紙書之、各見廻了、（遣所南部岩藏近邊人々）或以書狀送之、或元長持向之了、

諸卿申詞云

大閤（一條兼良公）（南部御座以書狀申送了）

入道左馬頭源滿仲朝臣遺廟鳴動事驚入候、但近日天下擾亂、爲彼子孫確執之間、祖靈驚覺頗與時相應候哉、次贈位事出家以後儀、凡不打任子細候歟、其上位記請印不可事行之條文、還又聊爾候哉、其間事可被如何哉、所詮廟所鳴動事者、連綿儀候、多武峯鳴動時者、氏長者捧告文、致祈謝之、仍以彼例、先爲源氏長者可有懇祈之條、可然之由爲勅定可被計仰之條、可爲如何候哉、以此旨內々可披露給候也、謹言、

七月廿三日　御判（牛折御狀也）

關白（二條政嗣公）

就故滿仲朝臣廟所鳴動贈位事、於階級者雖三品勿論候、以一段之儀可被贈從一位歟、宜在時宜矣、

日野前內大臣（勝光公）

就多田廟所鳴動可有贈位歟、然者可爲何位哉事、

彼鳴動先例雖爲連綿、今般震聲超常篇、連日相續過先蹤、先蹤旁以謹愼不輕、仍彼朝臣者、近爲貞觀之苗胤、今崇大樹之元祖、爲有靈威贈位之御沙汰定可□玄應乎、次階級事、於三位者爲普通之昇遷、以二品可被朝奬歟、宜在時宜矣、（折紙也、引合、○中略）

就人々申詞、去十一日被申談室町殿訖、二品（從二位）勅賞可畏入之由被申之、仍今日治定、

爰今度可爲宣命許歟之由、兼有其沙汰、然者一條大閤可被副位記請印、不可叶之由被申之、仍勸見

先規之處、（應永廿二年贈位、同廿一年贈位、）兩度宣命許也、雖不被副位記、不可有其難歟、但中院故一品贈位之時、於臨時之儀、不請印送之云々、且又康正三年二月廿七日、義量贈位贈官宣下之時、不及位記請印、（敎秀卿、于時上卿、彼記出現、）分明之上者、不及請印可副位記云々、仍仰内記了、抑參向廟所勅使事、少納言多分之例也、被仰少納言長直朝臣之處、所勞云々、仍中務輔幷大内記參向相尋之處如此、

就贈位宣命中務幷内記參向例無所見候、但貞治二年八月十四日、源貞氏贈位宣下、少納言不參、六位藏人勤代、輔不參外記爲代、如此注置候、若藏人參向候哉、可得其意候、恐々謹言、

宗賢（○中略）

八月八日

今度勅使事、仰大内記（兼將監、六位藏人、）菅原在數了、

僞冤贈位

〔續日本紀稱德二十七〕天平神護二年十一月壬戌、贈正六位上村國連島主從五位下、島主者壬申年功臣贈外小紫男依之孫也、始仕仲滿、任美濃少掾、寶字八年、遣使固關、島主內應、先歸朝廷、勅使以其初逆黨、橫加誅戮、死非其辜、故有此贈、

親王諸王贈官位

〔日本書紀天武二十九〕八年三月己丑、吉備大宰石川王、病之薨於吉備、天皇聞之大哀、則降大恩云々、贈諸王二位、

〔續日本紀聖武十二〕天平七年十一月乙丑、知太政官事一品舍人親王薨、（○中略）遣中納言正三位多治比眞人縣守等就第宣詔、贈太政大臣、

〔日本紀略嵯峨〕大同四年五月壬子、三品高志內親王薨、（○中略）詔贈一品、

〔日本紀略淳和〕天長七年四月甲子、萬多親王薨、桓武天皇第五皇子、母中務大輔藤原朝臣鷲取女也、詔贈一品、年卌三、

〔親長卿記〕文明六年七月三日、式部卿宮（○貞常親王）猶逐日無御憑之由申之、（○中略）注進云、已及御臨終、二

尊院參善知識、丑剋許御命終云々、　四日、以民部卿勸修寺大納言、廣橋大納言、予等、被仰下云、故式部卿宮一品事、以昨日日付可被仰付、各所存如何、爲叡慮者、何子細候哉之由各申之、予申云、凡親王或四品、三品、二品各無次第之一級、但於例者勿論毎々無此儀、仍昨日御事也、以昨日日付雖有宣下、不可有其隱、何無贈位之儀哉、於贈位者猶可爲一段之儀歟之由存之、但先規事當座無覺悟之由申入了、人々同心申入此子細了、仰云、然者贈位事可有御沙汰云々、廣亞相申云、奉行職事可仰元長云云、即予書書狀尋先規於兩局、師富朝臣、雅久朝臣、先之申出帝王系圖親王次第加級幷贈位之例引見之、阿保親王無等親王等有贈位事、予書之、先贈位事可有御沙汰否事、可尋申太閤云々、兩局之例未到之間、兩親王例注之申太閤、入夜太閤御返事到來、右先規之上者、何子細候哉之由被申奏聞、然者早々可申沙汰云々、　六日、贈位事、元長宣下之、○中略

文明六年七月六日　宣旨

故式部卿貞常親王

宣贈一品　宣命位記令作

藏人右少辨藤原元長奉

口宣一紙獻上之早參歟、下知給之狀如件、

七月六日　右少辨藤原元長奉

進上廣橋大納言殿

下上卿了、上卿命云、宣贈一品令作宣命位記、如此可有歟云々、大略舊次第等仰詞載此趣也、仍注付之由返答了、上卿下知大内記、大内記長胤持向寺家云々、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年九月丁酉、詔贈大納言從三位橘朝臣奈良麻呂、更贈大政大臣正一位、崇帝戚也、

○按ズルニ、帝戚贈官位ノ事ハ、帝王部外戚篇ニ載セタリ、

爲立后贈官

〔大鏡三左大臣師尹〕小一條大將濟時〇藤原の御ひめ君〇娍子こそは、たゞ今〇三條の皇后宮と申つるよ、三條院の御時に后にたて奉らんとおぼしけるに、こちよりて大納言のむすめにて、后にたつれいなかりければ、御ちゝのおとゞ小一條の大將を、贈太政大臣になしてこそは、后にたてさせ給ひてしか、されば皇后宮いとめでたくおはしますめり、

贈官位例

〔續日本紀二文武〕大寶元年正月己丑、大納言正廣參大伴宿禰御行薨、帝甚悼惜之、〇中略遣直廣壹藤原朝臣不比等等、就第宣詔、贈正廣貳右大臣、御行難波朝〇孝德右大臣大紫長德之子也、

〔拾芥抄中末贈官位〕贈官大寶元年正月十五日、大納言正廣三大伴御行宿禰薨、同廿日、贈正廣二右大臣云々、贈官位起自此云々、

〔續日本紀六元明〕和銅七年五月丁亥朔、大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨、帝深悼之、詔贈從二位、安麻呂難波朝〇孝德右大臣大紫長德之第六子也、

〔續日本紀七元正〕養老元年三月癸卯、左大臣正二位石上朝臣麻呂薨、帝深悼惜焉、爲之罷朝、詔遣式部卿正三位長屋王、左大辨從四位上多治比眞人三宅麻呂、就第弔賻之、贈從一位、〇中略大臣、泊瀨朝倉朝庭〇雄略大連物部目之後、難波朝〇孝德衞部大華上宇麻乃之子也、

〔續日本紀八元正〕養老四年八月癸未、是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨、 十月壬寅、詔遣大納言正三位長屋王、中納言正四位下大伴宿禰旅人、就右大臣第、宣詔、贈太政大臣正一位、

〔大鏡裏書上〕贈太政大臣七人事有二十四人、不審

右大臣不比等、左大臣武智麻呂、參議房前、內大臣良繼、參議百川、內舍人橘清友、左大臣冬嗣、中納言長良、紀伊守藤原總繼、式部卿仲野親王、內大臣高藤、左大臣時平、右大臣菅原朝臣、關白右大臣道兼、

〔大鏡一後一條〕世はじまりてのち、大臣みなおはしけり、〇中略あるひはみかどの御おほぢ、あるひ

は御門の御をぢぞなり給ふめる、またゑかのごとく帝王の御おほぢおぢなどにて御うしろみし給ふ、大臣納言かずおほくおはす、うせ給ひてのち、贈太政大臣などになり給へるたぐひあまたおはすめり、さやうのたぐひ七人(或本十人)ばかりやおはすらん、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年十月丁未、贈民部卿正三位藤原朝臣房前正一位左大臣、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字四年八月甲子、勅曰、○中略又得大師(惠美押勝)奏偁、故臣父(藤原武智麻呂)及叔(藤原房前)者、並爲聖代之棟梁、共作明時之羽翼、位已窮高、官尚未足、伏願廻臣所給太師之任、欲讓南北兩左大臣者、宜依所請、南卿(武智麻呂)贈太政大臣、北卿(房前)轉贈太政大臣、庶使酬庸之典垂跡於將來、事君之臣盡忠於後葉、普告遐邇、知朕意焉、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年七月壬辰、參議正四位上陸奥按察使兼鎭守將軍勳三等大伴宿禰駿河麻呂卒、贈從三位、賻絁三十四、布一百端、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年七月丙子、參議中衛大將兼式部卿從三位藤原朝臣百川薨、詔遣大和守從四位下石川朝臣豐人、治部少輔從五位下阿倍朝臣謂奈麻呂等、就第宣詔、贈從二位、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年二月壬子、天皇御大極殿、詔贈故式部卿藤原朝臣百川右大臣、

〔公卿補任桓武〕延曆十一年(壬申)
大納言正三位紀船守(六十二、四月二日薨、式部卿、近衛大將、天皇甚哀悼、不視事三日、贈右大臣正二位、)

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、○中略薨時贈正三位、年六十七、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年七月庚戌、致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣薨、依例遣使監護喪事、遺言不受焉、詔曰、念功惟深、懷德卽篤、總天工之綱紀、爲人臣之重望、況乎自朕幼沖、翊此王室、志同鷹隼、操均松筠、夫哀以悼往、榮以飾終、宜崇寵増用光幽壤、可贈從一位、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年五月丙辰、大納言正三位兼右近衞大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨、〇中略田村麻呂、赤面黃鬚、勇力過人、有將帥之量、〇中略頻將邊兵、毎出有功、寬容待士、能得死力、薨于粟田別業、贈從二位、

〔文德實錄六〕齊衡元年六月丙寅、左大臣正二位源朝臣常薨、大臣是嵯峨太上天皇子源氏第三郎、母飯高氏、太上天皇見其操行深沈、風神淸爽、寵愛殊於他子矣、丁卯、贈正一位、朝廷依舊遣監喪贈位使等、依有遺令、喪家確辭不受、

〔三代實錄淸和一〕天安二年十二月九日丙申、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣、〇中略贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足多武峯墓、在大和國十市郡、

〔〇按ズルニ、鎌足ノ贈官位ノ事ハ、帝王部外戚篇ニ之ヲ辨ゼリ、參看スベシ、

〔三代實錄淸和十六〕貞觀十一年三月四日壬戌、是日、勅贈故左大臣正二位源朝臣信正一位、遣參議正四位下行右衞門督兼讚岐權守源朝臣生、從四位下行大學頭潔世王、就第宣制、

〔日本紀略村上四〕康保二年五月二日辛未、贈故右大臣顯忠從一位、參議橘好古爲勅使、

〔扶桑略記白河三十〕承保四年〇承曆元年二月十七日戊戌、右大臣源朝臣師房薨、年七十也、瞑目以前、藏人頭源俊實爲勅使、被仰下可授太政大臣官之狀、薨了後、宣命持來、

〔源平盛衰記十九〕義朝首出獄事

左馬頭義朝ニハ贈官アリ、補太政大臣、

〔平家物語十二〕こんがきのさたの事

おなじき八月〇文治元年廿二日たかをのもんがく上人、故左馬のかみよしとものうるはしきかうべとて、たづね出してくびにかけ、〇中略くわんとうへぞくだられける、〇中略源二位〇賴朝かたせ川のはたまでむかへにぞ出給ふ、〇中略せきがんのさかしきをきりはらつて、あらたなるだうちや

うをつくり、一かうちゝの御ためとくやうして、せうちゆうじゆゐんとがうせらる、公家にもかやうの事をきこしめして、故左馬のかみよしとものはかへ、内大臣正二位をゝくらる、ちよくしは左少辨かねたゞとぞ聞えし、

〔大日本史二百二十九源義朝〕按平家物語曰、朝廷遣使贈義朝正二位内大臣、盛衰記爲太政大臣、無他確據、故今不取、

〔廣嚴寺楠木正成靈牌〕贈正三位羽林中郎將前河攝泉三州太守橘姓楠正成之座、

〔參考太平記十六〕正成兄弟死節事

按楠正成靈牌、今在攝州兵庫廣嚴寺、題曰、贈正三位羽林中郎將前河攝泉三州太守橘姓楠正成之座、製造古雅、彫刻遒勁、非復近世之物、別藏俊明極行狀一篇、其中載建武中贈位正成、乃與牌合、然其他事實有疑、故不採焉、

〔園太暦〕延文三年六月二日己巳、今日自内裏被下御書、故將軍〇足利尊氏贈官次位階事也、所存載請文了、

其後依無指事不染筆、積欝候、大樹事追日愁歎之外无他候、就其贈官事、此間沙汰候、内大臣無先規、右大臣實朝例不快、太政大臣又似過分候、左大臣可然之由、武家形勢候、此段非無其謂候歟、丞相贈官之時、被付贈正一位之條、先規常儀候哉、雖病中過分候、流例勿論候、推可有其沙汰候歟、爲之如何、被仰下候之旨、畏承了、大樹事驚歎不能左右候乎、就中老臣又多年舊好御體不聊候、總別之哀傷難盡筆端候、抑贈官事誠可然候歟、左大臣何事候哉、位階事、今度雖無沙汰、強不可有巨難候歟、但猶可有沙汰者、可爲從一位候歟、正一位者太政大臣、幷外祖定事候、其外執柄臣、神化人々、粗雖先例候、菅丞相猶最初者被贈本官右大臣正二位候歟、此上事可在時宜候哉、以此等之趣可令洩披露給也、公賢誠恐頓首謹言、

六月二日　　藤原公賢

頭辨殿

三日庚午、後聞、故征夷大將軍尊氏卿、贈官位事今日有沙汰云々、　四日辛未、去夕贈官位事尋參仕、外記康隆注進之、又丹忠有示旨、

〔康隆記〕同年六月三日（庚午）、今日解陣幷贈官宣下也、上卿權大納言藤原忠嗣卿、職事頭左中辨時光朝臣、少納言信家、大內記秀長、大外記師茂朝臣、少外記康隆參陣之、亥剋上卿著右仗座、（奥）頭辨進奥座、仰可解陣之由於上卿、卽被下吉書、次上卿移著端座、次官人敷軾、次上卿召外記、康隆參進、仰云、諸衞候哉、康隆申云、左近將監基統候、次上卿召內豎召諸衞、左近將監基統參列小庭、上卿南面ニ居直、（被疊勞置）次基統退、次頭辨就軾仰云、以前權大納言源朝臣、可贈左大臣從一位、令作詔書宣命位記ヨ、次上卿召大內記、秀長仰條々事、次大內記詔書宣命等草幷位記入一筥覽上卿、上卿見了返給內記、內記給之退出小庭、上卿就無名門代、以頭辨奏聞、次上卿歸著仗座、返給內記令清書、（位記不入清書）內記進清書、次有位記請印事、次掃部寮撤案、次上卿納清書詔書宣命請印位記等於筥、召大內記給之、上卿就無名門代、以頭辨奏聞、（內覽事被申免之云云）頭辨返下上卿、詔書有御畫日、上卿歸著仗座、大內記進、筥退、次上卿召少納言給贈位記宣命等、次上卿召外記康隆給詔書、被仰可傳給之由、康隆唯稱退、次上卿已下退出、少納言自陣直被參向本所云々、

〔師守記〕貞治四年五月十八日丙子、今日頭宮內卿信兼朝臣觸申云、〇中略平高時贈位事可有其口可被存知候、則被出請文了、注左、今日贈位事、被下知文殿了、〇中略

何條候事候哉

抑故高時贈官事、可被宣下候、日次治定候者、可獻御敎書候、彼本官不審候、又位階も何候哉注給候者悅入候、每事期參會候也、恐々謹言、

信兼

五月十八日

悅承候畢

抑故高時贈官事、可被宣下日次治定者、可賜御敎書之由可存知候、彼本官幷位階事、正中三年三月十三日高時出家、于時相模守正五位下如此候歟、左馬權頭同兼候哉、去任日不分明候、御不審候者可被決候歟、贈位位記請印之時、中務輔代事、承保二年十月六日、前太政大臣藤原朝臣(二條關白)殿下贈位位記請印、中務輔不參、左近少將顯實朝臣爲代官、近則康永二年三月四日、故從三位藤原清子贈位位記請印、中務輔不參、丞安倍盛宣從役、同年八月廿一日、入道讚岐守源貞氏贈位位記請印、中務輔不參、丞盛宣從役、凡式敍位以下請印之時、中務輔不參之時、殿上六位等從其役候歟、每事可參啓候、恐惶謹言、

五月十八日　師茂奉

廿日戊寅、今夜故入道相模守平高時有贈位宣下、上卿權中納言平親顯卿、奉行職事頭宮內卿同信兼朝臣、大內記菅原富長、權少外記淸原良種(博士書)等參候、子剋被始行之、

〔建內記〕嘉吉元年六月廿九日、故室町殿(足利義敎)去廿四日(薨、御、奉號普廣院、)贈官宣下日也、此事三寶院僧正御房被示中山宰相中將(定親、)宰相中將申合執柄(○藤原持基)之處、只今物忩歟、追可被宣下哉之由返答云々、可有宣下者、同者御葬禮以前可宜哉如何之由、一昨日僧正御房密々被招予示給、贈官事、遲速依時宜無定法、被賞其功可有宣下者、同者早遣誡可然哉、且可被載申御位牌歟、且就佛事可讚朝獎歟、近則正長元年正月例、御葬禮以前宣下也、重可被申合執柄哉之由申了、一昨夕已以奏聞治定云々、

〔贈官宣下記〕菅原益長記

嘉吉元年六月廿九日(甲午)、是日贈官宣下也、故室町殿(義敎公)被贈申太政大臣者也、上卿權大納言藤原時房卿、奉行職事左少辨藤原俊秀、少納言菅原益長朝臣、大外記中原師世朝臣、左大史小槻晨照宿

穪、權少外記清原忠種、左大史安信盛久等參陣、其儀上卿著奥座、職事進仰勅語、次上卿移端座、召少內記代盛久、(大內記在豐朝臣不參、仍勤代、)仰宣命事、即進草、上卿就弓場奏聞、清書取替奏也、被返下、次上卿著陣、召少納言益長朝臣給宣命、少納言賜之、持參本家、(仁和寺等持院)正長元年正月廿二日、勝定院殿(○足利義持)贈太相國時被行之樣如此、先例必不如斯歟、見仁安大外記記錄者也、

〔建內記〕嘉吉三年七月廿一日甲戌、卯剋室町殿(征夷大將軍左中將從四位下、十歲、御名義勝、普廣院殿(足利義敎)御長子、)御事切云々、(○中略)管領(畠山三位入道)招三條中山相談事在之、中山歸出示予曰、御贈官事可被申哉之由也云々、大納言談予、予云、公儀異他可被申之條何事有乎、但御淺官也、贈官可爲何官哉、但不依本位之早淺、被贈高官之例、義祖良門雖淺官淺位、被贈大相國、上古猶定有例歟、尤可被勸哉、於近例者一向無懸隔之例歟、此御事各別之儀也、定不可有子細之由相存之旨答之、尹大納言同之、次彼早出爲尋沙汰歟、(○中略)中山相語云、贈官位宣下事、可爲明後日(廿三日)、於先例者淺位(五位)淺官之人、贈相國左府等其例繁多也、(予曰、少年人如何、中山云、未知云々、是則今度彼御事別段之優賞者也、)就其今度之儀、可爲左府、其謂者三御代(鹿苑、(足利義滿)勝定(足利義持)普廣、)自丞相被贈大相國、兩御代(等持院(足利尊氏)寶篋院(足利義詮))自大納言被贈左大臣、然者今日淺官不可過兩御代例之故也、如此治定云々、尤可然事也、

〔親長卿記〕文明九年二月十四日、依召參內、(直衣)仰云、一位大納言、(○藤原綱光)今朝薨去、仍內府事人々頻望申之、殊爲舊院勅約云々、仍其時申次爲大藏卿被尋仰之處、爲其分之由申之、然者强非可被惜歟如何、先日一位儀同等事、被尋仰之處、內府可然之由、勸修寺大納言申之、予所存被尋下、申云、一位大納言任槐事、於贈官者有家例、已准槐事勅許之上者、强內府事非殊異儀歟、可在叡慮、凡日野一統元祖已來、無高官之例、近年昇進不可勝計、雖然故唯稱院左府、(○藤原勝光)昇進超越歟、武家外戚非始儀、只朝奬之至也、傍例如此、況於廣橋家有贈左府例、有一位准槐例、當時又奉公之勅約、旁以相應歟、但命後以存日日付、可被宣下之條、先規不覺悟、若無例者可有傍難歟、贈官例事候哉、又仰云、儀同三司事、雖

被宣下、辭退之間、予今先被指置了、及危急者可有御沙汰之由申之、止儀同三司、可被任内府歟、予申云、儀同事、已被宣下了、被止其儀之條、不可然歟、雖任儀同三司、何不被任内府哉、又仰云、敍一品任准大臣、任内府有先例歟、予申云、吉田内府定房公依家賞（御幸吉田家、仍有賞、）敍一品、無程蒙准大臣宣下、其後有仗議、上卿事、三公不參不可叶事在之、假被任内府了、雖爲他家例不能左右歟之由申入了、召勸修寺大納言可尋之由被仰民部卿、其間猶條々有仰旨、現存朝奬與死後贈官氣味何哉、先日此儀有勅問之處、贈官有氣味之由、人々申之、故益長卿現任有氣味之由、爲先規之由申之、予申云、祖父一位歡樂危急之時、一品事申入、後小松院之時、暫無勅許、或人々雖爲贈位不可苦、今強非可申歟云々、兼長卿聞之、現存有氣味之由申之、仍重申入之處、二月七日一位事有勅許、翌日八日薨了、以之思、彼現存可有氣味事歟、此外條々有仰旨、暫勸修寺大納言祗候、依内穢在門外、予民部卿等罷出、只今條々可尋仰云々、卽門外仰云、廣橋任槐事、可有勅許否、舊院勅約爲分明云々、以存日分之日次可有御沙汰之由、遺跡之輩申之如何、又止准槐宣下、内府事可有御沙汰歟、可被申所存之由仰之、申云、任槐事不可有子細之由、先度言上了、存日之日次猶可然歟、准槐事先可被指置歟、令歸參申彼趣、仰云、已准槐事止宣下之事、又命後書上存日事、兩條有例歟、重可尋云々、重兩人仰件趣、申云、兩條不存例云々、然者准槐事不可被止、内府事者可爲贈官、此趣可宣下之由、可仰元長之由有仰、卽退出、　十五日、故儀同綱光贈官事、元長今日宣下、

〔總見院殿追善記〕十月十五日（○天正十年六月二日織田信長薨）巳刻無常の煙となし奉る、（○中略）上は上皇を安じ奉り、下は下民を憐む、仍忝も勅使をたて贈官を給ふ、總見院殿大相國一品泰巖大居士と號し奉るもの也、

〔織田信長譜〕天正十年十月十五日、秀吉葬信長於紫野大德寺、道號泰岩、院號總見、是日、勅贈信長太政大臣從一位、

〔藩翰譜前田七上〕徳川殿○家康も又利家の病、日々に重しと聞召し、彼が大坂の家に至て訪せ給ひしかば、利家悦びに堪へず、子息等が事、深く頼み申て、閏三月○慶長四年三日、六十二歳にて薨ず、從一位をぞ贈られしとぞ聞えける、

〔改正加增大成武鑑一〕御系圖略

家康公 從一位太政大臣　左近衞大將　征夷大將軍　元和二年丙辰四月十七日、於駿河國府中城薨、(中略)三年丁巳三月九日、贈正一位、

秀忠公 從一位太政大臣右近衞大將　征夷大將軍　寛永九年壬申正月廿四日薨、春秋五十四、二月十日、贈正一位、

家光公 從一位左大臣右近衞大將　征夷大將軍　慶安四年辛卯四月廿日薨、奉葬日光山、贈正一位太政大臣、

家綱公 從一位右大臣右近衞大將　征夷大將軍　延寶八年庚申五月八日薨、贈正一位太政大臣、

綱吉公 正二位右大臣右近衞大將　征夷大將軍　寶永六年己丑正月十日薨、贈正一位太政大臣、

家宣公 正二位内大臣右近衞大將　征夷大將軍　正德二年壬辰十月十四日薨、贈正一位太政大臣、

家繼公 正二位内大臣右近衞大將　征夷大將軍　正德六年丙申四月晦日薨、贈正一位太政大臣、

吉宗公 正二位右大臣右近衞大將　征夷大將軍　寛延四年辛未六月廿日薨、贈正一位太政大臣、

家重公 正二位右大臣右近衞大將　征夷大將軍　寶暦十一年辛巳六月十二日薨、贈正一位太政大臣、

家治公 正二位右大臣右近衞大將　征夷大將軍　天明六年丙午九月八日薨、贈正一位太政大臣、

婦女贈位

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、○中略姉廣虫又掌吐納、叙從四位下、○中略延暦十七年正月十九日薨、○中略天長二年、天皇○淳和追思舊績、贈正三位之告身、

〔百練抄八高倉〕治承三年六月廿日、從三位平盛子攝政室中有贈位、去月十七日薨去、

〔百練抄七六條〕仁安二年十一月十八日、從三位平盛子故攝政北政所、前太政大臣女、被下准三后勅書、

〔蔭凉記〕應永卅二年十二月十七日壬午、今日有梶井大僧都義承母儀滿詮室、先爲故養德院贈左府(足利人生地藏院持圓僧都、其後

雜載

參鹿苑院殿、(足利義滿)生彼僧都、贈位宣下事、藏人頭右中將基世朝臣奉行之、上卿按察大納言(實家)參陣、基世朝臣仰云、從三位(從四位下敷、不審、)藤原朝臣誠子(此人種姓不聞、可尋注、)敍從三位、作贈位記、次上卿移端座、召大內記爲淸朝臣仰之、大內記作位記、(有端作云々、可尋讀、)持向彼葬家、(嵯峨眞忍院殿、鹿苑院殿母儀御事也、)鹿苑住持(十刹西堂)出逢門外、立案於門外、其上敷打敷、其上居盆、其上又敷打敷、長老立案後、爲淸朝臣(束帶)取位記、(入筥)進寄取位記、許於手置盆上、長老取之、頂戴披見之、卷居盆退、次內記退歸云々、凡贈官贈位事先例多之、而今日儀偏新儀也、後日引勘舊記之處、匡房中納言延久五年五月六日記云、有贈后幷贈太政大臣正一位(能信外祖)贈正一位祉子(外祖母)等事、件仰詞加故字、件宣命少納言給之向喪家云々、又有請印、今度之儀實先例不詳歟、

〔公卿補任　圓融〕安和三年(庚午○天祿元年)

出家人贈位例

左大臣從二位藤在衡(七十九、正月廿七日任、十月十日致仕、出家入道薨、廿日贈從一位、)

〔玉海〕治承三年六月廿九日丙辰、白川殿(○平盛子)薨奏、贈位等事有其沙汰云々、(○中略)

白河殿准后薨逝間事(○中略)

當日出家人不用出家歟事

永延三年六月廿六日、太政大臣(賴忠)薨、先下頂髮授戒畢云々、

七月廿日、薨奏、有諡號(廉義公)贈位(正一位)等事、(○中略)

右大略注進如件

六月廿五日　　大外記淸原賴業

〔康富記〕文安元年十月六日辛亥、(吉田神主卜部兼富贈從三位事)或語云、吉田社神主兼名朝臣申請、故兼富朝臣上階贈位事有勅許云々、

古事類苑

官位部六

令制官職一

神祇官

神祇官ハ、天神地祇ヲ祭祀シ、諸國ノ官社ヲ總管シ、祝部神戸ノ名籍等ヲ掌ル所ナリ、抑、我國ノ上世ハ、祭政一致ニシテ、中臣忌部ノ兩氏、歴世祭祀朝政ヲ掌リシガ、大臣大連ノ國政ヲ執ルニ及ビ、祭政漸ク分レテ、別ニ祭祀ノ官ヲ設クルニ至レリ、繼體、欽明、皇極等ノ諸紀ニ、神祇伯ト書セルモノ是ナリ、孝德天皇ノ朝、八省百官ヲ置キ、齋部首佐賀斯ヲ以テ神官頭トス、卽チ神祇伯ナリ、然レバ神祇官ノ設置モ亦當時ニ創マレルカ、文武天皇ノ朝、大寶令ヲ制定スルニ及ビ、神祇官ヲ以テ太政官ノ上ニ置キシハ、祭祀ヲ以テ政道ノ基トセル古義ニ據ルモノナリ、

神祇官ハ、宮城郁芳門内ノ南掖ニアリ、劃シテ東院西院(一ニ齋院ニ作ル)トス、西院ノ構内ニハ、八神殿、正廳、南廳、西廳、東舍、齋部殿、御幣殿及ビ高藏等アリ、正廳、一ニ北廳ト稱シ、或ハ神祇官曹司トモ稱ス、祈年月次神嘗新嘗及ビ祈年穀等ノ諸祭ニ、諸司皆此ニ來リテ事ヲ行フ、南廳ハ、南舍或ハ南屋ト稱シ、祈年月次ノ兩祭ニ、辨官幷ニ諸司六位以下此ニ於テ事ヲ行フ、西廳ハ、西舍或ハ西屋ト云ヒ、一ニ柏殿トモ稱ス、神饌調進ノ殿舍ナリ、東舍ハ、一ニ外記舍ト稱シ、祈年月次ノ兩祭ニ、外記ノ座ヲ此ニ設ク、齋部殿ハ、一ニ刀禰殿ト稱ス、御巫ノ宿所タリ、東院ノ構内ニハ、正廳、東廳、南舍、大炊殿等アリ、伯以下ノ事務ハ、此院内ニテ行フナリ、

本官ノ職員ハ、長官ヲ伯ト云ヒ、次官ヲ大副少副ト云ヒ、判官ヲ大祐少祐ト云ヒ、主典ヲ大史少史ト云フ、伯ハ神祇官設置以後、諸氏ヲ混任セシヲ、後朱雀天皇寛德三年、花山天皇ノ皇孫延信王ヲ以テ之ニ任ジ、其曾孫顯廣王、二條天皇永萬元年其職ニ任ゼラレシ以來、子孫相承ケテ世職トナリ、又他氏ヲ任ゼザルコト、ナル、白川家即チ是ナリ、又大少副ハ、專ラ大中臣卜部ノ二氏ヲ以テ任ジ、祐以下モ忌部卜部等ノ諸氏ヲ以テ任ジタリ、而シテ大副ハ祭主ヲ兼ヌルヲ以テ例トス、抑忌部氏ハ、古代ニ在リテハ、中臣氏ト相並ビテ權勢アリシガ、藤原氏執政ノ世トナリテヨリ、獨中臣氏ノミ權ヲ擅ニシテ、忌部ハ漸ク衰微シ、後世ニ至リテハ、神祇官中、終ニ其人無ク、忌部代ヲ設ケテ、其職ヲ行ハシムルニ至レリ、又卜部氏ハ、初メ本官ノ伴部ニテ、其勢甚微ナリシガ、後世ニ至リテ、漸次ニ勢力ヲ增シ、常ニ白川家ト相爭フニ至レリ、

當官ノ所屬ニ、中臣、忌部、神部、宮主、龜卜長上、卜部、神琴師、神琴生、神笛生、御巫、猿女、戸座、御火炬、炊女等アリ、中臣ハ、祭祀ノ日、場ニ臨ミテ祝詞ヲ讀ミ、忌部ハ、部下ノ神部ヲ監督シテ幣帛ヲ作リ、且ツ之ヲ頒ツコトヲ掌ル、神部ハ、官內ノ雜事ニ驅使スルモノニテ、定員三十人アリ、中臣、忌部、猿女等ノ諸氏ヲ取リテ之ニ充ツ、卜部ハ、龜卜ニ從事スル職ニテ、定員二十人アリ、伊豆、壹岐、對馬ノ三國ヨリ徵シテ之ニ充テ、術藝優長ノ者ヲ長上トス、宮主モ亦龜卜ニ從事スル職ニシテ、卜部ノ中ヨリ拔擢ス、凡ソ天皇ノ御卜ニ奉仕スルモノヲ大宮主トモ內宮主トモ稱シ、中宮ニ奉仕スルモノヲ、中宮宮主ト云ヒ、東宮ニ奉仕スルモノヲ東宮宮主ト云フ、神琴師、神琴生、神笛生ハ、並ニ神樂ヲ掌リ、御巫ハ、八神殿以下官內ニ鎭祭スル二十三座ノ神等ニ奉仕スル童女ニテ、天皇ノ御爲ニ八神ヲ祭ルヲ大御巫ト云ヒ、御門神ヲ祭ルヲ御門巫、生島足島神ヲ祭ルヲ生島巫、座摩神ヲ祭ルヲ座摩巫ト稱ス、(中宮東宮ニモ各御巫アリ)猿女ハ、猿女氏ノ女

ヲ以テ之ニ充テ、戸座ハ、七歳以上ノ童男ヲト定シテ之ニ充ツ、
中古以來、朝綱ノ廢弛スルニ随ヒテ、本官ノ用途ハ、常ニ匱乏シ、神祇官町ノ地子、及ビ僅々タル領地ノ收得ヲ以テ之ヲ補足シ、又諸國ノ大社ヨリ年貢ヲ進ラシメテ、官中ノ用途ニ充テタリシガ、政權ノ武門ニ遷リシヨリ益衰頽シ、殿舍門壁ハ、年ヲ逐ヒテ荒廢スレドモ、修理スルニ由ナク、祭祀ノ日ハ、僅ニ幄舍ヲ設ケテ廳舍ニ代用セリ、然ルニ應仁ノ大亂以後、頽廢愈甚シク、神祇伯忠富王、卜部兼倶ト相謀リテ、再興ヲ企テシカド其事行ハレズ、遂ニ吉田神社ヲ以テ神祇官代トスルニ至レリ、
神祇官八神殿ノ事ハ、神祇部官衙神篇ニ、白川卜部氏等ノ事ハ、同神道篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔倭名類聚抄 五官名〕官　本朝式職員令云、神祇官、加美豆加佐

〔朝野群載 六〕諸司訓詞
神祇官 カン司

〔令集解 二職員〕神祇官 釋云、神祇者、是人主之所重、臣下之所尊、祈福祥求永貞、無所不歸神祇之徳、故以神祇官爲百官之首、

〔百寮訓要抄〕神祇官
神祇官といふは、今の八神殿渡らせ給ふ神祇官の事也、是を本官と申、神祇の人々、天下の御祈を申時、此本官に候て申事也、

〔東宮年中行事 六月〕一日、ゑむぎくわむふ〇神祇官御あがものをたてまつる事、けふよりよをかのひにいたり、かんづかさくわんにんまいりてこれをたてまつる、

〔兵範記〕仁安三年七月十七日丙子、巳刻參內、行水解除午刻權大納言公保卿、參議家通朝臣參著左仗、次召辨、下官〇平信範參軾、〇註略被仰可令勘申祈年穀奉幣日時由、〇中略上卿召內記給宣命、作宣入於門外給

使、神司進發了、

〔玉海〕嘉應三年○承安元年六月廿八日辛未、此日賀茂齋王卜定也、○中略外記乍候軾插笏、自懷中取出封紙、右識如何以小刀封之、了參上、外記退下了余取之、其上書封字、封目上也取副名簿於笏、召云、神司(カンヅカサ)ノ權大副ノ朝臣、被聞程微音被召之、○下略

〔三長記〕建仁元年八月十二日己丑、今日被發遣祈年穀奉幣使、予○藤原長兼奉行也、○中略予又覽神祇官請奏、卽被返下、各被內覽奏聞予結申云、神祇官(カンツカサ)ノ申、諸社ノ幣料種々ノ物宛給(ハラムト)申(セル)旨、上卿揖許、

〔勘仲記〕弘安十一年○正應元年四月廿五日己卯、予尋取神祇官請奏諸社幣也於奉行史有澄外記申使王御馬事、申上卿歟、上卿召予參軾、被下內藏寮請奏、予結申○中略註懷中、此後取出神祇官請奏覽上卿、有御披覽被返下、同結申、神ツカサノ申セル、石清水賀茂等幣料被宛給ト申セルコツ、

〔職原抄上〕神祇官唐常太常寺、又云祠部、太常令、

〔標注職原抄校本別記上〕神祇官在所

神祇官の細注に、當唐太常寺、又云祠部の九字、板本にあり、○中略註周禮に、春宮大宗伯、掌天神地祇人鬼之祀とあるは、神祇伯の任にや、似たり、伯神祇官には、人鬼を掌れる事はなし、これを事類全書に引て、卽太常卿之任也といへり、唐百官志に、太常卿、掌禮樂郊廟社稷之事とあり、これを本朝にあてゝ考るに、人鬼と禮樂とは、治部省の所掌なれば、異朝の太常寺は、こなたの神祇官と治部省とをあはせたるが如くなり、また祠部は、禮部に屬せる官にて、通典に、延載元年五月制、天下僧尼、隷祠部、不須屬司賓、開元二十年正月制、僧尼隷祠部とあるなどを以ておもふに、これはた治部の事なり、されば太常祠部ともに、神祇官の唐名としがたし、實にこの官は、本朝のみのものにて、異國に准擬すべきがなき事、本文にて知べし、

所在

〔拾芥抄 中本 百官〕神祇官 宮城内郁芳門南掖

〔運歩色葉集 志〕神祇官 在北野

〔伯家部類〕神祇官事覺書　寛文九年酉五月日、雅喬王眞跡、○中略

一神祇官屋敷四ヶ町之事　故祖父雅朝王雜談、正親町院天正年中迄雖有之、及荒廢、其後秀吉大閤檢地ニ付斷絶、今二條城之廻リ也云々、○中略

故雅朝王雜談　雅陳王御聞書寫

一寛永元年月日、雅朝王、神祇官ハ大内裏ノ辰巳也、今ハ二條通リ北ニ當ルベシ、其屋敷卅九年許已前、予ガ卅餘ノ時迄屋敷アリ、其頃ハ芝ニ成テアリシヲ、大閤檢地ノ時カハリテ、ソレヨリ絶タルト也、神祇官屋敷ノ末ニ、官町トテ 神祇官ノ町ト云心ナリ、有之、神祇官被管之輩居タル所也、

〔伯家部類〕家記云、神祇官者、在大内裏南、一説、巽、上古者四町也、其後爲方一町、大宮猪熊在二條城之邊也、給圖、

〔秦山集 雜著 甲乙錄 三〕神祇官、在古内裏、古内裏在堀川西二條北、源平夜軍、平家自東攻者、入堀川門可見、今之内裏、足利末年造營之、神祇官八座、至近古在二條北、秀吉公於皇都築城、請行幸之時、移八神殿於吉田、今在本社北、本在王宮、故無神主職、祭亦絶、毎年九月十一日伊勢例幣時、勅使於八座前有行事、

〔雍州府志 神社 二〕齋場所　神祇館者、古在平安城宮内省、則今二條所司廳之西也、自茲移東山如意嶽、後土御門院文明十六年、移吉田神樂岡、

〔菟藝泥赴 二〕神祇官八神殿、もとは春日通の南、堀川の西、大炊御門の北、大宮の東藍園の西一町こ拾芥抄に見えたり、今は吉田に有、神祇官は、大内裏に日本國中の神をまつらる丶所也、延喜式に委みゆ、○中略大内裏あとなくなりても、猶此神殿はのこりしを、慶長の頃、京中の寺社を外にうつされし時、今の吉田の齋場所の後にあがめまつる、元本八神殿是也、

〔大内裏圖考證十九神祇官〕在所

拾芥抄部百官曰、神祇官宮城内郁芳門南掖、諸圖、雅樂寮北、大炊寮南、廩院東、諸書在所如諸圖、

按、南都所傳宮城殘缺圖、大炊寮南、雅樂寮北、有散位寮、未知何年以神祇官移此地矣、

占地

校本拾芥抄圖　宮城古圖曰、神祇官東西三十五丈、神泉苑所傳圖曰、神祇官南北三十七丈、北面路郁芳門大路十丈、南面路卽雅樂寮北面七丈、諸圖曰、西面路四丈、古圖曰、東面路五丈、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行○中略

一應消水旱求豐穰事

右臣伏以、○中略朝家每年、二月四日、六月十一日、十二月十一日、於神祇官、立祈年月次之祭、○中略爰神祇官讀祭文畢、以件祭物、頒諸社祝部、奉本社、祝部須潔齋捧持、各以奉進、而皆於上卿前、卽以幣絹插著懷中、拔棄桙柄、唯取其鋒、傾其瓮酒、一擧飮盡、曾無一人全持出神祇官之門者、況其神馬、則市人於郁芳門外、皆買取而去、○中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

○按ズルニ、此文ニ、市人於郁芳門外皆買取而去トアルニ據レバ、當時神祇官ノ郁芳門ノ掖ニアリシコト明ナリ、

〔太平記十七京都兩度軍事〕

將軍尊氏○足利是ヲ聞スマシテケレバ、六十萬騎ノ勢ヲ三手ニ分、○中略二十萬騎ヲバ船岳山ノ麓、神祇官ノ南ニ被隱置タリ、是ハ内野ヨリ寄ンズル敵ヲ、南北ヨリ引裹マン爲也、○中略聽テ内野ニモ合戰始テ、右近ノ馬場ノ東西、神祇官ノ南北ニ、汗馬ノ馳違音聞ニ相交テ、只百千ノ雷ノ大地ニ振フガ如ク也、

沿革

〔明德記上〕御所〈○足利義持〉ハ廿六日〈○明德二年十二月〉ノ辰ノ剋ニ、一色ノ左京大夫〈○詮範〉ノ亭、中ノ御門堀川ノ宿所ヘ御出成ル、〈○中略〉其外ノ諸軍勢ハ、皆ヒタ甲ニテ、一勢々々打出、內野ニ陣ヲゾ取タリケル、〈○中略〉畠山ノ右衛門佐〈○基國〉ハ八百餘騎ニテ、神祇官ノ北、大庭ノ椋ノ木ヲ南ニ見テ、土御門ノ末ニ陣ヲ取、敵東口ヨリ責入テ、一條ヲ西ヘ懸出バ、猪熊ノ返橋ノ邊ヘ馳向テ支ヨト也、大內左京權大夫義弘ハ五百餘騎、神祇官ノ森ヲ背ニ當テ、二條大宮ニ陣ヲ取、〈○下略〉

〔職原抄上〕神祇官
以當官置諸官之上、是神國之風儀、重天神地祇故也、昔人皇最初、神武天皇定都於大和國橿原時、以天照大神御靈八咫鏡及草薙劒、安置大殿、同床而坐給、蓋如往古神勅、由此皇居神宮無差別、宮中立庫藏、此云齋藏、官物神物無分云々、此時天兒屋根命孫天種子命、專主祭祀事、是乃執朝政之儀也、第十代崇神天皇、漸畏神威、鑄改鏡劒、奉安置神代之靈器於別所、是皇居神宮相分之初也、垂仁天皇御宇、天照大神鎮坐伊勢國度會郡五十鈴河上之時、命中臣祖大鹿島命、爲祭主、其後葉代々爲祭主、朝廷被置官以後、神祇官伯、〈昔爲祭主頭〉伊勢神宮祭主、又各別、但見伯職掌、掌爲祭主云々、然乃其職已一、本爲一體、以之可知者也、然乃祭官之職者、上古之重任也、又神國之故、以當官置太政官之上乎、

〔日本書紀十七繼體〕元年二月庚子、大伴大連奏請曰、臣聞前王之宰世也、非維城之固、無以鎮其乾坤、非掖庭之親、無以繼其趺蕚、是故白髮天皇〈○清寧〉無嗣、遣臣祖父大連室屋、毎州安置三種白髮部、以留後世之名、嗟夫可不愴歟、請立手白香皇女、納爲皇后、遣神祇伯等、敬祭神祇、求天皇息、允答民望、天皇曰、可矣、

〔日本書紀十九欽明〕十六年二月、天皇命神祇伯、敬受策於神祇、

○按ズルニ、以上二項ハ、未ダ神祇官ノ設置無カリシ時タリト雖モ、伯ノ名ノ見エタル始ナリ、故ニ此ニ擧グ、

〔古語拾遺〕至于難波長柄豐前朝〈○孝德〉白鳳四年、以小花下諱齋部首作賀斯、拜神官頭、〈○今神祇伯也〉令掌叙王族、宮內禮儀、婚姻卜筮事、夏冬二季御卜之式、始起此時、作賀斯之胤、不能繼其職、陵遲衰微、以至于今、

〔日本書紀三十持統〕三年八月壬午、百官會集於神祇官、而奉宣天神地祇之事、

〔日本書紀三十持統〕五年十一月辛卯、〈○辛卯原作戊辰、今據書紀集解說改、〉大嘗、神祇伯中臣朝臣大島、讀天神壽詞、　丁酉、饗神祇官長上以下至神部等、及供奉播磨國、因幡國郡司以下至百姓男女、並賜絹等、各有差、

〔日本書紀三十持統〕六年九月丙午、神祇官奏上神寶書四卷、鑰九箇、木印一箇、

〔日本書紀三十持統〕八年三月丙午、賜神祇官頭至祝部等一百六十四人絁布、各有差、

〔應仁記三〕洛中大燒之事

花洛ハ眞ニ名ニ負フ平安城ナリシニ、不圖應仁ノ兵亂ニ依テ、今赤土ト成リニケリ、〈○中略〉內野ニシテハ、神祇官大內ヲ殘ス、

〔資益王記〕文明十五年五月七日、中將來云、昨日自北野被參因幡堂、次本官〈○神祇官〉之舊跡拜見、掃除事可沙汰云々、以民部卿內々可奏聞之由申之、則當番予代に參之間、令用意之後可奏聞歟、楚忽儀、不事行者、不可然之由令申處、於掃〈○以下缺〉

〔神祇官雜々記〕神祇官再興間事

右當官者、爲皇居鎭護之神明、被行年中四度官幣、被專三千餘社之祭祀、爲天下無雙之靈場者也、爰去應仁大亂之後、于今不及再興之御沙汰之條、延曆遷都以來、雖一日片時無其例、爲神爲國爲道尤難默者歟、所詮雖爲如形、先四至構幷八神殿、祝部殿等假殿之儀、被遂其節者、一天靜謐之基、公武御祈之瑞、何事如之哉、仍言上如件、

延德二年閏八月日　　長上從二位兼倶

從二位伯忠富

神祇官興行條々事

一四至御地事、任先規各可被仰出之段、尤可爲珍重歟、但覆以下當時難事行者、先以如形芝築地堀風情分可然哉事、

一八神殿造立事、正殿分當時爲大儀者、先假殿分幷遷宮等儀、以最省略分、可三萬疋事、

一番衆事、一亂以前、官町散所者勤仕之、當時一向無居住之儀、其上爲荒野之間、無人不可叶、所詮近邊廿四ヶ村散所輩、各被分配、每日五人充可被仰付哉事、右當官御再興事、上意之趣定而可有神感哉、天下彌太平之基、殊更爲致御壽命長遠之御祈、粗言上如件、

延德二年十月日　長上從二位兼倶

從二位伯忠富

〔梵舜日記〕天正十三年十月九日、於內野神祇官、伊勢大神宮ノ祭事アリ、予令見物也、

○按ズルニ、神祇官ハ、此頃マデ內野ニアリ、諸社奉幣ノ發遣等モ、此處ニテ行ハレシコト明ナリ、

〔伯家部類〕昔者從諸國令奉納神物、已下繁多也、仍年中行事供祭物、諸役人等令下行、嚴密執行之、近來信長秀吉大閤已後、每事衰微、八神殿其外殿舍、漸及破損、然而以官町境內等之地子類、雖如形、神事體無退轉云々、

〔孝亮宿禰記〕慶長十四年九月十六日甲午、伊勢一社奉幣發遣日時定、陣儀有之、〇中略陣儀以後、予直參向神祇官代、吉田最上所前、奉幣發遣御作法有之、天正年中迄、神祇官代有內野、然而件內野敷地被構大樹御屋敷內之故、今度神祇官代被用吉田、初例也、

〔孝亮宿禰記〕元和三年三月七日壬申、神祇官代之事、今度吉田者不可被用、仍內野ニ神祇官屋敷四町有之、彼地今度八神殿被勸請由有風聞、　十二日丁丑、東照宮就一社奉幣、神祇官參向、神祇官代內野也

〔標注職原抄別記上〕神祇官在所

神祇官の在所は、拾芥抄に、宮城內郁芳門南掖とあり、大內裏圖考證に、神家所傳の官史鈔を引て、神祇官には、南廳西廳刀禰殿とて有之、今は无之、北廳許有之と見ゆ、伯家部類に、寛永元年月日、雅朝王曰、神祇官は大內裏の辰巳なり、今は二條通の北に當るべし、其屋敷三十九年ばかり以前、予が三十餘の時まであり、其頃は芝になりてありしを、大閤檢地の時かはりて、それより絕たりとなりと見ゆ、寛永元年より三十九年以前は、正親町院天皇の天正十三年に當る、その頃既に官舍は廢て、芝原となれるを以て、この官の衰たるほどを知べし、これより以前に、宣胤卿記に、延德元年十月云々、去三月廿五日夜亥剋、風雨雷鳴之剋、黑雲八流靡降于齋場之兩宮幷八神殿、及大元宮之上、其中光氣有二、恐怖無極、仍爲行事、參入大元宮之處、八神殿前大元宮後之庭上、有一靈物、則奉抱之安申大元宮壇云々、大神宮延德記もこれに同じ、此齋場大元宮などいふもの、神祇官にあるべからず、みな卜部家に建たる名なり、これを以ても、既く卜部家一種の神道を興したりし事を知べし、おもふに延德元年は、上にいへる天正十三年よりは九十七年以前なるに、既にかく吉田にも八神殿のありしを以て、神祇官は應仁の亂後より、あるかなきかのさまにて、年を經しこと論をまたず、これしかしながら朝家の陵夷より起れゝば、この一事にても、まことにあさましかりし世の形狀しられて、今も憤ろしくおぼゆる事なり、さるはもし神祇官なほ形の如くも殘りたらむには、卜家私に吉田に八神殿を建らるべきにあらざるをや、然れども彼延德の怪異まことにありし事ならむには、八神既に大內を厭ひて、洛外に所を易たまひし驗といふべし、其後天正十八年三月十三日に、勅許にて八神殿を神樂岡の社內に祀り始られたり、これ兼右卿の代の事なり、さればこれより以前には、その社ありても淫祠なりけるに、この時にうけばりたる官社となりにけり、萬葉緯首書云、八神殿、後陽成院天正十八年三月十三日、卜部兼右奏、勅、同四月十八日、奉遷神樂岡社內云々、種季案、洛中寺院等、天正年中に洛外に遷されたる多ければ、神樂岡に遷されたるは、今年の事とすべし、されば宣胤卿記にいへる八神殿は、卜部家に兼て造りおけるもの也、抑太政官以下の官舍等の事

ノ

廳舍

をば、その在所を記さずして、たゞ神祇官のみをかく委しく論いへるは、いかなるよしぞといふに、今も吉田に八神殿ありて、これ神祇官なりとおぼえたる人のおほかるにより、彼所にうつされしよしぞもをたづねて、かくはいふになむ、

〔大内裏圖考證（十九神祇官）〕西院（一作齋院）

神祇官古圖、神祇官建圖、神祇伯資清王文保元年二月十一日記、神祇官建圖、古文書曰、神祇官內東西兩院事、八足門內（有額、八神殿、西北兩廳、御贄殿、）謂之齋院、（或曰西院）棟門內（東廳、中屋、）謂之東院、（或曰廳子院）東院北門板葺棟門、（伊呂波字類抄諸司無傍例）中隔南北行有中門築垣等、東院西院之間有中隔中門也、

〔日本紀略（五冷泉）〕安和二年七月廿二日丁卯、今夜大風暴雨、發屋折木、　廿三日戊辰、風猶不止、○中略神祇官舍二宇、○中略悉以顛倒、

〔中右記〕大治二年二月十四日甲戌、未時許當西有燒亡所、申時火滅了後、陰陽頭家榮示送云、燒亡之興、火起齋司小屋、燒陰陽寮、勘解由使廳、宮內省幷園韓神社、神。祇。官。八。神。殿。郁芳門等了、

〔百練抄（六崇德）〕大治二年二月十四日、園韓神社、神祇官以下八神殿幷內外院、○中略燒亡、○中略但後日兼俊宿禰曰、八神殿園韓神、自元無御正體、

〔仲資王記〕安元三年（○治承元年）正月八日己酉、神祇官修理事始、　十六日丁巳、神祇官廳始、

〔玉海〕安元三年（○治承元年）四月廿八日丁酉、亥刻上方火、樋口富小路邊云々、○中略燒亡所々、

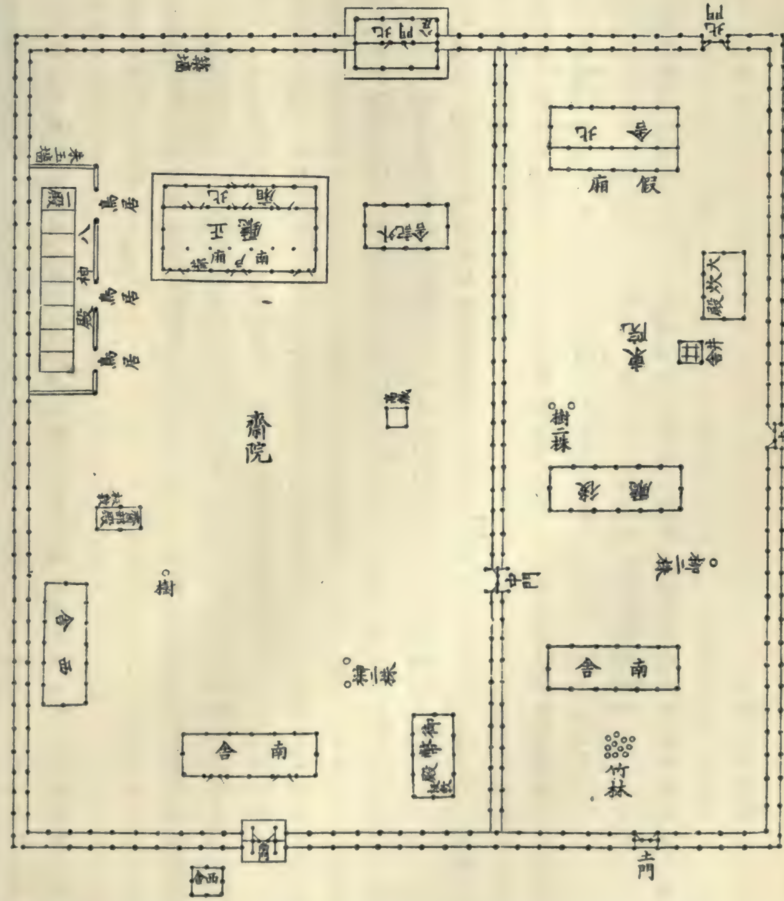
大極殿已下八省院一切不殘　會昌門　應天門　朱雀門　神。祇。官。（八神御正體燒失）

〔伯家部類〕神祇官修造事、來月（○來月下、神祇官雜記有七日二字、）以前、可被致其沙汰之由被仰下候也、仍而上啓如件、

二月（○正安二年）十五日　兵衛督時師

謹上　伯三位殿

（神祇官圖）



神祇官修造事、先日以北山殿被定御在所之間、當時無御方忌候、於修理者又々口有日次沙汰歟、門者七月以前可有憚候、於北門者、三月一日以後土用之前後不可有憚候、二月中者、大小門共不可被懸手候也、恐惶謹言、

二月廿一日　　在秀上

神祇官修營事、以折中之儀、猶早々可被致其沙汰給、不然者定有後悔歟之由被仰下候也、仍執達如件、

二月十八日　　兵衞佐時師

謹上　伯三位殿

神祇官修造事、如此被仰下候上者、以折中之儀、早可致其沙汰候也、先日中入候趣、非自由儀候歟、其分事早可云々、謹言、

二月九日 巳上　　神祇伯――

〔神祇官雜々記〕言上神祇官北舍幷築垣等修造事

右彼北舍已下、行事所始以前、被加修理者先例也、就中北舍、如當時雨露難留云々、四面築垣等、又大略壞損歟、不慮之觸穢若出來者、可爲以外之珍事哉、然者來六月行事所始以前、任例可被修造之由、爲被伯家言上如件、

嘉元二年四月日　　左官掌　紀秀兼
左史生　中原職有
右大史　中原景範

〔玉英記抄 神事〕曆應三年三月二十九日、大藏卿雅仲卿爲勅使來、神祇官可有修造之 武家執奏故也 於神體者、凡無御座之由、伯業清王所申也、此事如何、又任先例先可有假殿造營歟、將又直可被作正殿如何、

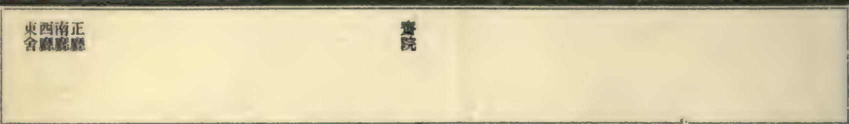
且可計申、且可相尋卜部輩者、予〇藤原內經申云、早可相尋候、神祇官神體爲神木之條勿論歟、伯申條不審、又須直作正殿也、其故者神體御座之時、先作假殿奉移神體之後、有正殿造營、於此度者神體已紛失給、假殿無其詮、雖片時可被急正殿也者、有假殿造營之由見奥、

〔神祇官雜々記〕神祇官解

請特蒙天裁、別被成敬神、被遂當官造營、被置番士、彌增神威、專御祈禱狀、

右謹考案內、本官者、人主所重、臣下之所敬也、祈福祥求永貞、無不歸神祇之德、故爲百官之首云々、依之被奉崇八神殿於大內宮中之以來、南北廳並甍宇、東西院峙殿舍、仍朝家大祀之始、行幸當官有由奉幣、本朝之神態、逴躒于異社、祈禳之靈德、先規不可勝計、書載、加之祈年月次神嘗等恒例臨時之祭、百官可集神祇官之也、令典設文、被示祭國家之大事也、欲歲災不起、時令順度、預此祭之靈神、京畿外國大小通計五百五十餘社、由格臨裁而炳焉也、且非其所祭之、名曰淫祀云々、抑當官者、天下第一之祭庭、日域無雙之靈場也、而今神殿逐年荒廢、門壁經日破損、神道之衰微、愁歎何事加旃、每拜見彼破壞、諸人無不愁吟、召仰蒼天令拭紅淚者也、凡神者就人之崇敬增威光、人者依神之加護添命、當官之大破、空雖被閣之、裁望請殊蒙天裁、別被仰武家、被遂造營、被置番士、忽令仰神道之再興、爲奉祈我君之萬年、謹解、

延文三年五月日　　從五位下行權大祐忌部宿禰親貧
從二位行伯資繼王　　從五位下行權大祐忌部宿禰親重
正四位下行權大副大中臣朝臣能蔭　　從五位下行權大祐忌部宿禰親清
正四位下行權大副卜部兼前　　從五位下行權大祐忌部宿禰親祐
正四位下行權大副大中臣朝臣親世　　從五位下行權大祐忌部宿禰憲親
正五位下行權大副大中臣朝臣爲忠　　從五位下行權大祐大中臣朝臣爲實



從五位上行權少副大中臣朝臣師豐
從五位上行權少副大中臣朝臣清世
從五位下行權少副大中臣朝臣爲顯
從五位下行權少副大中臣朝臣永隆

南座

長上正四位上行大副卜部宿禰兼豐　　祭主從四位上行權大副大中臣朝臣忠直
從四位下行權大副大中臣朝臣實直　　正五位下行權少副大中臣朝臣時世
從五位下行權少副大中臣朝臣爲俊　　從五位下行權少副大中臣朝臣親輔
從五位下行權少副大中臣朝臣親春　　從五位下行權少副大中臣朝臣蔭繼
權少副正六位上大中臣朝臣爲胤

〔儀式　一〕二月四日祈年祭儀
神祇官陳幣物於齋院。。

〔延喜式　二四時祭〕鎭魂祭○中略
右其日御巫於官齋院。。舂稻、簸以籭筥、炊以韓竈、

〔延喜式　九神名〕宮中神卅六座
神祇官西院。。○卽齋院、下文同、坐御巫等祭神廿三座並大、月次新嘗、

〔左經記〕長元八年六月廿日壬申、左中辨被示云、祭主輔親卿於左仗仰云、自今日三ヶ日、於神祇官西院。。中宮平安可令誕生男子給之由可祈申伊勢御神宮者、

〔大內裏圖考證　十九神祇官〕廳
續日本紀所引神祇官記、作神祇官曹司、延喜式及西宮記、作廳又北舍、神祇官古圖及建圖、江次

第、玉海、三長記、(文見身舍)作正廳、日本紀略、左經記、玉海、仁部記、(文見北門壇)作北廳、北山鈔、作北屋、江次第、或作齋院、神祇官年中行事、(文見御厨子間)及伯家部類、作神嘉殿、左經記、愚昧記、作神殿、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀(六月十二月十一日、月次祭儀亦同、)

其日卯四刻、(月次祭、六月卯一刻、十二月辰一刻、)所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、(中略)○次神祇官人率御巫等入自中門就西舍座、東面北上、大臣以下入自北門就門內座、(大臣在西披、東面、參議以上在東披、西面、著繫五位以上在門外東披、西面、外記率史生召使等、在西披、東面重行、)外記申庶事辨畢之狀、共起就北舍座、大臣南面、參議以上西面、諸王東面、並北上、(其大臣用北戶、參議以上東砌、諸王西砌、)大臣喚召使二聲、召使稱唯進立舍前、大臣宣、式部(乎)刀禰奉入(止)宣(遍)、召使稱唯、出命云、式部(乎)刀禰奉入(止)宣、輔稱唯、率群官入自南門就南舍座、北面東上、御巫降就西舍前庭座、左右馬寮各率御馬廿一疋、(寮別十疋、月次祭左右各二疋、)立南舍東頭、神祇官掌二人、率祝部等入自南門、立西舍南頭、神祇官人降就舍前座、大臣以下及諸司共降就舍前座、中臣進就庭座讀祝詞、毎一段了祝部稱唯、讀訖中臣退出、神祇官拍手兩段、次大臣以下五位以上、次諸司主典以上、次祝部、並不稱唯、然後皆復本座、

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭(中略)○

右神祇官所祭、幣帛一依前件、(中略)○致齋之日、平明奠幣物於齋院案上幷案下、(中略)○神祇官人率御巫等、入自中門就西廳座、東面北上、大臣以下入自北門就北廳座、(大臣南面、參議以上就廳東座、西面、王大夫就廳西座、東面、)御巫就廳下座、群官入自南門就南廳座、北面東上、神部引祝部等、入立於西廳之南庭、

〔西宮記二月〕一新年祭

平旦、上卿著神祇官北門、(在門中東腋、西面、王大夫在門外、外記在西腋、史生在前、西腋大臣座、東腋參議以上座、)上卿著廳座、(大臣入自後戶東第三間北壁下坐南面、)納言參議東一間、(入自巽角、南面、兼置式筥、)王大夫著、(西第一間東面、入自坤、或用代官、(中略)○)輔率群官北面東上、五位前六位後入著、(入自南門著南座、)御巫座西廳前、率御馬、(十一疋、兼繫猪雞、)神部祝入立西廳南庭、

〔北山抄 一年中要抄〕二月四日祈年祭事
神祇官率御巫著西廳、大臣以下入自齋院北門、○中略註就北廳座、○中略式部省率群官入自南門著南廳、座、御巫留西廳前庭、左右馬寮各引馬十一匹、(月次祭各二匹)立刀禰殿東庭、(猪雞等預繫之)神部祝部等入立西廳南庭、

〔中右記〕嘉承二年二月四日、祈年祭也、爲勤上卿、巳時許參神祇官、先入北門之間、外記義資立門前、相揖過之、著北門東腋座、(兼置式、立居揖如恒、)王大夫一人著西腋座、(是大臣座也、近代王大夫著云々、可尋、外記在圖外、此事後聞、王大夫不可著此座、○中略)先是神祇官祭主以下在西廳、(東面北上)分配辨藏人左少辨雅兼、史官掌吉行在南屋座、

〔重憲記〕康治三年(○天養元年)二月四日乙酉、祈年祭、廢務、○中略上卿王起座著北廳座、(上卿經北庇東壇下、入東方、著西面座、王東面歟、式筥令置由、見古記井江次第、而近例不置、北門必不置歟、而近代必置、)予又候東屋內南面平敷座、(東面一間)

〔玉海〕治承四年二月三日乙酉、入夜大夫史隆職參入、召前問神祇官正廳座不審事、申云、六位史官掌等相共奉行、五位史殊不尋行之間、分明不覺申、就中官中之習、以裝束司記文爲證據、而彼記文不載此儀、又年々例不同、只所詮以被仰下之趣可相存云々、仍註西宮、(十卷抄、井十五卷抄等也、)北山、江次第等文、相加先日所進指圖、(少紙押)下給之、　四日丙戌、此日祈年祭也、右大將(○藤原兼實子良通)奉行之、始從神態也、○中略

祭儀(以大將口狀記之)

於郁芳門下車、(召使向來、追前前行、)大夫史隆職來門下、申御裝束子細、(就去夜定、仰之趣本仰之云々、)入自神祇官北門、自壇上東行著門內東掖座、○中略次上卿起座、(兩揖如常)自當間降壇下、(或說、更西行自中門降壇下云々、其理可然、但當中門不登階、又其壇不高、仍隨宜可用、當間之由、兼可教訓也、)昇自正廳、(謂北廳是也、)北面經東南壇上、(庭間隨身被外壇上、其後自取之、於巽角程座之云々、)立南面東第一間(有妻戶)長押下、揖昇(天)著座、(件座西面、副東壁敷之、自座後著之、揖如常、召使直履者云々、)此間召使取在北門座之式筥、走來先置此座前、(上卿未著座之前置之)次王大夫著西第一間座、(件座東西相對天敷之)次上卿召召使、(音二)召使稱唯進立南庭、上卿仰云、式ノ省サヲ刀禰入マツレト宣ヘ、(微音仰之、但召使隨聞程也、字末頗不分明、)召使稱唯、經幣案東出南門召之、即行事右中辨兼

光朝臣、式部少輔光輔、〇註略諸司等入自南門著南廳座、先是神祇官人等、率御巫著西廳座、〇中略次神祇官人降居西廳前座、次上卿起座、〇註略自當間降壇下、自砌內西行著砌外座、(先立座後、揖天著座之後、又揖如常、南面著之、)(件座當東二間敷之、)王大夫同降坐砌前座、(件座當西二間敷之、)辨已下同降居南廳前、〇中略次頒幣、先伊勢幣、衞士受取、了使出東門、了、

〔江家次第 七 六月〕神祇官神今食

神今食事(又說)

六月十一日夜有行幸時、於中和院行、無行幸時、於神祇官被行、正廳之中三間爲神殿、東三間爲采女候所、北廂爲內侍候所、南六間庇東一間親王座、西向、二間上卿座、北向、參議座、南向、三四間辨少納言中務輔座、北向、少納言南向、(大盤)五間南壁下上官、第六間引分幔爲外記座、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、今夜神今食也、〇中略戌刻參神祇官、〇註略入官北門、(此門內不逐前、總禁高聲狼藉事云云、然而喧嘩甚多、)此間召使來會、予經北廳東、至于南廳、官掌出來褰幔、入北面自東第三間著座、其座爲體、東一間敷親王座、(西面)同二間敷上卿座、(北面、座前置式筥、)同間敷參議座、(南面)而退東及第三間敷之、雖須令敷直、依無益不直之、同三間敷辨(北面)少納言(南面)座、(各正不對違敷之、)第四間廻南敷上官座、第五間敷召使官掌座、(召使南也、官掌北、並東面、今日座體如此、)

〔江家次第 九 九月〕行幸神祇官被立伊勢幣儀

早旦內侍參神祇官、用行事藏人車、入自東院北門、於官東門下車、差几帳到正廳西第二門、〇門間字恐誤

〔園太曆〕貞和二年九月十一日、例幣也、〇中略到郁芳門下車、〇中略到北門前、(不引幔、前駈留此所、〇中略)著門東腋座、〇中略史取笏立北廳北邊、(東面)次起座、(兩揖如常)向東幄前、(隨身取松明相從、召使又相從、幣進發已前、共不發前聲例也、凡出門內者、不可發前聲歟之由仰候了、)抑東幄不見、只敷其座許、希代事也、〇中略經北廳東、自南方進東、自座後著座、(其路相計有幄之時之儀通之、荊棘滿地之間、隨身居樣不任意、喧嘩群居後方也、)

〔康富記〕應永廿二年九月十一日癸亥、例幣也、〇中略無陣儀、直皆參神祇官云々、使王御馬不申云々、御幣發遣之時、上卿著南廳、辨著北廳座、外記著東屋座、上卿西面、辨外記史、東上南面著之云々、

〔愚昧記〕仁安二年十一月十五日己卯、亥時許參神祇官、(自郁芳門入北面西門下、〇此日新嘗會)經神殿東著南舍、件舍南門內卯酉妻六間屋也、東第一間迫壁敷兩面端半疊一枚、爲親王座、(西面、後壁立屛風、)第二間南邊敷繧端半帖一枚、爲上卿座、(北面)其前置式筥、同間敷黃端半帖爲參議座、(南面、自上臈座頗下西、)第三間敷辨少納言之座、(辨北面、少納言南面、)第四間迫南柱(自上臈以下座頗退南也)敷外記史等座、第五間敷中務丞內舍人等座、(北面)同間折北敷召使官掌座、(東面)第六間引隔斑幔、侍從厨爲備饌所、已上各立机一脚、居饌、但辨少納言臺盤、予經舍東入自南面第三間著座、(第三間壁也、仍入自三間、召使褰幔、沓脫席上、)次左中辨俊經朝臣入同間著座、外記史入自南四間著座、召仕官掌入北五間、〇中略頃之中納言信康入北第三間著之、良久左大辨雅賴卿入自北二間著座、

〔管見記〕正長二年(〇永享元年)十一月廿四日、新嘗祭也、余爲卜合可參行之由、蒙其催了、仍入夜著束帶乘八葉車參神祇官、於郁芳門下車、入北門聊佇立北廳南簷下、少時召使告申事具之由、仍予以下相引著南廳、(此廳顚倒之間、儲假屋東西行五箇間、東一間爲親王座、)其儀廻南廳巽角入南面東第二間、乍立揖、脫沓著座揖、(南方北面)次四條宰相隆夏卿著北二間、(南面)與予對座、次少納言長廣朝臣著北第三間、(南面)次左中辨資親朝臣著南第三間、少納言對座、第四間爲外記史座、共以北面、

〔本朝世紀〕仁平元年十二月十一日丁丑、月次神今食祭也、仍廢務、中納言重通卿、參神祇官北廳、行月次祭事、(參議可尋)權中納言忠基卿參南廳、行神今食事、

〔日本紀略〕十一條長德四年三月廿八日丁亥、寅刻中御門南、大炊御門北、大宮東、堀川西燒亡、餘焰燒神祇官北廳屋、四月十日戊戌、御卜、依神祇官齋院舍燒亡也、

〔左經記〕長元七年八月十九日丙子、午刻參內、〇中略頭辨仰云、右府云、風損殿舍門廊堂等可分宛諸國、〇中略國宛、先被下損色文二通、〇中略

神祇官北廳屋、信乃國、紀伊國、南屋一字、常陸國、西屋一字、武藏國、倉一字、若狹國、

南廳代

〔園太暦〕康永四年貞和元年〇十一月廿三日癸卯、抑今日新嘗祭、右衞門督實繼卿參仕云々、雨儀事、父卿尋之、南廳代儀、用南門下北舍儀可用之間示了、

〔薩戒記〕應永卅二年六月十一日己酉、陰晴不定、午已後雨、臨晩聊日影、日沒已後又雨、月次祭、上卿葉室中納言、宗豐、〇中略後日納言談曰、欲行神今食之間殊甚雨、同南廳代幄不可叶、又雨雖休止、溜水流入、舍内無可著座之樣、相尋先例之處、無南舍之時、被用南門簷下之由、官外記等申之、而又當時南門無實、仍以今案於東門下行南舍之儀畢、〇下略

〔康富記〕嘉吉二年十一月廿二日己卯、大雪降、新嘗祭也、雨儀新嘗祭〇中略依大雪爲雨儀、南廳代以神祇官東門下被用之、上卿辨北上西面、參議少納言北上東面、外記史東上北面也、召使加其末皆圖東也、

曹司

〔續日本紀十聖武〕天平二年六月庚辰、神祇官曹司災、　壬午、雷雨、神祇官屋災、往々人畜震死、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲十一月丁卯、廢新嘗會、以諒闇故也、檢神祇官記、是年於神祇官曹司行新嘗會事矣、

〔續日本紀四十桓武〕延暦九年六月戊申、於神祇官曹司行神今食之事、先是頻屬國哀、諒闇未終、故避内裏而於外設焉、

柏殿

〔顯廣王記〕安元三年治承元年〇六月十一日己卯、月次祭幣於北舍裹之、依柏殿燒失也、上卿新大納言實定卿、　十二日庚辰、神今食御饌、立大藏省幄於柏殿跡辨備之、同依柏殿燒亡也、上卿權大納言實房卿、行事右少辨光雅、

〔大内裏圖考證十九神祇官〕西舍

神祇官古圖及建圖、作柏殿、

御幣殿

〔大内裏圖考證十九神祇官〕御幣殿

神祇官古圖及建圖、御幣殿在西院内巽隅、　神祇官建圖、御幣殿圖、南北四間、東西一間、子午建之、

齋部殿

〔百錬抄 十三後堀河〕安貞二年十月七日、朝間東風吹雨降、及未剋坤風猛也、〇中略神祇官御幣殿、眞言院四足等顚倒了、

〔大內裏圖考證 十九神祇官〕齋戸殿

一作齋部殿　神祇官古圖、作祝殿、　神祇官建圖、及古文書、正和二年神祇官遷宮注文、作祝部殿、延喜式、作西屋、　江次第、作刀彌殿、古文書作宿所、〇中略　古文書曰、祝部殿者、御巫等宿所、假令今世御子等號神殿如致祈禱之所也、無指細物也、又曰、神祇官祝部殿事、一名齋部殿、只如神殿懸御簾引壁代、立濱床、安青榊木、又曰、秉敎按之、御厨子祝部殿、共以無神座勸請之義、但祝部殿案上安賢木云云、可存如在體歟、

〔三代實錄 四淸和〕貞觀二年八月廿七日甲辰、夜偸兒開神祇官西院齋戸神殿、盜取三所齋戸衣、幷主上結御魂緖等、

〔神祇官年中行事 十二月〕十一日、月次祭如六月、齋部殿內及諸宮、御巫史生祭之、

〔江家次第 五二月〕四日祈年祭

左右馬寮各引馬十一疋、立於刀禰殿東庭、

官庫

〔延喜式 一四時祭〕春日神四座祭

祭神料〇中略

右祭料依前件、春二月、冬十一月、上申日祭之、其封物者、割下總常陸兩國香取鹿島二神封調布五百端、香取神封二百端、鹿島神封三百端、庸布三百段、商布六百段、麻六百斤、已上鹿島神封、紙六百張、香取神封、送神祇官、仍收官庫、依件充用、

〔延喜式 三臨時祭〕凡石上社、門鎰一勾、匙二口納官庫、臨祭在前遣官人神部卜部各一人、開門掃除供祭、自餘正殿幷伴佐伯二殿各一口、同納庫、不得輒開、

東院

凡春日廣瀨瀧田等社庫鎰匙者、納置官庫、祭使官人臨祭請取、事畢返納、

〔西宮記 二月〕一祈年祭

伯命史令班幣、史二人執簡唱社名、忌部二人立案下、史申須幣訖、次自上退、近社幣祝來請、遠國幣納官庫、付朝集使、

〔西宮記 六月〕月次祭

史二人、持簡召諸祝、遠社幣納官庫、朝集使入京日可付送、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應奉新年月次新嘗等祭幣事

右得神祇官解偁、檢案內、武藏、下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部受取供祭、而頃年緩怠會不勞受、徒積庫底、無由走奉、○中略

齊衡二年五月廿一日

〔日本紀略 四村上〕天德元年二月十一日己巳、今夜神祇官失火、倉一宇、宮城大垣五間燒亡、

〔扶桑略記 二十五村上〕天曆七年二月十二日壬戌、丑刻藍園町有失火事、延及神祇官後廳屋燒亡已畢、

十三日癸亥、去夜失火、登神祇官高倉撲滅火者、宜令給祿、

〔大內裏圖考證 十九神祇官〕東院

神祇官古圖、東院北面小土門建圖作棟門、內、正廳者南面假庇有一宇、其巽方大炊殿一宇、其南井舍一宇、中隔四足門、建圖作中門、艮方東廳一宇、其南南面諸戶門建圖作土門、諸戶內南廳一宇、神祇官建圖、東院北面棟門古圖作北土門、內六間屋南面有庇一宇、其少巽方大炊殿一宇、其南井舍一宇、中隔中門、古圖作四足門、艮方六間屋一宇、南面諸戶土門古圖作諸戶門、六間屋一宇、與北六間屋相對、

〔吉記〕壽永元年九月十一日己卯、今日例幣也、○中略依無神馬、不遂發遣、幣物等奉置東院、云々、以浮說注之、後聞遂以發遣云々、

東院正廳

後廳

〔山槐記〕元暦元年九月十一日丁亥、從去夜終日甚雨、今日例幣也、〇中略神祇權大祐大中臣宣康、權少祐齋部明茂、卜部兼助、（元官者也）入東門、參入正廳、奉出幣、

〔大内裏圖考證（十九神祇官）〕後廳或作東廳

諸圖書、神祇官古圖、東廳在東門（四足）外艮、神祇官建圖、正口六間卯酉建之、古文書曰、神祇官、〇中略棟門内東廳、（東曰東廳中屋）謂之東院、或曰厨子院、又曰神祇官東廳、東一間伯、第二間副官、第三間佑官、第四間史生、又從南方長官卜部官人著之、北方忌部門生卜部等著之、

〔神祇官年中行事（正月）〕當日伯以下官人參官、東廳著之、（但長官近代無參官）居饌三獻、次公文史生成吉書、持參長官亭之、

〔百練抄（十四）〕仁治二年二月四日壬戌、祈年祭也、本官東廳、去比有卅日穢、稱揃滯中門、於西院被行神事、伊勢幣自北門退出、未曾有事也、

〔左經記〕寛仁元年七月十一日丁未、今日於神祇官可被立新年穀幣、余奉仕其行事、〇中略於神祇官後廳座、奉諸社幣等、

長元四年七月十三日戊午、午剋許參神祇官、（依爲祈年穀奉幣也、日來八省修理、仍於此官被立使也、）〇中略史於神祇官東廳屋令奉諸社幣、

〔宮主秘事口傳〕近年朔日御卜始儀

宮主參本官、入自北門、參著東廳、先史生進手水、於東廳東傍沙汰之、

〔神祇官年中行事（臨時）〕貞應三年〇元仁元年十月廿八日辛酉、今日行初任吉書、〇中略十一月三日乙丑、今日著本官也、〇中略當日參著之儀、先例入北棟門、先著東廳云々、（御厨子御坐殿）而東廳幷件棟門顚倒、件門切塞了、仍自西三門直參神嘉殿、御厨子當時御座此殿、官掌二人儲門外、左右前行、予〇資光王入門之時、權大祐齋部明尙、權少祐安友、大史同致季等、門内列立、官掌史生官人爲先下﨟、左右二行、先行神嘉

殿、經北東自南面西戸著座、〇下略

〔扶桑略記 二十五 村上〕天暦七年二月十二日壬戌、丑剋藍園町有失火事、延及神祇官後。廳。屋、燒亡已畢、勅遣左近少將國紀、防止其火、

御卜所

〔北山抄 二 年中要抄〕六月十日奏御卜事

天暦四年十二月、神祇官解、中臣官人不足、代以散位高邦、令候御卜所、〇又見江家次第

〔大内裏圖考證 十九 神祇官〕御卜所 在所俟後考

小忌殿

〔政事要略 二十八 年中行事〕十二月十一日月次祭事

吏部記、承平四年十二月十一日、夕參神祇官小忌殿、

官地

〔拾芥抄 中末 宮城〕諸司厨町

神祇官 春日南、堀川西、二町、大炊御門北、大宮東、藍園西、一町、又中御門南、西洞院東、一町、又同倶、〇又以下三字疑有誤脱

〔伯家部類〕神祇官町之事

左辨官下　神祇官　雜事參箇條

一應任度々宣旨慥令催勤居住本官町人等、不勤守護役事、

右得彼官去月廿七日解狀偁、件守護、年來之間居住本官町之輩、各所勤來也、而近年居住之輩、度々背宣旨、或募權門之威、不叶本官之催、或領數戸之地、不勤一度之役、加之各准私領、恣好賣買、雖加制止、都無承引、神事懈怠、職而此由也、因茲注子細經奏聞之處、雖被下宣旨、構以不隨所勤、任度々宣旨狀、追出彼難澁輩、以叶役之者欲被令居住、慮外雜穢出來者、其恐不少、仍爲遁後日之勘發、頻所經奏聞也者、權中納言藤原朝臣光頼宣、奉勅宜任度々宣旨、居住本官町之人慥催勤、兼又所澁幷准私領賣買之輩、自今以後、令注進交名者、〇中略

以前條事如件、官宜承知、依宣行之、

保元三年六月十日　　大史小槻宿禰在判

右少辨藤原朝臣在判

左辨官下　神祇官

一應依先例令催勤字○令催勤三字依一本補居住左京內當官領輩、不隨官役、兼准私領賣買他人事、

右得同前○神祇官解狀偁、當官者、神態繁多之砌、祭祀重疊之地也、仍以彼町之住人、仕官底之雜役、○役一本作務而近年居住輩、或募權門之威、不叶本官之催、或領數多○多一本作戸之地、不勤一度之役、加之各准私領、恣好賣買、因茲經上奏之處、去保元三年六月十日宣旨偁、權中納言藤原光賴宣、奉勅宜任度々宣旨、居住本官町之人憖催勤、兼又所濫并准私領賣買之輩、自今以後、令注進交名者、仍雖加制止、都無承引、神事懈怠之基、唯以在斯、早任度々宣旨被追立件輩者、同宣、奉勅依先例、

一應同依先例看督長放免等闌入同領、始宛門并夜御役不令勤本官宿直事、

右得同前解狀偁、當官宿直者、彼町住人各守次第所令勤仕也、而近年始宛門并夜行之間、使廳下部等、亂入在家、凌轢住人、因茲各勤保內之夜行、空忘官中之宿直、然間官庫者有盜犯之難、官門者有汚穢之恐、就中件町者、淸淨之地也、下部等濫穢之身也、何不憚禁制可令亂入哉、爰考傍輩、於外記町者、使廳下部不亂入門并夜行不宛行、件町全無其煩、當官何蒙其責、早任延久二年宣旨、永被停止者、同宣、奉勅依先例、

以前條事如此、官宜承知、依宣行之、

長寬二年十月十六日　　大史小槻宿禰在判

少辨藤原朝臣判

左辨官下　神祇官　雜事貳箇條

一應任度々宣旨永從停止、本官町貳町伍段、催夜行門並役間、檢非違使廳看督長下部等亂入在家、

妄以汚穢身蹈穢奠祭地事、

右得彼官去月十三日奏狀偁、謹檢案內、被宛置諸司町地、載而在式條、仍本官司各令知行、以居住在家人等召仕本司雜役者、已以傍例也、而件地貳町伍段、背他司之例、爲使廳橫被虜掠之條、子細不審也、彼者則理非糺斷之廳也、豈不存式條哉、是者又祭奠潔齋之官也、爭不存式條哉、今之虜掠故不審也、若以威勢妄放入汚穢下部等、可被宛陵者、頗非正道糺斷之政歟、況度々宣下之地、任道理仰裁定而已、如此之間、住人偏恐使廳、早忘本官畢、因玆無人守護之間、有官門雜穢之恐、無人掃除之間、有庭草繁茂之煩云々、彼云此、神事違例、不淨之基也、望請天裁、早任度々宣旨、兼依守護無人、任先例重被下宣旨、永停止使廳下部亂入、催夜行門並者、中納言藤原朝臣實國宣、奉勅前後嚴制、旁以稠疊、永從停止、敢勿違越者、

一應同任度々宣旨永從停止居住同町住人等恣准私領賣買要人兼背先例不隨本官進止事、

右得同前奏狀偁、謹檢案內、諸司町地、令進退本司者、眼前之傍例也、而當官町地貳町伍段也、彼居住之輩、各稱買得之由、猥募私權、所不順本官之催也、以公廨物恣可賣買哉、兼居住地、妄可募私權哉、早任前宣旨、重被下宣旨、永停止件猥藉等者、同宣奉勅、前後嚴制、旁以稠疊、永從停止、敢勿違越者、

以前條事如件、官宜承知、依宣行之、

嘉應二年七月十九日　大史小槻宿禰在判

少辨藤原朝臣判

已上

〔顯廣王記〕安元二年十月十三日甲申、官町地宣旨到來、

三年〇治承元年八月三日庚午、今日召使神祇史生兼信、奉別當宣、口傳云、可停止本官町使廳非法之由召仰季光了、同先日所進伯消息、預御返事と申、只同事也、以此旨可被申者、

〔神祇官雜々記〕官町事之院宣三通

神祇官東町預行員申、官町地事、如元所被返付也、可令存知由、先依院宣、執啓如件、

正安三年七月廿二日　　大藏卿

伯三位殿

本官東西町輩、不從神事役間事、奏聞候之處、早任先例、無人煩之樣、可致興行沙汰候之由、院御氣色候也、仍執啓如件、

乾元二 九月廿五日　　春宮亮雅俊〔○雅俊、伯家部類作雅滿、〕

謹上　伯三位殿

神祇官町興行事、重以申趣奏聞候之處、猶以此院宣可致施行、任先例聽加催促之條、何爲人煩哉、此旨〔○旨、伯家部類作上、〕猶有難澀之輩者、相尋申彼趣、其時嚴密公事御沙汰申候、〔○公事以下七字、伯家部類、作可有沙汰之由被仰下候也十一字、〕仍執達如件、

乾元二 十月廿六日　　春宮大夫〔○大夫二字、伯家部類作亮雅滿三字、〕

謹言上　伯三位殿

〔伯家部類〕神祇官町〔大炊御門町西壹町〕事、奏聞之處、於有限之本官公事以下者、爭可對捍哉、任例嚴密可令下知給之旨、院〔○花園〕御氣色所候也、仍執達如件、

建武三 六月十七日　　權中納言資明

伯殿　已上

〔伯家部類〕山城國神祇官町幷攝津國廣田社領等、同所々散在田畠已下〔目錄在別紙、〕事、二位同三位兩代、或令沽却之、或被入置質物之條、神事退轉云々、太不可然、早被弃破之上者、如元被全知行、專神用、可被致御祈禱之由所被仰下也、仍執達如件、

延德二年閏八月廿四日　　前信乃守判

筑後守判

伯二位家雜掌　巳上

〔伯家部類〕神祇官地藏集軒訴訟落居一件 以下六通

普光院内藏集軒謹重言上

春日猪隈四町方地之事、此地神祇官町方境無相違之由、伯家猶以被申掠之段、言語道斷之次第也、賣券仁今宮御供錢之外、訴口不可存諸役之文言也、神祇官町之沙汰、曾以無之、定て本役今宮御供錢可調之上者、何之被申候事在之哉、縱爲官町之地帶御下知之上者、不可及弃破之沙汰者也、數十個年、當知行之由被掠而致押領者、年紀之遠近不可入之也、其上寺社之御法在之者歟、肝要者彼家賣券四至榜示分明也、殊公驗相副所持之上者、一切弃破之御沙汰不可有之者也、彼家へ被申請御下知、城州神祇官町ト在之、近頃大樣ナル文言也、寺家之證文、御下知之文言等慥之上者、理運無紛者也、總而賣券仁御下知申請事、永爲不可有相違也、御法如此之處、背彼家先祖之劵書、被破御下知之所行、誠以無道之專一也、此等之趣被聞召分、退押之方、任御下知之旨、重而被成下御下知者、可忝畏存候者也、仍謹重言上如件、

天文八年四月日　巳上

伯二位家雜掌重言上

藏集軒重言上之趣、春日猪熊四町方地四方榜示等、所被注申神祇官官町、方境無相違者也、將又康正度賣劵狀ニ、今宮幣物之沙汰有之云々、今宮祭祀之時、爲當家捧幣物、備本官御供進之儀勿論也、兩條藏集軒只今無詮申事哉、彼所賣得弃破候間、幣物別可有其沙汰之儀者、更申事無之、數十ヶ年、人々存知無相違者也、先度如言上、自去々年初而違亂、言語道斷次第也、被聞召分被成下御下知者、可爲御祈禱之專用者也、仍謹重言上如件、

天文八年三月日

家領神祇官町四町、幷北小路敷地東西十六丈五尺五寸、南北三十五丈三尺、之事、當知行無相違候、室町殿被成下御下知候者、可畏入存候、萬一掠申候者、可預御成敗候、此旨宜得御意候也、恐惶謹言、

八月廿七日　雅業〇白川

勅修寺殿　巳上

神ぎくわん町の事、むろ町殿よりの返事の樣、御きこしめし候て、おどろきおぼしめし候、はくの二位ばいとくしかるべく候か、はくの二位をちよくかん〇勅勘にて、洛中をはらはれべきかと申さるゝ、更に御かくごなく候、其ゆへは伯しよくは、きよひとのみこ〇淸仁親王のこうゐんあまたにて、一もんの輩まいりて、はいにんし候、さ候へば、この官町已下わたりりやうにて、ちぎやういたし候事にて候を、おの〳〵たいせつに候、近き比はすけます〇資益の卿、たゞ富の卿、兩人ならではなく候つるに、すけますの卿、其子資氏兩代、でん領の公領をこきやくいたして、かのりう、ふろはし〇ふろはし、恐あふろう候誤、所に、今の伯職に、故たゞ富の卿はいにんいたし候て、このことをそせういたし、延德の度、すでにきはせられ候て、五十餘年たゞちぎやうをいたし、神くう以下あひそだてつるを、たゞ今たちかへり、ばいとく人申入候事をそたてられ候はんずるは、しかるべからずおぼしめし候て、たび〳〵申され候へば、一みちも立ぬまゝ、せんそのくりやう、かくおひ人のてに落候べき事、あさましくおぼしめし候まゝ、ふびんふうんの事候へども、はく〇伯まへをめしあげられ候はんずるかと、おほせ出され候事、至極のだいもくにて候を、一もんのともがらのこきやくのとがにて、勅かん候べき事、分別も候はんずる、そうべつかやうの事は、あまたにておぼしめし候、一もんまで御せいばいの事は、きこしめしおよばれず候、神國にて候に、神ぎくわんさへかやうに成候はんずることは、なげきおぼしめし候、近衞殿へも、このしだいは、たび〳〵申させ候へ共、

申され候はぬ哉覽、きときこしめしわけられ候て、一日の申され候ごとく、御下地をまいらせられ候はゞ、よろこびおぼしめし候べきよし、よく〳〵申され候べく候、　已上

神祇官町の事、いまだむろ町どのより御返事申され候はぬやらん、一日も申され候やうにて、たにことなるくりやうたるゆへ、一たびさはせられ候うへは、たゞ今御さたにおよび候まじきことに候とおぼしめし候、ことに玄ぶんがらの事にて候ほどに、いそぎ伯二位に御下知をなされ候やうにと、よく〳〵申され候べきよし申され候、　已上

神祇官官町事、藏集軒號帶買得公驗違亂候條、被遂糺明候處、至延德被成弃破之御下知、既及五十ヶ年、當知行之上者、云公領云叡慮、彌可被全領知之由、所被仰下候也、仍執達如件、

天文八年十二月廿八日　豐前守 花押

散位 花押

已上六通藏集軒一件

伯二位家雜掌

〔伯家部類〕請申　神祇官領備中國久米庄事

右以御年貢內御寄進當社上者、御祈禱以下、殊可抽忠勤候、件御年貢員數、庄家落居之後、可被治定者也、於當年貢者、先ッ半分知承者七十石云々、請取時百貫云々、充給承之、今於半分者、否可沙汰進御方、似於被心憚入御便可被定其員數之上分、殊ニ者實無御免者雖聊不可有相綺候也、仍而後日證文之狀如件、

延慶三年八月日　前越後守泰方 花押

已上

一年號不知

播磨國黒田庄可令知行給之由、殿下御氣色候也、仍執啓如件、

六月廿二日　右大辨宣治

謹上　伯二位殿〈略○中〉

神祇官下　備中國久米之庄之事

定補　預所

右以人宜補任彼職、有限神祭米已下之事、無懈怠可被進濟、庄家宜承知、敢勿違失、故下、

延慶三年八月日　少祐齋部親有

伯〈華押〉　已上

官印

〔神祇官年中行事 臨時〕貞應三年十月廿八日辛酉、今日行初任吉書、〈略○中〉辰剋許、公文史生淸賴、所新鑄本官印持來、此印鑄改之由、雖被宣下、自然大藏省沙汰懈怠之間、依今日吉書、以頭辨中事由、重及沙汰、昨日內匠寮鑄出云々、仍先持來也、予一見之後返給淸賴、任先例可奉置御厨子之由下知了、而去比、彼御厨子、盜人猶打開云々、然者今日吉書以後、可案置長官亭歟、淸賴等是申云々、予云、年預之許歟、公文史生之家歟、本官四壁修造之時、由可奉置之由所下知也、

職員職掌

〔令義解 一 職員〕神祇官

伯一人、掌神祇祭祀、祝部、〈謂爲祭主贊辭者也、其祝者、國司於神戸中、簡定、即申太政官、若无戸人者、通取庶人也、〉神戸名籍、〈謂祝部名帳、神戸戸籍、也、案戸令、雜戸戸籍、更寫一通、各送本司、即神戸籍、亦須准此也、〉大嘗、〈謂嘗新穀、以祭神祇也、朝諸神之相嘗祭、夕者供新穀於至尊也、〉鎮魂、〈謂鎮安也、人陽氣曰魂、魂運也、言招離遊之運魂、鎮身體之中府、故曰鎮魂、〉御巫卜兆、〈謂在女曰巫也、卜者灼龜也、兆者灼龜縱橫之文也、凡灼龜占吉凶者、是卜部之執業、非長官自行之事、然而於此稱之、欲顯官內諸事、皆由長官、故兼附以注於職掌之中、其以下諸司亦准此例、〉總判官事、〈謂卜兆以上、皆既大事、是故別注、供神之人、自外諸事、不可具顯、故稱總而兼之、問總判糺判、其別如何、答考課、及他司移送諸事、不待判官、而長官得獨行、故曰總判、判官者、唯知官內羣常之事、故曰糺判、〉餘長官判事准此、大副一人、掌同伯、餘次官不注職掌者、掌同長官、〈謂以下諸司、多不注者、故立此例文、云不注、注、恐似注者不同長官、此有別掌者注、无別掌者不注、故下條云、抄寫判文、其主典之職掌、豈唯抄寫判文、餘皆准此條例、故特注其別掌、餘次官注職掌者、亦皆准此、〉少副一人、掌同大副、

大祐一人、掌糺判官內、審署文案、〈謂審署者、審察主典勘造文案而署之也、文案者、施行曰文、稽置曰案也、〉勾稽失、〈謂勾勘也、稽稽留也、失失錯也、依律、公事及文書、並失有稽留失錯之罪、即知稽留失錯者、行事文書、皆兼之也、〉知宿直、餘判官准此、少祐一人、掌同大祐、大史一人、掌受事上抄、〈謂上者載、也抄者錄〉

也、言受二判官以上勘一署文案一、謂勘二造文案一、檢二出稽失一、謂依レ律、同司犯二公坐一者、主典以上、節級連讀中公文上、處分一而載錄也、而署之也、坐、故知判官以上稽失、主典皆得二檢出一、餘主典准レ此、少史一人、掌同二大史一、神部卅人、卜部廿人、謂案二考課令一、占候醫卜、効驗多者、爲二方術最一、而於二此令一、長上番上、色制不レ分、卽知卜部廿人、長上約在二其中一、其員數者、依二式處分一、使部卅人、直丁二人、

〔令集解職員二〕釋云、說文曰、祝者、爲レ祭主二贊辭一者也、

〔延喜式宮內三十一〕供二奉踐祚大嘗一小齋

神祇官一百五十人、伯已下史已上七人、史生四人、宮主一人、彈琴二人、巫部一人、神部廿四人、卜部十八人、使部十二人、忌部五人、神服七十六人、

〔伊呂波字類抄官職加〕神祇官カムツカサ日本紀云、聖武天皇御宇天平十八年丙長、始置二神祇大副一、以二中臣益人一爲二大副一、又大常府

伯カミ主事　副大少　祐マツリコトノヒト大少　史大少　史生　卜部光仁天皇御宇寶龜五年甲寅、始置二龜卜長上二人一、卜部氏是也、　神部

〔拾芥抄中本百官〕神祇官宮城內部芳門南掖かし　伯ハク　大副タイフ權チイスケ　少副權スナイスケ　祐セウ大少マツリコトノ人　史サウ大少　卜部　宮主ミヤシユ

〔掌中職原擎要大成〕神祇官

伯一人　白川正四位下王氏源資訓王

大副一人　藤波從二位大中臣教忠卿

權大副二人　吉田正三位卜部良熙卿

權大副大宮司　河邊從三位大中臣長量卿

少副二人吉田社權禰宜　吉田正四位下卜部良祥朝臣

同皇大神宮氏人　河邊從五位下大中臣盛光

權少別四人吉田社權預　鈴鹿正四位下中臣連胤朝臣

同吉田社正禰宜　鈴鹿正四位下勝文朝臣

同同社權祝　吉田從四位上卜部良榮朝臣

同同社氏人　吉田從四位下良知朝臣

大祐一人行事官　山口從五位下紀以昌

權大祐二人吉田社正祝　鈴鹿正四位下中臣長存朝臣

同同社權祝　鈴鹿從四位下中臣芳春朝臣

少祐一人同　鈴鹿從四位上中臣種功朝臣

權少祐一人同　鈴鹿從四位上中臣熙明朝臣

大史一人吉田社若宮權禰宜　鈴鹿從六位上中臣通安

少史一人内舍人時岡正六位上忌部茂郁

〔令義解一官位〕從四位階○下神祇伯　從五位階○下神祇大副　正六位階○上神祇少副　從六位階○上神祇大祐　神祇少祐○從六位下　正八位階○下神祇大史　從八位階○上神祇少史

〔職原抄上〕神祇官

伯一人相當從四位下、近代至二二三位一帶レ之、唐名大常伯、又大卜令、又祠部尚書、○中略　大副權大副、唐名大常卿、祠部外郎、　相當從五位下也、然而任二祭主之輩一、至二二三位一帶レ之、多是四位五位任レ之、○中略　少副權少副、唐名大常少卿、　相當正六位上也、近代五位官也、○中略　祐大少　相當從六位上、近代雖二五位一帶レ之、唐名大常丞、相當從六位下、近代六位中不レ分二正從一、皆是正六位上也、○中略　史大少　唐名大常主簿

〔有職問答三〕重而不審條々

一神祇伯事

當時伯卿を二位卿と稱也、伯ノ二位、伯ノ三位ト稱也、然者伯に准じて三位大副卿、是チハ祭主ノ三位トモ同呼候、三位大副トハ不レ呼候、少副卿、或四位を祐朝臣、又は史朝臣共可是等ハ左樣ニハ不二呼付一候也、稱候哉、

〔除目抄〕勅任奏任黃紙白紙等事

親王任官○中略　觀察使

已上勅任等、天平已後大同已前多用二白紙一、用二青紙一或希用二黃紙一、弘仁以後嘉祥以前多用二黃紙一、或用二白紙一、仁壽以後至二于今一皆用二黃紙一、但先年偏記レ勅、或重記二勅任一、今既皆記レ勅、又天平寶字之間、或大納言八省卿、記二太政官謹奏一、神祇伯記二勅任一、

○按ズルニ、選敍令ニハ、神祇伯ハ奏任ノ中ニアリ、

〔拾芥抄中本官位唐名〕神祇伯神祇官、大常卿、或常卿、大卜令、祠部郎中、唐大常寺、　副大三人、正一人、權二人、少五人、正二人、權三人、　大常少卿祠部員外郎　祐大六人、正一人、權五人、少五人、正一人、權四人、　史大少　大常錄事祠部主事　祠部令史大卜令史　又大常府大常主簿

〔唐六典十四太常寺〕太常寺卿一人正三品、○註略　少卿二人正四品上、○註略

伯

太常卿之職、掌邦國禮樂郊廟社稷之事、以八署分而理焉、一曰郊社、二曰太廟、(〇註略)三曰諸陵、四曰太樂、五曰鼓吹、六曰太醫、七曰太卜、八曰廩犧、總其官屬、行其政令、少卿爲之貳、凡國有大禮、則贊相禮儀、有司攝事、則爲之亞獻、率太樂之官屬、設樂縣以供其事、燕會亦如之、若三公行園陵、則爲之副、公服乘輅、備鹵簿而奉其禮、若大祭祀、則先省其牲器、凡太卜占國之大事、及祭祀卜日、皆往涖之於太廟南門之外、

〔唐六典(四禮部)〕祠部郎中一人從五品上(〇註略)

員外郎一人從六品上(〇中略)

祠部郎中、員外郎、掌祠祀享祭天文漏刻國忌廟諱卜筮醫藥道佛之事、

〔伯家部類〕廳始幷吉書之事

正應四十七、今日初任後、大常。卿。本官廳始者、成吉書事、上階後依無政所始、早旦召下家司久重下交名、別當本官顯長、藤清久、令中度躬、知家事紀久重、案主、(紀久榮、)所司二人、(藤能實、藤景光、)等、民部卿、(資兼、)

〔令義解(二神祇)〕凡天神地祇者、神祇官皆依常典祭之、(謂天神者、伊勢、山城鴨、住吉、出雲國造齋神等類是也、地祇者、大神、大倭、葛城鴨、出雲大汝神等類是也、常典者、此令所載、祭祀事條是也、)

〔令義解(二神祇)〕凡祭祀、所司預申官、(謂所司者神祇官也、預申官者、卽一日齋亦須預申之、)官散齋日平旦頒告諸司、

凡供祭祀幣帛飮食、及菓實之屬、所司長官親自撿校、必令精細、勿使穢雜、

〔令義解(四考課)〕神祇祭祀、不違常典、爲神祇官之最、(謂少副以上、)

〔延喜式(三臨時祭)〕凡諸國神稅調庸帳、及神戶計帳、祝部等名帳、每年勘造送此官、(〇神祇官)計會知實、卽付返抄、

〔令集解(二職員)〕神祇官

伯一人(釋云、爾雅云、正伯長也、郭璞注云、正伯皆官長也、讃云、問、以伯字爲官長意、答、爾雅云々、然則用此字、非無由也、但此司以伯字、餘司用他字者、不見其由也、)

○按ズルニ、神祇伯ノ伯ハ、恐クハ周禮ノ大宗伯ノ伯ヲ取リシナラン、周禮ニ大宗伯之職、掌ㇾ建邦之天神人鬼地示(示音祇、本或作ㇾ祇、)之禮、以佐ㇾ王建ㇾ保邦國ㇾ云々トアレバナリ、

〔百寮訓要抄〕神祇官

伯　是は神祇のかみ也、伊勢大神宮以下の神事祭禮をつかさどる、

〔諸家家業記〕神祇道

伯職、上古は職掌事多キ樣子に候得共、當時は諸事古に違ひ、只內侍所の事をば萬端彼家にて被ㇾ引總、且主上御拜之儀、彼家より御相傳被ㇾ申上、并主上每朝之御拜、御故障有ㇾ之節は、關白家御名代御勤候事ニ候處、萬一關白家故障之節者、伯家より御代拜被ㇾ相勤ㇾ候例ニ而、主上御拜之御名代者、關白家白川家ニ相限り候事に候由、

〔伯家部類〕(雅喬王眞跡)一主上每日之御拜、何事にても御障有ㇾ之時ハ御代官仰下さる、是を常の御てがはりといふなり、關白へ仰出さるゝ事も有て、御代官を勤るは關白伯兩職也、只淸キト云ばかりにて、御代官つとむるにてはなし、子細有とゝるべし、關白も當家より相傳うけらるゝ也、(已上)

〔光臺一覽〕(四)王氏壹軒　白河殿(○中略)

內侍所每朝の神事神拜、天子に替り奉りて、天下安全寶祚長久の御祈被ㇾ成也、諒闇觸穢等にも不ㇾ預、唯一宗源君臣道之神道、淸淨の御家也、觸穢等の剋も、白川神祇伯を先達として、關白大臣一人、大中納言、參議、殿上人、〆二十人計は、觸穢に不ㇾ預、七五三を曳、淸淨にて、穢中非常等の用意に、御守勤給ふ事也、

〔伯家部類〕一神祇伯之事　凡神祇伯者號ㇾ長官、日本第一之重職也、(○中略)按ㇾ之當家(○白川)根本王氏也、一旦雖ㇾ賜ㇾ源姓、任ㇾ伯日復ㇾ王氏、中古以來、嫡庶競望雖ㇾ有ㇾ之、他姓之輩、其儀無ㇾ之處、卜部兼俱以來、至ㇾ子孫ㇾ含ㇾ志事、爲ㇾ顯然、彼八神殿奉ㇾ移取ㇾ事等、皆以其企也、于ㇾ茲曾祖忠富卿、(忠富ハ資益王舍弟、後柏原院無二之忠臣也、嫡流資氏王依ㇾ

（勘氣、不慮ニ當家相續云々、）當家自相續已來、卜部兼俱入魂故、受十八神道、任伯已來被執行之、於伯家者、一向不稱美事也、尤無先例、唯當職者、傳來之文書常々得心而、恒例之神齋無失却、可守其職者乎、

〔儀式 一〕二月四日祈年祭儀（六月十二月十一日月次祭儀亦同）

伯（○神祇伯）命史奉班幣帛、史二人共稱唯、（○中略）史復本座、申頒幣畢、伯命云縱、史共稱唯、

〔儀式 五〕鎭魂祭儀（十一月中寅日、中宮祭准此、但東宮用巳日、）

神祇伯（○○○）以下率琴師御巫神部卜部等、著榛摺衣、令持供神物、左右相分入立庭中、（○中略）神祇伯喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、伯命琴笛相和、（詞云、美許登留布虫安波世、○中略）大藏錄以安藝木綿二枚實於筥中、進置伯前、御巫覆宇氣槽立其上、以桙撞槽、每十度畢、伯結木綿鬘、

〔儀式 五〕奏御卜儀

神祇伯（○○○）以下宮內輔、（無輔、即丞代之、）令持奏文、（納漆塗函、安案上、）候延政門外、（○中略）宮內輔就版奏云、宮內省申久、御體御卜供奉禮留事申給牟止（詞云、於保美麻、）神祇官姓名候止申、勅曰、喚之、稱唯退喚之、伯稱唯、與副者祐（必備中臣姓名）昇案安庭中簀上、俱立、勅曰、將參來、伯稱唯、共昇案安殿上簀子敷上、中臣官便留就版、自餘退出、

〔日本書紀 三十持統〕四年正月戊寅朔、神祇伯中臣大島朝臣讀天神壽詞、畢忌部宿禰色夫知奉上神璽劒鏡於皇后、皇后即天皇位、　五年十一月戊辰、朔辛卯、（○戊辰下、原脫朔辛卯三字、據書紀集解說補、）大嘗、神祇伯中臣朝臣大島、讀天神壽詞、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十年五月辛卯、使右大臣正三位橘宿禰諸兄、神祇伯從四位下中臣朝臣名代、（○中略）賚神寶奉于伊勢大神宮、

〔續日本後紀 二仁明〕天長十年六月癸亥、是日爲聖體有間、使神祇伯正四位下大中臣朝臣淵魚奉幣於賀茂大神、

〔三代實錄 二十八清和〕貞觀十八年五月三日己卯、勅遣從四位上行神祇伯棟貞王向伊勢大神宮、告以大

極殿火、

〔北山抄一年中要抄〕二月四日祈年祭事

天暦十年六月、月次祭、伯勘事、無五位以上副、依無代官例、免忠望王勘事、令分行諸社幣事、

〔神祇官年中行事臨時〕貞應三年十月廿八日辛酉、今日行初任吉書、　十一月三日乙丑、今日著本官也、其儀兼日任在俊朝臣勘狀、告知本官、催官人、祐史生已下前物事、吉書日役人等勤之歟、(但五種物也、官人同前、)當日參著之儀、先例入北棟門、先著東廳云云、(御厨子御坐殿)而東廳幷件棟門顚倒、件門切塞了、仍自西三門直參神嘉殿御厨子、〇中略予著座之後、官人等同著座、先一獻、(盃權少祐安友、瓶子大吏致季、)次獻手水、〇中略次予起座著膝突、再拜兩段、官掌申祝微音、了拍手、予已下皆悉拍手、其後歸著本官二獻、〇中略次辰巳拜八度、(官人已下如前行)次奉拜八神殿、兩段再拜、退出了、〇中略次參賀茂、於下社給師祿、(單衣、右兵衛尉重弘行之給、)次上社、(師祿同前)次參平野社、先例不然也、而予每有拜賀每度參、頗依爲吉例、今度猶所參詣也、　五日丁卯、爲方違宿基光家、(一條高倉)卽用出門、明後日(七日)爲神拜可被下向西宮也、而此間有風雨之難、仍爲去件等之日、兼可令出門之由、道繁所陳也、　七日己巳、予刻許著西宮濱、巫女四條女宅爲宿所、代々候此所爲宿所也、

十一日癸酉、神拜日也、依陰陽師道繁勘文定今日也、予未明沐浴、日出之程、著束帶笏、相尋共人等具、辰刻許乘輿、〇中略先行於北宮社頭、(今日御和子八木二石、社政所計祿布十三疋、任先例前日出來者下行了、但當日人長祿所予之間、麻布二疋加給了、)先參廣田社、於鳥居下與、於中門下取御幣兩段再拜申祝了、(兼氏□□基取之□□□)予著東拜殿奥座(西間北面)此有御神樂了、(給祿、兼□給之、下家司代也、)次參南宮戎三郞殿、內王子等、次參松原社歸宿所、

〔基量卿記〕元祿六年二月廿八日、昨夜中將、今小路局服之義、尤無覺悟之間、不及沙汰處、伯卿被示中將、昨夜令退出(朝より當番伺公)之間、驚入以書中相尋之處、予服同前之由也、依之今小路局申暇義、仙洞へ申入處、從弟子不可及著服由、白川故二位卿〇雅喬以手跡服忌令一冊令書進中院之、件記則爲見被下伯卿、麤忽之由仰之間、退出停止了、其後又伯卿〇雅光有使、從弟子無服之由也、家業義、甚以不便不

大少副

便、

一白川家爲伯職、服忌之事沙汰來事、永正時分以來之事歟、爲神祇職、甚以不可然、服忌之事、法家之輩家業之事也、伯卿申沙汰之事、當時法家如無之間如此歟、不便々々、誠零落事可悲歟、

〔詠百寮和歌〕神祇伯　　高大夫實彙

使たつ伊勢のみてぐらみしめ繩神たからをば職る人

〔儀式〕〔一〕春日祭儀(二月十一日上申)神祇副(若無副則祐代之)喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、副命、琴笛相和、(調云、美許止留布江安波世、)

〔續日本紀〕(七元正)靈龜二年二月丁巳、出雲國國造外正七位上出雲臣果安、齋竟奏神賀事、神祇大副中臣朝臣人足、以其詞奏聞、

〔三代實錄〕(一清和)天安二年十一月戊午朔、遣從四位下行越中守房世王、內藏頭從五位上兼行神祇大副中臣朝臣逸志等於伊勢大神宮、告以天皇將卽位也、

〔爲房卿記〕寬治元年七月九日戊午、今日於諸社被修御祈、從院(○白河)依被申也、(御覺想云々)差神祇少副親定於神祇官、限七ヶ日被祈申、

〔百練抄〕(十四四條)嘉禎元年十一月廿一日庚辰、神祇權大副隆繼朝臣奏天神壽詞、祭主隆通朝臣輕服之間、隆繼奉仕此役、未曾有事也、

〔兼致朝臣記〕文明十八年十一月廿一日、當家事、代々朝奬證文等、家君(○卜部兼俱)被副御狀、被遣中御門黃門(○宣胤)宣了、(○中略)

當家事、受祖神之妙業、累代相傳之矣、神國之根源、朝家之樞要、尤無比類、神道之棟梁、本官之管領、唯在一流、爲南座勾當之上者、宮中參列之時、不守位次、而可被著一座者、依院宣執達如件、

承安五
六月十日　　　　權右中辨經房(奉)

謹上　冷泉權大副殿于時兼直

神祇管領長上、并南座。。。勾當事、實龜五年以來、爲御一流之重職、不被交他人之條、天兒屋根尊大業、唯受一人之明德乎、神祇伯者近代雖及人臣流通之拜任、專於御當流十七代、至庶子中臣流四代經歷之、尤叶神祇道之本理者哉、就中去永延度、八十八社社務職、爲御家業之賞、被補朝恩之時、件等社神主祠官已下事、爲進止之上者、以一門輩可被巡次補任之條、及勅定了、彌可令存知此旨給者、依天氣執達如件、

嘉祿三年十一月五日　左衛門佐信成

謹上　冷泉侍從殿于時兼直

〔伯家部類〕神祇官牒　當年齋物料進濟事

右爲天神地祇三千餘座齋物料、任例進濟如件、謹解、

明應五年正月六日　官掌紀宿禰久秀

左史生宗岡宿禰行賢

北座

伯花押

權大副大中臣朝臣花押

權大副卜部朝臣花押

祭主權大副大中臣朝臣花押中略○

南座

長上大副兼侍從卜部朝臣花押

權大副兼侍從卜部朝臣花押下略○

大少祐

〔令集解二職員〕神祇官
大祐一人（釋云、率下扶上謂之祐、祐之言佑也、佑亦助也、詩云、受天之祜、箋云、祜福也、切韻云、祐者、神助也、音尤救反、方言、祐亂也、郭璞曰、此亂宜訓治之也、又云、祐者天之福也、伴云、周易曰、祐者助也、天之所助者從也、人之所助者信也、然則祐者、蓋以福助人之義、故以此字爲神祇之判官也、此字祐佑難定、故二說之、）

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年五月辛未、遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣弟枚、改作伊勢大神宮正殿、

大少史

〔延喜式四伊勢大神宮〕遷宮禰宜內人等裝束（○中略）
右裝束雜物造備訖、即差使辨大夫一人、（○中略）神祇官史一人、史生一人、神部一人、卜部一人、部領送大神宮、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡禰宜內人神郡祝等、恩詔位記者、式部省依數送於神祇官、官則附四度祭使下之、使率神祇史一人、先申敍位之由、即就直會院第一殿南面坐、以位記置案上、史喚名給、（殿前東向、被喚名禰宜內人北上東面、重行、）

〔兵範記〕仁安三年十月十六日甲辰、內院幷神服院點地荒見河祓也、（○中略）神祇祐大中臣能隆居下官贖物、（備折敷高坏一本）同史生以下居五位六位史寄人等前、（備盞筥）次卜部兼成著膝突、神祇令史取大麻傳能隆、能隆持來下官前、下官取大麻末摩之、（能隆猶持串）次令史取寄大麻、引寄又五位六位史以下、令史返大麻、次祝詞中臣官人、（○下略）

〔勘仲記〕弘安十一年（○正應元年）四月廿五日己卯、予取副二通請奏於笏、召史有澄下之、先內藏寮、次神。祇。官。史。結申予仰、仰詞、

史代

〔神祇官年中行事臨時〕一本官差進使事（差文公文史生書上之、長官加署、）
大神宮御遷宮
辨代伯、或中臣官人、史代忌部卜部、同本。官。史。代。卜部忌部官人同勤之、

史生

〔續日本紀八元正〕養老四年六月甲辰、始置神祇官史。生。四員、

官掌

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、神祇官四人、

〔康富記〕寶德元年十二月廿五日庚子、今夜軒廊御卜被行之、吉田社去月廿七日怪異事也、○中略神祇官史生秀國子置文書於兼名朝臣前退、次上卿目兼名朝臣下給文書令卜之、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

神祇官掌二人率祝部等入自南門、立西舍南頭、

〔西宮記六月〕月次祭

神祇官掌云、申祝詞、祝師下自西廳著沉座、

年預

〔顯廣王記〕長寬三年○永萬元年二月三日壬午、成吉書補所司等、○中略即以兼友補年預、已時事了各退出、

〔神祇官年中行事二月〕四日、祈年祭也、○中略諸社神馬廿二疋左馬寮十一疋、右馬寮十一疋、諸社司可請取之處、近代本官年預請取之、

公文

〔神祇官年中行事正月〕當日伯以下官人參官、東廳著之、但長官近代無參官居饌三獻、次公○○○文史生成吉書持參長官亭之、加判被返下、其後官人加判、各退出、

〔伯家部類〕神祇官長官案下知廿五内

大神宮臨時祭舞人、近年致自由對捍事、院宣被遣之、祭官沙汰不事行歟之間、如此所被仰下也、祭官使相共○共一本作具殊可致其沙汰、依長官殿仰執達如件、

二月四日○弘安九年　公文左衞門尉宗兼奉

宮司殿

已上

〔宮主秘事口傳〕十月一日、大炊寮申新嘗祭御稻田、本官公文史生内膳司相承之書進卜串之間、宮主書付郡幷宮主中臣官人位署、

政所職

中臣　忌部

〔伯家部類〕神祇官史生官掌等注進案十三

注進　右前史生氏與跡驗壽、就神祇官政所職、武家掠給御下知、剩本官御敷地等可令進退之由申云々、前代未聞次第也、殊彼氏與事者、依爲重科之人、永被削子孫處、號其跡、如此之義、以外所行也、宜爲可被加御成敗注進如件、

明應八年五月日　　　官掌紀末重上

已上　　　公文史生宗岡行賢上

〔令義解神祇二〕凡天神地祇者、神祇官皆依常典祭之、○中略其祈年月次祭者、百官集神祇官、中臣宣祝詞、○註略忌部班幣帛、（謂班猶頒也、其中臣忌部者、當司及諸司中取用之、）

〔令義解神祇二〕凡六月十二月晦日大祓（謂祓者、解除不祥也、）者、中臣上御祓麻、○中略百官男女聚集祓所、中臣宣祓詞、卜部爲解除、

〔大嘗會儀式具釈一〕中臣ハ神祇官ノ伴部ニテ、祝詞ヲ讀ミ、其外ノ神事ニモ關カリ勤ムル者ナリ、必ズ中臣氏ナル故ニ、今ニテハ其職ノ沙汰ニ及バズ、只中臣氏ノ人ナレバ、中臣ノ役ニ充用ユルナリ、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀（六月十二月十一日、月次祭儀亦同、）前祭十五日、（月次五日、）充忌部八人、鍛工共作（アヒツクリ）木工各二人、令造供神調度、但釵者釵編氏造之、神祇官忌部官一人監造、若官内無忌部官人、及神部之中、忌部不足八人者、兼取諸司氏人充之、○中略其日卯四剋、（月次祭六月卯一剋、十二月辰一剋、）所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、○中略中臣進就庭座、讀祝詞、毎一段了、祝部稱唯、讀訖中臣退出、○中略忌部二人率神部二人、進夾案立、監頒幣事、史以次唱御巫及諸神祝、各稱唯、神部執幣頒之、

〔神祇官年中行事二月〕四日、祈年祭也、諸社幣料請奏、長官以下官人等加署、○中略奉行忌部書進之、

〔延喜式一四時祭〕二月祭

鳴雷神祭一座〇中略

右差中臣一人供祭

〔延喜式一四時祭〕六月祭

月次祭〇中略

前祭五日、充忌部九人、木工一人、令造供神調度、

〔延喜式一四時祭〕六月祭

大殿祭〇中略

右神今食明日平旦、以筥四合置一合盛玉、一合盛切木綿、一合盛米、一合盛酒、八足案二脚、令神部四人執、著木綿鬘襷、中臣忌部官人宮主史生神部等左右前驅、御巫列於案後、至延政門、置案於門前、大舍人叫門、宮內省官人退出召中臣稱唯、卽兩官人著木綿鬘忌部更加木綿襷立案前、直進御殿、先是御巫等自宜陽門入候於內裏、共入至殿東簀子敷上、卽御巫等各取筥、中臣忌部御巫等以次入御殿、忌部取玉、懸殿四角、御巫等散米酒切木綿殿內四角、退出、中臣侍御殿南、忌部向巽、微聲申祝詞、畢次至湯殿、懸玉四角、次懸厠殿四角、次懸御厨子所四角、次懸紫宸殿四角、御巫等以次散米酒如初、御巫一人、進承從明門、散米酒、陰明門退出、次引宮主忌部至御炊殿、懸木綿散米酒如初、

〔萬一記〕正安三年九月十一日、參內、今日被發遣伊勢幣之間也、神祇權大副忌部親顯息女、昨日他界、仍親顯父子三人輕服、今一人觸穢、此外京都無忌部氏之由、伯卿申之、因玆種々有沙汰、可被延引之由有沙汰、爰忌部氏沙汰出之由親顯申之、仍所被發遣也、

〔延喜式二四時祭〕十二月祭

鎭御魂齋戶祭〇中宮准此中略

右於此官（○神祇官）齋院、中臣行事、

〔延喜式（七踐祚大嘗祭）〕凡造大嘗宮者、前祭七日、神祇官中臣忌部二官人、依次立率悠紀國司及雜色人等爲一列、亦中臣忌部相別、率主基國司以下准上、（○中略）五日之內造畢、卽中臣忌部率御巫等祭殿及門、

〔延喜式（七踐祚大嘗祭）〕凡大祓使發訖、卽差遣供幣帛於天神地祇使、大神宮諸王五位以上一人、中臣一人、忌部一人、卜部一人、五畿內一人、七道各一人、（中臣忌部兩氏供之）

〔延喜式（七踐祚大嘗祭）〕阿波國忌部所織麁妙服、（神語所謂阿良多倍是也）預於神祇官設備、（○中略）次忌部官一人、入奠麗服案於同座上、訖共引出、（○中略）大臣若大中納言一人、率中臣忌部、（中臣立左、忌部立右、）御巫猨女左右前行、（大臣立中央、中臣忌部列門外路左右、）宸儀始出、（○中略）辰日、（○中略）神祇官中臣忌部引御巫等、鎭祭大嘗宮殿、（○中略）神祇官中臣、執賢木副笏入自南門就版位、跪奏天神之壽詞、忌部入奏神璽之鏡劒、訖退出、（若有雨濕、卽立奏之、）

〔江家次第（十四踐祚）〕建禮門行幸

御受禪之後、以可爲卽位之由、被申伊勢大神宮也、近則天慶、永觀、寬弘、長元、延久等例也、治暦依無建禮門、幸神祇官被申、諒闇之年幷幼主之時無此行幸、大臣於大極殿立之、但長和、應德、攝政參小安殿給幣、公卿等多相從、但退出時無出立、（○中略）

次上﨟次將昇傳取御劒置輦中、（先開輦戸）

內侍渡劒之後居璽、又如此、（齋部左手所取、卜部又以左右手取之、）

卜部復列、齋部膝行、取內宮幣退下、右廻復列、天皇宣、中臣參來、中臣進跪板敷上、天皇宣、能申（天）進（禮）、

中臣微音稱唯退下、卽齋部爲先、

次卜部中臣退出

〔權記（裏書）〕建禮門行幸記

寛弘八年八月廿七日戊辰、此日天皇(○三條)幸建禮門、發遣使者、告來十月十六日可卽位由於伊勢大神宮、(○中略)天皇召舍人二音、大舍人等於南幄南稱唯、(須到幔門外稱唯失也)少納言守隆經公卿幄南庭參入幔內、(○註略)就版跪候、勅曰、中臣忌部召セ、守隆稱唯(此間作法如常)退出、經南幄之南到東外幔門外、西面而立召之、守隆未到此處之前、神祇權大副大中臣千枝、率忌部後取等出艮方斜經南幄南參入、就版跪候、(○中略)此間天皇召忌部、忌部稱唯參進給御幣、後取者進取之、忌部重進又給之、相共就版、(內外宮料也、仍二度給之例也、)次亦召中臣、中臣參進奉勅退出、(爲先御幣)

〔續日本紀 十聖武〕天平元年四月癸亥、勅每年割取伊勢神調絁三百匹、賜任神祇官中臣朝臣等、

〔續日本紀 十二聖武〕天平七年七月庚辰、依忌部宿禰虫名烏麻呂等訴申、檢時々記、聽差忌部等爲幣帛使、

〔日本後紀 十四平城〕大同元年八月庚午、先是中臣忌部兩氏、各有相訴、中臣氏云、忌部者、本造幣帛、不申祝詞、然則不可以忌部氏爲幣帛使、忌部氏云、奉幣祈禱、是忌部之職也、然則以忌部氏爲幣帛使、以中臣氏可預祓使、彼此相論、各有所據、是日勅命、據日本書紀、天照大神閉天磐戶之時、中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、下枝懸青和幣白和幣、相與致祈禱者、然則至祈禱事、中臣忌部並可相預、又神祇令云、其祈年月次祭者、中臣宣祝詞、忌部班幣帛、踐祚之日、中臣奏天神壽詞、忌部上神璽鏡劒、六月十二月晦日大祓者、中臣上御祓麻、東西文部上祓刀、讀祓詞訖、中臣宣祓詞、常祀之外、須向諸社供幣帛者、皆取五位以上卜食者充之、宜常祀之外、奉幣之使、取用兩氏、必當相半、自餘之事專依令條、

〔西宮記 九月〕十一日例幣

吏部記、天慶五年十一月五日、行幸八省、有臨時奉幣事云々、大納言師輔語次陳云々、貞觀年中、無中臣時、忌部頒幣而退、太政大臣忠仁公(○藤原良房)聞之、自中途召還幣使、以諸司官人中臣氏者差使、因忌部只掌持幣、非可執中臣職、

中臣女

〔宮主秘事口傳〕九月十一日例幣○中略
齋部官人於堂上不下立、令授內宮御幣事、臨期問答、時剋押移之間、嘉曆二年經奏聞下賜勅裁畢、同三年九月、伊勢公卿勅使發遣行幸日、齋部憲親不下立、自堂上授內宮御幣之間、兼豐以行事左中辨光顯朝臣經奏聞、令責下畢、爲後鑒書加之、

官幣使齋部官人間事、國史記錄文分明之上者、向後下立壇上可授幣帛之由、嚴密被召仰畢、此上者不可有子細之旨、被仰下候也、仍執達如件、

嘉曆二年九月三日　　左中將俊氏

下野權守殿

建武元年九月十一日、例幣行幸之時、權大副齋部親重宿禰不下立於堂上令授內宮御幣之間、關白殿下○後圓光院殿藤原冬教御祇候、有御執奏、被尋問祭主蔭直卿、被責下訖、後代之龜鏡也、殿下御教書案可書加之

〔西宮記臨時一〕諸宣旨
節折中臣女氏擧、應和元六廿、內侍宣仰神祇官、

〔江家次第六月七〕晦日節折十二月准之
被定中臣女替事
應和元年六月廿九日御記云、藏人守仁奏、神祇官申、以大中臣清子令供奉御節折、藏人申同清子死闕文、仰以內侍宣令下、先例內侍仰神祇官、而今日不候、仍藏人以其宣傳仰、

〔神祇官年中行事臨時〕一齋宮卜定
中臣女謂節折中臣氏長者沙汰進、

〔儀式五〕二季晦日御贖儀六月十二月
中臣捧御麻進就版、勅曰、參來、稱唯就階下、中臣女簡氏女堪事者奏定於殿上轉取供奉、訖授中臣、還本處、即授

卜部一人、令向祓所、輔更入奏曰、宮内省申久、御贖物進止、神祇官姓名、大和河内乃忌部、四國乃卜部等率天候止申、退出喚中臣、稱唯、東文部捧横刀入就版、勅曰、參來、稱唯、就階下、轉授中臣女、取奉御畢退出、次西文部進退如前儀、次中臣率宮主卜部執荒世者、就階下、置於席上、(掃部寮敷席於階下、縫殿置荒世御服於席上、)宮主披荒世授中臣、中臣取授中臣女、卽執量御體總五度、訖宮主取祝、訖授後取卜部、宮主取坩授中臣、中臣轉授中臣女、執奉御、訖退授中臣、轉授宮主、宮主取祝、訖授後取卜部、荒世事畢退出、

〔延喜式一四時祭〕供奉大祓御贖人等祿

中臣官一人絹四疋、中臣女絹四疋、(中宮准此、)東西文部二人各絹二疋、東宮中臣幷女各一人、並給坊物、

〔西宮記六月〕御贖物事

縫殿官人昇豆々志余呂比御服、付女官、女官授中臣女、中臣女供之、(或云、内侍傳供云々、)天皇著給氣息、返給、中臣進御麻、付中臣女供之、天皇自取摩御體返給、東西文人一々進劔、(付中臣女供、木工造、)天皇著給御氣返給、中臣宮主著座、神祇官及荒夜卜部等、進置竹夜於庭中席上、中臣官人、卜部等解了、授中臣女、女取供之、天皇起與女量御體、○註略竹九枝、中臣女毎度取示神官、次卜部捧壺授中臣官人、官人付中臣女供之、天皇放御口氣於壺、(三度、)中臣女傳神官、宮主密祝了、

〔中右記〕天仁元年十月廿一日丁酉、大嘗會御禊也、○中略於其東下御座、有御禊、此間右大將以下諸卿著祓座、(北上東面、)次官左中辨長忠以下判官主典著後座、予在公卿座、(座前兼神祇官置祓物、失也、人々著座之後可居也、)御巫子四人供御祓物、(四折敷、從巽角間供之、)中臣女(折節也、)傳獻、次神祇少副輔清捧御麻、返給授宮主、宮主取御麻著座(巽角庭敷膝突、)解除、

〔萬一記〕正安三年十月廿八日甲午、今日大嘗會御禊也、○中略神祇官捧御撫物四坏、御巫子四人出幄南、於東一間供之、節折命婦傳供之、次關白祓物、○註略次居公卿祓物、次宮主捧大麻於東二間砌、神祇官取之傳中臣女、○註略次主上懸御氣御返給、次中臣女返賜神祇官、次神祇官賜宮主、次宮主著膝突、

忌部代

奉仕御禊、

〔仲資王記〕文治五年六月廿七日乙卯、月次祭神今食祭、又被副臨時御祈幣云々、中臣者、即祭主能隆也、王兼俊、予所沙汰立也、忌部友平、卜部兼貞代官云々、

〔大嘗會儀式具釋六〕忌部ハ、中臣ト同ジク、神祇官ノ伴部ニテ、幣帛ヲ班チ、其外ノ神事ニモ關カリ勤ムル者ナリ、必ズ齋部氏ナルガ故ニ、中古ニ至リテハ、其職ノ沙汰ニ及バズ、只齋部氏ノ人ナレバ、忌部ノ役ニ充用ユ、今ノ世ハ用ユベキ齋部氏ナキガ故ニ、他氏ノ人ヲ以テ代トス、當日○櫻町天皇元文三年十一月大嘗會　忌部代トシテ出仕セルハ、宣條伏原右兵衛權佐　神祇大祐紀春淸行事官和泉守兩人ナリ、

〔御昇壇記〕一寶永七年庚寅十一月七日辰刻、御即位○中御門由奉幣發遣、○中略

神祇官代

中臣　景忠卿　使王　兼通王代栗津治部丞　中原康忠

忌部　親重宿禰代　珍弘眞繼刑部少輔

神部

〔令集解職員二〕神祇官

神部三十人朱云、此令云、神部與衛禁律云神部各別者、讀說、於此司尤是名負色也、故置卜部上也、案衛禁律、神部者、即祝也、異於此條神部也、監神者、神主也、此條無其色、臨時處分耳者、未知此令神部職掌何事、讀云、問神部不注職掌者、爲何行事、答、官內雜驅使耳、不見行事、問神部本何色人、答、神祇令、忌部班幣帛者、所謂忌部是神部耳、但定氏耳歟、不見明文也、問、選敍令云、散位身材云々、軍防令云、內六位以下八位以上嫡子云々、令補使部之文、已在令內、未知神部是何色人、答、不見明文、但依神祇令、中臣宣祝詞、忌部班幣、然則以中臣等補之、問、神祇令義解云、中臣忌部取用當司及諸司中者、然則不必神部、答、雖他人司人、猶取用、因茲言之、取用神部於事無妨、問神部職掌、答、司內驅使耳、

〔大嘗會儀式具釋二〕神部ハ、神祇官ノ伴部ニテ、官中ノ雜事ニ供ズル者、昔ハ中臣忌部等モ神部ノ中ニ約シテ、職員令ノ如キモ、神部ハト部ヨリ上ニアリ、近世吉田家ノ昇殿セシヨリ、何トナクト部ハ卑シカラヌ者ニ成リ神部ハ廢絕シテ、臨時ニ取充ル故、無下ニ卑シキ者ニ成下リヌ、今度○櫻町天皇元文三年十一月大嘗會　悠紀方ノ神部ニハ、賀茂社ノ刀禰仁兵衛ト云者ヲ以テ之ニ充ツ、○中略主基方ノ

神部ニハ、賀茂ノ社ノ刀禰孫左衛門ト云者ヲ以テ之ニ充ツ、

〔延喜式 二 四時祭〕鎭魂祭○中略右其日、御巫於官○神祇齋院舂稻、簸以麁筥、炊以韓竈、訖卽盛蘭笥、納橫居案、神部二人執向祭所供之、

官人以下裝束料○中略神祇官人已下神部已上著靑摺衣官人備受頒給率御巫等入就廳上座、○中略神部於堂上催拍手、

〔延喜式 三 臨時祭〕八十島神祭○中略中宮准之右八十島祭御巫、生島巫、幷史一人、御琴彈一人、神部二人、○中略赴難波津祭之、

〔延喜式 三 臨時祭〕遣蕃國使時祭使還之日准此○中略右擬發使者、總祭天神地祇於郊野、○中略神祇官率神部等皆著明衣行祭事、大使自陳祝詞、神部奠幣、訖大使已下各供私幣、神部執奠神座、

〔延喜式 三 臨時祭〕凡石上社、門鎰一勾、匙二口納官庫、臨祭在前遣官人神部卜部各一人、開門掃除供祭、

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年九月丁未、遣正親正從五位下萩田王、少主鈴中臣朝臣竹成、神部鴨田連島人、奉幣帛於伊勢大神宮、

〔古語拾遺〕凡造大幣者、亦須依神代之職、齋部之官、率供作諸氏、准例造備、然則神祇官神部可有中臣、齋部、猨女、鏡作、玉作、盾作、神服、倭文、麻續等氏、而今唯有中臣齋部等二三氏、自餘諸氏、不預考選、神裔亡散、其葉將絕、所遺十也、

〔伯家部類〕神祇官　差進　御卽位

左右京職使　正六位上齋部宿禰重口　神部二人

五畿內使　正六位上齋部宿禰重延　神部二人

宮主

東海道使 從五位下齋部宿禰□□ 神部二人
東山道使 正六位上大中臣朝臣宣重 神部二人
北陸道使 正六位上齋部宿禰親有
山陰道使 正六位上大中臣朝臣爲重 神部二人
山陽道使 從五位下齋部宿禰親經 神部二人
南海道使 正六位上大中臣朝臣□□ 神部二人
西海道使 正六位上大中臣朝臣友宗 神部二人
右依官宣所差進如件
正安三年八月 日 正六位上少史齋部宿禰景親
從三位行伯 已上

〔伊呂波字類抄見官職〕宮主神祇官、ミヤシ、在

〔倭訓栞中編二十五〕みやじ 宮主のよみなり、取卜部堪事者任之、官職秘抄に、神祇官重職無過宮主と見ゆ、神代紀には、みやぬしとよめり、されば、じは、ぬしの略なり、女宮主といふもあり、大宮主も史に見ゆ、

〔日本書紀纂疏五〕宮主今在此名、掌宮內之神事也、

〔增益辨卜抄俗解上〕第二吉田卜部神祇管領長上ト稱スル誤リノ事
按ニ神祇官ニテハ、度々龜卜ヲ用テ吉凶ヲ定メ、祭ノ日取、又ハ國郡卜定ノ類、其外御惱ノ時、何ノ神ノ祟ゾト占ハルヽ事多キ故ニ、卜方ニ長ジタル者二十人ヅヽ、神祇官ニ侍ル事也、伊豆國ヨリ五人、壹岐ヨリ五人、對馬ヨリ十人、都合二十人也、其中ニテ、官中ノ神事ヲ掌ル者ヲ宮主ト云職ニ任ズ、但シ是ハ二十人ノ外也、

〔延喜式臨時祭三〕凡宮主取卜部堪事者任之、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

御巫〇中天皇宮等宮主、(自本所仰神祇官、以官解申上、依上宣補之、次大宮主、或有奉勅補之)

〔西宮記臨時二〕祭主幷御巫猿女等事

奉勅旨給官符於神祇官(宮主藏人召官人仰下、仍以解文申文上補云々、)

〔官職秘抄上〕神祇官

副〇中略卜部歷宮主神祇官重職者無過宮主、仍往年伊岐氏任之、(長久則政後絶畢)

〔西宮記三月〕三日御燈

三日、大裏潔齋、宮主奉御卜、申不淨由不被奉御燈、

〔神祇官年中行事三月〕一日、旬日也、其儀如常、今日內幷諸宮宮主等奉御燈奏、

三日、御燈御祓也、宮主等參本所、御祓勤之、

〔禁秘御抄下〕御物忌

寬治四年三月御燈、當御物忌暫撤晝御座、〇中略付御物忌宮主在東庭砌下、

〔延喜式四時祭一〕六月祭

月次祭〇中略

祭畢卽中臣官一人、率宮主及卜部等向宮內省、卜定供奉神今食之小齋人、〇中略

忌火庭火祭〇中略

右大殿祭畢、宮主於內膳司行事、

〔朝野群載六神祇官〕奏龜卜　御體御卜

神祇官謹奏

天皇我御體乃御卜爾、率卜部等天太兆爾卜供奉留狀奏、〇中略
以前太兆爾卜供奉留御體御卜如件、謹以申聞奏、

承曆四年六月十日

宮主正六位上行權少祐卜部宿禰兼宗

中臣從六位下行大祐大中臣朝臣惟維

〔業資王記〕正治元年六月九日己巳、御體御卜奏、予加署了、今度三道卜合也、五畿東山南海云々、三道卜合之時、二道長官進止也、然而今度宮主二道所望也、

〔宮主秘事口傳〕八月四日、北野臨時祭、

內宮主所役下神祇大副兼豐在判

先內藏寮史生渡大麻於宮主、　次內藏寮南庭立案、立懸御幣、　次案下敷圓座、爲宮主座、　次去四五尺敷圓座、爲使座、　次出御之後、陪膳役奏獻御贖物、先獻御笏歟、　次陪膳頭藏人進來、于時宮主懷中笏、持大麻授陪膳、　次陪膳獻主上、被懸御氣被返下、此間宮主正笏、不見外也、　次陪膳返給大麻、經本路返授、　次宮主又懷中笏乍持大麻、於案下膝突于圓座、讀中臣祓、

次讀表白、〇中略　次使著座之後、宮主退出、宮主退出之後、使移著宮主座、　大麻返渡內藏寮、

〔西宮記九月〕三日御燈

延長八年九月三日云々、不被奉御燈、宮主奉仕解除、

〔宮主秘事口傳〕十一月中寅日、鎭魂祭、

宮主取內御方御玉結糸、置上卿座前、　次歸著本座、　次中臣官人進寄十結令結、于時神琴師引琴計一二三四五六七八九十卜、十結也、中臣歸著本座也、近年中臣官人不參之間、宮主勤此役、

〔延喜式二四時祭〕忌火炊殿祭〇中略

右新嘗祭時、先新造炊殿、依件鎭祭、宮主行事、其舊殿者、壞却給宮主、

〔康富記〕應永廿九年十一月廿日癸卯、新嘗祭也、〇中略　宮主卜部兼興內侍等參官云々、毎事如例歟、

〔玉葉〕建暦二年十二月十七日、賀茂臨時祭也、○中略次有御禊事、○中略次供御贖物、頭中將通方朝臣於小板敷(此所、藏人惟長在)取之、(藏人惟長給之)給上戸持參、五位藏人宗宣於同所取第二折敷高坏相從、(出納傳之)入御座西間供御座前了、頭退候年中行事障子下、次宮主入自舊中門、新中門廊西緣(長橋)候、南妻付藏人頭通方朝臣、取之經初道參進獻之、主上(○順德)乍返持、一吻一撫之外退下給宮主、次宮主取之著庭中座、(西面)○中略次宮主奉仕御禊、了退出、

〔延喜式二四時祭〕每月朔日忌火庭火祭(中宮東宮亦准此、但忌火不祭、)○中略

右宮主於內膳司行事、但東宮於主膳監行之、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡祓穗田者、國別六段、○中略八月上旬申官、差宮主一人、卜部三人發遣、南國各二人、其一人號稻實卜部、一人號禰宜卜部、到國各於齋郡大祓、○註略訖卜定田及齋場雜色人等、

〔宮主祕事口傳〕河原御禊役者、宮主定役也、此外行事所始、荒見河祓、同日齋場所點地、大嘗宮點地、此三ヶ度者可限宮主也、拔穗使二人三人、幷中臣官人參集所被行也、宮主者年少之間、不參之例繁多也、

〔文德實錄二〕嘉祥三年九月壬午、遣宮主正六位下占部雄貞、神琴師正六位上菅生朝臣末繼、典侍正五位下藤原朝臣泉子、御巫無位榎本連淨子等、向攝津國八十嶋、

〔左經記〕寬仁元年十月廿日乙酉、源大納言召陰陽寮令勘可被行八十島祭日時、○中略又陰陽寮神祇官官人等、皇太后宮春宮等屬以下宮主御巫等、可下向之由可相催、　十二月十二日丙子、今日典侍美子、藏人章任等、爲八十島祭勅使、令持御衣下向、○中略又神祇官幷宮主率御巫等下向、皇太后宮幷東宮屬舍人、幷宮主等、同率御巫等下向、

〔宮主祕事口傳〕一諸社行幸之時、宮主每度參向社頭勤御祓也、其儀一事以上、如八幡賀茂臨時祭也、

一主上者、不受御重輕服給也、但每度被擇日次、被行御錫紵之御祓、其時宮主參勤、內藏寮史生先立案於庭上也、其上置御裝束、御吉方者陰陽寮勘申、

神祇大副兼豐花押

〔宮主秘事口傳〕禁裏宮主所役近年次第略

先立坊日被補宮主、踐祚日遷補內宮主也、

件夜宮主參候、奉行職事被召仰可遷補之由、或又後日被下御敎書、兩樣也、

踐祚夜御井竈神祭事、宮主兼日仰付本官史生也、史生申沙汰之云々、御井竈神令祭、

次御炊御卜宮主行之、但近代是等事無沙汰也、可引勘記錄也、

踐祚日、宮主參候、奉仕御炊御卜事、

堀川院應德三年十一月廿六日、御讓位、又以神祇大副卜部兼國可爲宮主被仰下、予召仰、本官卽於內膳令卜御炊事了、

〔宮主秘事口傳〕抑內宮主者、依爲朝家之重職、父ヲモ兄ヲモ上首ヲモ超越シテ、勤悠紀大使也、氏長者勤主基大使、第二官人者勤悠紀小使、第三者勤主基小使也、但此中第二三非器用、家業非分明者、雖爲下﨟可勤仕也、大祀者朝家之重事、當家之大事也、近則文和三年大祀主基小使事、前下總守兼繼宿禰、雖相當其仁、龜卜已中絕之間、豐兼猶子兼繁勤仕畢、爲藏人左少辨親顯奉行、被申合殿下、予時二條殿被弃捐畢、雖向後不傳家業者、不可勤仕此役也、

兼豐記之花押

〔宮主秘事口傳〕兼文宿禰記

龜山院正元元年十一月十七日乙酉、今朝宮主事申頭卿資季状云、御讓位之時、被仰宮主事、直踐祚者宮主依被新補、召神祇官差文、被下官符候、自坊踐祚者、以坊宮主依被遷補、當日或召其仁仰之、或以御敎書仰之、代々之間、時儀不同候歟、但近例貞永度、被召仰之由所見候、寬元度爲按察卿予時頭辨奉行、被

選補兼藤坊宮主之狀被仰下親父兼直宿禰、仰畢、今度就寬元之佳例、以坊宮主兼憲被選補之由、可被下御教書於兼文之旨存思給候、他事猶可參入言上候、恐惶謹言、

十一月七日　兼文

廿日戊子、今朝向頭卿亭、宮主事、御竈神間事、問答之、貫主被示云、宮主事、任寬元例、可被獻御教書於御邊之處、當時故障有憚之由、一日於御前沙汰之時、御氣色候、然者猶可仰本官歟ナド人々被申之、凡寬元度仰親父兼直宿禰事モ其理不叶、何樣可候哉、　予答云、被仰本官之條者不可然候、所詮今度兼文非氏長、隨故障中有憚之由御氣色候之上者、直可被仰本人兼憲事也、此條且叶本儀事候、貫主被示云、誠被仰本人條可然候、得此意可申沙汰也、　廿六日甲午、今朝頭宮內卿消息到來云々、

宮主事、猶任本儀可召仰之由被仰下候、可令參候歟、但幼齡難叶者、令參候給之體にてこそ候はめ、不可有子細之事候、謹言、

十一月廿六日　資平

神祇權大副殿

宮主事、可被召仰之由謹奉了、幼齡之間不堪出仕候、參仕之儀可得御意之由、殊恐悅候、如此被仰下候、只同事候、猶々畏入候、恐惶謹言、

兼文

〔宮主秘事口傳〕今上〈○光明〉貞和四年十月廿七日庚寅、今日有御讓位事、　十一月一日甲午、今日宮主宣下事、尋申頭卿也、口宣案被送之、

貞和四年十月廿七日　宣旨

從五位下卜部兼雄

宜令補宮主職

藏人頭治部卿兼春宮亮藤原長顯奉

〔續日本紀 三文武〕慶雲元年二月癸亥、神祇官大宮主入長上例、

〔續日本紀 八元正〕養老三年六月丙子、令神祇官宮主、○中略始把笏焉、

〔續日本紀 十二聖武〕天平九年八月甲寅、詔曰、○中略給大宮主御巫、坐摩御巫、生嶋御巫、及諸神祝部等爵、

〔文德實錄 八〕齊衡三年九月庚戌、宮主外從五位下卜部雄貞、○中略賜姓占部宿禰、

〔文德實錄 十〕天安二年四月辛丑、是日宮主外從五位下占部宿禰雄貞卒、雄貞者龜筴之倫也、兄弟尤長此術、帝在東宮時、爲宮主、踐祚之日、爲大宮主、齊衡二年正月叙外從五位下、雄貞本姓卜部、齊衡三年改姓占部宿禰、性嗜飮酒、遂沈湎卒、時年卌八、

〔三代實錄 七淸和〕貞觀五年九月七日丙申、壹岐嶋石田郡人宮主外從五位下卜部是雄、神祇權少史正七位上卜部業孝等、賜姓伊伎宿禰、其先出自雷大臣命也、

〔三代實錄 二十一淸和〕貞觀十四年四月廿四日癸亥、宮主從五位下兼行丹波權掾伊伎宿禰是雄卒、是雄者壹岐島人也、本姓卜部、改爲伊岐、始祖忍見足尼命、始自神代、供龜卜事、厥後子孫、傳習祖業、備於卜部、是雄卜數之道、尤究其要、日者之中、可謂獨歩、嘉祥三年爲東宮宮主、皇太子卽位之後、轉爲宮主、貞觀五年授外從五位下、十一年叙從五位下、拜丹波權掾、宮主如故、卒時年五十四、

〔類聚符宣抄 一〕補宮主事

太政官符式部省 外印

內御宮主正六位上直宿禰常純

右人轉任大史、仍如舊例兼補、

中宮宮主正六位上卜部宿禰兼延

右人轉任權少史、仍如舊例兼補、

春宮宮主正六位上直宿禰氏茂

右人轉任少史、仍如舊例兼補、

以前得神祇官去九月五日解偁、件人等任先例可被兼補之狀、言上如件者、從二位行大納言兼中宮大夫源朝臣高明宣、依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

右少辨位　　左大史

應和三年十一月十日

〔類聚符宣抄　一〕補宮主事

太政官符式部省外印

應補御幷春宮宮主等事

正六位上行龜卜長上直宿禰是也

右人補任御宮主職

正六位上散位直宿禰是盛

右人補任春宮坊宮主職

以前得神祇官去年七月十六日解偁、件宮主等、准先例可被補任之狀、言上如件、謹請官裁者、正三位兼行左衛門督源朝臣重光宣、依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

位左中辨　　位左大史

永延元年五月十七日

〔爲房卿記〕寬治元年八月二十一日庚子、今日有荒見河祓、宮主兼國、去三月卒去之後、未被補其替、卜部氏人兼良、兼元男幷兼正男等召覽殿下、以兼良可補之由被仰下、予召神祇少史政元、可進擧狀之由仰下、件擧狀付官可成上宣官符者、治曆四年奉正不仕之替、以兼國被補之時、右大臣奉宣旨、仰辨口宣云々、可尋、

〔大嘗會儀式具釋三〕宮主ハ、神祇官ノ流外ノ職ニシテ、長上ノ官ノ例ニ準ズル者ナリ今ハ常ニハ宮主ナシ、御禊ノ當日ニ至リテ、奉行ノ職事ヲ以テ、宮主タルベキ由ヲ其人ニ宣下セラル、是例ナリ、今度〇櫻町天皇元文三年十一月大嘗會ハ神祇權少副兼成吉田淡路守ヲ以テ之ニ補セラル、兼成初ノ名ハ兼林、貞享ノ御禊ノ時モ、宮主ニ補セラレテ之ヲ勤ム、今度モ更ニ補セラル、重熙朝臣鹽田中務頭ヲ以、當日宣下セラル、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應以官田給三宮口主戸座等月料事

山城國九町四段百十八步

御宮〇宮恐衍宮主一人、戸座一人、合二人料、三町百卌九步、

太皇太后宮宮主一人、戸座一人、合二人料、三町百卌九步、

皇太后宮宮主一人、戸座一人、合二人料、三町三段百八十步、

右得神祇官解偁、宮主等解偁、件月料米、准諸司要劇、以官田被充給者、官依解狀、謹請官裁者、大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣多緒宣、奉勅依請、

元慶七年十二月九日

〔延喜式三臨時祭〕凡宮主、〇中略其食人別日黑米二升、鹽二勺、妻別日米一升五合、鹽一勺五撮、

〔延喜式三十五大炊〕中宮雜給、〇中略候同所宮主一人、日米八合、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應以官田給中宮職宮主并戸座等月料事

山城國三町七段二百八十五步

右得神祇官解偁、宮主等解偁、件月料、准三宮例、以官田被充給者、官依解狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉

勅依請、

寛平三年八月三日

〔小右記〕天元五年三月十三日乙巳、參中宮、今日召著諸衞佐等於侍所給祿、〇中略又宮主裝束、史官掌史生等同給、

寛弘九年〇長和元年八月廿七日壬戌、雅通返事云、拔穗使〇三條大嘗會則政爲政等事、申左府、命云、則政皇后宮〇三條后藤原娍子宮主、爲政中宮〇三條中宮藤原妍子宮主、依次第可遣中宮宮主爲政者、答左右只可隨彼命之由了、但破初定、遣爲政如何、不可依宮主次第歟、頗奇而已、

宮主代

〔業資王記〕承元五年〇建暦元年正月九日癸巳、來廿二日、女御殿〇順德后藤原立子可有立后、宮主事所望人有哉之由、爲宮内大輔兼隆奉行被尋也、相尋所望人、任先例可差進之由申了、　十七日辛丑、立后宮主事、以壹岐則貞可差進之由下知了、

〔夕拜備急至要抄下〕一立太子

以卜部兼資宜補同宮主、

〔類聚符宣抄一〕補宮主事

龜卜長上卜部良經

右被中納言藤原朝臣清貫宣偁、宮主卜部茂蔭、遭弟喪不能奉仕御卜所、宜以件良經依神祇官請令奉仕其代者、

延喜十六年六月二日　大外記伴宿禰文永奉

〔類聚符宣抄一〕補宮主事

從二位行大納言兼民部卿藤原朝臣在衡宣、宮主神祇大史外從五位下直宿禰常純遭喪之間、以神祇少史卜部兼延宜令供奉者、

康保四年三月八日　　　　　　　　權少外記坂上望城奉

〔爲房卿記〕應德四年（○寛治元年）四月十九日庚子、今日吉田祭也、又被立宇佐使、（○中略）右少將有家朝臣奉仕御贖物、（余役供）次神祇史忌部儀時（宮主兼問、去三月卒去、其替未補、又氏人等皆服身、仍今日使奉仕此役、）獻御麻、

〔顯廣王記〕安元三年（○治承元年）十一月十九日甲寅、鎭魂祭、宮主代致貞、依有宮主家犬死穢、上卿右大辨園韓神祭藤中納言資長、廿日乙卯、新嘗會、宮主代權大祐兼貞也、

〔宮主秘事口傳〕大嘗會年十月（被撰吉日）河原御禊宮主所役事

文保二年十月廿七日甲寅、今日御禊行幸也、（○中略）祭主幷宮主代兼高宿禰（宮主兼貫幼少之間、所相語也、）列立御禊幄巽角邊、

〔康富記〕應永廿九年十一月十九日壬寅、鎭魂祭也、參議藤光卿、右少辨俊國、召使行繼、（宮主代兼行）内侍等有參行云々、

嘉吉三年六月廿九日、大祓也、（○中略）召使秀國爲神祇官之宮主代歟、

文安元年十一月十五日庚寅、鎭魂祭也、（○中略）神祇官宮主代召使秀國、内侍等參行、

〔宮主秘事口傳〕九月十一日例幣（號神嘗祭也）

本宮（○伊勢神宮）事、中古以降、宮主不參向、以當國住人齋宮宮主之後胤爲代官也、

〔大嘗會便蒙下〕宮主は、今の宮主吉田神祇權少副兼成是を勤むべきなれ共、今日（○元文三年十一月）はあまりに御側に近き勤なれば、地下の人を用がたきに依て、吉田神祇權大副兼雄卿、宮主代として是を勤めらる、

龜卜長上
龜卜得業生

〔令集解二職員〕神祇官

寶龜六年五月十九日格云、勅、卜長上、右簡定卜部等中、推卜尤長二人、以任長上、永爲恒例也、（○又見享祿本類聚三代格）

〔西宮記臨時二〕龜卜長上事以神祇官解申官補、

〔類聚符宣抄一〕補龜卜長上事

太政官符式部省外

應補龜卜長上正六位上卜部宿禰中興事

右得神祇官去七月十三日解偁、龜卜長上直全連、轉任春宮宮主之替、以件中興、依例請補之狀、申送如件者、大納言正三位兼行右近衞大將藤原朝臣伊尹宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少辨　　左少史

安和二年九月二日

〔中右記〕大治五年十月十六日乙酉、爲行軒廊御卜、未時許參內、○中略臨申時、神祇大副兼政申送云、咳病無術、不能參仕、仍所進男龜卜得業生政長也、仍行軒廊御卜、神祇官大中臣定長、卜部政長、陰陽寮頭家榮、助宗兼參仕、

〔令義解一職員〕神祇官

卜部廿人

〔令集解二職員〕朱云、卜部廿人、掌卜兆耳、此中可有長上也、

〔倭訓栞前編四字〕うらべ　卜部也、もと職掌をいふ、後世氏ともなれり、壹岐對馬伊豆等に其傳ありしは臨時祭式に見えて、こを祝詞式に、四方國の卜部といへり、一說に、右三國に山城をそへたれば、四ツの國なるべし、よもの國にはあらじといへり、

〔延喜式三臨時祭〕凡宮主取卜部堪事者任之、其卜部取三國卜術優長者、伊豆五人、壹岐五人、對馬十人、若取在都之人者、自非卜術絕群、不得輒充、其食人別日黑米二升、鹽二勺、妻別日米一升五合、鹽一勺五撮、

〔延喜式一四時祭〕霹靂神祭三座○中略

右官預前祭、申弁官請備、令卜部一人吉日祭之、十一月亦同、

〔令義解 神祇 二〕凡六月十二月晦日大祓、〇中略百官男女聚集祓所、中臣宣祓詞、卜部爲解除、

〔延喜式 四時祭 一〕御贖

右晦日、卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、〇中略進候延政門、大舍人叫門、宮內輔入奏、（其詞見宮內式）退出召中臣、稱唯、率文部四國卜部入、（宮主在此中）候於宜陽殿南頭、

〔延喜式 踐祚大嘗祭 七〕凡大祓使發訖、卽差遣供幣帛於天神地祇使、大神宮諸王五位以上一人、中臣一人、忌部一人、卜部一人、五畿內一人、七道各一人、（中臣忌部兩氏供之）

凡拔穗田者、國別六段、〇註略

八月上旬申官、差宮主一人、卜部三人發遣、兩國各二人、其一人號稻實卜部、一人號禰宜卜部、到國各於齋郡大祓、〇註略訖卜定田及齋場雜色人等、

凡拔穗者、卜部率國郡司以下及雜色人等、臨田拔之、〇中略卜部及國郡司、率雜色人以下、前後撿挍運送、

卯日平明、神祇官班幣帛於諸神、〇中略是日中臣官人率卜部、於宮內省卜諸司小齋人、〇中略別差中臣忌部官人各一人、率縫殿大藏等官人、奉置衾單於大嘗宮悠紀殿、〇中略其行列者、神部四人、左右前驅、〇中略次稻實卜部一人在中頭、〇中略次禰宜卜部在中頭、〇中略其主基國次第亦如之、

〔延喜式 踐祚大嘗祭 七〕凡料理御膳、幷備小齋人食院者、〇中略作訖稻實卜部等、於院內爲解除、

凡在京齋場者、預分設兩處、〇中略卜部率國郡司以下及役夫等、入卜食山採材、卽祭山神、〇中略又卜部率郡司以下雜色人等、入卜食野苅草、卽祭野神、〇中略造酒兒井者、稻實卜部始掘、

凡應供神御由加物器料者、（神語號雜贄、同爲由加物）九月上旬申官、差卜部三人遣三國、先大祓後行事、〇中略其物造了、卜部監送齋場、分付兩國、

〔永和大嘗會記〕同廿三日〇永和元年十一月卯の日なり、大嘗會の當日なり、〇中略悠紀の大嘗宮の鳥居を入せ給て內へ入給ふ、〇中略まづ悠紀の神膳まいる、陪膳の釆女より外には神殿の中へ入人もなし、卜部一人七節の竹の枝をもちて仕候す、

〔大嘗會儀式具釋〕一卜部モ同ジク、神祇官ノ伴部ニテ、龜ヲ灼テ事ヲトシ、又ハ解除其外ノ神事ニモ預リ勤ムル者ナリ、必卜部氏ナル故ニ、今ニテハ其職ノ沙汰ニ及バズ、只卜部氏ナレバ卜部ノ役ニ充用ユルナリ、今度〇櫻町天皇元文三年十一月大嘗會ハ權大副〇吉田兼雄及兼成、敬芳、章茂、勤ム、並ニ卜部氏ナリ、

〔延喜式〕十八式部凡遣渤海卜部、准陰陽師令把笏、

〔三代實錄〕四十元慶五年十二月五日己卯、從五位下行丹波介卜部宿禰平麻呂卒、平麻呂者、伊豆國人也、幼而習龜卜之道、爲神祇官之卜部、揚火作龜、決義疑多効、承和之初、遣使聘唐、平麻呂以善卜術備於使部、使還之後、爲神祇大史、嘉祥三年轉少祐、齊衡四年授外從五位下、天安二年拜權大祐、兼爲宮主、〇下略

〔類聚符宣抄〕一補卜部事

太政官符式部省外承知下神祇

應補卜部從七位上直宿禰延忠事

右得神祇官去二月十一日解偁、延忠奉試及第、仍卜部直宗直死闕之替、所請如件者、正三位行中納言兼左衞門督藤原朝臣師氏宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少辨位　　左大史

康保二年五月十七日

〔類聚符宣抄〕一補神琴師事

太政官符神祇官 外印

應以正六位上大中臣朝臣良廉補任權神琴師伊岐貞廉死闕替事

右得彼官去四月廿六日解偁、謹檢案內、件權神琴師貞廉、以去長德四年十月十六日蒙官符、勤仕職掌之間、以去長保三年五月二日、其身死去已了、而未被補任彼替、爰供奉神事之時、可致闕怠、就中件良廉爲氏人、令供奉神事、已有其勤、仍言上如件、望請官裁、早被補任件貞廉死闕替、將令供奉神事者、正二位行中納言藤原朝臣時光宣、依請者、官宜承知、依宣行之、符到奉行、

位宮內卿　　位左少史

長保五年十一月二日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

神琴生二人事

右被右大臣宣偁、奉勅、令神祇官取充白丁學習件琴、考准神部、

寶龜四年十二月四日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補神琴生一人事

右得神祇官解偁、檢案內、去寶龜四年十二月四日格偁、右大臣宣、奉勅神琴生二人、令神祇官擇定傳習、其考准神部者、而頃年漏失、殆絕彼道、望請依格補之、令習件琴、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅定置一人、

承和十四年三月廿二日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

神笛生二人事

御巫

右被右大臣宣偁、奉勅、今聞、毎至祭祀、常供音樂、而笛曲不調、多紊儀節、宜取神郡百姓堪習笛者二人、永免調庸、令得成業、其雅曲可稱者、亦聽出身、仍預神部列、考敍如令、

延暦十八年十月廿五日

〔儀式一〕春日祭儀（二月上申十一月上申）

前二日、早旦神祇官人一人、率神主神琴師神部卜部等、（○中略）向社行事、（○中略）于時神祇副（若無副則祐代之）喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、副命、琴笛相和、（詞云、美計止留布江安波世、）四人共稱唯、先吹笛一成、次調琴聲、次歌人發聲、（先神祇、後雅樂、）次神主和舞、

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

鎭魂祭（○中略）

右中寅日晡時、（○中略）大臣命召使、令喚治部、令歌女參入、又喚大藏省、令賜貲木綿、並如上儀、訖神祇伯召御。琴。彈。某甲、（二人共稱唯）次喚笛工某甲、（二人共稱唯）又命云、御琴笛會之、（四人共稱唯）先吹笛一曲、卽調御琴、歌者始奏、

〔延喜式三臨時祭〕八十島神祭（○中宮准之中略）

右八十島祭御巫、生島巫、並史一人、御。琴。彈。一人、（○中略）赴難波津祭之、

〔北山抄二年中要抄〕六月晦日神祇官奉荒世和世御贖事（見清涼抄）

應和二年六月、節折如例、但依穢疑、神祇官不令參、只神（カム）祇琴（コトヒキ）師（コトシ）大中臣高枝、及宮主等供奉、

〔令集解二職員〕神祇官

伯一人（○註略）掌神祇祭祀、（○中略）御巫、卜兆、（中略）釋云、巫者、知鬼神之道也、在男曰覡、在女曰巫、此令取此說、覡音胡的反、員數、考選、待式處分、（中略）古記云、別記云、御巫五人、倭國巫二口、左京生島一口、右京坐摩一口、御門一口、各給廬守一人、又免戸調役也、別記云、御巫五人云々、（中略）跡云、巫神奈伎、朱云、問御巫、何時可用何、答不見、（中略）讃云、問御巫爲何事者、答不見行事、但見時行事、相代一人、

〔延喜式三臨時祭〕凡御巫、御門巫、生島巫、各一人、其中宮東宮、唯有御巫各一人、取庶女堪事充之、但考選准散事宮人、

凡座摩巫、取都下國造氏童女七歲已上者充之、若及嫁時、申辨官充替、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

御巫上宣、以官解申上、

〔西宮記臨時二〕祭主幷御巫猿女等事

奉勅旨給官符於神祇官、宮主、藏人召官人仰下、仍以解文申文上補云々、

御巫子申上卿補之、猿女依縫殿寮解、内侍奏補、見格也、

〔延喜式三臨時祭〕凡諸御巫者、各給夏時服絁一匹、冬不給、其食人別日白米一升五合、鹽一勺五撮、

〔延喜式二十二民部〕凡諸御巫、各賜畿內田一町、中宮東宮御巫亦准此、

〔古語拾遺〕凡鎭魂之儀者、天鈿女命之遺跡、然則御巫之職、應任舊氏、而今所選不論他氏、所遺九也、

〔類聚國史十九神祇〕天長七年十一月辛巳、無位菅生朝臣氏負爲御巫、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀六月十二月十一日月次祭儀亦同、

神祇官人率御巫等、入自中門、就西舍座、東面北上、○中略史以次唱御巫及諸神祝、各稱唯、神部執幣須之、○又見延喜式、

〔延喜式一四時祭〕祈年祭○中略

三后皇太子御巫祭神各八座、並奠幣案上、但臨時加減、仍不入恒數、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、○中略大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主登御名者白而辭竟奉者、○中略

座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、婆比支登御名者白氐辭竟奉

者、〇中略

御門能御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命、豐磐間門命登御名者白氐辭竟奉者、〇中略

生島能御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、生國足國登御名者白氐辭竟奉者、〇下略

〔歷朝詔詞解五〕古書どもに、大御巫と御巫とを、多くは御巫、巫と分て書るは、御巫は、大御巫にて、神祇官に坐八柱神を祭る御巫也、たゞ巫とあるは其餘の御巫也、然るに其をまた大御巫、御巫と書ることも有て、同く御巫とあるに、大御巫なると、たゞ御巫なるとの差あるを、そはその所のさまによりて見分べき也、思ひ紛ふべからず、

〔神祇官年中行事二月〕四日、祈年祭也、〇中略當日官人著座出居、御巫子廻見幣物案、

〔重憲記〕康治三年〇天養元年二月四日乙酉、祈年祭廢務、〇中略神祇官人抱御巫子、欲令見幣物、上卿仰云、月次祭儀雖同、當祭御巫子不廻幣物由已有所見、早可歸入、又予依召參入、依無賦饒候上卿東方仰云、御巫子廻見幣物事如何、予云、不廻見幣物由存江次第、然而式文云、其儀同月次祭云々、而於月次祭者所廻見也、左右可有御定、上卿仰云、不可見也、式文廻見幣物事無所見、於祈年祭者不廻見由有所見、其後復本座、上卿尙依不審、以召使被尋申頭辨、辨被申云、御巫子雖著西廳邊、不廻見幣物歟云々、

〔中右記〕嘉承二年二月八日、付寢之間、召使來催云、今夜園韓神祭本分配、左衞門督俄申障、他公卿雖相催不被參、有殊仰、件祭上卿可參勤者、雖及深更、申承了由出立、〇中略廻御馬、七廻了引出神祇官歌遊、御神巫子舞廻、神部四人、持神寶舞廻、

〔延喜式一四時祭〕三月祭

四面御門祭十二月准此〇中略

御川水祭十二月准此、中宮亦同、〇中略

右四面祭、御門巫、御川水巫、座摩巫、各行事、

御巫代

六月祭〈十二月准レ此〉

御贖祭〈○中宮准レ此〉〈○中略〉

右始レ從二六月一日一至二于八日一、日別御巫行事、其東宮日限幷物數並減レ半、

〔延喜式 二 四時祭〕十一月祭

鎭魂祭〈中宮准レ此、但更不レ給二衣服一、〉〈○中略〉

右其日、御巫於二官齋院一舂レ稻、篩以二麁筥一、炊以二韓竈一、訖即盛二蘭笥一、納二橫居一案、〈○中略〉

官人以下裝束料〈○中略〉

右中寅日晡時、〈○中略〉神祇官人已下、神部已上、著二青摺衣一、〈官預受備頒給〉率二御巫等一入就二廳上座一、〈○中略〉神部於二堂上一催二拍手一、御巫及猨女等依レ例舞、〈○中略〉以レ次進舞二於庭一、訖就二本座一、

〔愚昧記〕仁安三年十二月十一日、依二月次祭一、申刻參二神祇官一、〈○中略〉次祝師著座讀二祝詞一、了拍手、〈二段〉次御巫子廻二伊勢幣一、〈三度、依二幼少一人把レ之廻、〉

右御巫行事

〔延喜式 二 四時祭〕每月晦日御贖〈中宮東宮准レ此、六月十二月不レ在二此例一、〉〈○中略〉

〔延喜式 三 臨時祭〕八十島神祭〈中宮准レ之〉〈○中略〉

右八十島祭御巫、生島巫、幷史一人、〈○中略〉赴二難波津一祭レ之、

〔玉蘂〕建曆二年十月廿八日庚子、此日天皇臨二鴨河一修レ禊、〈二條南畔爲二其所一、當二押小路末一、〉謂二之大嘗會御禊行幸一也、〈○中略〉次依レ催御巫〈○○○〉四人、經二公卿祓座前一、就二御禊幄巽角一、供二御撫物一、〈先レ是公卿座末程東、立二小棚一置レ之云々、〉中臣女〈折節出、不レ上レ埒〉進出、於二南第一間一取レ之傳供、〈件折節候二南第一間一〉葦形二折節、瓮二折節云々、

〔類聚符宣抄 一〕御巫代官事

神祇官

請蒙處分令供奉御巫代齋部安子狀

右御巫吉野實子遭喪之間、以件安子令供奉代官、謹請處分、

天暦十一年〇天德元年二月廿日

權少史兼宮主直宿禰常純

權大祐大中臣元房

左大臣宣、以件安子、彼實子遭喪之間、宜令供奉者、

同年三月廿一日　少外記秦斯賴奉

〔大嘗會儀式具釋〕三御巫ハ神ヲ齋キ祭ル女ニテ、男ノ祝ニ同ジ、今ノ神子ノ類ニハアラズ、昔ハ大御巫、生島巫、座摩巫、御門御巫ナド・有テ、各祭ル所ノ神アリ、今ハ御巫絶タルガ故ニ、今度〇櫻町天皇元文三年大嘗會ハ、讃岐守利盛朝臣齋藤左衛門大尉ノ女ト、右大史盛行山口中務少丞ノ女トヲ御巫ニ定ム、

〔西宮記臨時〕一諸宣旨

猿女內侍奏補之縫殿寮解

〔類聚三代格〕一太政官符

應貢猿女事

右得從四位下行左中辨兼攝津守小野朝臣野主等解偁、猨女之興、國史詳矣、其後不絶、今猶見在、又猿女養田、在近江國和邇村、山城國小野郷、今小野臣、和邇部臣等、既非其氏、被供猿女、熟捜事緒、上件兩氏、貪人利田、不顧恥辱、拙吏相容、無加督察、也亂神事於先代、穢氏族於後裔、積日經年、恐成舊貫、望請令所司嚴加捉搦、斷用非氏、然則祭禮無濫、家門得正、謹請官裁者、捜檢舊記、所陳有實、右大臣宣、奉勅宜改正之者、仍兩氏猿女從停廢、定猿女公氏之女一人進縫殿寮、隨闕即補、以爲恒例、

弘仁四年十月廿七日〇又見類聚國史

〔西宮記臨時裏書〕一貢猿女事弘仁四年十月廿八日、公氏之女一人進縫殿寮云々、

延喜廿年十一月十四日、昨尙侍令奏、縫殿寮申、以稗田福貞子請稗田海子死闕替、仰、得氏人解申省宜、省官補任云々、仰此度依奏、但以後須依國判可申省也、

天曆九年正月廿五日、右大臣令奏、縫殿寮申、被給官符於大和近江國氏人、令差進猿女三人死闕替文、猿女氏高橋峰則等、早被補了、任官符、勤御鎭魂、未補任猿女一人猿掌狀文、

〔儀式五〕鎭魂祭儀（十一月中寅日、中宮祭准此、但東宮用巳日、）

縫殿寮率猨女、升自東側階就座、（○中略）御巫舞訖、次諸御巫猨女舞畢、

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

鎭魂祭（中宮准此、但不給衣服、）（○中略）

右中寅日晡時、（○中略）令猨女參入、（○中略）神部於堂上催拍手、御巫及猨女等依例舞、

〔延喜式十四縫殿〕鎭魂齋服（新嘗祭同用之）

猨女四人、綠袍四領、（綠表帛裏、別三丈、）綿八屯、（別二屯、）兩面紐四條、（別長一尺九寸、廣五寸、）汗衫四領、（別三丈、）綠裙四腰、（綠表帛裏、別三丈、）裙腰料纐帛四條、（別一丈五尺、）綿八屯、（別二屯、）下裙四腰、（裙別三丈、腰別一丈五尺、）袴四腰、（別三丈、）綿四屯、（別一屯、）纐帶四條、（別長六尺、廣四寸五分、）細布髪髻四條、（別二尺、）緋帔四條、（緋表帛裏、別一丈五尺、）細布袜四兩、（別三尺、）線鞋四兩、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀中

戊刻、鸞輿御廻立殿、主殿寮供浴湯、卽著祭服、御大嘗宮、（○中略）大臣一人、率中臣、忌部、御巫、猿女前行、（○又見延喜式、）

〔平戶記〕仁治三年十一月十三日辛卯、今夜大嘗祭也、（○中略）祭祀之間、又多違例等、今日無猿女云々、希代勝事也、

〔永和大嘗會記〕同（○永和元年十一月）廿三日卯の日なり、大嘗會の當日なり、（○中略）主上の御前にすがゝさをさし、忌部中臣猿女などいふやうの者どもあゆみつらなる、いとめづらかなる御さまなり、

戸座

〔永享大嘗會記〕永享二年十一月十八日乙卯、是日大嘗會也、○中略次天皇入御大嘗悠紀宮南面東戸、攝政幷室町殿入給神殿御巫中臣猿女忌部等蹲候、○中略次天皇出御廻立殿步給、○中略次中臣祭主三位清忠卿、忌部親雄前行、次御巫少女總角猿女亦少女歟等前行、

〔延喜式三臨時祭〕凡戸座取七歲已上童男卜食者充之、若及婚時、申辨官充替、

〔延喜式五齋宮〕新造炊殿忌火庭火祭○中略

卜戸座一人取山城國愛宕郡鴨縣主氏童子

火炬二人取同國葛野郡秦氏童女

右始自初齋院至于參入大神宮奉仕、其齋王入伊勢齋宮、卽各替却、

〔延喜式五齋宮〕凡齋王到國之日、取度會郡二見鄕礒部氏童男、卜爲戸座、

〔令集解二職員〕神祇官

直丁二人、(中略)戸座、(座刊本作巫、今改、)三人、吉備前國一口、阿波國一口、齋宮一口、京戸各給養丁一口、如常、

〔類聚三代格一〕勅

戸座

阿波國阿曇部　壬生　中臣部　右男帝御宇之時供奉　備前國壬生　海部　壬生首　壬生部　右女帝御宇之時供奉　備中國海部首　生(生恐壬誤)部

首　笠朝臣　右皇后宮供奉

以前戸座等給時服料、各(各恐冬誤)人別橡絁一疋、綿六屯、夏人別橡(橡下恐脫布字)三丈、月料、人別三斗六升

天平三年六月廿四日

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡行幸陪從御巫戸座給乘馬、

〔類聚三代格一〕太政官符

定准犯科祓事○中略

一中祓料物廿二種〇中略

右〇中略殿物忌、戸座、御火炬、〇中略宜科中祓輸物如右、〇中略

延暦廿年五月十四日

〔類聚符宣抄一〕卜貢戸座事

太政官符備中國司内印

應卜貢中宮職戸座事

使卜部蔭孫從七位上直宿禰全連

右得神祇官去七月廿八日解偁、彼宮戸座、笠宿禰犬丸長體之替、爲令卜貢、差件人充使、依例申送者、

國宜承知、早速卜定貢上、符到奉行、

左少辨　左少史　驛鈴一口三剋

天暦〇暦恐徳字誤三年九月十一日

天延二年十月三日、不注上宣、但無驛鈴、

〔類聚符宣抄一〕卜貢戸座事

太政官符備中國司

應卜貢太皇太后宮職〇圓融中宮藤原遵子戸座笠二郎丸長體替事

使正六位上卜部宿禰行信

右得神祇官去四月十六日解偁、件戸座以去寛弘元年卜貢、令供奉職掌之間、其身長體不堪職掌、望請官裁、早被給官符於彼國、令卜替、仍差件人充使、申送如件者、正二位行權中納言兼治部卿皇太后宮大夫源朝臣俊賢宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左中辨藤原朝臣　右少史酒人眞人

長和二年十二月七日

〔類聚符宣抄一〕卜貢戸座事

太政官符阿波國

應卜貢戸座事

使卜部正六位上卜部宿禰行正

右得神祇官去三月二日解偁、件戸座、依例爲令卜貢、差件人充使、申送如件、望請官裁被給官符、依例卜貢、令供奉職掌者、左大臣宣、奉勅依請差件人令充使者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少辨源朝臣　　右大史津守宿禰

長和五年七月十日

〔神祇官年中行事臨時〕一本官差進使事○中略

御贖物

內御巫史生調進之、戸座童等、

〔宮主秘事口傳〕大嘗會年十月（被擇吉日）河原御禊宮主所役事

文保二年十月廿七日甲寅、今日御禊行幸也、○中略次御巫三人、戸座童一人、（阿波國卜貢、戸座童不上洛、公文史生宗兼沙汰立之、御巫戸座童以上四人裝束四千疋也、各千疋也、御禊奉行藏人佐資明下行之、但半分二千疋被下之、今半分追可被付足云々、）

〔延喜式三十六主殿〕火炬小子四人、（中宮不在此限）取山城國葛野郡秦氏子孫堪事者爲之、齒及冠婚、申省請替、其給時服者、各夏絁一丈七尺六寸、袴料七尺一寸、絲四銖、冬絁三丈五尺二寸、袴料一丈四尺二寸、綿三屯、絲四銖、履一兩、

〔類聚三代格一〕太政官符

定准犯科祓事○中略

一中祓料物廿二種○中略

右〇中略殿二物忌一、戸座、御火炬、〇中略宜レ科二中祓一、輸レ物如レ右、〇中略

延暦廿年五月十四日

〔儀式一〕園并韓神祭儀二月春日祭後丑、十一月新嘗會前丑、

其日早朝、神祇官率二神部卜部炊女等一、向二於神院一、辨二備供物一、

〔儀式一〕平野祭儀四月十一月上申

炊女

炊女四人、各執レ薦敷二舞殿一、〇中略訖皇太子出レ自レ舍、進就二神前座一、次親王以下各就レ座、訖山人候二東門外一、琴師率二炊女等一、盛二酒肴於八脚机一、而迎在二門内一、琴師南向、炊女東向、山人廿人用二左右衛士一、執二賢木一、入列二立机前一、西面北上、以次申二神壽詞一、訖炊女四人、進受二賢木一、復二本座一、謂二門内座一、于レ時琴歌發聲、炊女四人東向起舞、訖以二酒肴一賜二山人等一、訖琴師炊女復二本座一、謂二舍内座一、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、神祇官十五人、

卜部厮丁

〔東大寺正倉院文書一〕天平十七年諸司印踏文書

神祇官移　民部省

合得粮漆拾漆人宮主三人、卜部十人、直丁二人、并十五人、人別日米二升、鹽二勺、正女十四人、人別日一升五合、鹽一勺五撮、小子厮六人、人別日一升、鹽一勺、直丁厮丁二人、人別綿二屯、

應レ請庸米貳拾玖斛壹斗、鹽貳斗玖升壹合、庸綿肆屯、

右卜部等、來十一月卅箇日公粮、所レ請如レ件、故移、

〇按ズルニ、此移文斷簡ニテ年月ヲ缺ケリ、然レドモ天平十七年ノ文書ト共ニ卷ヲ成スヲ以テ、亦其年ノ物タルヲ知ル、而シテ十一月ノ公粮ヲ請フヲ以テ、十月ニ移スル所ナルベシ、

〔令集解二職員〕或云、右記云、別記云、〇中略津嶋上縣國造一口、京卜部八口、厮丁三口、下縣國造一口、京卜部九口、京厮丁三口、伊岐國造一口、京卜部七口、厮丁三口、伊豆國直丁一口、卜部二口、厮丁三口、齋宮卜部四口、厮丁二口、伊岐二口、津嶋二口、伊豆二口、國造丁直丁等各給二厮丁一口一、亦常食卜部等及厮

直身免課役、亦常食給京戸、所給人之厮丁、自被點上事、京戸厮丁、莫給免課役、又祝部免調役、戸口丁調者取而依神調、但戸內有他姓人者、其調者依公調也、

〔日本後紀 十三 桓武〕延暦廿四年十二月壬寅、公卿奏議曰、○中略停卜部之妾男女厮丁等粮、○中略許之

〔類聚三代格 一〕太政官符

應減筑紫防人十二人便充在京及府卜部厮丁事

右得大宰府解偁、對馬嶋去年四月廿九日解偁、檢案內、大宰府天安元年五月八日解偁、得對馬嶋解偁、筑紫防人百二人之內十二人、便充在京及府卜部等厮丁、其代以當土人永相補者、而得天安元年税帳使竿師從六位下日根造勝繼去年十一月廿九日解偁、被官宣偁、件厮丁、自今以後、本嶋人充之、仍返却者、嶋宜承知、依舊充行者、○中略而被大宰府去嘉祥三年十二月一日符偁、太政官去承和十一年七月十九日符偁、得神祇官解偁、卜部等解偁、承前之例、件厮丁以當嶋人限三箇年副綱丁差送、而太政官去弘仁十四年三月廿七日下大宰府符偁、彼府解偁、對馬嶋解偁、神祇官卜部等厮丁、依例差點進上、而頃年疫死、傜丁減少、仍請處分者、府加覆勘、所申有實、望請件厮丁、咸令陸國差送、謹請官裁者、右大臣宣、依請者、自厥以後、曾無差送、加以件嶋、遙居海中、往還希人、因茲本鄉親戚、未由訪育、望請復舊、被給本嶋者、府官覆辭狀、所陳有實、謹請官裁者、左大臣宣、依請者、嶋依符旨、差點行來、而或終身不歸、或擧家離散、一人被點、一烟永絕、差送之弊、室家彌少、若猶差送、恐無遺民、今商量、以筑紫人分配防人者、依兵不足也、以當嶋人差送厮丁者、爲恤卜者也、夫卜者雖能知未然、而防禦之備、尙不如兵、望請特被言上、減筑紫防人百二人之內十二人、便充在京及府卜部厮丁、其代以當土人永相補之、然則彼此得所、公私無損、仍請府裁者、自爾以降、件厮丁無有差定、望請以陸地人被充行之、仍請府裁者、依解狀請官裁者、右大臣宣、依請、

天安三年三月十三日

補任

〔官職秘抄上〕神祇官

伯

以孫王若三四世王氏任之、或華族源氏中、撰四位任之、或大中臣氏自大副轉之、（始自源魚）叙三位、（始自大中臣輔親祭主）非祭主爲三位例、（源顯仲、仲資王、）

副（大少有權）

以大中臣卜部等氏任之、中臣者、依可補祭主者也、卜部歷宮主、神祇官重職者、無過宮主、仍往年伊岐氏任之、（長久則政、後絶畢、）又齋部氏任之、（天延安茂、後絶畢、）爲祭主者、雖叙三位、猶爲大副例、始自親定、是無官者、不可爲祭主之故也、

祐（大少）

以大中臣卜部齋部伊岐氏等任之、直氏依爲宮主、往年多任之、（寛仁有光、後絶畢、）又伊岐氏雖任之、近年絶畢、（保延致政、後絶畢、）非大中臣氏不經史任例、（始自卜部兼宗宮主）

史（大少）

以本官奏、卜部齋部伊岐等氏任之、往年笠直等氏任之、近代絶畢、（直氏、萬壽隆昌後不被任之、笠氏、長久正親後不被任之、）謂本官奏者、史轉祐官人代等申文、書一紙奏狀上之、謂連奏是也、

〔職原抄上〕神祇官

伯一人

昔者諸氏混任、或又大中臣氏任之、中古以來、花山院御子彈正尹淸仁親王後胤相續、他人不任之、彼流四五位之時給源姓、雖任中少將、任伯之日復于王氏、是近例也、

大副（權大副）

相當從五位下也、然而任祭主之輩、至二三位帶之、多是四位五位任之、大中臣齋部卜部三姓之人

任レ之、

少副権少副

相當正六位上也、近代五位官也、三姓之人又任レ之、

大祐少祐

以前三姓、及中臣氏等任レ之、中臣者、本大中臣一種也、中臣清麻呂任二右大臣一之時、初加二大字一、然而其庶子有レ不レ給二大之族一、彼等苗裔、猶稱二中臣一也、

〔百寮訓要抄〕神祇官

伯　昔は高家の人々是に任ず、中古以來は王氏とて、姓も給らぬ今の伯が薫任る也、公達の殿上人などは、神祇官などは思ひさけたる也、大方王孫は四世にて、五代にあまりぬれば王の數にもあらず、今は數代の王孫なれば、只姓を給らぬ計にて、清花の家にはあらず、其御後と申計にて王孫のよし也、

大副　權大副　少副　權少副　以上神祇のたいふせふとて、當時は卜部中臣の輩など任ず、諸社の神主など任る也、よのつねの人はならず、

大祐　權大祐　少祐　權少祐　以上同じき神祇の輩、先是に任ず、子細上におなじ、

大史　少史　權少史　以上任官の子細おなじ

〔諸家家業記〕神祇道

白川　神祇官は八省之上に立候事ニ而、神祇官の棟梁を神祇伯と申、次を副と申候、伯職、上古は諸家混任有レ之候得共、白川家相立候以來、伯職は白川家に限り候事に相成、彼家にては四位五位に而、年齢二十未滿ニ而も伯に被レ任候、

〔光臺一覽四〕王氏壹軒　白河殿　此御家、抑内侍所之別當として他家に不レ望、花山院之皇子に彈

正尹清仁親王の後胤として源氏なり、先敍爵に從五位下侍從に任じ、神祇少副を申、中二年有て從上、中二年置正五位下神祇大副に任ず、二年有て從四位下、侍從を辭して少將に任ず、二年有て從四位上、二年過て正四位下、〇中略二年有て中將、此時神祇伯に被任、位署體替る也、

右近衞中將正四位下守神祇伯雅喬王と書習也

〔故實拾要十二〕神祇官

神祇伯　相當從四位下　唐名太常伯太卜令

是至二三位帶之、此官ハ神祇道ノ事ヲ掌ル也、往古ハ諸氏混ジテ任之、又大中臣任之、中古以來ハ、花山院ノ御子清仁親王ノ後胤相續シテ、他人不任之、親王ノ後胤タルニ依テ源ノ姓ヲ賜フ也、父神祇伯ニ任ズル時ハ、其子ニ源ノ姓ヲ賜フ也、又父神祇伯ニ任ズル日復王氏、父神祇伯ヲ退ク時ハ、其子捨源姓親王ノ王氏ニ復ス、以其子神祇伯ニ任ズル也、

〔神道名目類聚抄五神官〕伯　神祇最上ノ職ナリ、白川ノ家此職ヲ譜代、伯職勅許ナキウチ源ノ姓ヲ賜リ、伯職勅許アリテ王氏ニ復シ、神祇伯某ノ王ト稱ス、

〔日本書紀二十四皇極〕三年正月乙亥朔、以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三嶋、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、以從四位上中臣朝臣意美麻呂爲神祇伯、

〔續日本紀十一聖武〕天平四年九月乙巳、以正五位上中臣朝臣廣見爲神祇伯、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年七月辛亥、從四位上勳十二等巨勢朝臣奈氐麻呂爲左大辨兼神祇伯、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、以從三位石川朝臣年足爲神祇伯、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年十二月乙巳朔、以御史大夫正三位文室眞人淨三爲兼神祇伯、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆七年七月癸酉、前右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂薨、〇中略清麻呂、天平末、授從五位下、補神祇大副、歷左中辨文部大輔尾張守、寶字中至從四位上參議左大辨兼神祇伯、歷居顯

要、見稱勤恪、神護元年、仲滿平後、加勳四等、其年十一月、高野天皇稱德○更行大嘗之事、淸麻呂時爲神祇伯、供奉其事、天皇嘉其累任神祇官淸愼自守、特授從三位、○中略薨時年八十七、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年二月甲午、從四位下多治比眞人繼兄爲神祇伯、山城守如故、

〔續日本後紀三仁明〕承和十年二月己巳、從四位上橘朝臣氏人爲兼神祇伯、尾張守如故、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年八月辛卯、從四位上源朝臣寬爲兼神祇伯、阿波守如故、

〔三代實錄十四淸和〕貞觀九年二月十一日辛巳、以從四位下行山城權守在原朝臣善淵爲神祇伯、

〔三代實錄二十八淸和〕貞觀十八年正月十四日壬辰、以從四位下行中務大輔兼因幡權守棟貞王爲神祇伯、

〔白河家系譜〕淸仁親王彈正尹、花山院御子、從四位上、冷泉院猶子、母昭登親王祖母若狹守平祐之女、長元元年出家、

延信王ノブサネ本從四位上彈正大弼、母大宰帥源顯房女、萬壽二年三月廿九日賜源姓、一云父親王姓、同三年四月廿七日任侍從、寬德三年二月日任神祇伯、

康資王實者延信王男、爲祖父親王子、神祇伯從四位上右京權大夫、母高階成順女、寬治四年九月廿日薨、

顯康王任神祇伯、右大臣顯房公爲子賜源姓、安藝權守從五位上、母者左中辨藤原隆方朝臣女、

顯廣王母者筑前守藤原敦憲女、永萬元年正月廿四日任神祇伯、正四位下、賜源姓、改源歸王氏、

〔伯家部類〕一伯五幷廿未滿例資英王眞蹟ナリ

五位舊例

顯廣王從五位下初例　永萬元正廿五任伯　業資王從五位上○上一本作下　建久元正廿二任伯

資緒王正五位下　建長八十二十三任伯　資茂王從五位上　正曆二四廿九任伯

嫡流康資王號宮伯、年十八歲、　次男資基王十六歲　嫡業資王　次男資茂王十六歲　資緒王七歲　嫡業定王十二歲　業淸王十四歲

已上

〔顯廣王記〕長寬三年〇永萬元年正月廿三日癸酉、入眼、〇中略雞鳴有任神祇伯之由、其告隨拜任了、是依奉公之勞、被抽講第也、但於本性嬾、強不奔走、任天道之處、浴朝恩之條、可云神德也、

裏書今日任伯、于時從五位上正弘王也五位伯始之歟、歷一年、仁安元年十一月、大嘗會賞、敍正五位下、是可云希代、同二年二月十一日、敍從四位下、是院御即位之時褰帳賞、是又希代也、命長于今、繼三代職、昇四品加了、更以不趁求哉、只是奉任神慮之故也、

〔顯廣王記〕安元二年十二月五日丙子、除目也、讓伯於大夫了、朝恩無極也、年廿口位從五位上也、父祖十九歳任之、僕於七十任之後、十二年于今也、年齡者高祖之例、位者僕例歟、但申請神祇官修理、雖有許容、微力不及、故可相勵也、

〔薩戒記〕正長元年八月廿五日乙巳、後聞、今日以正四位下行左近衞權中將源朝臣雅兼、三十三歳被任神祇伯、依父從二位資忠卿讓也、今日則雅兼復王氏、是例也、受父讓定希代例歟、可謂幸運、　廿八日戊申、後聞、今日白川二位資忠卿前神祇伯、五十七歳出家、先是敍正二位、非參議正二位有例云々、可尋宣下日、依武家執奏、稱病危急之由、去廿五日讓職於男雅兼王、然而所勞非大事云々、

〔薩戒記〕永享二年二月八日己卯、戊刻向前藤宰相入道永藤卿許、禪門傳右大將殿〇足利義教命云、伯雅兼王、補當職之後、每朝出仕、令停止之由申也、實否如何、覺悟之間可令申者、予〇藤原定親答云、只今不分明、但補彼職之後、不參歟之由纔所覺悟也者、禪門云、各異僞之條、可及告文沙汰之由有御望意者、予云、只今於當座、件人實否之條、雖不覺悟、若注付日記歟、於有所見者、不覺悟之由難載告文、歸家引見之後、可申其左右者、禪門說、則歸華、次向勸修寺中納言經成許、示合此事等、　九日庚寅、早旦向藤宰相入道許、示云、雅兼王每朝出仕否間事、引勘每月記之所、或注參入蠻、或不注之、仍於每度儀者、分明難申、但雖一度、彼王參之由所不見也者、禪門命云、然者此旨注日記之由可披露歟、予云、不可然、若被召出日記可見苦、只縮詞、雅兼王任伯之後、於朔日夜入事者、不覺悟之由可被披露候歟、人々申旨者、彼王

大少副

參不參共不覺云々、於予者參入之事、不覺悟之由也、聊有差異歟者、禪門云、於件意趣者、可在各所存、於申詞者、皆一同也、以此旨早可披露者、予承談限歸、於路上逢勸修寺中納言、相互留車談予申入之旨、了歸華、白川二位入道(資忠)自去々年(正長元)秋初、被使中風所勞、八月之頃已及危急、仍申讓伯職於子息雅兼(八月廿五日被宣下)出家、(同廿九日)其後雖復本起居未輒、仍至去年冬不能細々出頭、十二月廿六日、始參右將軍殿、督無對面云々、是彼禪門構噓病、申讓職於子、遂出家之由、將軍深以令傾解給、近日此事再興、二品禪門可獻罰文之由被仰下、(藤宰相入道中次之)可爲大師勸請起請云々、而件書樣不尋得候、有所緣于山徒者可尋給之由、夜前來門外被示之、仍尋重秀法印(號花織院)之處、今日注進之、則遣禪門許畢、件文只奉書載山中諸佛薩埵、諸天善神等、悉奉注載也、依無益不注留之、

〔伯家部類〕一兒資益王之子資氏王、延德二年六月晦日、依病氣辭伯、依之伯父忠富、雖爲老年六十三歲、自今日本家相續、補伯職、

〔日本紀略(桓武)〕延曆十一年閏十一月乙酉、多治比子姉卒、參議大中臣諸魚母也、先是諸魚進家譜云、中臣朝臣任神祇伯者、是天照大神神主也、累世相承、遭喪不解者、勅雖不躬喪紀、不可供神事、宜令修其服、

〔祭祀或問上〕神祇伯ハ、遭親喪トモ解任ヲモセヌ法也、然ドモ服関ル迄ハ不交神事也、一說ニ、伯ハ天子ノ御手代トシテ被神拜、故ニ口不解任、不著喪服而爲神拜ト云ヘドモ誤也、

〔伊呂波字類抄(加官職)〕神祇官(カムツカサ日本紀云、聖武天皇御宇天平十八年丙辰、始置神祇大副、以中臣益人爲大副、)

○按ズルニ、天平十八年ハ丙戌ニシテ、丙辰ハ天平寶字八年ナリ、益人ハ天平十八年八月主稅頭タリシコト續日本紀ニ見ユレド、神祇大副ハ所見ナシ、

〔續日本紀(孝謙十九)〕天平勝寶六年四月庚午、以從五位上中臣朝臣清麻呂爲神祇大副、

〔文德實錄(一)〕嘉祥三年五月甲午、從五位下中臣朝臣逸志爲神祇大副、

〔諸家家業記〕神祇道

藤波　吉田　藤波家は大中臣姓に而、古來より伊勢神宮之祭主に被補候、尤先祖之內ニ者、祭主にて伯に被任候例も見え候得共、白川家伯職に定り候後は、神祇大副に被任、祭主に被補候事に候、尤祭主は必大副を兼任有之例故、大副は從五位下相當之官に候得共、二三位之後も大副を兼任有之事に候、○中略吉田家は卜部姓にて、神道傳授之家故、自ら神祇長上と被稱候、○中略古來は伯職に被任候事有之候得共、白川家定り候後は、副に而已被任候、

〔左經記〕長元四年三月廿八日乙癸、頭辨奉下申文等、內府○藤原教通披見被示云、神祇官連奏、依奏可被行歟、○中略余○源經頼申云、神祇官進副官以下連奏、須依奏被行也、而宣輔申文云、少副兼材、身爲大中臣一門、一門者有故不被任大副、已二百餘歲云々、有故之數百歲以不被任之門、今初任如何、慥尋由緖、追可被定行歟、抑所闕之大副二人也、彼大中臣副以上官人、當時所任不幾云々、且被任宣輔有何事哉、右大辨申云、依連奏可被行歟、左兵衞督申云、有故久不被任一門之由有宣輔申文、問其由緖可被任歟、左宰相中將申云、同左兵衞督申旨、左兵衞督申云、如宣輔申文者、伯輔親朝臣身爲二門、前年與一門理望朝臣競望大副之時、申一門不成大副之由、而今以一門兼材擧大副之旨、先後依違、先召問輔親朝臣可被定行歟、新中納言申云、一門不任大副之由、慥被問彼本系所、隨申可被定行歟、侍從中納言云、故一條院御時、輔親朝臣與理望朝臣競望大副之時、依有各愁、公卿僉議、以二門輔親被任了之由有宣輔申文、慥可被尋行歟、右衞門督申云、同侍從中納言云々、左衞門督申云、同左大臣申旨云云、藤納言、中宮權大夫、內府等、慥尋問彼此申旨、追可被定行歟云々、　五月廿五日辛未、頭辨奉仰云、中臣一門者、不被任神祇大副之由、招伯輔親朝臣於里第問之云々、輔親云、一門者、久不任大副、是依無可然之人歟、忌部卜部皆任此職、何一門者不任哉、宣輔所申理不可然云々、仰云、有故一門不任大副之由、宣輔有愁申、若是有何故不任哉、其由可被問宣輔云々、

大少祐

〔大嘗會記錄〕百十四代東山院貞享四年丁卯、主上今年十三歲、叡慮大嘗會ノ事ヲ減ジ、其形儀ヲ執行也、攝錄ハ一條右府冬經公、〇中略內々吉田神祇管領氏長者卜部朝臣兼連ニ召仰アリ、攝政兼連ニ仰アリケレバ、神祇ノ官ヲ不申シテ其預職コト如何ト御尋アル時ニ、兼連申上ラルヽハ、神祇管領トアルウヘハ不及其官ナリ、仰アラバ兼任可申ト答ラルヽ、依之實モトノ仰アリテ、神祇權大副ニ任ゼラルヽ、先祖ニモ其例アリ、既ニシテ吉田ノ祝部五人申官位、吉田越後介卜部兼林任神祇官少副、兼神祇官宮主、隱岐守兼景ガ事也吉田左近卜部兼成任神祇權少副、宮主兼林ガ弟也鈴鹿石見守中臣直加入一級ヲ申ス、又以卜部姓任神祇權大佑、鈴鹿左近中臣連屋任周防守、各從五位下タリ、同時勅許アルコト偏以テ神職ノ德也、又大政官ノ官掌小野伊豆目氏辰、神祇官ノ補公文、行事官重基任神祇大佑也、

〔朝野群載六神祇官〕神祇官

請殊蒙天恩、因准先例、依年勞恪勤次第、轉任官人等狀、

一請被以正六位上行少史伊岐宿禰致政、拜任少祐闕事、

右件致政、爲中宮宮主、已及多年、恪勤之勞、尤勝傍輩、就中諸宮宮主、超上薦應其撰、古今之例也、

一請依親父儀時讓、以正六位上卜部宿禰定景、被拜任大史事、

右得定景款狀、偁以父之職讓子之官者先例也者、今加覆審、所申有謂、仍以舉奏、

一請被以龜卜長上正六位上卜部宿禰兼繼、拜任少史致政申祐替事、

右依兼繼款狀、偁爲龜卜長上、御體御卜役、未曾懈怠、次第恩任之處、宜應其撰者、所申有謂矣、

以前轉任之者、標錄如件、抑月次新嘗會、幷臨時神事等、官人不足、殆可闕怠、望請天恩、依年勞次第、被轉任者、將竭奉公之節、仍勒在狀、謹請處分、

長治二年四月五日

從五位下行權少副卜部宿禰

從五位上行少副大中臣朝臣
從五位上行權大副卜部宿禰
正四位下行大副大中臣朝臣
從四位上行伯敦輔王

〔朝野群載神祇官六〕龜卜得業生正六位上卜部宿禰兼俊誠惶誠恐謹言
請殊蒙天恩、因准先例、依奉公幷龜卜勞、被拜任神祇少祐狀、
祐六七人相並例
正曆元年
大祐齋部守親　權大祐大中臣宗幹　權大祐大中臣清光　少祐直全連　權少祐大中臣師忠　權少祐伊岐正胤　權少祐大中臣佐俊
長保三年
大祐齋部守親　權大祐大中臣清光　權大祐直全連　少祐伊岐正胤　權少祐大中臣佐俊
權少祐直是盛
右兼俊謹檢案內、爲得業生之者補少祐、承前之例也、近則權大副兼宗是也、爰早歷成業、久積功績、本官公事之勤、軒廊御卜之役、殊勵愚忠、專繼賢跡、採擇之處、誰謂非據、望請天恩、因准先例、依奉公幷譜第龜卜勞、被補任件闕、彌勵奉公之節、兼俊誠惶誠恐謹言、
長治二年四月六日　龜卜得業生正六位上卜部宿禰兼俊

〔神祇官雜々記〕神祇官解
請被特蒙天恩、因准先例、造八省院廻廊拾間、副官功已進納、治承三年兩社行幸用途准絹三十疋功幷成業勞等、以散位正六位上大中臣朝臣信宣、拜任祐闕狀、右謹撿案內、成功勤、成業勞、相並之上、依

大少史

擧奏任祐闕者、氏之舊軌、朝之古典也、爰信宣前山城守資成朝臣以造進八省院廻廊十間、爲信宣之功、可任副官最前之闕由申請之處、依請被下宣旨畢、其上治承五年八幡賀茂兩社行幸用途及闕如、經八ケ日之內、進納三千疋之用途、是副官數具備、大祐明友有闕之時、可任最前除目之由、忝蒙綸綍者也、雖然其望未遂、宣下如空、又同三四年之間、頻雖逢副官祐等之闕、以他人被補、事雖顧宿運之拙、位猶仰朝撰之儀、抑或雖無別功、依本官擧浴恩、或雖無本官之擧、依別功被任、或不募他功、唯以文章生闕賞之者、募此一事、各遂所望、三ケ昇進之道兼備者、信宣一人而已、况乎信宣者、祭主頼宣之曾孫、大祐家成之孫、大祐俊宣之男也、祭官祠部之職、七代相副、成業大功之勤、一身相兼、加之當時氏氏者、申神祇官、各非無所募、然而道理之旨、猶難比信宣、又功勞共均之時、論成業非成業、信宣高經文章生、久積散位勞、僉議之處、唯仰哀憐、在官加褒賞、所申有謂矣、望請天恩、造進八省院廻廊十間之成功、依進納兩社行幸用途功、幷成業之勞、以件信宣被任彼官、將知聖化、令竭奉公、謹解、

壽永元年十月　日

北座

從四位上行伯兼因幡守仲資王　正四位上行權大副卜部宿禰兼友

南座

長上正五位下行少副卜部宿禰兼貞　祭主從四位上行權大副兼太皇太后宮權大進大中臣朝臣親俊　正五位上行權少副大中臣爲定

〔類聚符宣抄〕補宮主事

太政官符式部省外印

内御宮主正六位上直宿禰常純

右人轉任大史、仍如舊例兼補、

中宮宮主正六位上卜部宿禰兼延

右人轉任權少史、仍如舊例兼補、

春宮宮主正六位上直宿禰氏茂

右人轉任少史、仍如舊例兼補、

以前得神祇官去九月五日解偁、件人等、任先例可被兼補之狀、言上如件者、從二位行大納言兼中宮大夫源朝臣高明宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

右少辨位　　左大史

應和三年十一月十日

〔朝野群載六神祇官〕神祇官

請殊蒙天恩因准先例、依奉公勞任大史正六位上卜部宿禰儀時讓狀、以男學生貞景被拜任大史狀、

本官氏人、不經少史直任大史例、

大史齋部賴奉　康平二年二月任　大史齋部守親　天延三年十月任、親父安茂讓、

右得儀時款狀偁、謹檢案內、能所帶職與子息、又本官史不歷少史、直任大史、是聖代之通規也、尋其蹤跡、祖載于狀右、爰儀時、出仕奉公之後、四十七年于茲、其間本官之役、奉幣之使、謂其勤勞、全無闕怠、就中宇佐神寶之使及廿一ヶ度、是國家第一之神事也、然間爲下臈之者七人、超越轉任祐職、豈是朝恩之不及哉、偏只宿運之令然也、今件貞景、莅事之後、五年于茲、縱無推讓、何疑抽選、抑愚父之志、爲子尤深、若見浴貞景拜大史之仁、暫欲慰儀時漏少祐之愁、早被舉奏、將遂素望者、官加覆審、所陳有謂、望請天恩、因准先例、以大史儀時職令讓與男貞景者、將知奉公之不空矣、仍勒在狀、謹請處分、

康和三年三月廿七日　從五位上行權少副大中臣朝臣輔清

用途

從五位上行少副卜部宿禰――
從五位上行權大副大中臣朝臣輔弘
祭主正四位下行大副大中臣朝臣
伯從四位下敎輔王

〔延喜式圖書十三〕紙筆墨充諸司

神祇官紙卌張、筆一管、〇中略

右月料紙筆、具依前件、本司預受、八月一日依例預充、其年料季料亦准例充之、

神祇官墨一挺〇中略

右年料墨、具依前件正月總充、但月料八月一日依例充之、

〔延喜式宮內三十一〕凡神祇官年中所須、月別晦日御贖料、金人銀人各二百卌枚、鐵人廿八枚、缶蓋廿八枚、各仰所司色別造備、隨請充之、〇中宮東宮並在此內、具見木工式、

〔延喜式掃部三十八〕諸司年料

神祇官諸祭料、狹席五十八枚、(鳴雷神春秋祭料十二枚、御巫等奉齋神祭十枚、四面御門神春秋祭料八枚、六月十二月御卜所廿枚、同所短帖料三枚、御川水神春秋祭料四枚、六月十二月大祓祓詞座短帖料一枚、)折薦卌四枚、(御井東宮鎮魂料二枚、御巫等奉齋神祭料十二枚、四面御門神春秋祭料八枚、六月十二月御卜所料十八枚、道饗祭料四枚、)葉薦十六枚、(鎮花祭料四枚、春秋大忌風神二祭十枚、御井東宮鎮魂祭料二枚、)食薦一百八十五枚、(平野、春日、大原野、春秋祭料各廿四枚、鳴雷神春秋祭料十二枚、御巫等奉齋神祭料卌一枚、四面御門神春秋祭料卌二枚、六月十二月御卜所料四枚、每月晦御贖料廿四枚、御川水神春秋祭料十枚、)簀十六枚、(御巫等奉齋神祭料十二枚、六月十二月御卜所料四枚、)

〔延喜式主稅二十六〕凡神祇官臨時祭儲料、稻四百束、以山城國正稅充之、

〔伯家部類〕神祇官御年貢進社事

五畿內

松尾社(藁二百束、薪二百束、)　稻荷社(藁薪同、但雜事隨役、)　梅宮社(藁薪同、但並仲年預之時、被更除了、)　木嶋社　向社(隨仰事)

大和國　三和社紅百兩　廣瀨社作集子等　龍田社　布留社　大和社　丹生社

河內國　平岡社薫薪等、經木官被成神主、　弓削社神主被成　恩智社鳥羽院女房右門子孫傳領云々

和泉國　大鳥社明兼子孫傳領云々　積川社傳少々進　阿那師社同　大井開社同

攝津國　大依羅社　住吉社　生田社　長田社　座摩社　垂水社　廣田社

東海道

伊賀國　南宮社米五石、贄少々、　佐々宮

伊勢國　多度宮八丈十疋　賀福社八丈五疋　稻生社神主被成　阿射加社八丈三疋　於非社絹四疋、贄少々進

朝明上下社神主被成　牟山社　中牟山社皮

尾張國　一宮八丈廿疋　二宮八丈十疋　熱田社糸百兩進

參河國　池鯉附社　石卷

遠江國　小國社小池浮露イ・仁――○八丈五疋

上總國　玉崎社

常陸國　吉田社

甲斐國　國玉社上六一疋□□不見

東山道

近江國　建部社藁二百束、神祇官葛蒲進、　六座社　田啊社移文申　小野社

美濃國　南宮社八丈五疋　阿須賀○賀下恐脫田字社八丈三疋

飛驒國　水無社自本官被成神主

信乃國　須波社布千端進

下野國　宇都宮上馬二疋　香取社神官等皆申請本官移文

陸奥國 大高山社（大夫伯殿御時、諸衛申二請移文一、年貢急進） 苅田峯社（同）

北陸道

若狹國 常神社（鮑貝進）

越前國 氣比社（米拾五石進） 大虫社（眞漆一斗） 劔宮（絲少々）

能登國 氣多社（石納釜五口） 由須流義社（千飯）

越後國 上生田社（眞漆一斗）

佐渡國 一宮（神主本官被レ成、年貢且鮑三百貝進、）

山陰道

丹波國 出雲社（米十石）

丹後國 籠宮（糸五十兩進） 主基

但馬國 伊豆志社（布五十端進） 水谷社（上品紙五十帖進） 阿波加（○加一本作レ鹿）社（紙二百帖進、正米沙汰、）

已上三社正米賜二下文一了

因幡國 上宮（布五十段、鏡鑪物進、） 大江社（布廿段進）

伯耆國 一宮（鐙百枚進） 二宮（五十枚）

出雲國 大社（米） 佐陀社（米卅石）

石見國 大歳社（黒金）

山陽道

播磨國 伊和社（上品紙百帖） 荒田社（同上品紙二百帖） 白國社（腰刀進） 相撲社（同）

美作國 中山社 高屋社

備前國 吉備津宮（社司眞則隨レ仰）

備中國　吉備津宮

備後國　吉備津宮炭五十籠、贄五十合、白米、黒大豆小豆搗栗等五石進、　社二前致□□上品紙二百帖

周防國　玉祖社大榑三百寸〇寸恐才誤、才材書文、下同、　二宮

長門國　一宮上牛一頭　二宮

南海道

紀伊國　日前米十石時時召物　黒前

淡路國　一宮炭五十籠、木五十束、　二宮炭五十籠、薪百束、　石屋社薪百束、爲二縄二尺五寸一、

阿波國　大麻社炭五十籠、薪五十束三尺五寸縄從

讚岐國　一宮　楡無社

伊豫國　三島社尹暹法師榑一萬寸進

右大略注進如レ件

永萬元年六月日

〔神祇官年中行事臨時〕長官以二初任一次第神事

一吉書成事

神祇官牒　大和國衙

欲レ被二早進濟一神税稲　佰束事

牒件神税稲、爲レ宛二官家用途料、任二先例一可レ被二進濟一之状、牒送如レ件、

乞也衙察状、牒到、准レ状以牒、

安元二年十二月十四日

権少史齋部宿禰在判

伯在判

権大祐卜部宿禰

供給

祭主權大副大中臣朝臣
大副大中臣朝臣
權大副卜部宿禰
權少副大中臣朝臣
權少副大中臣朝臣

大祐齋部宿禰〈在判〉
權大祐大中臣朝臣
少祐齋部宿禰
權少祐大中臣朝臣
權少祐大中臣朝臣
權少祐卜部宿禰〈在判〉
權少祐大中臣朝臣
少史齋部宿禰〈在判〉
權少史伊岐宿禰
權少史伊岐宿禰〈在判〉

〔忠富王記〕明應五年二月六日、廳始幷神祇官御供料、以㆓政所行賢㆒被㆓下行㆒、請取在㆑之、　卅日、神祇官御供料、秘計不㆑叶之間、卅疋下行、殘分官町以㆓夏地子㆒可㆓下行㆒之由、行賢被㆓申付㆒了、

〔延喜式三臨時祭〕凡官人季祿馬料要劇、幷供㆓奉神事㆒官人裝束、宮主、神琴師、龜卜長上季祿馬料月粮、及卜部、御巫等衣服者、以㆓神税㆒充㆑之、〈但宮主月粮、以㆓官田㆒給㆑之、〉

〔延喜式三臨時祭〕凡史生二人、官掌一人、神部四人粮米者、以㆓神税物㆒充㆑之、月別各白米一斗五升、

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭神三千一百卅二座、〈○中略〉

前㆓祭十五日㆒、充㆓忌部八人、木工一人㆒、令㆑造㆓供神調度㆒、〈○中略〉其潔衣料布人別二丈七尺、〈官人絹一疋、布一端〉一人日米二升、酒六合、〈五位一升〉鮨三兩、〈五位五兩、又加㆓東鰒㆒〉烏賊、煮堅魚各二兩、鹽二勺、〈五位五勺〉海藻二兩、但木工者不㆑給㆓潔衣及食㆒、

春日神四座祭〈○中略〉

齋服料〇中略

神祇官人一人、別當色一領、内藏寮所充、絁二疋、綿二屯、已上官物、細布二端、調布二端、封物、〇中略彈琴二人、別絁一疋三丈、綿三屯、膳部八人、卜部二人、別佐渡調布二丈七尺、紅花二兩、已上官物〇中略

右祭料依前件、〇中略預神部二人、別日白米一升六合、鹽一勺六撮、〇中略其衣服神部、別夏絁四丈五尺、冬絁一疋三丈、綿四屯、並用神封物、

大原野神四座祭

右料物同春日祭、

園并韓神三座祭〇中略

齋服料〇中略

御巫一人、絁一疋、淺綠帛一疋、綿二屯、表裙一腰、〇中略神祇官人當色一領、彈琴二人、別黃帛三丈六尺、帛三丈六尺、綿三屯、卜部二人、別調布二丈七尺、

六月祭

卜庭神祭〇中略

中臣官二人、宮主一人、卜部八人、並給明衣、中臣細布、宮主已下調布、〇中略

供神今食料〇中略

右供御雜物、〇中略祭訖即給中臣忌部宮主等、一同大嘗會例、

〔延喜式二四時祭〕十一月祭

鎭魂祭〇中略

官人以下裝束料中宮宮主准此、

伯已下史已上七人、宮主一人、已上秦摺袍、龜卜長上二人、彈琴二人、巫部神部一人、各賜青摺袍一領、袴一

雜載

腰、史生四人、神部十三人、卜部十二人、使部三人、各青揩布衫一領、（已上縫殿寮賜）御巫一人、（中宮東宮御巫准此）御門巫一人、生嶋巫一人、各青揩袍一領、（表裏別帛三丈）綿二屯、下衣一領、（帛三丈）表裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈、）綿二屯、下裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈、）袴一腰、（帛三丈五尺）綿二屯、單袴一腰、（帛二丈）帔一條、（絁二丈）褶一條、（絁帛四丈）紐一條、（絁三丈）髻髮并襪料細布一丈、領巾紗七尺、櫛二枚、履一兩、座摩巫一人、青揩袍一領、（表裏別帛二丈五尺）綿一屯、下衣一領、（表裏別帛二丈五尺）綿一屯、單衣一領、（帛二丈五尺）表裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈、）綿一屯、下裙一腰、（表裏別帛三丈、腰料一丈、）袴一腰、（帛一丈五尺）綿一屯、單袴一腰、（帛一丈）帔一條、（帛一丈）褶一條、（絁帛一丈五尺）紐一條、（絁一丈）領巾六尺、襪料細布五尺、履一兩、

〔職原抄 上〕神祇官

以當官置諸官之上、是神國之風儀、重天神地祇故也、

〔玉勝間 六〕天の下の政神事をさきとせられし事

職員令に、神祇官をもろ〳〵の官のはじめにまづあげて、それが次に太政官を擧られたり、延喜式も同くはじめに神祇式、次に太政官式也、後の世ながら、北畠准后の職原抄も、令にならひてついでられたり、そも〳〵よろづの事、さばかり唐の國ぶりをならひ給へりし御世にしも、かく有しは、さすがに神の御國のしるしにて、いとも〳〵たふとくめでたきわざになむ有ける、世中は何につけても、此こゝろばへこそあらまほしけれ、

〔神祇官年中行事 臨時〕長官以（○以下恐有脫字）初任次第神事

貞應三年十月廿八日辛酉、今日行初任吉書、（○中略）御藏少舍人重弘來云、予（○貫光王）猶可候殿上之由云云、可賜祿之由令申之、而予答云、日來殿上人也、拜任當職之時王氏、仍座次事、於王（○王恐五誤）世以後者、可列本位次之由、兩明法博士進勘文、大外記師季申云、節會之時立標事、不限當時、立諸臣之上、敍位宮即有諸臣上、如此不重等云々、仍被問右府堀川源大納言等、然者則不及被仰年奉行、六位不存知

歟、此事先例頗稀歟、祿之條不重之由、以侍返答、退出了云々、

〔百練抄十三後堀河〕嘉祿元年二月廿七日、去夜爲盜人被放取神祇官御厨子鎖、件厨子者、昔伴大納言之遺物、于今見在、太政官與神祇官兩所相傳之物也、

〔伯家部類〕神祇官事覺書　寬文九年酉五月日　雅喬王眞跡

一神祇官　伯支配之事　後柏原院永正比迄、令存知候樣、忠富王跡所見候、忠富男雅業已後之記、依紛失不慥候、

古事類苑

官位部七

令制官職三

太政官上

太政官ハ八省諸司ヲ總管シ、大政ヲ統理スル所ナリ、孝德天皇ノ朝ニ、八省百官ヲ置クト雖モ、太政官ノ名未ダ見エズ、天智天皇ノ朝ニ、大友皇子ヲ太政大臣ト爲シヽヲ以テ、官職ノ名ノ見エタル始ト爲シ、天武持統ノ朝ニ至リ、官衙ノ名初メテ見エタリ、淳仁天皇ノ朝ニ、乾政官ト改號セシカド、久シカラズシテ舊號ニ復セリ、

太政官ノ長官ヲ太政大臣、左大臣、右大臣ト爲シ、是ヲ三公ト稱ス、太政大臣ハ、則闕ノ官ト稱シ、其人ヲ得ザルトキハ任ゼザルコトニテ、大友皇子ノ後ニハ、藤原不比等、武智麻呂、房前ノ父子兄弟、大ニ勢望アリシモ、尚ホ此官ニ進ムヲ得ズ、舍人刑部穗積ノ三親王ノ如キ、皇室至親ノ身ヲ以テ、僅ニ知太政官事ノ名ヲ以テ、此廳ノ首班ニ居ルニ過ギズ、蓋シ當時ハ歿後ニ此官ヲ贈ラレシモノハ往々コレアリシカド、生前ニ陞進セシモノハナカリシナリ、其後ニ押勝ノ大師ト爲リ、道鏡ノ太政大臣禪師タルガ如キハ、亂政ノ際ニ出デシ事ニテ、固ヨリ其例ニ加フルニ足ラズ、藤原良房ニ至リ、外戚ノ親ヲ以テ、文德天皇ノ朝ニ太政大臣ト爲リ、尋デ清和天皇ノ朝ニ攝政タリ、是ヨリ以後攝關タル者ハ、多ク太政大臣タリシガ、攝關ナラズシテ此官ニ居ルモノハ、藤原爲光、藤原公季ヲ以テ始ト爲シ、藤原頼忠ハ、關白ノ職ヲ去リテ後ニ、仍ホ太政大臣ト爲リ、藤氏長者タリ、是ニ於テ太政大臣ノ班次ハ、其人ニ依リテ同ジカ

ラズ、或ハ攝關ノ上ニ在ルモノアリ、而シテ太政大臣ノ特ニ關白ヨリ勝レルハ、官ニ在リテ薨ズルトキハ、國公ニ封ゼラレ、謚ヲ賜フコト是ナリ、左大臣ハ、太政大臣ノ下ニ居リテ政務ヲ執ルモノニテ、之ヲ一ノ上ト稱ス、右大臣ハ、左大臣ト相並ビテ事ヲ行フモノニテ、太政大臣アラザルトキハ、右大臣ヲ以テ一ノ上ト稱ス、三公ノ外ニ內大臣アリ、其名ハ既ニ天智天皇ノ朝ニ見エタレドモ、大寶ノ制ニ載セズ、光仁天皇ノ朝ニ至リ、藤原良繼ヲ之ニ任ゼシヲ以テ、令制後ノ始トス、然レドモ往時ノ官ニ比スレバ、其實ハ大ニ異ナリ、准大臣ハ又其下ニ在ルモノニテ、正官ニアラズ、一條天皇ノ朝ニ、藤原伊周ヲ以テ之ニ任ジタレド、歷朝ノ間、此官ニ居リシモノ極メテ少シ

大納言ハ、至尊ニ侍從シ、大政ヲ參議シ、奏宣ヲ掌ルモノニテ、納言トハ卽チ奏宣ノ謂ナリ、中納言ハ、其職掌大納言ニ同ジ、持統天皇ノ朝ニ見エタレド、大寶ノ令ニハ揭ゲラレズ、其後大納言ノ員數ヲ省キテ置ク所ナリ、參議ハ、文武天皇ノ朝ニ、大伴安麻呂等四人ニ勅シテ、參議セシメシニ萌シ、後ニ定メテ官名トス、然レドモ職事官ニアラズ、其位階ハ三四位ノ間ニ在レドモ、四位モ亦公卿ノ列ニ厠ルモノトス、參議ノ類ニ非參議ノ稱アリ、諸省ノ卿ニシテ、三位ニ升レルモノモ、太政官ノ政ニ參セザルモノハ皆非參議トス、少納言ハ、參議ノ下ニ在リ、小事ヲ奏宣スルモノニテ、侍從ヲ兼ヌルヲ以テ例トス、藏人ノ職起リシヨリ後、其職ハ僅ニ鈴印傳符ヲ請進シ、官印ヲ監スルニ止マルニ至ル、外記ハ、少納言ノ下ニ在リ、詔勅ヲ勘正シ、奏文ヲ勘造シ、除目敍位等ノ公事ヲ奉行ス、左右辨官ハ、八省ノ事ヲ分擔シテ之ヲ辨ジ、其文書ノ受付、及國司ノ朝集ヲ掌ル、辨官ノ下ニ史アリ、卽チ主典ナリ、文案ヲ勘署シ、官吏ノ稽失ヲ檢出ス、

參議以上ハ、太政官中ノ事ヲ通攝スルモノニテ、下ニ少納言左右辨官ノ三局アリテ、之ヲ分

掌ス、少納言局ハ、外記ノ上首之ヲ掌リ、局務ト稱ス、後ニハ清原中原ノ二氏專ラ之ニ任ズ、又辨官ノ二局ハ、左右大史ニテ之ヲ掌リシガ、後ニハ一局ト爲シ、左大史之ヲ掌リ、官務ト稱ス、是ニ於テ局務官務ノ二局ヲ合稱シテ兩局ト云フ、

太政官ハ、宮城内郁芳門大路ノ北、美福門大路ノ西ニアリ、其構造、諸官衙ニ比スレバ宏壯ニシテ、正廳、後房及ビ東西廳アリ、正廳ハ、列見定考等ノ儀式ヲ擧グル所ニテ、中世以後ハ、卽位及ビ大嘗ノ式ヲモ、此廳ニテ行ハルヽコトヽナル、又朝所、辨官曹司、造曹司、文殿等ノ設アリ、外記廳ハ、陽明門内職曹司ノ南ニアリ、中古以來公卿ノ政ヲ聽ク所タリ、又結政所、文殿等ノ設アリ、

〔倭名類聚抄五官名〕官　本朝式職員令云、〇中略 太政官、於保伊萬豆利古止乃官

〔朝野群載六〕諸司訓詞　太政官（オホイマツリコトノツカサ）

〔伊呂波字類抄太官職〕太政官

〔百寮訓要抄〕太政官　太政官といふは、眞實朝家の政を成敗する所也、今の官の廳など申此儀也、大臣公卿政務を成敗する人は、皆太政官の被管也、少納言外記史など申儀式官も、皆太政官の內の官也、

〔拾芥抄中本官位唐名〕太政官鸞臺閣省

〔職原抄上〕太政官當唐尚書省、又號鸞臺閣省、〇中略

當官統八省及諸國、天下事悉決此官也、故云都省、本名乾政官、

〔職官志一〕太政官、按此當唐尚書省、而倂門下焉、唐以門下中書尚書三省長官侍中及二令左右僕射爲宰相、每以他官攝之也、後又有平章政事同中書門下三品之名目、本朝制官雖效唐也、欲政歸於一、以省名更屬於官、改中書曰中務省、與其餘七省並從政焉、且三公位貴、然惟太政大臣獨無職、左右則責以吏事、固不攝以他

官、如唐、蓋鑒唐多冗官而然矣、尙書省、一名曰都省、以其管六尙書焉、六尙書、謂吏戶禮兵刑工、而七省當之、以式治民兵刑及宮內、加之以大藏是也、

〔標注職原抄別記下〕尙書門下

尙書といふ名、そのもとは六典の注に、秦置尙書、有令丞屬少府、また杜氏通典に、秦時少府遣吏四人、在殿中主發書、故謂之尙書、尙猶主也と見えたり、かゝれば始はいと輕き職なりけるに、漢元帝の時に、蕭望之が尙書事を領せしより、やう〳〵任重くなり、後漢に至て、太傅趙熹、太尉牟融を錄尙書事とせしより、錄名おこり、太傅鄧彪が如き、錄尙書事にて上公に位し、三公の上にたてり、（漢にては、太司馬、太司徒、太司空を三公といふ、太師、太傅、太保、その三公の上たり、故に上公といふ、）これより相續きて、古の冢宰總己の義の如く、其任いと重くなりにけり、されど共猶たゞ尙書とばかりいひたりけるに、靈帝の代になりて、始て尙書臺の名起れるを、劉宋の代に、改て尙書省とせり、其後隋になりては、天下の事ことごとく總べ掌れり、唐にもこれをうけて、都堂を中に置き、東に吏部、戶部、禮部の三行ありて、行ごとに四司を管す、西に兵部、刑部、工部の三行ありて、また行ごとに四司を管す、すべて二十四司、分曹共理して天下の事を盡せり、これ唐までの尙書省の始終の大概なり、（〇註略）また異朝には、尙書省の外に、門下省といふあり、事文類聚に、唐開元元年、（中略）時謂尙書省爲南省、中書門下爲北省、亦謂門下爲左省、謂中書爲右省、或通謂之兩省と見えて、門下省は中書省に同じさまなる官にて、尙書省とは別なるが如し、六典に、門下の侍中の職を、掌出納帝命、緝熙皇極、總典吏職、贊相禮義、以和萬邦、以弼庶務、所謂佐天子而統大政者也、凡軍國之務、與中書令參而總焉、坐而論之、擧而行之、此其大較也、凡下之通于上、其制有六、一曰奏抄、二曰奏彈、三曰露布、四曰議、五曰表、六曰狀、皆審署申覆而施行焉、その中書の令の職は、掌軍國之政令、緝熙帝載、統和天人、入則告之、出則奉之、以釐萬邦、以度百揆、蓋以佐天子而執大政者也、凡王言之制有七、一曰冊書、二曰

制書、三曰慰勞制書、四曰發日勅、五曰勅旨、六曰論事勅書、七曰勅牒、皆宣署申覆而施行焉と見えたる兩省の職、出納の別はあれ共、大概相似たり、(門下にも出納あれど、これは納を主とす、中書にも出納あれど、これは出を主とす、)かゝれば本朝もし唐制に倣れむとならば、門下にあたる任をば、中務にこそ委ねらるべき事なるを、太政官下の旁注に、當唐尚書省、又號鸞臺とある、鸞臺は門下省なり、通典に、至于武太后、再易庶官、或從宜創號、門下省爲鸞臺といへるこれなり、また此抄の古注に、尚書門下二省、併本朝名太政官ともありて、門下をば太政官に併せたるは、いかにぞといふに、通典に、至梁陳、舉國機務、悉在中書、獻納之任、又歸門下、尚書但聽命受事而已といへる如く、中書門下は、おのづから天子に親近するゆゑに、勢強くなり、尚書は外を治めて、天子に親近せぬゆゑに勢衰へたるものなり、本朝この弊を能く察て、門下を太政官に併せたるは、當時の執政、時勢に明らかなりしに依れるが所致にて、然かしながら實學その根ふかゝりしに起れるなるべし、

さてかく門下省を太政官に併せたらむには、その門下の官人たる侍中、黄門侍郎、給事中、錄事、主事などをも、太政官の內に於て准據を取るべき事なり、然るに此抄藏人所の篇に、模異朝侍中內侍等職歟とありて、侍中を藏人の唐名とせり、(此抄のみならず、古書みな然り、)後漢書の百官志に、侍中比二千石、本注曰、無員、侍左右、贊導衆中顧問應對云々、また六典注に、漢制分掌乘輿服物、功高者一人爲僕射、後漢初亦加官、出宣帝命、入備顧問云々、蔡質漢官典儀曰、侍中在尚書僕射下尚書上、舊與中官俱止禁中、宿直廬在石渠門外、武帝時、侍中僕射馬何羅、挾刃謀逆、由是侍中出禁外、王莽秉政、復止禁中、章帝元和中、郭擧與後宮通伏誅、由是復出外とあるは、實に藏人の職に似たり、され共その以後、やう〳〵侍中の任重くなれりと思はれて、同く六典の注に、後漢侍中六人、加官有數、初從第一品、中太和末、革令正第三品、北齊因之、掌獻納諫正、及進御之職、後周天官府、置御伯中大夫二人、天子出入、則侍中左右、大祭祀盥洗則受巾、武帝改御伯爲納言、蓋侍中之職也、宣帝末、又

別置侍中爲加官、隋氏諱忠、改爲納言、置二人、正三品、掌陪從、煬帝十二年、改納言爲侍中、皇朝初爲納言、武德四年、改爲侍中、といへるに依れば、侍中は大納言の唐名たるべきなり、(藏人の唐名とせるは當らず)然るに侍中をば藏人の唐名としたる故に、大納言の下に注せずして、中納言の下に黄門、少納言の下に給事中、外記の下に門下錄事と記せり、黄門は即侍中の貳にて、いはゆる黄門侍郎なり、これを中納言に當なむには、侍中の大納言たる事、辯をまたず、かゝれば官中にて、大中少の納言、及大少外記は、門下省の官人にあたれば、尙書省の本員に准む官は、三公七辨以下也と思ふべし、(伊呂波字類抄に、大納言の下に侍中、中納言の下に黄門と注せるは、故實を失はざる書なり、)

太政官

- 太政大臣（尙書省　尙書令）
  - 左大臣（左丞相）
  - 右大臣（右丞相）
- 大納言—中納言—少納言—大外記—少外記
  - （門下省）侍中　黄門侍郎　給事中　錄事　主事
- 左大辨—左中辨—左少辨—左大史—左少史—左史生—左官掌
  - 左丞　左司郎中　左司員外郎
- 右大辨—右中辨—右少辨—右大史—右少史—右史生—右官掌
  - 右丞　右司郎中　右司員外郎
- 都事　主事　令史　書令史　亭長　掌固

〔通典二十二職官〕尚書省

秦少府遣吏四人、在殿中主發書、謂之尚書、尚主也、漢承秦置、武帝遊宴後庭、始用宦者主中書、以司馬遷為之、中間罷其官為中書之職、成帝建始四年、罷中書宦者置尚書五人、〇中略 漢初尚書雖有曹名、不以為號、靈帝以侍中梁鵠為選部尚書、於是始見曹名、總謂尚書臺、亦謂中臺、〇中略 宋曰尚書寺、居建禮門內、亦曰尚書省、（令若闕、則左僕射為省主、）亦謂之內臺、〇中略 後周無尚書、隋及大唐、皆有其制略同、凡尚書省事無不總、龍朔二年、改尚書省為中臺、咸亨初、復舊、光宅元年、改為文昌臺、垂拱元年、又改為都臺、通天初、復舊、長安三年、又改為中臺、神龍初、復為尚書省、（亦謂之南省、）

〔通典二十一職官〕門下省

門下省、後漢謂之侍中寺、（嘉平六年、改侍中寺、）晉志曰、給事黃門侍郎、與侍中俱管門下衆事、或謂之門下省、至齊亦呼侍中為門下、領給事黃門侍郎公車太學太醫等、〇中略 大唐龍朔二年、改門下省為東臺、咸亨初、復舊、至武太后臨朝、光宅初、改為鸞臺、神龍初、復舊、〇註略 開元元年、改為黃門省、五年復舊、

〔元亨釋書二十三資治表〕弘仁十三年六月、尚書省符曰、傳燈大法師位最澄奏狀言、〇中略 謹以上奏者、被右僕射宣偁、奉勅宜依奏狀者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年正月九日辛巳、右大臣基經抗表請罷大將職言云々、伏望補武弁於蘭臺、專愚忠於槐署、〇下略

〔江吏部集上天〕七言、五月五日、陪內相府池亭同賦雲峯入夏池應教詩一首、（勒新鱗臻辰、幷序、）〇中略 進營啓沃於廊廟、鸞臺踏雲、退翫風流於郊扉、鶴帳友月、

〔江吏部集中人倫〕早夏諸客賀予再兼翰林、不堪情感、聊賦一絕、（付小序）〇中略 久陪蘭省、東方朔、再入翰林、白樂天、不恥烹鮮為少吏、只歡勸醉繼前賢、

〔北山抄七〕都省雜事

外記政（○付雜穢、○下略）

初見

〔日本紀略（一醍醐）〕延喜十三年正月廿八日、前太宰大貳源朝臣（○悦）依不赴太宰府召位記、不毀留官底。○

○官底ノコトハ、令制官職總載篇、官有官省職寮等別條ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔古京遺文〕小野朝臣毛人墓志

飛鳥淨御原宮治天下天皇（○天武）御朝、任太政官兼刑部大卿位大錦上（以上面文）小野毛人朝臣之墓營造、歳次丁丑年（○天武六年）十二月上旬即葬、（以上背文）

〔日本書紀（二十九天武）〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　乙丑、是日直大參布勢朝臣御主人、誄太政官事、

〔日本書紀（三十持統）〕三年五月甲戌、命土師宿禰根麻呂、詔新羅弔使級飡金道那等曰、太政官卿等、奉勅奉宣、（○下略）

○按ズルニ、古京遺文及ビ天武紀持統紀ノ文ニ據ルニ、大寶以前、既ニ太政官ノアリシコト明ナリ、

沿革

〔職原抄（上）〕我朝天孫天降給時、天兒屋根命、（津速產靈神孫、中臣氏祖、）天太玉命、（高皇產靈神子、齋部氏祖、）奉天照大神勅、爲左右之扶翼、如今世左右相歟、神武東征之後、天下一統、二神之孫、天種子命、天富命、又爲左右、又上古無大臣號、喚執政之人、稱食國政申大夫、第十二代景行御宇、初以武內宿禰爲棟梁臣、成務御宇、初號大臣、仲哀朝、又以大伴武持號大連、大臣大連相並知政事、爾來代々有大臣大連之任、皇極天皇四年、（乙巳）始置左右大臣、（止大臣大連、）孝德天皇御宇、以中臣鎌子連始爲內臣、天智朝、擧爲內大臣、賜藤原朝臣姓、此時其位在左右大臣上、其後此官久絕、至光仁御宇、藤原良繼、魚名等任之、初次左右大臣之下、

〔制度通（三）〕唐三省　本朝太政官ノ事

本朝上世ニ大臣ノ號ナシ、執政ノ人ヲ稱シテ食國申政大夫ト云、景行天皇ノ時ニ、武內ノ宿禰ヲ

殿舎

棟梁臣トス、成務天皇ノ時ニ、ハジメテ武内宿禰ヲ大臣ト號ス、大臣ノ名是ニハジマル、仲哀天皇ノ時ニ、大伴武持ヲ大連ト號ス、是ヨリ大臣大連相並ンデ事ヲ行ヒ、代々ニ大臣大連ヲ置ケリ、皇極天皇ノ四年六月ニ、孝德天皇卽位、阿部倉橋麻呂ヲ左大臣トシ、蘇我山田石川麻呂ヲ右大臣トシテ、大連ヲ罷メラル、左右大臣ノ名是ニハジマル、天智天皇ノ十年ニ及テ、大友皇子ヲ以テ太政大臣ニ拜セラル、持統天皇ノ時ニ、高市皇子又任ゼラル、是ニオイテ三公ノ名備レリ、又天智天皇ノ八年ニ、中臣鎌子連ヲ擧テ内大臣トシ、藤原朝臣ノ姓ヲ賜フ、文武天皇ノ令ヲ撰ミタマフ時ニコノ官ナキニヨリテ、是ヲ令外ノ官ト云、

〔續日本紀 二十一 淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝、○中略奉勅改易官號、太政官、總持綱紀、掌治邦國、如天施德、生育萬物、故改爲乾政官、太政大臣曰大師、左大臣曰大傅、右大臣曰大保、大納言曰御史大夫、　十一月辛卯、御乾政官院、行大嘗之事、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年三月丙戌朔、乾政官奏曰、○下略

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年九月丙辰、勅、逆人仲麻呂執政、奏改官名、宜復舊焉、

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年八月庚戌朔、加太政官少納言一員、　四年二月己巳、加少納言一員、

〔日本後紀 十七 平城〕大同四年三月己未、加左右辨官各四員、

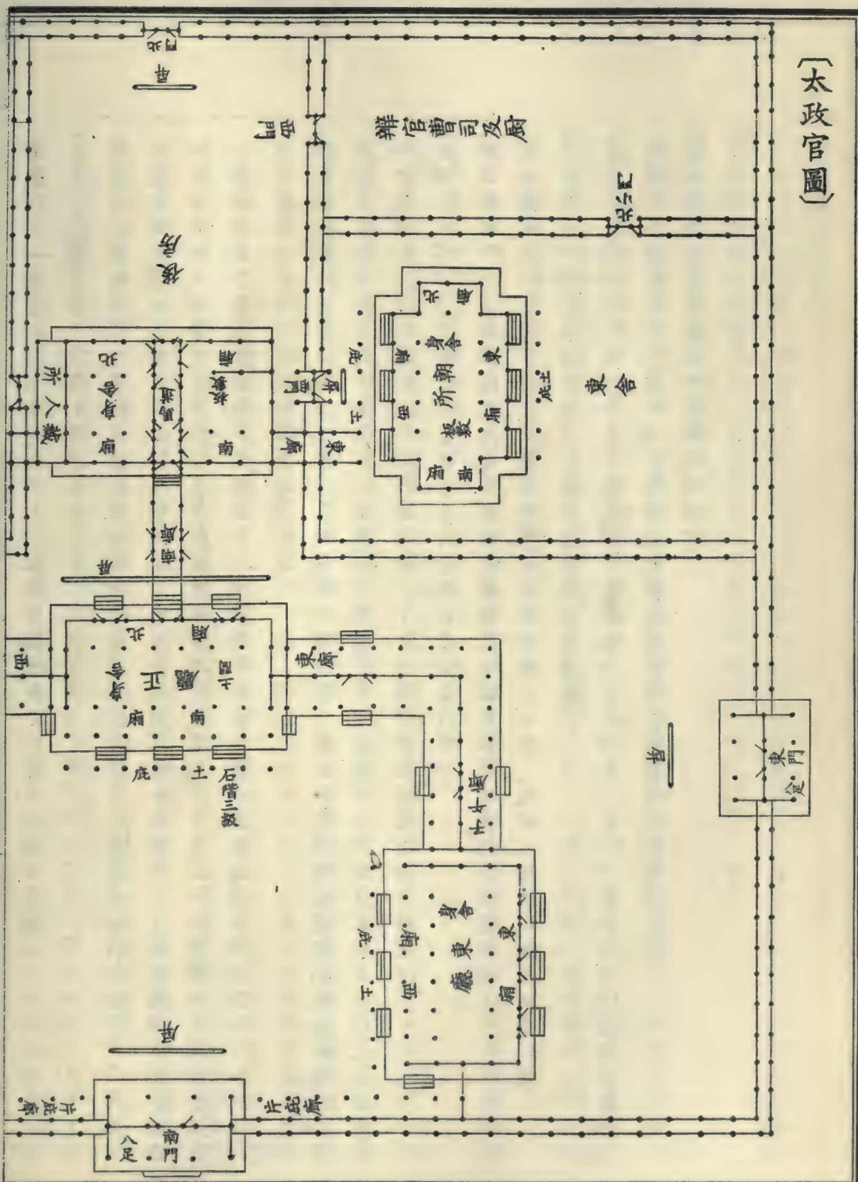
〔類聚國史 百七 職官〕弘仁四年十月甲辰、公卿言、據檢職員令、少納言三員、○中略而大同年中、量事繁劇、令員之口口更加少納言一員、○中略古今異宜、增減隨時、伏望省減後加、一依令條、許之、

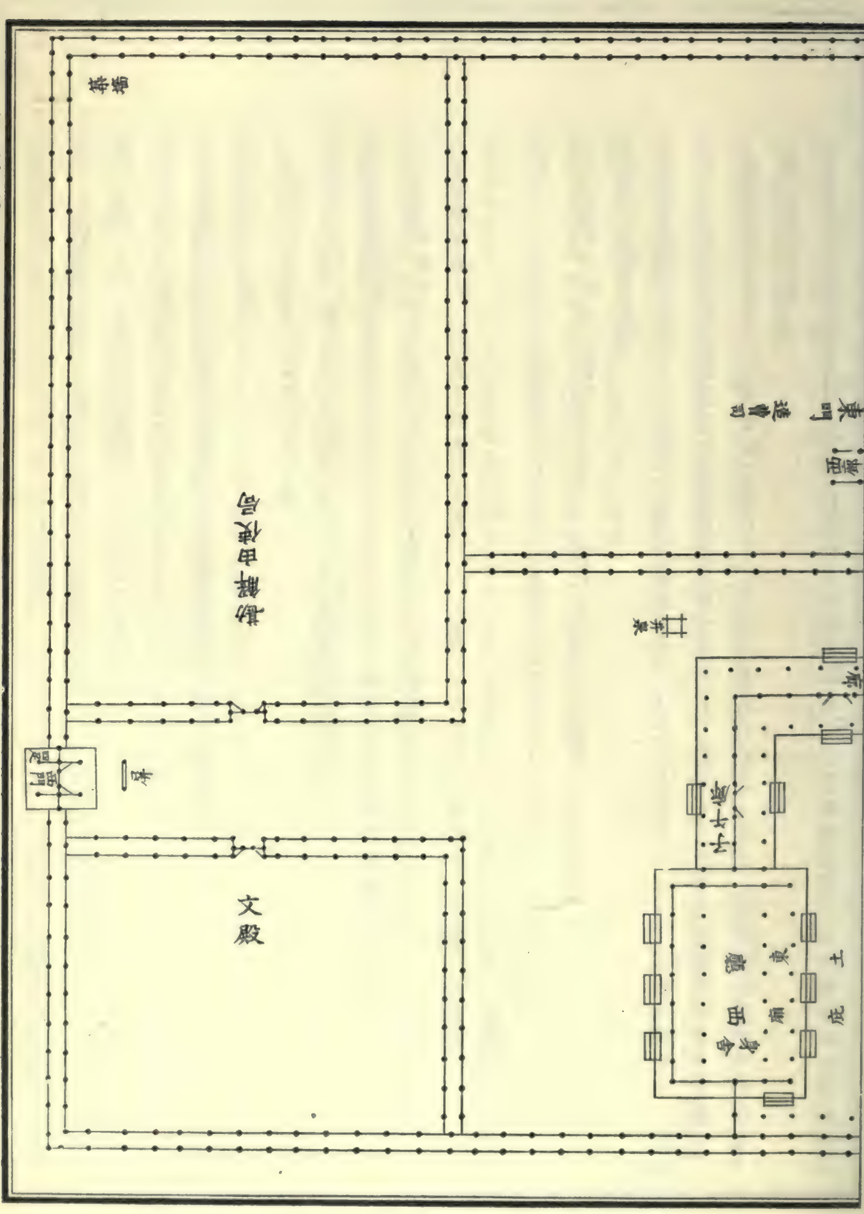
〔拾芥抄 中本 百官〕太政官(中略)宮城内、郁芳門大路北、美福大路西、

〔山城名勝志 一〕官廳

二水記曰、官廳當時田畠也云々、指南抄云、官廳の跡内野也、春日と大炊御門の間也、壬生の西、坊城の東、四まち也、于今有、

〔太政官圖〕




文殿

官廳

〔大內裏圖考證太政官二十上〕正廳　諸書作㆓官廳㆒又作㆓正廳㆒作㆓曹司㆒、三代實錄及貞觀儀式延喜式作㆓曹司廳㆒、貞觀儀式作㆓廳又作㆓曹子㆒、延喜式作㆓曹子㆒又作㆓上廳㆒、西宮記作㆓官曹司㆒、

〔儀式九〕二月十日於㆓太政官廳㆒申㆓三省考選目錄㆒儀

當日平旦、中務式部兵部三省輔、各引㆓丞一人㆒、進㆓太政官㆒候㆓於南門㆒、(掃部寮預鋪㆓床子㆒)辨官未㆓申㆒政之前、三省輔各率㆓丞㆒、(輔執㆓考目錄㆒、丞執㆓選目錄㆒、)自㆓官掌前㆒北向經㆓辨官廳前㆒、登㆓自㆓廳西側階㆒、各當㆓床子㆒立、

〔西宮記正月〕除目

上卿率㆓參議已下㆒、左衞門陣向㆓官廳㆒、

〔江家次第四正月〕除目下名(除目下名、往代天皇出㆓御南殿㆒有㆓召唱之儀㆒、中古以來於㆓官廳若外記廳㆒行㆑之、)

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年八月七日庚戌、太政官西廳鷺聚集、又同正廳東廳虹蜺見、

〔百練抄四後朱雀〕長久四年正月元日、節會已下、於㆓官廳㆒被㆑行之、

〔玉葉和歌集十八雜〕後深草院御時、五節はてゝ、官廳より閑院へ還御なりて後よみ侍ける、　辨內侍

雲井にてありし雲居の戀しきはふるきを思ふ心なりけり

〔百練抄五後三條〕治曆四年七月廿一日、卽㆓位卅五子太政官廳㆒、

〔代始和抄〕御卽位事

後三條院治曆四年の御卽位は、太極殿燒失の後、いまだ造作なきによりて、太政官廳にして行れ侍り、其後安德天皇治承四年の御卽位も紫宸殿にして行はる、これも大極殿燒失せしが故なり、後鳥羽院元曆元年は、又太政官廳にして卽位の事有、それより後は、一向に官の廳にて行はるゝ事となれる也、

〔本朝世紀〕仁平元年三月廿八日己亥、今日列見也、中納言公能卿、參議資信朝臣、著㆓太政官廳㆒行事、依

雨無申文、西廳顚倒、無列立所之故也、又雅樂於正廳内奏音樂、

〔江次第抄五二月〕釋奠

安元三年〇治承元年二月廿九日、〇二月廿九日恐八月十日誤釋奠、於太政官廳行之、依大學寮炎上也、安元三四廿八火初以南門爲廟門、以正廳爲廟堂、後以東廊北戸爲廟門、以北爲内以朝所爲廟堂、近代以東廊北戸爲廟門、以南爲内依無朝所、以正廳爲廟堂也、都堂之儀、幷百度座宴穩座等、皆以正廳爲其所、

〔源平盛衰記十三〕入道信嚴島幷垂迹事

治承四年四月廿二日、新帝〇安德御即位アリ、此御事大極殿ニテ被行事ナレドモ、去シ治承元年ニ燒ニシカバ、後三條院延久ノ例ニ任テ、官廳ニテ有ベカリシヲ、右ノ大臣兼實計申サセ給ケルハ、官廳ハ凡人ニ取ハ公文所也、大極殿ナカラン上ハ、紫宸殿ニテ可被行ト被仰ケルニ依テ、即其ニテゾ有ケル、

〔山槐記〕治承四年八月七日丁亥、今日釋奠也、〇中略大學寮火事已後、於官廳所被行也、廟倉被燒、仍前頃所奉渡也、以正廳爲廟堂、以西廳爲都堂、

〔玉海〕文治三年九月十八日丙辰、此日潔子内親王高倉院皇女、當今之御姉妹也、御年九歲、禊葛野河、即參大神宮之日也、於官廳被行此儀、

〔三長記〕建仁元年七月十三日辛酉、參院、以辨掌侍奏條々、〇中略官廳修造事、仰可勘功程尋成功輩、十八日丙寅、官廳修造損上功程事二萬疋、仰可尋付任官功、廿五日癸酉、參院、以辨内侍奏條々、〇中略官廳修造事、仰猶相構可尋付成功輩、廿九日丁丑、以辨内侍奏條々、官廳修造事、仰可給功、爲官沙汰、相構可修造之由可仰國宗、八月十二日己丑、參院、以越中掌侍奏條々、〇中略官廳修造事、仰猶可尋付成功輩、十七日甲午、入夜大夫史國宗宿禰來、官廳修造事也、馬大夫永資被止位記、可造營之由申請、其外成功尋盡了云々、十八日乙未、辰剋參院、以越中内侍奏兩條、官廳修造、永資被止位

記可勤仕事、　仰敍爵後經年序了、猶可尋他功、　廿日丁酉、參殿下、以季宗申官廳修造等事、　廿三日庚子、今日光親又參水無瀨殿、申吉書云々、次第參著之間、兩度之官廳修造事、大江永資(馬允、建久八年敍爵)止位記可造營之由宣下之間、且可召仰之旨、仰權大夫史國宗了、件修造事、去月十日、群行藏人方事可奉行之由被仰下、其翌日、兼可有沙汰事等注進之中、最前申之、而先可仰御卽位時造國司等之由被仰下、各遁避、次可尋付成功輩之由被仰下、國宗相共東西南北雖相尋、無所望之者、次可給功、爲國宗沙汰可修造之由被仰下、此事背普通之例、爲大夫史沙汰、勤如此之事、何時例哉、國宗私力難及之由言上、攝津國住人馬大夫永資、被止位記者、可修造之由擧申之、奏聞之處、經年序之後、被止位記之條不可然、仰可然、但國宗申云、群行日、若雨降者、御座一帖不可敷之、偏如露地云々、雖不雨降、後房無板敷、日數已迫了、仰天者、昨日以愚札達此子細於內府許、及闕如者、止位記可召付之由被仰下也、仍下知也、　廿五日壬寅、參殿下、以季宗申條々、官廳修造、永資止位記被召付事、仰神妙、(〇下略)

〔皇帝紀抄〕(八順德)建保二年四月十日、被移結政於太政官廳、爲修理外記廳也、

〔皇帝紀抄〕(八順德)建保四年八月廿八日、自戌時及子刻大風、(〇中略)官廳南門、大炊寮門等顚倒、

〔岡屋關白記〕貞永元年十二月二日丁巳、今日攝政(〇藤原教實)巡檢太政官廳云々、　五日庚辰、是日天皇(〇四條)卽位於太政官廳(貞觀、康保、治暦、治承等之外、代々於大極殿有此事、元暦以來於此官皆行之、)

〔岡屋關白記〕建長三年七月十九日丁丑、今日豐受大神宮禰宜等、於官廳被召問造宮事、

〔園太暦〕康永三年八月廿一日、今日先聖先師已下御影、自官廳入御仙洞、官廳破壞之後、件像奉安置仙洞(〇花園)念誦堂、

〔薩戒記〕應永卅三年七月廿二日甲寅、相伴德大寺大納言、藏人左少辨資親等參官廳、歷覽所々、爲參明日政始也、

〔建內記〕文安四年二月廿五日丁巳、釋奠下丁不快停止事、(〇中略)

東廳

當時官司云正廳云西廳去々年大風以後上葺未及修治去々年八月釋奠御影被浸雨座主講論之時擁笠上卿已下沾朝衣了東廊一向顚倒縱有修理職候假屋今已微雨臨期不休者頗可失禮儀廟像濕損有其恐仍招引親長令談合可被停止歟之由被令伺申及黃昏被觸停止之由了

〔和長卿記〕明應十年（○文龜元年）四月廿九日丁未依番參內頭右中辨賢房朝臣相談云昨日自關白（○藤原冬良）御申詞到來先日依有勅問之事參申訖其議者來十月可被行御即位（○後柏原）之儀但應仁亂來官司以下諸司廳等無其所當時建造又不可事行於里內紫宸殿可被行哉否間事也云々仍被御申詞取索之

一條關白御申詞官司幷由奉幣山陵使事

御即位官廳造立難事行之間於紫宸殿被行否事即位者朝家重事禮本也以短慮雖難述是非竊案先蹤大極殿大禮雖爲本儀燒失之後被移行太政官正廳今度又官廳就無基趾於紫宸殿被行之條於理無妨者乎凡如當時者縱雖無例猶可被用新儀已有兩度跡何論例之吉凶哉（○下略）

〔儀式 九〕太政官曹司廳敍任郡領儀

當東廳中階南柱去壇五尺立輔降立標當同廳南階南柱立丞錄降立標（去壇同上）掃部寮同廳西廂立輔丞錄床子（○中略）輔以下錄已上參入自屏東頭就東堂座（輔升自中階丞錄升自南側階）訖省掌率國郡司等入自屏西頭列立（○中略）每足十人省掌曰直立郡司稱唯當西廳南階北頭列立

〔大內裏圖考證 二十中 太政官〕東廳　貞觀儀式作東堂

〔儀式 十〕太政官曹司廳任出雲國造儀

當日早旦掃部寮預設座（辨大夫西廳式部東廳西廂）

〔江家次第 八 八月〕小定考事

於官東廳行之（往年大辨以下少納言等著近例不然只昨日考所辨史所著也著純方帶靴等由見致方辨記近代不然）辨入自東廳東西中戶著座（西面）史

入自同南戸、著辨座以南座、(北面)外記史生一人、(壹考文筥、謂史生官掌考也、)官史生一人(持硯筥)自南砌趍進、至西廂北第二間立、(東面)

〔今昔物語二十七〕參官朝廳辨爲鬼被噉語第九

今昔、官ノ司ニ朝廳ト云フ事行ヒケリ、其レハ未ダ曉ニゾ火燈シテ人ハ參ケル、其ノ時ニ史□□ノ□□ト云ケル者、遲參シタリケリ、辨□□ノ□□ト云ケル人ハ、早參シテ座ニ居タリケリ、其ノ史遲參シタル事ヲ怖レテ忩ギ參ケルニ、中ノ御門ノ門ニ、辨ノ車ノ立タリケルヲ見テ、辨ハ參リニケリト云フ事ヲ知テ、官ニ忩ギ參ルニ、官ノ北ノ門ノ內ノ屛ノ許ニ、辨ノ雜色小舍人童ナド居タリ、然レバ史、辨ノ被早參ニケルニ、我レ史ニテ遲參シタル事ヲ怖レ思テ、忩ギテ東。ノ。廳。ノ東ノ戸ノ許ニ寄テ、廳ノ內ヲ臨ケバ、火モ消ニケリ、(○中略)史、主殿寮ノ下部ヲ召シテ火ヲ燃サセテ、廳ノ內ニ入テ見レバ、辨ノ座ニ赤ク血肉ナル頭ノ髮所々付タル有リ、史此ハ何ニト驚キ怖レテ傍ヲ見レバ、笏沓モ血付テ有リ、亦扇有リ、辨ノ手ヲ以、其ノ扇ニ事ノ次第共被書付タリ、疊ニ血多ク泛タリ、他ノ物ハ露不見、奇異キ事無限、而ル間ニ夜曉ヌレバ人多ク來リ集テ見喤ケリ、辨ノ頭ヲバ辨ノ從者共取テ去ニケリ、其後東廳ニテハ朝廳ヲ不行ザリケリ、西。廳。ニテナム行ヒケル、然レバ公事ト云乍ラ、然樣ニ人離レタラム所ニハ可怖キ事也、此事ハ水尾ノ天皇(○清和)ノ御時トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔本朝世紀〕天慶元年八月十八日壬辰、少納言辨外記史著東廳、行史生考選事、

〔日本紀略(六圓融)〕天祿二年五月二日丙申、今日申剋、辨官東廳虹立、仍令占之、

〔左經記〕萬壽三年四月九日乙卯、於官東廳可召問眞舒宿禰、其儀北第四間母屋敷辨座、(追東殿之西面)次南間史座、次南間史生座、(前有硯等)同間官掌座、(皆西面北上)當史座西母屋廂壇上敷召人座、(東西)廳南西北面等列布幔、(大藏列幔、掃部敷疊)及未剋參入、經廳壇上入自中戸著、史以下同著座、(史生)二人(重基、季光、官掌一人、)吉政余眞舒可召

西廳

之由示史、史召官掌、(二音)官掌起立西廂、基信仰之、卜子山村宿禰眞舒召(セ)、官掌准下、自南腋階、於南門外召之、眞舒昇自西面南階著座、官掌於本座仰座席正可候之由、史次第問國解所申之五箇條事、眞舒耳頗不聞者、仍以官掌近居令傳仰所問文旨、及子刻事了歸宅、　十七日癸亥、早旦依御消息詣按察大納言御許、被命云、祭日所乘單中張弛錦縫塗鍍金銀、而於非違使等不糺過之、慥可召問、余申云、於何所可問哉、命云、申關白殿可左右者、卽參殿事由仰、於東廳可召問歟者、參大納言御許申此由、廿六日壬申、參御堂、(○中略)被仰云、使官人等於官東廳可被問之由云々、俗云、於東廳被問之人不宜者、因之怖畏之云、內々愁歎云々、公家被咎仰之旨、敢不可陣避、一兩度間不參者、推而可召怠狀之由、可申行歟、

〔大內裏圖考證(二十中太政官)〕西廳　貞觀儀式作辨官廳、　西宮記及左經記作朝廳、

〔儀式(十)〕八月十一日太政官廳定考儀

當日早旦、辨官申政、訖考選、少納言辨以下列立西廳南端、

〔西宮記(臨時四)〕官西廳座

廳母屋西邊立比獨床子、前机爲辨座、以下北上東面、左辨北、右辨南、史南北面立床子(左史北、右史南、)史生官掌左右居史後、(史生座前居朱漆韓櫃硯等、見朝廳儀也、)左右辨各入自南北戶、參議大辨入自中戶、

〔江家次第(十八臨時)〕官結政

官掌下居自床下、辨侍居於井巽角、進前登自西廊西面階、(史先平伏)南行登西廳北壇上、揖跪脫沓著座揖、

〔左經記〕寬仁四年十二月廿七日癸卯、巳三刻入自官西門、於廊下著靴、行自壇上、入自西廳西面北戶、經立蔀地妻幷少辨兀子後著兀子、座席不溫之間、起揖自本道退出歸室町、次歸高倉家、官掌幷使部五六輩陪從、雖然依宣旨著座之時不給物云々、仍給之明日可著朝廳之由仰下部等、令催供奉所司等、

〔本朝世紀〕康治二年二月三日辛酉、今日太政官西廳、爲大風顚倒、

〔台記〕康治二年五月廿五日辛巳、巳一剋參官、依列見也、○中略去比西廳、東廳南門等顚倒、今日各打幄、史生等就此內、此內者西廳

辨官廳

〔類聚國史〕帝王二十八大同四年三月己巳、緣修宮殿、欲遷御於辨官廳、而役夫一人自辨官南門墜死、仍停焉、

〔文德實錄〕八齊衡三年四月辛丑晦、虹見辨官廳前、

官曹司

〔儀式〕九四月十五日授成選位記儀

其日早旦、二省錄各率史生省掌等、就官曹司廳各立標、自常版北進四尺、式部省置宣命版、自此南去二丈、東折五尺、立輔標、南去一丈立丞錄標四枚、○註略兵部輔以下標在西方、一准式部、

〔延喜式〕太政官十一凡百官庶政、皆於朝堂行之、但三月十月旬日著之、正月二月十一月十二月並在曹司。行之、

凡左右辨官一人、向上廳。受事、若左事右受、右事左受者、並令相知、但受事辨施行、

凡太政官考選文者、八月一日、少納言辨外記史等別當、勘抄成案畢、長上考文、十一日申大臣、其儀大臣已下、就曹司廳考選、

凡成選廳敍位者、奏短冊後、預書位記、式部四月十日、兵部十三日請印、十五日大臣已下就朝座、二省率應敍人就標位、辨大夫宣命、○註略畢敍人稱唯、再拜舞蹈、○註略二省互唱名授之、於曹司廳行之亦同、

凡造館舍所者、太政官曹司、辨外記候所、大臣曹司、及厨等類、別當少納言辨外記史、及預、太政官辨官史生各一人、二年爲限、二月相替、別當先檢破損、隨行料物、其所修繕、且加勘定、若有臨事不了之輩、不必待限、將從改替、

〔西宮記〕二月十一日列見

弘仁五年、天皇○嵯峨御官曹司、

〔三代實錄清和一〕天安二年十月二日己丑、公卿不就太政官曹司廳、承前例、於仗頭賜次侍從已上飮、是日隨停止、以諒闇也、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年四月十五日丁未、公卿就太政官曹司廳、賜文武官成選位記、

〔三代實錄清和十一〕貞觀七年八月十七日乙丑、屈六十僧於太政官曹司廳、限以三日、轉讀大般若經、

大臣直廬

〔西宮記臨時五〕一所々事

宿所大臣納言宿廬職曹司也、見國史也、

一大臣宿所〔在宜陽殿東庇、○又見拾芥抄〕

〔三代實錄清和十九〕貞觀十三年四月十八日甲午、太政大臣〔○藤原良房〕重抗表曰、〔○中略〕陛下不許臣就私第、賜直廬於禁中、〔○下略〕

〔田氏家集上〕於右丞相〔○右大臣藤原良相〕省中直廬、讀史記竟、詠史、得高祖、應教、〔○詩略〕

納言曹司

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜八年三月戊辰、幸大納言藤原朝臣魚名曹司、賜從官物有差、

〔台記〕仁平元年二月十日辛亥、今日師業申曰、勘外記日記、〔○中略〕天長元年十二月九日記云、大納言緒嗣有身病、久蟄愛宕第、今年春有勅語、令近侍宮城邊、行政務、自四月五日遷曹司居住、在太政官厨家西町、令給上日云々、

〔日本紀略淳和〕天長二年二月己丑、右大臣〔○藤原冬嗣〕外曹司町北方公地、造作大納言休息局、

辨官曹司

〔類聚國史帝王二十八〕弘仁七年二月甲子、遷御於辨官曹司、以修造禁中也、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年四月七日丙辰、是日有大鳥、集於參議正四位下行左大辨藤原朝臣山陰、辨官曹司前、爲人被射獲、

〔本朝世紀〕天慶元年九月廿八日壬申、中納言藤原實賴卿、參議藤原顯忠朝臣、著辨官曹司廳聽政、依有任郡司事、　十月一日甲戌、少納言以下就辨官曹司廳結政所、仍中納言藤原實賴卿參來東門之

朝所

間、以召使令申參議障由、因之直著侍從所座、仍無政、

〔日本紀略村上三〕天暦二年十二月十日甲申、今夜群盜入左少辨好古曹司、掠取襍物、仍自今夜、仰諸衛令夜行、

〔權記〕寬弘二年十二月九日癸未、內侍所神鏡、日者御官左大辨曹司、今日奉移東對、

〔伊呂波字類抄安居所〕朝所官廳アイタトコロ

〔倭訓栞前編二阿〕あいたんどころ　東鑑に朝所をよめり、太政官にありといへり、北山鈔にも見ゆ、

〔玉勝間九〕朝所

朝所を常にはあいたんどころとよむを、中務內侍日記には、あしたどころと所々に書たり、あしたを音便にあいたんとはいふなるべし、玄をいといふも、んをそふるも音便のつね也、

〔延喜式十一太政官〕凡太政官考選文者、〇中略參議以上著朝食所、少納言辨大夫等候之、厨家儲酒饌、

〔西宮記二月〕十一日列見

上卿已下起出、〇註略著朝所、アイタン主造曹司脫靴辨少納言外記史、列立朝所東廂、南上西面、或辨少納言北上西面、外記史南上、就中辨少納言立南一二間、外記史立北三四間、上卿以下入自西戶、揖分著座、大臣者自北一間上下、納言自北階、參議南階、雖納言著東、昇自南階、外記史著北壁外饗、辨少納言昇著、有非參議大辨者、追入自西戶北著、

〔北山抄七都省雜事〕列見定考、朝所幷穩座、左右大辨共獻盃、一獻二

〔江家次第五二月〕列見二月十一日

著朝所

辨少納言以下、先到此所著座、〇中略辨少納言以下列立於母屋東庇地、辨少納言立於南一二間、北上西面外記史立於二三間、南上西面、大夫外記史同立、

〔公事根源二月〕列見　十一日

朝所并に宴穩座につきて儀式あり

〔西宮記二月〕十一日列見

仁和四年二月十一日列見云々、了大臣已下就朝所座、(謂史食所)及未剋廚家別當史、覽見參於左大臣、訖各分散、依今年諒闇、不著宴座穩座等、

〔本朝世紀〕天慶元年八月十七日辛卯、於辨官廳有定考事、(中略)右大辨紀淑光朝臣、從結政所獨移著朝所、

〔九暦〕天暦三年二月十一日、列見參官、左大臣(藤原實賴)來著座、仍予候看者、須於東廊著靴、而進北屏、皆是失也、廳間作法無外者、至朝膳所先著納言座、而依民部卿催著南面座、

〔本朝世紀〕長保元年六月十四日乙丑、今夜亥剋許、從修理職內造木屋發火災、內裏悉以燒亡、(中略)天皇(一條)乘輿、八省院從東廊南行幸、著太政官北門、寄御輿朝所、次開所々雜舍等、候諸卿幷殿上人、于時右大將藤原道綱卿、奉尋求春宮坊御所、此間御縫殿寮、子剋許移渡太政官、于時天皇御在所以東舍、爲春宮御所了、　十五日丙寅、依去夜內裏燒亡、無尋常政、御天皇太政官朝所、因之諸卿候終夜、

〔百練抄一條四〕寬弘二年十一月十五日、內裏燒亡、宸儀御職曹司、依破壞遷御官朝所、

〔百練抄三條四〕長和三年二月九日、內裏燒亡、天皇御朝所、

〔左經記〕寬仁四年二月十一日癸巳、參官司、依列見也、(中略)以著朝所、一獻左大辨、二獻右大辨、三獻左中辨、四獻余、

〔左經記〕萬壽三年二月十一日戊午、依列見、(中略)余參官、上達部於朝所食事之間也、仍不著此所、暫徘徊西廊邊、

〔行親朝臣記〕長暦元年二月十一日、列見也、(中略)次二省列見、次著朝所、二獻後粉熟、三獻飯、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕寬德三年(○永承元年)二月廿八日、太政官朝所火災、天皇遷幸大膳職、(○又見百練抄)

文殿

〔枕草子 八〕こゝろもとなきもの

故殿〈○藤原道隆〉の御服のころ、六月卅日の御祓といふ事に出させ給ふべきを、しきの御さうしは方あしとて、官のつかさのあいたん所にわたらせ給へり、其夜はさばかりあつくわりなき闇にて、何事もせばふ瓦葺にてさまこと也、例のやうに格子などもなく、只廻りてみすばかりをぞかけたる、中々めづらしうをかし、

〔百錬抄 十後鳥羽〕文治元年四月廿五日戊寅、戌時神鏡璽自鳥羽入御、座朝所、

〔玉海〕文治三年八月廿九日丁酉、晩頭大夫史廣房來、〈○中略〉此次持來官廳指圖、違延久例事等三箇條申之、〈○中略〉

一主上御休息所事

延久朝所也、而今御卽位之時、以後房爲御所、今度於後房可裹幣、仍任延久例、猶可用朝所歟、

仰、可用朝所、

九月十八日丙辰、此日潔子内親王〈高倉院皇女、當今之御姉妹也、御年九歲、〉禊葛野河、卽參大神宮之日也、於官廳被行此儀、〈○中略〉余乘御之後、出自東面北門乘車、自閑路參會、入自郁芳門辨官東門參朝所、中央間廣庇東西柱下迫長押擧燈、〈○註略〉卷庇御簾内侍二人、〈伊與辨、此中辨掌侍兼帶裹之役、蓋例也、〉候母屋中央間左右柱外、他女房四五人、候東北庇邊也、西間母屋儲大床子、中間儲平鋪御座、座東西北三方立大宋御屛風、南庇西門副端東西行敷兩面端疊爲余座、除東三箇間〈母屋二間、東庇一間也、〉之外、以西三箇間庇不懸簾、母屋懸簾、〈垂之、〉南庇第三間西面〈余座西面也〉同懸簾、〈上也〉東庇東面同懸簾、〈垂之〉前庭東南兩面引所司幔、中央有幔門、具在指圖、

〔皇帝紀抄 八後堀河〕元仁元年閏七月九日、於官廳朝所奉圖孔子御像、

〔勘仲記〕弘安十一年〈○正應元年〉正月八日甲子、自今日被始行八省御齋會、〈○中略〉以朝所爲道場、

〔延喜式 十一太政官〕凡太政官及左右文殿雜書、不得出閫外、

官庫

〔西宮記二月〕十一日列見

延長九年（〇承平元年）二月十一日列見云々、先例著廳上饗座、而此度依諒闇不設饗并宴座、不召樂人、又三局史生饗儲文殿云々、

〔本朝世紀〕長保元年三月七日庚申、此間太宰府貢上雨米一裹、湧出油一瓶等奏聞、卽上卿覽了、下給辨官文殿已了、

〔本朝世紀〕久安四年正月十九日戊寅、今日戌時、外印被納官文殿、少納言源俊長、權少外記中原長俊、史生藤井俊貞等參仕、取出印櫃納官文殿、是則修造外記廳之故也、依內大臣宣也、

〔壬生家文書一〕文殿

勘蘭韓神社注進可被造進神殿御鎰武具例事

右件例宜令勘申者、引勘文簿之處、件鎰不被修造神殿之時、臨時被造進之例無所見、但去永久二年八月、大原野社神殿四宇金物并鎰等、爲盜人被放取之由、彼社司所言上也、仍以榮爵一人敍料可造進之狀、同三年六月十八日被下宣旨、隨以件敍料被造進既了、仍勘申、

治承二年五月十一日　右史生秦信久（〇以下人名略之）

〔百練抄十三後堀河〕嘉祿二年八月廿七日、去夜官文殿（五間瓦葺）燒亡、累代文書皆爲灰燼、經數百歲未燒之所也、御齋會本尊者、自百濟國奉渡、已燒失了、末代之極歟、（〇又見皇帝紀抄）

〔季連宿禰記〕天和二年正月一日庚戌、早旦於官庫令心念、次讀書始、（延喜式太政官式〇〇〇〇）次吉書始、

陽春嘉慶、四海太平、王道武道、尤長久而、天恩神恩彌增長、家門繁昌、官庫再興、文書安全、萬端滿足、心中快樂、仍試筆如件、

天和二年正月一日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史筭博士小槻宿禰季連

官厨

〔延喜式二十六主稅〕凡五畿內伊賀等國地子、混合正稅、其陸奧充儲糒并鎭兵粮、出羽狄祿、大宰所管諸國、

充₂對馬嶋司公廨₁之外、交₂易輕貨₁、送₂太政官厨₁、自餘諸國交易送亦同、但隨近及緣海國舂₂米運漕₁、其功賃便用₂數內₁、

凡諸國交易雜贄、直用₂地子₁者、以₂太政官厨返抄₁勘會、

〔延喜式十一太政官〕凡厨家雜物、別當外記史、與₂諸司₁共出₂納之₁、諸司謂₂監物主計₁、

〔類聚符宣抄六〕應₂交易厨雜用料細布₁事

右被₂右大臣宣₁偁、厨家用料地子是足、而至₂于件布₁、更請₂官物₁、於₂事論₁之、甚非₂道理₁、宜₂支₁度年中用料₁、仰₂所₁出國₁交易令₂進、永以爲₂例者、

弘仁三年十二月廿八日　少外記船連湊守奉

〔政事要略五十三〕太政官符厨家

應₂勤₁行雜事五箇條₁事

一依₂式例₁可₂行₁年中例用幷色々雜事等₁事在₂式例別₁

右得₂厨家去延喜十二年八月十三日解狀₁偁、檢₂案內₁、年中所₂納、每色有₂限、例用之數、何充₂色目₁、而延暦十八年十月廿一日、只定₂大辨以下、季料米數幷兩雜事₁、未₂有₂子細條例₁、仍履行之間、尙多₂疑殆₁、望請具立₂式例₁、永以遵行者、大納言正三位兼行右近衞大將藤原朝臣忠平宣、依₂請₁、〇中略以前條事、所₂充如₁件、厨家宜₂承知、依₂宣行₁之、符到奉行、

右中辨藤原朝臣　右大史酒井宿禰

延喜十四年八月十五日

〔三代實錄一淸和〕天安二年十二月十三日庚子、是日公卿於₂侍從所₁飲酒、五位以上預₂席者八十餘人、以₂太政官厨家綿₁、賜₂上下各二屯₁、

〔三代實錄十九淸和〕貞觀十三年五月廿九日甲戌、太政官厨贈₂酒饌₁、饗₂造₂應天門₁工匠以上、公卿會飲、竟₂日

乃罷、

〔日本紀略醍醐〕昌泰二年正月廿八日壬戌、太政官厨家艮角有火、不延滅、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月二日乙巳、諸卿不參、仍無政、今日二省爲請印成選位記、丞錄率史生已下參來厨家、又依例辨備小饌、

〔本朝世紀〕長保四年十月六日丁卯、巳剋、左大臣、春宮大夫藤道綱卿、○中略昭訓門南腋座北上、少納言辨外記史等著同南隔座、上卿無酒饌、儲少納言辨外記史座等官厨儲饗、

〔百練抄後冷泉四〕永承二年十二月廿四日、渡唐者清原守武配流佐渡國、○中略件守武、大宰府召進之、於貨物者、納官厨家、

〔百練抄堀河五〕永長元年十二月十四日、太政官厨家燒亡、

〔朝野群載別奏八〕厨家

差進氷事

合

一斗　神分料　　三斗　釋奠料

二石五斗　關白殿下御料　　二石　左大臣御料

二石　右大臣御料　　二石　內大臣御料

五石　大納言五所御料各一石　　五石六斗　中納言七所御料各八斗

四石八斗　宰相八所御料各六斗　　六斗　右大辨御料

三石二斗　中少辨少納言八所御料各四斗　　一石五斗　外記五人料各三斗

二石四斗　史八人料各三斗　　一石二斗　內記四人料各三斗

三斗　外記史生食所料　　三斗　官史生食所料

永久四年六月一日　　案主日下部行友
　　　　　　　　　　永長藤井兼久

〔本朝世紀〕仁平二年二月廿五日庚寅、今日御賀試樂也、在別先是權大納言公教卿、參議教長朝臣、資信朝臣著仗座、被發遣御諷誦使於十二箇寺、是依御賀事也、○中略於官厨家有施米事、依同事也、

〔壬生家文書〕一太政官厨家下　若狹國國富庄司等
可任將軍家政所御下文永停止地頭非法濫行條々事○中略
建保四年十一月日　　案主文殿紀花押
別當右大史中原花押　　預右史生中原花押
　　　　　　　　　　　左史生高橋

造曹司

〔拾芥抄〕中末宮城諸司厨町
官厨家中御門北堀河西一所別納一條南

〔西宮記〕二月十一日列見
著廳諸卿、立北屏外著靴、於造曹所可著、雨日大臣於東廊著靴、

〔江家次第〕五二月十一日列見
上以下一々立、自上出造曹司脫靴、入自朝所西戸、

〔本朝世紀〕正暦元年八月廿七日己巳、此日惟宗爲重、右少史肥田維延、小槻奉親等著結政座、中納言源重光卿、同保光卿、權中納言同伊陟卿、參議同時中卿、藤原佐理卿、參著東廊床子座、剋限起床子座、於造曹司所著靴、廳座有申文、

〔左經記〕長元四年十一月二日乙亥、前日右府、召式部權大輔擧周朝臣於里第、被仰來月朔日賀表可作之由云々、奉仰草案奉之、仰大外記文義能書令清書、白色紙云々、先令文義覽關白殿給云々兼又召仰官厨家史

令儲敷物料錦臥組等、又仰造曹司所可令作函并下机等之由、同被仰史云々、

〔台記〕康治二年五月廿五日辛巳、巳一剋參宮、依列見也、（○中略）列見了著朝所、予於朝所西門外替沓、納言以下、於造曹所替之、

〔台記〕天養二年（○久安元年）閏十月十八日己未、依先日召、權右中辨朝隆朝臣（裝束使）來、仰可令作賀表案宮花足、令設錦臥組丸緒之由、（案宮花足、造曹司作之、錦臥組丸緒、官厨家設之、）色目寸法等書一紙給之、其寸法等依延久例、

〔玉海〕文治三年八月廿九日丁酉、晚頭大夫史廣房來、（○中略）此次持來官廳指圖、違延久例事等三箇條申之、

一幣裏所事

延久造曹司也、而當時無其屋、仍准小安殿例、於後房可裹歟云々、

仰可然、

〔大內裏圖考證〕（二十一太政官）外記廳

在所　諸圖職曹司南

〔西宮記〕（臨時八）官外記廳座（及官東廊床子座等事、各皆見他記也、）

大臣著座、座皆立之倚子、（內大臣不立倚子）倚子下敷蘆蓆、有太政大臣者、左右大臣座立南面、納言以下隨著座立之、著座人昇進之時、重著座之日撤舊座、不著座之間不改本座、著座人昇進後不著座之間、舊座尚立本所、復任人早著者、雖下﨟其座各立舊座上、小野大臣任右大臣為大納言之時、尚在本所、九條大臣任大納言著座日、其座立小野大臣之舊座上云々、（近代新舊次第立之）

〔江家次第〕（十八臨時）外記政

召使曳外○○記門北扉、（此間下外記北蔀）

若上﨟不申障者、曳戶之後、一剋相待、但始著政日不可然歟、若無參議、以召使令觸在結政大辨、示

可被著廳、

近例上卿著廳後、召使申大辨、仍不待返事、上卿入自外記門、經廳西庇中間、直入小屋、(召使追前、官掌在結政、云鳴高、)其外人西庇南砌列立、(北面東上)召使一人放列、入小屋內、上卿著深履、(上卿從者一人同入小屋)出小屋頗東進、揖而入廳後、次々諸卿次第如此、(在上之者入小屋後、次々東進、)上卿入廳後中戸、(大臣用東戸、參議用西戸、)著座、(從座下方著之)自餘次第著畢、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月十三日庚子、公卿於外記候廳聽政、自文德天皇崩後、於近衞陣頭聽辨官所申之政、今日始復常儀、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年六月十七日壬辰、是日太政官候廳前、晨見鬼跡、所謂候廳者、公卿聽政外記所直侍之處也、

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年十一月三日甲子、太政官候廳成、此廳在帝宮建春門東、大臣已下、尋常聽政之處也、始置之後、積代破損、命木工寮加修理、先是大臣已下、於太政官曹司廳視事、今日始就候廳、公卿會飲、五位已上並侍、終日酣飲、極歡而止、以厨家及大藏省錢給預席者、各有差、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月十九日戊戌、先是自太上天皇(○清和)崩、公卿於仗下聽辨官政、是日就太政官候廳(謂外記廳也)聽常政、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月庚戌朔、是日撤却太政官候廳茵疊、施倚子床子、復常、

〔百練抄四冷泉〕安和二年九月廿四日、黃牛入外記廳、(○中略)東行落出去畢、

〔日本紀略六圓融〕天延三年十二月廿一日戊午、今夜外記局文書、自然燒失、可謂物怪、後朝奏之、可令轉讀金剛般若經者、

〔左經記〕長元元年七月九日壬寅、參關白殿、(○藤原頼通)被仰云、一日烏咋損外記廳納言倚子疊等云々、十一日甲辰、大夫外記賴隆眞人云、昨日於廳、以十二口僧令轉讀仁王經、佛本自奉持外記局奉懸、如

此之時料佛也、

〔定家朝臣記〕天喜六年（○康平元年）二月五日、中納言殿（○藤原師實）御著座也、（○中略）渡御外記廳、

〔百練抄（五鳥羽）〕保安三年十二月十五日、外記廳、侍從所、修造以後、始有政、

〔百練抄（六崇德）〕長承三年四月廿五日、外記廳結政南所、修造之後有請政、

〔台記〕保延二年十月十六日庚戌、今日予（○藤原賴長、權大納言）著座之後、始參政日也、（○中略）入外記門、隨身發前音、召使前行、左兵衞督、大貳相從、入外記門、從廳西庇中間入小屋、前驅盛定持深沓來、凡盛定外、外記門中、前驅隨身等不入、著深沓之間、予見扇次第、著了後、出從外記門、次予出小屋、左兵衞督、大貳等、廳西庇內列立、（北面）次予出小屋、南向ニ立テ相揖、入從北面中戸著倚子、（從座下方著之、如恒、○中略）頃之予起座、（座下方ヨリ立ナリ）出從中戸テ西行テ、出從廳西庇中間出外記門、（此間召使相從）出外記門之時、門ノ北ノツラヲ出ナリ、當門北柱西向立、去北柱事三四尺許也、先揖辨少納言、辨少納言答揖、次向戌亥揖外記史、（辨少納言ノ揖ツルヨリハ淺ク揖也）外記史答揖、次向南揖左兵衞督、大貳、（辨少納言ノ揖ツルヨリモフカク揖也）左兵衞督、大貳答揖シテ南行經樹東、予同經樹東行、召使相從、隨身發前、先下﨟テ行也、次入南所門、次左兵衞督、大貳等、門中南ニ列立、（北面）予入門時、隨身等留入門、向南揖左兵衞督、大貳等、人々答揖、次從屋西砌北行天、入自北面第二間、著淺沓、（盛定持來淺沓、令著改深沓、即出了、凡門中、前驅隨身不入、）入自西戸、立沓脫下揖テ昇、沓脫上脫沓テ著座、（南面西上）次左兵衞督、大貳等來著、次辨少納言來、著南庇座、（東上北面）少納言召大舍人令居饌、大舍人居饌、召使役送、

〔台記〕久安三年七月廿七日己丑、範家來、仰新年穀奉幣事、可定申之由、令奏明日可定之由、又奏云、去廿一日、外記廳顚倒、早可被修造歟、他舍及南所、同以朽損相加、以受領重任若遷任之功被修造、可宜歟、又此次、官東西廳南東門被造可宜歟、（南廳南門、先年顚倒、東門纔殘、然而如無、）又先年、外記修理之間、於廳行政云々、今度可准彼例歟、範家歸來云、明日可定申奉幣事之由聞食、又外記廳、及他舍南所、官東西廳、朝所南、及東門令勸功程可奏、又此間政、於官可行者、

〔百練抄 十後鳥羽〕建久三年七月十二日壬午、今日天神御筆、自蓮華王院被返納外記局、

〔大外記良業記〕元久元年十二月廿六日甲寅、今日被立太政大臣御倚子於官外記廳、家司掃部頭中原師季參向、

〔名目抄 殿舍〕假粧間(ケシヤウノマ)〇〇〇 在外記廳

〔大内裏圖考證 二十一外記廳〕假粧間

年中行事畫外記政始圖、假粧間、在結政乾、東西一丈、南北二丈、屋制片庇、西注東面、片塀連北塀、北塀二間、又假粧間、乾有塀、東西行一丈餘、

〔新任辨官抄〕辨申障之時、史於結政申大辨云、某辨朝臣障申、少辨申次之、別假粧間之間進入外記門之辨若爲上﨟者、歷列後立加、

〔中右記〕大治五年三月四日丙午、今日初請印也、〇中略 外記使部冠取印唐櫃、居印盤 授官召使、於假粧間稱譽授之

〔名目抄 殿舍〕南所(ミナミドコロ)〇〇 在外記廳

〔本朝世紀〕長保元年閏三月四日丁亥、中納言藤原時光、參議同齊信朝臣、著廳座聽政、無申文、畢移著南所座、

〔左經記〕寬仁元年十二月廿七日辛卯、今日午剋、大殿〇藤原道長 御倚子立官外記廳幷南所、敷御座云々、

〔新抄〕文永元年三月十三日戊子、外記廳文殿屋修理之間、御物等被渡南所云々、

〔名目抄 殿舍〕小屋(コヤ)〇〇 在外記廳

〔西宮記 臨時六〕外記政在廳例

上卿入自西庇中間、入小屋、著床子 以下列立西庇南砌下、東上、雨日深入立、 上卿入門內之間、官掌居結政座唱鳴高、仍下外記南舍牛 從者執深沓、入小屋中取淺沓出、召使同入後近代 從者出、〇註略 上卿出小屋 小倚東面而南面揖下﨟 揖下﨟次第著座、

〔本朝世紀〕天慶四年八月十七日甲辰、中納言藤原師輔卿、參議源高明朝臣、伴保平宿禰、依刻限著廳、少納言外記史生隨身印盤、列立中門外、外記擬爲注申之間、上﨟權中納言源淸蔭卿、俄直入于召使小屋內、著靴著廳、少納言外記等列立之間、中納言師輔卿、起廳床子、入小屋內脫靴、參入於內裏、

〔愚昧記〕仁安四年(○嘉應元年)正月十九日丙子、政始也、(○中略)入外記門、入南廂中間、於小屋戸前著深沓、須入戸內著也、然而依無已次人如此、(先是朝家取深沓入小屋)

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町

外記町(中御門北、大宮東二町、但勘解由小路南修理職町云々、)

外記曹司

〔類聚符宣抄六〕文譜

　皇親籍三卷

　勘出帳一卷

　　並延曆八年作

右外記曹司無有件書、而今四部之書在正親司、望請取彼一部、以爲官料、

　弘仁十二年十一月四日

結政所

〔延喜式十一太政官〕凡式兵二省、請印准蔭成選等位記、先令印廿帳已下、後更定日、參議於辨官結政所捺、了、

〔大內裏圖考證二十一外記廳〕結政

西宮記、作外記南舍、　北山鈔、及江次第、作結政所、　公事根元、及續後拾遺和歌集、作可多奈之、

西宮記、及台記、作結政屋、　權記、作局屋、

諸書　年中行事畫、外記政始圖、結政北面東西廿三間、(但第五第六間小間、)方楹東第一間無壁及戸、第二第三第四間粉壁、第五間片妻戸、第六間小蔀、第七第八間並蔀、第九第十間並粉壁、第十一及第十二

第十三間並蔀、

〔倭訓栞前編六加〕かたなし　江次第に結政所をよめり、かたね成の義なるべし、延喜式に於辨官結政所捺印と見ゆ、除目などの數通の文を、一つに束ねて結固むるを、かたぬるといふ也、

〔續後拾遺和歌集十六雜〕外記廳結政座に、古宮の柱の今に殘れるを、まつりごとのついでに見てよめる、

中原師光朝臣

いにしへのならの都の宮ばしらこのかたなしに猶のこるかな

〔新撰六帖二〕もゝしき　右大辨入道光俊

立よりて先袖みせしかたなしの軒の下こそわすれがたけれ

〔新撰六帖六〕かうか　左京權大夫信實

世々に絕ぬおほうち山のかたなしに古き合歡の梢をぞみる

〔延喜式三十大藏〕凡應出給者、皆隨符到、其出給總目、每明日朝、進結政所、

〔江家次第十八臨時〕結政請印

結政所、左右大辨座中間程、敷參議座半帖、

〔建武年中行事〕十一日、○正月より、あがためしの除目おこなはる、○中略第三日、○中略上卿ゆばにすゝみて、藏人に付て鬼間にて奏す、內侍是をとりて奏す、下名やがてつけをこなはるれば、上卿かたなしに向ひて行ふなり、○中略

政始、九日なるべけれど、此比は日を撰てあり、○中略辨少納言外記史かたなしにて事ををこなふ、上卿召あれば大辨もちやうにつく、かたなしの事はてゝ、南の所にて勸盃あり、

〔本朝世紀〕承平五年六月二日乙丑、參議左大辨平時望朝臣著結政所衙、後左大臣參入、

〔本朝世紀〕天慶五年四月二日乙卯、少納言橘朝臣實利、權少外記多治文正、率史生等令持印、著辨官

外記文殿

西廊結政所座、

〔江家次第 十八 臨時〕結政請印

少納言率外記并史生等、向外記文殿、令出印、

〔皇帝紀抄 八 後堀河〕元仁元年二月廿七日、申剋結政文殿屋顚倒、日來破損之故歟、

官印

〔令義解 七 公式〕外印、方二寸半、六位以下位記、及太政官文案則印、

〔制度通 五〕印章ノ事

本朝之制、有內印、有外印、有諸司印、有諸國印、○中略 外印ハ官ノ印ナリ、ソノ文太政官印ト云、

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年九月乙巳、是夜押勝○惠美仲麻呂走近江、 丙午、高野天皇○孝謙勅、今聞逆臣惠美仲麻呂、盜取官印已逃去者、忝爲人臣、飽承厚寵、寵極禍滿、自陷深刑、仍復劫略愚民、欲爲悖倖、若有勇士自能謀計、急爲剪除者、卽當重賞、又北陸道諸國、不須承用太政官印、

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜八年五月己巳、自寶字八年亂以來、太政官印收於內裏、每日請進、至是復太政官、

〔宋景濂羅山集 四〕賦日東曲十首

其二

藤橘源平族四家、連城甲第競豪華、治書省內多官使、黃牒紛紛簇五花、藤橘源平國中四大姓、治書省乃官署名、有尙書侍郎、郎中主事及鴻臚卿丞之屬、其印文曰太政官印、

〔異稱日本傳 中 三〕治書省、尙書省之訛、我太政官當唐尙書省、八省百官悉屬太政官、非有尙書侍郎郎中主事及鴻臚卿丞之屬而已矣、其印文曰太政官印、太政官符所用之印文也、

職員職掌

〔令義解 一 職員〕太政官 謂太政官內、總有三局、少納言、左辨官、右辨官是也、大納言以上、卽兼通攝也、

太政大臣一人

右師範一人、儀形四海、謂師者、教人以道者之稱也、範者法也、儀者善也、形亦法也、四海者、九夷八狄七戎六蠻也、經邦論道、燮理陰陽、謂燮者和也、理者治也、言太政大臣佐王論道、以經緯國事、和理陰陽、則是有德之選、非分掌之職、爲无其分職、故不稱掌、設官待德、故无其人則闕也、无其人則闕、

左大臣一人、掌統理衆務、謂臨時大事也、假令公式令論奏式所言之事、不由辨官、直申大臣、考選令任官奏之類也、擧持綱目、謂陳其大綱、綱目必擧也、其諸國之事、由辨官者、辨官受取、申於大臣、大臣位高任重、不可細碎、故唯擧其大綱、持其總目也、總判庶事、謂官內尋常小事也、唐令云、總判省事也、故彈正糺不當者、兼得彈之、右大臣一人、掌同左大臣、大納言謂納言、王者喉舌之官也、言納下言於上、宣上言於下也、四人、掌參議庶事、謂與右大臣以上共參議天下之庶事、若右大臣以上雖无者、卽大納言得專行、其兼彈者、雖是左右大臣、尚不得爲職掌、故職掌之末、別起而注、卽大納言雖大臣以上並无、不得兼彈之、敷奏、謂敷陳也、奏進也、宣旨、侍從、獻替、謂君所謂可而有否焉、臣替其否、以成其可、君所謂否而有可焉、臣獻其可、以替其否也、少納言三人、掌奏宣小事、謂公式令所謂請進鈴印、及賜衣服、如此少事之類是也、請進鈴印傳符、進付飛驛函鈴、兼監官印、謂唯得監視踏印、其者、依律長官執掌也、印其少納言在侍從員內、大外記二人、掌勘詔奏、謂勘正詔書、及勘造奏文也、及讀申公文、謂上日行事之類、讀申於少納言也、勘署文案、檢出稽失、少外記二人、掌同大外記、史生十人、掌繕寫公文、行署文案、謂行官人所取文案署也、餘史生准此、左大辨一人、掌管中務式部治部民部、謂其餘不被管、諸司、亦各隨事分隸左右也、既辨官管八省、井八省管寮司、未知有別以否、答、辨官管省者、因事管隸、不常監臨、故律云、太政官、官雖管國郡、文案若無關涉、不得常爲監臨、內外百司准此、其省者、於寮司常爲監臨、故律云、所統屬官、謂省管寮、國管郡之類也、受付庶事、謂依令、受事一日受、二日付了是也、糺判官內、署文案、勾稽失、謂勾官內稽失也、其被管稽失亦同也、知諸司宿直、謂被管諸司宿直也、當司宿直者、自依神祇大祐例也、依令、京官開門前上、閉門後下、宿衞官不在此例、卽明宿衞官者、不入諸司宿直之例也、諸司朝集、若右辨官不在、則併行之、右大辨一人、掌管兵部刑部大藏宮內、餘同左大辨、左中辨一人、掌同左大辨、右中辨一人、掌同右大辨、左少辨一人、掌同左中辨、右少辨一人、掌同右中辨、左大史二人、右大史二人、左少史二人、右少史二人、左史生十人、右史生十人、左官掌二人、掌通傳訴人、檢挍使部、守當官府、廳事鋪設、右官掌二人、掌同左官掌、左使部八十人、右使部八十人、左直丁四人、右直丁四人、巡察使、掌巡察諸國、不常置、應須巡察、權於內外官、取淸正灼然者充、謂部司軍毅等、不在此限也、巡察事條、及使人數、臨時量定、

〔令義解 四考課〕最條

獻替奏宣、議務合理、爲大納言之最、

承旨無違、吐納明敏、爲少納言之最、
受付庶務、處分不滯、爲辨官之最、謂少辨以上、○中略
勤於記事、稽失无隱、爲主典之最、

〔令義解考課四〕凡內外初位以上長上官、○中略具顯功過、三位以上謂一品以下、其右大臣以上不在考例也、奏裁、

〔職原抄上〕凡諸官有長官次官判官主典也、假令太政官大臣爲長官、納言爲次官、少納言辨爲判官、史爲主典也、餘可准之、太政官長官、行節會任之、納言已下主典以上者、除目任之、史生官掌者、判授官也、然而太政官者其寄異他、仍史生官掌猶爲重職、

〔簾中抄下百官〕太政官
太政大臣　左大臣　右大臣　內大臣　大納言五人正權　中納言八人　參議八人　少納言二人　外記四人大少　大辨二人左右　中辨二人左右　少辨二人左右　中少辨の間に權辨一人あり、又博士の辨一人は必ず加はる、　史八人大四人左右少四人左右　史生廿人　官掌四人

〔故實拾要十〕大臣公卿員數
大臣三人、太政大臣ハ此外也、關白在此中、　大納言十人此中ニモ關白ノ人アリ、是攝家ノ大納言ノ時、　中納言十人、參議八人、都合三十一人、是ヲ現任ノ公卿ト號シテ、天下萬機ノ政ヲ執行フ仁體也、

〔令義解官位一〕親王一品太政大臣　二品左右大臣　三品四品大納言　諸王諸臣正一位從一位太政大臣　正二位從二位左右大臣　正三位大納言　從四位上階左右大辨　正五位上階左右中辨　左右少辨正五位下階　從五位下階少納言　正六位上階左右辨大史　正七位上階大外記　左右辨少史　從七位上階少外記

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年二月丙辰朔、勅中納言、准格正四位上、此則職掌既重、季祿尙少、自今以後、宜改爲從三位官、○又見類聚三代格、令集解、

三公

〔江家次第四正月〕除目清書事
四位參議任中納言者、書從三位後給位記、
〔職原抄上〕中納言
　相當三位也、四位參議任之時、執筆人卽書從三位、
〔有職拾葉下〕中納言相當從三位　唐名黃門
武家ノ中納言ハ、大略正三位也、
〔職原抄上〕參議八人相當正四位下
〔拾芥抄中本官位相當〕從四位上參議、令不見、
〔有職問答三〕一參議事
位は何れの相當候哉、兼官には如何成官をいくつ計兼候哉、證據を位署に被遊下度候、從四位上相當也、自三位至二位爲相當之條勿論、
〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年五月丁亥、太政官奏偁、外記之官、職務繁多、詔勅格令、自此而出、至於官品、實合昇進、其大外記二人、元正七位上官、今爲正六位上官、少外記二人、元從七位上官、今爲正七位下官、臣等商量改張、伏聽天裁、奏可之、○又見類聚三代格、令集解、
〔類聚名義抄十雜〕大臣オホイマウチキミ
〔八雲御抄三下異名〕大臣　かげなびく　ほしの階　おほぬし　みかさ山　おとゞ
〔拾芥抄中本官位唐名〕大臣相府　蓮府　槐門　丞相　僕射　三槐　三台　槐庭　蓮幕　大相國　太平侯　東閤　黃閣　三族　象岳　濟川　鹽梅
〔名目抄諸公事言說〕三公サムコウ太政大臣、左右大臣、
〔職原抄上〕太政官
　太政大臣一人、○中略　左大臣一人、○中略　右大臣一人、○中略
　已上謂之三公、

異朝三公者、皆則闕之官也、爲師傅保職、棟梁于諸官、鹽梅于帝道者也、是故三公無所職、置六卿令掌天下政、秦漢以來、有相國左右丞相之號、既知庶政、異于古三公也、三公者象天之三台星也、三槐者、周世外朝植三槐、三公班列其下、槐者懷也、懷遠人之義也、

〔故實拾要十〕三公

太政大臣、左大臣、右大臣、是ヲ三公ト云也、但シ太政大臣ヲ闕キ置ルヽニ依テ、當時ハ內大臣ヲ加ヘ、是ヲ三公ト云也、但內大臣ハ令外ノ官也、太政大臣アル時ハ、不任內大臣、內大臣アルトキハ、不任太政大臣、是雖無其謂例也、但太政大臣ハ多クハ是贈官也、又三公ハ三台ノ星ニ象ル也、

〔有職小說中官職〕三公　太政大臣左右大臣ヲ云、前漢天文志云、三台六星兩々而居、在人爲三公、在天爲三台云々、本朝ノ諺ニ、天子ヲ一人、太子ヲ一人、關白ヲ一所、相國ヲ一人、左府ヲ一上、右府ヲ一人ト云、醍醐帝ノ御宇ヨリ起レリトゾ、

〔制度通三〕唐三省本朝太政官ノ事

本朝三公ノ職、唐官ニ配當スルトキハ、周ノ制幷ニ唐ノ三公ヲ以テイヘバ、太師、太傅、太保ニ準ズ、孝謙帝ノ時改號、コレヲ以テ擬セラルヽナルベシ、唐ノ制ヲ以テイフトキハ、尙書省ハ太政官ニアタル、尙書省ノ長官、貳官ヲ尙書令、左僕射、右僕射トイフ、實ニ本朝三公ノ任ナリ、然ドモ唐ノ時ニハ、尙書令ハ三省ノ長官ニテ宰相ノ任ナレドモ、三公ノ員數ニアラズ、宰相ハ必僕射ヲ兼レドモ、僕射ハ宰相ノ官ニアラズ、本朝ノ法ト同カラズ、大抵本朝唐ニヨリテ官制ヲ立ラレタレドモ、此等ノ事ハ唐ノ法ヨリ簡ニシテ正シク、三公卽宰相ノ任ナリ、名實相副フテ重複虛設ノ弊ナシ、又相國、丞相、冢宰等ノ名ハ、古今ノ沿革、時ニヨリテ同カラザレドモ、何レモ首相ノ任ニシテ、本朝ノ太政大臣ニ準ズベシ、

官制ノ事、通ジテ之ヲ考フルニ、古今ノ間、年代オシウツリタルユヘニ、古ノ官權ナシトイヘド

モ廢シガタク、新シキ官、事ニアタリテ設ケ置カザレバ、カナハザルニヨリテ、カクノゴトク重複スルコトナリ、周漢ノ時ニハ、三公天下ノ事ヲ取行フテ、コノ外ニ執柄ノ官職ナシ、後漢コノカタ、中書、門下、尙書等ノ權盛ナルニヨリテ、三公虛位トナル、唐ノ時ニ及テハ、三公虛位タルノミナラズ、三省モ又後漢南北ノ時ノゴトクニアラズ、是ニオイテ平章事、同三品等ノ職出來リテ政事ヲ掌ル、杜佑ノ奏議ニ云、舊名不廢、新資日加ト、卽コノ事ナリ、モシ夫本朝ノ制ハ、上世簡朴ノ後ヲ承テ、新ニ一王ノ大法ヲ立ラレ、唐ノ禮法ニヨリ本ヅキテ、兼テ古今ヲ參ヘ考フ、太政官ハ尙書省ニナズラヘ、其長官ヲスグニ三公トシテ、別ニ師、傅、保ノ名ナシ、中務省ハ中書省ニ準ズトイヘドモ、是ヲ八省ニ列シテ、又門下省ヲ置カレズ、此唐ノ三省、本朝ニ在リテハ、タヾ一官ニテ事ヲ治ムルユヱンナリ、

〔倭名類聚抄五職名〕太政大臣　本朝式職員令云、太政大臣、於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美

〔類聚名義抄十一〕太政大臣オホマツリコトノオホマヘツキミ

〔古今和歌集一春〕そめどのゝきさきのおまへに、花がめにさくらの花をさゝせたまへるを見てよめる、

さきのおほきおほいまうちきみ〇藤原良房

としふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし

〔大鏡三左大臣仲平〕このおとゞ、〇中略貞信公〇藤原忠平よりは御兄にあたらせ給へど、廿年まで大臣になりをくれ給へりしを、つひになり給へれば、おほきおほいどの〇太政大臣藤原基經の御よろこびのうた、〇下略

〔玉勝間一〕官名の事

和名抄に、太政大臣は於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美とあるは、字につきてまうけられたる訓也、中昔の書どもには、おほきおほいまうちぎみ、又はおほきおとゞなどいへるは、右の訓あ

まり長き故に、政の字をのぞきたる訓也、また左右大臣は、於保伊萬宇智岐美とあるも、官名につきてまうけられたる訓也、但し萬豆岐美、萬宇智岐美は、古の稱にて麻閇都岐美なるを、音便に然いふ也、まへつぎみといふこと、書紀の景行卷の歌に見えたり、

〔伊呂波字類抄太官職〕太政大臣従一位大師太傅大尉大任司徒司空大相國

〔拾芥抄中本官位唐名〕太政大臣大師大傅大保巳上三師大尉司徒司空巳上三公、今世云大相國、唐尚書都省、尚書臺、尚書府、晉大師、大傅、大保、謂之三公、

〔下學集上官位〕大政大臣（ダイジヤウダイジン）大相國又相國

〔運歩色葉集多〕太政大臣（タイシヤウダイシン）唐名大相國府、亞相、僕射、蓮府、槐門、

〔嚴島文書〕散位源頼信解、申敬一宮權現卅三社御前□□貢□傳領三田郷田畠林栗栜桑等、傳領公驗立券等代々文書事、〇中略
但大常大臣殿〇平清盛爲御壽命長遠、以每年當十二月每月御神樂料申上了、敬白、
仁安二年六月十五日　　散位源頼信花押

〔唐六典一三師三公〕太師一人、正一品、　太傅一人、正一品、　太保一人、正一品、〇註略
三師、訓導之官也、其名卽周之三公、漢哀平間、始尊師傅之位、在三公上、謂之上公、明雖天子必有所師、其後或廢或置、大抵無所統職、至後魏特稱三師、以正其名、然非道德崇重、則不居其位、無其人則闕之、故近代多以爲贈官、皇朝因之、其或親王拜者、但存其名耳、
太尉一人、正一品、〇註略　司徒一人、正一品、〇註略　司空一人、正一品、〇註略
三公、論道之官也、蓋以佐天子、理陰陽、平邦國、無所不統、故不以一職名其官、然周漢已來、代存其任、自隋文帝罷三公府僚、皇朝因之、其或親王拜者、亦但存其名位耳、

〔唐六典一尚書都省〕尚書令一人、正二品、〇註略
尚書令、掌總領百官、儀刑端揆、其屬有六、尚書法周之六卿、一曰吏部、二曰戸部、三曰禮部、四曰兵部、

五曰刑部、六曰工部、凡庶務皆會而決之、初秦變周法、天下之事、皆決丞相府、置尚書於禁中、有令丞、掌通章奏而已、漢初因之、武宣之後、稍以委任、及光武親總吏職、天下事皆上尚書、與人主參決、乃下三府、尚書令爲端揆之官、魏晉以來、其任尤重、皇朝武德中、太宗初爲秦王、嘗親其職、自是闕不復置、其國政樞密、皆委中書、八座之官、但受其成事而已、

〔田氏家集中〕元慶五年冬大相國〇太政大臣藤原基經以拙詩草五百餘篇始屏風十帖、仍題長句謹以謝上、〇詩略

〔日本紀略六圓融〕貞元元年十一月二日甲子、今夜太政大臣〇藤原兼通從朱雀院遷坐閑院、件所右京大夫藤致忠所領也、而大相國堀川院、依天皇遷幸令近也、

〔權記〕正暦三年七月廿八日己未、拔出無音樂、依大相國〇太政大臣藤原爲光此年六月十六日薨事也、

〔台記〕久安六年八月廿一日甲子、傳聞右大臣實行任太政大臣、內大臣雅定任右大臣、右大將實能任內大臣、〇中略太政大臣、內大臣、先參候皇后宮御方、待節會畢進弓場奏賀、太相國直出、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年三月廿三日、上皇〇後白河自入道大相國〇前太政大臣平清盛福原亭還御、

〔田氏家集中〕見藤右軍新書大相府〇太政大臣藤原基經屏風因有寄呈、

〔本朝世紀〕天慶元年九月十二日丙辰、早朝大納言平伊望卿、參會太政大臣家、被相定雜事、先是大丞相〇藤原忠平召大外記三統公忠、〇下略

〔興福寺緣起〕法華會

右會於南圓堂所行也、弘仁八年閑院贈太政大臣大閤〇藤原冬嗣奉爲先考長岡相府諱名內丸所始行也、

〔九暦〕天暦三年正月十一日、午終請客使侍從延光朝臣來、卽參向、延光特前驅拜禮如常、初獻式明親王勸尊者、主人勸納言、次第理可然而已、相違太閤〇藤原忠平敎命給祿如例、　八月十四日、太閤薨御事、

〔小右記〕寛仁二年十二月十五日癸卯、參大殿、先著饗座、太閤〈○藤原道長〉攝政〈○藤原頼通〉大納言已下如昨、飮食後着堂前、朝夕講了、太閤攝政及諸卿、戌終許參院、院御息所產七夜也、

〔本朝世紀〕仁平元年十二月一日丁卯、法成寺御八講第一日也、禪門大閤〈○藤原忠實〉幷左相府被參入、以爲見物、

〔江吏部集〈上居處〉〕夏夜同賦池臺卽事應敎

常在李門員外職、久陪蓮府姜根塲、

〔愚昧記〕仁安四年〈○嘉應元年〉正月八日乙丑、今日欲參院、酉剋許、出蓬門、先向蓮府〈○太政大臣藤原忠雅〉亭、

〔源平盛衰記〈六〉〕小松殿敎訓父事

御身ハ既ニ先祖ニモ未拜任ノ例ヲキカザリシ太政大臣ヲ極メサセ御座上、又大臣ノ大將ニ至レリ、所謂重盛ナド暗愚無才之身ヲ以、蓮府槐門ノ位ニ至ル、

〔徒然草〈下〉〕さうふれんといふ樂は、女男をこふるゆゑの名にはあらず、本は相府蓮、文字のかよへる也、晉の王儉大臣として、家にはちすをうゑて愛せし時の樂なり、これより大臣を蓮府といふ、

〔職原抄〈上〉〕太政大臣一人

師範一人、儀形四海、無其人則闕云々、故云則闕之官、有德之撰、故非其人者、常不任之、又無職掌之官也、太政大臣行公事希例也、〈雅實大臣在官時、依別勅内辨敍位除目等被勤之、〉

〔後松日記〈四〉〕太政大臣は、おさ〳〵參內もせず、靑馬踏歌の宴にも預からで、これらを皆私第にてみるなり、又野の行幸などにも、多くは供奉せず、〈仁和二年昭宣公は供奉し給へり〉鷹などにかゝづらひては、太政の德薄きに似たる故なるべし、天皇御元服の加冠は必太政大臣なり、〈攝關といへども、加冠し奉ることを得ず、〉こは有德の撰によるものなり、

〔三代實錄〈三十九陽成〉〕元慶五年二月廿一日己亥、太政大臣〈○藤原基經〉拜職之後、日讓上表、其間太政官奏事

多藝、公卿議定、令辨大夫就太政大臣直廬、(以職院爲直廬)始白庶政、此後爲例、

〔三代實錄 四十五 光孝〕元慶八年五月九日戊辰、有勅令諸道博士等、勘奏太政大臣有職掌以否、幷當大唐何官、　廿九日戊子、是日左大臣正二位源朝臣融奉勅、於左仗下、喚從五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣道眞、正五位下行博士善淵朝臣永貞、從五位下行助敎淨野朝臣宮雄、中原朝臣月雄、少外記大藏善行、右少史兼明法博士凡春宗、大內記菅野朝臣惟肖、明法博士忌部濬繼等、問勘奏之旨、於是所言各異、詞有詳略、式部少輔兼文章博士菅原朝臣道眞奏議曰、一太政大臣職掌有無事、謹案紀傳之書、無太政大臣之文、唯本朝職員令義解云、太政大臣、卽是有德之選、非分掌之職、爲無其分職、故不稱掌、如此文者、先師之釋、更無可疑、一太政大臣史傳之中、相當何職事、謹案漢書表云、相國掌承天子助理萬機、丞相同之、大尉大師大保、皆在其下、後漢書志云、太傅上公一人、掌以善導、無掌職、大尉司徒司空、共在其下、晉書志云、丞相非常人臣之職、相國同之、太宰太傅太尉司徒司空、並在其下、宋書志云、太宰所以訓護人主、導以德義也、太傅太保同之、就此等文案之、相國太傅丞相太宰等、位冠百僚、掌殊常職、本朝太政大臣、可當漢家相國等、又唐六典云、三師訓導之官、大抵無所統職、無其人則闕之、三公論道之官、無所不統、故不以一職名其官、已曰無所統職、又稱無其人則闕之、可以唐三師當太政大臣、唯我朝制令之意、大乖大唐令條、何者唐令三師三公、獨專其官、不備尚書省之官員、我朝太政大臣、雖無分掌、猶爲太政官之職事、斯其所爲大乖也、博士善淵朝臣永貞等奏議曰、一職掌有否事、尙書周官曰、太師、太傅、太保、玆惟三公、論道經邦、燮理陰陽、據此文、師傅保三公、雖云殊名分掌、共是論道經邦、燮理陰陽之任也、本朝職員令云、太政大臣、師範一人、儀刑四海、經邦論道、如此令者、文辭出於周官、義旨歸於三公、然則太政大臣職掌、可謂相當三公、又公羊傳曰、天子三公者何、天子之相、自陝而東者周公主之、自陝而西者召公主之、世子相處于內、疏云、天子之三公主黜陟、周禮鄭玄注云、三公者內與王論道、中參六官之事、外預六卿之敎、據此文、非唯補袞職之闕、調恒若之愆、抑亦參機務、主

黜陟、乃斯三公之所行也、但此間之成式、未必皆如周家、至於行事、非可指言、一相當大唐何官事、唐令云、太師、太傅、太保、右三師、師範一人、儀刑四海、太尉、司徒、司空、右三公、經邦論道、燮理陰陽、據此文、太政大臣、兼攝三師三公者也、大內記菅野朝臣惟肖奏議曰、案令太政大臣、師範一人、儀刑四海、經邦論道、燮理陰陽、唐開元令云、太師、太傅、太保、以上三師者、師範一人、儀刑四海、太尉、司徒、司空、以上三公者、經邦論道、燮理陰陽、今如此文者、太政大臣、獨兼三師三公之最、至于正宮、無可適據、但檢周室以後唐朝以前之例、可准太師、何者五經異義云、周禮說、天子立三公、曰太師、太傅、太保、無官屬、與王同職、故云、坐而論道之三公、又宋書志云、太宰一人、周武王時、周公旦始居之、掌邦治、爲六卿之首、秦魏不嘗置、晉初依周禮、備置三公之職、太師居首、景帝名師、故置太宰以代之、太宰蓋古之太師也、殷紂之時、箕子爲太師、周武王時、太公爲太師、成王時、周公爲太師、西漢初不置、平帝時、始復置太師官、而孔光居之、東漢又廢、獻帝初、董卓爲太師、魏世不置、晉因太師而置太宰、以安平王孚居之、自晉以後、略無太師之官、至唐初置三師三公之職、以太師爲首、然則太政大臣、本朝最首之官、與周之太師、晉之太宰、唐之太師、官品職事略同焉、少外記大藏善行奏議曰、職員令云、太政大臣、師範一人、儀刑四海、經邦論道、燮理陰陽、無其人則闕、義解云、太政大臣、佐王論道、以經緯國事、和理陰陽、則是有德之選、非分掌之職、爲無其分職、故不稱掌、設官待德、故無其人則闕、又公式令云、詔書奏事等、太政大臣與諸公卿列署、據此等文、如職員令者、可謂無職掌、如公式令者、可謂知政令、但佐王論道、助理萬機、與彼左右大臣、舉持綱目、總判大(○大字恐衍)庶事差異矣、唐開元令云、太師太傅太保、右三師、師範一人、儀刑四海、太尉司徒司空、右三公、經邦論道、燮理陰陽、自三師以下、無其人則闕、大唐六典云、三師訓道之官、大抵無所統職、三公論道之官、無所不統、如此等文者、本朝太政大臣一員、兼大唐三師三公之職、然則無所統職、亦無所不統、職員令之無分職、公式令之署詔奏、蓋取於此歟、是其職掌之大較也、又周禮考工記云、國有六職、或坐而論道、疏云、論道謀慮治國之政令、此卽尙書周官云、立太師太傅太保、玆惟三公、論道經邦、燮理陰陽、是謀慮

治國之政令、使陰陽順叙也、鄭玄注周禮司徒序云、三公者、內與王論道、中參六卿之事、外與六卿之教、疏云、一公兼二卿、是其中參六官之事也、五經異義云、周禮說、天子立三公、曰太師、太傅、太保、無官屬、與王同職、漢書百官公卿表云、周禮天官冢宰、地官司徒、春官宗伯、夏官司馬、秋官司寇、冬官司空、是爲六卿、各有從屬、職掌周於百事、太師太傅太保、是爲三公、蓋參天子、坐而議政、無不總、故不以一職爲官、又云、相國掌承天子助理萬機、宋書云、太師太傅太保爲三公、訓護人主、導以德義、天子加拜、待以不臣之禮、宋百官階次云、相國自蕭何以後、殆非復人臣之位、據此等文、相當周漢三公相國及唐三師三公等之官、是其儀准之著明也、又儀制令云、在廳座上、見親王及太政大臣下座、義解云、左右大臣、見親王及太政大臣、即動座、其太政大臣見親王、及親王見太政大臣、並不動也、和銅六年十一月十六日、官宣偁、親王太政大臣、出入朝堂者、式部告知下座之事、其左右大臣動座、五位以上降立床下、餘跪座下、就座及出門訖、俱復座、是其禮數之尊顯也、但唐太宗實錄、三師三公、在親王上、又唐蕭、天子臨軒、冊授三師三公、其位次在親王上、本朝之制、與大唐殊矣、右少史凡春宗、明法博士忌部濬繼等奏議曰、職員令云、太政大臣、師範一人、儀刑四海、經邦論道、燮理陰陽、義解云、有德之選、非分掌之職、爲無其分職、故不稱掌、又云、左右大臣、掌統理衆務、擧持綱目、又公式令詔書奏事等、注太政大臣位臣姓、左右大臣位臣姓名、又式云、朝座者、昌福堂北端、太政大臣、次左右大臣、史依次讀申、每一事畢、大臣處分、依此視之、太政大臣居有德之選、非分掌之職、至于左右大臣、別立職掌、既稱無分職、似不掌政務、然而共署詔奏、同著朝座、可謂雖知行天下政、而不可掌大臣職矣、

〔三代實錄〕四十七光孝仁和元年正月丁巳朔、天皇御大極殿受朝賀、太政大臣〇藤原基經行內辨、太政大臣、儀不可行內辨、是日別有勅行之、是權時之事也、

〔本朝世紀〕天慶元年八月十五日己丑、是日太政大臣、〇藤原忠平召大外記三統公忠仰云、穢內被定齋王行禊次第使等之例、宜勘申者、勘申元慶三年八月之例已了、　廿三日丁酉、太政大臣、參入職御曹司、

大師

伊勢齋王、以來月七日可向大神宮、而陽成院穢、及宮中之後、其穢所起云々不同也、仍太政大臣、觸陣座諸卿、令定此穢事、遂召神祇官於軒廊令卜之、

〔本朝世紀〕仁平三年九月十八日甲辰、群行行幸停止之由被仰下了、依御不豫也、貞觀三年九月、右大臣良相、天慶六年九月、太政大臣貞信公、(藤原忠平)○中略參大極殿行之、兩度依御物忌無行幸云々、

〔山槐記〕保元四年正月七日壬戌、加階事、○中略內辨(太政大臣宗(藤原宗輔)也、左大臣(藤原伊通)自去年院御氣色不快籠居、右大臣(藤原基實)爲關白、內大臣(藤原公敎)申障不被參、仍太相國勤仕之、一上者不仰內辨、至于太政大臣如何、可尋記、)到東階給下名、

〔續本朝通鑑〕(六十後小松)應永元年十二月壬午、從一位源義滿任太政大臣、殊加賜兵仗、一書曰、義滿奏請曰、我解將軍之印、則補太政大臣之闕、朝議謂、以威權強任相國者、往昔則有道鏡、中葉則有清盛、共爲凶例、且源氏長者、未有武臣兼之例、義滿既帶之、則可謂極榮也、相國之望爲大過也、輙難勅許之、義滿怒曰、我守君臣之禮而奏請之、既無勅許、則自爲之耳、乃議遷帝座於隱岐國、而自稱國王、以斯波、細川、畠山准攝家、上杉、仁木、山名、一色、佐々木、赤松、土岐、武田、大內准清華、而擇諸士糺其所出、而立菅、江、橘、清、中等家、且以鎌倉氏滿任將軍、而擇陪臣顯名者、勤武士之役、則於治國家何難之有、既而議曰、官位者朝廷之所立、我不強任之、土地我所有也、先可削奪公家所領、朝廷大驚畏、而勅關白藤經嗣召佐佐木滿高、議和解之事、滿高曰、前將軍不昇則闕之官、則朝廷之危不可測也、義滿遂任相國、朝廷幸無事、由是諸公彌畏義滿、成君臣之禮、　二年正月壬寅、源義滿入朝、拜賀任相國、在京諸將群士悉從、行粧嚴重也、獻太刀、(銘國光)綾百卷、銀一千兩、虎皮十張於禁中、且贈攝家親王諸廷臣銀綾有差、群國武臣皆入洛、獻物賀之、

〔續日本紀〕(二十二淳仁)天平寶字四年正月丙寅、高野天皇(○孝謙)及帝、御內安殿、授大保從二位藤原惠美朝臣押勝從一位、○中略高野天皇口勅曰、乾政官大臣仁方敢天仕奉倍岐人無時波、空久置氏在官爾阿利、然今大保方、必可仕奉之止所念坐世、多能遍重天勅止毛、敢末之時止爲氏辭備申、復可受賜物奈利世波、祖父(○藤原不比等)仕

太政大臣禪師

奉天自、麻然有物乎知所毛無久、怯久劣岐押勝我、得仕奉倍岐官留波不在、恐止申、可久申須乎皆人仁毛之辭止申仁依氏、此官乎婆授不給止、令知流事不得、又祖父大臣乃明久淨岐心以氏、御世累氏天下申給比、朝廷助仕奉利多夫事乎、宇牟我自彌辱止念行氏、掛久毛畏岐聖天皇朝太政大臣止氏之仕奉止、勅部止禮、數々辭備申多仁夫依氏、受賜多受婆成留志事乎、悔止念賀故仁、今此藤原惠美朝臣能大保乎大師乃官仁上奉止授賜夫天皇御命、衆聞食宣、卽召大師賜隨身契、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月庚寅、詔曰、今勅久、太政官能大臣方、奉仕倍伎人乃侍坐時仁方、必其官乎授賜物仁在、是以朕師大臣禪師能朕乎守多比助賜乎見禮波、內外二種乃人等仁置天、其理仁慈哀天過無久毛奉仕之米天志可等念保之之天、末可多良比能利多布言乎聞久仁、是能太政大臣乃官乎授末都流仁方、敢多比奈牟可等奈毛念、故是以太政大臣禪師能位乎授末都留止勅御命乎諸聞食止宣、復勅久、是位乎授末都牟等頁申佐方、必不敢伊等奈宣多方牟止念之天奈毛、不申之天、是能太政大臣禪師乃御位授末都流等勅御命乎諸聞食等宣、詔文武百官、令拜賀太政大臣禪師、〇僧道鏡

〔詠百寮和歌〕太政大臣

ならびなき賢き人を求るに則かくる事をしぞ思ふ

左右大臣

〔倭名類聚抄五職名〕大臣　職員令云、左右大臣、於保伊萬宇智岐美

〔古今和歌集一春〕梅の花ををりてよめる　東三條の左のおほいまうちきみ〇源常

うぐひすのかさにぬふてふ梅の花をりてかざさん老かくるやと

〔古今和歌集十四戀〕右のおほいまうちきみ、〇源能有すまず成にければ、かのむかしおこせたりけるふみどもを、とりあつめてかへすとて、よみておくりける、

典侍藤原よるかの朝臣〇歌略

〔江家次第二正月〕敍位

大臣仰云、右乃大以万不チキ見、右大臣參上如先

〔伊呂波字類抄 太官職〕左大臣 正二位從二位 左丞相左相府 左僕射 右大臣 右丞相 右僕射

〔拾芥抄 中本官位唐名〕左大臣 左丞相左僕射左府今世號左相府、或左相國、 右大臣 右丞相右僕射右府今世號右相府、或右相國、

〔撮壤集 官位〕左大臣 左丞相、左僕射、左相府、大傅、左府、 右大臣 右丞相、右僕射、右相府、大保、右府、

〔運歩色葉集 佐〕左大臣 皇極女帝常色元丁未、始定左右大臣、唐名左府、左槐、左丞相、至天文十七八百九十二年也、

〔運歩色葉集 宇〕右大臣 唐名右府、右丞相、右相國、右相府、從二位、

〔唐六典 一尚書都省〕尚書左丞相一人、右丞相一人、並從二品、〇註略 左右丞相、掌總領六官、紀綱百揆、以貳令之職、令則專統焉、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年正月庚戌、勅左丞相藤原公、〇緒嗣 先朝之元勳、而朕之舊德也、

〔本朝文粹 九詩序〕元慶三年孟冬八日、大極殿成命宴詩序一首、 善相公〇三善清行

元慶初、天子〇陽成 勅右丞相〇藤原基經 修復大極前殿、備明堂也、丞相峨字望高、崇梁材大、郎運伊周之宏圖、更命班爾之妙匠、

〔貞信公記〕承平二年正月四日、大饗如例、但右丞相〇藤原定方 依病不來、

〔日本紀略 三村上〕天曆二年正月一日辛亥、無朝賀、天皇御南殿宴會有音樂、右丞相〇藤原師輔 奉仕內辨、

〔百練抄 四一條〕正曆四年六月廿五日、菅丞相〇道眞 贈左大臣正一位、

〔性靈集 四〕爲人求官啓一首

伏惟我右僕射馬足下、〇右大臣藤原冬嗣 鍾鼎累代、阿衡一人、能仁能惠、四海之父、允文允智、萬民之依、何不仰止、〇下略

〔性靈集 六〕右將軍良納言〇藤原世嗣 爲開府儀同三司左僕射〇藤原冬嗣 設大祥齋願文

伏惟故左僕射贈開府儀同三司藤原朝臣、累代台鼎、文武佐時、謙恭守雌、晏平何侈、溫良生徒、肩隨天

子、一心授兪、兩帝簡其僕射、柔和攝物、緇素毎慕其風、○中略謹以天長四年孟秋季旬、奉爲先左僕射大祥奉寫金字金剛般若經一十二紙、○下略

〔小右記〕治安四年○萬壽元年正月廿六日乙卯、右大史基信、右大史義光轉任事、有事定、○中略齊信進來云、○中略參議等申云、雖云下﨟依上日可被轉任歟者、卽以此旨傳達左僕射、○左大臣藤原顯通云々、

〔管見記〕嘉吉三年七月廿一日、今曉將軍義勝十歲、逝去云々、　廿四日、慶雲院殿○足利義勝被贈一品左僕射

〔權記〕正暦四年正月廿四日癸丑、參左府、○源雅信大饗也、

〔中右記〕寬治三年十二月六日壬寅、右府○源顯房於西院、故邦恒朝臣堂供養丈六釋迦像、以隆禪律師講師、題名僧廿人、左府○源俊房源大納言、坐簾中、

〔本朝世紀〕長和二年四月十日辛未、右相府使有賢朝臣云、煩瘡病飮食不受、若有柑子橘可分與者、依無其實奉還也、

〔本朝世紀〕久安五年十月廿六日甲戌、今夕左相府御息大夫師長、被聽所々昇殿、

〔日本紀略村上三〕天暦三年正月十四日戊午、今日右相閤○右大臣藤原師輔令山座主奉爲殿下○藤原忠平修大威德法、　十九日癸亥、除目議始、左閤○左大臣藤原實賴有勞給事不參、右閤○右大臣藤原師輔行事、

〔九暦〕天德二年二月廿二日、左大閤○藤原實賴御惱殊重、仍又加修法壇云々、爲救左大臣病給度者十五人、是依奏請云々、

〔本朝文粹十二落書〕櫻島忠信落書依此落書拜任大隅守云々、

右大閤賢歸衆望　左丞相佞損皇猷

○按ズルニ、類聚符宣抄卷四ニ載スル所ノ安和元年十月十一日太政官ヨリ處分ヲ請フノ狀ニ、大外記正六位上櫻島忠信ノ署名アリ、忠信ハ恐クハ此人ナラン、而シテ右大閤ハ藤原師尹

ニテ、左丞相ハ源高明ナルベシ、

〔名目抄人體〕一上（イチノカミ）

〔職原抄上〕左大臣一人

官中事、一向左大臣統二領之一、故云二一上一、關白之人爲二左大臣一時、右大臣行二一上事一、是依二關白與奪一也、

〔百寮訓要抄〕左大臣（左相府、左府、左僕射、左丞相、）もろ〳〵の政を奉行す、左大臣には一の上の宣下といふ事有、第一の臣下なれば、太政官のうちの事を悉沙汰する也、何事も禁中の公事は、一の上の參りて行ふ事也、不參の時にこそ、次の大臣、大中納言も奉行する事にて侍れ、〇中略右大臣（右相府、右府、右僕射、）つかさどる事左大臣に同じ、〇中略左大臣參せざる時、何事も右太臣の行べし、又左大臣のなき時は、一の上の宣旨を蒙也、

〔官職難儀〕左大臣は

當官は諸公事を奉行す、殿上別當になる、さる程に一上（イチノカミ）と申也、一上と讀を、或大臣近事にや、一上（イチシヤウ）と申されしおかしきに、人皆其大臣を異名に一玄やうのおとゞと申侍りき、關白左大臣たる時は、一上を次の大臣に與奪ある也、定事也、關白萬機の政を輔佐し申さるゝ間、諸公事などは、奉行なきゆへ御よだつある也、但奉行有たく思食ば、敍位、除目執筆、節會內辨など、御勤仕有事、又勿論也、但邂逅なるにや、其段御心にまかせらるゝ也、〇中略

右大臣は

左大臣のさはり有時、諸公事を奉行する事左大臣と同じ、左大臣關白の時、與奪にて一上になる、總別此與奪は、私にてもよだつす、又上としても次大臣に仰らるゝ、何も例あり、上として仰らるる時は、職事を勅使にて仰らるゝ也、私として與奪の時は、大辨參議を使として與奪ある也、大辨參議なくば、他の辨にても、他宰相にても例あり、

〔故實拾要十二〕左大臣
是於禁中諸政ヲ掌リ、都テ宮中ノ公事悉ク被執行之事也、若不參ノ時ハ、次ノ大臣、或ハ大納言タル人被行之也、但左大臣ハ第一ノ臣タルニ依テ、一ノ上ノ宣下ヲ蒙リ、一ノ上ト號ス、

〔官職補任圖畫凡例〕一上宣下　一ノ上と平生いふは左大臣なり、若左大臣、攝政か關白かを兼帶し給へば、太政官の事を次の右大臣へゆづり給ふ、夫よりして右大臣一ノ上の事をとり行ひ給ふ也、

〔江家次第十十一月〕新嘗會節會次第
裝束司供奉上下裝束、外記催諸司、式部立標、中務置宣命版、若非一上者、可仰內辨、

〔小右記〕長和五年四月三日丙子、資平云、今日左大辨云、可申一上之事、定其日可申大納言上臈、有障者、次第可申者、最初事、深有思憚、非職執行如何、仍先以他卿欲令行也、人心不同、賢愚區分、只是一端儉退之甚矣、

〔台記〕久安三年三月九日壬申、使少納言成隆問宗能卿曰、一上事、奉勅可行乎、奉執柄命可行乎、不奉命可行乎、故入道左府（○源有仁、保延二年十二月九日任、）之時、其弟（宗能弟）頭右大辨宗成朝臣、仰一上於右府云々、件時故入道右府（○藤原宗忠）被座、定有所被記置乎、且相計、且勘日記可被示者也、又一上後、擇吉日可行外記政乎、著座人兼官加階等時、擇吉日行政、件事可被相准也、故入道右府著座間記引勘、同可被示者、成隆移時歸來曰、今度必奉勅可行也、故右府（○藤原宗忠）記云、保延二年七月十日、藏人頭右大辨宗成朝臣、參右府亭仰云々、爲一之上行官中之事、（是保安二年例者、左府後、頗遲被沙汰歟、）著座人加階後、以吉日行政定例也、故右府記云、天仁二年九月十七日（于時中納言）參政、是加階之後、依吉日也云々、留法申依慶後著行也、此日雨儀、（不降雨）無廳申文、倩官符請印、（已上宗能答）今案保安二年、保延二年、依無關白左大臣有勅宣乎、相叶于今度、但先例唯以關白左大臣讓行之、更無勅宣、又關白左大臣辭大臣之時、右大臣蒙可爲一上之勅、以之言之、可無勅乎、加之西宮北山下宣旨篇無此事、而保安保延、有勅定爲奇、但事已及二代、可據用

乎、一上不審、故太相國（○藤原忠實）時事、（保安二年）及著座人、兼官加階之時、擇吉日行政否事、又問左大將（雅定）報命曰、一上事、不知先例、又不案得、故太相國之時事、不覺、著座人兼官及加級之時、以吉日著政之樣覺候、但慥不覺、後日問頭辨資信朝臣（識者古記多在彼家）曰、一上事、先例被下宣旨乎、頭辨答曰、無仰以前、勘古記被下宣旨之由無所見、料知無宜下歟、

有太政大臣之時猶左大臣爲一上事（六月十五日記之）

吏部王記云、天慶四年正月十六日、左大辨元方朝臣、從陣頭詣左大臣（仲平）家、申今日節祿宣旨、依大臣不參、此宣旨第一上所仰大辨、申行其事也、今案件時有太政大臣、（貞信公、于時攝政、）近代例亦雖有太政大臣、以左大臣爲一上、古今其道一也、

被下一上宣旨事

行官不同云、淸愼公自天慶之初、俄枇杷大臣（仲平）不出仕、蒙一上宣旨、宣行一上雜務、今案左大臣不出仕、又不讓次人、因之次人可行一上事之由被下宣旨歟、（非常法）件宣旨事、勘天慶間、貞信公、九條殿、吏部王（重明）小一條（師尹）記、無所見矣、此二條雖不合今度事、爲究知一上、

十二日乙亥、申刻參攝政、依召候簾前、一上事、可宣下否、余申曰、殿下內大臣時爲關白、轉左大臣之日爲一上、其後一上事、令讓次人給乎、答曰、讓之、又申曰、讓一上事於人、卽吾身爲一上自明、然者令蒙可爲一上之勅給乎、答曰不蒙、又申曰、然者今度雖爲內大臣、無上﨟可相同乎、答曰、左大臣爲一上之任、何奉可爲一上之勅乎、右內大臣可奉勅之疑乎、卽被勘保安二年、保延二年御記、（攝政殿自御記）目六云、保安六年三月十二日、右大臣蒙一上宣旨、（件目六、攝政殿御自筆、）卽勘其日記、全無此事、同日有任大將之事、於件事者具記之、余問曰、此御記、先被取目六乎、先被書日記乎、答曰、書一日了、卽取目六、如此御答者、彌可奇之、保延二年全無所見、（別勘七月十日、又無、）殿下命曰、保安二年三月、頭宗輔卿、伊通卿、五位藏人顯賴卿、公敎卿、皆見存、被尋問無隱乎、卽歸宅（戌刻）問宗輔卿、答曰、全不覺、伊通件間重服、（保安元年七月、父宗通卿薨、）公敎幼弱、而不

能執行庶務、定知此二人不宜下乎、故不問之、（後日問公數卿、答云、保安三年一上事、全不知給、問伊通卿、其答同、）又問顯頼卿、（件日宗輔候内、依任大將事也、）對曰、開日記（顯頼自記）追可申、但件事官外記不分明之由令申事歟、隨諸家記不注也、（顯頼返事）又問大外記師安、對曰、無所見、又問大夫史師經、對曰、保安二年三月十二日、右大臣令蒙一上宣旨給之由、雖注、置被仰下官之由無所見、口口事先例職事直被申其人云々、（師經返事）　廿二日乙酉、今日始行一上事、（先日雅樂頭泰親擇申之、不成勘文、不擇吉時、）雖爲天子御衰日及伐日、如此之事無忌之由、雅樂頭泰親申之、勘例京極殿奏太政大臣慶之日、當天子御衰日、（寛治二年十二月十六日）因之今日始行之、（中略）○御堂（○藤原道長）長德元年六月十九日、任右大臣、（無太政大臣、左大臣、與今度同、）同二年七月廿口日轉左大臣、勘彼大殿記、其間全無蒙一上勅之文、長德元年六月廿三日、大臣後初著陣、件日直著南座、是則被行一上之事也、同年九月四日、被奏唐人來著文、同月十三日、有不堪田申文、是等申一上之文也、定知不承勅行之乎、相合道理、猶成疑、問件年蒙一上勅否於官外記、各對曰、無所見、亦爲勘其事、借前一條院御記於攝政殿、對曰、見在寛弘一兩年、又申件御記於法皇、勅曰、有寛弘六年以後御記矣、然者無長德御記、不能勘之、以之案之、保安二年、保延二年、誤有勅乎、是故今度不承勅、又不承攝政命、始行之、今日事、據長德元年六月廿三日、延久元年正月廿二日例行之、依爲先祖之吉例也、長德元年、右大史申文、又左小史馬料也、今度雖不仰其由、自同被、可爲吉祥乎、

〔台記別記〕久安三年四月一日甲午、今日行官政、此事久絕不行、余（○藤原頼長）爲一上、庶幾官中之事復古風、故興廢行之、

〔古今著聞集〕十八（飮食）中御門左大臣（○藤原經宗）家へ、大外記頼兼はつねに參じけり、參たびごとにかならず瓶子一、肴物を座の前にをかれければ、しばし公事の物がたり申て、みづからかたぶけのみつつ、ひねもす祗候しけり、罷出さまに、しやうじのかみ邊にて、あはれ一上やと、たびごとに申ける、いと興ある事也、

〔新抄〕文永元年正月一日丁丑、小朝拜、〈内裏〉關白左大臣〈○藤原實經〉右大臣〈○藤原基平〉一上内大臣以下參列之、〈○中略〉次節會内辨右大臣一上外辨皇后宮大夫師繼以下候之、二月廿八日癸酉、今日革令仗議也、左大臣、右大臣、〈依爲一上被行事〉大納言良教、左大將冬忠卿以下參入、參議高定卿讀申勘文、參議資平卿書定詔等、職事頭大藏卿光國朝臣、次良教卿依一上與奪被行改元定〈○註略〉事、

〔徒然草上〕竹林院入道左大臣殿、〈○藤原公衡〉太政大臣にあがり給はんに、何のとゞこほりかおはせんなれども、めづらしげなし、一上にてやみなんとて、出家し給ひにけり、

〔公卿補任櫻町〕延享四年〈丁卯〉

左大臣從一位藤道香　正月五日、與奪一上於右大臣、

右大臣正二位同内前　正月五日、爲一上、同日著陣、

〔内裏儀式〕元日受群臣朝賀式幷會第四

皇帝乘輿入大極殿後房、警蹕侍衛如常、時閤外大臣宣、〈若無大臣者、參議已上行事、〉令撾外辨鼓、諸鼓皆應、〈殿下鼓不應〉乃開南方掖門、大伴佐伯兩氏〈不帶劍者權帶也〉率門部各三人、入自掖門居胡床、〈○中略〉兩氏降壇北面立閤下、門部開閤、諸門與閤俱開訖、各復本位、閤内大臣令撾召鼓、諸門鼓皆應、皇太子始就幄下座、群臣以次參入就版位、

〔北山抄一正月〕元日宴會事

時剋御南殿、左右近衞陣南階東西、王卿出就外辨、〈○中略〉天皇著御座、近仗稱警蹕、内辨大臣、〈大臣不參者、以次人〉〈率仰後著南座、問所司具否、催行雜事、王卿出外辨之後、於閑所以官人隨身等、令押笏紙、〉著靴就兀子、内侍臨東檻、大臣起座徴音稱唯、出自軒廊東第二間、〈○註略〉斜行到東仗南頭、〈當中少將座南去六七尺許〉西面再拜、左廻參上著座、

〔詠百寮和歌〕左大臣　右大臣

わが君の左右りに立そひて世をまつりごつたすけとぞなる

〔下學集上官位〕内大臣(ナイ)(内府)

〔運歩色葉集那〕内大臣(唐名内府)

〔江家次第二正月〕叙位

大臣仰云、○(中略)内乃大以万不チキ見、

内大臣稱唯、參上如先、

〔拾芥抄中本官位唐名〕内大臣(内府内丞相 内相府今名内臣)

〔權記〕正暦四年正月廿八日丁巳、參內府、(○藤原道兼)大饗也、

〔山槐記〕保元四年(○平治元年)三月八日癸亥、大外記中原師業申内府(○藤原公教)云、今日重日也、日次有其沙汰、

〔中右記〕寛治四年三月廿五日庚寅、内相府(○藤原師通)於二條亭、被供養大般若經、

〔本朝世紀〕康治元年三月四日丁酉、巳刻法皇(○鳥羽)幷高陽院、自小松殿臨幸平等院、(○中略)内相府(直衣烏帽)(○藤原頼長)騎馬被供奉、

〔百寮訓要抄〕内大臣(内府、内相府、)　つかさどる事、任人、大略右大臣に同、是は令條にはなき官也、本朝には大織冠(○藤原鎌足)始て任らるゝ、令になき官をば令外の官と申也、源氏物語にも、かずの外の大臣と、内大臣をば申たる也、

〔故實拾要十二〕内大臣

是令外ノ官也、令外ノ官トハ、官位令ヲ被行時、此官ナシ、令ノ外ノ官タルニ依テ、令外ノ官ト云也、故ニ職掌ナキ官也、然レドモ近代ハ、左右ノ大臣不參ノ時ハ、公事ヲ執行ハルヽコト也、

〔有職拾葉下〕内大臣(相當從三位)　唐名(内府)

近代正二位モアリ、員外ノ大臣也、或曰、内大臣ハ太政大臣ノ替リ也、左右ノ大臣ノ上ヘトモ云ヘ

り、

〔日本書紀天智二十七〕八年十月庚申、天皇遣東宮大皇弟於藤原內大臣(○鎌足)家、授大織冠與大臣位、仍賜姓爲藤原氏、自此以後、通曰藤原大臣、　辛酉、藤原內大臣薨、(日本世記曰、內大臣、春秋五十、薨于私第、遷殯於山南、天何不淑、不憖遺耆、嗚呼哀哉、碑曰、春秋五十有六而薨、)　甲子、天皇幸藤原內大臣家、命大錦上蘇我赤兄臣奉宣恩詔、仍賜金香爐、

〔藤原家傳上鎌足〕卽位二年(○天智八年)冬十月、稍纏沈痾、遂至大漸、(○中略)遣東宮皇太弟、就其家詔曰、遠思前代、執政之臣、時々世々、非一二耳、而計勞校能、不足比公、非但朕寵汝身而已、後嗣帝王、實惠汝子孫、不忘不遺、廣厚酬答、頃聞病重、朕意彌軫、作汝可得之任、仍授大織冠、以任內大臣、改姓爲藤原朝臣、

〔帝王編年記九天智〕八年十月十五日庚申、又遣東宮大海皇子(淨御原天皇)於內臣(○鎌足)家、授大織冠(正一位號也)幷內大臣、(內大臣始也)賜藤原朝臣姓、此時其位在左右大臣上、其後此官久絕、至孝謙御宇、藤原仲麻呂(大織冠曾孫、武智麿二男)任之、光仁御宇、藤原良繼(大織冠曾孫、宇合二男)同魚名(大織冠曾孫、房前五男)任之、初次左右大臣之下、凡內大臣者、令外之官也、

〔標注職原抄上本〕鎌足こそ左大臣か右大臣かに任せられ給ふべきを、大臣の號をえ給はりたまはで、內臣といふにせさせ給へるはいかにといふに、中臣は氏につきていへば、大伴物部起りしより以來、神事にむねとあづかりて、政事をば離たり、さる故に皇極紀に、三年に神祇伯に任じ給ひしかど、固辭して就給はざりしは深慮ありしに依てなり、姓につきていへば連尸にて、大臣になるべきすぢにあらず、さらば大連にせらるべきを、この御代より改正にて、左右大臣八省百官の制にかへんとおもほしめせる始なるゆゑに、大連にもなしがたく、是に依てこたびまづ宿老の二人を大臣となし、鎌足をば內大臣といふ新しき名目を作りて、これに任じ給へるなり、されば此の內臣、あながちに左右大臣の上なりと定れるにはあらず、左右大臣は外、內臣は內にて、おのづから別なるもの、、やうなれど、孝德の卽位またく中大兄の推讓に依

紫微內相

り、中大兄の入鹿を滅し給へる、またく鎌足の謀略に依れゝは、當時の勢、この公に歸しけんはごおしはかり知るべし、文に据宰臣之勢、處官司之上とある宜也、玉勝間に內字の義は、續紀天平勝寶元年、天平寶字元年等の宣命に、大伴氏を內兵、また同紀に內物部といふ稱も見えたり、これらみな內とは殊に親しみ給ふよしなり、神宮に大內人小內人とあるも、大神に親しく仕奉るゆゑなるべしといへれど、その意のみにはあらず、內外の內となして解べし、

○按ズルニ、鎌足ハ內大臣大織冠タリ、然ルニ三代實錄ニ、太政大臣正一位ト書キ、天平十三年銅版詔書ニ、鎌足不比等ノ二人ヲ、藤原氏前後太政大臣ト稱シ、興福寺緣起ニ、先正一位太政大臣、後太政大臣ト稱セルハ、往時ノ內大臣ハ當時ノ太政大臣ニ當リ、大織冠ハ正一位ニ當ルヲ以テナリ、太政大臣正一位ヲ贈リシニハ非ラズ、

〔萬葉集 一 雜歌〕天皇〇天智 詔內大臣藤原朝臣〇鎌足 競憐春山萬花之艷、秋山千葉之彩時、〇下略

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜八年正月丙辰、以內臣從二位藤原朝臣良繼爲內大臣、

〔源氏物語 十四 澪標〕源氏の大納言、內大臣になり給ぬ、數さだまりてくつろぐ所もなかりければ、くははり給なりけり、

〔河海抄 七 澪標〕左右大臣闕なきによりて、內大臣になり給ける也、かずさだまりてとは、內大臣は令外の官なればいふなり、

〔詠百寮和歌〕內大臣

冠をもいたゞく人やそのかみの內のおとゞの始なりけん

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字元年五月丁卯、以大納言從二位藤原朝臣仲麻呂爲紫微內相、〇中略 詔曰、朕覽周禮、將相殊道、政有文武、理亦宜然、是以新令之外、別置紫微內相一人、令掌內外諸兵事、其官位祿賜、職分雜物者、皆准大臣、

內臣

〔萬葉集二十〕天平寶字元年十一月十八日、於內裏肆宴歌二首、
伊射子等毛、多波和射奈世曾、天地能、加多米之久爾曾、夜麻登之麻禰波、
右一首、內相藤原朝臣○仲麻呂奏之、

〔唐書百五十七陸贄列傳〕贄入翰林年尚少、以材幸天子、常以輩行呼而不名、在奉天朝夕進見、然小心精潔、未嘗有過、由是帝親倚、至解衣衣之、同類莫敢望、雖外有宰相主大議、而贄常居中參裁可否、時號內相、

〔藤原家傳上鎌足〕庚戌、○四年六月、中略、帝○皇極以策書禪位于輕皇子、是爲天萬豐日天皇、○孝德實大臣○藤足之本意也、○中略改元爲大化、詔曰、社稷獲安、寔賴公力、車書同軌、抑又此擧、仍拜大錦冠、授內臣、封二千戶、軍國機要任公處分、

〔日本書紀二十五孝德〕天豐財重日足姬天皇○皇極授璽綬禪位於輕皇子、○孝德中略、由是輕皇子不得固辭、升壇卽祚、○中略以大錦冠授中臣鎌子連、爲內臣、增封若干戶云々、中臣鎌子連、懷至忠之誠、據宰臣之勢、處官司之上、故進退廢置、計從事立云々、

〔續日本紀八元正〕養老五年十月戊戌、詔曰、凡家有沈痼、大小不安、卒發事故、汝卿房前、當作內臣、計會內外、准勅施行、輔翼帝業、永寧國家、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年三月庚午、詔以○中略正三位藤原朝臣良繼爲內臣、　壬申、勅、內臣職掌官位祿賜、職分雜物者、宜皆同大納言、但食封者、賜一千戶、

○按ズルニ、此內臣ハ官名ニアラザルニ似タレド、其名ノ同ジキヲ以テ、姑ク此ニ載ス、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年三月己酉、是日以大納言從二位藤原朝臣魚名爲內臣、近衞大將大宰帥如故、

忠臣

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年三月丙子、內臣從二位藤原朝臣魚名改爲忠臣、

准大臣

〔下學集上官位〕儀同三司（三司者指上三大臣(太政大臣左右大臣)也、中關白道隆之二男伊周公、大納言時、遭左遷、歸洛之後、賜儀同三司之官、此官始於伊周公矣、）

〔通典（三十四職官）〕開府儀同三司

漢文帝元年、始用宋昌爲衞將軍、位亞三司、後漢章帝建初三年、初使車騎將軍馬防班同三司、同三司之名、自此始也、殤帝延平九年、鄧騭爲車騎將軍儀同三司、儀同之名、自此始也、（又獻帝以伏完爲輔國將軍、儀比三司、）魏黃權以車騎將軍開府儀同三司、開府之名、自此始也、

〔職原抄上〕准大臣者、文武天皇大寶三年正月、三品刑部親王爲知太政官事、又聖武朝、太政大臣高市親王三男、參議從三位大藏卿鈴鹿王知太政官事、是濫觴云々、帥內大臣伊周、歸京之後、寬弘二年、列朝參大臣下大納言上、五年准大臣、賜封戶一千戶、自稱儀同三司、其後絕久、弘安六年、太政大臣（基具時）子、大納言、敍一位、辭大納言、七年准大臣、可令朝參之由被下口宣、而擬階奏連署之時、被尋問官底、多者不可爲見任之由依申之無勅許云々、然而淸家外記補任見任、注從一位行儀同三司、列內大臣下大納言上、中家外記（三條本）補任、非參議列次、前內大臣公親（正二位）上、所爲不同、難一決者歟、正應二年、直轉太政大臣、其後正應定實公、永仁通賴公、嘉元實家公、（攝政實經男）相繼任之、是皆可昇大臣之器、暫沈淪之間、依重其人、慰晚達令朝參者也、而先朝（後醍醐院）御時、前大納言定房、爲名家任之、可謂無念、雖然後日任內大臣之上者、無是非歟、

〔有職問答三〕一儀同三司事

准大臣は勿論候哉、但三公の下大納言の上にて候哉、是に付て人數定候哉、新儀同など申事も有べく候哉、前官當官の沙汰も候哉、辭退の時は如何申候哉、時代何れ、誰人任始候哉、殊慥被仰出度候、

儀同三司トハ、本儀從一位之唐名也、然而中古以來之例、敍一品之後、准大臣可預朝參之由被宣下之後號儀同三司也、人數ハ不定、又官ニアラザレバ辭退ナド云事モナシ、前官當官ノ沙汰ナシ、只喚傳ハ稱號ヲ加テ、假令、勸修寺儀同、日野儀同ナド稱候、又勅撰ナドニハ儀同三司ト書テ、名字ノ片名ヲ下ノ傍ニ付也、新儀同トモ前ノ儀同トモ稱之事無之、准大臣儀同三司事ハ、伊周公左遷歸洛ノ後、寬弘二年二月宣旨、初例ニ候哉、

〔小右記〕寛弘二年二月廿五日癸卯、入夜阿波守伊祐朝臣來、〇中略伊祐朝臣云、外帥伊周可列大臣下大納言上之宣旨下之者、候内之間不承此事、若是入御後事歟、　三月廿六日甲戌、伊與守朝臣云、外帥今日被聽昇殿、今夕可被參内者、右金吾右大丞云、車副不可有四人、猶可用二人者、件事無所指、初爲大臣、今有可列大納言之上之宣旨、用四人無殊責乎、

〔榮花物語初花八〕帥殿伊周〇藤原の御くらゐもなきさだめにておはするを、いと〳〵おしきことなりなど、との道長〇藤原おぼして、いとおしがりて、准大臣の御くらゐにて御封などえさせ給、

〔日本紀略一條十一〕寛弘五年正月十六日戊寅、今日前大宰權帥伊周、准大臣給封千戸、

〔本朝麗藻上〕三月三日、侍宴、同賦問柳發紅桃應製以春爲韻　儀同三司〇藤原伊周、詩略、

〔公卿補任後宇多〕弘安七年甲申

前大納言從一位源基具　正月十三日辭退奬學院別當、正月十五日、遣勅使五位藏人定光於里亭、准大臣可朝參之由被仰、二月廿七日、准大臣可朝參之由被下口宣、定光奉、三月廿九日拜賀、自此日召具車副四人、自稱儀同三司、被申可列大臣下大納言上之由、仍擬階奏連署之時、被尋問法家、多者不可爲見任之旨計申之間、無勅許云々、

〔勘仲記〕弘安十一年正應元年〇正月一日丁亥、院御薬儀、平宰相奉行、公卿儀同三司〇源基具已下參仕云々、

〔公卿補任伏見〕弘安十一年戊子〇正應元年

准大臣從一位源基具七十五

〔職原抄中原家傳秘錄上二〕正應定實公

弘安十一年九月十二日、辭大納言、正應五年八月十四日、敍從一位、同九月五日、准大臣可朝參之由宣下、

永仁通賴公〇中略

後宇多院弘安十年正月十三日、辭大納言、後伏見院永仁七年、准大臣、

〔薩戒記〕應永卅二年四月廿七日丁卯、今日戌刻、前大納言從一位藤原兼宣卿出家、年六十、先是准大臣之由被宣下之、藏人右中辨房長書宣旨、下權大納言實秀云々、此事且擬祖父贈左大臣幷故万里小路一位仲房等之例、且奉公異于他之由立種々理申入道相府、仍令執奏給、上皇雖有被仰之旨、依禪門重被申、遂以被宣下云々、於祖父贈左府事者、爲帝外祖、難爲例歟、件宣旨書樣、後日尋取之注之、

應永卅二年四月廿七日　宣旨

從一位藤原朝臣

宜准大臣預朝參

藏人右中辨藤原房長奉

後聞、日野入道一位資敎卿參院申云、雖法體近日常參候內院、爲一家嫡流、爲一門宿老、忽爲彼儀同三司被超越、老後耻辱不可過之、奉公舊勞又不可劣他人、枉而因准法體已後准后例、同欲被宣下云云、此事自院被仰合入道內府、有再往問答、遂又被宣下之、以彼人出家以前日次、應永十二年七月云々、其時職事吉田前中納言家俊卿書宣旨、件比上卿廣橋入道一位之外不現存、仍下其人、藤中納言云々、而局務依爲故少納言賴季眞人、不及施行云々、此事傾申之輩多之歟、或人云、後醍醐院臣北畠大納言、親房卿也、入道之後、先准大臣、次爲准后、被宣旨云、於南朝有此事、

元弘二年　月　日　宣旨

入道前大納言源朝臣

宜准大臣

藏人

若准此例、可爲當時宣下歟云々、然而經數年賜同日位記有例、何不准哉之由有院仰云々、

〔長興宿禰記〕文明九年二月十四日、廣橋一位大納言綱光卿圓寂、年四十七、此間數日所勞、公武傳奏內外中沙汰之處早世、公私奉惜者也、此卿去月日附被任准大臣、今日贈內大臣被宣下云々、

〔後法興院記〕明應五年七月一日丙辰、儀同入道勸修寺教秀薨云々、

〔二水記〕大永六年四月一日甲寅、廣橋大納言守光逝去、可惜之、今日存日儀同三司御免云々、

〔續史愚抄後桃園〕明和八年八月一日己巳、一位賴胤宣准大臣預朝參由宣下、口宣上卿權大納言兼胤奉行藏人頭左大辨紀光、長曆、愚紳、公卿補任、

〔最樹院殿御葬式之記〕文政十年二月廿日、儀同殿〇將軍德川家齊父治濟かくれさせ給ぬ、〇中略五日、〇三月けふの末下刻に御葬送あるべきなれば、〇下略

〔延喜式十八式部〕凡親王知太政官事者、其季祿准右大臣、預議政者、一品二品准大納言、三品四品准中納言、

〔標注職原抄上本〕准大臣にも、その品くさ〲あり、親王よりなり給ふと、諸王諸臣よりなるとは意別なり、刑部親王は、續紀の大寶三年正月に、詔三品刑部親王知太政官事とあり、知字の義は、たとへば此抄の下卷に、記錄所の上卿辨の事を、可令行記錄所之事之由被宣下とある行字の如く、また漢土に領尙書事錄尙書事などいへるが如し、かく知太政官事とするは、その德いまだ太政大臣とすべきに至らざるが故に、しばらく太政大臣に準じて、後日の撰を待給ふものなり、されば刑部の知太政官事は、左右大臣よりも上たる事辯をまたず、續紀慶雲二年九月に、穗積親王知太政官事とある、これを多胡の碑文に考るに、和銅四年三月九日甲寅宣、太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、右大臣正二位藤原尊と連書せるを以て、親王の知太政官事は、左右大臣よりも上にて、准太政大臣といはんが如くなるを知べし、然るに續紀慶雲三年二月に、知太政官事二品穗積親王季祿准右大臣給之とあるに依て、公卿補任に、知太政官事は

左右大臣の次也とおもひ誤て、三品刑部親王知太政官事、次二右大臣從二位阿倍御主人之下一といへれど、季祿は功勞によりて給ふもの也、尊卑に依て給ふものにあらず、知太政官事尊しといへども、官の職事ならぬゆゑに、功勞多からねば季祿少し、是を以て右大臣の次といふ證にはなりがたし、

〔續日本紀 三文武〕大寶三年正月壬午、詔二三品刑部親王一知太政官事、

〔續日本紀 三文武〕慶雲二年九月壬午、詔二品穗積親王知太政官事、　三年二月辛巳、知太政官事二品穗積親王、季祿准二右大臣一給レ之、

〔好古小錄 上金石〕上野國多胡郡碑

辨官符、上野國片岡郡、綠野郡、甘良郡、幷三郡内三百戶郡成給羊成多胡郡、和銅四年三月九日甲寅宣、左中辨正五位下多治比眞人、太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊、

〔續日本紀 八元正〕養老四年八月甲申、詔以二舍人親王一爲二知太政官事一、

〔續日本紀 十二聖武〕天平七年十一月乙丑、知太政官事一品舍人親王薨、遣二從三位鈴鹿王等一監二護葬事一、其儀准二太政大臣一、

〔續日本紀 十二聖武〕天平九年九月己亥、以二從三位鈴鹿王一爲二知太政官事一、

大臣禪師

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年九月甲寅、勅以二道鏡禪師一爲二大臣禪師一、所司宜レ知二此狀一、職分封戶准二大臣一施行、

大納言

〔倭名類聚抄 五職名〕大納言　職員令云、大納言、於保伊毛乃萬字須豆加佐

〔尙書註疏 三舜典〕帝曰、龍朕堲二讒說殄一行、震二驚朕師一、傳、堲疾、殄絕、震動也、言我疾二讒說絕二君子之行一而動驚我衆上、欲レ遏二絕之一、命汝作二納言一、夙夜出二納朕命一惟允、傳、納言喉舌之官、聽二下言一納二於上一、受二上言一宣二於下一、

必以ㇾ信、

〔伊呂波字類抄　官職太〕大納言門下侍中今號二亞相一　中書令

〔拾芥抄　中本官位唐名〕大納言門下侍中今世號二亞相一　獻納、中書門下、黄門監

〔運歩色葉集　多〕大納言ダイナゴン唐名亞相、獻納、

〔唐六典　八門下省〕侍中二人、正三品、○註略侍中之職、掌下出二納帝命一、緝二熙皇極一、總二典吏職一、贊二相禮儀一、以和二萬邦一、以弼中庶務上、所謂佐二天子一而統二大政一者也、凡軍國之務、與二中書令一參而總焉、坐而論レ之、擧而行レ之、此其大較也、

〔興福寺緣起〕法華會

相府○藤原内麿呂遷代之後、久世大亞相、○藤原愛發大納言是則大閤○藤原冬嗣之連枝也、相承助二行法會一、

〔菅家文草　二詩〕暮春見二南亞相山莊尚齒會一○南淵年名詩略

〔本朝世紀〕久安五年八月三日壬子、今日停二皇后宮職一、爲二美福門院一、○中略大宮亞相○權大納言伊通云、就二門號一者、如二人々被一レ申、被レ用二建春門一、何事有哉、

〔玉海〕仁安三年八月四日、今日可レ有二任大臣之兼宣旨一云々、内府可レ任二太政大臣一、源亞相○定房可レ任二内大臣一、又可レ兼二右大將一云々、

〔亞槐集　一〕亞槐集卷第一

夏日同詠百首應製和歌

正二位行權大納言臣藤原朝臣雅親上○歌略

〔雲州消息　下本〕謹言上、依二鸞臺之勤一、登二龍作之官一、年齡雖レ老何恨レ之、有二明日一可レ申二慶賀一、○中略

二月日　　中納言

右衞門督殿

〔安齋随筆　前編十二〕一龍作　是中納言の異名也、唐名には非ず、龍は人の名也、書經舜典曰、龍汝

作納言、夙夜出朕命、惟允云々、是より出たり、納言の名より出たり、

〔江吏部集上地〕七言、夏夜陪左相府池亭、守庚申、同賦池淸知雨晴應敎一首、幷序以深爲韻

左相府尊閣(○藤原道長)者、希代榮貴之器也、居戚里爲王者之親舅、入法門爲如來之弟子、遊文場爲花月之主、在朝廷爲社稷之臣、外孫則鳳作皇子、聖日照帝梧之枝、長男(○藤原頼通)則龍作納言、家風期台槐之葉、(○下略)

〔元亨釋書二十三資治表〕延暦十二年正月、詔御。史。大。夫。藤小黒、尙書左丞紀古佐美及賢璟、視新城之地、

〔元亨釋書二傳智〕釋榮西(○中略)門。下。侍。郎。平頼盛、與西(○榮西)厚、聞西之西遊、常過行裝、以故未遑發、文治之元、平氏淵殱、侍郎尋亦卒、

〔濟北集十行記〕一山國師行狀

文保元年秋、忘療彌留、十月益革、(○中略)二十四曉手染遺表、(○中略)置筆而化、壽七十一、上皇得表蒼皇幸寢室、(○中略)上皇便賜宸奎、贈國師之號、(○中略)又宣僕射源有房公(時門下侍郎)作文祭之、

〔菅家文草九奏狀〕上太上天皇(○宇多)請令諸納言等共參外記狀

右臣某謹撿、去寬平九年七月三日讓位詔命曰、大納言藤原朝臣(○時平)權大納言菅原朝臣(○道眞)等、可奏可請之事、且誨其趣、奏之請之、可宣可行之政無誤其道、宣之行之者、而諸納言等持疑、以爲奏請宣行自非兩臣、更不可勤、臣再三反覆詔旨云々、奏請之人雖稱所指、尋常之務無止諸卿、加以臣業有文書、欲伺閑以傳授、身非木石、思寄暇而攝治、藤原朝臣獨自從政、何堪每日頻參之役、伏願太上皇陛下、遂去年詔命之意、察今日申請之誠、宣喩諸納言等、相共令參外記、然則庶務繁多、暫無擁滯、群臣激勵、俱致恪勤、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪謹言、

昌泰元年九月四日　權大納言正三位兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原(○道眞)

〔職原抄上〕大納言

其職掌、與右大臣以上參議天下事云々、然者大臣不候之間、奉行與大臣同、故云亞相之官也、異朝上古、少師少傅少保、是云三孤、又云三少、是三公之貳也、故云亞相、漢以來爲御史大夫者、必轉丞相、依之有亞相之號、然而御史之職、當今彈正、其義不叶、爰稱德御世、暫改大納言號爲御史大夫、是故大納言唐名爲御史大夫、不叶舊式者也、令正員四人也、寛平御宇、爲正二人權一人、其後權官加增、高倉御宇、初爲十人、先朝後醍醐天皇御時、被定六人、

〔唐六典十三御史臺〕御史大夫一人、從三品、○註略、中丞二人、正五品、○註略、

御史大夫之職、掌邦國刑憲典章之政令、以肅正朝列、中丞爲之貳、○註略、凡天下之人、有稱寃而無告者、與三司詰之、○註略、凡中外百僚之事、應彈劾者、御史言於大夫、大事則方幅奏彈、小事則署名而已、○註略、若有制使覆囚徒、則刑部尚書參擇之、凡國有大禮、則乘輅車以爲之導、

〔百寮訓要抄〕大納言龍作喉舌轆路天下喉舌の官也、下の申事を上へまうし、上の事を下にのぶる職也、又君のあしき事を被仰をばすて、よき事をば申由、令條にも見えたり、始は四人にてありしが、次第におほくなりて、當時は十人にて有也、參議より納言の數のおほき事不可然由、代々沙汰有、○中略又亞相と申は、大臣に亞て公事を行故也、○下略

〔官職秘抄上〕大納言

令曰、大納言四人、格云、慶雲二年省二人、寛平遺誡云、大納言二人、正權勿過三人、其後安和二年始爲三人、兼明、謙德公、(藤原伊尹)師氏、永觀元年增四人、爲光、重信、朝光、濟信、長和二年增五人、加宇治前太政大臣(藤原賴通)仁安元年增六人、加師長、承安元年增七人、加重盛、壽永二年增八人、加忠親、建久四五年以後、還爲六人云々、

〔故實拾要十二〕大納言、　相當正從三位、或從二位、　唐名亞相、亞槐、獻納、

是於禁中大臣ニ參リテ政務ヲ聽ク、大臣參內ナキ時ハ、大臣ニ代リテ諸政ヲ執行フ職也、故ニ亞相ト云フ也、大臣ニツグト云義也、大納言ハ可昇大臣人、或其家ヲ撰テ此官ニ任ズル也、故ニ攝家

清華ノ外ハ、以二此官一爲二先途一コト也、

〔有職拾葉下〕大納言相當正三位　近代正二位　唐名亞相

大臣ト交リ政務ヲ聞ク、大臣不參ノ時ハ、大臣ニ代リ萬事ヲ治侍ル、故ニ亞相トモ云ヘリ、定數十人アリ、十人ヨリ多キ時ハ、前ノ大納言ト云ヘリ、

〔職元秘抄〕昔ハ正大納言或任大臣ノ節會ノ宣命ニ入タルヲ正トス四人、權大納言十人、合テ十四人、又正中納言十人、權中納言十人、合テ二十人也、今ハ大中納言共ニ權バカリニテ正ハナシ、共ニ十人ヅヽアリ、今ノ納言ハ皆權大納言權中納言ノミナリ、新ニ納言ニ任ジ、イマダ吾下ノ出來ヌ内ハ、新大納言ト新ノ字ヲ書也、

〔日本書紀二十七天智〕十年正月癸卯、以二蘇我果安臣、巨勢人臣、紀大人臣一爲二御史大夫一、御史蓋今之大納言乎

〔年中行事秘抄正月〕始置二大納言一事

天智天皇十年正月五日、始置二大納言三人一、

○按ズルニ、次ニ引ケル天武紀ニ、天智天皇四年十月ノ事ヲ擧ゲテ大納言蘇我果安云々ノ文アレバ、此説信ジ難シ、

〔日本書紀二十八天武〕天命開別天皇〇天智元年、立爲二東宮一、四年十月壬午、入二吉野宮一時左大臣蘇賀赤兄臣、右大臣中臣金連、及大納言蘇賀果安臣等送之、自二菟道一返、

〔公卿補任天武〕大納言蘇我果安臣　元年八月改二御史大夫官號一爲二大納言一、八月坐レ事伏レ誅、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝〇中略奏勅改二易官號一、〇中略大納言曰二御史大夫一、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年正月丙寅、以二中納言正三位石川朝臣年足一爲二御史大夫一、

〔古京遺文〕石川朝臣年足墓志

武内宿禰命子宗我石川宿禰十世孫、從三位行左大辨石川石足朝臣長子、御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣、當平成宮御宇天皇〈〇淳仁〉之世、天平寶字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳、春秋七十有五、薨于京宅、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜二年二月癸卯、左大臣〈〇藤原永手〉暴病、詔大納言正三位大中臣朝臣淸麻呂攝行大臣事、

〔公卿補任 嵯峨〕弘仁十年己亥

大納言正三位藤冬嗣〈四十五〉 左大將

〇按ズルニ、冬嗣ハ弘仁九年十二月十九日、右大臣藤原園人ノ薨後、同十二年正月九日、右大臣ニ任ゼラルヽマデハ、大納言ヲ以テ太政官ノ上首タリ、

〔一代要記 圓融〕永觀元年、大納言四人始置之、濟時加權、

〔公卿補任 圓融〕天元六年癸未〈〇永觀元年〉

大納言正二位藤爲光〈四十二〉

源重信〈六十二〉 皇太后宮大夫、正月廿九日兼按察使、

權大納言從二位藤朝光〈三十三〉 左近大將、春宮大夫、

同濟時〈四十三〉 八月廿三日任、右大將、中宮大夫等如故、

〔一代要記 三條〕長和二年正月十六日、大納言始五人、賴通加權、

〔本朝世紀〕長和二年六月廿三日癸未、侍從之內示送云、今日可有除目、可被任大納言一人、中納言一人、大納言賴通、中納言懷忠〈〇中略〉大納言五人例一切不聞也、

〔愚管抄 七〕治れる世には官人を求む、亂れたる世には人、官を求むと、この比の十人大納言、三位五六十人、故院〈〇後白河〉の御時までも十人が内外にてこそ侍りしか、

〔今昔物語二十八〕傳大納言得烏帽子侍語第四十三

今昔、傳大納言ト云フ人御シキ、名ヲバ道綱トナム云シ、家ハ一條ニナム有シ、其ノ家ニ世ノ口者ニテ、物可咲ク云テ人咲ハスル侍有ケリ、字ヲバ内藤トゾ云ヒケル、其レガ其ノ家ニテ夜ル寢タリケル程ニ、烏帽子ヲ鼠ノ咋テ持行テ、散々ニ咋ヒ損タリケレバ、取替ノ烏帽子モ無クテ、烏帽子モ不爲テ、宿直壺屋ニ袖ヲ被テ籠居タリケレバ、主大納言此ヲ聞給テ、糸惜キ事カナトテ、我ガ烏帽子ヲ此レ取セヨトテ給ハセタリケレバ、内藤其ノ烏帽子ヲ給ハリテ、其レヲシテ壺屋ヨリ出テ、異侍共ニ向テ云ケル様、玉達ヨ此レ見ヨ、寺冠社冠ノ得テセムヤハ、一ノ大納言ノ御舊烏帽子ノコソハ給ハリテセメトテ、頸ヲ持立テ、シタリ顔ニ袖ヲ打合セテ居タリケルヲ見テ、人皆咲ヒケリ、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕かゝれば、明理、行成と一さうにいはれ給ひしかども、一の大納言〇行成にていとやんごとなくてさぶらはせたまふに、〇下略

〔台記〕久安六年四月十二日戊午、請辭大臣讓右大將藤原朝臣實能之狀、上書奏法皇手詔曰、藤原朝臣、大將勞及數年、第一大納言、昇進大臣、尤當其任、但辭大臣出仕朝廷、有先路乎、若有不仕之意、爲公爲私、事甚不便焉、

〔西宮記臨時四〕官西廳座

承平三年四月十九日貞信公御記云、新大納言恒佐爲著座到待賢門外、而聞外記結政所物忌歸去、但其倚子者、元右大將著、保忠卿歟

〔本朝世紀〕長和二年六月廿五日乙酉、昨新大中納言、依相府命向中宮大夫家、　廿八日戊子、來月三日新大納言聽通、午刻初參陣、

〔建内記〕嘉吉元年三月十二日己酉、日野新大納言、資廣卿彼卿位階上首、任日同上首也、仍號日野大納言了、忠秀卿下臈也、任日又下臈也、仍號新大納

言了、實廣卿辭退以後、以忠秀卿就日野大納言、而實廣卿又還任之間、今雖上首、就日野新大納言者也、

〔平治物語　一〕信賴信西不快事

故中御門藤中納言家成卿ヲ、舊院〈河〇白〉大納言ニナサバヤト被仰シカ共、諸大夫ノ大納言ニナル事ハ絕テ久シク候、中納言ニ至リ候ダニ、過分ニ候物ヲト、諸卿皆勇メ被申シカバ、思召止ヌ、セメテノ御志ニヤ、歲ノ初ノ勅書ノ裏書ニ、中御門新大納言殿ヘト被遊タリケル、是ヲ拜見シテ、誠ニナサレ進ラセタルニモ猶過タル面目哉、御志ノ程忝ナシトテ、老ノ淚ヲ拭兼ケルトゾ承候、

〔詠百寮和歌〕大納言

よきあしき御ことのりをも聞分て捨つ拾つ隙なかるらむ

〔故實拾要　十〕權官　正官

是大中納言ニ限リテ權官ヲ正官トス、自餘ノ官ニ於テハ、正官ヨリ權官ヲ輕シトス、往古ハ官ニ正官權官アリ、中古以來ハ正官ヲ闕キ置ルヽニ由テ、權官ヲ正ノ代リトシテ官ノ上ニ置也、大中納言ヨリ以下諸官、何レモ權官アリ、

〔職元秘抄〕一權大納言十人ノモノナレドモ、一二人モ闕テヲクヲ故實ト云フ、

〔官位問答〕不審條々

一權ノ字事

當時大中納言ハ、皆權大納言權中納言ニテ候、轉正トテ、正ノ大中納言轉任スル事有之、其時ハ權ト喚候ハデ、只大納言中納言ト申候也、是ハ任大臣ヲ被行之時、第一第二ノ大中納言、正ニ轉ジ候、サナラヌ時ハ轉正ノ事候ハヌ間、近來ハ只皆權大權中ノミニテ候也、

〔有職聞書〕一權官正官のわかちいかゞに候哉

答大臣は任大臣の節會に、宣命に載られたるを正官と申候、亦大中納言は其宣命の奧書れ、宣命

の事わきなど申候事、此事にて候、然ども近世任大臣の節會なく候故、宣命に載らるべきやうなし、然る故今の世の大臣をはじめ大中納言皆權官にて候、

〔安齋隨筆前編四〕一大中納言近代無正官　近代は大中納言正官は無之、皆權大納言也、是何ゆへといふ、詳ならず、壺井義知も考得ず、公家衆も其故を知らず、さま〳〵の說あれども、皆推量なれば取るに足らず、正親町院天正五年十一月廿日、大納言正一位藤原實枝卿、同年同月、中納言正二位藤原基考卿、近代右兩人正官之大中納言也、其後大中納言ともに正官中絕すと、滋野井亞相公麗卿の仰のよし、橘嘉樹が說なり、

〔安齋隨筆後編十一〕一大中納言正官權官

大中納言等、後代正官なくして、權官のみ任せらるゝ事は、除目行はれざる故に、すべて顯官には正を任せずして、權のみ任せらるゝにてはなき歟、顯官にあらざるは、權にかゝはらず歟、如何、

貞丈

大中納言は重職なる故に、近代除目行れざるに依て正を任せず、權官のみを任せらるゝか、重職ならざる官は、權にも拘らず任せらるゝかとの賢考、的中御說に候得共、正官を置れず、權官のみ任せらるゝは、納言にも限らず、羽林次將も亦近代正官なく、權のみなり、納言重職勿論の事に候、大將は納言と等しく重任たれども、次將は普通の任にて、重職重任となすにも及ばぬ官なり、然れば除目なき故に、其寄せ重き官は權官のみと云事、次將に正官を任せられざるにて少く不審あり、此段又御再勘あるべき事か、

並云、大中納言をば重職重任と稱すべし、所謂職原抄云、大納言人臣重職とあり、其餘彈正尹、左右大將、中務內藏頭、大學頭、廷尉、左右馬頭等、(此外太政大臣の史生官掌まで、凡て重職と號するもの數多、略之、)重職重任と稱す、然して顯官顯職と云へるは、彈正弼、同忠、勘解由判官、外記、官史、式部民部丞、又衞門尉等なり、此

外重寄の號、清撰之職、至極朝菲樞要官等、温職膏腴と名目する某々の職掌を以て稱せし也、嘉樹職原抄を拔萃して、其趣を分ち記せる一紙あり、事勞しければ不記之、顯官顯職と云は、他より目ザシ羨まれて、職掌に餘情ある官也、大中納言のごときは、實に國家の重職重任たり、顯官顯職とは職參差あるべきか、

右は賢考に戻候樣に奉存候へ共、不佞は如右覺悟之儀に候へば、猶又可否の儀御再勘ヲ奉待候也、

追考申上候、滋野井公麗亞相の仰に、納言正官は、正親町院の頃迄は間々任せられたり、公卿補任を考べしと、其後は一向に絶て任せられずと也、近代の公卿補任口携不仕候へば、右之儀を承候計也、　再白

〔伊呂波字類抄〈太官職〉〕太政官

大納言〈天長五年三月、以清原夏野始任權大納言、〉

〔公卿補任〈淳和〉〕天長五年〈戊申〉

權大納言從三位清夏野〈四十七〉　三月十九日乙亥任、元中納言、左近大將民部卿如元、

〔榮花物語〈三十四暁待星〉〕との、中納言どの〈〇藤原通房〉は、かずよりほかの權大納言にならせ給へり、かたち有樣、人にすぐれ給へり、

〔公卿補任〈後朱雀〉〕長久三年〈壬午〉

權大納言正二位藤通房〈十八〉　十月廿七日任

〔源氏物語〈十三明石〉〕程もなくもとの御位あらたまりて、かずよりほかの權大納言になり給、

〔湖月抄〈十三明石〉〕かずよりほかの權大納言　〈細〉大納言、昔は三人也、源只今新任し給也、〈〇中略〉按、公卿補任、寛平九年大納言正三位藤原時平一人也、六月十九日、聖廟并源の光、此兩人同日に權大納

言に任せり、權大納言、此時始る也、此等を模してかける歟、

〔本朝文粹十一和歌序〕初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序　源道濟

十月三日、員外大納言源相公、惜秋景之既過、賞節候之纔殘、小藏山下大堰河上、策細馬而觀覽、棹輕舟而泛遊、

〔源平盛衰記十二〕大臣以下流罪事

此大臣〇藤原師長ハ、去保元元年ニ中納言中將ト申テ、御歳二十ニテ御座ケル時、父宇治惡左府〇賴長ノ世ヲ亂リ給シ事ニ依テ、兄弟四人、土佐國ヘ流サレ給タリケルガ、〇中略長寬二年六月廿七日ニ被召返、其年ノ閏十月十三日ニ本位ニカヘシ、次年八月十七日ニ正二位シ給テ、仁安元年十一月五日、前中納言ヨリ權大納言ニ移リ給ヌ、大納言ノアカザリケレバ、員ノ外ニ加給ケリ、大納言六人ニナル事是ヨリ始レリ、又前中納言ヨリ大納言ニ移ル事モ、先蹤希也トゾ承ル、

〔倭名類聚抄五職名〕中納言　二方品員云、令外置中納言、〈奈加乃毛乃萬宇須豆加佐〉

〔拾芥抄中本官位唐名〕中納言〈門下侍郎、今世號納言、〉〈黃門侍郎、今世號黃門、〉

〔唐六典八門下省〕黃門侍郎二人、正四品上、〇註略

黃門侍郎、掌貳侍中之職、凡政之弛張、事之與奪、皆參議焉、若大祭祀、則從升壇以陪禮、皇帝盥手、則奉巾以進、既帨則奠巾于篚、奉匏爵以贊獻、凡元正冬至、天子視朝、則以天下祥瑞奏聞、

〔元亨釋書十七願雜〕黃門侍郎源顯基者、亞相俊賢之子也、〇中略寬仁上皇〇後一條升遐、顯基未過卒哭而出家、

〔兵範記〕久壽三年二月五日丁丑、今日黃門殿〇藤原基實可令拜賀給、

〔吾妻鏡七〕文治三年八月廿六日甲午、可令遠江守義定修造稻荷社之由、爲權黃門經房奉被仰下、所被募重任之功也、

〔史籍年表〕葉黃記一名葉禪記、葉室權中納言藤定嗣記、

○按ズルニ、黄門ハ中納言ノ唐名ナリ、本書葉室權中納言藤原定嗣ノ日記ナルヲ以テ、葉黄記ト名ヅケシナリ、

〔勘仲記〕弘安十一年〔正應元年〕正月一日、小朝拜、俊光奉行、公卿執柄巳下、皆悉立之、〔中略〕外辨上首三條黄門〔藤原實重〕召召使令置式筥、

〔徒然草下〕四條黄門命せられて云、龍秋は道にとりてはやんごとなきもの也、

〔東野州聞書〕一同〔寶德元年十月〕十六日常光院來臨あり、申されしは、歌雙紙をば、外題をはしに例式のやうに押也、物語は中にをす由申されし、可知之、京極黄門〔藤原定家〕之自筆を、承祐に借て、一字も不違私書寫、此本の外題を所望仕次に、如此申されし、

〔桃源遺事二附錄〕水戸源黄門〔光圀〕の訃音を聞侍りてよめる　清水谷前大納言實業

きくにその千里へだつるなみださへおどろく袖にかけてこほる、〔中略〕舟橋前式部少輔入道常覺

西山黄門のかくれ給ふを悼る言葉　自息軒〔文略〕

〔岡屋關白記〕貞永元年十一月十二日戊午、是日攝政〔藤原教實〕於直廬被覽御禮服云々、傳聞、京極中納言定家卿、新藤中納言家光卿〔中略〕等在此座、

〔職原抄上〕中納言〔令外官也〕

持統天皇六年、始置此官、其後罷之、大寶二年定官位令日無此官、仍爲令外歟、但慶雲四年又置之云云、相當三位也、四位參議任之時、執筆人卽書從三位、人數近代爲十人、前朝被定八人、其後又不同、

〔百寮訓要抄〕中納言〔侍郎黄門門下納言〕つかさどる所大納言に同、また任人も大略同事也、〔中略〕公事の上卿など申事は、大臣より中納言迄是をつとむべし、中納言令條になし、昔は員數四五人まで有しかど、次第におほくなりて、今は是も十人也、

〔官職秘抄上〕中納言〔令外〕

格云、慶雲二年省大納言二人、置中納言三人、遺誡云、中納言三人、其後天暦三年、始爲四人、(元方、高明、在衡、師平、)天祿三年增五人、(法興院入道、橘好古、雅信、朝成、延光、)寬和二年增六人、(加義懷、)長和三年增七人、(加實成、)同四年增八人、(加經房、)嘉應二年增九人、(加宗盛、)承安元年增十人、(加時忠、)建久四五年以後、還爲八人云々、

〔故實拾要十二〕中納言、相當從三位、唐名、(黃門、龍作、)

是令外ノ官也、於禁中諸政ヲ執行ハルヽ時、上大臣大納言ノ言ヲ下ヘ達シ上ヘ納レ、其外大納言ニ次テ公事ヲ行フ職也、

〔延喜式十一太政官〕凡庶務申太政官、若大臣不在者、申中納言以上、其事重者、臨時奏裁、自餘准例處分、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶五年三月辛未、大納言從二位兼神祇伯造宮卿巨勢朝臣奈氐麻呂薨、(○中略)淡海朝(○天智)中納言大雲比登之子也、

〔日本書紀二十九天武〕九年七月戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、

〔公卿補任持統〕

中納言直大貳大神高市麿朝臣　年月日任大納言、一書云、中納言、

納言布勢御主人朝臣　元年正月、中納言、

〔日本書紀三十持統〕元年正月丙寅朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、納言布勢朝臣御主人誄之禮也、

〔日本書紀三十持統〕六年二月乙卯、是日中納言直大貳三輪朝臣高市麿上表敢直言、諫爭天皇欲幸伊勢妨於農時、

〔日本靈異記上〕忠臣少欲足諸天見感得現報示奇事緣第廿五

故中納言從三位大神高市萬侶卿者、大后天皇(○持統)時忠臣也、有記曰、朱鳥七年壬辰二月、詔諸司當三月將幸行伊勢、宜知此狀而設備焉、時中納言恐妨農務上言諫、(○下略)

〔扶桑略記持統五〕六年九月、始置₂中納言₁、石上朝臣麿初居₂其職₁、

〔續日本紀文武二〕大寶元年三月甲午、始依₂新令₁改₂制官名位號₁、〇中略是日罷₂中納言官₁、

〔標注職原抄上本〕續紀大寶元年三月、罷₂中納言官₁、これに依て按ずるに、その始置は蓋持統帥位の年ならん歟、公卿補任に、中納言大神高市麻呂、納言布施御主人とありて、この中は大中少の中ならず、中外の中なるべし、持統女帝なるゆゑに、簾中に入て機密を獻替する官を置れて、こを中納言といへるならん歟、この御代には大納言の號所見なしか、ゝれば辨疑にいへる如く、彼中納言は卽今の大納言に等し、別に納言といふを置たるは、簾外にて庶事を奏宣の爲なるべし、然るに令制定らんとするに至て、女王の御代の官號にて無用なれば、罷られたるにこそ、

〔續日本紀文武三〕慶雲二年四月丙寅、勅依₂官員令₁、大納言四人、職掌既比₂大臣₁、官位亦超₂諸卿₁、朕念₂之₁、任重事密、充員難₂滿、宜₂廢省二員₁爲₂定兩人₁、更置₂中納言三人₁、以補₂大納言不足₁、其職掌敷奏宣旨、待問參議、其官位料祿、准₂令商量施行₁、太政官議奏、其職近₂大納言₁、事關₂機密₁、官位料祿不₂可₂便輕₁、請其位擬₂正四位上官₁、別封二百戸、資人三十人、奏₂可之₁、〇又見₂令集解、享祿本類聚三代格₁、

〔日本後紀桓武十二〕延曆廿三年四月辛未、中納言從三位和朝臣家麻呂薨、贈₂從二位大納言₁、家麻呂、贈正一位高野朝臣弟嗣之孫也、其先百濟國人也、爲₂人木訥₁、無₂才學₁、以₂帝外戚₁特被₂擢進₁、蕃人入₂相府₁自₂此始焉、

〔玉海〕仁安三年正月一日甲子、節會內辨別當隆季、中納言內辨頗希代事也、

〔詠百寮和歌〕中納言

上下の中立をけに知なれば聞もかしこし言葉ある人、

〔一代要記孝謙〕天平勝寶八年、以₂藤原永手₁始爲₂權中納言₁、此後中納言員不₂定₁、

〔公卿補任孝謙〕天平勝寶八年丙申

權中納言

（権中納言始）

權中納言從三位藤原朝臣永手（四十三）　五月十九日任權、即敍從三位、式部卿如元、（不歷參議）或本、天平寶字元年五月十九日、任權中納言、

〔一代要記　三（條）〕長和四年十一月十七日癸亥、中納言被成八人、源經房加任、

〔公卿補任　三（條）〕長和四年（乙卯）

權中納言從二位源經房（四十七）　二月十八日任、中宮權大夫如元、九月廿日勅授帶劍、

〔江吏部集（上天）〕七言、秋夜陪右親衞員外亞相亭子、守庚申、同賦秋情月露深詩一首、（幷序）

右親衞藤亞相幕下、禮義爲爪牙、德行爲羽翼、退佞進賢、致君於堯舜、輕財重士、比跡於伊周、（○下略）

（員外中納言）

〔江吏部集（上天）〕仲春庚申夜、陪員外藤納言文亭、同賦夜坐聽松風一首、（幷序○詩幷序略）

〔續日本紀（三十一光仁）〕寶龜二年二月己酉、左大臣正一位藤原朝臣永手薨、（○中略）詔遣正三位中納言兼中務卿文室眞人大市、正三位員外中納言兼宮内卿右京大夫石川朝臣豐成弔賻之、

（參議）

〔倭名類聚抄（五職名）〕參議　本朝式職員令云、參議、（於保萬豆利古止比止）

〔令義解（一職員）〕太政官

大納言（○註略）四人（掌參議庶事、謂與右大臣以上共參議天下之庶事、○下略）

〔八雲御抄（三下異名）〕宰相　やくらのつかさ（後拾遺序）

〔後拾遺和歌集（序）〕いぬる應德のはじめのとし、夏みな月の廿日あまりのころほひ、やくらのつかさにそなはりて（○藤原通俊、應德元年六月二十三日、參議ニ任ズ、）いつかのいとまもさまたげなし、

〔文德實錄（八）〕齊衡三年四月庚寅、右京大夫從四位下藤原朝臣諸成卒、（○中略）時人以爲、諸成才學不後等輩、資性勤爲宗、恨不登八座、而虛然傾逝、

〔本朝文粹（六奏狀）〕請殊蒙天裁依勤績及儒勞敍從三位狀　菅三品

伏檢故實、儒者之式部大輔、以十年已下勞必拜八座之例、近則三善清行朝臣、以八年勞、藤原元方卿、

以十年勞、大江維時卿以六年勞、皆任參議、如曾祖父是善朝臣者、勞僅三年被拜除也、〇中略

天延二年十一月十一日

正四位下行式部大輔兼文章博士菅原朝臣文時誠惶誠恐謹言

〔雲州消息下本〕不及三旬之齡、昇八座之科、殊常之恩、抃舞不少、夜部及深更、不申慶賀、今日可參所々、〇中略

正月日　　參議藤原

謹上　大藏卿殿

〔朝野群載二文筆〕可被拜任大納言闕事

天治又長實卿、爲新任八座兮、忽昇龍官、〇中略

長承元年十二月廿日　　中納言〇源顯雅

〔愚管抄七〕一問解官せじとはいかに

答、えりいだされん人の八座辨官職事ばかりになる人候らん所こそ要なれば、それは解官せられなんずとも、〇下略

〔太平記十一〕正成參兵庫事附還幸事

六月〇元弘三年五日ノ暮程ニ、東寺マデ臨幸成ケレバ、武士タル者ハ不及申、攝政關白太政大臣、左右ノ大將、大中納言、八座七辨、五位六位、內外ノ諸司、醫陰兩道ニ至ルマデ、我劣ジト參集リシカバ、車馬門前ニ群集シテ、地府ニ布雲、〇下略

〔伊呂波字類抄太官職〕參議平章事、今號相公、諫議大夫

〔拾芥抄中本官位唐名〕參議平章事、今世號相公、諫議大夫、八座、吏部尚書、宰相、平尚書

〔性靈集三〕贈伴按察平章事〇道〇國赴陸府詩并序〇詩序略

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年九月乙丑、參議從四位上和氣朝臣眞綱卒、○中略爾乃爵止於從四位、官登於平章事、

〔元亨釋書十七願雜〕諫議大夫尙書右丞平實親、才名文學顯著于時、

〔性靈集一〕贈良相公(安世)○良岑詩一首(五言雜言)

良相公投我桃李、余(空海)○報以一章五言詩三篇、雜體歌、○詩略

〔興福寺緣起〕法華會

故閑院大閤(冬嗣)○藤原同氣之弟、故左兵衞督相公(藤原助)○加三論立義二人、令論無相義、

〔菅家文草十二願文〕爲藤相公亡室周忌法會願文(元慶八年二月十二日)

弟子參議正四位下左大辨藤原朝臣山陰敬白○下略

〔菅家後集〕傷野大夫(古調七言五韻)

沈思雖非入神妙、如大夫者二三無、紀相公(長谷雄)○應煩劇務、自餘時輩總鴻儒、

〔本朝文粹二詔〕停九日宴十月行詔(世號殘菊宴)　後江相公(朝綱)○文略

〔玉海〕仁安三年十二月廿九日、今日有陣定幷伊勢幣事、○中略左府(藤原經宗)○示云、宰相不候、可被寄座之由、可被仰者、修理大夫召官人傳仰之、召平相公(淸盛)○親範(參議)○右大辨實綱(參議)○等、

〔菅家文草五詩〕被拜宰相奉謝藤納言賜鄭州玉帶、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年五月甲戌、勅曰、○中略宜令百官五位已上、緇徒師位已上、悉書意見密封奉表、直言正對勿有隱諱、朕與宰相審簡可否、

〔九曆〕天德元年十二月廿九日、東宮鎭魂、小野宰相(好古)○爲上、去月依御輕服不行、仍今日所行也、

〔本朝世紀〕久安三年二月廿二日丙辰、今日有行幸春日社事、○中略公卿攝政、○中略藤宰相(淸隆)左大辨(顯業)、行事、宰相中將(忠雅)宰相(公隆)宰相中將(經定)宰相中將(教長)等也、

〔台記別記〕久安三年四月一日甲午、今日行官政、〇中略辰二點參官、〇中略相續二相公忠雅、經定、參入、著床子、

〔寛延武鑑一御大名衆〕紀伊宰相宗將卿從三位常陸介
水戸宰相宗翰卿從三位

〔職原抄上〕參議八人
參議者、諸臣之中、四位已上、有其才之人、奉勅參議官中政之意也、故非正官、然而除目任之、又例也、四位任之者、猶稱某朝臣、三位已上稱姓朝臣也、八座者、異朝八座、其職各別也、本朝聖武天皇天平三年、置參議、大同御宇罷參議、置五畿七道觀察使、合八人弘仁御宇、罷觀察使、皆爲參議云々、八人自此而始、依之有八座之號、任參議有數道、左右大辨并近衞中將有其才者、藏人頭、及勘七箇國公文受領等是也、

〔唐六典一〕尙書都省
尙書令一人正二品〇中略
後漢以尙書令、僕射、及六曹尙書爲八座、魏氏省爲五曹、則僕射有二、若僕射省一、則尙書有六率、以爲常、今則以二丞相、六尙書爲八座、〇中略
尙書令、掌總領百官儀刑端揆、其屬有六尙書、法周之六卿、一曰吏部、二曰戸部、三曰禮部、四曰兵部、五曰刑部、六曰工部、凡庶務皆會而決之、〇中略其國政樞密、皆委中書、八座之官、但受其成事而已、
自太師已下、皆古宰相之職、今不常置、故備敍之、

〔百寮訓要抄〕參議相公　殊に才覺ある仁任ずる官也、陣の座にて物をよみ右筆をする器也、才覺なくては任せざる事也、是はむかしより八人、當時も子細なし、八座と申也、

〔故實拾要十二〕參議、相當位正四位下、唐名諫議大夫、
是雖非正官、於禁中諸政ニ無不參議、於陣座書ヲ讀、或執筆タリ、故ニ有文才人任之也、當官ヲ八座

ノ臣ト云、是非唐名、八人八疊ニ列座ス、故ニ八座ノ臣ト稱スル也、宰相ト云、是又非唐名、參議ノ異名也、異朝ノ宰相ハ、當本朝三公云々、又相公ト云、參議ノ唐名ニアラズ、白氏文集曰、以三公相公ト云、然ル時ハ參議ニ不可用コト也、凡參議ハ諸政ニ參ル、故ニ世人宰相ト稱ス、位署書ノ時ハ參議也、名ヲ呼ブ時ハ、源宰相、藤宰相、平宰相ト呼也、人數多キ故ニ以氏姓呼之也、

〔有職小說中官職〕參議　是ヲ官ト謂ズシテ職ト云、異名ヲ宰相ト云、本朝ノ故實也、但位署ノ時ハ、或源參議、或ハ菅參議ナド、書、名ヲ呼時ハ、或平宰相、或藤宰相ナド、云リ、唐名ヲ相公ト號ス、野相公(小野篁)、江相公(大江音人)ナドノ類ナリ、

〔有職拾葉下〕參議(相當正四位下)　近代從三位　唐名(諫議大夫、八座トモ、)

參議ニ任ズレバ四位ニテモ公卿ト云フ、況三位ニ至ルヲヤ、位署書ノ時、三位ノ參議ハ姓朝臣、四位ノ參議ハ名乘朝臣ト書也、

三位參議　藤原朝臣定家

四位參議　藤原定家朝臣

右ハ參議ニノミ限也、外ニハ無之也、

〔伊呂波字類抄太官職〕參議

本朝事始云、高天原廣野姬天皇(○持統)四年七月一日、始任正廣肆布施朝臣御主人、

〔續日本紀二文武〕大寶二年五月丁亥、勅從三位大伴宿禰安麻呂、正四位下粟田朝臣眞人、從四位上高向朝臣麻呂、從四位下下毛野朝臣古麻呂、小野朝臣毛野、令參議朝政、

○按ズルニ、政事要略ニ、此大寶ノ勅ヲ擧テ、本朝參議之起、自此始焉トアレド、此時未ダ官名ト爲サズ、以下ニ擧グタル養老ノ二條亦然リ、

〔續日本紀七元正〕養老元年十月丁亥、以從四位下藤原朝臣房前參議朝政、

〔續日本紀九元正〕養老六年二月壬申、以正四位下安倍朝臣廣庭參議朝政、

〔扶桑略記六元正〕養老七年、興福寺內、建施藥院悲田院、○中略同比始置參議五員、已上二條月日可尋

○按ズルニ、公卿補任ニハ、此歲參議ニ藤原房前、阿倍廣庭ノ二人アリテ、此ト合ハズ、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年八月辛巳、引入諸司主典已上於內裏、一品舍人親王宣勅云、執事卿等、或薨逝、或老病、不堪理務、宜各擧所知可堪濟務者、丁亥、詔依諸司擧、擢式部卿從三位藤原朝臣宇合、民部卿從三位多治比眞人縣守、兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、大藏卿正四位上鈴鹿王、左大辨正四位下葛城王、右大辨正四位下大伴宿禰道足等六人、並爲參議、

〔扶桑略記六聖武〕天平三年八月、或記云、同月始置參議、

〔公卿補任平城〕延曆廿五年改五月十八日爲大同元年、○中略皇代記云、大同元年五月廿四日、置六道觀察使者、不置畿內七道歟、○中略五月廿八日以參木爲觀察使、

〔職官志一〕參議、初非正官也、大寶二年五月(中略)、養老元年十月(中略)、六年二月(中略)是也既而爲正官、天平三年八月(中略)是也

〔公卿補任平城〕大同二年四月十六日、詔、宜罷參議號、獨置觀察使、所食封邑各二百戶、○又見日本紀略

〔日本紀略嵯峨〕弘仁元年六月丙申、太上天皇○平城詔曰、去大同元年、爲行十六條、量置觀察使、各委一道云々、夫參議之寄、望重守大、歸任責成、職非虛設、是以廢置之云々、宜罷觀察使、復參議號、封邑之例、亦仍舊歟、

〔菅家文草九奏狀〕請參議之官定爲職事事

右伏見、今之參議、古之觀察使也、考祿無法、官位不明、謹案續日本紀曰、大寶二年四月、從三位大伴宿禰安麻呂、正四位下粟田朝臣眞人、從四位上高向朝臣麻呂、從四位下下毛野朝臣古麻呂、小野朝臣毛野、參預朝政、本官如故、又省去大同二年五月四日問曰、觀察使無官位相當、仍不注兼字、而或云可注兼字、何以爲正、明法博士讃岐廣直答曰、雖無相當、官員既備、仍須注兼字、弘仁七年六月廿五日問

曰、未得解由之參議者、預釐務以不、大判事物部敏久答曰、參議之號、不載令條、但太政官去延曆八年八月廿日、下民部省符偁、得省今月十三日解偁、被太政官去六月一日符偁、參議正三位佐伯宿禰今毛人、去月十日、致仕已畢、省宜承知、依例施行者、仍檢案內、無有依致仕賜收參議封之例、今不知行狀、謹請處分者、被右大臣宣偁、奉勅宜准職封減半、自今以後、永爲恒例者、今據此符、參議准職事例、然則未得解由、不預釐務、同十三年四月十三日問曰、前大宰帥參議從三位多治比眞人、身帶參議、不預他職、考祿之法、未知所行、明法博士與江繼人答曰、大寶二年、始勅任、參議朝政、然則可謂職事、准據令條、可預考祿、但相准官位、事須處分、夫則大寶初置之日、郎云、本官如故、大同決疑之時、又曰、須注兼字、又未得解由之人、不預釐務、不帶他職之輩、可給考祿之狀、明法曹司勘申先畢、加之頃年之例、自職事拜參議者、至兼本官、必有宣旨、遭喪解任之徒、奪情復任、亦降勅旨、況所食者、職事之封、所載者除日之簿、號之職事、所據非少、但格式未立考祿馬料之法、官猶無相當行守之文、此其或可論非職事之故也、若果謂非職事、則三位參議不帶餘官者、當無家司、所以爲非職事三位也、爰知可稱職事、所據已多、論非職事、或有牴牾、望請被定官位考祿等之式、永爲職事之官、謹奏、

元慶六年七月一日、爲式部少輔、爲省修此狀、

〔小野宮年中行事正月〕十一日除目事

寬平二年正月廿八日御記云、又就議筵、問太政大臣曰、參議所掌、其職如何、大臣答云、爲政大夫、然則諸國長官、有聽其行者、具以奏之、

〔本朝世紀〕承平五年六月五日戊辰、此日中納言藤原扶幹卿、著左衞門陣座、而參議不參、仍無政、　七日庚午、中納言藤原扶幹卿、參議藤原師輔朝臣聽政、

〔續世繼七堀河の流〕ほりかはの左のおとゞ俊房の御子は、太郎にては師賴大納言とておはせし、○中略中辨より宰相になり給て、ひら宰。相。にて、前の右兵衞督とて、とし久しくおはしき、

〔玉海〕仁安三年正月一日甲子、欲出仕之間、聊有相障事不出、〇中略 或人云、雨儀奏宣命等之路、昇露臺小橋、入南殿北庇東戸、經廂云々、〇略 註 又召參議詞、一度ハ召兼國、一度ハ召參議姓朝臣云々、四位參議可召名也、而召官云云、但可尋問也、

〔詠百寮和歌〕參議

讀かける道に賢き名を得つゝ物知人や今ぞ見知らむ

權參議

〔續日本紀 十聖武〕天平元年二月壬申、以大宰大貳正四位上多治比眞人縣守、左大辨正四位上石川朝臣石足、彈正尹從四位下大伴宿禰道足、權爲參議、

〔日本後紀 十三桓武〕大同元年三月壬午、從三位藤原朝臣葛野麻呂、從四位上藤原朝臣園人、並爲權參議、

准參議

〔公卿補任 平城〕延暦廿五年 丙戌〇大同元年

准參議從四位下吉備泉 六十七 五月卅日、准三木、

從四位下阿倍兄雄 閏六月卅日任

參議代

〔本朝世紀〕正暦五年四月五日丙戌、被差定來十三日、齋内親王御禊、前驅參議不參、以右中辨源俊賢朝臣爲參議代、

非參議

〔書言字考節用集 三官位〕非參議 ヒサンギ 前官公卿、無官二三位、謂之非參議、

〔倭訓栞 中編二十一〕ひさんぎ 非參議の音なり、もと參議は天下の政をまじはりはかるなれば、八省より以上大納言までは參議也、よて宰相を打まかせては、參議と稱す、いまだ宰相にならぬ三位四位などをさして非參議といへり、

〔有職問答 二〕非參議の號の事、前官と可心得之、又參議に可成人の未任之を、他人賞翫しても稱之 又スベテ參議ニ任セザル散二位三位ヲモ云也 と云々、

〔有職問答 一〕一前官位署事

前大臣も非參議と申候〇下略

〔故實拾要十〕非參議

是雖レ敍二二位三位一、無官タル人ヲ非參議ト云也、

〔有職小說官爵中〕非參議　前官ノ公卿、無官ノ二位三位ヲ云、

〔公卿補任元明〕和銅二年己酉

非參議從三位長屋王　十一月一日敍、年廿七、元正四位上、十一月任二宮內卿一、天武天皇孫、太政大臣一品高市親王之第一子、母近江天皇(天智)女、

〔公卿補任桓武〕延曆廿年辛巳

非參議從三位坂上田村麿四十四　十一月乙丑敍

〔日本紀略桓武〕延曆廿年十一月乙丑、詔曰、〇中略田村麻呂授二從三位一、

〔內裏式上〕元正受二群臣朝賀一式

前一日設二御座於太極殿一、〇中略式部自二龍尾道南頭一去十七丈、置二宣命位一、自二宣命位一南去四丈、東折二丈五尺、置二太政大臣位一、西折二丈五尺、置二親王位一、左大臣位於二太政大臣位南一、右大臣位於二親王位南一、大納言位於二左大臣位南一、非參議一位二位位於二右大臣位南一、中納言位於二大納言位南一、三位參議位、少退在レ東、諸王三位位、於二非參議二位位南一、

〔本朝文粹六奏狀〕請三特蒙二天恩一依二當省幷儒學勞一被レ敍二從三位一狀　菅三品

右文時、〇中略康保元年任二當省一、天延二年敍二當階一、非參議之四位中、文時已爲二第一一也、〇中略

天元三年正月五日　正四位下行式部大輔兼文章博士尾張權守菅原朝臣文時上

〔權記〕正曆二年九月十日、詣二桃園一、命云、去七日、太政大臣〇藤原爲光家饗事、給祿如レ常、〇中略主人勸二盃於非參議大辨事一、雖レ非二初度事一、是先例也、非參議大辨座用二圓座一、但放レ面、

〔源氏物語(二椎本)〕なま〱のかんだちめよりも、非參議の四位ども、よのおぼえくちをしからず、もとのねざしいやしからぬが、やすらかに、身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや、

〔湖月抄(二椎本)〕非參議の四位とは、まづ參議は天下の政をまじはりはかるつかさ也、つねには、宰相といへり、參議にいまだならぬ四位の、たとへば左右の大辨、左右の衞門督などのたぐひを、非參議の四位といふ也、

〔源氏物語(四十四竹河)〕右兵衞督、右大辨にて、みな非參議なるをうれはしと思へり、

〔湖月抄(四十四竹河)〕非參議なるを　哢問云、竹河卷に、右兵衞督右大辨を非參議といへり、如何、一答、參議に任せぬさきは非參議といふ也、

〔薩戒記〕應永卅二年五月一日庚午、不出仕、傳聞今日被發遣祈年穀奉幣、上卿藤大納言、(隆光)使石淸水(上卿兼行之)賀茂西園寺中納言、(公名)松尾右衞門督、(敎豐非參議)

〔倭名類聚抄(五職名)〕少納言　職員令云、少納言、(須奈伊毛乃萬宇之)

〔拾芥抄(中本官位唐名)〕少納言(門下給事中、門下給事中、尙書郎)

〔唐六典(八門下省)〕給事中四人、正五品上、(○註略)給事中掌侍奉左右分判省事、凡百司奏抄、侍中審定、則先讀而署之、以駁正違失、凡制勅宜行、大事則稱揚德澤、褒美功業、覆奏而請施行、小事則署而頒之、凡國之大獄、三司詳決、若刑名不當、輕重或失、則援法例、退而裁之、凡發驛遣使、則審其事宜、與黃門侍郞給之、其緩者給傳、卽不應給罷之、凡文武六品已下授職、所司奏擬、則校其仕歷深淺、功狀殿最、訪其德行、量其材藝、若官非其人、理失其事、則白侍中而退量焉、(○註略)其弘文館圖書、繕寫讎校、亦課而察之、凡天下冤滯未申、及官吏剩害者、必聽其訟、與御史及中書舍人同計其時宜、而申理之、

〔田氏家集(中)〕菅給事、(○少納言菅原)過訪、兼示宮櫻詩、因以長句奉謝、(○詩略)

〔本朝世紀〕康和元年七月廿三日甲子、是日從四位上行主殿頭兼河內守藤原朝臣公經卒、○中略延久元年十二月、拜少納言、五年正月、授正五位下、以給事中勞也、

〔康富記〕寶德三年八月十一日丁丑、今日釋奠也、○中略六位外記史立廟拜者也、仁安、承安、承元度々六位外記史立加廟拜、其後中絕歟、此事無其據之間、可被興行之由、去年比予頻申談淸給事中、今春可如此之處、予爲五位參入之、愚息康顯爲六位參仕、

〔職原抄上〕少納言三人

昔者重職也、三人必兼侍從拾遺補闕之任也、弘仁御宇、置藏人所之後、其職掌遷於侍中、仍少納言只掌鈴印等事、其職兼太政官中務省也、

〔故實拾要十二〕少納言三人 相當從五位下、唐名給事中

是鈴印ノコトヲ掌ル也、鈴印トハ天子ノ寶印也、位記等ニ此印ヲ押スコトヲ掌リ、或ハ鈴ヲ振テ時ヲ告ル、或往古ハ驛路ノ傳馬早打等ノ時、鈴ヲ振テ奉行之コトヲ掌ル也、三人必兼侍從也、

〔官位問答〕一權大納言、權中納言ト申如ク、權少納言トハ不申候哉、

少納言ハ本來不置權官候也、少納言ハ三人任之候、當時モ菅少納言淸少納言ナド喚候、後ニ任候ヲ新少納言ト喚候也、

〔令義解七公式〕奏事式

奏勅依奏、若更有勅語須附者、各隨狀附云々、謂此大納言自注之辭、若少納言代奏者亦准此、凡少納言非奉勅之官、唯於其所奏之事、即得自奉勅語、除此之外不得復奏勅、

〔延喜式十一太政官〕凡任僧綱者、辨官預仰式部治部等省、其日遣勅使參議賜宣命文及少納言辨式部輔治部輔玄蕃頭等各一人、共向僧綱所、僧綱所預設座勅使以宣命文授少納言、少納言受而就座宣制訖、勅使以下還歸、

凡少納言所奏請印文、過五十張密奏、

凡内印公文、若脱錯應改者、少納言先申上、然後奏請印、

凡毎月晦日、太政官錄參議以上上日、少納言來月一日進奏、

〔延喜式 十一 太政官〕凡祭祀日、所司預申官、前散齋一日、少納言奏聞、

凡内裏任官者、少納言辨各一人、率式部兵部行事、若於朝堂、卽外記史共預、事見儀式

〔古京遺文〕威奈眞人大村墓志

小納言正五位下威奈卿墓誌銘并序

卿諱大村、檜前五百野宮御宇天皇○宣化之四世、後岡本聖朝○齊明紫冠威奈鏡公之第三子也、○中略藤原聖朝○文武小納言闕、於是高門貴冑、各望備員、天皇特擢卿除小納言、○下略

〔續日本紀 五 元明〕和銅五年閏十二月丁巳、有司奏、自今以後、公文錯誤、内印著了、事須改正者、少納言宣、申官長、然後更奏印之、

〔類聚符宣抄 六〕少納言職掌

右大臣宣、少納言無故不會申政之時一日、取前勞五日、自今以後、永爲恒例、

延暦廿四年七月廿日

少納言、外記、

右二官、大臣著朝座日、必可著座、壁書

大同二年三月廿二日

上宣、少納言、自今以後、宜定日別二人、若有闕直者、錄名申之者、

大同四年七月廿五日

弘仁九年六月十日、辨官申政之時、少納言不參、仍上宣無故不會之徒、宜准延暦年中宣旨、除前勞五

箇日、其昨日直者、必可會今日政、而不會者、其怠特重、宜除勞十箇日者、大納言藤原朝臣〇冬嗣宣、奉勅、行幸之日、少納言闕、請鈴、自今以後、追前勞十五箇日者、去弘仁九年六月十日宣旨偁、少納言、無故不會政時、宜准延暦年中宣旨、除前勞五箇日、其昨日直者、必可會今日政、而不會者、其怠特重、宜除勞十箇日者、當今商量、可有小恕、宜改前例、昨日直除勞七箇日、自餘四箇日者、

　弘仁十年九月七日　　少外記高丘宿禰潔門奉

大納言清原卿〇夏野宣、申政之時、少納言不參、匪侍之狀、擧申已訖、比及請印後乃參來、須先申其由、後令參入、而專輒參入、事渉不遜、自今而後、不得更然、

　天長八年十二月十七日　　少外記高村宿禰武人奉

〔續日本後紀十一仁明〕承和九年五月壬戌、中務大輔從四位下高階眞人石川卒、從四位下淨階眞人之子也、弘仁十三年任宮內少丞、轉大丞、明年正月敍正五位下、除兵部少輔、俄遷少納言、父子相襲居斯職、以富聲音也、時論以爲稱唯之音、細而且高、猶勝於父、

〔類聚符宣抄六〕少納言職掌

右大臣宣、奉勅、少納言外記上日、隨其參入、注銜前銜後等之由、加少納言署、自今以後、宜經奏聞者、

　天慶九年十一月十一日　　大外記三統宿禰公忠奉

左大臣宣、少納言勤申故障、鎮以遲參、請印之政常闕、奉公之勤自疎、事有終始、何無隄防、弘仁十年八月七日宣旨偁、少納言不會政時、准延暦年中幷弘仁九年六月例、除前勞五箇日、其昨日直者、必可會今日政、而不會者、其怠特重、宜追勞十箇日者、當今商量、可有小恕、宜改前例、昨日直者除勞七箇日、自餘四箇日者、然則闕直之輩、先例已重、若不改張、奈將來何、闕直之人、宜追三箇日者、

　康保四年四月卅日　　大外記雀部有方奉

〔詠百寮和歌〕少納言

御事法のべくだしぬることをしもつかさどりける人ぞ賢き

員外少納言

〔續日本紀 稱德二十八〕神護景雲元年十二月乙酉、從五位下石川朝臣淸麻呂爲員外少納言、

〔續日本紀 光仁三十四〕寶龜八年正月戊寅、從五位下池田朝臣眞枚爲員外少納言、

權少納言

〔續日本紀 桓武三十八〕延曆四年正月癸亥、從五位下藤原朝臣乙叡爲權少納言、

判少納言

〔三代實錄 淸和二十一〕貞觀十四年二月十五日乙卯、適者少納言正䒭王、依病不參、和氣朝臣彝範、染穢請假、藤原朝臣高範、父憂去職、勅以右中辨藤原朝臣良近、行少納言事、爲判少納言、○又見類聚符宣抄

○按ズルニ、判少納言ハ、公式令ニ謂ユル攝判ナリ、事ハ令制官職總載篇ニアリ、參看スベシ、

少納言代

〔類聚符宣抄 六〕少納言代

比日少納言、擧員依病不上、因茲請印之事、既致擁滯、右大臣宣、少納言等病瘳之間、宜權以辨大夫令請內外之印者、

貞觀六年六月四日　　少外記滋野恒蔭奉

〔江家次第 臨時十八〕結政請印

承平五年十二月卅日、依左大臣○藤原忠平仰、參議當時朝臣就結政所、令捺印官符三通云云、但今日少納言各有障不參入、仍蒙左大臣宣、以左少辨源相職朝臣、爲少納言代云云、

非少納言

〔江家次第 九九月〕九日平座

上卿令官人召外記、外記出自宣仁門、上卿云、見參、外記歸後、持參見參、依上卿目稱唯持參如恒、侍從以上一通、○註略非侍從一通、○非少納言、非參議入之、

外記

〔倭名類聚抄 五職名〕大外記　職員令云、大外記、於保伊之流須豆加佐

〔拾芥抄 中本官位唐名〕大外記 門下起居郎 今世號外史　門下錄事 門下令吏

〔田氏家集 中〕哭舍弟外史大夫○詩略

〔雜言奉和〕七言、秋日陪左丞相(〇藤原時平)城南水石之亭、祝藏外史大夫(〇大藏善行)七旬之秋、應敎一首、(井序)

左大辨紀朝臣長谷雄上

延喜元年秋、左丞相命詩酒於城南別第、賀外史藏大夫懸車之齡也、大夫經籍爲心、勸誘不倦、在朝之士、傳受其業、寔繁、生徒不可勝數、

〔菅家文草〕一(詩)哭菅外史奉寄安著作郎(〇興行、詩略、)

〔權記〕正曆三年十二月廿六日乙酉、御建禮門、有荷前事、(〇中略)上卿座南末有諸大夫座、東有上官座、又東去三丈有外史座、

〔康富記〕應永廿二年八月十六日己亥、酉剋詣高倉禪門幷給事中、大外記殿等對面、局務外史師胤朝臣、官務爲緒、坊城左衞門佐俊國等參會、

〔建內記〕嘉吉元年三月三日、今日大口借用、淸外史返送了、

〔有職問答〕三一少外記は、(本分數三人、三﨟マデ如此喚候歟、)一﨟二﨟三﨟四﨟とて四人あり、他人は一﨟外記とも二﨟外記とも書共、自筆には少外記、若は權少外記とも我が(此分候)成やうに書べし、此儀如何、

〔職原抄〕上外記(大二人 少三人)

太政官中有三局、左右辨官(左右大史掌其局)外記是也、近代左大史兼左右、此云官務、外記上首、此云局務、仍今稱兩局也、外記、恒例臨時公事、除目敍位等事、奉行之官也、尤爲重職、近代淸中兩家任其職、於少外記者、彼兩家輩、同門生等、依器量任之、

〔百寮訓要抄〕大外記(外史二人)　淸家中家兩流なり、來日上首の外記をば局務と申、天下の文書をかき、近き先例をかんがへ、よろづの公事を奉行す、其家ならでは、更他人のならぬ官也、昔より重代の仁の外は任ずる事なし、外記局に古今の文書ををさめ侍れば、天下の明鏡の職也、二人可有、或三人四人も有、

少外記二人　つかさどる所、大路大外記に同、清家中家など任ずべし、

〔延喜式十一太政官〕凡諸司申政於太政官者、先經外記、然後令申、

凡請印文書初入之日、外記細加撿察、明日捺印、

凡諸國史生博士醫師籤符、外記勘會補任帳、明知其補由、然後請印、

〔延喜式四十五左右近衛〕凡節會日、及臨時就事、外記率史生一二人、聽陪陣邊、史亦同之

〔西宮記臨時二〕宣旨事

太政官　外記局

除目文書計歷事權一任正二年、權任又給官符召名、

省試同宣旨學生事、仰式部　對策給料事、仰穀倉院云々、別當上卿召被下云々、　修國史撰式所別當寄人宣旨、或所別當宣

同所寄人、

策問博士事、節會行幸公宴等、總臨時可仰諸司事、外記所奉行也、北堂講書事、日本紀尙復召人等事、可令習奏賀事、依宣旨定其人、上卿仰外記云々、　節會日不就列昇殿事、

〔傳宣草下〕諸宣旨事

一下外記宣旨

凡節會行幸、恆例臨時諸公事、供奉諸司等事、外記所奉行也、

凡神事佛事諸公事、延引停止之時、仰外記、供奉諸司事　又仰辨、裝束饗祿事

凡任官之間事、一向外記所奉也、敍位之時勘例事、近代外記又奉之、

〔地下職官志〕外記　正四位下局務兼掃部頭押小路大外記中原師庸　家領高七拾六石　從五位

上兼造酒正押小路權大外記中原師英師庸男

年中臨時恆例之諸公事、承上卿職事命奉行之、正月三節會、參陣外任奏、御酒上勅使之交名、二月十

一月春日祭、上、八月放生會等見參錄法、九月例幣卜串等調進之、公家武家諸官、公卿殿上人諸大夫等、任官受領之時、應上卿之命、宣旨書調下知之、〇中略

少外記　從五位下兼少內記平田中務少輔中原職永　家領高十石三斗餘

正六位下兼少內記山口宮內少丞中原友昌　家領高五石八斗餘

權少外記　正六位下山口式部少丞中原高範　家領五石八斗餘

同　正六位下山口民部大丞中原英昌友昌之男

諸節會、於陣進外任奏、催國栖立樂、白馬舞妓之進、御酒勅使之交名、著外辨幄、二月十一月春日祭、八月放生會參向進見參、九月例幣、神祇官參向、〇下略

〔有職拾葉下〕外記　唐名外史

禁中筆取ノ役也、禁中ニ定リタル事、又時ニ臨ンデ有之、公事除目任官敍位昇位等ノ事ヲ司也、故有職故實ヲ能ク可知也、總テ禁中ニ史筆取八人、生二十人、太政官ニ居テ物ヲ書也、

〔日中行事〕每月一日は、殿上の簡のはなち紙をしかへて、ふるきはなち紙のすゑおりかへしたるをのべて、人々の上日の數をかく、三日前にしるして奏するなり、公卿ならびに少納言外記は、大外記しるして奏聞す、

〔類聚符宣抄六外記職掌〕應御所記錄庶事外記內記共預事

右被右大臣宣偁、依令外記掌勘詔奏、及撿出稽失、內記掌造詔勅、及御所記錄、據此而所掌稍異、舉綱而論、事合相通、何者內裏行事、大臣所預、至有稽失、誰能撿出、若御所錄事、外記共預、則內裏儀式、豈致違失、自今以後、御所儀例、外記同錄、以備顧問、如不遵奉、彼此有違、預事之人、解却見任、事緣勅語、不得疏漏者、今錄宣旨、立爲恒例、

弘仁六年正月廿三日　參議從三位行左大辨兼備前守秋篠朝臣安人奉

權外記

外記代

辨

右大臣宣、依公卿意見所施庶政、可順時合宜、存此意、政有迷時、外記申聞、

天長元年十一月十六日

大外記宮原宿禰村繼奉

聽外記侍陣邊事

右大將宣、節會行幸日、宜聽立床子侍陣邊、其史生一二人、令侍板敷、亦臨時就事、聽候陣邊、

天長六年十一月十六日

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年七月三日庚辰、勅參議已上就聽座聽政者、外記須毎日記錄、毎月一日十六日、兩度進藏人所、

〔詠百寮和歌〕大外記

まるしおく代々を重て曇りなき人や昔の鏡なるらん

〔三代實錄一清和〕天安二年十月廿六日癸丑、從五位下行相模介滋野朝臣安成爲權大外記、相模介如故、

〔類聚符宣抄六〕外記代

被右大臣宣偁、近日外記四人、皆煩咳病不能出仕、權少外記坂上恒蔭、雖纔參入手局、又有所勞不能著靴、無由從廳上之政、須以左少史小槻當平爲外記代、令從廳上之事、兼行雜務、但恒蔭祗候局中勤行例務者、

延喜廿三年正月廿九日

權少外記坂上恒蔭奉

〔倭名類聚抄五職名〕大辨　職員令云、左右大辨、於保伊於保止毛比　中辨　職員令云、左右中辨、奈加乃於保止毛比　少辨　職員令云、左右少辨、須奈伊於保止毛比

〔安齋隨筆前編五〕一辨官之訓　和名抄に、大辨於保伊於保止毛比　中辨奈加乃於保止毛比　少辨須奈伊於保止毛比とあり、橘嘉樹問云、辨官の訓オホトモヒと云義如何、貞丈答云、古義未知、無所見、今按、オホトラマヒの略

オホトマヒ也、マとモ音相通なるゆへ、マ轉じてモとなる歟、オホは多にて、職事の繁多なるをいふ、トは執るの義にて、モヒはマヒの轉語なるべし、ウヤマヒ、ワキマヒ、フルマヒの義の如き助語なるべし、辨官は太政官中の執事繁多なるゆゑ、オホトラマヒを略して、オホトモヒと云ならん、

〔玉勝間一〕官名の事

辨は於保止毛比、これは上つ代よりの官名と聞えたり、意はいかなるにか、いまだ考得ず、字もいかなる意をもてあてられたるにかさだかならず、西宮記、北山抄、小右記などに、大粫火之官(オホトモヒノツカサ)と書れたるは借字也、

〔標注職原抄上本〕辨、和名抄大辨を於保伊於保止毛比と訓る、おほともひの略にて、諸司諸國を伴ひ政を申す義也、

〔西宮記正月〕除目

上卿仰云、大粫火乃官乎式兵乃省仁名付給天令候人等將爲天參來、

〔台記〕康治元年正月十七日辛亥、政始如例、○中略六位外記、參自西戸、申云、大粫官政欲申、示大粫大夫一人云々侍リ、余云、令申ヨ、外記唯退、

〔本朝世紀〕久安三年四月一日甲午、於官廳有政、○中略左大辨顯業卿、先著結政座、後移著廳、權少外記三善康光讀申、其詞云、大粫火乃司乃政申給ムトス、大粫火大夫一人ミ乃侍ベリ、上卿宣曰、令引與、次申文如常、

〔拾芥抄中本官位唐名〕大辨左右 尚書左右大丞今世號尚書左右大丞 中辨左右 左右司郎中今世號尚書左右中丞 少辨左右 左右司員外郎今世號左右丞

〔運歩色葉集勢〕少辨唐名蘭臺

〔易林本節用集　官位左〕左中辨（中丞 鸞臺）　左大辨（尚書 同）　左小辨（少丞 同）

〔唐六典　一 尚書都省〕左右丞、掌管轄省事、糺舉憲章、以辨六官之儀制、而正百僚之文法、分而視焉、若左闕則右兼知其事、右闕則左亦如之、若御史有糺劾不當、兼得彈奏、

〔田氏家集　下〕傷左尚書〇詩略

〔田氏家集　下〕暮春宴菅尚書亭同賦掃庭花自落各一字、得遷〇詩略

〔菅家文草　三 詩〕尚書左丞餞席同賦贈以言、各分一字、探得時字、左丞佐世、

〔本朝文粹　十 詩序〕後二月遊白河院同賦花影泛春池應教　源順

太長秋左監門、戸部尚書、三納言、右武衛執金吾、左大尚書、及當時賢大夫之心、通和漢者、巧絃管者、或自仙園、或自第宅、冠蓋相望、皆以追尋、

〔本朝麗藻　上〕暮春於右尚書菅中丞亭同賦閑庭花自落以心爲韻　江以言〇詩略

〔本朝文粹　七 書〕七月一日、尚書右大丞藤原行成

答　江以言〇中略

長保三年七月一日　禮部侍郎以言白

〔吉續記〕文永十年五月廿四日乙亥、今日最勝講第二日也、〇中略其儀如例、辨左司郎兼頼、奉鐘入無名門、經小板敷、昇御倚子間、

〔本朝文粹　十 詩序〕晩春陪上州大王臨水閣同賦香亂花難識應教　後江相公〇朝綱

去月西郊遊覽之次、大王命云、書閣之畔有一株櫻、願待花開共相賞翫、卽奉敎者、尚書右少丞菅在躬、著作郎文時、及朝綱三人而已、

〔元亨釋書　十七 願雜〕通議大夫尚書右丞平時範者、尾州刺史定家之子也、天仁元年冬、辭鸞臺入佛家、

〔建內記〕嘉吉元年三月十四日、藤右少辨經直入來、言談成歡、勸三獻了、〇中略誠有興不可如之由蘭臺

同心也、

〔讃岐典侍日記下〕花山院のおりに、惟成の辨を入道殿〇藤原兼家一條院にわたりて、もとのごとく、ろ。く。ざにてつかはんと仰られけるをだに、我君につかうまつりし事の、それにつけても思ひ出られぬべければ、つかさ位をすて、法師に成にけん、

〔職原抄上〕辨七人

左右大辨二人

官中事、大辨所執行也、仍爲重職、名家譜第輩、殊依清撰任之、華族中有才名之輩、參議之時、兼之爲規模、無文才人不居之乎、

左右中辨二人

左右少辨二人

名家譜第任之、多者先補五位藏人乃任辨也、藏人帶之頗清撰也、

近衞中少將中、有才名之人遷任辨官、或兼之、又爲規模矣、五位辨敍四位之日、去其職者也、近代多敍留、又中辨者、多分四位也、少辨者、多分五位、是近來之例也、又中少辨之間、權官一人必任之、仍謂之七辨、

凡尙書者、管轄之任、權衡之職也、尤可撰其人、上象七星故也、又漢朝尙書郞、親近之官也、仍口含鷄舌香、手握蘭、故此云握蘭之職也、

〔延喜式十一太政官〕凡辨官申政時剋、自三月至七月辰三剋、自九月至正月巳二剋、二八兩月巳一剋、

凡左右辨官一人、向上廳受事、若左事右受、右事左受者、並令相知、但受事辨施行、

凡左右辨官、各錄入奏幷請印文書、及請進驛鈴傳符等色目、牒送少納言、少納言外記、錄入奏請印及請進驛鈴傳符訖之狀、牒辨官、

〔傳宣草　下〕諸宣旨事

一下辨官宣旨（常事左辨官宣　凶事右辨官宣）

凡神事佛事節會行幸以下諸公事、裝束饗祿事、官所奉也、

凡依神社佛寺院宮王臣家諸司諸國諸人申請、臨時被裁許、幷緯起叙慮、賜宣旨官符之類、皆官所奉也、

凡觸僧侶之類下知綱所事、皆官所奉也、但維摩講師事、外記所奉也、

凡踐祚即位大嘗會間事、臨其時可存知甚繁多也、仍不注之、

〔故實拾要　十二〕左右大辨（二人）　相當從四位上　唐名（尙書左右丞）

左右中辨（二人）　相當正五位上　唐名（尙書中丞、司郎）

左右少辨（二人）　相當正五位下　唐名（尙書司郎）　權辨（一人）

相當正五位下　唐名同上

以上七辨、名家ノ人任之、自餘ノ諸家ハ不任之、又名家之輩ハ依歷文官、勅授帶劒トテ、帶劒ノコト蒙勅許、太刀ヲ帶スルナリ、於禁中政務ニ參リ、都テ宮中ノ事ヲ大辨執行フコト也、故ニ重職タリ、又漢朝ノ尙書郎ハ、天子ニ親近ノ官也、依之口含鷄舌香手握蘭、是故ニ握蘭ノ職ト云也、於本朝辨官ハ天子ニ親近ノ官也、古今原始曰、前漢宣帝ハ、尙書ニ賜鷄舌香、凡侍臣奏事、至尊其氣ニ觸ン事ヲ恐ル、故ニ含之、欲香氣上達也、（至尊トハ天子之御事也、鷄舌香ハ丁子ノ異名ナリ、蘭ハ香草ナリ、）又含鷄舌香コトハ、南北ノ朝ノ時ニ始ルナリ、辨ニ任ズル人ハ必兼職事、職事トハ藏人ノコト也、辨ニテ藏人ノ頭ヲ兼ルヲ頭ノ辨ト云、頭ハ二人アリ、一人ハ羽林家ノ中ニテ中將ノ時兼之、是ヲ頭中將ト云、併テ二人、是ヲ兩貫首ト云也、

〔鹽尻　三十二〕凡そ位に敍するに、從五位下より從五位上に昇り、正五位下に至り、正五位上につむる事あたはず、是左右の辨官の當位なるが故のみ、却て是より從四位下に越階する事は聽され

侍る、夫より亦正四位上にはつむる事あたはず、是皇太子の傅中務卿の本位、大辨の當位なる故とかや、却て從三位に越階する事は宣下ありといふ、是は地下のみにもあらず、堂上の家といへども同じ、今年己丑〇寛永六年の補任を見るに、正四位上は萬里小路尙房藏人頭右少辨壹人、正五位上は裏松益光左中辨清園治房右少辨二人より外なし、季世といへども、辨官の重職たる事知るべし、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年三月丙午、大辨官直大參羽田眞人八國病、爲之度僧三人、

〔古京遺文〕采女氏塋域碑

飛鳥淨原大朝庭〇天武大弁官直大貳采女竹良卿、所請造墓所形浦山地四千代、他人莫上毀木犯穢傍地也、

己丑年〇持統三年十二月廿五日

古庭廷通用〇中略弁亦辨字、建多胡郡辨官符碑亦用之、國策齊貌辨、呂覽作劑貌辯、古今人表作昆辯、元和姓纂作昆弁、則知辨辯弁古通用也、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年九月庚辰、先是美作守從五位下阿倍朝臣帶麻呂等故殺四人、其族人詣官申訴、而右大辨正四位下大伴宿禰道足、中辨正五位下高橋朝臣安麻呂、少辨從五位上縣犬養宿禰石次、大史正六位下葛井連諸會、從六位下板茂連安麻呂、少史正七位下志貴連廣田等六人、坐不理訴人事、於是下所司科斷、承伏既訖、有詔並宥之、

〔本朝世紀〕天慶八年七月十九日癸丑、今日又可明經得業生十市部以忠習天文宣旨、辨官奉之、是主計頭兼助教左京權亮良佐宿禰息子也、良佐宿禰依去延長八年七月十四日宣旨、進天文奏者也、仍奉中文薦擧以忠、今日大納言召大外記三統宿禰公忠問云、令習天文宣旨、外記奉歟、將辨官奉歟、公忠宿禰申云、藤原三仁、同義柄、同時柄等、可習天文宣旨、辨官所承也云々、仍今日以件中文給辨官、書下宣旨、

權辨　員外辨　辨代　史

〔山槐記〕元暦元年八月廿日丙子、今日大嘗會行事所始也、○中略予○藤原忠親示頭辨曰、主基方可奏之文、悠記辨可奏給歟、至于內覽者、各不可有妨歟者、頭辨曰、辨官皆奏文事也、何可然哉、予曰、權辨爲地下之故也、寬弘左右辨朝隆殿上辨也、右中辨重本爲地下辨、小野右府被命旨如此、但今爲幼主不可及御成敗、只存其旨許歟、又有限可奏文可有其儀也、頭辨說此事、同示可權辨事也、而忘却者也、

〔愚管抄七〕職事辨官の官の名ばかりは昔なれど、任人はなきがごとし、おのづからありぬべきも、出家入道とのみきこゆ、ほりもとめば二三人などはいでくる人もありなんものを、すべて人を求められればこそは、ありてすてられたらんこそたのもしくも聞えめ、さればこはいかゞせんずるや、此人のなきをば、この中に實房は、左府入道とて、生のこりたるが、只この世の人の心になりたるとかや、

〔詠百寮和歌〕辨
世を守る七の星の誓をも知事あれば辨てけり

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年正月戊寅、正五位上大伴宿禰蓋立○蓋立一本作瓮立爲權左中辨、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年二月丙午、以從五位下阿部朝臣謂奈麻呂爲權右少辨、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年五月丙子、從四位下大伴宿禰伯麻呂爲員外左中辨、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年八月甲寅、從四位下大伴宿禰伯麻呂爲員外右中辨、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年正月庚辰、從五位上美和眞人土生爲員外左少辨、

〔本朝世紀〕天養元年十一月一日戊申、御曆奏也、又平野祭也、春日祭也、少納言成隆爲辨代、

〔倭名類聚抄五職名〕大史　職員令云、左右大史、大史讀、於保伊佐宇官、　小史　職員令云、左右小史、小史讀、須奈佐官、

〔拾芥抄中本官位唐名〕大史左右　尙書都事尙書主事　少史左右　尙書主事尙書都史

〔枕草子八〕大夫は

式部大夫、左衛門大夫、史大夫、

〔中右記〕嘉承二年七月十九日、時先朝（〇堀河）崩給了、申刻許、民部卿奉院宣被參云、幼主（〇鳥羽）未親萬機之間、右大臣藤原朝臣（〇忠實）令攝政、璽劒被渡新君事、早任例可沙汰者、則驚此告參御直廬、右大辨時範朝臣奉仰、遣召大外記大夫史大內記、則皆參、

〔玉海〕治承四年二月廿四日丙午、大夫史隆職來、召簾前仰雜事、申云、（〇中略）御即位所事議定、人々申狀之中、閤下（〇藤原兼實）令申旨上皇甘心、官外記又以服膺、

〔職原抄上〕史八人

左右大史各二人

中古以來、小槻宿禰爲一史、行官中事、謂之官務、多是五位也、其餘彼一族及門徒等、依器量任之、

凡官務者、太政官文書悉知之、樞要之重職也、小槻氏稱禰家、宿禰儀也、

左右小史各二人

已上謂之八史

〔延喜式十一太政官〕凡內外諸司所申庶務、辨官摠勘申太政官、其史讀申、皆依司次、若申數事、各先神事、申神事史、不申凶事、御本命日（中宮東宮亦同）及朔日、重日、復日、亦不申凶事、

凡諸司諸國申政之時、史讀申已訖、辨判曰云々、畢即史仰云、縱（讀曰與志）

〔地下職官志〕官方　左大史正四位下壬生官務小槻季連（家領百石）　從四位下壬生主殿頭小槻章弘

年中恒例臨時之諸公事、承辨職事之命奉行之、

三節會參陣、官方幷御裝束事奉仕之、

伊勢兩宮禰宜宣旨、幷諸社遷宮日時之宣旨、親王家將軍家法中等之宣旨、伊勢日光例幣官符、此外諸官符吉書等、悉書調之、

史生

就公事舊例御尋之節、先例勘進之、

右大史　從五位下村田大藏少輔高橋春職 家領

左少史　正六位上山名主計助三善亮兼 家領十石三斗餘

右少史　正六位上虫鹿兵部少丞小槻陳昭 家領十石九斗餘

同　山口監物安倍亮茂 家領十一石三斗餘

三節會參陣著外辨幄、或承辨命官方事沙汰之、於陣座指油事、公卿著之時覽吉書、正月大元師法御香水之御敎書調之、諸陣儀之時、承弁命官方事沙汰之、春日祭放生會例幣等參行、諸社遷宮參向行事之、

〔有職問答 三〕一左大史二人が内、一人は五位をなさる、其を大夫史と云、次をば官長者と云也、他人は大夫史とも書、我は大史右大史と書、二人ながら五位の事も有、此分に候哉、此分候　勿論近代四品者在之、上首ハ大略官務也、下﨟ナハ新大夫史トモ、新四位史トモ呼也、

一右大史、是は二人ながら六位なり、他人は姓を加て中大史とも、又は家大史とも書也、又二人の中に下﨟一人を新大史とも稱之、我は右之右大史と書之、是又如何、此分候

一左少史、是六位也、勿論候二人の中一人をば左一史と書之、或は左少史とも書之、次の一人は左端史と他人は書之、我は左少史と可書之、此分候哉、此分候

一右少史、是も六位なり、二人が中に一人をば指次史と他人書之、我は右少史と可書、一人をば新少史と書之、自書には右少史と調べし、此分候哉、以上此分候

〔詠百寮和歌〕大史

吾公の文をおさむる御倉をば知る人ならで披見ざらん

〔伊呂波字類抄 太職〕太政官　史生 行署左右

〔拾芥抄 中本 百官〕太政官　史生 フンヒト

〔名目抄諸公事言說〕三局史生(サムキヨクシシヤウ)外記局左右辨官、或内記外記辨官、左右混之、

〔拾芥抄中本官位唐名〕少納言門下給事中○中略 大外記門下起居郎○中略 史生門下書令史 大辨○左右、尚書中略 大史左右、尚書都事○中略 史生左右行署書令史

〔續日本紀五元明〕和銅五年十二月辛巳○十二月無辛巳、恐十一月誤、加左右辨官史生各六人、通前十六員、

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、加左右辨官各四員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略 太政官十一人、權一人 左右辨官各十八人、各權二人○中略 太政官左右辨官、○中略 史生待宣旨補任、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡外記史已上、就事聽度紫宸殿階下、太政官史生亦得

〔類聚符宣抄六〕太政官史生已上、就務聽出入自殿階下、

弘仁七年四月十七日在陣例掌侍伴宿禰傳宣

〔地下職官志〕外記方　史生正六位下青木左兵衞大尉宗岡信行

三節會著外辨幄、幷外記文書廻覽之時、公卿持參之、

〔地下職官志〕官方　右史生正六位下行事官家領高三石

三節會紫宸御裝束奉仕之、著外辨幄、二月十一月春日祭、四月賀茂祭、贖物祓物等調進之、勤宮主代、四月十月南殿御更衣奉仕之、紫宸御道具、御卽位之御道具幷御鳳輦、伊勢春日御神服御寶物、其外諸社之御神服御神寶、悉調進之、

〔枕草子八〕ゑせもの丶所うるをりの事

大饗の日の史生

〔枕草子春曙抄八〕大饗の日の史生　大臣大饗に、太政官の史生を召て、勸坏居飯の議有て、祿を給ふ事あり、江次第に委、史生は太政官の細事を書註す官人、此時所をうる也、

〔本朝世紀〕仁平二年七月一日甲午、酉剋權中納言忠雅卿著廳聽政、檢非違使義康官符請印也、參議并辨官不參、少納言敎宗從請印事、史生又不參、以召使藤井兼延爲代、

〔伊呂波字類抄〕太官職 太政官 官掌 掌固 左右

〔名目抄〕人體 官掌（クハンジヤウ）

〔拾芥抄〕中本 官位唐名 官掌（クワンシヤウ） 左掌固 右尙固

〔職原抄〕上 太政官

官掌四人 太政官被官也、大辨以下判授之、

〔官位問答〕一官掌事 役ハ何事專沙汰候哉

史生官掌トテ、史生ヨリモ猶下ノ者ニテ、太政官ニテノ宮ツカヘヲシ候也、

〔有職問書〕一史生官掌とはいかゞ

答史生は辨の下役也、外記は表向の事を記す、史生は內々の事を記す、亦官掌は史生の下役也、史生は右の事すれば官掌は留事をする也、

〔地下職官志〕官方 左官掌小野左衞門少尉紀氏辰、家領 高三石 同、岩崎駿河目紀氏親、

右官掌、庭田右兵衞尉 家領 高二石 同、從六位下峯內匠允紀親盛

三節會參仕著外辨幄、二月十一月春日祭、八月放生會參向、四月十月紫宸殿御帳臺御更衣奉仕之、此外諸社遷宮參向、於小野一家者、伊勢兩宮遷宮、御奉幣、并御卽位大嘗會之由奉幣、賀茂下上、貴布禰等之御遷宮之時御奉幣、東照宮臨時御奉幣調進之、自古來奉仕之、正月太元師法、御香水之御敎書、自史承之、以衞士令下知之、神祇官公文職役、諸社奉幣之時、神祇官差文請奏等調之、四日稻荷祭、松尾祭神祇官消息承伯命書調之、且亦兩社神主禰宜以下之補任狀同書調之、

〔續日本紀〕三十三 光仁 寶龜五年六月庚午、始令太政官左右官掌把笏、

官掌代

政官

〔百練抄 十後鳥羽〕建久五年四月十八日、賀茂祭也、中宮使藏人頭右大辨兼亮宗朝朝臣、〇中略

官掌二人 職直、爲直、束帶、件裝束馬鞍四貫首給、

〔本朝世紀〕天慶八年十月九日壬申、今日結政所官掌不參、因之以左史生勝良義爲官掌代、

〔伊呂波字類抄 志官職〕政官 上官也 云外記史等也

〔名目抄 人體〕政官ジヤウクハン

〔西宮記 四月〕郡司召仰

上官等著南廊 大辨北面、辨史西面、少納言外記東面、史生南面、

〔江家次第 正月二〕大臣家大饗

定錄事

令召殿上四位一人、五位一人、地下五位二人參入、〇中略 召經政官五位二人參入、立階西頭、仰云、史生 嘗 御酒給、錄事著座暫退出、

〔結政初參記〕結政初參〇中略

到陽明門階下扣車、問上官參否、未參者暫扣車、辨侍申參否、 大辨問中少辨參否、〇中略 此間上官列立于小屋前、

〔本朝世紀〕天慶二年六月廿日庚寅、爲祈雨屈百僧於大極殿、三ヶ日間被轉讀大般若經、去十八九兩三日雨降了、事了上卿已下著宜陽殿侍從厨家羞饌、上官等相從之、

〔本朝文粹 六奏狀〕請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀　橘直幹

竊見頃年之例、雖藏人所出納、太政官史生等、皆是綠袍之時、經上官諸司之溫飽、朱紱之後潤連城數國之脂膏、〇中略

天曆八年八月九日　正五位下行文章博士橘朝臣直幹誠惶誠恐謹言

〔日本紀略 六圓融〕貞元元年三月八日乙亥、太政大臣〇藤原兼通參詣春日社、公卿上官相從、

〔權記〕正暦三年十二月廿六日乙酉、御二建禮門一有二荷前事一、左右大將不參、門前立レ幄、爲二御在所一、前施レ幔、辰之方去二數丈一幄、爲二上卿座一、上卿座南末有二諸大夫座一、東有二上官座一、

〔源氏物語五十一浮舟〕宮れいならずなやましげにおはすとて、宮たちもみな參り給へり、上達部などおほくまゐりつどひてさわがしけれど、ことなることもおはしまさず、彼内記はじ。やう。ぐ。はん。なれば、おくれてぞ參れる、

〔河海抄十九浮舟〕上官は政官也、太政官被官なる故也、　上官とは宛字に書來也、

〔枕草子八〕こゝろもとなき物

日暮てくらまぎれにぞ過したる人々みなたちまじりて、右近のぢんへ物見に出きて、たはぶれさわぎわろふもありしを、かうはせぬ事也、上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などのゐる障子を、皆うちとをしそこなひたりなどくるしがるものもあれど、きゝもいれず、

〔枕草子春曙抄八〕上官　政官也、太政官の官人、辨少納言外記などをいふ也、

〔續世繼七河の流〕大納言〇源師頼のつぎの御おとうとも、師時の中納言と申し、〇中略宗茂宮軒などいひしがくさうの上官なりしときは、このきみでしにおはして、くるまなどかしたまへりければ、外記のくるまは、上らうしだいにこそたつなるを、中將殿のくるまとて、うしかひ一にたてゝ、あらそひなどしける、

〔重憲記〕康治三年〇天養元年正月十一日癸亥、或人云、上卿辨被レ參二圓勝寺一了者、仍予又伴二史參彼寺一、先レ之有二兩院幷待賢門院御幸一、內大臣、大宮大納言、侍從中納言、別當權中納言、堀川三位、宰相中將、著二佛前座一、此寺無二政官座一、先例著レ座云々、仍暫徘二徊閑所一之間、辨被二退出一、予進出相從、被レ示云、今日上卿不レ可レ被レ參、仍爲二行事一可レ參二成勝寺一之上官無レ役可二退出一也、抑權中納言堀川宰相可レ入二申見參一也、於二權中納言一者、爲二右大將代一之故也、予云、依レ爲二上卿一先々雖レ不二參行一、入二見參一了如何、辨云不レ可、然又尋二申圓勝寺見參事一、被レ示云、

不レ可レ有二見參一歟、是有二御幸一之上、不レ爲二上官奉行一之故也、兩夜芳情殊弘也、

〔本朝世紀〕久安五年五月十九日庚子、今日法勝寺千僧御讀經也、○中略大將依レ仰先參二法勝寺一、次寄二宮御車一、唐車也、而南面爲二壇所一、仍以二東面廊一爲二御車寄一、大夫予等候二御車寄一、次寄二院御車一、大夫候二御簾一、以二院御車一爲レ前、其路自二佛所小路一大炊御門、東行、入二御法勝寺一、○中略上達部著座後、政官著座、在二公卿南一、辨少納言、大外記、大夫史、六位外記史等也、　七月廿八日丁未、今日有レ任大臣事、○中略内府率二諸卿一被レ向二右府饗所一、○中略辨少納言一列、右中辨師能、權右中辨光賴、少納言俊長、能忠、上官一列、大外記師長、左大史師經以下、六位皆參、主客再拜了、

〔本朝世紀〕仁平二年正月二日戊戌、左大臣於二東三條一行二臨時客事一、○中略上官依レ例有二殿原廻事一、

〔季連宿禰記〕天和二年正月一日庚戌、元日節會定而可レ爲レ如レ例歟、予爲二暇服一姑服ノ之中間、不レ及二參陣一、○中略今夜政官少外記職永、右少史亮仲、少内記亮昌、此外如レ例云々、

〔延喜式〕十八式部凡諸司使部者、○中略太政官卌三人、左右辨官各卌人、

〔黃門白石問答〕使部

是は諸國司に必有レ之候、今も官外記之使部は有レ之候、和訓つかはれべと申候、彼方此方雜々之事に馳驅致し候ものにて候、

〔地下職官志〕外記方　使部、重九兵衞藤井重國、同、陰山庄兵衞高階定信、同、小畠平左衞門賀茂昌言、家領一石、

年中諸公事、幷或從レ上被二仰渡一品有レ之時、隨二局務之下知一、諸役人江相觸催也、

三節會外辨之幄式筥置レ之、諸宣旨大外記持參之時相從、

〔地下職官志〕官方　使部、重數馬藤井重方、家領五石、同、富田市兵衞、同、中島五郎左衞門藤井定嘉、

年中諸公事、或從レ上被二仰渡一等有レ之時、隨二官務之下知一、諸役人相觸催也、

〔東大寺正倉院文書十二〕戶主出雲臣麻呂、年肆拾歲、　正丁　左掌黑子、右○○○○○大辨官使部、

召使

山城國愛宕郡出雲郷雲下里、神龜三年、史生從八位下間人宿禰男君 (續日本紀)

〔本朝世紀〕承平五年六月廿八日辛卯、此日被レ發二遣諸社臨時奉幣使一、〇中略以巳四點一、史生二人同著二八省嘉喜門東腋內座一、卽一人例式入レ宮進奉レ置二上座一、先例、上卿未レ著之前、令二使部奉レ置二件式筥一、而此日賀茂上下社、參議左兵衞督源是茂朝臣在レ前著座、仍停二使。部。一、以二史生一令レ奉レ置之、

〔山槐記〕治承四年四月十五日丁酉、今日賀茂祭也、〇中略行列散々任レ渡次第記レ之、〇中略

少外記中原貞親

車不切物見　牛黑斑　牛童白張薄色衣　史部　雜色四人白張白練　白衣單衣〇中略

左大史大江盛景

車不切物見　牛黑　牛童白張白衣　史部　雜色四人白張白衣

〔禁秘御抄下〕一召人

康治節會、少納言不レ參、以二外。記。使。部一召レ之、藏人方馬部也、

〔名目抄人體〕召使（メシツカイ）

〔延喜式十八式部〕凡太政官召使者、省取二散位年卅九已下有二容儀一者一、每月爲二二番一、番別五人、計二召正身一、以令二供承一、其上日、每レ番外記送レ省、

凡太政官召使者、每月朔日、十六日、當番人、正身參レ省、卽錄二交名一進二太政官一、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

召使式部補、省卿及諸卿輪轉補レ之、以二名簿一出二式部一、未給人先補レ之、

〔西宮記臨時二〕召使事

大臣以下次第請レ補之、式部卿被レ下二宣旨一、上下藹共請補、專雖二下藹一、以二未給之人請文一下二上卿一宣、式部卿請レ補之

〔地下職官志〕外記方　召使、正六位上兼副使靑木右兵衞尉宗岡行富家領高二石　同、正六位上兼副使靑

木但馬目宗岡行長、同、正六位上兼添使青木縫殿大允宗岡庸行、行富男

諸節會版調ニ進之、陣儀等之時、上卿之据ヲ直ス、又公卿之祿事奉ニ仕之、例幣神祇官春日祭放生會等參向、其外諸社遷宮參向、辨命承レ之、

〔地下職官志〕官方　召使、從六位上兼添使青木信濃目宗岡利行、同、從六位上兼副使高屋越前大目宗岡種行、同、從六位下兼添使青木長門目宗岡季行、利行男　同、從六位下兼添使高屋雅樂少允宗岡行季、種行男

諸節會陣儀等之時、直ニ上卿之据、祿物之事奉ニ仕之、二月十一月春日祭、八月放生會、九月例幣等參向、其外諸社遷宮參向、并承レ命奉ニ仕之、

〔類聚符宣抄十〕右大臣宣、召使身直ニ太政官、著ニ到散位寮、事不ニ穩便、自今以後、宜下依ニ寮申番名、於ニ外記曹司ニ給ニ其上日、番別下上寮、又以ニ厨家物、給ニ冬夏時服、並以爲レ例、

弘仁三年十二月十五日　少外記大春日朝臣穎雄奉

〔類聚符宣抄六〕應レ令レ選ニ進召使等一事

右被ニ大納言清原卿宣ニ偁、今所レ直召使等、或容貌短乏、或年齒衰老、朝廷儀式、因レ之闕違、非ニ只式部選貢乖ニ憲法、抑只〇只恐亦字誤外記等所ニ疎略、宜自今以後、仰ニ式部省、選ニ擇壯年端貌者、從ニ闕令レ進、以爲ニ恒例、若所貢非ニ其人、外記又從ニ勘却者、

天長八年四月十五日　少外記山田造古嗣奉

〔類聚符宣抄六〕召使職掌、祗ニ候廳下、隨ニ召進止、爲レ專ニ其事、分爲ニ二番、凡十人、分ニ上下番、而頃月或一人不レ候、或承仰多怠、此不レ加ニ懲勘ニ之所レ致也、權大納言藤原朝臣宣、自今而後、有ニ如此之輩、必奪ニ先勞三日、令レ慎ニ將來者、

貞觀八年七月十九日　大外記菅野助道奉

官厨家別當及預案主

〔延喜式 十一 太政官〕凡厨家別當、少納言辨外記史各一人、及預太政官幷左右史生各一人、並一年爲限、二月列見之後相替、

〔西宮記 臨時 一〕諸宣旨

官厨家別當 所充之次、申二上卿一、

〔西宮記 臨時 二〕官厨家別當事 所充之次、申上定 別當公卿宣歟

〔類聚符宣抄 七〕補抄符廳直文殿等史生使部事

左文殿使部河內廣延

右定厨家案主淡海安延拜任大膳少屬之替、

正曆二年五月二日

判

左大史多米朝臣

官文殿別當及公文預

〔西宮記 臨時 一〕諸宣旨

官文殿別當史 以大夫史爲別當、一大臣左大辨宣之、

〔延喜式 十一 太政官〕凡左右文殿公文者、史一人永勾當、其預左右史生各二人、毎年二月相替

〔類聚符宣抄 七〕補抄符廳直文殿等史生使部事

左大辨藤原大夫 輔〇爲 宣、以厨家案主民懷土、宜加寄於文殿、永令勤仕其役者、

永觀三年正月十三日　　左大史大春日朝臣 奉

〔類聚符宣抄 七〕補抄符廳直文殿等史生史部事

直丁從八位上礒部臣安茂 寬和二年九月廿八日

左大辨大江大夫 齊光〇 宣、右文殿使部錦正平死闕之替、宜以件安茂補之者、

寛和二年九月廿九日　左大史大春日朝臣良辰奉

左大辨藤原大夫〇懷忠宣、厨家案主村主正利、宜准民懷土例、令兼仕文殿役者、

永延二年五月十六日　左大史大春日朝臣奉

左大辨藤原大夫宣、以厨家案主淡海安延、宜如舊加寄於文殿、永令勤仕其役者、

永延三年五月廿一日　左大史大春日朝臣奉

左大辨源大夫〇扶義宣、厨家案主眞髮部常景、宜准民懷土例、如舊令兼任文殿、改使部錦光貴辭退之替者、

長德二年十一月廿六日　左大史兼和泉守多米朝臣奉

參議左大辨平大夫〇惟仲宣、右文殿使部大鹿善忠死去替、宜以下宿禰直使部大鹿友忠補之者、

長德元年十二月廿八日　左少史物部宿禰邦忠奉

〔左經記〕長元四年十二月廿九日壬申、有召參殿、〇中略被仰云、昨日爲令請印、讚岐承知符國司目代權口之由云、而官文殿史部時永取籠其承知符也、不持來、仍昨日不請印云、而今朝時永來、向彼目代許云、件承知前日令請印了、仍昨日不持來、即授承知符歸云々、此事如何、余申云、下敷等聊有例給物、早不給其物之時、取籠如此之文書、請例物之後取出、是例事者、頗雖非常事、下注作法如此答早不宛給物之、政所取藏歟、殿下聞食了退出、

〔園太曆〕康永四年十月廿一日、亥刻著束帶、〇中略先參仙洞、兼可參之由有召之故也、〇中略次予〇藤原公賢示中院大納言云、相扶所勞參陣、始終奉行無術、赦吉書等事可被奉行給、大納言諾、且此趣兼示之、次予起座退出、于時寅刻、其後相尋大納言可注置也、又藤長朝臣實夏等難陳之趣、可記置之旨示實夏了、

文殿

勘攝津守從五位下藤原朝臣隆昌申請雜事捌箇條以貳箇條事

外記文殿役

一請給官使不論有輸庄園皆悉檢注勘決本免加納且免除且被停止事、

一請任先例被宛行在家役神社佛寺權門勢家庄園寄人等居住要津不勤國役事、

神崎　濱崎　杭瀬　今福　久岐

右件兩條引勘文簿之處、代々之間、任申請雖被裁許、守源朝臣長俊任申請之時、追可有左右之由、建久五年八月四日被下宣旨、又守中原朝臣師藤任申請之時、先注進子細、宜待聖斷之由、正元二年四月十三日被下宣旨之後、詳無所見矣、仍勘申、

康永四年十月十九日　右史生安倍久定

紀宣直

左史生中原職有

安倍泰廣

〔地下職官志〕外記方　文殿正六位下青木玄蕃大允宗岡直行、（家領六石九斗餘）同從六位下青木左衛門少尉宗岡行昭、

節會并諸公事時、出陣座、文書執筆之時、御硯調進之、

古事類苑

官位部八

令制官職四

太政官下

國事御用掛　總裁　議定
參與　參豫　併入

〔官職秘抄　上〕太政大臣○○○○

攝政關白之外、撰其人任之、所謂無其人則闕、仍謂則闕官、非執柄任例、近則恒德公（藤原爲光）以後也、二箇度任例、（法性寺入道前太政大臣○藤原忠通）自內大臣任例、（始自忠義公○藤原兼通）

〔職原抄　上〕太政大臣一人

師範一人、儀刑四海、無其人則闕云々、故云則闕之官、有德之撰、故非其人者常不任之、

〔百寮訓要抄〕太政大臣

此官は昔大友皇子より始てなれり、攝政關白の兼官也、但執柄は猶うへにてあれば、太政大臣をばのぞむ事なし、主上御元服の時は、必執柄の任る也、加冠のため也、凡人の極官也、當時久我（土御門、堀川、中院、三條坊門など也、）閑院（三條、西園寺、德大寺、洞院、）などなる也、花山、大炊御門などの一流の人々、賢才により宿老の後なる也、人臣の極官にて有也、中院、閑院、花山を三家と云、

〔官職難儀〕太政大臣には、いかなる人なり給ふや、

一人の師範たる人これに任ず、委職原抄にみえたり、則闕官とて、其人なきときは、いつも闕にをかるゝなり、攝家凡家の人是に任ず、いにしへ、さならぬ人も其器にて侍れば任じたるあまたあり、總別の昇進、近頃家を定たる樣に多くは成たるゆへに、朝儀かやうにすたれ侍る也、何も官位

は其器量によるべき事也、○中略天智天皇の御宇、皇子大友をもつて是に任ず、此官の始なり、大友より今大閤御拜任まで八十一人にて侍る也、則闕たるゆへあまたなき也、大友高市等の皇子は直任なり、其外は左大臣より任ずるは勿論、右大臣、內大臣、准大臣○儀同三司事也より、次第をへずして任ずる事勿論也、

〔有職問答〕一一太政大臣に任事

清花に多ク尤被レ執候拜任ス、是を先途とす、攝家は勿論たるに仍て、さのみ規模とせられず、其意清花モ同候ヘ共、依レ家依レ人サノミ執シ存セラレヌ方モ候、又連綿規模トセラル、方モ候也、左右大臣になれば、必相國○太政大臣に轉ずる故也と被二仰出一候畢、此分候哉、

〔官位問答〕一太政大臣、清華ノ家被レ任候哉、専任レ之候也則三條ニハ八條大相國實行公、西園寺ニハ一條相國公經公、德大寺ニ水本相國實基公、洞院ニ山本相國公守公、華山ニ華山相國兼雅公、大炊御門ニ六條相國賴實公、久我ニ久我相國雅實公ヲハジメトシテ、此家々代々皆任レ之來候也、贈官ハ帝ノ外祖タル人、贈太政大臣連綿候、近代每度賜官候也、是ハ別之儀候也、

〔延喜式十八式部〕凡諸王諸臣任二太政大臣一者、不レ得下以二親王一爲中左右大臣上、但得レ任二八省卿一、諸臣任二太政大臣一者、不レ得下以二諸王一爲中左右大臣上、親王任二左大臣一者、得下以二諸王一爲中右大臣上、但親王諸臣不レ得レ爲二左右一、

〔任官勘例〕太政大臣二箇度任例　法性寺殿○藤原忠通　鷹司前關白○藤原兼平

自二內大臣一任二太政大臣一例　忠義公○藤原兼通

〔大鏡一後一條〕世はじまりて後、いまにいたるまで、左大臣三十人、右大臣五十七人、內大臣十二人なり、太政大臣は、この御門のよには、たやすくおかせ給はざりけり、あるひはみかどの御おほぢあるひは御門の御をぢぞなり給ふめる、またしかのごとく帝王の御おほぢをぢなどにて御うしろみし給ふ、大臣納言かすおほくおはす、うせ給ひてのち贈太政大臣などになり給へるたぐひ、

あまたおはすめり、さやうのたぐひ七人或本十人ばかりやおはすらん、わざとの太政大臣は、なりがたくすくなくぞおはする、

〔大鏡裏書上〕太政大臣十三人事

大友皇子、高市皇子、道鏡禪師、藤原良房、同基經、同忠平、同實頼、同伊尹、同兼通、同頼忠、同兼家、同爲光、道長、同公季、

〔二中歷公卿一〕太政大臣

大友天智皇子、天智十年正月始置、　高市天武皇子二　道鏡禪師、天平神護元年三月任、同二年十月授法皇、歷二年、　忠仁　昭宣　貞信　清愼　謙德　忠義　廉義　兼家　恒德　御堂　仁義　宇治　二條　信長　大殿師實　後大忠實　雅實源　忠通　實行　宗輔　伊通　清盛　忠雅　基房　兼房　師長藤安元三三五任、乙巳　良經　頼實　公房　公經　良平　兼經　實氏　通光

〔日本書紀天智二十七〕十年正月癸卯、是日以大友皇子拜太政大臣、

〔懷風藻〕淡海朝天智〇　大友皇子二首

皇太子者、淡海帝之長子也、〇中略　年甫弱冠、拜太政大臣、總百揆以試之、

〔日本書紀持統三十〕四年七月庚辰、以皇子高市爲太政大臣、〇扶桑略記係三年恐誤

〔文德實錄九〕天安元年二月丁亥、右大臣正二位藤原朝臣良房爲太政大臣、〇中略　宣制曰、天皇我詔旨良萬止勅御命乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食止宣、不右大臣正二位藤原良房朝臣波朕之外舅那利、又稚親王止大坐時與利助導支供奉禮留所毛安利、今毛又忠貞留心乎持天、食國乃天下乃政乎相安那比申賜比助奉留事毛漸久那利奴、古人有言利、德止之無不酬止毛奈聞食須、而今所在乃官波、掛畏支先帝乃治賜留所那利、朕未有所酬、是以殊留太政大臣乃官留上賜比治賜、〇中略　天皇御命乎、衆聞食止宣、

〔帝王編年記(十三文德)〕天安元年二月十九日、右大臣藤原朝臣良房任太政大臣、(忠仁公是也)太政大臣者、天智朝初置之、皇子大友任之、天武朝皇子高市又任之、孝謙天皇改云大師、藤原惠美押勝任之、又改云太政大臣、道鏡法師(弓削法皇是也)任之、後代皆云太政大臣、多是贈官也、

〔大鏡(四右大臣師輔)〕をとこ君だちは、十一人の御なかに、五人(○伊尹、兼通、兼家、爲光、公季、)は(五人のうち、三人は關白攝政、)太政大臣にならせ給へり、それあさましくおどろ〳〵しき御さいはひなりかし、

〔權記〕正暦二年九月七日、任大臣事、諸司裝束南殿廂、從額間云々、時剋卿相參陣、大内記爲時朝臣持宣命、令覽於中納言顯光卿、(○中略)天皇我詔旨良萬と勅御命乎、親王諸臣百官人等天下公民衆聞食と宣、太政大臣乃官ハ、攝政正二位藤原道隆朝臣乃可任なり、而謙讓心神之天、内大臣乃官をも辭申天支、此般猶令昇進めば、彼心爾違ぬべし、右大臣從一位藤原爲光朝臣數代爾歷仕へ天朝乃重臣とあり、仍殊爾太政大臣乃官仁上給比詔賜布、(○下略)

〔台記〕久安六年八月廿一日甲子、傳聞右大臣實行任太政大臣、(○中略)天皇我詔旨良萬止勅御命乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食止宣、太政大臣乃官者、左大臣藤原賴長朝臣乃可任奈利、而右大臣藤原實行朝臣、數代仁歷仕天、朝乃重臣、國乃元老奈利止、推讓義厚久、撝讓心深氐、官爾上賜比治賜布、又位次毛不可誤仁依天、從一位仁增志給布、(○下略)

〔平家物語(一)〕すゞきの事

忠盛刑部卿になつて、仁平三年正月十五日、とし五十八にてうせ給ひしかば、清盛ちやくなんたるによつて、其跡をつぎ、(○中略)打つゞき宰相衞府のかみ、けんひゐしのべつたう、中納言大納言にへあがつて、剩へ丞相の位にいたる、左右を經ずして、内大臣より太政大臣從一位にいたり、大將にはあらね共、兵仗を給つて、ずいじんをめしぐす、牛車れんしやのせんじをかうぶつて、乘ながら宮中を出入す、偏にしつせいの臣の如し、

〔任太政大臣記〕建仁四年〇元久元年十一月十六日、今日上辭左大臣之表、承平大治皆自左大臣直任太政大臣給、而彼二代右大臣加冠、頗不快例也、仍今月可有任大臣事之由、內々有其議之上、自前大臣任太政大臣依爲吉例、天永頃有御上表、仍今日上表也、　十二月十日戊戌、今日太政大臣兼宣旨也、勅使中納言中將也、院主典代來召云々、申剋參院、先例相親本家之納言爲勅使也、〇中略戌剋、勅使中納言中將歸來云々、余〇藤原兼經著束帶排座北屏風出居其座、以長兼朝臣召勅使、勅使昇中門內方經簀子透渡殿等、跪寢殿東妻戶前簀子、余目之、入件間經我座就予前傳勅語、其詞、可任太政大臣日時擇申也、余仰勅報、其詞、身雖不肖、事依勅、難默止、愁申承由也、勅使退居我座後、余目之、勅使著座、茵傍、次宰相中將取祿持來、女裝束也、裳唐衣濃袴等、余置笏取之目中納言、中納言進來、予授祿、中納言取之經本路進前庭再拜退出歸參院、爲奏勅報旨也、
十四日壬寅、今日任大臣節會、〇中略申剋著束帶、蒔繪螺鈿劍紺地平緒、有文帶、不付魚袋、權大納言四位已下十餘人、殿上人兩三連車扈從、依日暮遲參輩不待具也、余降中門內方、於門外乘車、中納言中將褰車簾、入右衞門陣候直廬、密々於南殿廂中見物、權大納言兼良以下公卿等著仗座、頭顯俊仰內辨、仰權大納言、其次仰宣命趣、太政大臣余、左大臣家實右大臣隆忠也者、無新任大臣、凡無新任被行轉任之事、曾無先例、其仁不專一之間、于今無沙汰也、須任先例太政大臣一人可任也、而承平大治右大臣理髮、其例依不吉、强以新儀被行轉任也、凡御元服料任太政大臣之次、被任他大臣之例、天祿許也、彼左右大臣共新任也、粗准彼例歟、若轉右大臣於左、於內大臣者不可轉任歟之由、兼日有議定、無新任之時、內大臣轉任無其理之上、左大臣是理髮役人也、加冠次被加理髮、是別儀也之由有其沙汰、而本相連之人、更引分右大臣被置闕、又未曾聞之上、內大臣令外官可置闕者、可在侍官之由有議、如此之間、事未決、衆口嗷々、遂兩人可轉任之由、去夕被仰也、

〔公卿補任後小松〕明德五年甲戌七月五日、爲應永元年、
太政大臣從一位藤實時七十五　六月五日任、同日有官次宣下、十二月廿五日辭、

從一位源義滿三十七　十二月廿五日任

〔足利家官位記〕鹿苑院殿　義滿

應永元年十二月廿五日、任太政大臣、歲卅七同日兵仗宣下、

〔京都將軍家譜〕義滿

應永元年十二月任太政大臣兵仗宣下、世傳、義滿請任相國、朝廷未許、既而聞義滿欲押公家領地、或義滿自爲國王、以細川爲攝家、以畠山等爲清花、以擬朝廷、於是大驚、有勅許云々、

〔彰考館本南朝編年紀略〕應永二年正月十日、武家○足利義滿任相國拜賀、紀傳武家任相國准三宮事、往古八條入道相國清盛公已來無之、聊無勅許之旨、武家強望申之、竟勅許云々、紀傳異本

〔公卿補任正親町〕天正十四年丙戌

太政大臣從一位藤秀吉　十二月十九日任

〔豐臣秀吉譜中〕天正十四年十二月、秀吉任太政大臣、自改姓爲豐臣、

〔公卿補任後水尾〕元和二年三月廿一日、任太政大臣宣下、家康上卿日野大納言、奉行兼賢朝臣、

〔續史愚抄後水尾〕元和二年三月廿一日辛卯、前右大臣家康前將軍有太政大臣宣下、依病也、若去十七日分歟、口宣御十七日可考、上卿日野大納言資勝、奉行藏人頭左大辨兼賢朝臣、公卿補任、注記、兼賢公記、

〔台德院殿御實紀四十一〕元和二年三月十七日、大御所家康○德川太政大臣御昇進の事、先にも大內よりうち／＼其旨もらし聞え給ひ、京職よりも聞え上けれど、かたく御辭讓のみわたらせ給ひしが、こたびは御老病不起の御症なるべきよし、主上○後水尾も院○後陽成もこと更叡慮をわづらはし給ひ、さらば此際におよびせめて今一しほ長上極官宣下ありて、年頃の大勳にむくはせ給はんとの叡慮にて、今度兩傳奏をさし下され、あながちに其叡慮を仰進らせ給ひしかば、さのみいなみ給ふも、かへりて恐あれば、詔のまゝに受ひかせ給はんとの御事なりしかば、兩傳奏より急脚も

て京へ其よし奏聞をとげ、宣命使以下片時も早く駿府へ參向すべき旨を傳ふ、　廿七日、勅使は臨濟寺の新館にやどられしかば、つとめて本多上野介正純草津邊に迎へて、あとよりしたがひ使をはせて、勅使出門を駿府に告しむ、勅使は廣橋大納言兼勝卿、西三條大納言實條卿、行列は中原師易、秦行兼、左右に先行して警蹕を唱ふ、次に宣命使舟橋清少納言秀相、板輿にのり、布衣侍二人、白丁三人從ふ、次に大內記某、主鈴某騎馬各布衣、侍二人、白丁三人從ふ、次に烏丸大納言光廣卿、廣橋中納言總光卿、網代の轅輿にのり、小隨身三人、布衣侍三人、白丁四人、次に四辻中納言季繼卿、阿野宰相實顯卿同じく輿にのり、小隨身二人、布衣侍二人、白丁四人從ふ、次に柳原右大辨業光、烏丸右中辨光賢、板輿に乘る、小隨身一人、布衣侍一人、白丁一人從ふ、次に壬生官務孝亮、押小路大外記師生、出納某、各騎馬にて白丁三人具す、次に唐櫃、次に少外記師勝騎馬にて、白丁三人具す、次に岡部內膳正長盛騎馬にて渡押す、素襖著の侍四人從ふ、次に持筒二百挺、騎士左右に分れて警衞す、御所には玄關に勅使を迎給ふ、勅使常の御座所にて御對面、上段に勅使著座あれば、大御所御病牀をもて下段にうつし給ふ、戶田式部少輔某、(或は民部に作る、重能譜に見えず、)酒井河內守重忠御官服を持出て、御枕邊に置て退く、御座の御右に御所著給ひ、其他著座の公卿は、御次につかる、尾張遠江の兩卿、水戶の朝臣、越前宰相忠直卿むかひて座につかる、大外記師生便宜の所にありて唯許と唱ふる事二音、次に少納言秀相宣命をよむ、(こと更の叡慮あるをもて、黃紙を用ひらる、)次に左右の伶人樂を奏す、次に少納言秀相微音にて侍臣を召す、宰相忠直卿膝行してすゝみ、宣命を拜受して御座に捧げて、又持退て案上に置く、次に勅使また少納言秀相をして、案に就て宣命高らかによましむ、一句讀畢るごとに樂を奏す、はてゝ勅使宣命使本座に復して後勸盃の儀ありて、公卿諸官人みな退出す、

〔公卿補任後水尾〕寬永三年九月十二日、任太政大臣宣下、(秀忠、)上卿中宮權大夫、奉行頭左中將元親朝臣、

〔續史愚抄 後水尾〕寛永三年九月十三日壬午、被行任大臣宣下、武家官、近代員外也、公卿補任作今月十二日、德川家傳八月十八日、按去月分也、上卿中宮權大夫、通村奉行藏人頭左中將元親朝臣、太政大臣秀忠、元右大臣〇中略行幸二條第和歌御會懷紙作太政大臣秀忠左大臣家光、而資勝卿記分明間、九月十三日、以去月十八日分被宣下歟、

〔公卿補任 中御門〕寶永七年庚寅

太政大臣從一位藤家熙　十二月廿五日任、同日拜賀著陣、

〔續史愚抄 中御門〕寶永七年十二月廿五日乙酉、有任大臣宣下、口宣上卿櫛笥大納言、隆賀奉行藏人頭右大辨尙房朝臣、太政大臣家熙、元前左大臣攝政、明年御元服加冠料也、其儀自院召息左大將家久有宣下、幼主時賜院宣、天永三年十二月神祀已下例云、以德大寺大納言公全被女裝束于中使云、此日太政大臣家熙攝政奏慶、依幼帝不召御前、又著陣、借用大將座茵云、扈從公卿德大寺大納言公全已下六人、藏人頭尙房尙長等朝臣列其末、合七人、前驅殿上人左衞門權佐光和朝臣已下十六人、侍從資堯爲人數、又參院云、故辨殿御記、輝光卿記、番衆記、公卿補任、諸家傳、基長卿記、家抄、

〔宗建卿記〕享保十七年十二月廿六日、召御前、密有仰、去月十八日宗建密奉仰、關白今度東宮〇櫻町、母近衞家熙女、中御門后尙子、元服加冠依被仰出、以前官勤仕此事不御快者也、依之愈被授極官者、明日可有御內意間、明朝參准后入道亭、可申傳叡旨之由畏奉了、　廿七日、參准后入道豫樂院〇近衞家熙御亭、申昨日仰之趣、准后被申云、不被存寄之儀、先以畏入者也、雖然於皇太子元服被授極官之事可有如何哉、於天皇元服加冠ハ太政大臣流例也、於此官ハ最雖爲極官、五家｜｜｜｜｜之輩必不眉目者也、而以東宮外戚今度被授極官思召、深以畏入了、卽時雖可及御請時節不宜候歟、今度御元服被准貞享例、以關白勤仕加冠有何難乎、於如此申ハ、似謙退者歟、雖然於准后ハ、此事以謙退不申之者也、以關白父依申之似謙退歟、暫替他人可申之、抑於太政大臣者、當時爲將軍家贈官、其故ハ近代依武威盛、從朝廷被愛將軍家之事、官位之外無之歟、仍以此一官爲將軍家贈官、常不置之、若今度及此沙汰ハ、他四家之輩有

可望申之者歟、於其時者、又々可被授、於然ハ末代此官可多世者、將軍家贈官、强不爲規模候、仍近世此間爲闕、不被授他人之由、後水尾院有仰、准后密被奉仰者也、曾以依爲關白父不申之、爲朝廷申之間、宜令沙汰之由也、予申云、被申上之趣、委細承之了、雖然主上思召不快者也、既被仰遣關東之處、昨日勅答到來候歟、於宗建ハ、其子細憶不承候得ドモ、粗其沙汰有之者也、先件趣早々參內可令言上之旨申之、逐電參內、於御前言上之了、今日官位御沙汰也、三公各參入、群議了而被召留關白已下議奏輩、召御前仰云、來年皇太子御元服加冠關白勤仕之、雖然以前官加冠之事御不快、且當時關白爲東宮外戚、於然者近年雖御讓位之後、暫不可及被辭當職者也、至其時可被授極官之處、今度幸依爲加冠可被授之間、內々可仰之由、則各奉之、武傳議奏之輩各同座、申關白之處、雖爲讓位之後、暫不可爲辭職之儀ハ畏奉了、今度被授極官之儀ハ、難及御請之旨、振辨舌被申述之、則令言上之處、被聞召之、雖然既申達關東、思召被決定間、再應可申之、且申左右相府、相共可申聞由又々有仰、仍申左右相府之處被畏奉、即時被申傳關白之處、再三及固辭、猶申達父准后之上、可申御請、仍兩相府、先於今夜ハ、替關白被申御請、明日必可被申御請之由、兩公强被申之間、此旨宜言上之由、兩相府被申之、仍即時令言上了、

〔公卿補任中御門〕享保十八年(癸丑)

(東宮御元服加冠)太政大臣從一位藤家久　正月廿五日任、同日拜賀著陣、十二月廿七日辭、

〔續史愚抄中御門〕享保十八年正月廿五日丁未、關白(家久、前左大臣、)有太政大臣宣下、(東宮御元服加冠料也、)上卿春宮大夫、(實憲)奉行藏人頭右中將實全朝臣、太政大臣(家久、關白、)奏慶著陣、(扈從公卿某已下□人、殿上人實全朝臣、藏人頭右大辨植房朝臣等加之、前驅殿上人某已下□人、殿上家司左兵衛權佐惟薰朝臣、)

〔公卿補任櫻町〕延享三年(丙寅)

太政大臣從一位藤兼香　二月廿八日任、賜一座宣旨、同日拜賀、十二月十二日讓氏長者於左大臣、

同月廿六日賜內舍人、

〔續史愚抄 櫻町〕延享三年二月廿八日甲午、關白前左大臣（兼香）有太政大臣及一座宣下等、上卿權大納言（經秀）、奉行藏人頭右大辨光胤朝臣、此日太政大臣（兼香、關白、）奏慶有御前召、（晝御座、資興朝臣記、公卿補任、家記、年代略記、植房卿記、政房卿記、祐貢記、）

〔續史愚抄 後櫻町〕明和五年五月廿五日壬子、攝政（內前、前左大臣、）有太政大臣宣下、（春宮御元服加冠料云、）上卿油小路大納言（隆前、）奉行藏人頭右中將公明朝臣、此日太政大臣（內前、攝政、）奏慶、（扈從上達部源大納言通兄以下五人、殿上人公明朝臣、藏人頭左中辨伊光朝臣等加之、俱七人前駈、殿上人右中將實同朝臣已下七人、藏人右中辨紀光在政官列、）有朝餉召次、遂著陣、（無公卿著陣儀、）退出、覽吉書於里第、（右中辨紀光從官方、）

〔公卿補任 仁孝〕文政十年二月十六日、任太政大臣宣下、（征夷大將軍家齊、）上卿權大納言、辨隆光、奉行顯孝朝臣、

〔泰平年表〕文政十年三月十八日、公方樣（家齊○德川）被任太政大臣、內府樣（家慶○德川）從一位に敍せらる、（此日上樣御白書院へ出御、鷹司殿及勅使院使大宮使女御使等著座、御三家列侯諸士總出仕、五位以上は束帶にて列居せり、御轉任御位階御昇進に依て、京都より賜物有差、）

〔公卿補任 仁孝〕天保十三年八月十日、任太政大臣（政通公○鷹司）兼宣旨、使左大將（輔熙○鷹司）、奉行光政朝臣、

廿二日、任太政大臣宣下、上卿德大寺大納言、（○實堅）奉行光政朝臣、

太政大臣從一位藤原政通（五十四、）　八月十日兼宣旨、同月廿二日任、加賜內舍人隨身等、同日拜賀、同月廿三日直衣始、

〔官職秘抄 上〕左。右。內。大。臣。（內大臣令外官）

大納言中、兼近衞大將、歷坊官、幷一世源氏、二世孫王、執柄大臣子息、后宮父、當今外舅等任之、大業人任例、（菅贈太政大臣、粟田左大臣在衞、）出家人任例、（道鏡禪師、元少僧都、）自中納言任例、（忠義公（藤原兼通）任內大臣、是日被下關白宣旨、前內大臣師家自前中納言任內大臣、是日被下攝政宣旨、）自二位中將任例、（曾賢寺殿（藤原基通）自從二位右中將任內大臣、此日被下關白宣旨、）兄弟相並例、承平、（貞信公（藤原忠平）仲平公爲左右、）

天曆、(清愼公(藤原實賴)九條右大臣(藤原師輔)爲左右、)康保、(清愼公太政大臣、師尹公右大臣、)永承、(宇治太政大臣(藤原賴通)爲左大臣、二條前太政大臣(藤原敎通)爲右大臣、賴宗公爲內大臣、)永保、(俊房公、顯房公爲左右、)保元(實行公爲太政大臣、實能公爲左大臣、)永曆、(六條攝政(藤原基實)入道關白(藤原基房)爲左右、)長寬(入道前關白(藤原基房)爲左大臣、前關白(藤原兼實)爲內大臣、)

〔任官勸例〕大業人任大臣例　菅贈太相國(任右大臣)　在衡公(任左大臣、粟田左大臣云云、)

自中納言任大臣例　忠義公(任內大臣)　松殿入道攝政(自前中納言任內大臣、)

兄弟相並大臣例　天曆清愼公　九條右丞相(師輔公)　永承宇治殿(爲左大臣)　二條殿(爲右大臣)　賴宗公(爲內大臣)　永保俊房公(爲左大臣)　顯房公(爲右大臣)　保元實行公(爲太政大臣)　實能公(爲左大臣)　永曆六條殿(藤原基實爲左大臣)　松殿(基實弟基房爲右大臣)　長寬松殿(爲左大臣)　後法性寺殿(基房弟兼實爲內大臣)

〔百寮訓要抄〕左大臣　中院閑院のごう重代の人々、才能によりて任る也、昔は文才なき人の大臣に任る事なき也、中古以來は、譜代とて無才無能の人々も任る、政のすたれたる也、

右大臣　つかさどる事左大臣に同、又任る人も同事也、

〔官職難儀〕左大臣は、○中略攝政家凡家の人拜任す、是も古は、家によらず器量にまかせてなされし也、近き頃攝家凡家ならで任じ侍りしは、日野勝光公(號唯稱院)ばかりにや、

右大臣は、○中略是も攝家凡家人口任ず、是も昔は、家をえらまず器量により侍り、さてこそ菅丞相も右大臣までなり給ひける、近き頃たゞの人のなりけるは、いまの入道前右大臣(公條公三條西)○也、隨分道をつとめ、奉公又けたいなく侍しゆへ、昔に立かへり器量を撰れ侍る、尤聖代の御さたと申べきにや、

〔大鏡裏書上〕左大臣三十人事

阿倍倉橋麻呂、巨勢德太臣、蘇我赤兄臣、多治比眞人島、石上朝臣麻呂、長屋王、藤原武智麻呂、橘諸兄、藤原永手、同魚名、同冬嗣、同緒嗣、源常、同信、同融、藤原良世、同時平、同仲平、同忠平、同實賴、源高明、藤原

師尹、同在衡、源兼明、藤原賴忠、源雅信、同重信、藤原道長、同顯光、同賴通、

右大臣五十七人事

蘇我山田石川麻呂、大伴長德連、蘇我連子臣、中臣金連、安倍御主人、石上朝臣麻呂、藤原豐成、更任藤原不比等、長屋王、藤原武智麻呂、橘諸兄、藤原豐成、同永手、吉備眞吉備、大中臣清麻呂、藤原田麻呂、同是公、同繼繩、神王、藤原內麻呂、同園人、同冬嗣、同緒嗣、清原夏野、藤原三守、源常、橘氏公、藤原良房、同良相、同氏宗、同基經、源多、藤原良世、源能有、菅原朝臣、源光、藤原忠平、同定方、同仲平、同恒佐、同實賴、同師輔、同顯忠、源高明、藤原師尹、同在衡、同伊尹、同賴忠、源雅信、藤原兼家、同爲光、源重信、藤原道兼、同道長、同顯光、同公季、同實資、

〔二中歷公卿一〕左大臣 今案、孝德天皇元年六月始置二左大臣一、

阿倍倉橋麻呂 孝德元年六月　巨勢德太臣 同五年六月、公卿補任四月廿日任左大臣、　蘇我赤兄臣 天智十年正月　多治比島 天武四年八月　石上朝臣麿 天武四八月　長屋王 神龜元年二月

藤武智麿 天平九年七月　橘諸兄 天平十五年五月　藤永手 天平神護二十　同魚麿 天應元六　同冬嗣 天長二四　同緒嗣 天長九十一　源常 承和七七　同信 天安元二　同融 貞觀十四八

藤良世 寛平八七　藤時平 昌泰二二　同忠平 延喜二正　同仲平 承平七正　同實賴 天暦元四　源高明 康保四十二　藤師尹 安和二三　同在衡 安和三正　源兼明 天祿二十一　賴忠

源雅信 天元元十二　同重信 正暦五八　藤道長 長德二六　同顯光 寛仁元三　同賴通 治安元七　同教通 康平三七　藤師實 延久元四　源俊房 永保三正　藤忠通 保安三十二

家忠 天永元十二　源有仁　藤賴長　同實能　同伊通　同基實　基房　經宗 安元二十二十六山槐記左府云々　同隆忠　同良輔　同道家

同家通　同良平　同教實　同兼經　同良實

右大臣

蘇我山田石川麿 孝德元年六月　大伴長德連 同五年四月　蘇我連子臣 天智元　中臣金連 天智十正　山田大臣 自殺　阿倍御主人 大寶元二　石上朝臣麿 慶雲元　不比等 和銅元三

長屋王 養老五正　藤武智麿 天平六正　橘諸兄 同十正　藤豐成 天平寶字元　藤永手 天平神護三十二　吉備眞備 同年十　大中臣清麿 延暦元六　藤田麿 寶龜二三　同是公 同二七

同繼繩 同九二　神王 延暦十七八　藤內麿 大同元五　藤園人 弘仁三十二　藤冬嗣 弘仁十二六　同緒嗣 天長十一四　清原夏野 同九十一　藤三守 承和五正　源常 同七八　橘氏公(主イ) 同十一七

藤良房 嘉祥元正　同良相 天安元二　同氏宗 貞觀十二正　同基經 貞觀十四八　源多(字多) 元慶六正　藤良世 寛平三二　能有 同八七　菅原道眞 昌泰二三　源光 延喜元正　藤忠

平延喜十四八
定方同延長二正
仲平同承平三二
恒佐同同七正
實頼同天慶七正
師輔同天暦元四
顯忠同天徳四八
高明源康保三四
師尹同同四十二
頼忠同天禄三十
二
雅信源貞元二四
兼家藤天元元十
爲光同寛和二七
重信源正暦二九
道兼藤同五
道長同長徳元六
顯光同同二六
公季同寛仁元三
實資藤治安元七
敎通同永承二八
頼宗同康平二七
師實同治暦元六
師房源承暦四八
俊家同永保二十二
俊房源永暦四八
顯房同永保三正
忠實藤康和二七
雅實源永久三四
家忠
有仁源天永元十
二十七
宗忠イ元
雅定
公能藤永暦四八
經宗
兼實
實定
實房
兼雅

〔伊呂波字類抄 太官職〕左大臣右大臣

本朝事始云、天豐財重日足天皇 皇極 元年六月七日、始任左大臣大紫巨勢大臣右大臣大紫大伴長床連、

〔日本書紀 孝徳 二十五〕天豐財重日足姬天皇 皇極 四年六月庚戌、○中略 授璽綬禪位於輕皇子、○中略 由是輕皇子、孝徳 不得固辭、升壇卽祚、○中略 以阿倍內麻呂臣爲左大臣、蘇我倉山田石川麻呂臣爲右大臣、

辛亥、以金策賜阿倍倉梯麻呂大臣、與蘇我山田石川麻呂大臣、或本云、賜練金、

大化五年四月甲午、於小紫巨勢德陀古臣授大紫爲左大臣、於小紫大伴長德連 字馬飼 授大紫爲右大臣、

〔日本書紀 天智 二十七〕十年正月癸卯、以蘇我赤兄臣爲左大臣、以中臣金連爲右大臣、

〔日本書紀 持統 三十〕四年七月庚辰、以正廣參授丹比眞人爲右大臣、幷八省百寮皆還 ○還一本作遷 任焉、

〔康富記〕享德三年七月十六日丙寅、今夜任大臣宣下也、洞院前內府 實熈公 從一位 令任右大臣給、是此三月前關白二條殿御辭退替也、令超前內臣 時房公 從一位 同公名公 從一位 等給者也、於萬里小路前內府者、御所存如何、於西園寺殿者、可爲如何哉之由、御所存自內被尋申之處、不可被申右府之由被申之云々、此事不審也、

〔職原抄 上〕凡內○○大臣者、令外之官也、又有太政大臣之時、任內大臣頗似無其謂、

〔任官勘例〕自二位中將任內大臣例

普賢寺殿 不經納言

〔大鏡裏書 上〕内大臣十二人事 十一人也、不審、

中臣鎌子連、藤原良繼、同魚名、同高藤、同兼通、同道隆、同道兼、同伊周、同公季、同賴通、同教通、

〔二中歷 一 公卿〕内大臣

中臣鎌子 一云鎌足、孝德元六　藤良繼 寶龜二三　同魚麿 同九三　同高藤 昌泰三二　藤兼通 天祿三十一　同道隆 永祚元二　同道兼 正曆二九　同伊周 同五八　同公季 長德三七　同賴通 寬仁元三　同教通 治安元七　同師實 康平二七　源師房 治曆元六　藤信長 延久元八　同能長 承曆四八　同師通 永保三正　源雅實 康和二七　藤忠通 永久四二　源有仁 保安三十二　藤宗忠 天永元十二十七　公教　宗元イ能　雅通　師長 安元二十二十六 丁亥槐記內府　平重盛 安元三三五 乙巳任之　基通　實定　師家　良通　忠親　藤良經 建久六十一　宗盛 壽永元十三 庚子任之　同實宗 同

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年正月壬寅朔、以忠臣從二位藤原朝臣魚名爲内大臣、近衞大將太宰帥如故、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕康平八年 ○治曆元年 六月三日、大納言源朝臣師房任内大臣、年五十八、中務卿具平親王男也、源氏內大臣之始焉、

〔百錬抄 八 高倉〕治承三年十一月十五日、今日關白前太政大臣 ○藤原基房 幷權中納言師家解官、以二位中將基通卿、可爲關白內大臣氏長者之由宣下、不被行節會被任大臣例、今度始之、未曾有之珍事也、

〔公卿補任 光明〕康永四年 乙酉○貞和元年

內大臣正二位藤實忠 四十二　九月八日辭退

　同冬信 三十七　月日任、左大將如元、

大納言正二位同冬信　左近大將、月日任內大臣、

〔官職秘抄 上〕大納言

中納言中、位階上﨟、近衞大將、同中將、當今外舅歷坊官輩任之、非華族公達幷諸大夫不任之、大業人任例、元方、爲極官、除昇大臣人不任之、前中納言任例、三守、隆國、師長、自參議任例、兼實、不避撿非違使別當例、貞信公(藤原忠平)能有公、

〔江家次第四正月〕除目

大納言

依二公卿勞一謂二年限久一者

近代依二位次一被レ任、又依二恩有無一、

〔職原抄上〕大納言

凡當官者、人臣之重職也、可レ昇二大臣一之人任レ之、而光賴卿以來、爲二諸大夫一輩又任レ之、然而至レ今爲二重寄一、

〔百寮訓要抄〕大納言　執柄三家〇中院、閑院、花山、の人々、日野、勸修寺も當時はなる也、中古までは諸大夫の家日野、勸修寺、などは成事はなし、諸家何も近來は過分の昇進共にてあれば、大納言にかぎらず、皆同じ事也、

〔愚管抄四〕一條院の御時、四納言とのゝしる、ぬきまだらもなき四人は、齊信、公任、俊賢、行成とて、四人大納言までにて、つひに大臣にはえならず、俊賢こそ西宮左大臣〇高明延喜の御子にて、一世の源氏にて、凡人になりてゆゝしき人なりける、其子にて侍ければ、〇中略齊信は爲光太政大臣の子、公任は三條關白〇賴忠子、行成は一條攝政〇伊尹のむまご、義孝少將の子也、和漢の才にみなひいでて、その外の藝能とり〲に人に勝れたり、されど宇治殿〇藤原賴通左大臣、小野宮殿〇藤原實資右大臣、大二條殿〇藤原敎通内大臣にて、みなさしも命ながくておはしければ、力およばぬことにてありけるなるべし

〔愚管抄七〕一條院の四納言のすゑも、白河院のはじめまでは、同じ程の事のやう〲うすく成にてこそあれ、白河院御脫屣の後、一落おちくだれども、猶またその跡はたがはず、後白河院の御時になりて、一の人は法性寺殿、一の人の庶子の末は、花山院忠雅、又經宗、伊通相國、閑院にはまぢかく公能子三人、實定實家、實守、公敎子三人、實房、實國、實綱、公通、實宗父子これらまで、又源氏には雅

通公、諸大夫には顯季が末は隆季、重家、勸修寺には朝方、經房、日野には資長、兼光父子、是らは見聞し人々は、是等までは塵ばかり昔のにほひはむりけるやらんと、その家々のおほかたの器量はおぼえき、中の難どもは沙汰の外也、光頼大納言かつらの入道とてありしこそ、末代にぬけ出て、人にほめられしか、二條院の時は、世の事一同にさたせよと云仰ありけるを、ふつに辭退して出家してけるは、誠によかりけるにや、但大納言になりたる事こそおぼつかなけれ、諸大夫の大納言は、光頼にぞはじまりたりなんど、人にいはるめるまで也、かゝらん人はならで候なんとや思ふべからん、昔は諸大夫なにかと器量ある士をばさたなかりき、さやうのころは勿論也、久しくかやうの品秩さだまりて、諸大夫の大納言光頼にはじまりたるなどいはるゝ事は、上品の賢人のいはるべき事にはなきぞかし、末代にはこの難はあまり也、いかさまにもよくゆるされたりけるものにこそ、此人々の子共の世になりては、つや〳〵と生れつきより、父祖の氣分の器量をけづりすてゝなきに、孫共になりては、當時ある人々にてあれば、とかくよき人ともわろき人とも云にたらぬ事にて侍る也、

〔權記〕正暦三年八月廿八日己丑、大納言正二位源重光年七十辭二所帶大納言職一、讓二聟納言伊周一、任二權大納言一、年十九

〔愚管抄六〕さて過るほどに文治は六年といふ四月十一日に、改元にて建久になりにけり、元年十一月七日、頼朝卿は京へ上りにけり、〇中略十一月九日先任二權大納言一、參議中納言をもへず、直に大納言に任ずる也、

〔諸家傳二十一〕勸修寺

俊定卿 號二坊城一 正二位中納言治部卿經俊卿男、母侍從平業光女、 爲二德治元一

嘉元四年十一月十一日、所勞之間、已可レ任二權大納言一之由、有二御沙汰一之處、殿下〇關白藤原師敎被レ申レ子

細、仍五月廿六日、以男侍從基定被任少將、今度新儀歟、日野有其例、又朝隆卿子息一人有其例云々、

德治二年九月一日（五十六歲）任權大納言

自內裏被擧之、依御乳父也、病中也、

〔官職秘抄上〕中納言（令外官）

有五道、所謂參議大辨、同近衞中將、撿非違使別當、攝政關白子息爲二位三位中將、參議勞十五年以上輩也、此外歷坊官參議又任之、四位參議任中納言日、直載從三位之由、前參議任例、（伊通、邦綱、）以大辨前勞任例、（實光、）猶兼大辨例、（菅贈太政大臣、源希、）猶爲藏人頭例、（法興院入道前太政大臣〇藤原兼通）

〔江家次第四正月〕除目

納言

大辨（左右大辨一度被任例五箇度）　宰相中將（一度除目二人以上被任、近有其例、）　撿非違使別當　無兼官人一度二人

任例（經季實綱）　無兼官人早任例（家賢能實　雅俊）

〔職原抄上〕中納言（令外官也）

凡任當官者、參議勞二十年以上、撿非違使別當、大辨宰相、攝政關白子爲二位三位中將者、（近代大臣息三位中將等直任、非舊儀者也、）納言以上、殊可撰其人之官也、

〔任官勘例〕自前參議任中納言例　伊通公　邦綱卿　知盛卿　定家卿　雅家卿　有資卿

以大辨前勞任中納言例　實光卿

〔續日本紀三文武〕慶雲二年四月辛未、天皇御大極殿、以正四位下粟田朝臣眞人、高向朝臣麻呂、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂三人、爲中納言、

〔皇年代略記〕光仁天皇

寶字六年十一月一日、任權中納言、五十四、不歷參議、

〔文德實錄三〕仁壽元年十二月壬戌、參議左大辨兼春宮大夫左近衞中將陸奧出羽按察使正四位下藤原朝臣良相加從三位、卽日拜權中納言、

〔中右記〕嘉承元年十二月廿七日甲申、亥刻許除目、〇中略 予〇藤原宗忠 官奏之後、暫徘徊弓場殿、窺除目、藏人少將走來告云、已任權中納言了、乍悅逐電退出、兩大辨被成中納言、誠是善政也、月來七辨之訴、自達蒼天歟、

左右大辨一度任中納言例

安世　貞繼弘仁十二年　源弘　安部安仁嘉祥元年　澄清　保忠延喜廿一年　隆俊　經家治曆元年　通俊　匡房嘉保元年　宗忠　基綱今度已上六ヶ度

兩大辨被任中納言之例、聖代之善政也、

〔皇帝紀抄七高倉〕治承三年、三位中將師家關白當麿、生年八歲、任中納言、天下驚之、

〔公卿補任高倉〕治承三年己亥

權中納言從三位藤師家八　十月九日任、左中將如元、同廿一日正三位、同十一月十七日解官、

〔康富記〕享德三年七月十六日丙寅、局務被語云、冷泉前宰相永豐卿從二位 一昨日十四日任權中納言、宣下今日到來、上卿中納言 日野 中絕被興家、尤可云規模哉、飛鳥井中納言雅親卿被辭退之替、

〔官職秘抄上〕參議〇〇

有七道、藏人頭、大辨、爲位階上臈者、先以大辨任之、近衞中將有年勞、左中辨、式部大輔爲帝王師者、七箇國合格受領、散三位等也、權參議例、天平元年 准參議例、大同元年 兼大將例、氏公、常行、二條關白內大臣〇藤原師通、兼中辨例、昇 兼按察使例、淸原長谷

〔江家次第四正月〕除目

參議　藏人頭每度闕、被任、凡非參議大辨、近衞中將有年臈者、以下久絕式部大輔爲侍讀者、五箇國舊吏政迹叶格式、散位三位經年勞者、

〔參議要抄下臨時〕凡任參議道有七

藏人頭近代每度被任　大辨往年每日有官奏、仍被重大辨、如藏人頭、少內給之故也　近衞中將有年勞者　式部大輔爲侍讀者

五箇國受領政績合格式者　左中辨　散三位

〔百寮訓要抄〕參議宰相中將などは、大臣の家可然人の成事也、○中略參議には、執柄も諸家名家の人人も任る也、

〔職原秘抄〕攝家ハ參議ニハ任ゼラレズ、如何トナレバ、參議ハ大嘗會、又ハ改元ノ時ナドニ、陣ノ座ニテ執筆スルコトアル故ニ、其體見苦敷トテ、コレ一ツヲ除カル、近代ハ清花モ不任、

〔任官勘例〕參議兼大將例　巨勢野足　藤冬嗣公　文屋綿麿　藤吉野卿　橘氏公卿　源常行卿

後二條殿

參議兼中辨例　昇

參議兼按察使例　清原長谷

〔水鏡桓武下〕長岡の京には、中納言種繼留主にて候しを、みかど○桓武の御をとゝの早良の親王、東宮とておはせしが、人をつかはして、いころさしめ給ひてき、ことのおこりは、みかどつねにこゝかしこに行幸し給ひて、世のまつりごとを東宮にのみあづけたてまつりしかば、天應二年に佐伯今毛人といひし人を、宰相になさせ給ひたりしを、みかどかへらせ給ひたりしに、この種繼佐伯の氏のかゝることはいまだ侍らずと、御門に申しかば、宰相をとり給ひて、三位を經させさせ給ひしを、東宮よにくちをしきことにおぼして、○下略

〔朝野群載九功勞〕申參議

勘解由長官從三位藤原朝臣在國誠惶誠恐謹言、

請特蒙鴻慈依大辨藏人頭勘解由長官勞任參議狀、

右謹撿案內、公卿之選、其望有限、大辨藏人頭、待次登用、左近中將有年勞者、間以拔任、良吏之歷五箇國、功績合格式部大輔爲帝師者、同亦拜除、是即累聖之勝躅、百王之通規也、是以不歷其職、不應其選、在國謬以是愚質、歷此顯要、右大辨、藏人頭、勘解由長官、春宮亮、共是一時之官職也、聖上〇一條從降誕之日、及儲貳之朝、久爲本院之別當、多勤巨細之雜事、佛神祈禱、勤行超倫、近則朝家被賽度々神社行幸等御願、蒙入道大相國敎旨、二箇夜間爲恐外池、洛東河水、夜半祈請、相國深知愚忠、多加賞進、指天盟神、自在證知、若藏人頭、必當其仁、在國豈非當朝之藏人頭乎、若以辨勞、必成其望、在國豈非明時之右大辨乎、位者是造作行事之賞、似恩如罰、重撿先例、藏人頭之敍三位者、濟時卿超次任參議、勘解由長官之有勤節者、常嗣卿年中任參議、大辨之削官爵者、正躬王更亦任參議、方今逮三五之朝、擧二八之臣、在國縱雖舊弊、陛下豈忘遺擧於暫時、在國縱雖惰倦、陛下盍宥絕纓於暗夜、漢高帝之至聖、厚賞沛中之故老、唐太宗之最賢、猶愍床上之病臣、加以入道大相國者、以外祖之重寄、擬三宮之嚴儀、先朱雀院時、朝忠卿天曆六年抽拜參議、先太皇太后宮御時、兼忠卿天曆八年超登八座、彼皆無本官之可拘、只依僥木幡之新勤也、圓融院御時、輔正卿因准此例、殊敍三位、在國法興院中、空漱紅淚於秋雨、木幡山下、獨藏白骨於曉雲、其後旬日未改、雨露忽乾、初解兩龜、而留一官、後爲庶人、而削三品、幾復官位、天獨所佑也、何況瘴煙適霽、再望聖日之光、死灰更燃、幸逢仁風之扇、望請天慈曲賜優恤、殊交朝議之預參、試勵晩節之忠節、在國誠惶誠恐謹言、

長保元年六月廿四日　　前勘解由長官從三位藤原朝臣在國

〔續世繼二 釣せぬ浦々〕この御時〇白河ぞ、むかしのあとをおこさせ給事はおほく侍し、人のつかさなどなさせ給事も、よしありてたはやすくもなさせたまはざりけり、六條の修理大夫顯季といひ

し人、よのおぼえありておはせしに、敦光といひしはかせの、など殿は宰相にはならせ給はぬぞ、宰相になるみちはなゝつ侍るなり、中に三位におはするめり、又五くにをさめたる人も、なるとこそはみえ侍れといひければ、あきすゑも、さおもひて御氣色とりたりしかば、それも物かくうへの事也とおほせられしかば、申にもおよばでやみにきとぞいはれ侍ける、

〔神皇正統記後醍醐〕寛弘以來は譜第をさきとして、其中に才もあり德もありて、職にかなひぬべき人をぞえらばれける、世のすゑにみだりがはしかるべき事をいましめらるゝにやありけん、七ヶ國の受領をへて、合格して公文と云事かんがへぬれば、參議に任ずと申ならはしたるを、白河の御時、修理のかみ顯季といひし人、院の御めのとの夫にて、時のきら、ならぶ人なかりしが、此勢をつのりて參議を申けるに、院○白河の仰に、それも物書ての上の事とありければ、理にふしてやみぬ、此人は歌道などもほまれありしかば、物かゝぬほどの事やはあるべき、又參議になるまじき程の人にもあらじなれど、和漢の才學のたらぬにぞありけん、白河の御代までは、よく官をおもくし給ひけりと聞えたり、

〔岡屋關白記〕建長二年六月六日、在裏近代人世事迷是非之外、更無他風情、○中略去月十七日除書之時、時高卿望申參議、其時沙汰之趣、所詮非器非重代之者、依何事可致抽賞哉、雖非器量、爲累代者卿可被優、又雖非重代、爲器量者可有登用、兩事共無所募申云々、此等頗有其謂歟、

〔宗建卿記〕享保十八年四月七日、參殿下、○藤原家久申入、今日實雄卿任參議、近日可兼近衛將、彼家連綿也、仍予有所存、先日內々殿下言上了、古來中納言中將一人、若執柄家中納言於有二人者、一人必兼左衛門督例也、而永祿已來無其沙汰、於今者人々不爲奇、自今可被逐前例歟、且參議帶劒、古來不過六人、依之定家卿被辭兼官了、此儀分明之由、於當時者、八人悉帶劒官、此儀先日、於御前內々有仰之儀、予奉之、仍今度新任參議未兼近衛之間、予可辭侍從歟、雖然自今可爲六人之事、無格別御沙汰、且

以後於及七人者無益歟、此間不能所存、而萬事主上〇中御門被追古例、叡慮平常近臣身所存知也、然者今度非可默止者也、殿仰云、申處無餘儀、而如此事、當時能々可加了簡者歟、猶近日可被申答由也、九日、殿仰云、一昨日予申處辭侍從之事、其後古例公卿補任能々被勘處、定家以參議於被辭侍從者、聊有謂歟、于時定家兼侍從治部卿伊豫守、是兼官數多也、且帶劒七人也、仍被辭之歟、今日卒爾於侍從者、實雄卿難兼近衞歟、彼家近衞連綿也、然處今度於被止兼官者可有巨難歟、參議中帶劒不過六人事、爲古來之儀、以時宜可有御沙汰歟、猶殿下參內之節、以言談之次、可被言上者也、(宗建)今度辭兼官之儀、甚以不可然歟、元來定家卿以參議中帶劒七人、辭退兼官之事、頃日滋野井入道所見之旨被申殿、仍殿內々被言上之由、被爲見勘物、

拾遺愚草下、宰相の中七人帶劒、先例なきよしを申て、(略)之朱、

件御勘物懷中歸家了、

〔官職秘抄上〕少納言

可然公達、若名家諸大夫、堪公務之輩任之、敍留四位例、(法興院入道大臣以後其例多)諸衞將佐兼任例、(昭宣公入道前太政大臣)(道長、能信、)藏人頭例、(能季、)

〔職原抄上〕少納言三人

近代可然之諸大夫任之、花族又任之、兼近衞中少將之例有之、先者敍四位者避職、四位後帶之、又常事也、

〔職元秘抄〕少納言三人、是レハ古ハ菅家ノ兼任ズ、今ハ舟橋伏原ノ清家ヨリモカクル、

〔二中歷一公卿〕四位少納言

(藤)能信　能季　(藤)成隆　(源藤イ)信康　重綱

〔續日本紀十三聖武〕天平十年閏七月癸卯、以從五位下阿倍朝臣沙彌麻呂爲少納言、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延暦四年正月癸亥、以從五位上小倉王、百濟王玄鏡、並爲少納言、

〔朝野群載 九 功勞〕右馬權頭從五位下行源朝臣時俊、誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、因准先例、被遷任少納言申他官替狀、

右謹撿案內、帶當職之者、不經幾年、遷拜顯要、何況時俊、累祖步槐棘之聲華、相傳習趨拜之故實、縱浴不翅之恩、誰爲非據之授、望請天恩因准先例、遷拜件官、將勵勤王之節矣、時俊誠惶誠恐謹言、

康和二年七月廿三日　　　右馬權頭從五位下源朝臣時俊

〔平治物語 一〕信西出家由來幷南都落事附最後事

信西ト申ハ、○中略日向守通憲トテ、何トナク御前ニテ被召仕ケルガ、○中略出家ノ志候ガ、日向入道トヨバレンハ、無下ニウタテシウ覺候、少納言ヲ御許シ蒙リ候ハヾヤト申ケレバ、少納言ハ一ノ人モ成ナドシテ、無左右トリ下サヌ官也、如何アラント被仰ケルヲ、ヤウ〳〵ニ申テ御許サレヲ蒙リ、出家シテ少納言入道信西トゾ云ケル、

〔康富記〕應永廿六年二月五日庚辰、詣高倉少納言殿、（賴季眞人少納言讓任子息事幷昇殿事）違例以外也、風昨日同事也、次參淨居庵入見參、大外記宗業眞人被聽內昇殿、同被任少納言、被口宣幷局宣等取出、被見予候間、珍重之由種々奉賀之、凡少納言之事ハ、理運可爲昇進候處、局務師胤朝臣爲上首被座候間、未被致局務超上首外記直自大外記可任少納言哉之由、今朝室町殿被尋仰候間、常宗御返事被申云、宗季眞人未被致局務、常宗又未致局務、而任少納言之由、被御返事申間、然者爲佳例之由被仰下云々、彼家門被拜任少納言候事、宗業眞人マデ四箇度也、昇殿事ハ、宗業眞人ノ曾祖父宗季眞人、雖不任少納言被聽昇殿者也、希代之面目共也、更他家不可及事也、口宣案、局宣案等、重可寫之、折節物忩之間不能其儀也、予雖不取敢之、賀酒一獻致沙汰了、かつ〳〵祝著之由被命了、前少納言賴季眞人依違例（正四下）大事、今日申剋被出家、年齡五十歲被成云々、宗業眞人三十三歲云々、先可申年齡微弱歟、雖然早被

讓任少納言之條、大慶何事如之哉、珍重々々、勅許之至、忝難有存者也、

口宣案

上卿三條大納言

應永廿六年二月三日　宣旨

大外記清原宗業眞人

宜令任少納言者

藏人左衞門權佐藤原朝臣宣光奉

局宣案

從四位下行大外記清原宗業眞人

正二位行權大納言藤原朝臣公光　宣奉

勅件人宜令任少納言者

應永廿六年二月三日　正四位上行大外記兼肥後守中原朝臣師胤奉

〔官職秘抄上〕大。外。記。

往年多以文章生任之、近代以明經諳第者任之、五位二人例、(始自廣人、田使師平等、)兼大夫史例、(廣人)兼受領例、(始自慶比耳)歷史者任例、(春正、清方、)六位外記敍留例、(三統理平)權大外記例、(安成)兩度任例、(久義、義行、賴隆、定俊、)三度任例、(田使、師忠、)

少外記

重代者居諸司三分任之、文章生一人必被加置之、若被任當職文章生者、先可被外闕、次可遷任、是無官之輩不任之故也、文章得業生例、(慶滋爲政、大江公資、)

〔江家次第(四 正月)〕除目

被擧者

外記　諸道成業者居諸司者　諸司三分　二分者任例希有(民部錄任例、一兩有之、)　藏人所出納(季邦時成　高季)
(則季義定)　經坊官出納之者多任歟

〔職原抄　上〕外記(大二人少三人)
近代淸中兩家任其職、於少外記者、彼兩家輩同門生等、依器量任之、

〔官位問答〕一外記局事
是ハ淸家(淸原)○中家(中原)○ニ任來候官共少候、近來定タルヤウニ候、其事昔ハ他氏ニモ多補候シカドモ、中古已來ハ、淸中兩家ノ外不任之也、

〔雲圖抄　正月〕除目事
短冊大略書樣(○中略)
申大夫外記史、(濫望之人不可入、以天下所許可入云云、辨官廷尉佐同之、)
申外記(經文章生居內官之者、又雖當時進士名譽之者、撰入之初日、任外國掾、不次被登用也、爲內記之者、經諸道得業生居諸司之者、重代之者、一所々司近代職事用意云々、不過五六人、○)
(中略)號顯官是也

〔任官勘例〕大外記五位二人例　始自廣人田使等、仁和以後中絕、保延五年、自師安加補爲流例、
同三人例　正應　師顯　師宗　師冬　同四位例　天平　比良麿　長寬　師元
大外記兼大夫史例　廣人　權大外記例　安成

〔日本紀略　六十一〕天延三年十月十五日癸丑、民部錄菅野惟貫可任外記闕之由被下宣旨、

〔朝野群載　六太政官〕外記請奏
太政官
請被特蒙天恩、因准先例、以正六位上行掃部少允中原朝臣兼季、遷任少外記狀、
右謹撿故實、外記有闕之時、諸司三分之中、撰堪其職之者、擧奏者承前之例也、抑件兼季補得業生、

課試及第、依其勞効任掃部允、從事之後、夙夜匪懈、就中本官之勤、忩劇異他、准之先輩、旁當其仁、望請天恩因准先例、以件兼季被遷拜少外記、將勵奉公之節、乃勒事狀、謹請處分、

康和三年正月廿一日　正六位上行權少外記中原朝臣廣俊

正六位上行少外記大江朝臣仲俊

正六位上行少外記中原朝臣有清

從五位下行大外記惟宗朝臣

正五位下行大外記兼博士主税權助播磨介清原眞人定秋

從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣實行

從五位上行少納言兼侍從源朝臣實明

正五位下行少納言兼侍從紀伊權守藤原朝臣懷季

〔台記〕久安四年十月十七日辛未、今夜下名、師長依父讓任大外記、古今未有讓五位外記之例、道路以目之世也、

〔康富記〕應永廿六年二月卅日乙巳、押小路前大外記師勝朝臣被來臨、勸一獻、清大外記宗業眞人被任少納言闕之間還任事、傳奏令申由被語了、但局務外史師胤朝臣子息掃部頭師鄕、大外記事望申云々、雖然父子相並例先規更無之、於六位外記者粗有例、但於傍局五位史者、匡遠宿禰量實父子相並大夫史云々、於當局五位者、兄弟猶避迈也、予申云、局務外史何不讓任、如此强被申候哉、師勝朝臣被答云、雖爲一日、父子相並者可爲面目、父子相並事被聽者、翌日可辭退之由局務被申云々、如此被申之條打任不可然歟、

〔官職秘抄 上〕大辨　自中辨任之、或從近衞中將遷之、不經此兩職直加之例、太希有也、三位大辨例、(始自經家補)兼近衞中將例、(舒、氏宗、)兼撿非違使別當例、(秋津、善男、)兼受領例、(始自定親)

中辨　近衞中少將、幷大臣子息才能之輩、雖居四位閑官直加之、往年以少辨勞敍四位之後多避之、以轉中辨爲難、而近代每人昇之、兼衞府督例、（後賢）兼兵衞佐例、（師尹）兼受領例、（始自說孝）

少辨　近衞少將、廷尉佐、少納言、侍從、坊大進、五位藏人中好文者被登用之、四位少辨、（始自有隆）兼受領例、（始自輔尹）爲藏人頭例、（粟田左大臣）

延喜以後、中少辨間、必置儒者文章生、大辨雖爲儒者、必置中少辨、是依可草詔勅宣命也、但不置例、延長七年以後、至于承平元年、長治二年以後、至于嘉承元年、久安四五年、但有文章生辨、（朝隆）又權官、往年多在左中辨、近代多加右中辨、只隨便宜加中少辨也、又源氏辨一人、往年爲藥師寺勅使任之、近來必不然、是件勅使用氏五位故也、又八辨例、寶龜八年、（權右中辨伴益直、權左少辨美和土生、）弘仁八年、（權左少辨布勢全繼、藤原縄當丸、）安和元年、（權右中辨藤原爲光、權左少辨高階成忠、）又兄弟相並例、長治、（顯隆、爲隆、）平治、（俊憲、貞憲、）養和、（經房、光長、）元曆、（光長、定長、）正治、（宗隆、長兼、）

〔二中歷一公卿〕大辨（延喜以後）

源希（延喜左參）　藤佐世（右）　紀長谷雄（儒者直任大左）　藤忠平（任右直）　藤道明　同清貫（右左）　源昌（任左直）　橘隆淸（文左右）　藤保忠（任右直）　源悅（直左任參）　大邦基（文右）

任藤時隆（右直左任）　同扶幹（朱雀參直任左）　淑光（文右）　原是茂（任右直左任參）　同淸平（任右直）　藤元方（儒直任左參）　同在衡（儒右左）　源相職（任右右直）　源公忠（任右直）　源等（直右）

任同（村上）庶明（任左直）　藤朝口（儒左）　同有相（右左）　橘好古（文左右）　藤賴忠（直左任參右左）　同文範（文右左）　同（冷泉）保光（文左右）　同爲輔（儒右左）　大江重光（儒右）　藤（一條）懷忠（右左）　源致方

右左　藤在國（左）　平惟仲（文左右）　源扶義（文左右）　藤忠輔（儒右左）　藤行成（右左）　同說孝（右左）　源道方（右左）　藤源（三條）朝經（右左）　藤（後一）定賴（右左）　同重尹（右）

左　源經賴（右左）　藤（後朱）經輔（右左）　源資通（右左）　藤（後冷）經家（右左）　平定親（儒右）　源隆俊（直右任參）　藤泰憲（左）　源經信（右左）　藤（鳥羽）伊房（右左）　藤實政（儒右左）　藤正家（儒右）

大江匡房（儒左）　藤通俊（右左）　藤（堀川）季仲（右左）　源基綱（經右左）　藤宗忠（右）　源重資（左）　平時範（文右）　藤長忠（右左）　同顯隆（右）　同爲隆（左）　源雅兼（右左）

藤實光（右）　源師俊（右左）　平實親（右左）　宗成（右）　藤公能（左元中將）　藤顯業　源俊雅　資信　朝隆　雅敎　範家　顯時

資長　雅賴　朝方　時忠　實綱　俊經　長方　經房　親宗（解官）　兼光　光雅　行隆　光長

定長　親雅　基親　宗賴　親經　宗隆　資實　藤兼綱（文和四八十三左）　同經方（同四十二八左）　同時光（同四十二八左）　同保光（延文四四廿一左）

同忠光（同四四廿一左）　同嗣房（應安三八十四左）　菅長綱（同七十二十三左）　藤宣方（永和元十二左）　同宗泰（永和二二十二左參）　同資康（永和四三廿四左參）　同資敎

永和四十二十三左参　長衡菅康暦元二二左　俊任同康暦二十一三左参　保光藤文和四十二八右　親顯平延文四四廿一右　資定藤延文四三廿五右　嗣房同貞治六四十三右
長宗同應安三八十三右　資康同永和元十二右　仲光同永和四三廿四右参　俊任同永和四十二十三頭右　經重同康暦二十一三右頭永德元八十四参

〔二中歷一公卿〕四位少辨
當幹藤延喜十七十一　資仲藤永承三三　定經　公定　雅綱源左

〔續日本紀三文武〕慶雲二年四月辛未、從四位上中臣朝臣意美麻呂爲左大辨、從四位下息長眞人老爲右大辨、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月壬寅、從四位上多治比眞人三宅麻呂爲左大辨、從四位上巨勢朝臣邑治爲右大辨、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年六月庚寅、以從五位下石川朝臣麻呂爲左少辨、

〔朝野群載九功勞〕儒者申辨官

正五位下行式部權少輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、兼任右中辨狀、

右匡衡謹撿故實、式部少輔文章博士兼辨官、是聖代例也、又勸學儒者、一身兼三四官、是明時之事也、就中延喜以來至于當今、中少辨之中、儒者多三四人、少則一兩居之、此度尙書之運、匡衡適當其仁、抑年來淹屈、未遇時也、以久沈未必爲恩、顏駟歷三代、而武帝賞之、以徒老未必爲賤、太公望七旬、而文王師之、望請特蒙天恩、兼任件官、安慰老母之欲傾頽、但兢夕漏、以捧微祿、鞭撻癡兒之不學問、悅朝恩而勵大成、匡衡誠惶誠恐謹言、

〔續世繼一つかさめし〕大貳實政は、春宮の御時の學士にて侍りしを、〇中略みかど〇後三條くらゐにつかせ給てのち、左中辨にくはへさせ給へと申ければ、つゆばかりもことわりなきことをばすまじきに、いかでかゝることをば申すぞ、正左中辨にはじめてならむ事、あるまじきよしおほせられ

ければ、くら人の頭にて資仲の中納言侍りけるが、かさねて申けるは、さねまさ申事なん侍る、こづのわたりの事を、一日にても思ひ志り侍らんとそうしければ、そのをりおもほし志づめさせたまひて、はからはせたまふ御けしきなりけり、昔さねまさは、春宮のかすがのつかひにまかりくだりけり、隆方は辨にてまかりけるに、さねまさ、まづふねなどまうけてわたらんとしけるを、たかかたおしさまたげて、まちざいはひするもの、なにゝいそぐぞなど、ないがしろに申侍りければ、からくおもひて、かくなんと申たりけるをおもほしいだして、このことわり、あまてる御神に申うけんとて、左中辨にはくはへさせたまひてけり、

〔續世繼二釣せぬ浦々〕顯隆の中納言といひし人、よにはよるの關白などきこえしも、辨になさんと思ふに、詩つくらではいかゞならん、四韻詩つくるものこそ辨にはなれとおほせられければ、○白河おどろきて、このみなどせられけり、

〔中右記〕長治二年三月十六日、今日除目、右少辨爲隆、兼文章博士實義、木工頭俊頼、右近少將雅定、右衞門權佐實光、件五人之外無他事、今度不被下申文、只以詞被仰下、如何、爲隆者、元藏人中宮大進木工頭也、左少辨顯隆兄也、兄弟相並、又被止儒者被抽賞、人驚耳目歟、但五位藏人勞、七年于玆、夙夜奉公之勞所致歟、村上以後、七辨中無儒者例、又以不見破兩事難例被抽任之、誠可謂奉行之節歟、

〔官職秘抄上〕大夫史　近代以小槻氏必居此職、往年强不然、又五位相並例、多米國平、小槻奉親上モ已後多存、但有大夫外記二人之時無之、六位史敍留例、始自清方兼受領例、始自國平依父讓任例、政重

六位史有左右大少　式部民部錄、勘解由主典、撿非違使志、文章生、藏人所出納往年多以出納被任外記任之、或以一上擧、爲諸司二三分輩任之、或前坊屬任之、凡以重代者授之、史男雖申外記猶被推任史、又外記史不任四姓、源平藤橘文章得業生任例、高岳今常無文章生例、始自天曆四年

〔江家次第四正月〕除目

被擧者○中略

史文章生任史、往古以文章生一人必置外記史中、若有其闕則任之也、但無本官者不可擧之由、見春玉抄、無本官時、或外國散位之文章生任之、

式部錄　　民部錄　　勘解由主典　　撿非違使道志　　歷文章生居諸司者依闕

諸道成業者　　一上擧隨時　　一院主典代不入副上擧　　出納不入擧

若有文章生闕時、無有本官外任散位者、文章生初夜、外國終夜任史有其例、又外記同

〔雲圖抄正月〕除目事

短冊大略書樣○中略

近代官字不書
申官史式部民部錄、勘解由主典、文章生、出諸道居諸司之者諸代之家、撿非違使志有例、史之子孫申外記之時、不改申文直入史束、故實也、○中略

號題官是也

〔職原抄上〕史八人

左右大史各二人　中古以來、小槻宿禰爲一史、行官中事、謂之官務、多是五位也、其餘彼一族及門徒等依器量任之、

〔二中歷二官局〕大夫史寬平以後　今案歷官史昇公卿人、朝野鹿取、天長十六月記

壬生宇多望材　菅野延喜清方　阿刀忠行　錦部春蔭延喜八　尾張言鑒承平六　海村上業恒　阿積廣遠天曆六　我孫有柯　物部圓融安國　坂部以方　大春日良辰天延二　伴忠陳寬和

多米國平寬和元　小槻奉親正曆五　公イ奉親寬弘八　小槻貞行寬仁三　惟宗義賢長元二　小槻孝信永承元　惟宗實長康平元　小槻祐俊永保四　小槻堀川盛仲　惟宗政孝　小政

保安重三　小師經　惟宗孝忠　小永業師經相丞　小隆職　廣房　隆職　小國宗　小公尙　季繼　小淳方　有家　季氏

〔小槻氏系圖〕奉親初奉官務淡路守─貞行官務─孝信官務─祐俊官務─盛仲官務─政重同─師經同─隆職同

─國宗同─通時早世─淳方官務─顯衡同─統良同─于宣同─匡遠同

─景實長寬兩職事被下綸旨於隆職以來、官務職相續之、算之博士者被付廣方流相續也、

─兼治官務─周枝同─晨照同─晴富同正四位─雅久同─于恒同─登辰同

公尚（官務）―季繼（同）―季氏（同）―益材（同）―伊綱（同）

―冬直（同）―康景（同）―通古（同）―賴胤（同）

―清澄―光夏―爲緒―長興―寔包

―時元（正四下官務左京大夫）―伊治（正五上官務）

―永業（官務）―廣房（博士相以來以下官務正四下）

〔小右記〕治安四年（〇萬壽元年）正月廿六日乙卯、右大史基信、右大史義光轉任事有事定、義光者下臈也、而愁申云、雖下臈依上日超越上臈、有被轉任、其例注申文奏聞、即下給、給大納言齊信、（余目齊信給件申文、又納硯筥、）令諸卿定申、小時齊信進來云、大中納言申云、以載自解之日、難定申、前例、或雖少上日、猶以上臈有被轉任例、可被下勘基信等上日歟者、參議等申云、雖云下臈、依上日可被轉任歟者、即以此旨傳達左僕射、（〇藤原賴通）左僕射云、此事如何、余云、先被勘上日、義光若勝者、可被轉任外記史者、只以恪勤可爲先歟、關白（左大臣）召左中辨經賴、可令勘申基信義光等上日事、被仰大夫史貞行、（〇中略）少時勘進基信等上日、（義光上日、勝基信六十餘日、）仍以義光轉任左大史、

〔康富記〕寶德元年閏十月廿六日壬刁、抑官務幷氏長者事、今月廿一日、自禁裏以日野右少辨勝光爲御使被申武家、其謂朔旦冬至旬儀申沙汰、官務晨照宿禰一流奉行十三度也、每度爲佳例、長興宿禰一流奉行三箇度、每度爲凶例、仍可申沙汰之由、先官務依所望申、自內裏被申室町殿了、奉行事不可有子細之由、武家御返事楚忽被申之間、廿二日晨照宿禰、可爲官務氏長者之由被宣下之、頭右中辨冬房朝臣（萬里小路殿）奉行也、而長興宿禰當職被改補之條、不便之由申入武家之處、朔旦奉行被仰之間、不可有子細之由申入了、官務改動事、曾以不被仰下、所詮於官務職者不可被改之由、自室町殿重被申入內裏之間、又如元長興宿禰可爲官務之由、今日被下宣旨云々、御使日野右少辨勝光被申誤歟、晨照宿禰被最員歟之由有其風聞、四五日之間、相互官務職御敎書兩方被宣下、御沙汰次第無心安之儀者

也、後日見及之間、無何注左、

官務事、如元可被知行之由被抑下之狀如件、

閏十月廿六日　右中辨判

新四位史殿

當氏長者事、如元可被存知之由被仰下之狀如件、

閏十月廿六日　右中辨判

新四位史殿

此兩通自職事傳奏中山、中山進室町殿、室町殿被召置之、長興宿禰御前被召出直被下之、室町殿御扶持之儀、眉目之至、絕常篇者哉、誠新四位史事、去三月武家將軍御昇進之時、爲御嘉例被召出、被補官務之仁也、今無左右可被改補之條、誠無其謂歟、又朔旦奉行事、自元晨照宿禰爲大夫當職奉行可有何事歟、不可依官務改動之由、室町殿被思食云々、是又忝上意至歟、

〔蟫䕿翼抄〕三局史生。

三局ト謂ハ外記史生、左右辨官史生、內記史生也、春玉抄云、左右辨官史生、幷外記史生等也、又內記史生、共勞滿十年也者、准太政官史生任諸國目也、同抄云、春秋任之、師遠書云、依本所奏任內官二分、非每年事、以前任外國目、或先年任目者也、近代未必然也、多申內官、師安云、秋無擧之條、僻事也、申文之由口未知此事、師安云、近代三局史生不被任、但召使任之、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

三局史生以諸司所々奏狀下賜上卿、奉勅下辨令勸問否、覆奏之後下式部書、

三局史生、爲聽直抄符事、大辨宣、史奉之書下宣旨云々、

〔西宮記臨時二〕三局史生事

以奏狀(先下給式部省勘申闕否之後司々被下云々)、從御所下給、上卿給式部、(勘解由史生隔年補、自餘諸司皆有常例、)

〔新儀式五臨時〕定諸司史生諸衞府生事

太政官、左右辨官、內藏、木工、主殿、掃部、修理、左右馬寮、職史生、皆是宣旨官也、每有其闕、定補替人、

〔延喜式十一太政官〕凡太政官、幷左右辨官史生召使等、每年一人除諸國主典、(召使拜五畿內、志摩、伊豆、飛驒、佐渡、隱岐、淡路等十一國、)其勞成任官者、並不依年勞、只計上日、

〔傳宣草下〕一下外記宣旨

官史生事(先仰辨官、令勘闕否幷例之後下外記、)　諸司史生事　外記史生、大外記申(近代或申上執柄人、)書下之、

〔朝野群載六太政官〕外記史生請奏　太政官

請殊蒙天恩、因准先例、以刑部史生上毛野貞正、被補任件史生紀經元不仕替狀、

右謹撿故實、當局史生有闕之時、諸司史生之中、撰堪其職之者擧補、古今之例也、就中貞正、頗携文筆、尤足採擇、望請天恩、因准先例、以件貞正、被補任彼不仕替者、將令致記錄之功、仍勒事狀、謹請處分、

治曆四年十二月十六日　正六位上行權少外記文室朝臣(名〇以下署名七人略)

〔職原抄上〕史生二十人

大臣以下判授之職也、居其職者、多轉史、但小槻氏輩不補之、門徒等補之、

〔類聚符宣抄七〕應太政官幷左右辨官廳直抄符史生等、依其勤功成績、永改年官外國、拜任內官主典、事、

右得太政官去四月十四日奏狀、偁、謹撿案內、當局史生十一人之內、見任九人、其殘二人、自去永延元年、依無所望之人、于今不被補任、謹案職員令、史生十人、掌繕寫公文、行署文案者、所職之重、已異他所、就中所成之印文、二百張以上、三百張以下、或連日不絕、或隔一兩日、其所書寫之長案、猥積如山、方今件長案日記等、先寫注草案、預史生等爲致功績、以私紙淸書、納於文殿、永備後鑒、上代淸書之役、暫無

可休、爰大外記中原朝臣致時、拜任之後、搜尋局中文書、以往文簿、或以破損、或紛失、所遺不幾、何況寬和二年以後長案日記等、無有其實、尋問由緒、史生等申云、空疲十餘年之勤勞、僅拜最亡國之二分、適勵隨分之節、雖仰採擢之仁、年齡已傾、朝恩難及、見任之者、彌倦於前途、未達之輩、無進於當局、仍年來之間、自所緩怠也、若逢恩賞、何無其勤者、所申雖乖故實、其旨又以可然、抑局中文書、毎有朝議、已備據勘、尤爲要須、而偏倦出身之眇焉、更忘奉公之忠節、縱責彼怠、何無優恕、重見傍例、稱諸司官人代者、依本司請奏、悉以轉任、已無奔營之勤、唯爲昇進之媒、至于當局史生、所職有限、其勤掲焉、是以不經外任、直任內官之者、已以亘多、近則漢部長實、寬和二年八月任中務少錄、大春日晴遠、天元四年正月任主殿少屬、但波惟貞、天祿四年三月任中務少錄、肥田維延、同三年閏二月任隼人令史等是也、縱雖無先蹤、尤可有時議、何況於有例哉、然則停所給外國、被改任內官、公家新施鴻慈之恩、局中長遂鵠望之志、望請特蒙天恩、被下宣旨、改年官外國、永被任內官主典、傳之於來葉、俾知勤公之貴者、右大辨藤原朝臣在國傳宣、左大臣宣、奉勅依請、左右辨官廳直抄符史生等、勤功成績之輩、亦宜准此者、

永延三年五月十七日　　左大史兼備中權介大春日朝臣良辰奉

應左右史生等廳直抄符勤功成績者、并年勞次第輩、拜任內外官主典事、

右太政官并左右辨官、廳直抄符史生等、依其勤功、停任外國、可永拜任內官主典之由、去永延三年五月十七日、下宣旨已了、而廳直抄符者、不必一勞、其外史生、年勞已積、給官無期、參議左大辨平朝臣惟仲傳宣、右大臣宣、奉勅宜左右史生等、給官之時、任年勞次第、廳直抄符者、依勤功拜內官主典、年勞恪勤之輩、依次第任外國二分者、

長德二年正月廿三日　　左大史兼和泉守多米朝臣國平奉

〔類聚符宣抄七〕左史生物部興平

左大辨藤原大夫宣、左抄符預史生錦繁昌、遷任但馬權大目之替、以件興平宜補之者、

永觀三年四月一日　左大史大春日朝臣良辰奉

〔類聚符宣抄 七〕右史生酒部眞信
參議左大辨大江大夫宣、右應直史生矢田部清正、遷任皇太后宮少屬之替、以件眞信、宜補應直者、
寛和二年七月五日　左大史大春日朝臣良辰奉

〔類聚符宣抄 七〕左史生磯部爲松
參議左大辨藤原大夫宣、左抄符預史生勝有統、遷任大舍人少屬之替、以件爲松、宜補之者、
長保元年二月五日　左大史多米朝臣國平奉

〔傳宣草 下〕文殿
續文
勘從東市司官人代遷補左右辨官史生例、幷闕否事、
一遷補例
中原國景 文治五年十二月補右史生
一闕
左一人
右引勘文簿所注如件、仍勘申、
應長元年八月廿八日　右史生大江職重
左史生紀 宗兼

〔師守記〕貞治四年四月七日乙未、今日宣旨到來、是以官人代從七位上中原朝臣國貞、遷補左右辨官史生闕事也、上卿花山院大納言兼定卿、此事先可勘闕否幷例之由被仰官方之後、任續文可依請之由被宣下當局也、可勘闕否幷例之由被仰當局之條、令參差之間、請文所被返遣上卿也、且延文五年、如此被宣下被返遣請文畢、○中略

圖書寮

請殊蒙天恩、因准先例、以官人代從七位上中原朝臣國貞、被遷補左右辨官史生闕狀、

右得國貞款狀、偁、謹撿案內、爲諸司官人代之輩、被遷補左右辨官史生者、承前之例也、爰國貞補官人代之後、職掌之役有勤無懈、擧奏之處、誰謂非據者、今加覆審、所申有實、望請天恩、因准先例、以彼國貞被遷補件闕者、將令竭奉公之節矣、仍勒事狀、謹請處分、

貞治四年二月　日　　正六位上行權助紀朝臣未到

正六位上行助紀朝臣未到

正五位下行頭兼讚岐權介小槻宿禰兼治

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司官掌、○中略各二人、○中略判補之、

凡內外諸司史生官掌、○中略以雜色人補之、並把笏、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

官掌一大臣宣、辨奉上宣可仰史也、

〔朝野群載六太政官〕補官掌

參議左大辨藤原朝臣行成傳宣、左大臣宣、件人宜補右官掌安部尙貞死去之替者、

從七位上日下部宿禰保隆

長保四年六月十六日　　左大史兼播磨權介小槻宿禰

〔類聚符宣抄七〕補官掌事

右官掌笇部保理

右轉補左官掌尾張利茂死闕替

右官掌伴友成

座次

右轉補左官掌紀貞清死闕替

宗我部秋時

右補右官掌竿部保理轉左替

太秦吉理

右補右官掌伴友成轉左替

長和四年十一月十三日　　左大史但波朝臣奉

參議左大辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、官掌等、宜依件補任之者、

〔台記〕久安四年二月廿七日丙辰、官掌眞文、依病不仕、因以下家司(重兼)補之、余(藤原賴長)下家司其禮先招左大辨顯業卿(須召給之故也)、依疾不來、因之以重通名簿使左大史師經傳左大辨、下史下式部云々、補官掌事、爲一上宣之由見西宮北山、而式部式云、省判補由所見也、西北抄、已與式違、勘例、長保四年六月十六日左大臣(御堂〇藤原道長)宣、右大辨行成補之、近年又如此事、先日問伊通卿、報云、長保例非可疑、隨又合西北抄、官掌不待大臣宣、省判補無其理、雖式文猶以不審、不如據御堂時例矣、今日無憚日也、因補也、

〔台記〕久壽二年四月十二日戊子、今夜依宇治仰、以右辨官史生紀爲宗補右官掌(左官掌盛信讓)、召右大辨下盛信申文(讓請)、

〔官職補任圖畫凡例〕太政大臣

太政大臣を最第一に置く、攝關を以て傍に置、攝政は幼主女帝の時必あり、其時貴重いふべからず、關白は陽成院の御宇、元慶年中、昭宣公(基經)より始て連綿なり、殊更に一座の宣旨を給はり、一人と申し執柄たれば、必第一に置べきこと勿論なり、然れども官にをゐて布置せんには、先太政大臣ならんかし、書々に載る所、自餘に混ずべからず、令云、師範一人、儀刑四海、無其人則闕之云々、令集解云、古記曰、智用萬物、德合二儀、位高任重、於官尤重、故曰太政大臣云々、所謂有德選、則闕官也、是

なり、故に最初に置、將又執柄・一座宣下とは、不レ守二官次一著二一座上一之宣也、是によりて見れば、假令攝關といへども、宣下なくては、第一の座に著給ことあたはず、古來官次を守り給ふと見えたり、守二官次一とは、太政大臣左大臣右大臣と序列して著座あるをいふ、假令右大臣關白といへども、左大臣の下に著をいふ、

〔後松日記〕四柳營〇徳川家齊太政大臣に上らせ給ふて後、書などみぬ人の、關白とはいづれが重しとゝふ、關白は唯萬機の政をあづかり白すといふ事にて、内覽の宣旨をかうふり給へれば、萬の政皆關白をへずしては奏する事ならぬ也、又太政大臣は、我德をもて四の海浪しづかに、吹風は枝をならさず、あまざかるひなのかぎりも、化にほこるを以て其任にあたるとす、されば關白とならべていふべくもなし、むかしは攝關をへて太政にのぼる、昭宣公、基經、貞觀八年右大臣にて攝政の詔をかうふり、元慶四年十一月八日内覽の宣旨、同年十二月四日太政に任ず、貞信公、(藤原忠平)已下年月日略之謙德公、〇藤原伊尹廉義公、〇藤原頼忠忠義公、〇藤原兼通御堂、〇藤原道長宇治〇藤原頼通知足院、〇藤原忠實法性寺〇藤原忠通等也、又攝關の職を子弟に讓りて太政大臣にのぼり給ふは、御堂の太政大臣、其子頼通公に讓り、頼通公又弟敎通公に讓りて太政に任じ給ふの類なり、されば昔より攝關といへども、三公の官次によりて著座す、然るに寛和二年攝政兼家公にいたりて、はじめて三公の上に列すべしと宣旨をかうふり給ふ、兼家公散位にして攝政たり、又三公の上に列す、これ本官の威おとろへ、朝議失せるもの成べし、其後御堂關白、〇道長寛仁三年攝政を辭して太政にのぼり、其子内大臣内覽の宣旨をかうふりし時、太政大臣の下、左右の大臣の上に列す、治安三年公季の太政大臣、關白の上に列す、九條太政大臣、信長公承曆四年八月十四日太政に任じ、關白の上に列す、同年十月關白左大臣の下に列すべしと宣旨あり、寛和兼家公の例なるべし、保安三年太政大臣、雅實關白忠通公の上に列す、後世攝關の威いよ〳〵盛にして、遂に太政の上に列する事にはなれり、されど朝參に行立する時は、即位朝賀の類也、小朝拜は此限にあらず、散位の關白は、散位の列に立べし、内辨ならば宰なり

〔愚管抄四〕御堂（○藤原道長）は入道にて、萬壽四年まで立そひておはしける、めでたさ申かぎりなし、法成寺つくりたて、供養せられけるには、あまりに何もかも一ッ御事にて無興なるほどなれば、閑院の太政大臣公季の、九條殿（○藤原師輔）の御子にて、年たかくしらがおいてのこられたりけるを請じいだし申て、御堂は御出家の身にて法服をたゞしくして一座につかせ給ひけるに太政大臣にて攝籙の臣なる宇治殿（○道長子頼通）のかみにつけられたりければ、相國の面目きはまりて、入道殿にはうしろをさしまかせて、うるはしき著座氣色もなくて、宇治殿にむかひたる樣にゐられたりけるをば、いみじき事かなとこそ時の人申けれ、

〔公卿補任後一條〕寛仁五年（辛酉、○治安元年）

太政大臣從一位藤原公季（六十六）　七月廿五日任、即日聽輦車、

關白正二位同頼通（三十）　正月七日敍從一位、八月十日宣、可列太政大臣下者、廿一日宣旨、官外記侍從所宜陽殿座可敷太政大臣次者、（横座）

〔台記〕久安六年四月廿二日戊申、申剋法皇（○鳥羽）報書到來曰、一日頃、入道奏可以右大臣任太政大臣之狀、朕報曰、若有先例事、尤可宜、但越左大臣於理不可、太政大臣、若預朝參、座次如何者、余重奏曰、太政大臣爲光、越左大臣雅信、太政大臣公季、越內大臣頼通、（越座次）太政大臣信長越左大臣師實、（有可列太政大臣上之宣旨）先例如此、超越非臣所愁、太政大臣預朝參時、臣將列下、此事若成、喜悅殊甚矣、　八月九日壬子、巳剋法皇賜右大臣所上之書、（加御書）其狀如此、

兼宣旨事、今日之由返々恐戰、取諸身之慶、此外不候、依我君恩澤、已極人臣之職、今生不可忘候、抑任太政大臣之日、乃宣命ニハ、依官次敍從一位之由可被載候、近ハ左大臣度、其定候、依朝恩成太政大臣給、不列左大臣之上者、嗚呼第一事候、給消息ニ毛、出仕天列左府之上天子成大納言バ、悅とこそ思はめとこそ□□□不然者、今日奉兼宣旨之事、暫沙汰不可候歟、以此趣可洩達給、實行

頓首々々謹言、
實行上

報狀如此（書樣據北山拾遺下）

賴長頓首再拜謹奏、右大臣書狀、具見給候畢、座次事、先日申畢、賴長可列下之由、皆所存候也、右大臣望申一位被敍、何事之有乎、天祿二年、伊尹任太政大臣、同日敍正二位、先例既存、誰人聞然乎、抑不敍一位者、可列左大臣之下由、令申之條、未得其意、至于太政大臣者、雖正二位可列一位左右大臣之上、何依爲二位列一位左大臣之下乎、因之信長（正二位）任太政大臣之日、師實（從一位）蒙可列太政大臣之上宣旨也、無此宣旨者、可列太政大臣之下故也、此書狀被見右大臣、何事之有乎、依有所思、明年正月元日、必右大臣令出仕、可列彼下之由深存候也、賴長頓首再拜謹奏、

久安六年八月九日　從一位行左大臣藤原朝臣賴長謹奏

〔百練抄 七 近衞〕久安六年十月二日、美福門院（○鳥羽后藤原得子）於法勝寺供養金泥一切經（行幸）、今日太政大臣（實行）、（正二位）、列左大臣（○藤原賴長）上（從一位）、

〔公卿補任 桃園〕延享五年（戊辰）

太政大臣從一位藤兼香（五十七）

攝政從一位同道香（二十七）　氏長者

〔百練抄 六 崇德〕天承元年五月二日、於院殿上參議雅兼與修理大夫基隆座次相論事議定、十三日、散三位上臈與參議三位下臈署所已下可勘申先例之由被宣下、以散三位可爲上臈之由、明法博士勘申之、猶以參議下臈可爲上臈之由、人々定申也、

〔百練抄 八 高倉〕治承二年四月十二日、參議右大辨長方卿、與左大辨俊經卿（從三位）座次相論之間、今年未書上月奏、仍被問外記之處、三位參議下臈可載散三位上之由勘申、仍以右大辨可爲上臈之由被仰、

外記、

〔岡屋關白記〕建長二年五月十七日、右內府依官次可列之由宣下之、其宣旨如此、

右大臣正二位藤原朝臣
內大臣正二位源朝臣

正三位行權中納言源朝臣通行宣、奉勅件等人宜依官次令列者、

建長二年五月十七日　掃部頭兼大外記中原朝臣師光奉

〔後深心院關白記〕應安六年六月廿一日辛卯、良賢來、召前談書典事、其次語云、兩局與法曹傳盃相論事、去三日爲執權奉行被成院宣文殿云々、兩局法曹任位次可受獻酬之巡流之趣也云々、尤可然乎、裏書云、後日尋取記之、

文殿官外記下臈與法曹上首勸盃間事、次第巡流之條、每度例分明歟、而兩局輩不勤申先規、只以斟酌不參之舊記、忽爲獻酬相論之濫觴、公庭禮數、理豈可然乎、向後互任位階之列次、可受傳盃之巡行之旨、可被下知者、院宣如此、仍執達如件、

應安六年六月三日　權中納言忠光

四位大外記殿

待遇

〔令義解六儀制〕凡在廳座上、見親王及太政大臣下座、左右大臣當司長官即動座、謂左右大臣見親王及太政大臣、即動座、其太政大臣見親王、太政大臣、並不動也、

〔延喜式十八式部〕凡在朝堂座、見親王及太政大臣者、皆磬折而立、若見左右大臣、及左右大臣見親王及太政大臣者、並起座、即就座、及出門、訖乃以次就座、

〔延喜式四十一彈正〕凡彈正不得彈太政大臣、太政大臣得彈彈正、其左右大臣與彈正、若有非違者、各得互彈、

〔令義解六儀制〕凡儀戈者、(謂平頭戟也、用之威儀、故曰儀戈、卽是不可獨用、必於用蓋之時乃並用耳、)太政大臣四竿、左右大臣各二竿、大納言一竿、

〔延喜式二十八兵部〕凡諸門立儀仗日、衞府人等見皇太子及親王、太政大臣出入者、皆坐胡床而揖、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年九月九日庚寅、是日勅聽太政大臣、(○藤原基經)節會日、不列群臣直昇殿、

〔日本紀略四村上〕康保二年十二月十六日壬子、定左大臣、(○藤原實頼)諸節會日、不就行列直可昇殿、

〔日本紀略三村上〕天暦二年正月十六日丙寅、今日被下太政大臣(○藤原忠平)雖其身不參、宜預諸節會見參宣旨、

〔台記〕久安六年十二月卅日壬申、太政大臣、(○藤原實行)諸節會日、不就列可自腋參上之由被下宣旨云云、

〔百練抄七近衞〕仁平三年正月七日、節會、太政大臣(○藤原實行)乘牛車參陣、自腋參上、

〔新儀式五臨時〕雜事

親王公卿有別勅、聽乘輦車出入宮中、幷帶劒事、

親王、太政大臣、大臣、若有國之元老、朝之重臣、別聽乘輦車出入宮中、(○下略)

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年五月廿五日甲申、勅聽太政大臣(○藤原基經)駕輦出入宮中、

〔三代實錄二十二清和〕貞觀十四年十月十日丁未、正三位守右大臣兼行左近衞大將藤原朝臣基經、抗表辭故太政大臣忠仁公(○藤原良房)封邑曰、(○中略)臣謹讀去月四日詔書、贈於故太政大臣藤原朝臣以正一位、又以美濃國封之爲美濃公、謚曰忠仁、食封資人並同平日、太政大臣之官亦如故矣、

〔日本紀略三村上〕天暦三年八月十八日己丑、戊時葬太政大臣(○藤原忠平)於法性寺外艮地、詔贈正一位、謚貞信公、勅使大納言清蔭卿、中納言元方卿、參議庶明朝臣等向彼所、

〔台記〕久安六年四月十三日己未、召主計頭師安朝臣、仰可勘申辭大臣預朝參例之由、若無件例、可勘申辭納言參議預朝參例之由、同以仰畢、　十四日庚申、今朝師安朝臣、持來昨日所仰之例、大臣辭職

用途

預朝參之例、無憚所見、納言以下、先跡多存、冬緒、行平、文範、俊賢、但式部式云、凡前參議以上召見及預朝參者、致仕者、在本位見任上、以理解者、在同位下云々、言前參議已上、無所分別大臣、何無致仕者乎、又寛平九年正月七日宣旨云、致仕左大臣、准承和官符未下所司、宜准致仕大納言藤原冬緒、中納言在原行平等例、節會之祿、依本祿法行之者云々、已賜節會之祿、朝參自明、此等皆師安勘載也、卽奉宇治了、　廿一日丁卯、戌剋許上書法皇、○鳥羽曰、辭職間事、勘先例願重奏、入道抑留于今不奏、中心所存、辭職猶可預朝參、前大臣預朝參之例、無憚所見、但式文、前大臣可朝參之旨所見也、凡前參議已上被召見、及預朝參者云々是也、又寛平九年宣旨、致仕左大臣節會之祿、依本祿法行之者、七十已上、雖不參預祿、至于參議已上者、雖七十已上、其身不參不預之、如此文者、出所自明、納言以下、辭職預朝參、先例多存、大臣縱無其例、納言之例、盍准據乎、至于奉行公事者、辭職後可停止之、以大臣納言參議全無其例故也、師安所勘、大略如此、件勘文雖頻密奏、入道未許、因之遲留、

〔有職問書〕辨と侍從とは勝劣いかゞ

答位階侍從より高く候へ共、近習とは申がたく、太政官の被官なれば、大臣へは日々に逢候へども、天子の御側へは寄らず、侍從は武家の奧小姓にひとし、然故に天子の御側に伺公申なり、侍從に品々有之候、正侍從八人是右に申侍從なり、○中略侍從は大中納言にても兼るなり、尤參議中將猶以兼帶候、此時は位階亦辨とは各別也、

〔延喜式 十一 太政官〕凡左右辨外記史內記侍醫等大夫、○中略臨時宴會得預見參、

〔名目抄 衣服〕有文巡方帶○註略、下同、　無文巡方帶　有文丸鞆帶　无文丸鞆帶　以上玉帶三位已上用之、四位參議又勿論、

爰清原業忠法師一流、自五位外記史著無文玉帶、其由緒欲尋聞之處、無沙汰畢、嚴老注此子細、尋宗賢入道業忠子之處、不限我家、傍局共自法性寺殿給之云々、

〔延喜式 十三 圖書〕凡太政官長案料紙、留年料內三百張、每年打進、其料物者用寮家不仕料、

雜載

凡辨官長案料紙、便留月料內二百張、每月打進、左右各一百張、其堺法者、縱用麁堺、橫上四下一、〇中略紙筆墨充諸司、〇中略太政官紙五千五百張、年料筆十五管、左辨官紙一千二百六十張、筆廿管、右辨官紙一千七十二張、筆十二管、〇中略神祇官墨一廷、〇中略太政官十二廷、左辨官卌一廷、右辨官廿四廷、

〔延喜式十一太政官〕凡太政官及辨官年料雜物、十二月上旬下符所司、卽遣使請受、但紙筆等圖書寮擇精者、每月副解文進、莫更令使受、

凡大臣以下及番上座等、三年一度支料充用、事見掃部式

〔延喜式二十二民部〕凡朝堂幷朝集院場、皆使諸司仕丁芸掃、太政官左右辨官〇中略等仕丁、並免掃除、

凡每月晦日、令諸司仕丁掃除宮中、〇中略但太政官左右辨官〇中略等職司仕丁、並免掃除、

凡太政官內者、劑晦掃仕丁廿人掃除、

〇

國事御用掛

〔伏見宮系譜〕朝彥　文久二年九月三日、國事扶助被命、

〔職掌雜記〕文久二年十二月十二日、攘夷之儀ニ付、堂上、幷官外記、出納等江、以一紙被觸、此日右府公〇二條齊敬以下十餘人、國事御用掛被仰出、

今度以勅使御沙汰之條、於關東追々可爲遵奉哉、左候ハヾ、攘夷一決可有之、就而者、諸大名策略をも可被聞食、其上朝廷御處置可被爲在儀、皇國御安危、實ニ以不容易御時節、專勸懲之思召、且精精可被盡衆議ニ付、今度有志人々、御用掛被仰付候間、諸臣爲報國所存有之候ハヾ、右御用掛之內江、可申立候、一己之了簡ヲ以而、猥成取計進退等不可有之候、違制之輩、屹度可被及御沙汰、心得違無之樣、被仰出候事、

〔實麗卿記〕文久三年二月十四日庚寅、未斜於御學問所兩役列座、同志列參之者、自今國事御用掛被仰付之旨、殿下〇鷹司輔熙被命、正親町〇實德予等御請申上、被仰渡、依至當存也、自餘不能御請、殿下更予ニ被命云、今度國事ニ付、參政今度名目被置被仰出之旨也、不才之事、天下重大之儀、再三及固辭之處、猶篤與勘考之上、可御請之旨命給了、〇中略昨日姉小路少將參政被仰付云々、十五日辛卯、昨日被仰付國事參政御請申上、大藏卿東久世少將江、同被仰出了、〇中略國事御用ニ付、別紙之通、源大納言被示、

國事御用向、厚相心得、可有勵勤事、　小番被免、日參之事、　祗候之間御色紙部屋、但依差支御物置ニ替、　兩役武家應對之時、列席可有之事、

廿日丙申、巳刻參學習院、從今日參政一人、國事掛二人、寄人三人等參向、爲書記役非藏人二人、其餘中詰使番已下相詰、諸藩臣并雖草莽者有揚言之時、爲承屆之、而無事申刻退出、

〔正心誠意〕文久三年八月十八日壬辰、三條西中納言、橋本少將、右自今被止國事御用掛、大藏卿東久世少將、右中辨烏丸侍從、右自今被止國事參政、東園中將、滋野井中將、修理權大夫、四條侍從、右馬頭、主水正、右自今被止寄人、

右各被止參內候事、自今參政、國事、寄人等被止稱呼候事、

元治元年四月六日、實德卿來狀、帥宮〇熾仁親王九條大納言〇道孝國事御評議御人數被仰出候、　廿九日、國事御用近衞前殿〇忠熙理被聞食、中川宮內府被召止、於右府山階宮不上表云々、

〔議奏言渡〕慶應二年九月四日、尹宮被附、

先年來不肖朝彥、格別蒙朝恩畏入候、然處去月晦夜、不顧恐、諸藩召之儀押而言上、何共恐入候次第、是迄トテモ不行屆、此後尚又不計御失體ヲ釀候儀候而ハ、實ニ恐懼之至、仍國事扶助、以御憐愍被免候樣待御沙汰候事、

九月四日　朝彥

右於御前御評議之處、被止御前、

十月廿七日、常陸宮〇晃親王巳下御咎被仰出、

諸大夫召役申渡、武傳立合葉室殿御申渡、常陸宮、此度國事掛依所勞理非乍申上他出、剰止宿、且從來不行跡、旁以蟄居被仰出候事、

國事掛被止候事

總裁議定參與

〔議奏言渡〕慶應三年十二月十四日

德川內府〇慶喜征夷御委任候處、大政返上、將軍職辭退ノ兩條、斷然被聞召候、抑癸丑〇嘉永六年以來、未曾有ノ國難、先帝〇孝明頻年被惱宸襟候御次第、衆議ノ所望ニ付、依之叡慮被決、王政復古、國威挽回御基被爲立候間、自今攝關、幕府等廢絕、卽今先般ノ總裁職、議定、參與ノ三職ヲ置キ、萬機可被爲行、諸事神武創業ノ始ニ原ヅキ、搢紳、武弁、堂上、地下ノ別ナク、至當ノ公議ヲ盡シ、天下ト休戚ヲ同ク可被遊叡慮ニ付、各勉勵、舊來驕惰ノ汚習ヲ洗ヒ、盡忠報國ノ誠ヲ以テ可奉公候事、

一內覽、勅問、國事御用掛リ、議奏、武家傳奏、守護職、所司代、總テ被廢候事、

三職人撰

總裁有栖川宮

議定仁和寺宮　山科宮　中山大納言　大炊御門中納言　尾張大納言　越前宰相　安藝少將　土佐少將

參與大原宰相　萬里小路弁　長谷三位　岩倉少將　橋本少將　尾藩三人　越藩三人　土藩三人　藝藩三人　薩藩三人

太政官始追々可被立候間、其旨可被心得候、

參豫

〔正心誠意〕元治元年正月廿二日、董〇正親町公董へ遣狀、返狀云、〇中略薩〇島津久光春〇松平慶永會〇松平容保淀〇稻葉正

邦四人如御命參豫トカ申名目、日々豫政事參內之由ニ承候、　廿六日、董返狀、一橋、〇德川慶喜越前春、土州容堂、伊達伊豫守、島津少將、會津等、彌參豫ト申名目、是ハ全公武君臣一和之道相談相手と申事ニ候、

古事類苑

官位部九

令制官職五

攝政

攝政ハ天皇ニ代リ、萬機ヲ攝行スルモノニテ、幼帝及ビ女帝ノ時ニ之ヲ置ク、應神天皇ノ時、母后氣長足姫尊ノ攝政トナリシハ、天皇ノ幼冲ナルニ由リ、攝行シタマヒシナリ、厩戸皇子ガ推古天皇ノ時ニ於ケル、中大兄皇子ガ齊明天皇ノ時ニ於ケルガ如キハ、倶ニ女主タルニ由リテ攝行セシナリ、而シテ皆皇族ヲ以テセシガ、清和天皇ノ時ニ及ビ、藤原良房外祖ヲ以テ機務ヲ攝行ス、是人臣ヲ以テ攝政スルノ始トス、爾後幼主ノ時、藤原氏ノ大臣毎ニ外戚ヲ以テ其任ニ當リ、天皇元服ノ後其職ヲ辭ス、之ヲ復辟ト云フ、然レドモ猶ホ關白タルヲ以テ例トス、而シテ藤原道隆ノ一條天皇ノ元服以後ニ攝政トナリシハ、前例ニ違ヒタレド、近世往々此事アリ、三條天皇目疾ニ罹リタマヒシ時、左大臣藤原道長ヲシテ攝政ニ準ジ、敍位除目ノ事ヲ行ハシメシガ如キハ、尤モ異例ナリ、又堀河天皇ノ時、藤原師實攝政ヲ辭シテ關白トナリシカドモ、宮中ノ雜事、敍位除目、仍ホ攝政ニ準ジテ行ハシム、爾後時ニ此迹ニ循フモノアリ、

攝政ハ關白ニ似タルモノナレド、又大ニ異ナルモノアリ、天皇ニ代リテ宸筆ノ宣命ヲ書シ、除目敍位ノ申文ニ名字ヲ書セズシテ、判ヲ用キルガ如キ是ナリ、皆關白ノ行フコト能ハザル所ナリ、

攝政關白ハ正官ニアラザルヲ以テ、必ズ大臣ノ兼ヌル所ナリシガ、後ニハ單ニ此職ニ居ルモノアリテ、殆ド正官ノ如クナレリ、又位署ニ加署セザリシガ、内大臣藤原頼通ノ攝政タリシ時、始テ位署ニ加ヘタリ、是頼通ガ内大臣ニテ左右大臣ノ上ニ列スルヲ以テナリ、加署ノ例此ニ起レリ、又攝政ト關白トハ、太政大臣ノ下ニ列セシ事モアレドモ、多クハ太政大臣ノ上ニ列セリ、

攝政關白ハ藤原良房ノ嗣子基經、及ビ基經ノ子忠平ガ之ニ補セシヨリ、其一門ノ占有ニ歸シタリシガ、中世ニ至リ、忠通ノ長子基通ノ流ヲ近衞ト稱シ、次子兼實ノ流ヲ九條ト稱シ、基通ノ孫家實ニ至リ、子兼經近衞家ヲ嗣ギ、次子兼平鷹司ト稱シ、又兼實ノ孫道家ニ至リ、子教實九條家ヲ嗣ギ、次子良實二條ト稱シ、三子實經一條ト稱シ、互ニ攝政關白トナリシヨリ、此五家ヲ攝家ト稱シ、其子孫遞ニ其職ニ居リ、以テ德川氏ノ季ニ至ル、

攝政關白ハ大ニ威權アリシガ、白河上皇ノ院中ニ於テ、政ヲ行ヒタマヒシヨリ、漸ク衰ヘ、五家分立ヨリ以來、殆ド實權ヲ失ヒタリ、然レドモ他氏ノ人ハ、此任ニ膺ルコトヲ得ザリシガ豐臣秀吉ノ之ニ補シ、之ヲ其嗣子秀次ニ傳ヘシハ、歷代ノ一大變ナリ、而シテ終ニ其舊ニ復シ、五家ノ外、復之ヲ侵スモノナシ、

名稱

〔伊呂波字類抄 世 疊字〕攝政　攝籙

〔段注說文解字 十二上 手〕攝引持也、謂引進而持之也、凡云攝者皆整飭之意、論語攝齊、史記俟生攝弊衣冠、襄十四年左傳曰、不書者惰也、書者攝也、注云、能自攝整、詩攝以威儀、傳曰、言相攝佐者、以威儀也、論語官事不攝、注云、攝猶兼也、皆引持之意、从手聶聲、書涉切、八部、

〔六臣註文選 三 賦〕東京賦　張平子

高祖膺籙受圖、順天行誅、杖朱旗而建大號、綜曰、膺籙謂當五勝之籙、受圖卯金刀之語、（中略）善曰、春秋命曆引曰、五德之運、徵符合膺籙次相代、

〔六臣註文選 三十六 文〕永明十一年策秀才文五首　王元長

上古攝政

問秀才、朕秉籙御天、握樞臨極、善曰、尚書璇璣鈴曰、河圖命紀也、圖天地帝王終始存亡之期、錄代之矩、籙與錄同也、(中略)翰曰、秉執也、籙符也、天子受命執之、以御制天下

也、

〔下學集上官位〕攝政(セフシヤウ)攝籙(セフロク)貢辰

〔拾芥抄中本官位唐名〕攝政關白 執政 博陸 執柄 輔佐 攝籙 攝政 攝籙 垂衣 殿下 大麓 冢宰 曲阜 太宰 周公 納言 虞舜 貢辰 皐陶之輔佐

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、見帳中、攝政不座、主上依幼稚不着給、至攝政猶可着給也、

〔公武大體略記〕一執柄家

鷹司殿、○中略 攝政をば攝籙と申、

〔愚昧記〕仁安三年十一月廿三日庚辰、酉刻許束帶衣裝、○註略 下自待賢門入昭訓門、參大極殿、東福門

座依無人、參殿下、○攝政藤原基房 直廬、昭慶門以東 則殿下出御、東帶 有申承事等、

〔小右記〕寛仁二年四月廿一日甲申、今日大殿(藤原道長)謂大殿是前攝政也、世號大殿、被參賀茂、

〔官職難儀〕攝政とは、いかゞしたる時申候や、職原抄などにも委見えたる間申に及ず、天皇幼主の御時政をたすけ奉るべきため攝政し給、天子十五の御年迄と申也、去ながら十五より内にても、成人の禮を行なはれ、攝政を改て、關白たる例おほく侍り、又御十六の年まで攝政し給たる例もあり、人臣まさしく攝政したまふは、清和天皇幼主の御時、忠仁公御外祖にて成給ひしよりの事也、かりそめにもそれより攝家の御流ならでは成給はぬ事也、せい人の御時、攝政を返し奉られて關白と申也、猶かみとして〻やうじ申さるゝゆへ、准攝政の宣下など申事あり、猶おもくし申さるゝ儀也、攝政を辭申さるゝをば攝政復辟の奏と申也、復はかへす、辟は君也、政を君に返すと申心也、

〔日本書紀九神功〕氣長足姫尊、稚日本根子彦太日日天皇○開化之曾孫、氣長宿禰王之女也、母曰葛城高

職掌

穎媛、足仲彥天皇(○仲哀)二年、立爲皇后、(○中略)九年春二月、足仲彥天皇崩於筑紫橿日宮、(○中略)皇后從新羅還之、十二月戊戌朔辛亥、生譽田天皇(○應神)於筑紫、(○中略)明年(○中略)十月癸亥朔甲子、群臣尊皇后曰皇太后、是年也大歲辛巳、卽爲攝政元年、

〔日本書紀二十二推古〕元年四月庚午朔己卯、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、

〔日本書紀二十一用明〕元年正月壬子朔、立穴穗部間人皇女爲皇后、是生四男、其一曰厩戸皇子、(○註略)此之皇子(○中略)於豐御食炊屋姬天皇(○推古)世、位居東宮、總攝萬機、行天皇事、語見豐御食炊屋姬天皇紀、

〔帝王編年記十四清和〕齊明天皇御宇、皇太子中大兄皇子、(天智天皇)又攝政、

〔藤原家傳上鎌足〕十三年、天皇(○齊明、中略、)崩于朝倉行宮、皇太子(○天智)素服稱制、(○中略)十四年、皇太子攝政、

〔神皇正統記元正〕第四十四代元正天皇は、草壁太子の御女、御母は元明天皇、文武同母の姉なり、乙卯(靈龜元)の年正月に攝政、九月に受禪、その日卽位、

〔續日本紀四元明〕四年(○慶雲)六月、豐祖父天皇(○文武)崩、庚寅、天皇御東樓、詔召八省卿及五衞督率等、告以依遺詔攝萬機之狀、

○按ズルニ、元明天皇ノ時、元正天皇攝政タリシ事、正史ニミエズ、恐クハ又文武天皇ノ遺詔ヲ誤傳セシナラン

〔西宮記臨時五〕一攝政

代天皇攝萬機、載幼主受禪宣命後、或詔賜隨身加內舍人、辨申官奏、於議所行除目、有時於宿所行之、忠仁公有任人賜爵、(承平三年正月七日、貞信公內辨、(同元日御心神不調、不行節會、)同十三日任公卿、貞信公爲內辨、云々、中納言辨事、)

〔北山抄九羽林要抄〕矢奏事

幼主時申攝政、攝政先坐殿上御倚子西、次將自殿上口方參入、執書杖跪候於神仙門中、(時簡)依攝政

目進昇小板敷奉之、(不及時懸膝於長押上)退候小板敷、攝政見了、返給之、次將置杖於小板敷、膝行登長押取之、退取加文於杖退下、如恒、

〔江家次第二正月〕攝政時敍位事

藏人頭以下、於攝政直廬撰申文、本家家司爲識者、一人相加撰之、短冊袖書目錄等如恒、了奉仕裝束、南面東一二三四間放出之、垂母屋簾上庇簾、第四間西邊重敷高麗端二枚、爲攝政座、後立四尺屏風、不及南柱五尺許、爲攝政往反路、攝政座前置硯筥、反蓋仰置身上、其上置短冊申文、頭向東、其上置外記勘文、無懸紙、件勘文撰申文之前、外記所進也、硯筥北置十年勞帳筥、(同上)其東敷菅圓座一枚、爲執筆座、第三間北簾下敷高麗端一枚、爲大臣座、後立四尺屏風、第三四間敷同高麗端帖、爲納言參議座、(南北對座)北座後又立四尺屏風、無横切座、障子以東東庇、又二行敷高麗幷紫端帖、爲公卿以下暫候座、(高麗公卿座、紫職事辨官座、)公卿著仗座、殿下出御、(東帶)若不出御時、布袴御簾中、以頭若五位藏人召公卿、(頭或傳仰六位令召之、故經信卿語云、頭自可召、更不可傳六位之由、宇治殿所被責仰也云々、)召儀如恒、(但詞云、攝政御消息不罷著陣、人々引率此方云々、)次大臣召外記仰云、筥文候、外記取筥文列小庭幷宜陽殿南、如常、大臣以下起座、經承香殿後、到凝華舍、(里內裏時、有經大路東入自小門、被參直廬之例也)大臣以下次第昇著座、(先暫居東庇座、後進、)辨以下留立舍東北、(西上南面)辨官以下不足四人之時、殿上人相加取之、○中略敍畢入筥奉執政、覽畢給後、大辨退、若有勸盃者、藏人頭勸攝政、五位藏人取瓶子、若御座簾中者、於簾下勸之、外座第一人著簾下受之、執柄自簾下被出杯、執柄召入眼上卿給敍位、上卿召外記筥入之、向陣行入眼事、除目大略准之、

〔江家次第十八〕詔書覆奏

攝政時、若御直廬若里第者、藏人可持參、書可字返、(覆奏詞奥可一字許、自平聲頓寄奥書之、不插而返給之、)上卿傳給外記、(取爲退歸)近例於弓場殿開見御可之有無、歸著陣座、外記持文插候膝突、上卿取之、返給外記、

〔玉海〕壽永二年五月廿二日乙酉、此日忠親卿著仗座、被行減服御常膳詔事、頭中將隆房仰之、大內記

光輔進詔書、攝政〇藤原基通加御畫云々、下給中務少輔兼親了、

〔台記〕仁平元年三月一日壬申、晩頭、頭朝隆朝臣來示雜事、此中宸筆宣命、兩執政〇關白藤原忠通、太政大臣藤原實行、倶有輕服、皇帝雖有親政事之名、其實猶爲之如何、奏曰、攝政卽天子也、因之所書也、關白惟百官總己、猶在臣位、理不可書、加之未見關白書宸筆宣命之例、必天子〇近衞可書之、俊經尚復早獻草、兼日練習、豈書御乎、

〔玉海〕承安二年閏十二月二日丙寅、賴業語云、〇中略宇治殿〇藤原賴通始爲攝政內大臣時、可列左右大臣之上之由、被宣下了後爲關白左大臣之時、可列太政大臣下之由、被宣下了、下等云々、是始則依爲攝政重任也、自是關白攝政書位署事出來云々、昔不書之云々、是則以內大臣身列左右大臣上之條、頗無其謂、仍書載攝政字改云々、後關白之時下等之條、關白劣自攝政之上、又太政大臣爲重任故也云云、又或說云、攝政之時除目敍位、御申文不書名字用判云々、關白之時書氏名云々、是等未知是非云云、

〔中右記〕嘉承二年十一月三日、晩頭參內、〇中略公卿賀表儀、〇鳥羽卽位、註略、公卿參集仗座、〇中略攝政殿下〇藤原忠實ハ右大臣正二位也、而左大臣〇源俊房從一位也、今夜賀表之判、以誰人可爲上哉由、內々議定、先相尋例之處、元慶三年、朔旦冬至賀表、左大臣融、攝政右大臣基經、〇皆正二位雖下﨟、表中判有昭宣公〇藤原基經御名付之、案之表中臣等言之處乎、執柄人今度付彼例、殿下表中可有御判也、但年號之奧判所ニハ、左大臣之下ニ攝政殿可有御判歟、又今度只以攝政殿下可列左大臣上之由、先可被下宣旨歟、而多列上之時同階也、今度ハ左大臣ハ從一位也、殿下ハ正二位也、猶可有憚者、就中故大殿〇藤原師實聊被仰置云、列左大臣上事、暫不可有歟、大略後二條殿〇藤原師通列給左大臣上後、不經幾程、如此事思食憚歟、尤謙退之深在如此事、仍今度雖列左大臣下、至表中判者、攝政殿有御判也、

但件元慶三年、朔旦冬至賀表之時、左大臣融不出仕、右大臣以下參闕也、今度左府雖被參內、准據

補任

彼例有此儀也、

凡公卿連判上表之時、雖下臈執政人表中被加判也、

〔中右記〕寛治四年十一月四日甲子、權大納言雅實卿、爲勅使初被參伊勢大神宮、仍早旦先御覽神寶幷神馬如例、宸筆宣命左大辨匡房大江〇早旦參入、兼以草之、藏人頭季仲朝臣傳宣攝政殿下〇藤原師實淸書之、於晝御座給之、

〔殿暦〕天仁二年三月七日辛亥、先參院所申明日伊勢公卿勅使事宣命趣也、宸筆八日壬子、早旦沐浴、召敦宗仰宣命趣、於宿所草之、余〇藤原忠實見之、此間余著束帶參御前、〇中略次予下宿所自令淸書、寛治四年例也、淸書了封上、如天文奏、但無懸紙幷裏紙、封了引墨、草相具參御前、〇中略主上〇鳥羽出御晝御座召使〇藤原宗通、中略、使參入賜宣命、可有仰詞、而幼主〇御歳七不被仰、仍仰之、其詞云、能久申天奉禮、又來十二日可參著者、カク仰ラルホド告也使退了、余出殿上、使候殿上、余敎云、宣命ハ於社頭可被燒也、

〔西宮記臨時七〕伊勢使

當日早旦沐浴、〇中略次參內、〇註略依召參御前、御束帶進近龍顏、給宸筆宣命、〇中略使插笏給之插懷中、勅曰、能久申進禮、使稱唯、〇註略次被仰曰、宣命讀了、於神前可燒之、

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、午剋右中辨光長朝臣持來賴朝卿書札幷折紙等、〇中略此事旁以不可然、仍指遣經房卿、及晩來付件卿進消息折紙等於院、其上申固辭之子細、其狀云、〇中略成人御時以可覽天子之文書、先觸委任之臣、謂之內覽、幼主之儀、攝政就南面代君、攝天子之政、仍攝政之時、別置內覽之臣者、以可覽攝政之文書、先可觸內覽之人、以之謂之、攝政與內覽、殆似有君臣之禮、加之敍位除目官奏等、於攝政之直廬所行也、其外有內覽臣者相分、又於彼直廬可行歟、旁以無其謂、仍古來未有此例、縱雖無例、有叶物議事者立法、是聖代之流例也、〇下略

〔職原抄上〕太政官

攝政關白者、大臣兼之、或去大臣職帶之、東三條入道攝政〇藤原兼家已來例也、凡此職者、異朝唐堯時、擧舜爲攝政、殷湯以伊尹爲阿衡當攝政也周成王幼而卽位、叔父周公旦攝政、是今攝政之儀也、漢昭帝又幼而卽位、博陸侯霍光、奉武帝遺詔攝政、如周公故事、然乃以周公旦霍光爲濫觴是也、〇中略本朝仲哀崩皇后攝政、平三韓而歸筑紫、誕生皇子、皇子在襁褓、皇后猶攝政、遂臨天下、六十餘年、雖同正帝、奉稱攝政、其後推古天皇朝、皇太子厩戸皇子推古姪也攝政、齊明天皇御宇、皇太子中大兄皇子又攝政、淸和天皇幼而卽位、外祖忠仁公奉文德遺詔而攝政、是本朝以人臣爲攝政之初也、爾來彼一門爲執政之臣也、

〔柱史抄下臣下〕攝政事
御讓位之時、必載其宣命、不然之時有詔書、御畫奏下儀如准后、

〔朝野群載十二內記〕攝政宣命
太上法皇乃詔久、關白右大臣藤原朝臣〈藤原忠實〉波、輔導年久氏之爲朝重臣利、見其誠心仁、幼主違寄託都之志、然則皇太子天日嗣違承傳賜比天、未親萬機之間、保輔幼主天、攝行政事古止、一如忠仁公故事與世止世牟佐

詔御命違、衆聞食〇違恐止誤宣、

嘉承二年七月十九日

〔武家嚴制錄一〕禁中幷公家衆諸法度〇中略
一雖爲攝家無其器用者、不可被任三公攝關、況其外乎、〇中略
右可被相守此旨者也

慶長廿乙卯年七月日

昭實公在判二條關白殿
秀忠公御判
家康公御判

〔帝王編年記十四淸和〕天安二年十一月七日甲子、卽位于大極殿、時御歲九、此日以太政大臣〇藤原良房爲攝

政、

〔神皇正統記 清和〕此天皇九歲にて卽位、戊寅の年なり、己卯に改元踐祚ありしかば、外祖良房の大臣はじめて攝政せらる、○中略幼主の時ばかりかとおぼえしかど、攝政關白もさだまれる職になりぬ、をのづから攝關と云名をとゞめらるゝ時も、內覽の臣ををかれたれば、執政の義かはる事なし、

〔三代實錄 十三清和〕貞觀八年八月十九日辛卯、勅太政大臣攝行天下之政、　廿二日甲午、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表言、竊以疲驂倦路、難責以逐日之能、病鶴忘飛、豈望其凌霄之効、伏惟聖朝陛下聰跨軒昊、德觀成昭、泣辜之惠非深、扇暍之仁猶薄、臣以庸材、謬膺佐命、唯獻血誠之无比、潛欽日就而不訾、遂乃天從人願、神感聖仁、大成之日已來、歸老之期漸及、臣不敢忘盈滿之誡、又深企二疏之風、然而聖慈不許出於直廬之外、臣誠不忍離自玉階之前、徘徊恩澤、猶侍禁中、而去六年冬、大病以還、體氣疲苶、心魂惘然、坐念立忘、昨知今惑、加以長樂宮御藥之事、夙夜剋思、無顧私第、自然心將事懶、性與物疎、唯欲助衰以叨恩、那堪勤政以贊化、而今忽降綸言、更預機務、乍承驚悚、諮謝忘方、臣雖質情之愚薄、而當昔之全狀、唯以勤恪之力、幸獲免於罪戾、而今身已衰朽、勤勞何申、心已昏迷、恭恪胡施、卽知於公无益、爲私多傷、徒招眼下之耻、還損身後之名、臣竊想古人敎射之言、夫去楊葉百步而射、百發而百中、然其弓撥矢鉤、氣衰力倦、則百發之功盡廢矣、何況平生材望、幸賴偶中、器局力衰之後、更向百步之葉、假令雖專愚者、猶當知其不可焉、伏願陛下察其深衷、矜其疲劣、更廻璽誥、改賜旋聰、則巍々聖帝、無偏之德彌新、欵々微臣、有涯之生少損、無任誠懇之至、謹拜表以聞、不許、勅曰、廼者災異荐臻、內外驚動、然須賴公助理、且得謐靜、○以下恐有脫文　廿四日丙申、太政大臣重抗表言、先傾丹實、仰叩紫闈、而天顧弗廻、叙情無感、愚衷尙屈、奬喩彌申、跕焦原而非危、履虎尾而倍懼、臣聞日月猶示盈昃、山川未免崩冲、物理自然、人事何忒、臣德薄才拙、任重位高、偏賴聖哲欽明、天人叶贊、得免罪戾、久塵宸階、常愧深恩不窮、淺

効無答、如踏鑪炭、似履春氷、況今老大逼來、疲病交集、藥餌無聞、每闕趨奉、素飡之慙、彌倍平常、安得以此疲勞重掌機密、上黷國釆、下貽身累、況復神鑒害盈、鬼瞰貽禍、何忘止足之分、坐待幽冥之責、臣頽齡漸迫、殘命尙危、若能廻聖慈、矜臣深志、賜以優閑、任其將息、則再造之恩更渥、三舍之惠彌深、豈敢偏惜衰朽之身、唯貪久視太平之化、伏願陛下別垂哀許、不省焉、

〔大日本史清和二十八〕按大鏡裏書、載良房時爲攝政、公卿補任亦書攝政太政大臣、二書又載、貞觀七年帝加元服、良房辭攝政、八年重勅攝行天下之政、然考三代實錄、八年八月二十九日、始書勅太政大臣、攝行天下之政、而不言其再有攝政之命、蓋帝幼冲卽位、良房以外戚大臣攝行庶政、猶未有攝政之名、其後帝年稍長、加元服、親機務、始特有攝行之勅也、二書以良房爲攝政之始、欲牽合後世攝關故事、故設此說耳、今不取、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年十一月廿九日壬寅、是日天皇讓位於皇太子、〇陽成、時歲九、勅右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經、保輔幼主、攝行天子之政、如忠仁公故事、

〔三代實錄陽成三十〕貞觀十八年十二月甲辰朔、右大臣基經抗表辭攝政、臣基經言、伏奉去月二十九日傳國詔命曰、少主未親萬機之間、臣基經攝行政事、如忠仁公故事、臣某中謝伏惟忠仁公德崇功大、仁義兼資、況先帝之親舅、陛下外祖、人望皆歸、官齒既貴、陛下知其元老、專俾攝政、天下萬民、僉以爲宜、今臣年出不惑、性猶童蒙、職至大臣、効無匡濟、朝夕流汗、責深罪重、夫代天治民者人君也、導君從天者人臣也、而詔命曰、比年災異仍見、此復重臣罪責也、漢代以災異免三公之官、臣所尤可懼也、臣平生備員之日、陛下猶引過於一人、臣非常受寄之時、今上何明德於四海、蹇驢既疲坦途、況雲巖不知遠近乎、短檝無利夷浪、況淵水不測邊涯乎、任重道悠、不知所處、今公卿大臣在位者多、皆是有德良人、陛下察而用之亦亡叔忠仁公屬纊之夕、重託扶持陛下、莫愆始終之敎、臣今緣詔命、離去仙砌、攝事朝廷、進慙失敎、退恐違命、臣始謂穆遊之轉翠華、誰知堯心之脫黃屋、臣將隨陛下爲雲中之吠犬、何更歸城闕爲華表

之鳴鶴、臣之至誠、既其如此、臣某誠惶誠恐頓首々々、死罪々々、謹言、不許矣、　四日丁未、右大臣重抗表言、中使右近衛權中將藤原朝臣山蔭至、奉傳勅旨、抑止臣請、不知愚欵之乖聖懷、更疑微誠之逸天聽、臣某誠惶誠恐頓首々々死罪々々、臣位貴官重、皆是陛下之殊恩、祿厚封高、亦復陛下絕寵、殊恨淹引日月、偸安非服、不意綸命乍降、屬以重寄、縱令陛下責臣以有一割之刀、而復臣訴陛下以無再全之錦、不獨顧身、亦能思國、以臣思國之慮、將盡報主之情、陛下推而察之、莫重臣罪、臣以爲、春蒼夏昊、猶是一天、朝東暮西、未爲兩日、伏願臣心不離魏闕、將致今上臣子之忠、臣身常侍仙階、不失亡叔臨終之命、臣謹撿故事、皇帝之母、必升尊位、又察前修、幼主之代、太后臨朝、陛下若實重天下、憂思幼主、則皇母尊位之後、乃許臨朝之儀、臣竭力紀功、不敢懈緩、臣誠盡矣、臣願足焉、不堪悃欵之至、累表上聞、遂不許、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、天皇御紫宸殿、喚公卿及百官於殿庭、策拜右大臣正二位藤原朝臣基經、爲太政大臣、○中略策命曰、天皇我詔旨良万勅御命乎親王諸臣百官人等、天下公民衆聞食止宣、右大臣正二位藤原基經朝臣波朕之親舅奈利、○中略故是以太政大臣官爾上給比治賜久止勅、但攝政之職波今母彌益々爾勤奉仕止禮勅御命乎衆聞食止宣、

〔大日本史二十九陽成〕按愚管鈔、大鏡裏書、公卿補任、歷代皇紀並云、十一月八日、基經改攝政爲關白、然本書無所見、且此詔云、攝政如故、則知諸書誤矣、

〔三代實錄四十一陽成〕元慶六年正月二日乙巳、是日天皇○時十五歲加元服、　廿五日戊辰、太政大臣上表、請罷攝政、帝親萬機曰云々、勅答曰、先帝託公以眇身、委公以庶績、以至今日、識○識恐誠誤思名雖列於成人、德猶慙於往古、復辟之事、非予所堪、攝籙之機、欲公勿讓、朕之此志、美能順之、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年八月十二日乙巳、太政大臣○藤原基經上表請停攝政曰、臣從忝攝籙之名、常失心神之厝、執雕虎而非懼、探驪龍而猶安、況明辟有期、舊章攸迪、豈抵滯於非據、忘機衡之不羞、臣伏以去年十二月二十六日、敢披丹若、○若一本作苦頻黷青規、雖罄纖芥之誠、未廻重華之照、臣欲固守微志、重

祈哀憐、會蕃客入朝、攝館多務、所司從事于懷遠、微臣未遑于叫閽、屏氣鞠躬、經春涉夏、今齡若轉蓬飄然艾、孟繁之足、行步共艱、許丞之聾、風雨彌劇、縱當强健之日、尙謂踰涯、況臨疲茶之時、何堪紊序、伏願陛下踐周成之正位、遵漢宣之曆圖、則微臣歡極、天下幸甚、臣之懇誠、豈啻爲懟誇議、豈啻爲懼滿盈、是恐乖古今之彝倫、爽邦國之遐躅也、不任僂々之至、謹拜表以聞、勅答曰、得表具之、大行皇帝所以擧天下而委公者、非特爲予一人、兼復顧萬方也、自朕嗣事、七年于茲、垂拱司契、寔賴丕訓、而公深存謙遜、冲讓累年、方寵光於浮雲、蓄淸白爲重寶、暨于擧周誦引漢詢、求之常談、或如可然、但運鍾澆季、俗盡凋殘、非任明哲之謀、安致雍熙之化、況師範者公之最也、儀形者公之職也、既兼親賢、宜均休戚、豈有鼎盛之年、空陳懸車褰幕之禮、渭陽之地、還履博陸疎遠之蹤乎、公宜特加攝衞、勉養精神、上思先帝付託之旨、下待匪躬聽斷之期、依舊董攝、莫重抗辭、斷其後章、明於前勅、而來請未休、雖悟雅素、遺制之重、朕何離黃、悉之耳、　十月九日壬寅、先是太政大臣頻抗表、請停攝政、累月不視事、勅遂不聽、

〔日本紀略醍醐一〕延長八年九月廿二日壬午、天皇逃位讓於皇太子寛明親王、〇朱雀、時歲八、詔曰、左大臣藤原朝臣〇忠平保輔幼主攝行政事、

〔神皇正統記朱雀〕第六十一代朱雀天皇諱は寛明、〇中略外舅左大臣忠平昭宣公（藤原基經）の三男、後に貞信公と云、攝政せる、寛平に昭宣公薨じてのちには、延喜御一代まで攝關なかりき、此君又幼主にて立給ふによりて、故事に任せて、萬機を攝行せられけるにこそ、

〔日本紀略圓融六〕安和二年八月十三日戊子、冷泉院天皇逃位讓於天皇、于時新帝年十一、〇中略詔令太政大臣藤原朝臣〇實賴輔佐幼主、攝行政事、如貞信公故事、　十五日庚寅、攝政上表、同日返給上表、中使左近少將時中朝臣、　十八日癸巳、攝政重上表、　十九日、返給上表、中使左近中將元輔、

天祿元年五月廿日庚申、今日詔令右大臣藤原伊尹朝臣攝行政事、〇天皇時歲十二

〔日本紀略後一條十三〕長和五年正月廿九日甲戌、未剋、三條院天皇逃位、讓皇太子、〇後一條于時皇太子春秋

九歲、于時御坐上東門院、令新帝外祖左大臣藤原道長朝臣攝行政事、如忠仁公故事、

〔中右記〕嘉承二年七月十九日、申剋許、民部卿（○源俊明）奉院宣、被參云、幼主（○鳥羽、時歲五、）未親萬機之間、右大臣藤原朝臣（○忠實）令攝政、璽劒被渡新君事、早任例可沙汰者、則驚此告、參御直廬、右大辨時範朝臣奉仰、遣召大外記大夫史大內記則皆參、且被尋先例、□依爲卒爾事、不能子細、宛如向暗夜、□被示仰□年之間、昇攝政職、不圖此事、就中先帝之御事悲歎、推心新君之沙汰、迷亂失方、憂喜之處、已迷前後、爲之如何、仰旨誠以可然、戌時許民部卿著載院宣右大臣攝政、可爲如忠仁公故事由作載、令刑部卿道時朝臣內覽、則可奏法王御所、歸來下上卿、（○下略）

〔百練抄（九安德）〕壽永二年十一月廿一日、權大納言師家卿（年十一、入道關白子、）任內大臣、可爲攝政藤氏長者之由宣下、無節會、

〔源平盛衰記（三十四）〕法皇御歎幷木曾縱逸附四十九人止官職事

廿一日（○壽永二年十一月）ニ攝政ヲ奉止、基通ノ御事也、近衞殿ト申、其代ニ松殿基房御子ニ權大納言師家ノ十三ニ成給ケルヲ、內大臣ニ奉成、攝政ノ詔書ヲ被下ケリ、折節大臣ノ闕ナカリケレバ、後德大寺左大將實定ノ內大臣ニテ坐シケルヲ、暫借テ成給フ、時人、昔コソカルノ大臣ハ有シニ、今モカルノ大臣オハシケリトゾ笑ケル、加樣ノ事ハ、大宮大相國伊通コソ宜ヒシニ、其人オハセヌ共、又申人モ有ケリ、木曾、近衞殿ヲ奉止テ、師家ヲナシ奉ケル事ハ、松殿最愛ノ御女、ミメ形イト嚴ク御坐ケルヲ、女御后ニモト御勞リ有ケルニ、美人ノ由傳聞テ、木曾推テ御聟ニ成タリケル故ニ、御兄公トテ角計ヒナシ進セケルトゾ聞エシ、淺增キ事共也、（○下略）

〔愚管抄（六）〕九條の右大臣（○藤原兼實）は、文治二年三月十二日につひに攝政の詔（○後鳥羽、時歲七、）氏の長者と仰下されにけり、去年十二月廿九日より、內覽の臣許にて、我も人も何ともなく思ひてありけるに、かく定りにければ、世の中の人も、げに〳〵しき攝籙の臣こそ出きたれと思へりけり、さて右

大臣いはれけるは、治承三年の冬より、いかなるべしとも思ひわかで、佛神に祈りて、攝籙の先途には必ず達すべき告有て、廿年の後けふ待つけつるといはれけり、十六日やがて拜賀せられにけり、

〔皇帝紀抄 七後鳥羽〕文治元年十二月、以右大臣兼實可攝政之由、自關東申上、廿八日、先蒙內覽宣旨、二年三月十二日、以右大臣兼實可爲攝政幷氏長者之由被仰下了、

〔保曆間記〕主上〇後鳥羽幼帝ニ坐シケレバ、昔ノ如ク攝政月輪殿兼實公、政事ヲ仕給ケリ、大方ハ一向關東ノ任ニゾ成ケル、

〔吾妻鏡 五〕文治元年十二月六日乙卯、院奏折紙狀云、可有御沙汰事、〇中略

一攝籙事　可被下內覽宣旨於右大臣〇藤原兼實也、〇中略

十二月六日　賴朝在判

〔愚管抄 六〕院〇後鳥羽の御心に、ふかく世の變りし、我御必よりおこらずと云ふことを、人にも云られんとや思召けん、建仁二年十一月廿七日に、左大臣〇藤原良經に內覽氏長者の宣旨をくだして、やがて廿八日に熊野御進發なりにけり、母北政所の重服、この十二月ばかりにて有けり、さて熊野より御歸洛の後、十二月廿七日に、攝政の詔くだされにけり、時〇土御門歲八、さて正月一日の拜禮のさきに、悅び申せられにければ、世の人は、こはゆゝしく目出度ことかなと思ひけり、

〔愚管抄 二〕今上〇仲恭

攝政左大臣道家　受禪同日〇承久三年四月二十日、天皇時歲四、爲攝政二十九、後京極殿良經嫡男、外祖外舅爲大臣之時、無不居攝政之例、道理必然被載宣命云々、

〔增鏡 五內野の雪〕寬元も四年になりぬ、正月廿八日、春宮〇後深草に御位ゆづり申させ給ふ、この御門も又四にぞならせ給ふ、めでたき御ためしどもなれば、行すゑもをしはかられ給ふ、光明峯寺殿道〇

家御三郎君、左大臣さねつねのおとゞ、御とし廿四にて攝政し給ふ、いとめでたし、御あにの福光園院殿、○良實もと關白にておはしつる、うらみてしぶ〳〵におはしけれど、ちからなし、御はらから三人までせつろくしたまへるためし、ふるくは謙德公、○伊尹忠義公、○兼通東三條大入道殿、○兼家その又御子ども中關白殿、○道隆あはた殿、○道兼法成寺入道殿、○道長これふたゝびなり、ちかくは法性寺殿の御子ども、六條殿、もとざね松殿、もとふさ月輪殿、兼實是ぞやがていまの峯殿○道家の御おほぢよ、かやうの事いとたま〳〵あれど、あはた殿もせんじかうぶり給へりしばかりにて、七日にてうせ給ひにしかば、天下執行し給ふにをよばず、松殿の御子もろいへのおとゞ、夢のやうにて、しかも一代にてやみたまひにき、いづれも御すゑまではおはせざりしに、この三所の御後のみいまにたえず、御ながれ久しきふぢなみにて、たちさかへたまへることそたぐひなきやんごとなさなめれ、すゑのよにもありがたくや侍らん、今の攝政殿をば、のちには圓明寺殿とぞきこゆめりし、一條殿の御家のはじめなり、

〔公卿補任後深草〕建長四年壬子

攝政從一位藤兼平廿五、十月三日詔爲攝政、○天皇時歲十

〔五代帝王物語後深草〕次の年寬元五正月十九日に又攝政を改て、岡屋殿○藤原兼經なりかへり給て、建長四年までおはしましゝが、十月三日攝政を辭て、弟の左大臣兼平公、鷹司殿、に讓て、○下略

〔讀史餘論四〕初め道家の長子敎實九條殿を相續し、二子良實二條殿といひ、三子實經一條殿といひ、今又近衞分れて鷹司となる、これより五攝家と稱す、執柄家の權をわかたんため、時賴かくはからひし所なるべし、

〔公武大體略記〕一執柄家近衞殿　鷹司殿　九條殿　二條殿　一條殿　○中略

以上五ヶ所の家門を執柄家と稱す、仍鷹司家を近衞家に接稱して、攝家の御次第を近九二一

と、世俗の名目に申習せり、

○按ズルニ、五攝家ノ事ハ、姓名部家格篇攝家條ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔續史愚抄後小松〕永德二年四月十一日庚寅、於土御門里內受禪、(春秋六)以太政大臣(良基)可爲攝政被載讓位宣命者、

〔公卿補任稱光〕應永卅五年(戊申○正長元年)

關白從一位藤持基(七月廿八日攝政、詔、今日新帝踐祚、○後花園、時歲十一、)

〔公卿補任後花園〕永享四年(壬子)

攝政從一位藤兼良(三十一、八月十三日詔、○天皇時歲十四)

〔續史愚抄明正〕寬永六年十一月八日己丑、於土御門里受禪、(御年七○中略)以左大臣(兼遐關白)爲攝政、(氏長者內覽等如元)宣下云、

〔公卿補任明正〕寬永十二年(乙亥)

攝政正二位藤康道(二十九、十月十日詔、(天皇時歲十三)同日氏長者、內覽、牛車、兵仗等宣下、)

〔續史愚抄中御門〕寶永六年六月廿一日庚申、於假皇居(關白家熙今出川第也)受禪、(御年九○中略)以前左大臣(家熙關白)改爲攝政、

〔公卿補任桃園〕寶曆十二年(壬午)

攝政從一位藤內前(三十五、七月廿七日爲攝政、日踐祚、○後櫻町、時歲二十三、)

〔公卿補任後桃園〕安永八年(己亥)

攝政從一位藤尙實(六十三、十一月廿五日詔、踐祚時日、○光格、時歲九、)

〔公卿補任今上〕慶應三年

攝政從一位藤齊敬(五十二、氏長者正月九日詔、(天皇時歲十六、中略)十二月九日、辭攝政、內覽、氏長者、隨身兵仗等、)

天皇元服以後爲攝政

〔日本紀略一條九〕正暦元年五月廿六日、詔以關白內大臣〇藤原道隆改關白攝行政事、〇天皇時此年正月元服、歲十一、如昭宣公、貞信公故事、

〔續史愚抄後光明〕正保四年正月五日丁未、左大臣道房有攝政、氏長者、內覽、牛車兵仗等宣下、〇天皇時歲十五上卿清閑寺中納言共綱、奉行藏人頭右大辨資行朝臣、 三月廿八日己巳、此日前攝政昭良、前左大臣、有攝政、氏長者、內覽、牛車兵仗等宣下、上卿德大寺大納言公信、奉行藏人左少辨俊廣、

〔續史愚抄靈元〕寬文三年正月廿六日乙未、於土御門里內受禪、御年十〇去年十二月加元服、中略、以前左大臣光平關白爲攝政、 四年九月廿七日乙卯、左大臣房輔有攝政、氏長者、內覽、牛車兵仗一座等宣下、上卿園大納言基福奉行藏人頭左中辨貞光朝臣、

〔續史愚抄東山〕貞享四年三月廿一日己亥、於土御門殿受禪、御年十三〇此年正月加元服、中略、以前右大臣冬經關白改爲攝政、內覽、牛車兵仗等如元、

〔公卿補任中御門〕正德二年壬辰

攝政從一位藤輔實四十四、八月廿八日詔、同日拜賀、〇天皇時歲十二、正德元年正月加元服、

屢爲攝政

〔續史愚抄桃園〕延享四年五月二日辛卯、於土御門里內受禪、御年七〇此年三月加元服、中略、左大臣道香改關白爲攝政、

〔續世繼五みかさの松〕ちかくおはしまし、法性寺のおとゞ〇藤原忠通は、〇中略同四年〇保安正月に、さぬきのみかど〇崇德くらゐにつかせ給しかば攝政と申き、御門おとなにならせ給て關白と申し程に、近衛のみかど位につかせ給しかば、又攝政にならせ給ひき、

〔源平盛衰記三十五〕木曾頸被渡事

二十二日〇元暦元年正月ニ、新攝政〇藤原師家ヲ奉止テ、元ノ攝政〇藤原基通ニ成返リ給ヘリ、攝籙ノ詔書ヲ被下テ僅ニ六十日、ソモ春日大明神ノ御計ナレバ、可然事ト云ナガラ、見果ヌ夢トゾ思召ケル、去共

入ノ申ケルハ、昔一條院御宇ニ、右大臣道兼ト申シハ、太政大臣兼家公ノ次男也、號東三條殿也、正曆六年四月廿七日ニ、關白ノ詔書ヲ下給ラセ給テ、御拜賀ノ後只七日、前後十二日ゾ御座ケル、是ヲ粟田關白ト申キ、懸ル樣シモ有シゾカシ、是ハ六十日ガ間ニ、除目モ二箇度行給シカバ、思出マシマサヌニハ非ズ、一日トテモ攝籙ヲ黷シ給コソ目出ケレ、

〔葉黃記〕寬元五年(○寶治元年)正月十九日癸酉、頭辨爲院(○後嵯峨)御使參殿下、今日事粗被觸事云々、近衞前關白(○兼經)蒙攝政詔給、(○後深草、時歲五、)二位中納言(良教)大內記在宗、中務大輔爲繼、大外記師兼、大夫史淳方等參陣、頭辨顯朝宣下、官方事即奉之、官外記成宣旨參近衞殿、家司右佐奉行云々、新執柄御年卅八、今日御衰日歟、乃聊有豫議之由、或人稱之、然而猶不被憚之歟、上皇御治世六ケ年、執柄改補于今四ケ度、希代也、一條殿(○實經)門々被閉之、北小門許開之、庶幾弘景之牛、北叟之馬也、

○按ズルニ、兼經先キニ嘉禎三年三月攝政ト爲リ、仁治三年正月關白ニ轉ジ、同年三月關白ヲ罷ム、此年又攝政トナリシナリ、

〔百練抄(十六後深草)〕寶治元年正月十九日癸酉、前關白(○藤原兼經)蒙攝政詔、即被仰氏長者幷兵仗事等、關東計申之云々、

〔公卿補任(後小松)〕嘉慶二年(戊辰)

攝政從一位藤良基(六十九、四月八日還補、四ケ度、被始之、六月日薨、)

○按ズルニ、良基先キニ貞和二年二月關白ト爲リ、延文三年十二月罷メ、貞治二年六月又關白ト爲リ、同六年八月罷メ、永德二年四月攝政ト爲リ、至德四年(嘉慶元年)辭シ、此年又攝政トナリシナリ、

〔公卿補任(後花園)〕永享四年(壬子)

攝政從一位藤持基(四十八、八月十三日辭、十月廿七日還詔、○天皇時歲十四)

攝政不帶大臣

〔公卿補任花山〕寛和二年丙戌

右大臣正二位藤原兼家六月廿四日爲攝政、七月廿日辭右大臣、

○按ズルニ、攝政ハ藤原良房ノ太政大臣ヲ帶シ、藤原基經ノ右大臣ヲ帶シ、藤原忠平ノ左大臣ヲ帶シタルガ如ク、皆正官ヲ帶シタルニ、兼家ニ至リ、右大臣ヲ辭シ、攝政ヲ以テ事ヲ行ヘリ、以後此例ニ倣フモノアリ、

〔日本紀略一條九〕永祚元年十二月廿日丁卯、以攝政藤原兼家任太政大臣、

〔日本紀略一條九〕正曆二年七月廿三日庚申、攝政內大臣○藤原道隆上表、請罷大臣職、勅答許之、但攝政如元、

〔公卿補任堀河〕寛治三年己巳

攝政太政大臣從一位藤原師實四十八、四月日辭表太政大臣、

讓攝政

〔日本紀略後一條十三〕寛仁元年三月十六日乙卯、攝政○藤原道長敍從一位、是日也、讓攝政於內大臣、○道長子賴通有宣命、○天皇時十歲

〔榮花物語十五疑〕殿の御まへ、○藤原道長中略、みかど○後一條わかうおはしますときは攝政と申、おとなびさせ給おりは關白と申ておはしますに、このころ攝政をも御一男、たゞいまの內大臣○藤原賴通に讓きこえさせ給て、我御身は太政大臣の位にておはしますをも、つねにおほやけにかへし奉らせ給へど、○下略

〔公卿補任四條〕嘉禎三年丁酉

攝政從一位藤原道家四十五、三月十日上表、讓左大臣、勅答許、隨身兵仗如元、

左大臣從一位同兼經廿八、三月十日、攝政詔、○天皇時歲七

〔五代帝王物語四條〕文曆二年嘉禎元三月廿八日に、攝政○藤原敎實廿六にて俄にうせ給ふ、言ばかりな

辭攝政

き事なりしを、やがて大殿〈○藤原道家〉又成かへり給ぬ、〈○中略〉嘉禎三年三月に、今の殿の聟の左大臣〈兼經、岡屋殿、〉に攝政讓て、同四年四月廿五日に年四十六にて出家し給、

〔官職難儀〕攝政とは、いかゞしたる時申候や、攝政を辭申さるゝをば、攝政復辟の奏と申也、復はかへす、辟は君也、政を君に返すと申心也、

〔尙書註疏十五〕洛誥第十五　周書

周公拜手稽首曰、朕復子明辟、〈傳、周公盡禮致敬言、我復還明君之政於子、子成王年二十、成人故必歸政而退老、辟必亦反〉王如弗敢及天基命定命、〈傳、如往也、言王往日幼少、不敢及知天始命周家、安定天下之命、故已攝、〉予乃胤保、大相東土、其基作民明辟、〈傳、我乃繼文武安天下之道、大相洛邑、其始爲民明君之治、〉

〔柱史抄臣下〕攝關表事

兼日堪能文之儒奉之草進、其間作者內々告大內記許者例也、勅答有無隨時儀、無勅答之時、職事召大內記、〈令參六位藏人先例也〉書參藏人所、通案內、職事於弓場殿授內記云、令書留案文、正文可返上者、內記於藏人所書寫之、於紙者用紙屋紙若白紙、書寫了、於正文者返上職事、於案文者懷中退出、〈六位藏人書之、送大內記許之、〉件正文留裏紙、正文上卷一枚入本函、遣執政第云々、有勅答之時、職事前日送書狀云、明日可有攝政御上表也、所請不許、勅答任先例可被用意者、其後內々行向表作者許、見表草、兼又令見勅答草、蓋故實也、當日參陣、上卿著仗座、〈件上卿、大中納言之間、屬文之人多以勤之、〉內記參軾、上卿下給御表、仰云、攝政辭表不許勅答、可作進者、內記稱唯持參草、內覽奏下如恒、次淸書、〈用黃紙也、無御畫日、〉覆奏之時留御所、上卿口陣座、內記退出、

〔夕拜備急至要抄下〕一攝政復辟勅答

上卿〈大中納言〉　中使〈近衞次將〉　辨〈大辨中辨〉　大內記〈勅答幷詔書料〉　中務輔　官外記

表下上卿之時仰詞〈許所請天可爲關白之由、令作勅答、兼又可關白萬機之由、令作詔書、詔書奏聞之後、可有御畫、可被入年號下日、假令十四日也、〉　勅答〈如元納表筥、以〉

本高檀紙二枚裹之、不結中、召中使給之、持向本所、詔書入内記筥返給上卿、上卿歸陣下中務輔云々、

准攝政宣下仰詞除目官奏雜事等、令關白准攝政儀令行、上卿召大辨仰之、

大治雅兼卿仰云、聽所請可爲關白之由、可令作勅答、中使參殿下後、又出仗頭仰云、從一位藤原朝臣可關白萬機之由、令作詔書、准攝政事、除目官奏等雜事令關白准攝政儀行之、是寬治仰詞云々、

又寬仁准攝政儀令關白者、承安長方卿可頭仰云、許所請天可關白萬機之由、令作勅答、又改攝政爲關白之由、令作詔書、准攝政事仰云、除目官奏雜事、令關白准攝政儀行之、建久宗頼卿仰云、令作勅答并改攝政爲關白詔、貞應二十二十四祖父奉行、

關白參內、主上出御晝御座、有御前召、次入御、關白退下直廬云々、

〔夕拜備急至要抄下〕一攝關三讓表勅答隨本所命奉行之、

上卿　大内記勅答料　中使近衞次將頭中將有例、建久八通宗朝臣、　官外記

關白初度表家司四人舁案、中務省持參件案、令立年中行事下、職事取表筥持參御所、被下表、引懸紙裹紙等、下上卿、

攝政初度表中務省付內侍所、無勅答、被返下表、先例也、勅使納言勸之、可相催其仁、　第二第三度　上卿以下同前關白之時被付上、大臣者依請之由宣下、

關白者不許所請之由、令作勅答、

〔武家嚴制錄一〕禁中幷公家衆諸法度○中略

一器用之御仁體雖被及老年、三公攝關不可有辭表、但雖有辭表可有再任事、○中略

右可被相守此旨者也

慶長廿乙卯年七月日

昭實公在判二條關白殿

秀忠公御判

家康公御判

後江相公

〔本朝文粹表上四〕爲貞信公辭攝政第一表

臣忠平言、伏奉去月廿二日先帝○醍醐讓位詔命、陛下○朱雀未親萬機之間、臣某保輔聖躬、攝行政事者、寵溢身涯、聽出意外、反覆思之、知其非任、臣某中謝臣初蒙綸言、卽錄辭表、未能悃懷之入參漏、忽逢晏駕

之赴九泉、鼎湖悲深、山陵事急、跼蹐流汗、自過浹辰、臣孕非空桑、器是鑄木、猥以萎腇之身、謬承崇重之寄、譬猶拂跛鼈之首、戴以蓬萊之山、褰焦僥之裳、涉其渤澥之海、弱質難擧毫毛、何勝雲巖之萬仞、短脛不滿尺寸、還迷花浪之千里、臣已自知、況於物議、謹撿史册、少帝繼體、太后臨朝、訪舊風於漢家、和熹之蹤不墜、尋故實於晉室、崇德之制已明、伏願陛下停此攝籙、依彼前修、早思宗社安全之謀、莫遺微臣充滿之悔、不任憂國之至情、謹奉表陳讓以聞、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

延長八年十月十三日　　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

〔本朝文粹二勅答〕答貞信公辭攝政表勅　　後江相公

勅、省重表、具沖挹之懷、公風神深凝、德宇高聳、近取諸身、則四目之左眼、遠喩於國、則萬里之長城、故先皇寄以朕躬、付以朝政、既親亦賢、物無異望、況公之於朕也、名爲君臣、志如父子、何嫌何疑、以謙以拒、方今酷罰之身、少未有識、雖聞三讓之高古、猶恨百揆之擁今、上思先帝把臂之託、下知少子抱頸之情、凡厥攝行、一如前詔、縱瀝方赤於公口、何下雌黃於朕脣、悉之耳、

延長八年十月二十日

〔一代要記朱雀〕攝政

左大臣藤原忠平（中略）天慶四年十月卅日辭攝政、（朱雀時歲十九、愚管抄係二十日、）十一月廿八日爲關白、（日本紀略、愚管抄同、公卿補任、扶桑略記、帝王編年記、本朝世紀、並係八日、）

○按ズルニ、忠平ハ朱雀天皇承平七年正月御元服以後此ニ至ル五年間ハ攝政シタリ、此餘ノ人ハ多クハ御元服ノ年、又ハ翌年辭スルヲ以テ例トセリ、

〔日本紀略一條九〕正曆元年五月四日、太政大臣〇藤原賴忠上表、辭攝政、〇天皇時歲十一、此年正月加元服、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁三年十二月廿二日甲辰、攝政內大臣〇藤原賴通上表、辭攝政、〇天皇時歲十二、去年加元服、即詔停攝政、令關白萬機、

〔殿曆〕永久元年十二月廿六日癸酉、今日辭攝政、〇藤原忠實、鳥羽天皇、時歲十一、此年正月加元服、上表也、〇中略抑今日可蒙淮

攝政宣旨也、而有恐上、京極殿(〇藤原師實)北政所御心地極重御、若不量事出來時爲世間極大事也、又正曆度大入道殿有御事、其時攝政道隆、(號中關白也)其例又此家に不用、仍不蒙件宣旨也、

〔本朝世紀〕久安六年十二月八日庚戌、今日攝政前太政大臣(〇藤原忠通、近衞天皇、時歲十二、此年正月加元服)、有上表事、所謂復辟表是也、勅答幷關白詔書事等、今日可被行也、仍權大納言藤宗輔卿參仗座、被召備大内記、藏人頭右大辨藤朝隆朝臣取件表、持參法皇御所、(當時一院御鳥羽殿)奏聞之間、事々寂莫、然間朝隆朝臣宿病更發、留宿鳥羽邊、及深更上卿空以退出、世以爲奇、

攝政復辟表

臣某言、獻表章以不遑、頻勞慮招(〇慮招二字恐誤)之濡筆、貪祿位以無用、何異衞鶴之乘軒、任之非據、欲避尙矣、臣某(中謝)夫官由能理、故明王建官則先光簡、化以職成、故忠士裨化則不濫職、而臣既隔岳降之純精、久居冢宰之重秩、禪定仙院御宇(〇鳥羽)之際、啣紫泥之詔命、而受曳鈞之權、太上天皇(〇崇德)登極之初、訪黃門之畫圖、而傳負扆之跡、矧乎逮陛下(〇近衞)之早纂洪業、令微臣以又總衆務、寄托惟重、雖准外祖之儀、智略已疎、空乖下民之望、謬攝帝籙於二代、猥弄國柄於萬機、盈滿恐誡、右坐之器易傾、驚逐失方、南指之車難轉、啓々祗畏、不知所裁、方今聖體長以正容姿、飾禮冠於文竹、群僚率以致拜賀、祝遐算於大椿、成人之義存焉、復辟之期至矣、是以依思恒規、請遁殊賞、謝夕見而將退愚身、猶有過姬旦七廻之年序、布朝政而可決叡慮、誰無仰堯日再中之明輝、抑良弼何所嫌、零賤之士、假方須亦求幽隱之人、鄭大尉之未仕也、嵐晴若耶谿之樵路、陳丞相之在宅也、月殘戸牖鄉之席門、擧而用之、庶績咸熙、伏願宸嚴曲垂乾鑒、憐苦誠於披丹、停妄授於秉右、臣縱擺榮名、豈守說口之忠、臣縱辭寵遇、盍竭詣闕之忠、不堪悚惕屏營之情、謹奉表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

久安六年十二月八日　攝政從一位藤原朝臣上表

作者文章博士茂明朝臣

清書散位定信朝臣

中使右近少將行通朝臣

〔玉海〕承安二年十二月廿二日丙辰、抑今日可有復辟（○攝政藤原基房、高倉天皇時歳十二、此年正月加元服、）也、而俄延引來廿七日云々、其子細問兼光、申云、去夜俄明年自敍位儀可有御前議云々、因之今夜有復辟者、官奏之條頗以有煩、依不可有准攝政儀也、是天永例云々、此事太以不被甘心事也、寛仁寛治復辟表、各兩度相加三上表五度也、則被收之、其後有准攝政之儀、隔一年復辟之後第三年自除目有御前議、天永知足院殿（○藤原忠實）無准攝政儀、是白川院御今案也、彼例已最吉、仍大治久安如此、次年有御前儀、今度自讓位之始、偏被逐寛治嘉例、而至此事被弃寛治、被用天永如何、就中於天永例者、大治久安被逐用、卽不吉、仍御元服之時、此沙汰出來、隨又八歳踐祚、十一歳御元服次第、已相叶寛治例、忽弃置吉例之條、太無由事也、如此事如時忠之所行也、君不知食子細、人又不令申、實衰世也、又天永後復辟表只一度也、寛仁度也、今度尤可被逐寛治例、但永祚又一度也、何事有哉、　廿八日壬戌、昨日攝政復辟云々、秉燭之後、作者永範卿參上、清書伊經（○伊行息）書損之間殆遲々、亥剋有上表之儀、（使左少將顯行朝臣）勅答、（使右少將泰通朝臣、作者兼光、大内記病、仍儒者辨作之也、）其後拜賀先院、次内、有宿侍者、先是勅答之後、先於家有吉書等、官方重方藏人方親宗、政所兼光云々、前驅十二人、（永久例、寛治廿人、仍初其定被催、而被改天永儀之故、減其數了、）扈從公卿、中御門中納言宗家、源中納言雅賴、花山中納言兼雅、三位中將兼房云々、此外民部卿親範、大貳重家等、雖候上表座、不扈從云々、詔書又兼光作之、今夜俄其儀變、尚可依寛治之例之由議出來、卒爾有准攝政之儀云々、上卿中御門中納言被問官外記、（官官奏事、外記敍位除目事、）是則十二歳復辟、十三歳被覽吉書、近來院之外、更以無其例、件例頗以不快、仍忽又被歸寛治云々、自本中間異儀、甚異樣事也、近代朝務如反掌、朝成暮敗實此謂、

〔玉葉〕文曆二年（○嘉禎元年）七月六日丁卯、今日攝政（○藤原敎實）初度上表也、故入道殿文治二年三月、爲攝政、同年七月、有初度御上表、仍追彼例、又諒闇中三讓表、貞信公延長八年九月廿二日攝政、（傳國宣命）

同十月、被獻三讓表、此外中關白(藤原道隆)正曆御堂(藤原道長)長和又上表、但是非三讓、知足院殿(○藤原忠實)天仁元年、諒闇以後有御上表、先例也不同、而今度氏院參賀、任延長(貞信公藤原忠平)長和(○藤原道長)康和(知足院殿重服)之例、雖諒闇中猶行之、上表又有延長例之上、不可有難歟、取彼弃是者、頗可似斑駮之故也、

〔花園院御記〕延慶四年(○應長元年)三月十五日丁亥、今夜攝政(○藤原冬平)上復辟表、(○花園時年十五、此年正月加元服、)卽爲關白、丑刻出清涼殿、藤朝持參詔書加畫日返給之、

〔薩戒記〕永享五年三月廿一日乙亥、四條宰相(隆夏)送使者云、廿三日攝政(○藤原持基)復辟(○後花園、時年十五、此年正月加元服、)可著座之由被相示、雖非家禮可罷向哉、如何可計示者、予(○藤原定親)不思得、仍答難計申由了、廿二日丙子、藏人中務丞源重仲送書狀云、攝政復辟事、奉行職事長淳御教書如此、請文幷下知之趣可計給者、長淳狀云、

明日攝政可有復辟、任例可令下知給候、御教書追可獻、先且令申也、謹言、

三月廿二日　長淳

藏人中務丞殿

爲後證所寫留候也、但此狀之趣頗不甘心歟、　廿三日丁丑、今夜攝政復辟云々、

〔續史愚抄(靈元)〕寛文八年三月十六日乙卯、天皇(御年十五、○寛文二年十二月加元服、)依非幼主、攝政(房輔)復辟、(今度以省略、無上表儀云、)卽改攝政爲關白、又有內覽牛車兵仗等如元宣下、上卿今出川大納言(公規)奉行藏人頭左中辨光雄朝臣、

〔續史愚抄(東山)〕元祿二年三月廿七日甲子、主上(御年十五、○貞享四年正月加元服、)依非幼主、攝政冬經復辟上表、(菅中納言長量草、或作前菅大納言恒長、清書持明院前宰相基時、)使左少將基茂朝臣、勅答上卿万里小路大納言(淳房)中使左中將隆安朝臣、奉行藏人頭右大辨賴重朝臣、前右大臣(冬經)改攝政爲關白、

〔季連宿禰記〕元祿二年三月十九日丙辰、來廿七日辰一點、攝政(○藤原冬經)復辟宣下、　廿六日癸亥、復辟

准攝政

宣下者、永享五年以來斷絕歟、今度爲御再興、公私之大慶、季連殊無一事違亂、令遂申沙汰、祝著難書盡者也、

〔續史愚抄中御門〕正德六年〇享保元年十一月一日丁巳、主上御年十六、(寶永八年正月加元服、)清和天皇以降爲御年十五例、朱雀院御年十九有故歟、今度無故違例、依非幼主攝政輔實復辟上表、表草式部權大輔長義、清書左中將基雄朝臣、使右中將公尹朝臣者、藏人頭右大辨治房朝臣執奏之、卽有前左大臣輔實攝政改攝政爲關白之勅答、大內記爲穐朝臣草、上卿醍醐大納言昭尹中使右中將公福朝臣、奉行治房朝臣、

〔續史愚抄後桃園〕明和九年〇安永元年八月廿二日乙酉、主上御年十五〇明和五年八月加元服依非幼主、攝政太政大臣內前復辟上表、表大內記益良朝臣草、清書權大納言兼胤公卿權大納言兼胤已下五人、參議左大辨紀光爲人數、裹表函參會于攝政內第、表使左中將實德朝臣、奉行殿上家司少納言時章朝臣此日有勅答儀、改攝政爲關白勅答、亦益良朝臣草、上表同人古來太希、草、上卿大炊御門大納言、家孝中使左中將公聽朝臣、奉行藏人頭左中辨光祖朝臣、次關白太政大臣內前、冠直衣、參內、殿上人右中將宗董朝臣已下三人扈從

寬和二兼家公第三度表時、兵部權大輔高階成忠眞人、正應元六廿六師忠公第三度表時、右少辨兼仲、已上同人草上表勅答等、

〔百練抄四三條〕長和四年十月廿七日、左大臣〇藤原道長准攝政可行敍位除目事之由宣下、依御藥也、仍今日除目、於直廬行之、諸卿參彼所、

〔小右記〕長和四年十月廿七日甲辰、今朝官奏除目雜事、准攝政儀、宜令左大臣行之由、被下宣旨、〇中略正二位行權大納言兼太皇太后宮大夫藤原朝臣公任宣、奉勅除目等雜事、宜令左大臣准攝政儀行之者、長和四年十月廿七日、大外記小野朝臣文義奉、　十二月十日丙戌、今日左大臣著左仗、令申大粮文云々、准攝政、亦行一上儀、是宣旨趣耳、〇又見日本紀略、

〇按ズルニ、三條天皇御成人ノ後卽位アリシカバ攝政ナク、又關白ヲ置カズ、此年ニ至リ疾病

ヲ以テ道長ヲシテ攝政ノ事ヲ行ハシム、翌年正月皇太子〇後一條ニ御讓位アリ、

〔日本紀略 後一條十三〕寛仁三年十二月廿八日庚戌、令關白内大臣〇藤原賴通以攝政儀行官奏除目、

〔公卿補任 堀河〕寛治四年庚午

關白 攝政從一位藤師實 四十九、十二月十日上表辭、即改攝政爲關白、但官中雜事、敍位除目時、可准攝政儀、

〔中右記〕大治四年七月一日丁丑、今日攝政殿〇藤原忠通御上表、〇中略頭辨來膝突云、官奏除目等雜事、准攝政儀、宜令關白行之者、予〇藤原宗忠奉仰、先於官奏、可令下知給由、仰下頭辨也、是依爲大辨也、左大辨爲隆有所勞、不出仕也、頭辨出床子座下知右大史中原重兼、令書宣旨、是大夫史政重、依重服依不出仕也、又召寄外記景兼於膝突、仰件旨了、是大外記師遠、此兩三年、依重病不出仕間也、仍召六位大外記、所下知也、頭辨云、尋大内記大夫史之處、内々示送云、大外記ハ、此宣旨不持參殿下、只留本局也、大夫史ハ持參、所付殿下家司也、官外記申所不同也、如此予答云、只各隨年來例、可左右也、强是非不可沙汰歟、

宣旨書樣

正二位行權大納言藤原朝臣宗忠宣、奉勅、除目等雜事、准攝政儀、宜令關白行之者、

大治四年七月一日　大外記大江景兼奉

右大辨源朝臣雅兼傳宣、權大納言藤原朝臣宗忠宣、奉勅、官奏等雜事、准攝政儀、宜令關白行之者、

大治四年七月一日　右大夫中原重宣奉

〔公卿補任 高倉〕承安二年壬辰

關白 攝政從一位藤基房 廿九、十二月廿七日上表、辭攝政、即詔爲關白、廿八日又宣旨云、除目官奏等、准攝政儀行之、

〔玉海〕承安二年閏十二月二日丙寅、大外記賴業持來先日所下勘之神宮怪異解狀、〇中略此次賴業語云、去廿七日復辟〇基房夜、被宣下准攝政由、上卿中御門中納言被仰云、敍位除目雜事、令關白准攝政儀行云々、〇下略

待遇

〔百練抄後深草十七〕建長六年十二月二日庚午、攝政〇藤原兼平復辟表事、權大納言良教卿參入、被行勅答幷改攝政爲關白詔書事、次被行准攝政事、

〔季連宿禰記〕元祿二年三月十九日丙辰、來廿七日辰一點、攝政〇藤原冬經復辟宣下、廿六日癸亥、今度准攝政之儀無之、是主上御十五歲之故也、御十五未滿之時者、准攝政之宣旨有之云々、

〔公卿補任仁孝〕弘化三年

關白從一位藤政通五十八、氏長者、正月廿六日、蒙准攝政儀、二月十三日、止准攝政、更詔爲關白、〇據作日事明

〔柱史抄下臣下〕隨身兵仗事

攝政關白有勅書、賜左右近衞府生各一人、近衞各四人、但幼主之初爲攝政日、賜內舍人二人、左右近衞府生以下六人也、內覽之人賜例、御堂〇藤原道長并宇治左府〇藤原賴通也、

〔三代實錄清和十九〕貞觀十三年四月十日丙戌、勅、功多者賞厚、先王之通規、德茂者位尊、往哲之彛訓、〇中略朕外祖父太政大臣藤原朝臣、〇良房風槩沈遠、器度淹凝、〇中略夫太政大臣、法當食邑三千戶、及隨身兵仗、國有成式、又准三宮給年官、先帝之恩寵也、至于封邑、固讓二千、唯享千戶、隨身等事、皆辭不受、朕以祿法所當、古賢不辭、既能有其功、居其位、何不食其祿、增其威、然則所辭封邑等事、乖元老崇班之義、非國家褒飾之心、故今不敢踰法、唯盡其所當、宜其封戶全食三千、以內舍人二人、左右近衞左右兵衞各六人、爲其隨身之兵、又給帶仗資人三十人、年官准三宮事、亦當奉遵先帝之遺詔、〇又見都氏文集

〔大日本史藤原良房百三十一〕按公卿補任、大鏡裏書、以爲淸和帝卽位、良房攝政、准三宮、給年官年爵、然本書無明文、故不取、

〇按ズルニ、此勅文ニ據レバ、良房ガ三宮ニ準ゼラレ、年官ヲ賜ハリシハ、文德天皇ノ朝ノ事ニシテ、淸和天皇ノ朝ニ攝政セシ時ノ事ニアラズ、然レドモ爾後攝政タル人、概ネ准三宮タルヲ以テ、姑ク此ニ擧グ、

〔公卿補任清和〕貞觀十五年癸巳
左大臣從二位源融五十二
攝政右大臣從二藤藤基經三十八

〔小右記〕長和五年二月一日丙子、資平云、昨日給隨身內舍人二人於攝政〇藤原道長之勅書事、先申母后被仰上卿、　六月十日壬午、三更、藏人頭資平來云、今日左大將賴通、候母后簾前、召資平傳令旨云、攝政准三宮可給年官年爵并三千戶封、忠仁公例、又以左右近衛舍人各六人爲隨身事、亦攝政北方可賜年官年爵并本封外別給三百戶、惠子女王例也、惠子者、華山法皇外祖母、出陣仰中納言俊賢令云、尋前例元給隨身內舍人左右近衛等、皆載勅書、勅書草先內々以大內記義忠朝臣令覽攝政了、次以資平令奏、先覽攝政、次奏聞、只於母后御格子外申案內云々、　淸書如草儀、攝政進御所令奏慶云々、

〔日本紀略後一條〕寬仁元年三月廿二日辛酉、攝政內大臣〇藤原賴通上表、請罷左近大將、勅許之、卽日宣命、依寬和例可列左右大臣上、又聽乘牛車參入宮門、賜左右近衛府生以下爲隨身兵仗、

〔中右記〕嘉承二年十一月三日、殿下〇藤原忠實被語仰下云、宇治殿攝政之日、列給左右大臣上之時、行成大納言申云、攝政ハ不居人之下、仍元慶之初、右大臣昭宣公攝政宣旨之後、左大臣融、長不出仕云々、

攝政暫爲下﨟例見公卿補任

元慶初　左大臣融　攝政右大臣基經元慶四年任太政大臣

天祿初　左大臣在衡　攝政右大臣伊尹天祿元年六ヶ月間

正曆二ヶ度　太政大臣爲光　左大臣雅信　右大臣重信　攝政前內大臣道隆　內大臣道兼

件三ヶ度也

裏書云
正曆元年　左大臣雅信　右大臣爲光　內大臣道隆五月廿六日攝政不列上

同二年　太政大臣爲光九月七日任　大臣不列上　內大臣道兼右大將九月七日任、　左大臣雅信　右大臣重信任同日　攝政前內大臣道隆七月辭內

〔公卿補任〕〈堀河〉嘉承二年〈丁亥〉
左大臣從一位源俊房〈七十三〉
攝政關白右大臣正二位藤忠實〈卅、七月十九日、改關白爲攝政、依受禪也〉

〔葉黄記〕寛元四年十月十五日庚子、今日攝政殿〈○藤原實經〉被下内舍人隨身勅書、代々御禊御供奉之時、攝政被召具之、今月今日被宣下、天仁佳例也、内舍人無其仁之間、任近代之例、今日不被任之、前々他任人不及廣、而御禊之間、任近代之多、可被任之輩、去九日件除目延引之間、今日彼是被任之、殿下先御院參、被申定任人事、次御參内、除目之後有勅書事、大宮大納言參行、任寛治例、召大外記被召仰内舍人交名、次自御直廬有御出立、於弓場〈自御直廬殿上人秉松明〉被奏慶、經階前并宣仁左青瑣門、出西洞院西北門參院給、天仁出敷政門給歟、保安關白殿左大臣御拜賀、又如此歟、然而大臣出此門之時、必可有留御前、而無此儀、仍不令出敷政門給、且近例如此云々、度々有被仰合之旨、於院有御引出物、於一條殿覽吉書、内舍人著御隨身所、不令參東山殿給、委事予見次第、又見勾勘記、　十七日、相扶病參殿下、申承萬事、其中一座宣旨事、粗被仰子細、暫無沙汰、有何難哉之由、粗申入了、委細被勘先例、令見給之、可覽院歟云々、其儀止了、書寫之、續加之、有天變三星合也、

攝政關白與三公座次事

一攝政列三公上例

法興院殿〈○藤原兼家〉　寛和二年六月廿三日、爲攝政、〈○受禪日〉　于時太政大臣頼忠〈今日去關白〉　七月日、辭右大臣、　十月日、宣旨、依攝政可列太政大臣上、〈○中略〉

宇治殿〈○藤原頼通〉　寛仁元年三月十六日、爲攝政、〈于時内大臣〉　于時左大臣〈顯光〉右大臣〈公季〉　同廿二日宣旨云、依寛和例可列左右大臣上者、是雖兼大臣猶以攝政同上例也、

知足院殿〈○藤原忠實〉　嘉承二年七月十九日、爲攝政、〈于時右大臣正二位〉　于時左大臣〈俊房從一位〉　天永三年三月

十四日、敍從一位、同日、宣旨可列左大臣上者、

菩提院入道〇藤原基房　永萬二年七月廿七日、爲攝政、于時左大臣　仁安二年月日、辭左大臣、同月十一日、內大臣清盛任太政大臣、即敍從一位、　于時攝政、兼左大臣　同日敍從一位、被仰可列太政大臣上之由、別不被下宣旨、然而尙列上、

後法性寺殿〇藤原兼實　文治二年三月十二日、爲攝政、于時右大臣從一位　于時左大臣經宗　同月十六日、被下可列左大臣上宣旨、

後京極殿〇藤原良經　建仁二年十二月廿五日、爲攝政、于時左大臣正二位　于時太政大臣正二位賴實　同日宣旨云、可列太政大臣上、

猪隈殿〇藤原家實　建永元年三月十日、爲攝政、于時左大臣正二位　于時前太政大臣皇太弟傅賴實　五月廿八日、宣旨列皇太弟傅上、

入道攝政〇藤原道家　承久三年四月廿日、爲攝政、于時左大臣正二位　于時太政大臣從一位公房　同月廿六日、宣旨可列太政大臣上、

一攝政列三公下例

知足院殿〇藤原忠實　嘉承六年七月、爲攝政、右大臣正二位　于時左大臣從一位俊房　在上不被下一座宣旨、是依非同階也、但無座列之儀、天永三年、敍一位、日有此宣旨、

法性寺殿〇藤原忠通　保安四年正月廿八日、爲攝政、左大臣從一位　于時太政大臣從一位雅實　去年十二月、關白左大臣可列太政大臣下之由被宣下、攝政後一座宣旨事不詳、但御讓位日昇殿拜、

〔公卿補任桃園〕延享五年〇寛延元年戊辰

太政大臣從一位藤兼香五十七

攝政從一位同道香二十七、氏長者、

雜載

〔殿暦〕嘉承二年九月七日庚寅、今日御願文〇堀河七七日願文ニ余不ㇾ加ㇾ判、故ハ任ㇾ攝政ㇾ之後、未ㇾ加ㇾ名於文書ㇾ而爲ㇾ不吉事ㇾ也、人々不ㇾ可ㇾ加ㇾ判ㇾ由被ㇾ示、仍不ㇾ加也、不ㇾ修ㇾ諷誦ㇾ、是又憚ㇾ判故也、

〔朝野群載〕七攝錄家攝政家牒　興福寺

欲ㇾ被ㇾ納ㇾ置黃金十兩ㇾ出ㇾ送光明朱砂十兩ㇾ狀

牒、件光明朱砂、合ㇾ鍊紅雲ㇾ爲ㇾ令ㇾ救ㇾ療百病ㇾ也、方今傳ㇾ丹沙於仙方ㇾ者、少ㇾ於ㇾ麟角ㇾ侵ㇾ霧露於俗界ㇾ者、多ㇾ自ㇾ牛毛ㇾ是故敎ㇾ被ㇾ三代良醫之家ㇾ繼ㇾ此一朝欲ㇾ絕之藥ㇾ而已、仍牒進如ㇾ件、乞也察ㇾ之、欲ㇾ被ㇾ相替ㇾ事爲ㇾ舊風ㇾ非ㇾ取ㇾ新慮ㇾ今勒ㇾ事狀ㇾ以牒、

正暦三年七月廿八日

令大中臣朝臣

別當前紀伊守藤原朝臣

散位橘朝臣

左大史多米朝臣

關白 內覽附

關白ハ萬機ノ政ヲ總管スルモノニテ、一切ノ奏文ヲ御覽ニ供スル前ニ、先ヅ此ニ關白スルヲ云フ、光孝天皇元慶八年、勅シテ凡ソ奏スベキ事、下スベキ事、必ズ先ヅ太政大臣藤原基經ニ諮稟セシム、關白ノ事、實ニ此ニ萌芽シ、宇多天皇仁和三年、更ニ詔シテ萬機巨細皆基經ニ關白セシム、關白ノ名此ニ起レリ、朱雀天皇天慶四年、太政大臣藤原忠平攝政ヲ辭ス、特ニ詔シテ萬機巨細皆太政大臣ニ關白シ、然シテ後奏下スルコト、仁和ノ故事ノ如クセシム、爾後定メテ職名トセリ、

名稱

〔伊呂波字類抄久職官〕關白

〔下學集上官位〕關白クワンハク執柄シツヘイ又輔佐フサ名、唐名殿下デンカ、

〔運歩色葉集久〕關白博陸ハクリク、執柄シツヘイ、

〔公卿補任光孝丁未〕仁和三年

關白太政大臣從一位藤基經十一月廿一日、詔、關二白萬機一、

宇多元年丁未仁和三十一月廿一日、太政大臣基經公五十二始任レ之、○一代要記、歷代皇紀、爲二廿九日一誤、

○按ズルニ、仁和三年十一月ハ、宇多天皇即位ノ月ナリ、扶桑略記仁和四年五月九日條ニ、去年十一月廿一日下二詔書一云、萬機巨細、皆關二白於太政大臣一、然後奏下トアル即チ是ナリ、其詔書ノ全文政事要略ニミユ、是未ダ官名ニアラズト雖モ、關白ノ文字ノ據テ起ル所ナリ、

〔職原抄上〕太政官

關白者、漢宣帝立、霍光猶攝レ政、非二幼主之故一、霍光還レ政、宣帝猶重二其人一、令レ關二白萬機一、關白之號自レ此而始云々、

〔漢書霍光六十八〕後元二年春、上遊二五柞宮一病篤、○中略武帝崩、太子襲二尊號一、是爲二孝昭皇帝一、帝年八歲、政事壹決二於光一、○中略武帝病封二璽書一曰、帝崩發レ書以從レ事、遺詔○中略光爲二博陸侯一、○中略已而光奉二上皇帝璽綬一、謁二于高廟一、是爲二孝宣皇帝一、○中略光自二後元一秉二持萬機一、及二上即位一廼歸レ政、上謙讓不レ受、諸事皆先關二白光一、然後奏二御天子一、光每二朝見一、上虛レ己歛容、禮下之已甚、

〔拾芥抄中本官位唐名〕關白博陸殿下總己公官執柄博陸侯

〔高僧和讃〕源空存在セシトキニ、金色ノ光明ハナタシム、禪定博陸ハクリク○藤原兼實クワンハクナリ マノアタリ拜見セシメタマヒケリ、

〔公武大體略記〕一執柄家　關白の時は博陸殿下と申也

〔吉續記〕文永四年十二月九日、關白宣下事、頭辨奉行、表使右少將經顯朝臣、頭辨本所事了參內宣下、予參新霍光、(〇藤原基平)執事定藤著束帶候中門、公卿座已下供常灯、

〔職原抄上〕太政官

執柄(〇謂攝政關白)必蒙一座之宣旨、故稱一人、(イチノヒト)又云一所(イチノトコロ)

〔官職難儀〕關白とは　攝政關白をば大職と申也、必一座の宣下とて、第一に著給ふべきよし宣下あるのゆへに一の人と申也、同字ながらも一人と申時は、天子の御事也、よのつねの人の事をば、一人と申事、誰もしりたる事ながら、その事々に讀かへる事、ならひのうちにてある也、此類多侍る事也、

〔枕草子五〕めでたきもの　一の人の御ありき

〔枕草子春曙抄五〕攝政關白を申也

〔榮花物語三十六根合〕梅つぼ(〇後朱雀女御藤原生子)の御事、さもあらず成ぬれば、いみじうおぼしなげかせ給、女御殿も、との(〇內大臣藤原教通、生子父、)のおぼしめしたる御けしきを御覽ずるに、わりなくくるしう覺しめさる、關白殿(〇藤原賴通)をつゆ御心よせなく、なさけなくおはしますと、うらめしう思申させ給、一の人の御むすめならぬ人の、御子おはしまさぬが、ならせ給れい(〇立后例)は、まだなきこととおぼしめして、せさせ給はぬなりけり、

〔榮花物語三十九布引の瀧〕宇治殿(〇藤原賴通)おもくなやみわたらせ給へば、いつとなき御事にてすぎつるを、つゐに二月(〇承保元年)二日にうせさせ給ぬ、(〇中略)八十餘年世の一の人にておはしましつる、御かげにかくれつる人々、いくそかは、たかきもみじかきも、釋迦佛のかくれ給へるおりのありさまにおとらず、なみだをながしたり、

〔職原抄下〕藏人所

別當　世俗稱二一人一者執柄也、一人一所稱レ之、於二禁中一者殿稱レ之、衆人殿下稱レ之、

〔枕草子八〕くるしげなる物

一の所に時めく人も、えやすくはあらねど、それはよかめり

〔枕草子春曙抄八〕攝關を申す也、執柄とも云也、

〔續古事談二臣節〕昔ハ一ノ所ノヒルノヲロシヲバ、女房寢殿ノ妻戸クチニテ手ヲタヽケバ、六位ノ職事マイリテ、トリイデヽ藏人所ノ大盤ニヲキテ、ワケクヒケリ、

〔新抄〕文永二年閏四月十八日丙戌、關白宣下、左大臣(一條實經)爲二關白一皇后宮大夫師繼卿以下參二入之一前殿(○二條良實)無二上表儀一被レ定レ可レ爲二大殿一之由云云、

〔五代帝王物語龜山〕文永二年閏四月十八日に、左府(○藤原實經)關白に成給、前殿(二條殿○前關白藤原良實)は、大殿とて猶出仕し給ふ、御兄弟の御間は、父子の禮にてもおはしまさず、殊に中あしくおはしましつるに、猶か樣に大殿とておはしませば、是も珍らしき事也、

〔官職難儀〕關白とは　攝政關白をば大職と申也、○中略大閤とは、御息に關白をもち申されたる時申也、御出家あれば禪閤と申也、これも禪大閤と申べきを中略して申にや、

〔有職問答二〕一大閤號事

是は關白を息に持れたる御方ヲ稱シ候、(此事本儀ニ候)但後成恩寺殿(兼良公也、一條殿)は、息に關白ましまさゞりし時よ(後福光園攝政、イマダ關白ノ父タラザル時、太閤ト稱申候キ、是世ノユルス所也、但不甘心之由、成恩寺關白記ニシチカレ候、後成恩寺ハ、關白ノ父トシテ、大閤ト稱シ申候キ、)り、大閤と申候、其は先例子細有とて稱申也、大才博覽の御方にて御座候故に、世に難じ申候はぬよし被二仰出一候キ、是分に而候哉、

〔臥雲日件錄〕寬正七年(○文正元年)七月十二日、外記常忠居士來、予就二本朝故事一問二不審一○中略今一條殿稱二太閤一此號如何、曰父已爲二關白一其子又必關白、父尚存則稱二太閤一云々、

〔官位訓〕太閤の事

世に太閤といふは、豐臣秀吉公ひとりにかぎりたる事とおぼえたる者おほし、かならずひとりの事にあらず、攝家の御方々、關白を他へ御讓りなされしを、前關白と申奉り、御子に讓り給ひしを太閤と稱し奉る也、たとへ一旦他へ御讓りなされて其後にても、前關白の御子、關白に成給ふ時は、御父を太閤と稱し奉る事勿論なり、豐臣の秀吉公も、秀次殿に關白を讓給ひしゆへ、其世に太閤と申せしを聞つたへて、太閤といへば秀吉と心得るは、大き成僻事也、扨太閤の御飾をおろし給ふを禪閤と稱し奉る事勿論也、

〔槐記〕享保十四年五月朔日、仰ニ近代大閤ト申スコトヲ、關白ノ父ハ必ズ左申スヤウニナリタルハ、キミワルキコトナリ、上古ハ太政大臣ノ入道ヲコソ大閤トハ申シツレ、太政大臣ヲ閤下ト云、近代ハ關白ノ父ヲサシテ、凡テ大閤ト云、閤モ漢ニテハ閤下ト云ナリ、

〔左經記〕長元四年七月十七日壬戌、參結政有政、○中略關白大閤於殿上待、數刻言談之間、曆博士道平參入之由、頭辨申大閤、仰云、奏事由、　九月十三日戊午、右府御消息云、前年殿上所宛土代可書儲之由、有相示歟、○中略但令覽關白大閤可儲候者、則令覽了、

〔公卿補任後一條〕長元四年辛未

關白左大臣從一位藤賴通四十

〔公卿補任後光嚴〕貞治二年癸卯

關白從一位藤良基四十四、六月廿七日詔爲關白、元前關白、辭大

〔公卿補任後花園〕寛正四年癸未

前左大臣從一位藤敎房前關白、四月止之、此公不蒙一座宣旨之間、大外記師藤朝臣經奏聞之處、可爲實量公下之由、依勅定奉押御補任云々、然而後日任父大閤(前關白藤原兼平)執奏、以前關白爲上畢、

阿衡

〔外様言渡之記 二〕安政三年十二月九日　鷹司准后〇政通、內大臣輔熙父、
可レ稱二太閤一被二仰出一候事、萬里小路中納言被二申渡一候、最番々且未勤之親族中江　廣可二申傳一由ニ候事、

十二月九日　惟和

右之趣西大路三位江　達畢

〇按ズルニ、政通是年八月八日關白ヲ辭シ、准三宮トナリタルナリ、

〔鷹司家傳〕政通

安政三年十二月九日、太閤稱號宣下、仰詞、

多年在レ職、已被レ任二太政大臣一、內外被レ竭二忠精一、雖レ辭レ職猶又宮中雜事、如レ舊被二仰下一、且舊例之間、被レ賞二勤勞一、以二格別思召一可レ稱二太閤一被二仰出一候事、

〔扶桑略記 二十二 字多〕仁和三年十一月廿六日乙未、關白太政大臣藤原基經上表云々、勅答云、社稷之臣非二朕之臣一、宜下以二阿衡之任一爲中汝之任上、左大辨橘廣相作　時人難レ之、

〇按ズルニ、次ニ引ク政事要略ニ據ルニ、十一月二十六日乙未ハ、閏十一月二十六日乙丑ノ誤ナラン、

〔政事要略 三 十〕阿衡事

賜二攝政太政大臣關白萬機一詔

詔、朕以二涼德一、奉二茲乾符一、臨二鳳扆一而如レ履二薄氷一、撫二龍軒一而若レ涉二淵水一、自レ非二太政大臣之保護扶持一、何得レ恢二寶命於黃圖一、正中璇璣於紫極上哉、嗚呼三代攝政、一レ心輸レ忠、先帝聖明、仰二其攝籙一、朕之冲眇重以拱默、其萬機巨細、百官總レ己、皆關二白於太政大臣一、然後奏下、一如二舊事一、主者施行、

仁和三年十一月廿一日

左大辨橘朝臣〇廣相作之、事皆載二宣命一、而此廻有二別勘一、載之詔書、

太政大臣辭攝政第一表 紀〇長谷雄

臣基經言、伏奉去月廿一日詔書、萬機巨細關白於臣者、臣再三揣己、遂知不堪、臣基經誠恐誠惶、頓首頓首、死罪々々、臣性固庸疎、器亦濩落、期以早退、如秋葉之待風、顧而自危、喩春氷之向日、況亦耄隨老及、病乘衰侵、筋骨難支、驚空穴於虎嘯、行步易失、若平地於美腸、然臣猶扶殘喘、未敢乞骸、將爭截營之暫留、以効乃心之不貳、今幸逢无爲之代、庶作少事之臣、何忘昧暮之身、更濫明時之政、臣雖欲自勉、力難隨心、无水如流、不寒而慄、伏願陛下特賜允許、反汗寵章、慰徽臣流汗之意、垂恩苦請、免徽臣叨恩之譏、无任慊懇之至、謹奉表陳請以聞、臣基經誠恐誠惶、頓首々々、死罪々々、

仁和三年閏十一月廿六日

答太政大臣辭關白勑 橘納言(廣相)作

勑、太政大臣藤原卿、中務省昨進表函、披而讀之、有辭攝政、憮然方寸、不知所爲、卿自天成德、惟岳降神、風概冠時、忠貞衞國、爰從貞觀、化諧蕭曹、洎乎元慶、寄重周霍、爾來三代緝熙、万邦用能、崇業極於隆平、驅蒼生於仁壽、先帝承渭橋之拜、是卿之功、朕辱翼室之延、亦誰之力、伏案先帝詔命今以爲卿勳効之高、古今未有、將議其賞、答其勞、卿素履謙、先帝懷撝挹、受寵有憂色、臨勞有退情、若其讓章勑答、比相往還、恐一日万機、或致稽壅、故言不及賞、心在分憂、況朕愚未學政、孝何改道、卿秉鈞奕世、佐命受遺、所謂社稷之臣、非朕之臣、宜以阿衡之任、爲卿之任、先帝右執卿手、左撫朕頭、託以父子之親、結以魚水之契、宛如在耳、豈而忘乎、援筆哽咽、言不及多、

仁和三年閏十一月廿七日

阿衡任事

毛詩曰、實惟阿衡、左右商王、毛傳曰、阿衡、伊尹也、左右、助也、鄭箋云、阿、倚也、衡、平也、伊尹湯所依倚而取平、故以爲官名也、

尚書曰、在太甲時、則若保衡格于上帝、孔傳曰、太甲繼湯時、則有如此伊尹爲保衡、言天下則有安所取平焉、

正義曰、阿衡保衡、俱三公官名也、非常人之官名、蓋當時特以此官號伊尹也、

儀禮曰、諸公阼階西北面東上、鄭注曰、諸公大國有孤卿一人、與君論道、亦不典職、如公矣、疏曰、與君論道、亦不典職、如公矣者、尙書云、太師太傅太保茲爲三公、論道經邦、燮理陰陽、是三公論道无職、大國立孤一人、論道與公同、亦无職、故云不典職、如公也、周禮曰、或坐而論道、亦通及三公矣、據件等文、阿衡者三公之官也、坐而論道、是其任也、

仁和四年四月廿八日　　助教兼讃岐權掾中原朝臣月雄

博士善淵朝臣愛成

勘申阿衡事

晉書詔曰、丞相錄尙書事會稽王昱明德劭命、阿衡三世、廣相案三世謂穆帝時昱錄尙書事、專總万機、次哀帝時、進位司徒、統內外衆務、次海西帝時、進位丞相錄尙書事、加入朝不趍、贊拜名等禮、又河間王顒上表曰、成都王穎明德茂親、功高勳重、宜爲宰輔、代齊王冏阿衡之任、於是進穎位大將軍都督中外諸軍事、假節錄尙書事、執朝政、无巨細皆就諮也、據件等文、上公攝万機者、謂之阿衡、廣相偏見、其成文著於詔草、而經家勘云、阿衡准周三公、可无典職者、是極所不安也、何者伊尹爲殷三公、殊號阿衡、攝冢宰、兼卿士、无所不統職務、而引周三公稱无典職、是不安一也、三公之職、周也、獨无典職、至後代及大唐、三公之職、无所不統、然則殷三公准周代耶、准唐代耶、而猶无指的、要准周无典職、未見所據、是不安二也、屬文之體、會釋首尾、乃成其義、未聞以二字破一篇、古人有言、書不盡言、言不盡意、又言得魚忘筌、得意忘文、然則文章之難、聖人攸歎、廣相才拙文章、職非起居、乍奉詔令、不得辭退、輒草件文、無敢所避、

撿阿衡官所職事

毛詩曰、允也天子、降予卿士、實惟阿衡、左右商王、毛傳曰、阿衡、伊尹也、左右、助也、鄭箋云、阿衡也、衡、平也、伊尹湯所依倚而取平也、故以爲官號也、

正義曰、尚書君奭注曰、伊尹名摯、湯以爲阿衡、至大甲改曰保衡也、阿衡、保衡皆公官、然則阿衡保衡一人也、彼注阿衡爲公官、此言卿士者、三公兼卿士也、

尙書君奭曰、在昔成湯受命、則有若伊尹格于皇天、在大甲時、則有若保衡格于上帝、

正義曰、阿衡保衡此並三公之官、當時爲之號也、

又伊訓曰、惟元祀十有二月乙丑、伊尹祠于先王、奉嗣王祗見厥祖、百官總己以聽冢宰、孔安國傳曰、伊尹制百官、以三公攝冢宰也、

又周官曰、太師太傅太保、玆惟三公、論道經邦、燮理陰陽、(師天子所師法、傅傅相天子、保安天子也、)宋書百官志曰、殷大甲時伊尹爲太保、今撿此等文、阿衡者、三公官名也、然則阿衡所職、可同周官三公也

范曄後漢書廿八將論曰、或崇以連城之賞、或任以阿衡之地、注云、樊噲封爲舞陽侯、灌嬰爲丞相、封爲潁陽侯、晉書簡文帝紀曰、皇太后詔曰、會稽王阿衡三世、道化宣流、又曰、朕居阿衡三世、不能濟彼時雍、又曰、會稽王道子傳曰、阿衡之重、言何容易、齊王冏傳曰、河間王顒上表曰、成都王穎明德茂親、功高勳重、宜爲輔、代冏阿衡之任、晉中興書曰、泰和元年詔曰、會稽阿衡孝宗、有保太子之名也、今勘諸史斯文甚多、不可勝記、或以丞相稱阿衡、或以太司馬稱阿衡、或以攝政稱阿衡、或以錄尙書事稱阿衡、凡作文之斷章爲義、迭有不同、无可適從、未可據件等之文決定其任、然則阿衡職可依經家之義、

以前勘申如件

仁和四年五月廿三日　正六位上行少外記紀朝臣長谷雄

從五位下行大內記三善宿禰淸行

從五位上守左少辨兼式部少輔藤原朝臣佐世

一撿阿衡官事

右阿衡卽三公官名、前日勘申既畢、不更重勘、

一撿三公典職事

右撿尚書周官曰、立太師、太傅、太保、茲惟三公、論道經邦、燮理陰陽、注曰、此惟三公之任、佐王論道、經緯國事、和理陰陽、正義曰、三公俱是敎導天子、輔相天子、緣其事而爲之名、三公皆當運致天子使歸於德義、

天子立三公曰太師、太傅、太保、无官職、與王同職、故曰坐而論道、謂之三公、少師、少傅、少保、是爲三孤、冢宰、司徒、宗伯、司馬、司寇、司空、是爲六卿任職、故曰作而行之、謂之卿、又晉書職官志曰、伊尹曰、三公、調陰陽、九卿通寒暑、大夫知人事、烈士去其私、今案此文、三公无典職、殷周制、經史明文、无可更疑、

仁和四年五月廿日

一撿伊尹攝冢宰事

右撿尚書伊訓曰、惟元祀十有二月乙丑、伊尹祠于先王、奉嗣王祗見厥祖、百官總己以聽冢宰也、注曰、伊尹制百官以三公攝冢宰也、又毛詩曰、允也天子、降予卿士、實惟阿衡、左右商王、正義曰、此言卿士者、三公兼卿士也、今案此文、伊尹兼卿、猶如周制、但說阿衡者、指謂之三公、官名不謂兼卿士者之總號、然則三公兼卿者、可有典職、其不兼者、可无典職、是知伊尹制百官之時、以其暫攝冢宰也、非據阿衡之職焉、今稱阿衡、卽是三公、更亦有何典職、

以前勘申如件

仁和四年五月卅日　正六位上行少外記紀朝臣長谷雄

從五位下行大內記三善宿禰淸行

從五位上守左少辨兼式部少輔藤原朝臣佐世

或本、仁和四年六月日、助敎中原月雄、博士善淵愛成者可勘據之、

〔扶桑略記二十二宇多〕仁和四年五月九日、太政大臣報奏云、去年閏十一月廿七日奉勅、宜以阿衡之任爲

汝之任者、但未知阿衡之任、如關白何、仍持疑久矣、伏聞左大臣融○源令明經博士等勘申云、阿衡之任、可无典職者、以其可无典職、知阿衡爲貴、以臣比擬、非所克堪、抑至于無分職、暗合臣願之、宣命曰、天皇我詔旨良万止宣御命乎衆聞食止宣布、太政大臣藤原朝臣、先々乃御世與利國家乎濟助、朝政乎總攝奉仕賜倍利、又援立先帝保護朕躬仁波、功大德高已止、古之周霍與利毛超多利、朕卽位之初仁所念行之累代乃聖明毛猶仰其輔助利、況乎末小子仁天之何不倚賴委付武止所念行天、去年十一月廿一日下詔書云、萬機巨細皆關白於太政大臣、然後奏下、而上表天固執閑退之志、爰卽令左大辨橘朝臣廣相作勅答而下之、其結句宜以阿衡之任爲卿之任、而尙持疑天、不敢視事、天下之務皆盡壅滯多利、於是使明經紀傳之道人々等勘申云、阿衡者是殷世三公官名、三公者坐而論道、无所典職登申世利、然則以三公之貴天更煩碎之務乎聞幾久毛屑不在奈努利、然而朕之本意八萬政乎關白天欲賴其輔導之天奈毛、前詔八下世流、而奉旨作勅答之人廣相加阿衡波已乖朕本意多流奈利、宇倍母彌固久辭退坐奈利介里止、驚幾御坐之天、更重天述御意天宣、太政大臣自今以後衆務乎輔行比百官乎緫○緫恐誤賜倍、應奏之事可下之事先必諮稟與、朕將垂拱而仰成止宣御命乎衆聞食止宣、

〔政事要略三十〕御日記云、仁和四年五月十五日、太政大臣進奏狀、偁、可被定行雜務事、太政官奏事、右國家之事、一日万機、而自去年八月迄于今日、未奏太政官所申之政云々、臣伏奉去年十一月廿一日詔書、万機巨細、關白於臣、幸遇无爲之世、當作少事之臣、由是上表辭謝、不敢曰當、又奉同年閏十一月廿七日勅宣、宜以阿衡之任、爲汝之任者、其矜臣以阿衡之任、是增臣以素飡之責也、但未知阿衡之任、如關白何、仍持疑久矣、伏聞左大臣融○源令明經博士等勘申云、阿衡之任、可無典職者、以其可無典職、知阿衡之爲貴、以臣比疑、非所克堪、抑至于无分職、知暗合臣願、爲少事之臣、伏請聖口早仰執奏之官、莫令壅滯万機、去六月朔日、左大臣侍簾前、召參議文章博士橘廣相朝臣、右少辨藤原佐世、助教中原月雄、有所對論、先是太政大臣上表、有辭攝政、有勅不容、其中有以阿衡之任、爲卿之任句、爰世論嗷々、

大閤持疑、左大臣開之、不私勘之、輙使道々博士等勘申之、爰申云、阿衡般三公官名、准周代不典職、然則大閤者、不可聽政者也云々、夫周代三公、不典職之謂者、彼周代有六典職、所謂天官、地官、春官、夏官、秋官、冬官也、彼三公之尊與王同職、不以一職官、○官下恐有脱字故與六典之分職理政、相殊之謂也、非為三公不為政之謂也、又既云與王同職、然則王者不為政者、從佐世議、若王者謂可總天下之事者、三公何因不總天下之事哉、事具周禮疏、仍去五月廿九日、召左大臣以愛成佐世等勘文、及作勅人廣相朝臣勘文等、於左近陣頭、令辨定件兩疑、大臣言曰、彼此是非、怱難理也、答曰、知書之大義者、誠難、但聞彼此之辭論、相定是非、仍追于今日、召件人於殿上、述兩人之義、聽其言、各有道、是日暑熱、心中煩苦、仍不辨了、万機之事、无巨細皆壅滯、諸國諸司、愁恨万端、使左大臣就太政大臣之第曰、如前詔心、且行万事、二日、早朝、左大臣還奏曰、昨暮仰彼太政大臣、奉詔已畢、後詔奏此事、未定阿衡之趣者、不能行政、朕以為不可然、先日先帝○光孝左執愚之手、右執相國之手、託曰、我日衰耗、不知是據何事、此人必如卿子、為輔弼耳、於是帝崩以後、朕謂彼大臣、今無親可憑、既成孤、未覺知政事、更屬誰人、總無善惡、皆以當知、況卿從前代、猶攝政焉、至朕身、親如父子、宜攝政耳、答曰、謹奉命旨、必能奉何大臣出、如是異議哉、甚為不便、五日、廣相朝臣、奏五條愁文、其文云、一愛成月雄勘文曰、尚書正義曰、阿衡保衡、俱三公官名、非常人之官名、蓋當時特以此官號伊尹也者、卽引儀禮疏曰、三公論道、不典職云々、是極不安也、何者、既稱非常人之官名、當時特號伊尹也、然則殷國之世、只有伊尹一人、殊受斯號、何更引他三公論道之義哉、仍以此事難問諸儒、佐世申云、除伊尹之外、無他阿衡之狀申了、二儀禮、是周事也、以周事證殷事、亦所不安、仍以此事難問諸儒、佐世勘申云、晉書職官志、伊尹曰、三公調陰陽、九卿通寒暑、以此論之、殷周一同云了、廣相伏思之、甚不安、何者調陰陽通寒暑、非指三公九卿之謂也、只引殷時有三公九卿之名之證也、而以此文、證殷周同三公无職掌、未分明也、案殷官二百、周官三百、大略總有此異、何必一同三公无職、是周世也、至後代則三公之職、无所不統、而今諸儒申三公无職、極不安、三佐世申云、所申只阿衡

之任也、未被問古今三公之職、故不指申後代之事、是亦不安、何者欲稱无職、則引晉書志、至有職之文、則申非被問之事、極不安、四佐世申、後代稱阿衡者不定、或謂爲丞相者、或謂爲大司馬者、或謂錄尙書事者、或謂攝政、然則後代之事不定、不足爲信、總可據經家之義云々、是亦不安、何者稱阿衡者非謂爲丞相大司馬等職也、指謂執朝政者耳、故其官不定、楊駿以大尉錄尙書事、會稽王昱、晉穆帝時、以撫軍錄尙書事、總万機、哀帝時、以司徒統內外務、海西帝時、以丞相錄尙書事、是晉詔所謂三世阿衡者也、成都王穎、以大將軍錄尙書事、執朝政、齊王冏以大司馬輔政、件等諸公以執朝政、謂之阿衡、是一同也、何以其官異、而稱阿衡之名不定哉、至廿八將論、是文藝欲論灌嬰非其人居其官、故推崇丞相、謂之阿衡耳、非嬰身生被稱阿衡也、嬰死後五百餘年、范曄所作之文也、不可爲此事之證、五佐世申云、勅答若稱伊尹之任、則可謂有典職、今稱阿衡之任、則可謂无典職云、是最不安、何者史記曰、伊尹名阿衡、又除伊尹外、無他阿衡之狀申畢、而何以伊尹阿衡爲例、最以不安也、爲恐判書不省、九月十日云々、朕之博士、是鴻儒也、當以太政大臣令攝政之詔書、令此人作之、其詔文華雖遺麗、而徒有阿衡之句、是則群耶所託意、於是公卿以下、枉稱有罪之人、于時在六月晦日、有大祓之事、其日无公卿一人、外記等至太政大臣家、請處分、卽仰云、當告廣相朝臣、外記告廣相朝臣、答云、奏聞龍顏、仰云、莫罷行云了、天下嗷々、自此始也、但其實否、所不知矣、十七日、朕博士之事、命送太政大臣、其辭曰、先日太政大臣參入時、以其事示時平朝臣、厥後世間嗷々万端、況乎復朝政壅滯、天下愁苦、以是等事、問左大臣、卽答曰、此事如是、諸務猥集、一日希曰、爲陳官事、罷向大臣家、昨日以前、設官史座、今日无也、仍令人每事通陳、返答曰、阿衡之趣、當案以否哉、何以來耶、希答曰、能倘无案、閉口徒還去了、厥後召明經博士愛成、助敎月雄、左少辨佐世等、與廣相朝臣相對、使各詳指其正條、愛成等奏曰、阿衡者、三公官名、无所執當、但三公之事、件人等所引言違謬、吾博士所指明、左大臣曰、彼是有所執不伏、須罷退陣頭、辨問之耳、俄而還奏曰、无智而兩論難辨、喧譁不斷、吾又具問之、博士所問如故、佐世所答又如先、問答猶未悉詳、朕內心鬱憤、頃之左右

云、嗷々轉起、爰未定其事耳、如此之旨、示送太政大臣、十月廿七日云々、朕博士、月來蒙冤屈、隱居不仕、朕傷之日深、仍今賜書於太政大臣、述朕本懷、其報奏曰、御書具奉云々、又廣相朝臣事、先日奉了、而重賜仰示矣、基經從始无何意、然前詔者、有可關白大少事之恩命、後詔者、以阿衡之任、爲卿任者也、微臣疑先後之詔、其趣不同、暫不覩官奏、敬愼之懷、更无他腸、而去六月、有不善之宣命、可謂當時之一失、謹奏旨、二宛勅遣使召博士廣相朝臣、卽便參入、召於龍顏、勅曰、依不善事、久以隱居、中心悼念、然而事遂歸理、早就本職、勤仕官事、卽下階再拜、十一月三日、先度詔書、參議廣相朝臣所作也、次二度詔書、同人所作也、而諸公卿依不先覽及於己、毁譖作者、右少辨希持官奏、詣太政大臣許、大臣先問曰、先詔旨者、先關白太政大臣、而後奏下者、後詔以阿衡之任、爲卿任者、此事如何、是彼大臣逢希、而所言之事也、答曰、關白奏下、幷阿衡之由、憶念依同其義、而先所白也云了、朕聽其言、召希問之、希具奏其趣、仍召對廣相朝臣與佐世等、詳問其事、佐世以爲引阿衡者、是不預政事之義也、以此答之、欲定其事、公卿等皆稱病退出、明日左大臣進奏白、太政大臣不聽事已久、連出權謀、改詔書可施行、朕聽此言、不肯容許、大臣固請、然則不如速誅錯、可防之未然、朕遂不得志、枉隨臣請、濁世之事如是、可爲長大息也、○中略

勘申左大辨正四位下橘朝臣廣相犯罪事

右被上宣偁、万機巨細關白太政大臣之狀、詔書下訖、而上表固執閑退之志、爰令之人廣相引阿衡之文、仍令道々人々勘申云、阿衡无典職者、而廣相猶申有典職不伏、仍今年六月七日、重下詔書偁、詔本意万政關白、欲賴其輔導、前詔下也、而奉旨作勅答之人廣相引阿衡、彼已乖勅本意、宜勘申其罪者、謹撿詐僞律云、詐爲詔書及增減者遠流、注云、謂因詔勅成文、而增減其事、名例律云、五位以上犯流罪以下、減一等、又條云、犯私罪、以官當徒者、五位以上、以一官當徒二年、仍解見任職事、又條云、以官當徒者、罪輕不盡其官、留官收贖、又條云、三流同爲一減者、今引无典職阿衡、已乖勅本意、准撿律條、不異增減詔書、仍從遠流、請減一等、徒三年、身帶正四位下、以正四位下一階當徒二年、餘一年合贖銅廿斤、仍解

見任職事、仍勘申如件、

仁和四年十月十五日　左衞門少志櫻井貞世

右大史兼明法博士九春宗

勘解由次官兼大判事播磨大掾惟宗直宗

件勘文未進之前、有恩詔被免、仍不進之、

奉昭宣公書（菅丞相讚州刺史時）

某白、〇中略某今月日偸入皇城、適有或人告以一事、曰、左大辨廣相朝臣奉勅作答大府上章之勅書云、以阿衡之任爲公之任、明經善淵愛成等引毛詩尙書君奭之義、卽述其說云、阿衡者三公之官、坐而論道、紀傳藤原佐世等摘後漢書論晉簡文紀之句、更釋其意云、阿衡者或稱丞相、又名攝政、六月七日宣命云、作勅答之人、廣相引阿衡以乖朕之本意、去十月大臣命明法博士云、定廣相所當之罪名、諸人云云、〇中略廣相者某先父相公〇菅原是善之門人、然而未曾聞爲某有恩怨、約而言之、魏文帝所謂文人相輕也、今之所陳、无他用意、不勝己業之欲廢、續以狂昧之拙誠、伏惟大府深思遠慮、再三反覆、又近者如聞明法奉宣之後、所論各異、〇中略謹案職制律謂施行詔書、失錯其旨者杖罪、異于廣相作詔以乖主上之旨、詐僞律謂不據勅命、妄自爲詔者遠流、及于廣相奉勅以違人君之意、二律又遂无正條、將以因准論之、因准論之、疑罪自從輕之、則廣相之无患明矣、若法之所當、罰不足患、則大府先出施仁之命、諸卿早停斷罪之宣、若世之所爭不得已、則託以放逐邪臣之議、莫用詐爲詔書之律、古人有言、可斷不斷、還受其咎、甚恐事旨變生、後悔无及、某萬死再拜謹言、

〔菅家文草四〕憶諸詩友兼奉寄前濃州田別駕

天下詩人少在京、況皆疲倦論阿衡、（傳聞朝廷令在京諸儒定阿衡典職之論、）亘明府劇官將滿、安別駕煩代未行、南郡旱災無所與、東夷獷俗有何情、君先罷秩閑多暇、日月煙霞任使令、

〔三代實錄 四十六 光孝〕元慶八年六月五日甲午、勅曰、天皇詔旨良萬止宣御命乎衆聞食宣布、太政大臣藤原朝臣(基經)○先御世御世與利天下乎濟助介、朝政乎總攝奉仕禮利、爲國家建大義、爲社稷立忠謀天、不意外留萬機之政乎朕身留授任天、存閑退之心執高讓之節、朕聞定策之勳、自古先錄、又賞不踰月、是政之先毛止聞食須、大臣功績既高天、古之伊霍與利毛利乃祖淡海公、叔父美濃公與利毛益左利、朕將議其賞留大臣素懷謙挹心、必固辭退天、政事若壅世无加止也々美思保之天、本官乃任留其職行牟止思保之天、所司留令勸留、師範訓道乃美留波非安利介利、內外之政无所不統久毛有倍加利(○利下一本有計利二字)、假使留無所職久止毛可有、朕耳目腹心留、所侍奈禮波、特分朕憂止毛思保須乎、自今日官廳留坐天就天、萬政領行比、入輔朕躬、出總百官倍之、應奏之事、應下之事、必先諮稟與、朕將垂拱而仰成止、宣御命乎衆聞給止宣、 七月六日甲子、太政大臣抗表曰、臣伏奉去月五日詔命、欣戴啓處无聊、臣貪見聖化、思罄顓愚、況蒙綸言、當翊衰職、誠以區々於待旦、以叶堯典、孜々於戴星、無負湯誥、而天資尫弱、病累稍仍、受敕而出、既迨數旬、扶病而興、未朝一日、雖勵離疎之質、難堪吉甫之勳、匪啻微臣坐於罪辜、還恐庶績咸成壅遏、方今左右大臣朝之柱石、國之葭莩、舜既任其夔龍、周能得其魯衛、晝一之寄、將更待誰、伏望任降天鑒、許臣微懷、養生衛宇之中、久戴堯舜之化、若至謹奉表以聞、 八日丙寅、勅、太政大臣、省表具之、公義爲股肱、親是朕之傍賴、伊自疇初、寄於漆之投膠、深於魚之濟水、豈啻古今君臣之分而已哉、一日不見如三秋、故望其日々入朝、一事不詢如蒙面、故命其事々諮問、今天知朕之於公无一日不相見、无一事不相詢也、是後所以爲當時之重鎭、爲後嗣之元龜者也、必玉堂之政無所不知、有司之事無所不統、是以分朕旰食宵衣之憂、慰朕虛懷側席之望、如何責阿衡以忍勞力疾、役冢宰以侵署冒寒乎、公其頤養精神、臥治職務、亦加將攝、無替膽益國家昇平、所望於公、長生久視、亦所望於公、公其悉之、

〔公卿補任 陽成〕元慶四年(庚子)

攝政 右大臣 正二位藤基經(四十五、十一月八日改攝政爲關白、)

補任

○按ズルニ、愚管抄、大鏡裏書、攝關補任次第、歷代皇紀、並ニ本書ニ同ジ、而シテ此事三代實錄ニ所見ナク、且同書十二月四日、基經ヲ太政大臣ニ任ズル策命ニ、攝政故ノ如シトアルニ據レバ、此說ノ謬ナルヲ知ルベシ、

〔西宮記臨時五〕一關白

詔、內外奏請、上下大小雜事、先白其人宣行、賜隨身、除目時候御前不執筆、或爲日上行事、是昭宣公○藤原基經、時々行內辨事、承平□年、攝政左大臣著左仗、行位記事、漢宣帝時、諸事皆先關白光、然後奏御天子云々、光、霍光也、

〔柱史抄下〕臣下關白事

御讓位之時、新帝先以口宣仰之、後日被下詔書、其儀如攝政、

載宣命例

永觀二年、圓融院讓位宣命、太政大臣藤原朝臣、○賴忠如元關白之由載之、

久壽二年、後白河院踐祚之初、又載宣命、

此兩度不可爲後例云々

無詔書例

延久四年十二月八日、白河院受禪日、前太政大臣藤原朝臣、關白如故之由、被下宣旨、其後無詔書幷上表事、

〔夕拜備急至要抄下〕一關白詔宣下

上卿　辨　官外記　大內記料詔書　中務輔下詔書

仰詞以左大臣爲關白、令作詔書、又保安二、仰詞某大臣萬機巨細以關白爲氏長者、又關白以左右近衞府生各一人、近衞各四人、爲隨身兵仗、又可聽牛車、上卿召辨、外記仰之、

上卿今日可有宣下事、可令參陣給者、依天氣言上如件、

自餘可准之○中略

〔夕拜備急至要抄下〕一關白詔書覆奏

日次内覽奏聞　上卿(以職事奏聞、插文杖、被加御畫被返下、)　官外記　詔書(取諸卿署外記致沙汰、)　御畫(署奧上卿有可字、)

〔本朝世紀〕天慶四年十一月廿六日壬午、主上(○朱雀)御即位之後、今日初聞食官奏、從太政大臣(○藤原忠平)攝政以來、頃年辨史持官奏書、參彼里第奏下矣、而辭來攝政已經數月、今般詔書有准仁和例可關白之由、因之於殿上今日初有此奏、其儀先一日、大納言藤原實賴卿參入、(左大臣稱病由不參、)著宜陽殿西庇座、左右大辨一人必候之、于時奏者辨持擇奏等、奉覽大納言、大納言擇定其無止者、差辨史奉送太政大臣里第、太政大臣召辨於御前、覽件書等、如年來候官奏之儀、特以取捨、擇定其無難者、即給於辨、辨給之持參、申其由於大納言、仍定仰以明日可奏之由、各々退出、奏了之後、史書奏報奏殿上幷太政大臣家等、

〔日本紀略(二朱雀)〕天慶四年十一月廿八日、詔、万機巨細、百官總己、皆關白於太政大臣、(○藤原忠平)然後奏下、如仁和故事、

〔日本紀略(五冷泉)〕康保四年六月廿二日己卯、(○公卿補任同、百練抄爲二十七日、)詔、令左大臣(○藤原實賴)關白萬機、大內記成忠草詔、　七月六日癸巳、關白謝表有勅答、權右少辨菅輔正作之、

〔大鏡(五太政大臣兼通)〕圓融院の御母后、(○藤原安子)此おとゞ(○藤原兼通)のいもうとにおはしますぞ、この后村上の御時、康保元年四月廿九日にうせ給ひにしぞかし、この后のいまだおはしましゝ時に、このおとゞいかゞおぼしけん、關白は次だいのまゝにせさせ給へとかゝせたてまつりて、とり給ひたりける御ふみを、まもりのやうにくびにかけて、としごろもちたりけり、御おとゝの東三條殿(○兼家)は、冷泉院の御時の藏人頭にて、此殿よりもさきに三位して、中納言にも成たまひしに、この殿は、はつかに宰相ばかりにておはせしかば、世中すさまじがりて、うちにもつねにまいり給はねば、みかどもうとくおぼしめしたり、其ときにあにの一條攝政(○伊尹)天祿三年十月にうせ給

ひぬるに、この御ふみをうちにもてまいり給ひて御らんせさせんとおぼすほどに、うへ〇圓融鬼の間におはしますほどなりけり、おりよしとおぼしめすに、御おぢたちの中にうとくおはします人なれば、うち御らんじていらせ給ひき、さしよりてそうすべき事と申給へば、たちかへらせ給へるに、此ふみをひきいでゝまいらせ給へれば、とりて御らんずれば、むらさきのうすやう一かさねに、故宮〇安子の御手にて、關白をばしだいのまゝにせさせたまへ、ゆめ〳〵たがへさせ給ふなどかゝせ給へる、御覽ずるまゝに、いとあはれげにおぼしめしたる御けしきにて、こみやの御てよなどおほせられ、御文をばとりていらせ給ひにけりとこそは、さてかくいで給へるとこそはきこえ侍りしか、いと心かしこくおぼしける事にて、さるべき御すくせとは申ながら、圓融院けうやうのこゝろふかくおはしまして、はゝ宮の御ゆいごんたるべしとて、なしたてまつらせ給へりける、いとあはれなる事なり、その時よりたゞのおとゞ左右にておはしましゝかば、だうりのまゝならば、このおとゞのえ給ふべきにてありしに、このふみにてかくありたるとこそは聞え侍りしか、東三條殿もこのほり川どの〇兼通よりは、上らうにておはしましゝかば、いみじうおぼしめしよりたる事ぞかし、

〔日本紀略八花山〕永觀二年八月廿七日、先皇〇圓融讓位於今帝、先帝廿六、今帝十七、詔令太政大臣藤原朝臣頼忠百官總己、萬機關白、

〔日本紀略九一條〕正曆元年五月四日、太政大臣〇藤原兼家上表、辭攝政、同日詔、又令關白萬機、隨身不改、八日、關白太政大臣從一位藤原朝臣兼家落飾入道、年六十二法名如實、同日詔、令内大臣藤原朝臣道隆關白萬機、

〔江談抄一公事〕大入道殿夢想事

大入道殿兼家爲納言之時、夢過合坂關、雪降關路悉白ト令見給天、大令驚天、雪ハ凶夢也ト思天、召

夢解欲令謝テ令語給ニ、夢解申云、此御夢想極吉夢也、慥以不可有恐、其故ハ人必可令進斑牛、即人令進斑牛、夢解預纏頭也、大江匡衡令參、此由有御物語、匡衡大驚テ纏頭可召返、合坂關者關白之關字也、雪者白字也、必可令到關白、大令感給、其明年令蒙關白宣旨給也、

〔公卿補任一條〕正曆六年（長德元年）乙未○關白正二位藤道兼（四月廿七日、關白、巨細雜事、（中略）五月八日、薨于二條亭、（中略）號栗田關白、又町尻關白、又二條關白、世云七日關白、）

〔愚管抄三〕道兼（○中略）なにとなく花山院の間の事も、我結構ならねど、時にあひて、（○兼家）のためいみじかりけん、右大臣上臈なれば、內大臣伊周、人がらやまと心ばへは惡かりける人なり、からざへはよくて、詩などいみじく作くられけれど、大臣をかふべきならねば、右大臣、關白にはなりにけれど、長德元年四月廿七日になりて、五月八日うせられにければ、世の人は七日關白といひけり、

〔左經記〕寬仁三年十二月廿二日甲辰、及戌剋攝政殿、（○藤原賴通）上辭攝政表、有止攝政可爲關白勅答云云、

〔百練抄五白河〕承保二年十月十五日、左大臣（○藤原師實）蒙關白詔、

〔古事談二臣節〕宇治殿（○藤原賴通）使土御門右府、（○源師房）令讓攝籙於大二條（○敎通、賴通弟、）給之時、入道殿（道言趣云々）一度ハ猶不被信受、第二度ノ時、及零淚被悅申云々、而老衰之後、延久比自宇治殿被申云、於今者如契約可被讓攝籙於左府、（○師實、賴通子、）存命之時心安可見置云々、返答云、此事私難申左右、可伺天氣トテ、奏聞之處不許云々、仍宇治殿被遺恨、遂薨給畢、大二條殿又薨逝之時、（承保二年）御約束於內府（○信長、敎通子、）云々、仍左府愁歎欲出家、（○中略）依之召宮御方職事、忽被仰可下關白宣旨於左府之由云々、

〔榮花物語三十九布引の瀧〕九月（○承保二年）廿四日に、左大殿（○藤原師實）大井河にもみぢ御覽じにおはしますとて、殿上人上達部まいりあつまり、殿もれいならずなべてならぬかりの御ぞ奉らむとせさせ給

程に、關白殿〔○教通〕御かせのけしきおはしますとあれば、とまらせ給ぬ、三四日ばかりありて〔○九月二十五日〕うせさせ給ぬれば、左大殿關白の宣旨かうぶらせ給ひぬ、すきだいばんなどもてわたり、めでたきことかぎりなし、うちのおほとの〔○信長〕にゆづり奉らまほしくおぼしけめど、宇治關白殿〔○頼通〕の讓たてまつらせ給ひし御こゝろをおぼしめせば、いかでかは、又さりとも內〔○白河〕の御けしきなどのさるべきにもあらず、故院〔○後三條〕の御ときに內大殿になんゆづらせ給べかんなるなど、きこえしおりに、うぢ殿のきかせ給はんが、かたはらいたきことゝその給はせける、御心いとなだらかによくおはしましけり、

〔朝野群載〕〔七攝家〕關白詔

詔、朕以眇虛、虔承叡託、更委外祖〔○藤原師實〕之賢佐、因全小子之名基、而機揆之務、謙退彌深、智無獨理、況於庸昧哉、內大臣藤原朝臣〔○師通〕者、爲彼長男、朕之外舅也、久傳一門之餘慶、將被四海之澄淸、非禮不行之、故仁義之園尙昌、非信無履之、故道德之城惟固、誠是國之棟梁、朝之藩衛也、宜繼子孟之蹤、以助翕亮之化、夫萬機巨細、百官總己、皆先關白於內大臣、然後奏下、一如故事、庶賴此親戚、安其黎元、普告中外、俾知朕意、主者施行、

寬治八年三月九日　　從四位上行中務權大輔兼因幡權守藤原朝臣長實宣奉行

○按ズルニ、寬治八年ハ、堀河天皇ノ踐祚八年ナリ、此年三月八日藤原師實上表シテ、關白ヲ辭ス、因テ詔シテ其長子師通ヲ以テ關白ト爲ス、文中內大臣藤原朝臣トアルハ是ナリ、

〔殿暦〕長治二年十二月廿三日丙戌、巳刻許參御前、被仰可有關白事、余〔○藤原忠實〕恐悅卽退出、參京極殿、其由申北政所、了卽退出、向東三條、時範來、書立前驅、自今夜催之、　廿四日丁亥、還東三條、巳時許、右大將被來、相迎卽被退出了、新大納言民部卿右大辨左大辨宰相中將忠敎同家政等來、明日詔沙汰、幷慶賀間沙汰也、此有酒肴事、申剋許各退出了、酉剋許余著衣乘侍從車、密々に參京極殿、　廿五日

戊子、酉剋許有(恐有參議)東宮(御所弘徽殿云々、先例可不審事也)、今日有官奏、酉剋許頭辨重資持來奏、著直衣冠於對南面見之如常、戌剋許關白詔草持來、開見了、淸書仰不可持來之由、余著束帶、委子細有件記(右大辨書之、依余示)也、頃之反閉、次參內、其儀如承保二年、中宮、東宮申慶賀還家、四條宮北政所申慶賀、中宮四條宮有送物、中宮和琴、四條宮琵琶、委事有右大辨記、今日裝束(打下襲如常)上袴(カタ文如常)劍(蒔繪地、孔雀螺鈿金造、故大殿御賀茂詣時令書之、)平緒(紫綾縫物、松折枝千鳥鶴縫之、但松折枝鶴千鳥相交方チ爲上、)參御前儀如常、先昇自小板敷居殿上、依召參御前、廣庇に有圓座、所のカタニ居、其路如官奏儀、即退出、　廿七日庚寅、今日依慶賀參鳥羽院、申時許出京、秉燭之後參於中門申事由、少將通季頃之還來、余拜舞了、昇殿上、即退出、戌剋許參一條殿、拜了參御前、有酒食事、

〔公卿補任 鳥羽〕保安二年辛丑

關白正二位藤忠通(三月五日任)

〔愚管抄 四〕保安元年十月十日に御熊野まうで(○白河熊野詣)有ける時、その間に、鳥羽院の御在位のするつかたに、關白にておはしける、知足院殿(○藤原忠實)の女をなを入內あれと、內(○鳥羽)の御心よりおこりて仰られけるを、うち〳〵に悅びて、出立せ給ひけること出きたりけるを、くま野へあしざまに人申たりけるに、はたと御はらを立て、我まいらせよと云しには、方をふりて辭して、我にしらせでかくすると思召てけり、さて、御歸洛の即日、知足院どの當時關白なるを、はたと勅勘有て、十一月十三日に內覽とゞめて閉門せられにけり、さて攝籙の臣をかへんと思召けるに、大方其人なし、花山院左府家忠、京極殿の子にて、大納言の大將にて、さもやと思召て、顯隆に仰合せければ、稻荷祭の棧敷の事はと申たりけりなど聞ゆ、家忠の子忠宗中納言は、顯季卿が子の宰相が聟也、かやうのゆかりにて、其時顯季家保などあつまりて、棧敷にて酒もりして、さしかよはされたりなど、人そしりける事也、是は一定はしらねども、かくぞ申める、少しもさやうならん人のすべき

事にては、この攝政關白はなき也、さて內大臣にて法性寺殿〇藤原忠通のをはしける外には、いさゝかも又々さもといふ人なかりければ、力及ばで、親はをや、子はことこそは、げすもいふめれば、執政せよと仰られければ、法性寺殿は、此職をつぎ候ばかり候はゞ、忠通にゆるされ候て、一日父の勅勘を免せられ候て、門をひらかせ候て、代々の例、この職は父の讓を得候て、うけ取候夜やがて拜賀などする事にて候をたがへず候はゞや、職に居候ばかりにては、父の勅勘え申免せず候はんも、不孝の身になり候はゞ、佛神の御とがめもや候べからんと申されたりければ、この申さるゝ、むね、返す〴〵もしかるべしと感思召とて、その定にすこしもたがへず行ひて、うちとられにけり、

〔本朝世紀〕久安六年十二月九日辛亥、權大納言藤宗能卿參仗座、行勅答幷關白詔書事、如常、今日藏人頭藤伊實朝臣更參鳥羽奏聞昨日表、今日適有勅答及詔書事也、上卿召中務少輔藤季家被下詔書、又召大外記師業被仰除目等雜事、准攝政可令行之由、又召辨被仰官奏雜事可准攝政由了、記、

勅、從一位藤原朝臣、表論忽至、雅懷具之、天才兼□采特秀、再繼秉右之蹤、禆二朝令攝政、更歷相國之儀、形四海而彰功、今有避讓之情、將逃輔佐之寄、朕雖□領□之禮、未及躬政之齡、然而屢披表章、愁許所請、凡萬機巨細、百官總己、乞皆關白於公、然後奏下、庶依保護之力、專安社稷之基耳、

久安六年十二月九日　作者大內記長光

上卿權大納言宗能　使左近權中將光忠朝臣

昨日被獻表、藏人頭朝隆朝臣申事由於一院之間、當時御坐鳥羽殿、臨深更、俄依所勞申不歸京之由、仍□□無勅答、翌日藏人頭伊實朝臣奏覽、有勅答也、

改攝政爲關白詔

詔、俯披皇圖、緬稽帝典、褒有德賞元功者、累聖之佳躅也、得良佐委庶務者、明時之彝倫也、古之賢君、猶

有弼以安王室、未〇未下恐有脫字之少子豈躬政績、以治朝家、從一位藤原朝臣、詔宣風化、負扆之寄年深、欽翼昊天、納麓之迫日積、爰卑謙無止、復辟守期、從〇從恐徙誤適攝行之清班、盍傳博陸之舊跡、夫萬機巨細、百官總己、皆乞關白、然後奏下、一如舊典、宜繼隆漢之盛事、以宜區夏之黎元、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

久安六年十二月九日　御畫

作者大內記長光

上卿權大納言宗能

中務權大輔季家奉行

正二位行權大納言藤原朝臣宗能宣、奉勅除目等雜事、宜令關白准攝政儀行之者、

久安六年十二月九日　大炊頭兼大外記主殿助助教加賀權介中原朝臣師業奉

〔山槐記〕治承三年十一月十六日庚午、早旦或者來曰、關白〇藤原基房并中納言中將師家年八、停任者、驚相尋源中納言雅賴返報曰、寅初剋稱左衞門尉者失名相具牛來曰、勅定也、不移時刻可參陣者、共東西馳參云云、頭中將通親朝臣仰云、關白藤氏長者、中納言中將等停任、又仰下云、內大臣ニ從二位藤原朝臣基通、關白ニ同人、氏長者同人、　十七日辛未、今夜被行臨時除目、〇中略關白內大臣、聽牛車、并勅授、可列左大臣上者、

〔源平盛衰記十二〕孝博稻荷社琵琶事

近衞入道〇藤原基實殿下ヲバ、其時ハ中殿トゾ申ケル、其御子ニ、二位ノ中將〇藤原基通トテ御座ケルヲ、太政入道〇平清盛聟ニ奉取テ、一度ニ內大臣ヨリ關白ニナシ奉ル、大納言ヲヘズシテ、二位中將ヨリ大臣關白ニナル事其例ナシ、是ゾ始ナル、節會モ行ハレ、大臣召ノ有事モアリ、先例アル事ニヤ、上卿モ宰相モ、大外記大夫ノ史マデモ、皆アキレ迷テ肝心モ身ニ副ヌ體也ケリ、去レバ是何故ゾト寤ナシ、

〔百練抄 十三後堀河〕安貞二年十二月廿四日、前攝政 道家 被下關白詔、卽爲氏長者、

〔五代帝王物語 後嵯峨〕新帝 〇後嵯峨 は二月 〇仁治三年 十五日に政始ありて、三月十八日に卽位あり、攝政 〇藤原兼經 は新帝踐祚のちは、關白とておはします程に、三月廿五日に改て、左大臣 良實公、普光園殿、 關白に成給、

〔葉黄記〕寬元四年正月廿八日戊午、三條中納言 公親 參仗座、頭中將雅家朝臣奉仰、以左大臣 〇藤原實經 可爲關白事宣下之、〇中略

初任次第

關白詔書事

當日依內々催、上卿以下參陣、

上卿一人 三條中納言公親　辨一人 右中辨親顯朝臣　大外記 師兼　大夫史 淳方　大內記 在宗　中務輔 少輔兼氏

職事承仰、頭中將雅家朝臣 著軾仰上卿云、以左大臣可爲關白令作詔書、藤氏長者隨身兵仗、此次同仰之、上卿召大內記於軾、仰詔書事、隨身事、作勅書者同仰之、次召外記、仰氏長者事、次召辨仰之

次內記、覽詔書草、兵仗勅書同覽之　上卿見了、以內記令覽新博陸亭、先例、必被仰淸書不可內覽之由、歸來、仰可淸書由、

次淸書了、進弓場殿奏聞、御覽了返給、次上卿歸陣、召中務輔下給詔書、

〔勘仲記〕弘安十年八月十一日己巳、今日以左大臣 師忠 可爲關白之由、令作詔書、宣下職事頭左中辨俊定朝臣、奉行上卿吉田中納言參陣、陣儀了、申刻官外記參本所、大外記師顯持參詔書、左大史秀氏宿禰持參藤氏長者宣旨、頭辨 可補執事 參仕申次之、主人無出御、以頭辨被傳召之、付女房進入之由、後日頭辨所相語也、

〔花園院御記〕正和二年七月十日戊戌、今日聞關白 〇藤原冬平 辭退云々、仍左大臣 〇藤原家平 可爲關白云々、

十二日庚子、關白宣下也、申刻奏宣命草、次奏清書、晝日返給、

〔公卿補任光明〕建武四年丁丑○南朝延元二年

關白從一位藤經忠 三十六、四月五日、出奔吉野宮、

○按ズルニ、後醍醐天皇南山ニ遷幸ノ後ニモ、關白ヲ置レタルコトハ、新葉和歌集ニ據リテ、僅ニ知ルヲ得レドモ、事蹟多ク湮滅シテ詳ナラズ、

〔新葉和歌集一春〕今上○後龜山いまだ御子におはしましける時、家に侍りける梅の花ををりて奉るとて、

福恩寺前關白内大臣○歌略

〔新葉和歌集一春〕文中四年○後龜山内裏にて、人々題をさぐりて、五十番歌合し侍ける時、海邊霞といふ事を、

關白左大臣○歌略

〔園太暦〕貞和二年二月廿九日、傳聞今日關白宣下也、右大臣○藤原良基奉之云々、其儀可尋記、兵仗牛車幷一座宣旨事、追可被申請云々、

〔續史愚抄光明〕貞和二年二月廿九日戊寅、此日右大臣良基關白氏長者宣下、於兵仗牛車一座等事者、依仁治三、正和五等例、後日可被申請者、上卿花山院大納言長定、

〔看聞日記〕應永卅一年四月廿二日、重有朝臣歸參語世事、一昨日任大臣節會、左府二條○藤原持基任關白、内一條府○藤原兼良轉任右大臣、右大將洞院○藤原滿基任内大臣云々、九條關白七ヶ年也、室町殿此間聊不快云々、仍白陸轉變云々、

〔看聞日記〕永享四年十月廿六日、今日於仙洞天皇○後花園御元服定事有儀仗、室町殿○足利義教被參云々、○中略抑前攝政二條○藤原持通再任、依御元服事被關白宣下、是先例云々、一條○兼良不及拜賀、無念事也、

〔公卿補任後花園〕文安二年乙丑

關白從一位藤房嗣 十一月廿三日詔

〔康富記〕嘉吉二年十月廿六日癸丑、或語云、博陸御當職事、今度就御理運可爲左大臣殿近衞殿○藤原房嗣之由有勅約、無子細之處、一條攝政殿○藤原兼良又被望申、其故者先度攝政御拜任、聽二條殿○藤原持通御還補之間、一條攝政殿不被申御拜賀也、攝籙御拜任未拜賀、御上表事、先例無之間、口惜被思食也、今度關白有御拜任者、忽被申御拜賀、早可有御辭退也、若被渡前無御拜任者、可有御隱遁之由、前攝政殿内々御述懷也云々、言語道斷御事也、仍此事自陽明被仰談管領畠山云々、兵部少輔相豐、大夫史時繁等、爲陽明御使節向畠山亭云々、又前攝政殿よりも内々被仰談管領畠山方云々、攝政關白之御當職事、被仰合管領之條、澆季之至歟奈何、

〔康富記〕文安四年六月十五日乙亥、今晚局務令立寄給、被示云、只今宣下事、可在之由、被相觸兩人之間、可構參之由也、可爲關白宣下云々、近衞殿○藤原房嗣曾無御上表之沙汰、雖然大相國○藤原兼良先度永享四年不及御拜賀、攝政令辭給之間、御再任事、强被申之、仍雖無御辭退、可有推任之由、就室町殿大方殿室町殿御母堂之内々被申候故、自大方殿有御執奏、然間御上表歟否事、自禁裏被尋申近衞殿之所、未及御辭退、尙暫可爲御當職之由、御返事被申入云々、爲御執奏上者、不能是非歟、今及此宣下者也、承及分自一上兼日連々被申入、其故者、陽明若御上表之儀候者、任次第理運、可有御拜任之由、被出御所望云々、一條殿者、被最屓申方々多之間如此歟、又鷹司殿一代御中絶候間、不可叶之由、於禁裏有申旅云々、一心院殿○藤原冬通者、已爲御當職、左大臣殿○藤原房平御祖父也、後一心院殿○藤原冬家者、未被遂御先途先公也、於一代中絶、先强不可苦者歟、近衞殿御流者、後淨妙寺殿○藤原經平未御當職、是一代御中絶也、於一條殿御流者、棲心院殿○藤原内實不爲御當職、此兩家已有一代中絶之御例上者、尤爲准的歟云云、但棲心院殿者、内覽宣旨令蒙給、後淨妙寺殿者、不及内覽宣之間、一條殿之仰、無内覽宣者中絶也、有内覽宣者、不可謂中絶之由被申云々、於内覽者、雖非攝家、又令蒙給之條有例、又不可依内覽宣之由、有御沙汰云々、入夜予著朝衣、參陣之處、少内記不參、六位史又不參、勤代之仁無之、隼人參陣可然

之由、局務被示之間、予退出、召進康顯畢、此間天下庶人、三日疾幷咳病流布、官務高大史左一皆此違例之故不參云々、關白宣下、幷條々宣下也、上卿權大納言宗繼卿、職事頭右大辨資綱朝臣、官方左中辨敎忠朝臣、局務大外記業忠眞人、少外記中原康顯、少内記大内記菅原在治等參陣、關白事被載詔書、兵仗事、見勅書、氏長者、牛車等事、召大外記被宣下之、氏長者事、召左中辨被宣下、但五位六位史不參、後日辨可仰官務之由、被示之云々、詔勅大内記草進之、少内記康顯持參之、從上卿被返下之後、内記退入、更召外記康顯被問中務參否、申不參之由、然間上卿可傳給之由仰之、詔勅被下外記康顯了、其後召大外記仰兩條氏長者、牛車等次召辨仰氏長者事云々、關白兵仗事、雖不仰外記、成加宣旨之條、流例也、殊故淨恩寺殿、應永六年御嘉例如然、仍今日外記宣旨皆被載之、兵仗事府生各一人、番長各一人、如此成之儀モアリ、又今夜兵仗仰詞、自本所大相國内注被遣職事、御折紙云、近衞六人トアリ、雖然近衞各三人之由、被成注之、皆先例也、依命宣旨兩通、予染禿筆了、

從二位行權大納言藤原朝臣宗繼宣、奉勅万機巨細、宜令太政大臣關白者、

文安四年六月十五日　　大外記清原眞人業―奉

從二位行權大納言藤原朝臣宗繼宣、奉勅關白太政大臣、宜如舊爲藤氏長者、左右府生番長各一人、近衞各三人爲隨身、乘車出入官中者、

文安四年六月十五日　　大外記清原眞人業―奉

局務東帶宣旨兩通被持參申、一條殿以家司藤原幸房朝臣前右中辨、衣冠被進上之、其後有御對面云々、官務宣旨氏長者、後日可成進云々、詔勅爲中務輔代、被下外記康顯、仍不及寫進者也、

〔親長卿記〕文明十一年二月卅日、此日右大臣政家公、近衞、蒙關白詔給、先是關白九條基敎公、去廿七日辭退御職云々、可有辭退之由、内々有武命云々、陽明被競申故歟、元長奉行也、○註略先日野中納言廣光著仗座、奥元長進出仰仰詞、以右大臣爲關白藤原長者令作詔書、兼隨牛

車內覽万機セシメヨ、賜左右近衞府生各一人、左右近衞各四人、爲隨身兵仗、令作勅書ヨ、職事退入、〇註略上卿召內記仰詔書勅書等事、大內記不參、少內記參進奉之退入、入兩通之草於筥、十五年二月廿五日、詣鷹司前左府、今夜令任關白給也、自前官任關白之例三ヶ度云々、今日有關白宣下、前左大臣政平有詔、奉行藏人左少辨俊名也、今夜條條有宣下、上卿藤中納言緣光辨俊名、十九年二月九日、今日有關白宣下事、九條前內府政忠蒙詔給云々、

長享二年八月廿八日、申剋許有宣下事、內大臣冬良公令蒙關白詔給、上卿中御門中納言宣胤職事藏人左少辨宣秀云々、

明應二年三月廿八日、今夜有關白宣下云々、上卿中御門新大納言宗綱奉行藏人左少辨守光云々、

一條關白冬良公辭退、右府尙通公蒙詔給云々、

〔和長卿記〕明應六年六月十八日戊子、今朝有陣儀、上卿中御門大納言、奉行職事右少辨尙顯、右大臣二條〇藤原尙通殿任關白給、久我大納言任內大臣、關白詔書、昨夕以內々付頭辨畢、今朝宣下爲早速也、今度御例被用享德二年例云々、大染金剛院關白初度也仍隨身兵仗以下宣下、勅書也今日被略之可爲他日也、於彼門家者、關白初度之時隨身兵仗、同日宣下無之、代々御例也、詔書草注左、淸書黃紙、草宿紙也、

詔、藤尙基關白詔聖君必擧賢臣、如月配日、左輔兼濟右弼、同陰遇陽、執政九人、久雖得持寶祚、禮樂三代、恐是叨以庸菲、思羽翼之功、重假股肱之力、右大臣藤原朝臣、才器微缺、文質克調、匪合符節於朝廷、況立杜礎以下例文於邦國、夫萬機巨細、百官總己、皆先關白、然後奏下、一如舊典、庶賚書甸之嘉模、莫墜師尙父之遺美、已上例文也布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

明應六年六月十八日御畫也

淸書無闕字、草置闕字、是詔勅宣命等之爲故實、執政者關白也、九人者、當今自卽位至今關白九人也、於右府者十人也、先前職九人擧之也、猶依假執政之力任之儀也、

大染金剛院關白通〇持　寛正四四三再任三箇度今上代始三年爲常職之間最初取之也　後成恩寺關白兼〇冬兼　應仁元五十再任三箇度

如法院關白嗣〇政　文明二八十任之　九條前關白基〇政　同八五十五任之

准三后近衛前關白家〇政　同十一二卅任之　鷹司前關白平〇政　同十五二廿四任之

普門寺關白忠〇政　長享元同十九二九任之　太政大臣一條前關白兼〇冬　長享二八廿八任之

前左大臣近衛前關白通〇尙　明應二三廿八任之

已上九人、於右大臣殿爲十人、不加其數者、今新任之詔今日下之故也、申剋一點參殿下申入祝事、畢有御對面進太刀、金後聞今夕、爲御禮關白參內、被著衣冠云々、卽於議定所御對面之由、局物語畢、此事先規不審條々也、關白奏慶以前參內、以外之儀也、況被著衣冠事、是又言語道斷也、其子細者、關白初任之時者、必祝新調也、其紋非普通、故不用尋常袍者也、今度無新調之儀、又非關白袍云々、旁以沙汰外也、其上未拜賀之時、參內不可有證例、以下委自長橋不被申歟、又强不可及參賀歟、共以不審也、又、世間同有此沙汰云々、當其儀者哉、　十月廿三日辛卯、今日有關白宣下、〇藤原兼冬　午剋參仕一條殿、陣儀畢後召參候、上卿中山中納言、宣親奉行職事頭辨宣秀朝臣、六位外記兼少內記安倍盛俊、英同、盛遠兩人持參詔書宣旨等、頭辨爲家司、卽取次之、依無宣旨、局家司直持參之、今度詔書不可進之由、依仰予示此旨於頭辨畢、凡詔書勅書者、仰中務省被施行之間、不可進御亭也、然近年皆令進之、結句被留置之也、尤違先例之上、事儀亦不可然、仍今度被仰不可進之由、故內記每度被召詔書草也、今日令用意持參之、近代寔無此沙汰、今度勅書被略之、是又爲御嘉例、但後成恩寺關白、文安四年六月十五日御再任、於此時者有勅書、其外者皆被略之也、先光明峯寺關白、安貞二年十二月廿四日、御再任無勅書、仍隨身兵仗牛車長者等如舊ト有仰詞也、以此旨官外記成宣旨也、以此例應永六年四月十九日、成恩寺關白御再任無勅書、以兩度例今度同被略云々、今日之儀、主人御小直衣也、於再任者、近代不嚴儀也、有一獻、人々退出、詔書記左、

藤冬良關白詔

詔、庸菲在躬、曾耻不及堯舜、賢佐以汝、今嘉如視伊周、偏爲足嘉猷、敢莫倦政績、從一位藤原朝臣、朝廷元首、社稷重臣、規矩有中、擅仁經義緯、美言行無擇、〇中略

明應六年十月十四日　宣旨

〔宣胤卿記〕永正十五年三月卅日己巳、今日內相府尹房公、廿三歲、關白詔宣下也、鷹司殿兼輔公去廿七日被辭申、未拜賀也、重服也、奉行頭左中辨伊長朝臣、上卿中納言宣秀卿、巳刻參內、先遂著陣、敍正二位後、藏人方吉書官方申文略之伊長朝臣下之、次詔宣下、職事仰詞、以內大臣關白万機令作詔書、又爲藤氏長者、以左右近衞府生各一人、近衞各四人爲隨身兵仗、乘牛車令出入宮中、此仰詞普通儀也、近代二條殿御流、兵仗牛車事他日云々、當時陣儀不輒、只同日可然之由申定了、又內覽事不及宣下、午許剋、陣儀了、中納言退出、次第在別紙、經剋內相府御衣冠御輿令渡此亭給、〇中略宣旨御覽事、代々女房宣旨持參云々、當時無其人、假可爲中納言息女之由被仰定、次少外記小槻通昭持參宣旨、關白、氏長者、牛車、兵仗、一座、著障子上、以奏者所爲其所、大外記師家朝臣觸穢不參、於宣旨者成上之申次侍從氏賢衣冠、進通昭前、取宣旨、入宮、經簀子於簾外付女房、著赤袴、主人衣冠、奧北面、御覽了留宣旨返給宮、〇中略

一今日大內記菅原爲康不參、少內記中原康友參陣、下行事外記史內記陣官人各二百疋給之、三人內一人ハ兼之口事也、今度問答申異儀、終三人所參也、此下行亂陵新儀也、本家下行友同前、軾下行五十疋、是又自去年加增云々、元ハ二ヶ也、非新調、只持參訪也、又陣疊三十疋非新調事、同前、上卿著陣下行三十疋、此內ニテ陣官陣疊軾下行、遣陣官可支配之由仰了、

〔言繼卿記〕天文二年二月五日戊寅、關白事、此間種々相論也、仍今日從大樹諸司ニ參候由、可爲曲事之由、大館內富森彌四郎爲御使申入候、雖然堅爲禁裏被仰付候、仍兩局不參也、五ツ時分參集、關白宣下上卿万里小路中納言秀房卿、辨息惟房、史三善英名也、吉書藏人方計也、次起座、更著奧座、辨以內大臣〇藤原稙通爲關白、幷氏長者、一座、牛車、兵仗等宣下仰之、次上卿移端座、行事了、次二條前關白尹房公准三宮宣下有之、十四年六月二日癸巳、中御門來臨、今夕關白宣下治定之由了、〇中略六過時分參集、剋限著仗座、

（奥同上存之時、雖納言著亞相之座程、今度予失念、著納言座無念也、）職事（宣治朝臣、頭右大辨、）來仰、其詞、以左大臣（○藤原房通）關白万機令作詔書、又藤氏長者以左右近衛府生各一人、近衛各四人爲隨身兵仗、次予移端座、（每度座指不及注也）次召官人仰軾敷之、次以官人召大内記、少内記康雄著軾、仰云、以左大臣關白万機令作勅書、次詔書以左右近衛府生各一人、近衛各四人爲隨身兵仗、令作勅書、次詔書（紙屋紙草）持來（入筥）置笏覽之、詔勅可爲二通之處、一通持來不審之處、答云、大内記如此被示云々、則押遣、内記立小庭、次予起座出宣仁門、於便所勅書草之事、猶尋問、勅書加入、就弓場代奏聞、内記從之、職事（宣治朝臣）出指笏取筥職事ニ渡之、（乍筥）被直渡了、取之入無名門、上小板敷經上戸從臺盤所妻戸奏聞、則被返出、職事持參、予懷中笏取筥、職事仰云、令清書、次持内記復座、内記置筥則押遣、仰云、令清書、内記（於軾自懷中取出之間、予令氣色、令立於軾、清書如何、）退入、次令清書詔勅（黄紙）二通持來、置前置笏取之（乍筥、每度同之、）覽之、（於筥中見之二通）次押遣、内記取之立小庭、予起座奏聞如前、（前時、奏聞之於弓場、）（清書取替之儀、爲早速、善説歟、但予同上、初而參勤之間、兩度奏聞）被入御畫字返給、指笏取之、乍持内記披見之、御畫字見有無、次復陣、内記置筥前退入、次以官人召外記、（少外記伊昭）外記候小庭、予目唯稱著軾、（每度如此）仰云、中務ハ候や、答云、候ハス、置笏押遣筥、仰云、中務ニツタヘタベ、外記退入、次以官人召外記（伊昭）仰云、以左大臣關白万機爲藤氏長者、次以官人召辨、（其詞左中辨コナタヘ、）辨著軾、仰云、關白左大臣爲藤氏長者、辨於床子仰史（右大史通昭）云々、次可起座之處、任大臣被付行之間、相待職事（國光朝臣）仰仰詞、（大辨不著軾之間、宣治朝臣與奪云々、）其詞内大臣（公彥公、菊亭、）ヲ右大臣ニ、左近大將藤原朝臣（晴良公、二條殿、）ヲ内大臣ニ、次以官人召外記、仰云、其詞同職事、次職事仰云、内大臣左近大將如元、次召外記仰之、詞同前、次召官人撤軾、次起座退出、無上首之間、一座宣下無之、先年被申請之間、内覽之事同無宣下、又及四ヶ條之間、牛車宣旨無之、重被申請也、

廿二年正月廿二日己亥、（關白宣下）廣橋黄門著陣、次關白（○藤原兼冬）宣下、關白氏長者内覽左右近衛府生各四人、近衛各六人爲隨身兵仗、可令列前左大臣上之由等也、作法如常、奉行職事頭中將重保朝臣參陣、辨權辨經元、中務極﨟源爲仲、少外記康雄、同伊昭、内記盛厚等也、

〔公卿補任 正親町〕天正十三年 乙酉

關白正二位藤昭實 三十、七月十一日辭、

從一位同秀吉 五十、七月十一日詔、

〔太閤記 七〕關白職幷家臣之面々任官之事

近年〇天正十三年頃大嘗會之政も打絶、百官之勤も有か無か計にあはれなりしを、大嘗會取をこなはれ、內裏の東に院御所を造進し、太平之御代と成にけり、因之秀吉にも官職推任し給ふべき旨、うち〳〵の御さたなりしを、秀吉卿且聞給ふて、折節攝家之內として、關白職之爭おはしまして、闕職及兩年、萬事晦盲せしにより、秀吉此職を望み給ふ、許し給はん事內にもいかゞ有けんとおぼし給へ共、大臣家より、只許し給ふて可ならんと、諫を奉りしかば、卽勅許なし給ふ、

〔多聞院日記〕天正十三年七月十一日、秀吉ハ一昨日歟在京、今日ヨリ京中へ躍申付、於內裏見物云々、內大臣ニ成上、近衞殿大御所ノ猶子ニ申合了云々、則關白ヲ可持歟ト云々、先代未聞ノ事也、〇中略今度近衞二條殿關白申事爲折仲、秀吉關白ニ任云々、抑中々不及言慮事也、　十二日、秀吉明日十三日關白拜賀在之、

〔公卿補任 後陽成〕天正十九年 辛卯

關白從一位豐秀吉 五十六、十二月廿八日辭、

關白正二位同秀次 二十四、十二月廿八日、詔關白、

〔季連宿禰記〕天和二年二月廿四日壬寅、今日一條殿 冬經公、于時右大臣、爲關白宣下、刻限巳一點仍刻限著束帶參陣、局務其外諸司等同道、布衣二人白張、沓持、笠持、用乘物、良久相尋刻限、公卿廿亞相出陣、其儀如次第、

關白　宣下

上卿著仗座、奧職事來仰仰詞、　其詞以右大臣藤原朝臣可爲關白令作詔書勅書、以左右近衞府

生各一人、近衛各四人、爲隨身兵仗、乘牛車、令聽出入宮中、幷可爲內覽氏長者、
次上卿移端座、令官人敷軾、次上卿以官人召大內記、大內記來、軾、上卿仰云、以右大臣藤原朝臣可
爲關白、令作詔書勅書ヨ、
次內記持參詔勅草、入筥、次上卿披見以官人招職事奏聞、奏聞畢返給、次上卿以官人召內記、仰淸書事、
次內記持參淸書、次上卿披見畢就弓場殿奏聞、內記相從、次職事奏聞畢返給、見御畫有無、次上卿歸陣、以官人
召外記、問中務輔參否、次上卿以官人召中務、賜詔勅、不參之時下外記、　仰云、中務ニ傳給ヘ、
次上卿以官人召大外記、仰仰詞、　以右大臣藤原朝臣可爲關白、以左右近衛府生各一人、近衛各四
人、爲隨身兵仗、乘牛車、令聽出入宮中、幷可爲氏長者、
次上卿令官人召辨、上卿仰云、以關白右大臣藤原朝臣可爲內覽氏長者、次職事來、軾云、以關白右大
臣藤原朝臣、宣令列左大臣上、次上卿以官人召大外記、仰仰詞、如職事、　次上卿以官人令撤軾退出、

右次第昨日自奉行賜之書寫、○中略

今日宣下以後予直參一條殿下御亭、兩局宣旨持參、中務詔勅持參也、兩局宣旨兼而用意入覽筥、令持副使、中務輔詔勅同入覽筥、令持布衣、○下略

〔槐記〕享保十一年六月廿八日、參候、御次ニテ、山科殿○山科參議從三位持言卿、元文二年薨去、八十一歲、ヨリ獻上ノ花筒、
ナラビニ石州ヘノ御狀アリ、是ニ付テ收如石ノ話ニ、此山科殿ハ只人ニハアラズ、先朝ヲ引込
レシ初ヨリ由アルコト也、昔シ禪閤ノ基熙公、○近衛基熙公、延寶五年左大臣、元祿三年關白、左府ニテ任セシニ、一條
ノ冬經公、○一條冬經公、延寶五年右大臣、天和二年關白、右府ニテ關白拜任ノコトアリシヲ、世ニ恨メシキコトニ思
テ、昔ヨリ越階ノタメシナキニシモアラズ、タトヘバ其任ニ當ル人、ソノ器ニ非ヂバ是非ナシ、
禪閤ノ器ニ當ンニ於テ何カ有ン、是ヲ名ヅケテ亂階ト云、亂階ノ朝ニハ共ニ立ガタシトテ、終
ニ病ヲ以テ蟄居ス、○下略

〔季連宿禰記〕元祿三年正月十三日乙巳、辰半剋許、自藏人頭右大辨賴重朝臣一通來、其後著束帶令

參陣也、

今日可有宣下之事、任例可被沙汰之狀如例、

正月十三日　右中辨判

四位史殿

追而

可爲關白宣下、剋限辰一點之也

一無程而令參陣、宣旨二通用意之、陣儀了于直爲可持參也、布衣一人沓笠持等召供之、諸司各參集之後、良久相待、午剋許陣儀被始行、詔勅草奏聞已前有院奏、淸書之時不及院奏、其外之儀如次第歟、次第記之、

關白　宣下〇中略

上卿權大納言(中御門)資熙卿、奉行職事頭右大辨(葉室)賴重朝臣、參仕辨藏人右中辨(甘露寺)輔長、大內記(高辻)長量朝臣、四位大外記師庸朝臣、四位史季連、權少外記中原定淸、兼少內記役右少史小槻陳昭、初參也、進退以下神妙、中務輔職永、召使宗岡行量、同種行、件兩人兼外記官宣旨副使役陣官人某、大藏省弘之、主殿寮職方、掃部寮使部等也、

一陣儀了後、大外記予持參宣旨、副使幷使部等召具之、各垂裾著之、入四足門著殿上次間、此所設紫端疊、昇沓脫之時、自副使取覽筥也、持筥之故不沓揖、筥置前板敷上、令座揖、座北上西面也、直□左膝之後綠裾前著也、外記座定之後、予參著如外記、次家司、四位靈客也、時香朝臣歟、著殿上、次家司目外記、外記揖取筥起座、經殿上跪寢殿妻戶前、窺御氣色之後進御前、兩三步膝行云々、予不見之、置筥退候妻戶外、主人御覽了、留宣旨返給空筥、外記取之退去、次予不待家司目、于直可進之由、兼々有家司示、予直取筥起座、欲進御前之時、家司留予、而家司取筥持參御前、予退還著本座、次家司持空筥還著殿上、返給空筥、聞食之由仰之予取空筥退去、

天和二年、一條殿關白宣下之時、外記官宣旨于直持參御前覽主人、今度外記宣旨者、于直持參御前、官宣旨者付家司覽之也、此事先規可考、所詮隨時宜之間、萬端不述所存者也、又今日官宣

旨、付家司可覽之旨者、家司兼而無其示、臨期予二三歩行過之條、其體似忘却、尤家司兼而無其示之段奇恠也、

一官宣旨二通每一通加懸紙入覽筥、自門中令持副使種行、其儀如恒、

〔章弘宿禰記〕寶永四年十一月廿七日、今日關白宣下〇近衞殿家熈也、刻限卯一點也、

〔續史愚抄中御門〕享保十一年六月一日壬戌、關白綱平、前左大臣、辭職、左大臣家久有關白、氏長者、內覽、牛車兵仗等宣下、上卿花山院大納言常雅奉行藏人頭右大辨俊將朝臣、

〔大江俊冬記〕安永七年二月八日亥

一關白宣下〇藤原尙實關白宣下陣儀ニ付、卯刻過、予一人參內、奉行頭右中辨參仕、告臺盤所奏聞構如例、次陣座設幷諸司參否問、追々出仕之旨也、藏人方各參仕、殿上設宣旨也、辰刻許陣座設出來、諸司各參畢、奉行ヘ悉宣旨申入置、先刻上卿參仕、依之早速言上、暫而被始先陣座、上卿參著次第略之荒增書、巳刻比奏聞、於弓場代先草ヲ奏聞奉行於妻戶內侍附返給後、於弓場代、上卿ニ被返、直ニ弓場代ニ而清書ヲ取、上卿披閱、宮內見畢直奉行付、奉行附內侍奏聞、御覽畢返給奉行、上卿返退入、上卿陣座向、暫時相濟、于時巳半刻過、上卿ハ陣ヨリ直退出也諸司各撤却退出申渡、藏人方ハ直ニ居之由也、今日御著陣無之旨被申渡、

上卿　柳原大納言紀光卿　　辨　坊城右少辨俊親　　大內記　東坊城大內記益良朝臣

中務　樋口中務大輔宜康朝臣〇中略

一未半刻許九條殿下御參、四脚門ヨリ床子經無名門立給、申次頭右中辨復命節、殿下被受口損ヲ、篤長朝臣地膝、

御拜舞畢小板敷ヨリ殿上端疊著給、尤厚疊先刻ヨリ御塞也、著座之後、四位五位六位職事耆御座簀子候、出御、各平伏、奉行侍中御氣色受殿上上戶邊ニ而告召畢退復座、次殿下渡殿ヨリ臺盤所南孫

庇經御前參進、晝御座南第二間菅圓座聊押遣旁座給、不著圓座、裾クリ向御前御氣色アリ、殿下深揖、暫而又一揖退入、主上入御、各平伏、御服御引直衣と拜也、御裾經逸朝臣被候、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十一年九月十六日癸卯、關白宣下也、○中略

一散狀三通奉行被渡下給、兩局出納等如例、藏人亦一通給之、如左、

關白宣下

上卿　醍醐中納言

辨　光成

一陣儀上卿備忘、幷殿下御拜賀儀等兩通、奉行被爲見之、寫取令返却、兩局出納亦陣儀次第依所望各申奉行令一覽了、件次第在別、仍不注于此、

一官務尋申曰、詔書施行之官符、天明七年、寬政七年等鷹司家之時、兩度共有之、寬政三年一條家之時無之、今度寬政三年之通無之、覺悟宜哉、爲念一應承置度由也、其旨申入奉行處、被相調後無之旨被示、仍其旨申聞官務了、

一陣裝束以下諸司等具否相糺、申入奉行處、中御門辨依遲參可催促被示、命出納差遣小舍人令催促了、依仕人無出仕也、雖有使部、依爲早參之人、藏人方之者差遣可宜歟、愚存也、仍仰出納令如是了、

一巳半刻許陣儀被始、奉行被示觸、仰兩局出納等、上卿醍醐中納言、輝弘卿、辨光成、廣橋藏人左少、其外中務大輔師光朝臣、北小路、大內記聽長朝臣、東坊城、等各下殿、參陣之後奉行職事定成朝臣、今城頭右中將、降自殿上小板敷、經御後參陣、仰仰詞於上卿、以左大臣（藤原忠冥）可爲關白令作詔書、以關白左大臣可爲藤原氏長者、以左右近衞府生各一人、近衞各四人、可爲關白左大臣隨身、可令乘牛車出入宮中等之事也、上﨟在奧座、職事猶作垂裾仰之如何、此時予昇降女官階相從到陣後、又相從歸來如例、但歸路奉行暫蹰躇、東階邊見上卿、召大內記仰詔書、勅書之事、歸來即有言上也、

一須臾出御朝餉御座、奉行被示、即觸仰出納、早參職事定成朝臣、經定、光成、先是實無下殿歟、入御之後早々經御後參陣也、遺高戸時侍之、井辨條藤原助功、源常顯、大江俊常、予等列候馬形障子邊、後明朝臣、經則等不參也、此間上卿率內記令持詔書勅

書等草二通入筥、來立弓場、定成朝臣迎取參進朝餉簾下奏之、天覽畢返給儀如常、少時上卿再來立弓場、奏詔書勅書等、清書定成朝臣、又迎取參進朝餉簀子奏之、御畫之後返給、上卿見御畫有無、復仗座、召中務大輔、賜詔勅兩書、仰可施行之由、又召外記及辨、各仰仰詞、畢起座也、此間入御、職事退入、陣儀畢事藏人告奉行、奉行言上如例、

〔公卿補任孝明〕文久三年

關白從一位藤輔熙五十七、正月廿三日、詔爲內覽氏長者、賜隨身兵仗、聽牛車、賜一座同日拜賀、(中略)十二月廿三日、辭關白內覽氏長者隨身兵仗等、

同齊敬四十八、十二月廿三日、詔爲氏長者、賜隨身兵仗、聽牛車、

〔外樣言渡之記五〕慶應三年十二月廿八日

王政復古ニ付、攝政關白內覽等、自今被廢候事、

〔續世繼五三笠の松〕このおとゞ法性寺藤原忠通〇保安二年のとし、關白にならせ給、御とし廿五にぞおはしまし丶、同四年正月に、さぬきのみかど、〇崇德くらゐにつかせ給しかば、攝政と申き、みかどおとなにならせ給て、關白と申しほどに、近衞のみかど位につかせ給しかば、又攝政にならせ給き、久壽二年七月、この衞のみかど、かくれさせたまひて、この一院、後白河位につかせ給しにも、又關白にならせ給しかば、四代のみかどの關白にて、ふたゝび攝政と申き、昔もいとたぐひなきことにこそ侍けめ、おほきおとゞにも、ふたゝびなり給へりし、いとありがたく侍りき、藤氏の長者さまたげられ給しも、左のおとゞ宇治賴長のことにあひ給しかば、保元元年七月に、さらにかへりならせ給にき、同三年八月十六日、二條のみかどくらゐにつかせたまひし時、いまのとの丶松、藤基房、御あに丶おはしまし丶、右のおほいまうちぎみ六條攝政基實に、關白ゆづりきこえさせ給て、〇下略

〔五代帝王物語龜山〕關白は、弘長元年四月廿九日に改りて、二條前關白良實公、普光園院殿、成返給ふ、

〇按ズルニ、良實先キニ仁治三年三月關白ト爲リ、寬元四年正月關白ヲ罷メ、此年又關白トナ

リシナリ、

〔五代帝王物語龜山〕文永二年閏四月十八日に、左府、〇藤原實經關白に成給、

〇按ズルニ、實經先キニ寛元四年正月關白ト爲リ、同月攝政ニ轉ジ、同五年正月攝政ヲ罷メ、此年又關白トナリシナリ、

〔公卿補任後小松〕嘉慶二年戊辰

關白從一位藤師嗣三十三、六月十二日還補、

應永五年戊寅

關白從一位藤師嗣四十三、四月九日還補、

〇按ズルニ、師嗣先キニ、永和五年八月關白ト爲リ、永德二年四月罷メ、嘉慶二年六月又關白ト爲リ、明德五年康永元年五月罷メ、此年又關白ト爲リシナリ、

〔公卿補任後小松〕應永六年己卯

關白從一位藤經嗣四十二、四月十九日還補、

應永十七年庚寅

關白從一位藤經嗣五十三、十二月廿日還補、第三度

〇按ズルニ、經嗣先キニ、應永元年十一月關白ト爲リ、同五年三月罷メ、同六年四月又關白ト爲リ、同十五年四月罷メ、此年又關白トナリシナリ、

〔宣胤卿記〕明應六年十月廿三日、關白宣下、一條殿前關白前太政大臣冬良公、再任第二、御歲三十四、上卿中山中納言宣親、辨頭左中宣秀朝臣奉行、大內記和長朝臣不參、少內記安倍盛俊參陣、於詔書者、和長朝臣作進、四位外記史不參、六位外記安倍盛俊、六位史同盛遠參陣、仰詞從一位藤原朝臣冬良如元可關白万機、依安貞二年例、令作詔書、牛車兵仗、藤氏長者如舊、

陣下行事也、百五十疋タヽノ分也、初任二百疋宛也、

百八十疋外記內記兩人分凡百五十疋宛分ニテ、內記分ニ三十疋加增、父子參候間如此云々、　五十疋六位史依有官務中ニ子細、少分也、　百七十疋陣官人可為二百疋之由堅申之間、百五十疋外二十疋加增云々、

以上夏弘於本家問答定之、軾陣疊等下行如例也、此下行事亂以來事也、

〔公卿補任 後奈良〕天文五年丙申

關白從一位藤稙家三十五、十一月一日詔、再任、

〔言繼卿記〕永祿十一年十二月十六日辛卯、今日關白宣下二條准后晴良公關白御再任宣下陣儀有之、奉行中御門右少辨宣教也、午剋云々、申下剋及秉燭、上卿源中納言重保、庭田、予庭田へ衣文ニ罷出、於同亭右少辨令著束帶、次極﨟以繼於臺所令著之、深雪之間不及見物、關白、氏長者、兵仗、牛車等云々如例、但御再任ニ兵仗、牛車、更不申請之段、不審之至也、可尋、

〔續史愚抄 後陽成〕慶長五年十二月十九日己丑、准后前關白兼孝、前左大臣、有關白、氏長者、及內覽、牛車、兵仗、准后等如元、左大臣還任、或作去十五日、等宣下、氏長者、天正十三年後被止之、關白者、文祿四年後補也、上卿万里小路大納言充房、奉行藏人頭左中將基繼朝臣、此日關白左大臣兼孝奏慶、諸家傳、公卿補任註記、

〔續史愚抄 後水尾〕慶長二十年○元和元年七月廿八日壬寅、准后前關白昭實、前左大臣、有關白、氏長者、內覽、牛車、兵仗等宣下、上卿中御門大納言資胤、奉行藏人頭左中辨兼賢朝臣、

關白不帶正官

〔公卿補任 後冷泉〕康平三年庚子

關白從一位藤頼通六十九、七月十七日、重上表辭左大臣、

康平四年辛丑

關白從一位藤頼通七十

太政大臣從一位同頼通十二月廿一日任

讓關白

康平五年壬寅

關白太政大臣從一位藤頼通七十一、正月十四日、上表、辭ニ太政大臣并隨身近衞等一、勅答不レ許、九月二日重上表、同表勅答依レ請罷ニ太政大臣一、

○按ズルニ、關白ハ藤原基經、忠平、頼忠等ノ太政大臣ヲ帶シ、藤原頼通ノ内大臣ヲ帶シタル如ク、皆正官ヲ帶シタルニ、頼通ニ至リ、左大臣ヲ辭シ、關白ヲ以テ事ヲ行ヘリ、以後此例ニ倣フモノアリ、

〔公卿補任後三條〕治暦五年己酉○延久元年

關白從一位藤敎通七十四(中略)八月十三日、遂辭ニ左大臣一、

延久二年庚戌

關白太政大臣從一位藤敎通七十五、三月廿三日甲寅、任ニ太政大臣一、

延久三年辛亥

關白太政大臣從一位藤敎通七十六、八月十日上表、辭ニ太政大臣一、

〔大鏡五太政大臣兼通〕ほり川殿、○藤原兼通はてはわれうせ給はんとて、關白殿をば御いとこのよりただのおとゞにゆづり給ひしこそ、よ人いみじきひがことゝそしり申しか、此むかひをるさふらひのいふやう、東三條殿○藤原兼家のつかさなどとりたてまつらせ給ひしほどのことは、ことはりとこそうけ給はりしか、をのれがおほぢおやは、かの殿のとしごろのものにて侍りしかば、こまかにうけたまはりしは、この殿たちのあにをとゝの御中、としごろのつかさ位の、をとりまさりのほどに、御中あしくてすぎさせ給ひしあひだに、ほり川殿の御やまひをもくならせ給ひて、今はかぎりにておはしましゝほどに、ひんがしのかたに、さきをふをとのすれば、御まへに候人たち、たれぞなどいふ程に、東三條の大將殿まいらせ給ふと人の申ければ、殿きかせ給ひて、としごろなからひよからずしてすぎつるに、今はかぎりになりたると聞て、とぶらひにおはするにこ

そはとて、おまへなるくるしきものとりやり、おとのごもりたる所、ひきつくろひなどして、いれたてまつらんとてまち給ふに、はやくすぎてうちへまいらせ給ひぬと人の申に、いとあさましく心うくて、おまへに候人々も、おこがましくおもふらん、おはしたらば、關白などゆづることなど申さんとこそ思ひつるに、か丶ればこそ、としごろなからひよからですぎつれ、あさましくやすからぬ事なりとて、かぎりのさまにてふし給へる人の、かきおこせとのたまへば、人々あやしとおもふほどに、車にさうぞくせよ、御前もよほせとおほせらるれば、物のつかせ給へるか、うつし心もなくておほせらる丶かとあやしく見たてまつるほどに、御かぶりめしよせて、さうぞくなどせさせ給ひて、うちへまいらせ給ひて、陣のうちはきんだちにか丶りて、たきぐちのぢんのかたより、御前へまいらせ給ひて、こうめいちのざうしのもとに、さしいでさせ給へるに、ひの御ざに東三條大將、御前にさふらひたまふほどなりけり、この大將殿は、堀川殿すでにうせさせ給ひぬときかせ給ひて、うちに關白の事申さんと思ひ給ひて、この殿の門をとをりて、まいりて申たてまつる程に、ほり川殿のめをつ丶らかにさしいで給へるに、みかども大將もいとあさましくおぼしめす、大將はうち見るま丶にたちて、おにのまのかたにおはしぬ、關白殿御まへにつゐ給ひて、御けしきいとあしくて、さいごの除目をこなひにまいり給へるなりとて、藏人頭めして、關白には賴忠のおと丶、東三條殿おと丶をとりて、小一條のなりときの中納言を、大將になしきこゆる宣旨くだして、東三條殿をば治部卿になし聞えて、いでさせ給ひて、ほどなくうせ給ひしぞかし、心いぢにておはせし殿にて、さばかりかぎりにおはせしに、ねたさにうちにまいりて申させ給ひし程、こと人すべてもなかりじ事ぞかし、されば東三條殿つかさとり給ふ事も、ひたぶるにほり川殿のひざうの御心にも侍らず、ことのゆへはかくなり、關白は次第のま丶にとゐふ御ふみ、おぼしめしより、御いもうとの宮に申て、とり給へるも、さいごにおぼす事どもして、う

せ給へる程も、思ひ侍るに、心づよくかしこくおはしましける殿也、

〔日本紀略一條九〕正暦元年五月八日、關白太政大臣從一位藤原朝臣兼家落飾入道、(年六十二)法名如實、同日、詔令內大臣藤原朝臣道隆關白萬機、

〔江談抄一攝關家事〕大入道殿令讓申關白於中關白給事

大入道殿、(○藤原兼家)臨終召有國曰、子息之中以誰人可讓攝籙乎、有國申云、令執權者町尻殿歟云々、是道兼之事也云々、又令問惟仲、惟仲申云、如此事可有次第之理也云々、令問大夫史國平、國平申旨同惟仲、依二人之說、遂被讓申中關白、(道隆)關白攝籙之後被仰云、我以長嫡當此任、是理運之事也、何足喜悅、只以可報有國之怨爲悅耳云々、故無幾程及除名父子被奪官職云々、

〔江談抄一攝關家事〕町尻殿御惱事

町尻殿(道兼)所惱危急之時、有國令申云、書讓狀可被讓所職於入道殿(○道長)者、栗田殿(○道兼)被命云、關白者非書讓狀之事云々、

〔古事談二臣節〕宇治殿、(○藤原賴通)關白ヲバ直京極殿(○師實、賴通子)ニ奉讓トオボシテ、上東門院(○藤原彰子)ニモ、其由令申給ケレバ、女院御クシケヅラセテ、御トノゴモリタルガ、此事ヲ聞食テ、不受之氣色御坐シテ、俄令起給テ、御硯紙召寄テ、忽令進御書於內裏給ケリ、其狀云、オトヾ被申事候トモ不可有御承引、故禪門(○道長)儲被申置之旨候也、仍不被許讓事、遂後冷泉院御宇被讓大二條(○敎通、賴通弟)、云々、

〔公卿補任後冷泉〕治暦四年(戊申)

關白從一位藤敎通　七十三、四月十六日、詔爲關白、(前太政大臣賴通讓)

〔古事談二臣節〕宇治殿(○藤原賴通)使土御門右府、(○源師房)令讓攝籙於大二條(○敎通、賴通弟)、給之時、入道殿(藤原道長)遺言趣云々、一度ハ猶不被信受、第二度之時及零淚被悅申云々、

〔中右記〕寛治八年(○嘉保元年)三月九日庚辰、今日殿下(○藤原師實)有關白讓事、(○中略)午時許參賀陽院、左府(○源

（後房）民部卿（○源經信）以下公卿七八人（直衣）、頭辨以下雲客（束帶）濟々參會、讃岐守行家朝臣作御表持參、次召主殿頭公經朝臣令清書（各給祿、白大掛、）差左少將忠教令奉給、忠教持表函入自弓場殿、置殿上大盤上、頭辨被奏聞後、依仰持參院、（○中略）勅答奏聞之後、以左中將國信朝臣遣彼第、於賀陽院西中門邊、先以安藝守有後申事由、權大納言家忠卿持勅答、歸入之後、召勅使、東對南面立倚子、勅使著座後、權大納言代主人拜舞、撤倚子後、權大納言取祿給使、使拜退出了、此間民部卿仰在良令作關白萬機詔、奏聞之後、頭辨爲御使持參院、下知者也、及秉燭人々引參、向新關白殿（○師通）御所東三條東面、今夕爲令申慶賀御、則有御出、（無御前少納言）（○中略）凡今日事、長和六年、御堂讓御宇治殿之例者、

〔續世繼 五 藤の初花〕攝政前左大臣（基實）とてちかくおはしまし丶は、法性寺（○藤原忠通）の大臣の太郎にぞおはしまし丶、（○中略）このおとゞの御名は、基實とぞ申とうけ給はりし、いつれの御時のれいとか、左衞門督などきこえさせ給しに、そののち大納言右大臣などにならせ給へりき、をりふしあきあはざりけるにや、大將にはならせ給はざりしかとよ、二條のみかどくらゐにつかせ給しに、父おとゞのゆづりにて、保元三年八月十六日、關白になり給、御とし十六とぞきこえ侍し、むかしよりかくきびわにてなり給へる一の人、これやはじめにておはしますらん、からくにに甘羅といひける人は、十二にてぞ大臣になり給ける、よの人をさなしとも申さゞりけり、人がらによるべきことにこそ侍めれ、

〔五代帝王物語 後堀河〕關白をば嫡子の左大臣（教實、關白藤原道家子、洞院攝政殿、）に讓て、同年（○寛喜三年）七月五日關白とす、

〔公卿補任 後堀河〕寛喜三年（辛卯）

關白正二位藤道家（廿九、七月五日上表、辭關白兵仗、）

左大臣正二位同教實（廿二、七月五日、詔關白、）

罷關白

〔扶桑略記 二十七 一條〕寛和二年六月廿三日辛酉、太政大臣賴忠、被罷關白蟄居、年六十三、

〔公卿補任 堀河〕寛治八年 甲戌○嘉保元年

關白從一位藤師實 五十三、三月八日、上表辭關白、許之、但隨身兵仗如元、朝參如元、

〔玉海〕治承三年十一月十五日己巳、凡世間物忩無極云々、無聞實說、予刻人傳云、天下大事出來云々、不聞委事間、寅剋大夫史隆職注送云、

關白藤基通　內大臣同　氏長者同

止關白　藤基房 ○中略

余 ○藤原兼實 披見此狀之處、仰天伏地、猶以不信受、夢歟非夢歟、無所辨存、此事由來者、法皇 ○後白河 收公越前國 故入道內大臣(平重盛)知行國、維盛朝臣傳之、并被補白川殿倉預 前大舍人頭兼盛 已上兩事、法皇過怠云々、三位中將師家越二位中將基通任中納言、師家年僅八歲、古今無例、是博陸 ○基房 之罪科也、凡此外法皇與博陸同意、被亂國政之由、入道相國 ○平清盛 攀緣云々、

〔公卿補任 四條〕仁治三年 壬寅

關白 攝政從一位藤兼經 卅三、正月廿日、詔爲關白、依踐祚也、(後嵯峨)三月廿五日辭、隨身如元、

〔公卿補任 龜山〕文永二年 乙丑

關白從一位藤良實 五十、四月十八日止、卒爾之間、无辭表儀、

〔公卿補任 後宇多〕弘安十年 丁亥

關白從一位藤兼平 六十、前太政大臣、八月十一日止之、無辭表儀、

〔續史愚抄 光明〕貞和二年二月廿九日戊寅、關白 師平、前右大臣、辭職、不及上表、去廿五日、仰可辭職由、因自閉門籠居云、

〔公卿補任 後光嚴〕延文三年 戊戌

関白從一位藤良基（三十九、十二月廿九日止之、同日、内覽兵仗如元、）

〔續史愚抄〕（後光嚴）延文六年（○康安元年）十一月九日丙辰、關白（經教、前左大臣、）辭職氏長者等、無讓儀、未文殿云、

〔公卿補任〕（後光嚴）貞治六年（丁未）

關白從一位藤良基（四十八、八月廿七日、内々辭、不及上表、今日、内覽隨身兵仗如舊之由宣下、）

〔續史愚抄〕（後小松）明德五年（○應永元年）十一月六日壬寅、關白（師嗣）辭職、此日（○中略）前關白（師嗣）内覽兵仗等如元由宣下、（○下略）

〔公卿補任〕（後花園）文安四年（丁卯）

關白從一位藤房嗣（四十四、六月十五日辭、不及表、自上被召上歟、不便事也、）

〔康富記〕文安五年九月廿三日丙午、詣局務、文弟子被同道、留守之間、奉謁藏氷有一盞、其後局務被歸宅、昨日左府被仰間事談合之、攝家當職以前、令蒙内覽宣給事也、當時強非御規模歟、御當職被待懸候時分、差違可被申、其詮何事候哉、後京極殿以後、無其沙汰歟、殊近衞殿南北御兩流、至今無其例、於御當職者、雖爲一日可被取渡之由、強可被申之、三ヶ月御例、年中御辭退例等存候、密々意見被申也、予昨日於殿中粗所申不違矣、（○中略）

關白（○關白忠攝政誤）詔三箇月辭退例

天王寺攝政（師家）　壽永二年十一月廿一日詔　翌年正月廿二日止之

年中辭退例

後猪熊殿（經忠）　元德二年正月廿六日詔　同年八月廿五日止之

三緣院殿（道教）　康永元年正月廿七日詔　同年十一月十八日止之

〔續史愚抄〕（後土御門）文正二年（○應仁元年）五月十日甲戌、前關白、（兼良、准后前太政大臣内覽、）太關白氏長者、及兵仗、牛車

等ㇾ如ㇾ元由宣下、上卿北畠中納言、教親 奉行藏人右少辨兼顯、

〔親長卿記〕明應六年六月十八日、後聞、近衞前關白右大臣、〇藤原尚通 關白右府共以辭退、〇中略 近衞前關白辭退之後、被ㇾ申二請內覽兵仗一云々、

〔公卿補任〕後柏原 永正十一年甲戌

關白從一位藤尙通 四十三、氏長者、牛車、兵仗、內覽、八月廿四日辭、同廿九日、內覽兵仗如ㇾ元、

〔言繼卿記〕天文廿二年正月廿一日戊戌、從右府御折紙有ㇾ之、二條殿〇藤原晴良 關白御辭退之事、昨十七日于ㇾ今御辭退無ㇾ之云々、今日中ニ被ㇾ辭候樣ニ、稱名院へ可ㇾ申屆之由有ㇾ之、乍ㇾ去今朝早々被ㇾ獻二辭狀一之由、承及候間、其分申入了、昨日御辭退之分也、

〔公卿補任〕正親町 永祿十一年戊辰

關白從一位藤前久 三十三、被ㇾ違二武命一出奔、十二月十六日止ㇾ職、

〔宗建卿記〕享保廿一年〇元文元年 七月十二日、兩人召二御前一有ㇾ仰之儀、關白〇藤原家久、時爲二關白一 辭退、先日被ㇾ申候、今暫當職可ㇾ然思召候へども、去年已來辭退及二數度一之間、於二今度一者可ㇾ被ㇾ許哉、內々八月被ㇾ蒙二勅許一度之由被二申上一候、雖ㇾ然放生會已後可ㇾ被ㇾ許哉、於ㇾ然は例幣程近候間、例幣已後被ㇾ許有二子細一間敷歟、兩樣之間、主上〇中御門 被ㇾ任二思召一可ㇾ被二仰出一候、尤主上於二御內慮一者、武傳內々申二達關白一、且可ㇾ令ㇾ沙二汰于關東一候、此趣兩人爲二御使一參內、可二言上一之由也、參內以二武傳一令二言上一之處、逐一被二聞召一候、可ㇾ被ㇾ許思召候、乍ㇾ然八月放生會以後、或例幣以後兩樣之間之儀は、早速難ㇾ被二仰進一候間、近日可ㇾ被二仰進一之由也、還參令二言上一了、十六日、武傳參洞被ㇾ申云、今日於二禁中一被二仰出一候、關白辭退之事、自二九月一之間之儀、昨日御幸兩御所御相談之上、八月下旬被二思召定一候間、御內意可ㇾ申二達關白一、且可ㇾ令二沙汰一之由ニ候、於ㇾ被ㇾ許者、可ㇾ被ㇾ遷二左大臣一〇吉忠公 哉、是又雖ㇾ爲二勿論一被ㇾ窺之由也、卽兩人參二御前一令二言上一之處、逐一被二聞召一、尤以二左大臣一可ㇾ爲二當職一之間、可ㇾ申二達于關東一之由被二仰出一、申二達武傳一了、後聞晩頭博陸參洞、辭退御內意、被二畏申一之由也、

廿一日、召御前、密有仰之儀、今度關白辭職尤被許內覽隨身兵仗等、於古來者、隨身兵仗如元、數多有之歟、准后家熙公辭職之時、雖被辭隨身兵仗、數年之後更賜隨身兵仗、于時前攝政更賜之、古例勿論歟、於近例者二條康道公是也、以此等之儀思召之處、今度於家久公者不可有難乎之旨、內々宗建可申關白云云、於無所存者、被仰進主上、可有御沙汰之由也、　廿二日、參殿下御亭、昨日御氣色之趣申入之處、先以被畏存候、雖然於此儀者、有時宜更賜隨身兵仗無子細候歟、於召來者、內覽、隨身、兵仗數多例有之候、兵仗之儀、不爲眉目候歟、於內覽者勿論規模候へども、當時甚以可有傍難候乎此趣宜令言上之旨也、翌廿三日朝、從殿下有御消息、

追啓、昨日申候趣相違候故、如左候也、

近日雨濕難澀候、抑昨日被告知候ツル事、夜前引考之處、所見如左、辭職之後隨身兵仗、　道長

師實　忠實　基通　家實　兼經　其後　當准后

內覽ばかりは　基嗣　道嗣　忠嗣

但內覽兵仗等如之例者　政家　尙通　稙家　月輪流三家、且鷹司にも件之例有之候へど

も不注候、隨身兵仗如元事御沙汰候ても、不有傍難存候、件之趣被加芳意、宜有言上候也、

八月廿三日　家久

難波中納言殿

參洞博陸被示候之趣、參御前委細言上之處、古例數多有之、珍重思召候、於然者、內覽兵仗等如元可然歟、是又內々可申之由有仰了、　廿五日、參御前、昨日博陸被申候趣、委細言上候處、於然者、內覽如舊之儀、可然思召候間、先兩人今日行向左右大臣亭、關白辭職之後、內覽如舊之儀、被仰下候事、可有御沙汰思召候、於古來者、勿論不珍候へども、久中絕之儀、今度此儀御再興思召候、於當關白者、主上御外戚之儀候へ者、彼是今度可有御再興思召候、雖然自今必每度之儀者、各被存間敷候歟、可在時

宜候、左右大臣所存有之候はゞ、無遠慮可被申上候、內々以此兩人被仰下候由被仰出候、卽兩人行向兩公御亭申入候處、各對謁無所存候、殊一事御再興珍重被存候由故、還參令言上候之處、於然者令參內、右之趣可言上候、主上御同意に候はゞ、明日先被召當殿下、於禁中可被仰下御內意と思召候由被仰出候、須臾兩人參內、附武家傳奏令言上之處、御同意被思召候、明日召關白可被仰下、御內意候由、有御返事、仍還參言上之了、　廿六日、從內以武傳被仰進之、關白辭退之後、內覽如舊之儀、可被仰下之由、今日御內意被仰下候也、深以被固辭候、如何可被遊哉、御相談被仰進由、卽兩人及言上之處、辭退之儀尤思召候、併於此儀者非私之儀、朝廷一事御再興之儀候間、强可被仰下歟之旨、有御返事、此趣申武傳了、及黃昏博陸參洞、附兩人被申云、今度依辭職內覽如舊之事、可有御再興之旨、今日於內被蒙仰、誠以不存寄、於家眉目之至畏入存候、雖然久中絕之儀、殊以當時當今外戚候へ者、却而如何候歟、彼是以雖被及固辭、再應從院被仰進、是以朝廷御再興之儀候間、可及御請之旨、被仰下之趣難遁、先暫及御請候、偏宜申上之由也、仍兩人言上之處、目出度思召候、愈以幾久朝廷之儀被取計可然思召候、尤御對面可被仰候へども、少々御痛所被爲有候故、不被及其儀之由、被仰出了、　廿七日、今日關白家久公辭職、且被辭隨身兵仗了、於內覽者如舊之由、被仰下之了、○中略　抑前關白內覽如舊事久中絕之處、今度御再興陽明家之眉目者、彼家例、

後岡屋　基嗣公　後深心院　道嗣公　後普賢寺　忠嗣公　後法興院　政家公　後法成寺　尙通公

惠雲院　稙家公

年月日　略之　朱

陽明之外月輪、桃華等流、鷹司家有其例、不遑毛擧、所詮天文已後無之歟、內覽之人兩人之事、先日武傳被尋之間、關白內覽宣下、可爲勿論候故、更於院無仰候歟、於然者兩人內覽尤可有例候旨、予申之、後日勘之處不珍、就中師實師通等內覽之儀所見、○中略

待遇

今夜於陽明前殿御對面之間、頭左中辨光綱朝臣持來內覽宣旨草、明日史可持參件宣旨之故、先內內入見參之由也、

左中辨藤原朝臣傳宣、權大納言藤原朝臣宣、奉勅官中雜事、如舊宜先觸從一位藤原朝臣令行者、

年月日　史姓名

前殿下被示予、宜先二字可除之歟、又如舊二字、同可除之歟、又行字、是亦可省之歟、於然者官中雜事可觸――者、仍予申云、於如舊字者、初度宣旨歟、又先字、同可有之歟、於先字者最初之儀歟、依之前殿下諸家傳道長公之處、彼傳云、

正曆六年五月十一日、官中雜事可觸行權大納言道長卿之由宣下、

如此之間、無如舊字可然之由、重雖被仰之、予雖心得之旨強申之、道長卿初度也、非如舊、於行字者、無之儀、可無難歟之由申之、仍被改之、

左中辨藤原朝臣傳宣、權大納言藤原朝臣宣、奉勅官中雜事、如舊先可觸從一位藤原朝臣者、

年月日　史姓名

如右可然歟、雖然於前殿下非被指圖之儀、猶宜取計、明日可持參之旨、被示光綱朝臣了、予退按之、行字有無如何之旨存之、後日見朝野群載之處、果有行字、則道長公內覽宣旨等在彼書、○中略　卽席不申此儀無念云々、廿八日、前殿下今日被請內覽宣旨了、

〔傳宣草下〕諸宣旨事

一下外記宣旨　臨時事

執政臣列大臣上事　同人可列太政大臣下事治安二、閑院相國、

〔世俗淺深秘抄上〕一關白可列其大臣上由被宣下常事也、同位幷關白爲下臈時事也、關白爲上臈時ハ不然、又關白可列其大臣下由有宣下事有其例、卽宇治關白賴通、可列太政大臣公季下由被宣下、

法成寺供養時如此著歟、

〔職原抄上〕太政官

執柄必蒙二一座之宣旨一、○中略然而閑院太政大臣、公季著二關白左大臣頼通上一、久我太政大臣、雅實著二關白左大臣忠通上一、是邂逅例也、

〔標注職原抄上〕執柄必蒙二一座之宣旨一これ上なる東三條入道攝政以來例也を承てかけるものなり、古注に爲二攝關一之人、不レ守二官次一、著二一座上一之義也、是寛和二年七月、東三條入道以來之例也、古例貞觀十八年十一月廿九日、藤原基經右大臣之時、雖レ爲二關白一、次二左大臣源融之下一、天祿三年十一月廿七日、藤原兼通內大臣之時、雖レ爲二關白一、在二左右大臣之下一、是各不レ蒙二一座之宣旨一、守二官次一之故也とあり、されば又執柄の三字は、攝關二ながら受て說べし、○中略一座の宣旨を蒙れば、太政大臣といへども、上たることを能はざるは、いはんも更なれども、もし宿德の太政大臣あるときは、一座宣下ありても、太政大臣をすゝめて、上に坐しむることまれにあり、但攝關と關白とにつきて、いさゝか等差あるべし、攝政なれば宿德の太政大臣ありといへども、上に著れん歟、下文に引る公卿補任に、忠通關白の時は、太政大臣雅實の下に著れたるに、保安四年正月廿八日、改二關白一爲二攝政一、此時有二太政大臣之上一とある補任の文を以て知べし、さてまたこの抄に、公季雅實の事を是邂逅例也とあるに依て按ふに、關白といへども、普通なれば一座宣下のまゝに、太政大臣の上に著く事疑なし、系圖を按るに、公季は東三條兼家の弟なり、頼通は兼家の孫也、されば頼通の爲に從祖父なり、古注に公卿補任を引て、頼通寛仁三年十二月廿二日、辭二攝政一爲二關白一、同五年七月廿五日、公季任二太政大臣一、于レ時關白在二公季之下一といへるこれなり、雅實は源氏なれども、系圖を按ずるに、此公の妹卽忠通の母にて外舅に當る、古注に公卿補任を引て、忠通保安三年十二月十七日、任二左大臣一、關白如レ元、于レ時在二太政大臣雅實下一これなり、一は從祖父、一は外舅な

るからに、上にす、めたるもの也、

〔傳宣草上〕（下兩方宣旨）大臣官次

宣旨

　關白前太政大臣

　　宜㆑列㆓太政大臣上㆒

右謹奉㆑獻如㆑件

　正安三年七月七日　　權大納言判

　大外記局（中原師緒請文在㆑之）

宣旨

　關白前太政大臣

　　宜㆑列㆓太政大臣上㆒

右早可㆘令㆓下知㆒狀、仍執達如㆑件、

　正安三年七月七日　　權大納言判

　左少辨殿（平惟輔請文在㆑之）

〔公卿補任 後一條〕寬仁五年（辛酉、○治安元年）

太政大臣從一位藤公季（六十六、七月廿五日任、）

關白正二位同賴通（三十、八月十日宣、可㆑列㆓太政大臣下㆒者、）

〔玉海〕承安二年閏十二月二日丙寅、賴業語云、○中略宇治殿（○賴通）始爲㆓攝政內大臣㆒時、可㆑列㆓左右大臣之上㆒之由、被㆓宣下㆒了、後爲㆓關白左大臣㆒之時、可㆑列㆓太政大臣下㆒之由、被㆓宣下㆒了、下㆑等云々、是始則依㆑爲㆓攝政重任㆒也、○中略後關白之時、下㆑等之條、關白劣㆑自㆓攝政㆒之上、又太政大臣爲㆓重任㆒故也云々、

〔公卿補任 堀河〕長治三年〈丙戌○嘉承元年〉

左大臣從一位源俊房〈七十二〉

〈關白右大臣〉正二位藤忠實〈廿九〉

〔水左記〕承暦四年十月九日、關白左大臣〈○藤原師實〉可列太政大臣上之由、被下宣旨云々、依寛和例有此事云々、

〔續世繼 四藤花櫻〕ちかき世の關白には、〈○中略〉その御名は、もろざねとぞきこえさせ給し、〈○中略〉承暦四年十月に、太政大臣のかみにつらなり給べき宣旨ありき

〔中右記〕寛治八年〈○嘉保元年〉三月廿二日癸巳、新殿下〈○藤原師通〉有御隨身事、辰時頭辨含勅旨、召上卿〈民部卿〉參議〈左大辨〉則以參候陣座、頭辨仰下云、關白可賜隨身〈左右近衞府生各一人、近衞各四人、〉幷可聽牛車事等可行云々、上卿奉仰令大內記在良作草勅書、頭辨內覽三箇所之後奏聞、〈院大殿殿下〉次奏清書被下了、此後上達部殿上人參候東三條、關白殿卽出御、先令參大殿給、〈大炊殿〉於西中門被申事由、〈道眞朝臣傳中云々〉依可許於西對南庭再拜、了昇御、次大殿出御簾外、召覽御隨身上﨟四人、〈左近府生下毛野武忠、元者院御隨身、番長同敦時、右府生同敦重、元者大殿御隨身、番長秦資久、元者大殿御隨身、〉本家家司給腰差、〈府生番長以下各一疋、〉畢兩殿引率諸卿參內、大殿自北陣令參給了、

〔續世繼 四波の上の盃〕その御名は、關白內大臣師通と申き、〈○中略〉嘉保元年三月九日、關白にならせ給御とし三十三、その三年正月、從二位にのぼらせ給、左大臣のかみにつらなるべき宣旨かうぶり給、

〔中右記〕嘉保三年〈○永長元年〉正月七日、今夜中宮大夫留仗座、頭中將被仰云、以關白內大臣可列左大臣上者、中宮大夫召外記宣下云々、

〔公卿補任 二條〕保元四年〈己卯○平治元年〉

太政大臣從一位藤宗輔〈八十三〉

左大臣正二位同伊通六十七
關白右大臣正二位同基實十七

〔葉黄記〕寛元四年十月十七日、相扶病參殿下、○藤原實經申承萬事、其中一座宣旨事、粗被仰子細、暫無沙汰、有何難哉之由、粗申入了、委細被勘先例、令見給之、可覽院歟云々、其儀止了、書寫之、○中略

一關白任官次座例

宇治殿○藤原頼通 治安元年七月廿五日、任左大臣、元關白內大臣、于時右大臣公季傳太政大臣、

經頼記云、治安元年八月十一日、大外記文義朝臣云、昨關白殿○藤原頼通被仰云、可列太政大臣下之由、令下宣旨畢、官外記廳倚子等可令改立、十三日又申云、去年定考日考箇攝政內大臣卜奉書、而今年留關白字准左大臣卜奉書、兩年例不同如何、被示云、許本官人不書攝政關白等字、八月奏論奏之時所注也、以彼爲例、今所注非多關白殿被仰之書、攝政關白字先例不然、然而職爲內大臣、列左右大臣上、仍年來令書也、而任左大臣之後、依可列太政大臣下、令停止關白字也、廿一日、關白殿被仰云、人々云、有太政大臣之時、官外記侍從所宜陽殿等之時、左右大臣座立敷、納言而帶攝政關白大臣、猶可列他大臣歟、其故者除目時、御前座已關白者橫座也、況他所座猶可有儀也者、前日按察大納言申之、近日權大納言以余又被申也、此由參御堂可申也者、卽參上申御消息旨、卽被仰云、可立敷太政大臣座次之由兼案也、一日思失不聞也、雖無先例不可准他大臣、可立敷太政大臣座次横座之由、可被仰下也、但本于右大臣內大臣猶可立敷納言座上也者、卽歸申此由、卽被仰云、官外記倚子幷侍從所宜陽殿等之座、如仰可立敷之由、可仰下者、卽仰大夫外記史等、又關白被仰云、貞信公被任太政大臣之間、左大臣宮小野右大臣九條殿皆爲子、仍父子之間尤有憚列座、仍列納言上也、其後不改、已爲永例已云々、而ハ上古例更不立敷納言座上歟云々、

後二條殿〇藤原師通　嘉保元年三月九日、爲關白、內大臣正二位　于時左大臣從一位俊房　右大臣從一位顯房　永長元年正月七日、從一位、同日、宣旨可列左大臣上、

法性寺殿〇藤原忠通　保安二年十二月十七日、任左大臣、元關白內大臣　同日從一位

或記云、保安三年十二月十五日、關白殿召史并外記等、令右中弁實光仰官外記宣陽殿侍從所等座可令敷立之様、宜陽殿座ハ太政大臣、并關白座相並テ、此面ニ可敷、但太政大臣なば可敷西方、關白座なば可敷其東、右大臣內大臣座ハ、納言座上ニ對座ニ可敷也、官廳、外記廳、侍從所等准之可知、治安元年八月廿二日、宇治殿轉任左大臣之後、有御著陣事、件日有沙汰天、被仰下此由、左大弁經賴承關白殿仰云、下大夫外記等之由、見件人記、于時中弁也、仍准彼例所仰下也、此間大外記師遠有所勞不出仕、又大夫史政重依有所憚故不召之、六位史外記等仰下之也、

六條攝政〇藤原基實　保元三年八月十一日、爲關白、右大臣正二位　于時太政大臣從一位宗輔　左大臣正二位伊通　永曆元年八月十一日、轉左大臣、　今日以左大臣伊通任太政大臣　同日宣旨云、太政大臣、左右大臣、依官次可座列者、

一關白列三公上例

後二條殿〇藤原師通　子細見端

普賢寺入道關白〇藤原基通　治承三年十月十六日、爲關白、從二位　同十七日宣旨云、可列左大臣上者、

〔吉續記〕文永十年五月十八日己巳、今夜關白殿藤原(忠家)自正二位前右大臣超從一位左大臣(藤原家經)令聞榮給、皆先例歟、御拜賀也、廿二日、關白殿一座宣旨未被仰下云々、殿下頻被申云々、尤可被仰下歟之由、前右府被命之、仍議定不被參、若左府被參者、依可爲無骨也、

〔公卿補任〕龜山文永十年癸酉

關白不被下一座宣旨之間、與左大臣座次末歟、

關白正二位藤忠家（五月五日詔、同日爲氏長者、給隨身兵仗、〈府生一人、左右近衞各四人、〉同十八日聽牛車、〈今日拜賀、〉十二月廿五日從一位、）

左大臣從一位同家經（左大將、閏五月十九日兼東宮傅、九月十五日依養母北政所事重服云々、）

〔勘仲記〕正應二年四月廿一日庚申、酉剋著楚々束帶、參關白殿、（〇藤原家基）御拜賀事爲申沙汰也、（〇中略）

關白從一位行右大臣藤原朝臣

正三位行權中納言平朝臣忠世宣、奉勅件人宜令列左大臣上者、

正應二年四月廿三日　彈正少弼兼大外記大隅守中原朝臣師顯奉

〔康富記〕應永廿五年十一月卅日丙子、關白事、九條殿（右大臣滿教公）可有御任、來月二日可被行關白宣下云云、（〇中略）禪門被語云、局務師胤朝臣補任云、雖右大臣爲正二位之時者、從一位內大臣之下ニ押之云云、官次宣旨不被下之故也、此事大比興事也、官次ハ著座之時入事也、仍於大臣可依位階哉、然者雖關白爲二位者、可押內大臣下哉、大不謂事云々、如此事條々被語了、（〇中略）又大臣一座宣旨事、太政大臣有時被宣下、無太政大臣時ハ、一座宣下事不可有之云々、此事不審也、雖左右大臣可蒙一座宣旨也、關白不蒙一座宣旨シテ、直關白昇進事也、條々不及記之、

〔公卿補任〕（後花園）文安四年（丁卯）

關白從一位藤兼良（四十七、六月十五日關白詔、氏長者兵仗牛車同日宣下、今度別無內覽宣、〈關白例內覽〉不被云々、又兵仗事、初度ハ爲勅書、再任ハ爲宣下云々、然攝政之時、兵仗牛車等事不被仰、依前攝政之還補也、今度准初度兵仗爲勅書、）

〔康富記〕享德四年（〇康正元年）八月廿七日庚午、攝家御位次事、至一條殿准后（〇藤原兼良）者非御沙汰之限、近衞前殿下（〇藤原房嗣）鷹司前殿下（〇藤原房平）爲位階上﨟之間、不可爭申、當關白（位階下﨟）可爲上之由、兩攝家被思食、又太政大臣雖爲位階下﨟、可爲前左大臣上候歟、可列當關白大相國等之上候由、可被申請宣旨上候由、兩攝家內々有御沙汰歟、而准后（一條殿）御所存者、不可依當職關白幷太政大臣也、共一位位階上﨟也、兩攝家（近鷹）不可被申宣旨、自元前關白（前左大臣）兩人可爲當關白幷大相國上之由、被執思食云

攝關渡領

云、則此條者可ㇾ爲二何樣一哉、太政大臣位階下﨟著二關白上一之例、度々事也云々、如何、

〔公卿補任 後花園〕長祿三年己卯

太政大臣從一位藤持通 四十三、前關白、

關白正二位同敎房 三十六

寬正六年乙酉

准三后左大臣從一位源義政 三十一

關白從一位藤持通 四十九

〔公卿補任 後柏原〕永正十一年甲戌

關白正二位藤兼輔 三十五、八月廿九日詔、氏長者牛車兵仗一座宣等同宣下、家例(鷹司)三ヶ條、關白長者今度五ヶ條也、

〔宣胤卿記〕永正十五年三月卅日己巳、今日內相府 尹房公廿三歲 關白詔宣下也、○中略

一今日關白一座事宣下、仰詞關白內大臣可ㇾ令ㇾ列二前左大臣上一、當官右大臣 實香公 雖ㇾ爲二上首一不ㇾ加ㇾ之、前左大臣上可ㇾ事足一之由、入道前內府返事有ㇾ之、凡以二當官一爲ㇾ本、雖ㇾ然申二本座列座一之上、室町殿參賀日參會也、且又長享例有ㇾ之、

一兵仗事、左右近衛府生番長各一人、近衛各三人、此分師家朝臣成二宣旨一、仰詞分相違之由仰遣之處、先規每度此分之由申ㇾ之如何、

〔但馬國大田文 朝來郡〕太田太郞左衛門尉政頼、弘安八年之注進、

殿下渡庄

法成寺　二十丁 地頭但馬平三郞入道　流失　十丁

領家分　一丁五反　地頭分　八丁五反

〔建武以來追加〕寺社本所領事 應安元六十七、布施彈正大夫入道昌椿奉行之、

禁裏仙洞御料所、寺社一圓、佛神領、殿下渡領等、異ニ于他一之間、曾不レ可レ有ニ牢濟之儀一、固可レ停ニ止武士之妨一、〇下略

〇按ズルニ、渡領ノ事ハ、政治部莊園篇ニアリ、

〔愚管抄三〕關白攝政といふことは、必しもたへずなる事にはあらず、攝政は幼主の時ばかり也、忠仁公〇藤原良房の後は、たゞ藤氏長者內覽の臣になりぬるを一人(いちのひと)とは申也、內覽もかならずしもなき事也、關白も昭宣公〇藤原基經攝政の後に、關白の詔始りけり、漢の宣帝のとき、霍光がまづあづかりきかしめて、後に奏せよとうけ給はりける例なるべし、小野宮殿〇藤原實賴の攝政をへずして、關白詔始りけるをば、おそれ申されけり、されば延喜の御時、時平うせ給ひてのちと、天暦の御時とは、內覽の臣だになし、まして攝政關白といふつかさもなされず、たゞ藤氏の長者一のかみにて、延喜の御時は、貞信公〇藤原忠平ののちにこそ、朱雀院八にて御位なれば、攝政にはならせ給へ、村上には初は貞信公關白如レ元とてありけれど、うせさせ給ひて後は、左大臣にて小野宮殿こそは、ただ一の上にて事をこなひて、冷泉院の御時、直に關白の詔ありければ、時の君の御器量がらにて、かつは置るゝ事也、世の末はみな、君も昔には似させ給はず、誠の聖主は有がたければ、今は樣のごとく、攝政關白の名はたうる事なし、それも御堂〇藤原道長のはじめ一條院、三條院、知足院殿〇藤原忠實との、はじめ堀河院、このふたゝびは內覽ばかりにて、關白にはならせたまはざりける、やさしきこと也、

〔讀史餘論四〕按ずるに、良房、基經の相業議すべからず、社稷之臣といひつべし、雖レ然光孝、宇多の君たる、菅公、廣相が臣たる、猶其權を奪ん事を欲す、蓋是防微杜漸の深計遠慮也、忠平が純臣たりし外、實賴が後柄臣九世、皆是外戚之威を恃み、朝廷之權を弄す、後三條其權を抑へ給ふ、寔英明之主也、院中政衰、兵革屢起りしにおよびて、藤氏の大臣、その危を救ひ傾を扶しもの一人も

なし、保元の亂に忠通朝家にあり、其弟賴長と不和なるが故也といへども、其職に恥ずといふべし、平治に基實關白たりしかど、十六の童子論ずるにたらず、平氏西奔の日、基通不從駕而還、法皇の恩寵を思ふによるといへども、身已に朝廷の大臣たり、いかで捧首鼠竄して生を苟くもすべき、義仲が法皇を幽せし日、基房その間に彌縫して泰甚を去りし、濟時之才なきにしもあらず、賴朝守護地頭を請ひしに、兼實これを執奏す、遠見深識なしとすべし、承久の亂に家實寸策なくして、又新帝の攝政となる、其恥なきこと五代の臣のごとし、其のち後醍醐南狩の日に至りて、經忠最初に南に來れり、大臣の義にはぢず、これらの外、北朝に留り仕し輩、ともに君臣之大義を語るべからず、抑いはゆる攝政關白は大臣の表率たり、然るにかく忠なく義なき輩、累世その職に任じて、たゞみづからその望族門地に矜る、恥なきの甚しき也、王室のおとろへしこと、たゞ名敎のやぶれによれりと、北畠准后のいひけん事まことに然り、

〔愚管抄 四〕さて世の末の大なる變りめは、後三條院の世の末に、ひとへに臣下のまゝにて、攝籙の臣世をとりて、內は幽玄のさかいにておはしまさん事、末代に人の心はをだしからず、脫屣の後太上天皇とて、政をせぬならひはあしき事なりと思召て、かた〳〵の道理さしもやは思召けん、委くは知らねども、道理のいたりよも叡慮にのこる事あらじ、昔は君は政理かしこく、攝籙の人は一念わたくしなくてこそあれ、世の末には、君はわかくて幼主がちにて、四十にあまらせ給ふは聞えず、御政理さしもなし、宇治殿〇藤原賴通などは、をほくわたくし有とこそは御覽じけめ、太上天皇にて世をしらん、當今はみな我子にてこそあらんずればと思召ける間に、ほどなく位ををりさせ給ひて、延久四年十二月八日御讓位にて、同五年二月廿日、住吉詣とて、陽明門院ぐしまいらせて、關白御ともして、天王寺八幡などへ參りめぐらせ給ひけり、〇中略同四月廿一日より御惱大事にて、五月七日御年四十にてうせさせ給ひにけり、かゝる御心のおこりけるも、君の御私や

をほかりけん、我御身は、さばしも御脱屣の後の世をばをこなひ給はず、事の道理は、又世のすゑには尤か丶るべければ、白河院はうけとらせおはしまして、太上天皇の後七十七まで世をしろしめしたりけり、

〔神皇正統記 白河〕宇治の大臣〇藤原頼通の世となりて、三代の君〇後一條、後朱雀、後冷泉、の執政にて、五十餘年權を專らにせらる、先代には關白の後は、如在の禮にてありしに、あまりなるほどになりにければにや、後三條院の、坊の御時より、あしさまにおぼしめすよしきこえて、御中らひあしくて、あやぶみおぼしめすほどの事になむありける、踐祚の時、關白をやめて宇治にこもられぬ、弟の二條の敎通の大臣關白せられしが、ことのほかにその權もなくおはしき、ましてこの御代には、院にて政をきかせたまへば、執柄はたゞ職にそなはりたるばかりになりぬ、

〔薩戒記〕應永卅三年十二月廿七日丙戌、早旦參二入道內相府殿一、(足利義持)姉小路万里小路、稱二歲末禮一、近來諸人所二群參一也、巳剋入道殿令二出座一、於二會所一令二謁給一、給之由、左中將雅兼朝臣告二申人々一、先僧中、〇中略此後俗中、前關白〇藤原滿敎 關白(藤原持基)以上小直衣、上結也、右大臣(藤原兼良)衣冠 前內大臣(藤原滿季)參進時、令二內立一、前、依二攝家一歟、如何、內大臣〇藤原房嗣中略 各構二見參一、了退出、此事每年之儀也、然而不レ能二勞記一、今日聊注レ之、

〔光臺一覽 三〕五家中、二條家は代々將軍家の有職御師範之家として、堂上に御門弟も少く候也、其御親睦に依て、二條家には東照宮以來、關東の御諱字を一字充、御用ひ被レ成御事なり、

〔類例略要集〕御一字〇德川將軍偏諱 二條殿江被レ進之御禮物〇中略
二條殿ハ足利中比ゟ武家昵近故、代々將軍ゟ被レ遣レ之、

〔江家次第 二十〕關白四方拜

〇按ズルニ、關白四方拜ノコトハ、歲時部四方拜篇ニ載セタリ、

〔公卿補任 正親町〕永祿三年庚申

當職在國例

關白從一位藤前嗣二十五、九月十九日、下二向越後國一、

〔重編應仁記十七〕長尾入道謙信上洛事

管領輝虎が味方トシテ、關東ノ大守ト稱スベキ人無シ、先代堀越ノ御所政知卿、豆州御下向ノ例ニ任セテ、公方家ノ御連枝一人越州エ御供申シ、罷下テ、是ヲ關東ノ御所ト仰ギ、關左八州ノ名家國人ヲ懷ケ相催シ、北條ヲ追伐シテ、坂東ノ諸國ヲ退治シ太平ノ功ヲ立奉ラン由、頻ニ訴申ト云ヘ共、此條公方家御許容無キニ因テ、輝虎不レ力及御暇賜リ歸國ス、然レ共近年亂中ニ近衞關白前久公〇前久、即前嗣ノ御世度、微々ニ渡ラセ給テ、京都ノ御住居御心細クマシ〳〵ケルヲ、能キ幸トイザナヒ參ラセ、今度輝虎御供シテ、近衞殿前久公遙々越後エ御下向有リ、

〔朝野群載七攝籙家〕御教書

被二關白殿仰一云、來廿六日、伊勢公卿勅使祿料、合袴三腰、期日以前、美麗可二調進一由宜レ可レ仰者、仰旨如レ此、知綱謹狀、

十月十二日　右衞門權佐藤原知綱奉

謹奉　淡路守殿

〔朝野群載七攝籙家〕進二執政一

從五位上行勘解由次官三善朝臣道統誠惶誠恐謹言

請下被二特蒙一恩恤上因二准先例一擧中達辨官右衞門權佐闕上狀

右道統謹披二史漢一、倩見二昇沈一、韓信昌亭之餓隸、遇二蕭相國一而知レ名、長卿臨邛之食客、依二楊得意一而有レ達、伯里奚牛羊之甿、主以進二顯位一、東方朔虎鼠之論、人以爲二美談一、蓋是知與レ不レ知、用與レ不レ用也、道統再登二龍門一、再折二紅桂一、再褫二簪帶一、天暦七年、進士及第、應和二年、秀才及科、二省勞六年之內、色々公務、一々匪レ懈、敍用之後、分憂待レ例、而安和二年、故左相府薨卒之月、卽任二大學頭一、本望不レ遂、落涙不レ留、天延二年、更秉二當

職譏出不圖、例在非常、愁吟之處、蒲柳七秋、荷裳非業、何通名於東海之東、蘿徑應深、誰晦跡於北山之北、雖生堯舜之代、未遇比屋之封、雖非夷齊之廉、已及採薇之飢、心抽焦慮、雖學北門長鋏之歌、身苦孤貧、唯有南山短衣之曲、殿下〇關白藤原賴忠 黃波潤色、許月朗光、情峯之峨類嵩衡、不讓細壤、智水之深如江海、事嫌纖流、不珍尺璧、周公吐飡之勞、只重寸陰、荀氏累席之座、拔微起滯、極鑑秋毫、誘善備能、明照曉月、仍以布鼓之性、忝驚雷門之聽、如枯鱗之臥轍、投心於恩波、似窮鳥之入懷、懸思於惠露、望請特蒙恩恤、擧達件闕、加一顧於猶寒、使傳絕塵之譽、及餘慶於子孫、須期高門之胤、然則病雀飡花、生羽翼於暖雨、寒鶯出谷、戴恩煦於春風、道統誠惶誠恐謹言、

天元二年正月日　　從五位上行勘解由次官三善朝臣道統誠惶誠恐謹言

〔愚管抄三〕內大臣にて伊周もと內覽の宣旨かうぶりたる人にて在けるに、大納言にて御堂〇藤原道長にをはしけるは、道兼道隆の弟也、この伯父の大納言その器量拔群にして、世も人もゆるしたりけり、我身もこの時伊周執政の臣たらば、世は亂れうせなんず、わが身を攝籙の臣におかれなば、世はおだしかるべしと、さは〳〵と仰せられけり、

〔愚管抄三〕花山院には、義懷の中納言こそは外舅なれば、執政すべけれど、踐祚の時は藏人頭にこそは、初て四位侍從に任じて、やがてとく中納言になりて、三條關白〇藤原賴忠實賴子、如元とてをはしけれども、國の政はおさへて義懷をこなひけるほどに、わづかに中一年にて、不可思議の事出來にければ云ばかりなし、大入道殿〇藤原兼家、師輔子、はこのつぎめにと、日比の遺恨を思しけめども、外祖舅にもあらず、小野宮〇藤原實賴どのの子、九條殿〇藤原師輔の子、たゞ同じ事なれば、もと宿老になりて、關白ならんとおもふべきやうなしと思召けるも道理にて、この時はやみにける、

〔愚管抄四〕鳥羽院踐祚の時、御母は實季のむすめなり、東宮大夫公實は外舅にて、攝籙の心ありて、家すでに九條右丞相の家にて候、身大納言にて候、いまだ外祖外舅ならぬ人、踐祚にありて攝籙

する事候はず、さ候はぬたび〳〵は、大臣大納言などに、その人候はぬ時こそ候へと、白河院にせめ申けり、我御身も公成のむすめの腹にて、ひきおぼしめす御心やふか〻りけん、おぼし煩ひて御案あらんとやおぼしめしけん、御前へ人のまいる道を、三重までかけまわして、御とのごもりけり、其時けふすでに其日なり、未だ催しなんどもなし、こはいかにとをどろき思ひて、其時の御うしろみさうなき院別當にて、俊明大納言ありければ、束帶を正しくとりさうぞきてまいれりける、御前さまの道みなとぢたりければ、こはいかにとてあら〻かに引けるをうけ給りて、かけたる人いできて、かう〳〵といひければ、世の中の大事申さんとて、俊明がまいるに、猶かけよと云仰は、いかでかあらん、たゞあけよといひければ、皆あけてけり、近くまいりてうちしはぶきければ、たそと問せ給ふに、俊明となのりければ、何事ぞと仰せありければ、御受禪の間の事、いかに候やらん、日も高くなり候へば、うけたまはりに參り候、いかゞと申ければ、その事なり、攝政はさればいかなるべきぞと仰有りて、無左右如元とこそはあるべけれと仰られけるを、たか〳〵とさうなく稱唯して、やがて東帶さやはらとならして立ちければ、そのうへをばともかくも仰られず、やがて殿下に參りて、例にまかせてとく行はれ候べきよし、御氣色候と申て、ひし〳〵と行はれにけり、如元とこそはあるべけれども、公實が申やうはなど、仰られんとおぼしめしけるを、あまりにこはいかに、あるべくもなき事かなとかさとりて、いかでかさる事候べきと思ひけるにや、九條の右丞相の子なれ共、公季思ひもよらで、その子孫實成、公成、實季と五代までたえはてて、ひとへの凡夫にてふるまひて、代々をへて攝政には、さやうの人の、いるべきほどのつかさかは、さる事は又むかしも今も、あるべきことならずと、親疎、遠近、老少中年、貴賤上下、思ひたることを、いさ〻かもおぼしめし煩ふは、あさましきことかなと思ひけるなるべし、〇下略

〔十訓抄 十〕仁和寺大御室(三條院御子性信)御時、成就院僧正(法務大僧正東寺長者寛助右中辨時賢子)の、いまだ阿闍梨と申ける比、白川の九重の御塔供養有

けり、御室、今度の賞あらば、必讓らんと御約束有ければ、畏申給ほどに、思のごとく供養遂られて、賞行はるゝ時に成て、京極大殿の御子息阿闍梨にて、御弟子にて候給けるに、大殿御對面の次に、今度の賞は、小法師にぞ給り侍らめと、兼てより悅申給ければ、仰られやるべき方なくて、法眼に成給にけり、御室は、彼阿闍梨いかに口惜と思らんと、胸ふたがりて思食けるに、〇中略つゆも恨みたる氣色もなかりけり、御室うれしくも哀におぼしければ、今度こそ越られにけれども、次々の勸賞あまた讓りて、僧正までなりて、鳥羽院の御時は、いき佛と思召ければ、世を我まゝにして、法師關白とまでいはれ給けり、いみじかりける人也、

〔平家物語一〕淸水えんしやうの事

仁安三年三月廿日の日、新帝〇高倉大ごくでんにして御そくゐあり、〇中略國母建春門院〇高倉母平滋子と申は、入道相國〇平淸盛の北のかた、八條の二位殿の御いもうと也、又平大納言ときたゞのきやうと申も、此女院の御兄なるうへ、うちの御外せきなり、内外につけてしつけんの臣とぞみえし、そのころのじよゐぢもくと申も、ひとへにこのときたゞのきやうのまゝなりけり、〇中略入道相國天下の大小事をのたまひあはせられければ、ときの人、平くわんばくとぞ申ける、

〔類例略要集〕攝家　五　少將に而も必書殿文字　藤原

近衞殿　二千八百六十石　九條殿　二千四十三石　二條殿　千七百八石　一條殿
二千四十四石　鷹司殿　千五百石政熙公、政通公御父子者、御譯合有之、別ニ五百俵、被進之由、

右各關白職之節者、關東ゟ被進五百俵之由、

〔槐記〕享保十三年十二月廿五日夜、貞君御方御不豫ニ付、關白樣ニ宿ス、御夜食御相伴、御傍ノ老女ノ申サルヽハ、昔ハ關白料トテ、五百石ヅヽ御職料ノアリシヲ、近代ニテハ鷹司樣マデ其コトアリシヲ、故一條ノ殿下ノ時ヨリ、辭セラレテ、止ケルトナン申スト、語ラレケルヲ御聽アリテ、莞爾

ト御笑アソバシテ、得テハ俗間ニアノヤウニ覺テイル、大ナル誤リ也、關白ノ職料ナラバ、五百石ヤ千石ニテハウケラレモセマジ、鷹司家ハ猪熊殿ノ後胤絶テ、久シク子孫斷絶アリシヲ、信長ノトキ、二條家ノ君達ヲ一人、申シ承ケテ養ヒヲカレシガ、成長ノ後何ニカナリタク思召ト尋ラレシヲ、公家ニナリタキ旨ヲ仰ラル、幸ニ鷹司ノ稱號ノ明タルコソトテ、五百石進ゼラレテ、五家ノ列ニ入ラレシコト也、鷹司ノ□ハ、常憲院ノ外舅タリシ時、關白ニナラレシヲ、家料ノ小身ナルヲ思ヒヤリテ、關白轉任ノ折カラ、五百石ヲ賜ラレテ當職ヲ勤ラレシガ、辭退ノ折カラ、家料ノ上ヘ重ネテ千何ト云ホドニチラレシコト也、關白轉任ノ折カラユヘ、關白ノ職料カト人思ヒケルナリ、全ク左ニハアラズ、常憲院ヨリ何ガナ惠タキ折カラノコト也、左アレバトテ、二條殿ヨリ請ハルベキ子細ナシ、是ヲ惡シク心得タル人ノ誤リテ云コト也ト仰ラル、

〔槐記〕享保十四年四月十六日、二條行幸ノ圖ヲ拜見仕ルニ、攝家ノ御方々皆騎馬ニテ侍リ、應山公バカリハ御車ニテ侍ルハ、關白ハ又各別ノ御コトニテ候ヤト窺フ、イカニモ何時モ大臣ノ騎馬ノトキハ、關白ハ御車ナリ、左右ノ大臣ノ歩儀ノトキハ、關白ハ騎馬ナリ、此大法ナリト仰ラル、先日ノ行幸ニモ、關白公ハ騎馬タルベキノ由、一條ノ右府公ノ御進メアリケレドモ、メサズト承リシハ、サテハサルコトノ侍ルニコソト申シ上シカバ、一條殿ノ思召ハサアルコトナルベシ、御前ニモ御談合アリシカドモ、此度ハイラザルモノ乎トテヤメタリ、先年ノ御遷行ニハ、公ノ攝政タリシトキ故、騎馬ニテ供奉ナサレシガ、此度モ馬ニテ供奉セラレンニ、何條コトノアルベキナレドモ、路次モ近シ、又攝關ノ差別モアリ、時節場所モアルベキコト、由モナク序モナクテ、目ニ立コトハ、イラザル物カトテ、止ラレタリトナン、

〔附〕内覽

内覽ハ太政官中ノ雜事、先ヅ之ニ經由シ、及ビ奏下ノ文書ヲ先ヅ内覽スルヲ云フ、蓋シ内覽

ハ醍醐天皇ノ時、關白ヲ置カズシテ、左大臣藤原時平、右大臣菅原道眞ヲシテ、萬機ヲ宣行セシメシヲ以テ始トス、其權ヲシテ偏重セシメザル爲ナルベシ、其後、圓融天皇ノ時ニ、攝政藤原伊尹ノ弟中納言兼通アリ、一條天皇ノ時ニ、關白藤原道隆ノ子内大臣伊周アリ、關白藤原道兼ノ弟權大納言道長アリ、並ニ内覽ノ宣旨ヲ蒙レリ、皆前人ノ病革物故ニ由リシモノニテ、關白タルノ漸ナリ、而シテ伊周ハ其志ノ遂ゲザリシモノナリ、歷代ノ中ニ於テ、攝政關白ノ外ニ内覽ヲ置キシハ、藤原賴長ノ關白忠通ニ於ケル、藤原兼實ガ關白藤原基通ニ於ケル等ヲ以テ然リトス、是ニ於テ内覽ハ一ノ職名トナレリ、後世關白ヲ辭シテ後、内覽元ノ如シノ宣下ヲ蒙リ、又前關白ヲ以テ、當職ノ關白以外ニ、内覽ト爲シヽコトアリ、

名稱

〔名目抄 諸公事言說〕内覽(ナイラン)

〔官職難儀〕内覽とは　關白は、必内覽宣下ある也、さるによりて万機の政、まづ關白に申て次奏聞する也、關白に成給はで、内覽ばかり仰らるゝもあり、延喜御門御宇には關白は侍らで、左大臣時平公、右大臣菅原朝臣、(北野天神御事也)兩公並て内覽の宣下あり、其後に忠義公、(兼通公諡、堀川關白、)中納言の時内覽宣下を蒙り給、其後帥内大臣、(伊周公、于時内大臣、)御堂殿、(于時大納言)知足院殿、(于時大納言)法性寺殿、(于時内大臣)宇治左大臣、(賴長公、于時左大臣、)月輪殿、(于時右大臣)其外例どもあり、皆之るし申に及ず、或關白以前、或關白には終に成給はねども、内覽には成給たる例どもあり、又關白を辭申されても、猶内覽もとのごとくと云仰ある也、不然者前關白にては出仕なき事也、

内覽作法

〔江家次第 九月〕官奏内覽(殿上直廬里亭)

於里亭覽時以杖申之、其杖垂前方之說不可然、爲文可落也、(自餘如奏書)於直廬覽時、副笏申之、先可尋文刺歟、於倚子傍覽時、先以藏人可令申、執柄於倚子西召之、擗置笏於弓場殿上、(或立於名門外)無人跪於時簡下從目進居小板敷膝行進文、(攝政時於小板敷結之、只關白時、於長押上結之、近代無別、只於此小板敷結之云云、)

〔上卿故實〕內覽事

關白候御所者、令官人召藏人辨(或用殿上辨、藏事歟、)給宣、仰云、內覽被座直廬幷里亭者、上卿披見文了便返給外記若內記、(各不退歟、)令內覽、(天永二十廿五中右記云、除目爲內覽尋頭辨之處、已退出、仍以藏人令內覽、殿下御于宿所也者、大內記給宣、以少內記進里亭有例、於外記者無此儀、)抑兩度可覽文、(所謂有草清書文可請印文、復任除目勘文幷外記國除目等也、)初內覽之時、以外記若內記依事申請後內覽、已爲流例、(被候御所幷直廬者、更不可申請兩度可覽之、)共被免之、又非無例、

關白輕服之時、神事文不內覽、寒暑殊甚之程、更漏漸闌之時、非大事者、或偸仰子細於辨若外記事畢之後內覽、雖似自由有例、(但可依事歟、如日時僧名定幷除目、近例多存、至內記草進更不可然歟、)

應保二六十二都圖云、公家被獻佛舍利一粒於諸社、藏人右少辨長方奉行件事、官府請印被行、予爲上卿參陣、請印了持來、予令持外記就弓場殿奏之、歸著陣座、次以外記可內覽(關白)之由仰含了、須先可內覽、然而令座里亭給、可經數剋、仍行請印後可內覽、是省略儀也、近代公事可付便宜歟、

仁安二五廿七山槐記云、復任除目須內覽也、然而關白座五條坊門高倉、皇居爲土御門東洞院、往返間甚遲々歟、非大事、且密隨近年之非例、下二省之後、外記取之持參、於除目者不覽、只可申請內覽之由可申之由、內々示仰外記畢、但攝政之時猶不可爲例、

治承三三十三同記云、政、內文官符就弓場奏聞、予(藤原忠親)行政之間、密々令外記內覽、著陣之後雖可內覽、參內之後、又經時刻可無術、卽如候陣令內覽也、不可爲例、

上卿任自由不內覽例(今案不可爲例)

仁平二六廿三、內文請印、上卿權大納言宗能卿無內覽、依急事歟、攝政(○藤原忠通)左府(○藤原賴長)座宇治、仍上卿云、以後日可申其由云々、

關白詔尙內覽例(今案多不內覽歟)

嘉保元三九江記云、殿下(○藤原師實)停關白之後不可見、今朝被仰、然而如此事持參以被仰返却可爲

事云々、

宣命草淸書一度取替覽例

仁安元九十九角金記云、祈年穀奉幣、當日定、上卿右大將、大內記則覽宣命草、上卿招頭辨朝方被尋云、此間宣命內覽之儀如何、須草淸書覽兩度、而內裏與執柄御居所及十餘町、兩度往反之間、可及晚頭、於淸書者有優免之由、內記雖申之、於攝政之時者、更無御覽之例、是關白之例也、雖不當之事、草淸書令持一度、於彼里亭取替覽兩度如何、且者命兩年其儀、且可相計、且可改尋上官、頭辨示人人、如大外記先例頗不分明、今仰有何事乎者、仍宣命草幷淸書一度相具內記參殿下、○藤原基房於彼里亭取替、可覽兩度之由、上卿被仰內記畢、

以大外記內覽例

治承三四廿五山槐記云、春季仁王會、傳聞、今朝權中納言參陣、被奏呪願草、件者付少外記惟景取之逐電、雖良求猶不候、仍大外記賴業眞人五位求出草入宮持參之、權中納言令賴業眞人內覽、依六位不候也、希代例歟、直物之時、大臣賜勘文於大外記、雖內覽賜之、令六位外記內覽、歸參之時、猶令件六位奉上卿、今日六位不候、仍立陣腋即歸參、必內覽奉撿按、若是遣可令六位內覽之支度歟、然而當時所行者、五位已參博陸亭、歸參之儀也、先例不詳云々、○中略

一度內覽奏聞事

以辨覽文、令官人召著軾給宮、仰云、內覽幷奏聞、關白候御所直廬、又座里亭之時、皆如此、或以外記內覽、以殿上辨奏聞、雖有其例、古人不甘心歟、但辨爲地下者、內覽畢歸來之後、以藏人奏之、上卿猶不起座、或關白候御所之時、上卿進弓場付藏人、一度內覽奏聞、此由可示藏人、左府禪閤說云々、如除目常例也云々、

長承二五六中右記云、除目敍位付藏人兵部大輔令內覽、關白只今令候中宮御方給也、則歸來云、內覽早可奏由依被仰、便奏聞了者、進弓場殿可奏之由存之處、被奏了、尤神妙也、○中略

關白御物忌事

保安元六廿七中右記云、復任除目給外記令內覽、頃而歸來、殿下御物忌之間、不御覽、早可被奏之由所候也、進射場殿奏覽、

同三二五同記云、除目以外記內覽、數剋不還來、及子剋外記還來云、早可奏、殿下御物忌不申達、數剋候門外之由所陳也、又被封也、雖御物忌召除目御覽了被封返給之、

幼主時事

奏事由蒙許行事事（詔書覆奏之類見上）攝政候御所幷直廬者、以藏人申之、座里亭者、舊例或以外記申之、或尚以藏人申之、或不奏之、（近代藏人兼參攝政申之、上歸參陣之後、以內覽了、攝政之時、雖不可申請、被免成人之儀、以藏人奏聞、爲流例、無煩之故也、之例不可歸計、於兩度內覽之文者、舊例不尚申請、後內覽如恒、今案可結申文、即下之者、似上宜、雖被猶給辨、以內覽由、自陣邊可三歸來歟、）下之不奏聞、（近代或猶奏之不可然歟、或云、雖幼主令及十歲給者可奏歟云々、可尋、於諸社奉幣（祈年二社非此限）宣命者、舊例或不奏草、奏清書、今案攝政被候御所者、清書進弓場一度內覽奏聞可宜、○中略）

大治元二廿七同記（○中右記）曰、祈年穀奉幣宣命草令內覽、殿下御于鳴院也、歸來云、早可清書、但重不可內覽者、大內記清書廿二通持來、進弓場殿付頭辨令奏者、

治承四十廿三山槐記云、攝政第二度表勅答、上卿帥大納言（隆季）云、勅答不可奏依幼主也、於宣命所奏也、只可內覽也、

〔中右記〕寬治八年（○嘉保元年）九月六日、申時許、新中納言通俊卿參仗座、被行陣覽內文、先上卿在奧座、依無上﨟、職事令予（○藤原宗忠）可行內文之由被奏、仰聞食之由、次上卿移居端座、外記覽文、（入宮）以外記令內覽、（殿下（藤原師通）御里亭也）數剋還來、外記申內覽了由、上卿起座進弓場殿、令職事奏、（六位藏人）外記持宮履從、返給之後、於仗座見文、了返外記、次陣座前立案、（立案事、史可沙汰也、而史俄有所勞退出之間、竊令立也、）次請印官符、少納言成宗、近衞將監一人、（帶弓箭）立其傍、事了上卿退出、　八日丙午、今夜藤大納言左大辨（季）參仕仗座、（官人置膝突）有右府（○源顯房）覽奏事、先外記申其由、上卿令藏人右少辨時範奏覽奏候之由、仰聞食了由、外記指覽奏於文杖覽

內覽例

上卿之、見了後進御所、〇中略時範仰云、可贈正一位、賻物別給任葬司等、隨申請、警固幷廢朝三日者、〇中略上卿先召予、午日有贈位例被相尋、法性寺太政大臣時、午日被行贈位也、又位記宣命可內覽哉否、被問先例、大外記定俊申云、閑院太政大臣〇藤原公季長元二年時、兼不可內覽之由、殿下被仰者、仍仰少外記申此旨於殿下、返來云、付彼例不可內覽者、兼奏ハ本不內覽也、仍不被申也、宣命位記草可奏聞哉否條、先被問大外記、申云、可被奏聞、是先例也、清書ハ請印之後、重相具宣命可被奏者、仍隨定俊眞人申被仰也、

行云々、

〔日本紀略一醍醐〕寛平九年七月三日丙子、午三刻太上皇、〇宇多讓天祚于紫宸殿、傳國詔命云、春宮大夫藤原朝臣〇時平、權大夫菅原朝臣〇道眞、少主〇醍醐、時十三、未長之間、一日万機之政、可奏可請之事、可宣可行云々、

〔愚管抄三〕寛平は位につかせおはしましけるはじめより、〇中略第六年めに昭宣公〇藤原基經うせ給ひにければ、その太郎の時平と菅丞相とを內覽の臣に定められて、遺誡かゝせたまひて、三十一にてをりさせ給ひて、延喜の御門は醍醐天皇と申に御讓位ありければ、十三にて未だ御元服もなかりけるを、今日たゞ元服をして、位につかむとて、にはかに御元服ありて、攝政をもちゐられず、寛平の御遺誡のまゝに、時平と天神とに政を仰あはせて有ける程に、十七の御年、延喜元年に北野の御事いできにけり、

〔公卿補任圓融〕天祿三年壬申

權中納言從三位藤兼通四十八、十月廿七日宣、太政大臣(藤原伊尹)不從事之間、宜行公務者、即日又召御前曰、朕未堪其事、汝可輔佐者、

〔愚管抄三〕一條の攝政〇伊尹の病かぎりになりにければ、左右なく中納言〇兼通なる人に內覽を仰られて、大納言を經ずして、中納言より弟の大納言の大將〇兼家をこえて、內大臣になりて、天延二年に關白の詔くだりたりける也、

〔日本紀略十一條〕長德元年三月九日乙卯、權大納言道頼卿、仰外記云、太政官幷殿上奏下文書等、關白

病間、暫觸内大臣(○伊周)奏下者、

〔小右記〕正暦六年(○長德元年)三月八日甲寅、頭辨示送云、(内大臣候官奏事)今日内大臣(○伊周)冒雨候官奏者、又頭中將齊信、奉勅出陣、仰内大臣云、關白(○道隆)煩病間、雜文書宣旨等、先觸關白、次觸内大臣、可經奏聞者、内大臣云、傳勅之旨頗以相違、關白煩病之間、專委内大臣之由、已有所承、而先觸關白、相續有可令見文書之仰、(内大臣被承内覽)如何者、仍以此旨經奏聞、仰云、須以此趣仰關白、隨被申旨、仰事由者、頭中將馳向關白家云々、此事太奇異之極也、必有事敗歟、往古未聞如此事、　(昨日關白病間可令見官外記文書於内府之旨宣下事)十日丙辰、頭辨云、昨日權大納言道頼卿、關白病間、官外記文書可令見内大臣之由、仰下大外記致時朝臣、史奉親宿禰等、左少辨信順語致時等云、關白病間、間字可除也、關白病替、以内大臣可書下可令見官外記文之由者、致時朝臣等云、件事頭辨可奉、以彼辨仰宣所書也、須觸彼辨改直者、謀計之甚何人勝之、主人御氣色、關白病間、無可見之人、爲之如何、所仰下也、彼人等偏奏可蒙關白詔之由云々、然而天氣不許、近代之事所不知也、

〔大鏡(六内大臣道隆)〕皇后宮(○一條后藤原定子、道隆女、)と同腹の君、(○中略)小千與君(○伊周)とて、後ほかばらの大千代君(○道頼)にはこよなくひきこし、廿一におはせしときに、内大臣になし奉り給ひて、我(○道隆)うせ給ひし年、長德元年の事也、御病おもくなるきはに内へ參給ひて、をのれかくまかりなりてさぶらふほど、此内大臣伊周のおとゞに、百官并天下執行の宣旨給ふべきよし申くださしめ給ひて、我は出家せさせ給ひてしかば、此内大臣殿を關白殿とて、よの人あつまり參りし程に、粟田殿(○道兼)にわたりにしかば、手にすへたる鷹をそらいたらむやうにてなげかせ給ふ、

〔榮花物語(四見はてぬ夢)〕あはだ殿(○藤原道兼)四月つごもり(○長德元年)にほかへわたらせ給ふ、(○中略)五月二日、關白の宣旨もて參りたり、(○中略)内大臣殿(○藤原伊周)にはよろづうちさましたるやうにて、あさましう人わらはれなる御有さまを、ひとゝのゝうち思ひなげき、かいひざとかいふさまにて、あないみじのわざや、たゞもとの内大臣にておはせましかば、いかにめでたからまし、なに

のしばしの攝政、あなてづゝ、關白の人わらはれなることを、いづれのちごかはおぼししらざらん、ことはりにいみじうなん、

〔朝野群載（七攝籙家）〕內覽　宣旨（入道殿大將殿）　（大殿）

權左中辨源朝臣俊賢傳宣、權大納言藤原朝臣顯光宣、奉勅官中雜事、宜觸權大納言藤原朝臣道長令奉行者、

長德元年五月十一日　左大史小槻宿禰奉

〔日本紀略（十一條）〕長德元年五月十一日丙辰、仰外記云、太政官所申文書、先觸權大納言藤原朝臣道長、可奉行者、

〔小右記〕正曆六年（○長德元年）五月十一日丙辰、大納言道長卿、蒙關白詔之由云々、仍取案內、頭辨示送云、非關白詔、官中雜事准堀川大臣（○兼通）例、可行也者、

〔神皇正統記（一條）〕道隆かくれてやがて弟右大臣道兼なられぬ、（○關白）七日といひしにあへなくうせられにき、其弟に道長大納言にておはせしが、內覽の宣をかうぶりて、左大臣までいたられしかど、延喜天曆のむかしをおぼしめしけるにや、關白はやめられにき、

〔公卿補任（一條）〕長德四年（戊戌）

左大臣正二位藤原道長（三十三、三月四日、依病辭官職、停隨身並見內外文書、勅不許、）

〔本朝文粹（四表）〕入道大相國謝官文書內覽表　江匡衡

臣道長言、頻表仰恩、未蒙矜遂、馳意牢漢、秋靏之騎方危、薤詞披陳、春木之筆欲腐、臣某（中謝）聲源淺薄、才地荒蕪、偏以母后之同胞、不次昇進、亦因父祖之餘慶、匪德登用、（○中略）伏望弘慈曲降叡鑒、臣所帶官、及內外章奏觸臣宣行之事、忽從停止、又隨身近衞府生已下十人、各付本府令從歸鮲、俾夫天地之德、施而彌新、日月之明、照而更盛、無任危懼謙退之至、謹重上表、陳請以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首死罪死

罪謹言、

長德四年三月十二日　　左大臣正二位臣藤原朝臣某上表

〔朝野群載〕七攝籙家　內覽　宣旨入道殿大殿

左少辨藤原朝臣通俊傳宣、權中納言源朝臣經信宣、奉勅官中雜事、宜觸左大臣〇藤原師實令奉行者、

承保二年九月廿六日　　左大史小槻宿禰奉

同廿九日覆奏

〔公卿補任〕白河承保二年乙卯

關白左大臣　從一位藤師實廿四、九月廿六日宣旨、太政官所申文書、先觸左大臣可奉行者、十月十五日、詔爲關白、

〔朝野群載〕七攝籙家　內覽　宣旨入道殿大將殿　大殿

權大納言源朝臣師忠宣、奉勅太政官所申之文書、先觸權大納言藤原朝臣〇忠實可奉行者、

康和元年八月廿八日　　大外記算博士主税權助播磨介清原眞人定俊奉

今案納言可書名兩字也

〔殿曆〕康和元年八月廿八日戊戌、今日被下內覽宣旨、〇藤原忠實於批杷殿有此事、大外記定俊持來宣旨、召定俊於對西面、自見宣旨、次權左中辨能俊朝臣申吉書、次頭辨宗忠朝臣申藏人方書、卽各返下、次泰仲朝臣申家方書、

〔公卿補任〕鳥羽保安二年辛丑

內大臣正二位藤忠通廿五(中略)正月廿二日宣旨、權大納言源朝臣宣、奉勅官中上下文書、先觸內大臣宜令奉行者、

〔台記〕久安六年九月廿五日戊戌、法皇〇鳥羽手書、副攝政〇藤原忠通報狀、賜禪閤〇藤原忠實、攝政報狀曰、可被收公不能讓與云々、禪閤見之大怒、丑時許、禪閤使人傳仰曰、只今上洛可相伴者、廿六日己亥、鷄鳴後參西殿、禪閤居所頃之、乘輿出御、余〇藤原賴長乘車從之、〇中略未剋許、禪閤曰、攝政於我不孝、我心深怨而年

來忍之、無報今媚謟、唯可讓攝政之由數度、十許度云々非唯無許諾、亦有不義之報命、是以將絕父子之義、攝政者天子所授、我不得奪之、氏長者者我所讓、無有勅宣、然則取長者官授賴、何有所怖憚矣、余且諫且辭、禪閤不聽、

〔本朝世紀〕仁平元年正月十日壬午、申斜右大臣〇源雅定著仗座、藏人頭右大辨朝隆朝臣來仰云、官中雜事、先觸左大臣〇藤原賴長宣奉行者、左府頭辨先參院、承勅參陣、頭辨不奏主上、又不觸申關白、依上皇仰直宣下云々、右府先召大外記中原朝臣師業仰之、次召左少辨平朝臣範家同仰之、範家傳仰左大史師經了、其後大外記師業參左府第東三條覽宣旨、於客亭見之、留宣旨、返空筥云々、次覽官宣旨、不出客亭、以家司傳召云々、此間上官等皆參云々、

右大臣宣、奉勅官中雜事、先觸左大臣宣奉行者、

久安七年正月十日　　大炊頭兼大外記主税權助助敎加賀介中原朝臣師業奉

左少辨平朝臣範家傳宣、右大臣宣、奉勅官中雜事、先觸左大臣宣奉行者、

久安七年正月十日　　左大史兼筭博士播磨權介小槻宿禰師經奉

〔台記〕久安七年〇仁平元年正月十日壬午、今日余〇藤原賴長蒙內覽宣旨、未時法皇〇鳥羽賜手書禪閤〇藤原忠實曰、彼事只今可仰下侍也、右府〇雅定未參侍也、相待者也、朝隆召儲侍者也、又上官可催儲之由、夜前仰師業了、申斜重手書曰、申剋許如支度仰下侍了、毎事頗畏思給者也、委事面謁次可申侍者也、〇中略禪閤仰曰、成雅朝臣曰、太政大臣〇藤原實行語曰、法皇使顯遠仰公敎卿曰、左大臣內覽事、非依入道〇藤原忠實奏請許之、出自朕意、關白〇藤原忠通敎帝以不孝、朕心太惡、故下此宣旨、以此趣達太政大臣者也、十七日聞此事、

十六日戊子、內覽之後、始見吉書、里第直廬幷奏慶、始置文殿、

〔保元物語一〕新院御謀叛思召立事

宇治左大臣賴長卜申ハ、知足院禪閤殿下忠實公ノ三男ニテ御座ス、〇中略久安六年九月二十六日、氏長者ニ補シ、同七年〇七年二字原脫、今補、乃仁平元年、正月十九日〇九字一本无日內覽ノ宣旨蒙ラセ給フ、攝政關白ヲ閣

テ、三公內覽ノ宣旨是ゾ始ナルト、人々傾被申ケレ共、父ノ殿下ノ御計ヒノ上ハ、君モアナガチニ被仰ル子細モナシ、此大臣トテモ必シモ世ヲ知召間敷ニモナケレバ、諸臣モ是ヲユルシ給ケリ、法性寺殿〇藤原忠通、賴長兄、ハ只關白ノ御名計ニテ、餘所ノ事ノ如ク、天下ノ事ニ於テ、イロハセ給フ事モナカリシカバ、殊ニ御憤深クテ、當今位ニ卽カセ玉ヒテ、世淳素ニ可歸ハ、關白ノ辭表納ルカ、又內覽氏長者關白ニ被卽カ、兩樣共ニ天裁ニ有リト頻ニ申サセ給ケリ、此關白殿ハ、萬ナダラカニ御座セバ、人皆ホメ用奉レリ、

〔愚管抄〕四賴長の公、日本第一大學生、和漢の才にとみて、腹あしくよろづにきはどき人なりけるが、てゝの殿〇忠實に最愛なりけり、一日攝錄內覽をえばや〳〵とあまりに申されけるを、一日えさせばやとおぼして、子の法性寺殿〇忠通にさもありなんや、後には汝が子孫にこそかへさんずれと、たび〳〵ねんごろに申されけるを、法性寺殿のともかくもその御返事を申されざりければ、後にはやすからずおぼして、鳥羽院にこの由を申て、叶へかなはずは、次の事にてと存候はんやう、かへりごとの聞度候、上より仰たびて、申狀をきかせられ候へと申されければ、この由仰られたりける御返事に、存候ねむはとて、年のきは賴長が心ばへはしか〳〵と候也、かれ君の御うしろみになり候はゞ、天下の損じ候ぬべし、此やうを申候はゞ、いよ〳〵腹立れ候はゞ、不孝にも候べし、父の申候へばとて、承諾し候はゞ、世の爲不忠になり候ぬべし、仰天して候など申されたりけるを、つかはされたりければ、かくも返事はありけるは、など我云には返事だになきとて、彌ふかく思ひつゝ、藤氏長者、君のしろしめさぬ事也とて、久安六年九月廿五日に、藤氏長者をとり返して、東三條におはしまして、左府に朱器臺盤わたされにけり、さて院〇鳥羽をとかくすかしまいらせられけるほどに、みそかに上卿などもよほして、久安七年正月に、內覽はならびたる例もあればとて、內覽の宣旨ばかりくだされにけり、あさましきこと哉と、一天のあやしみになりぬ、

〔台記〕久壽二年四月廿七日癸卯、有私請印幷上表事、〈○中略〉後日召茂明、〈○中略〉問之、內覽者、世俗之稱也、因玆御堂〈○道長〉度々被辭內覽之表作、其意不稱內覽、此表直稱內覽、甚以凡俗、若有證據歟、茂明無所陳、此表既有二失、仍至于後表者、令長光朝臣作之、〈○中略〉

臣賴長言、權衡誠懸、不可欺以輕重之量、繩墨克正、不可誣以曲直之規、臣無飾讓、誰稱奸雄、臣賴長誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪、伏惟臣保延之曆、任內大臣、久安之年、轉左丞相、謂前後之勞、覃二十載、況掌驚臺內外之文書、賜羽林左右之武備、旁訪列祖之蹤、謬繼希代之例、載殊恩而任重、如冠千鈞之石、增峻秩而危多、似棹三峽之波、晋退失步、周章消魂、就中今玆厄會可愼、是臣恐也、近曾變異荐呈、亦誰咎乎、若不謝朝奬、强猶貪天寵、空忘盈滿之誡、徒招衆庶之訕、我君縱優臣愚、而垂偏私、若奈街衢之反脣、微臣縱依君惠、而忝榮貴、若奈道路之以目、爲何益、責己獨憂、伏乞皇鑒曲照、來祈、避相位於台司、返兵仗於本府、又改前勅、令罷內覽、安閑養性、惟追衡門之風、愚謹竭誠、將趁鳳闕之月、不堪覗面怵迫之思、謹上表以聞、臣賴長誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

久壽二年四月廿七日　從一位行左大臣臣藤原朝臣賴長表

五月三日己酉、今日重辭左大臣幷隨身、不辭內覽、自御門亭上此表、

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、午刻、右中辨光長朝臣、持來賴朝卿書札幷折紙等、如夢如幻、依爲珍事、爲後鑒續加之、

賴朝書狀〈○中略〉

折紙狀云、

可有御沙汰事〈○中略〉

一攝籙事

可被下內覽宣旨於右大臣〈○藤原兼實〉也、但於氏長者者、本人〈○攝政藤原基通〉不可有相違也、〈○中略〉

此事旁以不可然、仍指遣經房卿、及晩來付件卿進消息折紙等於院、其上申固辭之子細、其狀云、自頼朝卿許、注遣旨如此、須待仰下之處、近日武士奏請事、不論是非有施行、仍若無左右被宣下者、後悔無益、仍忌憚遮以所言上也、以不肖之身、當重任之仁、雖似可悅不當非一、先此事依何事、其沙汰出來哉由緒不審、如申狀者、天下之草創也、可究盡政道之淵源云々、已是可鎭亂致治歟、而內覽兩人之條、偏禍亂之源也、敢非靜謐之計、延喜仁平之例、古今㝡少之非據也、醍醐帝者、雖我朝無雙之聖代、以菅丞相事爲失、是則其權分二之故也、鳥羽法皇者、末代之賢主也、而依寵賞凶惡之臣、(藤原宇治左大臣頼長)是也顯万代之失、保元以後、天下亂逆、論其源、非因仁平之兩權哉、上古中古、治政之代、其亂猶如此、末代末世、亂逆之今、其禍又不可疑、欲致治似求亂、譬猶加薪求熖消、攪水期流淸、是一帝王政者、兼鑒將來、塞其亂待其治者也、當時天下之緇素、以延喜仁平之例、偏處不吉、殆及忌諱、世忌其例、人斷其望之處、此時若貽其例者、後代爲例、繼踵不絕歟、亡國之基無過於斯季、以人君之政、萌亂亡之源哉、是二成人御時以可覽天子之文書、先觸委任之臣、謂之內覽、幼主之儀、攝政就南面代君、攝天子之政、仍攝政之時、別置內覽之臣者、以可覽攝政之文書、先可觸內覽之人、以之謂之、攝政與內覽、殆似有君臣之禮、加之敍位除目官奏等、於攝政之直廬所行也、其外有內覽臣者、相分又於彼直廬可行歟、旁以無其謂、仍古來未有此例、縱雖無例、有叶物議事者、立法是聖代之流例也、於此事者依無理又無例、緣底忌當時後代之禍亂、可被行古今無例之新儀哉、是三縱雖有三ヶ之非據、若致万機之懇望者、以爲一人理法之謂可有此議歟、而亂世之執權、愚心全不欲者也、然則爲世爲君爲身、此事總無所據、固辭之趣、如此之由、須被仰遣關東也者、經房卿云、頼朝卿所申、抽賞刑罰、其事已多、必悉不可叶叡慮、然而偏任被奏請、併可被行云云、而至于此大事、被仰返子細者、定乖彼意趣歟、此條何樣可仰遣乎、勅定之趣定如此歟、仍乍恐爲存知、所驚申也者、余(藤原兼實)○云、此事奉爲上、全以不可及御煩、其故者、宥刑抑賞者、可乖奏請之旨趣、尤可

十二月六日　頼朝(在判中略)○

有御猶豫、至此事者、可蒙恩之者、自致辭遁、具述子細、於被仰遣其趣者、敢不可爲君御抑留、若有權臣之鬱者、恐可在愚臣者也、只理可被仰遣之由、可被奏聞者、經房伏理歸參、又以光長申攝政、〇基通云、賴朝申送旨、經院奏了、若有被宣下事者、令待重院宣給哉、暗非可有御抑留、院宣之儀、只申達子細之間、片時可被相待、於宣下之後者、無由于奏聞之故也、此事雖不可必然、經房歸云、此事已以定長、早可被宣下之由、被申攝政了、然者先被申殿下次第宣歟云々、仍所申也、及亥剋、光長歸來云、帥卿相共先參院、經房被仰付了趣、付定長具以奏聞、仰云、先例之有無、不可及議、自關東忩行任官解官等、言上之條有先例事歟、此上事、万事不可及沙汰、只任彼申旨、可被宣下也者、經房申云、須歸參之處、堅根所勞、殊無術、夜已及三更、汝聞勅語之趣、□已爲□事、且不申此由之旨、所申付光長也云々、於院〇後白河雖承、不被許御辭退之由、依不可默止、猶參殿下、而一有情不祗候、仰天之處、定長爲院御使參上、先是先以參上、是第二度御使也、尋出近習者一人申入、付件傳奏之人、申參入之由、定長先參御前、歸參院之後、依召光長又參御前、卽申子細畢、攝政返事者、此事已御定切了、此上於申雖片時難仰、只可有遺跡也云々、今日次第如此云々、又云、定長密語云、攝政披見折紙狀云、此事如狀、不限內覽一事歟、於氏長者者、不可有相違之由已載之、爰知相違事決定在之歟、仍此事奉行宣下、猶以有恐、只自院直仰上卿、可被宣下歟云々、而院仰云、如狀者、二人內覽トコソ見タレ、不可及不審云々、

〔公卿補任土御門〕建仁二年壬戌

左大臣正二位藤良經卅四、十一月廿七日、蒙內覽宣旨、十二月廿五日、爲攝政、

〔花園院御記〕元亨三年十一月九日癸酉、傳聞、今夜鷹司前關白〇藤原冬平任太政大臣節會云々、可否如何、未知其儀、後聞內覽宣同被下云々、內覽三人非尋常之例、非關白父仁二人爲內覽、今度初度歟、近日朝議亂歟治歟、議者宜決也、隨分有道義之沙汰、然而君臣皆有未證爲證之謬歟、

〔公卿補任後醍醐〕元亨三年癸亥

關白正三位藤房實卅四、三月廿九日詔、同日氏長者、內覽、牛車宣下、

太政大臣從一位藤冬平（四十九、十一月九日還任、前關白、内覽如元、）

散位

前左大臣從一位藤道平（卅六、前關白、十月日内覽、）

〔康富記〕文安四年六月一日辛酉、參鷹司殿、又參文第、令語給云、執柄事、一條殿（○藤原兼良）可有御再任候由、武家被執奏申、細川右京大夫爲管領職、可申入之者也、雖然傳奏霜臺卿（○藤原定親）稱中未無出仕之間、兩三日之間、彼出仕以後可被仰合之由、内々有其沙汰云々、今度者、鷹司殿（○藤原房平）爲一上局御理運、而後一心院殿（○藤原冬家）不被遂御先途、又不令蒙内覽宣給候間、可爲何樣哉之由、一條殿被語申之歟云々、一條殿御流者、棲心院殿（○藤原内實）御末先途也、雖然及獲麟令蒙内覽宣給云々、近衞院殿御流者、淨妙寺殿（○藤原家基）御末先途也、是者不令蒙内覽宣給云々、爲此例者、不可依内覽有無歟如何、十五日乙亥、今晩局務令立寄給被示云、只今宣下事可在之由被相觸兩人之間可構參之由也、可爲關白宣下云々、（○中略）近衞殿御流者、後淨妙寺殿（○藤原經平）未御當職、是一代御中絶也、於一條殿御流者、棲心院殿不爲御當職、此兩家已有一代中絶之御例上者、尤爲准的歟云々、但棲心院殿者、内覽宣旨令蒙給、後淨妙寺殿者不及内覽宣之間、一條殿之仰無内覽宣者中絶也、有内覽宣者不可謂中絶之由被申云々、於内覽者雖非攝家、又令蒙給之條有例、又不可依内覽宣之由有御沙汰云々、　五年九月廿三日丙午、詣局務、（○中略）昨日左府（○藤原房平）被仰間事談合也、攝家當職以前、令蒙内覽宣給事也、當時强非御規模歟、（○中略）

關白以前内覽例

堀川關白（兼通）　天祿三年十一月廿七日、任内大臣、即日爲内覽、

御堂殿（道長）　長德元年五月十一日、内覽、于時權大納言左大將、

京極殿（師實）　承保二年九月廿六日、内覽、于時左大臣左大將、

關白不內覽

知足院殿（忠實）　康和元年八月廿八日、內覽、于時權大納言左大將、
月輪殿（兼實）　文治元年十二月廿八日、內覽、于時右大臣、
後京極殿（良經）　建仁二年十一月廿七日、氏長者內覽、于時左大臣、

〔議奏記錄　二〕安政五年九月四日
一左大臣殿（○藤原忠熙）今日內覽宣下事（○中略）
一頭辨被伺　內覽宣下
　上卿　中山大納言　　辨　經之
右以一紙被附、以富小路伺候處、伺之通被仰出、其旨頭辨（江）申渡候、

〔外様言渡之記　五〕慶應三年十二月十日
一內覽、勅問御人數、國事御用掛、（○中略）總而被廢候事、

〔公卿補任　鳥羽〕元久三年（庚子○保安元年）
關白從一位藤忠實（四十三、十一月十一日、有宣旨、內覽事停止之、）

〔公卿補任　鳥羽〕保安二年（辛丑）
　關白從一位藤忠實（四十四、正月十七日宣旨、內覽如元、上卿源大納言雅俊卿、）

〔議奏記錄　三〕安政五年九月四日
一關白殿（○藤原尚忠）內覽辭退之事、左大臣（○藤原忠熙）內覽宣下之事、富小路ヲ以伺之處、伺之通被仰出、
一關白殿內覽辭退被聞召之事、頭辨ハ申渡候、

〔議奏記錄　四〕安政五年十月十九日
一左大臣殿（○藤原忠熙）內覽辭退聞食候旨、頭辨申後、關白殿內覽宣下被仰出、右宣下申沙汰被仰出候旨、同人（江）申渡御受、以楸丸申上候、後時御本人御受以同丸言上候、

去關白後仍爲內覽

〔公卿補任後光嚴〕延文三年戊戌

關白從一位藤良基〈三十九、十二月廿九日止之、同日、內覽宣旨如元、〉

○按ズルニ、關白辭職ノ時、內覽元ノ如シト云フ宣旨ヲ受クルコトハ、關白篇罷關白ノ條ニ載セタレバ參看スベシ、

雜載

〔中右記〕嘉保二年正月晦日、未剋許參殿下、〈師通○藤原〉付藏人辨覆奏內覽、是右衛門尉源季信、幷散位高階基實、美乃國所領住人、陵礫神人事、件處法勝寺領也、仍先申院之後、可召下手人之由、所被仰也、次內覽常陸國解狀等、

〔殿暦〕康和三年二月二日癸巳、今日宇治殿〈賴通○藤原〉御忌日也、余〈忠實○藤原〉可參也、然然內覽宣旨後未參、而間不參也、以吉日可參之由、殿下〈○忠實父師實〉の依被仰也、

〔康富記〕應永廿九年正月十六日甲戌、於宣陽殿新大外史〈師郷〉一見見參祿法之後、近衛殿前殿下〈忠嗣〉公ヲ見參ニ入申之條不審也、內覽既去々年御辭退也、內覽既御辭退ナラバ、何尙可入申哉、予答云、內覽事雖御辭退、猶見參ニ入申之條先例也、故實也、抑內覽御辭退之時、不入申見參、何有例哉、更無先規候之由予答了、師郷重申云、依內亂御辭退、如文書無奏覽、何可入申見參哉、予重答云、見參ニ入申、亦不可入申間事ハ、不可依文書奏覽有無者也、其故ハ文書ヲ內覽セヌ人ナレドモ、致仕ノ公卿ヲバ見參ニ入コト何ゾ、文書ノ內覽ナキトテ、可止入見參哉、此後外史無返事、□□長者外史師勝朝臣、同師世朝臣、四位史內名宿禰、師野等同座之間、此事可請給事中、同被聞、此間答了、所詮中家輩ハ依內覽御辭退、不可入申之由存之、仍去年正月一日見參ニ師野不入申之者也、其時予彼間事於淨居庵受申庭訓了、次師勝朝臣申云、致仕ノ公卿ヲ見參ニ入事モ、依上宣也、仍近者長綱卿ヲ見參ニ入了、其時無上宣トモ可入歟、又待上宣可入歟之由、有面々沙汰、然レドモ元德之比、宣房卿入之例ニ任テ、無上宣トモ、長綱卿ヲ入了、宣房卿時有沙汰歟云々、予申云、致仕ノ公卿ヲバ、雖無上宣可

入歟、又自上被仰ル、事モアリ、先ハ不待上宣可奉入之條本儀之由、受申庭訓了、師勝朝臣猶有不審之氣色、予重不及口入、無益也々々々、抑致仕ノ公卿ト云ハ、七十已上ノ人ヲ云者也、雖不參必七十以上ノ公卿ヲバ、入見參者也、可心得云々、

〔薩戒記〕正長二年正月十日丁巳、今日緇素群參、武家者佳例也、今年又不異前代云々、僧者仁和寺宮已下、俗者執柄以下也、今日前關白同被參入、攝政次在下、仍座列如何之由、忽有沙汰、凡當職執政列前執政上定例也、然而前執政被蒙內覽宣旨之時猶守本列、又依流例也、前關白依爲蒙內覽宣之人有此疑、攝政被示合右府、右府曰、此條難儀也、輙難申左右、其故如此、參會不可有其例、抑又攝政之時蒙內覽事第一不也、於奏聞文者可內覽、於覽攝政之文、何可內覽哉、但非無其仰、文治普賢寺攝政〈藤原基通〉當職之時、後法性寺攝政〈于時右大臣〉蒙內覽宣旨、是依關東執奏也、非本意之由見彼記、其後胤凡不可有此儀也、抑依此事普賢寺攝政被辭職了、仍難用例事也、然者今度前關白被申請內覽之條、頗不甘心者歟、今案更不及彼者、內覽前關白位階上﨟也、是者當代攝政萬機之臣也、以何爲上以何可列下之由難申左右云々、如此之間、遂前關白被列上云々、後日傳聞之趣如此、予案之、謂當職與前者、以當職可爲先、是式文也、攝政左大臣爭可列前關白前左大臣下哉、又謂攝政與內覽者、內覽者雖未至執政之人、蒙其宣有例、爭可比代一人攝行萬機之仁乎、且未有爲攝政之人、非父兄之外、列他人之下事、然者猶攝政可被列上歟、可勘知事也、隨傳聞之說懋注之者也、

〔續史愚抄〈後光明〉〕正保四年正月十六日戊午、今夜右大臣〈尚嗣〉雖未蒙內覽宣旨、有外任奏內覽云々、

古事類苑

官位部十

令制官職六

議奏

議奏ハ集議聞奏スルノ謂ナリ、後鳥羽天皇ノ文治元年、源頼朝ノ奏ニ依リテ置ク所ニシテ、內覽以下ノ公卿十人ヲ以テ、之ニ補セシヲ以テ始トス、其後久シク書冊ニ見エザリシガ、靈元天皇ノ貞享三年ニ、年寄衆、御側衆ノ稱ヲ改メテ議奏ト稱シ、淸華、大臣家等ヨリ選ビテ之ヲ任ズ、而シテ其人員ハ四人或ハ五人トス、其職掌ハ、往時トハ大ニ異ナルモノニテ、常ニ至尊ニ近侍シ、親シク口勅ヲ承ケ、公卿以下ニ傳フルモノナリ、故ニ傳奏ノ職モ、多クハ此職ノ傳奏ニ由ルナリ、

名稱

〔倭訓栞中編五〕ぎそう　文治元年に公卿十人を撰み、議奏政事といふ事、玉海吉記等に見ゆ、

〔議奏歷〕貞享三年十二月八日、可レ稱二議奏一被二仰下一、〈是役年來、年寄衆、或御側衆ト稱レ之、〉

〔貞享三年新撰公家要覽〕御年老衆

轉法輪大納言實通卿　勸修寺前大納言經慶卿　東園中納言基量卿　愛宕宰相通福卿

始見

〔吾妻鏡五〕文治元年十二月六日乙卯、院奏折紙狀云、

可レ有二御沙汰一事

一議奏公卿

右大臣〈藤原兼實〉可レ被レ下二內覽宣旨一、　內大臣〈○藤原實定〉　權大納言實房卿　宗家卿　忠親卿

職掌

權中納言實家卿　通親卿　經房卿　參議雅長卿　兼光卿

已上卿相、朝務之間、先始自神祇、次至于佛道、依被議奏、可被計行也、〇中略

十二月六日　頼朝在判〇又見玉海文治元年十二月廿七日條

〔故實拾要十〕議奏

是議奏トハ、天子ノ近習ニ侍テ、諸ノ御用ヲ辨ズ、武家ノ老中職ニ似タリ、傳奏ヨリ奏スル事モ、先達議奏、議奏是ヲ天子ニ奏ス、其事ニ依テ、傳奏又直ニ奏スル事モアリ、此外都テ奏スル事モ、先達議奏也、天子ノ御口ヅカラノ御用、議奏奉之也、議奏ハ四人、或ハ五人也、此ノ中、必清華家一人加之也、自餘ハ羽林家ノ中、可然人ヲ撰テ補之也、

〔光臺一覽三〕議奏三四人、隨時加勢一兩人有、大中納言參議三位迄、右之通御用多き時は、臨時に加勢有、武家傳奏の不繙餘用を議して、關白にも申、奏をもふる役也、式日など、親王攝家方不參之衆、諸大夫非藏人部屋迄參りて、議奏中へ對面して申入る事也、口上は、前殿下に被仰ます、今日の御禮被有御參ます筈之處、臨時御所勞に依て、御斷被仰入ます、此段宜敷御沙汰被成被進ます樣にと、爲其御使者を以、議奏中迄被仰ますと申切て、又厚く平伏して、御使者青木土佐守と名乘る事にて候、右之口上、議奏衆丁寧に御聞屆被成、御返答には、御使者口上之趣畏入まして御座ります、其段宜御沙汰申ますで御座りませうずと、御使者御苦勞とて入給ふ事也、此外小用筋皆此役なり、〇中略此兩役は其器により、清花大臣家よりも被勤候、併清花などの武家傳奏務事は、諸家にて嘲り申事に候、

〔續近代年中行事正月〕四方拜

一刻限參內、議奏へ參居之由申入置、〇中略

一出御之由、議奏被示之後、脂燭殿上人御服、御劍、御手水陪膳等へ出御之由申入、

○按ズルニ、本書ニハ此外議奏ノ、小朝拜以下ノ公事ニ關ル事見エタリ、

〔宗建卿記〕享保十七年八月九日、議奏輩、召御前仰云、故院〇靈元御追號、御在世之時思召在之哉被尋下本所之處、兩號被染宸筆有之由、則寫之自新大納言爲被入叡覽、靈元孝靈孝元、中正、履中反正、件兩號之間、可爲何號歟、靈元可然思召候、猶被群議可有言上之由、則申關白右府等之處、兩公先是參內少時群議之上、兩號之間、可爲端方叡慮之奉了、無子細候歟、殊近來明正院御例元明元正取合改院御定也旁可然候歟之由、議奏輩奉之、參御前奏之、

〔議奏記錄〕嘉永七年〇安政元年七月九日丙午、自大樹進獻茶一壺、武家傳奏就議奏披露、八月廿四日庚申、從大樹進獻初鶴、武家傳奏就議奏披露之、

〔所司代袖鑑〕音信贈答事

一議奏衆被仰付候義は不及伺候、被仰出候已後、江戸へ申遣候、其人品由緒等之義、御吟味は前廣承之候、

〔百一錄〕元祿六年九月五日、中御門大納言、久我大納言、清水谷大納言等卿、被補議奏、

〔元祿十三年御公家當鑑〕議奏衆

今出川大納言伊季卿　久我大納言通誠卿　池尻中納言勝房卿　石井宮內卿行豐卿　武者小路三位實蔭卿

〔百一錄〕寶永六年六月□日、池尻黃門、石井相公可爲新院傳奏、鷲尾黃門、石野三品被補議奏、

〔大江俊矩公私雜日記〕寛政九年

議奏　今出川大納言實種卿　廣橋前大納言伊光卿　甘露寺前大納言篤長卿　鷲尾前大納言隆建卿　六條前中納言有庸卿

文化十四年

議奏　廣橋前大納言胤定卿　甘露寺大納言國長卿　平松前大納言時章卿　日野中納言資愛卿　豐岡前宰相和資卿

〔外樣言渡之記〕嘉永三年十一月二十日

被免議奏加勢　源大納言

議奏加勢被仰出　萬里小路中納言

右廣橋大納言被申渡候、尤番々可申傳旨候事、

十一月二十日　隆修

嘉永四年五月十四日

依所勞願被免議奏御役　野宮中納言

議奏御役　右大將

被免議奏加勢　萬里小路中納言

右之通被仰出候旨、橋本前大納言被申渡候、尤番々且小番未勤之輩江は、從親族中可申傳由候事、

同日　良芳

〔安政三年雲上明覽上〕議奏方

廣幡右大將基豐卿寺町今出川上　廣橋前大納言光成卿西院參町

久我大納言建通卿（鎗辻子）　橋本前大納言實久卿（日御門前）

萬里小路中納言正房卿（中筋南角）

〔議奏記錄〕安政五年九月廿六日、武傳被付（內覽濟）

一、昨年五月被加議奏列、朝恩深畏入候、元來愚昧其上病身恐懼候得共、蒙厚御沙汰御請申上、以御憐愍勤仕畏入候、然處過日來所勞不參甚恐入、此比御用繁折柄、殊相役出仕、一卿御用御差支にも可相成、押而出仕可仕之處、誠以恐懼候得共、此比出仕難仕、退役之儀相願度、以御憐愍願之通被聞食候得者、可畏入存候、此段宜願御沙汰候也、

九月廿五日　恭光

萬里小路前大納言殿

〔外樣言渡之記〕萬延元年八月八日

依所勞願被免議奏御役、被加近習小番御免之列候趣、中山大納言被申渡候由、日野中納言被演說候、尤番々且小番未勤之親族中江も可申傳旨候事、　裏松中納言　行道

同月十一日

從今日被加議奏列候旨、右大將被申渡候由、正親町大納言被演說候、尤番々且小番未勤之親族中江も可申傳由候事、　久世三位　有容

〔慶應元年都仁志喜〕議奏方

正親町三條大納言實愛卿（椹木町寺町西）　六條中納言有容卿（寺町西藥師下）　柳原中納言光愛卿（中筋）　廣橋權中納言胤保卿（堺町院參町西角）　久世前宰相通熙卿（小川本誓願寺角）

役料

〔所司代袖鑑〕音信贈答事

一議奏衆役料、是亦老中、幷自分證文不﹅及候、○下略

〔光臺一覽三〕議奏三四人、隨時加勢一兩人有、○中略御役料現米四十石、御一人分也、加勢に料なし、

〔京都御役所向大概覺書二〕二條御城御藏詰米大豆幷御役料御切米御扶持方定渡方之事

一米四拾石　議奏料　中山前大納言

右者家來手形ニ所司代裏判

一米四拾石　同斷　鷲尾大納言

右同斷

一米四拾石　同斷　岩倉中納言

右同斷

一米四拾石　同斷　石野宰相

右同斷

一米四拾石　同斷　石井右衛門督

右同斷

一米四拾貳石　御切米　清閑寺頭辨

右者家來手形ニ兩傳奏家來奥判所司代裏判

傳奏

傳奏ハテンソウト稱ス、親王家、攝家、及ビ武家寺社等ノ奏請ヲ傳奏スルコトヲ掌ルモノニ

名稱

シテ、其名ハ既ニ安德天皇ノ朝ニ見エタリ、然レドモソハ院ノ傳奏ニシテ、未ダ天皇ノ爲ニ置キシニハアラズ、其之レアルハ建武中興ノ時ヲ以テ初トス、足利幕府ノ頃、武家傳奏、寺社傳奏等ノ別アリ、德川時代ニ至リテハ、武家傳奏ヲ特ニ要職ト爲シ、單ニ傳奏トモ稱シ、又兩傳奏ト稱ス、其常ニ二人ヲ置クヲ以テナリ、又卽位、改元、凶事等ニハ、臨時ニ其傳奏ヲ置クコトアリ、

〔名目抄人體〕傳奏(テンソウ)

〔運歩色葉集天〕傳奏

〔建武年間記〕傳奏詰番

一番二日　三日　十二日　十三日　廿二日　廿三日
菊亭前右大臣兼季公　萬里小路一位宣房卿　三條中納言右京大夫　洞院左衛門督實世卿　大貳經顯卿

二番四日　五日　十四日　十五日　廿四日　廿五日
久我刑部卿　堀川大納言　侍從中納言大藏卿　四條中納言修理大夫隆資　右大辨宰相淸忠

三番七日　八日　十七日　十八日　廿七日　廿八日
洞院右大臣公賢公　葉室前大納言按察使長隆卿　前民部卿別當光經卿　中御門前中納言冬定卿　左大辨宰相實治卿

四番十日　十一日　廿日　廿一日　廿九日　卅日
吉田前内大臣民部卿定房公　三條前大納言宮内卿　文章博士　中御門前宰相經宣卿　日野宰相資明卿

〔建武年間記〕口遊去年八月二條河原落書云々〇元年歟、中略、

賢者カホナル傳奏ハ　我モ々々トミユレドモ　巧ナリケル詐ハ　オロカナルニヤヲトルラン

〔太平記六〕正行參吉野事

武家傳奏

楠帶刀正行、舍弟正時、一族打連テ、十二月廿七日、芳野ノ皇居ニ參ジ、四條ノ中納言隆資ヲ以テ申ケルハ、〇中略今度師直師泰ニ懸合、身命ヲ盡シ合戰仕テ、彼等ガ頭ヲ正行ガ手ニ懸テ取候歟、正行正時ガ首ヲ彼等被レ取候カ、其二ノ中ニ戰ノ雌雄ヲ可レ決ニテ候ヘバ、今生ニテ今一度君ノ龍顏ヲ奉レ拜爲ニ參内仕テ候ト申シモ敢ズ、涙ヲ鎧ノ袖ニカケテ、義心其氣色ニ顯レケレバ、傳奏未奏セザル先ニ、マヅ直衣ノ袖ヲゾヌラサレケル、

〔東山殿年中行事十二月〕朔日、將軍家〇中略出御于御對面所、御供衆申次御禮如常、(中略)或日、今日傳奏モ被レ參事アリ、

〔禁裏向御法式〕禁中方御條目十七箇條

公家中雖レ爲二官位次第一、勅使ノ時ハ不レ依二官位一先座ト云々、

一關白傳奏并奉行職事等申渡儀、堂上地下之輩、於二相背一者、可レ爲二流罪一事、〇中略

右可レ被二相守此旨一者也、

慶長二十乙卯年七月　照實在判二條關白

秀忠在判

家康在判

〔御當家令條二〕條々

一禁中方之儀、長橋局、兩傳奏江伺之、先規之御作法可二相守一之、勿論板倉周防守〇重宗牧野佐渡守〇親成可レ得二差圖一事、〇中略

一官位其外、表向之御用者、爲二傳奏之役一間、内々にて、兩人執奏一切無用之事、〇中略

一萬事御入用、五味備前守手前ゟ、如二先規一品々兩人以二手形一、其時々に可二受取一事、

附勘定之儀、兩傳奏、并周防守佐渡守ニ申斷、毎年歲切に可二相究一事、〇中略

右之條々、可レ相二守此旨一者也、

承應四年正月十一日　　御墨印

高木伊勢守どのへ

青木新五兵衞どのへ

〔德川禁令考二公家〕攝家宮方公家衆法式所司代江達

定〇中略

一攝家宮方を始、奏請の事は、攝政殿井兩傳奏に相達せられ候上に而、可有奏聞候、寺社傳奏に至而も、是又可爲同例事、〇中略

右之趣、攝政殿江も可被相達之旨、兩傳奏可被申談候、以上、

正德四年十月廿八日　　戸田山城守〇忠眞、以下五人略、

水野和泉守殿〇忠之

〔續近代年中行事正月〕小朝拜

一武家傳奏へ、元日小朝拜、何刻警固如例沙汰可有之由、書付ニテ申遣事、

〔京司秘錄下〕所司代御參內之節、御次第書、

參內之儀

一戸田備後守、酒井讚岐守、同伴參內、鶴間着座、

一傳奏出會、備後守御口上被申述、東宮へ之御口上も被申述、傳奏退入、言上之後出席、告可有御對面、東宮にも可有御對面之由、

一出御之後、傳奏鶴間出席、誘引備後守、讚岐守小御所取合、廊下北方列座、

一御進獻之御太刀折紙、傳奏披露、備後守於中段被拜龍顏、〇下略、

〔光臺一覽三〕武家傳奏　貳人　大中納言宰相迄

右は總武家方の執奏たり、關東御往返、官位昇進、寺社方諸人參內之譯、禁中一切、上下奥口之沙汰人也、〇中略尤文筆之才智、辯舌公道之人にあらざれば難叶也、

〔禁中恒例年中行事正月〕關東御使

是は年始御祝儀上使として、高家肝煎三人の內上京あり、參內の日限仰出され、上使所司代衣冠にて同伴、唐御門より參內、諸大夫之間より昇殿して、鶴の間に着座、傳奏出座、御口上申述る、兩卿言上之後、御對面有べきよし仰出され、小御所〇小御所一本作清涼殿、御上段江出御、兩卿誘引、布障子邊に列座、御進獻之御太刀折紙、傳奏披露、上使中段において龍顏を拜せらる、〇中略廿七日頃京着、廿八日頃參內の事もあり、今は大かた廿八日頃京着にて、二月朔日二日頃參內、其後御暇なり、

〔嘉永年中行事二月〕關東へ御使

日限定らず、關東へ年頭御使として、武家傳奏參る、

〔光臺一覽一〕當月〇三月上旬之內、關東へ年頭之御禮として勅使を被差下、勅使は武家傳奏兩人、院使は院傳奏、法皇使、女院使、東宮使、女御准后使等、御所方有合次第、大方は兼合公家衆五人計參府有、〇中略勅使各關東御下着之處は、傳奏屋敷とて、大名小路に御屋敷有、則御評定所の隣也、常々御徒頭格の士兩人提野村之何某留守居仕なり、外之公家方は似合々々に居館を預け下され、傳奏衆を始、何れも五万石、三万石位の大名方を、御馳走人に被仰付、御公儀よりも、御旗本御寄合衆抔の內にて、心得能物馴たる仁を被為添、山谷海河の珍物厚味、朝夕の御饗應、〇中略扨諸卿着府月番の御老中三高家迄屆有之、翌日御老中御上使にて入來したまふて、〇中略三日四日之內、禁裏關東之御德日、關東之御忌日を撰み登城有、〇中略扨勅使御對面之席は白木書院也、〇中略將軍樣も御官位相當の御衣冠にて、白木書院之御上段之左之方に着御有、兩卿之中下座之仁、禁中より被進候御太刀目錄御持參有、將軍樣へ手自御渡し被成候、口上は上首の傳奏、右座に付、將軍樣と御對座

にて被演述、將軍樣御平伏有て、勅諚之旨御拜聽奉畏給ふとかや、御太刀目錄頂戴被遊し後は、三高家三方に裁せ、御床に直し奉る、此儀終て兩卿は中段之左之方に着座有、○中略扨將軍樣入御可有由兩卿御會釋有共、其儘御座を被爲〆先々と有御上意に任せ、兩卿下段に下り給へば、將軍樣中段之上之二疊目迄御送り被遊、其節御老中方大樹公是迄と被仰に付、兩卿顧見平伏有て退座有、將軍樣にも入御有、

〔日次紀事二月〕此月禁裏院中兩傳奏并院參之公家爲使節使赴關東而被賀年始、

〔康富記〕嘉吉四年○文安元年二月五日乙酉、是日被行仗儀、○中略仍少內記代事六位外記史之間可勤歟、任例六位史可勤仕之由新宰相大內記父尹大納言傳奏○藤原定親被申之、

文安四年六月一日辛酉、參鷹司殿○房平又參文第、令語給云、執柄事、一條殿○兼良可有御再任之由、武家被執奏申、細川右京大夫爲管領職被申入之者也、雖然傳奏霜臺卿○藤原定親稱中末無出仕之間、兩三日之間被出仕以後、可被仰合之由、內々有其沙汰云々、

〔長興宿禰記〕文明七年十月十七日、今日室町殿御方○宰相中將殿足利義植御讀書始也、○中略事訖被下祿、平緒太刀、馬置鞍、兩種以代三千疋內々被下行、當座御太刀於御座敷帖、拜受爲代之間、以傳奏返上云々、廿二日、於准后小川新造御所有御酒宴、○中略今日之儀、山名彈正少弼被申沙汰、畠山、細川、赤松等參候、日野內府○勝光傳奏廣橋亞相○綱光等被參云々、

〔孝亮宿禰記〕慶長十五年三月七日丙辰、兩傳奏駿州之大樹へ爲御使有下向、依之爲餞別足袋二束進之、

〔百一錄〕元祿六年二月廿五日、柳原、持明院兩傳奏、院使向東武發京洛、

〔御昇壇記〕寶永五年三月八日、午下剋、油小路通、姉小路下町家より出火、折節坤風烈、忽及大火、○中略

一恒年武家傳奏東武下向之儀、依回祿相止、

〔百一錄〕寶永六年四月十一日、將軍宣下、〇德川家宣因茲二條右大臣、近衞左大將關東下向發駕、十二月三日、兩傳奏〇高野保春、庭田重條、仙院使梅小路中納言、春宮使鷲尾黄門〇中略右兩日發駕、

〔宗建卿記〕享保十六年十一月十九日、關白、傳奏、議奏參集、召御前有仰、東宮〇櫻町被爲成御成長、依之來年御元服被仰出、今日以武傳被仰于關東、依之內々被仰出由也、

〔愛親卿記〕寛政五年二月十一日、午刻因招愛親、正親町前大納言〇公明等、向松平越中守〇定信役宅、先愛親一人依六角越前守誘引出席、老中列座、越中守發言問答註左、〇中略問、都而御內慮勅問衆にも評議有之事哉、答、關東御旨趣書、兩傳奏先申關白殿之後、直言上事、輕儀者直御返答、兩傳奏奉之、所司代へ申達之、如尊號事重儀者、兩役傳奏議奏召御前、評議之上御返答、兩傳奏書注之伺之、〇下略

〔公儀向聞書〕傳奏モ多クハ昵近ノ中ヨリ器量ヲ撰テ定メラル、

〔所司代袖鑑〕音信贈答事

一傳奏可被仰付御內勅有之候へば、其趣江戶へ伺、其人之親類書、從傳奏取之添遣し、江戶へ相濟候已後、傳奏衆へ申入、被達叡聞、被仰付候、右親類書遣候儀、自今已後右之通り可然と、從老中申來り、本院傳奏被仰付候時も同樣之由、

〔武家傳奏誓詞〕勤中御役料米五百俵、年々關東參向御用之節ハ、所司代役宅へ招キ、於小書院對話、

就傳奏之役儀勤仕、公家武家御爲、聊以疎略存間敷候、公武御用之儀ニ付テハ、相役中、惡ク不仕、諸事申合依怙贔屓無之正路ニ可致沙汰之次第、御用之儀、各被相尋、子細有之バ不殘心底可申者也、

右於違背者、可蒙梵天帝釋四大天王、總日本國中大小神祇御罰者也、

年號月日　　實名血判

老中連名殿

所司代誰殿

〔翁草三十八〕一堂上に武家昵近の家十七軒有、○中略公方家御代始に武家へ對し、不依何事、疎略有間敷由の誓書を被差出由、又武家傳奏も、其職に補せらる丶時、所司代より、右之趣の案文を被差越、誓書致さる丶となり、

〔實豐卿職方聞書〕武家傳奏御番御免は、後光明院の御宇の始より始る也、法皇御宇○後水尾三西大納言實條、中院中納言通村、兩傳奏にて御番勤仕也、三西任槐以後、内大臣也、御免、本院御宇○明正御番不相勤なり、三西前右大臣實條日野前大納言資勝一人、御番勤なり、後光明院御宇始ッ方、菊亭今出川前大納言經季、飛鳥井前大納言雅定、乍二人御免、同御宇清閑寺前大納言共房、野宮前大納言定逸、二人共に御免也、新院の御時、當仙洞御宇、勸修寺前大納言經廣、飛鳥井前大納言雅章、乍二人御免、予御番、法皇仰にて御免あり、難有候得共、昨今之儀と申、予四十六歳未若候と申、先相務度と申所に、達て御許あるにより不勤也、法皇へも、禁中へも、御禮申上也、今の世□役人は傳奏以下□院評定小番免ぜらる丶也、法皇へは翌日被伺公申上、禁中へ御幸にて御免なり、則長橋まで御禮申上也、傳奏辭退、御番飛大雅一予御免也、丞相にてもなく候に、御免忝存候由申上也、飛大請たるゆゑ、辭退達而不申也、達而申せば飛大へ當るにより、御請申たるなり、

〔後愚昧記〕應安二年三月廿八日、又聞、山門事、今夕武家付傳奏藤中納言武家使者攝津掃部頭云々、有奏聞、子細云々、委可尋記之、

〔長興宿禰記〕文明九年閏正月五日、今日傳奏廣橋大納言殿綱光卿、後聞敍從一位、此間所勞難治、大略難被本腹之間推敍云々、傳奏事被辭申之間、子息頭左中辨兼顯朝臣、公武傳奏如父卿可存知之由、今日被仰付云々、勸修寺大納言敎秀卿爲兩人副奏分爲雲客傳奏事、曩祖有其例云々、

〔親長卿記〕明應五年六月三日、伯二位爲勅使來仰云、勸修寺前大納言敎秀□□□□仍武家傳奏事辭退、中山中納言宣親窮困之由、度々辭退、結句近日申暇可在國云々、右中辨守光朝臣有若亡之、可被仰誰人哉可計申云々、予申云、中山中納言誠申窮困之由、守光朝臣有名無實、所詮先勸修寺前亞相、存

日之間、中納言政顯爲二其代一可レ存知之由、可レ被レ仰歟之由、申入了、

〔宣胤卿記〕永正五年六月十七日、右大丞入來、傳奏事出仕不レ合期由申二禁裏一云々、父前中納言久在國爲レ代之條不レ可レ然歟、傳奏事有レ望申方、可レ辭申歟之由有二御尋一云々、御返事之樣談合之間、御上洛以前故障子細雖レ申入、禁裏於二于今一者被レ仰二他人一之條、頗失二面目一、無二相違一者可レ畏存、且傳奏事非二一人事一也、武家申沙汰、傳奏近者廣橋贈內府綱光卿傳奏之時、彼卿令レ申沙汰、被レ召二加勸修寺故儀同兩人一也、有レ望申輩者於レ被二召加一者、不レ可レ有二子細一由可レ申歟之由令二入魂一了、　廿三日、右大丞入來、武家傳奏事、辭狀季綱朝臣申入候處、辭退神妙、仍傳奏事可レ申沙汰者、奏聞之處、以二前左大辨宰相一辭退申了、爲二武家一可レ被二仰定一云々、仍只今被レ遣レ召、未參之間來云々、此事條々言談時宜之趣者、父中納言在國御敵同意歟、又爲二其代一傳奏不レ可レ然云々、令レ辭申之條、時宜又難レ測、雖二左大領狀申一、今度ハ當身傳奏事、兩人相並申沙汰事、可レ望申歟云々、　廿四日、右大丞入來、傳奏事廣橋申二故障一、右大兩身可レ被レ仰之由、自二武家一御申、仍被二仰下一候間申二領狀一云々、

〔公卿補任　後柏原〕永正五年戊辰

參議正四位上藤尙顯　二十一、六月廿日、被レ仰二數奏一、同廿四日、被レ仰二武家傳奏事一、

永正六年己巳

參議正三位藤守光　三十九、左大辨、四月日、被レ仰二數奏一、六月廿一日、被レ仰二武家傳奏事一、

從三位同尙顯　三十二、右大辨、武家傳奏、

〔公卿補任　後奈良〕天文四年乙未

參議正四位上藤兼秀　三十、同(大永六年)九月廿三、被レ加二數奏一、同日爲二武家傳奏一、

〔京地在役代々記〕武家傳奏近代

自二永正五年六月廿日一到二大永四年三十一薨一勸修寺參議右大辨尙顯卿、自二永正六年四月一、到二大永五年廿九薨一、廣橋參議左大辨守光卿

永正十五年　勸修寺前中納言政顯卿（在國加州）

〔公卿補任 正親町〕慶長八年癸卯

權大納言正二位藤兼勝（四十六、二月十二日、爲武家傳奏、）

參議從三位同光豐（二十九、二月十二日、爲武家傳奏、）

〔御湯殿の上の日記〕慶長八年三月廿四日、ひろはし大納言（○兼勝）にてんそう仰つけらるゝ、かたじけなきよし申さるゝ、

〔百一錄〕寛文十三年

慶長八年二月十二日、爲武家傳奏、　廣橋　藤兼勝（四十六、元和四、十一十四、內大臣、）

同日　烏丸　藤光豐（廿九才）

同十九年　月日　三條西　藤實條（四十才、于時權大納言、寛永十七年薨、）

元和十年　月日　中院　權中納言源通村（廿七）

寛永七年五月十五日　日野　權大納言藤資勝（五十四、寛永十六年薨、）

同廿年　月日　菊亭　前權大納言藤經季（五十才、承應元三九、右大臣、同日薨、）

同年　月日　飛鳥井　前權大納言藤雅宣（五十八、慶安四三廿一薨、）

承應元年　月日　野宮　權大納言從二位藤定逸（四十三、万治元二十五薨、）

同年　月日　清閑寺　前權大納言藤共房（六十四、寛文元內大臣七同年七廿八日薨、三十）

万治元年　月日　勸修寺　前權大納言藤經廣（五十三）

寛文元年　月日　飛鳥井　前權大納言藤雅章（五十一）

寛文□□月日　正親町　前權大納言藤實豐

同十年十月十五日、兩卿同日、　中院　權大納言源通茂（四十才、于時當官爲上首、一兩日後前官而爲下藹、）

	日野前權大納言藤弘資（五十四才、延寶三卯年二月十日兩病役御免、且弘資病年頭之勅使勤仕也、）
延寶三年二月十日	花山院權大納言藤定誠（卅六才、數日之後辭大納言、貞享元八月廿六日辭役、）
同年五月十八日	千種前權中納言源有能（六十一才、天和三十一廿七辭、）
天和三年亥十一月廿七日	甘露寺權大納言藤方長（卅六才、貞享元子十二月廿六日辭役、）
貞享元年子九月廿七日	千種前相公源有維卿（前權大納言、元祿五十一月廿八日病死、）
同年十二月廿七日	柳原權大納言藤資廉
元祿五年申十二月十三日	持明院前權中納言藤基時卿（六十歲、同六年八十六日依病氣御役被免、）
同六年八月十六日補	正親町權中納言藤公通卿（四十二歲、元本院伺候也、同十三年二月六日被免役、）
同十三年六月廿八日	高野相公保春

〔武家傳奏次第〕高野中納言（權大納言正二位）保春卿（在役十三年）元祿十三年六月廿八日、爲代公通卿、正德二年五月廿四日辭、同年同月廿六日薨（六十三）
庭田前大納言正二位（從一位）重條卿（在役十三年）寬永三年十二月十三日、爲代資廉卿、享保三年後十月一日辭、同十年七月十六日薨（七十六）
德大寺大納言正二位公全卿（在役八年）正德二年六月廿六日、爲代保春卿、正德三年七月卅日、兼右大將、享保四年十一月廿九日辭、同年同月卅日內大臣、同年十二月二日薨（四十二）
中院大納言正二位通躬卿（在役九年）享保三年後十月一日、爲代重條卿、同十一年九月十五日辭、右大臣從一位、元文四年十一月三日薨（七十二）
中山大納言正二位兼親卿（在役十六年）享保四年十二月廿三日、爲代公全卿、同十九年十月廿四日辭、同年同月日任准大臣、敍從一位、翌日廿五日薨（五十一）
園大納言正二位基香卿（在役六年）享保十一年九月廿一日、爲代通躬卿、同十六年月日辭、延享二年

五月十七日薨、五十五

三條西大納言正二位公福卿在役四年　享保十六年九月二日、爲代基香卿、翌三日辭權大納言、同十九年十一月七日辭、延享二年九月十七日薨、四十九

葉室大納言正二位賴胤卿在役四年十　享保十九年十一月七日、爲代兼親卿、同廿一年正月廿三日、從二位、延享四年十二月十九日辭、

冷泉前中納言　爲久卿在役八年　民部卿權大納言正二位　享保十九年十一月廿二日、爲代公福卿、享保廿一年正月廿三日、權大納言、同年十二月十二日辭大納言、寬保元元文六年八月廿九日辭、同年同月同日薨、五十二

久我大納言正二位通兄卿在役十年　寬保元元文六年九月十九日、爲代爲久卿、寬延三年六月廿一日辭、同年八月十日、任內大臣、

柳原中納言從二位光綱卿在役四年十　左衞門督　延享四年十二月十九日、爲代賴胤卿、寶曆十年九月廿八日辭、

廣橋大納言　兼胤卿在役七年廿　寬延三年六月廿七日、爲代通兄卿、安永五年十二月廿五日辭、同年同月同日任准大臣、

姉小路大納言　公文卿在役五年十　寶曆十年十月十九日、爲代光綱卿、安永三年十月十八日辭、

油小路大納言正二位隆前卿在役五年十　安永三年十月十九日、爲代公文卿、天明八年正月十一日辭、

久我大納言正二位信通卿在役六年十　安永五年十二月廿五日、爲代兼胤卿、寬政元年十月廿五日、任右大將、同三年十一月廿三日辭、同年同月廿八日、任內大臣、大將如元

万里小路前大納言正二位政房卿在役六年　天明八年正月十一日、爲代隆前卿、議奏ノ中、聽本座、座次信通卿上、寛政五年四月十三日辭、

正親町前大納言正二位公明卿在役三年　寛政三年十二月廿五日、爲代信通卿、院傳奏ノ中、聽本座、

同五年四月廿八日辭、

勸修寺按察使前大納言正二位經逸卿在役　寛政五年七月廿六日、爲代政房卿、

千種前中納言　有政卿在役　寛政五年七月廿六日、爲代公明卿、

〔孝亮宿禰記〕慶長十八年七月十二日戊辰、西三條〇藤原實條可爲武家傳奏之事、自將軍〇徳川秀忠被申、去ル十一日攝家衆等被議定云々、

寛永七年九月十八日甲午、去十六日酒井雅樂頭〇忠世土井大炊頭〇利勝等參攝政殿、被申武命之旨、中院大納言通村卿武家傳奏可被辭事、日野大納言資勝卿武家傳奏可被仰出事云々、

〔宗建卿記〕享保十六年七月三日、殿下〇近衞家久於御前被傳仰、園前大納言〇基香今度依有思食、武家傳奏可申退辭候、可申達之由、三條大納言宗建等奉之、召高倉前宰相、傳仰後、則付中山前大納言、申辭退之由、仍三條大納言、宗建等言上之、後日可有御沙汰之由也、中山高倉へ被申含、〇三條、宗建、同座、且於申辭退者、雖無御沙汰被召放候、可爲同事之間、可爲其覺悟、同有仰、是又申含了、　九月二日、三條西大納言、武家傳奏於御前關白被傳仰、〇議奏各侍座　十九年十月廿五日、行向右大將〇藤原常雅亭、相役輩各參會、中山儀同〇兼親依被辭武傳事候、議奏輩可令沙汰旨、昨日於省中奉之、依之招中山家僕於右大將亭、武家傳奏被沙汰之事候留書等、議奏輩傳承了、午後各參内、自今日武傳之事、議奏輩奉之、三條西前大納言、〇公福等、雖爲武傳、自先頃被免、加名之故也、　十一月三日、殿下〇藤原家久御參、被招議奏輩被示之、中山故儀同武家傳奏辭退之間、未及御沙汰之處、今日被仰出、冷泉前中納言〇爲久押小路前宰相〇實岑兩人之内可被仰出、此旨可申達關東之旨、可申土岐丹後守〇京都所司代賴稔之由、且院中臺盤所、今度有

御沙汰之處、御移徙已後可有御沙汰哉之旨、内々丹後守申之、　四日、今日右大將滋野井宰將中將等、被行向丹後守館、　武家傳奏之事、御内慮一紙書之、被持參了、

冷泉前中納言　押小路前宰相

右兩人之内、傳奏役被仰付度思召候、此旨可被申達候御内慮、

五日、向土岐丹後守、今日中可向彼館之由、予、滋野井宰相、武者小路前宰相三人之内、兩人可向之由申來、仍予滋野井相伴行向彼館之處、丹後守申云、先日關東へ申達候三條西前大納言傳奏役被免度之儀、且跡役之事、從關東老中申來候趣、件狀遂之、

去十八日、議奏衆を以、松平石見守、桑山下野守江被仰出候て、御自分之儀、御用有之候付、參內候樣可被仰付候得共、此砌禁裏常御殿御修理有之候間、近衞殿亭へ可罷出旨に付、則被相越候處、關白殿出席、花山院右大將、難波中納言、滋野井宰相中將、武者小路宰相列座、被申聞候者、三條西前大納言、久々病氣付而、九月中傳奏役儀御免之儀願書被差上候得共、心永保養可仕旨被仰出之、此砌迄加療養候得共、於于今快驗無之に付、再應役義御免之儀、願書被差上、被及言上候處、願之通、御免被仰出度思召候、此段當地へ宜申上旨被申聞之由、則儀奏衆被相達候、三條西兩度之願書寫被差越候、右御内慮之通可被仰出哉と被申越候、右之趣及言上候處、可爲御内慮次第旨被仰出候、此由儀奏衆へ可被相達候、

一三條西役儀御免之儀、被相願候付、跡役之儀、葉室大納言被仰付度候、中山前大納言も所勞、急出仕難仕體に有之、此砌御用多時節候之間、早速被仰付度思召候に付、先一人被仰進候、此段當地江宜申上旨、御内慮之由、以書付被申聞候、則右書付寫、幷葉室由緒書寫被差越候、右御内慮之通可被仰出哉と被申越候、右之趣及言上候處、去亥年、園前大納言病氣に付、傳奏役儀御免之節、跡役花山院右大將〇雅常三條西大納言、右兩人之内江被仰付度旨、御内慮に付、三條西被仰付候

様にと被仰出候、此度三條西大納言役儀御免、跡役之儀者、花山院、葉室〇賴胤兩人之内に而、思召次第被仰付候様にと被思召候、此段議奏衆へ可被申達候、以上、

十月廿九日

松平左近將監

酒井讃岐守

松平伊豆守

本多中務大輔

土岐丹後守殿

右一紙隨身之參內、先是殿下御參、仍先申殿下之後、參御前言上之、其後殿下被參御前之後、被招予、滋野井宰相中將等、被傳仰云、自關東被申之儀、逐一被聞食候、三條西前大納言役義、愈可被免之者、跡役之儀、花山院右大將、葉室大納言、兩人之內に而可被仰付之旨被聞召候、左候はヾ件兩人之中、葉室大納言可被仰付候、且右大將事、入念丁寧被申上候、依御機嫌思召候、尤今度可被仰付思召候得共、近年之間、任槐之儀可有御沙汰候得共、役儀之間茂無之故、今度不及御沙汰候間、此旨宜申達之由也、予、滋野井、武者小路等畏奉、則予、武者小路等、及薄暮更行向丹後守館、申仰之趣、遣一紙、

一三條西前大納言役儀、依願被免度之段被聞食、思召次第可被免之旨、及言上候事、

一跡役之儀、花山院右大將、葉室大納言、兩人之內に而、思召次第可被仰付之旨、左様に御座候はば、葉室大納言江可被仰付候、花山院右大將儀、被爲入御念、御丁寧被仰進候段、御機嫌被思召候、尤花山院右大將儀、去亥年被仰遣候通、傳奏役儀被仰付度被思召候得共、近年之內、任槐之儀、可有御沙汰候得者、役儀相勤候間茂無之故、今度被仰付間敷候事、

丹後守畏奉了、武者小路參內被言上了、　七日、殿下御參、召御前於議奏輩、殿下被仰云、三條西前大納言、依病氣武家傳奏役辭退、如願被免之由、且葉室大納言、武家傳奏役被仰出候由、彼卿被畏奉了、

退入其後召押小路前宰相、三條西傳奏被免之義、早々可被申達申含了、即時退出、被申傳候處、被畏存候由、押小路被示了、翌八日武家傳奏之事候、自議奏四人、申達葉室大納言了、

〔兼胤公記〕寛延三年六月廿一日、候宮中、於八景畫間、攝政殿(○一條道香)被仰云、右大將(通兄)傳奏役被免、其替被仰下之由、(柳原大納言議奏列座)謹申領承了、其後姉小路中納言(富香議奏)誘引於御小座敷、拜天顏、(○桃園)攝政殿被候御側、有取合、申畏存之旨退去、(轉役之事、先議奏以來使大典侍長橋大御乳人周防江謝申、拜天顏御禮同上、)於林和靖畫間賜祝酒、

廿五日、未剋過、着布衣、奴袴、同役同道向豐後守役宅、(先達而雜掌持誓書、參被役宅相待、)於廊下取誓書、(雜掌渡之)入懷中、座定之後、御附田中出羽守、山木筑前守候末座、予進出、取出誓書、附豐州、豐州披見了返之、次硯幷宮蓋等を持來、置予前、予摺墨、點筆、披誓書、表包置傍、開書展付疊上、日付三字、名字等書加、次取針、在硯宮中、左手無名指爪ノ上方以針差切皮、名字ノ下ニ加血判、(加血判之前、所設之蓋ヲ置前、其上ニ居誓書加血判、)乍載宮蓋取廻進豐後守、次附表包、豐州披見、訖持入奥ノ方、此間撤硯幷蓋等、豐後守還出、述賀詞、申畏存候由、起座歸華之後、向柳原亭、謝同伴之儀、(○中略)

誓書調檀紙、以同紙爲表包、(折かけ、)豐後守より至來之案文之紙之寸法之通ニ調之、表包も同至來之寸法之通ニ調之、

就傳奏之役儀勤仕、公家武家御爲、聊以疎略存間鋪候、公武御用之儀付而、相役中惡不仕、諸事申合、依怙贔屓無之、糺善惡正路可致沙汰候、次御用之儀、各被相尋、子細有之節、不貽心底可申者也、

右於致違背者、可蒙梵天帝釋四大天王總而日本國中大小神祇御罰者也、

寛延三年六月廿五日　兼胤血判

堀田相模守殿(○老中正亮)

酒井左衞門尉殿(○老中忠寄)

本多伯耆守殿(○老中正珍)

松平右近將監殿〇老中武元

松平豐後守殿〇京都所司代資訓

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十四年　傳奏

六條前大納言有庸卿　山科前大納言忠言卿

文政五年　傳奏

廣橋一位胤定卿　山科前大納言忠言卿

〔安政三年雲上明覽上〕武家傳奏

三條大納言實萬卿寛永元年ヨリ梨木町西側　東坊城前大納言聽長卿弘化二年ヨリ西院參町西角

〔外様言渡之記〕同月〇安政四年四月廿七日

右大將〇藤原基豐

武家傳奏御役被ㇾ免

廣橋前大納言〇藤原光成

武家傳奏御役被二仰出一

右之通番々且小番未勤之親族中江茂可ㇾ申傳、權大納言被二申渡一候事、

四月廿七日　長說

右之趣竹屋三位江申達了

〔文久元年雲上明覽上〕武家傳奏

廣橋一位光成卿安政四年ヨリ西院參町東角　坊城中納言俊克卿安政六年ヨリ荒神口

〔慶應元年都仁志喜一〕武家傳奏

飛鳥井中納言雅典卿文久三ヨリ日ノ御門前北行當　野宮中納言定功卿文久二ヨリ石藥師通南側

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十二月、勅シテ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置ク、○中略

一、內覽、勅問國事御用掛リ、議奏、武家傳奏、守護職、所司代、總テ被廢候事、

〔憲法類編三〕武家傳奏取扱ノ廉々參與役所ヘ可申出並同役所被移ノ事

丁卯○慶應三年十二月十二日、參與役所ヨリ達、

今度武家傳奏御役被廢候ニ付テハ、差當候所、參與御役ニ於テ取扱ニ相成候、但石藥師通一乘院里坊ヲ以、假ニ右役所ニ被設、且參與役所ト被稱候間、是迄武家傳奏取扱ノ廉々、右役所エ可申出候事、

但右掛之方々

大原宰相○重德　萬里小路右大辨宰相○博房

長谷三位○信篤　岩倉前中將○具視

橋本少將○實梁

右名前ヲ以可差出事

〔殿居囊〕武家心得草

傳奏其外公家衆日光御門主途中行逢心得○中略

傳奏衆其外公家衆出會之節、構も無之候得共、片寄候て、供廻り等相障不申樣致候事、

〔光臺一覽三〕武家傳奏　貳人○中略

右ハ○中略御役料五百俵、三斗三升一人貳百五十俵にて、五月、十月、兩度被下之、此外官位錄物之配當、法中上下之收納、凡地方正米三千石餘之御身上也、

〔所司代袖鑑〕音信贈答事

一傳奏衆役料ハ江戶ヘ伺相濟候已後、此宅ヘ招申渡候、代々度々老中證文來候、

〔嚴有院殿御實紀二十九〕寛文四年十二月七日、飛鳥井正親町兩亞相に銀二百枚づゝ給ひ、正親町亞相には傳奏料廩米五百俵下さる、旨面命あり、

〔京都御役所向大概覺書二〕二條御城御藏詰米大豆幷御役料御切米御扶持方定渡方之事

一米百七十五石　傳奏料　庭田前大納言〇重條

右者家來手形ニ所司代裏判

一米百七十五石　傳奏料　德大寺右大將〇公全

右者家來手形ニ所司代裏判

〔晴右記〕永祿十一年二月八日、宣下、〇足利義昭將軍宣下今日辰ニ可ㇾ有ㇾ之由候處、總用之申事歟、戌ニ有ㇾ之也、傳奏へ三百疋拜領、

〔光臺一覽四頭書〕將軍宣下之御祝義拜領物傳奏衆一人、銀三百枚、錦二百把宛恒例也、其外臨機應變又流例有ㇾ之、被ㇾ下事也、

〔官物記〕官位御禮物

諸大夫　兩傳奏　銀六十目

國取侍從成　兩傳奏　銀三枚ヅヽ

中將成　兩傳奏御太刀折紙銀五枚ヅヽ　右官物之外御禮

兩傳奏　小袖　三ヅヽ

無位無官ニテ、始ヨリ從三位中將ニ昇進被ㇾ仰付時、

宰相成　兩傳奏　御太刀銀十枚ヅヽ　右官物之外御禮

兩傳奏　御太刀黃金一枚小袖三ヅヽ

法橋成　兩傳奏　金一分

高家衆御禮物之次第　兩傳奏　太刀一腰、馬代銀一枚、

〔故實拾要十〕傳奏

是傳奏ト云ハ、諸社、諸寺院、武家等、何レニモ傳奏アリ、諸社ハソノ社ノ事ヲ奏シ、諸寺ハソノ寺院、武家ハソノ武門ノ諸事ヲ奏ス也、○中略又諸社寺院ノ傳奏ハ堂上代々ソノ家アリ、諸家中勤之也、

〔禁裏秘抄〕諸寺社之傳奏取次

寺社方より何事に限らず、上へ申上る程の事、先其傳奏に申て後、傳奏より或は官位の事は、先武家傳奏へ傳へ、何の仔細なければ、職事に付て御披露あり、假令如何の事にても、其傳奏より武家傳奏へ達して、御沙汰ある事なり、

〔京都御役所向大概覺書一〕寺社傳奏之事

伊勢　春日　賀茂　貴布禰　右之分極候傳奏無之

廣橋　石清水　知恩寺　本國寺　清水成就院

白川　松尾　稻荷　大原野　廣田西宮　紀伊日前

勸修寺　住吉　藤森　御香宮　御靈　泉涌寺　南都西大寺　長講堂　南禪寺　大德寺　越前永平寺　能登惣持寺　誓願寺　安養寺　眞如堂　圓福寺　八幡正法寺　周防長門國分寺　佛光寺　伊勢專修寺　東本願寺　遊行宗門　伊勢比丘尼　信濃善光寺比久尼

甘露寺　妙心寺　萬里小路　淨花院　般舟院　嵯峨清凉寺　丹波常照寺

柳原　七觀音院　四辻　北野大報恩寺

小川坊城　興正寺　鷲尾　上京興聖寺

清閑寺　太秦廣隆寺　持明院　熱田

三條西　東山禪林寺　粟生光明寺　三鈷寺　遣迎院　廬山寺　嵯峨二尊院

武家傳奏　（西）本願寺　黑谷

〔文久二年雲上明覽　下〕諸社諸寺方傳奏

神宮（勢州）（上卿奉行　德大寺家清閑寺家）　賀茂下上社（傳奏奉行　正親町家清閑寺家）　南曹（春日）　甘露寺家

右之分時々相替

（下總）香取社　（美濃）白山社　一條殿　梅宮　九條殿　（尾州大山）針綱社　二條殿

（尾州）阿蘇宮　（常州）鹿嶋社　（勢州一宮）都波岐神社　（勢州桑名）佐乃富神社　桑名春日社　（尾州志賀村）綿神社神主　鷹司殿

伏見御香宮　伏見殿　高野山惣分方　御室宮　市屋道場金光寺　（金光寺末寺）西蓮寺　右　花山院家

（河內）壺井八幡宮　大炊御門家　禪林寺　粟生光明寺　二尊院　廬山寺　遣迎院　右　三條西家

（豐前）今井津祇園社　花咲稻荷社　右　中院家　（尾張）古渡稻荷社　正親町家

五山　金戒光明寺　智恩寺　靈源寺　（丹波）法常寺　西宮　尾張東照宮御宮弁神官　（武州）忍東照宮御

宮金剛寺　（尾州）若宮八幡社家　足羽社社家　（石州）眞福寺　（播州）月照寺　象頭山金毘羅　方廣寺　（美濃）南宮社

司　（下州）太平山別當　武家傳奏

西八條大通寺　座摩社　右　中山家

石清水八幡宮　本國寺　（清水）成就院　（紀伊）報恩寺　（加州白山長吏）法印白光院　廣橋家　宇佐八幡宮　（近江）永源寺

烏丸家

出雲大社　（近江）長命寺　（東山）七觀音院　（播州）大念佛寺　法隆寺　（丹波）高源寺　柳原家　妙心寺　甘露寺家

般舟院　（嵯峨）清凉寺　淨華院　（丹波）常照寺　大雲院　（淨花院內）松林院　（越前横越）證誠寺　（尾州鳴海）八幡神社　右　萬里小路家

住吉社　藤森社　上御靈社　泉涌寺　大德寺　（能登）總持寺　（越前）永平寺　南禪寺　金地院　（相模）遊行

（越前）誠照寺　（伊勢）慶光院　（信濃）善光寺上人　（長門）國分寺　（周防）國分寺　誓願寺　圓福寺　安養寺　八幡正法寺

長講堂　眞如堂　清水執行　（日向）寶滿寺　（南都）西大寺　（四條道場）金蓮寺　御影堂　右　勸修寺家

神宮傳奏

尾張津嶋社　太秦廣隆寺　智積院　妙顯寺　越中國泰寺　高野山學侶　靈山正法寺　尾州國府宮神主社家　參州西尾城内御劒八幡宮

井伊文天王社　尾州中嶋郡中嶋宮　右　清閑寺家

河内道明寺天滿宮　山本家　立本寺　坂本西敎寺　空也堂　身延山久遠寺　右　坊城家

佐太本山來迎寺　高野家　北野大報恩寺　四辻家　新玉津嶋社　上冷泉家　攝津三津八幡宮　冷泉家

興聖寺　堺妙國寺　岡崎滿願寺　右　鷲尾家　尾張一ノ宮　遠州秋葉山　油小路家

大山崎離宮ノ八幡宮　櫛笥家　妙滿寺　今城家　吉祥院天滿宮　醍醐長尾天滿宮　右　五條家

筑紫安樂寺　江戸東安樂寺　長崎松森天滿宮　大坂天滿宮　大和長谷本願院　東大寺龍松院　攝津常樂寺天滿宮　長樂寺　河内平岡社家水速家　常陸法雲寺　右　高辻家

信州定額山善光寺　別當大勸進　彥根北野寺　右　葉室家

平野社　西洞院家　尾張熱田誓願寺　近江金勝寺　右　持明院家

伊勢兩宮　伊勢大湊八幡宮　同香良洲社　尾州內宮御祭社　右　藤波家

松尾社　井旅所　稻荷社　大原野社　城南離宮　小鹽山勝持寺　出雲日御崎社

右之外於諸國伯家附屬之社數多、其外無傳奏之神社亦執奏、　右　白川家

竹田不動院　竹田安樂壽院　右　高倉家

〔國師日記〕寬永四年七月十九日、御前にて上方一諸出世御法度共被仰出、今度板倉周防殿〇江重宗右之通被仰付、〇中略

一寺々之傳奏へも、故相國樣〇德川家康御法度書に相違候者、出世之儀望申候共、向後猥に執奏無之樣に三條中院と相談仕可申渡事、

〔故實拾要〕十神宮傳奏

是伊勢大神宮ノ傳奏也、清華以下ノ大納言タル人勤之、神宮ノ事ヲ奏スル也、此傳奏ヲ被勤內、觸

穢ノ事有之時ハ、早速傳奏辭退アル事也、諸社ノ傳奏トハ各別也、此傳奏ノ中ハ、僧尼重輕ノ服者等一切不入門內、家僕ノ男女等穢有之者ハ、令下宿事也、仍門ニ神宮傳奏也、僧尼重輕不淨輩不可入門內ト板札ニ書テ、常ニ其門ニ建ル也、又醫師等病用ノ時ハ、令蒙頭巾テ、其ノ殿ニ入ル也、

〔光臺一覽三〕伊勢賀茂ハ、家不定、大中納言の中にて常々被遊置候、伊勢傳奏、賀茂傳奏と云也、

〔後水尾院年中行事上〕正月十一日、奏事始あり、〇中略神宮の奉行申次して神宮傳奏西のやり戶より入て候す、御きそくをうかゞひて圓座につく、奏事の目六を笏とりそへて座につき、笏を置て目六をよみ申、一ヶ條〳〵にて御きそくをうかゞひ、よみ終りて、目六を口口に笏にとりそへて圓座を下りて平伏す、

〔近代年中行事細記正月〕十一日奏事始奏神宮之事儀神主禰宜等官位歟

神宮傳奏、奉行職事參內而於議定所沙汰之、傳奏調小折紙、就內侍奏之歟、神宮儀奏始也、無別作法歟、傳奏襲奉行束帶如常　奏事始儀、不能勘知、可尋問、

基私曰右之儀、幼主無出御之時如此、主上直於聞食者、議定所出御、悉撤疊、爲板敷、構御座南面二帖、其上設茵、　傳奏座圓座一枚、東面西方垂御簾、刻限出御、傳奏入簾中奏條目、一々御氣色奉請之、悉奏了、取副笏退去、此間奉行有簾外之簀子、其後勾當內侍迄、珍重申入退出也、

〔禁中恒例年中行事正月〕十一日神宮奏事始

是は伊勢大神宮の事を奏聞する始めなり、社家の官位など沙汰なり、

〔宣秀卿御敎書案〕神宮事可令傳奏給者、依天氣言上如件、

十二月〇明應五年卅日　　　左中辨宣秀

進上　侍從大納言殿

〔公卿補任後柏原〕文龜二年壬戌

權大納言從二位藤實隆（四十九、侍從、正月廿三日、敍正二位、神宮傳奏、）

〔宣胤卿記〕永正三年二月十二日壬戌、神宮傳奏事申領狀、長講堂傳奏事辭申之由、申遣頭辨、

神宮傳奏事有存旨、雖故障申入候、度々蒙仰致固辭之條、其恐候間、可存知仕候、內々可得御意候、謹言、

二月十二日　宣胤

頭辨殿

神宮事可令傳奏給者、依（此行二行也）天氣言上如件、

二月十二日　右中辨尙顯（奉）

進上　中御門大納言殿

三月一日辛巳、早旦沐湯修祓着衣冠、於庭上敷薦奉拜太神宮、（內外）神宮傳奏事去月蒙仰之故也、廿四日、申斜着衣冠、（○註略）參內、神宮奏事始也、此傳奏、近年侍從大納言（實隆卿）也、依任槐（三月五日）余可存知之由被仰下、有存旨、度々辭申之處、依再往仰、終去月十二日申領狀、祖父依武家（普廣院殿足利義敎）○御執奏爲此傳奏、古來嚴重之儀人々所望也、然神宮造替經數通不及沙汰、（內宮寬正三年十二月廿七日遷宮、至當年四十五年歟、外宮永享八年九月十六日遷宮、至當年七十三年歟、）外宮炎上以後無造宮、雖有禰宜闕（今三闕、內宮一人、外宮二人、）經年序無望申躰、如斯時節、傳奏可有所存歟、

〔公卿補任（後奈良）〕天文十二年（癸卯）

權大納言正二位藤伊長（六十、十一月三日補神宮傳奏、）

從二位同實世（三十三、神宮傳奏、十月廿九日辭神宮傳奏、）

〔公卿補任（後陽成）〕文祿三年（甲午）

權中納言正三位藤公仲（三十八、神宮傳奏、六月廿六日薨、）

前權大納言正二位藤淳光（五十四、七月廿三日補神宮傳奏、）

〔親綱卿記〕文祿四年十二月十一日酉、神宮奉行之事從來年傳奏三人可存知之由被仰出、故障之由度々雖申入、無御領狀、畏存候旨則御請申了、則於長橋闕取了、三月替可存知由被仰出了、一番勸大、二番久我、三番予、

神宮傳奏次第之事

一番　勸修寺大納言　二番　久我大納言　三番　中山大納言　如斯相調、懸御目了、

〔孝亮宿禰記〕寬永九年十一月十二日丙午、依使者參姉小路頭中將、被命云、神宮傳奏之事、申所々之處、多稱所勞之由、于今御請申人無之、依之所令延引也、猶於治定者、重而可示云々、雖一日傳奏無之條、神慮難量者也、十九日癸丑、神宮傳奏之事、被仰出中山中納言（元親）之由、自頭中將有示、

〔公卿補任明正〕寬永十七年庚辰

權大納言正二位藤實晴（四十、神宮傳奏、二月十七日、辭傳奏、）

同公信（三十四、二月十七日、神宮傳奏、）

〔公卿補任後西院〕明曆三年丁酉

權大納言正二位藤公理（四十八、神宮傳奏、六月廿六日、止傳奏、）

源廣通（三十二、六月廿六日、神宮傳奏之事被仰之、）

〔百一錄〕延寶二年正月十一日、奏事始、神宮傳奏轉法輪亞槐（○三條實通）奉行頭辨、

〔百一錄〕元祿七年閏五月三日、花山院亞相（○持重）着陣也、被敍從二位之、未着陣也、神宮傳奏被仰出、仍之也、自是以前傳奏今出川大納言也、叔父服、仍辭之云々、

〔宗建卿記〕享保十三年正月廿九日、參殿下（○近衞家久）令對面給、御雜談之間、（○中略）予申云、神宮上卿、近年多被用華族輩如何、殿下仰云、神宮上卿者可爲一上、然處與奪右府者也、右府被與奪內府、內府被與

一之大納言、故近代大納言爲上卿、雖然於末之大納言者、可有如何哉、殊華族之外、依有此仔細、難爲上卿歟、先帝〇東山御代之始、稱傳奏、稱奉行、故奉行多爲貫首之人、至其後以傳奏稱上卿、止奉行名爲辨、故用五位職事者也、稱傳奏之時者、不限華族之人、與賀茂傳奏無差別、於稱上卿者英雄之外者如何、故近代多如斯、予申云、頃日藏人考定、依爲所勞辭御祈奉行、殊爲御修法之中、仍勅許藏人祗房爲奉行、如斯事可然哉、殿下仰云、御祈之事、職事之輩、沙汰之勿論也、雖然於上首之職事者、依公務繁多、爲下臈之職事者也、於然者、五位職事、與奪六位職事、可然歟、殊更當時六位護持之事沙汰之、是又依五位職事與奪沙汰之者也、奉行職事所勞或暫時之故障之時、與奪被仰出之儀有何難哉、予申云、當時神宮賀茂等奏事始之節、傳奏衣冠單持笏、衣冠之時把笏之事如何、殿下仰云、衣冠持笏之事、他之例無覺悟、布袴之時、有劒笏、若者准之歟、不審也、凡當時奏事始之樣、非古風、二三百年以來之儀者可心得、若存古風之上卿著陣、以職事於晝御座可奏之歟、又仰云、奏事始、不著直衣爲故實、不審之故、今年神宮奏事始之節、殿下著直衣給云々、

〔禁中恒例年中行事正月〕十二日加茂奏事始

是は賀茂下上の社〇下上の社四字、一本作明神二字、の事を奏聞する始なり、社家の事など沙汰す、年によりて日限替る也、

〔續近代年中行事正月〕賀茂奏事始事

一傳奏正月上旬之頃、以議奏相窺、被仰出後、何日奏事始之由申來之後、下上社へ來、何日奏事始候間、卯剋可被參之旨、申遣事、

一從兩社參候、小折紙共擧狀等傳奏へ爲持遣之事、

一自傳奏兩社之小折紙擧狀等、被返目錄可相加旨、以消息被示候事、

一前日奏事目錄書付置、神宮之通兩社へ口宣案書付、傳奏へ爲持遣、

目錄書樣注左

一當日之儀、如神宮奏事始、退出以後、兩社惣代出逢、奏事目錄見之後、惣代附使傳奏許遣事、

〔大外記師茂記〕應安七年四月十四日、加茂祭傳奏葉室前中納言、職事藏人右少辨、料足四万疋進之云々、

〔公卿補任後柏原〕文龜四年甲子○永正元年

權中納言從二位藤元長四十九、(中略)八月十九日、賀茂傳奏事被仰之、

〔御湯殿の上の日記〕大永七年八月廿九日、かものやしろのてんそうの事、はじめて勸修寺に仰いださるゝ、けふそうじはじめあり、常の御所にて御さかづきたぶ、

〔晴右記〕永祿十年十月十六日、今日爲勅使西國江一位藤原尹豐○賀茂傳奏罷下訖、然者傳奏之儀、與奪被申由、以長橋令披露候處、晴秀ニ被仰付候由、女房奉書如此、

文のやうひろう申候へば、中納言殿へてんそうよだつのよし、御つたへ申上まいらせ候、かしこ、

くわんじゆ寺一位どのへ

ながはしをもつて、傳奏被仰付候由、忝候旨御禮申入訖、

〔公卿補任後奈良〕天文十三年甲辰

權大納言從二位藤兼秀三十九、八月廿八日補賀茂傳奏、

正三位同惟房三十二、八月廿五日補賀茂傳奏、

〔言繼卿記〕天文十三年八月廿八日乙未、從禁裏文有之、廣橋大納言被補賀茂傳奏、下知之事、葉室ニ可申之由有之、則下知了、

賀茂社之事、可令傳奏給之由、天氣所候也、仍言上如件、賴房誠恐謹言、

八月廿八日　　　　左少辨賴房

進上廣橋大納言殿

〔晴豐記〕天正六年九月七日、今日賀茂傳奏被仰付候也、種々斟酌申入候へ共仰出候也、廿一日、今日伊勢傳奏（上卿勸修寺中納言）德大寺、奏事始、同鴨奏事申候也、目錄如此候、則內侍所參候也、祝宜下書出者万里小路、

天正六年九月廿一日　宣旨

從五位下鴨秀延

宜爲鴨社祝

廿七日、鴨祝職之禮來候、二か、三色充、傳奏百疋、奏者五十疋有之候由、大夫に申候へば、何もまへまへの日記見可申候由候、入道相おぼへ候て申候キ、

〔公卿補任（正親町）〕天正八年（庚辰）

權中納言正三位藤晴豐（三十七、十一月日辭傳奏、）

同親綱（三十七、十一月日補賀茂傳奏、）

〔公卿補任（後水尾）〕元和十年（甲子○寬永元年）

權中納言從二位藤宣衡（三十五、六月廿三日、爲賀茂傳奏、）

〔百一錄〕天和二年二月九日、家公（○日野資茂）賀茂傳奏役被仰出、隆尹卿辭替、

〔後中內記〕元祿七年四月十三日、今日賀茂傳奏（○藤原熙定）奉行、其外從役人、令巡檢賀茂云々、

〔百一錄〕享保五年六月十二日、於賀茂傳奏萬里小路（○尙房）第、七家之內五家被停官職、閉門被仰付、岡本、林、兩家別條無之、林家神主職被仰付、

〔議奏記錄〕萬延元年十一月二十日、賀茂傳奏正親町大納言（○實德）下社參向、奉行頭辨兩社參向等被屆、兩社無爲之儀、自奉行言上之旨、傳卿被屆候、

〔議奏記錄〕文久二年九月十二日、正親町大納言被附、

博房

辭賀茂下上社奉行之事

右被經內覽之旨、以篤丸披露之處被聞食、奉行長順朝臣江被仰出候、則正親町大納言申渡、小時頭辨御請之旨言上、以篤丸言上、

博房

辭御祈奉行之事

職事長順

右被經內覽候旨、頭辨被附、以篤丸披露、小時聞食則頭辨江申渡、

石淸水傳奏

〔建內記〕永享三年三月七日、辛未石淸水臨時祭、代始殊可被行之、四月佳例也、奉行職事明豐分配之、傳奏事、被仰新藤中納言親光處、申故障、口氣又有存旨云々、勝光院御代、彼祖父傳奏之故歟云々、仍被申談室町殿之間、被仰勸修寺中納言經成云々、

稻荷傳奏

〔後中內記〕元祿七年十月廿九日、稻荷社正遷宮日時定之事、右社尤雖可爲陣宣下、武家用脚不足、且官幣之事、同社中雖望申、是以同前也、今度造替之事、自武家沙汰之、作料別也、各別ニ爲遷宮料貳百石用脚出所也、然此僉議、稻荷傳奏早可有此沙汰事也、町奉行急日時之事申彼傳奏也、雖然漸々三十石許殘置也、仍用脚不足也、官幣是又五社分五拾石也、傍以難叶、仍武家傳奏議奏相談、關白申合候、其上にて可及言上有僉議、關白然者日時定之事、消息宣下可然之由被申上所也、以言上之通被仰出也、貳百石之內ニ而、陣宣下雖可事行事、彼傳奏云若輩、又社家彼奉行諸事示合也、望申事、幷日時定事等皆成後畢、畢竟彼傳奏遲僉議故也、

南都傳奏

〔滿濟准后日記〕永享五年十月九日、南都傳奏事被仰日野中納言云々、此間萬里小路大納言奉行也、

大德寺傳奏

〔晴右記〕永祿八年五月廿九日、大德寺住持綸旨廿八日之分ニ相調候て遣之傳奏へ貮百疋、奏者ニ二十疋、書出へ百疋、同奏者二十疋、

仰（永祿十三正五）むらさきの、てんそうの事、まづまへのごとく候、申さた候へと、申まいらせ候、かしこ、

　くわんじゆ寺中納言どのへ

十四日、大德寺より入院之禮先被出候三百疋、二百疋は傳奏禮、百疋は書出也、

長講堂傳奏

〔公卿補任後柏原〕大永四年（甲申）

前權大納言從一位藤緣光（八十四、八月廿四日奏、長講堂傳奏、）

〔晴豐記〕天正十年十月二日、長講堂（チヤウカウダウ）より院張ちやうかうだう上人柳二種持參候、傳奏之儀被仰出候、長講堂傳奏也、

學習院傳奏

〔安政三年雲上明覽下〕學習所　傳奏　久我大納言建通卿

〔議奏記錄〕安政六年七月廿三日、學習院傳奏右大將殿、學頭阿野中將被附、

來月十日丁未、於學習院可被行哉、朝論義、午後儒者講釋可爲如例年哉、

〔文久二年雲上明覽下〕學習所　傳奏　正親町三條大納言實愛卿

〔慶應元年都仁志喜一〕學習所（日御門前）　傳奏　八條前中納言隆祐卿

元服傳奏

〔章弘宿禰記〕寶永八年〇正德元年正月一日庚寅、今日天皇〇中御門御元服也、〇中略御加冠攝政太政大臣〇藤原家熙御理髮左大臣〇九條殿輔實公傳奏大炊御門大納言、〇經音痛〇下略

〔公卿補任中御門〕享年十八年（癸丑）

權大納言從二位藤賁時（四十四、東宮（櫻町）御元服傳奏、）

〔公卿補任今上〕慶應四年（御即位九月八日改元爲明治元）

正月十五日、天皇御元服、加冠式部卿親王、理髮權大納言、（正親町實德）能冠勝長朝朝臣、傳奏中山

前大納言、(忠能)奉行俊政朝臣、

〔後桃園院崩御記〕大行天皇安永八年(○中略)十一月九日、寅刻ツイニ崩御、聖算廿二歲、(○中略)先ニ御養子トシテ、聖護院門跡ノ御附弟ニ定ラル、閑院太宰帥典仁親王ノ御息男祐宮御方(○光格)御齡九歲、十一月八日夜御入內、廿五日辰刻踐祚御名兼仁、(○中略)踐祚上卿鷹司左大臣輔平公、辨小河坊城俊親、傳奏今出川大納言實種卿、奉行頭辨篤長朝臣ナリ、

踐祚傳奏

〔實久卿記〕弘化三年二月六日壬辰、今日踐祚、(○孝明)傳奏右大將(家○藤原家厚)奉行俊長朝臣、

〔議奏記錄〕慶應二年十二月廿九日、踐祚(○今上)傳奏(醍醐大納言○忠順)同奉行(勝長朝臣○中略)被仰出、

即位傳奏

〔公卿補任 後柏原〕永正十八年(辛巳○大永元年)

權大納言從二位藤守光(五十一、御即位傳奏、)

〔公卿補任 後奈良〕天文五年(丙申)

權中納言正三位藤資定(四十二、御即位傳奏、)

〔公卿補任 正親町〕永祿二年(己未)

前權大納言從一位藤資定(六十五、御即位傳奏、明年正親町即位、)

同尹豐(五十七、賀茂傳奏、御即位傳奏、)

正二位同惟房(四十七、御即位傳奏、)

〔忠利宿禰記〕明曆二年正月廿四日、仙洞、女院、新院、御匣殿兩傳奏、(○中略)御即位傳奏(○是月廿三日後西院即位)清閑寺大納言、奉行萬里小路辨方、中御門頭辨、女御御方、各へ予、大外記出納豐後介同道參、

〔大江俊光記〕寶永七年十月廿七日、御即位傳奏(○是年十一月中御門即位)中山大納言、奉行甘露寺頭辨、裏松辨、烏丸辨、小川坊城中納言、

讓位傳奏

〔御讓位記〕常芳記　明和七年九月十三日丙辰、午半剋計、御讓位傳奏、(○是年十一月後櫻町讓位)櫛笥中納言、同

奉行鷲尾中將ヨリ觸到來、

改元傳奏

〔公卿補任後西院〕承應四年乙未〇明曆元年
權大納言正二位藤共綱四十四、改元定傳奏、

〔忠利宿禰記〕明曆四年〇萬治元年十二月十七日、勸修寺大納言改元之傳奏故參可理由申、

〔公卿補任中御門〕寶永八年辛卯〇正德元年
前權大納言從二位藤通躬四十四、爲改元傳奏、

〔議奏記錄〕萬延元年十一月十八日、改元傳奏奉行公卿、勅使奉行等之事、武傳示達、附武士示遣、文久四年〇元治元年二月二十日辛卯、今日革令改元定也、傳奏帥大納言俊克、奉行職事頭左中辨豐房朝臣、

八講傳奏

〔公卿補任後柏原〕大永四年甲申
前權大納言正二位藤元長六十九、七月御八講傳奏

〔宗建卿記〕享保十八年七月十七日、關白一乘院座主等宮、依召被參、實相院勸修寺宮雖召之、依所勞不參、各召御前、先關白、召八講傳奏奉行等、被傳仰云、當冬依先帝〇東山御年忌被行八講、於一證義者、當時上首、於戒臈亦爲上臈、依之以一乘院尊昭爲一證義、於御經供養導師者、被仰山門者也、〇下略

凶事傳奏

〔故實拾要十〕傳奏
凶事ニモ傳奏アリ、凶事ノ傳奏ト云ハ、崩御ノ時ノ諸用ヲ奏スナリ、但此傳奏ハ其時ニ至テ蒙之也、

〔後深心院關白記〕應安七年二月九日乙巳、及晚仲光來語云、今日於太閤〇藤原師頁第、内々被議諒闇事、彼傳奏按察卿向彼亭、兩局輩同參、仲光可令奉行云々、

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌、今夜御葬禮也、〇後柏原御父後土御門、是年九月崩、中略、後聞、〇中略勅使馳參問

雜載

事、○註略勅答甘露寺中納言爲二凶事傳奏一申レ之、十二月十一日辛卯、今夜倚廬渡御也、武家用脚依二遲々一也、

諒闇傳奏勸修寺中納言○政顯、奉行職事頭左中辨守光朝臣、關白殿○一條冬良、爲二御供奉一被レ參、

〔丹波賴庸記〕寶永六年十二月十七日、新院○東山、自二前夜一以之外御大切、今朝少御快云々、○中略攝政殿御參院、自二相國公一以レ使被レ窺二御機嫌一、唯今崩御之旨、從二攝政殿一被二仰進一、十九日、巳刻參二攝政殿一、

凶事傳奏　日野中納言　奉行　藏人右少辨光榮

諒闇傳奏　松木前大納言　奉行　頭左中辨尙長朝臣

右今日被二仰出一之旨

〔靈元院御凶事記〕大江俊包記　享保十七年八月十六日、法事傳奏葉室中納言方ニ而、上北面三人、院藏人供奉之儀被二申渡一之由、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十年閏十一月三日丙申、亥刻崩御、仙洞○御諱智子、御寶算七十四、四日丁酉、傳聞、御凶事傳奏奉行日野右衞門督資愛卿、坊城辨俊明、被二定置一云々、

〔實久卿記〕弘化三年二月六日壬辰、自二去夜一伺候、今曉寅刻天皇○仁孝崩給、○中略諒闇傳奏源大納言基豐奉行愛長朝臣、凶事傳奏高倉前大納言永雅○永雅奉行顯彰被二仰出一了、

〔議奏記錄〕慶應二年十二月廿九日、主上○孝明今廿九日辰刻、崩御之事、以二駿河一被二申出一候、○中略

亮陰傳奏右大將　同奉行豐房朝臣　御凶事傳奏日野大納言　同奉行俊政　等被二仰出一、

〔海人藻芥〕凡書札ハ後マデ殘物ナレバ、思入テ書ベキ也、○中略其昔ノ傳奏ノ仁、殿上ノ職事等ノ手跡モアナガチ善キハ稀ナルヲヤ、殊更名家ノ人々ハ、年少ヨリ依レ令二申沙汰公事一、朝夕業務ノ間、手ヲ習事ナカルベシ、サレバ古ノ傳奏、幷奉行之職事ノ書タル綸旨、御敎書以下、アナガチ能書ト覺シキ手跡モ不レ見、中頃ヨリ以來能書共多見ユル、

〔落穗集追加三〕傳奏屋敷始の事

一問曰、傳奏屋敷、幷御評定の義は、何頃より初りたる義と被聞及候哉、答曰、我等承り及候義は、慶長五年、關がはら御一戰前に、公家參向と申は無之、天下御一統の後、傳奏の參向、每年の義に有之を以、公家衆御馳走の屋敷と申て、新に御普請出來、傳奏屋敷と申也、

〔大猷院殿御實紀二十九〕寬永十二年十一月十一日、高家吉良若狹守義冬、宅地を轉せられ、其地に傳奏旅館構造せしめらる、

古事類苑

官位部十一

令制官職七

中務省

中務省ハ、ナカノマツリゴトノツカサト稱シ、又ナカヅカサシヤウト稱ス、至尊ニ侍從シ、可ヲ獻シ、否ヲ替シ、禮儀ヲ賛相シ、詔勅ヲ施行シ、上表ヲ奏進シ、國史ヲ監修シ、女王及ビ宮人ノ考敍ヲ掌リ、諸國ノ戸籍、租調ノ帳、僧尼ノ名籍ヲ省庫ニ藏シ、以テ御覽ニ擬スル等ノ事ヲ以テ此省ノ職トス、而シテ中務ノ名ハ唐ノ中書省ヲ模セシナルベシ、

此省ノ所屬ニ侍從、内舍人、内記、監物、主鈴、典鑰アリ、侍從ハオモトマウチギミト訓ゼシガ、後音讀シテジジウト稱ス、常ニ至尊ニ侍シテ、遺ヲ拾ヒ闕ヲ補フコトヲ職トス、正員八人アリ、其中ニ三人ハ少納言ヲ兼帶ス、正員ノ外ニ次侍從アリ、次侍從ハ正員ノ外ニ之ヲ補スルモノニテ正員ヲ加ヘテ百人ト爲シ、多クハ儀式ノ事アルニ當リテ、四位五位ヲ簡ビテ之ヲ命ズ、擬侍從ハ即位及ビ賀正ノ儀ニ至尊ニ侍スルモノニテ、預メ擬シテ之ヲ補シ、左右各二人ト爲ス、親王參議等ヲ以テ之ニ充ツ、出居侍從ハ旬宴、又ハ相撲ノ時等ニ、出居ニ居ルモノナリ、酒番侍從ハ饗宴ノ時ニ行酒ノ爲ニ之ヲ補スルナリ、非侍從ハ侍從次侍從ニアラズシテ、至尊ニ見ユルコトヲ得ルモノナリ、

内舍人ハウチトネリト稱シ、又ウドネリト稱ス、兵ヲ帶ビテ宿衞シ、雜使ニ供奉シ、車駕行幸ノ時、前後ヲ分衞スルヲ掌ル、内舍人ハ初メ五位以上ノ子孫ノ、性識聰敏ニシテ、儀容アルヲ

以テ充テシ故ニ、大臣ノ子孫ト雖モ、此職ニ居リシ事アリシガ、後世ハ常ニ凡卑ノ人ヲ以テ之ニ充テタリ、

內記ハウチノシルスツカサト稱シ、又音讀シテナイキト稱ス、文墨ヲ以テ職トスルモノニテ、詔勅ヲ作リ、禁中ノ動靜ヲ錄スル事ヲ掌ル、故ニ能文ノ人ヲ以テ任ズ、

監物ハオロシモノヽツカサト稱シ、又音讀シテケンモツト稱ス、諸司ノ庫藏ノ出納ヲ監察シ、管鑰ヲ請進スルコトヲ掌ル、文武天皇大寶元年、下物職ヲ置カル、卽チ此官ナリ、

主鈴ハ驛鈴、內印、傳符、及ビ飛驛ノ函鈴ヲ出納スルヲ掌ル、諸國ニ下ス公文ハ、皆主鈴之ニ印セリ、

典鑰ハ監物ト其職相似テ、共ニ諸司ノ庫藏ノ管鑰ヲ掌レドモ、監物ハ監臨シ、典鑰ハ其下ニ在リテ、主守スルトノ別アリ、

本省ノ被管ニ中宮職、及ビ左右大舍人、圖書、內藏、縫殿、陰陽ノ六寮、畫工、內藥、內禮ノ三司アリ、光仁天皇神龜五年、內匠寮ヲ置キ、本省ニ屬セシメシガ、平城天皇大同三年、畫工司ヲ內匠寮ニ倂セ、內禮司ヲ彈正臺ニ倂セ、宇多天皇寬平八年、內藥司ヲ典藥寮ニ倂セタリ、

名稱

〔倭名類聚抄　五官名〕省　職員令云、中務省〈奈加乃萬豆利古止乃豆加佐〉

〔令集解　三職員〕疏云、中務省〈奈賀乃司〉

〔運步色葉集　那〕中務〈ツカサ唐名中書〉

〔下學集　上官位〕中務卿〈ナカツカサノキヤウ中書令〉

〔續日本紀　二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝、〈○中略〉等奏、勅改易官號、〈○中略〉中務省、宣傳勅語、必可有信、故改爲信部省、

〔續日本紀　二十二淳仁〕天平寶字四年正月丙寅、三品船親王爲信部卿、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅、逆人仲麻呂執政、奏改官名、宜復舊焉、

〔職原抄上〕中務省（當唐中書省、又號鳳閣、）（ナカノマツリコトスルツカサ　ナカノマツリコトスルツカサ　ナカツカサ省說）

〔唐六典九中書省〕中書令二人正三品

周官內使掌王之八柄、掌書王命、蓋中書之任也、漢中書謁者令丞屬少府、自武帝遊宴後庭、故用宦者、司馬遷被腐刑之後爲中書令、卽其任也、不言謁者、省文也、宣帝時任中尚書宦、弘恭、石顯皆宦者、恭爲令、顯爲僕射、元帝卽位、恭死、顯代爲中書令、元帝以中人無外黨、遂委以政事、事無大小、皆因決白、貴幸傾朝、公卿已下畏之、重足一迹、成帝改中書謁者令、曰中謁者令、罷中書宦官、更以士人爲之、漢舊儀云、頒贊尚書、出入奏事、秩千石、後漢省、獻帝時、魏武爲魏王、置秘書令、典尚書奏事、此又中書之任也、魏黃初改秘書令、典尚書奏事、爲中書令、又置監與令各一人、秩並千石、以秘書左丞劉放爲中書監、右丞孫資爲中書令、二人用事、權自此重矣、魏置監右於令、故孟康自中書令遷中書監、時以爲美也、魏中書典尚書奏事、若密詔下州郡及邊將、則不由尚書、晉氏監令並第三品、秩千石、○中略、監令掌贊詔命、記會時事、典作文書、舊尚書并掌詔奏、既有中書官、而詔悉由中書官也、故荀勗從中書監爲尚書令、人賀之、乃發恚曰、奪我鳳凰池、何賀之有、東晉朝更重其職、多以諸公領之、中興之後、以中書九任、幷入散騎省、後復置之、宋齊置監令、品秩並同晉氏、梁監增秩至中二千石、令秩增二千石、監令並增至二品、後定十八班、監班第十五、令班第十四、陳氏監令品秩依梁、中書分爲二十一局、各掌尚書諸曹、總國機要、而尚書唯聽受而已、○中略、後周依周官、春官府置內史中大夫二人、掌王言、蓋比中書監令之任、後又增爲上大夫、隋氏改中書省爲內史省、置內史省監令各一人、尋廢監、置令二人、正第三品、文帝廢三公府寮、令中書令與侍中知政事、遂爲宰相之職、煬帝十二年、改爲內書省、武德初爲內史省、三年改爲中書省、龍朔二年、改省爲西臺、令、爲右相、咸亨元年、復舊、光宅二年、改中書爲鳳閣、令爲內史、神龍元年、復舊、開元元年、改爲紫微令、

廳舍

五年復舊、

〔拾芥抄 中本 百官〕中務省 宮城 内

〔三代實錄 十一 清和〕貞觀七年八月廿一日己巳、天皇遷自東宮、御太政官曹司廳、爲來十一月將遷御内裏也、○中略 公卿於中務省廳事聽尋常政、少納言外記、移直中務省、近於御在所也、

〔日本紀略 一 醍醐〕昌泰二年五月廿二日甲寅、未時飄風吹、○中略 中務省正廳同傾、○又見扶桑略記

〔日本紀略 三 村上〕天曆三年五月廿五日戊辰、臨時仁王經御讀經始也、八省西廊依有死人穢、以中務省廳爲備僧供所、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶五年正月癸卯朔、廢朝、天皇御中務南院、宴五位已上、

〔三代實錄 七 清和〕貞觀五年十二月十二日庚午、中務省火、燒卿曹司屋一間、

〔延喜式 十二 中務〕凡諸國所進不動倉鑰者、官副國解下省、省即勘收庫、若應出下者、待官符下、然後出充、

〔延喜式 十二 中務〕凡納庫戸籍、令諸司出納、更勿載年終帳、

〔享祿本類聚三代格 十七〕太政官符

應令諸司封戸籍庫事

右得中務省解偁、去天長元年以往所納戸籍、猥藉庫底、塵蠹已甚、難爲證據、二年以往、頻經分付、整修區別、無可致損、加以件籍貯積庫中、少所動用、望請爲諸司封、省交替煩、但以納籍之年、便爲披涼之期、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將民部卿清原眞人夏野宣、依請、但比納後籍、若有濕損、事緣官舍破損、宜令省家備償、

天長九年四月五日

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年七月壬辰、令左右京職、幷五畿內七道諸國、寫進庚午年籍、以收之中務省庫、

省印
職員
職掌

〔日本紀略五冷泉〕安和元年十二月廿日戊辰、今夜中務省籍御倉燒亡、

〔西宮記十二月〕荷前事

中務省北門北去三許丈、立七丈幄一字、東西妻以爲運渡幣物之所、

〔北山抄三拾遺雜抄〕射禮儀

中務省門東西、左右衞門陣之、

〔延喜式十二中務〕凡長上及宮人考選文者（中略）諸司考選文、省輔押署、便以省印印之、

〔令義解一職員〕中務省管職一、寮六、司三、

卿一人、掌侍從、獻替、贊相禮儀、謂贊、助也、相、導也、禮、禮節也、儀、威儀也、言助導人君之禮儀也、審署詔勅文案、受事覆奏、謂依公式令詔書式、御畫日者、留中務省爲案、別寫一通印署、又依勅旨式、受勅人宣送中務省、中務覆奏訖、依式取署是也、宣旨、謂侍從之宣命也、案軍防令、有所征討、發日侍從充使、宣勅慰勞是也、勞問、謂勞者、郊勞也、依軍防令、凱旋之日、奏遣使郊勞是也、問者、存問也、依公式令、五位以上致仕、身在畿內、令內舍人一巡問、奏聞安不是也、受納上表、謂凡上表者、不由太政官、直向中務省、省受取奏進至尊也、監修國史、謂圖書寮所修、此省更押監也、案雜令、有徵祥災異、陰陽寮奏訖者、季別封送中務省、入國史是也、及女王、謂二世以下、四世以上、其五世者、自入命婦宮人例、帥有品內親王、亦錄於此省、爲掌考課故、若无品者、自非仕官、理然不錄、內外命婦、謂婦人帶五位以上、曰內命婦也、五位以上妻、曰外命婦也、宮人謂案後宮職員令、內侍以下十二女司是、其氏女、御巫、縫女、乳母、東宮人、饌以上女豎、歌女等、名帳、考選、位記、亦皆總掌也、等、名帳、考敘、位記、諸國戶籍、租調帳、謂案倉庫令、謂庸等物、應送京者、皆依見送物數色目、各造簿一通、此簿即納於民部省、而於此令、亦云租調帳、即是租調等帳、各造一通、更須納此省、其戶籍以下諸簿者、非此省之所執檢、唯止擬御覽而已、僧尼名籍事、大輔一人、掌同卿、唯規諫、不獻替、謂以忠正君曰規、以義匡主曰諫、其所獻替者大、而所規諫者少、事既有大少、故立制不同、若無卿者、亦得獻替也、少輔一人、掌同大輔、大丞一人、掌宮人考課、謂勘問宮人考課、即與式兵部丞考問義同也、餘准神祇大祐、少丞二人、掌同大丞、大錄一人、少錄三人、史生廿人、侍從八人、掌常侍規諫、拾遺補闕、謂拾撿遺忘、補益闕失、即是少事、與大輔規諫同也、內舍人九十人、掌帶刀宿衞、供奉雜使、若駕行分衞前後、大內記二人、掌造詔勅、凡御所記錄事、中內記二人、掌同大內記、少內記二人、掌同中內記、大監物二人、掌監察出納、請進管鑰、謂管鑰、與鍵牡爲管不同、是即庫藏管鑰、其諸門管鑰者、闈司掌之也、案宮衞令、及衞禁律、衞府各請進管鑰、即亦闈司掌也、凡此省、錄以上爲同司、內記、監物、主鈴、典鑰、各爲一司、即三等以上親、不可相避、其侍從內舍人、亦不相避之、中監物四人、掌同大監物、少監物四人、掌同中監物、史生四

人、大主鈴二人、掌出納鈴印傳符、飛驛函鈴、少主鈴二人、掌同大主鈴、大典鑰二人、掌出納管鑰、少典鑰二人、掌同大典鑰、省掌二人、掌通傳訴人、檢校使部、守當省府、灑事鋪設、餘省掌准此、使部七十人、直丁十人、

〔唐六典 九中書省〕中書令二人正三品○註略

中書令之職、掌軍國之政令、緝熙帝載、統和天人、入則告之、出則奉之、以釐萬邦、以度百揆、蓋以佐天子、而執大政者也、

〔令義解 一官位〕親王　三品四品八省卿

諸王諸臣　正四位上階○中務卿　正五位上階○中務大輔　從五位上階○中務少輔　侍從　大監物以下○侍從　正六位上階○大內記　八省大丞下階○　從六位上階○八省少丞　中監物　正七位上階○中內記　八省大錄　少監物　大主鈴以下○少監物　從七位下階○大典鑰　正八位上階○少內記　八省少錄　少主鈴　從八位上階○少典鑰

〔拾芥抄 中本官位唐名〕中務卿 中書令 殿中監 門下侍中 紫微令　輔 中書侍郎 殿中少監 門下侍郎 黄門侍郎 中書舍人 紫微侍郎　丞 中書舍人 殿中少監 給侍中 紫微舍人　錄 中書主事 又殿中主事 門下錄事

〔二中歷 七官名〕中務卿 門下侍中 中書令 紫微令 殿中監　輔 紫微侍郎 殿中少監 中書侍中　丞 紫微舍人 中書舍人 殿中丞 給書事　錄 主書 殿中主事 中書主事 門下錄事

〔皇胤紹運錄〕醍醐天皇──村上天皇──具平親王 二品、中務卿、號千種殿、後中書王是也、

　　　　　　　　└兼明親王 二品、中務卿、(中略)前中書王是也、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜元年十二月丙辰、以從五位下大原眞人繼麻呂、爲中務員。外。少輔、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年四月庚午、從五位下藤原朝臣鷹取爲中務少輔、從五位下多治比眞人歲主爲員。外。少輔、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜五年九月庚子、大納言正三位藤原朝臣魚名兼中務卿、從五位下石川朝臣淨麻呂爲少輔、從五位下高麗朝臣石麻呂爲員外少輔、

〔職原抄 上〕中務省

八省中以中務爲重職、宮中事、當省可統領之義也、異朝同重之、以尙書爲南衙、以中書爲北司、本朝近代之例、頗無其實、然而相當異于七省、又當省卿已下、雖文官帶劍之職也、

卿一人 相當正四位上、唐名中書令○中略 大輔一人 權大輔一人、相當正五位上、唐名中書大輔、或中書監、但異朝中書令上置監、然者以大輔比于監無其謂、○中略 少輔一人 權少輔一人、相當從五位上、唐名中書少輔、或中書侍郎○中略 大少丞 相當六位、大正六位上、少從六位上、唐名中書舍人○中略 大少錄 唐名中書主事

〔標注職原抄 上本〕頗无其實、これは嵯峨天皇弘仁元年に藏人所を置れしより、中務は宮中の統領にて、卿は親王、輔は名家より任せられ、その職は侍從獻替、その位は七省に冠たるゆゑに、主上も憚玉ふ所多くて、昵近うとくなりゆき、藏人は今いふ納戶役の類にて、朝夕の服御の物を取扱はしめ玉ふまゝに、主上も御心やすく思しめさるゝからに、奏宣出納、おのづから藏人にうつりたり、故に中務は名ありて實なくなれり、

〔令義解 四考課〕侍從覆奏、施行不停、爲中務之最、謂少輔以上、

〔延喜式 十二中務〕凡內裏應有宣命者、丞執版位、入自承明門左扉、置於尋常版位以北相去一許丈、事訖期入撤、

〔延喜式 十二中務〕凡奉詔書者、使內豎喚省、輔稱唯入閤門、進就版位、卽奉勅執詔書宮退出、事見別寫儀式一通印署送太政官、慰勞詔書不在此限、

〔西宮記 臨時二〕下中務省宣旨

詔勅書事 上下歸 女官除目事、相撲除目事、補次侍從事、

〔傳宣草〕下一下中務省宣旨(召丞以上於陣軾仰之、或錄候陣外者、以外記傳給之、近代凡以外記傳宣、)

詔書事　勅書事(准后宣旨、依仰勅書下中務、)　女官除目事　補次侍從事

以上召輔若丞於陣軾給之、或錄候陣外之時、以外記傳給之、補出居侍從之時、召近衛將若將監於陣軾給之、

節會日不就列參上事(外記傳宣)

〔延喜式〕十二中務 凡五位已上有上表者、置表函於高案、(以函盛筥、案上敷布、)卿輔已下就曹司廳座、卽身若子弟四人執表函案、進安版位後、卽共退出、須臾大輔已上一人宣奉表收之、錄稱唯卽令史生四人共降自西階、趍立案邊、搢笏持案、進署廳上、復本座、錄進案下、執表筥、置卿若大輔前、開筥復本座、輔以上開函見了卽錄進執筥置案上、復座、訖共下座退、丞先入內裏、以狀申內侍、然後入進、(事見儀式、)

〔內裏式〕下任女官式

侍臣於殿上喚中務、宣補任將參來、卿先侍殿上、大輔執補任筥、少輔執硯筥、昇殿、卿傳執補任筥、大輔執硯筥、少輔退降、勅曰、將參來、卿稱唯、進奏覽、少退侍、御筆點定可任者、賜卿、就本座書除目、訖納筥擎候、勅曰、將參來、卿稱唯、進奏覽、勅曰、令唱、卿稱唯、復本座、授大輔、少輔昇執硯筥、訖以次退降候陣側、輔執計名簿、(卿書除目、間大輔書之、若無大輔、卿便書之、)授於內侍、預令點檢、○下略

〔延喜式〕十二中務 凡任女官者、隨內裏喚、丞以上入候、(事見儀式、)

凡女官補任帳、每年正月七月一日進太政官、若有遷任卒死之類、以朱點側、更寫一通、六月十二月廿日進藏人所、

凡尚藏尚侍補任、幷解任之由者、申送太政官、

凡長上及宮人考選文者、十月一日輔率考選丞錄幷所管諸司、共進辨官、(諸司考選文、省卿押署、便以省印印之、)番上考選文者、二日輔亦率丞錄、送式部省、

〔延喜式中務十二〕凡女官人、自八月至正月計上日一百廿以上者、給春夏祿、(勅任上日、不滿三分之二者不在給例、其女王時服、不計上日、)本司各具錄人數及祿物色目、二月一日申送於省、省勘會去年祿文、卽造解文、十日錄與式部兵部共就辨官版位申曰、(二省甲了、中務乃申、其列立依司次、)中務省申久、宮人(賣比刀爾)春夏祿可給事上(留)申給(波)(止)申、辨官命候之、錄共稱唯退出、卽隨辨官向太政官、申曰、中務省申久、春夏祿可給宮人合若干人之中、號祿若干所、其位若干人應給物若干、損益去年人若干、申給(登)申、大臣判命之、三省共稱唯退出、卽造簿進辨官、廿五日所司設幄及座、大藏省積祿訖、狀申辨官、官召中務省仰給祿狀、卽令縫殿寮計列女官、訖省掌置版位於二幄間東庭北面、輔進就版位宣命、其辭曰、今宜久、常(毛)給(布)春夏祿給(波)久(登)宣、訖輔還退、

〔儀式七〕正月七日儀

所司祿物之餘送內司侍、先是中務省丞錄各一人、點於女官見參、省卽造見參簿、付內侍奏之、訖內侍司以所司送祿物、頒賜命婦及女官、

〔延喜式中務十二〕凡捺印五位以上幷勳六等以上位記者、書位記曰、少納言預告省輔、(輔不在者、近衛少將代之、)若丞幷主鈴(持印板、)令候、兼令掃部寮立案於版位邊、卽少納言率輔一人進就版位奏請、(事見儀式、)

〔延喜式中務十二〕凡應改鑄諸司國印者、隨太政官符到、卽下符內匠寮、寮錄用度申省、省申官、其字樣者、官仰式部、令書博士就省書之、卽少納言輔及寮助以上共檢挍令鑄造、

〔內裏式上〕七日(○正月)會式

前一日所司辨備豐樂殿、構舞臺於殿前、(○中略)中務置宣命版位、南去一許丈置尋常版位、四位五位座於顯陽承歡兩堂、六位以下座於明義歡德兩堂、

〔延喜式中務十二〕凡元會前一日、錄率史生省掌等、置版位於大極殿前龍尾道上、(其數幷相去丈尺見儀式、)

凡視告朔者、前一日置版位於大極殿前庭、(事見儀式、)

〔孝亮宿禰記〕慶長十六年三月廿七日丁卯、今日御讓位(○後陽成)當日也、(○中略)孝亮兼中務大輔之故、劒璽

渡御之時供奉版、

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月廿八日、花町院〇後西院有踐祚之事、〇中略

調進〇中略

中務省代召使

版

〔令義解〕〔戶二〕凡戶籍六年一造、起十一月上旬、依式勘造、〇中略其籍至官、並即先納後勘、謂先納中務民部後更勘檢也、〇下略

〔延喜式〕〔十二中務〕凡京職及諸國所進戶籍、皆令染黃蘗、但大宰管內諸國不在此限、若有未進者、移送民部省、拘留調庸稅帳返抄、

〔續日本紀〕〔二文武〕大寶二年九月戊寅、制、諸司告朔文者、主典以上送辨官、官總納中務省、

〔儀式〕〔六〕元正朝賀儀

前一日、〇中略中務置皇太子版於中階南十丈、南去二丈置奏賀版、〇中略當日〇中略寅一刻〇中略中務省擊動鼓、令裝束、大少輔並著淺紫襖、金銀裝腰帶、橫刀、靴、策著䩨殳、丞幷內舍人皂緌、緋襖、挂甲、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、〇中略訖輔以下就廳事座、史生二人各持內舍人簿、分立廳南庭東西階下、東持正員簿、西持權補簿、北面唱計內舍人各稱唯、〇中略卯一剋〇中略中務省擊進鼓、輔丞各二人相分率內舍人、入自永陽廣義兩門、隊於近衞陣以南、各居胡床、其輔胡床以虎皮敷、〇下略

〔延喜式〕〔十二中務〕凡大儀日、輔著淺紫襖、金銀裝腰帶、金銀裝橫刀、烏皮靴、策著䩨殳、丞幷內舍人皂緌、緋襖、挂甲、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、其日依時剋、輔丞各二人、相分率內舍人、大極殿前庭近衞陣以南隊之、〇中略卯一剋進鼓、〇註略丞二人、分率內舍人、供奉駕前、天皇御大極後殿、即分就胡床、禮畢駕還、供奉如初、事見儀式

凡供奉威儀官人、紺腰帶、布帶、横刀、弓箭、靴等、並私備之、自餘收省臨時出用、但敷胡床虎皮、奏請内藏寮、事了返上、

〔内裏式上〕會(元日節會)

中務率陰陽寮、舁置暦之机、入自逢春門(他皆傚此)立庭中退出、輔已上一人留奏進、其詞曰、中務省奏久陰陽寮乃供奉禮留其年七曜御暦進禮樂久乎申賜止奏、(無勅答、若親王任卿者、以進禮樂久止恐美毛謂、替進樂久乎、他皆效此、)

〔儀式八〕相撲節儀

當日寅一刻、(中略)○中務丞率内舍人等向相撲司、

〔内裏式中〕十一月進御暦式

朔日中務率陰陽寮、候延政門外、(御暦盛函安机、頒暦盛櫃)大舍人叫門、闈司就版奏云、御暦進牟止中務省官姓名(謂輔以上)叫門故爾申、勅曰、令申、闈司傳宣云、令申姓名、中務率陰陽寮舁机參入安庭中退出、中務獨留奏進、其詞云、中務省申久、陰陽寮乃供奉禮留、其年乃御暦、又人給暦進樂久乎申給久止申、(無勅答)訖即退出、

〔延喜式中務十二〕凡十一月一日平旦、輔丞二人將陰陽寮進暦、(事見儀式)

〔延喜式中務十二〕凡年終行儺者、前晦二日、少輔已上、點定親王幷大臣以下次侍從以上及丞錄内舍人等應預事者、造奏文、當日平旦令内侍進奏、又仰寮令進大舍人歷名、其分配、閑別參議以上二人、侍從十人、省丞一人、錄一人、内舍人四人、史生四人、大舍人五人、昏時省輔丞錄率史生省掌等、列於承明門外東庭、點檢儺人、依次列立、錄喚四位五位、史生喚丞及内舍人、

〔延喜式中務十二〕凡鎭魂祭前五日、簡點和舞人侍從四人、(其名移送式部、餘祭不須)内舍人大舍人各四人、(園韓神平野等祭、儛人准此、)令赴宮内省、

〔小野宮年中行事十一月〕中寅日鎭魂祭事

弘仁神祇式云、前五日簡點和儛侍從、内舍人、大舍人各四人、令赴宮内省、

〔延喜式中務十二〕凡出雲國造應奏神壽辭者、前二日差點內舍人十六人、前一日置版於大極殿南庭、(事見儀式)

〔延喜式中務十二〕凡供奉最勝王經齋會內舍人十二人歷名、正月八日早旦移送式部、

〔延喜式中務十二〕凡行幸者、丞以上率內舍人、候閤門外、分列左右供奉御前、其次第在近衞陣前兵衞陣後、其幸近處不裝束、(謂豐樂院、神泉苑之類、)

〔西宮記臨時五〕行幸 京內

供奉王卿如常、諸衞將佐平裝束、外衞府生已上、中務丞、內舍人平裝束、

〔延喜式中務十二〕凡行幸經宿者、差定留守徒、付公卿奏之、

〔類聚符宣抄四〕行幸

右大臣宣、行幸經宿、留守侍從、中務省差定參議已上、執省奏奏之、永爲恒例、其參議已上不在中務省、口口口若限、但裝束行事不據此例、

弘仁五年二月十五日　少外記大春日朝臣穎雄奉

〔令義解五宮衞〕凡應入宮閤門者、(○義解略)本司具注官位姓名、(○義解略)送中務省、付衞府、各從便門著籍、(○義解略)但五位以上、著籍宮門、(○義解略)皆非著籍之門者、並不得出、若改任行使之類、(○義解略)者、本司當日牒省除籍、每月一日十六日、各一換籍、

〔延喜式中務十二〕凡應入宮閤門諸司門籍、每月一日(正月用三日、但停朝拜年、元日送之、以下如此之類皆效此、)十六日送省、省覆勘訖、丞一人加署、即喚左右衞門及左右兵衞等府分付、但前番門籍返付本司、

〔令義解五宮衞〕凡无籍應入禁中、(○義解略)及請迎輸送、(○義解略)丁匠入役者、中務省臨時錄名付府、五十人以上、當衞錄奏、(○義解略)其有所輸送未畢、欲宿守物者、斟量聽留、

〔類聚符宣抄四〕荷前

參議秋篠朝臣安人宣、承前之例、供奉荷前使五位已上、外記所定、今被右大臣宣、自今以後、中務省點

補任

定、永爲恒例者、但三位已上、外記中上可點者、

弘仁四年十二月十五日

〔北山抄 七都省雜事〕外記政

中務省庭日儀

天慶五年二月十四日、政畢向南之間、中務丞藤原有聲、錄縣犬養良宗、率内舍人十三人、立侍從所西方、東面北上、至門下立留、向坤小揖、入門下著之後、中務丞錄、率内舍人著客座、北面東上、置簡所○所疑於字誤丞座錄座東、件簡自初出發置簡傍、錄執筆日給畢、自下退出、使部趍入、取簡硯等退出、

〔官職秘抄 上〕八省卿　中務○中略　已上必以親王任之、但家磨卿任中務卿、是公卿兼式部卿、非承前之通規、○中略　同輔大少有權　中務○中略　已上殿上地下公達多任之○中略　同丞大少　中務　良家子任之、如諸家侍不任之、近代此儀陵夷、○中略　同錄大少　中務○中略　已上本省奏、諸道擧問者生等任之、或卿申請也、或自諸司二分遷任之、

〔職原抄 上〕中務省

卿一人　親王任之、四品已上臣下不任之、　大輔一人權大輔一人　名家殿上人任之　少輔一人權少輔一人

同前　中務、八省中相當已高、然而於大輔少輔者、名家強不執之、治部、民部、兵部執之也、　大少丞可然六位侍任之、大者常不任之、　大少錄

〔百寮訓要抄〕中務省

卿　親王の任ずる官にてあれば、臣下の任る事はなし、親王なき時は闕にて可有、　大輔一人、權一人、

殿上地下雲客諸大夫にいたる迄任る也、昔は地下の諸大夫などは、八省に任るを先途にせし也、今は萬の者ども、善惡をいはず任る、返々無念の事也、醫陰兩道の輩なども規模にする官也、加樣の事、近代餘にすたれ侍り、尤可有興行候哉、　少輔　任る器用、大輔に同、大形中務などは、殊八

省の中にては規模にてあれども、當時は餘に零落し侍り、

〔百寮訓要抄別註二〕當卿親王ノ位ニ定リテ、臣下任ゼザルト云事ハ、中古以來ノ事ナリ、(爰ニ中古ト云ハ、淳和帝仁明帝ノ頃ナリ、)其ヨリ上ハ、臣下ノ任ジタル事、往々國史ニ見エタリ、(中略)又親王ヲ當卿ニ任ゼラル、ハ、淳和天皇第一皇子三品恒世親王ヲ中務卿ニ任ゼラル、事、紹運錄ニ見ヘタリ、是ヨリ前ニハ所見ナシ、又其後仁明天皇第二皇子四品宗康親王ヲ、嘉祥二年正月戊辰、爲二兼中務卿一、大宰帥如レ故ト、續日本後紀ニ見エ、夫ヨリ後ハ、往々親王ヲ中務卿ニ任ゼラル、コト、紹運錄ニ見エタリ、且臣下ノ當卿ニ任ジタルコトハ此後所見ナシ、然シテ親王ヲ任ゼラル、ニヨテ、臣下ノ任官ヲ止メラル、事、國史又格文等ニモ所見ナシ、去レバ延喜天暦ヨリノ後ノ制ナルベシ、

〔光臺一覽二〕中務卿一人　四品以上之親王任レ之、臣下は不レ任レ之、(唐名中書令)　大輔一人、權大輔一人、少輔一人、權少輔一人、

右諸家任レ之、大輔は大ゆうとよむ、少輔のゆうは不レ讀、書はすれども中務の少とか、中務の權少と計となへ申習ひ也、殘七省同斷、諸家の官也、(諸家は公卿)

丞錄は地下官、殘七省同斷、地下官也、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年十一月己卯、以二正四位上小野朝臣毛野一爲二中務卿一、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月壬寅、從四位上大伴宿禰旅人爲二中務卿一、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月辛丑、正四位上多治比眞人縣守爲二中務卿一、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月甲午、四品時康親王爲二中務卿一、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年閏七月癸卯、從五位下石川朝臣加美爲二中務大輔一、從五位下阿部朝臣虫麻呂爲二少輔一、

侍從

〔皇胤紹運錄〕後嵯峨院――宗尊親王一品中務卿、征夷大將軍、○下略

〔增鏡十四春の別〕一の宮○後醍醐皇子御かうふりして、中務卿尊良親王ときこゆ、

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕○中略

平田中務省少丞職孚　渡邊史生平華

〔詠百寮和歌〕中務卿

なよ竹のげに世中のまつりごとのぶるむねをば御子やしるらむ

〔倭名類聚抄五官名〕省　職員令云、中務省侍從、於毛止比止萬知岐美

〔北山抄一年中要抄〕正月同日○元日宴會事

大臣宣喚侍從、○末不千君達召世、小節皆用此詞、少納言稱唯、

〔北山抄五〕大嘗會御禊事

承平二年、侍從宗城朝臣、奉仕右兵衞督代、以兼明朝臣補次侍從、上卿仰中務輔云、源兼明朝臣、於毛止末不千君仁乎佐女給云々、

〔下學集上官位〕侍從ジシユウ拾遺

〔御湯殿の上の日記〕文明九年十一月十八日、日野のしゝう、御はぐろみしてしこう、

〔八雲御抄三下異名〕侍從　すゝむし　をもとひと

〔拾芥抄中本官位唐名〕侍從オモトヒト　侍從尉　散騎常侍　補闕左右　拾遺左右

〔唐六典八門下省〕左散騎常侍二人從三品

秦置散騎、又置中常侍、其散騎傍乘輿、專獻可替否、中常侍得出入禁中、常侍左右、○中略後漢省散騎、而中常侍改用宦者、魏黃初復置散騎、與中常侍合爲一、直曰散騎常侍、○中略貞觀初置散騎常侍二員、隷門下省、明慶三年又置員外、隷中書省、○中略龍朔二年改爲左常侍、咸亨元年復舊、

左散騎常侍掌侍奉規諷、備顧問應對、○中略

左補闕二人從七品上

皇朝所置、言國家有過闕而補正之、故以名官焉、詩云、袞職有闕、仲山甫補之、蓋取此義、後漢伏湛出入禁闈、拾遺補闕、魏志文帝勅侍臣曰、公卿等、宜拾朕之遺、補朕之缺、晉武帝詔曰、公卿等、宜補闕拾遺、獻可替否、晉職官志、御登殿、侍中居左、散騎常侍居右、備切問近對、拾遺補闕、後魏孝文帝令侍中李冲補闕左右、垂拱中因其義而創立四員、左右各二焉、天授初左右各加三員、通前爲十員、神龍初、依舊各置二人、其才可則登、不拘階敍、又置内供奉、無員數、才職相當、不待闕而授、其資望亦與正官同、祿俸等並全給、右補闕亦同、

左拾遺二人從八品上

皇朝所置、言國家有遺事、拾而論之、故以名官焉、史記汲黯曰、臣願爲中郎署長、出入禁闥、補過拾遺、漢書元帝初立、給事中劉向侍中金敞拾遺於左右、後漢張衡爲侍中、恒居帷幄、從容諷議、拾遺左右、後魏初置内侍長、主拾遺應對、若今之侍中散騎、又孝文帝命侍中丘帷拾遺左右、垂拱中因其義而創立四員、左右各二焉、天授初、左右各加三員、通前共爲十員、神龍初、依舊各置二員、才可則登、不拘階敍、亦置亦置(〇亦置二字恐衍)内供奉、無員數、資望俸祿並如正官、右拾遺亦同也、

左補闕拾遺、掌供奉諷諫、扈從乘輿、凡發令擧事、有不便於時、不合於道、大則廷議、小則上封、若賢良之遺滯於下、忠孝之不聞於上、則條其事狀而薦言之、

〔江次第抄　一〕元日節會

侍從列　寛平遺誡云、次侍從者、先例百廿人以上、年來例才(ハツカニ)八拾餘人、爲甚多、此爲稍少、須式例數莫過百人、新君愼之、

〔官職秘抄　下〕侍從　本數八人也、其中三人、少納言必兼之、　永承元年、始増九人、(源濟房)　久安四年増十人、(藤兼長)　其後員數太多、近代及廿人、

〔光臺一覽 二〕侍從　本數八人　唐名拾遺補闕、八人之內、三人は少納言たる人兼之也、天子召仕たまふおもと人也、本式の數にては御用勤まり難ければ、近代の員數無究、又五位の侍從、四位下に敍するは、侍從を辭する事なり、四品以上、侍從に任ずる事は、又格別の子細有事ぞかし、

〔令義解 四考課〕朝夕常侍、拾遺補闕、爲侍從之最、

〔唐六典 二吏部〕凡考課之法有四善、〇中略 善狀之外有二十七最、一曰、獻可替否、拾遺補闕、爲近侍之最、

〔令義解 五軍防〕凡有所征討、計行人滿三千以上、兵馬發日、侍從充使、宣勅慰勞、〇註略 發遣、

〔延喜式 十二中務〕凡正月二日、拜賀中宮幷東宮、點撿次侍從已上、

凡伊勢大神祭主、帶侍從及次侍從者、不得差他神和儛、

凡女樂幷踏歌前行、擇侍從有容儀者二人、令供奉、若遁隱不供、無給當日祿、

凡供奉諸祭和儛、及法會堂童子等、次侍從已上有闕怠、不預節會、正月七日、十一月大嘗會、移式部省拘留之、 幷臨時宴會、其內舍人奪一季祿、

凡簡點侍從及次侍從堪舞者十人、預令調習、互供祭事、

凡應供奉城外行幸陣、侍從次侍從者、除留守外、咸悉陪從、若無故不陪者、不預節會、

凡荷前使、次侍從已上、若有闕怠者、移式部省、不預正月七日節、兼從解却、

凡臨時遣山陵使、侍從次侍從、若致闕怠、一准闕荷前使之例、

凡親王以下次侍從以上、闕追儺陣者、不預元日節祿、

〔延喜式 十八式部〕凡次侍從已上、闕神今食幷法會堂童子等之役者、待中務省移、不預正月七日、若新嘗會等節、

〔官職秘抄 下〕侍從　本數八人也、其中三人、少納言必兼之、其外英雄、四五位公達任之、又可然大中納言參議兼之、辨官兼之例、始自長谷雄 大業人任例、長谷雄、匡衡、 兼受領例、始自伊通 兄弟相並例、始自宗忠、宗輔、

〔職原抄上〕侍從八人　八人之中、三人者少納言兼任之、其餘者公達任之、諸大夫中、常不任之、又大中納言參議已上、有兼任之例、近代無定數、五位侍從、敍四位者又去之、四位已上任之別儀也、

〔職原家傳秘錄上三〕公卿侍從ヲ兼任スル事ハ、其人ヲ御親ミアルニヨリテ也、ソノ子細ハ、侍從ハ御ソバ近クハンベリテ、御心ヤスクヨロヅ申上ル官也、公卿ニナリテハ、天下ノ政ヲトリ行フ故、御キヤク心ニナル故、モトノ侍從ノ時ノゴトクニ、ヨロヅ御心ヤスク、常ニ申上ルヤウニトノ事ニテ、侍從ニナシ下サルヽ事ト見タリ、近習ノ衆ナラデハ、侍從兼任ハナラヌ事也、參議已上兼任古今之例也、

〔百寮訓要抄〕中務省

侍從　令には八人と見えたり、遺たるをひろひ、かけたるをおぎぬふ官也、公達の家の人々任る也、日野、勸修寺、儒家などはならず、當時は其數數輩也、昔は擬侍從とて、節會に參る人をなされし也、今は其官なし、

〔江次第鈔一〕元日節會

侍從列　私按、侍從之職者、侍於天子之左右、補闕拾遺者也、假以他官人任之、八員之外、謂之次侍從、近代無員數、唐朝之制、六尙書、翰林學士、承旨翰林學士、御史中丞、府尹、六侍郎給事中、中書舍人、左右諫議大夫等爲侍從、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月辛丑、從五位上石川朝臣君子爲侍從、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月甲午朔、從四位上橘宿禰奈良麻呂、從五位上阿倍朝臣嶋麻呂、並爲侍從、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年三月辛巳、參議民部卿正四位下勅旨大輔侍從藤原朝臣繩麻呂爲兼近江守、

〔公卿補任平城〕大同二年丁亥

右大臣正三位藤内麿五十二、八月十四日兼侍從、卽不見

中納言從三位坂上田村麿五十、八月一日兼侍從

畿内觀察使從四位上藤緒嗣三十四、四月十六日任參議、八月兼侍從、

北陸道觀察使從四位上秋篠安人五十六、四月十六日任參議、八月十四日兼侍從、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年八月壬申、從五位下橘朝臣宗雄、從五位下藤原朝臣平雄、並爲侍從、

〔大鏡一宇多〕つぎのみかど亭子のみかど〇宇多と申き、〇中略このみかど、貞觀八年丙戌五月五日生れたまふ、元慶八年甲辰四月十三日、からいしもの〇からいしもの一本作源氏になり給ふ、御歳十九、王玄、うなごきこえて、殿上人にておはしましける時、〇下略

〔西宮記九月〕九日宴

延喜十一年九月九日、重陽宴也、無政、被補侍從十人云々、

〔公卿補任一條〕長保三年辛丑

參議正四位下藤行成三十、十月三日兼侍從

寛弘五年戊申

參議正四位下藤實成三十四、七月廿八日兼侍從

〔小右記〕寛弘八年七月一日壬申、去月廿七日公誠朝臣云、故花山院宮達御元服、〇中略亦仰可從侍從中納言行成指歸之由、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕今の侍從大納言行成卿、世のてかきとのゝしり給ふ、

〔續本朝往生傳〕一條天皇〇中略時之得人也、於斯爲盛、〇中略九卿則〇中略拾遺納言行成、〇下略

〔榮花物語三十八松の下枝〕一品宮にまいらせ給し侍從宰相〇源基平の御むすめ、内〇後三條おぼしめすといふ

こと世にきこえて、〈〇下略〉

〔台記別記〕仁平元年二月廿一日壬戌、侍從、本九人、加隆長十人、〈剩國二人、以兼長例、〉余〈〇藤原頼長〉所奏任也、

〔十訓抄〕〈八〉皇嘉門院、始て院號かうふらせ給へりける比、侍從大納言成通卿參りて、〈〇下略〉

〔公卿補任〕〈後宇多〉弘安十年〈丁亥〉

參議正三位源雅憲〈十二月十日任、(中略)同廿日兼侍從、〉

〔宗建卿記〕享保十五年十月三日、今日任參議、殿仰云、始而內々被申候、侍從兼任之事、於殿者被思惟之處、既爲公卿侍從、於然者爲參議申兼任之事、不可有子細歟、雖然無家例、一應去侍從之事、尤之儀也、申拜賀之後、更申之可然歟之由也、　十一月三日、參殿拜賀之事申談、□□□□仰云、先日噂候予兼侍從之事、雖無家例、以爲三位侍從、於申之者無子細候歟、爲三位侍從之輩、參議之後申如舊、或更任侍從事、於他家例數多也、〈冷泉、世尊寺多也、〉雖然依無家例不申請、如舊是無餘儀歟、於家者、三位侍從兩人、皆不昇進參議薨、依是今度雖申侍從、無其障歟之由也、拜賀後早速申之、有何難乎之由畏入了、

〔明和新增京羽二重大全〕〈一〉閑院家〈羽林　藤原氏〉　西三條侍從延季〈十九〉〈從五位下〉　清水谷侍從陳季〈十九〉〈從五位上〉

勸修寺家〈藤原氏　名家〉　小川坊城侍從俊親〈十二〉〈從五位上〉　勸修寺侍從經逸〈二十一〉〈正五位藏人〉

四條家〈羽林　藤原氏〉　西大路侍從隆良卿〈十三〉〈正五位下〉

諸家〈羽林　藤原氏〉　持明院侍從基武〈十二〉〈從五位上〉

源家〈宇多源氏　羽林〉　庭田侍從重嗣朝臣〈十二〉〈從四位下〉

〔實久卿記〕文政四年五月十二日辛酉、今度侍從及闕、實麗〈〇年十三〉申文、關白殿〈江〇藤原忠良〉申入、今日藏人辨向披露之事申入了、申文體續左、

〈中鷹三折〉申侍從

正五位下藤原實麗

奉四折家例

實文　享保元年十一月二日任侍從十三歲

實民　延享元年十二月七日任侍從十歲

實誠　明和八年十二月十八日任侍從十四歲

〔明良帶錄〕御老中從四位侍從、或は從四位少將、○中略　京都所司代從四位侍從○中略

御側御用人諸大夫四品或は侍從

此場は四品に敍し、城主格となる、○中略此場者、君邊第一の役にて、拾遺補闕と同意也、君の遺したるを拾、闕たるを補ふ職にて、君へ御心添をする役也、○中略

高家

世職にて何れも家柄歷々の末流世々にして官を嗣ぐ世職、尤雲上の事に明るく、公方の名託有職の事に達したる人、何れも老功の人ならねば功者ならず、昵近の公家衆と親敷、傳奏御用勤めるなり、肝煎は從四位上少將にて雁之間に列す、千石以下は五百石高也、當直平日一人也、餘は四位の侍從、五位の侍從也、五位の侍從は高家に限る、

〔職原抄支流大全二〕侍從　相當從五位下也、文官也、今ノ武家ノ侍從ハ大形從四位上下也、

〔四季草五秋草中〕官位之部

一國持大名の子元服して、初より直に侍從に任ずる事を、江戶の人はつきかけ侍從といひならはしたり、突懸といふ詞はなし、初任侍從といふべき事なり、

〔兼胤公記〕寶曆二年五月十二日、讃岐守○酒井忠用侍從之口宣宣旨、右京大夫從四位下之口宣位記、召使者渡之、如例同役入來立合如例、

享保十九年城代稻葉佐渡守、從四位下之節ハ、所司代土岐丹波守上京ヲ相待、口宣位記如例、

次侍從

丹波守江入内見後、召使者相渡之由所見也、今度之儀、寛延三年、松平薩摩守侍從之節、松平豐後守不待上京口宣宣旨不入内見、正月七日、使者江相渡、依此例、今日相渡之訖、

〔延喜式十二中務〕凡節會日、次侍從已上、不預謝座謝酒之禮、不得賜祿、但參議已上、幷當日有職掌者、及扇老扶杖之輩、不在此限、

〔延喜式三十三大膳〕親王以下月料

侍從卅人七人參議已上、餘五位已上、

三位已上及四位參議、醬二合、五位已上減一合 酢鹽各四勺五位已上同 東鰒二兩、五位已上減一兩 隱岐鰒、煮堅魚、各一兩、堅魚二分、烏賊一兩、鮭六分隻之一、五位已上並同 堅魚煎汁二勺、五位已上除 雜鮨三兩一分二銖、海藻二分、末滑海藻四勺、五位已上並同

〔延喜式十二中務〕凡次侍從員、百人爲限、正侍從八人、但參議已上不入此員中、中納言已上奉勅任之、若不在者、輔已下任之、 其名簿付省、其正侍從遷任者、雖無闕猶爲次侍從、以理解任亦同、

〔百寮訓要抄別註二〕次侍從トハ、侍從次ト云事ニテ、侍從ノ職ハ掌ラズト云ヘドモ、侍從ニ准ジテ祿ヲ賜ルナリ、何ガ故ニ侍從ニ准ジテ祿ヲ給フナレバ、侍從ノ官ハ、規諫拾遺補闕ノ重職ニシテ、常々天子ニ咫尺シ奉リ、又其餘ニ諸祭ノ和儛、法會ノ堂童子等ニ供奉スルノ儀モ侍從ノ職業ナリ、然ルニ正侍從ハ其員八人ニシテ、三人ハ必少納言兼之、又大中納言參議モ兼任スルコトアレバ、規諫補闕等ノ重キコトハ正侍從ノ任ニシテ、其餘ノ職業ヲ勤セシメンガ爲ニ、次侍從ヲ任ゼラルヽナリ、是四位五位ノ人ノ任ズルコトナリ、

〔貞丈雜記四官位〕擬侍從、次侍從など、云も、節會などの時に當分に被任也、常の侍從の人數不足に依て、かりに被任を云也、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

補次侍從出居侍從事　大臣、小節若旬日奏事由、依外記勘文補之、或於御前被補、大臣在陣、或自執筆書之、或仰參議令書之、奏聞之後、召中務輔丞下之、以京官五位以上年勞者、殿上人織内司等補之、

〔北山抄六〕補次侍從事正月一日、十六日、九月九日、二孟旬等補之、

大臣奉勅、仰外記令勘申侍從闕、中務省勘申之并可補者等先令奏之、隨仰定補、或以甲點可補之人下給、即召陣硯臨時事用陣硯、雖非无其例、其紙可召外記、猶同可召外記硯歟、自書下名、更不經奏召中務輔給之、但書二枚、一枚留之、若有召令奏之、或被仰與諸卿可定補之由、仍先書出令奏、返給後清書下給、九條大臣令參議書之、其下名如除目、但先書次侍從也、

臨時補一兩者、不必書之、召中務輔仰云、其姓名朝臣、五位其姓朝臣名於毛東末不千君留收給、

天慶五年四月二日、右大將〇藤原實賴奉仰、源俊等三人補之、仰外記、且加載見參、且召陣硯、手注夾名召補給之、吏記

〔江家次第十一十二月〕被補次侍從事

元日　踏歌　重陽　謂之小節、宴次侍從以上也、　二孟旬

件等日補之

頭藏人書宣旨　書樣

四位

藤原某朝臣

藤原某朝臣

五位

藤原朝臣某

橘朝臣某

紀朝臣某

年月日

於陣下上卿大臣更淸書　小野大臣令參議書之、九條大臣自書之、

四位

藤原朝臣某

藤原朝臣某

五位

藤原朝臣某

橘朝臣某

紀朝臣某

年月日

召外記下之、至案者、令僕從者、　此事近代、無知書樣頭藏人、

凡次侍從者、有殿上侍從、以四位爲之、旬相撲時、出居侍從昇是也、此殿上字音共用平聲、醫師陰陽師在此中、上古以預節會爲大望、多依給祿綿也、仲綿、本太宰府所進也、而近代師大貳申色代、三百兩代絹一匹、仍無望預節會人、元日節會、輔親朝臣、公則朝臣參入著幄、稱曰、元日奉拜龍顏、是物吉之事也、其後久無諸大夫著幄、近代著魚袋參節會殿上人、皆是侍從也、何不著幄哉、謝座謝酒著幄之時、公卿三人許昇南殿之間、諸大夫著幄、不必待公卿昇殿上了、

頭注裏書曰、次侍從百人、此中正八人、次九十二人、次侍從〇次侍從原脫次字今補四位五位之中、以有年勞者補任之、神祇官、伯、大少副、祭主、辨官、大中少辨、諸司長官、內膳正、諸陵頭、齋院長官、次官、八省大少輔、內藏助、外衞佐、馬助、諸道博士、大夫外記內記、畿內國司、美乃守在之、散位輩等皆補之、西宮抄云、小節日、不出御前補次侍從、外記進勘文、奏聞下給之後大臣或自筆、或令參議書之、奏聞返給下中務省、

〔文德實錄三〕仁壽元年四月癸卯朔、從四位下道野王、房世王、正躬王、貞內王、雄風王、高叡王、伴宿禰成益、正五位上藤原朝臣良仁、正五位下藤原朝臣高房、從五位上平朝臣春香、藤原朝臣並藤、豐階公安人、從五位下小野朝臣千株、百濟王永仁、文室眞人有眞、善友朝臣豐宗、高橋朝臣安雄、坂上大宿禰貞守、藤原朝臣冬緒、橘朝臣常蔭、橘朝臣茂房、藤原朝臣三藤、淸原眞人淸海、南淵朝臣年名等、並爲次侍從、庚戌、從五位上良岑朝臣長松、從五位下物部首廣泉、大枝朝臣音人、春日臣雄繼等、並爲次侍從、

〔文德實錄六〕齊衡元年五月乙巳、從五位下藤原朝臣貞敏、諸葛、三統宿禰眞淨等、爲次侍從、

〔西宮記臨時裏書一〕貞觀五年三月廿八日、補次侍從十三人、同卅日、又補四人云々、

〔貞信公記〕延長二年十月一日、上○醍醐御南殿、補次侍從十一人、右大臣奉仰定奏者、

〔貞信公記〕天慶十年○天曆元年正月十六日、補次侍從三人、

天曆二年十月一日、上不御南殿、中使有相朝臣來云、今日可補次侍從、而左右大臣、各有障不參、補此人々何、勘申前例之中有御點十人也、

〔西宮記九月〕九日宴

九記云、天曆四年十月八日、午二剋御南殿、未著御座之前、可被補次侍從四人之由、藏人頭有相傳仰左大臣云々、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年正月辛未、宴次侍從已上於東院、賜御被、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年正月己巳、宴次侍從已上於前殿、其餘者、於朝堂賜饗、

〔內裏式上〕十六日○正月踏歌式

早旦天皇御豐樂殿、賜宴次侍從以上、有蕃客者、非侍從及六位以下皆召、

〔延喜式四十五左右近衛〕凡次侍從、四位已上聽昇殿、其五位、新敍四位者侍宜陽殿、殿上侍臣候進止召之、一昇殿後、則得直昇、

擬侍從

〔延喜式十八式部〕凡職事次侍從、遷任他司、其解由與不之狀、移送中務、

〔延喜式十二中務〕凡次侍從已上年七十以上者、雖身不參、給節會祿、

凡帶官次侍從已上、有遷任者、待式兵兩省移、知進解由、乃預節會、

〔延喜式十八式部〕凡次侍從已上、年滿七十者、移送中務省、

〔延喜式十二中務〕凡應供奉神今食幷新嘗、小齋侍從、次侍從、前祭一日、平旦於神祇官南門外點撿訖、即省輔相率就同官廳、卜食四位一人、五位二人、省輔、宮內輔各一人、若其日不參者、不預節會、

凡應供奉神今食、小齋次侍從已上歷名、前祭一日奏之、(大嘗會亦准此)

〔康富記〕文安四年十一月十六日甲辰、豐明節會、停止平座也、○中略是日大見參也、不分次非之處、上卿被不審、見參一通不足也云々、二孟重陽者、分次侍從非侍從、至豐明平座者、不分次非只一通、大見參ハ元日節會、又分次非之由返事申之、上卿返答云、中古豐明平座時、當分次非之由存候、雖然近年儀如然歟、又可意得之由、返答有之云々、

〔北山抄五〕即位事

殿上侍從儀

女官著座訖、左右侍從及少納言、入自昭訓光範兩門、歷軒廊昇殿上、各出南榮、揖而相折、至南廂東西第二間相揖、北折入楹內立、氈上、相對而揖之、(東西面、以北為上、四位侍從、少東退立第二柱下、少納言立南榮第一間中央、)褰帳訖、典儀贊者唱再拜、百官再拜、(殿上侍從不拜)宣命使宣制訖、典儀又稱再拜、群官再拜訖、左侍從親王、(儀式云、在南者云々、失誤歟、)揖而經四位侍從前、出南榮、揖而西折、進行北、至東第四間、漸屈其腰、至同第五間東楹西、差屈揖而北折、大小傍行各三步、(儀式云、進當御前傍行數步北折進跪、膝行數步稱禮畢、却退乃立傍行、還如進儀云々、然則乍西向可傍行、與親王儀式、日記、口傳等相違、未定是非、)當于御前跪而膝行三度以揖、(吏部王記曰、傍行三步、膝行三步云々、似无小傍行幷屈行、雅信大臣說无屈行、次膝行云々、今案、小傍行屈行、殊無差別歟、隨當時便宜耳、)更亦俛伏、左右引笏、退而(謂之逡巡、)奏曰、禮畢、(其音高長、)揖而膝行退還、起而傍行左廻出於南榮、揖而東折、至第二間、揖而北折、

復二本座一以揖之、(経二四位前一如レ初)天皇御二後房一、應レ退鼓侍從退下、如二參上儀一、次内辨及群官退矣、(或群官退後、侍從可二退下一云々、)

〔小右記〕寛弘八年九月十日庚辰、參内、左大臣、(○藤原道長)内大臣、(○藤原公季)大納言齊信、中納言俊賢、隆家、行成、時光、參議經房實成參入、左大臣定二申卽位一、(○三條)擬侍從、左四品昭登親王、從四位上藤原顯信、右四品清仁親王、從四位下藤原朝臣資平、少納言從五位下源朝臣眞高、從五位下藤原朝臣維光、(中務大輔)

〔代始和抄〕御卽位事

擬侍從の事は、上卿例文硯等をめして、參議をしてこれを書しむ、侍從といふは、天子の左右に侍て、拾遺補闕をつかさどるの職也、もとよりその職ありといへども、卽位の時は、その一日、玄かるべき人をえらびて、その代とするによりて、擬侍從とは名付るなり、左右におの〳〵二人あり、一人は三位、一人は四位の人を用ふ、或は親王をもて、三位の侍從に用ふる事も有しなり、

〔玉海〕治承四年四月廿二日甲辰、此日天皇(○安德)卽二位於紫宸殿一、(○中略)左右親王代(左右兵衛督家通、右三位中將賴實、)殿上侍從、(左治部卿源顯實朝臣、右木工頭源師兼朝臣、)少納言、(左平信國、右藤原惟基、)各禮服帶劍、(兩親王代付二玉珮一、侍從少納言不レ付レ之、)入レ自二敷政神仙一者、昇レ自二南廂東西階一、經二簀子一立二位氈一、

〔百練抄〕(十七後深草)正元元年十二月四日壬寅、左大臣(公相公)拜賀著陣也、(○中略)被レ定二申御卽位、幷同行事所始一、可レ被レ立二高御座一日時等一、次被レ定二擬侍從已下事一、

〔實躬卿記〕永仁六年十月十三日丁卯、今日天皇(後伏見)(春秋十一歳)御卽位官廳也、(○中略)

職掌人事(○中略)

擬侍從

左方　參議藤原師信卿(○左中將中略)　散位藤原爲信朝臣(○註略)　少納言平兼有朝臣(○註略)

右方　參議藤原實躬(右中將)　前因幡守藤原隆名朝臣(○註略)　少納言代前若狹守藤原朝臣經定

〔内裏式上〕元正受二群臣朝賀一式

侍從四人(親王已下四位已上爲之、若不帶劔者、權帶用、北爲上、服色同上、)相分共立、

〔儀式六〕元正朝賀儀

大臣預點(中略)○註 殿上侍從四人、(三位二人、或以親王爲之、四位二人、並左右各一人、)少納言左右各一人、(若有闕者權任)奏賀奏瑞各一人、(簡四位以上堪事者爲之)典儀一人、(通用四位五位)並奏聞定之、

〔朝野群載五朝儀〕元日擬侍從

左　從三位藤原朝臣基忠　正四位下源朝臣道良

右　從三位藤原朝臣保實　從四位上源朝臣道時

少納言　正五位下藤原朝臣道輔　從五位上藤原朝臣公衡

奏賀　正二位源朝臣雅實

奏瑞　從四位上藤原朝臣實宗

典儀　從五位上藤原朝臣知家

應德三年十二月廿日

〔江家次第十一十二月〕元日侍從並荷前定

十三日、定元日擬侍從並荷前使事、

大臣參議著陣

大臣直著外座、以次上卿先著內座、以藏人令奏可定申其事之由、奉仰之後渡外座、一位大臣著三間東邊、次大臣著二間西邊、大納言著同間東邊、中納言著一間西邊、但行事日、不論大中納言著二間、大納言著西邊、中納言當崇明門中央著之、召官人令置膝突、又令召外記、五位外記著膝突、六位外記跪小庭、上卿仰可進擬侍從并荷前使等例文硯之由、外記稱唯出進之、一人取筥入年々定文二卷、今度可奉仕使上卿注文、并中務省進陰陽寮日時等、置上卿前、一人取硯加入大間二卷、置參議前、大臣見

案、令參議書之、

書樣○註略　元日大極殿擬侍從

左　正三位藤原朝臣某　有親王者可定、不然者用參議、　正四位下源朝臣某

右　從三位藤原朝臣某　從四位上藤原朝臣某　少納言正五位下藤原朝臣某　同從

五位上源朝臣某

奏賀正二位藤原朝臣某　奏瑞從四位上藤原朝臣某　已上用經少納言人　典儀從五位下

藤原朝臣某　用少納言

　天仁二年十二月十三日○中略

書了定文二枚日時入筥、令藏人若殿上辨內覽、奏聞返給下外記、

〔玉海〕壽永三年○元暦元年十二月十三日戊辰、此日元日擬侍從定、及荷前定也、右大將○藤原良通依勅定所

定申也、早旦大將以書札示送頭辨許曰、大極殿燒亡之間、天喜康平之比、無擬侍從定、而治暦四年有

此定、若是依代始歟、治承依治暦例之間被定云々、但於彼治暦例者、大極殿雖不迨造畢、大略出來云

云、今度未及出來、頗不相似歟、今日可定申哉否、從上仰可進止事也、且尋外記、且申事由可被定下者、

返事云、擬侍從定、尤可被行候也云々、攝政○藤原基通命歟、私計歟、頗不重、然而職事許、可申定之由示送、

而答可被行之由計也、非自由事歟、加之外記執可有定之由云々、仍大將定申了云々、猶於愚意者、不

可有此定歟、又擬侍從定文ニハ、元日大極殿擬侍從書也、而當時大極殿無異、仍件字可書哉否有疑、

治暦例書之云々、依其例治承又書之、而余○藤原兼實案之、治暦ニハ依大極殿出來書之歟、治承不及爲

例、於今度ハ略大極殿三字、只元日擬侍從ト可書也、仍此由含大將了、入夜歸來云、示合大外記幷執

筆左大辨兼光等之處、尤可然之由令申、仍摺除大極殿三字了云々、

〔建武年中行事〕荷前の使の定のつゐでに、元日の擬侍從のさだめあり、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

補次侍從出居侍從事　出居侍從十二人中、隨闕補之、召左近將監以上賜之、

〔貞丈雜記官位四〕一出居侍從と云は、禁中にて公事を行はるゝ時、其席に出て居る侍從也、人數あまたあり、是は其當分に被任也、

〔西宮記臨時二〕補次侍從事

召中務於膝突給之、(出居侍從、(中略)本十二人、而近代所補不過五六人、)

〔北山抄九羽林要抄〕出居侍從事

上卿以夾名下給左次將、次將應召進膝著給之、(置笏於左、)卽下給官人、加宣旨書令續收、(一條院例給右將、)

〔江次第鈔六四月〕二孟旬儀

出居侍從著座　多帶京官者勤仕之、但外國守又有例、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡出居侍從十二人聽昇殿、但其交名臨時仰下、

凡出居侍從、雖非御膳時、而御紫宸殿、卽聽昇殿、

凡出居侍從及內記上日、於陣給之、其內記聽度紫宸殿階下、

〔小野宮年中行事四月〕同日(日〇朔)旬事

左近陣例、大將宣、(冬闕)出居侍從滿十二人、不得更昇、天長二年二月二日、今案件宣旨、出居侍從十二人已下歟、

〔文德實錄三〕仁壽元年四月癸卯朔、正四位下高枝王、從四位下茂世王、基兄王、正躬王、從四位上豐江王、正四位下橘朝臣永名、從四位上藤原朝臣衞、源朝臣生、源朝臣安、源朝臣勤、源朝臣冷、清原眞人瀧雄、從四位下藤原朝臣春津、藤原朝臣岳守、清原眞人岑成、藤原朝臣諸成、春澄宿禰善繩、正五位下藤原朝臣貞守、藤原朝臣行道、從五位上久賀朝臣三夏等、爲出居侍從、

酒番侍從

〔三代實錄 二十六 清和〕貞觀十六年七月廿八日甲寅、天皇御紫宸殿、觀相撲、不開閤門、親王公卿、及出居侍從侍殿上、

〔中右記〕寬治二年七月廿六日庚午、有相撲召合、其儀如常、○中略、右少將宗通朝臣先昇、次左右大臣以下、次出居侍從其後次第等如常、

〔延喜式 十二 中務〕凡酒番侍從、及次侍從、毎年定十二人、(一日爲番、番別四人、)若致闕怠、封門籍卅箇日、(見直二人已上、不以爲闕、)其封籍之間、不預節會、但中宮東宮賀禮、不在制限、

凡省輔雖非酒番、率侍從上殿行酒、

凡酒番侍從、及次侍從、當遣藥殿、(番別二人、)有闕者隨卽解却、

凡辨大夫帶次侍從已上者、不得差酒番、

〔西宮記 十月〕一旬　還宮後儀

應和三四一有旬、酒番侍從一人、右大將仰少納言懷忠行酒、

〔西宮記 七月〕相撲召仰

召合　天皇御南殿、○中略、御厨子所供御膳、○中略、酒番侍從獻盃、

〔北山抄 九 羽林要抄〕二孟旬

內侍奏左右近簡、○註略、此間供御酒了、酒番侍從、隨而勸盃、

非侍從

〔類聚國史 三十二 帝王〕天長三年十月丙申、天皇○淳和幸栗前野遊獵、賜侍從及狩長非侍從、幷山城國掾已上衣被、

〔三代實錄 一 清和〕天安二年十二月戊子朔、於右仗頭賜親王已下侍從已上酒、非侍從亦預之、賜祿各有差、

〔儀式 一〕平野祭儀

侍從所

外記喚中務省、仰侍從已上見參事、〇中略但非侍從見參者、外記率史生、就祭座點之、

〔儀式十〕奉山陵幣儀

前十日、中務省差定使次侍從以上、內舍人、大舍人、總錄名簿進太政官、式部點非侍從五位十人進之、補侍從非常闕

〔江家次第六四月〕二孟旬無御出儀

凡歷侍從之人、皆入侍從見參、公卿大不歷侍從之人、皆入非侍從見參、

〔倭名類聚抄五官名〕局　職員令云、侍從局於毛止比止女(女恐末字誤)宇知岐美〇中略俗謂局如所、侍從所內舍人所等是也、

〔西宮記臨時五〕一所々事

侍從所在外記南、有所監預、膳部熟食大粮有厨、

〔西宮記臨時八〕侍從所

第一間西壁下有左右大臣座、東面南上、但有太政大臣之時、左右大臣座、大納言上申文中入如例、大納言座、母屋北邊西上南面一列、仍申文史作法等、與納言同、母屋北邊西第一間東邊有大納言座、南邊在、大臣座在其上方西壁下、壁下有太政大臣道、同第二三間有納言座、第四間有參議座、南面西上、就中四位參議者可著東一間敷、納言以上、各皆机并半疊、參議者立長帖及食床等也、南廂南邊東上北面、有非參議大辨以下、少納言座、中辨以下隨品次著之、就中東第一間大辨、第二間四位、第三間正下五位、第四間從下五位可著云々、東庇南間有王少納言座、西面、又母屋中央間南邊有一世源氏座、北面、件兩座者、雖無其人尙設其座及机盤筥等、但件所北座西板戶下、別有大臣昇階、其南至于東邊下、有履脫、是參議以上之間所踏也、

〔北山抄二年中要抄〕八月十五日牽信濃勅旨御馬事

上卿仰大辨、令召侍從、大辨仰少納言、若辨、以召使召遣、或上卿直仰少納言、侍從等出局進著、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年閏十二月庚午、公卿已下、於侍從所宴飲歌舞、殊有勅、賜侍從已上內外諸大夫等祿、各有差、

〔文德實錄十〕天安二年三月丙子、有勅令相模介從五位下滋野朝臣安成講老莊於侍從所、令文章生學生等五人預聽之、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月十三日庚子、公卿於外記候廳聽政、〇中略是日公卿於侍從所飮酒、五位以上預席者八十餘人、以太政官厨家綿賜上下各二屯、

〔三代實錄二十二清和〕貞觀十四年十一月八日甲戌、右大臣已下參議已上、於侍從所賞雪會飮、詔以內藏寮綿賜之各有差、侍從五位以上、亦預賚焉、

〔西宮記六月〕神今食　散齋日在畿內行神事例

天曆三年七月二十一日、於中和院有神今食祭事、〇中略依穢延引待曉之間、已徒然、仍上卿召棊局、侍從所棊局也、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年二月廿六日癸亥近日連夜、鬼物行侍從所、

〔左經記〕長元七年十二月十六日壬申、兼行朝臣來云、侍從所壁書、爲去八月大風被吹破、可改書之由、少納言賴祐朝臣、奉關白左大臣仰被召仰、其壁書被書留之下給、欲寫取者、卽充之、此書故一條殿云云、件壁書、紀貫之朝臣所書、其後破損、貫之男大膳大夫時文、依祖例又書之云々、今兼行雖非彼胤、依爲當時能書當其撰歟、

〔百練抄五鳥羽〕保安三年十二月十五日、外記廳侍從所、修造以後始有政、

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

侍從所月料油三升小月二升九合

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

補侍從所所監事、著座一人著侍從所之間、食畢未拔箸之前、問可補人於少納言、少納言擧申一兩人、上卿一定仰下、雖大臣不著座人不仰下、近代ハ大臣內々仰少納言、上卿著日令擧補申云、令某人行所事者、上卿揖許、

侍從厨

〔北山抄 六〕侍從所所監事

第一上卿著侍從所補之、未著座大臣、示仰著座上卿及少納言、

〔類聚符宣抄 七〕侍從所々監事

散位從五位下藤原朝臣賴信

右關白左大臣宣、宜令件人撿領侍從所雜事者、

長元二年五月七日　　少納言兼侍從源朝臣 奉

〔類聚三代格 五〕太政官符

應左右坊城使幷侍從厨防鴨河葛野河兩所五位以下別當四年遷替兼責解由事 ○中略

天長八年十二月九日

〔延喜式 十八 式部〕凡侍從女官等厨別當、四年爲歷、責其解由、預亦同之、但不立歷限、

〔西宮記 臨時 一〕諸宣旨

侍從厨別當 一大臣宣

侍。從。厨。預 上宣、貞觀十九年閏二月廿八日官符、内竪任云云、春耳高貞定、預大舍人助、並松任若狹目替云々、

〔類聚符宣抄 七〕太政官符侍從厨

右少辨紀朝臣淑光

右右大臣宣、件人宜補前別當左少辨橘朝臣公賴遷任近江權守之替者、厨宜承知、依宣行之、符到奉行

從四位下行右中辨兼山城守藤原朝臣扶幹　　外從五位下行左大史菅乃朝臣清方

延喜十九年四月十七日

〔類聚符宣抄 十〕侍從厨

權中納言藤原朝臣宣、史生之中、簡堪勘勾者一人、十箇日許、令勘侍從厨家公文、

弘仁十三年正月廿日　大外記永世宿禰公足奉

權中納言藤原朝臣宣、以史生大藏岡繼、暫充勘侍從厨物所者、

弘仁十三年七月廿六日　大外記永世宿禰公足奉

〔三代實錄 十八 淸和〕貞觀十二年四月廿八日庚戌、制、責侍從厨預解由、立爲恒例、

〔西宮記 七月〕相撲召仰

二十六日、辰四刻御武德殿、○中略 右近辨備王卿膳、侍從厨給侍從膳、

〔倭名類聚抄 五 官名〕局　職員令云、中務省內舍人、宇知止禰利

〔河海抄 十九 浮舟〕うどねり　內舍人

〔倭訓栞 中編 三〕うどねり　內舍人のよみ也、侍の品にて禁中の御隨身也、○中略 此を攝關に賜はるを內舍人を賜ふといふ、道路警衞のため也、

〔古事記傳 三十三〕舍人は、左右近く親く仕奉る者なり、書紀仁德卷に、近習舍人、武烈卷に、近侍舍人、顯宗卷に、左右舍人などもあり、これらもたゞ舍人なり、別にかゝる稱どもあるにはあらず、さて此者、此記書紀に見えたるを考へわたすに、天皇及王たちの使ひ賜ふ物にて、万葉歌によめるさまも、皆皇子に仕奉るよしなり、十三卷に、朝者召而使夕者召而使遣之舍人之子等者、行鳥之群而侍、有雖待不召賜者云々、續紀八に、舍人親王に、內舍人二人、大舍人四人、衞士三十人、新田部親王に、內舍人二人、大舍人四人、衞士二十人を賜へること見えて、其舍人、以供左右雖使、衞士以充行路防禦とあり、臣の家には、此稱無し、續紀五に、左大臣舍人見えたるは、後の事なるべし、○中略 名義は、殿侍か、能波閉を切むれば、泥となる、侍の意は、上卷傳十四の四十四葉に云るが如し、万葉二、日並皇子尊宮舍人等歌に、東の、たぎの御門に、伺侍へど、昨日も今日も、召こともなし、又今一の考もあり、其は下に云べし、師(賀茂眞淵)は、殿守と云意なりと云れしかど、殿守は、本よりとのもりと云て、別なり、書紀に、帳內、官者、兵衞などもあり、漢國にて官者と云物は、皇朝には無し、されど仕奉るさまは登禰理と似たることあり、又兵衞は、登禰理に正しく當らず、さて舍人の字をむれと用る故は、漢書注に、舍人親近左右之通稱也、後爲官と云る、此意を以てなり、舍人と云稱は、周禮にも、史記秦始皇紀などにもあれど、此方に登禰理に用るは、右の漢書注に云る意を以てなり、後爲官と云るさへ、よく合り、又や、後に、大舍人と云あり此名

書紀雄略巻より始て見えたり、職員令に、左右大舍人寮ありて、大舍人八百人と見ゆ、集解に、弘仁十年に、減じて四百人に定められし由見ゆ、内舍人と云もあり、同令中務省の下に、内舍人九十人、掌帶刀宿衞、供奉雜使、若駕行、分衞前後とあり、大寶元年に、始て置れしこと、續紀に見ゆ、久安四年、内舍人六十人に定められしこと、百練抄に見ゆ、漢國にても、隋官に太子内舍人と云あり、太子の官なり、又東宮職員令にも、舍人監ありて、其下に、舍人六百人とあり、さて又刀禰と云稱あり、此は舍人とは、本より別なり、廣瀬大忌祭祝詞に、王等臣等百官人等、倭國乃六御縣能刀禰、男女爾至万氐云々、龍田祭祝詞にも、かくあり、續後紀九に、公卿百官及刀禰等、また諸祝刀禰等、西宮記五月五日條に、内辨云、刀禰召せ、少納言唯出召、王卿以下列入、また釋奠條に、上卿宣云、刀禰奉入禮興、諸大夫以下入自南門、また九日宴條に、云々、大節大夫稱刀禰云々、仰召刀禰云々、神樂弓立歌に、伊世之末乃安万乃止禰、可太久保乃計、大神宮儀式帳に、二箇郡司子弟、及諸刀禰等、中右記に、嘉保二年云々、大原刀禰等、爲雨院下部、不隨行事所召炭、又西七條刀禰、申同爲下部、不進行事所召針事など見え、伊勢神宮の書どもに、宇治鄉刀禰、沼木鄉總刀禰、諸鄉刀禰、小俣村總刀禰職、射和村刀禰職などあり、後拾遺集、神祇部、詞書に、里の刀禰ともあり、散位をも刀禰とよみ、命婦官人などを、比賣刀禰と訓り、凡て刀禰とは、もと上中下に亘りて、公に仕奉る者の總名にて、甚賤き品の者までを云り、故後には、おのづから賤き稱の如くにもなれるなり、神樂歌に、海人の刀禰とあるも、海人は公の御贄を捕事を仕奉る故に云り、

〔古史徵一夏開題記〕舍人は刀禰と訓べし、そは書紀に舍人皇女とあるを、古事記に杼泥王と書き、百官男女をすべていふ刀禰を、舍人とも書にもて知べし、○中略舍人は祝詞に刀禰男女など有て、男のみならず、女にもいふ稱にて、上中下に亘りて、公に仕奉る者の總名なればなり、仁德天皇紀に、命婦をヒメトネと讀み、延喜式に、宮人をも、かく訓るを思ふべし、

〔周禮註疏九地官〕司徒

舍人上士二人、中士四人、府二人、史四人、胥四人、徒四十人、註舍猶宮也、主平宮中用穀者也、

〔漢書一高帝〕秦三年六月、沛公乃夜引軍從他道還、偃旗幟、遲明圍宛城三帀、○註略南陽守欲自剄、○註略其舍人陳恢曰、文穎曰、主廐内小吏官名也、蘇林曰、藺相如爲宦者令舍人、韓信爲侯、亦有舍人、師古曰、舍人親近左右之通稱也、後遂以爲私屬官號、○中略死未晚也、

〔漢書三十九曹參列傳〕曹參沛人也、○中略蕭何薨、參聞之、告舍人趣治行、師古曰、舍人猶家人也、治行謂修行治裝也、吾且入相、

〔隋書二十八百官〕門下坊置左庶子二人、内舍人四人、錄事二人、主事令史四人、

〔野々宮問答〕内舍人

是は中務省之官人に候、先にも申候ごとくに、中務は八省之長官にて候故、禁中宿衞之爲に九十

人之兵士を被置候、是を內舍人と申候、

〔貞丈雜記四役名〕公家にて舍人と云は、大舍人、內舍人とて官の名也、內舍人は、始は大臣の子息などのなる官也、後には侍のなる官になれり、天子行幸の時、前後を守護する役也、

〔拾芥抄中本官位唐名〕內舍人（通事舍人　千牛備身）（給事舍人　千牛府）

〔唐六典九中書省〕通事舍人十六人、從六品上、

通事舍人、卽秦之謁者、漢書百官表云、謁者掌賓贊受事、員七十人、秩比六百石、有僕射、秩比千石、舊儀云、謁者有缺、選郞中美鬚眉大音者補、〇中略　晉武帝省僕射、以謁者幷蘭臺、晉初置舍人通事各一人、隷中書、晉令舍人通事兼謁者之任、通事舍人之名自此始也、宋武帝置謁者僕射、領謁者十八人、〇中略　隋初罷謁者官、置通事舍人十六人、從六品上、開皇三年增舊爲三十臺、〇中略　皇朝廢謁者臺、改謁者爲通事舍人、隷四方館、屬中書省、

〔拾芥抄中末宮城〕內舍人所（中略）在中務省北門東掖、有年官熟食、件所故實尤多云々、

〔續日本紀二文武〕大寶元年六月癸卯、始補內舍人九十人、於太政官列見、

〔類聚國史百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々減內舍人、定卌員、〇又見職員令集解

〔百練抄七近衞〕久安四年正月廿八日、內舍人六十人、永可爲員數之由被仰外記、〇又見拾芥抄

〔官職秘抄下〕內舍人

令云、九十人、格云、大同三年正月廿日、定四十人、久安四年以六十人可爲員數之由被下宣旨、其後超過百人、

〔令義解四宮衞〕勤於宿衞、進退合禮、爲內舍人之最、

〔令義解五軍防〕凡有所征討、〇中略　其防人滿一千以上、發日遣內舍人發遣、

〔唐六典九中書省〕通事舍人、掌朝見引納、及辭謝者於殿廷通奏、〇中略　凡軍旅之出、則受命慰勞而遣之、

既行則每月存問將士之家、以視其疾苦、凱還則郊迎之、皆復命、凡致仕之臣、與邦之耋老、時巡問、亦如之、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年十一月辛未、遣內舍人於近江國、慰勞持節大使藤原朝臣宇合、

〔令義解 七公式〕凡諸王五位以上、諸臣三位以上致仕、身在畿內、〇註略 每季、五位以上每年、並令內舍人一巡問、奏聞安不、

〔延喜式 十二中務〕凡大儀日、〇中略 輔丞各二人、相分率內舍人、大極殿前庭近衞陣以南隊之、內舍人不足者、權補散位、大舍人十人、內豎廿人、有品親王家十人、省直仰令進名簿、便補之、其名簿具注父祖官位、審察入朝之時、待太政官所下名簿補之、

〔延喜式 十二中務〕凡正月七日、兵部供御弓者、預簡內舍人、令奏、事見儀式、

凡藥師寺三月最勝會堂童子、王氏內舍人六人、興福寺三月國忌御齋會、若有閏月者、部修其月也、十月維摩會等堂童子、藤氏內舍人各六人、前五日差點、其名簿入太政官、

凡每月十五日遣內舍人、勞問常住寺十禪師、兼奏修法行事、

〔延喜式 十二中務〕凡內舍人、參雷鳴陣者、立春興殿西廂、

〔新儀式 五臨時〕雷鳴陣事

雷鳴之時、〇中略 中務丞率內舍人、帶弓箭、陣于春興安福兩殿之東西廂、近代彼省不勤此事、

〔類聚國史 百七職官〕大同二年五月庚寅、停闈司奏事、令內舍人奏之、其儀一如闈司、

〔日本後紀 二十一嵯峨〕弘仁二年九月庚戌、停內舍人奏、依舊令闈司奏之、

〔類聚國史 百七職官〕大同三年正月庚戌、始令內舍人與監物主計共出納諸司雜物、其辨官中務民部等、並不預焉、

〔孝亮宿禰記〕慶長十六年三月廿六日丙寅、〇明日後陽成讓位 漏剋者內舍人可持之由、今日被仰出也、內舍人、當時闕人有之由申之、〇中略 內舍人者當局催也、

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月廿八日、花町宮(○後西院)有踐祚之事、(○中略)調進(○中略)　內舍人　漏剋綱棒

〔延喜式 三十一 宮內〕供奉踐祚大嘗小齋(○中略)

內舍人十人

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴訟届書等留牒

奉願口上

大嘗會卯日內舍人出仕之事、元文之度則貞、寬延之度亡父正芳、出仕被為仰付候、以此等之例、於今度(茂、薰正)出仕被仰付候者、難有可奉存候、此旨宜御沙汰奉願候、以上、

八月　內舍人和氣薰正

官務殿

〔續日本紀 八 元正〕養老三年十月辛丑、詔曰、(○中略)其賜一品舍人親王、內舍人二人、大舍人四人、衞士三十人、益封八百戶、通前二千戶、二品新田部親王、內舍人二人、大舍人四人、衞士二十人、益封五戶、通前一千五百戶、其舍人以供左右雜使、衞士以充行路防禦、

○按ズルニ、內舍人ヲ賜フ事、始テ此ニ見ユ、以後其例頗ル多シ、概シテ省略ニ從フ、

〔令義解 五 軍防〕凡五位以上子孫、年廿一以上、見無役任者、(謂役猶使也、任亦使、其得考以上、不須申送、但帳內資人、是敍外位、故須申送、即雖已敍位、卑於蔭位者、亦須申送也、)毎年京國官司、勘檢知實、限十二月一日、幷身送式部、申太政官、檢簡、性識聰敏、儀容可取、充內舍人、(謂二事相須、乃充內舍人也、)三位以上子、不在簡限、以外式部隨狀、充大舍人及東宮舍人、(謂中宮舍人、亦准此也、)

〔官職秘抄 下〕內舍人　往代以大臣子息任之、延喜以降、此儀絕畢、近代以臨時內給、成功、院宮二分代、大臣別給等、諸家侍任之、殆及凡卑、任國後更任例、(藤茂朝)

〔職原抄 上〕內舍人九十人(唐名通事舍人)　可然之侍任之、攝政關白給內舍人隨身時、殊撰其器召仕

之帶劔之官也、

〔百寮訓要抄〕中務省

内舍人十九人　是は童殿上人などの成る官也、昔は武勇をならはせける程に、内舍人をば坂東の國へ下されけるとぞ、今はかやうの事もなし、いまだ元服せずして殿上のふだにつくは、皆内舍人也、又下﨟も内舍人には成ける、

〔百寮訓要鈔別註〕二内舍人　令ノ定九十人ニシテ、○中略其後ハ百人ニ滿タルコトモアリテ、源平ノ武士ナド多ク内舍人ニ任ズルナリ、故ニ藤家ノ人任ズレバ、是ヲ藤内ト呼ビ、源家ヲ源内、平家ヲ平内ト云習セシヨリ、當代内舍人ニ任ゼザルモノモ、藤内源内等ヲ稱スルニ至レリ、源内兵衞、平内左衞門ナド云シハ、内舍人ニシテ兵衞衞門等ヲ任ジ兼タル人ナリ、

〔吾妻鏡〕三十三延應二年〇仁治元年九月卅日庚寅、御家人等中、任官之輩、不勤行役事、依有其恐、召進用途之由、今日有評定、所謂左右衞門尉分、人別百四左右兵衞尉分、人別七十四、左右近將監分、人別三十四内舍人分人別廿四等也、不供奉行幸等者、爲每年役可進濟云云、且加催促、令致沙汰、可注進交名之旨、所被仰諸國守護人也、

〔藤原家傳〕下武智麻呂藤原左大臣、諱武智麻呂、左京人也、○中略大寶元年、選良家子爲内舍人、以三公之子、別勅敍正六位上、徵爲内舍人、年廿二、詔曰、爾家光濟帝室、勳載策書、今錫此爵、未足爲榮、聞者新制律令、齊整國人、緣有條章、且錫此爵耳、

〔今昔物語〕二十二高藤内大臣語第七

今昔、閑院ノ右ノ大臣ト申ス人御マシケリ、御名ヲバ冬嗣トナム申ケル、○中略其御子數御ケリ、兄ヲバ長良ノ中納言ト申ケリ、次ヲバ良房ノ太政大臣ト申ケリ、次ヲバ良相ノ左大臣ト申ケリ、次ヲバ内舍人良門ト申ケリ、昔ハ此ク止事无キ人モ初官ニハ内舍人ニゾ成ケル、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年十月廿九日乙巳、正三位行中納言橘朝臣岑繼薨、岑繼者贈太政大臣正一位清友朝臣孫、而右大臣贈從一位氏公朝臣之長子也、〇中略天長六年爲內舍人、七年任常陸少掾、

〔三代實錄清和十五〕貞觀十年二月十八日壬午、參議正四位下行右衞門督兼太皇太后宮大夫藤原朝臣良繩卒、良繩字朝台、左大臣內麻呂朝臣孫、而正五位下備前守大津之子也、良繩風容閑雅、擧止詳審、〇中略承和四年爲內舍人、中務省啓令侍東宮、〇中略文德、昔爲內舍人時、諸內舍人皆是豪家年少、奢侈放縱、无所拘束、唯見良繩悉修法度、因而語曰、朝台來則苦我、去而莫不思者、

〔兼胤公記〕寶曆四年十二月六日

一官務內々相尋、內舍人辻故常陸大掾員倫先達而病死候、其節可然相續之人體無之ニ付、兩人へ相尋候處、死後に而も、相應之人體有之候はゞ、官務幷內舍人仲ヶ間より可願申渡候、然ル處此節相應之人體有之候間、相願度候、乍然右願人何とぞ自分之稱號ニ而、相願度由申候、辻ニ而無之外之稱號ニ而、願候而も不被苦哉之由申候、如何可申渡哉、攝政殿江御尋申之處、辻家ニ而無之他之稱號ニ而願候而も、被苦間敷由被命、仍兩人申云、後日又辻家相名乘相續相願候者有之候共、相成間敷哉之由御尋申、內舍人は員數九十人之間、後日辻家相續願候者有之候はゞ、其節可相願候、不苦之由被命、

〔明和新增京羽二重大全一〕官方

內舍人　正六位上神原伊豆守和氣董正　同　正六位上小畠縫殿大允和氣武信　同　正六位上神原治部少丞和氣正茂　同　正六位下西村兵部大錄和氣茂興　同　正六位下原右衞門大志橘忠信　同　正六位下內海近江權大掾和氣從賢　同　正六位下淺井民部大錄和氣正路　同　正六位下辻左兵衞大志源順與

〔延喜式三十三大膳〕親王已下月料

內舍人廿五人、人別鹽二勺、雜腊二兩、鮨三兩、

〔日本後紀平城十七〕大同三年四月甲子、內舍人廿人准二少監物一、賜二馬料一、以レ出二納官物一也、

〔延喜式中務十二〕凡內舍人、歷二十箇年一始載二勞帳一、但雖レ歷二十箇年一、上日不レ滿二二千四百一者、不レ得レ載レ之、

〔蟬冕翼抄〕內舍人外國勞帳

件勞帳ハ中務省注二進之一、相籖也、兩面同ク內舍人勞帳ト書タリ、以レ紙捻一テ閉付也、內舍人ノ勞ヲ何年ト注セリ、

〔延喜式大舍人十三〕凡朝拜日、點二定舍人十人一、爲二權內舍人一、其名簿十二月五日申レ省、

〔延喜式彈正四十一〕凡蕃客朝拜之日、假內舍人得レ著二金銀飾仗一、

〔詠百寮和歌〕內舍人

武士のいきほひの有なりすがた內の舍人やならひ初らん

〔倭名類聚抄官名五〕局　內記局、職員令云、中務省內記、〔宇知乃之流須豆加佐、有二大少一、〕

〔運步色葉集那〕內記

〔拾芥抄中本官位唐名〕內記〔著作郎　起居郎　起居舍人又柱下內史　今世號二柱下一　又內史　又柱史〕

〔都氏文集四狀〕謝二渤海楊太使贈二貂裘麝香暗模靴一狀

殊貺難レ當、豈敢輒受、謹勒奉返、望不レ怪責、不宣、謹狀、

即日　起○居○郎○都良香狀

謹奉太使公節下謹空

〔通典職官二十六〕秘書監

著作郎、漢東京圖書悉在二東觀一、故使三名儒碩學入直二東觀一、撰二述國史一、謂二之著作一、東觀皆以二他官一領焉、蓋有二著作之任一、而未レ爲二官員一也、〈略〉○註　魏明帝太和中、始置二著作郎官一、隸二中書省一、專掌二國史一、〈略〉○註　晉元康二

年、詔曰、著作舊屬中書令、秘書既典文籍、宜改中書著作爲秘書著作、於是改隷秘書、後別自置省、謂之著作省、而猶隷秘書、著作郎一人、謂之著作、專掌史任、

〔通典職官二十一〕侍中

今起居周官有左右史、記其言事、蓋今起居之本、略○註漢武帝有禁中起居、後漢馬皇后撰明帝起居注、則漢起居似在宮中爲女史之任、又王莽時置柱下五史、秩如御史聽事、侍傍記其言行、此又起居之職、自魏至晉、起居注則著作掌之、其後起居皆近侍之臣錄記也、錄其言行與其勳伐、歷代有其職、而無其官、後魏始置起居令史、每行幸宴會、則在御左右記錄帝言及宴賓客訓答、後又別置修起居注二人、以他官領之、北齊有起居省、後周有外史、掌書王言及動作之事、以爲國志、即起居之職、又有著作二人、掌綴國錄、則起居注、著作之任、自此而分也、至隋初、以吏部散官及校書正字有敍述之才者、掌起居之職、以納言統之、至煬帝以爲古有內史外史、今著作如外史矣、宜置起居官以掌其內、乃於內史省置起居舍人二員、次內史舍人下、○註大唐貞觀二年、省起居舍人、移其職於門下、置起居郞二人、顯慶中、復於中書省置起居舍人、遂與起居郞分掌左右、龍朔三年、改爲左右史、略○註咸亨元年、復舊、天授元年、又爲左右史、神龍初復舊、每皇帝御殿、則對立於殿、略○註有命則臨陛俯聽、退而書之、以爲起居注、凡冊命啓奏封拜薨免悉載之、史館得之以撰述焉、

〔史記六十三老子列傳〕老子者、略○中周守藏室之史也、索隱曰、按藏室史乃周藏書室之史也、又張湯傳、老子爲柱下史、即藏室之柱下因以爲官名、

〔西宮記臨時五〕一所々事

內記所在左兵衞陣南、戴令、內記外有史生、有蓋米、傳料、

〔類聚符宣抄十〕內記所

被左大臣○藤原忠平宣偁、史生佐伯音行令書位記間、宜令直內記所者、

延長八年十一月十五日　大外記伴宿禰久永奉

〔日本後紀 十四 平城〕大同元年七月壬子、廢中内記、

〔類聚三代格 五〕太政官符

令定内記四人、

大内記二人

右依舊正六位上官

少内記二人

右定正七位上官、

以前右大臣宣、奉勅如件、

大同元年七月廿一日 〇又見令集解、類聚國史、

〔令義解 四 考課〕明於記事、不失勅旨、爲内記之最、

〔延喜式 十二 内記〕凡内記、身候陣頭掌記錄、

〔百寮訓要抄〕内記局　中務省被官也、詔勅宣命詔書などを、おさめらるゝ所也、

〔西宮記 臨時 二〕下内記局宣旨

詔勅　宣命　位記　表勅答等事

凡内記等本局無殊事之日、必候左近陣、可著將監座程也、

〔傳宣草 下〕一下内記宣旨 内記不候之時、以外記傳仰之、以下准之、

宣命事　詔書事　勅書事　勅答事　神位記事　男女位記事

已上仰内記令作之

臨時勸賞加階敍爵事　院宮被申合爵事　諸人給爵事　諡號事 上卿奉仰、内記令勘其字、令作宣命、　追位記事

〔延喜式 十二 内記〕凡節會及尋常詔旨者、内記預書 〇註略、但臨時詔勅者、承旨、卽内記作詔書畢、納宮、令參議

已上若內侍進於御所、

〔類聚符宣抄 六〕應御所記錄庶事外記內記共預事

右被右大臣宣偁、依令、外記掌勘詔奏、及撿出稽失、內記掌造詔勅、及御所記錄、據此而○而下疑有脫文、所掌稍異、舉綱而論、事合相通、何者內裏行事、大臣所預、至有稽失、誰能撿出、若御所錄事、外記共預、則內裏儀式、豈致違失、自今以後、御所儀例、外記同錄、以備顧問、如不遵奉、彼此有違、預事之人、解却見任、事緣勅語、不得疎漏者、今錄宣旨、立爲恒例、

弘仁六年正月廿三日　參議從三位行左大辨兼備前守秋篠朝臣安人奉

〔康富記〕嘉吉四年○文安元年四月廿六日乙巳、今夜有准后宣下事、○中略職事左中辨令立寄給、被語云、今夜大內記不參也、爲少內記可被參陣、詔書作進事、可被致用意之由被仰之間、予申云、於宣命位記等者、少內記草進、有連綿之例、於詔勅者頗希也、且當座不覺悟之由申了、

〔御昇壇記〕寶永六年六月廿一日御讓位○東山也、○中略

御讓位次第○中略

大臣以官人召大內記、仰可作進勅符之由、次大臣以官人召辨、仰可作進官符之由、次外記覽內舍人差文、大臣披見畢返給、外記退入、次內記持參勅符草、次大臣披見、畢進弓場代、內記持筥相從奏聞、御覽畢返給、次大臣還著陣、仰可令清書之由、內記取筥退出、次大內記進勅符清書、次大臣披見、○中略次職事就軾仰讓位於皇太子、以某朝臣令攝行政事、一如忠仁公舊事、且停太上天皇尊號及服御物、可令作宣命之由、退入、次大臣召大內記、仰宣命之趣、次內記持參宣命草、次大臣披見、畢內記退入、次大臣令職事奏聞、職事還來仰可令清書之由、次大臣召內記、返給宣命草、仰可令清書之由、內記退入、次內記持參清書、次大臣披見、畢進弓場代、內記持宣命相從、奏聞、御覽畢返給、次大臣還著陣、給宣命於內記、仰可候陣腋之由、○下略

〔延喜式內記十二〕凡神社山陵宣命、大臣奉レ勅命二內記一作レ之、內記作了、進二大臣一、大臣給レ使、

凡賀茂祭日宣命、前一日書、付二內侍一奏之、

〔本朝續文粹書狀七〕上啓兩箇所望事

敦光

一式部大輔闕事○中略

立后之後、八社奉幣、并鹿島奉幣告文者、先例大內記所レ作也、而上東門院○一條后藤原彰子御時、式部大輔匡衡朝臣作レ之、准二據彼例一、中宮立后之時、敦光所レ作獻一也、○中略

保安三年十二月九日　大學頭藤原敦光狀

謹上　頭中將殿御直廬

〔古今著聞集神祇一〕保延五年五月朔日、祈雨の奉幣有けり、太宮の大夫師賴卿奉行せられけるに、大內記儒辨さはりありて參らざりければ、宣命をつくるべき人なかりければ、上卿は玄のびて、宣命をつくりて、少內記相永作たるとぞ號せられける、

〔康富記〕嘉吉三年五月九日癸亥、祈雨奉幣也、○中略權辨示云、可レ被レ發二遣祈雨奉幣一也、宣命事可二草進一云云、予申云、大內記故障何事哉、俄可二草進一之條、難治之由返答之處、重被レ示云、大內記在所遼遠也、只今可レ申二沙汰一之由被二仰下一之間、不レ及レ申二柱下一也、早可二用意一之由申レ之、被レ送二內々狀一之間、然者可レ給二御敎書一之旨令レ申、雖レ然宿紙拂底也、追可レ獻二御敎書一之旨、懇被レ申之間、予領掌申了、○中略大內記有レ障之時、爲二少內記一作二進宣命一例、先所見分、貞永以來及二數ヶ度一、近例又連綿之間、俄染二黃紙一、到二其用意一畢、

〔延喜式內記十二〕凡應レ授レ位五位及勳六等以上者、內記執二硯紙筥一昇二殿上一書二位記一、授訖卽以二位案一送二中務省一、神僧尼位記案亦送、但臨時位記、中納言以上奉レ勅、便於二宜陽殿及陣邊一令レ書之、

凡在外官飛驛奏事者、大臣奏畢、卽令二內記作二勅符一、大臣自持昇二殿上一奏覽、畢少納言中務輔內記主鈴等請印、封レ函發遣、事見二儀式一

凡封驛傳勅符式、少納言中務輔主鈴等請印、准飛驛式、內記主鈴封函、官史發遣、事見儀式、

凡雜公文使史生進省

恒例解文進省式

右正月廿日春夏祿文、五月廿一日夏衣服文、六月神今食兆人一人文、同月廿日夏馬料文、七月廿日秋冬祿文、八月十日內記并史生考日行事文、十一月新嘗會兆人內記一人文、同月廿日冬馬料文、又依上日請要劇文、每月申送、

凡賜渤海答書日、內記從使赴于客館、

凡賜渤海國勅書函、蠟上書封字、函上頭書中務省三字、

〔延喜式內記十二〕凡天皇御大極殿視告朔者、諸司大夫進置函於案上、奏者奏畢復本列訖、侍從令舍人喚內記、預候龍尾道階下、內記二人稱唯、昇東西階就版位立、侍從宣曰、進文收之、稱唯案下、搢笏舁案退降東階、出蒼龍樓掖門、公文總送中務省、

凡供奉行幸、遠處內記二人、史生一人、內記分在左右、預被鞍御馬官人之後、馱鈴馬主鈴之前、近處內記一人、史生一人、

〔柱史抄上〕朝覲行幸正月二日有此儀式、又有擇吉日之時、六位內記二人供奉此事、天皇臨幸仙院之後、著上官座、車駕還御之時、未兼御輿之間、上卿以官人召內記、內記入自中門、磬折而立、上卿仰云、其人賜其位、內記微音稱唯退歸、若及數輩之時、下賜折紙、上若坐堂上者、五位居階下奉之、六位居地奉之、若乍立被仰者、各磬折奉之、

〔官職秘抄下〕大內記　多用大業人、或有文章生任之例、諸蔭是也、或有六位內記敍留例、保胤是也、又有二人相並例、朝綱、橘好古、凡授此官輩、殊被撰才幹名譽、　少內記　文章生、紀傳學生預本局舉奏任之、其中以重代者抽補之、是依任民部丞也、以能書輩為最、道風自兵衞尉任之、敏行自內舍人遷之

是也、又文章得業生任之、爲藏人例、近則敦基親俊是也、

〔職原抄上〕內記局

大一人　儒門之中、堪文筆者任之、草詔勅宣命故也、上下諸人位記、悉內記所奉行也、故雖爲中務被官、別云內記局、　少二人　儒胤幷同門徒等任之、

〔百寮訓要抄〕內記局

大內記　詔勅宣命をかく者にてあれば、代々儒者のなる也、故實なき人などは任せられず、和漢の才覺ある人をなさるべし、今は儒家諸大夫などの任ずる也、柱下類林とて百卷計の文あり、是も內記のつかさどる所の詔勅宣命をあつめたる物也、內記をば柱下と申也、　少內記　つかさどる事大內記に同、近代は六位の他下の者ども、史などの常に任ずる也、大略地下の六位の職也、

〔本朝續文粹七書狀〕上啓兩箇所望事　敦光

一式部大輔闕事〇中略

敦光六位之時、任式部丞、〇中略　此外大學頭、文章博士、大內記、皆是儒官之規模也、〇中略

保安三年十二月九日　大學頭藤原敦光狀

謹謹上　頭中將殿御直廬

抑非儒士任大內記者、延喜聖代、〇醍醐　藤原諸蔭是也、以往之例、不可勝計、〇中略

天祿四年正月十五日　從五位上行圖書頭兼丹波介藤原朝臣篤茂誠惶誠恐謹言

〔本朝文粹六奏狀〕請被殊蒙天恩、拜大內記紀伊輔、木工頭源方光申他官所拜淡路國守闕狀、〇中略

〔朝野群載十二內記〕內記局

請殊蒙天恩、因准先例、以學生正六位上三善朝臣爲康、被拜任少內記申他官替狀、

右件爲康、久積編柳之功、新學入木之跡、就中虎館年老、龍門身沈、不擧若人、何勵後輩、望請天恩、因准

先例、以爲康被拜任件官者、將令勤局中之書法、仍勒事狀、謹請處分、

康和二年正月廿一日

正六位上行少內記藤原朝臣泰盛
正六位上行少內記中原朝臣廣俊
正六位上行少內記大江朝臣仲俊
從五位上行大內記藤原朝臣兼衡

學生正六位上藤原朝臣有親誠惶誠恐謹言

請被殊蒙天恩、因准先例、依學道勞、拜任少內記闕狀、

右有親、謹撿案內、携文學、習書法之輩、內記有闕之時、被抽任者、古今之例也、近則惟宗友國、藤原廣兼等是也、而有親言華雖疎、久列翰林之風、義實雖淺、聊學臨池之妙、此時不浴朝恩、何日彰夜學、望請天恩、因准先例、被拜任少(○少字原无、據一本補、)內記闕者、縱抽風情、欲抽露點、有親誠惶誠恐謹言、

大治三年正月廿一日　學生正六位上藤原朝臣

〔康富記〕嘉吉三年五月九日癸亥、祈雨奉幣也、○中略權辨示云、可被發遣祈雨奉幣也、宣命事可草進云云、○中略大內記不參、予爲少內記作進事、於先例者、雖爲勿論、辭申之處、俄被行之上、及闕如之由、職事給度々狀之間作進了、文章不顧鄙拙、其憚且口也、上古者、少內記外記史、各經歷文章生、爲成業者也、中古以來、雖非成業之內記外記、尙被宥仰之間、書獻之條、又以爲流例、定招人之哢者歟、

〔玉海〕文治二年閏七月十四日己未、是日祈年穀奉幣也、○中略上卿右大將、行事右少辨親經、大內記不參、少內記之中、無文章之人、仍親經草宣命、

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年二月甲辰、從五位下大枝朝臣音人爲大內記、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮內卿相模守滋野朝臣貞主卒、○中略貞主身長六尺二寸、雅有度量、涯岸甚高、大同二年春、文章生試及第、五年爲少內記、六年轉爲大內記、

〔三代實錄 十七 清和〕貞觀十二年二月十九日辛丑、參議從三位春澄朝臣善繩薨、(○中略)七年(○天長)對策、詞議甚高、式部省評處之丙第、是年春、內記闕、帝本自重士、虛釋此職、以俟善繩、至于夏五月、善繩擢第、六月遂補少內記、文路榮之、尋轉大內記、

〔都氏文集 四〕請以所帶內記職讓與諸才者狀

右良香、自任內記、于今十年、准之往例、實爲過分、(○中略)伏見伊勢大掾滋野良幹、權少掾藤原春香、出雲權掾高岳五常、土佐權掾大藏善行等、並文富春華、學收秋實、若插筆麟閣、洗硯鳳池、則左右得人、起居傳美、畫餠不咲、鏤氷□□謹言、

元慶三年二月一日　　文章博士從五位下兼行大內記越前介都朝臣良香

〔康富記〕嘉吉四年(○文安元年)正月十六日丙寅、大內記菅原在豐朝臣、去六日敍從三位、以其子在治(從五上、本名在嗣)被任大內記、今夜爲宣命書進藏人左少辨資重被宣下云々、

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕(○中略)

平田　內記局少職孚

〔慶應元年都仁志喜 二下〕外記方

少外記(正五位下少內記)　山口兵部大丞中原昌言　　少內記(正六位上)平田中務大錄職明

〔延喜式 四十五 左右近衞〕凡出居侍從及內記上日、於陣給之、其內記聽度紫宸殿階下、

〔康富記〕嘉吉四年(○文安元年)二月五日乙酉、是日被行仗儀、今年甲子當革命否、幷改元定等也、(○中略)今日少內記不參也、員職予等、各不參陣、仍少內記代事、六位外記史之間可勤歟、任例六位史可勤仕之由、新宰相(大內記父)尹大納言(傳奏)被申之、奉行職事、大不可存知之由被申之、仍外記史各申子細、大內記少內記、共以不參時、可補公儀之間可勤代也、大內記、幸參陣之時、可勤內記代之條不叶理、(○中略)然間大內記新相公等承伏、遂以從此事了、

内記史生

〔拾芥記〕永正十六年八月四日、就御即位〈〇後柏原〉儀、各有其下行、大内記叙位就可參陣五百疋配當云々、

〔詠百寮和歌〕大内記

雲の上の事をゑるせるつかさをば柱を折し人のみぞゑる

〔日本後紀〈十四平城〉〕大同元年七月庚申、置内記史生四員、

〔日本後紀〈十七平城〉〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〈〇中略〉減内記二員、

〔延喜式〈十八式部〉〕凡諸司史生者、〈〇中略〉内記二人、〈〇中略〉待宣旨補任、

〔延喜式〈十一太政官〉〕凡内記史生、勞滿十年者、准太政官史生任諸國目、

〔延喜式〈十二内記〉〕凡雜公文使史生進省、

監物

〔日本書紀〈三十持統〉〕七年四月辛巳、詔、〈〇中略〉監物(オロシモノヽツカサ)巨勢邑治、雖物不入於己、知情令盜之、故降位二階、解見任官、

〔下學集〈上官位〉〕監物(ケンモツ)〈城門郎〉

〔拾芥抄〈中本官位唐名〉〕監物〈城門郎又主監　殿中侍御史〉

〔唐六典〈八門下省〉〕城門郎四人從六品上、〈〇中略〉城門郎掌京城皇城宮殿諸門開闔之節、奉其管鑰而出納之、

〔續日本紀〈二文武〉〕大寶元年二月丁未、詔始任下物職、

〇按ズルニ、下物職ハ、卽チ監物ナリ、持統天皇紀ノ訓ヲ視テ知ルベシ、而シテ此ニ始任トアルハ、一タビ廢シテ再ビ置キシニヤ、

〔儀式〈六〉〕同日〈〇正月二日〉拜賀皇太子儀

當日后宮禮畢、掃部寮設式部輔已下座於監物曹司東道、

〔日本紀略〈一醍醐〉〕昌泰二年六月四日丙寅、監物局枇杷花、

〔續日本後紀 七仁明〕承和五年八月己亥、霹靂於監物前柳樹、

〔北山抄 三拾遺雜抄〕射禮儀

幔門北設外辨座、(中略)裝束記文云、監物局門、西去三丈立之、

〔延喜式 十二監物〕年料所請、馬荎十領、藺笠十枚、(並官人料)登美表八領、(囊鎰料、已上並請內藏寮、)鍬一口、簀二枚、明櫃一合、筥一合、缶一口、土器卅枚、

〔日本後紀 十七平城〕大同四年二月己巳、加少納言一員、中監物二員、少監物二員、

〔類聚國史 百七職官〕弘仁四年十月甲辰、公卿言、據撿職員令、少納言三員、中監物四員、少監物四員、而大同年中量事繁劇、令員之□□更加少納言一員、中監物一員、(○一員恐二員誤)少監物二員、古今異宜、增減隨時、伏望省減後加、一依令條、許之、

〔令義解 四考課〕監察不怠、出納明密、爲監物之最、

〔百寮訓要抄〕監物局　官鎰をおさむる也

大監物　官鎰、鈴印、使符、飛驛の函などの事をつかさどる、

〔詠百寮和歌〕大監物

すゞをしで幢までもおろし物預り申つかさなるべし

〔延喜式 十二監物〕凡請諸司管鎰者、毎旦監物并典鎰等、共候延政門外、近衛開門、大舍人就闡司(掃部寮設座)叫門二聲、(其詞曰、美可度能都可佐、)闡司問曰、誰、大舍人稱姓名曰、鎰給(巨牟登)監物姓名、典鎰姓名等候門(登)申、闡司進、就版位奏、其詞曰、鎰給(巨牟登)監物姓名、典鎰姓名等叫門故(爾)申、勅曰、令奏、闡司稱唯、復本座宣曰、令姓名等奏、大舍人共稱唯、即監物引典鎰大舍人等、入共就版位、(但大舍人留於左掖門、)監物奏曰、司々(乃)賜物下(牟)鎰給(登)申、勅曰、取之、共稱唯退出、典鎰更引大舍人等、進就鎰櫃下、出管鎰授大舍人、退出轉授監物、夕時進鎰儀亦如之、其奏詞曰、給(禮留)司々(乃)鎰進(登)申、勅曰、收之、即共稱唯退出、但國忌并奉伊勢大神幣

帛日、及諸齋日不舉聲奏、只請鎰狀告於闈司、申於內侍、內侍微聲奏、訖卽闈司宣曰、直入、卽監物典鎰等入就內侍所、內侍宣曰、給之、卽監物典鎰等微聲共稱唯、退却就鎰櫃前、典鎰引大舍人等開櫃出鎰、並如上儀、

凡請進管鎰、當降雨之日、於承明門擅上奏之、

〔西宮記十月〕一旬　還宮後儀

延喜八年二月二日、仰清貫、仰監物令奉仕鎰奏、清貫云々、監物申云、前日五位奏之、而今日不參、仰云、式不指五位、又無宜旨、隨候六位可奏者、

〔西宮記十月〕同日〈天慶八年十月一日〉御記、〈九〉大外記公忠宿禰申云、大監物等申病由不參、仰云、非重者可參入之由、重可遣仰者、抑六位監物、御鎰奏之例有乎、申云、曾無其例者、但內裏式載監物奏之由、不別大中少、先年太政殿下仰云、大監物不候之日、六位監物奉仕御鎰奏有何事哉云々、令師尹朝臣奏大監物不候之由、仰云、大監物不參者、可止御鑑奏者云々、

〔延喜式十二監物〕凡應出納大藏物者、少辨已上一人、中務民部大藏三省輔各一人、監物一人、主計助已上一人、同會就諸司廳、本司錄申曰、雜物出納登申、〈絁絹綵帛絲綿布錢等類〉辨判命之、錄稱唯、主鎰申曰、給鎰止申、監物命曰、給之、卽稱唯受鎰、諸司共赴立正藏前、主鎰引藏部等申曰、開藏登申、監物命曰、開之、卽稱唯令藏部開、諸司撿挍出納、了卽監物加封、主鎰申曰、事畢、諸司乃還、其出納鐵鍬等類、及自餘諸司物者、官史一人、三省錄各一人、監物及主計屬各一人〈若錄屬不在者、丞允代之、〉倶會出納、

凡奉口勅出大藏物者、本司奉勅經中務省、省輔一人、監物一人、與本司輔已上一人相共出之、〈二省輔不在者、丞代之、〉三司共入奉進、卽錄物數、三司同署、便附本司申送辨官、其出鍬鐵等物者、省錄已上一人、監物一人、與本司錄已上二人、共出奉進、申送於官、亦同上例、

凡宿直者、大監物以下、少監物以上二人、

凡官人請暇文、有見直五人以上者、得互判許、若不滿此數、請省處分、

〔官職秘抄　下〕監物局

大監物、諸大夫任之、近代諸道者任之、兼受領例、平中範　少監物　藏人所、院宮給、臨時内給、文章生任之、皆撰重代侍、諸道得業生任例、三善爲長、菅原順成、以御書所書畢勞任例、坂上是則

〔職原抄　上〕監物　六位侍任之

〔百寮訓要抄〕監物局

大監物〇中略　地下の五位以下の成る官也、近頃は殊零落す、侍なども なる也、

〔續日本紀　二十　孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、從五位下田口朝臣御直爲大監物、

〔文德實錄　九〕天安元年二月甲申、田口朝臣統範、藤原朝臣三直等、爲大監物、

〔類聚三代格　十五〕太政官符

改給諸司要劇幷番上粮事

監物〇中略

已上七司以米給〇中略

元慶六年四月十一日

〔延喜式　三十五　大炊〕監物日米八升八合〇中略

右每日料、依前件熟食充之、

〔續日本紀　二十四　淳仁〕天平寶字七年十月丁酉、前監物主典從七位上高田毗登足人、〇中略坐殺高田寺僧、下獄奪封、

監物主典

〔日本後紀　十七　平城〕大同三年八月癸酉、廢監物主典、

〔職原抄　上〕中務省

監物史生

主鈴

監物略○中　主典相當從七位上

〔拾芥抄中本官位相當〕大初位上　監物主典

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、略○中監物中宮職各八人、

〔延喜式三十五大炊〕親王已下月料

監物史生四人、略○中

右依前件人別日米一升

〔拾芥抄中本官位唐名〕主鈴符寶郎

〔唐六典八門下省〕符寶郎四人從六品上、略○中

符寶郎掌天子之八寶、及國之符節、辨其所用、有事則請於內、既事則奉而藏之、八寶、一曰神寶、所以承百王、鎭萬國、二曰授命寶、所以修封禪禮神祇、略○註三曰皇帝行寶、答疏於王公則用之、四曰皇帝之寶、勞來勳賢則用之、五曰皇帝信寶、徵召臣下則用之、六曰天子行寶、答四夷書則用之、七曰天子之寶、慰撫蠻夷則用之、八曰天子信寶、發蕃國兵則用之、

〔百寮訓要鈔別註二〕按ニ監物ノ次ニ、主鈴典鎰ノ二局アルベキナルヲ、洩シテ記シ玉ハザルモノハ、當時二官共ニ廢官ノ如ク、任ズル人モナキユヘニ筆ヲ闕玉ヒタルベシ、職原抄ニモ、主鈴典鎰ノ二官、近代強不任之トアリ、是ヲ以テ其任ゼシ人ノナキ事ヲ推シ考ルナリ、故ニ印本職原抄ニハ、監物局ヲ一字上ゲテ書キ、六位侍任之トシテ、又並ニ主典ヲ記シ、主典ハ令外ノ官ナリ又主典ノ並ニ主鈴典鑰ト連ネ書テ、自然ト官列ヲ混亂シテ印行セシハ、當時任ズル人モナク、名モ實モナキユヘナリ、然ルニ近世ハ位記ニ御證印ヲ加ヘラルヽ事アルヲ以テ、內豎頭タル渡邊出雲守ガ家、故アリテ御璽ヲ預リ掌ルニヨテ、世ニ主鈴ヲ兼官トシテ、少納言ニ屬シテ、少カニ其掌リヲ存スルナリ、且典鑰ノ事ハ、當時一向ニ沙汰ナキコトニナリタリ、

〔延喜式主鈴十二〕年料所須、朱沙十二兩、膠八兩、(位記料)練絲三兩、苧二斤、貲布一丈、(數印板料)柳筥二合、(納印板料)赤土一斗、年終申省請受、但銅盤二口、印板漆案二脚、緋氈二枚、並隨損請換、

〔延喜式主鈴十二〕凡下諸國公文、少納言奏請印狀、訖主鈴印之、但勅符幷位記、少納言印之、

凡行幸從駕、內印幷驛鈴傳符等、皆納漆籠子、主鈴與少納言共預供奉、其駄者、左右馬寮充之、

凡飛驛幷驛傳函、及遣渤海國勅書、太政官牒者、主鈴封之、(勅書與內記共署之)

〔官職秘抄下〕主鈴　典鎰　已上多以內豎所擧奏任之、或以所々奏任之、往年爲昇進官、近爲內豎奏時之職、

〔職原抄上〕主鈴(大少)　近代强不任之　典鑰(大少)　同前

〔文德實錄六〕齊衡元年二月辛未、安倍朝臣有道爲大主鈴、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應以官田給主鈴典鑰等要劇料事

山城國十六町八段百十二步

右得中務省解偁、主鈴典鑰等解偁、件要劇米、停給京庫、以官田所請如件者、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

寬平元年十月廿三日

〔延喜式大炊三十五〕主鈴(日米三升二合○中略)

右每日料依前件熟食充之

〔延喜式大膳三十三〕主鈴典鑰、滓醬二斗一升、(小月二斗三升八合)

〔延喜式掃部三十八〕凡主鈴典鑰等座料、以古弊疊六枚、每年終充之、

〔薩戒記〕應永卅三年十一月四日癸巳、大外記師勝朝臣來談雜事條々、雖無其要注之、○中略

一去月十九日請印政如例、〇中略
一同日、内文主鈴不參、此事師勝無沙汰歟之由、有沙汰云々、尤難堪事也、〇中略件主鈴(内豎行廉兼之)常祗候内裏(如此之類、多被召置禁中也、)間忘却歟云々、此上更非師勝之緩怠歟云々、
〔友俊記〕延享四のとし五月二日、〇中略今上(〇櫻町)御讓位、新主(〇桃園)七歳にならせたまふ、〇中略主鈴印の辛櫃をかき出す、少納言鈴を奏す、

主鈴直丁

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年七月十三日丙午、是日加主鈴直丁一人、

典鑰

〔拾芥抄中本官位唐名〕典鎰(宮圖局内)
〔日本書紀三十持統〕七年四月辛巳、詔、〇中略典鎰置始多久、與菟野大伴亦坐贓、降位二階、解見任官、
〔續日本後紀四仁明〕承和二年二月戊子、河内國人右少史掃守連豐永、少典鎰同姓豐上等、賜姓善世宿禰、
〔延喜式十二典鑰〕凡諸司藏庫鎰匙、每日與監物共且請夕進、(圖書寮、民部省、大藏省、掃部寮、大膳職、主殿寮、大炊寮鎰、)但兵庫鎰、臨時請進、
凡鎰袋、皆以牛革縫造、若有損破者、申省請換、
凡納御鎰辛櫃匙、納典鎰局、
〔延喜式三十五大炊〕典鑰(日米三升二合〇中略)
右每日料、依前件熟食充之、

史生

〔續日本紀六元明〕和銅六年十二月庚子、始加中務省史生十員、
〔類聚國史百七職官〕大同三年三月戊申、省中務省史生十員、
〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、〇中略省中務省史生六人、
〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略中務省廿人、

〔延喜式三十大炊五〕親王已下月料
中務史生十八人、省掌一人、〇中略
右依前件、人別日米一升

省掌
〔延喜式十八式部〕凡内外諸司官掌省掌、〇中略各二人、但中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正、中宮、修理等、並待本司移補之、自餘者判補之、
凡内外諸司史生官掌省掌、〇中略等、以雜色人補之、並把笏、
〔類聚國史百七職官〕大同元年十月壬申、中務、〇中略等六省省掌、准式部兵部二省聽把笏、

扶省掌
〔延喜式十八式部〕凡中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正等省臺、正員之外、扶省掌臺掌、以入色者各置二人、令習儀式、皆待本司所送名簿、乃補之、若正員有闕者、以扶省掌補之、
〔三代實錄十八淸和〕貞觀十二年六月廿八日己酉、置中務省扶省掌二員、

使部
〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略中務省卅人、

用度
〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年四月戊寅、近江國乘田廿八町、賜中務省、
〔類聚國史百七職官〕天長七年十月乙丑、宮城内御井町内南方半町、給中務省厨地、

古事類苑

官位部十二

令制官職八

中宮職 皇后宮職 皇太后宮職 太皇太后宮職
紫微中臺 坤宮官 〔併入〕

中宮職ハ皇后、皇太后、太皇太后ノ三宮職ノ總稱ニシテ、啓令ヲ吐納シ、及ビ雜務ヲ行フヲ掌ル、然レドモ同時ニ總稱ヲ以テ唱フルトキハ、相混ズルノ患アルヲ以テ、實際ニハ皆之ヲ別チテ、皇后宮、皇太后宮、太皇太后宮等ト云ヘリ、而シテ中宮ヲ以テ別ニ一種ノ稱ト爲シ、或ハ皇太夫人ヲ稱シ、或ハ皇后ヲ稱シ、兩后ヲ並立スルニ及ビ、其一ヲ中宮ト稱シタリ、故ニ職ノ名モ之ニ從フ、孝謙天皇天平勝寶元年、皇后宮職ヲ改メテ紫微中臺ト稱シ、淳仁天皇天平寶字二年、改メテ坤宮官ト稱セシハ、皇母ヲ尊崇スルノ餘ニ出デシモノニテ、一時ノ稱ナリ、帝王部ニ皇后篇アリ、參看スベシ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕職 職員令云、○中略 中宮職、(奈加乃美夜乃豆加佐)

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

中宮職(ナカノミヤノツカサ)

〔令義解一職員〕中宮(謂皇后宮、其太皇太后皇太后宮、亦自中宮也、)職

廳舍

〔日本紀略淳和〕天長九年十二月甲子、皇后(○正子内親王)移御后宮職東院、當誕月也、

〔西宮記正月〕節會(○元日)

九記云、天慶七年十月九日仰云、延喜十一年正月一日、日蝕廢務、親王公卿侍從大夫等數十人、來向

臺印

職曹司、盃酌頻下、已及酩酊、召春宮御服、絹、阿波給集會侍從已上、是依元慶例也、

〔日本紀略村上四〕應和二年十月廿日甲辰、中宮〇藤原安子遷座職曹司、自弘徽殿遷座也、

〔日本紀略冷泉五〕康保四年十月七日壬戌、於左大臣〇藤原實賴職曹司、被行除目、

安和元年二月十五日戊辰、太政大臣〇藤原實賴於職曹司、被定諸司諸寺別當、十一月廿二日辛丑、叙位儀、太政大臣〇藤原實賴於職曹司被行也、

〔日本紀略圓融六〕貞元元年五月十一日丁丑、子刻内裏有火、火出自仁壽殿西面、但中重外舍屋不燒、天皇出自玄輝門、御桂芳坊、依火氣熾、天皇遷御職曹司、中宮〇藤原媓子皇太子御縫殿寮廳、

〔百練抄圓融四〕天元三年十一月廿二日、内裏燒亡、天皇御職曹司、

〔日本紀略一條十〕長保三年十一月十八日乙酉、今夜亥刻、内裏燒亡、天皇渡御職曹司、次渡御小安殿、其間加修理、寅刻又歸御職曹司、

〔枕草子四〕しきの御ざうしにおはしますころ、〇一條后藤原定子こだちなどはるかに物ふり、屋のさまも高う、けどをけれど、すゞろにおかしうおぼゆ、もやは鬼ありとて、みなへだて出して、みなみのひさしに御きちやうたてゝ、またひさしに女房はさふらふ、このゑのみかどより左衛門の陣に入給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかければ、おほさきこさきと聞つけてさはぐ、

〔三代實錄陽成三十〕元慶三年九月十一日戊戌、親王公卿、於中宮職廳事賜飲酒之後、賜五位以上及外記等祿、各有差、

〔延喜式中宮十三〕凡四月中酉、奉賀茂上下松尾三社幣使者、〇中略

右依前件、男官料請大藏内藏等省寮、但賜馬人幷女使料、以職庫物充之、

〔三代實錄陽成三十〕元慶元年閏二月廿七日己亥、中臺印奉充中宮職、元此印在太皇太后五條宮、今有勅奉之、

職員
職掌

〔令義解 一職員〕中宮（謂皇后宮、其太皇太后、皇太后宮、亦自中宮也、）職

大夫一人、掌吐納啓令、（謂納啓於上、吐令於下也、）亮一人、大進一人、少進二人、大屬一人、少屬二人、舍人四百人、（謂分番宿直等事、一准大舍人、）使部卅人、直丁三人、

〔令義解 一官位〕從四位階○下 中宮大夫　從五位階○下 中宮亮　從六位階○上 中宮大進　從六位階○下 中宮少進　正八位階○下 中宮大屬　從八位階○上 中宮少屬

〔二中歷 七官名〕中宮大夫（内侍省内侍 内宮主人）長秋監　亮（内侍省常侍 内宮監）内常侍　進（内給事 内宮判事）　屬（内侍伯 内侍省主事 内宮錄事）

〔拾芥抄 中本官位唐名〕中宮大夫（長樂令 唐内侍省）（長秋監 内宮主人）　亮（内侍省常侍 内宮監）　進（内侍省 内侍伯）（内給事 内宮判事）

屬（内侍主事 内宮錄事）

〔唐六典 十二内侍省〕内侍四人從四品上、（中略）○漢書百官表云、（中略）○詹事掌皇后太子家、屬官有中長秋、私府諸宦官皆屬焉、成帝省併屬大長秋、又曰將行、秦官、景帝更名大長秋、（中略）○後漢常用宦者、掌奉宣中宮命、（中略）○後魏有大長秋、又置内侍長四人、掌顧問拾遺應對、

補任

〔本朝文粹 五表〕爲四條大納言請罷中納言左衞門督狀　江匡衡

皇太后去年春以還、霧露屢侵、口膳乖和、蒙猶子之恩、兼爲長秋之監。。。。

〔官職秘抄 下〕中宮職（諸宮准之）

大夫　權大夫　可然上達部任之、諸大夫補例、（泰憲）　亮　華族四位諸大夫、或公達、或大業者任之、五位例、（始自乘方）自進轉任例、（仲實、清實、）　權亮　英雄四位公達任之、五位又任之、多爲近衞次將之兼官、　大進

權　可然五位諸大夫任之、諸衞佐一人、必在此列、四位進例、（始自貴眞）　少進　權　五位多任之、於權少進者以可經藏人者任之、有六位進二人例、（平隆時、藤眞輔、）　屬　大 小　五位一人、經外記史民部丞者任之、六位中

舍人

必以當職史任之、凡自大夫至于屬、皆本宮請也、

〔職原抄上〕中宮職

中宮者、卽皇后也、本朝並置二宮、太無其謂、然而光仁御宇、被置此職以來、代々並置、仍今號四宮也、四宮中、中宮皇后宮之司、尤擇其人、太皇太后等宮司、强不淸撰、但可依時事也、　大夫一人　近代華族納言等兼之　權大夫一人　同納言參議、及三位已上兼之、名家雖有其例、不打任事也、近代尤被擇其人、　亮　名家四位中擇其人任之、知職中之諸事故也、　權亮　花族四位五位中少將等兼之

大進一人　名家五位任之　少進權　諸大夫五位六位任之　屬　院主典代官史生等任之

〔續日本紀聖武十二〕天平九年十二月丙寅、賜中宮〇聖武母后藤原宮子孃職官人六人位各有差、亮從五位下下道朝臣眞備授從五位上、少進外從五位下阿倍朝臣虫麻呂從五位下、外從五位下文忌寸馬養外從五位上、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年七月丁卯、從四位下佐味朝臣虫麻呂、爲中宮〇淳仁御生母當麻山背大夫、備前守如故、從五位下佐々貴山君親人爲亮、

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年五月乙亥、始置中宮〇桓武御生母高野新笠職、以參議宮內卿正四位上大伴宿禰伯麻呂爲兼中宮大夫、衞門督如故、從五位下大伴宿禰弟麻呂爲亮、左衞士佐如故、外從五位下伊勢朝臣水通爲大進、外從五位下上毛野公薩摩、外從五位下物部多藝宿禰國足、並爲少進、

〔大日本史職官二〕按續日本紀、聖武帝稱所生皇太夫人官職爲中宮職、則太夫人亦稱中宮也、又按本書桓武帝卽位、爲皇太夫人高野氏始置中宮職、然自天平以降、中宮官人往々見于本書、而今謂始置者可疑、顧本職非常置官、有中宮則置之、無則廢之、蓋所謂始置者、爲皇太夫人始置之之謂、而非謂此職始于此也、附以備考、

〔令義解五軍防〕凡五位以上子孫、年廿一以上、見無役任者、〇中略申太政官、撿簡性識聰敏、儀容可取、充內

舍人、〇中略以外式部隨狀充大舍人、及東宮舍人、(謂中宮舍人亦准此也)

〔延喜式十八式部〕凡補諸宮舍人者、中宮入色一百五十人、外位一百人、白丁一百五十人、〇中略其外位隨解闕補之、但白丁舍人未敍之前、无故不上之替、聽補白丁、其敍位之後、依病不上、幷遷他色之替、以雜色人補之、

凡中宮春宮白丁舍人、幷三色資人者、以本貫勘籍解文補之、

凡中宮春宮舍人、非有本司許文、不得遷他職、

〔延喜式十八式部〕凡諸外考者、經一選然後、聽遷中宮職舍人春宮坊舍人、其舍人遭喪者、奪情補之、遷補之後、未經一選、无故及依病不上者、直還本色、

凡中宮春宮舍人、及三色資人等、待考帳放出、

〔延喜式十八式部〕凡諸司番上把笏者、不與公驗、其舍人使部伴部之類、皆與公驗、其式如左、

式部省

位姓名(年若干、某國某郡人、)

右人元某色、今補其司某色、任爲公驗、

年月日　　錄位姓名

輔位姓名

右印署訖、告知本司、令附考帳、仍卽給與、隨身爲驗、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、　十月甲戌、王臣以下至〇中略中宮舍人、〇中略賜祿各有差、

天平元年八月癸亥、天皇御大極殿詔曰、〇中略改神龜六年爲天平元年、〇中略其賜物、〇中略中宮職舍人諸司長上及史生、各布二端、

女孺

〔延喜式 中務十二〕宮人時服

中宮女孺九十人

右○中略 女孺已上、絹三丈、冬加絹三丈、綿二屯、

史生

〔延喜式 式部十八〕凡諸司史生者、○中略 監物中宮職各八人、○中略 待宣旨補任、

凡内外諸司史生、○中略 以雜色人補之、並把笏、

〔延喜式 式部十八〕凡主計主税勘解由等寮使史生、勞十年爲限、以外諸司史生、廿年爲限、並補諸國史生、

職掌

〔延喜式 式部十八〕凡○中略 職掌、坊掌、寮掌、使掌、司掌各二人、但○中略 中宮○中略 待本司移補之、

凡内外諸司、○中略 職掌○中略 等、以雜色人補之、並把笏、

使部

〔延喜式 式部十八〕凡諸司使部者、○中略 中宮職廿人、

作器手

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

合作器手陸人 作木器一人 作土器五人

右太政官、今月六日下宮内省符偁、造皇后宮供御器手如件、省宜承知、隷内膳司給時服、

弘仁六年八月七日

中宮官屬

〔榮花物語 月宴 一〕天德二年七月廿七日にぞ、九條殿、○藤原師輔 の女御、きさきにたゝせ給、○村上后 藤の安子申て、今は中宮と聞えさす、中宮大夫には、みかどの御はらからの高明の親王と聞えさせし、いまは源氏にて、例人になりておはするぞなり給にける、

〔紫式部日記〕午の時○寛弘五年九月十一日 に空はれて、あさひさし出たる心地す、たいらかにおはします○一條中宮藤原彰子御産 うれしさの、たぐひもなきに、おとこにさへおはしましけるよろこび、いかがはなのめならん、○中略 宮大夫○中宮大夫藤原齊信 ことさらにも、ゑみほこり給はねど、人よりまさるうれしさのをのづからいろにいづるぞ、ことはりなる、

〔平治物語 一〕源氏勢汰事

一門ニハ先左馬頭義朝、○中略次男中宮大夫進朝長、○下略

〔尊卑分脈 四 源氏〕義朝――朝長 左衛門尉五位中宮少進

〔達幸故實抄 三〕下﨟依勤執筆上首起座退事

應保二二十九日、立后○二條后藤原育子宮司除目清書、○中略

清書書樣

太政官謹奏

中宮職　大夫正二位藤原朝臣兼實兼　權大夫正三位藤原朝臣實長兼

應保二年二月十九日

已上一紙用紙屋紙

太政官謹奏

中宮職

亮正四位下藤原朝臣邦綱兼　權亮正四位下藤原朝臣忠親兼

大進正五位下藤原朝臣俊經兼　權大進從五位上高階朝臣隆行兼

權大進從五位上藤原朝臣光長兼　權少進正六位上藤原朝臣季佐

大屬從五位下大江朝臣盛親　少屬正六位上三善朝臣康信兼

權少屬正六位上清原眞人能景兼

應保二年三月十九日

以上一紙同紙也

〔仁部記〕弘長元年八月廿日庚戌、今日女御○藤原嬉子有立后○龜山中宮事、○中略

宮司除目　大夫源雅忠　權大夫藤隆顯　亮藤隆保　權亮藤公房　大進藤賴親　權大進同高朝　同俊定　少進平輔兼　權少進藤定世　大屬安倍資國　少屬中原職成　權少屬中原國民

〔立坊立后記〕天和二年十二月六日、當今〇靈元ノ女御藤房子〇鷹司敎平女准后宣下アリ、〇中略同三年二月十四日、立后ノ片節會ヲ行ハル、〇中略中宮職大夫ハ從二位藤原朝臣實通兼之、權大夫ハ正三位西園寺中納言兼敎兼之、亮ハ高倉從四位上藤原朝臣永福兼之、權亮ハ大炊御門從四位上藤原朝臣信名兼之、但依所勞廣幡左中將豐忠代之、大進ハ小河坊城正五位上藤原朝臣俊方兼之、權大進ハ交野彈正少弼從五位上平朝臣時香、少進ハ豐岡從五位上侍從藤原朝臣弘昌兼之、權少進慈光寺正六位源朝臣宣仲兼之、大屬ハ從五位下中原朝臣職永、少屬ハ正五位下賀茂縣主有顯、權少屬ハ從六位下宗岡朝臣信行也、

〔中右記〕永長元年十二月廿六日壬午、今夕被補中宮〇堀河后篤子內親王職事五人、予〔藤原宗忠〕忠敎朝臣、顯實朝臣、宗輔以上殿上人、爲宣、

〔朝野群載〕四朝儀諸宮雜人所望

中宮〇堀河后篤子內親王職召使長淸原國助解申請應裁事〇中略

康和二年正月廿三日　召使長淸原國助

〔法成寺攝政記〕寬弘五年三月三日甲子、參大內、中宮〇一條中宮藤原彰子侍長明範解却、是依庚申夜亂行也、

〔紫式部日記〕御ゆどのは、〇後一條御產ノ時とりの時とか、〇中略そのおけすへたるだいなど、みなしろきおほひしたり、おはりのかみちかみつ、宮〇一條中宮藤原彰子のさふらひのおさなるなかのぶきて、みすのもとにまいる、

〔日本紀略〕十二三條長和二年十二月廿三日庚辰、中宮〇三條后藤原姸子少進藤原惟信爲敵被打、翌日死去、其敵者同宮侍長藤原惟兼也、

〔源平盛衰記 十〕中宮御產事

治承二年十一月十二日、寅時ヨリ、中宮〇高倉后平德子御產ノ氣御座ト聞ケリ、〇中略佛師法印召レテ、等身ノ七佛藥師、幷五大尊ノ像造立セラル、御誦經物ニハ御劒御衣、諸寺諸社ヘ被進、御使ハ宮ノ侍、ノ中ニ、有官ノ輩勤之、

〇

〔續日本紀 聖武十〕天平元年八月戊辰、詔立正三位藤原夫人〇聖武后藤原安宿媛爲皇后、　九月乙卯、從四位下小野朝臣牛養爲皇后宮大夫、

〔續日本紀 聖武十二〕天平九年十二月壬戌、外從五位下阿倍朝臣虫麻呂爲皇后〇聖武后藤原安宿媛宮亮、外從五位下中臣熊凝朝臣五百島爲員外亮、

〔續日本紀 光仁三十一〕寶龜二年正月辛巳、以式部大輔從四位上藤原朝臣家依爲兼皇后〇光仁后井上內親王宮大夫、中衞員外中將從四位上伊勢朝臣老人爲兼亮、

〔續日本紀 桓武三十七〕延曆二年四月丙寅、左大辨從三位佐伯宿禰今毛人爲兼皇后〇桓武后藤原乙牟漏宮大夫、大和守如故、近衞少將從五位下笠朝臣名麻呂爲兼亮、

〔續日本紀 桓武三十九〕延曆五年正月己未、從五位下藤原朝臣縵麻呂爲皇后宮大進、

〔日本後紀 嵯峨二十四〕弘仁六年十月甲辰、制皇后宮職舍人者、一百五十人、以白丁補之、除此之外、以入色補之、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應置職掌二人事 並令把笏

右得皇后宮〇嵯峨后橘嘉智子職解偁、職務繁劇、人物難整、望請准春宮坊、置件職掌者、中納言兼左近衞大將從三位行春宮大夫陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅依請、

弘仁九年三月廿八日

〔小右記〕天元五年三月十一日癸卯、今日以女御從四位遵子、〇藤原氏、圓融后立皇后、〇中略今夜奉令旨以藤詮子爲宣旨、是皇后大夫妻、中宮姉、以藤原洊子爲御匣殿別當、參議佐理妻、以藤原近子爲内侍、信濃守陳忠妻、以下官〇藤原實資及右中辨懷遠爲侍所別當、大進輔成朝臣奉令旨、男女房簡今夜始書、宣旨、内侍著簡、依無先例不著、御匣殿別當、少將乳母、長峯美子、同著簡、下官、右中辨、侍所長藤原長忠、同望弘等、同著簡、而以四人付簡、頗有詞忌、仍加阿波守公任朝臣侍所長、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年閏三月十一日、夜藏人隆重恐懼、小舍人近國被下陣、又中宮侍盛家給左衞門弓場、侍長某前長宮内丞元助被下本宮廳、一夜中宮侍與藏人達於瀧口陣邊有小論事、彼是已及放言、仍有此事也、衆口嗷々不可委記、

〔保元物語〕一左大臣殿上洛事附著到事

新院〇崇德ノ御方ヘ參ケル人々ニハ、〇中略中宮〇崇德后藤原聖子侍長光弘、〇中略皇后宮〇近衞后藤原多子侍長忠綱、〇中略都合其勢一千餘騎トゾ註シケル、

〔古今著聞集〕十五闘爭仁平元年九月七日、賀茂行幸に樋口東洞院にて、左大臣のうつし馬の居飼雜人をはらひける程に、太刀をぬきたる者二人、おとゞの馬の前にはしり來けるを、わづかに一丈あまりにやと見へけるに、隨身左近府生秦公春馬を打入てへだてけり、〇中略其主人二人大夫尉將義が郎從のよし名乘けれ共、まことは皇后宮〇近衞后藤原多子の侍長源有治が郎從成けり、

〔東大寺正倉院文書〕一皇后宮〇聖武后藤原安宿媛職解　申請公粮事

合直丁陸人　立丁三人　廝丁三人

應請米壹斛漆斗肆升　鹽壹升漆合肆勺　布三段

右、來五月廿九箇日之粮、所請如前、以解、

天平十七年四月十八日

從八位下守少屬川原藏人假

正六位上行少進茨田宿禰枚麻呂

勘少錄桑原忌寸

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月廿五日壬午、宣詔内外云、宜改先中宮〇仁明后藤原順子職、爲皇太后宮〇清和生母皇太夫人藤原明子職、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年二月廿一日辛未、從五位上行皇太后宮〇清和后藤原高子大進菅野朝臣直臣爲亮、少進從五位下藤原朝臣常淵爲大進、

〔兵範記〕仁安三年三月廿日壬午、卯時内辨左大臣〇藤原經宗參著仗座、下官奉仰出軾、仰云、皇太后宮〇高倉母后平滋子冊命事、可載宣命者、〇中略

次除目

大夫正二位大納言源雅通
亮正四位下左京大夫藤原定隆
大進正五位下左衛門權佐藤原經房藏人
從五位上兵部少輔伯耆守平親宗
權少進正六位上高階經仲
少屬左大史中原盛直

權大夫從三位右近中將平宗盛
權亮從四位上右近中將藤原賴實
權大進正五位下藤原光雅藏人
少進從五位下平時家
大屬從五位下伊豆守中原宗家
權少屬西市祐中原久孝

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕前一兩日職事奉勅向大臣第有召仰之事、當日早旦、諸司奉仕南殿御裝束、剋限諸卿著仗座、次大臣令官人敷軾、次大臣召大外記問諸司具否、次職事來軾、仰以准三后藤原氏〇仁孝妃藤原祺子、鷹司政通女、號新朔平門院、爲皇太后、〇中略除目二通之寫宿紙也

太政官謹奏

皇太后宮職　大夫正二位源朝臣基豐兼　權大夫從二位藤原朝臣忠能兼

弘化四年三月十四日

太政官謹奏

皇太后宮職

亮正四位上藤原朝臣恭光兼　權亮正四位下藤原朝臣季知兼

大進正五位上藤原朝臣顯彰兼　權大進正五位下藤原朝臣胤保兼

少進正五位下藤原朝臣哲長兼　權少進正六位上丹波朝臣頼永兼

大屬從五位下中原朝臣職孚兼　少屬正六位上紀朝臣定厚兼

權少屬正六位下宗岡朝臣行誠兼

弘化四年三月十四日

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月廿四日辛丑、制太皇太后、皇太后宮舍人、待職免聽補他職、自今已後立爲恆例、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應制官田充諸司要劇幷番上粮料事○中略

大和國四百六十七町九段二百十八歩○中略

皇太后宮職廿二町七段二百八十歩○中略

元慶五年十一月廿五日

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年二月廿九日己亥、參議正四位下行右衞門督兼讚岐守藤原朝臣○朝臣二字原脫、據一本補、良繩爲太○太字原脫、據一本補、皇太后宮○仁明后藤原順子大夫、餘官如故、散位從五位下藤原朝臣遠經爲大進、

〔百寮訓要抄〕太皇太后宮職帝皇祖母也　是は第一の后なり給ふ、后妃至極の人是になり給ふ、天子の國母御祖母なとの宿老の後成給ふ也、　大夫　是は其后宮にまたしき人任べし、執柄も三家の人々、皆可、然人の任る事也、后宮の内を管領する也、公卿大納言などのなる也、　權大夫　是も大夫に同、中納言參議など任べし、大夫につぎたる人也、　亮　四位の殿上人のなる也、公達も名家も皆任ずる、時によるべし、　權亮　おなじ　大進　名家の五位人々是に任ず、四位に敍する時は是をさる、　權大進　大進におなじ　少進　地下の五位など是に任す　權少進　六位任べし

凡太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮、中宮、皆后のなり給ふ也、大夫以下の官、皆同事也、后渡らせ給はぬ時は闕にて可有、

〔公卿補任堀河〕康和五年癸未

大納言正二位源俊明六十、民部卿、太皇太后宮大夫、

康和六年甲申

大納言正二位源俊明六十一、民部卿、大宮大夫、

〔台記〕保延二年十二月四日丁酉、入夜大宮大夫師頼被來、

〔公卿補任崇德〕保延二年丙辰

權大納言正二位源師頼六十九、太皇太后宮大夫、

〔公卿補任高倉〕嘉應二年庚寅

非參議從三位平經盛四十七、太皇太后宮亮、如元、○中略

永曆元年四月七日、兼大宮權大進、○中略　應保二七十七轉大宮亮、

承安三年癸巳

紫微中臺

權大納言正二位藤公保〈○四十二、大宮大夫、〉

同隆季〈四十七、中宮大夫、〉

前權大納言正二位同實長〈四十四、皇后宮大夫、〉

非參議正三位同俊盛〈○五十四、大宮權大夫、〉

同俊成〈六十、皇太后宮大夫、〉

從三位平經盛〈○五十、大宮亮、〉

○按ズルニ、太皇太后ヲ又大宮ト稱ス、故ニ其官僚ヲ大宮大夫、大宮權大夫、大宮亮ト稱セシナリ、

〔類聚三代格　十五〕太政官符

應レ割二官田一充二諸司要劇幷番上粮料一事〈○中略〉

大和國四百六十七町九段二百十八歩

太皇太后宮職廿三町三段二百八十歩〈○中略〉

元慶五年十一月廿五日

〔詠百寮和歌〕太皇太后宮

げにおほいおほいきさいの宮所𛀁たしき人や猶あふがまし

大進

月影とあふげる秋の宮の内のめしにすゝめる祭事人

〔續日本紀　十七孝謙〕天年勝寶元年八月辛未、以二大納言正三位藤原朝臣仲麻呂一爲二兼紫微令一、參議正四位下大伴宿禰兄麻呂、式部卿從四位上石川朝臣年足、並爲二兼大弼一、從四位下百濟王孝忠、式部大輔從四位下巨勢朝臣堺麻呂、中衛少將從四位下背奈王福信、並爲二兼少弼一、正五位上阿倍朝臣虫麻呂、伊

豫守正五位上佐伯宿禰毛人、左兵衛率正五位下鴨朝臣角足、從五位下多治比眞人土作爲兼大忠、外從五位上出雲臣屋麻呂、衛門員外佐外從五位下中臣丸連張弓、吉田連兄人、葛木連戸主、並爲少忠、九月戊戌、制紫微中臺官位令、一人、正三位官、大弼二人、正四位下官、少弼三人、從四位下官、大忠四人、正五位下官、少忠四人、從五位下官、大疏四人、從六位上官、少疏四人、正七位上官、

〔唐書百官四十七〕開元元年、改中書省曰紫微省、中書令曰紫微令、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后〇孝謙生母藤原安宿媛崩、〇中略勝寶元年、高野天皇〇孝謙受禪、改皇后宮職曰紫微中臺、抄選勳賢、並列臺司、寶字二年、上尊號曰天平應眞仁正皇太后、改中臺曰坤宮官、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝〇中略等奉勅改易官號、〇中略紫微中臺、居中奉勅、頒行諸司、如地承天亭毒庶物、故改爲坤宮官、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字四年正月戊寅、從三位藤原朝臣弟貞爲坤宮大弼、但馬守如故、從五位下大原眞人繼麻呂爲少忠、

大舍人寮

大舍人寮ハオホトネリノツカサト稱ス、大舍人ノ爲ニ置ク所ナリ、大寶令ノ制、左右二寮ニ分チシガ、平城天皇大同三年、左右ヲ併セテ一寮ト爲シ、少屬一員ヲ加フ、

大舍人ハ帶仗ノ職ニシテ、分番シテ禁中ヲ宿衛シ、雜使ニ供シ、諸司ノ事ヲ奏スル時ニ閤門ニ詣リ、叫喚シテ之ヲ通ジ、儀式ノ場ニ陳列シ、追儺ニハ其身體ノ長大ナルモノ、黃金四目ノ假面ヲ冒リテ、方相氏トナル、大舍人ハ內舍人ヨリ下レルモノニテ、四位以下五位以上ノ子

孫ノ性識儀容ヲ擇ビ、上等ヲ内舍人ト爲シ、其次ナルヲ大舍人ト爲スナリ、又内六位以下ノ嫡子ハ、内舍人ト爲サヾレドモ、其以下八位以上ノ嫡子モ、儀容端正ニシテ書算ニ工ナルトキハ、亦大舍人ト爲スナリ、其人員ハ大寶令ノ制、左右各八百人トシ、後減半セシガ、平城天皇大同二年九月、舊ニ復シ、同十月、内豎ヲ廢シ、以テ左右二寮ニ各百人ヲ隷屬セシム、同三年、左右ヲ併セシ時、更ニ八百人ニ定ム、而シテ嵯峨天皇弘仁二年、殿上舍人百二十人ヲ定メ、内豎ト爲シ、同十年、内豎局ヲ置クニ及ビ、大舍人ノ員ヲ四百人ニ定メタリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、〇中略大舍人寮、於保止禰利乃豆加佐

〔標注職原抄上末〕大舍人は、内舍人に對する稱なり、大と内と對するは、大藏と内藏との如し、令義解に、大舍人、是供奉之人とある如く、禁内殿下の庶事を供奉するなるべし、

〔職原抄上〕大舍人寮唐名宮闈局

〔通典二十七職官〕内侍省

宮闈局令二人、隋置、令掌宮内門閤之禁、及出納神主并内給使名帳糧廩事、大唐因之、

沿革

〔日本後紀十七平城〕大同三年八月庚戌朔、併左右大舍人寮、爲一、加少屬一員、

廳舍

〔續日本後紀三仁明〕承和元年七月甲子、左大舍人寮廢來已久、徒爲空閑處、勅中分其地、以西賜式部省、以東賜主税寮、

〔文德實錄十〕天安二年四月乙卯、夜大舍人寮火、追儺方相氏裝束一時滅却、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年十一月三日丙子、大舍人寮火、燒一倉一屋、

〔日本紀略四村上〕天德元年十一月廿九日辛亥、大舍人寮廳舍一宇、西門失火、

〔延喜式十三大舍人〕凡年終追儺、〇中略其方相假面一頭、黄金四目後轅赤兩面四尺、〇中略並納寮庫、當時出用、

職員
職掌

〔令義解一職員〕左大舍人寮右大舍人寮准此

頭一人、掌左大舍人名帳、分番、宿直、〈謂大舍人、是供奉之人、故長官定其宿直、官人宿直者、自依神祇官、故依常例、判官知其宿直也、假使容儀事、問、內舍人亦供奉之人、是長官之官、省輔定其宿直乎、答、內舍人、是長上之〉助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、大舍人八百人、使部廿人、直丁二人、

〔令義解一官位〕從五位階〇上　左右大舍人頭　正六位階〇下　左右大舍人助　正七位階〇下　左右大舍人大允　從七位階〇上　左右大舍人少允　從八位階〇上　左右大舍人大屬　左右大舍人少屬階〇下

〔拾芥抄中本官位唐名〕大舍人頭〈宮闈令主當令〉　助〈四人主當少令宮闈史〉　允〈宮闈丞宮闈令史〉〈又主當丞〉　屬〈宮闈令史主當錄事〉

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

加置官員事

大舍人寮〈今加少屬〉　〈今定舍人八百人〉

右件所守閑清、務不要急、伏乞廢省官員、混一左右、但除兩併一、恐有闕、亦乞更加件員、〇中略以前雖官職之員、令條立限、而臨時取宜、政道所尙、伏乞依件廢置、各理其務、臣等商量、所定具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

大同三年七月廿六日

〔職原抄上〕大舍人寮

頭一人〈無權官、唐名宮闈令〇中略〉〈相當從五位上〉　助〈權助〉〈相當正六位下唐名宮闈少令〇中略〉　允〈大少〉〈相當正七位下從七位上〉

〈唐名宮闈主事〇中略〉　屬〈大少〉〈相當從八位下大初位上〉〈唐名宮闈令史〉

〔內裏式上〕元正受群臣朝賀式

內藏、大舍人寮等、各執威儀物、東西相分列於殿庭、〇下略

〔延喜式十三大舍人〕凡元正者、六位以下官人四人、史生二人、將舍人一百卌六人、左右分頭、各執威儀物、入自東西廊門、陣列大極殿前庭近衛陣以北左陣、所執屏繖一具、圓翳十具、圓羽十柄、橫羽八柄、弓八張、

箭八具、（各有胡籙）大刀八口、桙四竿、杖二枚、如意二枚、蠅拂二枚、笠二枚、挂甲一領、（弓以下並納袋、圓鞸以下分爲兩行、其屏繖立兩行首、挂甲袋立兩尾、官人立屏繖側、）右陣亦如之、其威儀物、前二日受内藏寮、事畢返納、

凡諸司奏事者、舍人四人詣閤門、第一者再唱、闈司令問曰阿誰、舍人稱姓名、即申曰、某事申給（牟登）某官姓名門候（登）申、闈司就版奏曰、某事申給（牟登）某官姓名叫門故（爾）申、勅曰令奏、闈司傳宣云、令姓名等申、舍人共稱唯、但神今食新嘗祭取小齋人、

〔内裏式 上〕會（○元日節會）

闈司二人、出自青綺門、分坐逢春門南北、大舍人詣門外、叫門曰、御暦進（牟止）中務省官姓名等（謂輔以上）候門（止）申、（闈司辨以叫門、故替之、他皆效此、）闈司就位奏、（他皆效此）

〔延喜式 十三大舍人〕凡元日賜次侍從已上宴、豐樂儀鸞兩門開訖、闈司二人出自青綺門、分坐逢春門南北、舍人四人詣門外、第一者叫門曰、御暦進（牟止）中務省官姓名、等門候（止）申、闈司就版奏、勅曰令申、闈司進傳宣云、姓名等（乎）令申（與）、舍人稱唯、所司奏進御暦訖撤案、又舍人進叫門曰、氷様進（牟止）宮内省官姓名等門候（止）申、闈司奏之、舍人稱唯如前、所司奏進亦同、（○中略）舍人四人與少納言候同門外、大臣喚舍人二聲、舍人共稱唯、（餘節准此）少納言替入、（事見儀式）

凡正月七日節會、兵部省進弓矢、舍人叫門、其詞曰、御弓事申給（牟止）内舍人姓名門候（止）申、

凡五月五日、典藥寮進昌蒲草、舍人叫門、其詞曰、漢女進（良牟止）宮内省輔姓名門候（止）申、

〔儀式 六〕上卯日進御杖儀

大舍人寮頭以下率舍人、左右兵衞府督已下率兵衞、各執御杖一束、候承明門外、（○中略）大舍人叫門如常、闈司進就版奏云、御杖進（牟止）大舍人寮官姓名等（謂五位已上、若無五位權任、）候門（等）申、勅曰、令奏、闈司傳宣云、姓名等（乎）令申、掃部寮入立案於殿庭尋常版東西、大舍人寮先入奏進、其詞曰、大舍人寮申（久）正月（乃）上卯（日乃）御杖仕奉（氏）進（良久乎）申給（波久止）申、（若親王奏、以進禮樂詞、代進良久乎詞、又其下加恐美恐毛詞、）勅曰置之、屬已上共稱唯隨次

相傳置案上畢即退出、

〔內裏式中〕十二月大儺式

中務省率侍從內舍人大舍人等各持桃弓葦矢、〇中略方相一人、(取大舍人長大者爲之)著假面黃金四目玄衣朱裳、右執戈、左執楯、

〔延喜式十三大舍人〕凡二月四日早朝、官人二人(五位一人、六位一人、)參神祇官祈年祭所、

凡六月十一日、供月次祭所小忌官人一人、史生一人、舍人十人申省、祭日〇中略戌時幸於中院、(御輿長幷副給用小舍人)亥時進御疊、舍人叫門、其詞曰、御疊進止、其親王門候止申、寅時退御疊叫門、(同亥時)畢即車駕還宮、明旦依神祇官叫門、其詞曰、鎭御殿事申給止、宮內省輔姓名門候止申、鎭御殿畢、

凡奉伊勢大神幣日、舍人四人候大極殿東廊門內、勅喚舍人、共稱唯、少納言替入、

凡鎭魂、園韓神、平野等祭、官人一人、史生一人、率舍人能和舞者四人參之、但踐祚大嘗廿人、(便取小齋之內)

凡出雲國造奏神壽詞、頭以下率舍人候大極殿東廊內、奏事畢侍從喚舍人、共稱唯、

〔延喜式十三大舍人〕凡七月十四日、奉盂蘭瓮供養使舍人七人送省、

凡文殊會之前、差舍人八人、進辨官從其事、

〔儀式十〕奉山陵幣儀

其使〇中略柏原、深草、田邑、後山階五陵、參議以上、若非參議三位以上各　人、四位若五位一人、內舍人一人、大舍人一人、楊梅一陵四位一人、五位一人、大舍人一人、田原、後田原、八島三陵、宇治、後宇治、愛宕三墓、四位若五位二人、大舍人一人、多武峯墓、內舍人一人、大舍人一人、

〔延喜式十三大舍人〕凡任相撲司後、六位官人二人率大舍人廿人向彼司、(左右各官人一人、舍人十人、)

凡每月一日、官人前月上日幷番上粮文(大月料白米廿四斛、但小月減八斗、)上番門籍文申省、(正月者二日、但朝拜止者如恒、)

凡視告朔日、舍人四人候昌福堂東北、于時殿上侍從喚舍人二聲、舍人共稱唯、少納言替昇、(事見儀式)

補任

凡監物請進諸司管鎰者、差舍人七人、朝夕供奉請進、(事見監物式)

凡蕃客人朝者、待省處分、賜饗之日、點舍人十人、擬酒部、各著黃袍、(請所事所)拜朝之日、陳列威儀、一同元日、

凡舍人二人爲上下番、毎月廻取宮城內諸司諸所愼火書、進太政官、

〔百寮訓要抄〕大舍人寮(宮闈局)　宿直の事をつかさどるよし令に見えたり、節會の時、諸卿をめす事は大舍人の役也、行幸の時に、御綱などの事を奉行す、

〔延喜式(十三大舍人)〕凡車駕行幸者、舍人四番(以十二人爲番)供奉、御輿長八人、駄鈴四人、並著緋袍白布袴帶、若皇后有幸、又供御輿長、裝束同前、其叫門者、便取副鈴舍人、總緋袍卅八領、布帶卅八條、(緋布衫准此)並納寮庫、臨時充用、若有破損、返故請新、

〔西宮記(臨時十)〕行幸仰御綱事

乘輿出閤門之間、大將(立閤外壇上)召大舍人二聲、大舍人稱唯、大將仰云、御綱張禮、大舍人同音稱唯、張御輿綱、

〔延喜式(四十一彈正)〕凡臺奏彈事者、不經太政官而直奏聞、(將奏事者、忠詣閤門、告大舍人、令伺奏事狀、有可召者、尹已下忠已上、共入上閤、若御太極殿者、忠就大舍人處、伺奏事狀、舍人召臺者、准前上聞、)

〔官職秘抄(上)〕諸寮頭　大舍人(○中略)　已上可然諸大夫任之、近代諸道者任之、(○中略)　同助(權)　大舍人(○中略)　已上可任良家子、凡諸司助、以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、諸王任例、(大舍人實雄、氏宗、○中略)五位例、(大舍人、大原繩麿、橘仲村丸、自餘不遑毛擧、)　依成功任例、(大舍人、平直方、自餘不遑毛擧、○中略)　同允(大少)　大舍人(○中略)　已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分、尤爲難、(○中略)　同屬(大少)　大舍人(○中略)　已上臨時內給、諸道所々擧問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、自陰陽師任例、(大舍人、賀陽毅明、)

〔職原抄(上)〕大舍人寮

頭一人無二權官一 諸大夫五位任之　助權助　同六位任之　允大少　六位侍任之　屬大少

〔百寮訓要抄〕大舍人寮

頭宮闈令　四位以下地下の輩、醫陰兩道など皆是に任ず、　助宮闈少令　六位是に任ず　權助

本寮より擧するに隨て任せらるゝ是を本寮の奏といふ、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年閏七月癸卯、從五位下大井王爲二左大舍人頭一、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年六月丁酉、從五位下高丘王爲二右大舍人頭一、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字三年七月丁卯、從五位下橘宿禰綿裳爲二左大舍人助一、

〔文德實錄六〕齊衡元年十月庚申、正五位下備前守藤原朝臣大津卒、大津者、贈左大臣從一位內麻呂之第九子也、○中略年十八爲二大舍人大允一、

〔兼胤公記〕寶曆四年三月廿七日、桂大舍人屬病身、且困窮ニ付、由緒有レ之ニ付、近藤修理江大舍人寮讓申度由、願書仲ケ間之添願書、修理由緒書、此由緒書ニ等親之儀不二相見一、同役被二吟味一候處、再從兄弟之由也、攝政殿ヘ申入、子細無レ之候間、願之通可二申付一之由被レ命、歸參內之後、爲二心得一別當ヘ申入了、

〔明和新增京羽二重一〕外記方

大舍人寮　從六位下荒木大舍人助高橋榮承　同　從六位上近藤和泉守藤原義休

同　從六位下山下大舍人大允藤井伴政　同　從六位下倉光肥前介平安正

同　從六位下倉光大舍人大屬平忠篤　同　從六位下近藤大舍人少屬藤原義路

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕○中略

永井大舍人寮少丞藤井常足

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

大舍人寮　從五位上山口大舍人頭紀定厚　從五位下永井大舍人權助藤井源淸

大舍人

正六位下近藤土佐介源義裕　岩垣大舍人少允源菊苗
正六位下永井若狹介藤井常名　岩垣佐渡介源杉苗　姉小路薩摩介源賴彥

〔日本書紀十四雄略〕穴穗天皇〔○安康〕意將沐浴、幸于山宮、〔○中略〕既而穴穗天皇、枕皇后膝、晝醉眠臥、於是眉輪王、伺其熟睡、而刺弑之、是日大舍人〔闕姓字也〕驟言於天皇〔○雄略〕曰、穴穗天皇、爲眉輪王見弑、

〔出雲風土記意宇郡〕舍人鄉、郡家正東廿六里、志貴嶋宮御宇天皇〔○欽明〕御世、倉舍人君等之祖、日置臣志毘、大舍人供奉之、卽是志毘之所居、故云舍人、

〔日本書紀二十九天武〕二年五月乙酉朔、詔公卿大夫、及諸臣連幷伴造等曰、夫初出身者、先令仕大舍人、然後選簡才能、以充當職、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年五月、是月、勅遣左右大舍人等、掃淸諸寺堂塔、　九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　甲子、是日淨廣肆河內王誄左右大舍人事、

〔類聚國史百七職官〕大同二年九月甲辰、依令定左右大舍人員各八百人、先是改令半減、至此復舊、　十月己巳、停內豎、隷左右大舍人寮、各一百人、

〔類聚符宣抄十〕大舍人寮
內裏宣、殿上大舍人百廿人、自今以後爲內豎、春宮坊召繼者、名爲舍人、
弘仁二年正月五日

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁二年正月庚子、制、上殿舍人一百廿人、復舊名爲內豎、

〔令集解三職員〕弘仁十年八月廿六日官符云、減定大舍人數事、〔元八百人、今定四百人、〕右被中納言從三位兼行宮內卿藤原朝臣貞嗣宣偁、奉勅、今依舊置內豎、宜大舍人依件定、其食及時服定壹佰人、

○按ズルニ、此官符、又享祿本類聚三代格ニ見エテ、十一年四月二十一日ニ係ケタリ、今之ヲ公卿補任ニ徵スルニ、藤原貞嗣ノ中納言從三位宮內卿タルハ十二年正月ニ在リ、二書恐クハ並

ニ誤ナラン、

〔令義解五軍防〕凡五位以上子孫、年廿一以上、見無役任者、〈○註略〉每年京國官司勘撿知實、限十二月一日、幷身送式部、申太政官撿簡、性識聰敏、儀容可取、充内舍人、〈○註略〉三位以上子不在簡限、以外式部隨狀充大舍人、及東宮舍人、

凡内六位以下、八位以上嫡子、年廿一以上、見無役任者、每年京國官司勘撿知實、責狀簡試、分爲三等、儀容端正、工於書筭、〈○註略〉爲上等、身材强幹、〈○註略〉便於弓馬、爲中等、身材劣弱、不識文筭、爲下等、十二月卅日以前、上等下等、送式部簡試、上等爲大舍人、下等爲使部、中等送兵部、試練爲兵衞、如不足者、通取庶子、

〔類聚國史百七職官〕延暦十四年六月己酉、勅自今以後、左右大舍人、以蔭子孫〈○五位以上子孫〉補之、其位子〈○八位以上嫡子〉者、依令以容止端正、工於書筭者補之、不得妄以雜色及畿外人補之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補大舍人事

右撿案内、太政官去延暦十四年六月十四日下式部符偁、右大臣宣、奉勅大舍人、自今而後、以蔭子孫補之、其位子者、依令簡試、以容止端正、工於書筭者補之、但自非有別勅以外、不得妄以雜色及畿外人補之者、今右大臣宣、奉勅除蔭子孫以外、一切停補、

大同元年十二月四日

〔延喜式十八式部〕凡大舍人勞廿年爲限、每年一人任諸國史生、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年三月辛巳、宴五位已上於南苑、但六位已下官人、及大舍人、授刀舍人、兵衞等、皆喚御在所、給鹽鍬各有數、

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿詔曰、〈○中略〉改神龜六年爲天平元年、〈○中略〉其賜物、〈○中

略　定額散位、及左右大舍人、六衛府舍人、〇中略各布二端、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月戊子、山背國相樂郡女、鴨首形名三產二六兒、初產二一男、次產二二女、後產二二男、其初產二男、有レ詔爲二大舍人一、

〔詠百寮和歌〕大舍人

時に會夜のにはなひをきる人を大直にぞめしこゞめぬる

〔續日本紀八元正〕養老三年六月丙子、令〇中略左右大舍人寮別勅長上〇中略等始把レ笏焉、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

大舍人番長別當上卿仰下

〔北山抄六〕大舍人番長事

別當上卿下二宣旨一

〔玉海〕治承四年正月廿六日己卯、此日春除目初日也、〇中略任二進物所二人、大舍人三人、〇中略

上總大掾正六位上賀茂朝臣吉末大舍人番長

〔薩戒記〕永享五年三月廿九日癸未、今夜除目入眼也、〇中略

出雲掾大井胤之大舍人番長

〔蟬冕翼抄〕四所籍〇中略

大舍人

榻籤也、兩面ニ同ク大舍人勞帳ト書タリ、二枚ヲ續テ書テ籤ニ閉付タリ、

番長以下五人見籍

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略大舍人寮四人、

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

史生

大舍人寮史生下村大舍人少屬橘諸見 正七位上村田安房掾菅原信義

寮掌

〔延喜式十八式部〕凡内外諸司〇中略寮掌、〇中略各二人、但中務治部民部兵部大藏彈正中宮修理等、並待二本司移一補之、自餘者判補之、

〔延喜式十二中務〕時服

大歌生

大舍人寮一百七人(中略)舍人一百人、但大歌生十人在二舍人内一、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略大舍人寮〇中略各十人、

直丁

〔東大寺正倉院文書 〕左大舍人寮解 申請公粮事

所請米壹斛壹斗陸升 鹽壹升壹合陸勺 庸布貳段

米壹斛壹斗陸升人別日二升 鹽壹升壹合陸勺人別日二勺

右直丁貳人料

庸布二段人別一段

右厮貳〇貳下恐脱二人字一料

以前來五月廿九箇日料、所レ請公粮如レ件、以解、

天平十七年四月十八日 從七位上行少屬勳十二等黄文連大海

從五位下守頭 王久仁宮留守 正七位上行大允守山眞人

少允從七位下勳十二等巨勢朝臣

右大舍人寮解 申請直丁粮事

合肆人二人直丁 二人厮丁

應給米壹斛貳斗別日二升 鹽壹升貳合別日二勺

右直丁二人料

應請綿肆屯
右厮二人料
以前來十一月卅箇日料粮、所請如件、以解、
天平十七年十月十八日
少属從八位下竹原連安麻呂
正六位下行大允大養德連東人

用度

〔延喜式十三大舍人〕凡不仕舍人衣服幷食料、充寮中雜用、
〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町
大舍人町鷹司北、町尻東、牛町、辻子西也、

圖書寮

圖書寮ハ官ノ書籍ヲ管シ、校寫裝潢セシメ、紙筆墨ヲ造リテ官用ニ供シ、及ビ宮内ノ佛事ヲ掌ル、紙、筆、墨ノ事ハ、文學部ニ各其篇アリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、○中略圖書寮、不美乃豆加佐
〔下學集上官位〕圖書頭秘書監
〔續日本紀淳仁二十〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等奉勅改易官號、○中略圖書寮、掌持典籍供奉内裏、故改爲内史局、
〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政奏改官名宜復舊焉、
〔職原抄上〕圖書寮唐名秘書省
〔唐六典十秘書省〕秘書省監一人從三品

周禮春官太史掌建邦之六典、又小史掌邦國之志、定繫代、又外史掌四方之志、三皇五帝之書、並秘書之任也、秦則博士官所職、禁人藏書、漢氏除挾書之律、開獻書之路、置寫書之官、又令謁者陳農求遺書於天下、故文籍往々而出、並藏之書府、在外則有太常太史博士掌之、内則有延閣廣内石渠之藏、又御史中丞在殿中、掌蘭臺秘書圖籍、又未央宮中、有麒麟閣天祿閣、亦尙書、劉向揚雄典校、皆在禁中、謂之中書、猶今言内庫書也、後漢則藏之東觀、亦禁中也、至桓帝延熹二年始置秘書監、屬太常、掌禁中圖書秘記、故曰秘書、

廳舍

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年七月庚戌、詔、〇中略竊問東人等欵云、〇中略去六月中期會、謀事三度、〇中略次於圖書藏邊庭、

〔延喜式十三圖書〕正月最勝王經齋會堂裝束

盧舍那佛幷脇侍菩薩壇像一鋪、〇中略

右佛像雜具、並收寮庫、臨事出用、

凡宮中禮佛三寶布施者、收納寮庫、聽官處分、

〔西宮記臨時五〕諸院

紙屋院（〇圖書別所、在野宮西、西拾芥抄作東、）大同年、始置此院、

〔簾中抄百官下〕圖書寮　紙屋院、この寮の被官、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年十一月廿九日壬辰、晦、夜圖書寮失火、燒一倉一屋、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽四年二月廿七日戊戌、右近府幷圖書寮雜舍等燒亡、累代寶物皆爲灰燼、

〔百練抄四後朱雀〕長久三年正月廿四日、圖書寮燒亡、

寮印

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年十月甲戌、始賜諸陵、圖書、〇中略印各一面、

職員職掌

〔令義解一職員〕圖書寮

頭一人、（掌經籍圖書類、謂五經六籍、河圖洛書之類、其諸史百家、亦兼掌也、修撰國史、謂撰撫國事、修撰史書也、內典佛像、宮內禮佛、謂宮中諸佛事也、正月金光明會、及臨時轉讀般若等之類、其京外者、玄蕃掌、校寫裝潢、謂裁治曰裝、染色曰潢、即寫書以下諸手者、皆得考人也、功程、給紙筆墨事、）助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、寫書手廿人、（掌校寫書史、）裝潢手四人、（掌裝潢經籍、）造紙手四人、（掌造雜紙、）造筆手十人、（掌造管、）造墨手四人、（掌造墨、）使部廿人、直丁二人、紙戸、

〔唐六典十秘書省〕秘書省監一人從三品○中略

秘書監之職、掌邦國經籍圖書之事、有二局、一曰著作、二曰太史、皆率其屬而修其職、

〔令義解一官位〕從五位階○上　圖書頭　正六位階○下　圖書助　正七位階○下　圖書大允　從七位階○上　圖書少允　從八位階○上　圖書大屬　圖書少屬階○下

〔拾芥抄中本官位唐名〕圖書頭（秘書監　著作郎　中略　著作郎　秘書郎）　助（四人　秘書少監　著作佐郎）　允（秘書丞　秘書郎）　屬（秘書主事）

〔職原抄上〕圖書寮

頭一人（無權官、名秘書監、相當從五位上、唐名著作郎○中略）　助（權助、相當正六位下、唐名秘書少監○中略）　允（大少、唐名秘書丞○中略）　屬（大少、唐名秘書主事）

〔內裏式上〕元正受群臣朝賀式

主殿圖書各二人、以次出東西、就爐燒香、（主殿先出生炭、圖書次出焚香、）

〔延喜式十三圖書〕凡元日、大極殿前庭左右、設火爐榻一脚、官人四人各著禮服、分自東西廊門、當爐榻相對立、開御帷訖、主殿先進發火爐、寮官人左右各一人進就榻下、共燒香一擧、畢即共復本列、所須香小六斤十二兩、（盛匳預前請受、香匳爐榻及禮服、並在寮家、）

〔嘉永元年御即位圖〕主殿圖書の兩寮、火爐のもとに行て、主殿生火し、圖書香をたく、是位につかせ給ふ事を、天につぐるよしなり、

〔延喜式十三圖書〕凡暴涼佛像經典者、起七月上旬、盡八月上旬、其所須綿紙幷鋪設等、臨時請受、

補任

凡御書及圖繪者、六年一度曝凉、勅使辨官簡差諸司判官以下及舍人學生等堪事者、分番撿凉、

〔西宮記(臨時五)〕行幸

城外　圖書持地圖、

〔官職秘抄(上)〕諸寮頭　圖書(中略)　已上諸大夫諸道者任之、被任圖書權頭例、(大江爲基、中略)　同助(權)

大舍人　圖書(中略)　已上可任良家子、凡諸司助以公卿二合爲最、是可任式部丞之依也、(中略)　自允轉任例、(圖書、藤職直、紀基樹、中略)　同允(大少)　大舍人　圖書(中略)　已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功藿等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分、尤爲難、問者生任例、(圖書、藤季信、中略)　同屬(大少)　大舍人　圖書(中略)　已上臨時內給、諸道所々擧問者生、幷成功藿任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、自陰陽師任例、(中略)圖書、滋岳眞河、(中略)　自織部文師任例、(圖書、大宅利秀、)

〔職原抄(上)〕圖書寮

頭一人(無權官)　諸大夫五位、及諸道藿任之、　助(權助)　同六位等任之　允(大少)　六位侍等任之

屬(大少)

〔百寮訓要抄〕圖書寮

頭(秘書監)　地下の四位五位是に任ず、醫陰兩道など近比は任る也、　助(秘書少監)　五位六位是に任ず

〔光臺一覽(二)〕圖書頭(中略)　等五位四位通任也、公家官なり、

〔藤原家傳(下武智麻呂)〕和銅元年三月、遷圖書頭兼侍從、公朝侍內裏、夜候綸言、爰以其間、撿按圖書經籍、先從壬申年亂離已來、官書或卷軸零落、或部帙欠少、公爰奏請、尋訪民間、寫取滿足、由是官書券帙得備、

〔續日本紀(十一聖武)〕天平三年六月庚寅、從五位下阿倍朝臣粳虫爲圖書頭、

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年二月十三日己亥、土佐守從五位下安倍朝臣房上爲圖書頭、

〔三代實錄 十清和〕貞觀七年三月九日庚寅、以散位從五位上和氣朝臣高作爲圖書頭、

〔明和新增〕京羽二重 一〕藏人方

圖書寮　正六位下田村圖書大允藤原廣敎　同　從六位上蒔田圖書少允藤原祐恭
同　無位上田長左衞門藤原安利

〔慶應元年〕都仁志喜 二下〕藏人方

圖書寮　從五位下藤井圖書大允源義敬　同左兵衞權大尉同義順
從六位上長野圖書少允藤祐親　從六位下同大和介同祐忠

史生

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、〇中略圖書寮五人、權一人

〔慶應元年〕都仁志喜 二下〕藏人方

圖書寮史生　從六位下小島伊勢少目藤長敬　正七位下同長門掾同有隣
從六位下安田美濃目政春

寮掌

〔三代實錄 十二清和〕貞觀八年三月丁丑朔、圖書寮置寮掌一員、把笏、

工人

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

圖書寮

造筆手、元六人、今定三人、　造紙手、元八人、今定五人、

右右大臣宣、奉勅、年料造紙、其數不多、所有紙手、既無食料、又年中造筆、無有定數、依臨時宜造備供奉、準量所用、造手有餘、並從減省、

大同三年二月十六日

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

停止幷減定諸司才長上事

圖書寮

造紙長上二員　右減一員定一員

造筆長上　造帙長上　右並停止○中略

以前被右大臣宣偁、奉勅、件司等、才長上數停止、幷減定如件、永爲恒例、

大同三年十二月十五日

太政官符

圖書寮造紙手少初位下秦公室成

右撿按內、太政官去大同三年十二月十五日下式部省符偁、右大臣宣、奉勅、造紙長上一員、宜從停止者、今被右大臣宣偁、奉勅、前長上秦部乙足死去之替補室成、自今以後、依舊定二員、

弘仁三年二月廿八日

〔類聚三代格十五〕太政官符

應割官田給造墨長上要劇事

攝津國二町一段

右得圖書寮解偁、件要劇以彼國官田所請如件者、正三位行中納言兼民部卿在原朝臣行平宣、奉勅、依請、

元慶九年二月八日○又見三代實錄、係九日

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年六月甲申、圖書寮雜色生等、停經式部省監試、緣本司定、令預勸籍例、

〔令集解三職員〕釋云、別記云、紙戸五十戸、山代國、自十月至三月、每戸役一丁、爲借品部、免調雜徭也、古記無別、

〔延喜式十五內藏〕年料所造色紙四千六百張厚三千二百八十張、薄千二百廿張、長五十張、廣五十張、其料常陸調布卅端、十六端曝、九端紺、五端縹、

紗五丈八尺、鐵二廷、砥一枚、毎年差圖書長上一人、遣美濃國造之、

〔類聚符宣抄 七〕太政官符式部省

應補任造色紙長上從七位上阿曇兼遠事

右得圖書寮去八月廿一日解偁、美濃國今年四月廿一日解偁、云々者、大納言正三位兼行中宮大夫藤原朝臣顯忠宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左大辨　右大史

天曆五年九月十日

〔權記〕長保四年二月一日丁卯、召奉親宿禰、付美濃國紙屋長上宇保良信解文、尋先例可進止之由示之、

〔延喜式 三十 大炊 五〕圖書寮、日米四升 同寮紙工一人、日米二升 〇中略

右毎日料、依前件熟食充之、

雜色生

〔儀式 五〕正月八日講最勝王經儀

唄師發聲、衆僧左右各十八人起就殿南廂座、圖書寮雜色生左右各二人、先進就花机下、次官人各一人就之、左西面、右東面、次堂童子進、北面列跪、生各一人起取花筥、相傳後授官人、受之授堂童子、堂童子以次傳授訖、堂童子自下起、進跪授衆僧、初堂童子起畢、圖書寮官人率生等各復座、訖各復座、〇中略 散花師讃佛號訖、圖書寮生幷官人進就如上、次堂童子進受花筥、跪列亦如上、以次傳受、返置机上、訖各復座、

使部

〔延喜式 十八 式部〕凡諸司使部者、〇中略 圖書寮、〇中略 各十八人、

用度

〔延喜式 三十六 主殿〕諸司所請年料

圖書寮油三升、二升元日御井中宮御装束所燈料、一升奉寫年料新翻仁王經所料、

〔延喜式 三十八 掃部〕諸司年料

圖書寮寫年料仁王經所、狹席十二枚、折薦廿四枚、造年料墨所、席一枚、食薦二枚、

內藏寮

名稱

內藏寮ハ大藏ニ對シテ、ウチノクラノツカサト訓ゼシガ、後單ニクラノツカサト稱ス、持統天皇ノ時、始テ內藏寮ノ名見エタリ、大寶ノ制、大藏省ヨリ送レル所ノ金銀、珠玉、寶器、錦綾、氈褥ノ類、諸蕃ノ貢獻セル奇瑋ノ物、年料ノ供進ノ御服等ノ事ヲ掌ル、故ニ大少主鎰アリテ、出納ヲ主當シ、典履アリテ、供御ノ靴履鞍具ヲ縫作シ、百濟手部アリテ、雜縫作事ヲ掌リ、平城天皇大同三年、大寮ニ准ジテ少允一人ヲ加フ、後世內藏頭ヲ禁中ノ重職トシ、四位五位ノ殿上人中、其人ヲ擇ビテ補任セリ、

〔倭名類聚抄 五官名〕寮　職員令云、(中略)內藏寮(宇知乃久良乃豆加佐)

〔源氏物語 一桐壺〕このみこみつになりたまふとし、御はかまぎのこと、一の宮のたてまつりしにをとらず、くらづかさ、おさめどののものをつくして、いみじうせさせたまふ、

〔古事記傳 三十八〕內藏を後世に、たゞ久良とのみ云は、大藏に對へて、此をばたゞ藏とのみ云ならへるなり、物語書などにも、くらづかさと云るは、內藏寮のことなり、

〔宣胤卿記〕永正三年十二月廿四日、頭辨狀到來、賴量朝臣申施藥院使事、可伺申文案、宣下案令見之、(中略)施字如何可讀云々、不讀也、百官中不讀字多、內藏、內匠、造酒等類也、

〔下學集 上官位〕內藏頭(少府監)

〔職原抄 上〕內藏寮(唐名倉部　又云少府)

〔通典 二十三職官〕戶部尚書

廳舍

倉部郎中一人周官有倉人、主藏九穀、又有廩人、主藏九穀之數、賜稍食、魏尚書有倉部郎、後魏有太倉尚書、亦其任也、故後魏書曰、李訢爲太倉尚書、攝南部事、令千里之外、戶別轉運、詣倉輸之、所在委積、延停歲月、大爲困弊、歷代多有倉部曹、皆掌倉廩之事、後周有地官屬司倉下大夫、隋初爲倉部侍郎、煬帝除侍字、武德中加中字、龍朔二年、改倉部爲司庾、咸亨初復舊、天寶中改爲司儲、至德初復舊、掌諸倉廩之事、開元二十六年以後、置出納使、皆以他官爲之、

〔拾芥抄中本宮位唐名〕內藏寮內府局

〔唐六典十二內侍省〕內府局　令二人正八品下

漢少府屬官有內者令丞、後漢長秋屬官有中宮私府令、主中藏幣帛、諸總裁衣被補浣皆主之、後魏有內者令、北齊中侍中省有內者丞一人、隋內侍省統內者局丞各二人、皇朝改置內府令丞、○中略

內府令掌中宮藏寶貨給納名數、丞爲之貳、

〔拾芥抄中本百官〕內藏寮堀河西、近衞南、修理職東、

〔小右記大內裏圖考證所引〕永祚元年二月十日、內藏寮權曹司燒亡、

〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年三月二十九日丁未、內藏寮御服倉院松樹有烏巢、

〔三代實錄四十三陽成〕元慶七年二月廿八日乙丑、夜內藏寮舍人津守小吉、開御服倉盜取絹四十匹下獄、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

御服倉勾當　內藏頭已下有宣旨

〔伏見院御記〕弘安十一年二月廿一日丙子、今日禮服御覽也、爲俊朝臣兼仲等向內藏寮禮服倉、臨昏相具禮服參、

〔西宮記十二月〕出野御倉藥事

藏人奏聞、仰內藏官人取御鎰、仰左近陣在南廊藏人、侍從一人、侍醫一人向御倉、開出用帳、各加名撿封退歸、

〔侍中群要〕十出内藏不動藏物事可尋載之

奉仰先召官人、官人參入、允屬史生藏部各一人預參史生給藏人所御匙、勅使立藏前令開檢、開檢了之後、使官人入御藏令出、其後付下帳退下、加封於藏如元云々、○中略

出野御倉物事

内藏官人、參近衞陣申給御鎰云々、勅使行向開封之間事同前、召修理職令造階云々、催中務省云々、

○按ズルニ、野御倉ハ大藏省ニモ在リテ、同ジク藥種ヲ藏セリ、彼此同一ナヤリ否ヤ詳ナラズ、

〔百練抄四三條〕長和三年三月十二日、大藏幷内藏寮掃部寮燒亡、内藏累代寶物貴藥等多燒亡、

〔小右記〕長和三年三月十二日丁酉、巳剋許、乾方有火、雜人令申云、大宿燒亡云々、頃之又云、火移内藏寮不動倉幷掃部寮云々、○中略累代寶物皆悉燒失所歎念也、適所取出不幾、所燒之由數万者、火起自大宿移内藏寮掃部、皆悉燒亡云々、　十三日戊戌、大外記敦頼云、昨日内藏寮納御卽位御服、幷雜物他物等少々取出、倉三宇、只中倉鎰以石打開、被倉納物少々取出、今二宇倉物不能取出、是左衞門尉宗相檢非違使所令取出云々、左大臣及卿相五六人向火所行事、資平自内退出之、左府云、累代重物十分之一、僅取出、太歎息、就中貴藥盡以燒失、只雄黃二升許取出云々、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年二月十二日己酉、風雨殊甚、内藏寮雜舍一宇顚倒、男女二人壓死、

〔左經記〕寬仁四年四月七日戊子、參結政所、無内藏頭之後、始今日參、無政、參内、及未剋著寮、先例初參之時、著御倉町云々、雖然燒亡之後、頼光定頼朝臣等、皆著外司、仍著外司、先開簡日給、次著返抄、大和國舂米卅斛返抄請印、次有飲酒事、事了退出、

〔玉海大内裏圖考證所引〕文治二年正月十八日、仰下宗隆事、三箇事、一者諸司之中、有納寶物之所々、就中内藏寮有應神天皇御禮服云々、近代長官已下、如此事慥不尋行、或紛失、或朽損、甚不便云々、寮官藏人、相共加檢知、注目六可分附歟、

〔百練抄十三後堀河〕安貞元年三月廿四日、近日内藏寮庫倉、二條猪熊盜人等亂入、捜取累代御物云々、目錄不

寮印
職員
職掌

分明之間、紛失物不レ知二其員一云々、

〔類聚國史 職官 百七〕天長六年二月丙辰、山城國愛宕郡五段地賜二內藏寮地地一、

〔續日本後紀 仁明 二〕天長十年八月丙戌、勅穀倉院西南角地、東西各廿丈、南北各卅丈、宜レ爲二內藏寮染作之處一、

〔類聚國史 職官 百七〕承和二年三月丁巳、山城國杵山一處、爲二內藏寮所領之地一、

〔三代實錄 淸和 八〕貞觀六年三月四日庚寅、詔以二內藏寮所領遠江國長上郡田地一百六十四町一、施二入貞觀寺一、

〔三代實錄 光孝 五十〕仁和三年五月十六日己丑、是日勅以二山城國愛宕郡鳥部鄕桧原村地五町一、賜二施藥院一、(中略)南限二內藏寮支子園幷谷一、北限二山陵幷公田一、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年(〇文治元年)三月二日乙酉、今日內藏寮領山城國精進御薗事、止二給人景淸妨一、可レ令二刑部丞信親領掌一之旨、武衞(〇源賴朝)直令二下知給一云云、

〔類聚國史 職官 百七〕大同四年五月癸亥、在二河內國一內藏寮田十一町、賜二正五位下伊勢朝臣繼子一、其一身之後、收爲二寮田一、

〔延喜式 內藏 十五〕凡年料油絹料、寮請取充二隼人司一、疋端捺二寮印一、

〔令義解 職員〕內藏寮

頭一人、掌二金銀珠玉、(謂自生爲レ珠、作爲レ玉也、)寶器、(謂金樽玉盃之類也、)錦綾、雜綵、氈褥、(謂燃レ毛爲二褥席一者也、)諸蕃貢獻奇瑋(謂非常之物、其金銀以下雜物、皆自二大藏省一割別而所レ送者也、)之物、年料供進御服、及別勅用物事一、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、大主鎰二人、掌レ主二當出納一、餘主鎰准レ此、少主鎰二人、掌同二大主鎰一、藏部卌人、價長二人、掌下平二物價一市易上、(謂猶レ言下評價直一而市買上也、)餘價長准レ此、典履二人、掌下縫二作靴履鞍具一、(謂此爲二供御一也、)及檢中挍百濟手部上、百濟手部十人、掌二雜縫作事一、使部廿人、直丁二人、百濟戶、

〔令集解職員三〕朱云、年料供進御服及別勅用物者、倉庫令云、大藏准一季應須物數量出別貯、隨用出給、其內藏者、卽納一年須物、每月別貯出用、並乘者附帳、欠者隨事徵罰是也、穴云、此司雜物支度一年用物、自大藏分受、每月別貯出用也、又穴云、內藏受納之物、亦監物等出給耳、鑰皆在御所故也、中略穴云、問此司主鑰職掌也、答案職掌云主當出納、不云鑰、然則審不掌鑰也、管凡鑰皆中務所知故也、中略○私大藏省條云、義解云、百濟手部狛部、謂並是得考者也、案之彼省所造、此爲賞賜也、此寮所造卽爲供御也、送賞賜之人旣得考、造供御之輩明知亦可得考、

〔令義解官位一〕從五位下階○內藏頭　從六位上階○內藏助　正七位上階○內藏大主鑰　從七位上階○內藏允　正八位上階○內藏少主鑰　從八位下階○內藏大屬　大初位上階○內藏少屬

〔拾芥抄中本官位相當〕正七位下　內藏允　從七位上　內藏少允　從八位下　內藏大屬　內藏少屬

〔拾芥抄中本官位唐名〕內藏頭　少府監　尙衣奉御　倉部郞　藏幣令　倉部郞中　內府令　左右藏令　助　少府小監　倉部員外郞　藏幣小令長　尙衣直長　允　小府丞　內府丞　左右藏丞　屬　小府祿事　監事　倉部主事　小府主簿　左右藏府史

〔二中歷官名七〕內藏頭　內府局令　左右藏令　倉部郞中　少府監　尙幣令　助　倉部員外郞　左藏令　尙幣少令　少府少監　允　少府丞　府丞　監事　內　左藏丞　屬　左大藏史　少府主簿　倉部主事

〔唐六典太府寺二十〕左藏署令三人從七品下

周禮有外府中士、主泉藏之在外者、掌邦布之出入、以供百物而待邦用也、又有職幣上士中士、主貨幣之入也、並今左藏之職也、至秦漢則分在司農少府、後漢少府屬官、有中藏府令丞各一人、掌中藏幣帛金銀貨物、魏氏因之、晉少府屬官、有左右藏令、東晉御史九人各掌一曹、有庫曹御史、後復分庫曹置外左庫內左庫、宋文帝省外左庫、而內左庫直云左庫、武帝復置、前廢帝又省、齊陳梁有右藏庫無左藏、後魏闕文、北齊太府寺統左右藏令丞、後周有外府上士中士二人、掌絹帛絲麻

錢物皮角筋骨之藏、隋有左藏署令丞、皇朝因之、○中略

左藏令掌邦國庫藏之事、丞爲之貳、

右藏署令二人正六品上

周禮有内府中士、主良貨賄藏在内也、又有藏内上士中士、主泉貨所入、並今右藏之職、至秦漢已來、則分在司農少府、其職掌廢置並與左藏同、隋太府寺統右藏令丞各三人、皇朝因之、○中略

右藏署令、掌邦國寶貨之事、丞爲之貳、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

置廢官員事

内藏寮

省除主鎰四員　今加少屬一員

右件員少事多、怱劇尤殊、而主鎰四人、口無一用、徒置官員、遥費俸祿、伏請省除、更加少屬一員、綜濟寮務、○中略

以前雖設官分職、令員有限、而斟酌閑繁、取舍時宜、恒典通論、善政所先、伏望廢彼閑吏、更置此要員、臣等商量所定、具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延曆十八年四月廿三日

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年四月辛丑、勅、○中略廢内藏寮主鎰四人、加少屬一員、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

加置官員事○中略

内藏寮今加少屬一員

右件供御忙劇、兼候別勅、伏乞更加件員、○中略

以前雖官職之員、令條立限、而臨時取宜、政道所尙、伏乞依件廢置、各理其務、臣等商量所定、具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

大同三年七月廿六日〇令集解係十六日

聞

〔日本後紀十七平城〕大同三年八月庚戌朔、加內藏寮少允一員、

〔職原抄上〕內藏寮

頭一人相當從五位上唐名倉部郎又少府監〇中略　權頭一人〇中略　助權助相當正六位下唐名倉部員外郎〇中略

允大或無大少唐名倉部丞少少府丞〇中略　屬大相當從八位下唐名倉部主事少府錄事少相當大初位上

〔儀式七〕正月七日儀

平明左右衞門樹梅柳於舞臺四角及三面、掃部寮敷調薦於臺上、內藏寮以縹帶結著梅柳枝、剪綿爲花形、以兩面敷薦上、以鐵爲鎭子、

〔延喜式十五內藏〕元正預前裝飾大極殿、鳳形九隻、順鏡廿五面、玉幡八流、玉冑甲十六條、鄣子十二枚、韓紅花綾表白綾裏帳二條、淺紫綾表緋綾裏上敷兩面二條、下敷布帳一條、已上高御座料錦幔一條、緋綱八條、漆土居桁柱二具、土敷布帳卅七條、鎭子鐵一百廿廷、廷別納俗與內匠主殿掃部等寮、共依例裝束、從小安殿至高御座之間敷兩面、爲御道、其日驅使以左右衞士各十人充之、

元日御禮服玉冠牙笏等、當日平旦、寮官人於大極後殿下持候之、隨內侍宣進之、

大舍人寮左右兵衞府獻卯杖、訖寮頭已下率史生藏部進庭撿收、

凡正月七日、預前節一日、寮官人率史生藏部裝飾舞臺、〇中略餘節設舞臺同之、是日兵部省所獻御弓矢等、寮官亦進庭撿收、

凡四月駒引、及五月節、預前一日、裝飾武德殿、綴雜飾料、熏革半枚、絲五兩、車駕行幸者、懸御在所帳幔、

凡諸衛府所献昌蒲幷雜彩時花、寮官率史生藏部等撿收附絲所、

凡典藥寮所献昌蒲幷艾、奏進之後、寮允已下參入撤之、若官人已下不足者、召加内豎、

宴會召文人者、乘輿未御之前立文臺、紙人別二枚、其紙筆墨、預受圖書寮、

凡寮庫雜物者、先種別自正倉移納於別庫、而後下用、未下用盡之前、亦復移納、勿令斷絶、開正倉者、助以上一人與允屬開之、

凡藏匙者、屬以上一人、先觸左近陣官、率史生入日華門請納、

〔百寮訓要抄〕内藏寮　金銀珠玉錦綾をつかさどる、又天子の御服を奉行する所也、今も月別の御服調進子細なし、

〔延喜式十五内藏〕年中所造御梳三百六十六枚、(二百枚御料、百枚中宮料、六十枚春宮料、並六月、十二月各半分進之、六枚神今食新嘗祭等料各二枚、皆用由志木、)所須調布一丈六尺、紙卅八張、木綿大五兩二分、木賊大三兩、柳筥四合、三月中旬具數申省、仍令工手依例造備、訖毎十枚分爲一裹、(裹以白紙、結以木綿、)十裹盛柳筥、納漆櫃、(敷白布、)安漆牙牀案、(覆以黄表帛裏、結以縹帶二條、)訖六月一日、(十二月准此、)先進奏狀、内侍執奏、卽寮官四人執案、進立殿庭、少退而立、于時内侍宣持參來、寮官一人稱唯、共舁案進詣階下、執筥進内侍、訖舁案退出、(獻中宮亦准此、)但六月、十二月神今食、十一月新嘗料、各付縫殿寮、其東宮御梳裹、(裹以白紙、結以木綿、)訖盛柳筥、安高案、(敷白布、)先進啓狀、坊官執啓、卽寮官二人執案進立殿庭、退出、舍人受案送寮、

〔薩戒記〕應永二十九年十二月一日戊申、御贖物、内藏寮進御櫛、

〔延喜式十五内藏〕月別縫造御靴一兩、插鞋一兩、(已上御料、)錦鞋三兩、(中宮料、)雜給錦鞋五兩、御料盛漆櫃、(敷白布、)安漆牙牀案、(帊用黄表帛裏、結以縹帶二條、)毎月晦日先進奏狀二紙、(一紙御料、一紙雜給料、)内侍執奏、卽寮官四人舁案、奉進藏人所、訖卽退出、(中宮准此、)但雜給料盛柳筥進内侍、六月、十二月神今食、十一月新嘗料、別插鞋一兩送縫殿寮、(不御祭所之時、以雁鼻沓代插鞋、)

縫作雜履料

靴一兩料、牛革練絲二分、漆四勺、膠一兩二分、麻油一合、酢五合、(中略)

雜染

紫染綾一百疋、(深紫廿疋、淺紫八十疋料、)絹一百六十疋、(深紫卌疋、淺紫百廿疋料、)帛卌疋、(淺紫纈料、)絲二百絇、(深紫、淺紫各七十絇、深滅紫、淺滅紫、中滅紫、各廿絇料、)錢十二貫文、篩廿口、(新絹一匹二丈、口別四尺、)(中略)

右每年起二月一日、至五月卅日、依件染畢、以寮仕丁充駈使、其染手二人各給橡帛衣一領、(別三丈)調布袴一腰、(別七尺)褌一條、(別六尺)染女四人、各橡帛衣一領、褌一條、(長並同上)但纈料絲准量所須充、

〔新儀式五臨時〕內藏寮修御諷誦事

親王公卿、或御近親、或有殊功者、歿後修追福法事、內藏寮奉宣旨修御諷誦、助已上一人、爲勅使令修之、(近衞次將、殿上侍臣、亦爲勅使、)

〔北山抄一年中要抄〕正月上子日供若菜事(內藏寮、內膳司各供之、)

〔公事根源上正月〕供若菜　上子日

內藏寮ならびに內膳司より、正月上の子日是を奉る也、

〔公事根源中四月〕更衣　一日

けふは衣がへなれば、(中略)御服は御なをし御ぞ、すゞしのあやの御ひとへ御はりばかま、內藏寮よりたてまつる、

〔公事根源下十月〕亥子餠　上亥日

此餠は內藏寮よりそなへ奉る、朝餉にてきこしめす、

〔薩戒記〕應永二十九年十月三日辛亥、(今日亥日、內藏寮進餠、)

〔新儀式四臨時〕召雅樂寮物師等令奏音樂舞等事

補任

時剋著御座、大臣依召參上、爰伶人發音樂、王卿依次參上侍座、內藏寮給王卿以下侍臣等饌、侍臣益送、

〔政事要略二十八年中行事〕十一月丁酉賀茂臨時祭事

入夜使等歸參、○中略內藏寮辨備酒饌、

〔西宮記臨時五〕行幸　城外

內藏入錢餌袋、如常

〔十訓抄十一〕天曆の御時、延光卿藏人頭にて、御おぼえことにおはしけり、○中略召有ければ、いそぎ參給へるに、年比はをろかならずたのみて過つるに、口惜き事は、藤原雅材と云學生作たる文のいとおしみあるべかりけるを、奏せざりけるこそ、いと憑がひなしと被仰ければ、理申限なし、やがて藏人たるべき由仰下されけるを、小倉舍人して觸遣すに、家を尋かねて、通所を聞出て告たりける、雅材出仕すべき樣もなかりけるを、君聞召て、內藏司に仰て、其よそほひを給はせける、

〔禁秘御抄中〕藏人事

藏人給御衣、只時被給ナドハ不及子細、初參之時、可然人子ナドノ外不給也、昔天曆御時雅材給裝束自內藏寮調進、○下略

〔禁秘御抄下〕雪山

初雪日仰六位藏人令取所見參、○中略藏人進見參、給祿、內藏寮絹、大藏省布也、

〔官職秘抄上〕諸寮頭　內藏頭有權　華族四位殿上人任之、但妻妾爲下品者不任之、凡此職撰人也、近代爲三品昇進之路故也、自權頭轉任例、長直、兼輔、自助轉任例、安方、希世、五位任之例、相職、二度任之例、文山、權頭可然諸大夫任之、且無其人者不任之、○中略　同助權○中略　內藏　經藏人式部民部丞、五位、幷一道者任之、六位任例、紀冬雄、菅原千葉、藤原善行、○中略　同允大少

大舍人〈中略〉　内藏〈中略〉　已上臨時内給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分、尤爲難、問者生任例、（中略）〈内藏、藤爲季、〉　五位例、〈内藏、錦信理、自餘不違毛擧、〉　諸道擧任例、〈内藏、藤親賴、自餘不違毛擧、〇中略〉　同屬〈大少〉

大舍人〈中略〉　内藏〈中略〉　已上臨時内給、諸道所々擧、問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、

〔職原抄 上〕内藏寮

頭一人　四位五位殿上人、擇其人任之、於禁中爲重職、又世俗説、妻室凡卑之人不任之、專知御服等事故也云々、　權頭一人　諸大夫五位任之、諸寮權頭中、内藏木工左右馬、殊爲宜也、　助〈權助〉　近代多者、醫陰二道任之、勤仕賀茂祭内藏使者也、　允〈大少〉　六位侍等可任之歟、但强不望之、　屬〈大少〉

〔百寮訓要抄〕内藏寮

頭〈倉部郎〉　可然四位の殿上人是に任べし、天子の御服を奉行する人なれば、口傳も故實もなき人は任ずべからず、殊に人をえらばるゝ職也、　權頭　地下の五位是に任ず、昔はかやうの官に可然人等皆任せり、近頃は皆零落す、　助〈倉部員外郎〉　是も地下の五位六位、今は沙汰に不及事也、　權助　おなじ

〔光臺一覽 二〕内藏頭〈中略〉　五位四位通任也、公家官なり、

〔日本書紀 三十持統〕七年四月辛巳、詔内藏寮允大伴男人、坐贓降位二階、解見任官、

〔續日本紀 十一聖武〕天平五年十二月庚申、從五位下路眞人虫麻呂爲内藏頭、

〔三代實錄 六清和〕貞觀四年正月十三日壬午、從五位上守内藏權助藤原朝臣安方爲助、從五位下行内藏大允藤原朝臣積善爲權助、

〔三代實錄 四十五光孝〕元慶八年三月九日庚午、從五位下源朝臣希爲内藏助、

〔中右記〕永長二年〇承德元年四月三十日、入夜於仗座有小除目、上卿中宮大夫、内藏頭予〇藤原宗忠、中略辨内覽、〇中略

近曾有松容之次御氣色云、汝欲成内藏頭如何、予奏曰、從往古以來、爲藏寮藏者、或藏人頭、或辨官、近衞將任來、雖然近代御服美麗、納寮不足、仍被任顯綱朝臣後、次八人皆以受領也、然者如下官者、誠不堪上、又事闕歟、再三辭申、重仰云、尤可然、但只成親昵人、全無所隔欲召仕、仍一日任國信朝臣頭中將也而已進辭書、甚無本意事也、汝猶縱雖一兩月可成此職者、重申云、非可申左右、只隨勅命許也、偏任命於君、今者在叡慮、列親昵人中、是大慶也、奏此旨後遂被成也、

追尋見内藏頭次第處、誠多親昵之人也、三守大臣、西三條大臣、常行大將、泉大將、顯忠右大臣、忠義公、恒德公、件人々經此職、爲諸大夫者、纔二三人許歟、此外多以君達也、今出於叡慮被推任、又有何事哉、偏所恐只闕御服、雖然勵微力致沙汰許也、

〔言繼卿記〕永祿十三年〇元龜元年五月廿五日、早旦自新大典侍殿、倉部可參候由有之間參之處、内々申人候上階之事、昨日勅許分云々、但内藏頭之事、如何之由仰云々、近代闕連綿也、應永十八年、鹿苑院殿〇足利義滿御判、子々孫々一家可存知之由有之以來、不渡他家之由申入云々、尚予可參申入者也、自長橋局上階勅許之由文有之、則參御禮申入了、并倉部闕之事如此勘進之、重而御返事之由有之、

内藏頭闕之事

顯言卿寶德四四十七從三位此次至寛正三十二十五十一ヶ年　言國卿文明十六十十一從三位此次至長享三七廿六ヶ年

定言明應三七卅卒此次至同九十二廿六七年　言綱卿永正十五六廿六從三位此次至同十七正一二ヶ年

言繼天文六五廿二從三位此次至同廿二十二十五十七ヶ年

以上

〔諸家家業記〕裝束

高倉　山科

史生

山科家は裝束色目之事を沙汰有之、夫故代々必內藏頭ニ被任候、先例ニ而服御調進之事ニ被預、

〔明和新增京羽二重 一〕外記方

內藏寮　兼造酒司從五位下造酒佑　德岡內藏少允大江盛林

藏人方

內藏寮官人　從六位下深尾丹波權掾藤原維禎　同　正七位下山本備前掾大江正芳

〔慶應元年都仁志喜 二下〕外記方

內藏寮　正六位下造酒佑　德岡內藏大允大江盛禮　同官人　從六位上多村伊勢介清原久成

正七位下同近江介同久直　從六位下深尾內藏少允藤金長

藏人方

內藏寮官人　從六位上深尾內藏少允藤金長　從六位下垣內尾張介同匡盛

〔續日本紀 四元明〕和銅元年七月丁酉、內藏寮始置史生四員、

〔日本後紀 十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、○中略加左右辨官各四員、內藏寮二員、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、○中略內藏寮十人、權二人○中略內藏、○中略史生待宣旨補任、

〔西宮記 臨時一〕諸宣旨

諸司史生(中略)內藏、內匠、上卿奉勅下式部丞、

〔儀式 十〕奉山陵幣儀

內藏寮差史生四人、令賫幣物於縫殿寮南庭候之、

〔明和新增京羽二重 一〕外記方

內藏寮史生　正七位下好田內藏大屬藤原安信　同　正七位下神足內藏少屬清原武員

藏人方

內藏寮史生　正七位下東川修理少屬藤原直興　同　無位矢田齋宮藤原常德

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

內藏寮史生　澤渡近江大掾紀廣繁　正七位下好田大和大掾藤原信之

藏人方

內藏寮史生　正七位下東川播磨少目菅助一

寮掌

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年五月廿五日戊寅、內藏寮置二寮掌二員一、其衣粮、以二藏部料内一給之、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、○中略寮掌使掌司掌各二人、但中務治部民部兵部大藏彈正中宮修理等、並待二本司移一補之、自餘者判補之、

藏部

〔儀式六〕元正朝賀儀

內藏寮允屬各一人、大藏省丞錄各一人、各率三執二威儀柳筥一藏部八人上列立、在二大舍人北面一東西去一丈、內藏在レ東、大藏在レ西、納二錦袋一懸レ頸抱レ胸、

〔延喜式十五內藏〕凡番上史生四人、藏部十八人、勅旨舍人廿五人、別米一升、

御藏守

〔延喜式十五內藏〕凡御藏幷門守火長等月粮、寮請班給、

舍人

〔延喜式十二中務〕時服

內藏寮八十五人(中略)舍人廿人

工人

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年四月癸亥、是日詔曰、○中略宜二且罷二造宮勅旨二省一、○中略但造宮勅旨雜色匠手、隨二其才幹一、隸二於木工內藏等寮一、餘者各配二本司一、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

織二錦綾羅等一手廿人

右人等、緣二神龜五年七月廿一日勅一、置二內匠寮雜匠手之內一、今大納言正三位紀朝臣古佐美宣、奉レ勅件

織手等、隨其事類、割屬內藏寮、

延暦十五年八月二日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

典履二人　百濟手部十人　典革一人　狛部六人　百濟戶　狛戶

右件元大藏省之所管、今右大臣宣、奉勅件人等、自今以後、宜隷內藏寮、

大同元年十月十一日〇又見職員令集解、類聚國史、

〔日本後紀十七平城〕大同三年七月庚子、停內藏寮御履長上一人、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

停止幷減定諸司等才長上事〇中略

內藏寮

典履三員　右減一員定二員

典革長上　造油絁長上　造御履長上　造御櫛長上

右四員並停止〇中略

以前被右大臣宣偁、奉勅件司等才長上數停止幷減定如件、永爲恒例、

大同三年十二月十五日

〔延喜式十五內藏〕雜作手卅三人

造御櫛手二人、夾纈手二人、﨟纈手二人、暈繝手二人、造油絁手二人、織席手一人、燒灰四人、燒炭二人、

作埴器四人、作陶器三人、作木器五人、採黃櫨一人、各日黑米二升、仕丁五十一人、日米二升、

染手五人、日米一升五合、

鹽總四斗九升三合五勺

使部

直丁
駈使丁

右寮中駈使雜作手等、依前件、

〔令集解 職員 三〕古記、及釋云、別記云、百濟手部十口、左京一番役五人、爲雜戸免調徭也、百濟戸十戸、左京六戸、紀伊國四戸、臨時召役、爲雜戸免調徭、

〔山槐記〕永曆元年十一月五日己卯、藏人左近將監來云、內藏寮御櫛生、一昨參上、其後令引五節櫛云云、

〔中右記〕永久二年三月七日壬午、從院〇白河召資清、〇中略其次被仰云、內藏寮御服張女、與伊豫守牛飼童有鬪亂事、問子細可申者、件輩明日召具可來由、仰資清了、

〔言繼卿記〕永祿十年六月廿八日、小川與七郎補御陵〇陵恐綾誤織手之、補任調遣之、春之分如此、

內藏寮下

小川與七郎宗久

右所被補御陵織手也、宜被免除諸役之上者、可專公役之旨、所仰出之狀如件、

永祿十年二月廿日　　目代 右兵衛尉重延判

〔言緒卿記〕元和五年五月廿五日丁未、織手七八補任遣候案文一、

內藏寮下　　吉勝男

宜補御寮織手

元和二年五月五日　　內藏頭藤原花押

同日ニ遣分、中西吉勝、同則房、錦屋宗次、久松喜次等也、

〔延喜式 十八 式部〕凡諸司使部者、〇中略內藏寮、陰陽寮、內匠寮、各十八人、

〔東大寺正倉院文書 一〕內藏寮解　申請月粮事

合米漆斛貳斗　鹽漆升貳合　庸綿貳拾肆屯

右直丁貳人、駈使丁壹拾人、厮壹拾貳人、幷貳拾肆人料、仕丁十二人、日別米二升、鹽二勺、厮丁十二人、人別綿二屯、

以前來十一月卅箇日料、依例所請如件、以解、

天平十七年十月十八日　正八位上行少屬安刀宿禰祜万

從六位上行允粟田朝臣關守

仕丁

〔東大寺正倉院文書一〕內藏寮解　申請月粮事

總貳拾參人、十二人仕丁、十一人厮丁、

合米陸斛玖斗陸升　鹽陸升玖合陸勺　庸布壹拾壹段

米參斛肆斗捌升人別日二升　鹽參升肆合捌勺人別日二勺　庸布陸段人別一段

右請甲賀宮仕丁陸人、厮丁陸人、合壹拾貳人料、

米參斛肆斗捌升人別日二升　鹽參升肆合捌勺人別日二勺　庸布伍段人別一段

右請久邇宮仕丁陸人、厮丁伍人、合壹拾壹人料、

以前來五月廿九箇日料粮、所請如件、以解、

天平十七年四月十八日　從七位上行大屬曾禰連

從六位下行允粟田朝臣關守

別當

〔小右記〕長元四年九月十四日己未、淸書事問、遣右大辨、報狀云、修理職、穀倉院、可充內府〇藤原教通之由、昨日關白被命者、土代充關白、余〇藤原實資、報云、內藏寮、修理職、穀倉三所、猶第一爲別當、就中攝政、關白、必爲三箇所別當、舊例勘文等指夾算、送大辨許、承平七年例爲後鑒、貞信公御例也、

用度

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

內藏寮胡麻油二斗八升七合、麻子油二升五合、二升、伊勢大神宮御鞍二具用途料、六升五合、麻子油二升五合、造年料御靴幷絲鞋等料、二斗、盛山陵幷所々荷前料、

雜載

〔延喜式三十八掃部〕諸司年料

內藏寮年料藍染所、席十枚、折薦十五枚、年料供御、幷雜給履屜料、小町席、其數臨時定之

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町

內藏一町近衞南、堀河西、

〔類聚國史七十八奉獻〕大同四年十月癸未、令內藏寮奉獻於東院、〇平城宴飮終日、賜五位以上衣被、

〔類聚國史三十二帝王〕天長五年六月己巳、御紫宸殿、賜飮群臣、召內藏寮錢三百貫、賜見參侍從已上有差、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十月癸酉、是日建禮門前張立三幄、置雜唐物、內藏寮官人及內侍等交易、名曰宮市、

〔三代實錄二十一淸和〕貞觀十四年五月廿日己丑、內藏寮與渤海客廻易貨物、

〔扶桑略記二十四醍醐〕延喜十九年七月十六日、交易唐物使藏人所出納內藏大屬當麻有業、獻孔雀、此唐人飽置求所送太宰大二也、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡內藏掃部寮官人已下、聽出入陣、

〔言成卿記〕慶應三年十月十五日、內藏頭〇藤原言繩申云、來春天皇〇今上元服、能冠頭左中辨勝長朝臣御內意云々、可爲內藏頭之處、當時公卿難被仰云々、舊例不在內藏頭被〇被下恐脫用字近衞少將多分今度被用藏人頭、全御新規云々、不可說不可說、萬端末代不足言乎、

〔新撰和歌六帖二〕うなひご　衣笠內大臣家良公

百敷やくらのつかさのふりうりにわれおさらじとつどふうなひこ

〔標註職原抄上末〕內藏は、〇中略職員令に、掌金銀、珠玉、寶器錦綾、雜綵氈褥云々、年料御服、とあるその綱にて、その目は、內藏式に、諸祭幣帛、諸陵幣、御齋會以下佛事の布施、大極殿の裝束の物、御中宮東宮の冠服等なり、これらの內にて、御服殊にむねたるものなるゆゑに、旁書にまづ載たる

なるべし、さてその損廢の物をば賣拂はるゝにや、夫木集にも、しきやくらのつかさのふり賣にわれおとらじとつどふうなひこゝといふ衣笠内府の歌、夏部に出づ、

○按ズルニ、此歌又夫木和歌抄、夏部、瓜ノ下ニ載セタリ、ふりハうりノ轉音ニテ瓜ナリ、大鏡卷七、道長ノ條ニ、ふりをこはゞうつはものをまうけよと申事、まことにある事なりト云ヒ、枕草子卷八、うつくしきものノ條ニ、ふりにかきたるちごのかほト云ヘルガ如シ、當時内藏寮ニテ、其園ノ瓜ヲ賣シコトノアリシナラン、

〔詠百寮和歌〕内藏頭

賣をぞ内の藏にはつみてける金銀にしき綾絹

縫殿寮

縫殿寮ハ、ヌヒドノヅカサト稱シ、又ヌヒノツカサト稱ス、御服ヲ供進シ、及ビ裁縫纂組雜染ノ事ヲ知ル、又内侍以下ノ十二司ニ男官ナキヲ以テ、其司ヨリ送ル所ノ女王、内外命婦、宮人ノ上日行事ニ據リ、其考第ヲ定メ總省ニ送リ、以テ黜陟ノ用ニ供ス、桓武天皇延暦十八年、陞セテ大寮ト爲シ、平城天皇大同三年、大藏省ノ縫部司、宮内省ノ采女司ヲ以テ、此寮ニ併セタリシガ、采女司ハ其後舊ニ復セリ、

〔倭名類聚抄五官名〕寮 職員令云、○中略縫殿寮、奴比止乃豆加佐

〔運歩色葉集奴〕縫殿頭ヌイノカミ 唐名尚衣 掖庭監 造縫

〔職原抄上〕縫殿寮唐名尚衣局

〔唐六典十一殿中省〕尚衣局奉御二人從五品上

沿革

周禮有司服中士二人、掌王吉凶衣服、辨其名物與其用事、戰國有尙衣尙冠之職、秦漢少府屬官、有御府令丞、掌供御服、○中略隋門下省有御府局監二人、大業三年分屬殿內省、其後又改爲尙衣局、

〔類聚國史 百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、縫部采女二司併縫殿寮、○又見職員令集解

○按ズルニ、采女司ハ弘仁三年二月庚戌復置アリシ事、日本後紀ニミユ、

廳舍

〔拾芥抄 中本百官〕縫殿寮朔平門北

〔儀式 八〕正月八日賜女王祿儀

其日內侍、於縫殿院點撿女王、

〔儀式 十〕奉山陵幣儀

縫殿寮南庭、立五丈幄一宇、

〔日本紀略 六圓融〕貞元元年五月十一日丁丑、子刻內裏有火、○中略中宮皇太子御縫殿寮廳、一品資子內親王出同寮、

〔延喜式 十五內藏〕奉諸陵幣、○中略

右陵墓幣料、○中略前一日晚、差史生四人、色別備賫、於縫殿寮南院候之、

〔西宮記 十二月〕一荷前事

內藏寮進幣料請奏、藏人奏下班幣料、治部省以解文進官、依例下宣旨、先於一日、藏人內侍已下、著縫殿寮幣殿、令裏備供物、

糸所

〔西宮記 臨時五〕一所々事

糸所在采女町北、獻藥玉之時、依請給料物等、縫殿別所也、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、祿法、○此爲藤原多子女御入內祿法、中略、

寮神

糸所　預一人〈一匹六丈絹〉　女孺六人〈各一匹絹〉　刀自四人〈各一匹絹〉　官人代一人〈一匹絹〉

〔延喜式十四縫殿〕寮神三座夏祭〈冬祭准此〉

御匣殿神一座

五色薄絁各三尺、絹二疋、綿二屯、絲二絇、納幣明櫃一合、〈其絹綿等、至冬祭賜物忌御巫、冬料亦至祭賜、〉酒二斗、饌食二案、脚別机四前、〈二盛幣料、二盛饌食料、〉井内膳司備、調布一端、〈敷机案二丈八尺、敷櫃一丈四尺、〉祝史料庸布二段、

縫殿神一座

木綿大八兩、酒二斗、米糯米各一斗、大豆小豆各五升、鰒五斤、腊乾魚海藻各六斤、

著酒神一座

五色薄絁各二尺、木綿大一斤、鮮物、〈直〉酒四斗、米三斗、糯米一斗、大豆小豆各五升、鰒五斤、腊乾魚海藻各六斤、物忌童女裝束絹一疋、〈夏料〉紫絹三丈、調綿二屯、〈冬料〉

以上三前神、四月十一月上卯日祭、前三日受件料物、

職員職掌

〔令義解一職員〕縫殿寮

頭一人、〈掌女王及内外命婦宮人名帳考課、謂内侍以下十二司之考課、即本司録上日行事、送於此寮、寮定考第、申中務省、以内侍司無男官故也、其縫女采女等考者、本司按定、直送中務、不由此寮也、〉及裁縫衣服、〈謂此雖御服、并爲賞賜、其縫司亦同也、〉纂組〈謂並綬屬也、〉事、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、使部廿人、直丁二人、

〔唐六典十一殿中省〕尚衣局奉御二人從五品上、〈○中略〉

尚衣奉御掌供天子衣服、詳其制度、辨其名數、而供其進御、

〔令義解一官位〕從五位〈○下階〉縫殿頭　從六位〈○上階〉縫殿助　從七位〈○上階〉縫殿允　從八位〈○下階〉縫殿大屬　大初位〈○上階〉縫殿少屬

〔拾芥抄中本官位相當〕從八位下　縫殿少屬

〔拾芥抄 中本官位唐名〕縫殿頭 尚衣奉御隷殿中省 掖庭令尚縫令 彩縫監內謁者監 御府監 助 裁縫小監掖庭監 允 尚衣直長掖庭丞 屬 尚衣令史掖庭令史

〔唐六典 十二內侍省〕掖庭局

令二人從七品下

詩之巷伯也、至秦爲永巷、漢武帝更名掖庭、有令丞、後漢掖庭令一人六百石、左右丞從丞各一人、掌後宮貴人采女事、魏晉並有掖庭令黃門令、而非宦者、後魏有掖庭監、北齊長秋寺統掖庭署令丞、隋內侍省統掖庭令丞各二人、皇朝因之、〇中略

掖庭局令掌宮禁女工之事、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

縫殿寮准大寮事

右被右大臣〇神王宣偁、奉勅、件寮加允一員、以置大少、宜准大寮、

延曆十八年七月廿一日

〔職原抄 上〕縫殿寮 掌裁縫事

頭一人 無權當相當從五位上唐名尚衣奉御 或掖庭令 彩縫監〇中略 助 權相當正六位下唐名尚衣少監〇中略 允 大少唐名少衣直長〇中略

屬 大少 唐名尚衣令史

〔延喜式 十四縫殿〕年中御服

春季 正月料、二月三月亦同 袍十領 白橡六領、淺紫四領、十一月一領、十二月二領、並用白、 料、絹十五疋四丈八尺、別一疋三丈四尺八寸 絲二兩二銖、別五銖〇中略

中宮

春季 正月料、二月三月亦同 袍十領 白一領、作目白橡九領、 料、白絹四疋一丈 別二丈五尺 絲一兩一分、別三銖〇中略

右四季御服並依前件、毎年依數從內藏寮受之、進例染縫、〈臨時定色〉月別一日十六日兩般均分供進、若數不等者上般加之、〇中略

元日御禮服、前二日受內藏寮褁脩、即付本寮同日節會賜親王已下被一百條、〈別一匹一丈五尺〉綿八百屯、〈別八屯〉預前縫備、當日持候、中務唱名、寮即頒給、其有殘者依例行之、

行幸供奉飼鷹胡桃衫料、細布人別二丈一尺、袴別八尺、袴緒料帛、以八尺充五腰、〈割五〉飼、大人別押帽子一口、〈別紺細布一尺〉紺細布衫一丈八尺、袴七尺五寸、縫縹絲五銖、〈衫別三銖、袴別二銖〉並毎年七月內縫備進內裏、〈其數臨時定之〉

〔百寮訓要抄〕縫殿寮〈尙衣局〉　衣服を裁縫事を主る也

〔延喜式〕〈十四縫殿〉裁縫功程

九條袈裟、長功日五人、中功日六人、短功日七人、〇中略

袍〈襖子及女袍、褌、六幅四幅袴准此〉、長功日大半人、中功日一人、短功日二人

〇按ズルニ、單衣、綿袴、單裙、斗帳等ヲ裁縫シ、新羅組、絞組等ヲ纂組スルノ功程アレド省略ス、

〔延喜式〕〈十四縫殿〉雜染用度

黃櫨綾一疋、櫨十四斤、蘇芳十一斤、酢二升、灰三斛、薪八荷、帛一疋、紫草十五斤、酢一升、灰一斛、薪四荷、

〇按ズルニ、雜染ノ事ハ本寮ノ掌ル所ニシテ、深紫、淺紫、深緋、淺緋、蘇芳、黃支子、綠、藍等ノ雜色ヲ染ムル用度アレド省略ス、

〔延喜式〕〈十四縫殿〉練絁用度

絁十疋、〈綾絹亦同〉藁五圍、薪百廿斤、絲卅絇、藁四圍、薪六十斤、

〔儀式〕〈五〉二季晦日御贖儀〈六月十二月〉

縫殿寮先以荒世和世御服、率女孺參入、即內侍縫司〈以縫上供之〉傳取、令藏人供奉訖、縫殿寮退出、

〔小野宮年中行事〕〈六月〉同日〈晦〉〇縫殿寮奉荒世和世御服事

補任

〔延喜式縫殿十四〕凡命婦位祿、宮人職事季祿馬料等請受頒給、季祿馬料春秋臨時有增減

凡定額女孺已下宮人已上春秋祿、請受頒給、

凡職事已下宮人已上造祿文料紙申省、春秋各五十帳

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

及宴將終、內藏縫殿兩寮分入延明門、置納被櫃於庭中、

〔兼胤公記〕寶曆八年正月廿三日、元日縫殿寮祿所再興ニ付、下行米五斗候由、兩局注進候、可相渡之由、飯室伊賀守へ申付了、

〔官職秘抄上〕諸寮頭中略縫殿中略已上可然諸大夫任之、近代諸道者任之、二度任縫殿頭例、隆宗中略同助權中略縫殿中略已上可任良家子、凡諸司助以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、中略同允大少中略縫殿中略已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分尤爲難、中略同屬大少中略縫殿中略已上臨時內給、諸道所々擧問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、

〔職原抄上〕縫殿寮

頭一人無權官　諸大夫五位任之　助權　同六位任之　允大少　六位侍任之　屬大少

〔百寮訓要抄〕縫殿寮

頭尙衣奉御　地下の四位五位、近頃は任る也、　助尙衣少監　是も今は下品の輩任る也　權助おなじ

〔續日本紀十一聖武〕天平五年十二月庚申、從五位下阿倍朝臣糠虫爲縫殿頭、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年七月丁未、從五位下石城王爲縫殿頭、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年三月辛巳、以從五位下藤原朝臣氏雄爲縫殿頭、

史生	寮掌	宮人女孺

〔三代實錄四十光孝〕仁和元年二月廿日丙午、刑部少輔從五位下藤原朝臣永善爲縫殿頭、

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

縫殿寮　從五位下西尾縫殿助源在忠　從六位上小森縫殿少允和氣政康

從六位上多田縫殿權助同好問

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略縫殿寮〇中略各四人、

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

縫殿寮史生　正七位下西原上總少掾藤安之　原武藏大掾平輝輿

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、〇中略寮掌使掌司掌、各二人、但中務治部民部兵部大藏彈正中宮修理等、並待本司移補之、自餘者判補之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

宮人卅人

右得大藏省解偁、此宮人元配縫部司、卽此省所管也、承前以此宮人縫作幄幔、而依去大同三年正月廿日詔書、廢縫部司、幷縫殿寮、自爾以降、無人縫造、因此幄々〇々恐幔誤等物、破損不少、望請依舊修縫者、大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂宣、奉勅割縫殿寮配大藏省、

弘仁二年二月十日〇又見日本後紀

〔延喜式十四縫殿〕凡女孺七十人月粮、不經女官厨、直受大炊寮、

凡地六町、左京北邊三坊一町、右京北邊二坊三町、一條二坊二町、四町賜內侍司東豎子、女孺、斉力婦、二町賜寮女孺已下、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、祿法、〇此爲藤原多子女御入內祿法、中略、

縫殿

女孺十六人　五位二人各六丈絹二匹、六位十四人各匹絹一匹、

油守十八人各疋絹一疋　今良十八人各疋絹一疋

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

停₂止并減₁定諸司等才長上₁事〔○中略〕

縫殿寮

染師二員　右並停止〔○中略〕

以前被₂右大臣宣₁偁、奉₂勅件司等才長上數停止并減定如₂件、永爲₂恒例₁、

大同三年十二月十五日

〔延喜式中務十二〕時服

縫殿寮十八人〔(中略)縫部四人、染手六人、〕

〔延喜式縫殿十四〕凡染手六人、各日黒米一升五合、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

今良捌人〔男一人　女七人　染手二人〕

右件人等依₂染縫₁〔○皇后字脱、下恐〕宮御服直₂縫殿寮、省宜承知預₂時服₁、

弘仁六年十月十三日

〔延喜式縫殿十四〕凡寮直今良廿四人、〔男二人、女廿二人、〕其衣服并粮米、不₂經₁主殿寮₁、寮家直受充、

〔延喜式式部十八〕凡諸司使部者、〔○中略〕縫殿寮〔○中略〕各十人、

〔延喜式縫殿十四〕凡仕女二人日功養物、勘₂納寮家₁充給、

〔類聚三代格一〕太政官符

應₂貢₁猿女₁事〔○中略〕

定₂猿女公氏之女一人₁進₂縫殿寮、隨₂闕卽補、以爲₂恒例₁、

染手縫部

使部

仕女

猿女

弘仁四年十月廿七日

〔儀式 五〕鎭魂祭儀

縫殿寮率猨女、升自東側階、

〔延喜式 十四縫殿〕年料雜物

柳筥四合、（盛御服料二合、盛雜給料二合、）刀子十五枚、絁一枚、釘五千一百六十枚、砥二顆、熨炭卅六石、擣衣料調布五端一丈、下繰綿一屯、縣絁緒苧十二斤、裁衣板六枚、（長五尺、厚三寸、）陶由加四口、染槽四隻、（已上二色、隨損請替、）樚轤杓四柄、水瓱麻笥四口、席三枚、（請內藏寮、）紙三百六十張、（上紙百卅張、凡紙二百卅張、）筆十二管、墨三挺、帛三疋一丈二尺、（一疋四丈八尺、盛擣案二脚帊料、一疋二丈四尺、熨被二領料、）縹帛八尺、（盛擣案四脚帊紐四條料、別二尺、）綿十屯、（熨被二領料、）絁四丈、（褌四條料、）細布十端一丈八尺、（九端、縫御服牀九脚敷料、一端一丈八尺、納御服厨子二基敷料、）黃端茵四枚、折薦二枚、長帖十枚、長席二枚、

三年一度雜物

黃絁四丈八尺、帛五疋、緋兩面一疋一丈六尺、生絁三疋五丈二尺、調綿十二屯、綵布八端、緋油絁四丈八尺六寸、貲布九端五丈四尺、絲十兩、白木脚別机二前、（各長三尺五寸、高三尺、）筥三合、（各方二尺、）裁板三枚、（各長五尺、廣二尺五寸、厚三寸、）

右御服所雜物依前件

染槽四隻、（各長一丈、）槽二口、（一口受一石、一口受五升、）水瓱麻笥四口、水麻笥五口、（各受三斗、）樚轤杓五柄、（大三、小二、）叩戸五口、

右御服染作所雜物依前件

御服床敷料、紫端疊四枚、（各長八尺、廣五尺、）兩面染覆三條料、兩面五丈七尺、（裏料生絹長同表、）雨覆三條料、緋油絁五丈七尺、（裏料生絹長同表、）緋綱六條（各長二丈、）料、緋絁一疋、調布一端二丈、（中子料、）黃覆一條（長八尺三幅、）料、黃絁二丈四尺、（裏料帛長同表、）雨覆一條（長同上、）料、緋油絁二丈四尺、（裏料生絹長同表、）同覆帶四條（各長八尺、）料、縹絁八尺、（四割、）柳筥二合、黑葛筥四合、（各方三尺、）筥覆四條（二條黃絁、二條油絁、）表料、黃絁二丈四尺、緋油絁二丈四尺、裏料、帛二丈四尺、生絹二丈四

尺、帷七條、（御衣床幷御衣韓櫃等覆料）料、帛三疋三丈三尺、東絁二疋、（座褥料）練絲五兩、（縫糸料）裁板二枚、（各長四尺、廣二尺、）熨板二板、（各長三尺五寸、廣二尺四寸、）熨斗二口、熨炭卅六斛、（請主殿寮、）擣衣料、調布二端二丈四尺五寸、下纏料、調綿一屯、席二枚、染槽六隻、漆手洗四口、（各受二斗、）水瓱麻笥五口、陶池由加四口、檜棹四枚、（各長二丈、）漆絁張廿具、樚櫨杓十柄、（大五、小五、）紺布端長疊八枚、短疊四枚、筆十二管、墨三挺、

右中宮御服所料依前件、女官申內侍、卽付辨官行、

凡洗御帳帷料物、申內侍給之、

〔延喜式 三十八 掃部〕諸司年料

縫殿寮、縫正月齋會講讀師等法服所、狹席四枚、縫新嘗會御服所、黃端短帖一枚、折薦帖四枚、席二枚、（通用十二月神今食、）六月十二月晦、裹御贖物料、葉薦二枚、（中宮東宮亦同）

〔延喜式 三十六 主殿〕諸司所請年料

縫殿寮油五升、（御服所、幷寮中十二月晦夜料、）

〔拾芥抄 中末 宮城〕諸司厨町

縫殿一町（正親町北、西洞院西一町、）

陰陽寮

陰陽寮ノ事ハ、方技部陰陽道篇ニ載セタリ

內匠寮

名稱

内匠寮ハ、ウチノタクミノツカサト稱シ、又タクミノツカサト稱ス、工匠技巧ノ事ヲ掌リ、以テ官司ノ用ニ供ス、聖武天皇ノ神龜五年、初メテ此寮ヲ置キ、中務省ニ隷屬セシム、光仁天皇ノ寶龜五年、大藏省ノ典鑄司ヲ本寮ニ併セ、平城天皇ノ大同三年、中務省ノ畫工司、及ビ大藏省ノ漆部司ヲ併セタリ、是ヨリ後此寮ニ置ク所ハ畫工、細工、金銀工、木工、造丹工、轆轤工等ニシテ、銀器、漆器、宮箱、輿車、几帳、屏風、玉石帶、笠撒等ヲ造リ、又殿舍ノ裝飾ニ從事セリ、而シテ是等ノ事ハ、後世多クハ木工寮、修理職ニテ掌リシカバ、本寮ハ大ニ其職ヲ失ヘリ、

〔倭名類聚抄五官名〕寮 職員令云、○中略内匠寮宇知乃多久美乃豆加佐

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

内匠寮(ウチノタクミノツカサ)

〔源氏物語一桐壺〕さとの殿はすりしきたくみづかさに、宣旨くだりて、になうあらためつくらせたまふ、

〔宣胤卿記〕永正三年十二月廿四日、頭辨狀到來、賴量朝臣申施藥院使事、可伺申文案、宣下案令見之、○中略施字如何可讀云々、不讀也、百官中不讀字多、内藏、内匠、造酒等類也、

〔下學集上官位〕内匠頭少府監

〔職原抄上〕内匠寮唐名少府

〔唐六典二十二少府監〕少府監監一人從三位

漢書百官表云、少府秦官、掌山海池澤之稅、以給供養、○中略王莽改曰共工、後漢復爲少府、○中略漢官解詁云、少府主供養陂池禁錢服御口實掖庭中宮、○中略太和末改少府爲大府、○中略至隋煬帝大業五年、始分太府爲少府監、○中略龍朔二年改爲内府監、咸亨元年復爲少府監、光宅元年、改爲尙方監、神龍元年復舊、○中略

少府監之職、掌百工技巧之政令、總中尚左尚右尚織染掌冶五署之官屬、庀其工徒、謹其繕作、少監爲之貳、

沿革

〔官職秘抄後附〕大藏省被官　典鑄司（寶龜五年、併內匠寮、）

〔類聚國史百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰云々、其畫工漆部二司、併內匠寮云々、○又見職員令集解、新抄格勅符抄、類聚三代格、

廳舍

〔大內裏圖考證二十三〕諸圖在藻壁門內北掖、造酒司西、右兵衞南、東西三十五丈、南北四十丈、○圖略

〔拾芥抄中末宮城〕諸院

漆室（內匠別所、在上西門北脇、今荒廢、）

職員職掌

〔令集解三職員〕釋云、神龜五年七月廿一日、新置內匠寮、管於中務省、彼格云、勅內匠寮、頭一人、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬二人、史生八人、直丁二人、驅使丁二十人、右令外增置、以補闕少、其使部以上、考選祿料、一同木工寮、宜付所司以爲恒寮、即入中務省管內之員、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年八月甲午、是日勅始置內匠寮、頭一人、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬二人、史生八人、使部已下雜色匠手、各有數、

○按ズルニ、此歲八月ニ甲午ナシ、本書ノ前後ノ文ヲ檢スルニ、錯簡アルニ似タレバ、八月甲午ノ四字ハ衍文ニシテ、上文ナル七月乙卯ノ事ナラン、乙卯ハ二十一日ニシテ令集解ト合ヘリ、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十一月丁丑朔、外從五位下日下部直安提麻呂爲內匠員外助、

〔職原抄上〕內匠寮

頭一人（無權官、相當從五位上、唐名少府監、○中略）　助（權、相當正六位下、唐名少府少監、○中略）　允（大少、唐名少府丞、○中略）　屬（大少、唐名）少府主事

〔拾芥抄中本官位相當〕正六位下（內匠助）　從七位上（內匠少允）　從八位上（內匠屬）　從八位下（內匠少屬）

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕內匠頭 少府監秦 尚方監晉 內府監唐 中尚史 少府錄事 中府主簿 助 四人 少府少監 中匠小令 允 中書丞 少府丞 屬 中尚史 中府 少簿 少府錄事

〔唐六典 二十二 少府監〕中尚署令一人從六品上

漢少府屬官有尚方令丞、後漢尚方令一人六百石、掌上手工作御刀劍諸好器物及寶玉作器、和帝時蔡倫爲尚方令、作祕劍皆有龍泉太阿之目、及諸器械靡不牢固、其後分爲中左右三尚方、魏氏因之、晉過江左唯置一尚方、哀帝以隸丹陽尹、孝威 ○威恐武誤 帝復舊、晉代掌造軍器、宋高祖踐阼以相府部配臺謂之左尚方、而本署謂之右尚方、令丞各一人、武 ○武上恐脫孝字 帝改右尚方曰御府、又置中署、隸右尚方、齊置左右尚方令丞各一人、梁置左中右尚方三令丞、其令並從九品、其後廢中尚方、唯存左右而已、陳因之、北齊太府寺管左中右三尚方、隋開皇中有內左右三尚方署、猶屬太府寺、內尚方令二人正八品下、掌諸織作、煬帝分屬少府、皇朝因置二人、省方字、但曰中尚左尚右尚、開元十八年省一人、升爲從六品上、○中略

中尚署令掌供郊祀之圭璧 ○註略 及歲時乘輿器玩、中宮服飾彫文錯綵珍麗之制、皆供焉、丞爲之貳、

〔儀式 六〕元日御豐樂院儀

前一日內匠寮官人、率雜工等構立御斗帳於豐樂殿高御座上、立軟障臺九基於高御座東西、五基高御座東西四間、一基當西一戸立、三基立殿西二間、淸暑堂東西、張調布爲蓋代、其下設御座、

〔延喜式 十七 內匠〕凡每年元正前一日、官人率木工長上雜工等、裝飾大極殿高御座、○註略 又甃立南庭白銅大火爐二口、備臺入鐵火袋 中階以南相去十丈、東西之間相去六丈、又建烏像寶幢等之處、差向工一人、其蕃客朝參之時亦同、元日高御座飾物收內藏寮、當時出用、幔臺及火爐收案、

凡正月齋會前一日、長上率雜工等、從圖書寮運高座具、構立大極殿、事了返送本寮、

凡諸節前一日、官人率雜工等、豐樂殿立軟障臺六基、三基立高御座東二間、一基立西一間、二基立母屋西二間、小安殿以信濃布

補任

張東隔蓋代、事了却收、倂臺障泥板方三丈、行幸之前二日令畫所繪、但蕃客之時畫方六丈、凡五月五日節前一日、武德殿構立斗帳又軟障臺二基、(立御座壇南西二間)以其神泉苑立斗帳亦同、但軟障十基、(御帳東西各五基)

凡五月六日、毬子廿九、(盛楊筥)預造備、騎射畢、即當武德殿南階西邊、允已上一人、率番上一人持候、隨殿上喚進之、

〔侍中群要十〕御殿修理

御殿有可修理所、仰內匠、但御格子可修理時仰內匠、(竹臺御障子同仰內匠)

〔職原抄上〕內匠寮(掌工匠事、但近代木工修理知其事、頗似無其實、)

〔百寮訓要抄〕內匠寮(少府)　物を作る事をつかさどる也

〔延喜式十七內匠〕銀器

御飯筥一合(徑六寸、深一寸七分、)料、銀大二斤八兩、炭一石二斗、和炭二石、油三合五勺、長功日十六人、(火工五人、燒爐工四人、磨夫四人、)中功日十九人、(工十四人、夫五人、)短功日廿二人、(工十六人、夫六人、)

○按ズルニ、漆器、筥箱、鏡劍、玉石帶、印章、輿車、几帳、屛風、笠撒等ノ功程等ヲ載セタレド、今省略ス、

〔官職秘抄上〕諸寮頭(中略)○　內匠(令外官)　已上可然諸大夫任之、近代諸道者任之、(中略)○　同助(權)(中略)○

內匠(中略)○　已上可任良家子、凡諸司助以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、(中略)○　同允(大少)(中略)○

內匠(中略)○　已上臨時內給、諸院宮給、文章生同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分尤爲難、(中略)○　同屬(大少)(中略)○　內匠(中略)○　已上臨時內給、諸道所々擧問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、

〔職原抄上〕內匠寮(令外)

頭一人(無權官)　諸大夫及諸道五位等任之　助(權)　同六位任之　允(大少)　六位侍任之　屬(大少)

史生
寮掌
工人

〔百寮訓要抄〕内匠寮

頭　是も地下の五位、醫陰兩道など任る也、今は造物の奉行などはせぬにや、　助　六位以下是に任す

〔續日本紀 聖武 十二〕天平九年十二月壬戌、從五位下池邊王爲内匠頭、

〔續日本紀 聖武 十六〕天平十八年四月壬辰、從四位下大市王爲内匠頭、

〔續日本紀 淳仁 二十四〕天平寶字七年正月壬子、從五位下陽胡毗登珍璆爲内匠助、

〔續日本紀 稱德 二十八〕神護景雲元年三月己巳、從五位下石上朝臣眞足爲内匠助、從五位下栗田臣公足爲員外助、

〔三代實錄 清和 七〕貞觀五年二月十日癸卯、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵爲内匠頭、

〔日本後紀 平城 十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、○中略 減内記二員、内匠寮二員、

〔西宮記 臨時 一〕諸宣旨

諸司史生〔中略〕内藏、内匠、上卿奉、勅下式部丞、

〔慶應元年 都仁志喜 二下〕官方

内匠寮史生　從六位下　狩野内匠大屬文信　新見内匠少屬秦恭勝

從六位下　狩野豐前目藤原義信

〔三代實錄 清和 七〕貞觀五年六月廿八日己未、内匠寮始置寮掌一員、

〔三代實錄 清和 十一〕貞觀七年九月五日癸未、内匠寮始置寮掌二員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

織錦綾羅等手廿人

右人等、緣神龜五年七月廿一日勅、置内匠寮雜匠手之内、今大納言正三位紀朝臣古佐美宣、奉勅件

織手等、隨其事類、制屬内藏寮、

延暦十五年八月二日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

内匠寮

長上工廿人、准從八位官、番上工百人、並取白丁、但入色人情願亦聽、使部一人、

右右大臣宣、奉勅改承前格、一依件定、永爲恒例、

大同三年十月廿一日

太政官符

定内匠寮雜工數事

長上廿三人　畫師二人　細工二人　金銀工二人　玉石帶工二人　鑄工二人　造丹一人　屏風一人　銅鐵二人　漆塗二人　木工二人　轆轤一人　捻一人

番上一百人　畫工十人　細工十人　金銀工十人　玉石帶工四人　銅鐵工十三人　鑄工四人　造丹工二人　造屏風工四人　漆塗工十人　木工廿人　轆轤工二人　捻工二人　革筥工四人　黑葛筥二人　柳箱工四人

右撿案内、太政官去年十月廿一日下式部省騰勅符、唯注長上番上之員、不辨色目、今所定如件、永爲恒例、

大同四年八月廿八日

〔延喜式中務十二〕時服

内匠寮一百卅四人(中略)才長上廿人、番上工一百人、

〔延喜式内匠十七〕凡番上工卅八人、各日黑米二升、

〔延喜式十八式部〕凡內匠寮雜工、自非本司申文、不聽輙遷他色、其年老身尩、不堪出仕、永許還鄉、即補其替、

〇又見內匠式

〔延喜式十七內匠〕凡史生以下雜工已上、給等第祿、五月十六日奏之、以庸布給之

使部

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

　內匠寮〇中略

　　使部一人

右右大臣宣、奉勅改承前格、一依件定、永爲恒例、

　　大同三年十月廿一日

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略內匠寮各十人、

雜戶

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年八月己丑、是日廢漆部八烟從公戶、

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

內匠寮油三升五合、造年料革筥料猪膏十五斤、造雜工等藥料

〔延喜式十七內匠〕凡粮米幷間食不仕料、宛寮中雜用、

雜載

〔延喜式十七內匠〕凡典藥醫師一人、令直於寮、

凡六衞府舍人各二人、令直於寮、

凡有可縫調之物者、移大藏省、不限多少、受令宮人縫、

〔詠百寮和歌〕內匠頭

木をきりて作れる物のよしあしは心の內の匠にぞある

畫工司

畫工司ノ事ハ、文學部繪畫篇ニ載セタリ、

内藥司

内藥司ノ事ハ、方技部醫藥篇ニ載セタリ、

内禮司

内禮司ハ宮内ノ禮儀ヲ掌リ、非違ヲ禁察ス、平城天皇大同三年、彈正臺ニ併セラル、

職員　職掌

〔令義解一職員〕内禮司

正一人、掌宮内禮儀、謂門籍以内禮儀、其外者、式部彈正掌也、禁察非違、謂若大臣彈正有非違者、内禮不得直禁、即錄所犯、申中務省、省更大臣之非違者移彈正、彈正之非違者、申大臣、各隨其狀、遞相糺正也、佑一人、令史一人、主禮六人、掌分察非違、謂主禮、錄取所察之非違、即令本司知正之、不得輙呵禁、使部六人、直丁一人、

〔令義解一官位〕正六位下階〇　内禮正　正八位上階〇　内禮佑　大初位下階〇　内禮令史

補任

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年正月戊寅、從五位下奈吳王爲内禮正、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年三月己巳、從五位下淨原王爲内禮正、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年閏六月乙巳、從五位下田中王爲内禮正、

主禮

〔續日本紀十三聖武〕天平十年九月庚子、内禮司主禮六人、始令把笏、

直丁

〔東大寺正倉院文書一〕内禮司解　申請直丁粮事

合貳人一人直丁
一人厮丁

米伍斗捌升奈良宮所請　鹽伍合捌勺久仁宮所請　綿貳屯厮料請奈良

以前來九月廿九箇日料、所請如件、以解、

天平十七年八月十八日　　佑正八位上小治田朝臣虫麻呂

〔享祿本類聚三代格 四〕詔、觀時改制、論代立規、往古相沿、來今莫革、故虞夏分職、損益非同、求之變通、何常準之有也、思欲省司合吏、少牧多羊、致人務於淸閑、期官寮於簡要、○中略內禮司併彈正臺、○中略主者施行、

大同三年正月廿日

古事類苑

官位部十三

令制官職九

式部省

式部省ハ、ノリノツカサト稱ス、ノリトハ禮法ヲ云フ、又字音ニテ、シキブシヤウト稱ス、朝廷ノ禮儀、文官ノ考選、祿賜ヲ掌リ、文官ヲ判補シ、功ヲ論ジ、賞ヲ行ヒ、學政ヲ總轄シ、學校ヲ管シ、秀才明經ノ貢人ヲ策試ス、

日本書紀天智天皇十年紀ナル沙宅紹明ノ註ニ、法官大輔トアリ、法官ハ即チ式部ニシテ、之ヲ以テ本省ノ始見トス、ナホ學校試驗等ノ事ハ文學部ニ載セ、其他考選敍任等ノ事ハ多ク政治部ニ散見セリ、

本省ノ被管ニ大學散位ノ二寮アリ、散位寮ハ、宇多天皇寛平八年、本省ニ併セラル、

名稱

〔倭名類聚抄 五官位〕省 職員令云、○中略式部省乃利乃豆加佐

〔朝野群載 六〕諸司訓詞

式部省(ノリノツカサ)

〔建武年中行事 正月〕七日は白馬節會なり、○中略仰云、の。ゝつ。か。さ。つは物のつかさめせ、式兵丞六位藏人つれにさぶらふすゝみて內辨のまへにたつ、

〔下學集 上官位〕式部卿(シキブキヤウ)吏部尚書(リホウ)

〔職原抄 上〕式部省當ニ唐吏部

沿革

〔本朝續文粹六奏狀〕從四位上行式部大輔藤原朝臣某誠惶誠恐謹言

請蒙天恩因准先例依當職并儒學奉公勞被敍一階狀、〇中略

抑紀傳道者卓躒於諸道、式部省者冠絶於八省、其中功効勝他之者某一人也、〇中略

大治六年正月四日　從四位上行式部大輔藤原朝臣〇敦光

〔日本書紀二十七天智〕十年正月、是月、以大錦下授佐平余自信、沙宅紹明、法官大輔

〔日本書紀二十九天武〕九年八月丁未、法官人貢嘉禾、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　乙丑、直廣參石上朝臣麻呂誄法官事、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、〇中略等奉勅改易官號、〇中略　式部省總掌文官考賜、故改爲文部省、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年五月壬午、從五位下阿倍朝臣毛人爲文部少輔、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政奏改官名、宜復舊焉、

廳舍

〔拾芥抄中本百官〕式部省朱雀門拔

〔類聚國史百七職官〕延暦廿一年十二月癸未朔、平城京地一町賜式部省、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年七月甲子、左大舍人寮、廢來已久、徒爲空閑處、勅中分其地、以西賜式部省、以東賜主稅寮、

〔延喜式十八式部〕凡親王任省卿臺尹、就曹司廳者、五位已上並立床前、六位已下磬折而立、就座訖、乃以次就座、其雜公文令錄疏取署、

〔延喜式十八式部〕凡諸司五位已上、朝堂無座者、皆毎朔日就省受點、散五位已上、亦准此、其停朝座月、有座無座、皆就曹司受點、但太政官不在此限、勘解由使亦同、毎旬一遣史生檢其直不、若不在者、隨除其日、

〔延喜式十九式部〕考問幷引唱

其日質明、省掌鋪設床疊於曹司廳幷省掌座東、共皆北面、

〔左經記〕長元七年十二月九日乙丑、式部丞季通來向語云、昨日著明經得業生課試所、相次有召參陣、及曉更給下名退出、先是大外記賴隆眞人、奉右府仰問云、省試日、儒者兩三臨向試場、教示字樣等於學生之由有披露、彼日爲撿士、定有所見歟、依實可申者、卽令申云、置床子正廳北廂東第三間、錄床子同第四間也、　十七日癸酉、大外記賴隆示送云、去八日、奉右大臣宣云、去月廿日省試、學生一兩降居於牀子、儒者一兩立壁外人眼通事之由有其聞、召問省官、可令申實否者、卽召問撿事丞橘季通、申云、正廳北廂有省官座、以南簷爲學生座、

〔永昌記〕天永元年三月十九日丁巳、有省試事、乃相具朝隆向省、〇式部門、〇註略擬生乘車、廻朱雀門壇下並立、〇中略學生等後群來列立幔外、(廳屋前三間曳幔、屛跡曳之、東南有幔門、)〇中略氏院生徒三人入小屋、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕應令散位藤原朝臣仲義修造式部省正廳幷南門、西門、南面築垣壹町、拜任最前要國事、

右得彼省去四月廿八日解狀偁、得仲義欵狀偁、謹撿案內、依諸司修造功任諸國受領吏者、承前之例也、爰當省者、布政之場、歷試之砌也、旣先舍屋破壞顚倒之時、募受領之功、致修造之營、古今之間、蹤跡多存、方今件正廳之屋、朽損顚倒、南門西門、已以無實、南面築垣、又以破壞、而仲義早拜典厩之官、再爲管國之吏、雖從遂要凋弊之境、共勵勸濟公文之勤、縱雖无所募、何不任宰吏、況申成功、誰謂非據者、今加覆審、所申有實、抑當省、去天治元年之比、可被注損色之由、經天裁之處、依同年十二月十七日宣旨、官使諸司相共檢注、言上損色幷功程已畢、其後先抽至要舍屋等、可令成功輩修造之由、度々奏聞先畢、今依彼欵狀、重所言上也、望請天裁、因准先例、今件仲義、依修造之功、被拜任受領吏最前闕者、右少辨藤原朝臣宗成傳宣、權大納言藤原朝臣宗忠宣、奉勅依請者、

大治三年六月五日　左大史兼算博士能登介小槻宿禰奉

〔兵範記〕仁平四年（○久壽元年）四月廿日壬寅、今日秀才兩人（基業、繼季、）獻策、（○中略）未剋題者式部權少輔公賢入自東腋門、本省典幷史生以下迎向、前行敘正、輔著後廳饗座、

〔兵範記〕仁平四年（○久壽元年）六月廿日壬寅、貢士等登省也、（○中略）大卿（○式部大輔）著後廳座、

〔日本紀略〕（五冷泉）安和二年七月廿二日丁卯、今夜大風暴雨、發屋折木、廿三日戊辰、風猶不止、（○中略）式部省錄曹司顚倒、

〔兵範記〕仁平四年（○久壽元年）四月廿日壬寅、今日秀才兩人（基業、繼季、）獻策、（○中略）問頭宣旨、幷郡事屋申文外題等、已到來本省云々、申剋後廳盃饌事了、權少輔引率省官等著本省、（依有未剋丞郡事屋跡、任舊基立諸司幄行此事、）

〔朝野群載〕（八別奏）式部省

請被殊蒙天恩因准先例令正六位上行備中大掾藤原朝臣章貞以私物造築當省南面垣五段依其成功歸本姓惟宗遷任少錄闕狀、

右得章貞欵狀偁、謹撿案內、申請別功遷任要官者、承前之例也、近則刑部錄中原章永、造築當省垣五段遷拜少錄、（○中略）

永久五年正月廿六日　正五位下行少輔藤原朝臣

從四位上行大輔菅原朝臣

〔朝野群載〕（八請奏）式部省

請殊蒙天恩因准先例依正六位上行刑部少錄高橋朝臣宗廣以私物築進當省築垣一町成功被遷任少錄闕狀、

右得宗廣欵狀偁、謹撿案內、居諸司口分之輩、築進當省築垣、遷任少錄者、承前之例也、爰宗廣以省奏申下成功宣旨、築進築垣一町、去々年十一月日、請諸司覆勘已了、（○中略）

元永三年月日

權少輔從五位下兼行中宮少進能登權守藤原朝臣

正五位下行少輔兼阿波介藤原朝臣

從四位上行大輔兼文章博士菅原朝臣

〔中右記〕寬治三年正月廿五日、未時許、式部省正廳燒亡、是失火云々、

〔百練抄八高倉〕治承元年四月廿八日亥刻、火起自樋口富小路、火焰如飛、○中略式部省南門大膳職勸學院等、拂地燒亡、

省印

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部治部○依一本補二字民部、○中略印各一面、

職員 職掌

〔令義解一職員〕式部省管寮二

卿一人、掌內外文官名帳、謂任授簿外、更有名帳、其雜色亦可有名帳也、考課、謂考者、考校也、課者、諸司職掌所課之庶事也、言考一年功過、必先校所職之修不、故曰考課、其考課令所謂課者、爲課試之義、此條更簡試貢人之文、故不得重爲課試之義也、有選敍、謂選者、選官也、敍者、敍位也、禮儀、謂朝廷之禮儀也、版位、謂朝賀及祭祀、定群臣幷百官列位之版也、位記、校定勳績、謂勳績、省功也、不限文功武功也、論功封賞、謂論其功勞、或封或賞也、朝集、謂諸國朝集使、依考選及補任郡司之事、集於此省、學校、謂大學也、策試貢人、謂策試秀才明經之類也、祿賜、謂位祿季祿、及臨時給賜也、假使、謂假者、除六假外、皆是也、本司判訖、即申式部也、使者、如巡察覆囚使之類是也、補任家令、謂先銓擬申官、然後乃補任也、功臣家傳田、謂有功之家進其家傳、省更撰修、事、大輔一人、少輔一人、大丞二人、掌勘問考課、餘同中務大丞、少丞二人、掌同大丞、大錄一人、少錄三人、史生廿人、省掌二人、使部八十人、直丁五人、

〔令義解一官位〕親王三品四品八省卿　諸王諸臣正四位階○下七省卿　正五位階○下七省大輔　從五位階○下七省少輔　正六位階○下八省大丞　從六位階○上八省少丞　正七位階○上八省大錄　正八位階○上八省少錄

〔二中歷七名官〕式部卿吏部尙書大常卿　輔吏部侍郎考功郎中大常少卿　丞吏部郎中大常丞考功員外郎　錄吏部主事大常主簿

〔拾芥抄中本官位唐名〕式部卿吏部尙書李部大常卿大常卿　輔吏部侍郎大常少卿今號李部大小卿、考功郎中、　丞李部郎中考功員外郎司勳郎

中常丞　大　錄　李部主事大常主簿

〔唐六典二吏部〕吏部尚書一人正三品

周之天官卿也、漢舊儀云、尚書四人、爲四曹、一曰常侍曹、二曰二千石曹、三曰民曹、四曰客曹、成帝增置三公曹、爲五曹、其常侍曹主丞相御史公卿事、後漢光武、又分爲六曹、常侍曹爲吏部曹、主選擧齋祀事、漢末又改吏部爲選部、專掌選擧事、靈帝以梁鵠爲選部尚書、魏改選部爲吏部、歷晉至宋孝武大明二年、置二吏部尚書、廢五兵尚書、尋復舊名、齊梁陳後魏北齊、皆曰吏部尚書、後周依周官、置大冢宰卿一人七命、隋復曰吏部尚書、然此官歷代班序常尊、不與諸曹同也、漢官儀、尚書秩五百石、次補二千石、晉令、吏部尚書五時朝服、納言幘、進賢兩梁冠、佩水蒼玉、乘軺車皂輪、袁子正書曰、尚書佩契刀囊、執版、加簪筆焉、自魏至梁、並第三品、梁秩加至中二千石、後定十八班、班多爲貴、吏部尚書班第十四、諸曹尚書班第十三、陳梁隋、吏部尚書、並正第三品、皇朝因之、掌文官選擧、龍朔二年、改爲司列太常伯、咸亨元年、復爲吏部尚書、光宅元年、改爲天官尚書、神龍元年、復故、○中略

吏部尚書侍郎之職、掌天下官吏選授勳封考課之政令、凡職官銓綜之典、封爵策勳之制、權衡殿最之法、悉以咨之、其屬有四、一曰吏部、二曰司封、三曰司勳、四曰考功、尚書侍郎總其職務、而奉行其制命、

〔唐六典十四太常寺〕太常寺卿一人正三品

唐虞之時、伯夷作秩宗、典三禮、皐夔典樂以敎胄子、周官大宗伯卿一人、掌建邦天神人鬼地祇之禮、秦曰奉常、典宗廟禮儀、至漢高祖、名曰太常、惠帝復曰奉常、景帝又曰太常、漢制以列侯忠孝敬愼者居之、秩中二千石、王莽改曰秩宗、後漢太常、掌禮儀祭祀、及行事掌贊天子、大射養老大喪皆奏其禮儀、每月前晦察行陵廟、幷選試博士、奏其能否、魏因之、晉太常、置功曹主簿五官等員、品第

三、銀章青綬進賢兩梁冠、五時朝服佩水蒼玉、宋太常用尙書、亦轉爲尙書、如（〇如通典作好）遷還曹尙書領護等、齊因之、梁天監七年、象四時置十二卿、太常宗正司農爲春卿、太常位視金紫光祿大夫、班第十四、陳因梁、後魏太常與光祿勳衞尉爲三上卿、位從一品下、北齊太常卿、（〇卿當作寺）掌陵廟群祀儀制天文術數衣冠之屬、太常卿第三品、後周爲宗伯、隋太常寺、卿一人、正三品、皇朝因之、龍朔二年、改爲奉常、咸亨元年復舊、光宅元年、改爲司禮、神龍元年復故、（〇中略）

太常卿之職、掌邦國禮樂郊廟社稷之事、以八署分而理焉、一曰郊社、二曰太廟、（〇註略）三曰諸陵、四曰太樂、五曰鼓吹、六曰太醫、七曰太卜、八曰廩犧、總其官屬、行其政令、少卿爲之貳、

〔唐六典吏部二〕考功郎中一人從五品上

漢官儀曹郎二人、掌天下歲盡集課、有（〇後漢書註引漢官儀有作事）尙書郎曹、有考功郎中一人、宋齊並置功論郎中、梁有秩論侍郎、並考功郎中之任也、北齊有考功郎中、隋文帝置考功侍郎、煬帝改爲考功郎、皇朝改爲考功郎中、龍朔二年、改爲司績大夫、咸亨元年復故、（〇中略）

考功郎中之職、掌內外文武官吏之考課、

〔唐六典吏部二〕司勳郎中一人從五品上

周官有司勳上士二人、凡有功者、司勳詔之、後周夏官有司勳上士一人、掌六勳之賞、隋文帝立司勳侍郎二人、煬帝改爲司勳郎、武德初、爲司勳郎中、龍朔元年、改爲司勳大夫、咸亨二年復故、（〇中略）

司勳郎中、員外郎、掌邦國官人之勳級、

〔本朝文粹序十一〕左丞相花亭遊宴和歌序　菅三品

于時秋也、（〇中略）於是喚堪和詞者十有二人、賜其席於潺湲之東西、蓋憐秋之易過、吏部員外大卿菅原文時不期而會矣、

〔江吏部集人倫中〕李部大卿（〇菅原輔相）述沈滯懷、忝賜玉章、問聲相應、敢押本韻、

詩情何事太丞仍、爲是郎潜不得昇、周老晩成君莫歎、宋生秋思我先興、仙禽契翮期千里、碩鼠藏身謝五能、菅氏江家除累代、末孫職冷謝孫弘、

〔玉勝間四〕李部王記

李部王の記といふふみの名の李字、心得がたし、西宮記北山抄などに引れたるには、吏字をのみかゝれたり、台記などにすら、吏字をかゝれたり、李は後に誤れるものなるべし、

○按ズルニ、吏部ヲ李部ニ作ルハ、管子法法篇ニ、皐陽爲李ノ註ニ、古治獄之官、作此李官、李同理トアルト、漢書公卿百官表ノ、長吏ノ下ノ顔師古ノ註ニ、吏理也トアルトヲ觀テ其義ヲ知ルベシ、又我國ノ書ニ在リテモ、本朝續文粹卷二ニ載スル所ノ富家殿勅答ニハ、居燮李陰陽之重任、トアリテ、理ヲ李ニ作レリ、亦傍證ニ供スベシ、

〔續日本紀八元正〕養老二年八月庚戌、以從四位上藤原朝臣武智麻呂爲式部卿、○中略從五位下波多眞人與射爲員外少輔、

〔續日本紀八元正〕養老四年十月戊子、從五位下大伴宿禰祖父麻呂爲式部少輔、從五位下巨勢朝臣是人爲員外少輔、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年二月丁卯、○丁卯恐丁丑誤左中辨從四位下大伴宿禰家持爲兼式部員外大輔、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年九月甲午、以從四位下藤原朝臣雄依爲式部員外大輔、

〔親王家系譜〕伏見殿

邦房親王正親町帝御猶子　天正十二正十五、三品中務卿　年月日、二品式部卿

〔職原抄上〕式部省

周禮天官大宰之職也、國家典章、皆是此官所統也、本朝文官除授考選事、今猶掌之、

卿一人相當正四位下唐名吏部尚書○中略　大輔一人權一人、相當正五位下唐名吏部大卿、又云吏部侍郎、或考功郎中、○中略　少輔一人權一人相當

（從五位下、唐名吏部郎中、又吏部員外郎、或大常少卿、○中略）大丞二人（相當正六位下、唐名吏部郎中）少丞二人（相當從六位上、丞又云侍郎、○中略）錄（大小）（相當正七位上、唐名吏部主事／相當正八位上）

〔令義解四考課〕銓衡人物、（謂、銓衡者、銓、量也、衡、平也、人物者、猶云人也、言、司選之於才能、猶銓衡之於錙銖、故論言也、）擢盡才能、爲式部之最、（謂少輔以上、○中略）

揚清激濁、（謂、激、清也、言清廉之人在下第者、襃而進之、貪濁之人處上考者、貶而降之類也、）襃貶必當、爲考問之最、（謂式部兵部丞、）

〔唐六典吏部二〕凡考課之法、有四善、○中略善狀之外有二十七最、○中略二曰、銓衡人物、擢盡才良、爲選司之最、三曰、揚清激濁、褒貶必當、爲考校之最、

〔西宮記臨時二〕下式部省宣旨

敍位下名　除目下名召名　停任復任（郡司復任、不經奏之間、官以上宣仰官掌、復任以傍官掌申下、）補諸司一分以上事　諸國品官以上計歷權任事（可附宣旨文、）　二合他色（以一分補非違類、）　諸國撿非違使事（謂他色宣旨也、）　郡司事（亦復任、）　帶劍事（近代不給、或給之、）省可勘申文、上卿或給辨、辨令省錄令勘申、返進上卿、奏定之後、上卿召丞給了、省卿下學生登省宣旨之時、兼日先奏事由、勅許了、召省錄仰之、但任省卿之後、先例有其限云々、

〔傳宣草下〕一下式部省宣旨

文官敍位下名（節會之時、內辨下之、）　同除目下名事　同停任事　同復任除目事　直物時文官勘文事

除目之後、二合停任事（執筆大臣召里第給之、）　三局史生事（先下辨官、勘給否之後下之、）　諸司史生事　一分召事（諸國史生也）

節會日不就列參上事（外記傳宣）

〔續日本紀六元明〕和銅六年四月丁巳、制、銓衡人物、黜陟優劣、式部之任、務重他省、宜論勳績之日、無式部長官者、其事勿論焉、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月戊戌、凡遷任之人、奏任以上者、以名籍送太政官、判任者、式部銓擬而送之、

〔令義解四選敍〕凡任官、(中略)舍人、史生、使部、伴部、帳內、資人等、式部判補、

〔續日本紀三文武〕大寶三年十一月癸卯、太政官處分、巡察使所記諸國郡司等、有治能者、式部宜依令稱擧、有過失者、刑部依律推斷、

〔延喜式十八式部〕凡選任者、奏任以上者、省注可用人名、申送太政官、但官判任者、銓擬而申太政官、

凡雜色輩、頗有耐書算者、省課試、補任諸司史生、

〔續日本紀四元明〕和銅二年十月甲申、制凡內外諸司考選文、先進辨官、處分之訖、還附本司、便令申送式部兵部、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年十一月丁未、太政官處分、武官醫師使部、及左右馬監馬醫、帶仗者考選、及武官解任者、先例並屬式部、於事不便、自今以後、令兵部掌焉、但正身依舊在寮上下、

〔延喜式十八式部〕凡除目簿案一通、除目後五日內、加勘合進辨官、

〔三代實錄八清和〕貞觀六年四月七日癸亥、式部兵部兩省、奏成選擬階簿、天皇不御前殿、有勅於省令行、

〔百寮訓要抄〕式部省　內外の文官の事をつかさどる、兵部は武官をつかさどる、式部は文官をつかさどる也、選敍といひて、昔は人の才能をえらびて官職をさづけし也、さやうの輩をも此省にて先試らるゝ也、昔は一分めしの除目とて、此省にて諸國の史生などを任せられし也、凡天下の大事を奉行する省也、

〔詠百寮和歌〕式部卿

上下の人の心をこゝろ見てその品々に引入てまし

大丞

つたへくる人のおしへに順てならひしまゝをためしてぞ行

〔續日本紀二文武〕大寶元年五月癸酉朔、太政官處分、王臣五位已上上日、本司月終移式部、然後式部抄

錄、申送太政官、

〔延喜式十八式部〕凡諸司五位已上、朝堂無座者、皆每朔日就省受點、（散五位已上亦准此）其停朝座月、有座無座皆就曹司受點、但太政官不在此限、勘解由使亦同、（每旬一遣史生、檢其直不、若不在者、隨除其日、）

〔儀式五〕天皇卽位儀

宸儀初見、執仗者俱稱警、式部錄以下省掌已上、共稱面伏、群官磬折、諸仗坐、

〔弘化御卽位次第〕御卽位次第

宸儀初見、諸仗稱警、式部稱面伏、（近代不稱之）群臣磬折、內辨不立、

〔延喜式十八式部〕凡五位以上侍宴、衣冠不正、容儀違禮者、遣錄糺之、但殿上侍臣、不在此限、其在朝堂者、四位以上遣史生已上、五位追喚其身、隨狀敎喩、

〔延喜式四十一彈正〕凡朝庭儀式、衣冠形製、臺幷式部、總知糺正、

〔文德實錄七〕齊衡二年正月癸卯、前山城守從五位下藤原朝臣松影卒、松影刑部少輔從五位下星雄之子也、○中略天長四年爲式部大丞、時東宮僚屬、妙選名流、松影風望著聞、遷爲春宮少進、還復式部大丞、時當朝會、嵯峨皇子源朝臣常、緣勅帶劍、式部詰以未知詔旨、不聽、皇子愧赧而歸、以故天皇赫怒、貶黜式部官人、左轉松影爲彈正少忠、

〔延喜式十八式部〕凡彈正在朝堂失禮儀者、省加敎正、

〔延喜式四十一彈正〕凡臺有所犯者、式部省加敎正、

〔延喜式十八式部〕凡賜宴蕃客者、辨官史省錄、並就會所撿察諸事、

〔延喜式十八式部〕凡擬使者、丞申大臣之後、其名簿令錄進太政官、史生進辨官、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應隷相撲節事

補任

右撰格所起請偁、相撲之節、諸衞供事、進退之儀、須隷兵部、而承前之例、式部兼攝、稽之恒典、可謂乖違、伏望准據正月十七日、五月五日、兩度節會、令兵部省執當者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔官職秘抄 上〕八省卿　中務　式部○中略　以上必以親王任之、但家隆卿任中務卿、是公卿兼式部卿、非承前之通規、○中略

同輔大少有權○中略　式部　大業之中、撰人授之、於大輔者、雖昇參議散三位、不去之、於少輔者、敍留于四位例、始自菅人置權大輔之時、不置權少輔、二度任權大輔例、敦宗○中略

同丞大少○中略　式部　兵部丞、以公卿二合、諸司助、文章得業生、文章生任之、多被置成業者一人、又於藏人所者、雖非二合助任之、○中略

同錄大少○中略　式部○中略　已上他省錄諸司二分任之、或文章生任之、不似他錄、殊有清選、必可任外記史之故也、自式部錄遷任例、林相門

〔除目抄〕闕官寄物無禮紙年月

諸官隨闕載之、○中略　又式部輔之中、大少輔之間、一官必令闕之、然而同不取闕、是聖廟令任給之故、一闕必置之、

〔職原抄 上〕式部省

卿一人　近代親王四品已上任之、人臣任之希例也、凡當職其寄異他、毎年於本省行諸國一分召也、一分召者、任諸國史生之名也、史生謂之一分、內給、院宮大臣已下參議已上皆有年給、式部卿行之也、近代其禮久絕畢、件日者、式部卿乘庇差絲毛車、殿上丞一人、乘結唐尾馬前驅云々、　大輔一人　近代儒中二位三位帶之、　少輔一人　儒中之重職也、仍他人不任之、　大丞二人　少丞二人　當省

并民部丞、謂之二省丞、必可給爵者所任之也、但式部者、可然諸大夫云眞家子是也任之、民部者、侍之中宿老重代輩任之、號民部大夫五位是也、假令撿非違使受領等次也、抑當省丞者、依闕所任也、若無其闕者、以大丞上臈令敍爵、次第轉任、加新任者也、又敍爵時乃去其職、　錄大少

〔百寮訓要抄〕式部省

卿吏部尚書　李部　第一の親王是に任す、更よのつねの人臣は任せぬこと也、親王も宿老の人極官にてあるべし、大輔吏部大卿　儒家の人の第一の侍讀など任すべし、殊才名ある人の任る也、儒家ならでは任せず、權大輔　是も可然儒者任すべし　少輔吏部少卿　是も儒道の人任すべし　權少輔　同前、權大輔のある時は任せられず、　大丞李部郎中　地下六位の可然者是に任す、六位藏人などの兼官、つねの事也、　少丞　同前

〔百寮訓要鈔別註〕三官職秘抄曰、式部卿必以親王任之、是公卿兼式部卿非承前之通規トアレバ、是必親王ノ任ジ玉フ官ナルコトニ定マレルナリ、後醍醐天皇御時、建武中ニ洞院公賢公ヲ式部卿ニ任ゼラレシコトアレドモ、全ク邂逅ノ事ニテ、秘抄ニ承前ノ通規ニ非ズトアルノ義ナリ、但シ秘抄ニ、承前ノ通規ニ非トアルハ、参議橋是君卿、式部卿ヲ兼任セラレタルコト公卿補任ニアリ、此事ナリ、又職原抄ニ、近代親王四品以上任之トアレドモ、親王ヲ式部卿ニ任ゼラレタルハ、桓武ノ朝ニ、一品葛原親王ヲ當卿ニ任ゼラレシヨリ以來ハ、臣下ノ任例ハナク、親王計ヲ任ゼラレタリ、然レバ近代トモ言ヒガタキモノカ、

○按ズルニ、第一ノ親王ヲ式部卿ニ任ズルコトハ、清和帝皇子貞保親王、宇多帝皇子敦實親王、醍醐帝皇子重明親王等ノ中務卿ヨリ式部卿ニ遷リシガ如キヲ以テ知ルベシ、

〔光臺一覽〕二式部卿　一人　唐名吏部尚書、四品以上親王任之、公家も任之、大輔、權大輔、少輔、權少丞、錄、右同斷、○輔公卿、丞錄地下、

〔二中歷〕二職歷式部大輔天長以後

(淳和)南淵弘貞　藤原吉野　藤原愛發　三春春上(善ィ原)　安倍吉人　朝野鹿取　(仁明)藤衞　滋野貞主　伴善男　(文德)藤貞守　南淵年名　(清和)春澄善繩　菅原是善　(陽成)橘廣相　藤春景　(宇多)平惟範　紀長谷雄　(延喜)安倍興行　藤菅根　藤興範　藤淸貫(歷少甫成業)　三善淸行　滋野良幹　三統理平　橘公統　平伊望　(朱雀)藤元方　藤在衡　大江維時　(村上)藤在昌　橘直幹　(冷泉)藤重光　源保光　(文章生)菅文時　大江齊光　高階成忠　菅輔正　大江匡衡　(三條)藤廣業　(後一條)藤資業　(後冷泉)藤國成　平定親　藤實綱　藤實政　大江匡房　藤正家　菅在良　藤敦光　藤顯業　藤永範(三位)　藤俊經(參議)　藤光範　藤親經　菅在高　藤賴範　菅爲長　藤光範　菅淳高

〔續日本紀　二文武〕大寶二年正月乙酉、以從三位大伴宿禰安麻呂爲式部卿、

〔續日本紀　四元明〕和銅元年三月丙午、從四位上下毛野朝臣古麻呂爲式部卿、

〔續日本紀　八元正〕養老二年八月庚戌、以從四位上藤原朝臣武智麻呂爲式部卿、正五位上穗積朝臣老爲大輔、從五位下中臣朝臣東人爲少輔、

〔續日本紀　十六聖武〕天平十八年十一月壬午、從五位上巨勢朝臣堺麻呂爲式部大輔、從五位下大伴宿禰犬養爲少輔、

〔文德實錄　一〕嘉祥三年五月甲午、二品仲野親王爲式部卿、

〔文德實錄　四〕仁壽二年五月戊子、主計頭從五位下都宿禰貞繼卒、貞繼、大和介外從五位下桑原公秋成子也、○中略貞繼累歷吏部、詳知舊儀、後到此職者、必相訪習行之、

〔文德實錄　五〕仁壽三年六月癸亥、一品大宰帥葛原親王薨、親王者、桓武天皇之第三子、嵯峨太上天皇之兄也、○中略弘仁元年九月爲式部卿、○中略十四年十月、更爲彈正尹、天長七年正月兼爲常陸太守、八月更爲式部卿、○中略親王少而惠了、歷覽史傳、常以古今成敗爲戒、爲人恭儉、不傲於物、久在式部、諳職務、凡在舊典、莫不達練、擧朝重之、

〔文德實錄七〕齊衡二年正月癸卯、前山城守從五位下藤原朝臣松影卒、〇中略松影四入式部、閑練故事、其進退容儀、得於天性、今到吏部者、皆推松影爲楷模焉、

〔文德實錄九〕天安元年十一月戊戌、右京大夫兼加賀守正四位下藤原朝臣衞卒、衞、贈左大臣從一位内麻呂第十之子也、〇中略七年〇天長正月爲式部少輔、見有不法、必評論之、不避貴戚、帝甚器之、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年二月十日癸卯、以二品兵部卿兼上野太守忠良親王爲式部卿、上野太守如故、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月廿三日庚子、從五位下行皇太后宮大進高向朝臣公輔爲式部權少輔、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年正月十七日戊午、二品仲野親王薨、親王者、桓武天皇之第十二皇子也、〇中略嘉祥三年遷爲式部卿、〇中略親王能用奏壽宣命之道、音儀詞語、足爲模範、當時王公、罕識其儀、勅參議藤原朝臣基經、大江朝臣音人等、就親王六條亭、受習其音詞曲折焉、故致仕左大臣藤原朝臣緒嗣授此義於親王、親王襲持、不失師法焉、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年三月九日庚午、二品行兵部卿本康親王爲式部卿、

〔類聚符宣抄七〕式部省

請被當省之丞不依拜任次第依著座恪勤預榮爵狀

右謹撿案內、頃年之例、除目以後、依無著座之官人、勤擁恒年之公事、大少之丞四員不闕、著座之輩一人無聞、職員雖具、廳座尙空、旬月多移、歲年自隔、爰諸道得業生等、雖滿七年之限、難歷一度之試、又擬文章生者、每年有奉春秋之試、明爲朝典、載在式條、然而二三箇年之間、纔所行者一度也、是以成業之企、皆臨暮年、奉公之期、各待何日、又一分除目、是年中大事也、常無著座之丞、頻致淹遲之累、自餘雜預〇預恐務誤停滯繁多、夫拜除者、不異往年之拜除、時節者、亦非新設之時節、而昔人速以著座、近代每稱無日、又或定著座之日、兼經奏聞、適臨期日之來、虛有過送、縱雖有障、猶似無勤、斯由偏依任年之次第、自

預榮爵之光華也、望請天裁、當省之丞、先盡著座之者、亦拔恪勤之倫、然則吉日早晩者、自繫人之運命、聽事儀式者、應無政之稽留、勸激勵於公庭、垂明規於聖代、謹請處分、

應和元年六月廿日　　從四位下行少輔大江朝臣重光

從四位下行權大輔兼東宮學士橘朝臣

從四位下行大輔兼尾張權守橘朝臣直幹

卿三品元長親王

左大臣○藤原實賴宣、奉勅、式部省奏云、當省丞、不依拜任之次第、依著座恪勤、將預榮爵者、可依奏行之由、宜仰彼省、但敍位奏者、定大丞之中、轉任奏者、定少丞之中、大少之間、不得相混者、

應和元年八月五日　　大外記兼主税權助周防介御船宿禰傳説奉○又見朝野群載

〔類聚符宣抄 七〕從二位行大納言兼民部卿藤原朝臣在衡○宣、奉勅、式部少丞正六位上藤原朝臣雅材、紀朝臣文利等、去年閏十二月廿五日奏狀云、請以每月殿上上日、被下本省狀、謹檢案內、任諸司候殿上之者、皆以殿上上日、下加於本司、而此省丞獨不勞申下、是則不勘上日、不受省奏、偏依年勞次第等、預敍位之故也、而今任省申請之旨、始自去年、只依上日之優劣、有定給奏之先後、雅材等、須日々罷向致其勤績、而或候御物忌、或忽有承行、如此之時、不能赴省、但至於陣頭、給宣旨等、其役已繁、然則奉公之勤雖多、參省之日自少、望請天裁、始從拜省官之日、以每月殿上上日、被下於省、將致勤績者、又應和元年八月五日下彼省宣旨云、省奏云、當省之丞、依著座恪勤、將預榮爵者、可依奏行之、但敍位之奏者、定大丞之中、轉任之奏者、定少丞之中、大小之間、不得相混者、依奏狀尋事情、依著座恪勤、預敍位轉任之旨、雖無先例、省奏所下也、今依恪勤之優劣、定省奏之先後、然則已謂恪勤、盍用上日、文利等所申、理誠可然、須始從任省丞之日、以殿上每月上日、加載本省上日、又後年若有候殿上之輩、同准此例者、宜仰彼省者、

應和四年三月五日　大外記兼主税權助備後介御船宿禰傳説奉

〔本朝文粹六奏狀〕請特蒙天恩依當省幷儒學勞被敍從三位狀　菅三品

〔一代要記六三條〕敦儀親王(中略)長和二年六月廿二日、任中務卿、□月□日、遷式部卿、

當省大輔任參議之例

大江維時卿　勞七年　藤原元方卿　勞十年三年權大輔、七年大輔、　三善清行朝臣　勞八年四年權大輔、四年大輔、　平伊望卿　勞五年已上權大輔　藤原興範朝臣　勞四年　曾祖父是善朝臣　勞三年二年權大輔、一年大輔、○中略

謹撿故實、爲式部大輔者、數年之間、必拜參議、雖至晚者、不過十年、近古之例、略載于右、文時當省之勞殆廿年、古來曾無如是淹沈者、頃年略引先例、頻訴蒼穹、卑聽不達、抱愁而止、須猶一心、請拜參議、○中略文時誠惶誠恐謹言、

天元三年正月五日正四位下行式部大輔兼文章博士尾張權守菅原朝臣文時上

〔大鏡三左大臣師尹〕式部卿の宮○敦康と申は、故一條院の一のみこにおはします、その宮をばとしごろそちの宮と申しを、小一條院○敦明の式部卿にておはしましゝが、東宮にたゝせ給ふ、あくところに、そちのをばのかせ給ひて、式部卿の宮と申しぞかし、○中略うせ給ひてのち、又この小一條院の御さしつぎの二のみや、あつのりの親王をこそは、いはくらの式部卿とは申めれ、

〔榮花物語八初花〕内の一宮○一條子敦康御元服せさせ給て、式部卿にとおほせど、それは東宮の一宮○三條子敦明さておはします、中務にても二のみや○敦明弟敦儀おはすれば、たゞ今あきたるまゝに、今上の一宮をば、そちの宮とぞきこえける、

○按ズルニ、令制ニテハ式部省ハ中務省ノ下ニアレド、此時ハ式部ハ中務ノ上ニ位セルガ如シ、此文ヲ觀テ知ルベシ、

〔朝野群載九功勞〕正六位上行大炊權助源朝臣敦經誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例遷任式部丞狀

右敦經謹撿案內、以諸宮給任諸司助之者、遷式部丞、承前之例也、近則玄蕃助藤原時家、典藥助藤原親信、雅樂助源能明等是也、爰敦經永長二年依太皇太后宮御給、拜任當職、仁恩未浴、八箇年于玆、就中爲當時子息之者、朝撰異他、望請天恩因准先例、遷任式部丞者、將勵奉公之節、敦經誠惶誠恐、謹言、

長治元年四月廿九日　　正六位上行大炊權助源朝臣敦經

〔本朝續文粹七書狀〕上啓　兩箇所望事

一式部大輔闕事

右件官、不慮之外、忽有其闕、以愚庸質、自然爲位階第一儒士、但當如此之道理、且是天運之令然也、雖不可盡其理、下﨟儒士等、旁致濫望云々、仍所披鬱望也、式部大輔、偏被用儒士之後、不論才學之淺深、不謂本官之優劣、唯拙上﨟所任來也、今當其運、其理一也、〇中略　敦光恐々謹言、

保安三年十二月九日　　大學頭藤原敦光狀

謹々上頭中將殿御直廬

〔朝野群載八別奏〕式部省

請被特蒙天恩、因准先例、以正六位上行肥後大掾中原朝臣盛尙、拜任少錄申官史替、

右得盛尙款狀偁、謹撿案內、爲諸國掾之輩、依省奏拜任少錄者、古今之例也、近則齋部孝重自美作掾任少錄是也、盛尙專携拾螢之學、早任司馬之官、採擇之處、誰謂非據者、省加覆審、所申有實、望請天恩因准先例、以盛尙被拜任少錄、將令致奉公之節、仍注事狀、謹請處分、

大治二年正月十六日　　少輔　權少輔　權大輔　從四位上行大輔　卿闕

〔本朝續文粹六奏狀〕正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例被兼任參議中辨闕狀

一式部大輔雖不兼大辨藏人頭任參議例

先祖興範朝臣　延喜十一年十二月、任參議、式部大輔如元、勞三年、

三善清行朝臣　延喜十七年正月、任參議、元式部大輔、勞三年、

藤原元方卿　天慶二年八月、任參議、元式部大輔、勞八年、

大江維時卿　天曆四年二月、任參議、式部大輔如元、勞五年、

菅原輔正卿　長德二年四月、任參議、式部大輔如元、勞六年、

藤原廣業卿　寬仁四年十一月、任參議、式部大輔如元、勞四年、

已上雖不兼大辨藏人頭、依式部大輔勞、不過十年、皆所拜任也、延喜以往之例、寔繁有徒、不遑毛擧、

一敦光身勞

保安三年十二月、任式部大輔、勞十年

一式部大輔兼任辨官例

紀長谷雄卿　寬平十年二月、任右大辨、式部大輔如元

藤原清貫卿　延喜十年四月、任式部大輔、左大辨如元

粟田左大臣　天慶三年三月、任式部大輔、左中辨如元

大江齊光卿　天元四年十月、任式部大輔、右大辨如元

源保光卿　安和二年三〇三一本作四月、任式部大輔、右中辨如元

平定親朝臣　天喜二年十一月、任式部大輔、左中辨如元

藤原實政卿　永保二年四月、任式部大輔、左大辨如元

大江匡房卿　應德四年二月、任式部大輔、左大辨如元、

已上辨官式部大輔兼任之例如此、寛平以往其例甚多、

右敦光謹撿史漢人之所以官學者、欲上至卿相、下爲州牧之故也、古人格言今亦如此、爰某去寛治八年、對策及第、承德二年、任式部丞、謂獻策勞、則三十八年、計新敍勞、亦三十四年、○中略方今八座之闕、其數有五、倩謂昇晉之運、自當頑魯之身、其故何者、參議之選者、藏人頭、大辨、式部大輔、近衞中將等也、苟爲春官、盍參朝議、○中略望請天恩因准先例、被兼任彼等闕、將誇學校之興紹矣、敦光誠惶誠恐謹言、

大治六年正月十九日　正四位下行式部大輔某

〔親長卿記〕文明七年九月十七日、今日有小除目、○中略無品親王邦高任式部卿、

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

式部省　從六位下谷口式部少丞平胤長

史生

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略式部省廿人、○中略其式部民部兵部三省史生者、試棘景迹、然後取用、亦不得輙補畿外人、

〔延喜式十一太政官〕凡式部民部兵部等省史生、每年一人任諸國目、

〔慶應元年都仁志喜二下〕外記方

式部省史生　從六位下三崎常陸大掾源義祥　正七位下永田大和大掾源忠俊

書生

〔日本後紀五桓武〕延暦十六年二月癸酉、太政官史生從七位下安都宿禰笠主、○中略敍位二階、○中略式部書生無位雀部豐公一階、以供奉撰日本紀所也、

〔職官志二〕按書生、蓋其初取善書人、臨時助史生、故於令條不載也、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十月乙巳、式部省書生員定卅人、省試手跡、令得出身、

省掌

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、官掌省掌、○中略各二人、但中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正、中宮、修理等、並待本

司移補之、自餘者判補之、

〔續日本紀 稱徳 二十九〕神護景雲二年十一月癸未、是日被任官者、多不會庭、省掌代之稱唯、於是詔式部兵部省掌、始賜把笏、

〔延喜式 式部 十八〕凡省內雜色、每年進新限、一千擔、其三百擔分充春宮坊、自此以外不得更徵、若有違徵者、省掌解任、永不敍用、

扶省掌

〔延喜式 式部 十八〕凡省掌之外、置扶省掌二人、令習儀式、以備其闕、即任大學寮權史生、把笏行事、

使部

〔延喜式 式部 十八〕凡諸司使部者、〇中略式部省卅人、

直丁

〔東大寺正倉院文書 二〕式部省移民部省

合見直丁幷厮丁壹拾肆人 八人直丁、六人厮丁、

應請米肆斛陸斗肆升 人別日二升　鹽肆升陸合肆勺 人別日二勺　綿拾貳屯 人別二屯

省請米二斛二斗二升　鹽二升三合二勺　綿捌屯

右直丁四人、厮丁四人、合八人料、

奈良宮米一斛七斗四升　鹽一升七合四勺　綿六屯

右直丁三人、厮丁三人、合六人料、

甲加宮米五斗八升　鹽五合八勺　綿二屯

右直丁一人、厮丁一人、合二人料、〇中略

以前省幷所管二寮直丁厮丁等、來九月廿九箇日料粮、所請如件、故移、

天平十七年八月廿一日　正六位下行大錄勳十二等建部君豐足

正六位上行大丞石川朝臣豐成

用途

〔續日本紀 文武 三〕慶雲元年七月庚子、公廨祿給式部省大學散位等寮、

雜載

〔延喜式 四十 彈正〕凡臺召式部省者、只可稱省、若省召臺者、可稱疏名、

〔類聚符宣抄 九〕左大臣宣、奉勅文章得業生菅原資忠策文、幷擬文章生試詩等所納式部省厨子、去十月廿六日夜、爲盜人有被打破之聽、因茲召問省官之日、所進日記云、雖打破厨子、所納策文試詩、先日所加監試官人署封、各不相誤者、宜依例令評定者、

安和元年十一月十七日　少外記坂上望城奉

〔類聚符宣抄 七〕被大納言正三位源朝臣雅信宣偁、奉勅式部大丞藤原貴清、同知章等、互有愁申、宜仰彼省令勘申貴清等著座上日等者、

貞元二年正月五日　大外記兼備前介大藏朝臣弼邦奉

卽日仰大錄大春日弘辰了

大學寮

大學寮ノ事ハ、文學部學校篇ニ載セタリ、

散位寮

名稱

散位寮ハ、內外文武ノ散位ノ事ヲ總掌スル所ニシテ、兼テ諸國朝集使ノ事ヲ掌ル、此寮ハ、宇多天皇寬平八年ニ式部省ニ倂セラル、散位ノ事ハ位階篇ヲ參看スベシ、

〔官職秘抄 後附〕令內被減省之官

式部省被官

散位寮（サンヰノ／トネノ）寬平八年倂式部省

沿革

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應併置諸司并省官員事〇中略

散位寮〇併式部省 中略

寛平八年八月廿九日〇本書年月闕、據寛平八年九月七日官符補、

職員職掌

〔令義解 一職員〕散位寮

頭一人、掌散位（謂文武散位、皆總掌之也、）名帳、朝集、（謂諸國朝集使、皆此寮判其上日也、）於事、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、史生六人、使部廿人、直丁二人、

〔令集解 三職員〕穴云、文武散位、皆可在此司、但時行事武散位在兵部也、〇中略 釋云、辨官式部兵部并散位寮、共掌朝集、其辨官式部兵部者、申雜務并考選事、唯散位寮爲判上日也、官判其上日者、式部點於申官、請外官下國耳、內相定也、

〔令義解 一官位〕從五位（階〇下）散位頭　從六位（階〇上）散位助　從七位（階〇上）散位允　從八位（階〇下）散位大屬　大初位（階〇上）散位少屬

補任

〔續日本紀 八元正〕養老五年三月辛未、以從五位下路眞人麻呂爲散位頭、

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年三月十九日辛巳、從五位下山口宿禰文雄爲散位頭、

〔三代實錄 四十七光孝〕仁和元年二月廿日丙午、散位從五位下藤原朝臣有世爲散位頭、

史生

〔日本後紀 十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略 減內記二員、內匠寮二員、散位寮二員、

直丁

〔東大寺正倉院文書 二〕式部省移民部省

合見直丁并廝丁壹拾肆人（八人直丁、六人廝丁、）〇中略

散位寮請米一斛一斗六升　鹽一升一合六勺

右直丁二人料

以前省幷所管二寮直丁厮丁等、來九月廿九箇日料粮、所請如件、故移、

天平十七年八月廿一日　正六位下行大錄勳十二等建部君豐足

正六位上行大丞石川朝臣豐成

治部省

名稱

治部省ハ、ヲサムルツカサト稱シ、又字音ニテチブシヤウト稱ス、姓氏ノ事ヲ掌リ、五位以上ノ繼嗣、婚姻ヲ知ル、故ニ特ニ解部ヲ置キテ、譜第ノ諍訟ヲ鞠問セシム、又雅樂、祥瑞、外蕃、僧尼、國忌、諸陵、喪葬、贈賻等ノ事モ亦此省ノ掌ル所ナリ、

本省ノ被管ニ、雅樂玄蕃ノ二寮、諸陵、喪儀ノ二司アリ、而シテ聖武天皇天平寶字元年、諸陵司ヲ陞セテ寮ト爲シ、平城天皇大同三年、喪儀司ヲ兵部省ノ鼓吹司ニ倂ス、

〔倭名類聚抄五官名〕省　職員令云、○中略治部省、乎佐牟留都加佐

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

治部省（ヲサムルツカサ）

〔下學集上官位〕治部（チブ）卿禮部（レイホウ）尚書

〔職原抄上〕治部省當唐禮部

沿革

〔日本書紀二十九天武〕十年九月甲辰、詔曰、凡諸氏有氏上未定者、各定氏上、而申送于理官（ヲサムルツカサ）、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　乙丑、直大肆大三輪朝臣高市麻呂誄理官事、

廳舍

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等奏、勅改易官號、○中略治部省、僧尼賓客、誠應尙禮、故改爲禮部省、
〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年十一月丁卯、從三位氷上眞人鹽燒爲禮部卿、
〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政、奏改官名、宜復舊焉、

〔拾芥抄中本百官〕治部省宮城內神祇官南

〔左經記〕長元七年八月九日丙寅、及晚景自艮風漸扇、入夜東風大吹、所々舍屋幷中門等、多以損破、
十九日丙子、可修造風損所々事、○中略治部省 廳屋七間東四間參河、同日收、加賀、次三間能登、

省印

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部、治部、○治部二字依一本補民部、兵部、刑部、大藏、宮內、春宮印各一面、
〔續日本紀三十光仁一〕寶龜二年正月壬戌、自天平神護元年以來、僧尼度緣、一切用道鏡印印之、至是復用治部省印、

職員職掌

〔令義解一職員〕治部省管寮二司二
卿一人、掌本姓、謂猶言姓、其姓氏者、爲人根本、故連言也、繼嗣、謂五位以上嫡子也、繼嗣令定五位以上嫡子者、陳牒治部是也、婚姻、謂五位以上嫡妻也、爲重繼嗣故、兼知其生死(死原作服、據令集解改、)也、祥瑞、喪葬、贈賻、謂官位曰贈、財貨曰賻、凡贈位者、中務作位記、此省受取付死人家也、賻貨者、死人本司申太政官、官下此省、省更勘申、自大藏省下給也、國忌、謂先皇崩日也、諱、謂諱、避也、言皇祖以下名號、諱而避之也、及諸蕃朝聘、謂國君自來曰朝、使卿大夫曰聘、事、大輔一人、少輔一人、大丞一人、少丞二人、大錄一人、少錄三人、史生十人、大解部四人、掌鞫問諸第爭訟、謂窮問諸第之爭訟、定其族姓之次序、其解部是爲別司、不在員也、少解部六人、掌同大解部、省掌二人、使部六十人、直丁四人、
〔令義解一官位〕親王三品四品八省卿 諸王諸臣正四位階○下 七省卿 正五位階○下 七省大輔 從五位階○下 七省少輔 正六位階○下 八省大丞 從六位階○上 八省少丞 正七位階○上 八省大錄 正八位階○上 八省少錄 治部大解部階○下 從八位階○下 治部少解部

〔二中歷 官名七〕治部卿 大常卿禮部尙書 輔 大常少卿禮部侍郎 丞 大常丞禮部郎中 錄 大常主簿禮部主事

〔拾芥抄 官位唐名中本〕治部卿 禮部尙書大常卿 輔 大少四人大常小卿 禮部侍郎 丞 禮部郎中員外郎 大常丞大常主簿 禮部主事

〔小右記〕寬弘二年四月八日乙酉、治部卿〇源俊賢自去夕有惱煩告、仍差忠時問送、報云、頭打身熱辛苦者、禮部宇佐定、間有引汲帥之情、非無怖畏、

〔江談抄 四〕斐文籍後聞君久　菅禮部孤見我新 逢渤海斐大使有感、淳茂、

故老曰、斐公吟此句泣血云々、斐璆者、斐邈子也、邈以文籍少監入朝、菅相公〇道眞以禮部侍郎贈答、有此句、

〔唐六典 禮部四〕禮部尙書一人正三品

周之春官卿也、漢成帝置尙書五人、其四曰客曹、主外國夷狄事、光武分六曹、吏部曹主選擧齋祀事、然則夷狄齋祀、皆今禮部之職、東晉始置祠部尙書、常與右僕射通職、若右僕射闕、則以祠部尙書知右事、宋齊梁陳、皆號祠部尙書、後魏稱儀曹尙書、北齊亦爲祠部尙書、掌祠祭醫藥死喪贈賻等事、後周依周官置春官府大宗伯卿一人、隋更爲禮部尙書、皇朝因之、龍朔二年、改爲司禮太常伯、咸亨元年、復爲禮部、光宅元年爲春官尙書、神龍元年復故、〇中略

禮部尙書、侍郎之職、掌天下禮儀祠祭燕饗貢擧之政令、其屬有四、一曰禮部、二曰祠部、三曰膳部、四曰主客、尙書侍郎、總其職務、而奉行其制命、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官謹奏

增減官員事

治部省

大錄一人　少錄三人　今減少錄一人

□□□惟閑、官員已多、論於政途、未〈入〉傭□□員、永從停廢、〇中略

以前因時制宜者、經國之長策也、觀民□救者、爲政之良規也、然則雖設官分職員數已定、而量宜隨便、損益無妨、臣等商量、廢置如件、謹以申聞、謹奏、

弘仁十二年八月廿九日

聞

〔職原抄 上〕治部省

周禮春官大宗伯之職也、天地神祇之禮、此官之所掌也、本朝又當省掌禮儀事、准唐禮者、神祇官唐云祠部可屬此省也、當時此省所掌、雅樂事、僧尼度緣、廟陵等事也、

卿一人 相當正四位下 大常卿○中略 唐名禮部尚書　大輔一人 權大輔一人 唐名禮部侍郎 相當正五位下　少輔一人 權少輔一人 唐名同○中略 相當從五位下　丞 大少 唐名禮部郎中○中略　錄 大少 唐名禮部主事

〔令義解 四考課〕僧尼合道、謂合於佛道也、譜第不擾、謂治部掌本姓、解部掌譜第爭訟、故擧以爲最名也、爲治部之最、謂少輔以上、

〔令義解 四繼嗣〕凡定五位以上嫡子者、陳牒治部、驗實申官、其嫡子有罪疾、罪、謂荒耽於酒、謂迷亂曰荒也、樂酒曰耽也、不任承重者、謂繼父承祭、祭事尤重、故云承重、及餘罪戾、謂犯徒以上罪、若數有愆犯、量情將來不任器用者、疾謂癈疾、不任器用者、雖不至徒亦是也、申牒所司、驗實聽更立、

〔延喜式 二十治部〕凡立五位以上嫡子者、父申牒省、省移本貫、知實然後申官、

〔令義解 六儀制〕凡祥瑞應見、若麟鳳龜龍之類、依圖書合大瑞者、隨卽表奏、謂祥瑞所出之官司、勘據圖書、合大瑞者、不待元日、卽時表奏也、其表唯顯瑞物色目及出處所、不得苟陳虛飾徒事浮詞、上瑞以下、並申所司、謂申治部、凡上瑞以下、皆先申官、官付治部、而此所申所司者、據其應掌驗之所也、元日以聞、其鳥獸之類、有生獲者、仍遂其本性、放之山野、謂凡鱗甲羽毛、產自山水之氣、飲啄飛栖、不服人之馴養、故放令遂生、若有馴人哈哺、保其喘息、雖在籠紲、而不可觸死者、皆待至然後放之也、餘皆送治部、若有不可獲、謂雲氣之類、不可親附者、及木連理之類不須送者、所在官司、案驗非虛、具畫圖上、其須賞者、臨時聽勅、

〔令義解 九喪葬〕凡京官三位以上、謂散位亦同、卽以下准此、遭祖父母父母及妻喪、四位遭父母喪、五位以上身喪、謂以一

下也、並奏聞、謂治部申官、官轉申聞也、遣使弔、殯斂之事、謂斂於戸內、殯於客位、是、並從別式、

凡百官在職薨卒、當司分番會喪、謂此五位以上喪、故云薨卒、文云在職、即是散位者非也、親王及太政大臣、散一位、治部大輔監護喪事、謂監、視也、護、助也、左右大臣、及散二位、治部少輔監護、三位、治部丞監護、

〔令義解 雜十〕凡僧尼、京國官司、毎六年造籍三通、謂知外國人爲京僧尼者、京職造籍、本國不造也、各顯出家年月夏﨟及德業、謂﨟猶年也、年終有﨟、故稱年爲﨟、言僧尼夏月安居、乃得一﨟、故云夏﨟也、德者、得也、猶云得業、假如華嚴三論之類、依式印之、一通留職國、以外申送太政官、一通送中務、一通送治部、所須調度、並令寺准人數出物、

〔延喜式 玄蕃 二十一〕凡沙彌沙彌尼應受戒者、限三月上旬集於僧綱所、先勘會度緣、然後受戒、畢具錄僧數、使幷十師連署、進官上奏、即省於度緣末、注受戒年月日、幷官人署名、即捺省印以爲記驗、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年八月庚申、治部省奏曰、大寶元年以降、僧尼雖有本籍、未知存亡、是以諸國名帳、無由計會、望請重仰所由、令陳任處在不之狀、然則官僧已明、私度自止、於是下知諸國、令取治部處分、

〔延喜式 治部 二十一〕凡威儀師已上幷從儀師、及諸國講讀師補任帳各一卷、年終勘作、正月一日進太政官、

凡度緣請印者、不經辨官、直申太政官、

〔公事根源 上 正月〕太元帥法　同月〇八日

治部省にて七ヶ日是を行はる、藏人、內藏寮の官人をもて御衣を給て壇所におくる、御衣宮に入て韓のつなにて是をゆふ、御所より給へば、藏人封を付て是を治部省につかはして御祈をいたさしむ、結願の日は、御衣をもとのごとく返上する也、

〔延喜式 治部 二十一〕凡國忌日、各請當寺僧一百口、轉經禮佛、輔丞錄各一人、玄蕃寮五位一人、六位已下官二人、皆詣寺以供事、事見式部式、

凡諸國附朝集稅帳等使所送、國分二寺雜公文、勾勘畢、即具狀移式部民部等省、

補任

凡蕃客入朝者、差領客使二人、掌在路雜事、隨使一人、掌記錄公文事、及掌客二人、掌在京雜事、有史生二人、供食二人、掌饗日各對使者飲宴、自餘使見太政官式、

〔百寮訓要抄〕治部省禮部　もろ〳〵の祥瑞、慶雲、壽星などのたぐひ、上瑞、中瑞、小瑞とてあり、又五位以上婚姻の事を主どる、繼嗣をおもんずる故也、委細は治部式に見えたり、もろ〳〵の僧俗の事を主る、凡朝家の大事を奉行する省也、

〔詠百寮和歌〕治部卿

悅の雲の氣色を三笠山神の昔を思ひいでつゝ

〔官職秘抄上〕八省卿　治部○中略　已上必爲大中納言、而近年及參議散三位、或治部卿、殆以四位被登用、無其謂歟、又以親王被任例、賀陽親王○中略　同輔大少有權　中務　治部○中略　已上殿上地下公達多任之、但治部已下、殿上地下諸大夫又任之、○中略　同丞大少○中略　治部○中略　元藏人陪從良家子等任之、近代諸家侍任之、但可撰人也、○中略　同錄大少○中略　中務　治部○中略　已上本省奏、諸道擧、問者生等任之、或卿申請也、或自諸司二分遷任之、

〔職原抄上〕治部省

卿一人　四位已上任之、多爲公卿兼官、　大輔一人權大輔一人　少輔一人權少輔一人　名家五位任之、公達又任之、　丞大少　六位侍任之　錄大少

〔百寮訓要抄〕治部省

卿禮部尙書　三位以上の公卿の任る也、昔は殊ゑかるべき公卿の納言などの後に任ず、規模の官也、可然殿上の四位以上も任る也、名家の人々、殊是に任ず、　大輔禮部侍郞　四位五位可然人是に任ず、凡八省輔は、名家の人々、諸大夫の極官也、今は是も零落し侍ると也、　權大輔　是も名家の人々、諸大夫のゑかるべき輩任ずべき也、　少輔同上、又員外郞、　子細同前、大輔は少輔にま

さり侍るべけれども、家にまたがひて、あながちにさほどの勝劣なきにや、 權少輔 子細同前、名家の人々、地下の諸大夫も是に可任、 丞大小 錄大小

〔光臺一覽二〕治部卿一人 唐名禮部尙書、三位以上公家任之、

四輔〇正權大少輔 丞錄同前〇輔公卿、丞錄地下、

〔續日本紀元明四〕和銅元年三月丙午、從四位下彌努王爲治部卿、 九月壬戌、以從四位下安八王爲治部卿、

〔續日本紀元正八〕養老五年六月辛丑、從四位下坂合部王爲治部卿、

〔續日本紀聖武十七〕天平十九年三月乙酉、以從四位下藤原朝臣八束爲治部卿、

〔日本後紀桓武十三〕大同元年五月壬申、三品諱淳和爲治部卿、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年五月癸丑、宮內卿正四位下安倍朝臣吉人爲治部卿、

〔朝野群載別奏八〕治部省

請被殊蒙天恩因准先例以算生正六位上惟宗朝臣國季補任當省少錄闕狀

右謹撿案內、學道有勤之輩、依省奏補任錄闕者、古今之例也、而件國季算道積勤、採用可期、擧奏之旨非無先蹤、望請天恩因准先例、以國季被拜任少錄闕者、爲朝爲省、盡忠盡節、仍注事狀、謹請處分、

大治二年正月 日

正六位上行少錄惟宗朝臣

從二位行權大納言兼卿源朝臣

正六位上行少丞藤原朝臣

從五位下行大輔源朝臣

正六位上行少丞源朝臣

從五位下行少輔藤原朝臣

正六位上行少丞大江朝臣

從五位下行權少輔源朝臣

正六位上行少錄紀朝臣

正六位上行少錄小野朝臣

正六位上行少錄紀　朝臣

史生

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略治部省十八人、

書生

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置書生一十人事

右得治部省解偁、此省雖有煩劇、未置書生、而天長以降、所倍雜務、其數不少、望請割雅樂寮雜色生十人、置件書生、將濟劇事者、右大臣宣、奉勅依請、仍須割田儛生五人、筑紫諸縣儛生五人、不經省試充之、

承和二年二月十九日

〔類聚國史百七職官〕貞觀十四年八月八日丙午、勅省治部省書生二人、

省掌

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、官掌省掌、○中略各二人、但中務治部○中略等、並待本司移補之、

〔類聚國史百七職官〕大同元年十月壬申、中務治部民部刑部大藏宮內等六省省掌、准式部兵部二省、聽把笏、

扶省掌

〔延喜式十八式部〕凡中務治部民部兵部大藏彈正等省臺、正員之外、扶省掌、臺掌以入色者各置二人、令習儀式、皆待本司所送名簿乃補之、若正員有闕者、以扶省掌補之、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略治部省廿人、

解部

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年四月辛丑、勅、○中略減大藏省主鎰大少各一員、治部省解部四員、

雅樂寮

雅樂寮ハ、ウタマヒノツカサト稱ス、文武ノ雅曲正舞、及ビ雜樂ヲ掌リ、曲課ヲ學習スル所ニシテ、祭祀節會等ノ日ニ雅樂ヲ以テ歌舞ス、本寮ノ樂ニハ、國樂ノ外ニ唐、高麗、百濟、新羅、吳等

ノ樂アリ、其器ニハ横笛、琵琶、笙、簫、箏、篥、尺八、箜篌、方磬、箏、鼓等アリ、歌舞樂器ノ事ハ樂舞部ニ詳ナリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、○中略雅樂寮、宇多末比乃豆加佐

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

雅樂寮(ウタマヒノツカサ)

〔下學集上官位〕雅樂頭(ウタノカミ)協律郎

〔職原抄上〕雅樂寮(ウタマイ ガクレウ)唐名大樂

廳舍

〔大内裏圖考證二十五〕諸圖、雅樂寮在宮城巽隅、神祇官南、侍從厨東、據南都所傳圖、及神泉苑所傳圖、占地方三十五丈、○圖略

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年十月四日庚申、雅樂寮申請、庫中樂器、五絃有乘、琵琶有欠、

〔延喜式二十雅樂〕歌女居地一町在右京三條四坊八町、

〔日本紀略四村上〕康保二年七月四日壬申、今日子時、雅樂寮七間舍一宇失火、樂器皆以燒亡、

寮印

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年十月甲戌、始賜諸陵、圖書、雅樂、○中略印各一面、

職員職掌

〔令義解一職員〕雅樂寮

頭一人、掌文武雅曲正儛、謂、无干戈者曰文、有干戈者曰武、雜樂、謂、雅曲正舞以外雜樂也、男女樂人、音聲人名帳、謂樂人音聲人、男女相雜、既非一色、故先稱男女以蔽之、試練曲課、謂音聲曲度、各有大小、課其程限、試其成功也、事、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、歌師四人、掌教歌人歌女、二人、掌臨時取有聲音堪供奉者教之、歌人卅人、歌女一百人、儛師四人、掌教雜儛、儛生百人、掌習雜儛、笛師二人、笛生六人、掌習雜笛、笛工八人、謂供此間樂而吹笛者、其唐國以下諸樂者、吹笛之人、各在其樂生中也、唐樂師十二人、掌教樂生、高麗百濟新羅樂師准此、樂生六十人、掌習樂、餘樂生准此、高麗樂師四人、樂生廿人、百濟樂師四人、樂生廿人、新羅樂師四人、樂生廿人、伎樂謂吳樂、其腰鼓亦爲吳樂之器也、師一人、掌教伎樂

生、其生以樂戶爲之、腰鼓生准此、腰鼓師二人、掌敎腰鼓生、使部廿人、直丁二人、樂戶、

〔令義解一官位〕從五位階〇上雅樂頭　正六位階〇下雅樂助　正七位階〇下雅樂大允　從七位階〇上雅樂少允　從八位階〇上雅樂大屬　雅樂諸師　雅樂少屬階〇下

〔拾芥抄中本官位唐名〕雅樂頭大樂令協律郎　助大樂郎大樂令史　允大樂丞　屬大樂府大樂署府　大樂主簿　伶師樂正

〔唐六典十四太常寺〕太樂署令一人從七品下

周禮大師樂中大夫二人、樂師下大夫四人、掌成均之法、以樂舞敎國子雲門大卷大咸大韶大夏大濩大武之舞、樂師掌國學之政、敎國子小舞羽舞皇舞旄舞干舞人舞之節、又有大師下大夫二人、掌六律六呂、以合陰陽之聲、至秦漢奉常屬官有太樂令丞、又少府屬官、有樂府令丞、後漢太常樂令一人六百石、魏復爲太樂令丞、黃初中、以杜夔爲之、使正雅樂、時散騎侍郎鄧靜善詠雅樂、歌師尹胡能習宗祀之曲、舞師馮肅曉知前代諸儛、夔與創定、遷協律都尉、至晉元帝幷太樂於鼓吹、宋太常有太樂令丞、齊因之、品第七、四百石、銅印墨綬、進賢一梁冠絳朝服、梁太常屬官有太樂令、班第一、品從九、又別領淸商丞、太樂有庫丞、與淸商丞並三品勳位、陳因之、後魏太和十五年、置太樂官、有太樂博士、六品下、北齊太常寺有太樂令丞、後周有司樂上士中士、隋太常寺統太樂令丞二人、皇朝因之、開元二十三年、各減一人、〇中略

太樂令、掌敎樂人調合鍾律、以供邦國之祭祀饗燕、丞爲之貳、

〔唐六典十四太常寺〕協律郎二人正八品

漢書武帝時、李延年善新聲、以爲協律都尉、後漢亦有之、至魏武帝平荊州、得杜夔、能識舊樂章、以爲協律都尉、晉改爲協律校尉、宋齊亦有其官、梁太常屬官有協律校尉、後魏有協律郎、太和初、協律中郎、從四品下、協律郎、從五品上、至二十年協律〇律下脫郎字正八品下、北齊太常屬官有協律郎二人、隋太常寺協律郎二人、皇朝因之、

協律郞、掌レ和二六律六呂一以辨二四時之氣一、〇下略

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年三月己巳、從五位下皇甫東朝爲二雅樂員外助一、

〔職原抄上〕雅學寮

頭一人無二權官一、相當從五位上、唐名大樂令協律郞〇中略　助一人權助一人、相當正六位下、唐名大樂郞〇中略　允大少　唐名大樂丞〇中略　屬大少

大樂主事

〔令義解四考課〕音樂克諧、不レ失二節奏一、爲二雅樂之最一、謂二助以上一、

〔唐六典二吏部〕凡考課之法、有二四善一、〇中略　善狀之外有二二十七最一、〇中略　五曰、音律克諧、不レ失二節奏一、爲二樂官之最一、

〔延喜式二十一雅樂〕凡諸節會日、省輔丞錄各一人、將二寮屬以上及雜樂歌人歌女等一、候二閤門外一、若非二節會一、御在所奏レ樂者、省亦預之、行幸之所、屬已上率二雅樂人一祗候

凡園韓神平野等祭、幷御及中宮東宮鎭魂祭、省丞錄各一人、率二允屬各一人歌人歌女等一供奉、鎭魂祭、五位已上官各一人供之、春日大原野祭、官人一人率二同歌人等一供レ之、

凡春秋釋奠、屬一人率二歌人等一供奉、

凡正月最勝王經會始終日官人率二樂人等一左右相分供奉、

凡中宮東宮正月二日饗宴、官人率二樂人等一供奉、大臣大饗亦同、

凡賜二蕃客宴饗一日、官人率二雜樂人一供レ事、所レ須樂色、臨時聽二官處分一、

〔西宮記臨時五〕行幸　京內　雅樂寮、候二路邊一奏レ樂、

〔延喜式二十一雅樂〕凡七月上旬、差二官人幷雜樂人等一、分二配左右相撲司一、左唐樂、右高麗樂、

〔西宮記七月〕十六七日相撲召仰

音樂事、或諸卿依レ仰定申、有レ樂年、雅樂寮分二配樂人一送二左右一、

〔延喜式雅樂二十一〕凡每年六月曝涼林邑幷雜樂具、寮預申省、省申官、令監物就檢、省丞錄各一人、相共檢按、

凡樂器幷裝束等物、若有破損、具錄申省、省申官、

補任

〔官職秘抄上〕諸寮頭 雅樂 陪從多任之、又諸大夫一道者任之、〇中略 同助權〇中略 雅樂〇中略 已上可任良家子、凡諸司助以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、〇中略 同允大少〇中略 雅樂〇中略 已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧、問者生任寮三分、尤爲難、〇中略 同屬大少〇中略 雅樂 樂人舞人多任之、或本寮申請之、或諸道擧、問者生任之、

〔職原抄上〕雅樂寮

頭一人 五位諸大夫任之、堪音律者、可應其選歟、 助一人權助一人 六位諸大夫任之、 允大少 六位侍任之、 屬大少

〔百寮訓要抄〕雅樂寮

頭大樂令 諸大夫、陰陽兩道の輩も是に任ず、 助大樂郎 地下の六位是に可任、か樣の職は、先祖なり來りたるを執する事なれば、あながちに勝劣なし、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年十二月庚申、從四位下栗栖王爲雅樂頭、

〔三代實錄一淸和〕天安二年十一月廿五日壬午、散位從五位下橘朝臣春成爲雅樂頭、

〔三代實錄八淸和〕貞觀六年三月八日甲午、外從五位下行雅樂少允和邇部宿禰大田麻呂爲權大允、

〔令集解職員四〕雅樂寮

雅樂諸師

別記云、〇中略 大屬尾張淨足說、今有寮儛曲等如左、久米儛、大伴彈琴、佐伯持刀儛、卽斬蜘蝦、〇蝦恐蛛誤 唯今琴取二人、儛人八人、大伴佐伯不別也、五節儛十六人、田儛師儛人四人、倭儛師儛也、〇儛也恐有誤脫 楯臥儛十人、五人土師宿禰等、五人文忌寸等、右著甲幷持刀楯、筑紫儛廿人、諸縣師一人、儛人十人、儛人八

人著甲持刀、禁止二人、歌師四人、立歌二人、大歌笛師二人、兼知横竹(竹○或作笛)及文、度羅儛師一人、歌師一人、婆理儛六人、二人持刀楯儛、四人持鉾立、久太儛廿人、邪禁女儛五人、三人儛人、二人花取、韓與楚奪、女舞女廿人之中、五人著甲帶刀、右四儛、度羅之樂、唐令笙師一人、揩(揩恐○搊字誤)箏師一人横笛師一人、鼓師一人、歌師一人、方磬師一人、篳篥師一人、尺八師一人、箜篌師一人、儛師一人、百濟箜篌師一人、横笛師一人、(兼歌)韓琴師一人、(大理須古)儛師一人、高麗儛師一人、散樂師一人、箜篌師一人、新羅儛師一人、琴師一人、伎樂師一人、以上隨時増減而已、

〔續日本紀(二文武)〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、(中略)雅樂諸師、如此之類准官判任、

〔續日本紀(八元正)〕養老三年六月丙子、令(中略)雅樂寮諸師、(中略)始把笏焉、

〔延喜式(二十一雅樂)〕凡諸樂横笛師等、不解和笛不得任用、

〔西宮記(臨時一)〕雅樂物師事(以總省解文、式部令申補任云々、)

〔北山抄(六)〕雅樂物師事

應和、雅樂別當奉勅、試物師大友兼時例、

以總省解、申官下寮、

〔類聚國史(百七職官)〕延暦廿一年九月癸未、省雅樂寮歌師二員、

〔日本後紀(十七平城)〕大同四年三月丙寅、定雅樂寮雜樂師、歌舞師四人、笛師二人、唐樂師十二人、横笛師二人、高麗樂師四人、横笛箜篌莫目舞等師也、百濟樂師四人、横笛箜篌莫目舞等師也、新羅樂師二人、琴舞等師也、度羅樂師二人、鼓舞等師也、伎樂師二人、林邑樂師二人、

〔令集解(四職員)〕大同四年三月廿八日、官符云、定雅樂寮雜樂師事、歌師四人、儛師四人、(筑紫諸縣師一人、在此中、)笛師二人、唐樂師十二人、(横笛師、合笙師、簫師、篳篥師、尺八師、箜篌師、箏師、琵琶師、方磬師、鼓師、歌師、儛師云々、)高麗樂師四人、(横笛師、箜篌師、莫目師、儛師、)百濟樂師四人、(横笛師、箜篌師、莫目師、儛師、)新羅樂師四人、(琴師、儛師、)度羅樂師二人、(鼓師、舞師、)右依舊爲定、餘皆停止、伎樂師二人、(元一

人、今一人、置林邑樂師二人、今置右依件爲定、〇享祿本類聚三代格係三月廿一日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

定雅樂諸師數事

儛師四人、倭儛師一人五節儛師一人田儛師一人筑紫諸縣儛師一人

新羅樂師四人琴師一人儛師一人〇令集解琴師上有今改二人四字

右造式所起請偁、太政官去大同四年三月廿一日騰勅符、□擧□□□□□仍須具錄以令無疑者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅宜依件請、永爲恒例、

弘仁十年十二月廿一日〇又見令集解

太政官符

應停五節儛師置高麗鼓師事

右得治部省解偁、雅樂寮解偁、太政官去弘仁十年十二月廿一日格、定儛師四人之内、置五節儛師一員、而件師、徒設其員、曾無其人、今有高麗鼓生四人、習業之日、無有其師、望請停彼儛師、置此鼓師者、省依解狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

齊衡二年八月廿一日

太政官符

應停新羅儛師置五節儛師事

右撿案内、依太政官去八月廿一日符、停五節儛師置高麗鼓師者、今被右大臣宣偁、奉勅宜依件更令改置、

齊衡二年十二月廿一日

〔續日本紀八元正〕養老五年正月甲戌、詔曰、文人武士國家所重、醫卜方術古今斯崇、宜擢於百僚之内、優

遊學業、堪爲師範者、特加賞賜、勸勵後生、因賜、○中略和琴師正七位下文忌寸廣田、唱歌師正七位下大窪史五百足、正八位下紀多眞玉、從六位下螺江臣夜氣女、茨田連刀自女、正七位下、置始連志祁志女、各施六疋、絲六絇、布十端、鍬十口、

〔續日本紀三十光仁一〕寶龜二年二月丙午、授莫牟師正六位上村上造大寶外從五位下、優高年也、

〔續日本紀三十光仁四〕寶龜八年三月戊辰、幸大納言藤原朝臣魚名曹司、賜從官物有差、授其男從六位上藤原朝臣末茂從五位下、百濟箜○一本作箜篌師正六位上難金信外從五位下、

〔類聚符宣抄七〕太政官符式部省外物部長上

應補才伎長上從六位下右近衛米錦連德常事

悉篳篥

右得治部省去三月廿七日解偁、雅樂寮去天德四年二月廿八日解偁、件人課試練身才、尤堪爲師、仍篥師船木洪範、轉任唐儛師之替、以件德常所請如件者、省依解狀言上如件者、從二位行大納言兼中宮大夫陸奧出羽按察使源朝臣高明宣、依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

權左中辨　　　右少史

應和二年九月八日

〔延喜式三十大炊五〕雅樂寮蕃樂人日米一斗六升、○中略

右每日料、依前件熟食充之、

〔令集解職員四〕雅樂寮

歌人歌女笛吹

別記云、歌人歌女笛吹、右三色人等、男直身免課役、女給養丁也、不限國遠近、取能歌人耳、

〔日本後紀桓武十三〕延曆廿四年十二月壬寅、公卿奏議曰、○中略雅樂歌女五十人減卅人、○中略許之、

〔東大寺正倉院文書二〕雅樂寮解　申請公粮事

樂生

合米貳拾肆斛漆升、鹽貳斗肆升漆勺、庸布貳段、
歌女七十九人料米廿二石九斗一升、人別日一升、鹽二斗二升九合一勺、人別日一勺、○中略
右歌女及直丁等、來三月廿九日料米鹽等數、具錄如件、以解、
天平十七年二月廿日　從七位上行少屬後部高多比

〔延喜式二十一雅樂〕歌女卅人、各日黑米八合、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年七月乙亥、定雅樂寮雜樂生員、大唐樂三十九人、百濟樂二十六人、高麗樂八人、新羅樂四人、度羅樂六十二人、諸縣舞八人、筑紫舞二十人、其大唐樂生、不言夏蕃、取堪教習者、百濟高麗新羅等樂生、並取當蕃堪學者、但度羅樂、諸縣筑紫舞生、並取樂戶、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符
應減定雅樂寮雜色生二百五十四人事 減一百五十四人、定一百人、
倭樂生百卌四人 減九十九人、定卌五人、　歌人廿人 元卌五人　笛生四人 元六人　笛工二人 元八人　儛生二人 元十六人　田儛生二人 元廿五人　五節儛生二人 元十六人　筑紫諸縣儛生三人 元廿八人
唐樂生六十人 減廿四人、定卅六人、　歌生二人 元四人　橫笛生四人 不減　尺八生二人 元三人　簫生一人 二人　篳篥生四人 不減　合笙 ○笙下恐脫生字 四人 不減　箜篌生二人 元三人　琵琶生二人 元三人　箏生二人 元三人　方磬生二人 元三人　鼓生四人 元十四人　儛生六人 元十二人
高麗樂生廿人 減二人、定十八人、　橫笛生四人 不減　莫目生二人 不減　箜篌生三人 不減　儛生四人 元六人　鼓生四人 不減　弄鎗生二人 不減
百濟樂生廿人 減十三人、定七人、　橫笛生一人 不減　莫目生一人 不減　箜篌生一人 元二人　儛生二人 元四人女十人　多理志古生一人 不減　歌生一人 不減

新羅樂生廿人（減十六人、定四人）　琴生二人（元十人）　儛生二人（元十人）

右被大納言正三位源朝臣信宣偁、奉勅宜依件減省者、今須選業稍成者即充件數、餘並留省者、

嘉祥元年九月廿二日

〔延喜式十八式部〕凡勘解由使勘籍書生、及雅樂寮雜色生、自非次官以上許文、不得輙遷他色、

〔延喜式二十一雅樂〕凡雜樂師有闕者、不問生徒及入色、簡取伎業優長者申省、省丞已上試訖、具狀申官、其生者、簡才申省、省亦試練申官補之、歌女者、取庶女容貌端正有聲音者充之、

樂戸

〔令集解四職員〕雅樂寮

別記云、〇中略伎樂卅九戸、木登八戸、奈良笛吹九戸、右三色人等、倭國臨時召、但寮常爲學習耳、爲品部取謂〇謂恐調免雜徭也、

〔政事要略五十九〕貞臨格云、太政官符、應免伎樂百姓徭事、〇徭字原缺、今依享祿本類聚三代格補、

右得治部省解偁、雅樂寮解偁、百姓等申云、已等依例調習伎樂、而國郡司偁今年諒闇、差妨他役、望請依舊被免件役者、省依解狀、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

嘉祥四年正月十六日、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年七月壬辰、勅、〇中略廢餅戸、散樂戸、

〔延喜式二十一雅樂〕凡四月八日、七月十五日齋會、分充伎樂人於東西二寺、〇中略就樂戸鄕簡充、（在大和國城下郡杜屋村）

史生

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略減〇中略雅樂寮一員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略雅樂寮玄蕃寮諸陵寮、各四人、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略雅樂寮玄蕃寮諸陵寮、各十人、

直丁

〔東大寺正倉院文書二〕雅樂寮解　申請公粮事

用途

合米貳拾肆斛漆升　鹽貳斗肆升漆勺　庸布貳段〇中略

直丁二人料米一石一斗六升、人別日二升、鹽一升一合六勺、人別日一勺、厮二人料庸布二段、人別一段、

右歌女及直丁等、來三月廿九日料米鹽等數、具錄如件、以解、

天平十七年二月廿日　從七位上行少屬後部高多比

〔類聚三代格十五〕勅、安上治民、莫善於禮、移風易俗、莫善於樂、禮樂所興、惟在二寮、門徒所苦、但在衣食、亦是天文陰陽曆等醫針等學、國家所要、並置公廨之田、應用諸生供給、其大學寮卅町、雅樂寮十町、〇中略所司宜准件施行、

天平寶字元年八月廿三日

〔延喜式二十一雅樂〕公廨田一十町在近江國

甲賀郡二町　野洲郡五町　愛智郡三町

右件田地子米、充年中用度、

名稱

內教坊

內教坊ハ、ナイケウバウト稱ス、女樂及ビ踏歌ヲ調習スル所ニシテ、正月七日ノ節會、同十六日ノ踏歌、及ビ內宴等ノ用ニ供ス、別當アリ、大中納言ヲ以テ之ニ補ス、又婦女ヲ以テ預トシ、內侍宣ヲ以テ之ニ補ス、

〔源氏物語六末摘花〕いとさむげなる女房、しろき衣のいひしらずすゝけたるに、きたなげなるしびらひきゆひつけたるこしつき、かたくなしげなり、さすがにくしをしたれてさしたるひたいつき、ないけうばう、ないしどころの程に、かゝるものどものあるはやとおかし、かけてもひとのあ

たりに、ちかうふるまふものとも𛂞り給はざりけり、

〔源氏物語五十一東屋〕琴びはの𛂞とて、ないけうばうのわたりより、むかへとりつゝ、ならはす、てひとつひきとれば、師をたちゐおがみてよろこびてろくをとらすること、うづむばかりにて、もてさわぐ、

〔標注職原抄下本〕内敎坊、有職家の説に、内字訓ぬよし見えたれど、源氏末摘花に、ないけう坊、また後のものながら、思ひのまゝの日記などにも、ないけう坊とあれば、よむべき事論なし、

〔唐書四十八百官〕大樂署令二人、〇中略武德後、置内敎坊于禁中、武后如意元年、改曰雲韶府、以中官爲使、開元二年、又置内敎坊于蓬萊宮側、有音聲博士、第一曹博士、第二博博士、京都置左右敎坊、掌俳優雜伎、自是不隷太常、以中官爲敎坊使、

職員職掌　〔百寮訓要抄〕内敎坊　女の舞人の候所也、今も踏歌の舞妓などは、内敎坊より參る、女房の舞樂を稽古せさする所也、

所在　〔大内裏圖考證二十三中務省〕内敎坊

諸圖、在茶園南左近衞北大宿直東、〇圖略

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町

内敎坊町土御門北、堀川西、

〔日本紀略六圓融〕安和二年九月廿一日乙丑、今夜内敎坊燒亡、

〔職原抄下〕内敎坊別當知女樂事、同前、〇大中納言中、堪其道之人補之、

〔百寮訓要抄〕内敎坊

別當　大納言以下、可然人是に補す、

〔扶桑略記二十四醍醐〕延喜十九年十二月十六日、仰遣内敎坊別當右近少將伊衡於内敎坊、選定渤海客宴日舞人等、仰定坊家可調舞人廿人舞童十人音聲廿人、去八年、音聲人卅六人、此度定減、此外威儀

廿人、依レ例內侍所可レ差二女孺等一、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

內敎坊頭預中臣靜子應和四二廿九、別當奏補二五節師一、以二內侍宣一被レ仰二本人及內侍所一、以二舊舞姬一爲レ師、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年五月戊寅、典侍從三位飯高宿禰諸高薨、〇中略葬二奈保山一天皇〇元正御世、直二內敎坊一、

〔三代實錄四淸和〕貞觀二年正月廿一日壬申、天皇內二宴近臣一、如二常儀一、凡每年正月廿一日、天子內二宴於近臣一、喚二文人一賦レ詩、預レ席者不レ過二四五人一、內敎坊奏二女樂一、親王公卿及文人殿上六位已上、賜レ綿各有レ差、他皆效レ此、

〔江家次第二正月〕七日節會裝束

同〇校書殿內鋪二內敎坊男樂人座三行一、二行南北行、一行東西行、其陣座處右近陣設二舞妓座一、自レ南第二間迄二于北第四間一、南北行置二草墪一、立二床子一、兩儀候二紫宸殿南檻西頭一幔外砌石上鋪二亘葉薦一、其北板敷西方南向設レ座、舞妓座〇中略

七日節會

三獻　內敎坊別當若不レ候者、內辨奏レ之、奏二舞妓奏一、別當次將令レ持二奏於將監一、於二巽角壇下一傳取奉レ之、將監執レ筆候、別當加署後參上、付二內侍一奏レ之、件奏留二御所一、別當復レ座、樂人等於二射場殿一發二音樂一、先調子、次參音聲、舞妓幷樂女等在二校書殿東庇座一、樂前大夫二人前行、〇註略舞妓等登二舞臺一、樂前大夫等退、次舞五曲、必大曲一曲、皇帝破陣樂、玉樹後庭花、赤白桃李花、萬歲樂、喜春樂等也、舞師一人、以二大拍子一進二舞臺下一、致二節度一、每二一舞一了舞妓居、舞畢退出、有二退音聲一、若入レ夜者、不三必可レ奏二大典一、次王卿以下下殿拜舞、謂二之樂拜一、如二親族拜儀一、

〔江家次第三正月〕踏歌

坊〇內敎坊家妓女裝束、依レ請奏給レ之、其飾物兼日奏下坊家妓女外、中宮春宮妓女各二人催レ之、被レ候二內宴一時〇中略三獻立樂、〇中略坊家別當奏レ圖、別當不レ參、內辨奏レ之、別當少將於二階下一授レ之、進奏儀如二見參等一、留二御所一、先披見後、乍レ令レ持レ杖插レ之、不加署名單之了復座　左右近府

妓女

生取標札、舞妓出、西宮抄、四十人至版位下、折南行、更還北行、踏舞三廻了、如元退、樂前大夫二人者帶劍前行、當校書殿南端東向立、舞妓分自殿南進、當校書殿南端、東折夾馳道分進南、更北還作大輪、右廻一匝、又分左右南行、更折自內北進了退、留校書殿東庭、東向立唱歌了退入、了參三宮云云、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年正月乙酉、帝臨軒、授高麗大使楊承慶正三位、○中略饗五位已上及蕃客幷主典已上於朝堂、作女樂於舞臺、奏內敎坊踏歌於庭、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年正月庚申、帝御閤門、饗五位已上及蕃客、○中略於朝堂、○中略奏內敎坊踏歌、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年十月庚子、御大極殿、屈僧六百轉讀大般若經、奏唐高麗樂及內敎坊蹋歌、

〔續日本後紀仁明十四〕承和十一年正月庚子、是日敍內敎坊妓女石川朝臣色子從五位下、

〔續日本後紀仁明十五〕承和十二年正月丁卯、是日有勅、授內敎坊倡女宍人朝臣貞刀自從五位下、

〔九暦〕天德三年十月十九日、召內敎坊女妓於淸涼殿西渡殿、令彈琴、給饗祿事、

〔百練抄後白河七〕保元三年五月廿九日、覽內敎坊舞姬、近代斷絕興行之、

〔續世繼乙女の姿三〕廿一日、○保元四年正月今年も內宴ありて、○中略法性寺の大臣○藤原忠通奉給りこそ聞え侍し、舞姬、今年はうるはしき女舞にて、日比よりならはされけるとぞ聞え侍し、みちのりのだいとく樂のみちをさへこのみえりて、さもありぬべき女どもならはしつゝ、神の社などにもまゐりて、まひあへりと聞侍しに、○下略

〔大內裏圖考證二十三〕近眞記傳口曰、或記云、內敎坊ノ女樂人、昔ハ眞實ニ歌舞シケリ、雅樂舞人爲行事藏人之使、行向舞師許云、欲見舞之善惡ト云ケレバ、女舞師召上物師テ、上母屋際ノ簾、其內ニ立舞妓婦等、女師云、御使早立テ令舞云リ、物師答云、何ノ舞ゾ、女師云、皇帝也、使云、不覺然者鬪亂旋如

女孺

何、又云、不覺、次問玉樹、答云、不知、于時女師怒云、不知シテ稱物師、口朝威者也、以此由令奏達之間、暫摒置タレト云ケレバ、物師ハウハウ逃去リケリ、

〔延喜式中務十二〕内敎坊未選女孺五十人

右夏絹三丈、冬加絹三丈綿二屯、貲布一端、冬調布二端

用途

〔類聚國史職官七百〕天長五年四月丁卯、河内國澀河郡、田六段、畠四町四段、割大學所口五十町六段内給內敎坊、

〔延喜式中務十二〕内敎坊

年料庸布四段、鍬六口、白木韓櫃二合、明櫃四合、折櫃廿合、筥五十合、輿籠四口、樽二隻、箕四枚、笠十枚、食薦廿枚、椀卅口、坏一百口、

〔延喜式大炊三十五〕親王以下月料

內敎坊米廿石小月十九石三斗三升三合六勺

〔延喜式掃部三十八〕諸司年料

內敎坊食薦廿枚

右年中所充、並依前件、若有増減者、臨時處分

大歌所

大歌所ハ、大歌ノ歌曲ヲ掌ル所ニシテ、親王、大納言、非參議、六位ノ人ヲ以テ別當ニ補ス、又和琴歌師、十生、案主等ノ職員アリ、大歌ハ我國ノ古樂ニテ、神樂歌、催馬樂ノ如キモノヲ云フ、

所在

〔西宮記臨時五〕一所々事

職員

大歌所（在圖書東、上西門內、）

〔百練抄四條一〕寛弘二年二月八日、大歌所、大藏省倉等炎上、

〔西宮記臨時五〕一所々事

大歌所（中略）新嘗時供奉、有親王、大納言、非參議、六位別當、師、和愛（○愛字恐誤）歌師、十生、（師以下七字一本無）案主、給年官、供奉時給食酒米、（○又見拾芥抄）

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

大歌六位別當、御琴師、幷和琴歌師、（依所奏、被下宣旨於本所、十生、別當三人、輪轉補之、）

〔西宮記臨時二〕大歌所十生御琴笛師等事

十生者、撿挍已下別當以上、輪轉補之云々、但御琴師等以本所奏補之、

〔職原抄下〕大歌所別當（知大歌事、）　納言已上補之、上古親王之中又補之、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十一月己卯、從四位下治部大輔興世朝臣書主卒、（○中略）能彈和琴、仍爲大歌所別當、常供奉節會、

〔類聚符宣抄七〕十生。十生。蔭孫正七位下多朝臣安邑

右被右大臣宣偁、奉勅件人依大歌所申請、補別當多安邑任河內大掾之替已了、宜仰彼所者、（仰十生近江門雄、）

仁和元年二月廿五日　大外記高丘五常奉

〔朝野群載五朝儀〕申大歌別當

明法生正六位上小野朝臣保倫　望大歌別當

長和四年十月三日

右少辨藤原朝臣資業傳宣、左大臣宣、奉勅件人宜爲大歌別當者、

長和四年十月十五日　左大史丹波朝臣奉

用度

〔後二條關白記〕永保三年正月十六日壬辰、節會如常、天皇御南、於仗下右大臣（○源俊房）承可補大歌之由、而告藤大納言（忠家）承了、宣命宰相中將左大辨、給目錄、就錄所、上達部各以分散、

〔延喜式〕（二十三民部）凡内酒殿料黑米百五十斛、幷大歌所料卅八斛七斗二升三合二勺五撮、受於省、

〔延喜式〕（三十八掃部）諸司年料

大歌所食薦十五枚（○中略）

右年中所充、並依前件、若有增減者、臨時處分、

雜載

〔續日本紀〕（三十六桓武）天應元年十一月己巳、宴五位已上、奏雅樂寮樂、及大歌於庭、

〔萬葉集〕（六雜歌）十二月（○天平八年）十二日、歌儛所之諸王臣子等、集葛井連廣成家宴歌二首、

比來古儛盛興、古歲漸晚、理宜共盡古情、同唱此歌、故擬此趣、輙獻古曲二節、風流意氣之士、儻在此集之中、爭發念心々和古體、

我屋戶之、梅咲有跡、告遣者、來云似有、散去十方吉、

春去者、乎呼理爾乎呼里、鶯之、鳴吾島曾、不息通爲、

〔延喜式〕（十八式部）凡被召大歌所之輩、起自十月廿一日、至于正月十六日、一向直所、若无故不上者、五位已上不預節會、六位已下奪季祿、散位雜色等、責以違勅、

〔類聚符宣抄〕（十）右大臣宣、奉勅少納言從五位上和氣朝臣彝範、始自今月廿一日、迄于節會終日、宜令直大歌所者、

貞觀十八年十月廿日　　大外記嶋田朝臣良臣奉

樂所

樂所ハ、唐樂ヲ調習スル所ニシテ、禁中ナル桂芳坊ノ內ニ設ク、別當預等ノ職員アリテ之ヲ管シ、雅樂寮及ビ六衞府ノ官人、此所ニ在セリ、又每ニ樂所始アリ、事アルニ臨ミ、此所ニ於テ演習スルモノヽ如シ、

名稱

〔宇津保物語藏開上〕ごせんに、つかさ〳〵のあげはりどもうちわたし、左右こんゑのつかさのがく所どもあり、

〔宇津保物語國讓上〕たつの二てんばかりに、うちの御かご行幸し給へり、此院よろこびかしこまり給、はなのかげにさい人ども、がく所のものども、みなさぶらふ、

所在

〔西宮記臨時五〕一所々事

樂所在桂芳坊

〔倭名類聚抄十居宅〕房　桂芳房在華芳坊東、今爲樂所是也、

〔拾芥抄中末宮城〕禁中所々異名

桂芳在朔平門內

職員

〔西宮記臨時五〕一所々事

樂所在桂芳坊、有別當五位藏人六位、預熟食、置舊位祿、以其料宛不足、同內御書所、每月注習物奏聞、或有試、○又見拾芥抄

〔職原抄下〕樂所別當知樂所事也　堪其道公卿補之、

〔中右記〕嘉保二年二月廿七日、今日依爲吉日、初樂所、〇中略　以藏人頭左中辨師頼朝臣爲別當、先例多藏人頭也、以藏人宮內丞宗仲爲六位別當、并兵部丞成綱爲樂所預、

〔中右記〕嘉承元年十二月九日、藏人廣房補樂所、〇所字、據一本補　別當之後、今夜著樂所、樂人吹万歲樂參內、頗不得心事也、

〔樂所補任〕大治三年戊申

雅樂允基政〈所勾當、宣旨、月日賞、八月日補樂年五十、〉　雅樂屬時忠〈笙二年五十七〉

〔樂所補任〕天永元年

左近將曹正清〈笛一年六十二〉　右近將曹忠方〈右一年廿六〉

右兵衞志則時

左近府生則方〈鼓樂吹年七十三〉　光則〈左三年四十二〉　季貞〈左四年四十四〉　是行〈年卅六〉　基政〈笛年卅二〉　行季〈左五年卅八〉　友光〈左六年廿九〉　則遠〈年五十七〉　光時〈左七年廿二〉　助貞〈笛年五十〉　時員〈年廿五〉

右近府生正吉　公正　則清〈三鼓打年五十四〉　助清　助高〈年五十八〉　近方〈右年廿三〉　公持〈笙年卅一〉

左衞門府生正延〈篳篥吹〉　季忠〈年六十二〉

右衞門府生近正〈年五十八〉　爲季　左兵衞府生則重

右兵衞府生爲永　延國〈篳篥吹〉　忠影〈年五十一〉　時兼〈年卅九〉　則元　吉恒

樂所始

〔花園院御記〕元亨三年十月二日辛酉、傳聞、今日內裏樂所始、被覽舞曲云々、其儀不傳聞、

〈裏書〉傳聞樂所別當宗平朝臣、〈非管絃者〉藏人頭代々例也、十月又多佳例歟、○中略

〈同〉後聞於清涼殿出御、御覽舞曲者、非樂所始事、臨時舞御覽云々、

樂所生

〔侍中群要八〕諸試　樂所生等試事

召東庭之時、以圓座一枚、鋪河竹北方、爲試座、別當上卿候簀子敷、〈鋪所管圓座爲座〉召侍〈侍恐御誤〉前之時、當御膳棚前、鋪圓座爲試座、闈外北去五尺許、敷圓座爲師座、生等座在下、侍西方、或徘徊腋陣邊應召、

〔本朝世紀〕康和五年七月十五日壬辰、是日於左近衞府有興福寺供養樂所始事、

〔日本紀略三村上〕天曆二年八月五日辛巳、此日於大內始樂所、

〔權記〕寬弘元年十一月廿日庚午、詣左府、〈道長○藤原〉被始樂所、○中略明日試樂也、

〔中右記〕嘉保二年二月廿七日癸巳、今日依爲吉日、初樂所、〈左兵衞陣〉先仰藏寮穀倉院、聊辨備饗饌、樂人等

參集、又地下召人等參集、以藏人頭左中辨師頼朝臣爲別當、(先例多藏人頭也)以藏人宮内丞宗仲爲六位別當、幷兵部丞成綱爲樂所預、頭辨相引殿上人五六輩被著樂所、(予在其中)殿上人地下召人饗(母屋、絶席)樂人等西庇下、先有盃酌、(三獻、獻盃地下倍從、幷藏人宗仲、瓶子所衆、)次調子平調、万歳樂、地久樂許也、其後起座、入從左兵衛陣門、(先吹調子、万歳樂、)左近將監狛光末、右近將監多佐忠、懸一鼓前行、主殿司官人炬火、殿上人、次地下召人樂人等、進殿上、有召從西中門進出南庭、次如本歸樂所之次、從中門頗進出歸樂所、著到初、又付簡云々、

〔中右記〕元永元年十月廿三日、有樂所始云々、頭中將宗輔、藏人顯憲被補別當、秉燭之後、人々著樂所、(左兵衛陣、諸司居饗、)内藏寮殿上人、頭中將、權辨伊通、四位少將忠宗、侍從宗成公敎、藏人顯憲著母屋、樂人庇座、寄人元輔兼定、著樂人上座、藏人顯憲兼定等勸盃、万歳樂地久、(各六人舞之)殿上口吹万歳樂、光則忠方懸鼓、殿上人相具、

〔山槐記〕永暦二年(○應保元年)四月四日丙午、晩頭參内、今夜可有樂所始之故也、樂人等參集於長橋邊、内内聞食音樂、秉燭以後入御、仍予付内侍奏日時、

書樣

擇申可被始樂所日時

今月四日丙午　時申酉

永暦二年四月四日　陰陽頭賀茂朝臣在憲

凡仰樂所別當以下事、幷日時奏聞事、日來申沙汰之職事可奏下歟、而頭辨依服暇籠居、無示付職事、仍予所奏日時也、

雜載

〔貞信公記〕天暦二年三月廿日、中使俊朝臣來云、(○中略)樂所如舊置何、

〔古今著聞集〕(六管絃歌舞)天暦七年十月十三日、内裏にて庚申の御あそびありけり、女藏人菊の花のひわり子を奉る、大納言高明卿、伊與守雅信朝臣御前に候、樂所の輩は御壺にぞ候ける、

〔兵範記〕保元三年三月十日庚午、今夕可被始行調樂、〇臨時祭石清水可參著由、行事藏人以御藏小舍人催告、入夜參內、（先行水、今日殊精進、不食魚味也、）著樂所桂芳坊、其儀南面中央三四間、母屋庇放出之、敷滿弘筵、以庇爲座、（南北二行敷帖、舞人著南北、歌人著西上對座、）中央立置机四脚、居舞人歌人饌、（有中屯物菓子、樂調精進、）東遣戶及母屋戶前敷召人座、（南上西面、）同居机饌、庇西遣戶內爲戶屋、四方引廻幔、南面座、母屋庇每間打燈階炬燈、南庭東南西三方引幔如例、出納并所衆小舍人等在西庇、穀倉院以下諸司在東庇邊歟、〇中略、歌人散位範基、賴方、信綱、式部丞、兵部丞、（則盛、盛清、）二人、縫殿助二人（維盛、賴業、）在座、召人左衛門志好方以下六人、候東邊座、舞人藏人左近將監親行、（行事、）同左衛門尉重章先著座、次下官、〇平信範、少納言通能、右馬權頭隆信、兵衛佐實清等并六人著座、此間藏人召小舍人仰見參可進由、小舍人稱唯退入、次所衆持參見參、獻行事藏人、行事以上見上至下官許、披見之傳陪從上﨟範基、範基以下見下之、陪從下﨟返給所衆、（本所衆猶相待候也、）所衆給小舍人令進殿上也、此間又自殿上召見參、如雨脚、歌舞人每參加、進見參蓋例也、次一獻、所衆二人勸歌舞人、穀倉院官人取瓶子、次二獻、同前、今度勸召人盃、次寄和琴、下箸居汁、次發歌笛、次三獻、同前、（召人同前、）居湯漬、次歌遊、盛清和琴、維盛笛、賴業篳篥、範基賴方一二舞、次撤饌机、次舞人下官以下入戶屋、次出於母屋列舞、（東西二行、以南爲上也、下官依舞人不足不列之、人人列舞之後出戶屋居本座、是先例也、見永保記、）駿河舞了、歸入戶屋、褪褐又出著本座、次居肴物、（歌舞人皆居之、）次所衆勸盃如初、次撤肴物、舞人如初列母屋、舞求子、（此間下官在座、）舞了、又入戶屋、差紐歸出、次各分散、甚雨之上、依御物忌無內參、下官歸了、

〔言繼卿記〕享祿五年三月廿七日丙子

一樂所催之事、奉行（右少辨）直札之事、先々者就御師範如此也、雖堂之折紙にて可催之由候、樂所各所存申候、種々予申合、以御灌頂之時分例、左右方之意趣申ナダメ候、此分一通也、從來月四日三ケ日、可被行御懺法講、可存其旨之由、可令下知樂所輩給者、依天氣執啓如件、

三月廿七日　右少辨惟房

名稱　廳舍　職員　職掌

謹上　內藏頭殿

自來月四日三ケ日、可有御懺法講、各可被參勤之由、可被相觸候也、

三月廿七日　　判表紙ニハ官繼ト書

豐雅樂助殿

玄蕃寮

玄蕃寮ハ、ホフシマラヒトノツカサト稱シ、又字音ニテ、ゲンバレウト稱ス、玄トハ佛教ヲ云ヒ、蕃トハ外蕃ヲ云フ、故ニ此寮ハ、佛寺、僧尼、齋會、及ビ蕃人、客館等ノ事ヲ掌ル、

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、○中略玄蕃寮、保宇之萬良比止乃豆加佐

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

玄蕃寮ホウシマラウトノツカサ

〔運歩色葉集録〕玄蕃

〔書言字考節用集三官位〕玄蕃ゲンバ唐名鴻臚

〔職原抄上〕玄蕃寮　唐名鴻臚寺

〔大內裏圖考證二十五〕玄蕃寮　古本拾芥抄宮城路圖、宮城一古圖、並在治部省中艮、○圖略

〔令義解一職員〕玄蕃寮

頭一人、掌佛寺、僧尼名籍、謂在京幷諸國佛寺、及僧尼名籍也、供齋、蕃客辭見、讌饗送迎、謂凡諸蕃入朝者、始自入城、終于辭別、讌饗送迎等、皆總主知、其送迎者、唯於京內、不出畿內也、及在京夷狄、監當館舍、謂鴻臚館也、事、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、史生四人、使部廿人、直丁二人、

〔令義解官位〕從五位階〇上玄蕃頭　正六位階〇下玄蕃助　正七位階〇下玄蕃大允　從七位階〇上玄蕃少允　從八位階〇上玄蕃大屬　玄蕃少屬階〇下

〔二中歷官名七〕玄蕃頭（祠部郎中、主客郎中）（崇玄令、鴻臚卿）助（祠部員外郎、主客員外郎）（崇玄令史、鴻臚少卿）允（崇玄丞、崇玄史）（主客員外部、鴻臚丞）屬（祠部主事、崇玄史）（主客主事、鴻臚錄事）

〔拾芥抄中本官位唐名〕玄蕃頭（典客郎中、崇（崇恐主誤）客郎中）（鴻臚卿、鴻臚寺）（主（主恐崇誤）玄署令）助（鴻臚少卿、恐客（誤）員外）（主外（外祠部員外郎、崇玄令）允（典客丞、崇玄丞）（鴻臚丞、主客員外郎）屬（典客主事、鴻臚史）（祠部主事、崇玄史府）

〔隋書百官二十七〕昭玄寺　掌諸佛教、置大統一人、統一人、都維那三人、亦置功曹主簿員、以管諸州郡縣沙門曹、

〔唐六典禮部四〕祠部郎中一人從五品上

東晉置、歷宋齊梁陳後魏北齊、皆有祠部郎、後周春官府有典祠中大夫一人、隋有祠部郎、皇朝稱郎中、龍朔二年、改爲司禋大夫、咸亨元年、復故、〇中略

祠部郎中員外郎、掌祠祀享祭、天文漏刻、國忌廟諱、卜筮醫藥、道佛之事、

〔漢書十九百官公卿表〕典客秦官、掌諸歸義蠻夷、有丞、景帝中六年、更名大行令、武帝太初元年、更名大鴻臚、（應劭曰、郊廟行禮、讃九賓、鴻聲臚傳之也、）屬官有行人、譯官、別火、三令丞、〇註略及郡邸長丞、〇註略武帝太初元年、更名行人爲大行令、初置別火、王莽改大鴻臚曰典樂、初置郡國邸屬少府、中屬中尉、後屬大鴻臚、

〔唐六典十八鴻臚寺〕典客署令一人從七品

周禮有掌客上士二人、漢鴻臚屬官有行人、武帝改爲大行令、魏改曰客館令、晉改曰典客、宋永初中、分置南北客館令丞、齊有客館令、梁有典客館令丞、在七班之下、爲三品勳位、陳因之、後魏典客監從五品、太和十五年、置主客令、北齊鴻臚寺統典客署、後周有東南西北四掌客、各上士一人、隋鴻臚卿統典客署令丞、煬帝改曰典蕃署、又於建國門外置四方館、以待四方使客、各掌其方國及

互市事、皇朝以四方館隷中書、改典蕃曰典客署、○中略

典客令、掌二王後介公酅公之版籍、及東夷西戎南蠻北狄、歸化在蕃者之名數、丞爲之貳、

〔通典職官二十六〕鴻臚卿

周官大行人掌大賓客之禮、○注略秦官有典客、掌諸侯及歸義蠻夷、○注略漢改爲鴻臚、○注略景帝二年、令諸侯王薨、列侯初封、及之國、大鴻臚奏諡誄策、○注略列侯薨、及諸侯太傅初除之官、大行奏諡誄策、○注略中六年、改大鴻臚爲大行令、武帝太初元年、更名大鴻臚、又更名其屬官行人、爲大行令、○注略秦時、又有典屬國官、掌蠻夷降者、漢因之、成帝河平元年、省之幷大鴻臚、○注略後漢大鴻臚卿一人、諸王入朝當郊迎、典其禮儀、及郡國上計、餘職與漢同、凡皇子拜王、贊授印綬、及拜諸侯諸侯嗣子、及四方夷狄封者、臺下鴻臚召拜之、王薨、則使使弔之、及拜王嗣、○注略魏及晉初皆有之、○注略自東晉至於宋齊、有事則權置兼官、畢則省、梁除大字、但曰鴻臚卿、位視尚書左丞、常導護贊拜、○注略後魏曰大鴻臚、北齊曰鴻臚寺、有卿少卿各一人、亦掌蕃客朝及吉凶弔祭、後周司寇有蕃部中、大夫掌諸侯朝覲之敍、有賓部中大夫、掌大賓客之儀、隋文帝開皇三年、廢鴻臚寺、入太常、十二年復置、領典客、司儀、崇元三署、至煬帝、置少卿二人、大唐龍朔二年、改鴻臚爲司文、咸亨初復舊、光宅初、改爲司賓、神龍初復舊、卿一人、掌賓客凶儀之事、及册諸蕃、少卿本一員、景雲二年、加一員、領典客司儀二署、署各有令、

〔唐六典鴻臚寺十八〕鴻臚寺卿一人從三品

卿一人、正第三品、統典客、司儀、崇玄等三署、開皇三年、省幷太常、十二年復舊、煬帝降卿爲從三品、皇朝依焉、龍朔二年、改爲同文正卿、咸亨元年、復曰鴻臚、光宅元年、改爲司賓寺卿、神龍元年、復舊、

舊屬官有崇玄署、開元二十五年、勅改隷宗正寺、○中略

鴻臚卿之職、掌賓客及凶儀之事、領典客司儀二署、以率其官屬、而供其職務、少卿爲之貳、

〔唐六典宗正寺十六〕崇玄署令一人正八品下

北齊有昭玄寺、掌釋道二教、置大統一人、都維那三人、亦有主簿功曹員、以管諸州縣沙門、又鴻臚寺統典寺署、有丞一人、後周有司寂上士中士、掌法門之政、又有司玄中士下士、掌道門之政、隋置崇玄署令丞、煬帝改佛寺爲道場、改道觀爲玄壇、各置監丞、皇朝又爲崇玄署令、又置諸寺觀監、隸鴻臚寺、毎寺觀各監一人、貞觀中省、開元二十五年、勅以爲道本玄元皇帝之教、不宜屬鴻臚、自今已後、道士女道士、並宜屬宗正、以光我本根、故署亦隨而隸焉、其僧尼、別隸尙書祠部也、○中略

崇玄令、掌京都諸觀之名數、道士之帳籍、與其齋醮之事、丞爲之貳、

〔通典職官二十三〕禮部尙書

主客郎中一人漢成帝初、置尙書、有客曹、主外國夷狄、後光武分改爲南主客、北主客二曹、至魏亦爲南主客、至晉氏分爲左右南北四主客、或單爲客曹、宋齊梁陳單有主客、後魏吏部管南主客、祠部管左主客、北齊改左主客爲主爵、南主客爲主客、隋初爲侍郎、煬帝除侍字、尋又改爲司蕃郎、武德初改爲主客郎中、龍朔二年、又改主客爲司蕃、咸亨元年、復舊、掌二王後及諸蕃朝聘、

〔菅家文草七書序〕鴻臚贈答詩序元慶七年五月、余依朝議、假稱禮部侍郎、接對蕃客、故製此詩序、

余以禮部侍郎、與主客郎中田達音、共到客館、○下略

〔職原抄上〕玄蕃寮

頭一人無權官、相當從五位上、唐名鴻臚卿、○中略　助一人權助一人、相當正六位上、唐名鴻臚少卿、○中略　允大少、唐名鴻臚丞、　屬大少、唐名鴻臚史、

〔令義解四考課〕僧尼不擾、謂令僧尼不擾也、蕃客得所、謂遠人新至、不服水土、不習風俗、有司存檢、不致令其煩濫也、爲玄蕃之最、謂助以上、

〔延喜式二十一玄蕃〕凡毎年起正月八日迄于十四日、於大極殿設齋、講說金光明最勝王經、請僧卅二口、○中略

前齋四日、錄名申省、省申官、

凡諸國國分寺僧尼、以去年定數勘注一卷、當年三月一日、移送主稅寮、

凡諸國所徵塡、修理國分二寺料稻率分之數、移送主稅寮、

凡應徵免度人還俗僧等課役者、毎年申省、

〔延喜式二十一玄蕃〕凡僧綱、毎歲首、遍訪求諸大寺僧情願國分僧者、不論多少、細記年﨟幷願國、正月卅日

以前、經省寮申官、若申國分寺僧死闕、卽便補之、

凡僧綱辭任者上表、其表盛筥置案上、玄蕃史生一人、執筥敷暉章堂修式堂間、進北二丈許、史生二人、執案自會昌門東戶入、置筥上退出、中務受取奏聞、

凡授戒者、每年三月十一日始行之、月內令畢、其應行事之省寮綱所三司交名、當月五日進官、

凡受戒時、省丞錄、寮允屬各一人、率史生各一人、與威從共向戒壇院、子細勘會官符度緣、便收取受戒者戒牒、具注後紙、以其本籍姓名、卽省寮相共押署、捺以省印、五月以前下於僧綱、僧綱六月一日頒給、若有持白紙戒牒者、科違勅罪、

凡每年四月八日、七月十五日、彈正撿察東西寺非違、允屬相隨祇承、

凡應對僧綱論事者、允屬各一人、就綱所相論、若無者省錄亦聽、

〔延喜式二十一玄蕃〕凡僧尼幷沙彌等、身死及犯罪因才還俗者、收其度緣、年終申官毀之、寮案具注事狀、

凡諸大寺僧有死闕者、每月申送僧綱、僧綱勘取度緣、每年牒送於寮、寮卽申省、省年終申官、

〔延喜式二十一玄蕃〕凡律師以上、有卒去者、申送於省、

凡威儀師六人、從儀師八人、有闕者、僧綱簡定幹事者、申官補之、

凡禪院寺經論、三年一度曝涼、省寮僧綱三綱檀越等、相共檢校、

凡諸蕃使人、將國信物應入京者、待領客使到、其所須駄夫者、領客使委路次國郡置、獻物多少、及客隨身衣物准給迎送、仍令國別國司一人部領人夫防援過境、其在路不得與客交雜、亦不得令客與人言語、所經國郡官人、若無事亦不須與客相見、停宿之處、勿聽客浪出入、自餘雜物、不須入京者、便留當處庫、還日出與、其往還在路所須駄夫等、不得令致非理勞苦、

凡蕃客往還、若有水陸二路者、領客使與國郡司相知、逐便預定一路、明注所須船駄人夫等數、及客到時日、遞牒前所、應須供客之物、令預備擬、不得臨時改易、及有停壅、如有事故、必須停滯及改張者、速造

前所レ勿レ致二費損一、

〔百寮訓要抄〕玄蕃寮鴻臚寺　佛寺僧尼の事を主どる也、又唐人の來朝するをみちびく、玄蕃と申は蕃客の事也、唐人をば蕃夷と申也、鴻臚館とて、唐人のつく所も此所に可レ有、

補任

〔官職秘抄上〕諸寮頭　圖書玄蕃　已上諸大夫諸道者任レ之、〇中略　同助權〇中略　玄蕃〇中略　已上可レ任二良家子一、凡諸司助、以二公卿二合一爲レ最、是可レ任二式部丞一之故也、〇中略　同允大少〇　玄蕃　已上臨時内給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任レ之、凡諸道擧、問者生、任二寮三分一尤爲レ難、〇中略　同屬大少〇中略　玄蕃〇中略　已上臨時内給、諸道所々擧、問者生、幷成功輩任レ之、或以二本寮奏一任レ之、凡寮奏者、於二二分一者許レ之、於二三分一者不レ許レ之、

〔職原抄上〕玄蕃寮

頭一人　五位諸大夫任レ之、近例多以二諸道輩一任レ之、　助一人　同六位任レ之　允大少　六位侍任レ之

屬大少

〔百寮訓要抄〕玄蕃寮

頭鴻臚卿　地下の諸大夫諸道の輩是に任ず

助鴻臚少卿　おなじき六位是に任ず

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月乙卯、以二從五位下鴨朝臣吉備麻呂一爲二玄蕃頭一、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年閏七月癸卯、從四位下安宿王爲二玄蕃頭一、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年二月庚午、以二從五位下文室朝臣助雄一爲二玄蕃頭一、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月九日庚寅、從五位下行安房守紀朝臣吉繼爲二玄蕃頭一、

史生

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略　玄蕃寮〇中略　四人、

寮掌

〔三代實錄九清和〕貞觀六年十一月四日丁亥、始置二玄蕃寮寮掌一員一、

使部
寮丁

〔延喜式十八式部〕凡内外諸司、略〇中寮掌使掌司掌、各二人、略〇中判補之、

凡内外諸司、略〇中寮掌使掌司掌、略〇中以雜色人補之、並把笏、

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、略〇中玄蕃寮略〇中十人、

〔東大寺正倉院文書二〕玄蕃寮解　申請月料事

合參拾貳人十六人立丁、十六人斷丁、

合米玖斛貳斗捌升仕丁十六人別日二升　鹽玖升貳合捌勺仕丁十六人別日二勺

甲賀宮肆人立丁二人、斷二人、

米壹斛壹斗陸升　鹽壹升壹合陸勺　庸布貳段

久邇宮貳拾捌人十四人立丁、十四人斷、

米捌斛壹斗貳升　鹽捌升壹合貳勺　庸布拾肆段

以前來三月廿九箇日料、所請如件、錄狀以解、

天平十七年二月廿日　大初位上守少屬秦大藏連道成

從四位上行頭　從六位下行大允津嶋朝臣

正八位下守少允榎井朝臣別當

諸陵寮

諸陵寮ハ、ミサヽキノツカサト稱シ、山陵、及ビ皇族、外戚等ノ墓ヲ知リ、葬祭ニ預カリ、及ビ陵戸ノ名籍ヲ掌ル、其所屬ニ土部アリテ、凶禮ヲ賛相ス、上世凶禮ノ事ハ、土師宿禰ノ世職ナリシガ、大寶制令ノ時、諸陵司ヲ置キテ之ヲ管ス、聖武天皇天平寶字元年、司ヲ陞セテ寮ト爲ス、

名稱　沿革　職名　寮印　職員職掌

ナホ陵墓ノ事ハ帝王部山陵篇、禮式部冢墓篇等ニ詳ナリ、

〔倭名類聚抄 五官名〕寮　職員令云、〇中略 諸陵寮、（美佐々岐乃豆加佐）

〔職原抄 上〕諸陵寮（唐名廟陵署）

〔續日本紀 十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略 京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等（伊）負圖龜一頭獻止、奏賜止（不）所聞行、〇中略 諸大陵差使奉幣、其改諸陵司爲寮、增員加秩、〇又見令集解

〔大內裏圖考證 二十五〕諸陵寮　古本拾芥抄宮城略圖、宮城一古圖、並在治部省中乾、〇圖略

〔日本略紀 二朱雀〕承平三年六月三日戊申、夜諸陵寮燒亡、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年十月甲戌、始賜諸陵圖書、〇中略 印各一面、

〔令義解 一職員〕諸陵司

正一人、（掌祭陵靈、謂十二月、奉荷前幣是也、喪葬凶禮、諸陵及陵戸名籍事、）佑一人、令史一人、土部十人、（掌贊相凶禮、謂凶禮者、送終之禮、即土師宿禰、年位高進者爲大連、其次爲少連、並紫衣刀劍、世執凶儀、其文多、故不載也、其外臨時取充、謂此長官之職掌、而於此注者、隨便起事、无別例、）使部十人、直丁一人、

〔令集解 四職員〕穴云、贊相凶禮者、就手治死者也、與凶禮及凶事儀式全異也、

〔令義解 一官位〕正六位〇上 諸陵正　從七位〇下 諸陵佑　大初位〇上 諸陵令史

〔拾芥抄 中本官位唐名〕諸陵頭（諸陵令 廟陵監 禮部諸陵令）　助（四人 廟陵小監 禮部令）　允（諸陵丞 廟陵丞）　屬（諸陵錄事）

〔職原抄 上〕諸陵寮

頭一人（无權官、相當從五位上、唐名廟陵令、）　助一人（權、唐名廟陵監、）　允（大少、唐名廟陵丞、）　屬（大少、唐名諸陵錄事）

〔延喜式 二十一諸陵〕凡陵戸及守戸計帳者、寮差專當人、注名申省、分遣本鄕、與國司共相知勘造、其戸籍亦差遣專當官人勘造、

〔延喜式 二十一諸陵〕凡諸陵墓者、毎年二月十日、差遣官人巡檢、仍當月一日錄名申省、其兆域垣溝、若有損

壞者、令守戶修理、專當官人巡加檢校、

〔儀式十〕奉山陵幣儀

十二月上旬、諸陵寮錄幣物數幷應擇日之狀、申送治部省、

〔百寮訓要抄〕諸陵寮 廟陵署 天子山陵をつかさどる也、凡喪葬凶禮をつかさどる、昔より天皇代代の御墓を奉行する也、

〔詠百寮和歌〕諸陵頭

誰もきけ代々をふりたる御陵をふし拜こそ貴かりけれ

補任

〔官職秘抄上〕諸寮頭 諸陵 任人同圖書、但陰陽師醫師、往代憚之、近代不憚、〇中略 同助權 〇中略 諸陵〇中略 已上可任良家子、凡諸司助、以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、〇中略 同允大少 〇 諸陵〇中略 已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧、問者生、任寮三分、尤爲難、〇中略 先坊主膳佑任例、諸陵石作致節〇中略 同屬大少 〇中略 諸陵〇中略 已上臨時內給、諸道所々擧、問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、

〔職原抄上〕諸陵寮

頭一人 近代賀家陰陽師五位已上任之、 助一人權 允大少 屬大少 爲禁忌之官、仍寮頭之外、强不任之、

〔百寮訓要抄〕諸陵寮

頭廟陵令 陰陽道の輩、宿老の人を可任、山陵の事を奉行する也、 助廟陵監 同輩六位是に可任

〔續日本紀十一聖武〕天平三年六月庚寅、外從五位下土師宿禰千村爲諸陵頭、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年七月丁未、從五位下甲賀王爲諸陵頭、外從五位下土師宿禰和麻呂爲助、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年二月十三日己亥、從五位下守圖書頭當麻眞人清雄爲諸陵頭、

〔有職問答三〕一諸陵官事　裏書云、七所廟、大和山城中ニ、柏原醍醐ナドノ天子代代御陵へ歲暮ニ勅使ヲ立ラレテ禮儀アリ、荷前ト云、

當時此沙汰なし、如何、在所はいづく、役は何を勤候、家は誰人、時代はいつのころ迄稱之哉、

荷前ノ使ハ、天子御慥、又御珍事有時、チコタリヲ申タマフ勅使之事也、

諸陵ハ代々ノ國王ノミサヽキヲ被置候、近代ハ遺詔トテ、天子崩御ノ時、御遺言ニテ、不被置其陵候、是ハ國家ノ費ヲ被省之心也、然而自上古被立來候諸陵へハ、時トシテ山陵使、又荷前使トテ、勅使ヲ立ラルヽ事候也、諸陵頭ニハ、陰陽家賀茂氏ノ輩、今モ必任候、當時モ在重朝臣、ミサヽキ田トテ知行候モ、醍醐ノ天皇ノ御陵田候歟、則山科醍醐邊ノ田地領知候也、

土部

〔令義解九喪葬〕凡百官在職薨卒、當司分番會喪、〇中略三位以上及皇親、〇註略皆土部示禮制、謂職員令、贊相凶禮、是也、

〇土部ノコトハ、古代官職伴造篇、及ビ禮式部葬禮篇ニ詳ナリ、

史生

〔類聚國史百七職官〕延曆二十一年十二月癸巳、加置諸陵寮史生四員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略玄蕃寮諸陵寮、各四人、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略諸陵寮各十人、

喪儀司

喪儀司ハ、凶事ノ儀式、及ビ喪葬具ノ事ヲ掌ル所ニシテ、平城天皇大同三年、兵部省ノ鼓吹司ニ併セラル、ナホ葬儀ノコトハ、禮式部葬禮篇ニ載セタリ、

職員職掌

〔令義解一職員〕喪儀司

正一人、掌凶事儀式、及喪葬之具、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、

〔令集解四職員〕釋云、金鉦鐃鼓楯竿等、行列法式、謂之儀式也、〇中略朱云、此司一人以下、及至臣下喪事皆約不、私案約廣可云、未知而何、〇中略古記云、喪葬之具者、卽儀式之具物耳、幷陳圖等是、朱云、喪葬

者、未レ知此文只爲二一人一歟、若爲二臣下一歟何、私案依二喪葬令一、皆可レ知二臣下喪葬一何、

〔令義解一官位〕正六位階〇下 葬儀正　正八位階〇上 葬儀佑　大初位階〇下 葬儀令史

〇按ズルニ、葬儀ハ即チ喪儀ナリ、

直丁

〔東大寺正倉院文書二〕喪儀司解　申請公粮料

合直丁貳人、一人立丁、一人斷、丁、應レ給米伍斗捌升、鹽伍合捌勺、庸布壹段、斷料

右來三月廿九日料、應レ給米鹽等如レ件、錄レ狀謹解、

天平十七年二月廿一日

廢司

〔享祿本類聚三代格四〕詔、觀レ時改レ制、論レ代立レ規、往古相沿、來今莫レ革、故虞夏分レ職、〇詔以下二十二字、原缺、今據二職員令集解一補、損益非レ同、求二之變通一、何常準之有也、思レ欲下省レ司合レ吏、少レ牧多レ羊、致二人務於淸閑一、期中官僚於簡要上、其〇中略 喪儀司併二鼓吹司一、〇中略 主者施行也、

大同三年正月廿日

古事類苑

官位部十四

令制官職十

民部省 廩院併入

民部省ハ、タミノツカサト稱シ、又字音ニテ、ミンブシヤウト稱ス、民政ノ事ヲ總掌スル所ニシテ、人口ヲ檢シ、戸籍ヲ勘ヘ、租庸調ヲ知リ、國用ヲ支度シ、節義アル者ヲ旌表シテ課役ヲ免ジ、孤寡ヲ優恤シ、家人奴婢ヲ知リ、道路橋梁、津濟山川、藪澤田野等ヲ管シ、國郡ノ境界牓示ヲ明載シタル圖帳ヲ具シテ、以テ按檢ニ便ニス、

本省ノ創置詳ナラズ、日本書紀天武天皇六年紀ニ、內小錦上河邊臣百枝ヲ以テ民部卿ト爲スノ文アルヲ始見トス、本省ノ隷屬ニ廩院アリ、諸國ヨリ輸セル租米庸米ヲ納ムル所ニシテ、以テ諸司ノ用度ニ充ツルナリ、

本省ノ被管ニ主計主稅ノ二寮アリ、調庸ト田租トヲ分掌ス、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕省　職員令云、○中略民部省、(多美乃都加佐)

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞

民部省(タミノツカサ)

〔下學集 上官位〕民部卿(ミンブノ)(戸部(コホウ)尙書)

〔職原抄 上〕民部省(當唐戸部)

沿革

〔日本書紀 二十九天武〕六年十月癸卯、內小錦上河邊臣百枝爲民部卿、

廳舍

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年七月戊申、雷光南方而一大鳴、則天災於民部省藏庸舍屋、或曰、忍壁皇子宮失火、延燒民部省、　九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　丙寅、直廣肆紀朝臣弓張誄民官事、

○按ズルニ、民官ハ即チ民部省ナリ、

〔續日本紀文武二〕大寶元年正月丁酉、以守民部尚書直大貳粟田朝臣眞人、爲遣唐執節使、

〔職官志二〕民部卿、在唐即其尚書也、本朝制新令之前、蓋或因唐曰尚書歟、考之史、大寶元年正月、以守民部尚書直大貳粟田朝臣眞人、爲遣唐執節使、和銅元年、攝津大夫從三位高向朝臣麻呂薨、難波朝刑部尚書大華上國忍之子也、推是類似非如後人偶然假稱者、故擧以備考、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等奏、勅改易官號、○中略民部省施政於民、量用惟仁、○量用惟仁、類聚國史作惟仁爲貴、故改爲仁部省、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年五月壬午、從五位下大伴宿禰御依爲仁部少輔、

〔古京遺文〕修造多賀城碑

多賀城○中略

天平寶字六年歲次壬寅、參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政奏改官名、宜復舊焉、

〔拾芥抄中本百官〕民部省宮城內、太政官南、美福大路西、

〔大內裏圖考證二十五民部省〕一古圖曰、民部省、東西五十六丈、按據諸圖同之南北三十四丈、按神泉苑所傳圖曰、二十九丈、蓋誤寫、

〔玉海〕壽永二年九月十九日辛巳、親經來問、仍就此問狀、○安德即位所令申子細也、○中略

一以民部省南門可擬會昌門歟事

申云、儉約者、明王之所好也、何況近日之天下哉、爲省土木之煩費、被止門垣之修造、專可叶時宜歟、但

圖帳　省印　職員職掌

省南門不當高御座正南、雖非巨難、頗不叶正禮歟、加之彼省南築垣、當時無實云々、定有修祓歟、若然者、與改立官南門、不可有幾之差別、猶任治曆例、民部省北垣、移立官南門尤宜歟、而其事猶不可叶者、不□官門、其中被縮行裝束事如何、其條又猶難叶者、雖不穩便、被用省南門之外、無他計歟、

〔延喜式二十二民部〕凡畿內調物者、專當國司部領、納京庫、其郡司者、不可入京、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年六月十九日甲寅、地震十四度、（○中略）民部省舍三宇顚倒、

〔玉海〕安元三年（○治承元年）四月廿八日丁酉、亥剋上方火、樋口富小路邊、（○中略）燒亡所々、（○中略）民部省、（圖帳倉不燒亡）

〔平戶記〕延應二年四月廿日甲寅、巳剋許著直衣參大殿、而渡御攝政殿了云々、仍卽參、以大內記信房入見參之次、申民部省文庫破壞間事、（○中略）仰云、猶々仰合人々可被左右云々、又民部省町、皆以爲權門押領之間、遂年凌夷之子細、此次被申了、　廿九日癸亥、早旦陸奧守宗基來、民部省町內兩名爲彼領云々、近年每鄕恩免云々、今猶示其由也、件事屬權勢皆申免之間、近來有若亡云々、仍不可免之由、仰年預召文等了、然而示子細者似無仁義、早可免之由、返答謝遣了、

〔職原抄上〕民部省　有圖帳國郡牓示、甚以明白、謂之民部省圖帳、

〔百練抄十三後堀河〕嘉祿二年九月十一日、盜人切穿民部省文庫、盜取文書等了、諸國圖帳、少々紛失、

〔平戶記〕延應二年四月廿日甲寅、巳剋許、著直衣參大殿、而渡御攝政殿了云々、仍卽參、以大內記信房入見參之次、申民部省文庫破壞間事、是先日圖帳可濕損之間、可渡外記文殿□□□被仰之故也、召文預友兼相尋子細之處、遂年破壞性入之處、勿論及五月雨者、所殘之圖帳雖一通不可全然之由所申也、仍申件事也、仰云、猶々仰合人々可被左右云々、

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部民部、（○中略）印各一面、

〔令義解一職員〕民部省（管寮二）

卿一人、掌二諸國戸口名籍、謂依二戸令一京戸及官奴婢名籍、亦同掌也、賦役、孝義、謂依二賦役令一孝子義夫同籍、悉免二課役一是也、優復、謂優、優賞也、同令、有二精誠通感一者、別加二優賞一是也、復、復除也、同令、没二落外蕃一得レ還、及遷レ郷給レ復是也、蠲免、謂同令應レ免二課役一者、皆待二蠲符至一、然後注レ免是也、家人、奴婢、謂既非二平民一故別顯、其道橋以下、藪澤以上、唯據二地圖一知二其形界一、至二於檢勘一、不二更關渉一、橋道、津濟、渠池、山川、藪澤、諸國田事一、大輔一人、少輔一人、大丞一人、少丞二人、大錄一人、少錄三人、史生十人、省掌二人、使部六十人、直丁四人、

〔令集解職員四〕問、戸令云、官戸奴婢、毎年正月本司色別各造二籍二通一、一通送レ官、一通留二本司一者、彼送官之一通入二此省一歟、答、然也、寺家人奴婢亦掌耳、釋云、官戸及官奴婢名籍亦掌、案二戸令一知也、穴云、諸國戸口者、其皇親籍、亦在二此司一也、官奴婢、私奴婢等籍、亦在二此司一、依二戸令一知耳、問、寺家人奴婢、何司所掌也、答、或云、寺奴婢家人之籍、與二僧尼籍一共作送レ官、而入二中務治部一耳、或云、不レ見二正文一、猶在二此司一耳、時行事亦同レ之、古記云、卿注云、計二料國用一及勘二勾用度一、謂計二料一年所レ用物一、及勘二勾費用之物一也、今令レ進二諸司支配文一是也、

〔令義解官位一〕親王三品四品八省卿

諸王諸臣正四位〇下階　七省卿　正五位〇下階　七省大輔　從五位〇下階　七省少輔　正六位〇下階　八省大丞　從六位〇上階　八省少丞　正七位〇上階　八省大錄　正八位〇上階　八省少錄

〔拾芥抄中本官位唐名〕民部卿戸部尚書　輔戸部侍郎　職方郎中　戸部員外郎　丞戸部郎中　戸部員外郎　職方員外郎　職方郎中　錄戸部主事

〔通典職官二十三〕戸部尚書

隋初有二度支尚書一、則幷二後周民部之職一、〇略註開皇三年、改二度支一爲二民部一、統二度支民部金部倉部四曹一、國家〇唐修二隋志一、謂二之戸部一、蓋以二廟諱一〇唐太宗諱世民故也、〇略註大唐永徽初、復改二民部一爲二戸部一、廟諱故也、太宗在レ位、詔官名及公私文籍、有二世民兩字一不二相連一者、並不レ諱、至二高宗一始諱レ之、

〔唐六典三戸部〕戸部尚書一人正三品

周之地官卿也、漢成帝置尙書五人、其三曰民曹、主吏人上書事、後漢以民曹兼主繕修功作、當工官之任、魏置左民尙書、晉初省之、太康中、又置、惠帝時、有右民尙書、東晉及宋齊、並置左民尙書、梁陳並置左戶尙書、並掌戶籍、兼知工官之事、後魏北齊、有度支尙書、亦左民右戶之任也、後周依周官、置地官府大司徒卿、隋初曰度支尙書、開皇三年、改爲民部、皇朝因之、貞觀二十三年、改爲戶部、明慶○卽顯慶元年、改爲度支、龍朔二年、改爲司元太常伯、咸亨元年、復爲戶部、光宅二年、改爲地官尙書、神龍元年復故、○中略

戶部尙書侍郎之職、掌天下戶口井田之政令、凡徭賦職貢之方、經費調給之算、藏貨贏儲之準、悉以咨之、其屬有四、一曰戶部、二曰度支、三曰金部、四曰倉部、尙書侍郎總其職務、而奉行其制命、

〔唐六典五兵部〕職方郎中一人從五品上

周禮夏官有職方氏、中大夫之職、掌天下之地圖、主四方之職貢、職方郎中之任也、後周依周官、隋開皇初、始置職方侍郎一人、煬帝曰職方郎、武德三年加中字、至龍朔二年、改爲司城大夫、咸亨元年復故、○中略

職方郎中、員外郎、掌天下之地圖、及城隍鎭戍烽候之數、辨其邦國都鄙之遠邇、及四夷之歸化者、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

民部主計及越前肥後二國增官員事

右謹案令條、官員有限、緣事繁閒、應有增減、而民部省及主計寮、計納雜物、勘勾用度、諸司之中、尤是忽劇、○中略伏請民部省加大丞一人、○中略自今以後、永爲恒式、庶得各分其職、公事早濟、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延暦九年二月廿五日

聞

〔職原抄　上〕民部省　周禮地官大司徒之職也、邦國土地之圖、戸口人民之數、此官之所知也、本朝又如此、天下之戸口皆掌之、又有圖帳、國郡牓示、載以明白、謂之民部省圖帳、

卿一人相當正四位下、唐名戸部尙書〇中略　大輔一人權大輔一人、唐名戸部侍郎〇相當正五位下中略　少輔一人權少輔一人、相當從五位下唐

名同員外郎〇中略　丞大二人、少二人唐名戸部郞中　錄大少唐名戸部主事

〔令義解　四考課〕戸口不濫、謂據勘籍帳、令無脱漏及冒名也、倉庫有實、謂諸國所支租税、雜稻擧息、如法令、无懸欠也、爲民部之最、謂少輔以上、

〔延喜式　二十二民部〕凡應造籍者、預前一年、省錄申官、待報施行、〇下略

〔續日本紀　三文武〕慶雲三年閏正月戊午、勅〇中略收貯民部、諸國庸中輕物、絁絲綿等類、自今以後、收於大藏、而支度年料、分充民部也、

〔延喜式　二十二民部〕凡大帳調庸正税損益者、勘抄總目、大帳税帳明年正月、調帳七月並申省、省卽押署申官、自餘損益准此

〔三代實錄　四十四陽成〕元慶七年十一月二日乙丑、勅令民部省、諸國貢調郡司、參省日、勘會見物之後、五箇日內、移送大藏省、

〔延喜式　二十二民部〕凡勘納調庸物者、郡司見參之日、省錄率史生等向大藏省正倉院、與大藏錄共勘會見物、然後可納調物狀移大藏省、

〔延喜式　二十三民部〕凡諸國大帳正税帳損益者、主計主税勘定畢、卽可給返抄之狀申省、省修解進官、但調帳者、待收物訖乃送、

凡雜公文結解者、正税帳大帳出擧帳明年正月一日、田租帳四月一日、調庸帳七月一日、主計主税並申送省、卽同月上旬申官、但出擧帳留省、

〔延喜式　二十二民部〕凡調庸專當郡司到京者、使國司引見省、若有私還者、省錄歷名、九月卅日以前申官、

〔延喜式　二十三民部〕凡諸國大未進小未進等帳者、勘錄國司功過、每年正月五日以前進官、

〔延喜式民部二十三〕凡隱首括出者、畿內十月一日、外國十一月一日、主計寮載功過帳申省、省押署進官、得度除帳者、移主稅寮不申省、

〔延喜式民部二十二〕凡朝集使終事還國者、令二寮（○主計主稅）勘合官舍溝池桑漆種麥陸田鷄鋪設等帳、然後移送式部省、

〔延喜式民部二十三〕凡御贖幷中宮御贖、及祭忌火庭火御竈神料雜物、神祇官所受、待彼官移文充之、（春宮坊幷齋院司所祭亦同）但陰陽寮所祭者、待中務省移充之、

凡京職正稅義倉穀者、省與主計主稅共知出納、（正稅主稅、義倉主計、）義倉用度帳、京職每年三月進官、卽經省下寮、

年料舂米

伊勢國（大炊一千七十石、糯卅石、）　尾張國（大炊一千八十石、糯廿石、）　參河國（大炊七百石）

近江國（內藏五十石、省五百石、大炊一千二百石、糯卅石、）　美濃國（內藏廿石、大炊一千四百石、糯廿石、〇中略）

右廿二國、各以正稅舂運、白米送大炊寮、黑米送省及內藏寮、其運送傜夫、並給路粮、

〔延喜式民部二十二〕凡十一月新嘗會、黑白二酒料米、九月下旬、省下符畿內、卽舂省營田稻、送造酒司、

凡正月三節、及十一月新嘗會等料酒、預仰畿內、用正稅釀送造酒司、（山城國四石二斗一升、大和河內攝津等國、各四石、）

〔延喜式民部二十二〕凡給公粮者、本司每月十一日、錄移送省、省總勘錄、十六日申官、待印書到給、但六九十二合三箇月、以十三日爲申省期、

〔延喜式民部二十二〕凡諸國使請暇文、輔已下共判署下寮、

凡點仕丁者、每五十戶二人、（采女采薪守舍不入此數）不點厮丁、其大替前年四月、省預勘錄應點人數、申官下符國司、計帳之日點定、

凡諸國匠丁還鄉者、本司錄移送省、省申官給路粮、一人日米一升、鹽一勺、（仕丁准此）

補任

凡仕丁重病、不堪駆使者、本司移省、撿實申官、充給食馬、遞送本鄕、(諸家仕丁令家送之)隨即差替、

〔類聚符宣抄六〕正三位行中納言兼民部卿伴宿禰善男宣、凡可經民部之色、總用省符、而繁劇細碎、不堪如式、直下承知、實足弃累、但至免除之物、須必用省符、外記宜留意勘返、不可略漏、

貞觀四年七月廿七日　大外記賀茂朝臣岑雄奉

〔類聚符宣抄七〕國栖事

民部封戶所

勘大和國國栖丁十五烟事

右撿去天曆三年文簿所注如件、但至于戶田者、引勘年々圖帳、無所見、仍勘申、

寬仁二年十一月十日　少錄尾張如親

少丞菅原明任

〔朝野群載八別奏〕民部省位田宛文

民部田所

改給從五位上藤原朝臣位田拾町事〇中略

右位田改給如件

寬治八年五月廿日　案主史生惟宗〇下略

〔官職秘抄上〕八省卿　治部　民部　已上必爲大中納言、而近年及參議散三位、〇中略　同輔(大少有權)〇中略　民部　殊選知吏途之法者任之、雖辨少納言近衞次將知之輩兼之、中古以往守年限、必任受領、近代不被選人、又不任受領、四位少輔例、(泰通)二度任例、(泰憲)〇中略

同丞(大少)〇中略　民部　彈正忠、勘解由判官、少內記等、爲重代輩、勸學院有官別當任之、自諸司助遷任例、(菅原忠時、藤原宗康、)自兵部丞遷任例、(藤原維香、橘廣平、)諸官少進兼任例、(橘懷、平業貞、)文章得業生任例、(藤衡)　兼文章生任例、

大江如鏡卿申任例、始ㇾ自二藤原後實一、依二成功一任例、始ㇾ自二藤原爲眞一○中略

同錄大少中略 ○ 式部　民部　已上他省錄、諸司二分任ㇾ之、或文章生任ㇾ之、不ㇾ似二他錄一、殊有二清選一、必可ㇾ任二外記史一之故也、自二式部錄一遷任例、林相門

〔職原抄上〕民部省

卿一人　當省卿者、雖ㇾ爲二四位相當一、古來公卿兼官也、仍無二四位拜任之例一、多是納言以上兼ㇾ之、仍中○中務式部○式部之外、以二此卿一爲ㇾ重也、　大輔一人權大輔一人　少輔一人權少輔一人　名家輩任ㇾ之、未ㇾ取二下一之官也、

丞大二人少二人　可ㇾ然之六位侍任ㇾ之、必可ㇾ敍二爵一之故、爲二重職一也、見二式部丞之所一、　錄大少

〔百寮訓要抄〕民部省

卿戸部尙書　是は可ㇾ然納言以上のなり侍る也、昔は殊更執し侍し官也、宿老の納言なる事也、治部卿よりは猶是をば執し侍りけるにや、諸國の事などを取沙汰して、天下の大事をいろふべき故也、

大輔戸部侍郞　殿上四位五位、地下の人々も任る也、名家儒道の人々皆是に任ず、八省の輔、何も同事なれども、人の家々に執しつけたる樣侍れば、其樣さだまれる事なし、　權大輔　四位五位、名家諸家、皆是に任る也、　少輔　殿上地下五位是に任ず、同前、　權少輔　是も同前、正より權は次なる事にてあれども、近來は殿上人なども、只おなじ品なる樣に任る也、八省の輔、皆如ㇾ此、さきにも申侍る樣に、むかしは地下の諸大夫極官にて侍し也、當時は零落す、

〔光臺一覽二〕民部卿一人　唐名戸部尙書、右同斷、○三位以上高家　四輔丞錄、同斷、○輔公卿、丞錄地下、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年四月辛未、從四位下巨勢朝臣麻呂爲二民部卿一、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、從四位下多治比眞人池守爲二民部卿一、

〔續日本紀八元正〕養老四年十月戊子、正五位上大伴宿禰道足爲二民部大輔一、從五位下高朝臣大足爲二少

輔、

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、○中略天應元年授從四位下、拜民部大輔、爲攝津大夫、累遷中宮大夫、民部卿、授從三位、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年八月壬申、大納言正三位藤原朝臣良房爲兼民部卿、

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年二月十日癸卯、散位從四位上基兄王爲民部大輔、從五位下行尾張權介笠朝臣弘興爲少輔、

〔菅家文草 一詩〕拜戸部侍郞、聊書所懷、呈田外史、○島田良臣

聞說劇官戸部郞、人臣何簡職閑忙、偸居史局三年去、忝入兵曹一月強、余貞觀十三年爲內史、今年正月遷兵部侍郞、二月遷任戸部、案牘初慙從政理、風雲暫謝屬文章、知君近侍公卿議、功過昇降報莫忘、外史侍近仗頭案、每有公議、終日祗候、故云、

〔三代實錄 四十五光孝〕元慶八年三月九日庚午、正三位行中納言在原朝臣行平爲兼民部卿、

〔菅家文草 九奏狀〕爲在中納言謝民部卿狀

右臣行平、伏奉今月九日詔旨、以臣爲民部卿、恩喧冬日、懼切春氷、三省而慙、一身無措、臣謹撿人民損益、倉庫盈虛、雖繫國吏之常憂、復關所司之明察、故旣往任此職者、皆是詳通政事、廣踏吏途、僉曰之容、具瞻所屬而已、臣累佩銀魚、久忍尸素、縱期粉骨、已無才智之可施、空叩丹心、唯有老病之相迫、上畏玄鑒、下愧蒼生、伏願陛下、曲廻聖恩、罷臣所職、勿俾微臣爲天工之盜、機要爲閑曠之官、臣行平、誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

元慶八年三月廿一日

〔本朝文粹 六奏狀〕請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀　橘直幹

右直幹、謹撿案內、去天曆三年、自大學頭大內記、拜當職之日、所帶兩官、皆被停止、朝家自被始置文章博士之後、未聞其例、又至同四年、三統元夏、從式部少輔、除儒職之日、不罷少輔、被賜兼字、拜除之恩惟

史生

一、榮枯之分不同、依人而異事、雖似偏頗、代天而授官、誠懸運命、獨守一職、爰歷七年、今撿前例、職經博士、見在當朝者、大江維時朝臣、博士上兼任式部少輔、大學頭同朝綱朝臣、先兼左少辨、後兼民部大輔、紀在昌朝臣、先兼式部少輔、後兼民部大輔大内記、菅原在躬朝臣、兼右少辨等是也、往古之例、不可勝計、又儒官之例、不越次第、而三善文明、及三統元夏等者、皆是直幹之下﨟末座也、藤原國光者、直幹榮爵之後、所問之秀才也、式部少輔、每有其闕、三人超越、遞被拜任、又至于算明法等博士、皆帶顯職溫官、或兼二寮之頭助、爲一朝之要樞、或兼警衞判斷之職、掌國典朝威之嚴、而直幹不量涯分、謬竊大業之名、既非器用、自漏明時之祿、年齡漸傾、滿頭霜雪一半、進退惟谷、每步山川千里、望後進之歡華、眼疲雲路、對傍人之榮貴、顏低泥沙、獨仕有道之邦、獨抱貧賤之恥、久顧不運之質、多積淪落之悲、抑近代成業之輩、悉是儒門之胤也、文籍隨身、提撕在耳、少者二十有餘、老者僅過三十、皆繼箕裘、咸列昇進、〇中略直幹比年不奏申文、唯恃天道、亦憑聖明、然而蒼々之玄遠難答、瑣々之素懷未遂、伏惟昇殿是象外之選也、俗骨不可以踰蓬萊之雲、尙書亦天下之望也、庸才不可以攀臺閣之月、至民部之大輔者、專非溫潤之地、卽是恒例之兼官也、誰爲過分之榮職乎、徒銷日月、不若趨馳、望請殊蒙天恩、被兼任件闕、暫慰陸沈淹屈之愁、直幹誠惶誠恐、謹言、

天曆八年八月九日　　正五位下行文章博士橘朝臣直幹誠惶誠恐謹言

〔公卿補任後堀河〕嘉祿三年丁亥○安貞元年

非參議從三位藤公長四十四、治部卿、四月三日服解、十月廿一日遷民部卿、

頭注　非參議任民部卿例、和氣淸麻呂之外無近例、故光範卿任式部大輔、叙二位之後任之

〔續日本紀六元明〕和銅六年十月丁巳、更加民部史生六員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略民部省廿人、〇中略試諫景迹、然後取用、亦不得輙補畿外人、

〔延喜式三十五大炊〕民部史生廿人〇中略

省掌

右依₂前件₁人別日米一升、

〔類聚國史 百七職官〕大同元年十月壬申、中務、治部、民部、刑部、大藏、宮内等六省省掌、准₂式部兵部二省₁聽₂把笏₁、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年十月庚午、置₂民部省掌二人₁、

〔延喜式 十八式部〕凡内外諸司、官掌省掌〇中略各二人、但中務、治部、民部、〇中略並待₂本司移₁補之、自餘者判補之、

扶省掌

〔延喜式 十八式部〕凡中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正等省臺、正員之外、扶省掌、臺掌、以₂入色者₁、各置₂二人₁、令₂習₁儀式₁、皆待₂本司所送名簿₁乃補之、若正員有₂闕者₁、以₂扶省掌₁補之、

〔類聚國史 百七職官〕承和八年十月庚午、置₂民部省扶省掌二人₁、

使部

〔延喜式 十八式部〕凡諸司使部者、〇中略民部省卌人、

〔東大寺正倉院文書 十一〕

戸主出雲臣麻呂〇中略

弟少初位上出雲臣乙麻呂年肆歲〇年齡有₂誤脱₁　正丁　右頰疣　民部省使部

裏書　山背國愛宕郡出雲鄕雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

仕丁

〔朝野群載 二十七諸國公文〕民部仕丁所返抄　能登國

撿納仕丁肆拾肆人事〇中略

右年々料所₂進、撿納如₁件、故返抄、

天永四年正月　日　小錄兼太皇太后宮少屬大江朝臣在判

少丞平朝臣在判

〇

〔西宮記臨時五〕諸院　廩院（在民部省東、納諸國庸租黑米、充公用、今按、屬民部省、分省官主當之、）

〔大内裏圖考證二十五〕諸圖、廩院在民部省東、神祇官西、宮内省南、

〔令義解五宮衞〕凡開閉門者、〈○中略〉諸衞按檢所部及諸門、（謂〈中略〉所部者、御垣周廻、及大藏、民部廩院等、令衞士守是也、）

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年三月乙巳朔、震民部省廩、

〔三代實錄四十六陽成〕元慶八年六月廿三日壬子、夜偸兒入民部廩院倉、盜取米一斛五斗、爲行夜者所捕得、

〔類聚符宣抄七〕應以主計權少屬川瀨保平爲廩院長殿勾當令檢納諸國所進雜物事

右得左大史大春日朝臣良辰、去二月十四日解偁、良辰依有蹤跡、兼任廩院長殿別當、謹撿案内、出納官物之勤、監物只知當日之事、主計永有終始之辨、方今依諸司之度手、依事之緩怠、必無定日、只依見參、成其日事、爰諸國之吏、勘濟公文之日、本司稱無寮料之返抄、更致勘會之煩、誠違朝章之意、雖在度手之人、國宰相憚緣事之稽失、還致申宣旨之煩、被知當日事之監物、猶被定其人、況勤終始辨之主計、何不置其人哉、望請被下宣旨、准監物例、永以主計寮官人一人、被定給件等諸司之度手、卽令其人辨寮料之返抄、將省國宰申宣旨之煩者、右大辨大江朝臣齊光傳宣、左大臣宣、宜以件保平爲勾當令勤仕者、

天元三年四月七日　　　右大史牟久忠陳奉

民部大錄多惟時（奉、四月十七日）

大藏少錄大原連松（奉、四月廿日）

〔三代實錄十八淸和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、〈○中略〉運廩院雜物車馬、聽出入自美福門、

〔延喜式四十一彈正〕凡運民部廩院米車馬、自美福門脇門、〈○中略〉並聽出入、

〔延喜式二十三民部〕凡諸司諸家所借、廩院米一百石以上者、非奉勅官符、莫以奉行、

〔西宮記七月〕八日文殊會料米廩院粃石

〔文德實錄十〕天安二年五月己丑、出(○中略)民部廩院米五百斛(○中略)賑給左右京苦霖之窮民、

名稱

主計寮

主計寮ハ、カゾフルツカサト稱シ、後世カズヘノツカサト稱ス、調庸ヲ計納シテ、國用ヲ支度スル所ナリ、

本寮ハ、主稅寮ト共ニ要劇ノ官ナルヲ以テ、並ニ長次官ハ、吏務ニ諳練シタル者、若シクハ諸道ノ博士ヲ以テ任ジ、長次官ノ中一人ハ、必ズ算博士ノ職ヲ兼チ、又特ニ算師ヲ置キタリ、而シテ寮官ハ其勞他司ニ異ナルヲ以テ、俸給モ從ヒテ優渥ナリ、故ニ後世、二寮ノ職員ヲ稱シテ溫職ト爲ス、

〔倭名類聚抄五職名〕寮　職員令云、(○中略)主計寮、加須不留豆加佐

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

主計寮(カゾフルツカサ)

〔節用集加官名〕主計頭(カズヘノカミ)

〔職原抄上〕主計寮唐名金部　又度支

廳舍

〔大內裏圖考證二十五〕諸圖主計寮、在民部省中巽隅、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年五月戊申、主計寮言、寮中置廚、苦於愼火、賜散位寮東面地、廣七丈、長十丈、將爲置廚之處、許之、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕治曆三年八月九日、寅剋主計寮燒亡、

〔玉海〕安元三年〇治承元年四月廿八日丁酉、亥剋上方火、樋口富小路邊、〇中略燒亡所々、〇中略主計寮、

寮印

〔日本紀略桓武〕延暦十五年三月丙申、始賜主計主税二寮印也、

職員
職掌

〔令義解一職員〕主計寮

頭一人、掌下計納調及雜物、謂除調以外、庸及諸國貢獻物等是也、支度國用、謂勘勾用度、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、算師二人、掌勘計調庸及用度、史生六人、使部廿人、直丁二人、

〔令集解四職員〕釋云、依計帳而計丁數、以勘當年可輸物、并可用之數、跡云、支度國用、謂八月卅日以前、諸國計帳進上、則計算可輸之調庸、校定來年用物可足不足之狀申官也、又司々令進支度之書、則預勘定可足之狀申官也、〇中略朱云、問支度國用者、支度來年可用國用者、問、稱一年用物者、自去年用物者、自去年八月至今月七月歟、何者以八月卅日以前計帳至主計寮可支度、故、答不然也、自來年正月至十二月稱一年、

〔令義解官位〕從五位階〇上主計頭　正六位階〇下主計助　正七位階〇下主計大允　從七位階〇上主計少允　從八位階〇上主計大屬　主計少屬　主計筭師〇主計少屬以下、下階、

〔拾芥抄中本官位唐名〕主計頭比部郎中金部郎中　度支郎中　助金部員外郎度支員外郎　比部員外郎　允度支部郎　屬金部主事度支主事　筭比部計史度支計史

〔唐六典六刑部〕比部郎中一人從五品上

魏氏置、歷晉宋齊後魏北齊、皆有郎中、後周天官府有計部中大夫、蓋其任也、梁陳隋並爲侍郎、煬帝曰比部郎、自晉宋齊梁陳、皆吏部尚書領比部、後魏北齊及隋則都官尚書領之、皇朝因焉、武德三年、加中字、龍朔二年、改爲司計大夫、咸亨元年復故、

〔唐六典三戶部〕度支郎中一人從五品

漢有度支侍郞、節郞中之任也、歷魏晉宋齊後魏北齊、並有度支郞中、梁陳隋爲侍郞、煬帝但曰郞、自漢魏以來、皆度支尙書領度支郞、開皇三年、改度支尙書爲民部尙書、始民部領之、皇朝因焉、武德三年、加中字、龍朔二年、改爲司度大夫、咸亨元年復故、

員外郞一人從六品

隋開皇六年置、煬帝改曰承務郞、皇朝爲員外郞、龍朔咸亨隨曹改復、○中略

度支郞中員外郞、掌支度國用、租賦少多之數、物產豐約之宜、水陸道路之利、每歲計其所出而支其所用、

金部郞中一人從五品上

漢置尙書郞四人、其一人主財帛委輸、蓋金部郞曹之任也、歷魏晉宋齊後魏北齊、並有金部郞中、梁陳隋爲侍郞、煬帝但曰郞、皇朝因之、武德三年、加中字、龍朔二年、改爲司珍大夫、咸亨元年、復故、

員外郞一人從六品上

隋開皇六年置、煬帝改曰承務郞、皇朝爲員外郞、龍朔咸亨、隨曹改復、○中略

金部郞中、員外郞、掌庫藏出納之節、金寶財貨之用、權衡度量之制、皆總其文籍而頒其節制、

〔享祿本類聚三代格〕四太政官謹奏

民部主計及越前肥後二國增官員事

右謹案令條、官員有限、緣事繁閑、應有增減、而民部省及主計寮、計納雜物、勘勾用度、諸司之中、尤是忽劇、○中略伏請民部省加大丞一人、主計寮少允少屬各一人、○中略自今以後、永爲恒式、庶得各分其職、公事早濟、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延曆九年二月廿五日

聞

〔職原抄上〕主計寮

頭一人（無官、金部郎中、相當從五位上、○中略、唐名、又度支郎中）　助一人（權助一人、唐名金部員外郎、相當正六位下、○中略）　允（大少、唐名度支郎中、○中略）

屬（大少、唐名金部主事）　筭師（相當從八位下、唐名金部計史）

〔令義解考課四〕支度國用、明於勘勾、爲主計之最、（謂助以上、）

〔令義解賦役三〕凡每年八月卅日以前、計帳至付民部、主計計庸多少、充衞士、仕丁、采女、女丁等食、（謂除當年須役人之外、皆總輸庸、充衞士女丁食、并役民雇直及食也、）以外皆支配役民雇直及食、九月上旬以前申官、

〔延喜式民部二十三〕凡諸國大帳正稅帳損益者、主計主稅勘定畢、卽可給返抄之狀申省、省修解進官、但調帳者、待收物訖乃送、

凡諸院諸家、募封戶所借物、主計寮勘補之數、每年申省、省移大藏省、

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者、皆據去年帳勘其出入、但死亡篤癈殘疾服侍隱首括出、并中男鄕戶課丁等色、計會別簿、其依符入課、及雜色等類、勘合省符、若違符過免、并可進而不進者、並卽勘出、徵其課役、次計會去年大帳後死帳與今年死亡帳、若名在後死帳、不載死亡帳者、亦勘出之、次勘神寺諸家封戶、并應定納官人數及賦物、卽勘抄損益總目、明年正月一日申省、訖勘造應給返抄之狀、送主稅寮、卽勘出擧帳之狀、便錄主計狀尾、官人署名返送、訖卽申省、

凡勘大帳損益者、皆須相折損進撿其損益、（其調丁有益、而庸丁有損者、謂以補庸丁二人、中男補損、一如令條也、）若損進同數無所增益者、卽申官省返却其帳、但通計數年有益無損者聽之、（假令二年有益廿人、三年有損十人、相准元年有益無損之類、）

〔令義解賦役三〕凡雇役丁者、本司預計當年所作色目多少、（謂本司者木工寮也、色者、草葺瓦葺之類也、目者、倉屋廳屋殿之類也、多少者、倉屋及人功多少也、）申官、錄付主計、（謂案文、本司既申官、官卽付主計、而稱錄付者、官取本司錄狀、卽轉付主計、非是官更別錄也、）覆審支配、（謂主計覆審申官、官卽奏聞支配也、）

〔延喜式民部二十三〕凡京職正稅義倉穀者、省與主計主稅共知出納、（正稅主稅、義倉主計、）義倉用度帳、京職每年三月進官、卽經省下寮、

〔百寮訓要抄〕主計寮 金部又ハ倉部 諸國の年貢雜物をかずへ納るよし、令にも見えたり、

〔詠百寮和歌〕主計頭

色々の御調物をもかぞへそへかず限りなくをさめぬる哉

〔類聚國史百七職官〕大同三年正月庚戌、始令下内舍人與二監物主計一共出中納諸司雜物上、其辨官、中務、民部等、並不レ預焉、

補任

〔官職秘抄上〕諸寮頭　主計　主税　已上大外記、大夫史、諸道博士任レ之、就レ中至二筭博士一者、必兼二頭助一、頭助中不レ置二筭博士一例、寛治二年 父子爲二二寮頭一例、氏主、縄雄、○中略 同助権○中略 主計○中略 已上大外記、大夫史、諸道博士任レ之、就レ中至二筭博士一者必置レ之、兄弟相並例、主計爲忠、主税爲長、四位例、爲忠、忠廉、依二成功一任例、義忠、國明、依二父讓一任例、信俊、師忠、信憲、 同允大少○中略 主計○中略 已上以二寮奏一任レ之、或臨時内給、或成功輩等又任レ之、兼二山城介一例、宗岡公能、神服是輔、兄弟爲二允屬一例、主計佐伯貞義、兼後、主税中原兼景、兼弘、藤原任レ之例、季光、○中略 同屬大少○中略 主計○中略

已上自二筭師一轉二任之一、五位例、伴兼弘、文室爲任、

〔職原抄上〕主計寮

頭一人 無二權官一 諸道中、爲二五位一者任レ之、 助一人 權助一人 同輩爲二六位一者任レ之、近代五位任レ之、

允大少 六位侍任レ之 屬大少 筭師

〔百寮訓要抄〕主計寮

頭 倉部郎中、金部、 地下五位六位、官外記輩、皆是に任ず、諸國の雜物を計納むる職也、 算師と云ものを此被官におきて、算をかぞへせける也、興ある事也、 助 倉部員外郎、金部、 地下の六位是に任ず、近比は官外記、諸道の輩など是に任ず、 權助 子細同レ前

〔續日本紀十三聖武〕天平十年閏七月癸卯、從五位下石川朝臣牛養爲二主計頭一、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年正月己未、從五位下多治比眞人木人爲二主計頭一、外從五位下葛井連

立足爲助、

〔朝野群載八別奏〕二寮〇主計主稅頭助等解申請天裁事

請被殊蒙天恩裁許雜事二箇條狀

一請被任先例以本道成業者幷給擧學生等寮別永置〇一本此下爲缺文任允屬算師各二人令勘辨公文事、

右謹撿舊貫、二寮者、本算道之官也、聖代應其撰、往古任此官之輩、多是莫非本道儒學之士、成業給擧之生、則携勾勘掌諸之賦斂、傳術數、備一朝之規模之故也、此中橫任之者、間以雖相交、其員僅只一二人、多且不過三四人、而近代以降、偏依此例、每有其闕、不敢用當道業經之者、頻以他人被補任之間、或不才兮、公平難存、或他藝兮、採用異途、知者尙有失錯、何況於不知乎、若當此時、默而不申、則恐公文之趣、首尾遂亂、調稅之辨、損益何知矣、治不忘亂、斯言之近、望請天裁早下宣旨、被裁許件條者、爲朝爲世、永繼先蹤之不朽、爲道爲寮、全貽後代之無誹矣、

一請被同裁許、任先例依寮奏、以本道官人、次第令轉任事、

右謹撿案內、二寮者、本連奏之官也、擇年勞隨身勾勘堪職之者、次第被行轉任、是往古之例也、而近代以降、每有其闕、橫任之者頻加、轉任之跡亦絕、年勞深者彌沈、任日淺者忽昇、誠以徑寸之華、暗蔽百尺之枝者也、望請天裁同被裁許件條者、將慰彼積薪之愁矣、

以前條事、言上如件、望請殊蒙天恩、被裁許件等條者、繼絕興廢、遙誇治世之風、計人授官、忝仰明時之化、仍勤事狀、謹請處分、

承曆四年十月廿八日

從五位上行陰陽助兼主計權助權曆博士賀茂朝臣道榮

正五位下行大外記兼主稅助助敎伊豫介淸原眞人定俊

正五位下行陰陽頭兼主計助曆博士賀茂朝臣道言

從四位下行主稅權助兼算博士播磨權介三善朝臣爲長

從四位下行主計頭兼算博士紀伊守小槻宿禰孝信
正四位下行主稅頭兼侍醫丹波權守丹波朝臣雅忠
主稅權助兼算博士三善朝臣爲長

二寮官人覆勘卿宣
被二卿宣一云、件人爲二道之助一、宜レ令レ覆二勘諸國公文一者、
康平二年九月十八日　民部少錄中原奉任奉

算師

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、○中略主計主稅筭師、雅樂諸師、如レ此之類、准二官判任一、

〔續日本紀八元正〕養老三年六月丙子、令二神祇官宮主、○中略主計寮、主稅寮筭師、○中略等始把一レ笏焉、

史生

〔續日本紀四元明〕和銅元年八月庚辰、兵部省更加二史生六員一、○中略主計寮四員、通レ前十人、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略主計寮十一人、權一人

凡主計主稅勘解由等寮使史生、勞十年爲レ限、以外諸司史生、廿年爲レ限、並補二諸國史生一、

寮掌

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十二月辛卯、置二主計主稅二寮、寮掌各二員一、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年六月甲子、始置二主計主稅二寮、寮掌各二人一、准二勘解由使及京職一、以二雜出身人堪レ事者一補レ之、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略主計寮、主稅寮各十人、

主稅寮

主稅寮ハ、チカラノツカサト稱ス、チカラトハ、田租ノ謂ナリ、全國ノ田租、及ビ倉庫ノ出納ヲ管シ、諸國ヨリ貢上スル舂米及ビ碾磑ノ事ヲ掌ル、

名稱

〔倭名類聚抄五職官〕寮　職員令云、○中略主稅寮、知加良乃豆加佐

廳舍

〔百寮訓要鈔別註三〕主税寮　民部省被管ナリ、○中略此寮ハ民ノ力ヲ以テ貢グ所ノ租税ヲ主ルユヘニ、田力ヲ上略シテ、チカラト云ナリ、

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

主税寮(チカラノツカサ)

〔職原抄上〕主税寮唐名倉部、又屯田、

〔大內裏圖考證二十五〕諸圖主税寮、在民部省中坤隅、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年七月甲子、左大舍人寮、廢來已久、徒爲空閑處、勅中分其地、以西賜式部省、以東賜主税寮、

〔朝野群載八別奏〕主税寮

請特蒙天裁、任例各被成給位記、當寮伍間貳面瓦葺正廳壹宇作料、榮爵伍人狀、

正六位上藤原朝臣清實　正六位上平朝臣宗貞　正六位上惟宗朝臣則高　正六位上中原朝臣賴元　正六位上紀朝臣義忠

副進覆勘文一通

右謹撿案內、件廳者、嘉承二年三月顚倒、因玆給榮爵七人、可造進之狀、經奏聞之處、同年十二月且被下三人宣旨、依作料不足、去天仁元年重所加給二人也、仍以件等輩敍料造進、請覆勘先畢、望請天裁早被成給件輩位記者、將俾知成功之不空矣、仍勒在狀、謹請處分、

天永二年八月廿日　從五位下行權助惟宗朝臣盛親

從五位上兼直講土佐介清原眞人信俊

從四位上行頭小槻宿禰祐俊

正二位行權大納言源朝臣雅俊宣、奉勅宜作件清貫等五人敍從五位下之位記者、

寮印
職員
職掌

同年九月廿五日　正五位下行文章博士兼大內記越中介藤原朝臣敦光

〔扶桑略記　二十七〕寬和三年〇永延元年四月十二日、盜入主稅寮文殿、取散雜文、

〔玉海〕安元三年〇治承元年四月廿八日丁酉、亥刻上方火、樋口富小路邊、〇中略主稅寮燒亡、

〔日本紀略　桓武〕延曆十五年三月丙申、始賜主計主稅二寮印也、

〔令義解　一職員〕主稅寮

頭一人、掌倉廩謂穀藏曰倉、米藏曰廩也、出納、諸國田租、謂左右京田租、亦准此、舂米、謂知諸國舂米之數、但納大炊寮之日、主計寮計納也、碾磑謂水碾也、作米曰碾、作麵曰磑、事、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、算師二人、掌勘計租稅、史生四人、使部廿人、直丁二人、

〔令集解　四職員〕穴云、舂米、謂元知舂成之狀、其運京納大炊寮時、主計所知也、

〔令義解　一官位〕從五位〇上階主稅頭　正六位〇下階主稅助　正七位〇下階主稅大允　從七位〇上階主稅少允　從八位〇上階主稅大屬　主稅少屬　主稅筭師〇主稅少屬以下、下階、

〔拾芥抄　中本官位唐名〕主稅頭金部郎中比部郎中屯田郎中　助金部員外郎屯田員外郎　允金部郎　屬金部主事　筭倉部計史

〔唐六典　七工部〕屯田郎中一人從五品上

漢尙書郎四人、其一人主戶口墾田、蓋兼屯田之任也、故汜勝之爲侍郎、教田三輔、是也、魏有農部郎曹、晉始置屯田郎中、東晉及宋齊、並左民郎中兼知屯田事、後魏北齊並置屯田郎中、梁陳隋、並爲侍郎、亦郎中之任也、煬帝曰屯田郎、後魏北齊祠部尙書領屯田、陳左戶部尙書領屯田、隋則工部尙書領之、皇朝因之稱郎中、龍朔二年、改爲司田大夫、咸亨元年復故、〇中略

屯田郎中、員外郎、掌天下屯田之政令、

〔令義解　四考課〕謹於蓋藏、明於出納、謂京國官倉、蓋藏及出納、其在京者、主稅自撿挍、在外者、據帳知也、爲主稅之最、謂助以上、

補任

〔唐六典二吏部〕凡考課之法、有四善、〇中略善狀之外有二十七最、〇中略二十一曰、謹於蓋藏、明於出納、爲倉庫之最、

〔延喜式二十二民部〕凡畿外諸國、無主職田者、毎有其闕、式部省移送主稅寮、納其地子、混合正稅、

〔延喜式二十六主稅〕凡勘稅帳者、先據去年帳勘會今年帳、次計會出擧租地子驛傳馬池溝救急公廨夷俘在路飢病、及倉附等帳、次亦待神祇兵部主計玄蕃左右馬等官省寮移、然後返抄送省、若當年勘出物大國滿一萬束、上國八千束、中國六千束、下國四千束、卽返帳、但造損益帳一通留寮、仍錄返由申省、某未納幷交替闕、及去年勘出物未塡者、雖是束把、亦猶返帳、唯當年勘出不滿差數、卽顯勘出、不須返帳、凡勘租帳者、皆據當年帳、卽通計國內、十分以得七分已上爲定、若有不堪佃者、聽除十分之一、如過此限者、各申官聽裁、

〔日本紀略三村上〕天曆三年十二月十九日戊子、被定主稅寮返帳事、

〔百寮訓要抄〕主稅寮倉部、又は屯田郎中、　是は倉廩諸國の年貢の事を主る、大炊寮に納むべき米などを、此寮よりかすへいるゝ也、

〔詠百寮和歌〕主稅頭

治め知心やすくもなりはひの道のちからを惠にぞ請

〔延喜式十八式部〕凡主稅寮勘解由使、莫責正月御齋會不參、

〔官職秘抄上〕諸寮頭　主計　主稅　已上大外記、大夫史、諸道博士任之、〇下略

〇本書全文主計寮篇ニ載ス、故ニ下略ス、

〔職原抄上〕主稅寮

同前〇主計

凡主計主稅、謂之二寮、當寮頭助爲重任、給爵之後任受領云々、近代必不然也、主計者、掌天下戶口員

數竿勘也、主稅者、掌正稅也、依之多者諸道輩任之、

〔百寮訓要抄〕主稅寮

頭 倉部郎中 是も官外記、諸道の輩任す、主計寮に同、主計主稅を二寮と申て、昔は温職に申ける、

助 子細主計助におなじ　權助 同前

〔續日本紀 八 元正〕養老四年十月戊子、從五位上車持朝臣益爲主稅頭、

〔續日本紀 十一 聖武〕天平四年十月丁亥、從五位上久米朝臣麻呂爲主稅頭、

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年正月己未、從五位下甘南備眞人伊香爲主稅頭、外從五位下船連男枏爲助、

〔文德實錄 六〕齊衡元年正月辛丑、外從五位下有宗宿禰益門爲主稅助、竿博士如故、

〔中右記〕大治四年十月八日辛未、今夕秋除目也、○中略 九日、史俊重送聞書、披見之處、

主稅頭丹波實康、父讓、○中略

實康年纔十三歲、被成主稅頭、古今未有此例云々、

〔薩戒記〕應永三十三年三月廿九日癸亥、今日除目入眼也、○中略 聞書後日自局送之、○中略

主稅助藤原久家 左近權中將藤原朝臣當年給二合、請任息子、○中略

後日大外記師勝朝臣來談條々、○中略

一予所申之息子二合被任主稅助畢、少納言良賢入道 常宗 難申云、被任二寮 主計主稅也 助之條如何、不可然歟云々、此事奉行外記師世朝臣、則申執筆云々、被仰云、有先例之樣所覺悟也、追可勘見、然而若不可然者、可改玄蕃助者、此事我引勘先例之處、被任二寮先蹤勿論也、仍示其旨於師世朝臣畢、凡公卿以子息請任之何可被惜二寮助哉、殊依爲公卿息子、可被任二寮事歟、尤可規模之故也、

算師

〔續日本紀文武二〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、○中略主計主税筭師、雅樂諸師、如此之類、准官判任、

〔續日本紀元正八〕養老三年六月丙子、令神祇官宮主、○中略主税寮筭師、○中略始把笏焉、

〔權記〕長保二年四月四日辛亥、自内詣左府、○藤原道長此朝候御前、○中略一之次、仰云、主税筭師、非博士之道擧任之由云々、令博士等可令辨之由、可仰左大臣者、仍仰大臣、即仰國平朝臣、

史生

〔續日本紀元正九〕養老六年四月辛卯、主税寮加史生二人、通前六員、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年三月廿七日癸未、制主税寮史生勞、以十年爲限、

〔延喜式式部十八〕凡諸司史生者、○中略主税寮七人、權一人

凡主計、主税、勘解由等寮使史生、勞十年爲限、以外諸司史生、廿年爲限、並補諸國史生、

寮掌

〔續日本後紀仁明十〕承和八年十二月辛卯、置主計主税二寮、寮掌各二員、

〔續日本後紀仁明十三〕承和十年六月甲子、始置主計主税二寮、寮掌各二人、准勘解由使及京職、以雜出身人堪事者補之、

〔延喜式式部上八〕凡内外諸司、○中略寮掌、○中略各二人、但中務、治部、民部、○中略等、並待本司移補之、自餘者判補之、

使部

〔延喜式式部十八〕凡諸司使部者、○中略主計寮、主税寮、各十人、

兵部省

兵部省ハ、ツハモノヽツカサト稱シ、又字音ニテ、ヒヤウブシヤウト稱ス、本省ハ兵政ヲ總管スル所ニシテ、内外武官ノ考課選敍ヲ知リ、兵士ヲ訓練シ、徵發ヲ行ヒ、器仗ヲ具ヘ、諸牧驛傳ノ馬等ヲ掌ル、

本省ノ創置詳ナラズ、日本書紀天武天皇四年紀ニ、栗隈王ヲ以テ兵政官長ト爲シ、大伴連御

行ヲ大輔ト爲ストアルヲ始見トス、

本省ハ既ニ兵政ヲ總管セリ、故ニ預ル所頗ル廣シ、卽チ中宮職、春宮坊、六衞府ノ舍人、齋宮寮ノ門部等ヲ判補シ、衞士、防人、健兒ヲ管シ、鎭守府ノ官人、太宰府及ビ諸國ノ帶仗官ノ事ニ預リ六衞府長官以下ノ馬料、幷ニ兵庫寮、左右馬寮ノ事ニモ關涉セリ、

本省ノ被管ニ兵馬、造兵、鼓吹、主船、主鷹ノ五司アリ、兵馬司ハ、平城天皇大同三年、馬寮ニ倂セ、造兵鼓吹ノ二司ハ、宇多天皇寛平八年、左右兵庫司ト倂セテ、兵庫寮ト號セリ、主船司ハ、廢絕ノ年紀詳ナラズ、主鷹司ハ、淸和天皇貞觀二年以後官員ヲ置カズ、停廢ニ歸シタリ、又平城天皇大同三年ニハ、衞門府ノ隼人司ヲ以テ、本省ノ被管ト爲シタリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕省　職員令云、○中略兵部省、〈部波毛乃乃部加佐〉

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

兵部省〈ツハモノヽツカサ〉

〔下學集上官位〕兵部卿〈ヒヤウブ〉〈兵部尙書也〉〈ヘイホウ〉

〔職原抄上〕兵部省〈當唐兵部〉

沿革

〔日本書紀二十九天武〕四年三月庚申、四位栗隈王爲兵政官長、小錦上大伴連御行爲大輔、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　乙丑、直大肆㳣原朝臣大嶋誄兵政官事、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等奏、勅改易官號、○中略兵部省總掌武官考賜、故改爲武部省、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年十一月丁卯、從三位藤原朝臣乙麻呂爲武部卿、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂、執政奏改官名、宜復舊焉、

〔享祿本類聚三代格〕〈四上文缺〉

頭一人　助一人　大允一人　少允一人　大屬一人　少屬□□　史生四人

右太政官去年〈○寬平九年〉二月廿八日下兵部省符偁、去年〈○寬平八年〉九月七日下式部省、□□□太政官去八月廿九日奏偁、左右兵庫、造兵、鼓吹等四司、總爲一寮、使爲兵部省管隷者、右大臣宣、奉勅依請者、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平□□□□□□□隷爲被管者、今被大納言正三位兼行右近衞大將藤原朝臣時平宣偁、奉勅宜改被管、復舊爲管隷、

□□□□□月五日〈○據時平官銜推知是昌泰元年官符〉

廳舍

〔拾芥抄〈中本百官〉〕兵部省〈朱雀門內西掖〉

〔儀式〈七〉〕十七日〈○正月〉觀射儀

前十日、兵部省簡定親王已下五位以上能射者廿人、〈○註略〉於省家南門弓庭以令調習、

〔北山抄〈三拾遺雜抄〉〕射禮儀

前十日、兵部省簡定親王以下五位以上廿人、於省射場調習、

省印

〔續日本紀〈八元正〉〕養老三年十二月乙酉、充式部民部兵部、〈○中略〉印各一面、

職員職掌

〔令義解〈一職員〉〕兵部省〈管司五〉

卿一人、掌内外武官名帳、考課、選敍、位記、兵士以上名帳、〈謂校尉以下也、即主帳亦同、其大少兩毅爲外武官〉朝集、祿賜、假使、差發兵士、〈謂差遣衞士防人、及征討也、依軍防令、差兵廿人以上、皆須契勅、即此書勘錄應發之國幷人數申官、官即奏聞、下契勅、但差衞士防人者、省直下符於國、更不申官也〉兵器、儀仗、〈謂用之征伐曰兵器、用之禮容曰儀仗也〉城隍、烽火事、大輔一人、少輔一人、大丞一人、〈掌准式部大丞〉少丞二人、〈掌同大丞〉大錄一人、少錄三人、史生十人、省掌二人、使部六十人、直丁四人、

〔令集解〈四職員〉〕穴云、兵器儀仗者、諸國幷造兵司所造也、兵庫者不掌、古記云、兵器儀仗、謂左右及內兵庫之兵器儀仗等、〈○中略〉釋云、諸國烽火、皆知其烽燧、至京之日、烽子申兵部、兵部申官、官奏聞、

〔令義解一官位〕親王三品四品八省卿

諸王諸臣正四位下七省卿　正五位下七省大輔　從五位下七省少輔　正六位下八省

大丞　從六位上八省少丞　正七位上八省大錄　正八位上八省少錄

〔拾芥抄中本官位唐名〕兵部卿兵部省兵部尚書　駕部夏官衞尉府卿　晉周衞尉衞尉尚書　輔兵部侍郎衞尉少卿　丞兵部郎中衞尉丞　錄兵部主事衞尉主簿

〔時信卿記〕天承元年十一月十六日己酉、未刻自大殿〇藤原忠通召、大卿殿〇兵部大輔平知信、時信父、郎令參給、

〔唐六典五兵部〕兵部尚書一人正三品

周官夏官卿也、漢置五曹、未有主兵之任也、魏始置五兵尚書、謂中兵外兵騎兵別兵都兵也、晉太始中、省五兵尚書、太康中、又置七兵尚書、以舊五兵尚書中兵外兵分爲左右、東晉及宋、又爲五兵、孝武大明二年、又省之、順帝昇明元年、又置、歷齊梁陳後魏北齊、皆置五兵尚書、後周依周官置大司馬卿一人、隋改爲兵部尚書、皇朝因之、龍朔元年、改爲司戎太常伯、咸亨元年、復爲兵部尚書、光宅元年、改爲夏官尚書、神龍元年復故、〇中略

兵部尚書、侍郎之職、掌天下軍衞、武官撰授之政令、凡軍師卒戍之籍、山川要害之圖、厩牧甲仗之數、悉以咨之、其屬有四、一曰兵部、二曰職方、三曰駕部、四曰庫部、尚書侍郎總其職務、而奉行其制命、

〔唐六典十六宗正寺〕衞尉寺卿一人從三品

漢書百官表云、衞尉秦官也、掌宮門衞屯兵、漢因之、景帝中六年、更名中大夫令、後元年、復爲衞尉、屬官有公車司馬衞士旅賁三令丞、又諸屯衞候司馬二十二官皆屬焉、又有長樂建章甘泉衞尉、各掌其宮之職、不常置、後漢衞尉、又有南宮北宮衞士令丞、餘同前漢、荀綽百官表云、衞尉品第三、銀章青綬、五時朝服武冠、佩水蒼玉、過江省、宋孝建元年復置、齊因之、梁天監七年、置十二卿、衞尉、與廷尉大匠爲秋卿、班第十二、位視侍中、兼統武庫令、陳因之、後魏衞尉卿、從第一品下、太和二十

二年、降爲第三品、北齊因之、隋衛尉掌軍器儀仗帳幕、以監門衛掌宮門屯兵、煬帝降卿爲從三品、皇朝因之、龍朔二年、改爲司衛寺正卿、咸亨中復舊、光宅元年、又改爲司衛寺卿、龍朔元年復故、○中略

衛尉卿之職、掌邦國器械文物之政令、總武庫武器守宮三署之官屬、少卿爲之貳、

〔唐六典兵部五〕駕部郎中一人從五品上

周禮夏官屬有輿司馬之職、蓋駕部之任也、魏氏始置駕部郎曹、歷晉宋齊後魏北齊、並爲駕部郎中、梁陳爲駕部侍郎、後周夏官府有駕部中大夫一人、隋文帝改爲駕部侍郎、煬帝曰駕部郎、宋齊左民尙書領駕部、梁陳左民部尙書領駕部、後魏北齊殿中尙書領駕部、隋則兵部領焉、皇朝因之、武德三年、加中字、龍朔二年、改曰司輿大夫、咸亨元年復故、○中略

駕部郎中員外郎、掌邦國之輿輦車乘、及天下之傳驛廐牧官私馬牛雜畜之簿籍、辨其出入闌逸之政令、司其名數、

〔職原抄上〕兵部省

周禮夏官大司馬之職也、軍旅兵馬、及諸武官之籍、皆是當官之所掌也、本朝又同之、

卿一人相當正四位下衛尉卿○中略唐名兵部尙書　大輔一人權大輔相當正五位下唐名兵部侍郎　少輔一人權少輔相當從五位下唐名同○中略　丞大少○中略唐名兵部郎　錄大少唐名兵部主事

〔令義解四考課〕銓衡武官、謂知將吏之材略、其武藝出身、隨材揀擢、亦是也、備預諸非常、調充戎事、謂調習軍容、充備火具也、爲兵部之最、謂少輔以上、揚淸激濁、謂激、淸也、言淸廉之人、在下第者、褒而進之、貪濁之人、處上考者、貶而降之類也、褒貶必當、爲考問之最、謂式部兵部丞、

〔唐六典吏部二〕凡考課之法、有四善、○中略善狀之外有二十七最、○中略三曰、揚淸激濁、褒貶必當、爲考按之最、

〔西宮記臨時二〕下兵部省宣旨

武官除目事、(復任、停任、)同召名下名事、衛府官人被召大歌事、補諸衛府生及馬寮醫師史生事、諸國統領事、

信濃擬兼牧監事、陸奥將軍傔仗事、武官復任事、左右衛士給左右大臣家事、(上﨟仰於輔)

〔傳宣草下〕一下兵部省宣旨

武官敍位下名(節會之時、内辨下之)　　同除目下名事

同停任事　　同復任除目事

直物時武官勘文事　　諸衛府生事(先勘給否、外記傳宣、)

馬寮史生馬醫等事　　陸奥守傔仗事(外記傳宣)

鎭守府將軍弓師事(給官符)　　節會日不就列參上事(外記傳宣)

三宮及大臣大將等散衛士事(召補於陣所仰之)

兵部官人申請統領事(以申文下丞)

〔令義解五軍防〕凡兵衛毎至考滿、兵部校練、(謂唯據考文、不可試才、卽與式部銓擬法不殊也、)隨文武所能、具爲等級、(謂計堪理務者、爲三等之品級也、)申官、堪理時務者、量才處分、(謂量其才能、任文武官、卽雖有武才、不堪理務者、亦不可任用也、)其年六十以上、皆免兵衛、(謂考校之日、乃放免也、)卽雖未滿六十、若有尫弱長病不堪宿衛、及任郡司者、(謂長病者、不可必滿日限、量狀不堪宿衛者、卽解也、郡司者主帳以上也、)本府錄狀、幷身送兵部、撿覆知實、奏聞放出、(謂兵部奏聞也)

〔續日本紀十一聖武〕天平三年十一月丁未、太政官處分、武官醫師使部、及左右馬監馬醫、帶仗者考選、及武官解任者、先例並屬式部、於事不便、自今以後、令兵部掌焉、但正身依舊、在寮上下、

〔延喜式二十八兵部〕凡位記請印、及内外武官考選敍位除目、幷季祿馬料等類、一准式部、

凡補任武官番上以上者、移送本司、其式如左、

兵部省移某司

位姓名(年若干、某京人)元某司某官

右人某月日任（若番上把笏稱補）某司某官訖、仍移送如件、移到任用故移、

年月日　錄位姓名

輔位姓

右署印訖、即送本司、

凡武官補任帳、進式部省、毎年正月七月一日進太政官、若有遷官卒死之類、以朱注側、（其內裏料更寫一通、六月十二月進藏人所、）

凡武官史生已上遷任文官者、解由到來之日、移送式部省、

〔續日本紀 十聖武〕神龜五年十一月壬寅、制衞府府生者、兵部省補焉、

〔延喜式 二十八兵部〕凡左右馬寮騎士、毎寮十人、兵庫寮工部卄人、鼓吹生卌四人、隼人司作手隼人卄人、省隨其解移申官、勘籍補之、其考帳者、毎年送省、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應補任兵部省所管諸司史生事

右右大臣宣、奉勅、件史生、自今以後、令當省補任、

大同四年五月九日

〔儀式 七十〕正月十七日觀射儀

前十日、兵部省簡定親王以下五位以上能射者卄人、（若不足者、通取六位以下、）於省家南門弓庭、以令調習、兵庫寮可立羅幡之狀、移送兵部省、木工寮射殿前量定步數、即立標札、前五日、兵部省書射者歷名於札、送侍從所、（以省掌爲使、）前一日、書歷名一卷、進內侍司、輔以上裝束使、率所司供帳於豐樂殿、（中略）其日早旦、兵部省錄、率史生省掌等、入自便門、自儀鸞門東戸北進六丈、立射者東向標、（中略）皇帝御清署堂、警蹕侍衞

如常、諸衛服上儀服、(大仗)兵部省列五位以上六位以下群官於豐樂門外位、(以弓矢代笏、○中略)兵部省入自儀鸞門西戸、就兵庫寮幄、唱名者、(卿唱親王、大輔唱三位、少輔唱四位五位、丞唱諸衛六位以下、)進就位、(在西第三間)唱射者官姓名、(蕃客亦同、但五位以上輔唱、六位已下丞唱之、)射者進就射位射之、

〔延喜式(二十八兵部)〕十七日(○正月)大射、前月廿日省點親王以下五位以上卅人、前二日簡定能射者廿人、(若不足者通取六位已下、)於省南門射場令調習、

〔北山抄(三拾遺雜抄)〕射禮儀

前十日、兵部省簡定親王以下五位以上廿人、於省射場調習、(省式云、前二日調習、)前五日、送射手札於侍從所、(近例十二月卅日送之云々)

〔續日本後紀(三仁明)〕承和元年十一月癸亥、依兵部省所請、以國造田卅町地税、永充親王已下五位已上廿人、調習內射之資、

〔延喜式(二十八兵部)〕凡射田卅町、(近江國八町、丹波國六町、備前國六町、)充大射射手親王已下五位已上調習之資、

〔公事根源(正月上)〕射禮　十七日

是は建禮門にて行侍る事なり、代の始には豐樂院にてあり、十五日に、先兵部省手つがひといふ事有て、射手をとゝのへさだむる儀式有、

〔享祿本類聚三代格(十八)〕太政官符

應隷相撲節事

右撰格所起請偁、相撲之節、諸衛供事、進退之儀、須隷兵部、而承前之例、式部兼攝、稽之恒典、可謂乖違、伏望准據正月十七日五月五日兩度節會、令兵部省執當者、中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔延喜式兵部二十八〕凡諸儀所須武官不足者、本府預錄人數移省、省申太政官權任、

〔延喜式兵部二十八〕元日平旦、丞錄各一人東西相分、將史生省掌等共入八省院、撿按兵庫鐘旗諸衛儀仗及隼人等陣、若有闕失者、即令改正、後日追勘本司、餘儀准此、閤外大臣就朝集堂、召兵部省、即丞入受命、出令兵庫寮擊外辨鼓、

〔儀式七〕正月七日儀

前一日、中略兵部省丞錄率史生省掌等立敍位行立標、中略當日中略內舍人入自逢春門、經左近陣南、就版奏云、御弓進牟止兵部省官姓名等大輔已上候門止申、勅曰、喚之、內舍人稱唯出喚、卿稱唯、錄已上及兵庫寮官人、置櫃弓矢別櫃於高机上共舁卿輔丞錄六人、擔舁御弓案、丞錄及寮官人六人舁御矢案、入自逢春門、尋常版北一許丈東去五許尺立置退出、兩机之間相去一許丈、御弓案在西、御矢案在東、卿若大輔一人獨留、待僚下出畢、進立兩机中央、奏曰、兵部省奏、兵庫寮奉禮留正月七日乃御弓、又種々矢獻良久乎申給波久止申、若親王任卿者、奏詞云、太天万部禮良久乎、訖退出、

〔令義解五軍防〕凡衞士向京、防人至津之間、皆令國司親自部領、衞士至京之日、兵部先檢閲戎具、分配三府、若有闕少者、隨事推罪、

〔延喜式兵部二十八〕凡廢置御馬驛家軍毅兵士器仗等者、造省符副內案、進官請印施行、但留案捺省印、

凡兵庫器仗、應須曝凉者、本司預移省、省申官、

凡鼓吹初發聲者、兵庫寮預申省、省申官、

凡諸國器仗帳、勾勘訖錄狀、三月卅日以前移送式部、

凡諸國樣器仗者、省與兵庫檢按定品了、副國解文奏進內裏、閲定其品了、省更申官、官下符兵庫寮、即諸司就庫收之、其器仗鐫題專當官人姓名、若檢閲有不如法、隨事科貶、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置書生十人事

補任

右得兵部省解偁、(○中略)依去大同三年正月廿日詔書、廢兵馬司、自茲以後、彼司之務、總歸於省、衆務繁劇、(○中略)

弘仁四年七月十六日

〔官職秘抄上〕八省卿　中務　式部　兵部　已上必以親王任之(○中略)　同輔(大少有權)　中務　治部　兵部(○中略)　已上殿上地下公達多任之、但治部已下、殿上地下諸大夫又任之、(○中略)　同丞(大少中略○)　兵部　諸司助中、選其人任之、必可轉式部丞之故也、諸宮少進兼任例、(藤原頼經、橘兼遠、)文章生外國任例、(藤原全忠)　同錄(大少)　中務(○中略)　兵部(○中略)　已上本省奏、諸道擧問者生等任之、或卿申請也、或自諸司二分遷任之、

○按ズルニ、職原抄ニ、凡八省之中、中務式部親王官也、兵部時々任之トアルガ如ク、兵部卿ハ親王定任ノ官ニハアラズ、官職秘抄ニ、兵部卿ヲ必以親王任之トアルハ誤ナリ、

〔職原抄上〕兵部省

卿一人　近代多爲公卿已上兼官、四位不任之、或又親王任之、凡八省中、中務、式部、親王官也、兵部時任之、此外不任親王、公卿以上任之、民部、兵部、是爲重、治部、刑部、其次也、大藏、宮內、又其次也、然乃治部、刑部、大藏、宮內雖四位侍臣任之、民部、兵部、更不任四位侍臣等也、　大輔一人(權大輔)　少輔一人(權少輔)　名家五位任之、公達又任之、八省輔之中、民部、治部、兵部名家執之、仍地下諸大夫等、細々不任之、

丞(大少)　六位諸大夫、幷譜第可然之侍任之、當省丞、本爲重職、式兵相並、故武官除授等令奉行之、近來無沙汰、不可然事歟、　錄(大少)

〔百寮訓要抄〕兵部省(○中略)　卿(兵部尚書)　親王も任ず、又納言以上、可然公卿も任る也、是も殊更親王の官にてあれば、人の執するなり、武官の事を成敗する職也、されども又將軍などの樣に、武藝にたづさはる事はなし、只武官の事を奉行するばかり也、

史生

〔光臺一覽 二〕兵部卿一人　唐名兵部尚書、四品以上親王任之、
三位以上之公家も任之、中務卿は親王に任て、臣下不任也、式部兵部之二卿は、親王も任じ、臣下も任ず、此外々親王は不任なり、

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年六月庚申、以從三位大伴宿禰安麻呂爲兵部卿、

〔續日本紀 八 元正〕養老五年六月辛丑、從五位下御炊朝臣人麻呂爲兵部少輔、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十年閏七月癸卯、從五位上石川朝臣麻呂爲兵部大輔、外從五位下大伴宿禰百世爲少輔、

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、從三位石川朝臣年足爲兵部卿、神祇伯如故、從五位上大伴宿禰家持爲大輔、從五位下藤原朝臣繩麻呂爲少輔、

〔續日本後紀 六 仁明〕承和四年六月甲寅、宮内卿三品阿保親王爲兼兵部卿、上野太守如故、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年三月辛巳、四品忠良親王爲兵部卿、

〔三代實錄 七 清和〕貞觀五年二月十日癸卯、四品彈正尹本康親王爲兵部卿、

〔續日本紀 四 元明〕和銅元年八月庚辰、兵部省更加史生六員、通前十六人、

〔日本後紀 十七 平城〕大同四年三月己未、〇十四日 始置左右兵庫史生各二員、〇中略 加〇中略 兵部省四員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符
應新置幷加置史生員事
省廿員 元十六員 今加四員
右加置如件、〇中略
以前去三月十四日下式部省符偁、被右大臣宣偁、奉勅夫官職之員、事貴閑繁、寮司之務、孰無繕寫、而件省司史生、先無定準、或闕此員、實乖適時、宜量事加置令濟理務者、謹依勅旨、增加幷新置等員如件、

書生

大同四年四月三日

○按ズルニ、此格文ハ太政官ヨリ、兵部省ニ下シタルモノニシテ、原本ニハ、太政官符ノ上ニ、弘兵ト註シタリ、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略兵部省廿人、○中略其式部、民部、兵部、三省史生者、試練景迹、然後取用、亦不得輙補儀外人、○中略兵部省○中略等史生、待本司移補之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置書生十人事

右得兵部省解偁、省中公文、其數不少、繕寫之事、任在史生、而或奉使諸國、經日無歸、或事緣病假、累旬不上、是以文書塡委、無人繕寫、加以依去大同三年正月廿日詔書、廢兵馬司、自茲以後、彼司之務、總歸於省、衆務繁劇、既殊昔時、望請准式部省、置件書生者、被右大臣宣偁、奉勅式部省書生總卅人、宜停其十人、依件令補、試其身才、然後補之、不得令濫吹之輩輙備其員、

弘仁四年七月十六日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應減廢書生十人事

右撿案內、依太政官去十月廿日下式部省符、定書生三十人畢、得兵部省解偁、省家務繁、公文塡委、史生少數、繕寫多煩、望請准式部省、置書生十人者、被右大臣○藤原園人宣偁、奉勅宜廢件書生、依請令置、

弘仁四年七月十○七月恐十一月誤六日、

〔類聚國史百七職官〕天長十年六月庚午、兵部省奏、造兵司雜工廿人之中割二人、鼓吹々部卅四人之中割大少角鼓生各一人、將爲省書生、許之、

〔延喜式二十八兵部〕凡書生不經式部省、省試身才、勘籍便補之、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、○中略寮掌○中略等各二人、但○中略兵部○中略等、並待本司移補之、自餘者判補之、

〔儀式七〕十七日○正月觀射儀

前五日、兵部省書射者歷名於札、送侍從所、以省掌爲使、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年十一月癸未、是日被任官者多不會庭、省掌代之稱唯、於是詔式部兵部省掌、始賜把笏、

〔類聚國史百七職官〕天長七年八月戊申、置兵部省扶省掌二人、

承和五年七月丙寅、兵部省言、准式部省、置扶省掌二人、許之、

〔延喜式二十八兵部〕凡省掌之外、置扶省掌二人、習儀式、以備其闕、卽任隼人司權史生、把笏行事、

〔延喜式十八式部〕凡中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正等、省臺正員之外、扶省掌臺掌、以入色者各置二人、令習儀式、省待本司所送名簿乃補之、若正員有闕者、以扶省掌補之、但兵部省扶省掌二人、本省便任隼人司權史生、令把笏、自餘不把笏、

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略兵部省卅人、

隼人司

隼人司ハ、ハヤヒトノツカサト稱シ、又ハヤトヅカサト稱ス、隼人ヲ檢按シテ、使役スル所ナリ、初メ衞門府ノ被管ナリシガ、平城天皇大同三年正月、衞門府ニ併セラレ、同年八月、衞門府ノ左右衞士府ニ併セラルヽニ及ビ、復兵部省ニ隷セリ、

隼人ハ、大隅薩摩ノ地方ニ在ル一種ノ人民ニシテ、後ニハ京畿ニ仕スルモノモアリテ、常ニ

交代シテ本司ニ直シ、元日、卽位、蕃客入朝等ノ時、狗吠ヲ爲シテ宮門ヲ守衞シ、風俗ノ歌舞ヲ奏シテ朝儀ニ備ヘ、平日ハ油絹及ビ、竹器等ヲ造ル、

名稱

〔倭名類聚抄　五官名〕司　職員令云、○中略隼人司、波夜比止乃豆加佐

〔下學集　上官位〕隼人正ハヤトノカミ　布護將軍

〔文選　三〕東京賦

聲敎布濩、護盈溢天區、布濩、猶散被也、天區、謂四方上下也、言天子敎愛及之、尚書曰、聲敎訖于四海、

○按ズルニ、隼人正ノ唐名ヲ布護將軍トスルハ、其據ル所詳ナラズ、恐クハ布護ハ卽チ布濩ニシテ、當時隼人ヲ外域ト看做シ、聲敎ノ遠ク散被セルヲ云フカ、護ト濩ト相通ズルコトハ、湯ノ樂ノ大濩ヲ又大護ニ作レルガ如シ、

〔職原抄　上〕隼人司　唐名布護署

沿革

〔類聚國史　百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰云々、隼人司倂衞門府、

〔日本後紀　十七平城〕大同三年八月庚戌朔、隼人司、依今年正月廿日詔書、既從廢省、倂衞門府、而衞門府倂左右衞士府、仍更置此司、隷兵部省、

廳舍

〔大内裏圖考證　二十五〕占地　都城諸圖、隼人司、右京土御門南、堀河東一町、

司印

〔三代實錄　十二淸和〕貞觀八年四月乙亥朔、新鑄銅印一面、賜隼人司、

職員
職掌

〔令義解　一職員〕隼人司

正一人、掌撿校隼人、謂隼人者、分番上下、一年爲限、其下番在家者、差科課役、及簡點兵士、一如凡人、及名帳、敎習歌儛、造作竹笠事、佑一人、令史一人、使部十人、直丁一人、隼人、

〔日本後紀　十七平城〕大同三年八月庚戌朔、隼人司○中略隷兵部省、但廢佑一員、使部二人、

〔享祿本類聚三代格　四〕太政官符

應復舊置隼人司佑員事

依令隼人司、正一人、佑一人、令史一人、而大同三年、准□□廢隼人司、併衞門府、依同年七月廿六日論奏、更置件司、除省佑員、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宜、奉勅宜依令置佑員、

元慶元年十二月十七日〇又見三代實錄、類聚國史、

〇按ズルニ、享祿本類聚三代格ニ、又隼人司、使部四人、直丁一人、大衣二人、隼ノ十六字ヲ載セタリ、上下殘闕シテ、其記シヽ所ヲ詳ニセズ、

〔令義解一官位〕正六位〇下階　隼人正　正八位〇上階　隼人佑　大初位〇下階　隼人令史

〔拾芥抄中本官位唐名〕隼人正布護將軍　佑布護小尹　令史布護主簿

〔百寮訓要抄〕隼人司布護署　隼人の名帳歌舞をつかさどるよし令に見ゆ、又行列の事つかさどる也、

〔詠百寮和歌〕隼人正

品々の位亂さずゑめし置て東遊に立ぞつらなる

〔延喜式二十八隼人〕凡隼人計帳者、五畿內并近江丹波紀伊等國、每年一通附大帳使進官、官下省、其班田之年、亦進田籍、

〔延喜式二十八隼人〕凡遠從駕行者、官人二人、史生二人、率大衣二人、番上隼人四人、及今來隼人十人供奉、番上已上、並帶橫刀騎馬、但大衣已下、著木綿鬘、今來著緋肩巾、木綿鬘、帶橫刀、執槍步行、其駕經國界及山川道路之曲、今來隼人爲吠、

凡行幸經宿者、隼人發吠、但近幸不吠、

凡每年造進油絹六十匹緋卅匹、縹廿五匹、白五匹、其料絹自內藏寮請取、卽捺寮印行之、但荏油一斛三斗八升、匹別充二升三合、棘絲二兩二分、縫絹料、匹別一銖、調綿三屯、絞油料、苧二斤十三兩、張絹料縄、簀一枚、席一枚、並置絹料、調布一端二丈、一端一丈二尺、作手隼人二人衣料、八尺、巾二條料、摩油料田具卌口、以一口充絹二匹、薪八千二百八十斤、煎油料、以六十斤充一升、篚二百枚、張絹

料、〈大和國所進、十一月以前進、〉造功七百廿人、〈四別十二人〉其絹結解帳、毎年造二通、一通送內藏寮、一通取寮押署收司、

凡應供大嘗會竹器熬笥七十二口、煤籠七十二口、〈料、筐竹、口別六株、〉乾索餅籠廿四口、〈口別十三株〉籠六口、〈口別十五株〉預前造備送宮內省、

年料竹器

薫籠大一口〈口徑二尺二寸、高二尺七寸、〉料、筐竹五十株、中一口〈口徑一尺八寸、高二尺、〉料、筐竹卅株、漉紙簀十枚〈各長二尺四寸、廣一尺四寸、〉料、筐竹各廿株、茶籠廿枚〈方二尺〉料、筐竹各六株、

凡造竹綾判帙、長功十八日一張、〈長二尺、闊一尺五分、作竹様線成帙、〉中功廿一日一張、短功廿五日一張、

凡年料雜籠料、竹四百八十株、用司園竹、

補任

〔官職秘抄上〕諸司正　隼人　諸大夫、若陪從任之、元六位任之、近代爲五位、〇中略　同佑　隼人〇中略

已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功臨時內給等任之、或以本司奏任之、〇中略　同令史　隼人〇中略

已上以本司奏任之、或臨時內給、

〔職原抄上〕隼人司

正一人　諸大夫任之、但近代諸道及侍等多任之、五位六位共任之、但侍者五位之後可任之、　佑

六位侍任之、元者正八位官也、　令史

〔百寮訓要抄〕隼人司

正〈布護將軍〉　五位六位是に任ず、いたく人の執せざる職也、地下のものおほく是に任ず、　佑〈布護少尹〉

地下の六位是に任ず、　權佑　おなじ

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年三月乙未、以外從五位下上總宿禰建麻呂爲隼人正、

史生

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略　隼人司二員、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

使部

應新置幷加置史生員事〇中略

一隼人司二員

右新置如件〇中略

大同四年四月三日

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略隼人司五人、權三人、其二人以兵部扶省掌兼任、

〔延喜式二十八兵部〕凡隼人司權史生一人、兵庫寮權史生二人、省擇補預近江丹波備前三箇國射田、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸司使部事〇中略

隼人司六人〇中略

以前、被右大臣藤原繼繩宣偁、奉勅、諸司使部、徒滿其數無用官司、宜改張格令依件爲定〇中略省宜承知、自今以後、永爲恒例、

延暦十四年七月十日

隼人

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略隼人司四人、

〔運歩色葉集葉〕隼人ハヤト唐名布護

〔古事記傳十六〕隼人は、波夜毘登ハヤビトと訓べし、和名抄にも、隼人司、波夜比止乃豆加佐ハヤビトノツカサあり、後世に波伊登ハイトと云は、夜毘ヤビは伊イと約まれども、なほ訛なるべし、又書紀の訓などに、ハイトンと あるは、いよゝ正しからず、又今世に波夜登ハヤトとも云は、波伊登と云たぐひなり、 隼人と云者は、今の大隅薩摩二國の人にて、其國人は絕れて敏捷く猛勇きが故に、此名あるなり、古言に、猛勇タケキを波夜ハヤとも登志トシとも云れば、波夜と云に猛勇ハヤブキ意もあるなり、隼字を書こ とは、迅速きこと此鳥の如く、又波夜ハヤ夫佐ブサてふ名も合へればなり、 景行仲哀の御世のころ、熊曾と云し者も是にて、卽其國を熊曾國と云き、〇略註又其を隼人國と云へるは、續紀二に、大寶二年、先是征薩摩隼人時云々、唱更國司等今薩摩國也言云々とある、唱更ハヤビトノこれ隼人なり、〇略註萬葉三十五

丁に、隼人乃薩摩乃迫門、六二十二丁に隼人乃湍門など云るも國名なり、○中略註其を薩摩國とは、後に改められたるなり、

〔古事記傳十七〕そも〳〵隼人は、大隅薩摩國人なること、上に云るが如し、さて朝廷に召れて仕奉れるが、永く留りて京近き國の人になれるも、子孫までなほ隼人と稱て、其職に仕奉れりしなり、隼人式に、五畿內及近江丹波紀伊等國隼人とあるも、右の國々のを云なり、和名抄に、山城國綴喜郡に大住鄕あるも、大隅國の隼人の留住しよりの名なり、中原康富記に、隼人司領、山城國大住莊と見え、○中略さて大衣と云は、右の近き國々の隼人の中にて、二人を擇びて補たるものなり、隼人式に、凡大衣者擇譜第內置左右各一人、大隅爲左、阿多爲右、敎導隼人云々と見ゆ、大隅阿多とは、其國の人を云には非ず、先祖の出たる地を以て、近國なるをも大隅隼人、阿多隼人と別ち云なり、或人大衣をも、大隅阿多など、並べて、一種の隼人の如く云るは、式をも考へざる妄說なり、續後紀に、山城國人右大衣阿多隼人逆足と云人見えたり、又番上隼人と云は、本國よりかはる〳〵上りて仕奉る者なり、職員令義解に、分番上下、一年爲限とある是なり、續紀廿五に、大隅薩摩等隼人相替と云こと見ゆ、隼人式に、凡番上隼人二十人、有闕者取五畿內及近江丹波紀伊等國隼人幹了者、申省補之とあり、類聚國史に、延曆廿年、停太宰府進隼人とあるは、番上隼人のことには非じ、又今來隼人と云は、番上にはあらで、本國より新に上りて、永く留りて京畿に住居する者なり、此は妻子をも率て上る故に、女もあり、式に見ゆ、凡今來隼人給時服及鹽云々、また今來隼人身亡者、擇取畿內隼人充之、二十人爲限云々など式に見えたれば、此も中昔には、人數定まり有て召上せられしと見えたり、諸儀に吠聲を發るは、今來隼人の職なり、類聚國史に、大同三年勅、定額隼人、若有闕者、宜以京畿隼人隨闕便補之云々、其女者不在補限とあるは、女のことあれば番上には非で、今來の隼人なるべし、又續紀廿

八に、隼人司隼人百十六人、不論有位无位、賜爵一級とあるは、番上今來の外に別に司隼人と云あるにや、職員令隼人司に、直丁一人の次に、隼人と云あり、是なるべし、員は見えず、式に白丁隼人一百三十二人とあるは、凡大儀者、預前申官、喚集諸國隼人、令供其事とあるを以て見れば、司隼人とは別なるにや、これらは詳には知がたし、さて威儀に隼人の執る楯に、鉤形を書とある、此も失たる鉤を徴りし故事を、後世まで示さむためなるべし、

○按ズルニ、隼人ニ四種アリ、大衣隼人、番上隼人、今來隼人、白丁隼人是ナリ、大衣隼人ハ大衣ヲ著テ、役ニ從フモノナリ、卽チ隼人ノ長ニテ大隅阿多各一人アリ、番上隼人ハ分番上直ノ稱ニシテ、普通ノ隼人ナリ、今來隼人ハ大同四年ニ、始テ補スル所ニシテ、衣服粮料番上隼人ヨリ減ゼリ、今來トハ新來ノ義ニテ、後ニ置ク所ナレバ、カク云フナリ、白丁隼人ハ事ニ當リ臨時ニ命ズル所ニシテ、白丁トハ隼人ノ種ニアラザルヲ云フ、

又按ズルニ、萬葉集卷十一ニ、肥人額髮結在染木綿染心我忘哉トアル肥人ヲ、舊點ニコマヒトト訓ジタリ、然ルニ賦役令ニ、邊遠國、有夷人雜類之應輸調役之所、隨事斟量、不必同之華夏、トアリテ、其集解ニ古記ヲ引テ云ク、夷人雜類、謂毛人、肥人、阿麻彌人等類、問夷人雜類、一歟二歟、答本一末二、假令隼人、毛人、本土謂之夷人也、此等雜居華夏、謂之雜類也、一云、一種無別トアル毛人ハ蝦夷、阿麻彌人ハ卽チ南島奄美ノ人ナレバ、肥人ハ隼人ニテ、ハヤヒトト讀ムベキニ似タリ、而シテ此歌ノ一二三句ハ、隼人ノ歌舞スル時ノ狀ヲ擧ゲシモノナラン、又本朝書籍目錄ニ、肥人書五卷、薩人書トアルハ、薩摩人書トアリシガ、摩ノ字ヲ脫シタルモノニテ、肥人書ハ薩摩隼人ノ書ナルコトヲ註シタルモノナラン、又播磨風土記賀毛郡ノ條ニ載セタル、日向肥人朝戶君モ、續日本紀文武天皇四年紀ニ、薩末比賣、久米波豆、衣評督衣君縣、助督衣君氐自美、又肝衝難波從肥人等、持兵剽刦覓國使刑部眞木等トアル肥人モ、亦隼人ノ事ナルベシ、附シテ後考ヲ竢ツ、

〔續日本紀二文武〕大寶二年十月丁酉、唱更國司等今薩摩國也言、於國內要害之地、建柵置戍守之、許焉、

〔日本書紀通證七〕按、〇中略本居大隅薩摩等國、而番直朝廷、令義解曰、隼人者分番上下、一年爲限、唱更訓波比登、亦此義也、延佳以唱更爲譯義、非也、

〔續日本紀考證二文武〕按史記吳王濞傳、卒踐更輒與平賈、正義曰、踐更若今唱更、行更者也、古謂隼人爲唱更、義取諸此、

〔八雲御抄三下異名〕隼人　いぬ人といふ

〔釋日本紀八進義〕狗人

私記曰、問依何義名之哉、答以身喩狗、言卑下奉仕之謂也、

〔日本書紀二神代〕一書曰、〇中略海神白言、今者天神之孫、〇彦火火出見尊辱臨吾處、中心欣慶、何日忘之、乃以思則潮溢之瓊、思則潮涸之瓊、副其鉤而奉進之曰、皇孫雖隔八重之隈、冀時復相憶而勿棄置也、因敎之曰、以此鉤與汝兄〇火酢芹命時、則稱貧鉤滅鉤落薄鉤、言訖以後手投棄與之、勿以向授、若兄起忿怒、有賊害之心者、則出潮溢瓊以漂溺之、若已至危苦求愍者、則出潮涸瓊以救之、如此逼惱、自當臣伏、時彥火火出見尊、受彼瓊鉤、歸來本宮、一依海神之敎、先以其鉤與兄、兄怒不受、故弟出潮溢瓊、則潮大溢、而兄自沒溺、因請之曰、吾當事汝爲奴僕、願垂救活、弟出潮涸瓊、則潮自涸、而兄還平復、已而兄改前言曰、吾是汝兄、如何爲人兄而事弟耶、弟時出潮溢瓊、兄見之走登高山、則潮亦沒山、兄緣高樹、則潮亦沒樹、兄既窮途、無所逃去、乃伏罪曰、吾已過矣、從今以往、吾子孫八十連屬、恒當爲汝俳人、一云、狗人請哀之、弟還出潮涸瓊、則潮自息、於是兄知弟有神德、遂以伏事其弟、是以火酢芹命苗裔、諸隼人等、至今不離天皇宮墻之傍、代吠狗而奉事者也、世人不債失針、此其緣也、

〔古事記上〕故後木花之佐久夜毘賣、參出白、妾妊身、今臨產時、是天神之御子、私不可產、〇中略故其火盛燒時、所生之子名火照命、此者隼人阿多君之祖

〔令集解職員五〕古辭云、薩摩大隅等國人、初捍後服也、諸請云、已爲犬奉仕人君者、此則名隼人耳、

〔續日本紀元正七〕靈龜二年五月辛卯、太宰府言、〇中略又薩摩大隅二國貢隼人、已經八歲、道路遙隔、去來不便、或父母老疾、或妻子單貧、請限六年相替、並許之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

應停減雜色等事

隼人八十人減二卌人、定二卌人、男卌人減二廿人、定二廿人、女卌人減二廿人、定二廿人、

以前伏奉勅旨、頃年營造未已、黎民或弊、念彼勤勞、事須矜恤、加以時遭災疫、頗損農業、今雖有年、未聞復業、宜量事優矜令得存濟者、官議商量、具件如前、具錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延曆廿四年十一月十日〇日本後紀係二十二月壬寅、壬寅七日、

閑

〔延喜式隼人二十八〕凡番上隼人廿人、有闕者取五畿內及近江丹波紀伊等國隼人幹了者、申省補之、不在給時服及粮之限、

凡今來隼人身亡者、擇取畿內隼人充之、廿人爲限、

〔延喜式隼人二十八〕凡大儀者預前申官、喚集諸國隼人、令供其事、仍給間食、

凡今來隼人、令大衣習吠、左發本聲、右發末聲、總大聲十遍、小聲一遍、訖一人、更發細聲二遍、

凡大衣者、擇譜第內、置左右各一人、大隅爲左、阿多爲右、敎道隼人、催造雜物、候時令吠、若有闕者申省、省卽申官補之、

〔延喜式左右衛門四十六〕凡門部十人、三年一給大衣、並錄奏請、

〔日本書紀清寧十五〕四年八月癸丑、是日蝦夷隼人並內附、

〔日本書紀欽明十九〕元年三月、蝦夷隼人、並率衆歸附、

〔日本書紀 二十六 齊明〕元年、是歲、〇中略蝦夷隼人、率衆內屬、詣闕朝獻、

〔日本書紀 二十九 天武〕十一年七月甲午、隼人多來貢方物、是日大隅隼人、與阿多隼人相撲於朝廷、大隅隼人勝之、　戊午、饗隼人等於飛鳥寺西、發種々樂、仍賜祿各有差、令道俗悉見之、

〔日本書紀 三十 持統〕九年五月己未、饗隼人大隅、　丁卯、觀隼人相撲於西槻下、

〔續日本紀 九 元正〕養老七年五月辛巳、大隅薩摩二國隼人等、六百二十四人朝貢、　甲申、賜饗於隼人、各奏其風俗歌舞、酋帥三十四人、敍位賜物各有差、　六月庚子、隼人歸鄉、

〔續日本紀 十二 聖武〕天平七年七月己卯、大隅薩摩二國隼人二百九十六人、入朝貢調物、　八月辛卯、天皇御大極殿、大隅薩摩二國隼人等奏方樂、　壬辰、賜二國隼人三百八十二人爵幷祿、各有差、

〔續日本紀 三十 稱德〕神護景雲三年十一月庚寅、天皇臨軒、大隅薩摩隼人奏俗伎、外從五位下薩摩公鷹白、加志公島麻呂、並授外從五位上、正六位上甑隼人麻比古、外正六位上薩摩公久奈都、曾公足麻呂、大住直倭上、正六位上大住忌寸三行、並外從五位下、自餘隼人等、賜物有差、

〔日本後紀 十二 桓武〕延曆廿四年正月乙酉、永停大替隼人風俗歌舞、

〔職官志 三〕古者諸國風俗歌舞、其國造於朝奏之者常也、故天武之喪、國造隨其赴、來而誄于殯、乃奏種々之歌舞、又如大歌所之職、集諸國之歌、知其國風也、以此推之、則隼人所奏風俗歌舞、蓋薩摩大隅風俗歌舞、從可知也、〇中略延曆二十四年正月、永停大替隼人風俗歌舞、非卽位之年、而去永停、則其前必奏於常禮、是以敎習不倦也、

〔延喜式 二十二 民部〕凡點仕丁者、每五十戶二人、(采女採薪舍不入此數)不點厮丁、其大替前年四月、省預勘錄應點人數申官、下符國司、計帳之日點定、十二月下旬以前附綱送省、月內相替、令得給粮、其名簿先附大帳使進省、

〇按ズルニ、大替隼人ハ役畢リテ鄉ニ還ルヲ云フ、大替ハ番上ニ對スル名ナリ、

〔儀式六〕元正朝賀儀

隼人司官人二人、史生二人、率大衣二人、番上隼人卅人、今來隼人廿人、白丁隼人一百卅二人、分陣應天門外之左右、並執楯槍坐胡床、其史生已上、著當色横刀、大衣幷番上隼人、著當色横刀、白赤木綿耳形鬘、自餘隼人、皆著大横布衫、襟袖著兩面襴、布袴、著兩面襴、緋帛肩巾、横刀、白赤木綿耳形鬘、

〔延喜式二十八隼人〕凡元日即位、及蕃客入朝等儀、官人二人、史生二人、率大衣二人、番上隼人廿人、今來隼人廿人、白丁隼人一百卅二人、分陣應天門外之左右、蕃客入朝、天皇不臨軒者不陣、群官初入自胡床起、今來隼人發吠聲三節、蕃客入朝不在吠限、其官人著當色横刀、大衣及番上隼人、著當色横刀、白赤木綿耳形鬘、自餘隼人、皆著大横布衫、襟袖著兩面襴、布袴、著兩面襴、緋帛肩巾、横刀、白赤木綿耳形鬘、番上隼人已上横刀私備、執楯槍、並坐胡床、

〔正親町院御即位略次第〕外辨公卿、依次起幄座、入自南門著版位、

此間隼人吠三節

近代其由計也

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

卯日、○中略隼人司、率隼人分立左右朝集殿前、待開門乃發聲、○中略時剋悠紀主基、共發自齋場詣大嘗宮、○中略衞門開會昌應天朱雀三門、如元會儀、供物入應天門、隼人百餘人在門内、自胡床起發犬聲三節、○中略戌刻鑾輿、○中略御大嘗宮、○中略群官初入、隼人發聲、立定乃止、○中略次隼人司、率隼人等從興禮門參入、於御在所屏外北向立、奏風俗歌舞、

〔延喜式二十八隼人〕凡踐祚大嘗日、分陣應天門内左右、其群官初入發吠、

〔北山抄五〕大嘗會事

卯日、○中略伴佐伯氏各一人、○註略分就南門左右、○註略隼人司、率隼人分立左右朝集堂前、○中略其群官初入、隼人發吠聲、立定即止、○中略次隼人司、率隼人入自右掖門、於御在所外北面立、奏風俗歌舞、

〔壬生家記〕嘉永元年大嘗式

卯日、〇中略大臣以下、入自南門、各就幄下座、其群臣初入、隼人發聲、立定乃止、〇中略次隼人司率隼人等參入、於御在所屏外北面立、奏風俗歌舞、

〔享祿本類聚三代格〕六太政官符

應充便補隼人粮事

右右大臣宣、奉勅定額隼人、若有闕者、自今以後、宜以京畿隼人、隨闕便補之、但衣服粮料、莫同舊人、特准衞士給之、其女者不在補限、

大同四年正月七日

〔延喜式〕二十八隼人凡今來隼人給時服及鹽、春夏男別絹一尺、袴腰料布二端、二丈一尺朝服一領料、一端衣二領料、二丈一尺袴三腰料、庸布一段、履直絲三銖、縫衣袴料鹽一斗、漬菜料女絹三丈、下裙料布二端三丈、三丈衣二領料、一端表裙二腰料、一端下裙二腰料、庸布一段、履直絲三銖、縫衣裙料秋冬男絹一匹一尺、綿三屯、布二端、庸布一段、絲三銖、鹽一斗、女絹一匹、綿三屯、布二端三丈、庸布一段、絲三銖、其粮每月一給、男日黑米三升、鹽三勺、女日黑米二升、鹽二勺、其三年一給布衾及鋪設、人別調布一段、綿十三屯、席一枚、薦一枚、折薦二枚、女同並限一身、若有死者給賻物、人別絁一匹、調布二端、庸布一段、白米五斗、酒一斗、腊一斗五升、鹽三升、

〔續日本紀〕十三聖武天平十二年九月戊子、召隼人二十四人於御在所、右大臣橘宿禰諸兄、宣勅授位、各有差、幷賜當色服發遣、

〔續日本紀〕二十八稱德神護景雲元年九月己未、隼人司隼人百十六人、不論有位無位、賜爵一級、其正六位上者敍上正六位上、

〔續日本紀〕三十一光仁寶龜二年三月戊辰、停隼人帶劒、

〔古事記〕下履中於是其伊呂弟水齒別命〇反正參赴令謁、爾天皇令詔、吾疑汝命、若與墨江中王同心乎、故

不相言、答曰、僕者無穢邪心、亦不同墨江中王、亦令詔、然者今還下而、殺墨江中王而上來、彼時吾必相言、故卽還下難波、欺所近習墨江中王之隼人名曾婆加理云、若汝從吾言者、吾爲天皇、汝作大臣、治天下那何、曾婆訶理答白、隨命、爾多祿給其隼人曰、然者殺汝王也、於是曾婆訶理、竊伺己王入厠、以矛刺而殺也、故率曾婆訶理、上幸於倭之時、到大坂山口、以爲曾婆訶理、爲吾雖有大功、既殺己君、是不義、然不賽其功、可謂無信、既行其信、還惶其情、故雖報其功、滅其正身、是以詔曾婆訶理、今日留此間、而先給大臣位、明日上幸、留其山口、卽造假宮、忽爲豐樂、乃於其隼人賜大臣位、百官令拜、隼人歡喜、以爲遂志、爾詔其隼人、今日與大臣飮同盞酒、共飮之時、隱面大鋺盛其進酒、於是王子先飮、隼人後飮、故其隼人飮時、大鋺覆面、爾取出置席下之劒、斬其隼人之頸、

〔日本書紀十五清寧〕元年十月辛丑、葬大泊瀨天皇○雄略于丹比高鷲原陵、于時隼人、晝夜哀號陵側、與食不喫、七日而死、有司造墓陵北、以禮葬之、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　丙寅、是日○中略大隅阿多隼人、及倭河內馬飼部造各誄之、

〔日本書紀三十持統〕元年五月乙酉、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮○天武而慟哭焉、於是隼人大隅阿多魁帥、各領己衆、互進誄焉、　七月辛未、賞賜隼人大隅阿多魁帥等三百三十七人、各有差、　三年正月壬戌、筑紫太宰粟田眞人朝臣等、獻隼人一百七十四人、

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月丙申、薩摩多褹、隔化逆命、於是發兵征討、遂校戶置吏焉、

〔續日本紀四元明〕和銅二年十月戊申、薩摩隼人郡司已下一百八十八人入朝、徵諸國騎兵五百人、以備威儀也、

〔萬葉集十一〕寄物陳思

早人、名負夜音、灼然、吾名謂、孋恃、

〔比古婆衣三〕隼人の狗吠

隼人の狗人となりて仕奉りし狀の、おもひやらるゝ證あるを、こゝにいはむとす、其は大和國添上郡、奈保山の元明天皇の陵、土人、王塚といへり、今そのわたりの字を、大奈閉(オホナ)山といふ、其陵邊に建てたる、犬石と呼ぶもの三基あり、みな自然なる石の面を平らげて、狗頭の人形を陰穿(エリ)たり、頭は狗の假面なるべし、身中みな貫き裝束て、狗の狀を表せりと見ゆ、もとは朱をさしたりと見えて、ところどころに剝げ遺れりとぞ、其狗人、一枚は立像にて、楚とおぼしきものを杖けり、上に北字あり、二枚は踞像なり、此も手のさま、楚を持たらむとは見ゆれど慥ならず、石の長、立像なるとは短し、此狗石、昔は七基ありしとて、土人、大奈閉の七匹狐とも呼びならへるを、いつのころにか四基は亡て、今三基存れりといふを、○中略按ふにこは、そのかみ朝廷の大儀に、隼人の狗吠して奉仕るときには、狗の假面を被る例なりけるから、やがて其像を石に模して、陵域に殉置しめ給へるものなるべし、今昔物語集卅一の卷に、此天皇の陵の事をいへるところに、石ノ鬼形共ヲ廻ニ池邊、陵ヲ墓樣ニ立テ、微妙ク造レル石ナド、外ニハ勝レリ、とみえたるこれなり、但し鬼形といへるは、見たる人の疎なりしか、又傳聞の誤なるべきこと決し、さて今遺れる立像の上に、北字あるは、そのかみ陵域の四面に、それと同じ狀なるを建られて、その方位を標したりけむを、後に東西南の三基は亡せたるなるべく、踞像も舊四基ありて、四隅に建られたりけむが、二基は亡せたりしなるべし、そは隼人の宮墻を衞れる意にて、陵の四方四隅に建られたりしものにぞあるべき、

〔續修東大寺正倉院文書十三〕戸主隼人國公首麻呂戸

去年計帳定良口玖人男五女四　帳後新附壹人女

今年計帳定見良大小口拾男五女五

不課口捌人　男參人小子　女伍人　課口貳人　見輸貳人正丁

用途　領地　職員　職掌

輸調錢拾捌人

合差科戸主隼人國公首麻呂、年參拾漆歲、正丁、右上脣黑子、　男隼人國公麻呂、年玖歲、小子、　男隼人國公道麻呂、年漆歲、小子、　女隼人國公廣刀自賣、年玖歲、小女、　女隼人國公廣虫賣、年參歲、綠女、　隼人石島、年參拾壹歲、正丁、右鼻於黑子、〇中略　隼人和伎毛賣、年參拾捌歲、丁女、〇下略

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

隼人司、荏油一斛三斗八升、造年料油雜料

〔康富記〕嘉吉三年五月五日己未、自隼人司領山城大住庄名主等中、粽十二連上之、三連米進也、

享德四年〇康正元年十月十七日巳未、大住內、隼人領大嘗會役人田事、是日當國〇山城大住庄內、隼人司領名主南未知實名來申、予對面、申云、大住內、隼人領大嘗會田ト申テ、田地一丁二反在之、大嘗會時參洛、於官廳奏風俗舞人役是也、南ガ叔父ニ西ト云者、相傳知行シテ、被役人ヲ沙汰立テ、其外常ニハ無所役、年々此年貢ヲ令知行也、

兵馬司

兵馬司ハ、牧馬、兵馬、驛傳ノ馬、公廨ノ馬牛ヲ掌リ、兵馬ハ軍團ニ付シテ養ハシム、又民間ノ馬牛ヲモ知レリ、是臨時ノ差發ニ供センガタメナリ、此司ハ平城天皇大同三年、馬寮ニ併セラル、

〔令義解一職員〕兵馬司

正一人、掌牧及兵馬、謂取牧馬、付軍團令養者也、郵驛、謂郵亦驛也、境上行書舍也、公私馬牛、謂公者、傳馬及公廨馬牛也、私者、凡非官畜而在民間皆是、其征行大事、公私共給、爲其差發、是故兼知、事、佑一人、大令史一人、少令史一人、使部六人、直丁一人、

〔令集解職員四〕古記云、問若爲令習兵馬也、答奉主調習耳、厩牧令云、軍團官馬、本主欲於郷里側近十里內調習者聽之、穴云、兵馬、牧馬、堪乘用付軍團、又條云、軍團兵馬、即是其每火充六馱馬、亦同合掌知、元爲給官馬故也、

〔令義解厩牧八〕凡官私馬牛（謂文云附朝集使、即知京內馬牛、不在此限也、）帳、每年附朝集使送太政官（謂自太政官、更下兵部、即兵馬司職掌云公私馬牛是、）

〔令義解官位一〕正六位階○上 兵馬正 從七位階○下 兵馬佑 大初位階○上 兵馬大令史 兵馬少令史下○階

補任

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字四年正月戊寅、從五位下路眞人野上爲兵馬正、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年正月壬子、從五位下田口朝臣大戸爲兵馬正、

史生

〔續日本紀元明六〕和銅六年十一月乙酉、權充兵馬司史生四人、

厩司

〔官職秘抄後附〕兵部省被官 兵馬司（大同三年正月併馬寮、）

造兵司

造兵司ハ、兵器ヲ造ルナリ、其下ニ鍛戸、甲作、靫作、弓削、矢作、鞆張、羽結、桙刊、爪工、楯縫、幄作等アリ、本司ハ、聖武天皇天平十六年、廢司トナリ、其後再ビ置カレシガ、宇多天皇寛平八年、左右兵庫鼓吹等ト合シテ、兵庫寮ト稱ス、

職員職掌

〔令義解職員一〕造兵司

正一人、（掌造雜兵器、及工戸戸口名籍事、）佑一人、大令史一人、少令史一人、雜工部廿人、（謂此取雜工戸而充之、其鍛冶司鍛部、土工司泥部等、如此之類者、皆自鍛戸泥戸內而取充、但戸內无人者、通取他氏、）使部十二人、直丁一人、雜工戸、

補任

〔令義解 官位一〕正六位〇上階 造兵正 從七位〇下階 造兵佑 大初位〇上階 造兵大令史 造兵少令史〇下階

〔續日本後紀 仁明十三〕承和十年二月己巳、外從五位下紀宿禰福善爲造兵司正、

史生

〔日本後紀 平城十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略造兵司、二員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應新置幷加置史生員事〇中略

造兵司二員〇中略

右新置如件〇中略

大同四年四月三日

工戸

〔三代實錄 清和十二〕貞觀八年二月十日丙辰、勅、貞觀六年正月七日、詔復天下百姓徭十日、而在諸國造兵司雜工戸、猶役三十日、司徵其料、宜准詔旨同復、

〔三代實錄 陽成三十二〕元慶元年十一月八日乙巳、詔返收造兵司所役之遠江國雜工戸二十烟、其代充山城國、復舊也、

〔令集解 職員四〕古記及釋云、別記云、鍛戸二百十七戸、甲作六十二戸、靫作五十八戸、弓削三十二戸、矢作廿二戸、鞆張廿四戸、羽結廿戸、桙刊卅戸、右八色人等、自十月至三月、毎戸役一丁、爲雜戸、免調役也、爪工十八戸、楯縫卅六戸、幄作十六戸、右三色人等、臨時召役、爲品部、取調免徭役、

才長上

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

停止幷減定諸司等才長上事〇中略

造兵司

才長上二員 右並停止〇中略

司印　廢合

以前被右大臣宣偁、奉勅件司等才長上數、停止幷減定如件、永爲恒例、

大同三年十二月十五日

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年九月十四日戊辰、新鑄銅印一面、賜造兵司、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年四月甲寅、廢造兵鍛冶二司、

○按ズルニ、此後復置カル、其年月詳ナラズ、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

大角長上一人　少角長上一人　鉦鼓長上一人

右元鼓吹司長上、而依太政官去八月廿九日論奏、以左右兵庫造兵鼓吹等四司、爲兵庫一寮既訖、件長上宜隷彼寮、○中略

遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、宜依件隷之、

寛平八年十日五日

職員　職掌

鼓吹司

鼓吹司ハ、鼓吹ヲ調習スルヲ掌ル、鼓ハ鉦鼓ナリ、吹ハ大角小角ナリ、當時軍旅ヲ整フルニ、此ヲ以テ節ト爲ス、故ニ本司ニ大角長上、鉦鼓長上等ノ樂師アリテ、敎習ヲ掌レリ、宇多天皇寛平八年、左右兵庫造兵等ノ司ト合シテ兵庫寮ト稱ス、

〔令義解一職員〕鼓吹司

正一人、掌調習鼓吹事、謂敎習鼓吹戸人也、佑一人、大令史一人、少令史一人、吹部卅人、使部十人、直丁一人、鼓吹戸、

〔令義解官位一〕正六位〈○上階〉鼓吹正　從七位〈○下階〉鼓吹佑　大初位〈○上階〉鼓吹大令史　鼓吹少令史〈○下〉

補任

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年五月癸酉、從五位下安倍朝臣小東人爲鼓吹正、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年二月十三日己亥、從五位下栗田朝臣雄上爲鼓吹正、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年三月九日庚寅、散位從五位下上毛野朝臣綱主爲鼓吹正、

史生

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〈○中略〉鼓吹司二員、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應新署幷加置史生員事〈○中略〉

鼓吹司二員〈○中略〉

右新置如件〈○中略〉

大同四年四月三日

樂師

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應廢置長上事

鼓吹司

廢大笛長上一員　今置鉦鼓長上一員

右得兵部省解偁、鼓吹司解偁、軍旅之設、吹角爲本、征戰之備、鉦鼓爲先、今有吹角長上三人、曾無鉦鼓之師、至威儀之日、有失進退之節、望請置鉦鼓長上、敎習生徒者、右大臣宣、奉勅宜廢大笛長上、兼預大角長上、更置鉦鼓長上、其官位亦同吹角長上、

延曆十九年十月七日

〔令集解四職員〕古記云、鼓吹師幷生等、不載令文、若爲答、雖不注、而理必合有、所以別勅補長上也、

〔儀式 九〕三月一日於鼓吹司試生等儀

當日平旦、司率鉦鼓等師幷生等、區別應事前庭幷立標、(○中略)自東第二標東去二町第三徑、立大角師標、東去一町第四徑、立小角師標、東去一町第五徑、立鉦鼓師標、

吹部

〔日本後紀 五桓武〕延暦十五年十月甲申、定鼓吹司吹部號、置員卌四人、初大寶(○寶下恐脫以字)降、或注吹人、或著角吹、或稱番上、或號吹部、名既不定、數亦無限、今定名吹部、准雅樂寮雜色生、乃聽勘籍焉、

鼓吹戸

〔續日本紀 九聖武〕神龜三年八月壬戌、定鼓吹戸三百戸、

〔令集解 四職員〕穴云、鼓吹戸者一也、鼓幷吹各一者非也、古記及釋云、別記云、大角吹幷二百十八戸、右每戸各自九月至二月習、爲品部免調役也、

〔三代實錄 三十八陽成〕元慶四年八月十六日丁酉、兵部省言、鼓吹司吹(○司吹二字原脫、今據一本補、)戸者、調庸雜役、共被免除、資私粮食、學習鼓角、依式部例、點定六十丁、若過期者、拔補他戸課丁、而山城國司、六丁之外、加置課丁五六人、兼賣却見丁之戸田、請依式令行之、又吹戸男女、老少有數、須依數載計帳、而山城國司、除弃大小口、只抄六丁、以爲一戸、請依數令載帳、又吹戸計帳者、國司與鼓吹司令史已上一人、以中戸上戸點定、勿充他役、山城國吹戸七十五烟也、而國司除弃二烟、只置七十三烟、其七十三烟(○其七十三烟原脫、今據一本補、)內、所欠課丁猶多、請依式令定七十五辟、茂辰、來計帳返付課丁三十六人、太政官處分、下知山城國司、依請許之、

直丁

〔東大寺正倉院文書 二〕兵部省移民部省

合壹拾貳人(六人直丁、六人廝丁、○中略)

省二人(一人直丁一人廝丁)　鼓吹司二人(一人直丁一人廝丁)

右在訓仁宮應給米壹斛壹斗陸升(人別日二升)　鹽壹升壹合陸勺(人別日二勺)　布貳段(人別一段)

以前省幷管司直丁等、來五月之粮料、所請如前、故移、

天平十七年四月廿一日　　正六位下行大錄馬史益万呂
大輔正五位下勳十二等紀朝臣

廢司

〔官職秘抄後附〕兵部省被官　鼓吹司　寛平八年併二兵庫寮一

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符
大角長上一人　少角長上一人　鉦鼓長上一人
右元鼓吹司長上、而依二太政官去八月廿九日論奏一、以二左右兵庫造兵鼓吹等四司一、為二兵庫一寮一既訖、件長上、宜レ隷二彼寮一、○中略
寛平八年十月五日

雜載

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年十二月己酉、中納言從三位兼勅旨卿侍從勳三等藤原朝臣繩麻呂薨、○中略葬事所レ須官給、幷充二鼓吹司夫一、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年八月十日庚寅、寫二鼓吹司陣法式一通一、賜二隱岐國一、宰申請也、

主船司

主船司ハ、攝津國ニ在リ、官私ノ舟檝ノ數、幷ニ勝載ノ量ヲ檢知スルコトヲ掌ル、太宰府ニモ亦主船司アリ、並ニ要津ナルヲ以テナリ、而シテ本司ノ延喜式ニ載セザルヲ視レバ、延喜ノ比ニハ既ニ停廢ニ歸シタルモノナラン、

職員　職掌

〔令義解一職員〕主船司
正一人、掌二公私舟檝、及舟具事一、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、船戶、

〔令集解四職員〕古記云、公私船檝、及舟具事、常在レ津、官私舟數、及受レ斛斗數、悉撿按知、但自二他國一往來者、

臨時撿察耳、

補任

〔令義解 一 官位〕正六位 階〇下 主船正 正八位 階〇上 主船佑 大初位 階〇下 主船令史

〔令義解 六 營繕〕凡有官船之處、謂除攝津及太宰主船司之外、諸國有官船之處也、皆逐便安置、並加覆蓋、量遣兵士看守、隨壞修理、謂以雜徭修理也、不堪料理、謂舟木朽爛、不可更修理也、者、附帳申上、其主船司船者、令船戸分番看守、謂太宰府主船亦同

〔續日本紀 二十淳仁 四〕天平寶字七年正月壬子、外從五位下村國連子老爲主船正、

船守戸

〔令集解 四 職員〕別記、及釋云、船守戸百、津國以十戸一番役、爲品部免調役、

廢絶

〔官職秘抄 後附〕兵部省被官 主船司 後世不被任之、停之時未勘、

主鷹司

主鷹司ハ、鷹犬ヲ調習シテ、遊獵ノ用ニ供スルヲ掌ル、國史往々放鷹司ノ文アレバ、改稱セシ事モアリシナラン、淳仁天皇天平寶字八年ニハ、一時停廢セラレシガ、日本紀略桓武天皇延暦十三年正月ノ紀ニ、主鷹司ノ文アレバ、當時復置セシコト知ルベシ、淸和天皇貞觀二年以後ハ、本司ニ官人ヲ置カズ、終ニ廢絶スルニ至レリ、

沿革

〔濫觴抄 上〕飼鷹

仁德四十三年乙卯九月、始知鷹能捕鳥、始令養云々、

〔職官志 三〕主鷹司

按、酒君時、未建官名、然當司之職、乃自是起、

〔續日本紀 八 元正〕養老五年七月庚午、詔曰、〇中略 宜其放鷹司鷹狗、大膳職鸕鷀、諸國鷄猪、悉放本處、令遂其性、從今而後、如有應須、先奏其狀待勅、其放鷹司官人、幷職長上等且停之、所役品部、並同公戸、

〔續日本紀考證四元正〕放鷹司職員令主鷹司是也

〔東大寺正倉院文書二〕兵部省移民部省〇中略

放鷹司二人一人直丁、一人斷丁、〇中略

天平十七年四月廿一日　正六位下行大錄馬史益万呂

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年十月乙丑、廢放鷹司、置放生司、

〔日本紀略桓武〕延曆十三年正月癸未、有雉集主鷹司垣上、

〇按ズルニ、本司ヲ復置セシ事、史ニ所見ナシ、而シテ延曆十三年以前ニ在リシコト、此文ニテ明ナリ、

〔日本紀略桓武〕延曆十七年閏五月癸酉、先是主鷹司於北山造巣放二鶴子、卽生三雛、於御前養長之、天皇甚愛翫、詔曰云々授位、令群臣賦詩、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年七月五日己巳、勅弘仁十一年以來、主鷹司鷹飼三十人、犬三十牙食料、毎月充彼司、其中割鷹飼十人、犬十牙料、充送藏人所、貞觀二年以後、無置官人、雜事停廢、今鷹飼十人、犬十牙料、永以熟食充藏人所、

職員職掌

〔令義解一職員〕主鷹司

正一人、掌調習鷹犬事、令史一人、使部六人、直丁一人、鷹戸、

〔令義解一官位〕從六位〇下主鷹正　少初位〇下主鷹令史

史生

〔日本後紀五桓武〕延曆十五年十月辛未、始置主鷹司史生二人、

司丁

〔東大寺正倉院文書二〕兵部省移民部省

合壹拾貳人六人直丁六人斷丁

省六人三人直丁三人斷丁　放鷹司二人一人直丁一人斷丁

右在甲賀宮應給米貳斛參斗貳升(人別日二升)鹽貳升參合貳勺(人別日二勺)布肆段(人別一段○中略)

以前省幷管司直丁等、來五月之料粮、所請如前、故移、

天平十七年四月廿一日　正六位下行大録馬史益万呂

大輔正五位下勳十二等紀朝臣

犬飼餌取

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勘移補左右近衛左右兵衛市廛百姓及決罰主殿主鷹織部等寮司雜色驅使幷犬飼餌取等事、

右得左京職解偁、市司解偁、件等百姓多任衛府、恒住市邊、强買不止、毆寃無絕、又主殿主鷹織部等寮司雜色驅使、惡行既甚、詈陵官人、因茲市廛荒廢、公事難堪、望請衛府移送本府、以從解却、自餘雜色、更不經本司、隨犯決罰、然則暴亂永絕、市廛安業者、右大臣宣、依請、右京□亦宜准此、

承和元年十二月廿二日

鷹戶

〔令集解四職員〕古記及釋云、別記云、鷹養戶十七戶、倭、河內、津、右經年每丁役、爲品部免調役、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年八月壬戌、定鼓吹戶三百戶、鷹戶十戶、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年七月丙戌、停止鷹戶、

古事類苑

官位部十五

令制官職十一

刑部省

名稱

刑部省ハ、ウタヘノツカサト稱セシガ、淸和天皇貞觀七年、勅ニ依リテ、ウタヘタヾスツカサト稱ス、後世ハ字音ニテギヤウブシヤウト稱セリ、此省ハ罪人ヲ鞫問シ、刑名ヲ定メ、訴訟ヲ判斷スル爲ニ設クル所ナリ、上世刑罰ノ事ハ、物部氏ノ世職ナリシガ、後ニ本省ヲ置キテ之ヲ掌ラシム、而シテ其創置ハ續日本紀元明天皇和銅元年八月ノ紀ニ、難波朝廷刑部尙書大花上國忍トアル文ニ據レバ、孝德天皇ノ時ニ在ルガ如シ、嵯峨天皇弘仁年中、檢非違使ヲ置レテヨリ以來、本省ノ職掌ハ多ク之ニ移ル、

本省ノ被接官ニ判事アリ、解部アリ、解部ハ爭訟ヲ窮問シテ之ヲ解クコトヲ掌リ、判事ハ更ニ鞫狀ヲ覆按シ、刑名ヲ斷定シ爭訟ヲ判決ス、而シテ解部ハ持統天皇四年ニ、解部一百人ヲ以テ本省ニ置キシガ、大寶令制定ノ時、減ジテ六十人ト爲シ、平城天皇大同三年ニ至リ、盡ク停廢シテ復置カズ、

本省ノ被管ニ贓贖、囚獄ノ二司アリ、贓贖司ハ平城天皇大同三年本省ニ倂セラル、

〔日本書紀 三十 持統〕四年正月丁酉、以解部一百人、拜刑(ウタヘノ)部省、

〔日本書紀 十三 允恭〕二年二月己酉、立忍坂大中姬爲皇后、是日爲皇后定刑部(オサカベ)、

〔古事記 下 允恭〕爲大后〇允恭后忍坂大中津比賣之御名代、定刑部、

沿革

〔倭名類聚抄六國郡〕伊勢國三重郡刑部於佐加倍

〔倭訓栞前編四十五〕おさかべ　倭名抄郷名に刑部を訓せり、允恭紀に忍坂大中姫の御名代として刑部を定むと見えたれば、忍坂と通ふなるべし、刑罰は安忍の意あれば、かく訓せしにや、又推問するよりおし考る意なるべしともいへり、

〔古事記傳三十九〕刑部は、忍坂部なり、於佐加辨と訓、○中略此は大后の御郷、大和國城上郡の忍坂なるを、刑部としも書故は、其郷なる忍坂部の人等の、刑部の職に仕奉しことのありしより、やがて其職名の字を書ならへるなり、されば於佐加辨と云名は、忍坂部にて刑部職には由あるに非ず、又刑部の字は忍坂部と云名に由あるに非ず、本は別なり、然るを於佐加辨を本より刑部の職名と心得るは非なり、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月七日戊子、先是刑部省奏言、承前之例訓刑部省號訴訟之司、夫名不正、則事不從、又名以召實、事以放象、何以判斷之司、可謂訴訟之司、望請訓刑部省三字、將號判法之司、至是有勅云、宜號定訟之司、

〔倭名類聚抄五官名〕省　職員令云、刑部省、宇多倍多々須都加佐

〔下學集上官位〕刑部卿刑部尚書

〔職原抄上〕刑部省當唐刑部

〔續日本紀四元明〕和銅元年八月丁酉、攝津大夫從三位高向朝臣麻呂薨、難波朝廷○孝德刑部尚書大花上國忍之子也、

○按ズルニ、刑部尚書ハ、乃チ刑部卿ナリ、

〔古京遺文〕小野朝臣毛人墓志

飛鳥淨御原宮治天下天皇○天武御朝、任太政官兼刑部大卿位大錦上以上面文小野毛人朝臣之墓營造、歲次丁丑年○五年十二月上旬卽葬、以上背文

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　丙寅、是日直廣肆阿部久努朝臣麻呂、誄刑官事、

〔日本書紀持統三十〕四年正月丁酉、以解部一百人、拜刑部省、

〔日本書紀持統三十〕六年二月乙卯、詔刑部省赦輕繫、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等奉勅改易官號、○中略刑部省、窮鞫定罪、要須用義、故改爲義部省、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年十一月丁卯、正四位上紀朝臣飯麻呂、爲義部卿、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政奏改官名、宜復舊焉、

〔拾芥抄中本百官〕刑部省（宮城内皇嘉門内西掖）

〔大內裏圖考證二十五〕刑部省　占地

據宮城諸圖、東西四十丈、南北卅五丈、判事局在西、○下略

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部民部兵部刑部、○中略印各一面、

〔令義解一職員〕刑部省管司二

卿一人、掌鞫獄、定刑名、（謂覆審解部所鞫、與判事以上共斷定也、依獄令、在京諸司事發者、犯徒以上送刑部省、其衞府糺捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部省、又云、刑部省斷流以上者、皆連寫案申太政官、然則死以下笞以上、皆合推斷也、）決疑讞、（謂讞、請也、正也、依同令、國有疑獄不決者、讞刑部省是也、）良賤名籍、（謂良訴賤、賤訴良、判、斷簿書是爲名籍也、）囚禁、債負（謂徵財曰債也、受貸不償曰負也、卽六贓之類、及諸合沒官者、此省皆掌、）事、大輔一人、少輔一人、大丞二人、少丞二人、大錄一人、少錄二人、史生十人、大判事二人、掌案覆鞫狀、斷定刑名、判諸爭訟、中判事四人、掌同大判事、少判事四人、掌同中判事、大屬二人、掌抄寫判文、（謂唯爲抄寫、別注其餘檢出稽失等者、一准神祇史、）少屬二人、掌同大屬、大解部十人、掌問窮爭訟、中解部廿人、掌同大解部、少解部卅人、掌同中解部、省掌二人、使部八十人、直丁六人、

〔令義解一官位〕親王三品四品八省卿　諸王諸臣正四位（○下階、）　七省卿（○中務以外）　正五位（○下階、）　七省大輔

大判事　從五位○下階　七省少輔　正六位○下階　八省大丞　中判事　從六位○上階　八省少丞　少判事○下階　正七位○上階　八省大錄　判事大屬○下階　從七位○下階　大解部　正八位八省少錄○上階

刑部中解部　判事少屬○刑部中解部以下下階　從八位○下階　刑部少解部

〔拾芥抄 中本官位唐名〕刑部卿刑部省秋官尚書　刑部尚書大理卿秋官周禮大理　輔四人刑部侍郎大理少卿都官郎中　丞刑部郎中大理錄事　刑部員外郎大理員外部　大理丞　錄刑部主事刑部主簿

〔唐六典 六尚書刑部〕刑部尚書一人正三品

周之秋官卿也、漢成帝、始置三公曹主斷獄事、後漢以三公曹、掌天下歲盡集課事、又以二千石曹、主中都官水火盜賊辭訟罪法事、晉初依漢、置三公尚書掌刑獄、太康中、省三公尚書、以吏部尚書兼領刑獄、宋始置都官尚書、掌京師非違得失事、兼掌刑獄、齊、梁、陳、後魏、北齊、皆置都官尚書、後周依周官置大司寇卿一人、隋初曰都官尚書、開皇三年、改爲刑部、皇朝因之、龍朔二年、改爲司刑太常伯、咸亨元年、復爲刑部、光宅元年、改爲秋官尚書、神龍元年復故、○中略刑部尚書侍郎之職、掌天下刑法及徒隷句覆關禁之政令、其屬有四、一曰刑部、二曰都官、三曰比部、四曰司門、尚書侍郎總其職務、而行其制命、

〔唐六典 十八大理寺〕大理寺卿一人從三品

尚書云、帝曰、咎繇汝作士、五刑有服、孔安國注曰、士、理官也、周官爲司寇、韓詩外傳云、晉文公使李離爲理、理、謂察理刑獄也、史記天官書、斗魁四星、貴人之牢曰大理、漢書百官表云、廷尉、秦官、掌刑辟、有正左右監、景帝更名大理、秩中二千石、武帝復爲廷尉、宣帝置左右廷尉平、哀帝復爲大理、王莽改曰作士、後漢復爲廷尉、魏初爲大理、後復爲廷尉、置律博士、晉置丞主簿明法掾、歷宋齊皆爲廷尉、梁爲秋卿、班第十三、陳因之、後魏置少卿司直、北齊及隋爲大理寺、隋置評事、皇朝因之、龍朔二年、改爲詳刑寺正卿、咸亨元年、復爲大理、光宅元年、改爲司刑寺、神龍元年復故、○中略

大理卿之職、掌邦國折獄詳刑之事、以五聽察其情、一曰氣聽、二曰色聽、三曰視聽、四曰聲聽、五曰詞聽、以三慮盡其理、一曰明愼、以讞疑獄、二曰哀矜、以雪寃獄、三曰公平、以鞫庶獄、少卿爲之貳、

〔宇治拾遺物語十四〕これもいまはむかし、白河院の御とき、北おもてのざうしに、うるせき女ありけり、名をば六とぞいひける、殿上人ども、もてなしけうじけるに、雨うちそぼふりて、つれづれなりける日、ある人六よびて、つれ〴〵なぐさめんとて、使をやりて六よびてこといひければ、ほどもなく六めしてまいりて候といひければ、あなたより内のでいのかたへ、ぐしてこいひければ、さふらひいできて、こなたへまいり給へといへば、びんなく候などいへば、侍歸きて、めし候へば、びんなくさふらふと申て、恐申候なりといへば、つきみていふにこそとおもひて、などかくはいふぞ、たゞこといへども、ひが事にてこそ候らめ、さき〴〵も内御でいなどへまいることも候はぬにといひければ、このおほくゐたる人々、たゞまいり給へ、やうぞあるらんとせめければ、すぢなき恐に候へども、めしにて候へばとてまいる、このあるじ見やりたれば、刑部錄といふ廳官、びんひげに白髮まじりたるが、とくさのかりぎぬに、あを袴きたるが、いとことうるはしくさや〳〵となりて、あふぎを笏にとりて、すこしうつぶしてうずくまりゐたり、○下略

〔職原抄上〕刑部省、當唐刑部

周禮秋官大司寇之職也、斷獄刑法及諸訴訟、當省所掌也、本朝先例如此、然而被置檢非違使之後、刑部職掌、有名無實、但行贖銅等罪之時、猶移于當省者也、

卿一人相當正四位下、唐名刑部尙書、大理卿、○中略 大輔一人權大輔一人、相當正五位下、唐名刑部侍郞、 少輔一人權少輔一人、相當從五位下、唐名同員外郞歟、○中略 丞大少、唐名刑部郞中、○中略 錄大少、唐名刑部主事、

〔令義解四考課〕決斷不滯、與奪合理、爲刑部之最、謂少輔以上及判事、

〔令義解獄〕凡犯罪、皆於事發處官司推斷、（謂事發者、已被告言、其應三審者、初告亦是發訖也、官司者、受告處官司、即在京諸司、及國郡官司皆是、凡告人罪者、皆須於犯處、若不由此例者、不可受推、其路遠、及事礙者、即於隨近官司告之也、假有人紀伊國盜鹽、攝津國事發、即取紀伊國中估之鹽、准紀伊國上布之估、於攝津國斷決之類、是也、爲於事發處官司推斷也、）在京諸司人、及諸國人、在京諸司事發者、犯徒以上送刑部省、（謂先申辨官、官下刑部、凡在京諸司、除京職外、皆不得斷徒已上罪、故略准告狀、即當徒以上者、直送刑部、不得斷勾、假有甲乙二人、共犯一年徒、乙是隨從、應減一等、決杖一百、是猶甲乙共送、既不推斷、首從未分故也、）杖罪以下、當司決、（謂若合收贖者、申官送贓贖司也、）其衞府糺捉罪人、非貫屬京者、（謂文云非貫屬京者、即知貫屬者、皆送京職、但犯夜之罪、衞府當日決放也、）皆送刑部省、

凡犯罪、笞罪郡決之、（謂決贖並同、其贖物留郡、錄數申國也、）杖罪以上、郡斷定送國、（謂斷文并身俱送、其兵士笞罪、兩毅決之、若杖罪者、送所在郡也、）覆審訖、徒杖罪、及流應決杖、（謂依律、犯徒應役、而家無兼丁者加杖、又累犯徒流加杖、又雜戶陵戶、犯流決杖之類是也、）若應贖者、（謂有蔭及老少之類也、）即決配、（謂決杖及配徒也、）徵贖、其刑部斷徒以上亦准此、（謂依律、死罪應決杖及贖者、即准流徒之法、刑部亦得決贖、故云亦准此、其死罪決、及流罪配者、自依下文、不可准此也、）刑部省及諸國、斷流以上若除免官當者、皆連寫案、（謂凡鞫獄官司、皆連鞫狀及伏辨、以成一案、更連寫之、與斷文共送官、是爲連寫案申太政官也、）申太政官、按覆理盡申奏、即按覆事有不盡、在外者、遣使就覆、（謂依國所斷、情理不盡、別遣專使、就所在按覆、與下條覆囚使、其義不同、）在京者、更就省覆、

凡決大辟罪、五位以上、在京者、刑部少輔以上監決、（謂雖是自盡之人、亦在其家監決也、）在外者、次官以上監決、餘並少輔及次官以下監決、從立春至秋分、不得奏決死刑、（謂奏決者、猶云奏而決也、）若犯惡逆以上、及家人奴婢殺主者、不拘此令、其大祀、及齋日、朔、望、晦、上下弦、廿四氣、假日、並不得奏決死刑、在京決死囚、皆令彈正衞士府監決、若囚有冤枉灼然者、停決奏聞、（謂彈正奏聞、）

〔令義解獄〕凡國有疑獄、（謂獄有所疑、處斷難明者也、）不決者、讞刑部省、（謂此不論本罪輕重、但徒以上者皆是、即與上條本罪應奏、其情稍異、）若刑部仍疑、申太政官、

〔令義解獄〕凡犯罪、應入議請者、皆申太政官、應議者、大納言以上、及刑部卿、大輔、少輔、判事、於官議定、雖非六議、但本罪應奏、（謂上條、刑部及諸國、斷流以上及除免官當者、皆連寫案、申太政官、案覆理盡申奏是也、）處斷有疑及經斷不伏者、亦衆議量定、雖非此官司、令別勅參議者、亦在集限、若意見有異者、人別因申其議、官斷簡、以狀奏聞、

補任

〔延喜式刑部二十九〕凡流罪以下、隨發且斷、其死刑者、皆摠斷、十月四日申官、即斷文令判事屬申送、

〔延喜式太政官十一〕凡刑部省所申斷罪文者、造二通、十月四日進辨官、即日史讀申、外記覆勘造論奏、廿日以前奏聞、(謂流罪以上、及除免官當、)若有依奏及恩降、並具狀錄、刑部解後印之、訖附辨官、(一通留辨官、一通下刑部、)

〔延喜式刑部二十九〕凡決死囚者、省預移送彈正衞門、其日會集市司南門、共監行決、

〔延喜式刑部二十九〕凡流移罪人者、省申官遞請左右兵衞爲部領、即授省符、路次差加防援、令達前所、其返抄者從官下省、

凡流移人者、省定配所申官、具錄犯狀、下符所在幷配所、(良人請內印、賤隷請外印、)

凡徒罪以上、具錄犯狀、移送民部、

凡徒人年限者、從入役日始計、其徒役滿者、省具錄事狀、遞送本鄉、

凡徒以上罪人、應勘籍者、具錄姓名、移送民部、待報乃斷、

〔延喜式刑部二十九〕凡辨官所下罪人、到省付囚獄司、司即易其徽纆、其有行決者、隨罪輕重、於市若囚獄司決之、行決之日、丞錄各一人、引囚獄官人幷物部丁、赴向市司、便令本司喚集市人、列立司南門、示衆決之、於囚獄司決者、於廳前決之、

凡獄囚應給衣糧薦席醫藥、及修理獄舍之類、用贓贖物者、申官聽裁、然後給之、在外者先用後申、

〔延喜式刑部二十九〕凡罪人會赦合放者、省即免之、不可申官、

〔延喜式刑部二十九〕凡私鑄錢、其作具幷錢銅等物、皆沒官、

凡贖銅錢者、收囚獄司、省相共出納、

〔官職秘抄上〕八省卿　刑部(○中略)　已上爲參議散三位四位官(○中略)　同輔(大少有權○中略)　刑部(○中略)　已上殿上地下公達多任之、但治部已下殿上地下諸大夫又任之、(○中略)　同丞(大少○中略)　刑部(○中略)　元藏人陪從、良家子等任之、近代諸家侍任之、但可撰人也、(○中略)　同錄(大少○中略)

刑部〈○中略〉　已上本省奏、諸道擧、問者生等任之、或卿申請也、或自諸司分遷任之、

〔職原抄 上〕刑部省

卿一人　四位已上任之、雖公卿又任之、　大輔一人〈權大輔一人〉　少輔一人〈權少輔一人〉　名家五位、及諸大夫五位任之、近來雖侍五位任之、抽賞之儀歟、不打任事也、　丞〈大少〉　六位侍任之、但雖諸大夫任之、頼義朝臣男義光、久爲刑部丞、　錄〈大少〉

〔百寮訓要抄〕刑部省

卿〈刑部尚書〉　三四位の人是に任ず、名家儒家など任じ來る也、　大輔〈刑部侍郎〉　八省の輔、何もさきに注し侍るに同事也、　權大輔　少輔〈同上〉　權少輔　何もおなじ

〔光臺一覽 二〕刑部卿一人　唐名刑部尚書、三位以上任之、　四輔〈○大少輔正權〉　諸家〈○公卿〉　任之、丞錄地下官、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、從四位上竹田王爲刑部卿、

〔續日本紀 八元正〕養老四年十月戊子、從五位上鍛冶造大隅爲刑部少輔、　五年三月辛未、以從五位下高橋朝臣廣島爲刑部少輔、　六月辛丑、從五位下當麻眞人大名爲刑部大輔、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十年閏七月癸卯、從五位下宇治王爲刑部大輔、外從五位下大養德宿禰小東人爲少輔、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年二月己巳、從四位上南淵朝臣永河爲刑部卿、

〔三代實錄 二淸和〕貞觀元年二月十三日己亥、從四位上行阿波守藤原朝臣輔嗣爲刑部卿、阿波守如故、散位從五位上百濟王慶世爲大輔、從五位下橘朝臣末茂爲少輔、

〔三代實錄 十淸和〕貞觀七年三月九日庚寅、從五位上紀朝臣有常爲刑部權大輔、從五位下藤原朝臣秋緒爲少輔、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、〈○中略〉刑部省十人、

史生

〔日本書紀齊明二十六〕四年十一月庚寅、或本云、〇中略有間皇子、與一判事(コトハルツカサ)謀反之時、皇子案机之脚、无故自斷、

〔拾芥抄中本官位唐名〕大判事一人大理正、廷尉正、決斷令、司直、評事、小判事大理丞、屬大理錄事、評事史、評事主簿、

〔唐六典十八大理寺〕大理正二人從五品下

秦置廷尉正一人、漢因之、〇中略龍朔二年、改爲詳刑大夫、咸亨元年、改爲大理正、光宅元年、改爲司刑正、神龍初復舊、

丞六人從六品上

晉武帝咸寧中、曹志上書、請廷尉置丞、自此始也、〇中略大業三年、改丞爲句檢、〇中略

主簿二人從七品上〇註略　錄事二人從九品上　獄丞四人從九品下〇註略　司直六人從六品上

後魏永安三年、御史中尉高穆、奏置司直十人、視五品、隷廷尉、位在正監上、不置曹士、唯覆理御史劾事、〇中略

評事十二人從八品下

漢書云、宣帝地節三年、置廷尉平、秩六百石、員四人、其務在平刑獄、故曰廷平、〇中略

大理正、掌參議刑獄、詳正科條之事、〇下略

〔享祿本類聚三代格四〕〇上文闕刑部判事

大判事一人　令員二人　今省一人

中判事四人　令員口口　今皆省除〇此間文闕

小判事二人　令員四人　今省口人

小屬一人　令員二人　今省一人〇此間文闕

寬平八年九月七日

○按ズルニ、類聚三代格卷十五、寛平八年九月七日ノ官符ニ據ルニ、八月二十九日官奏ヲ以テ、判事ヲ併省センコトヲ請ヒ、九月七日ニ符ヲ發セシガ如シ、

〔官職秘抄 後附〕令內被減省之官

刑部省被官 中判事 寛平四年、有詔省大判事一人、中判事二人、少判事一人、唯置大少各一人云々、

〔本朝文粹 二意見封事〕意見十二箇條　善相公 清行

一請依舊增置判事員事

右臣伏案職員令、大判事二人、中判事二人、○令作四人少判事二人、○令作四人皆掌決斷人罪也、然而近古以來、大判事一員、常用律學之人、其外五人、未必任明法之輩焉、故去寛平四年有詔、省件大判事一人、中判事二人、小判事一人、唯置大小判事各一人、然猶大判事、獨用法家、小判事亦非其人、今案事意、此詔之旨、竊有疑惑、何者聖主之政、刑法爲大、昔皐陶以大賢爲理官、帝舜猶誡云、欽哉欽哉、惟刑之恤、光武以明察詳刑獄、桓譚亦奏云、法吏愛增、刑開二門、然則疑獄之斷、古今所難、而今總萬民之死生、繫之於一人之脣吻、括五刑之輕重、決之獨見之讞書、已乖閱實之理、恐貽濫罰之科、近會安藝守高橋良成之罪、大判事惟宗善經、處之遠流、以禦螭魅、奏下已畢、官符亦下、儻依刑部大錄粟田豐門之駮議、良成之身、幸蒙赦免、朽骨再肉、遊魂更歸、然則法律出入、難可取信、天下喁々、莫不危懼、伏望依舊置判事六人、皆擇明通法律者補任之、使之倶議科文、詳定條章、各儘其意、然後奏聞、如此則怨獄永絕、罪人自甘、不待扶南之鰐魚、豈用堯時之獬豸、○中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

○按ズルニ、職員令載ル所、大判事二人、中少判事各四人ニシテ、此ニ云フ所ト合ハズ、又此ニ云フ寛平四年ノ詔文ト、前ニ引ク所ノ享祿本類聚三代格ナル寛平八年ノ文ト矛盾セリ、封事ハ蓋シ暗記ノ失ニシテ、寛平四年ハ、八年ノ誤ナラン、而シテ官職秘抄後附ハ、封事ノ誤ヲ承ケシ

ナルベシ、

〔令義解考課四〕決斷不滯、與奪合理、爲刑部之最、(謂少輔以上及判事、)

〔唐六典尚書吏部二〕凡考課之法、(中略)○六曰、決斷不滯、與奪合理、爲判事之最、

〔延喜式判事二十九〕凡訊獄訟書者、具錄訴狀、其申官解文者、少除繁辭、宜判之日、必須委曲、

凡彈正臺移送罪人、若有事不分明者、遣刑部錄、判事屬、就臺諮問、若明知臺之所枉、乃追就省勘問、其檢非違使所送罪人亦准此、

凡國司稅帳之外、隱截租稅者、隨辨官宣下斷其罪、具錄事狀及物數、年終申太政官、

凡判良賤訴者、具錄事狀、申官奏聞、

凡斷徒以上盜人者、必勘前年盜人歷名、然後依法科斷、

〔延喜式刑部二十九〕凡告囚罪名者、囚獄司引罪人就省版位、即判事屬、讀示判狀、少判事以上、覆問服不、

〔詠百寮和歌〕大判事

罪人のおもさ輕さを計身は心にかけて方引もせじ

〔延喜式刑部二十九〕凡宣良賤判者、卿引錄以上列於西行、大判事引屬以上列於東行、囚獄司一人、當兩頭中間二許丈却立、次主若寺檀越一許丈却立、次賤男東列跪、賤女西列跪、物部丁挾立於賤東西、自朝堂會昌門入各如前列、卿已下當修式堂東北角列立、大判事已下當暉章堂東北角列立、並北向、各立定、當宣判事、自中間進二許丈宣告判狀、畢還立本列、若判爲良者、主若檀越幷囚獄司西側避立、即囚獄司教示賤等令再拜舞踏、然後從下退出、若判爲賤者、囚獄司西側避立、主若檀越再拜舞踏退出、

〔官職秘抄下〕諸道官　明法

大判事　明法博士兼之、此職元二人、寬平四年省一人、延長四年復舊加置之、但不任之、　少判事

明法道者必任之、但有文章得業生任例、(安倍興行)有文章生任例、(藤原章貞)有院宮給任例、(三善基時)有依公卿二合

任例、源相忠

〔職原抄 上〕刑部省

大判事一人　明法道輩、任レ之爲二極官一、　中判事一人近代不レ任レ之　少判事二人　明法道輩兼レ之

屬大少

〔百寮訓要抄〕刑部省

大判事司直大理正　人の罪名を判斷する職也、今も檢非違使の一の者、明法の輩任る官也、他人は任せず、殊に人をえらびて是を任せらるゝ、　少判事　是も檢非違使道志の輩任ずる也、

〔有職問答 三〕重而不審條々

一大判事少判事官事

八省の中刑部に屬して見え候、役はなにごとを專勤申候哉、任家候哉、

明法道ノ輩任レ之、世間ノ雜犯等ノ理非ヲ判斷スル職也、

〔有職問答 五〕言上條々

一勢多大判事の事

中原氏の人任じ候よし以前被二仰下一候、當時は執分誰人にて御座候哉、大中少判事の號武家にも可レ有レ之候哉、

日野ニ家禮候テ、近來マテ章淸ノ朝臣トテ候、其子今現在候、サモヤト覺候、中判事近代不レ任レ之候歟、

〔二判問答〕不審申上條々事

一大小判事雖レ非二博士之廷尉一、經歴可レ爲二如何一哉、

法曹輩之外、兼任未レ見及、

〔日本書紀 三十 持統〕三年二月己酉、以二淨廣肆竹田王、直廣肆土師宿禰根麻呂、大宅朝臣麻呂、藤原朝臣史、務大肆當麻眞人櫻井、穗積朝臣山守、中臣朝臣臣麻呂、巨勢朝臣多益須、大三輪朝臣安麻呂一、爲二判事一、

〔藤原家傳 下武智麻呂〕二年〇大寶正月、遷中判事、公莅官聽事、公平无私、察言觀色、不失其實、決疑平獄、必加審愼、雖有大小判事、其官方无准式、文案錯亂、間辨不允、於是議事前後、奏定條式、大寶元年已前爲法外、已後爲法內、自茲已後、諸訴訟者、內決已事、不敢公庭、

〔續日本紀 八元正〕養老五年六月辛丑、從四位下內部王、從五位下紀朝臣國益、並爲大判事、

〔續日本紀 十七聖武〕天平十九年三月乙酉、從五位下大伴宿禰三中爲刑部大判事、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年正月壬子、從五位下藤原朝臣楓麻呂爲大判事、

〔文德實錄 八〕齊衡三年十二月癸未、外從五位下讚岐朝臣永直爲大判事、明法博士如故、

〔文德實錄 九〕天安元年十一月戊戌、右京大夫兼加賀守正四位下藤原朝臣衞卒、衞贈左大臣從一位內麻呂第十之子也、〇中略十八奉文章生試及科、時人方之漢朝賈誼、頃之拜中判事、〇下略

〔三代實錄 一清和〕天安二年十一月廿五日壬午、散位從五位下安倍朝臣房上爲大判事、

〔三代實錄 十清和〕貞觀七年三月九日庚寅、從五位下行明法博士宍人朝臣永繼爲大判事、明法博士如故、

〔康富記〕應永廿九年十一月廿四日丁未、今日明法博士中原章卿任大判事云々、使左少尉從五下被宣下歟、坂上明雄、去六月卒去之替也、

〔兼胤公記〕寶曆九年五月八日、關白殿〇藤原內前被命、〇中略町口大判事、藤野井遠江等、叱り可申渡候、

判事大屬

〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年四月十三日丙辰、以大藏少輔從五位下清原眞人　道爲治部少輔、〇中略大丞正六位上平朝臣元行爲少判事、大錄正六位下御井原史淨氏爲判事大屬、

判事史生

〔日本後紀 八桓武〕延曆十八年七月己未、置判事史生四員、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、〇中略刑部省十八人、判事四人、

解部

〔日本書紀 三十持統〕四年正月丁酉、以解部一百人拜刑部省、

省掌

〔令義解四考課〕推鞫得情、申辨明了、(謂鞫者、窮罪也、了者、了別之義也、)爲解部之最、

〔唐六典二尚書吏部〕凡考課之法、○中略九曰、推鞫得情、處斷平允、爲法官之最、

〔令集解四職員〕大同三年正月廿日詔、○中略其刑部解部、宜從省廢、主者施行、○又見類聚國史、享祿本類聚三代格、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、官掌省掌、○中略各二人、但中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正、中宮、修理等、並待本司移補之、自餘者判補之、

〔類聚國史百七職官〕大同元年十月壬申、刑部、○中略省掌、准式部兵部二省聽把笏、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略刑部省卅人、

仕丁

〔東大寺正倉院文書二〕刑部省移民部省、

合仕丁伍拾肆人(立丁廿七人 廝廿七人)

應給米壹拾伍斛陸斗陸升　鹽壹斗伍升陸合陸勺　布貳拾漆段

省仕丁一十二人(立丁六人 廝六人)

應給米三斛四斗八升(人別日二升)　鹽三升四合八勺(人別日二勺)　布六段(人別一段)○中略

以前省并所管司仕丁等、來三月廿九箇日料、所請如件、故移、

天平十七年二月廿日　　從七位上行少錄韓國連大村

從四位下守卿王

雜載

〔類聚國史百七職官〕天長九年二月己丑、尾張國空閑地三十一町四段三百步、充刑部省、

贓贖司

贓贖司ハ、贓物及ビ贖銅ヲ徵シ、犯罪人ノ資財ヲ沒官シテ諸司ニ分チ、闌遺ノ雜物ヲ處分ス

ル事ヲ掌ル、而シテ本司ハ平城天皇大同三年、刑部省ニ併セラレ、贖銅ノ事ハ刑部省ニ於テ、囚獄司ト共ニ徵納スル事トナレリ、

職員職掌

〔令義解職員一〕贓贖司

正一人、掌簿斂、謂簿、疏也、斂、收也、言疏收於逆人資財、而没官也、配没、謂領收没官之物、更分配於諸司、假令兵器者配兵庫、文書者配圖書、財物者配大藏、逆人父子者配官奴司之類也、贓贖、謂非理取財曰贓、倍贓亦同也、出金當罪曰贖、入公入私並同也、其諸國贖物、即入當司、以充修理獄舍等也、闌遺雜物、謂依捕亡令、得闌遺物、无主識認、没官是也、事、佑一人、大令史一人、少令史一人、使部十八人、直丁一人、

〔令義解官位一〕正六位上階○贓贖正、アカムモノ、　從七位下階○贓贖佑　大初位上階○贓贖大令史　贓贖少令史○下階

補任

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年四月庚戌朔、外從五位下漆部直○直原作眞、據一本改伊波爲贓贖正、

廢司

〔類聚國史百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、贓贖司併刑部省、

囚獄司

囚獄司ハ、ヒトヤノツカサト稱シ、又字音ニテ、シユゴクシト稱ス、罪人ヲ囚禁シ、徒役ノ功程、及ビ配流決杖等ノ事ヲ掌ル、

本司ノ雜任ニ物部アリ、物部ハ上代ニ在リテ刑罰ノ職ナリシガ、當時ハ專ラ罪人ヲ防援シ、笞杖ヲ行ヒ、死囚ヲ殺戮ス、

囚獄ノ名ハ、世人ノ惡ム所ナルヲ以テ、後世ニハ此官ニ居ル者ナキニ至レリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕司　職員令云、○中略囚獄司、比止夜乃官

〔有職問答三〕重而不審條々

廳舍

職員
職掌

一囚獄官事

是をひとやと訓候本候如何、（勿論候）ヽゆごくと點候、（常ハ如此ニ候）いづれ能候哉、ヽゆごくのときは清濁いづれ、（上下候歟）被加筆度候、

〔職原抄上〕囚獄司（唐名斷獄署、掌獄舍事、）

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年閏十二月己未、乘輿巡省京城、以錢米賑給窮者、比至囚獄司前、天皇問曰、是爲誰家、右大臣藤原良房朝臣奏言、囚獄司、於是殊降恩詔、皆免獄中罪人、群臣欣悅、倶呼萬歲、

〔令義解一職員〕囚獄司

正一人、（掌禁囚罪人、謂衛府糺捉罪人、及諸司送徒以上者、皆此司任禁囚、徒役功程、及配決事、）佑一人、大令史一人、少令史一人、物部卅人、（謂此伴部之色、故式部補任、其衛門府門部、亦同也、掌主當罪人決罰事、）物部丁廿人、（謂諸國仕丁、帶仗守獄者、即自民部省所充也、）

〔令義解一官位〕正六位（階〇上）囚獄（ヒトヤ）正　從七位（階〇下）囚獄佑　大初位（階〇上）囚獄大令史　囚獄少令史（下〇階）

〔拾芥抄中本官位唐名〕囚獄正（囚獄司、斷獄令）（大理獄、都官郎）（比部郎中）　佑（比部員外郎、主斷獄大理獄正）（大理左右丞）（斷獄丞）

令史（比部獄史）（主事）

〔延喜式二十九刑部〕凡贖銅錢者、收囚獄司、省相共出納、

○按ズルニ、大同三年、贓贖司ヲ廢セラレテヨリ、本司ニ於テ、贖銅ノ事ヲモ掌ルコト、ナレルナリ、

〔令義解十獄〕凡囚、當處長官十五日一檢行、無長官次官檢行、其囚延引久禁、不被推問、若事狀雖可知、支證未盡、（謂支證者、支舉證也、猶云舉證也、）或告一人數事、（謂假有甲云乙是殺人、強奸、盜馬、即官司禁甲之類、其被告之人、亦同在禁、即次文云被告人有數事者是也、）乃被告人有數事者、重事得實、輕事未畢、如此之徒、檢行官司、並即斷決、

凡獄囚有疾病者、主守申牒、（謂主守者、主當獄囚之物部也、）判官以下親驗知實、給醫藥救療、病重者、脫去枷杻、仍聽家

内一人入禁看侍、其有死者、亦即同檢、若有他故者、（謂非法竊死、及令自死之類、）隨状推科、

〔延喜式二十九囚獄〕凡罪人死亡者、具注姓名年居幷入徒年月日申省、

凡禁囚之處、當宿官人、恒將物部幷物部丁等、每夜巡檢、（從三月至七月別三度、從八月至二月別四度、）

凡徒人役滿、具錄役日幷作物色目申送於省、

凡應戮罪人者、注預事物部歷名進省、即官人共率供事、

補任

〔官職秘抄上〕諸司正　囚獄　諸道得業生、文章生、明者生等任之、　同佑〇中略　囚獄〇中略　已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功臨時內給等任之、或以本司奏任之、〇中略　同令史〇中略　囚獄〇中略　已上以本司奏任之、或臨時內給、〇下略

〔職原抄上〕囚獄司

正一人　佑　令史　近代不必任此司、若憚名號歟、

〔百寮訓要抄〕囚獄司　断獄署　是は獄門の事を司る、よび名も不吉によりて、いたく近代の人の任せぬ事にてあれば、ゑるし侍らず、　正断獄令　子細おなじ

史生

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略　囚獄司二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略　囚獄司二人、

物部

〔令集解四職員〕養老四年三月十日、刑部省解偁、囚獄司物部、老貧無病、不堪驅使、省依常例、即遣專使、就京及畿內簡點訖、經式部補、此今京國不肯承行、謹請官裁、即官判、案令、伴部補任者、既是式部職掌、今所謂物部、亦是伴部之色、省錄所須人數申送式部、依令判任補、若有選人欠少、應考白〇白一本作衰字丁者、申官使本貫簡點、身來之日、又附式部補任、兵部亦准此、

〔類聚國史百七職官〕天長八年二月乙酉、囚獄司物部、定額卌人、依無名負氏入色人、通取他氏、早補十人之員、兼皆令帶兵仗、無人分番、不堪充事也、

使部
仕丁

〔延喜式十八式部〕凡囚獄司物部者、通取負名氏幷他氏白丁補十人、帶兵仗、
〔延喜式二十九囚獄〕凡物部十人、申省移式部、勘籍補之、其物部丁八人、准諸司直丁給粮、
〔令義解十獄〕凡徒流囚在役者、囚一人、兩人防援、〈○註略〉在京者取物部及衞士充、〈謂三府一分物部、三分衞士也〉
〔延喜式二十九刑部〕凡決死囚者、省預移送彈正、衞門、其日會集市司南門、共監行決、其彈正左衞門官人列門外東、〈各西面北上、相去一許丈、〉刑部右衞門官人列門外西、〈各東面北上、相去同上、〉市獄兩司列於南庭、〈自衞府南去四許丈、各北面中上、東西相去三許丈、〉囚人當中間而跪、〈自兩司南去三四許丈〉物部分陳防援、〈列囚左右、北向中上、〉立定、錄進於兩司中間、北面宣告犯狀罪名、示衆、衆人稱唯、畢還於本列、師丞召兩司、仰云、依例行之、兩司稱唯、以還本列、轉告物部、物部稱唯、案劒戮之、〈絞者用綱、〉
〔延喜式四十一彈正〕凡囚獄司物部、橫刀緒色、胡桃染、
〔令集解四職員〕古記云、物部丁廿人、此充仕丁耳、
〔延喜式二十九囚獄〕凡司內所須笞杖、每年十一月、役物部丁令採備、〈笞杖各一千枝〉
〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〈○中略〉囚獄司六人、
〔東大寺正倉院文書二〕刑部省移民部省〈○中略〉
囚獄司仕丁卅二人〈立丁廿一人、厮廿一人、〉
應給米十二斛一斗八升〈人別日二升〉　鹽一斗二升一合八勺〈人別日二勺〉　布廿一段〈人別一段〉　並應給久邇宮
以前省幷所管司仕丁等、來三月廿九箇日料、所請如件、故移、
天平十七年二月廿日　從七位上行少錄韓國連大村
從四位下守卿王

大藏省

名稱

大藏省ハ、オホクラノツカサト稱ス、諸國ノ調庸ヲ出納シ、及ビ錢幣、金銀、珠玉、銅鐵、骨角齒、羽毛、漆等ヲ知リ、朝廷ノ禮典、神事佛事釋奠等ニ供スル幄幔ヲ給シ、度量權衡ヲ平ニシ、賣買沽價ノ法ヲ定メ、諸司及ビ外賓ノ賜物等ヲ掌ル、

神武天皇ノ時、宮內ニ齋藏ヲ建テ神物官物ヲ納メ、履中天皇ノ時、別ニ內藏ヲ建テ、官物ヲ分納シ、雄略天皇ノ時、更ニ大藏ヲ建テ、秦氏ヲシテ世々出納ヲ掌ラシメタリ、是本省ノ淵源ナリ、然レドモ大寶制令ニ至リテ、其職制始テ考フベシトス、

本省ノ所屬ニ主鑰、藏部、價長、典履、典革アリ、主鑰ハ藏庫ノ管鑰ヲ掌リ、藏部ハ出納ヲ掌リ、價長ハ物價ヲ平ニシ、市易スルヲ掌リ、典履ハ賞賜ニ供スル靴履鞍具ヲ縫作スルヲ掌リ、百濟手部ハ其役ニ從ヒ、典革ハ雜革ヲ染作スルヲ掌リ、狛部ハ其役ニ從フ、要スルニ本省ノ內藏寮ニ於ル、其職掌ニ大小輕重ノ異ハアレドモ、大ニ相類スルモノニテ、倶ニ主鑰、藏部、價長、典履、百濟手部、百濟戶アリテ、煩雜ニ失スルガ如シ、故ニ平城天皇大同元年、本省ノ典履、百濟手部、百濟戶及ビ典革、狛部、狛戶ヲ以テ、內藏寮ニ移シタリ、

本省ノ被管ニ、典鑄、掃部、漆部、縫部、織部ノ五司アリ、而シテ典鑄司ハ、光仁天皇寶龜五年ニ、漆部司ハ、平城天皇大同三年ニ、共ニ內匠寮ニ併セ、縫部司モ亦大同三年、中務省ノ縫殿寮ニ併セラル、掃部司ハ、嵯峨天皇弘仁十一年、宮內省ノ內掃部司ト合シ、掃部寮ト號シテ宮內省ニ隷ス、

〔倭名類聚抄 五官名〕省 職員令云、〇中略大藏省、於保久良乃都加佐

沿革

〔職原抄 上〕大藏省〈唐名大府寺〉

〔古語拾遺〕神武天皇、〈○中略〉建都橿原經營帝宅、〈○中略〉當此之時、帝之與神其際未遠、同殿共床、以此爲常、故神物官物亦未分別、宮內立藏號曰齋藏、令齋部氏永任其職、〈○中略〉至於後磐余稚櫻朝、〈○中略〉三韓貢獻、奕世無絕、齋藏之傍、更建內藏、分收官物、仍令阿知使主與百濟博士王仁記其出納、始更定藏部、至於長谷朝倉朝、〈○中略、雄略、〉諸國貢調、年々盈溢、更立大藏、令蘇我麻智宿禰檢校三藏、〈齋藏、內藏、大藏、〉秦氏出納其物、東西文氏勘錄其簿、是以漢氏賜姓、爲內藏大藏、令秦漢二氏爲內藏大藏主鑰藏部之緣也、

〔日本書紀 二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　乙丑、直廣參大伴宿禰安麻呂誄大藏事、

〔續日本紀 二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝〈○中略〉等、奏、勅改易官號、〈○中略〉大藏省、出納財物、應有節制、故改爲節部省、

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字三年五月壬午、從五位下石川朝臣人成爲節部少輔、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年九月丙辰、勅、逆人仲麻呂執政奏改官名、宜復舊焉、

廳舍

〔拾芥抄 中本百官〕大藏省〈(中略)宮城門內、達智門西、〉

〔大內裏圖考證 二十五大藏省〕大藏省　諸圖大藏省在兵庫寮南、圖書寮北、大藏町西、采女司東、占地方四十丈、

〔日本書紀 二十九天武〕朱鳥元年正月乙卯、酉時難波大藏省失火、宮室悉焚、

〔日本紀略 三村上〕天曆元年七月四日丁亥、今夜大風猛烈、〈○中略〉大藏省後廳〈○中略〉等顛倒、

〔小右記〕天元五年二月九日壬申、依召參內、〈○中略〉大藏省、幷北大垣等、破壞顛倒、前年仰諸國令修造、忽依造營于今停滯、同仰造營行事上卿可令行其事、若可令分配諸國歟如何、大相國〈○藤原賴忠〉可定申者、

〔類聚符宣抄 十〕少外記正六位上多治眞人實相

右中納言從三位藤原朝臣扶幹宣、奉勅宣、令件人直實錄大藏省御書之所者、

承平五年九月十七日　　大外記内藏時景奉

〔日本書紀二十七天智〕十年十一月丁巳、災近江宮、從大藏省第三倉出、

〔令義解五宮衞〕凡兵庫大藏院内、皆不得將火入、其守當人、須造食者、謂官人以下直丁以上也於外造、謂於五十丈外造也餘庫藏、謂内外庫藏、其倉廩亦同准此、

〔續日本紀八元正〕養老五年二月壬辰、大藏省倉、自鳴有聲、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年八月戊辰、節部省北行東第二雙倉災、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年十月壬戌、前右大臣正二位勳二等吉備朝臣眞備薨、右衞士少尉下道朝臣國勝之子也、○中略大藏省雙倉被燒、大臣私更營構、于今存焉、

〔大内裏圖考證二十五大藏省〕大藏正倉院

占地　諸圖宮城北南土御門、東壬生、西壬生、分爲八區、而巽一區爲率分藏、其西一區爲長殿、南四區占地方四十丈、北四區占地東西四十丈、南北三十五丈、又東西各四區之間、爲十字街、其路廣各四丈、其路頭皆有門、不得相通、

○按ズルニ、儀制令元日國司朝拜條ノ義解ニ、正倉者正税也トアリ、

〔儀式九〕二月廿二日賜春夏季祿儀八月亦准

廿二日、式部省分史生爲四番、○註略預遣省掌於大藏省、唱計諸司、令進直丁運積祿物、彈正弼以下率史生臺掌至大藏省正藏院、就西亭座、點檢五位已下、○下略

〔儀式十〕賜位祿儀

廿日○十一月太政官、下符大藏省正藏院、

〔儀式十〕奉山陵幣儀

長殿

大藏省正倉院中區、縱立五丈幄一宇懸幔、設參議已上一人座、其南横亦立一宇、設辨官座、大藏省官人率藏部等、褁備幣物、(幣料納當年調之日、別設正倉、)

〔延喜式三十八掃部〕凡辨備山陵幣之座、設縫殿寮南院、幷大藏省正倉院、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年七月十三日乙卯、大鳥集大藏省正藏院納藥倉上、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年二月乙巳朔、大藏省奏言、昨夜偸兒、穿正藏院庫壁盜取官物、多少難記、遣檢非違使索焉、

〔延喜式二十二民部〕凡勘納調庸物者、郡司見參之日、省錄率史生等、向大藏省正倉院、與大藏錄共勘會見物、然後可納調物狀移大藏省、

〔延喜式三十大藏〕凡巡檢正倉院衞府等、巡否之狀、每日召問御倉守等、若不巡檢者、卽申官、

〔延喜式三十大藏〕凡掃正倉院料米二斛、滓醬一斗、鹽五升、每年六月、申官受用、

〔江家次第一正月〕供御藥

十二月十九日、(○舊年)藏人率諸司、向大藏省野倉出藥、(近代無此事)

〔江次第抄一〕野倉　在大藏省中、藏藥種之所也、

〔日本紀略四村上〕康保元年十月十三日乙卯、年來一本御書所淸書二百廿二卷、遷納大藏省野御倉、

〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕昌泰四年(○延喜元年)六月七日丁巳、今夜大藏省出擧倉燒亡、

〔日本紀略四村上〕天德二年七月十八日丁酉、夜大藏省下殿納絹百匹、盜人取之、

〔扶桑略記二十六村上〕天德四年二月廿八日戊戌、大藏省奏神態御庫度々鳴狀、

〔日本紀略十一一條〕寬弘二年二月八日丙戌、野火及大歌所、延及大藏省西倉一宇燒亡、

〔大内裏圖考證二十五大藏省〕長殿　諸圖、大藏省長殿在率分所西方四十丈、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年七月甲申、雷雨、大藏省東長殿災、

率分所

〔類聚國史 百七十三 災異〕弘仁十四年十月辛丑、亥剋失火、大藏十四間長殿、彈正尹葛原親王、右衞門督紀朝臣百繼、左大辨直世王、右大辨伴宿禰國道等、到著令撲、左右衞馳東西京、呼告集衆、千勢高閣不能制止、盛炎飛揚、迸落無數、勇士卅許人、登北長殿、濕幕撲之、是夜大臣已下侍內裏、諸門皆禁出入、明朝擇拔有功、奏聞賜綿、　十一月壬申、亥剋巡大藏舍人等、呼失火於大藏省、左右大辨等、奔波檢校、有人持炭火、插東十四間長殿東面長押、且撲火、且出物、優婆塞三人、藏部一人、親入盜物、郎著縛優婆塞一人、先申云、己等所謀、騷動之間、雜衆取物、去十月廿日夜失火、亦己等所爲、至明朝、勅使左右近衞少將推問、或爭避、或吐實、依事未盡、優婆塞降非違禁固、藏部降囚獄著鈦、于時撰集大庭五位已上尤勇士人、賜物、

〔續日本後紀 六 仁明〕承和四年十二月庚子、是夜盜穿大藏省東長殿壁、竊取絁布等、不知幾匹端、

〔日本紀略 四 村上〕天德元年十一月卅日壬子、今夜竊盜穿大藏省長殿、盜取鍬鐵等、

〔永久四年百首 冬〕貢調　　　　前越前守正四位下藤原朝臣仲實

長殿の常陸の御藏ひらきあけよけふ御調物おさめみつべく

〔類聚符宣抄 七〕定所々別當勾當預事

權左中辨藤原朝臣懷忠傳宣、左大臣宣、中監物藤原相成、宜如舊爲長殿勾當職者、

貞元〇貞元恐天元誤三年十一月廿八日　　右大史內藏佐忠奉

〔權記〕長保二年八月十五日己未、申主計允丹生益光爲長殿預事、

〔拾芥抄 中末 宮城〕正藏率分所 大藏省納物、割二十分之二、爲別納、以辨官一人、掌其事、以主計頭、大藏輔、大監物等、爲勾當、又年料長殿者、尙爲藏被宣云々、無正藏率分國者、五畿內國、幷陸奧、出羽、周防、志摩、淡路、伊賀、依興福寺修造免除久、

〔權記〕長保二年四月廿日丁卯、此日召民部錄船隆範、給正藏率分所土左國絹伍拾陸疋下文、幷仰彼國目秦連光俸料等、觸國守可令宛下之由、

〔左經記〕萬壽五年〇長元元年四月十一日丙子、參ニ詣政所一、有ニ政〇註略事一、雖レ未レ畢、稱レ内召起座、渡ニ率分藏一、因幡見上調布二千端令レ納、歸ニ參大内一、五月十六日庚戌、及ニ午刻一、渡ニ率分藏一、令レ納伯耆見手作百端、麻布五百端、手作絹六十匹代、麻布絹百匹代、次請ニ右府一、大安寺知識物、任ニ見納數一、且可レ令レ渡預別當鴻助之由下ニ宣旨一、

〔古今著聞集〕三政道忠臣村上御時南殿に出御ありけるに、諸司の下部の年たけたるが、南階の邊に候けるをめして、當時の政道をば、世にはいかゞ申すと御尋ありければ、目出度候とこそ申候へ但主殿寮に松明の入候、率分堂に草候と奏したりければ、御門大きに恥ちおぼしめしてけり、させる公事の日にはあらざりけるにや、松明のいると申は、公事の夜に入由にて侍り、率分堂に草の繁れるとは、諸國の貢物の參らぬ由なるべし、いみじく申たりけるもの也、〇又見ニ十訓抄一

〔夕拜備急至要抄〕上八月四日北野祭

幣幷饗料任ニ率分所一、大藏省切下文、催ニ諸國一之外無レ他、

〔兵範記〕仁安三年九月七日乙丑、神祇官、發ニ遣五畿七道諸國幣使一、〇中略

件大奉幣幣物、以ニ大藏省切下文一付ニ諸國一、日來催促、〇下略

〔詞花和歌集〕十雜藤原實宗、常陸の介に侍ける時、大藏省の使ども、きびしくせめければ、匡房〇大藏卿にいひて侍ければ、遠江にきりかへて侍ければ、いひつかはしける、

太皇太后宮肥後

筑波山ふかくうれしとおもふ哉はまなの橋にわたす心を

〔塵添壒囊抄〕十九觀勝寺當寺事

龜山院御宇文永五年戊辰九月比、大圓上人、不慮ニ此山登、令レ住持給ヘリ、〇中略其後弘安四年辛巳夏比、異賊襲來間、院宣ヲ蒙テ御祈禱ヲ始給、勅使中納言具房卿也、一七箇日後、重宣旨任、八幡宮參籠有テ、秘法ヲ修シ給間、凶賊亡ビケレバ、叡感无限、猶異國降伏ノ爲トテ、五大尊ヲ造立シ、同長

省印

職員職掌

日護摩ヲ可始置由被仰下ケレバ、上人手自剋立給、則率分所ヲ被下ケレ共、料所ヲバ固辭シ申シ、御願ヲバ被始ケリ、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年六月廿五日甲午、裏書今日對面民部卿〇源俊明之次、申云、一日不思懸間、率分所勾當可奉行由被仰下了、倩案事情、率分辨近代多上臈、正左中辨所奉來也、然者左中辨師頼朝臣可奉也、若不然者、權右中辨重資、年來爲辨官之上、又有良吏之聞、仍可奉行之仁也、至宗忠者、新任未練之者、豈可堪此職哉者、民部卿被命云、件事殿下〇藤原師通皆所思食量也、被申院內了、只不論上下臈、爲諸國以不被憂之人可爲率分辨之由有議定也、汝已當其仁、於今者不可辭申者、予聞此語中心有所思、民部卿者、一家之禮、最如嚴親、萬事所申含也、七月三日壬寅、晩頭歸家之後、大藏省下部等、著衣冠來進見參、先例不賜饗祿、則令歸了、是依承奉率分事、本省下部等見參者、又初加署於率分吉書等、來八日、新年穀奉幣請奏宣旨、諸國下文等也、

〔中右記〕長承四年〇保延元年六月七日己酉、今日宣旨、〇中略

民部大輔藤原朝臣經親

件人宜爲正藏率分所勾當、〇中略

藏人右少辨資信

〔諸家傳十六〕日野家　資長卿男兼光、治承五年十二月四日、爲率分所勾當幷裝束司、

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部、民部、兵部、刑部、大藏〇中略印各一面、

〔延喜式三十大藏〕凡諸國所進調庸等物、緣麤惡短狹及欠失等、若有買換者、檢納之日、便捺省印、

〔令義解一職員〕大藏省管司五

卿一人、掌出納、謂與監物共出納也、諸國調、及錢、金銀、珠玉、銅鐵、骨角齒、羽毛、漆、帳幕、權衡、謂權、懸錘也、衡、横木也、所以知輕重者也、度量、謂丈尺爲度也、升斗爲量也、賣買、估價、謂貨物價直、隨時輕重、官家賣買、據其中估、但當賣買時、知估價法、非是常在市而案記也、諸方貢獻雜物事、大輔一人、

少輔一人、大丞一人、少丞二人、大錄一人、少錄二人、史生六人、大主鑰二人、少主鑰二人、藏部六十人、價長四人、典履二人、掌縫作靴履鞍具、手部狛部、謂此爲賞賜、不關供御、百濟手部、狛部、謂並是得考者也、撿挍百濟手部、百濟手部十人、掌雜縫作事、典革一人、掌雜革染作、撿挍狛部、狛部六人、掌雜革染作、省掌二人使部六十人、直丁四人、駈使丁六人、百濟戸、狛戸、

〔令集解四職員〕穴云、此司典履、內藏典履等別何、答二司並各作同物、同充供御也、其染作皮、自此司入內藏耳、釋云、內藏爲供御也、此省爲人給也、

〔令義解官位一〕親王三品四品八省卿　諸王諸臣正四位下七省卿中務以外　正五位下七省大輔從五位下七省少輔　正六位下八省大丞　從六位上八省少丞　大藏大主鑰正下七位上八省大錄　從七位下大藏少主鑰　正八位上八省少錄　典履　典革

〔拾芥抄中本官位唐名〕大藏卿大藏省官外官　大府大府卿　或大府寺大藏部尚書　輔大府小郎大府侍郎　丞大府丞大府郎中　錄大府錄事大府主簿

〔唐六典二十太府寺〕太府寺卿一人從三品

周禮天官、有太府下大夫上士下士、掌九貢九賦九功之式、以受其貨賄之入、頒其貨于受藏之府、頒其賄于受用之府、凡官府都鄙之吏、及執事者、受財用焉、則今太府之任也、秦漢已下、不置其官、其職幷於司農少府、梁天監七年、始置太府、班第十三、掌金帛府帑、統右藏令上庫丞太市南市北市令、關津亦皆屬焉、陳因之、品第三、後魏太和中、始改少府爲太府卿、品第三、北齊因之、後周有太府中大夫、又有計部中大夫、隋太府寺卿一人、正三品上、統左藏左內右內三倘方司染右藏掌冶甄官等署、各置令丞、至煬帝、分太府寺置少府監、管三倘方及司染掌冶等署、而太府寺管左右藏及兩市平準等署焉、大業四年、降爲從三品、皇朝因之、至龍朔二年、改爲外府正卿、咸亨元年復故、光宅元年、改爲司府寺、神龍初復舊、○中略

太府卿之職、掌邦國財貨之政令、總京都四市平準左右藏常平八署之官屬、擧其綱目、修其職務、少卿爲之貳、

〔本朝續文粹八序〕七言冬日於御史源中丞書閣同賦琴書雪裏携詩一首〇詩略
江大府卿匡房

〔公卿補任鳥羽〕天永二年辛卯
前權中納言正二位大江匡房七月廿九日任大藏卿

〔吾妻鏡五〕文治元年十一月十五日甲午、大藏卿泰經朝臣使者參著、依怖刑歟、直不參營中、先到左典厩御亭、告被獻狀於鎌倉殿之由、〇中略典厩相具使者、遂子細給、府卿云狀披覽、俊兼讀申之、

〔令集解四職員〕大同三年七月十六日、官奏云、加置官員事、今加大丞一員、大錄一員、右件出納事、官員欠少、伏乞更加件員、以前雖官職之員、令條立限、而臨時取宜、政道攸尙、伏乞依件廢置、各理其務、臣等商量所定、具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、〇又見事林本類聚三代格、係七月二十六日、

〔日本後紀十七平城〕大同三年八月庚戌朔、加大藏省大丞大錄、〇中略各一員、

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年四月辛丑、勅、〇中略減大藏省主鎰大少各一員、〇又見令集解、

〔職原抄上〕大藏省唐名大府寺
卿一人相當正四位下唐名大府卿、〇中略　大輔一人權大輔一人、相當正五位下唐名大府侍郞歟　少輔一人權少輔一人相當從五位下唐名大府少卿　丞大少唐名大府郞中歟　錄大少唐名大府主簿

〔令義解四考課〕謹於修置、謂得安置所也明於出納、爲大藏之最、謂少輔以上、

〔唐六典二尙書吏部〕凡考課之法、〇中略二十一曰、謹於蓋藏、明於出納、爲倉庫之最、

〔延喜式三十大藏〕凡受納出納者、先申辨官、辨官仰諸司共集然後給納、諸司官人見監物式、

凡諸司返上雜物者、並待符到檢納正倉、若印書到後一月不進者、具錄色目、毎月申官、不勤催納、致有

亡失、交替之日勘解由、

凡出納庫物者、諸司各作出納帳、共署、卽明記受人姓名、

凡每月十三日、廿七日、爲出御服雜物之日

凡奉行御服物之日、出納諸司、與內藏寮官人相共入庫遷進、

凡遣太宰府染料綾二百疋、每年四月以前擇定付內藏寮、

〔延喜式二十二民部〕凡勘納調庸物者、郡司見參之日、省錄率史生等向大藏省正倉院、與大藏錄共勘會見物、然後可納調物狀移大藏省、

〔延喜式三十大藏〕凡受納調庸雜物者、國帳至省、先可納狀申官、期月之後、廿日以前、隨次收納、假令近國十一月廿日以前、中國十二月廿日以前收訖之類、其絁絲綿布者、每國品別割置爲樣、至于後年以此比校、違卽勘返、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年閏正月戊午、勅收貯大藏諸國調者、令諸司每色檢挍相知、又收貯民部諸國庸中輕物、絁絲綿等類、自今以後、收於大藏、而支度年料分充民部也、

〔類聚符宣抄七〕定所々別當勾當預事

大藏大丞藤原命世　大藏民保晴

左中辨源朝臣保光傳宣、左大臣宣、件等人宜爲太宰府康保三年貢調物勾當者、

康保四年十二月廿一日　左大史物部宿禰安國奉

大藏少丞藤原以實　少錄民千尋

右少辨藤原朝臣懷遠傳宣、左大臣宣、件等人、宜爲太宰府進納天元元年貢調物勾當者、

天元四年二月七日　左大史大春日朝臣良辰奉

〔延喜式三十大藏〕凡諸國所進年料漆、先令內匠寮定其品、卽蓋上記定品之人名、然後納庫、

〔延喜式三十大藏〕凡諸節會日、所懸之幔、令左右衞門府守之、若不勤守致破損者、申官拘留官府要劇馬料、

凡在省紺幄十一字、五丈紺幄八字、紺輕幄七字、布幔百廿四條、皆收別倉、隨事供設、若有破壞者、申官縫換、但故弊者、任充公用、

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月廿八日、花町宮、〇後西院有踐祚之事、〇中略

調進　大藏省

大幔六ケ所拾貳張　同幔串内侍所神供御用　御棚六脚　寸榧六合　陣疊　結灯臺

小板敷疊

〔御昇壇記〕寶永六年六月廿一日、御讓位〇東山也、〇中略

剱璽渡御儀

先掃部寮敷筵道、大藏省每辻張幔、〇下略

〔令義解九關市〕凡官私權衡度量、每年二月、詣大藏省平校、謂凡諸司及庶人、用權衡度量者、皆詣大藏省平校、然後用之、其諸國幷要用官者、司別給樣也、依律、雖平而不經官司印者、笞卌、即知平校日、官司題印、但唐令云、並印署然後聽用、此令除印署文、故不可署、唯依律可印、即與量面不同、不在京者、詣所在國司平校、然後聽用、

〔類聚國史八十政理〕延曆十七年十月乙未、勅、〇中略度量權衡、先有定製、平校行用、亦具令條、然所司怠慢、曾不遵行、大小任意、輕重由人、收納多濫、蠧害尤甚、自今以後、宜改此弊、升尺等類、就大藏省依法平校、永絕姧源、若違此制、口寘嚴科、

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月丁未、撰令所處分、職事官人賜祿之日五位已下、皆參大藏受其祿、若不然者、彈正糺察焉、

〔儀式九〕正月廿二日賜馬料儀

太政官錄三省所申總目、十五日少納言奏之、廿日下符大藏省、廿二日質明、式兵二省省掌、向大藏省唱計諸司、〇中略大藏省積料錢、掃部亦設二省幷大藏座於料物下、大藏積物畢狀申辨官、辨官令官掌

喚式兵二省、錄稱唯參進、辨大夫命諸司馬料早給之、錄稱唯退、（中略）諸司主典、隨喚稱唯進跪、史生宣示物數、藏部承命計授、隨卽且申其數、史生記錄、大藏亦如是、

〔延喜式 三十大藏〕凡諸司給春夏祿者、辨官式部兵部彈正並集、積祿物畢、彈正巡檢、卽省申辨官、辨官宣命、訖式部兵部唱名、省因班給、（位祿准此、但不宣命、）若當日不了、具錄殘數移送式部、待報乃給、（秋冬准此）女孺以上給春夏祿者、於正倉院立五丈幄二宇、（一宇南面懸幔、掃部鋪內侍以下座、一宇北面積祿、秋冬准此、）

凡諸司給春夏時服者、辨官中務並集、其物積畢、省申辨官、辨官仰中務、宣命訖卽唱名、省因班給、若當日不了、待中務移乃給、（秋冬准此）

〔內裏式 上〕七日正月會式

皇太子先拜舞、次親王共拜舞、（他皆倣此）訖大藏省積祿、（掃部寮鋪南立祿臺、）

十七日（正月）觀射式

其日乘輿未幸之前、大藏省陳賞物於每席東南角七許丈、（中略）射人進就射位射之、中的則獲者、捧的稱所中之規、隨矢疎密叩鉦有數、（中略）大藏省且隨射訖召、射中者停立、（註略）北面稱唯進至賞物前受物退、

〔延喜式 三十大藏〕凡諸節會日給祿者、中務式部隨節唱名、省卽頒給、（大射祿、省獨班給、）若有殘者、辨官幷省共修奏狀附內侍司、（大射祿殘、賭弓後進藏人所、）

〔延喜式 三十大藏〕八日（正月）最勝王經齋會、（中略）其布施物者、預前請受、（中略）會終之日班送、（呪願師已上、輔丞以文奉之、餘僧諸司判官以下持物送之、）

○按ズルニ、佛會ノ布施、僧徒ノ菜料等ノ事尙ホアレド、今省略ス、

〔延喜式 三十大藏〕凡遣諸蕃使、祭天神地祇者、官人史生各一人、率藏部等、齎幣物幷明衣、共赴祭處、

凡遣蕃國使儲物者、省與使者依例修備、

補任

凡蕃客來朝者、官人史生各一人率二藏部等一、向二郊勞處一、供二設幄幔一、
凡蕃客貢具雜物者、納二省庫一、待二客徒入朝之時一出用、
凡蕃客來朝應二交關一者、丞錄史生率二藏部價長等一、赴二客館一、與二內藏寮一共交關、訖錄二色目一申レ官、其價物東絁一百疋、調綿一千屯、錢卅貫文、若有レ殘者同申返上、

〔官職秘抄 上〕八省卿　大藏〇中略　已上爲二參議散三位四位官一、〇中略　同輔〇大少有レ權　大藏　諸大夫、諸道博士等任レ之、　同丞〇大少中略　大藏〇中略　元藏人陪從、良家子等任レ之、近代諸家侍任レ之、但可レ撰レ人也、〇中略　同錄〇大少中略　大藏〇中略　已上本省奏、諸道擧、問者生等任レ之、或卿申請也、或自二諸司二分一遷二任之一、

〔職原抄 上〕大藏省
卿一人　四位已上任レ之、雖二公卿一又任レ之、　大輔一人權大輔一人　少輔一人權少輔一人　名家殿上人、及地下諸大夫共任レ之、近代諸道、及侍五位等又任レ之畢、八省輔中、頗被二取下一者也、仍可レ然之殿上人不レ望レ之、　丞大少　六位侍任レ之、昔者爲二重職一、給レ爵之後、任二受領一云々、　錄大少

〔百寮訓要抄〕大藏省大府寺
卿大府卿　三位四位名家儒家以下皆是に任ず、昔は天下の雜物を奉行の官にてあれば、殊人をえらばるゝ也、今はさやうの事なければ零落し侍しにや、　大輔大府侍郞　さきに申ごとく、八省の輔は同事なり、但此輔は、いたく人の執し侍らぬにや、　權大輔　少輔大府少卿　權少輔皆おなじ

〔光臺一覽 二〕大藏卿一人　唐名大府卿、右同斷、〇三位以上任レ之、　四輔〇大少輔正權　諸家任レ之　丞錄地下

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、從四位上廣瀨王爲二大藏卿一、

〔續日本紀 八元正〕養老四年十月戊子、從五位下阿倍朝臣若足爲二大藏少輔一、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十年閏七月癸卯、從五位下小田王爲大藏大輔、從五位下路眞人虫麻呂爲少輔、

〔日本後紀 十三 桓武〕大同元年五月壬申、四品葛原親王爲大藏卿、

〔古今著聞集 十六 興言利口〕修理大夫行通卿、大藏卿に成たりける時、或人のもとより、今は德つき給なんするに、まひなへかしといひたりける返事に、

たてそめてまだ物つまぬ大藏はもとの修理にもまさらざりけり

〔葉黃記〕寶治元年五月十七日己巳、今日有小除目、〇中略俊宗任大藏少輔、四品之後、任八省少輔、希代事也、

〔建內記〕文安四年六月一日辛酉

從四位下祝部行保、宜令任大藏權大輔叙從四位上、〇中略可被宣下之由被仰下之狀、如件、

六月一日　判

頭左大辨殿

〔明和新增京羽二重 一〕官方

大藏省 木工寮　從四位下 左衞門大尉　堀川近江守大石弘充

同　從五位下 大藏少丞　堀川左衞門少尉大石弘澄

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕〇中略、

堀川　大藏省少丞 兼木工寮　弘度

〔慶應元年 都仁志喜 二下〕官方

大藏省 木工寮　堀川大藏少丞大石弘亮

史生

〔續日本紀 六 元明〕和銅六年九月辛巳、加大藏省史生六員、

〔日本後紀 十七 平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略大藏省八員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略大藏省廿人、

〔今昔物語三十一〕大藏史生宗岡高助傳娘語第五

今昔、大藏ノ最下ノ史生ニ、宗岡ノ高助ト云フ者有キ、

〔慶應元年都仁志喜二下〕官方

大藏省史生　篠田上總大掾源保寛

　　　　　　山本肥後掾藤盛厚

藏部

〔類聚國史百七職官〕延曆十七年四月癸亥、大藏省藏部數、定爲卅人、仍給廿人夏冬衣服、

〔儀式十〕奉山陵幣儀

大藏省官人率藏部等、褁備幣物、

價長

〔亨祿本類聚三代格四〕太政官符

　應減省價長二人事

右得大藏省解偁、謹案令條、可置價長四人、雖然承前之例、只補二人、令掌厥職、公事不擁、其來尙矣、而式部省去貞觀二年、偏稱令員、如本加補、自爾以降、無職充用、爭訴多端、望請因准前例、減省二人、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

　　貞觀十三年二月十四日

〔伊呂波字類抄於官職〕大藏省

價長四人

　〇按ズルニ、價長四人トアルハ、貞觀以後復古セシニヤ、又ハ令制ニ據リテ記セルニヤ、詳ナラズ、

典履典革

〔亨祿本類聚三代格四〕太政官符

典履二人　百濟手部十人　典革一人　狛部六人　百濟戶　狛戶

右件元大藏省之所管、今右大臣宣、奉勅件人等、自今以後、宜隷內藏寮、

大同元年十月十一日

縫女

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

宮人卅人

右得大藏省解偁、此宮人、元配縫部司、卽此省所管也、承前以此宮人縫作幄幔、而依去大同三年正月廿日詔書、廢縫部司、併縫殿寮、自爾以降、無人縫造、因此幄々〇々恐幔字誤等物、破損不少、望請依舊修縫者、大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂宣、奉勅割縫殿寮、配大藏省、

弘仁二年二月十日

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年二月乙亥、分縫殿寮宮人卅人、配大藏省、以縫作幄幔等類也、

〔延喜式三十五大炊〕親王已下月料

大藏縫女卅人總日四升

〔延喜式三十三大膳〕女官月料

大藏縫女廿六人、鹽七升八合、

省掌

〔類聚國史百七職官〕大同元年十月壬申、中務〇中略大藏宮內等六省省掌、准式部兵部二省聽把笏、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司官掌省掌、〇中略各二人、但中務、治部、民部、兵部、大藏、〇中略並待本司移補之、自餘者判補之、

扶省掌

〔延喜式十八式部〕凡中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正等省臺、正員之外、扶省掌臺掌以入色者各置二人、令習儀式、皆待本司所送名簿乃補之、若正員有闕者、以扶省掌補之、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略大藏省廿人、

雜戸

〔東大寺正倉院文書十二〕戸主出雲臣八綱年肆拾伍歳　正丁左頰黑子　大藏書使部
裏書
山背國愛宕郡出雲郷雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

〔令集解職員四〕古記及釋云、別記云、忍海戸狛人五戸、竹志戸狛人七戸、合十二戸、役日無限、但年料牛皮廿張以下令作、村村狛人三十戸、宮郡狛人十四戸、大狛染六戸、右五色人等、爲品部免調役也、紀伊國在狛人、百濟人、新羅人、并卌八戸、年料牛皮十張、鹿皮廣皮令作但取調庸免雜徭、百濟手部十戸、左京八戸、右京二戸、一番役五人、月料履一人十六兩令縫、爲雜戸免調役也、百濟戸十一戸、臨時免役爲雜戸免調役、衣染廿一戸、飛鳥沓縫十二戸、呉床作二戸、蓋縫十一戸、大笠縫卅三戸、横作七十二戸、右六色人等、臨時召役爲品部、取調庸免雜徭、但百濟手部十人得考、一云、凡縫笠、縫蓋、飛鳥縫履、染部、如此之類、皆在藏部之中、

雜載

〔續日本紀聖武十四〕天平十三年十一月庚午、始以赤幡班給大藏〇中略等司、供御物前、建以爲標、

〔續日本紀聖武十三〕天平十年七月癸酉、天皇御大藏省覽相撲、

〔貞信公記〕天慶十年〇天暦元年十二月四日、中使公輔來、賜大藏省勘申國用支度、又有省試宣旨、中学〇学恐學字誤生事、國用支度、主計寮勘申文也、不知故實上卿令勘歟、

典鑄司

典鑄司ハ、金銀銅鐵ヲ鑄造シ、瑠璃ヲ塗飾スルヲ掌ル、而シテ光仁天皇寶龜五年、内匠寮ニ併セラル、

職員
職掌

〔令義解職員一〕典鑄司

正一人、掌造鑄金銀銅鐵、塗飾瑠璃、謂火齊玉作、及工戸戸口名籍事、珠也佑一人、大令史一人、少令史一人、

雜工戸

雜工部十人、使部十人、直丁一人、雜工戸、

〔令義解官位一〕正六位〇上階　典鑄正（イモシノ）　從七位〇下階　典鑄佑　大初位〇上階　典鑄大令史　典鑄少令史〇下階

〔令集解職員四〕古記及釋云、抽取鍛冶造兵司部人、及高麗百濟新羅雜工人配之、

賤司

〔官職秘抄附後〕令内被減省之官

大藏省被管　典鑄司寶龜五年、併内匠寮、

掃部司

沿革

掃部司ハ、カモリヅカサト稱ス、蓋シカニモリノ轉ナリ、鋪設灑掃、及ビ牀席等ノ事ヲ掌ル、上世ニ於テハ、灑掃ハ掃守連ノ世職ナリシガ、大寶制令ニ本司ヲ置キテ司掌セシム、而シテ嵯峨天皇弘仁十一年、此司ト宮内省ノ内掃部司ト併セテ、掃部寮ト號シ、宮内省ニ隷セシム、

〔令集解職員五〕内掃部司　弘仁十一年閏五月五日格云、併掃部内掃部二司爲掃部寮、右二司之職、内外雖異、論其所掌、俱是鋪設、〇中略伏望依件爲定、隷宮内省、〇中略謹以申聞、謹奏、

職員 職掌

〔令義解職員一〕掃部司

正一人、掌薦席牀簀苫、及鋪設灑掃、蒲藺葦簾等事、佑一人、令史一人、掃部十人、使部六人、直丁一人、駈使丁廿人、

〔令義解官位一〕正六位〇上階　掃部正（カモリノ）　從七位〇下階　掃部佑　大初位〇上階　掃部令史

史生

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年七月己未、置〇中略掃部司史生二員、

仕丁

〔東大寺正倉院文書二〕掃部司解　申請仕丁公粮事

沿革
職員職掌
補任

合參拾捌人（立丁廿人、廝丁十八人）
料米拾壹斛陸㪷（日別二升）　鹽壹㪷壹升陸合（日別二勺）　庸布拾捌段
米陸斛參㪷捌升（日別二升）　鹽陸升參合捌勺（日別二勺）　布拾壹段
右甲賀宮直丁十一人、廝丁十一人、
米伍斛貳㪷貳升（日別二升）　鹽伍升貳合貳勺（日別二勺）　布漆段
右久邇宮立丁九人、廝丁七人、
以前廝丁已上、來五月廿九箇日料、所請公粮如件、具狀以解、
天平十七年四月廿日　正八位下行令史池田朝臣河內麻呂
正正六位上勳十二等藏垣忌寸虫麻呂　正七位上行佑秦常忌寸養德麻呂

漆部司

漆部司ハ、髹漆ノ事ヲ掌ル、平城天皇大同三年、內匠寮ニ併セラル、

〔類聚國史 百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、其畫工漆部二司、併內匠寮、云々、〇又見令集解、享祿本類聚三代格、

〔令義解 一職員〕漆部司
正一人、掌雜塗漆事、佑一人、令史一人、漆部廿人、使部六人、直丁一人、

〔令義解 一官位〕正六位（階〇下）漆部正　正八位（階〇上）漆部佑　大初位（階〇下）漆部令史

〔續日本紀 二十淳仁〕天平寶字五年十月壬子朔、外從五位下陽侯毗登玲璆爲漆部正、

〔續日本紀 三十光仁〕寶龜五年九月庚子、外從五位下日置首若虫爲漆部正、

〔續日本紀 八元正〕養老四年六月己酉、漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝、直丁秦犬麻呂、坐盜司漆、

雜戸

並斷流罪、

〔令集解 四 職員〕古記及釋云、別記云、漆部廿人之中、伴造七人、倭國經年役伴造、爲伴部、漆部爲品部、漆部十戸、經年毎戸役、免調役也、泥障二戸、革張一戸、右二色人等、臨時召役、爲品部、取調免徭役、限外漆部五人、泥障八戸、革張三戸、右三色人等、爲品○外以下二十字、據一本補部、取調免徭役、但漆部伴部並得考、

〔倭名類聚抄 六 國郡〕大和國宇陀郡漆部奴利倍

縫部司

縫部司ハ、衞士等ノ衣服ヲ裁縫スル事ヲ掌ル、平城天皇大同三年、縫殿寮ニ併セラル、

職員 職掌

〔令義解 一 職員〕縫部司

正一人、掌裁縫衣服謂此爲衞士等衣服也事、佑一人、令史一人、縫部四人、使部六人、直丁一人、縫女部、謂檢前令、縫女部在使部上、而新令在直丁下者、凡新令之體、雜女皆在男下、所以在直丁下、其考者、依舊更无改張、

〔令集解 四 職員〕古記云、問縫殿寮與縫部裁衣服之別何、答縫殿以給內人也、縫部以給外人、

補任

〔令義解 一 官位〕正六位○下 縫部正　正八位○上 縫部佑　大初位○下 縫部令史

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年五月癸酉、外從五位下秦忌寸簑守爲縫部正、

廢司

〔類聚國史 百七 職官〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、縫部釆女二司、併縫殿寮、○又見令集解

織部司

織部司ハ、オリベノツカサト稱ス、綾羅錦紬ヲ織リ、及ビ諸種ノ染物ノ事ヲ掌リ、挑文師ヲ置キ

名稱

錦繡綾羅ノ文ヲ挑起セシム、

〔倭名類聚抄 五官名〕司 職員令云、○中略 織部司、於里倍豆加佐

〔百寮訓要鈔別註 四〕織部司

和名抄ニ於里倍豆加佐ト訓ゼリ、一ニハ於牟倍ト訓ズ、是ハ假名ノ文ナドノ訓ニテ、於里倍ノ轉音ナリ、

〔下學集 官位 上〕織部正(ヲリベノカミ) 令織染

〔職原抄 上〕織部司(ヲンベ ヲリベ 常ニハヲンヘト云) 唐名織染署、掌ニ織部事一、

〔新撰六帖 五〕あや

もゝしきや大内山のうしとらにをりべのつかさあやたてまつる　右大辨入道光俊

廳舍

〔大内裏圖考證 二十五 織部司〕占地 諸都城古圖、織部司在ニ東大宮東、土御門大路北一、東西四十丈、南北二十丈、古本拾芥抄、及校本拾芥抄別圖、神泉苑所レ傳圖皆同レ之、今從レ之、按印本拾芥抄圖方四十丈、蓋圖不レ精也、又一圖有ニ南北四十丈、而東西缺者一、與ニ諸圖一不レ合、故今不レ取、

〔日本紀略 十一 一條〕寛弘五年十月一日戊子、今日宇佐八幡宮禰宜成子、乘レ車參ニ織部司南門一、訴ニ申彼宮司邦利以ニ無實一科レ祓事一、

〔日本紀略 十三 後一條〕寛仁四年七月廿二日辛未、夜大風吹ニ壞内裏所々一、○中略 織部司大炊舍一字、并倉一宇、○下略

〔小右記〕天元五年二月十八日辛巳、今夜織部司東邊小屋等燒亡云々、

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年閏正月戊戌、織部司織手町災、燒ニ百姓廬舍數烟一、

〔葉黄記〕寛元四年六月九日丙申、今夜織部司燒亡、

祭神

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年閏十月廿三日己酉、是日授ニ織部司正六位上辰巳隅神、戌亥隅神、並從五位下一、

司印
職員
職掌

〔續日本後紀仁明二十〕嘉祥三年三月丙戌、此日織部司言、元來無印、行事有妨、勅鑄造充之、

〔令義解職員一〕織部司

正一人、掌織錦綾紬羅、及雜染事、佑一人、令史一人、挑文師四人、掌挑錦綾羅等文、挑文生謂取綾錦文者、名爲挑文生、即得考也、以八人、使部六人、直丁一人、染戸、自挑織故也、

〔令義解官位一〕正六位下〇織部正　正八位上〇織部佑　大初位下〇織部令史　挑文師

〔拾芥抄官位唐名中本〕織部正織部司　織染署　佑織染正　令史織染史　織染府　織染錄事

〔唐六典少府監二十二〕織染署令一人正八品上

周官九職嬪婦化理絲帛、考工記理絲麻而成之、謂之婦功、漢少府屬官有東織西織、成帝河平元年省東織、更名西織曰織室、後漢有織室丞一人、此後無聞、北齊中尙方、領涇州雍州絲局丞、定州紬綾局丞、後周有司織下大夫一人、掌凡機材之工、隋煬帝置司織署令丞、後與司染署併爲織染署、周禮天官有染人、掌染絲帛、凡染春暴練、夏纁玄、冬官有設色之工五、謂畫繢鍾筐㡛也、韋昭辨釋名云、平準令主染、有常平之法、故準而酌之、兩漢並隷司農、晉平準令有監染吏六人、初隷司農、後屬少府、宋順帝名準、始改曰染署令、齊復爲平準令、梁陳爲平水令、北齊太府寺有司染署、長秋寺有染局丞、後周有染工上士一人、又有司色下大夫一人、隋初有司染署、隷太府寺、煬帝分屬少府、大業五年、合司織司染爲織染署、令二人、皇朝置一人、〇中略

織染署令、司供天子皇太子及群臣之冠冕、辨其制度而供其職務、丞爲之貳、〇下略

〔百寮訓要抄〕織部司織染署　にしきあや綾羅風情を織侍る職也、絲などをもそむる事を主どる、今の大宿直など申樣なる所也、

〔詠百寮和歌〕織部正

つやも色もこぼる計に錦綾たゝまくおしく織出しけり

補任

〔官職秘抄 上〕諸司正 織部 諸大夫、幷一道者任之、元六位官也、今五位職也、又往年必任受領、近代絶畢、任權正例、(時滋、諸兄、)同佑(○中略)織部 任人如上、或自令史轉之、同令史(○中略)織部 本司奏、多用文師勞、或又臨時内給、

〔職原抄 上〕織部司

正一人 五位諸大夫、諸道輩等任之、昔者當司正、依功勞任受領云々、 佑 六位侍任之 令史

〔百寮訓要抄〕織部司

正(織染令) 地下の五位是になる、官外記の輩是に任す、 佑(織染丞) 權佑 子細皆おなじ

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年正月壬子、外從五位下季忌寸元環爲織部正、

史生

〔日本後紀 十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、(○中略)織部司二員、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、(○中略)織部司四人、(權二人○中略)但(○中略)織部(○中略)史生待宣旨補任、

物受

〔政事要略 八十一糺彈雜事〕撿非違使移刑部省

禁送犯罪人事(貫屬年紀具前奏狀)

織部司物受滋生宿禰峯良

右撿案内、件峯良幷津守連梶取、酒井乙麿、下村主白子等犯狀、使局以去貞觀二年閏十月八日勘奏已畢、即其奏給辨官、下省亦畢、而有稱事不盡返上、遂依无失錯、亦更返下、仍禁送峯良身如件、(○中略)

貞觀四年二月廿三日 正六位下行左衞門少志讃岐朝臣時人

正六位上行右衞門大尉藤原朝臣好行

挑文師

〔續日本紀 五元明〕和銅四年閏六月丁巳、遣挑文師于諸國、始敎習織綿綾、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

停止幷減定諸司才長上事(○中略)

織手　使部　雜色　雜戶

織部司

挑文師四員　右減二二員一定二二員一〇中略

以前被二右大臣宣一偁、奉レ勅件司等才長上數、停止幷減定如レ件、永爲二恒例一、

大同三年十二月十五日

〔類聚符宣抄七〕挑文師

太政官符式部省　外從七位下大宅臣安直

右大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣忠平宣、件人宜下補二權挑文師若湯坐家恒死闕之替一者、省宜二承知、依レ宣行一レ之、符到奉行、

左大辨　　左少史

延喜十三年十一月十日

〔延喜式三十織部〕織手共造機工卅五人、各給二粮日黑米二升、間食四合、薄機織手五人、各日白米一升六合、絡絲女三人、各日米一升五合、幷夏冬時服申レ省請受、其今良男十人、女廿人衣粮、不レ經二本寮一便受二所司一、

凡定額作手、幷今良加物布綿代、以二讚岐國庸米一運二送於司家一、

凡內藏寮錦綾織手、勘籍廿人直二司家一、其考文送二彼寮一、

凡宮人三人、不レ給二考祿一、

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略織部司四人、

〔類聚國史百七職官〕天長八年二月壬辰、雜色一十人充二織部司一、以レ支二雜事一也、

〔延喜式十八式部〕凡織部司雜色十人、〇中略與レ考、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月己酉、停二河內國織二御服一絹戶、造餠戶一、

〔令集解四職員〕古記云、別記云、錦綾織百十戶、年料一人、錦一匹、綾一匹令レ織、但貴錦一匹令レ織、錦機卅

四枚、爲品部、取調免徭役、呉服部七戸、年料每戸小綾二匹令織、爲品部、取調免徭役、河內國廣絹織人等三百五十戸、機五十枚、一機七匹令織、取調免徭役、緋染七十戸、役日無限、染絁無定、爲品部、取調免徭役、藍染卅三戸、倭國廿九戸、近江國四戸、二戸出女三人役、餘戸每丁令採薪、爲品部免調役、以上釋無別織手等一二人在司上、多在國織進耳、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年三月壬子、停攝津國川邊郡揩戸十烟、豐島郡二烟爲平民、

〔延喜式 三十 織部〕凡雜機用度料、篦竹河竹各百株、每年山城國進、又篦六百株、大和國進、

凡不仕料物、幷定額人帶衞府者衣粮、充司家雜用、

〔拾芥抄 中末 宮城〕諸司厨町

織部一町 鷹司北、猪熊西、

古事類苑

官位部十六

令制官職十二

宮內省

宮內省ハ、ミヤノウチノツカサト稱シ、又字音ニテ、クナイシヤウト稱ス、宮中大小ノ事ヲ管スルモノニテ、官田園池、及ビ收穫藏氷、諸方別獻ノ珍味、諸王ノ名籍時服、宮中ノ神事儀具等ヲ掌ル、ナホ其所屬ノ官衙ヲ視テ、其梗概ヲ知ルコトヲ得ベシ、

本省ノ被管ハ極メテ廣クシテ、一職四寮十三司アリテ飮食ニ關シテハ大膳職、大炊寮、及內膳、造酒、主水、園池ノ四司アリ、醫藥ニハ典藥寮アリ、工事ニハ木工寮、及ビ鍛冶、土工、筥陶、內染ノ四司アリ、殿中ノ事ニハ主殿寮、及ビ主油、內掃部ノ二司アリ、諸王ノ事ニハ正親司アリ、使役ノ事ニハ官奴、采女ノ二司アリ、而シテ平城天皇ノ大同三年ニ、鍛冶司ヲ木工寮ニ併セ、官奴司ヲ主殿寮ニ併セ、筥陶司ヲ大膳職ニ併セ、內染、采女ノ二司ヲ中務省ノ縫殿寮ニ併セ、嵯峨天皇ノ弘仁三年ニ、采女司ヲ復置シ、弘仁十一年ニ、內掃部司ヲ大藏省ノ掃部司ト併セ、掃部寮ト號シテ本省ニ隷シ、宇多天皇ノ寛平八年ニ園池主油ノ二司ヲ內膳司ニ併セタリ、土工司ノ廢絶ノ如キ、其年紀詳ナラズ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕省　職員令云、○中略宮內省美夜乃宇知乃都加佐

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

宮內省(ミヤノウチノツカサ)

沿革

〔下學集上官位〕宮內卿司農尙書

〔職原抄上〕宮內省當唐工部

〔日本書紀二十九天武〕九年七月戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、則遣高市皇子而訊之、十一年三月甲午朔、命小紫三野王、及宮內官大夫等、遣于新城、令見其地形、仍將都矣、

朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、甲子、直大參縣犬養宿禰大伴、總誄宮內事、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等奉勅改易官號、○中略宮內省、催諸產業、廻聚供御、智水周流、生物相似、故改爲智部省、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年四月庚戌朔、從五位上巨勢朝臣淨成爲智部大輔、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂、執政奏改官名、宜復舊焉、

廳舍

〔拾芥抄中本百官〕宮內省宮城內、太政官東、大炊寮西、

〔大內裏圖考證二十六〕南都所傳一古圖、及神泉苑所傳圖、南都所傳圖、宮內省方四十丈、西距太政官、南距廳院各十丈、北距主水司、東距大炊寮各四丈、

〔延喜式二四時祭〕鎭魂祭○中略

右中寅日晡時、○註略五位已上、及諸司官人、參集宮內省、式部依例檢列、大臣若參議已上就西舍座、神祇官人已下神部已上、著青摺衣、○註略率御巫等、入就廳上座、御巫南面、伯以下使部以上東面南上、(中略)大臣宣、諸司令參入、卽稱唯、退出入參入、五位以上、就廳座、北面、六位以下、分就東西舍座、

〔延喜式三十一宮內〕凡卜供奉神事小齋人者、其日神祇官副祐各一人、率宮主卜部等、先就宮內廳座、

凡正月十六日、於省廳給男女饗、

〔延喜式三十八掃部〕十一月鎭魂祭日、於宮內省廳、設大臣已下歌女已上座、

十五日○正月勘御薪之日、設辨官幷三省輔已下座於宮內省廳上、又設式兵二省座於西細殿、並用中

床子卅脚、

〔儀式 五〕鎭魂祭儀

其日、所司預敷神座於宮內省廳事、次大臣以下座於西舍南、少西設辨大夫座、

〔江家次第 十一月〕鎭魂祭

上卿以下、入自宮內省南門、著曹廳、須先著西細殿、○中略而近代彼省無一屋、仍曹廳跡、立平張行之、

〔江家次第 正月〕御薪

宮內省正廳 近例立幄行之

〔左經記〕長元七年八月十九日丙子、可修造風損所々事、○中略

宮內省

廳屋七間 東四間、和泉國、同日改三河、次三間、伊賀國、同日改甲斐、

十一月十九日乙巳、著東宮鎭魂祭所宮內廳、

〔本朝世紀〕正曆四年十月五日己未、中納言源保光卿、參議平惟仲朝臣、參著廳聽政、但權大納言藤原伊周卿、參議同道綱卿、率辨史著大原野社行幸行事所宮內省後廳、○○始行雜事、

〔日本紀略 後一條 十三〕長和五年九月十五日丙辰、今日伊勢齋宮禊東河、入宮內省後廳、

〔北山抄 一 二月〕四日新年祭事

神祇官有穢時、於宮內省行之、上卿先著後廳北屋、○一本作廂供神物幷辨備畢、經廳東砌上著座、

〔北山抄 一 二月〕中丑日園韓神祭事 用春日祭後丑

上卿入自宮內省南門、著神院北屋座、

〔百練抄 六 崇德〕大治二年二月十四日、宮內省、主水司、齋院等燒亡、

〔中右記〕大治二年二月十四日甲戌、未時許、當西有燒亡所、申時火滅了後、陰陽頭家榮示送云、燒亡之

省神　省印　職員職掌

與火起、醫司小屋、燒陰陽寮、勘解由使廳、宮内省、并園韓神社、神祇官八神殿、郁芳門等了、

〔延喜式 九神名〕宮内省坐神三座 並名神大、月次、新嘗、

園神社　韓神社二座

〔古事談 五神社佛寺〕園韓神社者、本自坐大內跡、而遷都之時、造宮之使等、可移他所云々、于時託宣云、猶坐此處奉護帝室云々、仍坐宮内省內云々、

〔續日本紀 八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部、治部、○治部二字依古本補 民部、兵部、刑部、大藏、宮内、春宮印各一面、

〔令義解 一職員〕宮内省管職一、寮四、司十三、

卿一人、掌出納、謂被管諸司之出納也 諸國調雜物、舂米、官田、謂供御稻田分置畿內者、名爲官田也、及奏宣御食産、謂奏者、官田園池、當年所佃種色目、并收穫多少、及氷室氷之厚薄、皆申奏之也、宣者、若有勅語者、更傳宣告也、諸方口味、謂除調雜物外、諸方別獻珍味是也、事、大輔一人、少輔一人、大丞一人、少丞二人、大錄一人、少錄二人、史生十人、省掌二人、使部六十人、直丁四人、

〔令集解 五職員〕跡云、出納、謂在此省并攝官等內雜物等、此司副監物等行廻出納耳、

〔令義解 一官位〕親王三品四品八省卿　諸王諸臣正四位○下階　七省卿　正五位○下階　七省大輔　從五位○下階　七省少輔　正六位○下階　八省大丞　從六位○上階　八省少丞　正七位○上階　八省大錄　正八位○上階　八省少錄

〔拾芥抄 中本官位唐名〕宮內卿 工部尚書 司農卿 殿中監 小府監 光祿卿 禁省尚書　輔 工部侍郎 司農小卿 殿中小監 光祿侍郎 小府小監 光祿小卿　丞 工部郎中 祿丞 殿中丞 小府丞 司農郎中 光祿郎中 司農丞 工部員外郎 光　錄 工部主事 司農主簿 殿中主事 少府主簿

〔職官志 三〕宮内省 此准唐官六部、乃爲當工部、獨以其所管有木工寮、爲、然其實懸當殿中省、殿中省置卿丞等官、而掌乘輿服御之令者、且其所管六局、曰尚食、曰尚藥、曰尚衣、曰尚舍、曰尚乘、曰尚輦、今宮內之名、與殿中相似、而其所管亦同之、內膳司即尚食局、主殿寮即尚舍尚輦二局併也、而中務之所管、亦與之關、是以縫殿寮即尚衣局、尚藥司即尚藥局、職原鈔云、宮內之職、是似分中務者也、以此故也、

〔唐六典七工部〕工部尚書一人正三品

周之冬官卿也、漢五曹尚書、其三曰民曹、後漢以民曹主繕修工作城池園苑之事、自晉宋齊梁陳、營宗廟則權置起部尚書、事畢省之、後周依周官置大司空卿一人、隋開皇二年、始置工部尚書、皇朝因之、龍朔二年、改爲司平太常伯、咸亨元年、復爲工部尚書、光宅元年、改爲冬官尚書、神龍元年復故、

侍郎一人正四品下〇註略

工部尚書侍郎之職、掌天下百工屯田山澤之政令、其屬有四、一曰工部、二曰屯田、三曰虞部、四曰水部、尚書侍郎總其職務而奉行其制命、

〔唐六典十一殿中省〕殿中省監一人從三位

魏氏初置殿中監、品第七、晉宋因之、齊有內殿中監八人、外殿中監八人、梁初位不登七班者、別署〇署丞當作置、勳位〇隋志作藴位、通典作曹位、勳位殿中外監爲三品勳位、〇隋志作藴位、通典作曹位、內監爲三品勳位、陳因之、然其官甚微、後魏殿中監從五品下、北齊門下省屬官有殿中監四人、掌駕前奉引行事、東耕則進耒耜、隋改爲殿內局、監二人、品正第六下、大業三年、分門下省尚食尚藥御府殿內等局、分太僕寺車府驊騮等署、置殿內省、監正四品、少監從四品、丞從五品、各一人、掌諸供奉、又有奉車都尉十二人、掌進御輿馬、統尚食、尚藥、尚舍、尚衣、尚乘、尚輦等六局、皇朝因改曰殿中省、龍朔二年、又改爲中御府、監爲中御大監、咸亨元年復舊、〇中略

殿中監掌乘輿服御之政令、總尚食尚藥尚衣尚乘尚舍尚輦六局之官屬、〇註略備其禮物、而供其職事、少監爲之貳、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

增減官員事〇中略

宮內省

□□□□□少錄二人　今增少錄一人

望加置件員以濟劇務、

以前因時制宜者、經國之長策也、觀民口敎者、爲政之良規也、然則雖設官分職員數已定、而量宜隨便、捐益無妨、臣等商量廢置如件、謹以申聞、謹奏、

弘仁十二年八月廿九日

聞

〔職原抄上〕宮內省當唐工部

周禮冬官考工之職也、百工事、當省所掌也、本朝又如此、宮內大少務、又此省知之、其職似分中務、

卿一人相當正四位下、唐名工部尚書、殿中監、光祿少卿、司農卿○中略　大輔一人權大輔一人、相當正五位下、唐名工部侍郎　少輔一人權少輔一人、相當從五位下、唐名同員外郎歟○中略　丞大少、唐名工部侍中○中略　錄大少、唐名工部主事

〔令義解四考課〕堪供食產謂供御雜膳謂之食、官田及園池所生謂之產也、言預量所須、色別准擬、至於供用、皆能堪之也、催治諸部謂治、漆治也、部、所部也、宮內所管、多是供奉之司、其事尤重、故爲最名也、爲宮內之最、謂少輔以上、

〔百寮訓要抄〕宮內省工部　諸國の雜物、官田、御膳樣の事を主どる也、

〔詠百寮和歌〕宮內卿

隙もなく月々日々に備ぬるにへくだ物を職る人

〔延喜式三十宮內〕凡給諸王時服者、歲滿十二年、每年十二月京職錄名送省、省付正親司勘會虛實、訖卽申省、省錄申官、下符給之、

凡親王諸王名籍者、皆於正親司案記、其有品內親王、若有請事者、申省、省受申官、卽朝參及勅召者、申縫殿寮、又內侍知之、

凡無位諸王卒者、待京職移下符正親司、勘會申省、省卽申官、

凡應給諸司月料魚宍者、省司毎月臨勘廚庫見物多少及可盡之物、申官充用、勿致盡廠、臨時雜用准此、

凡諸司可返上之雜物、官符到後一月不進者、具錄色目申官、若省遺漏致怠者、交替之日、拘其解由、

〔延喜式二十二民部〕凡官田者、山城國廿町、(宮內省營八町、國營十二町、)大和國十六町、(省營九町、國營七町、)河內國十八町、(省營八町、國營十町、)和泉國二町、(國營)攝津國卅町、(省營十五町、國營十五町、)其營種料稻、町別一百五十束、(和泉國一百廿束)一所獲苗子五百束、(和泉國四百束)國別長官主當其事、

〔延喜式三十一宮內〕凡省營田卅町、(大和國九町、山城河內二國各八町、攝津國十五町、)獲稻町別五百束、割其苗子充營種料、

〔令義解三田〕凡官田應役丁之處、毎年宮內省、預准來年所種色目及町段多少、依式料功、申官支配、(謂色目者、稻白黑爲色也、稻名爲目也、依式料功者、式別式也、料量也、支配者、支度也、配當也、)其上役之日、國司仍准役月閑要、量事配遣、(謂以雜傜充使其事也、)其田司年別相替、(謂宮內省、差管內雜任、令掌其事、是爲田司也、)年終省挍量收穫多少、附考褒貶、

〔延喜式三十一宮內〕凡省營田稻、踰年之後、不任供御、皆悉爲糙、收納別倉、莫混正稅、

凡省營田收納帳、自官下省、卽令大炊寮支度年中供御稻糯粟等數申省、省卽申官、官下符民部省、省奉充、(中宮東宮亦同)

〔內裏式上〕(〇正月元日節會)大舍人叫門、闈司就版位奏云、氷様進牟止宮內省官姓名叫門故爾申、勅曰、令申與、闈司傳宣、省丞已下史生已上相分、與主水司官人已下共執氷様、又與太宰使同執腹赤御贄、省輔相扶入自同門、共安庭中退出、輔一人留就位奏曰、宮內省申久、主水司乃今年收氷合若干室、厚若干寸已下若干寸已上、益自去年若干室、減自去年若干室供奉禮留事、又太宰府乃進禮留腹赤乃御贄長若干尺進樂久乎申賜等申、(無勅答)訖退出、卽膳部水部等入自承秋門、取氷様腹赤御贄退出、

〔延喜式 三十一宮内〕凡藏氷之處、收氷多少、及氷厚薄、毎處具錄、元日群臣未喚之前、省輔已上將本司入奏、并進氷樣、其詞曰、宮内省申久、主水司能今年收留太氷合若干處、氷若干室、厚若干寸已下、若干寸已上、益自去年若干室、減自去年若干室供奉禮留事申給、又太宰府進禮留腹赤乃御贄一隻、長若干尺進樂久乎申給登申、

〔公事根源 正月〕元日節日　同日

諸司奏とは、七曜の御曆、氷樣、腹赤の奏などの事也、〇中略氷樣は宮内省より奉る、去年氷をおさめたる所々の樣を、今日節會のついでに奏聞するなり、厚さ薄さいか程の寸法に侍るなどこまかに奏して、其ためしとて、近比は石かわらのわれを奉るなり、

〔儀式 九〕正月十五日於宮内省進御薪儀

宮内省掌、率文武官史生就版、稱容止如前其一人申云、司々進御薪文進止申、丞命云、進度、史生共稱唯、傳取中分、其最後者二人總取、進置宮内錄傍、錄讀申云、司々乃進禮留御薪數札若干枚申賜止申、輔命云、縱、錄稱唯、丞命云、縱、史生共稱唯、訖式兵二省錄退出、

〔延喜式 三十一宮内〕凡毎年正月十五日、辨官及式部兵部會集於省、相共檢按諸司所進御薪、訖省丞錄各一人、率史生二人、就主殿寮檢按御薪數幷好惡、其行事諸司、給粥幷酒食、

〔内裏式 中〕五月五日觀馬射式

中務率內藥、宮内率典藥、舁盛菖蒲机、自埒東馳道進、末到埒東門八許丈〇丈一本作尺留候、闈司二人經右近東陣南頭、分立埒西門南北掖、大舍人一人、進埒東門南邊北面立叫門、闈司就版位奏云、菖蒲草此間謂漢女草進牟止中務省官姓名等以上謂輔叫門故留申、勅曰、令申、闈司傳宣、大舍人進共稱唯退出、兩省率寮司舁盛菖蒲机置庭中、二省輔各一人留机後、自餘皆退出、頃之中務輔就版奏曰中務省申久、內藥司乃供奉禮流五月乃五日乃菖蒲草進樂乎久申賜久止申、訖退出、次宮内輔奏曰、宮内省奏久、典藥寮乃

奉禮流、五月乃五日乃人給乃菖蒲草進樂乎久申賜久止申、並無勅答退出、

〔儀式十〕進御藥儀

晦日(○十二月)卯一剋、中務宮內二省、率內藥典藥寮司、持御藥幷人給藥机、其候延政門外、大舍人叫門如常、闈司就版奏云、御藥進止中務官姓名、(謂輔以上、宮內亦同)宮內省官姓名等叫門故留申、勅云、令奏、闈司稱唯、傳宣云、姓名等令奏、中務卿輔丞、率內藥正已下藥生已上、舁御藥案、(案別六人)宮內卿輔丞、率典藥寮頭已下醫生已上、舁人給藥案、入安庭中版後、依次退出、兩省可奏可者各一人、(謂輔已上)便留立案後、中務先進就版、奏曰、中務省申久、內藥司乃供奉禮留元日乃御藥、又臘御藥進良乎久申賜久止申、訖復本處、次宮內省進就版、奏曰、宮內省申久、典藥寮乃仕奉禮留人給白散、又殖藥樣進良乎久申賜久登申、(並無勅答)訖退出、次寮司更入舁案退却、卽付尙藥、

〔延喜式三十一(宮內)〕凡卜供奉神事小齋人者、其日神祇官副祐各一人、率宮主卜部等、先就宮內廳座、次中務丞錄、幷宮內丞錄各一人、率史生等分就西廂舍座、時中務引女官等、執其名簿移送宮內、次文武官各引官人已下雜色已上等、亦送名簿、訖宮內錄、申諸司名簿進了之狀於神祇官、其詞曰、宮內省司々能兆人能名著進了登申、(○下略)

〔儀式五〕二季晦日御贖儀(六月十二月)

其日卜部各著明衣、其一人執御麻、二人執荒世、二人執和世、二人執壺、宮主史生神部等、左右分頭前行、中臣官人之次、御麻次之、東西文部次之、(各執橫刀)荒世次之、和世次之、(並著木綿鬘)宮內輔(若無輔丞替之)陳列御麻等物、候延政門外、大舍人叫門、闈司問阿誰、大舍人答云、宮內省輔姓名御麻奉登御門候、闈司傳奏如常、輔入就版、奏云、宮內省申久、御麻進止神祇官姓名御門候止申、退出、(○中略)中臣女(謂氏女堪事者奏定)於殿上轉取供奉、訖授中臣、還本處、卽授卜部一人、令向祓所、輔更入奏曰、宮內省申久、御贖物進止神祇官姓名、大和河內乃忌部、四國乃卜部等率天候止申退出、

補任

〔延喜式宮內三十〕一凡新嘗祭所供官田稻及粟等、每年十月二日、神祇祐史各一人率卜部、省丞錄各一人率史生、共向大炊寮、卜定應進稻粟國郡、卜了省丞以奏狀進內侍、內侍奏了下官、官卽仰下、

凡醸新嘗黑白二酒者、每年九月二日、省與神祇官共赴造酒司、卜應進酒稻國郡、訖省丞以奏狀進內侍、內侍奏了下官、官卽仰下、

〔延喜式宮內三十〕一凡神今食新嘗祭夜、丞錄各一人、與神祇官共侍內裏、檢按御膳進退、

凡四月中酉日鴨祭、丞一人、錄一人、史生一人、省掌一人、臨祭所檢按饌物、

凡春秋釋奠、丞錄史生省掌各一人、向大學寮檢按饌具、

凡正月最勝王經齋會、丞錄各一人、率史生四人、日別臨檢供養、

凡七月十四日早朝、丞錄各一人、率史生二人向大膳職、檢按七箇寺盂蘭盆供物、

凡諸節會給饌者、當日平旦、陳置饌具於便處幄下、大膳官人已下膳部已上就幄、丞錄率史生等檢按饌具、群官未入之前、大膳職造酒司預陳、

〔令義解考課四〕凡家令、(謂書吏以上總名、卽文學亦本主考、其扶以上及文學、得諸官最、從得判官最、書吏得主典最也、)每年本主准諸國考法立考、(嬪以上及內親王家事、隷宮內省、謂家事者、考事、卽宮內省承主旨、定其考第也、)考訖申省案記、(准考應解者、同諸司法、)

〔令集解職員五〕宮內省

穴云、內親王嬪等家事、送宮內省、日、注送上日行事、或定等第、兩說可、式定、考課令云、嬪以上內親王家事、隷宮內省、義云、家事者考事、卽宮內省承主旨定其考第、又女王命婦等家事、古說送正親司、未審所歸、亦可定也、

〔延喜式宮內三十〕一凡被管諸司考選文、幷內親王家令已下考文、六年一除、

〔延喜式宮內三十〕一凡諸國女丁者、省檢按分配諸司、其粮每月准仕丁、移民部省、(踐祚大嘗之時、抽出充造酒司、令舂酒米、)

〔官職秘抄上〕八省卿　刑部(○中略)　宮內　已上爲參議散三位四位官、宮內卿或爲大中納言兼官、

同輔大少有權、中務○中略宮內　已上殿上地下公達多任之、但○中略殿上地下諸大夫又任之、○中略
同丞大少○中略　治部○中略宮內　元藏人、陪從、良家子等任之、近代諸家侍任之、但可撰人也、○中略
同錄大少　中務○中略宮內　已上本省奏、諸道擧、問者生等任之、或卿申請也、或自諸司二分遷任
之、

〔職原抄上〕宮內省
卿一人　四位已上任之、雖公卿又任之、　大輔一人權大輔一人　少輔一人權少輔一人　名家殿
上人、及諸大夫五位任之、　丞大少　六位侍任之　錄大少

〔百寮訓要抄〕宮內省
卿工部尚書　三四位の名家儒家是に任ず、　大輔工部侍郎　子細上に見ゆ、大藏宮內などは、い
たく人の執し侍ぬにや、　權大輔　少輔　權少輔　皆おなじ

〔光臺一覽二〕宮內卿一人　唐名工部尚書、三位以上任之、　四輔諸家任之　丞錄地下

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、正四位下犬上王爲宮內卿、　二年十一月甲寅、以從三位長屋王
爲宮內卿、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月壬寅、從四位上阿部朝臣廣庭爲宮內卿、

〔續日本紀八元正〕養老四年十月戊子、從五位下高橋朝臣安麻呂爲宮內少輔、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年五月癸丑、以治部卿三品阿保親王爲宮內卿、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年六月甲寅、左衞門督從四位上百濟王勝義爲兼宮內卿、相模守如故、

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月廿五日壬午、正四位下行下野守豐江王爲宮內卿、散位從五位下清
原眞人道雄爲少輔、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年二月十日癸卯、散位正四位下源朝臣寛爲宮內卿、

史生

〔續日本紀 六元明〕和銅六年十二月己酉、始加宮內史生十員、

〔類聚國史 百七職官〕貞觀十四年八月八日丙午、勅省宮內省史生二人、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、○中略宮內省十八人、

省掌

〔延喜式 十八式部〕凡內外諸司官掌省掌、○中略各二人、○中略自餘者判補之、

〔類聚國史 百七職官〕大同元年十月壬申、中務○中略宮內等六省省掌、准式部兵部二省聽把笏、

使部

〔延喜式 十八式部〕凡諸司使部者、○中略宮內省廿人、

雜載

〔延喜式 三十一宮內〕凡供奉雜物、送大膳大炊造酒等司者、皆駄擔上竪小緋幡、以爲標幟、其幡一給之後、隨破請替、以內侍印印之、

大膳職　醬院併入

大膳職ハ、オホカシハデノツカサト稱シ、又字音ニテ、ダイゼンシキト稱ス、內膳司ノ造レル御膳ヲ監シ、官人ニ賜フ所ノ饗膳ヲ造リ、神事佛事等ニ供スル物ヲ調スル事等ヲ掌ル、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕職　職員令云、○中略大膳職、於保加之波天乃豆加佐

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞

大膳職 オホカシハデノツカサ

〔下學集 上官位〕大膳ゼン大夫 光祿卿

〔職原抄 上〕大膳職 唐名大官署　又光祿

沿革

〔日本書紀 二十九天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、甲子、直廣肆紀朝臣眞人、誄膳職事、

〔令集解 五職員〕宮陶司 大同三年正月廿日詔、(中略)宮陶司併大膳職、主者施行、

廳舍

〔大内裏圖考證二十六〕大膳職及醬院考定圖

按大膳職、東無道者、後世省略側也、故據宮城古圖、及古本拾芥抄圖、應永千分一圖、爲東西三十五丈、南北四十丈、於醬院占地無定論、如上文、雖然神泉苑所傳圖似有可據、今暫從之、

〔兵範記〕仁安三年九月十九日丁丑、參大膳職裝束司行事所、今日從官東廳移彼廳、可始行之故也、寢殿母屋西、鋪設裝束如常、下官座在母屋東壁下、昇自南階著座、左少史大江廣盛在北座、史生盛康以下、官掌爲宗、候西横座、　廿七日乙酉、參裝束司行事所、(大膳職寢殿)

〔左經記〕長元八年正月十四日己亥、治部省廳屋、去年大風顚倒、仍大元御修法可行之處、有議於大膳職小屋○(小屋一本作北屋)修之、(廳屋因顚倒未造立之故也)件屋短狹、佛像高廣、仍上下各卷之奉懸云々、

〔山槐記〕元曆元年八月廿二日戊寅、午刻許、頭左中辨光雅朝臣(持笏、衛府一人在共)來、予著直衣(冠)相逢、○中略暫之以談雜事、○中略又曰、小忌院事、悠紀可用大膳職西院、主基可用同東院者、○下略

職神

〔日本紀略五冷泉〕安和二年七月廿二日丁卯、今夜大風暴雨、　廿三日戊辰、風猶不止、○中略大膳雜舍等悉以顚倒、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁四年七月廿二日辛未、夜大風吹、壞内裏所々、○中略大膳職倉一宇、

〔左經記〕長元七年八月九日丙寅、入夜東風大吹、所々舍屋幷中門等、多以破損、　十日丁卯、大膳掃部等舍屋、皆以顚倒云々、

〔中右記〕承德二年三月廿八日戌時許、皇居近邊有燒亡、○中略從中御門南堀川西小屋中出來、○中略餘炎渡大宮大路、付大膳職倉三字燒了、

〔百錬抄八高倉〕治承元年四月廿八日、亥刻火起、自樋口富小路、○中略大膳職勸學院等、拂地燒亡、

〔延喜式九神名〕大膳職坐神三座(並小)

御食津神社　火雷神社　高倍神社

職印
職員
職掌

○職神ノ事ハ、神祇部官衙神篇ニ詳ナリ、

〔日本後紀 二十二 嵯峨〕弘仁三年五月丁卯、始賜大膳職印、

〔令義解 一 職員〕大膳職

大夫一人、掌諸國調雜物、及造庶膳羞、醢、葅、(謂具食曰膳、熟食曰羞、肉醬曰醢、醋菜曰葅也、)醬、豉、未醬、肴、菓、雜餠、食料、率膳部以供其事、亮一人、大進一人、少進一人、大屬一人、少屬一人、主醬二人、掌造雜醬豉未醬等、主菓餠二人、掌菓子、造雜餠等、膳部一百六十人、掌造庶食、使部卅人、直丁二人、駈使丁八十人、雜供戸、(謂鵜飼江人網引等之類也)

〔令集解 五 職員〕大膳職(中略)跡云、此司自不造御食、但檢校內膳所造、故亮以上爲最也、私考課令云、監造御膳、淨戒無誤、爲主膳之最、(謂亮以上及典膳)朱云、造庶膳羞、謂凡臨時節日等、給諸司官人食等、此司掌造也、(中略)朱云、食料、謂菜也、不在飯者、未知、而朝夕常給何、伴跡云、諸司菜料、此名食料、然則以此食料作膳羞也、(此師說文)穴云、食料、此官司食料也、

○按ズルニ、令集解ノ此文及ビ職制律ノ外膳ノ註ニ、謂供百官トアル文ニ據レバ、大膳職ハ百官ニ賜フ所ノ常食ヲモ調理セシガ如シ、

〔令集解 十九 考課〕釋云、大內二膳、同得此最、比其職掌不可相關、但以供御雜珍、大膳所掌供御事重、因爲最名也、

〔律疏 職制〕凡監當官司及典膳、誤將雜藥至御膳所者、徒三年、(謂御厨造膳、從造至進、皆有監當官司、但是雜藥、誤將至御膳所者、即得此坐、未至膳所、從不應爲重、雜藥、謂合和爲藥、所謂監當之人、應到之處、堪服餌者、若有毒性、雖不合和、亦爲雜藥、)

凡外膳(謂供百官)犯食禁者、膳部笞五十、(謂百官常食以上、皆官厨所營、名爲外膳、故註云、謂供百官、犯食禁者、食禁已上解訖、若有犯者、所由膳部、笞五十、)穢惡之物在食飲中、及簡擇不淨者笞卅、(穢惡之物、謂不淨之物在食飲中、及簡擇有不淨、其所由者得笞三十、)誤者各減二等、(謂誤犯食禁笞卅、誤簡不淨笞十、)

〔令義解 一 官位〕正五位 階○上 大膳大夫(オホカシハデノ)　從五位 階○下 大膳亮　從六位 階○下 大膳大進　正七位 階○上 大膳少進　正八位 階○下 大膳大屬　從八位 階○上 大膳少屬

〔二中歷 七 官名〕大膳　大夫(膳部郎中 大官令 光祿卿 理署令)　亮(監膳郎中 光祿少卿 膳部侍郎 光祿侍郎)　進(膳部員外郎 大官丞)　屬(膳部郎中)

大膳部主事(大官史)

〔拾芥抄〕中本官位唐名大膳大夫(大官令 光祿卿)　膳部郎中(珍羞監膳)　亮(膳部員外郎 光祿小卿 膳部侍郎 光祿侍郎)　進(大官丞 郎中 膳部 光祿丞)
屬(大官史 膳部主事 光祿錄事)

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月二日丁卯、遠州(北條時政、)中略、渡御于大膳大夫廣元朝臣亭、主奉相逢之、遠州被仰合云、○中略、大官令(廣元)答申云、○下略

〔唐六典四禮部〕膳部郎中一人從五品上
後魏職品令、太和中改定百官、都官尙書管左士郎、北齊河淸令改左士郎爲膳部、隋亦號膳部郎、皇朝爲郎中、龍朔二年、爲司膳大夫、咸亨元年復故、○中略
膳部郎中、員外郎、掌邦之牲豆酒膳、辨其品數、

〔唐六典十五光祿寺〕光祿寺卿一人從三品
漢書百官表云、郎中令、秦官、武帝太初元年、更名光祿勳、掌宮殿門戶、秩中二千石、今雖取其名、職務則別、後漢兼掌郊祀三獻、獻帝末、又改爲郎中令、魏文帝黃初元年、復爲光祿勳、晉光祿勳有署丞功曹主簿五官等員、東晉哀帝興寧二年、省幷司徒、孝武帝寧康元年復置、魏晉已來、無三署郎、光祿勳不復居禁中、宮殿門戶猶屬焉、宋齊因之、梁置十二卿、除勳字、光祿卿爲冬卿、班第十一、陳因梁、後魏光祿卿、從第一品下、太和二十二年、重次職令、九卿並第三品、北齊光祿寺置卿、掌諸膳食帳幕器物肴藏、隋光祿寺、置卿少卿丞主簿錄事等員、統太官肴藏良醞等署令丞、開皇三年、廢光祿入司農、十二年復置、煬帝卽位、降卿爲從三品、皇朝因之、龍朔二年、改爲司宰寺正卿、咸亨中復舊、光宅元年、改爲司膳寺卿、神龍元年復舊、○中略
光祿卿之職、掌邦國酒醴膳羞之事、總太官珍羞良醞掌醢四署之官屬、修其儲備、謹其出納、少卿爲之貳、

太官署令二人從七品下

周禮有庖人外饔中士、蓋其任也、秦漢少府屬官有〇有原脫、據漢書補、太官湯官令丞、太官主膳食、湯官主餅餌、漢官儀太官令秩一千石、桓帝延熹元年使太官令得補二千石、置四丞、魏氏因之、晉光祿勳屬官有太官令、宋侍中屬官有太官令一人、齊因之、梁門下省領太官、陳因之、後魏北齊分太官令爲尚食中尚食、尚食門下省領之、中尚食集書省領之、太官光祿卿領之、尚食中尚食掌知御膳、太官掌知百官之饌、後周有典庖中士一人、隋光祿寺統太官署令丞、皇朝置令二人、〇中略

太官令、掌供膳之事、丞爲之貳、

〔唐六典十五光祿寺〕珍羞署令一人正八品下

周禮有籩人奄一人、女籩十人、奚二十人、掌四籩之實、則朝事之籩、饋食之籩、加籩羞籩之實也、後漢少府屬官有甘丞、主膳供、果丞主果、晉太官令有餳官史二人、又有果官二人、北齊光祿寺肴藏令、後周有肴藏中士一人下士一人、隋光祿有肴藏令、皇朝因之、長安中、改爲珍羞署、神龍初、復爲肴藏署、開元初、又改焉、領餳匠五人、〇中略

珍羞令、掌供庶羞之事、丞爲之貳、以實籩豆、陸產之品、曰榛栗脯修、水物之類、曰魚鹽菱芡、辨其名數、會其出入、以供祭祀朝會賓客之禮、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年五月壬戌、以從五位下三島眞人島麻呂爲大膳員外亮、

〔令集解五職員〕大膳職大同三年七月十六日、官奏云、加置官員事、今加少進一員、少屬一員、右件依今年正月廿日詔書、省宮陶司、併於件職、又主醬主菓餅等、雖謂從停廢、其政復歸職、然則務繁人少、更加件員、以前雖官職之員、令條立限、而臨時取宜、政道攸尚、伏乞依件廢置、各理其務、臣等商量所定、具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、〇又見享祿本類聚三代格、係七月二十六日恐誤、日本後紀係八月朔、蓋擧發勅之日也、

〔職原抄上〕大膳職

大夫一人權大夫一人、唐名大官令、相當正五位下、元正五位上、弘仁改從四位下云々、〇中略

亮權亮　相當從五位下、唐名光祿侍郎、〇中略

進大少　唐名

大官丞〇中略　屬大少　相當正八位下相當從八位上　唐名大官史

〔百寮訓要抄〕大膳職大官署　諸國の雜物、御膳もろもろの食物をつかさどる、今も朝廷の禮にたまふ饗膳をば、皆大膳職より沙汰する也、玄、ゝびしほづけ、くさびら菓などをも、皆此省にてつくるべし、

〔詠百寮和歌〕大膳大夫

諸人のまつりごとにも隨へば折びつ物を調ぞたぶ

〔延喜式三十二大膳〕新嘗會

輿籠二脚、置簀二枚、供神料

小齋給食總三百卌四人、五位已上廿人、六位已下二百五十五人、命婦十人、女孺、采女卌四人、御巫五人、五位已上一人、醬酢鹽各一合、東鰒七兩、堅魚一兩、烏賊十二兩、熬海鼠腊各五兩、鮨八兩、海藻十二兩、漬蒜房蒜英各二合、漬菜一合、韮擣二合、六位已下一人、醬五勺、鹽五勺、東鰒七兩、熬海鼠腊各五兩、海藻四兩、鮨六兩、韮擣五勺、漬菜一合、

右依前件、其男辰日旦、女卯日夕、辰日旦給之、〇中略

宴會雜給

親王以下三位已上幷四位參議〇中略

右新嘗會宴食料依前件、其雜器、親王已下三位已上朱漆、四位已下五位已上烏漆、幷土器、

〇按ズルニ、此他園韓神、平野、賀茂、春日、大原野、松尾等ノ諸祭ノ雜給料アレド今略ス、

〔延喜式三十三大膳〕凡神事幷供御料雜物者、進屬各一人勾當、若有怠者科責、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年七月庚午、始令大膳備盂蘭盆供養、

〔延喜式三十三大膳〕東寺中台五佛、左方五菩薩、右方五忿怒料、生道鹽日別五合七勺、海藻六兩、滑海藻十二兩、末醬四合五勺、醬一合五勺、

右每年十二月以前、計來年日數、申官行之、

聖神寺季料常住寺准此

佛聖二座別、日菜料、糯米一升、米小麥各七合、大豆小豆胡麻子各五合、醬二合六勺、滓醬味醬酢各一合五勺、胡麻油二合、鹽三合六勺、海藻三兩、滑海藻二兩、芥子四勺、

右季別隨月大小請受、送入寺家、

○按ズルニ、此他正月最勝王經齋會供養料、正月修眞言法料、大安寺讀大般若經齋會供養料、嘉祥寺春地藏悔過料、七寺盂蘭盆供養料等アレド今略ス、

〔延喜式三十二大膳〕凡釋奠祭始、自歲首差充執當官一人、在前儲備享物、官人名申官、官即下知大學寮、若有奠祭不法之事、隨即科責、

〔延喜式三十二大膳〕釋奠祭料

石鹽十顆、乾魚二升、鹿脯卅斤、鹿醢一升、魚醢一升、〇中略

凡六衞府輪轉所進、釋奠祭醢料兎一頭、先祭三月送職、潔淸乾暴造醢、至祭日供之、其貢進之次、以左近衞府爲一番、依次貢進、終而更始、

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

大膳職、設次侍從以上饌、

〔儀式七〕正月十六日踏歌儀

大膳職、盛賜群臣饌、

〔延喜式三十三大膳〕親王以下月料

無品親王內親王

醬一斗二升、日四合　未醬六升、日二合　鹽一斗五升、日五合　東鰒九斤六兩、日五兩　堅魚七斤八兩、日四兩　鮭十五隻、

日二分之一 腊十五斤、日八兩、鮨十五斤、日八兩、堅魚煎汁紫菜各一斤十四兩、日一兩、海藻七斤八兩、日四兩、○下略

〔朝野群載六太政官〕官中政申詞

百度文二枚

宮內省申、久、大膳職乃申、官物收下司々乃人等乃、此乃月乃百依乃分乃魚六斤、鹽二斗、給止申。

〔官職秘抄上〕諸職大夫 大膳 往年諸道博士、并歷外記史輩、多任之、中古以降、以殿上四位任之、近代及地下五位、尤可被撰人也、二度任例、○安倍利行 同權大夫 大膳 可然四位任之、近代大業并諸道者任之、○中略 同亮 權亮 大膳 ○中略 殊有清撰、五位例、大膳高世、民(民一本作氏)道、秀行、○中略 同進 大少 大膳 ○中略 重代侍任之、多藏人所并齋宮給也、諸道得業生任例、大膳原順清 同擧任例、大膳清中原 ○中略 醫道擧任例、大膳河內正序 五位進例、大膳廣遠 ○中略

同屬 大少 大膳 ○中略 本職請、臨時內給、所々擧、諸道擧任之、

●〔職原抄上〕大膳職

大夫一人 殿上人四位五位、地下諸大夫共任之、華族殿上人、强不任之、 亮 權亮 諸大夫侍共任之、諸司助之中、近代頗爲輕、而諸司助、多是六位相當也、當職亮、相當五位也、近代爲輕、不叶其理、 進 大少 六位侍任之 屬 大少

〔百寮訓要抄〕大膳職

大夫 大官令 四位五位是に任ず、是も諸大夫のなり侍る官也、四職の大夫と申は、大膳、左右京、修理也、地下の諸大夫などの殊執し侍る也、 權大夫 地下四位五位是に任ず 亮 膳部侍郎 五位六位これに任ず 權亮 六位可任也

〔光臺一覽二〕大膳大夫 ○中略 五位四位通任也、公家官なり、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、從五位下多治比眞人犬養爲大膳亮、

〔續日本紀 淳仁 二十二〕天平寶字三年十一月丁卯、從四位下御使王爲大膳大夫、
〔續日本後紀 仁明 八〕承和六年二月庚午、從五位下豐前王〈○豐前王、原作豐前守、今據諸本改、〉爲大膳大夫、
〔續日本後紀 仁明 十〕承和八年十二月甲戌、外從五位下與世朝臣高世爲大膳亮、
〔三代實錄 淸和 一〕天和二年十一月廿五日壬午、從五位下在原〈○在原、原作藤原、據文德實錄改、〉朝臣守平爲大膳大夫、
〔玉海〕安元二年正月廿八日癸酉、此日春除目初日也、〈○中略〉卅日己亥、此日入眼也、
大膳少進正六位上中原朝臣榮重〈○藏人所略〉
抑中氏大膳、未曾有云々、
〔高代寺日記〕永祿三年正月廿七日、御卽位〈○正親町〉ノ禮行ハル、毛利〈○元就〉調進スル故、大膳大夫ニ任ジ、御杖ヲ賜フ、
〔明和新增〕京羽二重〔一〕外記方
大膳職　正六位下德岡雅樂少允小野久弘　同　從六位下德岡大膳大進小野久視
〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕〈○中略〉德岡　大膳職大進小野久古
〔慶應元年〕都仁志喜〔二下〕外記方
大膳職　正六位下德岡大膳大進小野久遠

史生

〔續日本紀 元明 六〕和銅六年六月癸丑、始置大膳職史生四員、
〔日本後紀 平城 十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〈○中略〉加左右辨官各四員、〈○中略〉大膳職四員、
〔延喜式 式部 十八〕凡諸司史生者、〈○中略〉大膳職八人、
〔慶應元年〕都仁志喜〔二下〕外記方
大膳職史生　正七位下神代上野大掾藤名臣

職掌

〔類聚國史 百七 職官〕承和二年六月丁丑、大膳職職掌、准之諸職加置二員、

主醤 主菓餅

〔享祿本類聚三代格 四〕詔

觀時改制、論代立規、往古相沿、來今莫革、故虞夏分職、損益非同、求之變通、何常準之有也、思欲省司合吏、少牧多羊、致人務於淸閑、期官僚於簡要、○中略 主醤主菓餅及刑部解部、宜從省廢、主者施行、

大同三年正月廿日

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年二月癸巳、主菓餅從七位下宍人朝臣宮人假淄入色、改正還本、特免其罪復本職、

膳部

〔延喜式 三十一 宮内〕供奉踐祚大嘗小齋

大膳職八十四人 官人二人、史生二人、膳部八十人、

〔延喜式 三十三 大膳〕請節差權膳部、正月三節并大嘗會卅人、餘節各卅人並給粮、一人日米一升二合、鹽一勺二撮、大嘗會五日、餘節三日、

網曳長 江長

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

網曳長一人　江長一人　已上元隷大膳職

右被大納言從三位神王宣偁、件長等、宜改隷內膳司、

延暦十七年六月廿五日

使部

〔延喜式 十八 式部〕凡諸司使部者、○中略 大膳職十五人、

仕丁

〔東大寺正倉院文書 三〕大膳職解　申請仕丁公粮事

米肆拾斛陸斗 立丁人別月五斗八升　鹽肆斗陸合 立丁人別月五合八勺　布漆拾肆段 斯丁人別月一段

已上目錄

一米廿三斛二斗　鹽二斗三升二合 已上甲可宮廳立丁廿人料給

一米十七斛四斗　鹽一斗七升四合（已上久留宮應給立丁卅人料）

右職家仕丁百六十四人（立丁八十二人、斷丁八十二人）之中、散廿人（立丁十二人、斷丁八人）先申逃亡六人（立丁四人、斷丁二人）今申逃亡九人（立丁五人、斷丁四人）未充五人（立丁三人、斷丁二人）見定百卌四人（立丁七十人、斷丁七十四人）來五月廿九箇日料、所請如件、以解、

天平十七年四月十七日　從七位下行少屬贊土師連佐美万里

從六位下行少進勳十二等上村主稻敷

大膳職率分勾當

〔類聚符宣抄七〕大膳權少屬上藤枝

左中辨藤原朝臣文範傳宣、左大臣宣、件人宜爲彼職率分勾當者、

康保二年二月廿三日　左大史海薰仲奉

調庸進物勾當

〔類聚符宣抄七〕右少辨菅原朝臣輔正傳宣、大納言源朝臣兼明宣、奉勅、依大膳職去正月廿七日奏狀、以少屬秦有時、宜爲諸國進納彼職調庸交易雜物年料勾當、大夫源朝臣治、相加檢察、令辨行其合期見上之事者、

安和二年二月廿九日　右少史大春日良辰奉

〔類聚符宣抄七〕右大辨平朝臣惟仲傳宣、權中納言源朝臣伊陟宣、奉勅、依大膳大屬川原兼之去年十二月廿八日奏狀、准有時例、以件兼之、宜爲諸國進納彼職調庸交易雜物年料勾當、大夫紀朝臣時文、相加檢臨、令辨行其合期見上之事者、

正曆三年二月三日　左大史多米朝臣國平奉

〔類聚符宣抄七〕右大辨源朝臣扶義傳宣、右大臣宣、奉勅、大膳少屬大友忠節、宜永爲職納諸國調庸交易雜物之勾當、大夫紀朝臣時文共令辨行之者、

長德二年六月廿五日　右大史物部邦忠奉

造器手

〔延喜式三十三大膳〕造器二人（一人木器、一人土器）、月別所造折櫃卅合、平片坏八百口、其粮料黑米日二升、鹽二勺、

筑摩御厨長

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

筑摩御厨長一人

右檢案內、件長元隷大膳職、今被右大臣宣偁、改隷內膳司、

延暦十九年五月十五日

雜戸

〔令集解五職員〕大膳職　雜供戸（中略）釋云、別記云、鵜飼卅七戸、江人八十七戸、網引百五十戸、右三色人等、經年每丁役、爲品部、免調雜徭、未醬廿戸、一番役十丁、爲品部、免雜徭、每年字〇恐每年二字衍誤以下古記無別、

〔續日本紀八元正〕養老五年七月庚午、詔曰、〇中略宜其放鷹司鷹狗、大膳職鸕鷀、諸國鷄猪、悉放本處、令遂其生、從今而後、如有應須、先奏其狀待勅、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月己酉、停河內國織御服絹戸、造餅戸、

用途

〔延喜式三十三大膳〕年料雜器

薄絁篩八口、（別二尺）調布水篩四口、（別四尺）襷十二條、（別四尺）褌五十二條、（別六尺）頭巾六條、（別二尺）衫六領、（別二丈四尺、二領別一丈四尺、）拭臼巾七條、（別四尺）手巾五條、（別二尺）絲二兩、（縫襷褌等料）

右造菓餅醬味醬、及料理魚宍等料

輿籠八十脚、匏六十柄、杓卅柄、食薦四百枚、箕廿枚、苫十枚、中取案卅八脚、（職廿七脚、醬院三脚、菓子所四脚、百度所侍從所各二脚、）切案卅八脚、（職卅脚、百度侍從所各四脚、）大槽十五隻、（職七隻、醬院菓子百度侍從各二隻、）小槽十五隻、（職七隻、醬二隻、菓子三隻、百度二隻、侍從一隻、）木臼八口、（職三口、醬菓子各二口、侍從一口、）杵十六枚、（職五枚、醬三枚、菓子三枚、大厨三枚、侍從二枚、）槽二口、陶𤭖筥盤十二口、壺十二口、由加六口、水𤭯三口、瓫十口、叩瓫六口、洗盤十四口、𤭖坏廿口、砥二顆、

右職家料

折櫃十二合、陶叩瓫四口、水椀十二口、（加盤）坏八十口、柏十五把、（日料）

右百度料

折櫃卅合、陶由加二口、杓四柄、陶片盤百八口、壷坏九十口、坏百八十口、洗盤叩瓮各四口、醬酢瓼各四口、砥一顆、置簀二枚、盛案一脚、絁篩二口、(別一尺)布襷褌各五條、明櫃二合、(納筋幷作柏等料)

右侍從所料

蠡筥一百五十合、(各長一尺二寸、廣一尺一寸、)諸國所進、

右年中供御、幷神事料依前件、

〔延喜式三十三大膳〕年料

索餅料小麥卅石、(御井中宮料、各十五斛、)粉米九斛、(同料各四斛五斗)紀伊鹽二斛七斗、絹幷薄絁篩各卅二口、(別四尺)曝麥調布單二條、(別三尺)承塵帳四條、(別二丈一尺三年一請)裹麵布十六條、(別五尺)水瑿杷布四條、(別五尺)席、折薦各六枚、韓櫃四合、明櫃、折櫃、蠡筥、壺各四合、缶、洗盤各四口、瓮、堝各十六口、水麻笥八口、匏十六柄、槽二隻、箕四枚、臼一腰、杵二枚、別脚案四脚、中取案四脚、刀子四枚、籮四口、乾索餅籠十六口、(長三尺廣二尺)鍬二口、竹一百五十株、襷十條、(別五尺)褌十條、(別六尺)頭巾卅條、(別三尺)薪日卅斤、(仕丁所採)

右從十一月一日迄來年十月卅日供御料、女孺率女丁、向內膳司與司料理、日別供之、但壷內膳儲備、

手束索餅料小麥十七斛七斗、(御井中宮、各八石八斗五升、)粉米五石三斗一升、紀伊鹽八斗九升、醬味醬各一斛四斗二升六合、酢七斗一升二合、薪日別卅斤、(請主計寮)

右起三月一日盡八月卅日供御料、其雜器通用上條、

同手束索餅料小麥十七斛七斗、(御井中宮料、日供五升、所餘臨時用之、)粉米五斛一升、紀伊鹽八斗八升五合、醬一斛五升一合、末醬一斛五斗三升一合、酢五斗四升、薪卅斤、(請直)

右起九月一日盡來年二月卅日供御料、如前、

雜載

糖十斛八斗九升四合六勺、御井中宮、各一斛六斗八升三合、東宮一斛六斗七升八合八勺、雜給五石八斗四升九合八勺、絹篩九口、別三尺、絞糖布袋十二口、別四尺、覆瓮綿八兩二分、調布二丈、覆甕二十口料、口別二尺、紙五十八張、燈油三升六合、明櫃十五合、折櫃六合、由加六口、瓮卅口、箕六枚、韓櫃三合、中取六脚、薪一萬四百卅斤、調布衫九領、別一丈七尺、褠褌各九條、別四尺、手巾四條、別五尺、

糯糒四斛六斗八升、御井中宮、各一斛六斗二升、東宮一石四斗四升、粟糯一斛二斗八升六合二勺八撮、御井中宮、各四斗四升四合、東宮三斗九升八合二勺八撮、明櫃十二合、箕二枚、長席四枚、長薦二枚、雜穢通用、

醬一百五十石、供御料七十五石、雜給料七十五石、甕一百石、別受三石、滓醬六十五石、甕五十口、未醬五十石、甕十口、醬鍑二*

百廿九斤三兩、卅斤三兩中宮料、

神事幷諸節儲料糯糒八斛

造年料醬料酒米卅斛、申官請用、

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

大膳職、胡麻油一升二合、供御井中宮、御索餅糯料、

〔延喜式三十八掃部〕諸司年料

大膳職、食薦一千九十枚、御井東宮鎭魂料十枚、平野春秋祭料一百六十枚、春日大原野春秋料各百五十六枚、織女神春秋祭料八枚、最勝王經齋會所一百枚、雜用料五百枚、狹席六枚、年料供御四枚、遣索餅所二枚、長席八枚、干供御年料糯所二枚、暴干未醬大豆所六枚、折薦十枚、供御年料四枚、遣供御年料索餅所二枚、干供御年料大棗所四枚、苫十枚、○中略

右年中所充、並依前件、若有增減者、臨時處分、

〔延喜式三十三大膳〕凡諸節神態、幷職內所須炭松明薪、令仕丁儲備、大炊、主水、造酒等司准此、

〔延喜式四十一彈正〕凡運民部廩院米車馬、自美福門脇門、運大膳職雜物、大炊寮米幷雜穀自郁芳門、○中略並聽出入、

醬院

〔續日本紀 八元正〕養老四年二月乙酉、令檢按造器二司造釋奠器、充大膳職大炊寮、

〔榮花物語 三十一殿上の花見〕四月〇長元五年には、御けいの日、やがて大せんにいらせ給、うちちかくて女房などまいりかよふ、

〔本朝世紀〕寛治元年十月十二日庚寅、今日攝政殿下〇藤原師實御覽大膳職、主上可遷御之故也、十六日甲午、天皇從堀河院遷幸大膳職、來廿三日、依可有大嘗會御禊也、廿六日甲辰、天皇自大膳職還御堀河院、內大臣以下諸卿參入、

〔文德實錄 十〕天安二年五月己丑、出〇中略大膳職鹽廿五斛、賑給左右京苦霖之窮民、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年十一月庚午、始以赤幡班給大藏、內藏、大膳、大炊、造酒、主醬等司、供御物前建、以爲標、

○

〔西宮記 臨時五〕一所々事

諸院　醬院 大膳別院、在職西、

〔簾中抄 下〕大膳職　肉醬院(ヒシホツカサ)このうちなり

〔三代實錄 四十二陽成〕元慶六年九月廿五日甲午、大膳職醬院火、

〔日本紀略 三村上〕天曆二年六月七日甲申、雷雨、大膳職醬院顚倒、壓死者一人、

〔日本紀略 四村上〕天德四年二月十七日丁亥、雷電霹靂於大膳醬院、

〔百練抄 六崇德〕大治二年二月十四日、宮內省、主水司、醬院等燒亡、

〔類聚符宣抄 七〕權左中辨藤原朝臣爲輔傳宣、左大臣宣、大膳亮宮道時忠、宜如舊爲供御所幷醬院勾當者、

安和二年六月廿五日　左大史吉志公胤奉

職員職掌　直丁　筥戸　廢司

筥陶司

筥陶司ハ、筥陶器皿ヲ造ルヲ掌ル、而シテ平城天皇大同三年、大膳職ニ併セラル、

〔令義解一職員〕筥陶司

正一人、掌ニ筥陶器皿、謂器總名、爲レ皿、其木土器、亦皆掌、事、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、筥戸、

〔令集解五職員〕古記云、檢ニ校土師皿器一、

〔東大寺正倉院文書成卷之餘本書紙背糊用雜書〕筥陶司石山寺充雜器事

陶埦肆拾口　陶坏陸拾口　鹽坏陸拾口　片埦陸拾口　叩戸伍口　坏蓋研貳拾口　已上

前充　筥參拾合　後盤貳拾口　已上物今充　折櫃參拾合、陶盤陸拾口、右物依レ無不レ充

天平寶字六年二月九日

正六位上行正林連黑人

〔令義解一職員〕從六位階〇上筥陶正　正八位階〇下筥陶佑　少初位階〇上筥陶令史

〔東大寺正倉院文書三〕筥陶司解　申請直丁粮事

合米壹斛壹斗陸升人別日二升　鹽壹升壹合陸勺人別日二勺　布貳段人別壹段

右司家直丁合肆人二人立丁二人斷 來五月廿九箇日料粮、所レ請如レ件、具狀以解、

天平十七年四月十七日　正七位上行令史白鳥史老人

〔令集解五職員〕筥陶司（中略）古記及釋云、別記云、筥戸百九十七戸、年料一丁、長二尺、廣一尺八寸、深四寸、若干具、長一尺六寸、廣一尺四寸、深三寸、二具、爲ニ雜戸一、免ニ調役一、

〔令集解五職員〕大同三年正月廿日、詔、〇中略其筥陶司併ニ大膳職一、主者施行、〇又見ニ享祿本類聚三代格一

木工寮

木工寮ハ、コダクミノツカサト稱シ、又モクレウト稱シ、又ムクレウト稱ス、土木ノ事ニ從フモノニテ、營作ヲ爲シ、修理ヲ行ヒ、木材ヲ採伐スルヲ掌リシガ、後ニハ中務省ノ内匠寮ノ主掌セル細工ノ事ヲモ分掌シタリ、而シテ桓武天皇延暦二十四年十二月、造宮職ヲ廢シ、之ヲ本寮ニ併セ、平城天皇大同三年、宮内省ノ鍛冶司ヲ以テ又之ヲ此ニ併セタリ、而シテ修理職モ亦此ニ併セラレタレド、其年紀詳ナラズ、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕寮　職員令云、○中略 木工寮古多久美乃豆加佐

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞
木工寮(コダクミノツカサ)

〔伊呂波字類抄 毛職官〕木工寮(モクレウ)

〔下學集 上官位〕木工頭(ムク) 工部(ホウ)尚書

〔職原抄 上〕木工寮(ムク)(コダクミノ) 唐名將作監

沿革

〔日本書紀 二十五孝德〕白雉元年十月、遣將作大匠(タクミノツカサ)荒田井直比羅夫、立宮堺標、

〔大日本史 職官三〕木工寮、○中略 孝德帝時、有將作大匠、○註略 大寶制、蓋改今名、

〔續日本紀 三十七桓武〕延暦元年四月癸亥、是日詔曰、○中略 宜且罷造宮勅旨二省、法花鑄錢兩司、以充府庫之實、以崇簡易之化、但造宮勅旨雜色匠手、隨其才幹、隸於木工内藏等寮、餘者各配本司、

〔日本後紀 十三桓武〕延暦廿四年十二月壬寅、是日中納言近衞大將從三位藤原朝臣内麻呂侍殿上、有勅令參議右衞士督從四位下藤原朝臣緒嗣、與參議左大辨正四位下菅野朝臣眞道、相論天下德政、于時緒嗣議云、方今天下所苦、軍事與造作也、停此兩事、百姓安之、眞道確執異議、不肯聽焉、帝善緒嗣議、

廨舍

卽從停廢、有識聞之、莫不感歎、　乙巳、廢造宮職、

〔日本後紀 十三 桓武〕大同元年二月丁酉、停造宮職、併木工寮、

〔類聚國史 百七 職官〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、鍛冶司幷木工寮、〇又見令集解、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

　應停修理職隷木工寮事〇下略

　〇按ズルニ、本文年月ヲ闕失ス、蓋シ天長二三年ノ間ニアラン、修理職篇ヲ參看スベシ、

〔類聚三代格 七〕太政官符

　應修理坊城非理之損事

右得宮内省解偁、木工寮解偁、檢案内、太政官去仁壽二年六月七日下左右京職符偁、木工寮解偁、省去三月廿五日符偁、太政官今月廿日符偁、右大臣宣、奉勅停修理左右坊城使隷木工寮、宜官物一事已上受領者、寮依符旨受領既訖、〇中略

　齊衡二年九月十九日

〔拾芥抄 中本 百官〕木工寮 二條南、大宮東、

〔本朝世紀〕天慶元年八月卅日甲辰、〇中略去元慶三年八月八日、木工頭藤原維邦、於寮曹司頓滅、〇下略

〔續日本後紀 十八 仁明〕嘉祥元年七月丙辰、災于東西二京、凡十一處、木工寮倉、東市司樓、

〔小右記〕長和五年六月十二日甲申、攝政曰、木工寮可築垣、余申云、木工寮力不可及、以爵料被充築垣料、忽可成歟、以勤公之者爲行事極可佳、攝政曰、以四百石許可築固歟、左大辨道方云、以築朱雀院垣之料、今准思、以爵料剩可充用者、

〔朝野群載 十五 陰陽道〕方角禁忌

勘申、木工寮屋舍、爲大風所顚倒、欲令造立、可忌哉否事、

右自内裏指彼寮當丙方也、丙方是大將軍在地之内也、仍須待遊行日造立無妨、但新造舍屋可有其忌、仍以勘申、

天祿四年五月廿六日　主計頭賀茂朝臣保憲

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年五月十二日癸巳、夜木工寮火、燒官人直廬一字、

〔西宮記五臨時〕一所々事

内候　木工内候所、在中院西宮城門内、

職員　職掌

〔令義解一職員〕木工寮

頭一人、掌營構木作及採材、謂、斫伐樹木、可以施事於工匠者、爲材也、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬一人、工部廿人、謂不限雜色白丁、取知工者充、即得考之色、使部廿人、直丁二人、驅使丁、謂凡諸司驅使丁、皆有定數、特於此寮不制員數者、分配諸司、其餘多少、皆配此寮、故无定員也、

〔令義解一官位〕從五位階○上木工頭　正六位階○下木工助　正七位階○下木工大允　從七位階○上木工少允　從八位階○上木工大屬　木工少屬階○下

〔延喜式十二中務〕時服

木工寮一百卌四人（中略）屬○二人○少○

〔拾芥抄中本官位唐名〕木工頭將作監、工部尚書、木作尹、將作監、將作大匠、左校令、助將作小匠、工部侍郎、將作丞、將作少監、允將作丞、工部郎中、工左校令、木作丞、屬將作主簿、員部（員部丞工部誤）、將作錄事、主事、左校史、笇師將作計史、准計史、

〔漢書十九百官公卿表〕將作少府、秦官、掌治宮室、有兩丞左右中候、景帝中六年、更名將作大匠、屬官有石庫、東園主章、左右前後中校七令丞、如淳曰、章謂大材也、舊將作大匠主材吏名章曹掾、師古曰、今所謂木鍾者、蓋章聲之轉耳、東園主章、掌大材、以供東園大匠也、又主章長丞、師古曰、掌凡大木也、武帝大初元年、更名東園主章爲木工、

〔唐六典二十三將作監〕將作監大匠一人從三品

左傳云、少昊氏五雉爲五工正、周官多官掌百工之職、漢書百官表云、將作少府、秦官、掌治宮室、有兩丞左右中候、景帝改曰將作大匠、秩二千石、屬官有石庫、東園主章、左右前後中校七令丞、又主章長丞、武帝改東園主章曰木工、成帝省中候及左右前後中校五丞、後漢光武中元年（○中元年據後漢書、當作中元二年、）省、常以謁者兼之、至章帝建初元年又置、魏因之、晉將作大匠、置功曹主簿五官等員、掌土木之役、過江後及宋齊、並不常置、梁天監七年、置十二卿、改將作大匠爲大匠卿、是爲秋卿、班第十品、正第五、陳因之、後魏大和初、將作大匠、從第二品下、二十二年、降爲從三品、北齊因之、後周有匠師中大夫一人、掌城郭宮室之制、及諸器物度量、又有司木中大夫一人、掌木工之政令、隋將作寺置大匠一人、從三品、開皇二十年、改爲將作監、以大匠以大監、煬帝大業五年、正四品、十三年、又改大監爲令、皇期改置大匠少匠丞主簿等員、龍朔元年、改爲繕工監、咸亨元年復舊、光宅元年改爲營繕監、神龍元年復舊、（○中略）

將作大匠之職、掌供邦國修建、土木工匠之政令、總四署三監百工之官屬、以供其職事、少匠貳焉、

左校署令二人從八品下

周官有攻木之工七、謂輪輿弓廬匠車梓也、秦漢有左右前後中校五令丞、後漢唯置左右校令丞各一人、令六百石、又有材官校尉、魏幷左（○左下恐脫右字）校於材官署、過江省將作大匠、而左右校隸少府、又改材官校尉爲將軍、罷左校令、宋齊梁陳又有左校令丞、別置材官將軍司馬、北齊太府寺有左校署令丞、後周有掌材上士、隋將作領左校署令二人、皇朝因之、（○中略）

左校令掌供營構梓匠之事、致其雜材、差其曲直、制其器用、程其功巧、丞爲之貳、

〔職原抄上〕木工寮

頭一人（權頭一人相當從五位上　唐名木作尹、又工部尚書、將作大匠、○中略）　助（權助　相當正六位下　唐名工部侍郎、將作少匠、○中略）　允（大少）

（唐名工部郎中、將作丞、左校丞、或木作丞、○中略）　屬（大少　唐名工部主事、又將作主簿、或左校史）　竿師（唐名將作計史）

〔儀式　七〕十七日（正月）觀射儀
前十日、（○中略）木工寮射殿前量定步數、卽立標札、（○中略）其日、（○中略）木工寮懸兩侯的、

〔延喜式　三十四　木工〕神事幷年料供御
土火爐、（長三尺五寸、廣二尺五寸、高七寸、）長功二人、中功二人半、短功三人、
案、（長一尺八寸、廣一尺六寸、高三尺、樓長廣亦同、高一尺六寸、）長功四人、中功四人半、短功五人、（○中略）

雜作
飛驛函、（長一尺一寸六分、廣三寸、深二寸三分、）長功小半、中功半人、短功一人、
大篭、（軸長四尺、高二尺、）長功三人、中功四人、短功五人、
紙槽、（長五尺、廣三尺五寸、深一尺五寸、）長功四人、中功五人、短功六人、
板蔀、（方一丈、）長功七人、中功九人、短功十人、（○中略）
步射的、（徑二尺五寸、）中功卌五枚、（三尺的准此、）
梁桁、（廣六尺、高七尺、）山形、（方二丈、以實子爲之、）各中功二人、
鉦簾、（長六尺五寸、廣四尺、高五尺五寸、）長功六人、中功八人、短功十人、
鼓簾、（長六尺五寸、廣六尺、高五尺五寸、）功同鉦簾、
七尺札六枚、（書奏料、）方八寸版位七枚、（元日朝拜料、）
　右年料造充中務省、（○中略）

鐵工
五寸刀子一枚、料鐵五兩、（四寸已下、毎寸減一兩、）長功四枚、中功三枚、短功二枚、（○中略）
一尺打合釘一隻、料鐵十四兩、長功五隻、中功四隻、短功三隻、（○中略）

土工

方丈壁一間一重棧、料楉三擔、藁三圍、繩七十五丈、編棧夫一人、塗工一人、夫二人、二重棧、料楉四擔、藁四圍半、(麤塗一圍半、中塗三圍、)繩一百丈、編棧夫一人、麤塗夫一人半、中塗工大半、夫一人小半、間度材工一人、穿著廿枚、表塗料白土二石、洗馬矢一石、粥汁料白米二升、塗工大半、夫二人、○中略

葺工

葺瓦工一人、夫三人、葺長十二丈、以藁一圍充長三丈、提瓦、以擘瓦二枚爲一重、(其數隨屋大小、)○中略

掘埴

掘開埴土一人、一日立方五尺、(堅埴減一尺、)一人一日取埴大二千斤、(堅埴減一千斤、)

工一人作埴槌十五柄、夫一人作運埴葛籠十五口、

作瓦

夫一人一日打埴大三百斤、(雇人加一百斤、)以沙一斗五升交埴四百斤、以一千八百斤爲一疊、以四疊充一夫、

工一人日造瓪瓦九十枚、○中略

築垣

高一丈三尺、(本徑六尺、末徑四尺、)長一丈、築工十三人、上土夫四人半、○中略

削材

五六寸已上材、長功一人六千材、中功五千材、短功四千材、

作石

山作計六面積、以一千二百材充工一人、中功短功、並以二百材爲差減之、其庭作計五面積、以九百材充工一人、

〔夕拜備急至要抄 下〕一内裏修理(木工寮修理職)

木工寮

補任

紫宸殿內（夜御殿、又西邊二ヶ間、常陽女讚候所分也、）　淸涼殿　常御所　朝餉　臺盤所　弘御所　黑戶御所　二棟　議定所　御湯殿　殿上下侍、外刀自臺所、幷進物所、

〔百寮訓要抄〕木工寮　木作の事をつかさどる、料材をおさめ、番匠を官領す、今も內裏以下の修理御造作、皆此寮の沙汰也、

〔詠百寮和歌〕木工頭

木工（○工下一本有の字）屋つくりたる雲の上に軒をならべてみゆる高きや

大工

くもでには物を思はじひだたくみやすくも家を作る成けり

〔令義解〕（六營繕）凡京內大橋、及宮城門前橋（謂十二門前渋橋也）者、並木工寮修營、自餘役京內人夫、（謂以雜徭作）

〔延喜式〕（三十四木工）凡供神雜物、幷節料年料、諸司所儲雜器等、並依例造備、待官符幷宣旨充之、（東宮主膳主殿所儲雜器准此）

凡諸節及公會處、應設幄幔者、寮依例預樹柱桁、

凡應修理諸司雜器物、本司運送於寮、若應塗朱及漆者、令內匠寮塗、

〔菅家文草〕（七記）左相撲司標所記

左司定之後、八日卯剋、木工少允笠忠行、率長上番上、飛驒直丁等卅餘人、就廳東方造標屋、須臾構成、

〔職原抄〕（上）內匠寮（掌工匠事、但近代木工修理知其事、頗似無其實、）

〔官職秘抄〕（上）諸寮頭　木工頭（有權）　可然四位五位、撰人任之、自權頭任例、（維邦、光並、）自助轉任例、（春枝）近衞中將兼任例、（正純）權頭、可然諸大夫、若儒者任之、（○中略）

同助（○權中略）　木工（○中略）　已上可任良家子、凡諸司助、以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、（○中略）　東宮主馬首、兼木工助例（藤斯繁○中略）依內敎坊申請任例、（主殿平信道○中略）　同允（大少○中略）　木工　重代侍任之、多

藏人所、幷院宮給也、兼造寺司例、菅野常世、藤原尙賴、同屬大少中略○木工寮奏多自算師任之、或諸道擧、問者生等任之、

〔職原抄上〕木工寮

頭一人權頭一人　頭者、名家五位殿上人多任之、權頭者、諸大夫五位中、可然之輩任之、　助權助　六位諸大夫任之、　允大少　屬大少　竿師

〔百寮訓要抄〕木工寮

頭木作尹　四位五位是に任ず、禁中の修理以下、奉行の仁たるべき間、代々其器をえらびてなさる也、名ばかりにはあるべからず、寮領を知行する仁のなる也、諸大夫是に任ず、いたく他人などの執する官にはあらず、

權頭　是も五位の諸大夫、諸道の者任る官也、いたく執せず、　助工部侍郎　六位是に任ず　權助　おなじ　大工　權大工　小工　權小工　是皆番匠の名也、此職細工所を奉行する間、此輩をかゝる、也、又算師と云もの有、材木の員數をかずゑんため也、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月辛丑、阿部朝臣若足爲木工頭、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字三年七月丁卯、從四位下御方王爲木工頭、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年正月己未、正五位下久世王爲木工頭、從五位下穗積朝臣小東人爲助、

〔文德實錄六〕齊衡元年十二月甲寅、是日木工頭正五位下石川朝臣長津、頓死於寮中、中略○長津者、中納言正三位兼宮內卿豐成之孫、正四位上武藏守河主之子也、中略○天長八年七月、爲木工助、中略○仁壽二年二月、爲木工頭、卒時年七十長津性能工巧、恪勤爲宗、故頻歷工官、遂終於此、

〔三代實錄八清和〕貞觀六年三月八日甲午、散位從五位下御春朝臣內雄爲木工助、

〔明和新增京羽二重 一〕官方

大藏省木工寮 從四位下左衛門大尉 堀川近江守大石弘充　同 從五位下大藏少丞 堀川左衛門少尉大石弘澄

〔慶應元年都仁志喜 二下〕官方

大藏省木工寮 堀川大藏少丞大石弘亮　木工寮官人 安見長門介秦邦昌

別當

〔小右記〕長和五年二月廿七日壬寅、資平告送云、昨日所々別當定了、○中略木工寮、以左中辨經通爲別當、彼職寮事一向可執行、又造宮事、可行之宣旨等下了、

史生

〔續日本紀 九元正〕養老六年六月壬寅、始置木工寮史生四員、

〔日本後紀 十三桓武〕大同元年二月丁酉、停造宮職、併木工寮、事務繁多、因加史生六員、合前十二員、

〔日本後紀 十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、○中略減內記二員、○中略木工寮四員、

〔日本後紀 二十二嵯峨〕弘仁三年十二月己酉、加木工寮史生六員、

〔類聚國史 百七職官〕弘仁九年七月庚寅、定木工寮史生六員、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、○中略木工寮十一人、○中略權一人待宣旨補任、

〔延喜式 三十四木工〕凡史生將領等月粮、便以寮庫物充之、

〔西宮記 臨時一〕諸宣旨

諸司史生 修理職、木工、(中略)上奏、勅下式部丞、

〔慶應元年都仁志喜 二下〕官方

木工寮史生　正七位下安見伊勢大掾秦資昌　高井河內大目源義信

寮掌

〔類聚國史 百七職官〕承和二年十一月辛酉、木工寮置寮掌二員、

算師

〔延喜式 十八式部〕凡准令以別勅才伎長上諸司者、其位主典以上准少判官、以下准大主典、○中略其木工等師准二寮主○主計主税等師、

諸工

〔續日本後紀五仁明〕承和三年三月壬寅、木工寮算師八戸史礒益、同姓彌繼等廿人、賜姓常澄宿禰、

〔類聚符宣抄六〕左衞門督藤原朝臣保忠宣、俾檢備中國去年不堪佃田使主典散位刑部貞茂、申身病之代、宜令木工笇師大原茂則申使返事者、

延長五年四月十九日　　大外記伴宿禰久永奉

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

停止幷減定諸司等才長上事〇中略

木工寮

長上十七員　右減九員定八員　轆轤長上　右依舊爲定　鍛冶長上二員　右減一員定一員

以前被右大臣宣偁、奉勅件司等、才長上數、停止幷減定如件、永爲恒例、

大同三年十二月十五日

〔續日本後紀四仁明〕承和二年九月癸卯朔、先是木工寮中所蓄長上雜工、隨其才巧各有品數、而承前考文、總注長上木工、不別其品色、至是長上及工、品選其人、每色辨置、隨闕補之、木工八人、土工三人、瓦工二人、轆轤工一人、檜皮工二人、鍛冶工二人、石灰工一人、

〔延喜式十八式部〕凡木工寮長上工、木工七人、土工一人、瓦工二人、轆轤工一人、檜皮工一人、鍛冶工一人、石灰工一人、並與考、

〔延喜式十二中務〕時服

木工寮一百卅四人大工一人、少工一人、長上十三人、將領十人、工部五十人、飛彈工卅七人、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶三年正月戊戌、天皇幸東大寺、授木工寮長上正六位上神礒部國麻呂外從五位下、

〔類聚符宣抄七〕大政官符式部省

應補木工長上弓削清茂死闕替事

工長從七位上秦忌寸正平

右得宮內省解偁、木工寮解偁、件正平、從去天祿三年以來、不懈恪勤、無倦造作、况乎亦才能、尤足爲長上職也、望請省裁、早被言上於官、補任清茂死闕所、將知勞績不朽、彌致忠節者、中納言從三位兼行中宮大夫平朝臣惟仲宣、依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左中辨高階朝臣　　右大史美麻那宿禰

長保元年閏三月廿一日

〔朝野群載八請奏〕木工寮

請特蒙天恩、因准傍例、以長上藤井則季被補任少工闕狀、

右得則季欵狀偁、謹撿案內、少工有闕之時、長上十五人中、以上臈被補任者、承前之例也、今少工有闕、次第所至、則季已當其仁、則季早傳郢斤成風之妙、已綺夏屋如雲之構、况乎奉公之勞、年序多積、採擇之處、猶異傍輩者、寮加覆審、所申有實、望請天恩、以件則季、被拜任少工闕者、彌令抽奉公之節、仍勒在狀、謹請處分、

嘉保二年正月廿六日　　正六位上行少允橘朝臣

正六位上行少允高橋朝臣

正六位上行助源朝臣

兵部權大輔正五位下兼行頭藤原朝臣

木工寮

請特蒙天恩、因准先例、以長上從七位上清原眞人正行、被拜任少工闕狀、

右得正行欵狀偁、謹撿案內、爲長上職之者、少工有闕之時、依勤公勞、被抽任者例也、爰正行苟傳郢斤

成風之藝、久致厦屋如雲之勤、採擇之處、已當其仁者、今加覆審、所申有實、望請天恩、隔愛光、不倣正行、被拜任彼闕者、將令知奉公之不空矣、仍勒在狀、謹請處分、

長治元年十二月十八日

正六位上行權助藤原朝臣 未到

正六位上行助源朝臣 未到

正五位下行頭兼中宮權大進藤原朝臣

從四位上行權助藤原朝臣

〔延喜式 木工 三十四〕凡工部五十人、各日黑米二升、

凡工部一人、飛驒工一人、充大學寮、令修理小破官舍、

〔令集解 職員 五〕木工寮

古記云、工部卅人、不限貴賤、知工人充、得考幷給衣服、掌食、釋亦同之、跡云、友造等取知工才人等、爲工部、非雜戶、令知也、

〔延喜式 木工 三十四〕凡飛驒國匠丁卅七人、以九月一日相共參著寮家、不得參差、

鍛冶戶

〔延喜式 木工 三十四〕鍛冶戶

左京十九烟　右京五十八烟　大和國一百二烟　山城國十烟　河內國卅六烟　攝津國五十八烟　伊賀國三烟　伊勢國三烟　近江國卌四烟　播磨國十六烟　紀伊國十三烟

右鍛冶戶、每年當國計帳進官、官先下主計寮、全計損益、然後下寮、即從十月一日至二月卅日、爲番役使、

使部

〔延喜式 式部 十八〕凡諸司使部者、(中略)木工寮(中略)各十人、

仕丁

〔三代實錄 光孝 四十九〕仁和二年四月三日壬子、是日木工寮仕丁立縫彥麻呂、於東宮南門樹下、以刀子刺殺同僚刑部貞雄、捉彥麻呂下於獄、

駈使丁

用途

〔令集解五職員〕木工寮

古記云、駈使丁、分配諸司以外、餘仕丁皆配此寮、私問、駈使丁以何色人充、答諸國仕丁是也、與直丁同、

〔延喜式三十四木工〕年料

生絲十八斤五兩、(十八斤工等墨繩料、五兩纏大祓刀柄料、)油一升一合、(一升塗餝鑪軸料、一合塗大祓刀料、)鐵百廿四廷二斤、(練餝鑪鉇刃料、幷造充諸司雜鐵物料、)熟銅四斤八兩二分三銖、(作大祓刀料、)伊豫砥五顆、木賊大二斤、(磨床案等料、)膠二斤十二兩一分、(作大祓刀幷小刀等鞘料、)小刀鞘料鹿革一張、鞘緒料鹿革一張、塗鞘漆一升一合、絁一尺五寸、綿四兩、調布一尺五寸、(已上鞘漆料、)太刀鞘料馬革二張、(各長五尺、廣三尺、)塗太刀猪膏五合、練金一兩、銀一兩、水銀一兩、御贖鐵人像料、金薄千四百卌枚、銀薄千四百卌枚、並九月一日申省請受、

凡鍬五十口、幷鍛冶吹皮料牛皮十五張、申省三年一請、

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

木工寮、胡麻油一升一合、猪膏五合、(塗造年料雜物料、)猪膏卅斤、(造雜工已下仕丁已上藥料、)

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町

木工町(二條南、大宮東、三條坊門北二町、)

〔延喜式三十四木工〕諸國所進雜物

商布七百六十二段(三千七百九十二段內、配修理職之遺、)

駿河國七百段、下野國六十二段、

綿七百六十二把(三千七百九十二把內、配修理職之遺、)

出雲國

鹽廿斛(六十四斛內、配修理職之遺、)

備前國

職員供給

庸米千斛〈三千斛內、配修理職之遺、〉

越前國三百斛、丹波國一百斛、備中國三百斛、阿波國三百斛、

海藻二千九百五十斤〈八千八百五十斤內、配修理職之遺、〉

紀伊國千五百斤、阿波國千四百五十斤、

魚卅七斛二斗〈一百卅一斛六斗內、配修理職之遺、〉

淡路國廿三斛六斗、伊豫國廿三斛六斗、

右並諸司出納、依官符受用、

〔東大寺正倉院文書三〕木工寮解　申請公粮事

合請米壹佰伍拾參斛貳斗　鹽貳斛貳斗伍升貳合　綿肆屯

右史生三人　長上十一人　番上九十一人　直丁二人　厮二人　飛驒匠卅七人

厮十人　駈使丁七十六人　厮卅八人　合二百七十人料〈史生、長上番上、直丁、幷一百七人別日米二升、鹽二勺、飛驒匠、厮、駈使丁、幷一百廿三人別日米二升、月鹽一升、駈使丁厮別月米四斗、鹽一升、直丁厮別月綿四屯、〉

奈良宮米一百卅斛　鹽二斛三升二合

右史生三人　長上十一人　番上九十一人　直丁二人　飛驒匠十九人　厮六人

駈使丁七十六人　厮卅八人　幷二百卅六人料

甲可宮米十三斛二斗　鹽二斗三升

右飛驒匠十八人　厮四人　幷廿二人料

返上米七斛八升

右出家番上工十二人　飛驒匠一人　幷十三人料

見請米一百卅五斛四斗

以前史生巳下駈使丁巳上、來十一月卅箇日料、粮所請如件、具狀以解、

天平十七年十月七日　正八位下行大屬佐伯直石山

正六位上行少允守部垣麻呂

從五位下守頭王

雜載

〔延喜式四十一彈正〕凡運民部廩院米車馬、自美福門脇門、〇中略運在中院西木工寮木屋材瓦、造酒司米、自談天門、〇中略並聽出入、

鍛冶司

沿革

鍛冶司ハ、銅鐵雜器ヲ造ルコトヲ掌ル、其下ニ鍛戸アリ、本司ハ聖武天皇天平十六年、廢司トナリ、後復置キタレド、平城天皇大同三年、木工寮ニ併セラル、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年四月甲寅、廢造兵鍛冶二司、

〇按ズルニ、鍛冶司ハ大寶令ニ於テ制定シ、是ニ於テ停廢セラレタレド、木工寮ニ併セラレシ事下文ニ見エタレバ、廢後ニ復置キシモノナラン、

〔官職秘抄後附〕宮内省被官　鍛冶司大同三年正月、併木工寮、

職員職掌

〔令義解一職員〕鍛冶司

正一人、掌造作銅鐵雜器之屬、及鍛戸戸口名籍事、佑一人、大令史一人、少令史一人、鍛部廿人、使部十六人、直丁一人、鍛戸、

〔令義解一官位〕正六位〇上階鍛冶正　從七位〇下階鍛冶佑　大初位〇上階鍛冶大令史　鍛冶少令史〇下階

補任

〔續日本紀 三 文武〕慶雲元年四月甲子、令鍛冶司鑄諸國印、

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年五月癸酉、從五位下氣太王爲鍛冶正、

鍛戸

〔令集解 五 職員〕鍛冶司

鍛戸（古記及釋云、別記云、鍛戸三百卅八戸、自十月至三月、每戸役丁、爲雜戸免調徭、）

土工司

土工司ハ、壁ヲ塗リ、土ヲ起シ、瓦ヲ造リ、石灰ヲ燒クコトヲ掌ル、大寶令ニ此司ノ職員ヲ載セタレド、國史ニハ絕エテ補任ノ人ヲ擧ゲズ、延喜式ニモ此司ノ事ヲ載セザレバ、其停廢セラレシモ久シキコトナラン、而シテ泥土石灰ノ事ハ、木工寮ノ所管ニ歸セリ、

職員職掌

〔令義解 一 職員〕土工司

正一人、（掌營土作瓦埿、謂瓦埿猶瓦也、以埿爲瓦、故連言也、并燒石灰等事、）佑一人、令史一人、埿部廿人、使部十人、直丁一人、泥戸、

〔令集解 五 職員〕朱云、營土作、謂總掌土作物耳、假令爲塗壁起工、此等者、〇中略穴云、泥部者、古言波都加此乃友造、〇中略朱云、泥戸、文讀何、穴云、泥戸、奴利戸、

〔令義解 一 官位〕正六位下〇下階土工正　正八位上〇上階土工佑　大初位下〇下階土工令史

泥戸

〔令義解 五 職員〕土工司

泥戸（中略）（古記及釋云、別記云、泥戸五十一戸、一番役廿五丁、爲品部、免調徭役也、）

廢司

〔官職秘抄 後附〕宮內省被官　土工司（後代不被任之、停之時未勘、）

大炊寮 供御院〔併入〕

大炊寮ハ、オホヒノツカサト稱ス、供御ノ稻米粟米ヲ舂キテ、內膳司ニ送リ、無品親王、內親王、妃、夫人、女御、釆女、中務、監物、大學、民部、宮內、春宮坊ノ史生、六衞府ノ府生等ニ、月料ノ米ヲ分チ充テ、祭祀、齋會、釋奠、節會等ニ、薪米ヲ供ス、而シテ大炊省ノ名ハ、日本書紀天智天皇十年紀ニ始テ見エタリ、

供御院ハ、本寮ニ屬ス、畿內官田ノ稻ヲ納メ、供御中宮東宮等ノ御料ニ充ツ、史生一人ヲ、以テ預ト爲シ之ヲ掌ラシム、

名稱

〔日本書紀二十七天智〕十年、是歲、〇中略大炊省有八鼎鳴、或一鼎鳴、或二、或三俱鳴、或八俱鳴、

〔倭名類聚抄五官名〕寮 職員令云、〇中略大炊寮、於保爲乃豆加佐、

〔標注職原抄上末〕大炊を和名抄に於保爲と訓るは假字たがへり、常陸風土記に、大生里の件に、倭武命の故事を載て、取大炊之義名大生之村とあり、生をヒと訓るは、オヒのオを省けるなり、されば大生、卽大炊の借字にて、大炊は大飯の義なり、政事要略に載たる多米宿禰の大系帳に、召氏人等令作大飯とあるを、姓氏錄に併せ考るに、大炊寮御飯と見えたれば、大炊卽大飯にて、和名抄の爲に作れるは誤なること明らかなり、

〇按ズルニ、於保爲ハ、オホヒノ音便ニテ、猶ホ萬葉集ニ、イ延ヒ蔓ヲ伊波爲都良ト書シ、法華驗記ニ、山城國神南備寺ヲ神奈井寺、今昔物語ニ、池ノ底ヒヲ底井トモ書セルガ如シ、

〔下學集上官位〕大炊(オホイ) 大倉令(サウレイ) 又主鑰(シユサン)

〔職原抄上〕大炊寮 唐名大倉署

廳舍

〔日本紀略一條一〕寬弘二年五月廿三日庚午、雷公震大炊寮廳、

寮神

職員職掌

〔左經記〕萬壽二年八月卄日己卯、風聞大藏率左少辨經、於八省東廊行大祓、是去七月、大炊寮廳屋失火、件所被行也、

〔日本紀略六圓融〕天延三年五月廿九日庚子、今夜大炊寮稲御倉、盗人開之、以空車三輛運取之、

〔延喜式三十五大炊〕收供御米粟舍、天井料調布四端、隨損請換、

〔竹取物語下〕又人の申やう、おほいづかさの、いひかしく屋のむねに、つくのあなごとに、つばくらめは巢をくひ侍る、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年七月廿二日丁卯、今夜大風暴雨、　廿三日戊辰、風猶不止、○中略大炊大膳雜舍等、悉以顚倒、

〔類聚國史百七十三災異〕大同四年五月壬申、大炊寮廩災、

〔類聚符宣抄八〕太政官符

應依雜米未進斷罪國郡司返國司解由事

右左大臣奏狀偁、日者大炊廩院數申無庫、尋其由緒、職緣未進、凡年料白米者、以大税利稻、諸國春進、一年應納万八千石、而或年見納六七千石、或年纔八九千石、然則既缺三分之一、何支百僚之用、○中略

寛平六年八月四日　辨史可尋入之

〔日本紀略十三後一條〕寛仁四年七月廿二日辛未、夜大風、吹壞內裏所々、○中略大炊舍一宇幷倉一字、○中略其外不可勝計、

〔百練抄六後堀河〕大治二年二月十四日、大炊寮、○中略等燒亡、

〔延喜式三十五大炊〕大炊寮　竈神八座

〔文德實錄七〕齊衡二年十二月丙子朔、大炊寮大八島竈神、齊火武主比命、庭火皇神、並授從五位下、

〔令義解一職員〕大炊寮

頭一人、掌諸國舂米、雜穀、分給(謂凡諸雜穀者、皆於此寮收領、更分充諸司、假令粟充主水、大豆充大膳之類也、)諸司食料事、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、大炊部六十人、使部廿人、直丁二人、駈使丁卅人、

〔令集解五職員〕穴云、分給、謂每馬給豆二升之類、上雜穀、謂收掌耳、古記云、雜穀分諸司者辨官勘量月料給、跡云、雜穀仰諸國交易令進耳、朱云、雜穀分給、謂隨色分給司々也、(○中略)朱云、諸司朝夕給常食、幷月一度給月粮等、皆是食料者、或云不然、食料、謂品飯一色也、故雜穀與分給讀二事者、此說不明、後度同此說也、

〔令義解一官位〕從五位(○下階)　大炊頭　從六位(○上階)　大炊助　從七位(○上階)　大炊允　從八位(○下階)　大炊大屬　大初位(○上階)　大炊少屬

〔拾芥抄中本官位唐名〕大炊頭(導官令 大倉令)　助(主饗)　允(導官丞 大倉丞)　屬(導官史 導官令 大倉史)

〔唐六典十九司農寺〕導官署令二人八品上

秦漢少府屬官有導官令丞、主擇米以供祭祀及御饌、導擇也、後漢屬大司農、令六百石、丞三百石、魏晉宋齊皆有令丞、梁在七班之下、爲三品勳位、陳因之、後魏闕文、北齊及隋皆有令丞、並屬司農、皇朝因之、置令二人、(○中略)

導官署令、掌供御導擇米麥之事、丞爲之貳、

〔唐六典十九司農寺〕太倉署令三人從七品下(○中略)

周禮有廩下大夫上士、秦漢大司農屬官、太倉令丞各一人、文帝時、淳于意爲之、後漢太倉令一人、六百石、魏品第七、晉宋齊梁陳亦然、後魏闕文、北齊司農統太倉令丞、後周有司倉下大夫、隋大令(○令恐倉誤)署令二人、米廩督二人、谷倉督四人、鹽倉督二人、皇朝署太倉令三人、(○中略)

太倉署令、掌九穀廩藏之事、丞爲之貳、

〔職原抄上〕大炊寮

頭一人(無品官、相當從五位下、唐名大倉令、導官令、○中略)助(權唐名主 權○中略)允(大唐名大倉 少丞○中略)屬(大唐名大倉 少史云々)

〔延喜式三十五大炊〕凡供御稻米粟米舂備、日別送內膳司、(中宮亦同、但東宮送主膳監、)

〔百寮訓要抄〕大炊寮　諸國の米穀并諸國の食料を納めをかる、所也、後三條院、大炊寮の御稻田とて諸國に定をかれし、今も禁中の第一の要脚也、

〔詠百寮和歌〕大炊頭

おしなべて人も養ふくさ〳〵をむしつゑらげつをさめてぞおく

〔延喜式三十五大炊〕凡諸國年料所ㇾ進糯米、寮官檢按、勿ㇾ令ㇾ他粒雜糅、又雜穀隨ㇾ到量收、訖卽申ㇾ省、

諸司共收糒十斛

　右每年干收、諸司檢納、

〔延喜式三十五大炊〕中宮鎭魂

官人已下雜色已上料、米五斗四升四合、(人別八合)薪卅斤、

平野祭料(夏冬亦同)

雜給米五石八斗九升、(饗飯一石一斗五升、平飯十三石料、但夏冬祭米五石三斗二升、)盛ㇾ飯土椀、(夏七十合、冬一百合、)鋺形、(夏六十口、冬百廿口、)覆ㇾ瓮柏九十八把、薪三百六十斤、盤七十枚、

釋奠料(春秋亦同)

稻米粱米、各一升四合、(並先聖先師二座料)稷米六升六合、黍米七升七合、先聖先師九哲十一座料、

竈宮四合、韓竈一具、(並十一座料通用)

米四石五斗、(享官一百人、學生三百五十人料、人別一升、)薪三百九十斤、

　右諸祭料依前件、其當祭日、允屬史生各一人、率炊部使部等、共赴祭所供事、

正月最勝王經齋會料

米十斛一斗一升二合、(佛聖二座、四王四座、日各四升、講師以下卅二口、各二升、沙彌卅四口、各一升六合、並七箇日、新度沙彌十二口、各一升二合、一度供之、)燈油二升一合、松明廿一把、薪七百廿斤、供奉官人以下十三人、各給₂潔衣一領₁、(官人一人、史生一人、各細布二丈、炊部五人、女孺二人、各庸布一段、仕丁四人、各商布一段、)

正月修₂眞言法₁料米廿斛六斗七升二合、糯米五石三斗三升、大豆一石八斗九升七合、小豆一石一斗八合、胡麻五斗七升五合、大小麥各四斗二升、

中宮雜給、(日別米四斗、平飯料、六升、磨飯料、)圖書寮、(日米四升、)同寮紙工一人、(日米二升、)雅樂寮蕃樂人、(日米一斗六升、)内膳司、(日米六升、磨飯料、)御火炬童四人、料米日三升六合、(一人一升二合、三人各八合、)春宮坊帶刀卅人、料米六斗、(人別日米二升、)監物、(日米八升八合、)主鈴、(日米三升二合、)典鑰、(日米三升二合、)勘解由使、(日米三斗二升二合、)内裏殿上侍所、(日米二斗五升、)藏人所、(日米二斗、)女藏人、(日米一斗三升、上飯二斗料、)御膳宿采女、(日米五升、飯一斗料、)次御厨子所米八升、(膳部六人、日米四升八合、破飯一斗二升料、女孺四人、日米三升二合、破飯八升料、)候₂同所₁宮主一人、(日米八合、)候₂内裏₁侍醫一人、(日米一升五合、)藥生十人、(日米八合、)校書殿、(日米三升四合、割₂内竪三人料一升八合、大舍人二人料一升六合₁充之、)進物所、(五升四合、)贄殿、(一升二合、並割₂内竪料内₁充之、)御書所、(日米一斗六升、)畫所、(日米一斗六升、)作物所、(日米三斗、)

右每日料、依₂前件₁熟食充ㇾ之、

親王已下月料

無品親王、内親王、妃、夫人、女御、(日米各五升、)幼親王乳母、(日二升、)乳母子各五斗、(小月亦同、七歲以後停止、)

賀茂齋内親王料、日米一斗、稷八合、同院雜色人料米、月廿二石六斗八升、(小月廿一石九斗二升四合、)

平野古開久度三神、各物忌一人、(日一升二合、)松尾社物忌一人、料米三斗六升、(小月三斗四升八合、)

采女卅七人、料米十八石九斗、(小月十八石二斗七升、)中宮女孺廿七石六斗、(小月亦同、)女官厨一百五十六石、(小月百五十一石七斗六升二合、)内教坊米廿石、(小月十九石三斗三升三合六勺、)

諸得業生、(人別日二升、)觀天文生、(日二升、)漢語師、(日一升二合、)

大藏縫女卅人、(總日四升、)長人、(日五升、)

補任

中務史生十人、省掌一人、監物史生四人、大學寮官人六人、博士十五人、史生四人、學生五十人、民部史生廿人、宮內史生十人、春宮坊史生二人、舍人五十人、左右近衞府生各六人、番長三人、近衞二百人、左右兵衞府生各二人、番長二人、兵衞百五十人、左右衞門府生各二人、門部五十人、

右依前件、人別日米一升、但大學官人博士、并諸衞府生以下、日各二升、大學史生學生、日各一升二合、

內豎二百人、月料人別日米六合、

出納官物諸司百度料、一月所受米六斛、(五位已下六合、史生四合、)用盡之日、先進前帳勘勾、然後更請、如有所殘者廻充後料、

〔朝野群載 六太政官〕官中申詞

百度文一枚

宮內省申久、大炊寮乃申官物收下爪司々乃人等乃此乃月乃百依乃料乃米三坂給(半止)申津、

〔江次第抄 五〕釋奠

百度座　天慶記云、大炊寮未進百度、(○中略)允亮云、女帝曰、勤公之者、雖一日百度可給云々、今案百度、謂大炊寮之飯也、

〔西宮記 臨時五〕行幸　城外

大炊入餉櫃負馬

〔官職秘抄 上〕諸寮頭　大炊(○中略)　已上四位五位諸大夫中、有勞有功者撰任之、或諸道博士任之、任大炊權頭例、(光榮)自同權頭轉任例、(同)自同助轉任例、(糸繼)自諸司三分任大炊頭例、(三島久頼)依成功任同頭例、(藤原淑光○中略)　同助(○中略)　大炊(○中略)　已上可任良家子、凡諸司助、以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、(○中略)自陰陽助遷任例、(○中略)大炊(能文、○中略)二度任例、(大炊、行義、)三人例、(大炊、始自寬弘元年、○中略)　同允(大少○中略)　大炊(○中

略已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位諸道得業生成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分、尤爲難、〇中略　寮頭依成功申任例、大炊、織部、貞廉、〇中略　同屬大少〇中略　大炊〇中略　已上臨時內給、諸道所々擧問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、〇中略　自織部文師任例、(中略)大炊、賀茂恒連、

〔職原抄　上〕大炊寮

頭一人　無權官　五位諸大夫任之、近代大外記中原師遠子孫相傳之、溫職中尤膏腴也、　助權　六位諸大夫任之　允大少　六位侍任之　屬大少

〔百寮訓要抄〕大炊寮

頭大倉令　四位五位諸道の者是に任ず、近比は外記代々相傳してなる官也、御稻田などを奉行する間、局務外記など知行する也、今は代々相傳の樣になり侍るにや、　助主鑰　五位是に任ず

權助　おなじ

〔續日本紀　十九孝謙〕天平勝寶六年七月丙午、從五位下紀朝臣伊保爲大炊頭、

〔日本後紀　八桓武〕延曆十八年二月甲午、外從五位下嵩山忌寸道光爲大炊權助、

〔三代實錄　八淸和〕貞觀六年三月八日甲午、從五位下行木工助丸子連家繼爲大炊頭、

〔朝野群載　八請奏〕大炊寮

請特蒙天裁、因准先例、以官人代正六位上中原朝臣成忠、被拜任少屬闕狀

右謹撿案內、當寮屬者、公役忩劇、供奉繁多、諸社之祭、庶務之役、莫不致其勤、望請天裁、因准先例、以件成忠、被拜任彼闕者、彌令知奉公之節矣、仍注事狀、謹請處分、

天永三年三月二日　正六位上少屬淸原眞人成行〇以下略

〔慶應元年都仁志喜　二下〕外記方

史生

寮掌

使部

炊部

仕丁

大炊寮史生　吉村常陸大掾源逸廣　正七位下岡田上總大掾丹治要道　鈴木源永孝

〔續日本紀 八元正〕養老二年六月丁卯、始置大炊寮史生四員、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、〇中略大炊寮主殿寮、各五人、各權一人

〔伊呂波字類抄 於官職〕大炊寮　寮掌 三人

〔延喜式 十八式部〕凡諸司使部者、〇中略木工寮大炊寮、〇中略各十人、

〔延喜式 十二中務〕時服

大炊寮五人 炊部

〔東大寺正倉院文書 三〕大炊寮解　申請仕丁公粮事

合仕丁陸拾肆人 立丁卅二人 廝丁卅二人

米壹拾捌斛伍斗陸升 立丁別日二升　鹽壹斗捌升伍合陸勺 立丁別日二勺　布參拾貳段 廝丁別月料一段

已上目錄

甲賀宮五十六人 立丁廿八人 廝丁廿八人

米十六斛二斗四升　鹽一斗六升二合四勺　布廿八段

難破宮二人 立丁一人 廝丁一人

米五斗八升　鹽五合八勺　布一段

久仁宮六人 立丁三人 廝丁三人

米一斛七斗四升　鹽一升七合四勺　布三段

以前寮家仕丁、來五月廿九箇日料、所請如件、錄狀以解、

天平十七年四月十七日　正七位下行少屬大炊刑部造菱麻呂

正六位上行助秦河邊忌寸信万呂　從六位上行允陽胡史 難破宮

從七位下行大屬大戶首

女丁

〔延喜式大炊三十五〕凡供御料稻粟、並用官田、中宮東宮齋宮亦同、但齋宮者、在京之間供之、○中略其舂米女丁八人、御井中宮各三人、東宮二人、各給衣服、夏人別黃帛三丈、紺布二丈、庸布一段、冬黃帛一疋、紺布二丈、庸布一段、庸綿二屯、日別給粮米二升

雜戶

〔令集解職員五〕大炊寮

古記及釋云、別記云、大炊戶廿五戶、津國宰饗爲品部、免雜徭、戶止五戶定、餘皆止、

用途

〔延喜式大炊三十五〕寮家年料

中取案六脚、櫓三口、高各三尺、口徑三尺、有蓋、槽四隻、長一丈、深九寸、簀十枚、輿籠五脚、置簀六枚、匏十柄、明櫃五十合、板筥一百合、斗四口、升廿口、

收供御米粟舍天井料、調布四端、隨損請換、行幸供奉仕丁二人裝束、人別紺布衫一領、長二丈一尺袴一腰、長七尺布帶一條、長九尺、中割、練絲二分、縫衫袴料並三年一請、

雜載

〔貞信公記〕延長九年○承平元年二月六日、大炊寮有死兒腰以上相連者、舂御稻事於宮內省行之

〔東大寺正倉院文書十五〕尾張國司解　申收納天平六年○中略

納大炊寮酒料赤米貳佰伍拾玖斛　充穎稻伍阡壹佰捌拾束○中略

謹件收納天平六年正稅雜充用之狀、具注如件、仍付守從五位下勳十二等多治比眞人多夫勢進上以解、

天平六年十二月廿四日　史生從八位上丹比新屋連石萬侶○中略

〔朝野群載諸國功過二十八〕大炊寮

勘前山城守從五位下賀茂朝臣保道任中四箇年所濟納畢事

承德二年

胡麻子四石　荏子四石　大麥三石　小麥卅四石　大角豆六石

康和元二三幷三箇年各色目同前

右依官宣、納畢如件、

康和五年二月　日

正六位上行少属笠宿禰

正六位上行少允惟宗朝臣

從五位上行頭兼曆博士丹波介賀茂

長元元年十二月八日宣旨云、應功過定時、永令副進大炊寮納、諸國年料米雜穀合期畢勘文事、右得彼寮奏狀云、太政官、去寬弘九年符云、年料舂米進納立期、遲進之責、嚴○嚴下恐有脫字、頻下、勤王之吏、何忘章條、宜仰諸國新守、參期限月以前令進納、但依合期返抄、將定功過之勤惰、長和五年符云、諸國年料米、各守月充、兼月進納、若有違越、解却見任、不敢途用、今年宣旨云、諸國得替年々料米、令前司辨申物實、以日收、分付後司、宜准修理職例、令副進其合期物畢勘文、永爲功課之備、

〔延喜式四十一彈正〕凡運民部廩院米車馬、自美福門脇門、運大膳職雜物、大炊寮米幷雜穀、自郁芳門、○中略並聽出入、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年十一月庚午、始以赤幡、班給大藏、內藏、大膳、大炊、造酒、主醬等司、供御物前建、以爲標、

供御院

〔師守記〕貞治四年四月十四日壬寅

大炊寮目代職事被仰付候、可被存知之狀、依仰執達如件、

貞治四年四月十四日　大炊允國隆奉

彈正忠殿

○

〔西宮記臨時五〕一所々事

諸院

供御院在二大炊寮中一、納二畿内御稲一、充二供御中宮東宮御飯一、以二史生一爲レ預、

〔朝野群載別奏八〕補二供御院預一

官人代礒部廣信

権左中辨源朝臣相方傳宣、左大臣宣、永補二供御院預物部光保不仕之替一者、

長保四年五月一日　左大史小槻宿禰

〔類聚符宣抄七〕右少辨藤原朝臣廣業傳宣、左大臣宣、大炊寮供御院預礒部滿利讓替、宜下永以二礒部滿輔一補上レ之者、

寛弘七年正月廿七日　右少史竹田宣理奉

〔日本紀略朱雀二〕承平元年二月六日甲午、大炊寮申、今夜犬咋二死童於供御院一、仍仰二宮内省一、以二寮外御稲一令レ備二供御一、

古事類苑

官位部十七

令制官職十三

主殿寮

主殿寮ハ、トノモリノツカサト稱シ、又トノモヅカサトモ稱ス、供御ノ輿輦、蓋笠、繖扇、帷帳ヲ知リ、湯沐ヲ供ヘ、殿庭ヲ洒掃シ、燈燭松柴炭燎ヲ給スルヲ掌ル、平城天皇ノ大同三年ニ、官奴司ヲ廢シ、宇多天皇ノ寛平八年ニ、主油司ヲ廢シ、並ニ此ニ併セタリ、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕寮 職員令云、○中略 主殿寮、止乃毛里乃豆加佐

〔有職問答 三〕一主殿官

宮内省の下に、其はとのもんと訓候、又是をすてんと點候ニテモスユテン兩樣同前讀候ハヽトノモリ同事候兩所差異如何候哉、

〔運歩色葉集 登〕主殿頭トノモノカミ

〔倭訓栞 中編十六〕とのもづかさ 伊勢物語に見ゆ、又とのもりづかさとも見えたり、

〔宇治拾遺物語 六〕今はむかし、○中略 わかぎみはとのもりのかみちかみつといひしなり、

〔東宮年中行事 四月〕こんあむに御さうじんやなき時は、ないせんにてたてまつらる、たゞしあるせちに、どのもむれうのおほきのもとに、たてまつらるべしといへり、

〔職原抄 上〕主殿寮トノモリノ符ニハトノモント云 唐名尙舍局

沿革

〔日本書紀 三神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、○中略 頭八咫烏亦入賞例、其苗裔、卽葛野主殿縣主部是也、

廳舍

〔拾芥抄 中本 百官〕主殿寮（宮城内、上東門北、大宿北、）

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年十月十二日辛酉、麞鹿一入主殿寮御湯舍、有人捕獲、放之北野、其舍在太政官候廳東、

〔續日本後紀 十七 仁明〕承和十四年三月戊申、雄雉自東方飛來、集主殿火爐前、從渠西走入閤門中、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年六月丁亥、主殿寮釜殿自倒、

〔西宮記 臨時五〕一所々事

内候　主殿掃部内候所（在西南廊内、）

寮神

〔延喜式 三十六 主殿〕主殿寮　神廿三座（寮家四座、釜殿三座、松山三座、炭山十三座、）

職員 職掌

〔令義解 一 職員〕主殿寮

頭一人、（掌供御輿輦、〈謂擧行曰輿、輓行曰輦也、〉蓋笠、繖扇、〈謂繖、蓋、扇、團扇也、〉帷帳、湯沐、洒掃殿庭、及燈燭、〈謂油火爲燈、蠟火爲燭也、〉松柴炭燎、〈謂柴、薪、柴、燎、庭燎、〉等事、）助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、殿部卌人、使部廿人、直丁二人、駈使丁八十人、

〔令義解 一 官位〕從五位（○下）主殿頭　從六位（○上）主殿助　從七位（○上）主殿允　從八位（○下）主殿大屬　大初位（○上）主殿少屬

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕主殿頭（尙舍奉御、尙輦奉御、殿中監）　助（殿中小監、尙舍直長）　允（尙書直長、殿中少監）　屬（尙書史、尙舍令史、尙輦令史、尙輦直長、鉤署令、尙屬、鉤署丞、鉤署祠令史）

〔唐六典 十一 殿中省〕尙舍局奉御二人從五品

周禮有掌舍、掌王行所止之處、帷幕幄帟之事、漢少府屬官有守宮令丞、掌宮殿陳設、魏殿中監、掌帳設監護之事、晉宋已下、其職並在殿中監、隋煬帝置殿內監、改殿內局爲尙舍局、置奉御二人、正五品、皇朝因之、龍朔二年、改爲奉扆大夫、咸亨元年復舊、（○中略）尙舍奉御、掌殿庭張設、供其湯沐、而袚其灑掃、直長爲之貳、

尙輦局奉御二人從五品上

周禮小司徒、中大夫二人、掌六畜車輦、又巾車、下大夫二人、掌王后之五輅、〇中略秦漢魏晉、並太僕屬官、車府令掌之、東晉省太僕、遂隷尙書駕部、宋齊梁陳、車府乘黃令丞掌之、後魏北齊、則乘黃車府令兼掌之、後周則司車輅主之、隋又乘黃車府令兼掌之、煬帝置殿內省尙輦局奉御二人、正五品、皇朝因之、爲從五品上、龍朔二年、改爲奉輦大夫、咸亨元年復舊、〇中略

尙輦奉御、掌輿輦繖扇之事、分其次序、而辨其名數、直長爲之貳、

〔唐六典十九司農寺〕鉤盾署令二人正八品上

漢少府屬官有鉤盾令丞、茂陵中書云、鉤盾宦者近署、兵器所造、昭紀云、帝初立、年八歲、耕于鉤盾弄田、應劭云、帝時幼、未能親耕帝籍、鉤盾宦者近署、故往試爲弄田、後漢令六百石、魏氏闕文、晉大鴻臚屬官有鉤盾令、宋齊梁陳、省其官、後魏闕文、北齊大司農統鉤盾令丞、隋司農統鉤盾署令三人、掌薪芻及炭鵝鴨蒲藺陂地藪澤之物、皇朝令二人、丞四人、〇中略

鉤盾署令、掌供邦國薪芻之事、丞爲之貳、

〔職原抄上〕主殿寮

頭一人(無官、權名尙舍奉御)(相當從五位下、唐殿中監、〇中略)　助(權助舍直長、〇中略)(唐名尙)　允(六少丞、〇中略)(唐名尙舍)　屬(大少)(唐名尙舍令史)

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月廿八日、花町宮(〇後西院)有踐祚之事、〇中略　調進〇中略

主殿寮　幔　陣掌灯　松明

〔大江俊冬記〕天明七年十一月廿三日、大嘗會(〇光格)御習禮也、　廿四日、今日臣下內見也、〇中略

一菅蓋命主殿寮令持參、執綱執蓋試之、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

卯日、〇中略申刻以前、內辨已設、主殿寮供奉浴湯、(巳時大齋、酉時小齋、)

〔延喜式主殿三十六〕十二月晦夜、官人當日晚頭、率史生殿部今良等大内前庭、東西相分立燈臺、各相去八尺隨即燃燭、于時追儺已畢、供奉御湯、

〔西宮記正月一〕四方拜

追儺後、主殿寮供御湯、

〔九條年中行事十一月〕中卯日新嘗會事

中務輔率侍從候座、外記史等同在座、近衞開門、主殿寮先設御湯殿於寢側、○中略亥一剋、所司供夕供神物、○中略主殿寮又供御湯殿、

〔元文五年新嘗會次第〕新嘗會次第

主殿寮供御湯、有御湯殿事、

〔伏見院御記〕弘安十年十一月十七日甲辰、解齋、○新嘗會御手水、主殿寮供之、

〔延喜式主殿三十六〕毎日早朝、頭率僚下、掃治御前及宮掖所々、

〔日中行事〕卯の時に、とのもりの司、あさぎよめするをとにおどろきて、藏人御殿の格子をあぐる○中略朝ぎよめは、御殿つねの御所朝かれゐの庭、とのもりの官人五位衣冠してこれをはく、其外の所々は、つかさのみやつこかち冠して拂ふ也、

〔百寮訓要抄〕主殿寮尙衣局　禁中殿庭掃除して、松柴炭燎などの事を主どる也、

〔江家次第十七〕東宮御元服

當日平明、裝束司仰主殿寮掃除南庭、

〔江家次第三月六〕石淸水臨時祭

御前座儀

寢儀入御、作法(著御挿鞋入御)　内藏寮撤饌物等、掃部撤座、主殿掃除、

〔枕草子七〕なを世にめでたき物

りんじのまつり〇石清水のおまへばかりの事は、何ごとにかあらん、〇中略かんもりづかさのものども、たゝみとるやをそきと、とのもりづかさの官人ども、手ごとにはゝきとり、すなごならす、

〔西宮記七月〕十六日七日相撲召仰　節代

有飛塵者、主殿灑水、掃部撤張筵、

〔枕草子四〕左はすの十餘日のほどに、雪いとたかうふりたるを、〇中略おなじくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、さぶらひめして、おほせ事にていへば、あつまりてつくるに、殿守司の人にて、御きよめにまいりたるなども、みなよりて、いとたかくつくりなす、

〔内裏式上〕七日會式〇正月

其日逮昏、主殿寮執燎入自逢春承秋兩門、與宣命版位平頭、北面列立、左右各十炬、又賜五位以上祿所各二炬、

〔兼胤公記〕寶暦七年五月三日、

一主殿寮伴佐伯五月節句、御殿菖蒲、小野庄百姓等引率、加下知、爲葺度由願、關白江申入候處、難及沙汰、願之間可指送被命候、

〔延喜式三十六主殿〕釋奠料春秋並同

名香二兩、受藏人所、胡麻油二升、油瓺一口、燈盞八口、加盤下、皆准此、燈炷布二寸、松明七十把、五十把、燎五所料、廿把、燒幣物料、

〇按ズルニ、此他神事佛會諸寺諸司等ニ供スル燈燭炭燎ノ事アレド今略ス、

〔延喜式三十六主殿〕凡諸祭及節會等所須油、皆待印書出充、散見各本司式、

凡充諸司炭松者、皆令寮家仕丁燒採、其薪者、依内侍宣、以收寮薪充之、

〔季連宿禰記〕貞享四年十一月十七日壬辰、今日被行豐明節會、〇中略大中臣景忠卿、就版奏壽詞之時、

主殿少允亮信、取ニ松明一候ニ中臣之右方一、

〔内裏式上〕元正受ニ群臣朝賀一式

主殿圖書各二人、以レ次出ニ東西一、就ニ爐燒一レ香、(主殿先出ニ生炭一、圖書次出ニ焚香一、)

〔古事談王道后宮一〕顯基中納言者、後一條院寵臣也、天皇崩給之後、忠臣不レ仕ニ二君一ト云テ、七々聖忌之後、登ニ天台楞嚴院一落飾入道云々、發心之根源、天皇晏駕之期、梓宮不レ供レ燈、問ニ其由一所、主殿司皆依レ勤ニ新主之事一云々、聞ニ此事一忽發心云々、(○又見ニ古今著聞集一)

〔枕草子四〕りんじのまつり(○賀茂)のてうがくなどはいみしうおかし、とのもりの官人などの、ながき松をたかくともして、くびはひき入てゆけば、さきはさしつけつばかりなるに、(○下略)

〔今昔物語二十七〕參官朝廳辨爲レ鬼被レ噉語第九

今昔、官ノ司ニ朝廳ト事フ事行ヒケリ、其レハ未ダ曉ニゾ火燈シテ人ハ參ケル、其ノ時ニ史□□ノ□□ト云ケル者、遲參シタリケリ、辨□□ノ□□ト云ケル人ハ、早參シテ座ニ居タリケリ、(○中略)史、辨ノ被ニ早參一ニケルニ、我レ史ニテ遲參シタル事ヲ怖レ思テ、忩キテ東ノ廳ノ東ノ戸ノ許ニ寄テ、廳ノ内ヲ臨ケバ、火モ消ニケリ、人ノ氣色モ无シ、史極テ恠ク思テ、辨ノ雜色共ノ居タル屏ノ許ニ寄テ、辨ノ殿ハ何コニ御マスゾト問ヘバ、雜色共、東廳ニ早ク著セ給ヒニキト答フレバ、史、主殿寮ノ下部ヲ召シテ、火ヲ燃サセテ、廳ノ内ニ入テ見レバ、辨ノ座ニ赤ク血肉ナル頭ノ髮所々付タル有リ、(○下略)

〔今昔物語三十一〕藏人式部丞貞高於ニ殿上一俄死語第廿九

今昔、圓融院ノ天皇ノ御時ニ、內裏燒ニケレバ、□□院ニナム御ケル、而ル間殿上ノ夕サリノ大盤ニ、殿上人藏人數著テ物食ケル間ニ、式部丞ノ藏人藤原ノ貞高ト云ケル人モ著タリケルニ、其ノ貞高ガ俄ニ低シテ、大盤ニ顏ヲ充テ、喉ヲクツメカス樣ニ鳴シテ有ケレバ、極テ見苦カリケルヲ、

補任

小野宮ノ實資ノ右ノ大臣、其ノ時ニ頭ノ中將ニテ御ケルガ、其レモ大盤ニ著テ御ケレバ、主殿司ヲ呼テ、其ノ式部丞ガ居樣コソ極ク不心得ネ、其レニ寄テ搜レト宣ケレバ、主殿司寄テ搜テ、早ウ死給ヒニタリ、極キ態カナ、此ハ何ガ可爲キト云ケルヲ聞テ、〇下略

〔古事談〕二臣節 一條院御時、實方與行成、於殿上口論之間、實方取行成之冠、投弃小庭、退散云々、行成無繆氣、靜喚主殿司、取寄冠、攏砂著之、

〔枕草子〕八 宰相になり給ひにしかば、〇中略 文かきて、とのもづかさして、やらむなど思ひしほどに、〇下略

〔源平盛衰記〕一 五節夜闇打附五節始幷周成王臣下事

忠盛、身ノカタワヲ謂レテ、安カラズ思ヘ共、無爲方、著座ノ始ヨリ、殊ニ大ナル黑鞘卷ヲ、隱タル氣モナク指ホコラカシタリケルガ、亂舞ノ時モ猶サシタリケリ、未御遊モ終ラザルニ、退出ノ次ニ、火ノホノ暗キ影ニテ、オホ刀ヲ拔出シ、鬢ニスハリ〳〵ト引當ケレバ、火ノ光ニ耀合テキラメキケレバ、殿上ノ人々皆見之、忠盛如此シテ出樣ニ、紫宸殿ノ後ロニテ、主殿司ヲ招寄腰刀ヲ鞘ナガラ拔、後ニ必尋アルベシ、慥ニ預ケントテ出ニケリ、

〔增鏡〕十一今日の日影 そのとし〇正應元年 六月二日入內〇伏見后藤原鏱子 あり、〇中略 まことや御入內の夜の御使勾當內侍まいれりしろくに、うはぎからぎぬを給はる、御せうそこの御つかひに、まいれりしうへ人も、女の裝束かづきながら歸りまいりて、殿上口におとしすつ、とのもりづかさぞとるならひなりける、

〔官職秘抄〕上 諸寮頭　主殿〇中略　已上四位五位諸大夫中、有勞有功者撰任之、或諸道博士任之、〇中略

同助權〇中略　主殿〇中略　已上可任良家子、凡諸司助、以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、〇中略

依內教坊申請任例、主殿、平信道、〇中略　同允大少　大舍人〇中略　主殿〇中略　已上臨時內給、諸院宮給、文

章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分尤爲難、〇中略　同屬大少〇中略　主殿　伴氏多任之、或諸道擧、臨時內給又得之、又淸原親任者、依打滅內裏火任之、伴國方者、搦捕禁中犯人任之、

〔職原抄上〕主殿寮

頭一人無權官　五位諸大夫任之、近代小槻家隆職流相傳任之、　助權助　六位諸大夫任之　允大少　六位侍任之　屬大少

〔百寮訓要抄〕主殿寮

頭尙倉奉御尙輦奉御　地下五位六位是に任ず、近頃官務など任ずる也、　助　六位是に任ず　權助　おなじ

〔續日本紀十一聖武〕天平三年六月庚寅、外從五位下引田朝臣虫麻呂爲主殿頭、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月十五日甲子、太政大臣家令外從五位下菅原朝臣永津爲主殿權助、

〔光臺一覽四〕壬生は、〇中略　主殿頭を傳へて任ず、小槻姓にて宿禰なり、

〔明和新增京羽二重一〕官方

主殿寮　從四位下主殿助　小野筑前守伴重威　同　正五位下小野主殿權助佐伯職秀

同　從五位下小野主殿大允伴泰之　同　從五位下小野主殿少允佐伯職成

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕〇中略

小野主殿寮助伴重安　小野權助職保

〔慶應元年都仁志喜二下〕官方

主殿寮　正五位下小野主殿權助佐伯職保　從五位下小野主殿助伴重安　從五位下同佐伯職忠　正六位下同伴重勤　從六位上下村主殿少允橘幸一　同官人　中尾甲斐介藤曰則　下村

大和介橘一和　主殿寮官人　正七位下中尾三河介藤原基之

史生

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略加左右辨官各四員、〇中略主殿寮二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略大炊寮主殿寮各五人、各補一人〇中略待宣旨補任、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

諸司史生、〇中略主殿、内藏、内匠、上卿奉勅下式部丞、

〔寛徳元年都仁志喜二下〕官方

主殿史生　從六位下今藤主殿大屬玄俊　藤井上野大掾藤原明憲　島田越前大掾源雅喬　正七位下鈴木大和掾中臣義道

女官

〔枕草子十〕とのもりの女官御きよめまいりはてゝ、おきさせ給へるに、〇下略

〔朝野群載四朝儀〕切杌申爵

主殿女孺正六位上山宿禰清子誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、依年勞被敍爵状、〇中略

應徳三年十二月廿二日　主殿女孺正六位上山宿禰清子

〔江家次第二正月〕七日節會裝束

上南殿格子、掃部女孺供奉、〇供奉一本作奉仕、下同、洒掃殿上、主殿女供奉

〔光臺一覽二〕采女令主殿司の女官などとて有之候、別て主殿司の女官は、名家の辨藏人に補せられし時奏慶し、殿上の間に至るとき、湯漬をたまふ例なり、拜賀の儀式重し、其時主殿司の女官一同、晴に從五位下を下され、淺緑の袴を著し、縫箔の小袖を著され、配膳いたす例也、故に主殿司は無之間不叶官女なれども、今は男女ともに御省略の御事なれば、おまへ女孺の内兼帶して、相勤

めら、御事なり、

〔三代實錄 四十二陽成〕元慶六年十二月廿五日癸亥、聽主殿寮殿部十人、以異姓入色加補其闕、先是宮內省言、主殿寮申請、撿職員令、殿部三十人、〇三十人、令義解作廿人以日置、子部、車持、笠取、鴨、五姓人為之、今代或氏擧家絕滅、或氏無心直寮、因玆差役雜事、常煩人乏、為濟公事假補異姓、功積勞成、移式部省、而稱不載考帳、常事勘却、望請承和六年八月十四日、補異姓白丁五人之外、充補十人、其遣二十五人、待五姓人以補之、從之、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司伴部者、各以負名氏入色者補之、不得輙取白丁、若其氏无入色者、本司錄狀請官處分、但主殿寮殿部、掃部寮掃部、主水司水部、並取負名外異姓白丁五人、預勘籍例、亦主殿寮殿部十人、造酒司酒部廿人、並負名外、取異姓人色補之、

〔儀式 六〕元正朝賀儀

主殿寮官人亦各一人、率殿部十一人、著黄袍列立、

〔拾遺和歌集 十六雜春〕延喜御時、南殿にちりつみて侍ける花を見て、　源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな

〔袖中抄 九〕とものみやつこ

顯昭云、とのもりのとものみやつことは、主殿寮の下部也、或人、かの下部は伴氏なれば、とものみやつこといふことあれど、いかゞときこゆ、さしもなきにや、神祇官の下部をもとものみや人としるせり、凡は諸司にわたりてあることは、伴佐伯二の氏を用られたり、むかしは他姓のものは、改姓して諸寮の下部にはなりけり、主殿寮には伴氏たえずと云々、

〔新撰六帖 一〕あした　左京權大夫行家

殿守のとのゐやつれの庭たちに婁かしこきあさぎよめかな

使部
仕丁

〔類聚三代格十五〕太政官符
應給官田七十八町六段三百卌九歩事（○中略）
山城國廿一町二段二百四歩
右主殿寮殿部廿人粮料
以前得中務宮內兩省解偁、彼兩寮（○主殿陰陽）解偁、件月料粮等米、停給京庫、以官田所請如件者、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、
仁和四年十二月廿五日

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、（○中略）主殿寮、典藥寮、掃部寮、各十人、

〔延喜式三十六主殿〕凡量收油直丁二人、每年各給調布衫一領、襷一條、褌一條、

〔延喜式二十二民部〕凡每月晦日、令諸司仕丁掃除宮中、（以主殿寮仕丁廿五人充之）若有闕怠者、留其月粮一斗、申官返上、

〔東大寺正倉院文書三〕主殿寮解　申請駈使丁公粮事
合米肆拾壹斛壹斗捌升（人別日二升）　鹽肆斗壹升壹合捌勺（人別日二勺）　布漆拾貳（○貳恐壹誤）段（人別一段）
已上目錄
米卌八石八斗六升　鹽三斗八升八合六勺
右甲賀宮駈使丁六十七人料
米二石三斗二升　鹽二升三合二勺
右久仁宮駈使丁四人料
以前寮家駈使丁一百六十四人、（立丁八十二人、干丁八十二人、）此中先逃廿一人、（立丁十一人、干丁十人、）見定立丁七十一人、干人七十二人幷一百卌三人等、來五月廿九日（○日恐衍）箇日料、所請公粮如件、以解、

天平十七年四月十七日　從六位下行大屬丹羽臣眞咋

外從五位下行助賀茂朝臣石角　正六位上行允調連牛養

火炬小子

〔延喜式三十六主殿〕火炬小子四人、（中宮不レ在ニ此限一）取ニ山城國葛野郡秦氏子孫堪レ事者一爲之、齒及ニ冠婚一申レ省請替、其給ニ時服一者、各夏絁一丈七尺六寸、袴料七尺一寸、絲四銖、冬絁三丈五尺二寸、袴料一丈四尺二寸、綿三屯、絲四銖、履一兩、

〔延喜式五齋宮〕新造炊殿忌火庭火祭

火炬二人（取ニ同國(山城)葛野郡秦氏童女一）

用途

〔延喜式三十六主殿〕供奉年料（中宮准レ此）

沐槽一隻、（加レ案）覆絁帷一條、（長八尺、廣三幅、）浴槽二隻、覆暴布二條、（長五尺、廣二幅、）下敷調布帷二條、（條別二端）洗牀一脚、覆暴布一條、（長六尺、廣二幅、）池由加二口、（一口湯殿、一口釜殿、）覆絁二條、（各長五尺、廣二幅、）由加廿口、覆廿條、（表暴布各長三尺、廣一幅、裏絁各長三尺、廣一幅半、）板蓋廿枚、圓槽一隻、榣案一脚、覆暴布一條、（長六尺、廣二幅、）匏卅柄、絁篩七口、（圓篩五口、各四尺、油篩一口、三尺、泔篩一口、一尺、）薄絁篩三口、（各長一丈）洗槽暴布二條、（各六尺）打掃布一條、（六尺）拭布一條、（一丈二尺）筥二合、麁筥二合、御巾紵布六尺、生絲一兩、泔料白米月別二斗、土鋺形一口、土睡盤三口、土瓫八口、土火蓋十口、匜三口、覆暴布三條、（各二尺）乳缶四口、覆布四條、（各一尺）油瓶二口、（隨レ損請替）陶瓫八口、箸坩十五口、洗盤三口、鉢二口、叩瓫廿口、明櫃六合、持麻筒廿六口、杓六柄、砥一顆、燈樓料、紗二疋二丈四尺、（春秋各一疋一丈二尺）油瓶二口、燈盞廿口、燈炷調布十二端三尺六寸、（長夜一尺六寸、短夜減ニ三寸一、）燈油隨ニ夜長短一、（從ニ二月一至ニ七月一、夜別三升三合、從ニ八月一至ニ正月一、夜別三升八合、）簀敷調布一條、（二丈四尺）洗ニ拭御殿一庸布十端、御川殿巾布二條、（別一丈）洗料酒、月別五升、糟一斗、箒二百卅把、（月別廿把、寮所レ備、）槀七百十一圍、御沐料、蔣七十二圍、（月別六圍、受ニ掃部寮一、）

右起ニ十一月一日一、迄ニ來年十月卅日一料、

三年一請

漆槽二隻、漆大案二脚、覆帷二條、(油絁表、生絁裏、各長一丈七尺五寸、)漆椅二脚、漆匏二柄、絁圓篩二口、(各長四尺、)緋絲二銖、殺敷細布單二條、(各長二丈八尺、)浴槽下敷曝布帷二條、(各二端、)貫簀一枚、調席二枚、今木人衣裳料、曝布卅一端一丈二尺、(男卅六人、各三丈二尺二寸、女四人、各四丈三尺、)生絲一絇二兩、白筥二合、韓櫃三合、

寮家年料

大鋒十九口、鉇二柄、(已上請木工寮、返故、)鍬十口、鋤一口、砥一顆、等美蓑廿五領、藺笠廿五枚、清栗鹽一斛二斗、

每日早朝、頭率僚、下掃治御前及宮掖所々、正月元日燒香史生、左右各二人、其禮服者冠袷袍、(表緋、裏白、)下襲袷衣、(表緋、裏白、)白袴帶、鼻切履、執威儀物殿部、左方十一人、一人執梅杖、二人紫纖、三人紫蓋、二人菅纖、三人菅蓋、右准此、其裝束、各黃帛袷袍一領、(並一備之後、隨破請替、)

五月五日節、供奉殿部五人、各紅染曝布二丈一尺、洒水今良男十六人、各紺調布二丈一尺、調布袴各一腰、布帶調布四尺五寸、持麻筒八口、杓八柄、(七月廿五日准此、)

十二月晦夜、供奉內裏幷大極殿豐樂殿武德殿、儺料等雜物、椒油七斗六升六合、胡麻油四斗、油瓶廿六口、燈盞一千百六十六口、(二百五十三口加盤、)燈炷調布一丈九尺三寸、燈臺八十基、(紫宸殿、幷御在所料、)中宮油八斗、油坏八百口、盤百卅口、瓶十六口、燈炷布一丈三尺、追儺今良男卅人、女十六人、(女五人奉中宮、)各給衣服、表桃染布、裏調布、各二丈一尺、(女減五尺、)庸綿二屯、生絲一分、○中略

車駕行幸供奉殿部十人、各給紅染細布衫一領、細布帶一條、袴一腰、今良卅人各紺調布衫一領、調布帶一條、調布袴一腰、(已上隔三年請、)仕丁十二人、各紺布衫一領、布袴一腰、布帶一條、(已上隨破請替、)

燈樓九具、盤形燈臺三基、並隨損請替、

斑幔卅四條、(大卅條、小四條、)並廿年一請換內藏寮、

〔延喜式三十六主殿〕年中所用御薪

湯殿料一百八十荷、御匣殿御洗料七十二荷、御沐料一百八十荷、御脚水料二百卌荷、御炊料七百八荷、儲料二百荷、(中宮准此)御贄殿五荷、

〔延喜式三十六主殿〕凡油十斛、別納以爲不動、

官奴司

官奴司ハ、官戸ノ奴婢ノ名籍ヲ造リ、工能アル者ハ、色目ヲ注シテ、太政官ニ送リ、又其口分田ヲ掌リシガ、平城天皇大同三年、主殿寮ニ併セラル、其奴婢ノ事ハ、人品部、政治部等ニ載セタリ、

職員職掌

〔令義解一職員〕官奴司

正一人、(掌官戸奴婢名籍、謂依戸令、官戸奴婢、毎年本司色別、各造籍二通是也、及口分田事、)佑一人、令史一人、使部十人、直丁一人、

〔令義解一官位〕正六位階○上官奴正　從七位階○下官奴佑　大初位階○上官奴令史

〔令義解二戸〕凡官戸奴婢、毎年正月、本司色別、各造籍二通、(謂本司者、官奴司、)一通送太政官、一通留本司、有工能者、色別具注、

凡官奴婢、年六十六以上及癈疾、若被配没令爲戸者、並爲官戸、(謂下條云、家人奴婢姦主及主親、所生男女、各没官、又依律謀反大逆者、父子並没官是也、)至年七十六以上、並放爲良、(謂縁坐家賤、當没入時、既六十六以上廢疾者、即任所樂處附貫、反爲官戸、如七十六以上及篤疾者、亦從良人也、反逆縁坐八十以上、亦聽從良、謂若甲是縁坐、乙即甲奴、倶是七十六者、乙依法從良、甲爲未滿八十、猶爲官戸、其家人者、依律准奴婢之例、)

補任

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年三月壬午、外從五位下船連任麻呂爲官奴正、

直丁

〔東大寺正倉院文書三〕官奴司解　申請公粮事

米伍斗捌升（日二升） 鹽伍合捌勺（日二升恐勺誤○） 已上直丁一人料
布壹段 已上厮丁一人料
以前司家直丁并厮丁二人、來五月廿九箇日料粮、所請如件、以解、
天平十七年四月十八日 正七位上行佑上村主五百嶋
從六位下守正額田部連（缺破）

廢司
〔類聚國史（百七職官）〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、官奴司併主殿寮、

主油司

主油司ハ、諸國ヨリ貢セル膏油ヲ掌ル、宇多天皇寛平八年、主殿寮ニ併セラル、

職員職掌
〔令義解（一職員）〕主油司
正一人、掌諸國調膏油（謂內膳爲膏、自餘爲油、）事、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、
〔令義解（一官位）〕從五位（○上）主油正 正八位（○下）主油佑 少初位（○上）主油令史

補任
〔續日本紀（二十四淳仁）〕天平寶字七年正月壬子、從五位下當麻眞人吉嶋爲主油正、
〔續日本紀（三十二光仁）〕寶龜三年四月庚午、從五位下三嶋眞人安曇爲主油正、

廢司
〔官職秘抄（後附）〕宮內省被官 主油司（寛平八年、併主殿寮、）
〔享祿本類聚三代格（四）〕太政官符
應併置諸司并省官員事
主油司（併主殿寮、）○中略
寛平八年八月廿九日（○本書年月闕、據寛平八年九月七日官符補、）

典藥寮

典藥寮ノ事ハ、方技部醫術篇ニ載セタリ、

掃部寮

名稱

掃部寮ハ、カムモリノツカサト稱シ、又カモリヅカサト稱ス、カムモリ、カモリハ、並ニカニモリノ轉音ナリ、後世ニハ又轉ジテ、カモンレウト稱ス、鋪設、洒掃、及ビ牀席、蒲藺等ノ事ヲ掌ル、初メ大藏省ニ掃部司アリ、宮内省ニ内掃部司アリテ、其掌ル所相似タルヲ以テ、公會臨時ノ敷設ニ當リ、彼此相讓リテ、反テ闕怠ヲ致シヽニ由リ、嵯峨天皇弘仁十一年、二司ヲ併セテ一ト爲シ、掃部寮ト號シ、宮内省ニ隷屬セシメ、其官員ハ主殿寮ニ准ジテ之ヲ置ケリ、

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、○中略掃部寮、加牟毛里乃豆加佐

〔玉勝間一〕官名の事

掃部はもと蟹守(カニモリ)なるを、加牟毛里(カムモリ)とあるは音便なり、今世にかもんといふは、いみじき訛也、

〔倭名類聚抄六國郡〕和泉國和泉郡掃守加爾毛利

〔運歩色葉集賀〕掃守(カモリ)

〔運歩色葉集賀〕掃部(カモン)唐名洒掃

〔枕草子十〕かもんづかさまいりて、御かうし參り、

〔職原抄上〕掃部寮(カンモリノ寮ニハカモン)唐名洒掃署

職員
職掌

〔日本紀略村上三〕天暦元年七月四日丁亥、今夜大風猛烈、○中略掃部寮西屋、○中略典樂寮東檜皮葺屋等顚倒、

〔山槐記〕治承三年十二月五日戊子、前關白○藤原基房文書、於大内當時非皇居左兵衛陣屋北、被令目六、○中略午剋參向掃部寮、東西對座敷帖、○下略

〔西宮記臨時五〕一所々事

内候　主殿掃部内候所在西南廊内

〔百錬抄四條三〕長和三年三月十二日、掃部寮燒亡、

〔類聚國史百七職官〕弘仁十一年正月辛卯、公卿奏曰、掃部、内掃部、二司雖異、顧其所掌、倶是鋪設、而設公會并臨時之座、彼此相讓、動致闕怠、加以事少司多、有不穩便、臣等商量、先王垂範、政期簡要、往哲權宜、事貴沿革、伏望併兩爲一、號掃部寮、屬宮内省、專濟職務、且省煩弊、但官員一同主殿寮、伏聽天裁、奏可、○又見令集解、係閏五月五日、是歳閏在正月、五月當作正月、蓋正月十八日辛卯奏之、至閏正月五日而制可也、

○按ズルニ、官員一同主殿寮トハ、頭一人ヲ從五位下トシ、助一人ヲ從六位上トシ、允一人ヲ從七位上トシ、大屬一人ヲ從八位下トシ、少屬一人ヲ大初位上トスルヲ云フ、

〔職原抄上〕掃部寮

頭一人無權官、相當從五位下、唐名洒掃尹、守宮令、○中略　助權助、相當從六位上、唐名洒掃少尹、○中略　允大少、唐名洒掃丞、○中略　屬大少、唐名洒掃史、

〔拾芥抄中本官位唐名〕掃部頭守宮署、尚舍奉御、守宮令、洒掃尹、　助洒掃少尹、○守宮丞、前田本作守宮少監、尚舍直長、守宮丞、　允洒掃丞、　屬守宮史、尚尹〈尚尹二字恐誤〉令史、

〔唐六典十六宗正寺〕守宮署令一人正八品下

漢少府屬官有守宮令丞、主御紙筆墨及財物諸用并封泥之事、晉光祿勳屬官有守宮令、梁陳大

匠卿屬官有守宮令員、北齊光祿寺統守宮令丞、掌凡張設之事、隋衞尉寺統守宮署令二人、皇朝減一人、○中略

守宮署令、掌邦國供帳之屬、辨其名物、會其出入、丞爲之貳、

〔百寮訓要抄〕掃部寮 洒掃署 此寮は御殿の御裝束の事を奉行する所也、疊薦筵風情の物を沙汰する所なり、

〔詠百寮和歌〕掃部頭

玉すだれしとねさきはりいしだゝみおとゞをかざるよそひをぞなす

〔延喜式三十八掃部〕元日平旦、設奉拜天地四方御座、前庭鋪長筵、立御屏風、三所敷半帖、元正前一日設御座於大極殿高御座、去御座左右各一丈二尺、褰御帳命婦座、其後左右各去一丈五尺、更北折五尺、威儀命婦座、相夾御階南北各去二丈五尺、以南爲上、侍從位氈於南廂第二間、以北爲上、少納言位氈於南榮第一第二楹間、並東西相對、執翳者座於東西戶前、皇太子座於殿東南幄、大臣座於其巽角幄、又後殿以布薦十一枚、爲南榮之屏中間隔、殿內鋪葉薦、上加調席、鋪御帖八枚、立五尺御床、上施茵、左右立五尺御屏風四帖、

〔西宮記正月〕四方拜

延長九年正月一日、掃部奉仕四方拜御裝束、立御屏風八帖、鋪御座三枚於其內云々、

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

掃部寮敷御座於高御座、殿西第二間南面設皇后座、東第二間西面設皇太子座、第三四間差南去、設親王以下參議以上座、南面西上、顯陽承歡兩堂設次侍從以上座、東西面北上、

〔延喜式三十八掃部〕元日供奉威儀掃部二人、分列左右、○中略朝賀畢賜侍從巳上饗、官人率掃部、昇豐樂殿供御座、○下略

〔儀式七〕正月七日儀

掃部寮入レ自二延明門一、立二祿臺於庭中一、

〔公事根源四月〕更衣　一日

けふは衣がへなれば、宮中所々の御しやうぞく、掃部寮あらたむ、御殿の御帳のかたびら、おもてすゞしに胡粉にて繪をかく、壁代みなてつす、御たゝみなども、あたらしきをしきかふ、

〔公事根源十月〕旬　朔日

十月一日は、先御衣がへあり、掃部寮、夏の御裝束を撤して、冬のにあらためかふ、

〔延喜式三十八掃部〕凡二月四日祈年祭、設二大臣及參議以上座於神祇官西院北舍一、(大臣南面、參議以上西面北上、)同舍西壁下設二王大臣座一、(東面北上)南舍敷二座二行一、(北面東上)前一行爲二辨官并諸司五位已上座一、後一行爲二官史并諸司六位已下座一、大臣舍之東屋設二外記座一、西屋設二神祇官伯已下座一、又其屋前庭設下讀二祝詞一者座上、(東面)但御巫座在二祝師後一、又大臣已下諸司六位已上座、預設二於各舍前庭一、(爲下讀二祝詞一時座上、敷以二葉薦一)

六月奏二御卜一日、設二大臣座於殿上一、(御座東南二許丈西面)十二月亦同、

凡春日春祭、著到殿東壁下西面設二公卿座一、北壁下南面東上五位已上氏上座、南廂北面東上六位已下著到座、○中略事訖祿所設レ座、冬祭亦同、

〔儀式五〕九月十一日奉二伊勢大神宮幣一儀

其日昧爽、掃部寮於二八省院小安殿東第三間中央一鋪二御座一、(東面、其後施二屏風一、)東壁下鋪二置幣案薦一、(豐受宮幣在南、大神宮幣在北)西第一間北壁外置二簀一枚一、第二間鋪二裹幣葉薦一、其左右鋪二長席一、(爲二裹レ幣者座一、)第三間北壁下鋪二內侍座一、其南少東鋪二長疊一、(爲二闈司等座一、)東廊鋪二參議已上座一、(西面北上)北廊鋪二少納言辨座一、(南面東上)○下略

〔儀式五〕新嘗會儀

前一日、所司裝二飾豐樂院一、構二舞臺於庭前一、○中略當日寅剋、掃部寮設二式部輔以下省掌以上座於興禮門

以西擅上、〇中略平旦、掃部寮敷調薦於舞臺上、

〔枕草子七〕なを世にめでたき物

りんじのまつり清水〇石のおまへばかりの事は、何ごとにかあらん、〇中略清涼殿の御まへの庭に、かもりづかさのたゝみどもをしきて、つかひは北おもてに、まひ人は御前のかたに、これらは、ひが事にもあらん、

〔延喜式三十八掃部〕踐祚大嘗會、十月下旬裝束八省院頓宮、

凡二月八月上丁釋奠祭廟堂敷滿長席、祭畢之後、親王公卿座設都堂東方、西面北上、五位已上座設西方、東面北上重行、諸司座設東夾舍、式部大學幷諸博士學生等座設西夾舍、講畢改座賜饌、東第二三間設參議已上座、西去十許丈五位已上座、並南北相對、以東爲上、東西夾座如前、次設宴座、

〔儀式五〕正月八日講最勝王經儀

掃部寮設年分度者座於延休堂前座、殿東庭東去五許丈、木工寮以材木四枚分立四隅、掃部寮以長苫一枚廻立東南北三面、其內縱敷折薦帖一枚、爲度者剃頭座、

〔延喜式三十八掃部〕最勝王經齋會、衆僧座設於大極殿、(鋪設申省受之、事畢返上、)初終日有行幸者、設御座於高御座丑寅角及小安殿、〇中略又昌福堂設衆僧布施座、幷宣命大夫座、堂西庭設公卿已下座、

凡諸祭及節會所須席薦、預前具數、申省請受、事畢返上、

凡諸處立幄、隨事設座、其臨時所須、依官處分、

〔延喜式三十八掃部〕凡踐祚大嘗會祓禊儲料、輕幄、百子帳、軟障、大床子、屛風、帳茵等、貯納寮家、臨事出用、

凡諸國所貢調幷交易席薦等、(色目見主計式)寮先檢定、與諸司共收納、若有年中用多、支度不足者、申省聽裁、

凡朝堂院、昌福、含章、延休等堂、幷太政官曹司及廳座者、並以儲料鋪之、

供御料

狹帖一枚長八尺、廣五尺、料織席一枚、葉薦四枚、〇中略長功日二人、中功日二人半、短功日三人、

短帖一枚長四尺五寸、廣四尺、料織席一枚、葉薦二枚、〇中略長功一人、中功一人半、短功二人、

雜給料

坂枕一枚長二尺五寸、廣三尺、料編薦一枚、生絲一兩、長功一人少半、中功一人大半、短功二人、

軾一枚長二尺五寸、廣一尺、料編薦一枚、生絲一兩、苧二兩、長功一人、中功一人少半、短功一人大半、

〇按ルニ此他長帖、張席、織席、食薦、草墩、倚子、茵、細繩、圓座等ヲ造ル功程アレド今略ス、

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月廿八日、花町宮〇後西院有踐祚之事、〇中略調進〇中略

掃部寮

清涼殿夜御殿 繧繝端疊御座四帖　御疊渡御路次 筵道六百五十枚　大紋疊　厚圓座貳枚　薄圓座四枚

軾大殿祭御用　小半疊貳帖　薦

〔官職秘抄上〕諸寮頭〇中略　掃部　已上四位五位諸大夫中、有勞有功者撰任之、或諸道博士任之、〇中略

同助權〇中略　掃部〇中略　已上可任良家子、凡諸司助、以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、〇中略

同允大少　掃部〇中略　已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧、問者生、任寮三分尤爲難、〇中略自屬轉任例、掃部、桑原登輔、佐伯信眞、自木工竿師任例、掃部、春道敏助、〇中略　同屬大少〇中略　掃部〇中略　已上臨時內給、諸道所々擧、問者生、幷成功輩任之、或以本寮奏任之、凡寮奏者、於二分者許之、於三分者不許之、

〔職原抄上〕掃部寮

頭一人無權官　五位諸大夫及諸道五位任之、近代大外記中原師光後胤相續、但於今者斷絕歟、

助權助　六位諸大夫任之　允大少　六位侍任之　屬大少

〔百寮訓要抄〕掃部寮洒掃署

頭〈掃部尹〉諸道の四位五位是に任ず、近來外記おほく任ずる也、御殿御裝束以下の事を奉行する也、助〈掃部少尹〉地下五位六位是になる　權助　おなじ

〔有職問答〕一一武士掃部頭昇進事

〈師元大外記流ニ相續拜任之官也、他人不任之、雖然攝津ノ家ニ任來候、彼最祖親秀と申者ノ時ヨリカト覺申候、無權守國ニテ候ヲ、康永夏、武家東大寺八幡宮神輿造營ノ功ヲ募テ、藤原直盛と申者ヲ、丹後權守ニ吹擧候間被任候シ、武家臨時申狀者、近代不及沙汰候哉、〉

當職禁中に現在堅固也、然ル上ハ別而地下之仁拜任、無其謂也、此類可有斟酌之由、被仰出候畢、其分候哉、

〔續日本後紀〈八仁明〉〕承和六年二月庚午、從四位上紀朝臣名虎爲兼掃部頭、備前守如故、

〔明和新增京羽二重〕一外記方

掃部寮　正六位下平岡掃部助藤原利一　同　正六位下清水掃部權助藤原利尹

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕〈中略〉

平岡掃部寮權助利常　清水大允平田藤原利政

〔慶應元年都仁志喜〈二下〉〕外記方

掃部寮　正五位下清水掃部助藤原利貞　從六位上同右兵衞大尉同利厚　正六位下平岡長門介利和

史生

〔延喜式〈十八式部〉〕凡諸司史生者、〈中略〉掃部寮五人〈權一人〉〈中略〉待宣旨補任、

〔慶應元年都仁志喜〈二下〉〕外記方

掃部寮史生　從六位下奧田掃部大屬藤原信敬　正七位下中大路掃部少屬源輝光

寮掌

〔伊呂波字類抄〈加官職〉〕掃部寮　寮掌

女孺

〔日中行事〕朝ぎよめは、〈中略〉堂上はかもん、とのもりの女孺これをはく、

〔江家次第〈二正月〉〕七日節會裝束

上南殿格子〈掃部女孺奉仕〉

使部　掃部

〔儀式八〕正月八日賜女王祿儀
所司、〈中略〉立掃部女孺床子二脚、
〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〈中略〉典藥寮、掃部寮、各十人、
〔延喜式十八式部〕凡諸司伴部者、各以負名氏入色者補之、不得輙取白丁、若其氏无入色者、本司錄狀請官處分、但主殿寮殿部、掃部寮掃部、〈中略〉並取負名外異姓白丁五人預勘籍例、
〔儀式六〕元正朝賀儀
掃部寮官人左右各二人、各率執胡床掃部五人列立、

作手

〔延喜式三十八掃部〕作手八人、〈各日黑米一升六合〉

雜色

〔延喜式十八式部〕凡織部司雜色十人、掃部寮雜色五十人與考、

用途

〔延喜式三十八掃部〕年料鋪設
供御白地錦端帖四枚、〈夏冬各二枚、長一丈、廣五尺、〉緋綱端帖十枚、〈夏八枚、長八尺、廣五尺、冬二枚、長廣同上、〉同端帖四枚、〈夏冬各二枚、長六尺、廣四尺、〉
同端短帖六枚、〈夏冬各三枚、長四尺五寸、廣四尺、〉兩面端帖十六枚、〈南殿御帳下敷、長八尺、廣四尺、〉褥席七十二枚、〈月別六枚〉張席十具、其中宮御料亦同、但加下敷兩面端帖六十四枚、〈夏冬各卅二枚、長八尺、廣四尺、〉
右依前件預前儲之、夏薄冬厚、
雜給兩面端帖十六枚、〈厚薄各八枚、女御已上料、〉緣端帖七十枚、〈厚薄各卅五枚〉黃端帖三百十三枚、〈厚一百五十八枚、薄一百五十五枚、〉紺布端帖一百枚、〈厚薄各五十枚〉折薦帖九十二枚、〈並長八尺〉張席五枚、〈○枚一本作具〉簀十五枚、中宮雜給黃端帖廿枚、〈夏冬各十枚〉
同端茵四枚、〈夏冬各二枚〉紺布端帖卅六枚、〈夏冬各十八枚〉
〔續修東大寺正倉院文書二十八〕掃部司解　申請年料葛野席直錢事
合卅一貫八百七十五文　少屬大師
卅貫廣席一千五百張直〈枚別廿文〉　一貫八百七十五文運駄卅七匹半賃直料〈匹別五十文〉　十貫狹席

雜載

直

右依例所請如件

天平廿一年二月十日

〔延喜式三十八掃部〕殖藺田一町、在山城國 耕殖卌一人、以當國正税雇充 刈得藺三百八十圍、寮仕丁刈運 蔣沼一百九十町、在河內國茨田郡 刈得蔣一千圍、菅二百圍、並刈運夫、以當國正税雇役、 莞五百圍、攝津國備夫刈運 刈收者、卽用本司仕丁、

〔延喜式二十二民部〕凡掃部寮殖藺田一町、量置山城國便近之處、其營料者、以當國正税三百束、每年充之、

〔延喜式二十六主税〕凡營掃部寮藺田一町料稻三百束、每年以山城國正税充彼寮、

〔延喜式四十五左右近衛〕凡內藏、掃部寮官人已下、聽出入陣、

內掃部司

內掃部司ハ、供御ノ牀疊席薦簀簾等ヲ監シ、宮中ノ鋪設ヲ掌ル、而シテ嵯峨天皇弘仁十一年、大藏省ノ掃部司ト合シテ掃部寮ト號シタリ、

職員
職掌

〔令義解一職員〕內掃部司

正一人、掌供御牀、狹疊、謂狹疊、猶云疊 席、薦、簀、簾、苫、鋪設、及蒲藺葦等事、佑一人、令史一人、掃部卅人、使部十人

直丁一人、駈使丁卅人、

〔令義解一官位〕從六位上階〇 內掃部正ノカモリノ　正八位下階〇 內掃部佑　少初位上階〇 內掃部令史

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年三月壬午、內掃部司員外令史正六位上秦刀良、本是備前國仕丁、巧造狹疊、直司卅餘年、以勞授外從五位下、

補任

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年五月壬寅、外從五位下山田連弟分爲二内掃部正一、

駈使丁

〔東大寺正倉院文書 三〕内掃部司解　申請駈使丁公粮事

合駈使丁漆拾捌人 立丁卅人 斷卅八人

應請米貳拾參斛貳㪷 人別日二升　鹽貳㪷參升貳合 人別日二勺　庸布參拾捌段 人別一段

已上目錄

甲賀宮陸拾貳人 立丁卅二人 斷丁卅人

米拾捌斛伍㪷陸升　鹽壹㪷捌升伍合陸勺　庸布參拾段

久邇宮壹拾肆人 立丁六人 斷八人

米參斛肆㪷捌升　鹽參升肆合捌勺　庸布捌段

難波宮貳人 並立丁

米壹斛壹㪷陸升●　鹽壹升壹合陸勺

以前駈使丁等米、五月廿九箇日料、所レ請公粮如レ件、以解、

天平十七年四月十七日　從七位下行員外令史家原連男常

外從五位下行正客君 別當　正七位上行令史掃守連 故

廢司

〔官職秘抄 後附〕内掃部司 弘仁十一年正月、併二掃部寮一、

正親司

正親司ハ、オホキムダチノツカサト稱ス、皇族ノ名籍ヲ知リテ、其季祿時服ヲ賜フ事ニ與カル、

名稱　司印　職員職掌

〔倭名類聚抄 五官名〕司　職員令云、正親司、〈於保岐無太知乃司〉

〔有職問答 三〕一正親官事

同訓の憚によりて停止と云々、いつのころより斟酌候哉、〈不勘得候、近代王氏五位任之由、載職原抄歟、〉

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞

正親司〈オホキミノツカサ〉

〔職原抄 上〕正親司〈唐名宗正寺〉

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年十月甲戌、始賜諸陵、圖書、雅樂、園池、正親司、印各一面、

〔令義解 一職員〕正親司

正一人、〈掌皇親名籍、謂二世以下四世以上名籍、案戸令皇親爲不課、故知於京職亦可有皇親戸籍也、〉事、佑一人、大令史一人、少令史一人、使部十人、直丁一人、

〔令義解 一官位〕正六位〈上階〇〉正親正〈オホキミノカミ〉　從七位〈下階〇〉正親佑　大初位〈上階〇〉正親大令史　正親少令史〈下〇階〉

〔拾芥抄 中本官位唐名〕正親正〈宗正卿 宗正尹〉　佑〈宗正丞〉　令史〈宗正錄事 宗正主簿〉

〔唐六典 十六宗正寺〕宗正寺卿一人從三品

石氏星經云、宗正二星在帝座東南、周禮小宗伯掌三族之別、以辨親疏、漢百官表云、宗正秦官、掌親屬、平帝元始四年、更名宗伯、王莽并其官於秩宗、光武復置、續漢書百官志、宗正掌序錄王國嫡庶之次、宗室親屬遠近、漢宗正之官、不以他族、楚元王子郢客劉辟彊劉德等、遞爲之、魏亦以宗室居之、晉桓溫奏、省屬太常、宋齊並不置、梁天監七年乃置焉、宗正春卿、位視列曹尚書、皆以宗室爲之、班第十三、陳因之、後魏亦曰宗正卿、第二品上、北齊第三品、隋開皇初、宗正卿正三品、煬帝爲從三品、皇朝因之、光宅元年、改爲司屬、神龍初、復爲宗正、〈〇中略〉

宗正卿之職、掌皇九族六親之屬籍、以別昭穆之序、紀親疏之列、幷領崇玄署、少卿爲之貳、

〔延喜式三十一宮內〕凡親王諸王名籍者、皆於正親司案記、其有品內親王、若有請事者申省、省受申官、卽朝參及勅召者、申縫殿寮、又內侍知之、

〔類聚國史百七職官〕元慶五年五月十日丁巳、制令正親司進四世已上諸王歷名帳於太政官、每有闕補、隨令改正、一如式兵二省補任帳、下委祿符之日、卽備於勘會、

〔類聚符宣抄六〕皇親籍三卷　勘出帳一卷　並延曆八年作

右外記曹司無有件書、而今四部之書在正親司、望請取彼一部、以爲官料、

弘仁十二年十一月四日

〔延喜式三十九正親〕凡諸王計帳者、令造二通、司加押署、東京職判畢、一通留司、待年足符、卽勘會申省、

〔延喜式三十一宮內〕凡無位諸王卒者、待京職移、下符正親司、勘會申省、省卽申官、

〔百寮訓要抄〕正親司宗正寺　皇親の名籍の事を主るよし、令に見えたり、皇親とは、天子の御えたしき宮などを申也、近代此事を奉行する事なし、

〔延喜式三十九正親〕凡諸王年滿十二、每年十二月、京職移宮內省、省以京職移卽付司、令勘會名簿訖、更送省、明年正月、待官符到、始預賜時服之例、

凡給季祿男女王、同世之中、有同名者、速令申換、截帳進之、

凡正月八日給祿女王、所司設座於殿庭、立幄二字於安福殿前、積祿於版位南、亦供奉殿上裝束、天皇御紫宸殿、內侍率女官就座、本司官人引女王自月華門參入、女王先就幄下座、以世爲次、不據長幼、次官人共趍就前庭座、佑一人執簿唱曰、某親王之後、卽一祖之胤、皆下座共稱唯、就庭中座、座定執簿一々喚名、女王卽稱唯、進受祿退出、餘亦如之、

凡諸王給春夏時服者、○中略正月廿日錄送省、秋冬准此、

補任

凡給女王二節祿見參簿、當日早旦奏之、

凡參平野祭所官人、幷諸王見參歷名、進太政官、

凡參藥師寺最勝會王氏無官六位已下、廿人已下十六人已上、司預差定、三月一日名簿進太政官、

〔官職秘抄上〕諸司正〇中略　正親內膳　已上王氏任之、〇中略　同佑〇中略　正親〇中略　已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功、臨時內給等任之、或以本司奏任之、王氏任正親佑例、正業、能有、已上皆補正、〇中略　同令史〇中略　正親〇中略　已上以本司奏任之、或臨時內給、

〔職原抄上〕正親司

正一人　近代王氏五位任之、他人所任遲逅　佑　常不任之　令史

〔百寮訓要抄〕正親司

正宗正卿　地下の五位是に任ず、いたく人の執せぬ也、　佑正宗丞　六位是になる　權佑　おなじ

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字三年十一月丁卯、從五位下和王爲正親正、

〔文德實錄三〕仁壽元年二月辛亥、善永王爲正親正、

〔皇胤紹運錄〕花山院

清仁親王 ― 康資王

源顯康從五下、安藝權守、正親正、右大臣顯房爲子、

〔朝野群載九議狀〕依敍勞幷奉公功、申加階、

從五位下行正親正致清王誠惶誠恐謹言

請被殊蒙天恩、因准先例、依敍勞幷奉幣使等功、敍一階狀、〇中略

永久二年正月四日　從五位下行正親正致清王

別當

〔儀式八〕正月八日賜女王祿儀

祿以西五許尺、更南折一許丈、立正親司別當以下、令史以上床子、

〔延喜式三十掃部八〕同日〇正月八日賜女王祿〇中略祿西南立正親司別當以下令史已上床子、

史生

〔日本後紀五桓武〕延暦十五年八月己卯、始置正親司史生二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略正親司內膳司各二人、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略正親司〇中略六人、

用途

〔延喜式三十九正親〕凡闕官及不仕官人已下、要劇番上料者、充修理司中小破幷雜用、

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

正親町正親町北、西洞院東、一町、

雜載

〔山槐記〕元暦元年九月十一日丁亥、今日例幣也、〇中略召使王、正親正資遠王入東門參上、跪居軾傍、出訴訟之詞、近江國保田卅丁依爲司正、資遠可知行之處、伯仲資王知行之、付頭辨雖訴申、于今不蒙裁許、無此裁許者難進發者、〇下略

內膳司　御厨子所　進物所　併入

內膳司ハ、ウチノカシハデノツカサト稱シ、又ナイゼンシト稱ス、長官ヲ奉膳ト云フ、御膳ヲ總知シ、進食ノ時、先ヅ嘗ミルコトヲ掌ル、奉膳ニハ高橋安曇二氏ノ人ヲ任ズルヲ以テ例ト爲シ、若シ他氏ノ人ヲ以テスル時ハ、正ト稱シテ之ヲ別テリ、然ルニ桓武天皇延暦十一年、安曇氏、罪ヲ獲テ流ニ處セラレシヨリ、奉膳ハ常ニ高橋氏ヲ以テ之ニ任ゼリ、次官ヲ典膳ト云フ、御膳ヲ造リ、庶味ヲ調和スルコトヲ掌ル、宇多天皇寛平八年、園池司ヲ此ニ併ス、

近江國筑摩ニ御厨アリテ、本司ニ隷ス、膳部一人ヲ擇ビテ御厨ノ長ト爲ス、初メ大膳職ニ隷セシガ、桓武天皇延曆十九年、改メテ本司ニ隷ス、

贄殿ハ、本司中ニアリ、太宰府及ビ諸國ヨリ貢進スル所ノ御贄ヲ納メ、供御ノ料ニ備フ、別當、預、出納等アリテ之ヲ管ス、

御厨子所ハ、後涼殿ノ西庇ニアリ、內膳、內藏、造酒、大膳等ノ御厨、及ビ衞府ノ御贄ノ酒食ヲ以テ御膳ニ供スルコトヲ掌ル、別當、預等アリ、

進物所ハ、月華門外南腋ニアリ、亦御膳ヲ掌ル、別當、預アリ、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕司　職員令云、○中略 內膳司、宇知乃加之波天之官

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞

內膳司（ウチノカシハデノツカサ）

〔運步色葉集 那〕內膳正（ナイゼンカミ）唐名尚食

〔職原抄 上〕內膳司 唐名尚食局

沿革

〔日本書紀 三十持統〕元年春正月丙寅朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、○中略 於是奉膳紀朝臣眞人等奉奠、奠畢、膳部采女等發哀、樂官奏樂、

〔類聚國史 三十二帝王〕延曆十七年八月癸卯、御○桓武 內膳院曲宴、賜物有差、

廳舍

〔中右記〕寬治八年○嘉保元年 十一月三日辛丑、今日戌剋、立內膳屋、其所從町尻東、御倉町中也、○中略 件屋五間二面、卯酉、先例也、修理職作之、四方壁者、

〔類聚國史 百七職官〕天長六年五月丁亥、園池司地四段、賜內膳司膳部曹司處、

司神

〔延喜式 十六陰陽〕庭火并平野竈神祭 坐內膳司

神座十二前 各六前○下略

〔文德實錄九〕天安元年四月癸酉、內膳司忌火庭火神、並授從五位下、

〔享祿本類聚三代格十〕供御事（○此間闕文）

□樣進納內膳司、所司卽採物、別其表、而召阿房之刀自部、令祀膳神、但春秋之祀物者、臨時取□□淨物、依恒數充行、自今以後、永爲恒例、

天平三年九月十二日

〔延喜式三十九內膳〕園神祭（春秋並同）

十四座（京北園二座、長岡園三座、奈良園三座、山科園一座、羽束志園三座、奈癸園一座、政所一座）

右五位一座（京北園）、六位十三座

〔令義解一職員〕內膳司

奉膳二人、（掌總知御膳、進食先嘗、謂在御所而嘗之、凡玉食珍羞、欲登天供、膳官營造、淸戒俱至、然猶慮其誤犯、故在照臨而先嘗、）事、典膳六人、（掌造供御膳、調和庶味寒溫之節、謂寒甚者噯、熱過者爛、令其調適不失中和、其依考課令、大膳職亦須知御膳、）令史一人、膳部卌人、（掌造御食、）使部十人、直丁一人、驅使丁廿人、

〔令義解一官位〕正六位（○上階）內膳奉膳　從七位（○下階）內膳典膳　大初位（○上階）內膳令史

〔拾芥抄中本官位唐名〕內膳正（尚食局尚食奉御）　奉膳（尚食奉御）　典膳（尚食直長）　（主食）　食醫　令史（尚食令史）

膳部（主膳）

〔唐六典十一殿中省〕尚食局奉御二人正五品下

周禮有膳夫內饔、秦置六尚、有尚食之名、如淳以爲主天子物曰尚、漢因之、後遂省幷其職於太官湯官、至北齊門下省統六局、尚食局、有典御二人、丞監各四人、又有集書省統三局、有中尚食局、典御二人、監四人、品與尚食同、後周有內膳上士二人、中士四人、凡進食必先嘗之、至隋開皇初門下

省統尙食局、有典御二人、直長四人、食醫四人、大業三年、分屬殿內、改典御爲奉御、員二人、正五品上、皇朝因之、龍朔二年、改爲奉膳大夫、咸亨元年復故、(中略)尙食奉御、掌供天子之常膳、隨四時之禁、適五味之宜、(註略)當進食、必先嘗、凡天下諸州、進甘滋珍異、皆辨其名數、而謹其儲供、直長爲之貳、

〔有職問答 三〕一內膳事

奉膳典膳膳部、何れも是に屬候分別、慥に被仰出度候、又役はいづれ、家又如何、

奉膳ハ內膳ノカミニアタル、近代高橋氏ノ者、必奉職ニ任、當時其定候、典膳ハ內膳ノスケ、膳部ハ內膳ノサクハンニテアルベク候哉、

〔令義解 四考課〕監造御膳、(謂亮以上、及奉膳爲監、典膳爲造也、)淨戒無誤、(謂不犯食禁也、)爲主膳之最、(謂亮及典膳以上、)

〔律疏 職制〕凡造御膳、誤犯食禁者、典膳徒三年、(謂造御膳者、皆依食經、經有禁忌、不得輙造、若乾脯不得入黍米中、莧菜不得和鼈肉之類、有所犯者、典膳徒三年、)若穢惡之物在食飲中、杖一百、簡擇不精減二等、(謂簡米擇菜、有不精好者、)不品嘗者、杖六十、(謂酸鹹苦辛之味不品嘗、及應嘗不嘗、俱得此坐、)

〔百寮訓要抄〕內膳司　天子の供御奉行する所也、たとへば膳部所など申所、同事也、昔は內膳の御飯ならでは、主上のきこしめさぬ事也、凡もろ〳〵の御膳の具を此所におかる、

〔詠百寮和歌〕內膳正

色々のおものを日々に備るにからくさものに手を盡しつゝ、

〔儀式 六〕元日御豐樂院儀

內膳司預辨供皇帝皇后御饌、

〔儀式 七〕正月七日儀

內膳司(著當色、)益供御饌、(左右各三人、其次第、采女司前行、次正奉膳、左右相分、擎御饌、典膳次之、典膳不足者、用進物所人、)升自西階、至第一階、而留授采女、降階趨退、

〔公事根源七月〕七日御節供

内膳司より是を調進す、けふさくべいを用事、ゆへある事にや、

〔北山抄正月一〕上子日供若菜事内藏寮、内膳司、各供之、

〔公事根源正月〕供若菜　上子日

内藏寮ならびに内膳司より、正月上の子日、是を奉る也、

〔忠利宿禰記〕承應三年十一月廿八日、花町宮〇後西院有踐祚事、

調進〇中略　内膳司　三ヶ日晴御膳　三ヶ日朝餉

〔延喜式内膳三十九〕諸祭雜菜

園韓神祭三斛、春日祭四斛、平野祭三斛、大原野祭三斛、釋奠祭四斗、色目見大膳式

六月神今食料十二月准之

淡路鹽二升、東鰒七斤五兩、薄鰒六斤十兩、堅魚五斤、干鯛六隻、干鯵卅隻、鮨鰒、煮鹽年魚、醬鮒、各二升、廿鹽鯛四隻、海松、海藻、各六斤十兩、干棗子、生栗子、搗栗子、菱子、各二升、十二月以橘子代菱子瓫四口、堝十口、大四小六、松明八束、供奉官人二人、膳部六人、各給暴布褌一條、長八尺

〔北山抄六月二〕朔日供忌火御飯事

内膳司、早旦御粥以前付采女、於大床子御座供之、用御大盤一脚、不稱警蹕、

同日〇十一日神今食事

内膳司兆人、簡付内侍令奏、内侍不候者、或付藏人、覽畢返給、

〔延喜式内膳三十九〕最勝王經齋會料、雜菜六石五斗四升五合充大膳職、同會料理佛聖供養官人二人、膳部四人、各給調布衫一領、別二丈一尺調布四條、長各八尺、膳部四人褌料、

七寺七月十五日盂蘭盆料、菜三石二斗、寺別四斗五升七合菓子二石四斗三升、寺別三斗四升七合

補任

諸節供御料中宮亦同、下皆准此、

正月三節○中略

右三節料、依前件一度請受、節別分供、但射禮料用此內、又十八日賭射、辨備肴物給王卿及近衞次將等、

蘿蔔味醬漬、瓜糟漬、苽、鹿宍、猪宍、押鮎、煮鹽鮎、瓷盤七口、高案一脚、長三尺五寸、廣一尺七寸、高四尺、

右從元日至于三日供之

〔延喜式十八式部〕凡內膳司勘解由使齋院司、莫責神祇等不參、

〔官職秘抄上〕諸司正○中略　內膳　已上王氏任之、內膳奉膳、高橋氏中、撰其人任之、自典膳轉任奉膳例、忠主、忠彥、經國、○中略　同佑○中略　內膳典膳○中略　已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功、臨時內給等任之、或以本司奏任之、○中略　依氏擧任內膳典膳例、高橋基村、以諸國掾相遷內膳典膳例、紀貫之○中略　同令史○中略　內膳○中略　已上以本司奏任之、或臨時內給、

〔職原抄上〕內膳司

正一人　奉膳一人　近代奉膳乃爲正、高橋氏相傳任之、　典膳　令史　已上膳部外不任之

〔百寮訓要抄〕內膳司

正尚食奉御　四位五位是になる　奉膳同上　高橋の氏ならでは任せざる官也　典膳尚食直長

六位是になる

〔詠百寮和歌〕奉膳

高橋の氏に備るつかさをば猥りにたれか望わたらん

〔延喜式十八式部〕凡內膳司長官、除高橋安曇二氏以外爲正、

〔本朝月令六月〕十一日神今食祭事見儀式

高橋氏文云、太政官符、神祇官、定高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後事、右被右大臣宣偁、奉勅如聞先代所行、神事之日、高橋朝臣等立前供奉、安曇宿禰等更無所爭、但至于飯高天皇〇元正御世、靈龜二年十二月、神今食之日、奉膳從五位下安曇宿禰刀、語典膳從七位上高橋朝臣乎具須比曰、刀者官長年老、請立前供奉、此時乎具須比答云、神事之日、供奉御膳者、膳臣等之職、非他氏之事、而刀猶强論、乎具須比不肯、如此相論聞於内裏、有勅判、累世神事、不可更改、宜依例行之、自爾以來、尤有爭論、至于寶龜六年六月神今食之日、安曇宿禰廣吉、强進前立、與高橋波麻呂相爭、挽却廣吉、事畢之後、所司科祓、于時波麻呂固辭、無罪何共爲祓、是言上聞、更有勅判、上中之祓、科廣吉訖、其後廣吉等、妄以僞辭加附氏記、以此申聞、自得爲先、因玆高橋朝臣等、雖不敢披訴、而憂憤之狀、稍有顯出、去延曆八年爲有私事、各進記文、卽喚二氏勘問事由、兼搜撿日本紀及二氏私記、乃知高橋氏之可先、而事經先朝、不忍卒改、思欲令一先一後、彼此無憂、雖未勅所司、而每臨祭事、宜知二氏遞令先後、而今内膳司奉膳正六位上安曇宿禰繼成、去年六月十一月十二月、三度神事、頻爭在前、猶不肯進、仍勅應遞先後之狀、比來頻已告訖、宜此度依次令高橋先、而繼成不奉宣勅、直出而退、竟不供奉、爲臣之理、豈如此乎、宜稽故事以定其次、兼論所犯、准法科斷者、謹案日本紀、卷向日代宮御宇大足彥忍代別天皇〇景行五十三年、巡狩東國、渡淡門、是時聞覺鴐鳥之聲、欲見其形、尋之出海中、仍得白蛤、於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈、高橋祖也以蒲爲手繦、白蛤爲膾而進之、故美六鴈臣而賜膳大伴部、撿其家記、略同於此、是高橋氏預奉御膳之由也、及輕島明宮御宇譽田天皇〇應神三年、處々海人、訕哤之不從命、乃遣安曇連祖大濱宿禰平之、日爲海人之宰、是安曇氏預奉御膳之由也、又安曇宿禰等欵云、御間城入彥五十瓊殖天皇〇崇神御世、己等遠祖大栲成吹、始奉御膳者、仍撿其私記文、追注行下、筆迹殊拙、不庶字、奸詐之端、於是見矣、然則考之國史、求之家記、磐鹿六鴈、委質於前、大濱宿禰、策名於後、時經五代、口逾二百、相去懸遠、更尤可疑、先後之次、事已灼然、理須以高橋爲先、安曇在後、又繼成固執僞記、臨事爭先、恣意逝去、遂不供奉、不承詔命、

史生

無人臣禮、此而不正、何以懲後、仍案職制律云、對捍詔使、而無人臣之禮者絞、名例律云、對捍詔使、而无人臣之禮者、爲大不敬、又云、犯八虐獄成者除名者、今繼成所犯、准犯依律、處絞刑、令除名、謹具狀奏聞者、奉勅宜宥其死以處遠流、自餘依奏者、官宜承知以爲永例、符到奉行、延曆十一年三月十九日、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年二月癸巳、從五位下布勢王爲內膳正、中略○是日勅、准令以高橋安曇二氏任內膳司者爲奉膳、其以他氏任之者宜名爲正、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年十一月丁卯、從五位下高橋朝臣子老爲內膳奉膳、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年四月庚戌朔、從五位下高橋朝臣老麻呂爲內膳奉膳、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜元年十一月丁丑、授典膳正六位上安曇宿禰諸繼從五位下、即轉奉膳、

〔文德實錄八〕齊衡三年正月丙辰、從五位下高橋朝臣淨野爲內膳奉膳、

〔三代實錄淸和一〕天安二年十一月廿五日壬午、從五位下高橋朝臣淨野爲內膳奉膳、

〔三代實錄淸和八〕貞觀六年三月八日甲午、右兵庫頭從五位下連扶王爲內膳正、

〔春記〕長曆四年長久元年○十一月十日辛酉、有小除目事、任奉膳事也、齋宮助經正、前志摩守、未得解由者也、依爲氏人被任已畢、故脩道之息信季、依得父讓尤可任也、而重服之上、太以幼年者也、仍此度不被任也者、

〔明和新增京羽二重一〕兩局藏人方催之外

內膳司　正五位下　濱嶋播磨守高橋等淸　同　從六位上　濱嶋內膳奉膳高橋等庭

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕參仕中略○

後藤　內膳司奉膳高橋實定

〔慶應元年都仁志喜二下〕內膳司　從五位下　濱嶋志摩守高橋實庭

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、中略○內膳司二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、中略○內膳司各二人、

膳部

食長上
料理長上
網曳長
江長

御炊

〔慶應元年都仁志喜二下〕內膳司史生 從六位下齋藤周防權掾藤忠晴 同 大和少掾同忠保 從七位上齋藤常陸少掾藤政忠 須藤伊豆目藤往吉 木田伊賀目同榮福

〔類聚國史百七職官〕大同四年五月庚午、加內膳司膳部卌人、

〔延喜式三十九內膳〕凡膳部勞、十年已上者、隔三年一人預勸籍例、

〔延喜式三十九內膳〕膳部卅人〇卅人恐卌人誤根、白米人別日一升、鹽一勺、〇中略膳部卅人給衣服、

〔慶應元年都仁志喜二下〕內膳司膳部妹背出雲目平正邇 松下大和少目伴季韶 藤田甲斐目藤康長

〔日本後紀十七平城〕大同三年七月庚子、停內藏寮御履長上一人、內膳司食長上一人、料理長上一人、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

網曳長一人 江長一人已上元隷大膳職、

右被大納言從三位神王宣偁、件長等、宜改隷內膳司、

延曆十七年六月廿五日

〔延喜式三十九內膳〕凡山城河內攝津和泉等國、江網曳御厨所請徭丁、江卅人、網曳五十人、

〔類聚雜要抄三五節雜事〕內大臣(藤原忠通)令五節進給定文

一大破子百九十六荷〇中略

內膳御炊〇中略 以上同前〇廿合荷、中略、

永久三年十月十九日

〔薩戒記〕應永卅二年十月廿三日己丑、左頭中將隆夏朝臣示送曰、內膳司申、御膳屋幷御膳具等、去月廿四日燒亡了、大炊御門可新造之間、御訪事申狀如此、此事貫首可申沙汰哉如何、予〇藤原定親答曰、尤可被申沙汰也、以件申狀可被奏院〇後小松也者、

內膳司御炊岩夜叉丸注申〇下略

炊夫

〔日本紀略 七圓融〕天元元年十月十三日乙丑、今朝内膳司炊夫頓死之間、其穢出來諸陣立札、

作器手

〔延喜式 三十九内膳〕作木器二人、一人贄殿、一人司家、作土器九人、月別一人所造、折櫃卅合、土器七百八十口、大坏、中坏、淺坏、下坏、埦形、片盤、盆、堝等類、作土器人、充商布九段、料埴器鍬九口、納舊請新粮人別、日黑米二升、鹽二勺、時服夏冬各絁四丈五尺、冬絁一疋三丈、綿四屯、

使部

〔延喜式 十八式部〕凡諸司使部者、○中略内膳司、○中略各六人、

仕丁

〔延喜式 三十九内膳〕仕丁十七人粮、黑米人別日二升、鹽二勺、

仕丁十七人、紺布衫一領、別二丈調布袴一腰、別七尺調布帶一條、別長八尺四寸、中割、三年一請、

〔東大寺正倉院文書 三〕内膳司解　申請公粮事

合米拾漆斛玖斗捌升　鹽壹斗漆升玖合捌勺　布參拾段

總駈使丁陸拾貳人　欠參人直丁一人厮丁二人並逃亡

定陸拾壹人直丁一人厮丁卅人　直丁卅人之中直丁二人　並應請久仁宮

以前直丁已下厮丁已上、來五月廿九箇日料、幷應請於久邇宮等、顯注如件、以解、

天平十七年四月十七日　從八位下行令史日下部連老人

奉膳正七位上兼行采女正采女朝臣比等　正八位上守典膳雀部朝臣眞人

正八位下守典膳栗前連東麻呂

別當

〔職原抄 下〕内膳別當知内膳司事　大中納言中補之

〔百寮訓要抄〕内膳司

別當　可然公卿大納言以下是に任ず、御膳を奉行すべき人なれば、公達も可然家々の人も任る也、

〔江家次第 三正月〕踏歌

御厨別當
筑摩御厨

内膳入自月華門、供御膳、(運々時、内膳別當公卿下殿催之、内膳正以下令史等叉手前行、膳部等擎御膳相從、)

〔西宮記 臨時一〕諸宣旨

内膳御厨別當、筑摩長等事、以名簿下給、上卿可仰下辨官、但至于筑摩長等、給官符於式部、(載式、)

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

筑摩御厨長一人

右撿案内、件長元隷大膳職、今被右大臣宣偁、改隷内膳司、

延暦十九年五月十五日

〔延喜式 式部十八〕凡内外諸司史生、(○中略)筑摩長等、以雜色人補之、並把笏、

凡内膳司近江筑摩御厨長歷、六年爲限、

〔延喜式 内膳三十九〕凡筑摩長、擇膳部中補之、

〔延喜式 大藏三十〕凡筑摩御厨、舊納不進者、不得充行新造料物、

〔三代實錄 光孝四十八〕仁和元年九月七日戊子、勅、(○中略)停近江國筑摩御厨長幷調丁充雜丁、

〔三代實錄 光孝五十〕仁和三年六月十一日癸丑、去仁和元年九月七日、内膳司奏停廢近江國筑摩御厨長幷調丁、是日勅復舊充之、以供御之事多致闕乏也、

〔權記〕長保二年正月十九日丁酉、詣左府、(○藤原道長)申近江國筑摩御厨長物部永邦任符可令作事、依請、

四年二月一日丁卯、近江筑摩御厨長淺井當宗秩滿替、物部永邦官符付妙讃師送行覽阿闍梨房、

〔朝野群載 八別奏〕太政官符

式部省

應補筑摩御厨長某姓某厨事

右左大臣宣、奉勅件人補彼厨長某姓某丸之替者、宜承知依宣行也、符到奉行

贄殿

用途

辨　　史

年月日

〔拾芥抄 中末 宮城〕贄殿（在内膳中、有別當、藏人、預、出納、太宰及諸國所進御贄、納備供御給料、納御厨子所也、）

〔日本紀略 十二 三條〕長和二年十一月廿九日丁巳、今日采女町燒亡、内膳司贄殿同燒、

〔延喜式 三十九 内膳〕供御月料

糯米二斗四升七合五勺、粟三斗四升五合、糯糒一斗二升七合五勺、粟糒三升七合五勺、米三斗六升四合、秫米一斗五升、黍子三斗、糖一斗四升二合五勺、小麥一石四斗一升、薏子七升五合、大小豆各二斗二升五合、胡麻子荏子各一斗一升二合五勺、大角豆一斗三升五合、酒七斗五升、搗糟六斗七升五合、汁糟六斗、酢三斗七升七合五勺、胡麻油一斗五升、末醬一斗五升、醬八斗三升、滓醬七升五合、鹽一石一斗八升五合、脯九斤、鳥腊押年魚各十六斤八兩、東鰒卅五斤、薄鰒十一斤四兩、隱岐鰒卅五斤、醬鰒廿一斤、堅魚二百廿五斤、煮堅魚熬海鼠各八斤四兩、蛸烏賊各廿三斤四兩、鮭卅五隻、腊四斗五升、乞魚皮廿斤十三兩、堅魚煎海鼠腸各四升五合、安房雜鰒廿三斤四兩、腹漬鰒二斗三升二合五勺、久惠脯十三斤八兩、雜鮨二斗三升二合五勺、鮨皮廿一斤十二兩、能登鯖一百卅二隻、紫菜十二兩、海松二斤四兩、滑海藻十三斤八兩、海藻廿二斤八兩、大凝菜四斤八兩、於期五斤四兩、鹿角菜十二斤、伊祇須九斤、芥子豉各四升五合、口醬廿三顆、干棗子一斗四升二合五勺、搗栗二斗九升三合五勺、干栗子七斗五升、生栗子二石二斗五升、干柿子廿九連、椎子四斗五升、吳桃子一斗五升、橘子卅五蔭、擬橘子菱子各二斗二升五合、蓮子一斗五升七合五勺、帛七尺、（拭金銀朱漆御坏料、）燈油六升、（盛所進物所各三升、）箸竹四百五十株、（九十株山城國乙訓園、三百六十株相樂郡鹿鷲園、）

右月料、小月減卅分之一、

炭一石四斗、（盛所四斗、進物所、并菓子所、各五斗、）松明三把、（盛所、進物、菓子所、各一把、）薪一百廿斤、（大炊所、并煮雜物所、各六十斤、）造雜餠料甘醴一升、

右日料

盛餠甜物菓子、柳筥各二合、(各長一尺、廣九寸、)麄筥廿一合、圓櫃廿四合、檳榔葉十枚、

右起七月七日盡十月供料

供奉雜菜

日別一斗、𪉩料三升、生瓜卅顆、(准三升、自五月迄八月所進、)茄子卅顆、(准二升、六七八九月、)莧四升、(五六七八月、)蕑六把、(准六升、自二月迄九月、)路二把、(准二升、五六七八月、)蔓菁四把、(准四升、自正月迄十二月、)莖立四把、(准四升、二三月、)薺四升、(正二十一十二月、)萵苣四把、(准二升、三四五月、)葵四把、(准二升、五八九十月、)羊蹄四把、(准二升、四五八九十月、)韮二把、(准二升、自二月迄九月、)葱二把、(准一升、正四五九十十一十二月、)蒜一百根、(准二升、正二三四十一十二月青進、五六七八九月干進、)生薑八房、(准二升、六七八月、)蜀椒二合、(三四月稚葉、五六月子、)蓼十把、(准二升、自四月迄九月、)蘭二把、(准一升、自正月迄十二月、)胡荾二合、(正二九十十一十二月、)蘿菔根四把、(准四升、正二十十一十二月、)芹四把、(准四升、自正月迄六月、)水葱四把、(准四升、五六七八月、)芋莖二把、(六七八九月、)雜菓子五升、生大豆小豆各六把、(並六七八九月、)生大角豆六把、(六七月、)芋子四升、(正九十十一十二月、)波々古五升、(二三月、)熟瓜八顆、(六七八月、)栗子三升、(七八九月、)桃子四升、(七八九月、)柚子十顆、(九十月、)柹子二升、(九十十一月、)枇杷十房、(五六月、)李子二升、(五六月、)覆瓫子二升、(五六月、)笋四把、(五六月、)中宮准此、其東宮雜菜五升、𪉩料二升、雜菓子三升、生大豆小豆大角豆各三把、波々古芋子各二升、栗子一升、桃子二升、柚子五顆、柹子李子、各一升、枇杷十房、笋二把、

〔延喜式 内膳三十九〕供御料雜器

朱漆臺盤四面、(二面尋常料、二面節會料、)　黑漆臺盤二面(潔齋料)　金銀朱漆瓷雜器

右供御雜器、從藏人所請、但尋常料、臺盤二面、帊料油絁二丈五尺二寸、隨破損申官、請受內藏寮、

朱漆椀五口、(各深三寸五分、口徑一尺一寸、)中宮東宮各三口、金銅界文臺五基、(各高一尺、徑八尺、)中宮東宮各三基、

右日供諸節通用、並隨破請換、

〔延喜式 内膳三十九〕年料

御飯帛被三領、二領、別綿五屯、一領、三屯・一兩二銖、並長二丈五尺、裹衦麵帛帷一條、長七尺、絹大篩四口、水瓶麻笥料、口別各長三尺五寸、絹小篩九十五口、煮雜羹所十三口、漬菜所十四口、菓餅所十三口、麥粉所十一口、糯粉所七口、油所三口、甘葛煎所三口、醬所八口、雜用廿四口、並長二尺、薄絁篩廿五口、搗胡麻子料四口、各長四尺、胡桃料三口、各長二尺、甘葛煎料二口、各長二尺五寸、濾蔓料五口、各長四尺、芥子料三口、各長三尺、已上十七口、並二重、醬料八口、各長二尺、外居案十二脚、帊料油絁十二條、各長五尺一寸、廣一幅半、御膳櫃十二合料曝布綱廿四條、長一丈、中割、一年二換、曝布篩十四口、御井大篩十口、各長三尺五寸、並二重、水篩四口、各長四尺、磨御飯曝布袋一口、長一丈、曝布巾卅六條、拭御飯銚料十二條、各長二尺、作薄餅料二條、各長一丈二尺五寸、裹衦麵料一條、長四尺、拭御案料各六條、各長五尺、拭釜料一條、長四尺、拭臼料二條、各長二尺五寸、押鮨料三條、各長二尺、押燒漬鮨料三條、各長二尺、拭甑料五條、各長五尺、押麥袋料一條、長六尺、案帊布三條、作餅案料一條、長一丈四天、大炊殿案二脚料二條、各長六尺、纏竈蓋曝布十二條、各長一尺五寸、生絲三絇、縫案帊并篩料練絲一分二銖、縫裹御飯被料砥三顆、磨刀子料檳榔葉廿八枚、八枚扇涼御飯料、廿枚扇雜膳火料、麻六斤三兩、竈蓋廿四條料、以四兩三銖作一條、韓櫃五合、四合納醬酢未醬并漬物料、一合納御米料、中取案廿四脚、三脚雜器櫃料、二脚置雜魚料、四脚雜菓子櫃料、四脚洗雜菜槽料、三脚收雜魚櫃料、二脚雜鮨櫃料、三脚御米櫃料、三脚洗儲料、切案十六脚、二脚料理雜鮨料、二脚料理肴料、二脚料理雜滑海藻料、二脚料理雜菜料、四脚料理鮮魚料、二脚料理雜菓子料、二脚儲料、大槽八隻、四隻洗雜漬菜料、一隻洗雜菓子料、一隻洗雜羹菜料、二隻洗御菜帊布並巾等料、圓槽十三隻、二隻洗雜生菜料、五隻洗漬蓴料、二隻洗雜生魚料、二隻洗雜菜料、二隻洗雜羹料、木臼四口、二口舂鹽并楡等料、二口舂粉料、杵八枚、舂雜物料箕五枚、二枚簸擇鹽井楡等料、三枚簸擇粉米料、匏一百九十柄、汲雜物汁料席十六枚、四枚張大炊殿上料、四枚暴涼雜菜料、四枚帊御案料、四枚舂鹽井楡料、薦十六枚、八枚張大炊殿上料、八枚鋪御膳所料、黑葛六斤、結大炊殿上張席料酢醬瓶卅口、鉢八口、負瓶四口、大瓶八口、小瓶八口、筥瓶八口、陶臼四口、已上八種、納甕物料、洗盤十二口、四口磨御飯料、八口洗作雜滓漬物料、麻笥盤十二口、四口漬御菜料、八口納滓醬未醬料、缶廿口、十口納醬井雜醬漬物料十口納雜滓漬物料、壺八口、納醬漬井滓漬物料瓱十一口、汲運水料由加十六口、汲運水料叩瓮二口、洗納泔料火蓋二口、蓋火爐料明櫃卅七合、四合納羹堝料、四合納汁漬物料、二合納雜洗菜料、六合納雜魚料、三合納御菜料、四合納雜甕物器料、四合納柏料、四合納菜料、十六合儲料、荒筥五十七合、十二合涼御飯料、四合洗納雜甕物料、四合洗納雜羹菜料、卅七合儲料、筥廿合、二合納蘿蔔料、四合納餅料、四合納甘物料、四合納志登伎料、二合納刀子料、四合納菓子料、圓櫃卅八合、從御贄殿納雜物運御膳所料刀子七十七枚、十枚剝鱐料、四枚打古毛料、二枚切鱠料、二枚打加自米料、二枚打魚骨料、一枚作拆餅料、一枚餛飩料、五十五枚雜用料、長廿枚、短卅五枚、案十脚、四脚料理雜菜子料、二脚居御膳櫃料、二脚置御案料、二脚盛御膳料、足高案二脚、涼暴御坏料水樽案七脚、熬笥廿四口、熬雜糒料大蓋十一枚、燎料漉籠廿四口、漉雜燥餅料暴布九端二丈三尺、二端一丈六尺巾十條料、長各一丈、三丈六尺作餅膳部二人彩料、長各一端一丈八尺、一端四尺褌十條料、各長四尺六寸、一丈二尺褌二條料、

各長六尺、一端二丈三尺駈使十三人褌料、各長五尺、一端一丈八尺官人十人褌料、各長六尺、一丈八尺仕女四人褌料、各長四尺五寸、一端一丈四尺彩四領料、各長一丈四尺、八寸冠四條料、各長二尺、

右起十一月供用、明年十月請替、

木盤一百廿口料理所雑用料、木工寮毎年所進、

〔延喜式三十八掃部〕諸司年料

内膳司狭席十六枚、折薦十六枚、並供御料〇中略

右年中所充、並依前件、若有増減者、臨時處分、

内膳司造供御粉熟料席二枚、簀二枚、三年一充、

〔延喜式三十五大炊〕内膳司日米六升磨飯料〇中略

右毎日料、依前件熟食充之、

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

内膳町土御門北、烏丸西、

〔延喜式三十九内膳〕凡膳部仕丁仕女等、不仕之物者、充司中雑用、

凡作園所須牛十一頭、以左右馬寮牛充之、其死老者、申省請替、官驗其實、然後充之、其鍬七十四口、鍬柄卌枝、鋤柄卌四枝、並二年一請、舊鍬返上馬鍬二具、舊返上辛鉏閑良二枚、鋒四枚、已上隨損請車二兩、年別請

營園仕丁十四人一人直丁、十三人駈使丁、

川船一艘、長三丈在與等津、

右灃奈良奈癸等園供御雑菜、

園地卅九町五段二百步、京北園十八町三段、奈貝園六町八段三百廿步山科園九段、奈癸園五町五段二百卌步、羽束志園四町九段、泉園一町、平城園二町、雑菓樹四百六十株、櫝梨百株、桃百株、柑卌株、小柑卌株、柿百株、橘廿株、大棗卌株、郁卌株、覆瓮子園二段、

右依件令殖、若不滿數還替之時拘其解由、

御厨子所

○〔拾芥抄 中末宮城〕御厨子所 四位殿上人爲別當、以民部大輔五位爲預也、在後涼殿西庇、以內膳內藏造酒大膳、及諸御厨衛府御贄、供朝餉及朝夕御膳、用土器、有別當所衆、有年官預熟食、進月奏、

〔標注職原抄 下本〕御厨子所は、拾芥抄に、四位殿上人爲別當、○中略この抄には內藏寮頭とみゆ、拾芥いはゆる四位殿上人、卽內藏頭の事也、○中略別當の外に預所衆等あり、主上の御膳は、令條に載する所、內膳一司なり、中古より御厨子所始る、故に節會などの晴儀には、內膳の御膳を南階より供す、御厨子所の御菜などの如き、腋御膳と號して西階より供す、これにて其本末を察るべし、

〔朝野群載 五朝儀〕補所々別當

御厨子所　　左衛門少尉藤原隆時 ○中略

應德三年八月十二日　　藏人左衛門權佐藤原

〔職原抄 下〕御厨子所別當　內藏寮頭補之

〔西宮記 臨時一〕諸宣旨

御厨子所預幷衆事　以名簿自御所下藏人、藏人仰本所、定額膳部永宣旨、

〔三十六人歌仙傳〕攝津大目壬生忠見、右衛門府生忠峯男天暦八年五月御記云、爲御厨子所定外膳部、以壬生忠見 本名實子爲定額膳部、

〔拾遺和歌集 十六雜春〕みづし所にさぶらひけるに、藏人所のをのこども、櫻の花をつかはしたりければ、

壬生忠見

もろともにわれしおらねば櫻花おもひやりてや春をくらさん

〔新儀式 四臨時〕召雅樂寮物師等令奏音樂舞等事

時剋著御座大臣依召參上、〇中略御厨子所供御菓子干物、計程供御酒、

〔新儀式 五臨時〕親王加元服事

親王加元服之儀、〇中略御厨子所時供御酒、

〔西宮記 七月〕十六日七日相撲召仰　　召合

天皇御南殿、〇中略御厨子所供御膳、

〔江家次第 一正月〕供御藥

御厨子所尋常御銚子御酒盞渡於藥殿、

〔友俊記〕寛延元年十一月廿日午、豐明節會行る、〇中略內辨天氣をうかゞふ、御箸なる、臣下應す、あつもの、御飯、進物所の御菜、御厨子所御菜を供す、

〔實麗卿記〕天保八年正月七日乙酉、今日白馬節會也、〇中略內府被申御箸、御箸令鳴給、臣下應之、次供蛇御卷、〇中略次供進物所御菜、(窪器二盤物六汁物二合十度云々)次供御厨子所御菜一盤、(八坏、盤物七盤四坏汁物二燒物二)

〔侍中群要 二〕日中行事　　巳一刻奏日次御贄事

同〇御厨子所例云、延喜十一年十二月廿日官符、始定六箇國日次御贄、〇中略今案件等六國、進於內膳司、司之官人、以解文覽藏人、隨其處分、進進物所御厨子所等、

〔百練抄 五後三條〕延久元年七月廿二日、令御厨子所預、始令供精進御菜、

〔明和新增京羽二重 一〕兩局藏人方催之外

御厨子所預　從四位下高橋若狹守紀宗直　同　從六位上高橋采女正紀宗之

同小預　從六位下大隅讃岐介藤原信彥

〔慶應元年都仁志喜 二下〕御厨子所預　正五位下高橋薩摩守紀宗愛　同　采女正紀宗謙

同番衆　從五位下大隅美作守藤原時忱　同小預　從六位上同　阿波介同　正徹

〔建內記〕嘉吉三年三月廿日丙子、西七條口丹波口事也率分事、代官預禪澄、以良圓房遺補任者也、公人事所司代明日可出云々、以被可沙汰給也、仍以明日以禪澄被下仰付吉祥院取原云々、日次口補任也、去々年守護遵行內事也、

判

禁裏御厨子所雜分所率分事、万里小路家代々帶勅裁御判御教書等御知行也、仍西七條口壹所事、御代官職所被預法勝寺刑部卿律師禪澄也、任先例無濫吹之儀、可有執沙汰、於御代官得分者可爲役所所納之半分、於半分者、自本所被副置人、隨役所所納、可有收納者也、但於彼人之長日食物者、以御代官得分內、可有扶持也、無不法之儀者、雖權家之口入、不可有改易、若又不法濫吹事歟、雖何時可有改易、其時不可有異儀者也、仍補任如件、

嘉吉三年三月廿二日　　常慶

家種

禁裏御厨子所雜分所率分事、被帶勅裁御判御教書所万里小路殿御知行也、仍西七條口壹所御代官職事禪澄預申上候、無不法濫吹之儀、任先例可致執沙汰、於御代官得分者、可爲所納之半分、於半分者、爲本所被副置人隨役所之所納、可有御收納、於件人之長日食物口以下用者、御代官得分之內、可加扶持候、有請文先例等、不法濫吹事候者、可被改御代官職候、其時不可申子細候、仍請文如件、

嘉吉三年三月廿二日　　刑部卿律師禪澄判

〔道の幸上〕十四日、〇寬政四年十一月初更ののち、高橋采女正紀宗孝朝臣のもとに、包丁のわざならふとて入門す、この日比、邦彥ぬし吹擧にて許容有し也、抑此家は、數百年來御厨司所の預相承して、むかし光嚴院の丹波國山國へ遷幸ありし時、然るべき公卿だに、從ひまいらするは稀なりし中に、此

先祖、かい〳〵しく付そい参らせ、日別の供御もをこたらず奉りしとぞ、

〔西宮記 臨時五〕一所々事

進物所 在月華門外南腋、外候在右兵衛陣北、以公卿近衛大将爲別當、在預、以奉膳爲預、奉膳執事、膳部、有熟食、請内膳所渡之、御菜供朝夕御膳用銀器、御精進日、白瓷器、不足例供具之時、觸藏人、有年官月奏、○又見拾芥抄、

〔西宮記 臨時一〕諸宣旨

進物所預執事 以名簿自御所賜藏人、藏人召仰本所、

〔江家次第 四正月〕除目

任進物所執事 多任播津、安藝、甲斐等掾、

次任進物所散位籍 丹波 權少掾正六位上多治比眞人興重 安藝 進物所執事労

次任進物所別籍 但馬 權目正六位上高向宿禰行利 進物所散位籍

權大目正六位上文室眞人重光 進物所一條院籍

以上三人許任畢

〔玉海〕治承四年正月廿六日己卯、此日春除目初日也、○中略 任進物所二人、大舍人三人、○註略

大和少掾從七位上大江朝臣有江 進物所執事

備中大目從七位上秦宿禰牛里 進物所膳部

〔延喜式 三十三大藏〕凡進物所膳部六人、正月三節、五月以後三節、當色料絹三疋、紺望陀布三端、毎年兩度充行、

〔友俊記〕寛延元年十一月十九日、主基 ○桃園大嘗 の節會おこなはる、○中略 内辨天氣をうかゞふ、御箸鳴、臣下是に應ず、鮑のあつもの、御はん、進物所の御菜、厨子所の御菜を供じ奉る、

〔朝野群載 十一廷尉〕進物所

請膳部多治忠岑

職員職掌
史生
使部

右忠岑以去正月廿五日俳雙六座居被禁囚矣、而從今月二日本病發、動煩苦、爲彼病所請如件、

貞觀十八年二月七日　膳部大春日茂蔭〇中略

掌侍從五位上賀茂定子傳宣、奉勅件人治病之間暫給假者、

貞觀十八年二月八日　左衞門權佐從五位下惟範奉

〔西宮記十二月〕御佛名　二十九日進物所請御器於內膳司事

進物所例云、十二月廿九日、被差元日之勞膳部、向內膳司、造請文、受銀鏤御器大小合三十口、諸節又同、節後返納、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年十月廿六日己未、停內膳司進物所等、置近江國員外贅人、依國吏申請、

園池司

園池司ハ、宮內省所轄ノ園池ヲ掌ルモノニシテ、供御ニ供スベキ果蔬ヲ種植スルナリ、本司ハ宇多天皇寬平八年、內膳司ニ併セラル、

〔令義解一職員〕園池司

正一人、掌諸苑池、（謂凡苑池之所、有可以供御者、皆司其地、令不須使也、）種殖蔬菜樹菓、（謂草可食者、皆爲蔬菜、樹菓猶菓子、其種殖二字、兼屬蔬菜樹菓也、）等事、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、園戶、

〔令義解一官位〕正六位階〇上　園池正　從七位階〇下　園池佑　大初位階〇上　園池令史

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略減園池司一員、

〔東大寺正倉院文書十二〕戶主出雲臣文田年漆拾貳歲〇中略

戶少初位上出雲臣阿多年陸拾伍歲　老丁　左眉黑子　薗池司使部〇中略

山背國愛宕郡出雲郷雲下里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

園戸

〔令集解 職員 五〕園池司

古記及釋云，別記云，園戸三百戸，經年一番，役百五十戸，爲品部，免調雜徭，

直丁

〔東大寺正倉院文書 三〕園池司解　申諸直丁并鳥料粮事

直丁壹人料米伍斗捌升 日二升　鹽伍合捌勺 日二勺 ○中略

以前依例，來五月廿九日箇日料，應給米鹽等如件，以解，

天平十七年四月十六日　正八位上行令史小野朝臣 假

從六位下行佑贊首廣前

司神

〔三代實錄 四 清和〕貞觀三年五月甲戌朔，授園池司無位御氣津神從五位下，

司印

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年十月甲戌，始賜諸陵，圖書，雅樂，園池，正親司，印各一面，

廢司

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應併置諸司并省官員事 ○中略

園池司 併内膳司

右□□□□□清□所置惟□□□□ ○中略

寛平八年八月廿九日 ○本書年月闕，據寛平八年九月七日官符補，

雜載

〔東大寺正倉院文書 三〕園池司解　申請直丁并鳥料粮事 ○中略

孔雀鳥壹翼料米漆升貳合伍勺 日二合五勺 ○中略

天平十七年四月十六日　正八位上行令史小野朝臣 假

從六位下行贊首廣前

造酒司 造酒併入

造酒司ハ、サケノツカサト稱シ、又ミヤヅカサト稱ス、酒及ビ醴酢ノ類ヲ釀造シ、供御ヲ備ヘ、節會等ニ行觴スルコトヲ掌ル、

名稱

〔倭名類聚抄〕五官名 司　職員令云、〇中略 造酒司、佐希乃司

〔宣胤卿記〕永正三年十二月廿四日、頭辨狀到來、賴量朝臣申施藥院使事、可伺申文案、宜下案令見之、〇中略 施字如何可讀云々、不讀也、百官中、不讀字多、内藏(クラ)、内匠(タクミ)、造酒(サケ)等類也、

〔職原抄〕上 造酒司 唐名良醞署

廨舍

〔西宮記〕臨時五 一所々事

造酒主水内候所在安福殿西庇

司神

〔延喜式〕九神名 造酒司坐神六座大四座小二座

大宮賣神社四座並大、月次新嘗、

酒殿神社二座並小

酒彌豆男神　酒彌豆女神

〇按ズルニ、司神ノ事ハ、神祇部官衙神篇ニ詳ナリ、

職員職掌

〔令義解〕一職員 造酒司

正一人、掌釀酒、醴謂醴、酤酒、酢事、佑一人、令史一人、酒部六十人、掌供行觴、使部十二人、直丁一人、酒戸、

〔令義解〕一官位 正六位上階〇 造酒正(サケノカミ)　從七位下階〇 造酒佑　大初位上階〇 造酒令史

〔拾芥抄〕中本官位唐名 造酒正良醞署典酒　佑良醞丞司酒　令史良醞史酒師

〔唐六典〕十五光祿寺 良醞令二人、正八品下、

周禮有酒正中士下士、掌酒之政令、以式法授酒材、辨五齊三酒之物、又有酒人奄十人、女酒三十人、奚百人、掌爲五齊三酒以供祭祀賓客、後漢少府有湯官丞主酒、晉太官有監釀(○釀恐醞誤)吏四人、酒丞一人、四百石、齊職儀食官局有酒吏一人、梁有酒庫丞、北齊光祿寺有清漳令丞主造酒、(○中略)隋有良醞署令二人、皇朝武德中、置一人、貞觀中、加至二人、領掌醞酒匠奉觶等、(○中略)良醞令之職、掌供邦國祭祀五齊三酒之事、丞爲之貳、

〔百寮訓要抄〕造酒司(良醞署)　酒を作る職也、酒屋をかまへ、酒壺を奉行する也、色々の酒、淸濁、又醴酒とて、一夜の内に造たるを所々へ參らする也、皆酒司に作りをかる酒也、

〔延喜式(民部二十二)〕凡正月三節、及十一月新嘗會等料酒、預仰畿内、用正稅釀、送造酒司、(山城國四石二斗一升、大和河內攝津等國、各四石、)

〔儀式(六)〕元日御豐樂院儀

御豐樂殿、皇后出御、亦如常儀、(○中略)大臣宣侍座、共稱唯謝座、訖造酒正把空盞、(便用殿上者酒盞、)來授貫首者、

〔公事根源(六月)〕供醴酒　同日(○一日)

この酒は、造酒司けふより七月卅日まで、日毎に奉るなり、

〔建內記〕嘉吉元年六月一日丙寅、造酒司送醴酒、

〔康富記〕永享二年十一月廿日丁巳、主基(○後花園大嘗)節會也、(○中略)造酒正授空盞於小忌上首、

〔西宮記(臨時五)〕行幸　城外

造酒橫甕、入酒負馬、

〔延喜式(四十造酒)〕運造御酒料薪牛一頭受右馬寮、無卽直奏受用、

〔官職秘抄(上)〕諸司正　造酒　主水　已上諸大夫、或一道者任之、(○中略)同佑(○中略)造酒(○中略)已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功、臨時內給等任之、或以本司奏任之、(○中略)同令史隼人(○中略)造

補任

酒（○中略）已上以本司奏任之、或臨時内給、自織部文師任造酒令史例、（是酉興）

〔職原抄上〕造酒司

正一人　近代諸道五位等任之　佑　常不任之　令史

〔百寮訓要抄〕造酒司

正（頁醍令）諸道の四位五位是に任ず、今は外記中家に相傳して任ずる也、酒の課役ともあり、

佑（頁醍令）六位なる也　權佑　おなじ

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月九日庚寅、散位從五位下當麻眞人安方爲造酒正、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年二月廿日丙午、散位從五位下布瑠宿禰今道爲造酒正、

〔康富記〕應永二十九年正月五日癸亥、造酒正師俊今夜敍爵了、六歲也、未元服云々、爲童形申任官位之條、過分歟之由、有偏執之人、去年十二月任造酒正了、

〔明和新增京羽二重一〕外記方

大外記（從五位上造酒正）押小路掃部頭中原師賌　内藏寮（兼造酒司從五位下造酒佑）德岡内藏少允大江盛林

史生

〔日本後紀五桓武〕延曆十五年十月壬戌、始置（○中略）造酒司史生二人、

〔類聚國史百七職官〕弘仁七年四月壬戌、加造酒司史生二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、（○中略）造酒司四人、

酒部

〔類聚國史百七職官〕天長八年二月甲申、通取他氏廿人、補造酒司名負酒部闕、見直少數、供事多闕也、

〔延喜式十八式部〕凡諸司伴部者、各以負名氏入色者補之、（○中略）主殿寮殿部十人造酒司酒部廿人並負名外、取異姓入色補之、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、（○中略）造酒司、（○中略）各六人、

直丁

〔東大寺正倉院文書三〕造酒司解　申請公粮事

米伍斗捌升日二升　鹽伍合捌勺日二勺　已上直丁料　布壹段斷丁料

右直丁一人、厮丁一人、幷二人、來五月廿九箇日料、所請如件、以解、

天平十七年四月十七日　正八位下行員外令史日下部酒人連毛人

外從五位下行正兼內膳奉膳勳十二等高橋朝臣國足

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補充造酒司酒部事

合六十人元無人　今加廿人

右得宮內省解偁、造酒司解偁、案職員令、酒部數六十人、而去大同二年、減廿人定卅人、今分配平城宮幷皇后宮、無人充奉、每事難堪、望請依令被給六十人、將濟公事者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁七年六月八日

酒戶

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

造酒司率酒部等、東廊南二三間、安參議以上酒臺、顯陽承歡兩堂北五間檻外、安次侍從以上酒臺、若有蕃客、儲設顯陽堂、

〔令集解五職員〕造酒司

古記及釋云、別記云、酒戶百八十五戶、倭國九十戶、川內國七十戶、合定百六十戶、一番役八十丁、爲品部免調雜徭、但津國廿五戶、今定十戶、客饗時役也、

用途

〔延喜式四十造酒〕供奉年料中宮准此

缶二口、覆二條長各七尺、三幅料兩面油絁各二丈一尺、並表料　東絁四丈二尺、裏料　絲一兩、結綱一條、長一丈四尺　料緋東絁七尺割二條、調布七尺割二條、負瓶二口、受各二升納儲酒料平瓶二口、受各二升納御糟坩二口、結綱二條、長各七尺料調布七尺、割二條　筥形三具、二具二缶料、一具瓶料、檜杓三枚、二枚各一丈一尺、一枚長八尺、臺盤一面、朝夕料　覆三條、一條朝夕料、二條諸節料、料甲纈油絁一疋三尺、二條別一丈一尺　絲一分、絁大篩十二條、別五尺　絁小篩廿四條、別一尺　縫篩絲二分、敷納盞筥

暴布單十二條、（別二尺）布篩十二條、（別五尺）筥一合、韓樻三合、陶瓶二合、乳盆三合、（二口朝夕料、一口節料、）小匝四口、坩二合、陶鉢一口、洗盤一口、𨏍一口、土片坏一百八十口、明樻二合、食薦二枚、中取案二脚、刀子一枚、調布襷褌各十一條、（襷別四尺、褌別六尺、並官人三人、酒部四人、取甕四人料、）其造醴酒部二人、潔衣各絁三丈、調布七尺、（袴料、）官人三人、各絁二丈五尺、調尺頭巾一條、（別三尺）仕丁一人、調布二丈二尺、頭巾一條、（三尺）

右料物依前件、但臺盤等隨損請替、

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料

造酒司油四升（御酒殿十二月晦夜料）

〔延喜式三十八掃部〕諸司年料

造酒司食薦廿四枚（供御四枚、雜用廿枚、）〇中略

右年中所充、並依前件、若有増減者、臨時處分、

〔延喜式四十造酒〕造酒雜器

中取案八脚、木臼一腰、杵二枚、箕廿枚、槽六隻、（隨損請換）甕木蓋二百枚、（三年一請、近江國進、）櫓三口、水槽十口、水麻笥廿口、小麻笥廿口、筌百口、匏十口、（已上供奉酒料）篩料絹五尺、𨏍三口、𢂁暴布三條、（別三尺）麻笥盤一口、擇盤一口明樻三合、韓竈一具、（已上三種糟料）篩料薄絁五尺、冷醴由加一口、𢂁暴布一條、（長二尺五寸）坩二口、麻笥盤一口、明樻一合、（造麴料）麤筥一合、韓竈一具、（已上醴酒料、中宮准此、）糟垂袋三百廿條、（二百卌條酒料、度別六十條、八十條醴料、度別廿條、並以商布一段造八條、一年四換、）甕𢂁調布百條、（條別長四尺、廣一幅半、）縫絲二分二銖、（一銖縫得廿條、）結縄料熟麻七斤六兩二分、（斤別九丈五尺、口別七尺、）大匏四柄、（各受二斗、）鍬四口、（已上雜給料、）

右造酒料支度、及年料節料雜器、並申省請受、

雜給年料

絹篩十條、（別一尺）縫篩絲一分、輿籠五脚、缶十六口、坩五合、平瓶十五口、土片盤卅口、土盞七百廿口、別脚

案六脚、(四脚三位已上料、二脚侍從料、)食薦廿枚、

〔延喜式 二十五 主計〕凡造酒司年中用途帳者、先令進官、即加外題、下勘於寮、若闕年料支度、忝稱無庫者、移式部省、五位奪位祿、六位留季祿、

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年十一月庚午、始以赤幡班給(〇中略)造酒、主醬等司、供御物前建、以爲標、

〔江家次第 一 正月〕元日宴會

酒正授空盞於貫首人、

〔資麗卿記〕天保八年正月七日乙酉、今日白馬節會也、(〇中略)右幕下已下再拜、次酒正師身授空盞右幕下、相跪受之、酒正持盤退、到櫻樹邊之比、先乍居一拜、(盞持兩手、)起揚(笏有地)次各再拜、酒正持來盤、又相跪返盞、

〔兼胤公記〕寶曆五年十月十四日、造酒司大江盛林申從五位下、小折紙願書等、去春內藏寮本職之由申立相願候、即殿下(〇藤原道香)へ申入之處、造酒司、寬延三年御定も有之、其上年若にも有之候、旁不及沙汰候、出納を傍例に書出候得共、當時出納とは格式も不等同、難准據候段申達、小折紙指返候處、又々今度差出ニ付、關白殿へ入御披見、被仰云、不及沙汰之由可差返候、出納者、例ニ不相成候由、去春申渡候處、又々用例之儀、如何之由可申達候、且願書之中、去ル戊年より如古例、內藏寮兼造酒司ト被書候由有之候、此儀如何之儀、書付候哉、右之儀、何方より承候而、書付候哉、可尋之由被命、 十七日、德岡造酒佑差出、內藏寮本職之段、不審之答書、關白殿へ入披見、被抑留了、(酉年冬、故局務へ申、戊年より已前、內藏寮兼造酒司と補略等ニ被書候之由也、)件書付大外記將來、故大外記師充(江)申候由ニ有之候間、師充留書吟味候處、申談候儀無所見候由、申候段も申入了、 二十日、德岡造酒佑、內藏寮之事ニ付差出書付、此間返給候、如何可申付哉、關白殿へ尋申之處、先其通ニ可致置之由被命了、

〔建武以來追加〕一造酒正申麴(〇麴一本作酒)役事

自往古有限所課也、不可依此沙汰焉、

右此條々更不可有依違之儀、可令存知之狀、依仰下知如件、

明德四年十一月廿六日　　左衞門佐源朝臣（在判義將）

○酒殿

〔西宮記（臨時五）〕一所々事

酒殿（在外記廳東、有別當辨、預、納播磨庸米、造酒、隨藏人所召進之、一度不過九升、甘糟又隨召、○又見拾芥抄）

采女司

采女司ハ、采女ヲ撿按シ、之ヲ後宮十二司ニ分配ス、上世ハ采女氏、之ヲ以テ世職ト爲シヽガ、大寶制令ノ時、本司ヲ置ケリ、然ルニ平城天皇大同三年、中務省ノ縫殿寮ニ併セラレシニ、嵯峨天皇弘仁三年、復置セラルヽ、ナホ采女ノ事ハ、女官篇ニ載セタリ、

名稱

〔拾芥抄（中本百官）〕采女司

〔職原抄（上）〕采女司（唐名采女署）

沿革

〔日本書紀（二十九天武）〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　甲子、是日肇進奠、卽誄之、（○中略）直大肆采女朝臣筑羅誄內命婦事、

〔新撰姓氏錄（右京神別上天神）〕采女朝臣　石上朝臣同祖、神饒速日命六世孫、大水口宿禰之後也、

〔新撰姓氏錄（和泉國神別天神）〕采女臣　神饒速日命六世孫、伊香我色雄命之後也、

〔類聚國史（百七職官）〕大同三年正月壬寅、詔曰、云々、縫部采女二司、併縫殿寮、

〔日本後紀（二十二嵯峨）〕弘仁三年二月庚戌、復采女司、

廳舍

〔日本紀略（七圓融）〕天元四年二月九日丁丑、今夜采女司廳燒亡、

職員 職掌

〔日本紀略十二三條〕長和二年十一月廿九日丁巳、今日采女町燒亡、
〔百錬抄四條〕天元四年二月九日、采女司炎上、
〔令義解一職員〕采女司
正一人、掌撿校采女等事、佑一人、令史一人、采部六人、使部十二人、直丁一人、
〔令集解五職員〕采女司
穴云、此司只有名帳、其身在女司耳、問采女名帳、亦在縫殿寮哉、答私案不合有也、後案配水司膳司、所殘可上縫司、故知名帳可在縫司、但不合在寮、朱云、撿校采女等、謂此司爲本司、可分配後宮十二司等也、總名帳可有此司者、未知等字情何、古記云、采女考仕者申中務省也、
〔令義解一官位〕正六位〇下階 采女正　正八位〇上階 采女佑　大初位〇下階 采女令史
〔拾芥抄中末官位相當〕從七位下采女佑
〔拾芥抄中本官位唐名〕采女正采女令　佑采女丞　令史采女史
〔延喜式七踐祚大嘗祭〕薦悠紀御膳、〇中略 行立次第、〇中略 采女司采女朝臣二人、左右前膳
〔延喜式四十采女〕凡諸節會日、正及令史、供奉御膳前、令史用采女朝臣氏
〔百寮訓要抄〕采女司采女署　諸國より參らする采女を此所にをかる、采女と申は、國々より可然美女どもをえらびて、天子に參らせし也、御陪膳などもゆるさるゝ女房なり、古今集にも歌よみなどやさしき事などもおほし、

補任

〔官職秘抄上〕諸司正　采女　諸大夫、幷一道者任之、近代多醫道者居此職、諸司二三分遷之例、巨勢金岡元內藏屬、小野安倫元左京進、〇中略　同佑〇中略　采女〇中略　已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功臨時內給等任之、或以本司奏任之、〇中略　同令史〇中略　采女〇中略　已上以本司奏任之、或臨時內給、
〔職原抄上〕采女司

正一人　諸道中、雖六位又任之、佑　常不任之　令史

〔百寮訓要抄〕釆女司

正釆女令　醫陰兩道の輩、是に任る也、佑釆女丞　六位以下是に任す　權佑　おなじ

釆部

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年十一月丁卯、外從五位下小田臣枚床爲釆女正、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年二月辛未、攝津職島下郡人、右大舍人釆女臣家麻呂、釆女司釆部釆女臣家足等四人、賜姓朝臣、

史生

〔續日本後紀十仁明〕承和八年二月庚辰、置釆女司史生二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略釆女司、○中略二人、

使部

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略釆女司、○中略各六人、

用途

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

釆女町土御門北、東洞院西、

主水司

主水司ハ、モヒトリノツカサト稱シ、後世モンドヅカサト稱ス、供御ノ水漿饘粥、及ビ藏氷ノ事ヲ掌ル、此職ハ上世ニ水取連、主水部アリ、古事記仁德天皇ノ條ニ、水取司ノ駈使丁ノ事アレバ、其來レルコト極メテ久シキヲ知ルベシ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕司　職員令云、○中略主水司、毛比止里乃豆加佐、

〔下學集上官位〕主水正膳部郎中

〔玉勝間一〕官名の事

廳舍

主水は水取也、和名抄にも毛比止里とあり、今世に、もんどといふは、いみじき訛なり、

〔古事記傳三十六〕古は凡て飲む水をば、母比と云り、川池などにたゞある水をば美豆と云て、母比とはいはず、たゞ魚をば宇袁と云ひ、食ふ魚を那と云類なり、

〔職原抄上〕主水司唐名上林署云々、不レ詳、或云膳部署、又不レ詳、

〔拾芥抄中本百官〕主水司宮城內待賢門南、大膳職西、

〔兵範記〕仁安元年十月十五日乙酉、御禊點地也、〇中略向行事所、〇中略於待賢門下車、主水司正廳爲行事所也、入東門、著西壁下座、

〔百練抄六崇德〕大治二年二月十四日、主水司醬院等燒亡、

〔西宮記五臨時〕一所々事

內候　造酒主水內候所在安福殿西庇

神司

〔延喜式九神名〕主水司坐神一座小

鳴雷神社

〔延喜式四十主水〕氷池神十九座祭〇中略

右每年十一月祭之

氷池風神九所祭山城國五所、大和國一所、河內國一所、近江國一所、丹波國一所、〇中略

右若有年溫、氷薄隨祭之、尋常寒歲、不在此限例、

司印

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年六月戊寅、主水司言、司家之政、觸類繁多、而本司無印、只用白紙、事涉輕疎、未免嫌疑、望請准內膳釆女等司、被給件印者、勅宜允之、

職員職掌

〔令義解職員〕主水司

正一人、掌樽、水、饘粥、謂稠糜曰饘、稀糜曰粥、及氷室事、佑一人、令史一人、水部水部原作氷部、今改、〇卌人、使部十人、直丁一

人、驅使丁廿人、水戸、

〔令義解 官位〕從六位 階上 主水正(モンドノカミ)　正八位 階下 主水佑　少初位 階上 主水令史

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕主水 主水、原作主水令、今改、正 膳部郎中 又白藥令　上林藏氷　佑 主藥　令史 藥司

〔唐六典 十九 司農寺〕上林署令二人從七品下

漢書百官表、水衡都尉、武帝置、掌上林苑、屬官有上林令丞尉、又有甘泉上林長丞、又步兵校尉、掌上林苑、又少府屬官有上林中士池監、上林者、漢之苑囿也、司馬相如有上林賦、後漢上林苑令一人、六百石、主苑中禽獸、頗有人居、皆主之、捕得其獸、送太官、〇中略 北齊及隋、並屬司農、皇朝因之、〇中略

上林署令、掌苑囿園池之事、丞爲之貳、〇中略

凡季冬藏氷

每歲藏一千石、方三尺、厚一尺五寸、所管州於山谷鑿而取之、

先立春三日、納之氷井、

〔延喜式 四十 主水〕御生氣御井神一座祭 〇中略

右隨御生氣擇宮中若京内一井堪用者定、前冬土王、令牟義都首渫治即祭之、至於立春日昧旦牟義都首汲水付司擬供奉、一汲之後、廢而不用、

〔公事根源 正月〕供若水 立春日

若水といふ事は、去年御生氣の方の井をてんじて、ふたをして人に不汲、春立日、主水司内裏に奉れば、朝餉にて是をきこしめす也、

〔延喜式 四十 主水〕凡供御氷者、起四月一日盡九月卅日、其四九月、日別一駄、以八顆爲駄、准二一石二斗一、五月八月二駄四顆、六七月三駄、進物所冷料、五八月二顆、六七月四顆、御醴酒幷盛所冷料、六七月一顆、

〔公事根源四月〕貢氷　同日〇一日

主水の司、四月一日より九月晦日まで、是をたてまつる、

〔百寮訓要抄〕主水司上林署、諸國の氷室を主どる、饘粥を主るよし令に見たり、今も諸國の氷室を管領して、夏の氷を奉る也、

〔詠百寮和歌〕主水正

あつめをく氷室の祭はやせなんすきまあらさぬ風のはふりこ

〔建内記〕嘉吉元年六月一日丙寅、主水司送寒氷、

〔延喜式四十主水〕神今食料新嘗會、踐祚大嘗會亦同、

絹篩一口、一尺五寸水案一脚、杷騾布一條、六尺下居案一脚、土坏二合、水盆二合、官人一人、水部五人、各褌一條、但新嘗會加布衫、見中務式、

右依件具錄色目、申省請受、

同祭解齋御粥料亦同新嘗會

鮑二斤、堅魚八兩、和布一斤、鹽五合、堝二口、

右自內膳司受之供奉、但米用旦供內、〇中略

諸祭雜給料

園韓神祭料〇春冬並同、中略

右五祭、〇園韓神、及春日、平野、大原野、松尾、官人一人、率水部二人及仕丁等、向祭所供事、

〔北山抄五〕大嘗會事

辰日、〇中略主水司供解齋御盥御粥、

〔盈春記〕元文四年十月廿八日、自去年被仰付大嘗會御調度之圖、先頃盡所預土佐大藏少輔光芳よ

補任

り差出于此宅、○中略

廿三枚、解齋御粥御菜、

第一米、黍子、粟、蕎子、　第二薑子胡麻子、小豆、　第三鮑、堅魚、　鹽　第四和布御汁物

御粥御汁物等、主水司供之、但此內鮑、堅魚、鹽等、從內膳司主水司渡、調進之、

〔延喜式四十主水〕聖神寺七種御粥料○中略

右具備、正月十五日旦、令水部送、

正月三節、五月五日供奉水部十九人、四人中宮供之各給紺布衫一領、人別二丈一尺諸節親王已下五位已上藥料、

節別米九升、瓮三口、著足土埦十二合、炭九斗、

〔延喜式四十主水〕釋奠料

享日、官人一人率水部六人、仕丁四人、汲花水六斗供祭、雜給料粟一升、陶埦二合、

〔新儀式四臨時〕天皇加元服事

當日、○中略設洗器於殿東西壇上、盛匜盥案上、各加手巾、主水官人分立案下、但內藏官人候手巾、主水官人候洗手、

〔江家次第九月〕行幸神祇官被立伊勢幣儀

供御手水、主水司、自北面第二間獻之、頭藏人役之、

〔官職秘抄上〕諸司正　主水　已上諸大夫或一道者任之、二度任主水正例、菅野順季○中略　同佑○中略

主水○中略　已上諸道得業生、諸道擧問者生、成功臨時內給等任之、或以本司奏任之、○中略　同令史

○中略　主水○中略　已上以本司奏任之、或臨時內給、

〔職原抄上〕主水司

正一人　同上○近代諸道五位等任之　近代大外記清原賴業眞人子孫、相傳任之、　佑　常不任之　令史

〔清原氏系圖〕良枝主水正──宗尙主水正──良兼主水正──宗季──良賢主水正

史生

使部

水部
御井守

類季──宗業──良宣改二業忠一主水正　宗賢主水正

〔百寮訓要抄〕主水司

正上林令　諸道の輩是に任ず、近來は外記おほく任る也、佑上林丞　おなじ　權佑　おなじ

〔有職問答〕三一主水裏書云、丹波ノヒドコロ、今モ常官ノ知行也、

このもん氷と書本も候、如何、いづれの家、役はなにを勤候哉、非也、水ニテ候、清少納言宣賢ガ流、今相傳、彼一類任二此司一、正は氷室所領候也、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年八月廿五日己卯、左京人主水令史正七位下水取連繼人、散位正八位下水取連繼主賜二姓宿禰一、

〔明和新增〕京羽二重一藏人方

主水司　從六位上橋本主水佑原井信益

〔慶應元年〕都仁志喜二下藏人方

主水司　從五位下橋本主水佑幸益　從六位下同　伊勢介永益

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置二左右兵庫史生各二員、○中略主水司二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略主水司各二人、

〔慶應元年〕都仁志喜二下藏人方

主水司史生　正七位下兼水部　松本大和少掾源邦光　勝　藤勝明

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略主水司各六人、

〔令集解五職員〕弘仁七年九月廿三日官符云、應レ增二加水部一○水部原作二水部一、今改、下同、十二人一、並名負雜色人右得二宮内省解一偁、主水司解偁、水部員卅人、今供二奉御井平城宮皇后宮一、而其數少、不レ足二充用一、望請增二加件員數一、將レ令レ直二皇后宮一者、中納言從三位兼行兵部卿藤原朝臣繩主宣、奉レ勅依レ請、○又見二享祿本類聚三代格一

〔延喜式十八式部〕凡諸司伴部者、各以二負名氏入色者一補レ之、不レ得下輙取二白丁一、若其氏无二人色一者、本司錄レ狀請レ官

處分、但主殿寮殿部、掃部寮掃部、主水司水部、並取負名外異姓白丁五人、預勘籍例、

〔延喜式 三十一宮内〕供奉神事〇大嘗 諸司行列

主水司水取連一人、執二蝦鰭槽一 次水部一人、執二多志良加一土瓶也

〔匡房卿大嘗會記〕天仁元年十一月廿一日、主水司水取連一人、執蝦鰭船、是土手洗也、次水部一人、執多志良加、土瓶也、

運氷丁

〔延喜式 四十主水〕守御井二人、各日黒米一升、中宮東宮亦同

凡中宮水部六人、御井守二人、衣服並申省充之、

〔延喜式 十二中務〕時服

主水司卅三人、中略 水部廿四人、守御井六人、

〔延喜式 四十主水〕凡運氷駄者、以仕丁充之、山城國葛野郡德岡氷室一所、一丁輸二一駄一 愛宕郡小野一所、栗栖野一所、土坂一所、賢木原一所、並二丁輸二二駄一 同郡石前一所、一丁半輸二一駄一 大和國山邊郡都介一所、六丁輸二一駄一 河内國讃良郡讃良一所、四丁輸二一駄一 近江國志賀郡部花一所、三丁輸二一駄一 丹波國桑田郡池邊一所、五丁輸二一駄一 率駄丁給食、一人日米四合、鹽五撮、駄別秣稻二把、總計所須、每年申省請受、氷標幡十二流、各長二尺 料緋帛八尺、幡料六尺、緒料二尺、三年一請、

水戸

〔令集解 五職員〕古記及釋云、別記云、水戸〇水戸原書作氷戸、據一本改 百卌四戸、自九月至二月、每丁役自三月至八月、一番役卅丁、爲品部免調雜徭、宮內禮佛之時、僧等洗手湯者、當司設、若有僧數多、不堪造湯者、仍請主殿寮、

用途

〔延喜式 四十主水〕供御年料 中宮亦同

御手巾紵四條、各九尺 貲布篩卌二口、各二尺、磨二御粥料一 絹大篩四口、各八尺、二重、 絹小篩廿口、各一尺六寸 絹井篩四口、各七尺、二重、 缶帊二條、各一尺五寸 曝布二條、各二尺三寸 絹小篩四口、各一尺五寸、牛乳井御澡豆料、 絁大篩十四口、各四尺 絁小篩十二

領地

口、(各二尺)刷料生絲一兩一銖、縫篩幷帊料絲一兩二分、洗器曝布二條、(各五尺)竈帊曝布二條、(各三尺六寸)冷氷槽二口、氷槽四口、槽二隻、切案、擇案、洗案、各二脚、中取案六脚、輿籠四脚、箕二枚、置簀四枚、木臼一口、杵二枚、竹百廿株、匏百廿柄、大杓四柄、水瓱麻筒四口、瓱六口、缶土湯瓮、大蓋、陶叩盆、各二口、手湯戸一具、(加盞幷杓)手洗槽三口、(已上二種、隨損請替、)明櫃四合、筥六合、土火爐二口、轆轤木蓋五口、桶三口、(各受斗)檳榔葉四枚、行幸儲料緋帊兩面覆二條、(一條御膳櫃料、一條牙床料、)兩面袋二口、(一口御匣料、一口盥料、)油絁覆二條、(一條御膳櫃料、一條牙床料、)油絁袋二口、(一口御匣料、一口御盥料、已上四物、並著裏、)緋絁綱五條、(一條長三丈、四條各長一丈三尺、)紺布一丈、(御盥水瓮覆料)紺布衫八領、布袴八腰、布帶八條、(並仕丁八人料)

右便納司家、隨時出用、

司家年料(中宮亦同)

水部曝布潔褠五領、(別四尺)襌五條、手巾一條、(六尺)釆女女孺手巾四條、(別六尺)陶由加一口、(汲釆女女孺手水料)

凡水部仕丁等、不仕料物者、充司中公用、

〔康富記〕嘉吉三年四月十一日丙申、早朝謁清外史文亭、被語云、丹波氷所供御人等、今月四日五日之比、爲結山之鹿垣、苅山之柴之次、誤而苅取守護押妨之山之間、自守護方相支之、不令苅之、此山根本者、氷所領歟、名主秦井之知行山歟、彼秦井自守護方討之後、件山ヲモ日置山トテ、細典廐(細川持賢)近年押領也、本氷所領タル由ヲ存歟之間、地下人如此令苅取云々、仍典廐方以清將監爲使、被尋本所之間、外史今朝向典廐亭、被申此子細、所詮守護返事云、御料所之事之上者、自本所可被罪科地下人歟、万一令對捍本所之成敗者、承候而爲守護堅可致罪科也、先爲本所可被糺明之由、有返答之間、悅喜之由被語了、就之下遣人於氷所、可致撿斷也、其間事被談合了、

職員　職掌　補任　司丁　廢司

内染司

内染司ハ、供御ノ雜染ヲ掌ル、平城天皇大同三年、縫殿寮ニ併セラル、

〔令義解一職員〕内染司謂、此司無駈使丁、者、以官奴婢充、

正一人、掌供御雜染物之屬、佑一人、令史一人、染師二人、使部六人、直丁一人、

〔令集解五職員〕内染司(中略)朱云、古記云、此條内字者、織部司職掌雜染事、故有内字耳、

〔令義解一官位〕從六位階(上)内染正　正八位階(下)内染佑　少初位階(上)内染令史

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年十月壬子朔、從五位下布施王爲内染正、

〔東大寺正倉院文書三〕内染司解　申直丁幷品部粮事

合米壹斛壹斗陸升直丁一人日二升品部二人各日一升　鹽壹升壹合陸勺直丁一人日二勺品部二人各日一勺　布壹段廝丁料

直丁三田部麻呂　廝丁三田部牛麻呂

右直丁一人、廝丁一人、品部二人、幷四人、來五月食料、所請如件、錄狀以解、

天平十七年四月十七日　佑正八位下布勢朝臣宅足

正從六位上根連[illegible][illegible]

〔官職秘抄後卿〕宮内省被官　内染司大同三年正月、併縫殿寮、

古事類苑

官位部十八

令制官職十四

女官

女官ハ中世ヨリ、上臈、小上臈、中臈、下臈ノ品格ヲ分チ、二三位ノ典侍ヲ上臈ト爲シ、公卿若シクハ侍臣ノ女ヲ小上臈ト爲シ、内侍ニアラザル侍臣已下ノ女ヲ中臈ト爲シ、諸侍及ビ賀茂、日吉ノ社司ノ女等ヲ下臈ト爲シ、其衣服ニハ各ヽ等差アリテ、尊卑ヲ明ニセシガ、後世ハ必シモ拘ラザルニ似タリ、

後宮ニ内侍司以下十二司アリ、其官人ハ唐ノ宮官ニ模シ、皆尚典掌ノ三字ヲ以テ長官次官判官ノ稱トス、内侍司ニハ尚侍、典侍、掌侍等ノ職員アリテ、至尊ニ常侍シ、奏請宣傳ヲ爲シ、女孺ヲ撿挍シ、内外命婦ノ朝參ヲ知リ、禁内ノ禮式ヲ掌ル、尚侍ヲナイシノカミト稱シ、典侍ヲナイシノスケト稱シ、掌侍ヲナイシノジヨウト稱シ、掌侍ノ上首ヲ勾當内侍ト稱シ、專ラ文書ノ事ヲ掌ル、又藏司ハ神璽、關契、供御ノ衣服、巾櫛服翫、珍寶綵帛、及ビ賞賜ノ事ヲ掌ルモノニシテ、其位階祿秩十二司ノ中ニ超絶セリ、又書司ハ内典經籍、筆紙墨、几案絲竹ヲ供奉スルコトヲ掌リ、藥司ハ藥物ヲ掌リ、兵司ハ兵器ヲ掌リ、闈司ハ宮閤ノ管鑰、及ビ出納ヲ掌リ、殿司ハ輿轍、膏沐、燈油、火燭、薪炭ヲ掌リ、掃司ハ牀席、灑掃、舖設ヲ掌リ、水司ハ漿水、雜粥ヲ掌リ、膳司ハ御膳、酒醴、餠菓ヲ掌リ、酒司ハ釀酒ヲ掌リ、縫司ハ衣服ヲ裁縫シ、纂組ヲ知リ、兼テ女功及ビ朝參ヲ掌ル、而シテ尚膳尚縫ノ祿モ、亦尚侍ノ上ニ在リ、其後尚侍ノ權漸ク重ク、其祿位尚藏

ニ均シキニ至ル、

内侍以外ノ十一司ハ、後ニ至リ先後シテ廢絶シ、又闈司ノ如キハ僅ニ空名ヲ存シ、朝儀アルニ際シ、其職ヲ置カレシガ如シ、内侍司ニ於テモ尙侍ノ官ハ、中世停廢セラレ、典侍ヲ以テ、内侍司ノ上首ト爲シタリ、

女官ニ又采女、得選、氏女、女孺、命婦、御櫛笥殿別當、刀自、女藏人、東豎等アリ、其至テ卑キ者ニ樋(ヒ)洗(スマシ)、長女(ヲサメ)、御厠人(ミカハヤウド)、半物(ハシタ)、雜仕、御(オ)末(スエ)等アリ、采女ハ上世ヨリ見エテ、至尊ニ侍シ、御饌ノ事ヲ供奉スルモノニテ、孝德天皇大化二年ニ、詔シテ郡ノ少領以上ノ姉妹、及ビ子女ノ形容端正ナルモノヲ採リテ之ニ充テ、大寶制令ノ時、此制ニ循ヒ、更ニ采女司ヲ置キテ之ヲ總管セシメ、又水司、膳司ニモ采女ヲ置キテ、飮饌等ノ事ヲ掌ラシム、而シテ養田アリテ其糧食ニ供シ、養丁アリテ薪水ノ役ニ從フ、養丁ハ其郡ヨリ出スモノナリ、後世ニ至リテハ采女ハ漸ク衰ヘテ、僅ニ陪膳采女、髮上采女ノ名ヲ存シ、數人ノ承事スルアルノミ、得選ハ御厨子所ノ女官ナリ、采女ノ兼帶スルコトアリテ、飮饌及ビ雜事ニ從フモノナリ、氏女ハ京畿内ノ諸氏ヨリ貢スル所ニシテ、婦女ノ配偶ナキ者ヲ擇ブ、女孺ハ内侍以下ノ諸司ニ分屬シ、或ハ圖書、掃部等ノ諸寮ニ隷屬セルモノアリ、采女及ビ氏女ヲ取リテ之ニ補ス、命婦ニ内外ノ別アリ、内命婦ハ五位以上ヲ帶スル婦女ヲ云フ、而シテ女王ハ無位ト雖モ猶ホ命婦ト稱ス、外命婦ハ五位以上ノ者ノ妻ヲ云ヒテ、無位ト雖モ猶ホ此稱ヲ得ルナリ此内外命婦ハ、並ニ朝參ヲ爲シ、朝儀ノ時ニ、威儀命婦、褰帳命婦ト爲ル、而シテ後世ハ一ノ女官ノ稱トナレリ、御櫛笥殿別當ハ貞觀殿中ニ在ル御櫛笥殿ノ事ヲ行フ者ニシテ、藤原氏ノ女ヲ以テ之ニ充ツ、刀自ハ老女ノ稱ナリシガ、中世御厨子所、御膳宿等ニ奉仕スル婦女ニモ、亦此稱ヲ用ヰタリ、女藏人ハ男官ノ藏人ニ對スル稱ニシテ、宮中ノ諸事ヲ奉仕ス、東豎ハアヅマワラハト稱シ、少女ヲ以テ之ニ充

ッ、行幸ノ時ニ、馬ニ乘リテ供奉ス、代々紀朝臣季明、阿閉宿禰友成ノ姓名ヲ襲用シ、又女敍位ノ時、五位ニ敍セラル、流例ナリ、樋洗ハヒスマシト云ヒ、又單ニ洗ト書シテ、スマシト稱ス、御厠ノ事ニ預ルナリ、長女ハヲサメト稱シ、御厠人ハミカハヤウドト稱ス、其所役ハ並ニ樋洗ト同ジ、半物、雜仕、御末ハ共ニ賤役ニ從フモノナリ、

名稱

〔名目抄人體〕女官(ニヨウクワン)女公人之總名也

〔有職問答一〕一女官事

女官の事によくはんとは、(近來の云ナラハシカヤウニ候)大略禁中上下の官名ある女房を稱候、によう官となかくよぶは、刀自得選等の事にて候と被仰聞候畢、此分候哉、

〔東宮年中行事四月〕一日改御裝束事

こんあんに、〇中略ひのござをば、によくわむにわかちたまふ、

〔禁秘御抄下〕一女房

女房品格

上臈　不謂是非、二三位典侍號上臈、著赤青色候御陪膳也、不補是等職聽色、大臣女或大臣孫也、孫猶或不聽、或聽之、禁中無小路名、仍雖最上號大納言、上古可然人女皆爲女御更衣、只宦仕華族人不爲最上事、但又有例非恥、新院〇土御門御時、督三位女能圓按察三位、雖爲三位不入夜御殿、不取劒璽也、是僧女故也、近代三位濟々、春宮幷親王御乳母、又無何院女房等皆敍三位、力不及事也、仍禁中濟々又有何事哉、是近代事也、先帝典侍當時妾著禁色參内、可止事也、權中納言狂者頻豫參不可爲例、建曆左衞門督局親兼女依院〇後鳥羽御許著禁色、是過分事也、但別儀也、其後又中宮女房按察雅縁僧正女是又著禁色參、是別儀歟、但如此事亂政也、但自中宮御方時々參之間、無何非可戒、建曆之比、家經卿女不聽之、親兼卿女聽之、是非道之甚也、但別儀中々不能子細、

小上臈　不謂善惡公卿女號小上臈、著織物幷表著也、侍臣女依儀、公達女勿論、諸大夫公卿孫、或爲

小上臈、或爲中臈也、可依父官歟、僧女依俗姓、假令俗姓生公達者、公卿遠多爲小上臈、近兵衛(院御時)又當時大貳(法眼成海女)成海房官法師也、成海父生公達也、是著織物、万人引比類、尤不可爲例、右京大夫、大納言資賢孫也、而父雖爲房官、不著織物、依人異事也、

中臈　內侍外不著織物類也、是昔號命婦、侍臣女已下也、諸大夫良家子、醫陰陽道等猶號中臈、八幡別當女同、凡一切者多中臈品也、

下臈　諸侍賀茂日吉社司等女也、皆稱候名也、不及國名、但其內宿老者、或賀茂祭爲命婦、渡後或國名ヲモヨビ、又(○又一本作或)候名モ有也、是近代如此、皆下臈藏人也、但近代中臈品上品藏人多歟、凡女房、上臈、小上臈、內侍外不入夜御殿朝餉內、只中臈渡朝餉緣、下臈不渡之、下臈不取御服、於局著紺紫小袖紺帷事也、錦端席御座敷外不用事也、

〔禁秘御抄階梯下〕女房

下臈候名、按ひさしき、うれしき、ゆりはな、久、龜、鶴抔樣皆候名也、(○中略)

國名、按陸奧常陸等之類也、(○中略)

峯記(承元三、三、廿三、立子入太子宮、)歸家之後、定女房等名、(殿名候名、上中臈有殿名、下臈無殿名、久安記云、上中下臈、皆有候名、上中臈有召名、下臈無召名、雖中臈、除公達及藏人五位之外無召名、至大進者、依爲乳母有之、)按殿名又小路名ト云、大宮殿、三條殿、坊門殿抔也、候名見上、召名、按察、大進、少進、大貳、少貳、少辨、左衞門、少將之類也、

〔倭訓栞前編二十〕にようばう　侍中群要に、多女房所供也、召男房事希有事也、盛衰記、女房男房と見えたり、凡て倘侍より已下禁中の女中に稱せり、

〔貞丈雜記二人品〕一古は女の事をすべて女房と云、房はねやとよむ字にて、部屋と云に同じ、部屋を持たる位の女を女房衆と云也、部屋を持ざる女をも女房と云はうやまふ心也、今は人の妻の事をのみ女房と云也、

〔羽倉考 二〕女房之事

禁裏院中等ニテ女房ト云ハ、上﨟、小上﨟、中﨟、下﨟ノ官女ヲ云、夫ヨリ以下ノ官女ヲバ女房トハイハズ、○中略當時モ下﨟以上ハ長局トテ、一列ニ房アリ、故ニ女房ト云歟、夫ヨリ以下ノ者ハ、相合曹司ナドアリトイヘドモ、其一列ニハ非ズ、又人臣ノ家ニテモ、女房ト云ハ、是モ下﨟以上ナルベシ、

〔女房官品〕禁裏

上﨟のつぼね、一位二位のつぼね、これらなどは大臣大中納言の娘、可然人々の娘まいる、下らふ女ばう國名など、又三位四品五位以下は、内侍のすけと成なり、

〔禁秘御抄 上〕一御膳事

朝餉、上﨟女房典侍或聽色人召候、朝餉南間端、中﨟内侍、或小上﨟候障子外、取傳之、下﨟又傳之、中﨟下﨟得選又傳之、刀自持參御膳、近代無何往反、

〔禁腋秘抄〕清涼殿

朝干飯ノソバ一間ニ、兩面三帖ヲ敷、奥ノトリキ障子ノソバニ、御倚子ヲ立、○中略元三ナドニハ、典侍若ハヨキ小上﨟、此兩面ニ候也、○中略朝餉常ノ御所ノ御縁ハ、下﨟女房トヲラズ、

〔日中行事〕辰の時に、どのもりのつかさ御ゆをくうず、○中略御湯殿へおりさせ給て、御ゆめしぬれば、典侍もしは上﨟の女房、御ゆかたびらをたてまつる、

〔海人藻芥〕内裏ニ武士ノ女ヲ被召仕ニハ、熱田大宮司、高、上杉ノ女ハ中﨟ニ被召仕、其外ハ下﨟女房ニ被召仕、中比一色ノ大入道ガ女、内裏ニ祗候セシ下﨟女房也、但如斯事随時代相替事アリ、一定スベカラザル事歟、

女房次第、大上﨟トハ攝家ノ御女也、上﨟トハ三家等ノ大臣ノ女也、中﨟トハ名家等ノ女也、但名

家ノ女典侍ヲ渡スレバ、至上﨟令勤御陪膳、名家ノ女外ハ典侍ヲバ不渡也、下﨟女房トハ、諸大夫或ハ北面等ノ女也、御室ノ坊官行賢法印後胤ノ女、安居院澄憲法印ノ後胤ノ女、八幡祠官ノ女ハ、皆中﨟ニ被召仕也、但俗人ノ猶子ニ成也、後圓融院ノ御母儀、崇賢門院ハ八幡祠官ノ女也、而ニ廣橋大納言兼綱卿猶子ニシテ、後光嚴院ヘ參ラセケル也、初メハ三位局トテ、中﨟ニテ宮仕ハセ給ヒケリ、

〔光臺一覽 二〕凡の格式をいふときは、典侍は上﨟、内侍は中﨟、御下は下﨟なり、乍去典侍内侍御下之中にても、上中下﨟の細品は可有なり、

〔光臺一覽 五〕御下たと申は、古への下﨟、今六位之格に立也、　上﨟と申は、二三位迄昇進之人の事也、　小上﨟といふは、善惡をいわず、公卿の女也、今典侍、　中﨟は、殿上人以下之女也、昔之命婦是也、今内侍、　下﨟は、社司の女、則今のお下之局也、

〔後水尾院年中行事 下〕一上﨟分の人は、根本女孺、するの者などに、直に詞をかはさず、廊下などにて行あふ時も、傍により跪、面をそむきて居也、本はかうやうのさ法なれど、此ごろはさしもあらず、

〔後水尾院年中行事 下〕一御陪膳に上﨟或は典侍候す、正親町院御時には、晴季公の女、家輔公の猶子として上﨟に參らる、尚侍に准せらる丶樣の事にて、御陪膳に候せられ侍らず、されども上﨟は、尚御陪膳に候すべきもの也、

〔后宮御著帶部類〕常盤井入道相國〇實氏記、寛元元年正月廿三日庚子、今日中宮〇後嵯峨后藤原姞子有御著帶事、吉時申剋云々、件御帶關白被獻之、小時使持參御帶云々、奉行宮司俊兼〇權大進啓事由、〇註略依仰使取御帶參上、〇中略仍俊兼於中門廊簀子請取之、經晝御座前簀子、自東第二間進入、女房中﨟尾張内侍尾張内侍(中略)參主上御前、有使之間用之、内侍不著上著、傳取之、經御手水間、持參常御所南面、予扶持之、開宮覽之、二品祗候、其外人不候、

〔薩戒記〕應永卅三年八月廿二日癸未、午剋參院、（○中略）予（○藤原定親）問藤中納言云、内裏女房懷姙之人（皇胤也、産可爲來月云々、）其名如何、皇子降誕之時、定可有賞翫歟、答云、未聞及、或人云、未及名之沙汰、最初號伊與局也、（○下略）猶于今爲權大納言子、若可爲典侍歟、但無其沙汰云々、

〔憲法類編四國法〕己巳（○明治二年）十月御沙汰

尚侍（正三位從三位）　典侍（正四位從四位）　掌侍（正五位從五位）　命婦（正六位從六位）　尚侍（在其人任之）　典侍（四人）　掌侍（四人）　命婦（有權官、此内人兼大御乳人）

稱呼之事

大典侍　二典侍　三典侍　新典侍　勾當掌侍　二掌侍　三掌侍　新掌侍　一命婦　二命婦　三命婦　新命婦　權命婦　新權命婦　御差

大宮中宮女房

上﨟　小上﨟　中﨟　下﨟　御乳人　御年寄

各稱呼ハ地名

隱居女房各稱地名之事

右之通ニ付爲心得相達候事

内侍司

〔西宮記臨時五〕一所々事

内侍所（在温明殿、載令有月料、主殿、掃部、女官同候云々、）

〔禁秘御抄上〕一賢所

近代者如内侍不候内侍所、上古者多以温明殿爲局、

〔古語拾遺〕天兒屋命、太玉命、以日御綱（○註略）廻懸其殿、令大宮賣神侍於御前、（是太玉命久志備所生神、如今世内侍善言美詞和君臣間、令宸襟悅懌也、）

〔令義解 一 後宮職員〕內侍司

尙侍二人、掌供奉常侍、奏請、謂奏而請其報、凡此爲女司、不涉男官、若須涉者、自依勅旨式也、宣傳、撿按女孺、謂下條、諸氏氏別貢女、雖非氏名、欲自進仕者聽是也、兼知內外命婦朝參、及禁內禮式、謂後宮禮式也、此司以下無女史者、皆取女孺堪任者爲之也、之事、典侍四人、掌同尙侍、唯不得奏請宣傳、若无尙侍者、得奏請宣傳、掌侍四人、掌同典侍、唯不得奏請宣傳、女孺一百人、

〔令集解 六 後宮職員〕古記云、典侍注請傳之字若爲、答奏宣小事、謂之請傳耳、少納言一種也、釋云、奏請名例奏請者、案奏而請其報也、穴云、問依公式令、謂奏事皆少納言以上所行、未知此司掌何事乎、答自餘諸事巨多是也、○中略 穴云、注讀文一說供奉常侍、而奏請宣傳爾、一說供奉爲證、則侍從注亦如讀文、常侍傳宣事一耳、言男官侍從及獻替奏宣意耳、奏請猶奏宣、○中略 穴云、撿按女孺、謂諸司皆押知耳也、今說此同也 問、當入司所殘女上何司哉、答、縫司掌女功、皆合在其司、私案采女等、配水司膳司、所餘合上縫司也、言名帳皆在內侍司耳、跡云、女孺者、謂諸司女孺皆撿按也、朱云、撿按女孺者、此司一司內女孺者未明、女官本司本司可記宮人之上日功過者、未知記後何司可送、釋云、十二司宮人考按定送縫殿寮也、又云、或說十二司注上日行事、送內侍司、內侍摠取送縫殿寮者、件說未一定、又采女考者所仕記上日行事、直送采女司、爲當此亦與女孺等考同、何也、而亦疑若送內侍司者、內侍司考定送、爲當受取上送縫殿寮令定考第、而凡可無本司各考定何、以上事中務職掌說了○中略 穴云、朝參縫司所知、內侍司亦押知耳、○中略 穴云、禁內禮式、謂後宮院中禮式是、問有違失儀式之罪科罰何、答女司決罰、故刪定令稱糺正推罰也、跡云、知朝參及禁內禮式之事、謂當命婦等朝參、撿按及敎正禮儀耳、諸司等皆太政官簡定奏聞、奉勅合召其補任帳、中務掌耳、又朱云、凡此司管藏司以下諸司、依何文可習、若爲作者本意所傳歟、何、

〔唐六典 十二 內侍省〕內侍四人、從四品上

石氏星經宦者四星在帝座西、周禮有內小臣閽人寺人、鄭玄云、今謂之宦人、詩有巷伯寺人、孟子

之作春秋時、皆謂之寺人、戰國趙有宦者令繆賢、漢書百官表云、少府奏官、屬官有中書謁者等、令丞諸僕射署官皆屬焉、又云、詹事掌皇后太子家、屬官有中長秋、私府諸宦官皆屬焉、成帝省併屬大長秋、又曰、將行秦官、景帝更名大長秋、或用中人、或用士人、秩二千石、〇中略隋内侍省、置内侍二人、内常侍二人、内侍則舊長秋、内常侍則舊中常侍也、煬帝大業三年、改内侍省爲長秋監、置令一人正四品、少令一人從五品、丞二人正七品、並用士人、罷内親者員、省内僕内謁者局、所領惟掖庭、宮闈奚官三署、而口亦參用士人、大業五年又置謁者員、皇朝依開皇復爲内侍省、置内侍二人、今加至四人、龍朔二年、改爲内侍監、咸亨元〇元字原闕、據通典補、年復舊、光宅元年改爲司宮臺、神龍元年復爲内侍、中官之貴極于此矣、若有殊勳懋績、則有拜大將軍者、仍兼内侍焉、〇中略内侍之職、掌在内侍奉、出入宮掖、宣傳制令、總掖庭宮闈奚官内僕内府五局之官屬、内常侍爲之貳、

〔三内口決〕一女房奉書事

是ハ内侍宣ノ准據候、天子ノ御口ヅカラノ仰ヲ内侍奉テ、其旨ヲ傳ヘラレ候、是ヲ内侍宣ト申候、以此准據諸事被書出候ヲ、女房ノ奉書ト申候、被成候品々ハ大略綸旨同前候、下々ヘ被仰出候事者、以宛所被書出候、

〔源氏物語桐壺〕ひきいれの大臣のみこばらに、たゞひとりかしづき給御むすめ、春宮よりも御けしきあるを、おぼしわづらふことありけるは、この君にたてまつらんの御心なりけり、〇中略おまへより内侍宣旨うけたまはりつたへて、おとゞまいり給べきめしあれば、まいり給、

〔禁秘御抄中〕一藏人事

凡補藏人、延喜天暦御記、頭奉勅向大臣亭仰之、又召御前仰之、或又彼御時内侍宣也、頭以下五位藏人下知之、小舍人向彼家也、

〔侍中群要二〕下宣旨事

尙侍

有必奏下一上之書等、不可奏、以次之上下宣旨之時、若事理重者、藏人必稱内侍宣、(典侍某子傳宣云々)是依六位藏人直地不可承也、

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年十二月丁酉、是日左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、(〇中略)内侍宣久、國老止志氏波、獨能美許曾坐世、(〇中略)今進禮留辭書非御意止志氏、左近衞中將從四位下和氣朝臣眞綱乎差使給止宣、

〔類聚符宣抄 六〕被中納言在原朝臣行平宣偁、奉勅掌侍春淵朝臣治子召仰所司之宣旨、宜准典侍宣而奉行者、

仁和元年九月八日　　大外記大藏善行奉

〔政事要略 六十一〕典侍從五位藤原朝臣灌子宣(〇中略)

康保二年五月五日　　左衞門尉藤原朝臣邦保奉

〔玉海〕壽永三年(〇元暦元年)六月一日戊午、入夜藏人左衞門權佐親雅自院爲御使來、余(〇藤原兼實)依病不調、仍以人(兼親)示云、來十三日可有行幸押小路亭、而劒璽不御、内侍尙可候歟、又晝御座御劒可被開歟、件御劒内侍可持歟、條々可計奏者、余問云、行幸何事哉、答云、依御靈會也、余申云、内侍供奉不可依劒璽御否、男官女官供奉之儀也、而使持劒璽之歟、仍雖其物其人、何不供奉哉、晝御座御劒尤可被入御輿、雖無先蹤、御輿空納依無便也、件御劒内侍取事不可然、近將可持也、其故者内侍一人雖持御劒、今一人空手之條還見苦歟、加之内侍取此御劒者、已以被擬寶劒事、甚無便歟、(〇中略)親雅歸去了、

〔名目抄 人體〕尙侍(シヤウシ)

〔源氏物語 十賢木〕みくしげどのは、二月にないしのかみになり給ぬ、(〇中略)后はさとがちにおはしまいて、まいり給時の御つぼねには、むめつぼをしたれば、こきでんにはかんのきみすみ給、

〔兼載雜談〕一内侍(〇内侍恐尙侍誤)はかみ、典侍はすけ、掌侍はさくわんにあたる也、

〔延喜式 十二中務〕凡尙藏尙侍補任、幷解任之由者、申送太政官、

〔百寮訓要抄〕內侍司　尙侍　執柄の女など是に任ず、女御更衣同程の事也、近代は此官に任る人まれ也、

〔女房官品〕禁裏

內侍のかみ　執柄の御娘などまいる

〔禁秘御抄下〕一尙侍（是大略可准更衣等、近代又絶畢、）

〔西宮記臨時八〕尙侍饗女官事

新任之後、詣縫殿陣、令奏慶賀由、（諸司陣邊立䡛、陪從下仕候所、）爲內侍一人出來傳奏、（書司一人相列、女官乘燭、）給祿、（女裝一襲、入散繪筥、）中宮御、內者、付內侍令啓慶賀、（有贈物、）尙侍又以祿授內侍、（承平、）中宮職縫殿寮立䡛、設前駈酒肴、後日尙侍參內、於禁中便所設掌侍以上饗祿、於縫殿高殿給女官饗祿、（立䡛、）

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年六月庚午、尙藏兼尙侍正三位藤原朝臣宇比良古薨、贈太政大臣房前之女也、賻絁百疋、布百段、鐵百廷、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年三月己巳、尙侍兼尙藏正三位大野朝臣仲仟薨、從三位東人之女也、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年四月己巳、尙侍從二位藤原朝臣百能薨、兵部卿從三位麻呂之女也、適右大臣從一位豐成、大臣薨後、守志年久、供奉內職、見稱貞固、薨時年六十三、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年十月乙未、尙藏兼尙侍從三位阿倍朝臣古美奈薨、遣左大辨兼皇后宮大夫從三位佐伯宿禰今毛人、散位從五位上當麻眞人永繼、外從五位下松井連淨山等監護喪事、古美奈中務大輔從五位上粳虫之女也、適內大臣贈從一位藤原朝臣良繼、生女、卽是皇后也、

〔類聚國史七十五歲時〕延曆十四年四月戊申、曲宴、天皇誦古歌曰、以邇之弊能、能那何浮流彌知、阿良多米波、阿良多麻良武也、能那賀浮流彌知、勅尙侍從三位百濟王明信令和之、不得成焉、天皇自代和曰、記美己蘇波、和主黎多留羅米、爾記多麻乃、多和也米和禮波、都禰乃詩羅多麻、侍臣稱万歲、

〔日本後紀嵯峨二十〕弘仁元年九月己酉、藤原朝臣藥子自殺、○中略藥子以東宮宣旨出入臥內、天皇○平城私焉、皇統彌照天皇○桓武慮婬之傷義、卽令駈逐、天皇之嗣位、徵爲尙侍、

〔三代實錄清和三〕貞觀元年八月十日癸巳、尙侍從三位當麻眞人浦虫薨、時年八十、浦虫者右京人也、父正六位上繼麻呂、浦虫弘仁七年任典殿、十三年授從五位下、未幾遷爲掌侍、十四年授從五位上、天長五年授正五位下、爲典侍、○中略天安元年任尙侍、浦虫爲人貞和、早標美譽、未嘗適於人、遂不知伉儷之道、自掌宮人之職、能修禁內之禮式、　十月廿三日乙巳、尙侍從三位廣井女王薨、廣井者、二品長親王之後也、曾祖二世從四位上長田王、祖從五位上廣川王、父從五位上雄河王、廣井天長八年授從五位下、任尙膳、嘉祥三年授從四位上、任權典侍、仁壽四年授從三位、天安三年轉尙侍、薨時年八十有餘、廣井少修德操、擧動有禮、以能歌見稱、特善催馬樂、諸大夫及少年好事者、多就而習之焉、至于殂沒時人悼之、

〔三代實錄清和四〕貞觀二年二月十一日壬辰、從三位源朝臣全姬○嵯峨皇女爲尙侍、

〔本朝文粹表五〕爲尙侍源朝臣全姬請罷職表　　菅贈大相國

妾全姬謹言、妾先陳悃誠、請解所職、重年遠隔、單書難通、一二年來、愈增厚顏、今妾位崇三品、齡迫七旬、將假脂粉以從事、紫園非扶杖之庭、欲催綺羅以勤公、丹悃慙懸車之儀、妾不敢嫌退、白日惟明、妾亦無飾詞、蒼天在上、伏願殊垂降鑑、聽妾誠請、避高班於賢路、養殘氣於幽閑、妾全姬誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

元慶四年月日

〔三代實錄清和七〕貞觀五年正月三日丙寅、大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣定薨、○中略定者嵯峨太上天皇之子也、母百濟王氏、其名曰慶命、天皇納之、特蒙優寵、動有禮則、甚見尊異、宮閫之權、可謂無比、官爲尙侍、爵至二位、及薨贈一位、○下略

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月二日壬辰、以正三位藤原朝臣淑子(○長良女、藤原氏宗妻、)爲尚侍、

〔日本紀略醍醐〕延喜六年五月廿八日庚辰、尚侍從一位藤原朝臣淑子薨、(年六十九)卅日壬午、贈故尚侍淑子正一位、賜穀倉院絹布、

〔日本紀略二朱雀〕承平七年十月十八日丁酉、贈故尚侍正二位藤原滿子正一位、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、正四位下藤原朝臣貴子爲尚侍、(太政大臣藤原忠平息女也)

〔榮花物語三様々の悦〕東宮(○三條)はことし(○寛和二年)十一にならせ給にければ、この十月に御げんぶくのことあるべきに、おほとの(○藤原兼家)のおほんむすめ、(○綏子)たいの御かたといふ人のはらにおはするをぞ、ないしのかみになしたてまつり給て、やがて御そひぶしにと覺しおきてさせ給ひて、その御調度どももよるをひるにいそがせ給、

〔大鏡四右大臣師輔〕このきさいの宮(○村上后藤原安子)の御をとゝの中の君(○登子)は、重明式部卿宮北方にてぞおはせしかし、(○中略)さて后の宮もうせおはしまし、式部卿の宮もうせ給ひて、みかどわりなくこひしとおぼしければ、めしとりていみじく時めかさせ給ひて、貞觀殿内侍のかみとこそ申しかし、

〔日本紀略六圓融〕安和二年十月十日甲申、以從五位上藤原登子爲尚侍、

〔一代要記圓融〕後宮

尚侍正三位藤灌子(天祿三年十二月薨)　尚侍從二位藤登子(中略)天延□□三月二十九日薨)

尚侍從三位忯子(師輔六女、冷泉女御、天元五年七月任尚侍、同十月敍從三位、)　尚侍正三位藤婉子(太政大臣兼家二女、(中略)貞元元年五月任尚侍、)

〔日本紀略十一條〕寛弘元年十一月廿七日丁丑、以正四位下藤原妍子爲尚侍、左大臣(○藤原道長)第二御息女、

〔一代要記白河〕後宮

尙侍從五位上藤朝臣眞子寬治元年十二月十五日卒、七十二、

〔玉海〕治承三年六月廿九日丙辰、白川殿○平盛子薨、奏贈位等事有其沙汰云々、被問前相國左府等云々、

大略淑子例歟云々、宇多養母云々、○中略

白河殿准后薨逝間事○中略

尙侍從一位藤原淑子宇多養母、贈太政大臣長良女、右大臣藤原氏宗室、延喜六年五月廿八日庚辰薨、

卅日壬午、召中納言源貞恒卿、令行宣命幷贈正一位事、參議十世王中務大輔源治朝臣等爲使、○中略

宣命贈位事

准淑子幷代々外祖母等例者、可被贈正一位歟、准女御等例者、可被贈從二位歟、但三位准后人幷有養母之儀者、可被贈正一位歟、○中略

右大略注進如件

六月廿五日　　大外記淸原賴業

七月廿一日丁丑、昨日白川殿有贈位事、上卿權中納言實家卿、宣命使右大辨長方卿、位記使橘以政朝臣云々、廢朝三ヶ日、音奏停止事、被仰下賴業眞人云々、昨日贈位之間事、職事甚親不仰官々人、史一人不參、奇異事也云々、

〔尊卑分脈藤原氏五〕道家

┃女子從一位四條院尙侍全子

〔一代要記後嵯峨〕後宮

尙侍從二位藤佺子前攝政入道左大臣道家女、（中略）建長五年九月十九日薨、年廿六、

〔女院小傳〕萬秋門院頊子圓明寺關白○藤原實經女、○中略乾元二三五爲後二條尙侍、卅六

典侍
權典侍

〔名目抄人體〕典侍ス　ケ

〔下學集官位上〕典侍テンシ　ス　ケ　レシ　女官

〔源氏物語七紅葉の賀〕といたう老たるないしのすけ、人もやんごとなく、心ばせありて、あてにおぼえたかくはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、○下略

〔光臺一覽二〕內侍典侍をば內侍を略して、只成は大典侍、大夫典侍、新典侍、權典侍など、被呼用、人數多きときは、右之外に新大典侍、新大夫典侍、又は其父之姓を呼て源典侍、藤典侍など、被召仕御事也、

〔百寮訓要抄〕內侍司

典侍　大中納言の女是に任ず、紅紫の織物の禁色をゆるさるゝなり、源氏の物がたりに、ゆるし色といふも、紅紫の事也、上臈女房なり、

〔女房官品〕禁裏

內侍のすけ　大中納言の娘、日野勸修寺の宗徒の人々の娘まいる、

〔枕草子十〕女は　內侍のすけ、ないし

〔禁秘御抄下〕一典侍

四人也、此職尤重、爲御乳母之人者、諸大夫女聽之、只人公卿侍臣女也、侍臣女生公達躰也、大臣子頗無例、大臣孫少々有例、所謂國信女也、只聽色品人不好此職事也、候御陪膳著禁色青色赤色尤可恐思事歟、白川院御時親子、能信家者、父親國無下者也、然而爲吉例、後白川院御時朝子、馬助兼永女、是左道也、但不補典侍歟可勘、保元二年爲從三位、其後劣定殿上人女也、又雖非侍臣知通女可准侍臣、二條院御時源光保女、爲御乳母爲典侍、院御時高階清章女同之、但是等不應法、向後定左道人多補之、堀河院御乳母四人、其外不過二三人、近代花族御乳母左道出來歟、中宮御息所ナド舉中有例、

〔後水尾院年中行事 下〕當時の典侍は、女敍位なければ、位階の沙汰なし、されども必聽色人なり、

〔西宮記 臨時八〕陪膳事　內宴、更衣若典侍奉仕、

〔枕草子 一〕內侍のすけなどいひて、をり〳〵うちへまいり、まつりのつかひなどに出たるも、おもだゝしからずやはある、

〔禁秘御抄 中〕可遠凡賤事

天子者殊可被止御身劣、是難盡筆端事也、假令供御之陪膳聽色女房、又典侍不論善惡候之、前典侍ナドノ非當職類、無何著禁色雖參、不可及御陪膳、〇下略

〔光臺一覽 二〕往古は右の女御に押つゞき、更衣御櫛笥殿とて、二名の女中候得共、これも今は絶候て、此職は典侍方に被勤よしなり、更衣は天子の御服召替させまふする役、御櫛笥とは御くし上なりとかや、

〔政事要略 七十〕右辨官 下檢非違使

雜事二箇條狀

一定使典侍車、幷前駈數事、

右年來件使典侍、前駈不少、後車亦多、服綺紈而半透、裝羅繡而□□思其一車之費、豈只十家之產、同〇左大臣宣、奉勅、自今以後、車勿過五兩、騎勿過八輩、五位二人、六位已下六人、以是爲其定數者、

以前條事、所仰如件、使宜承知、依宣行之、不得違越、

永祚二年四月一日　左大史大春日朝臣良辰

〔本朝世紀〕康治二年十一月廿八日庚辰、今日被立八十島祭使、御乳母典侍藤家子 故家政卿女、清隆卿室也、行裝之儀、世以爲壯觀、〇中略藏人左近將監藤隆憲爲勅使、發向、典侍用唐車云々、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字二年六月甲辰、太宰陰陽師從六位下余益人〇中略等四人賜百濟朝臣姓、〇中

略內侍典侍ノスケ從五位下高麗使主淨日等五人多可連、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年五月丁卯、從四位下菅野朝臣人數爲典侍、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十月廿三日乙巳、尙侍從三位廣井女王薨、〇中略嘉祥三年授從四位上、任權。典侍。

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、以從五位上藤原朝臣貞風爲典侍、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、〇中略正五位下藤原朝臣明子爲典侍、元掌侍

〔日本紀略一醍醐〕延喜十五年正月廿四日乙卯、詔贈故典侍正四位下滋野朝臣直子從三位、賜絹布等、

〔續古事談二臣節〕高內侍ト云ハ、中關白ノ室、成忠二位ノ女也、圓融院ノ御時典侍シケレドモ、臺盤所ユルサレザリケレバ、內侍所ニ屛風ヲタテヽ、サブラヒテ、云事アル時ニハ、カミヲアゲテ、女官ヲオホクグシテ參テ、石灰ノ壇ニゾ候ケル、

〔朝野群載四朝儀〕典侍正四位下藤原朝臣師子誠惶誠恐謹言

請殊蒙天慈因准先例被敍一階狀、

右承曆四年任典侍、承德二年敍當階、典侍勞廿一年、當階後三箇年、竊聞傍例、正四位下歷二三年敍三品例也、望請天恩、因准先例、被敍一階、師子誠惶誠恐謹言、

康和二年正月十一日　典侍正四位下藤原朝臣師子

〔中右記〕嘉承二年十一月廿五日丙子、女官除目、頭仰云、典侍可任者掌侍重仰宰相令書勅旨、

內侍司

典侍從五位下源朝臣仁子件人元六位也、今夜敍從五位下、然而不書別敍位、是例也、〇中略

嘉承二年十一月廿五日

〔本朝世紀〕久安二年三月八日丁丑、權中納言藤原公能卿參仗座、行女官除目事、〇中略

勅旨

內侍司

典侍從五位下源朝臣俊子

從五位下藤原朝臣敎子

久安二年三月八日

〔山槐記〕治承四年三月九日辛酉、後聞先有女除目事云々、藏人左衞門權佐光長奉行此事、光長示送曰、上卿、藤中納言成範宰相、通親朝臣仰詞ハ只藤原輔子、藤原領子、源房子、源賴子、可爲典侍、〇下略

〔山槐記〕治承四年五月八日己未、今夜被行女敍位云々、藏人宮內權少輔親經奉行云々、〇中略

從五位上

源朝臣房子典侍

〔薩戒記部類三〕當內侍依所望可出家、仍任局法可被任典侍之由望申、乃頭辨宣下之云々、宣旨曰、

宣旨

應永廿七年三月十六日

掌侍藤原朝臣能子

宜爲典侍

藏人頭右大辨藤原盛光奉

〔薩戒記〕永享二年十二月廿五日辛酉、黃昏之程、中御門大納言俊輔光臨、被示合女敍位人等事、

一典侍當時三人、所謂綱子從四位下、故兼宣卿女、光子正五位下、入道一位有光卿女、僚子從五位下、予妹、等也、

〔實隆公記〕明應六年十月廿二日庚寅、黃昏參內、晝間不參、則被召常御所庇、種々物語、勾當內侍被勸一盞、上﨟大典侍、新大典侍等同被候御前、同勸盃、

〔實麗卿記〕天保十年十二月十九日辛巳、予妹經子今年十六才其實十四才於內女房被召出、則被補典侍、

了、珍重々々、祝著之外無他、但職事口宣案其體續左、

上卿新大納言
天保十年十二月十九日宣旨

藤原經子

宜令爲典侍

藏人頭右近衛權中將兼皇太后宮權亮藤原忠能奉

掌侍
權掌侍

〔光臺一覽 二〕內侍掌侍は、掌侍を略して內侍とばかり用ゆ、源內侍、藤內侍、菅內侍、新內侍など、中也、

〔名目抄 人體〕掌侍シヤウジ 內侍同

〔簾中抄 下女官〕掌侍ナイシ

〔百寮訓要抄〕內侍司

掌侍　公卿殿上人諸大夫の女も、是に任せらる、第一の內侍を勾當と云也、

〔女房官品〕禁裏

內侍のせう

平家、菅家、その國司などの娘まいる、今の內侍などなり、

〔禁秘御抄 下〕掌侍

六人、正四人、權二人、權自上古有之、此內以一內侍爲勾當、隨補日爲一二也、雖爲先帝內侍、當帝時後參爲下﨟例也、先帝內侍必一兩人渡、其內劒璽渡時、內侍二人直取之、只時與侍傳之授次將、號送內侍、後代々不入禁中云云、但近宜秋門院兵衞佐女季長彼中宮時候其御方、雖非吉例、如此、凡非可憚、嘉承久我大臣雅實源取劒璽置御帳中、次將取之、彼大臣更非不吉人、勿論歟、爲勾當先例有沙汰、白川院仰曰、非別宣下、頭承仰、仰其人許也云々、內侍有障之時、用代官流例也、其內侍ニ成ヌベキ品中﨟、白地著內侍裝束、奉仕其

役、是例也、延喜十五年御記、神今食內侍有障、以命婦爲代、雖無例准他事爲代云々、是根源也、禁中殊重職也、尤可撰其器量補之、只諸大夫公卿女雖有例、非普通事、納言孫又同品樣程公卿孫也、又侍臣女也、生公達女又只諸大夫女、是殊父ナド不趁諸家者女也、但少々左道人交歟、尤可有淸撰事也、雖不趣諸家、非重代者女不可補、凡內侍官、僧女不補事也、又其身人從者不補、但執柄家聽之、

〔日中行事〕辰のときに、とのもりのつかさ御湯を供す、○中略內侍御湯のあつさぬるさをさぐりて、ことのよしを申す、御湯どのつかうまつる、內侍湯卷をきる事もあり、勾當などなり、

〔日中行事〕夜のおとゞのかいともし、御手水のまより內侍もちてまいりて、四のすみのとうろにともす、

〔後水尾院年中行事下〕一御けづりくしは、禁秘抄御裝束の事等無何人不奉仕、典侍若聽色上臈也などあれど、此ごろはさしもあらず、掌侍ときどき是を奉仕す、

〔續日本紀桓武三十九〕延暦六年四月乙丑、武藏國足立郡釆女掌侍兼典掃從四位下武藏宿禰家刀自卒、

〔續日本後紀仁明八〕承和六年三月壬辰、授掌侍正五位下大和宿禰館子從四位下、從五位下菅原朝臣閑子爲掌侍、

〔三代實錄陽成三十四〕元慶二年九月十六日戊申、以散事從五位下藤原朝臣因香爲權掌侍、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、○中略從五位下橘朝臣平子爲掌侍、元掌侍從五位下良峯朝臣養父子爲掌侍、正六位上橘朝臣本子爲權掌侍、

〔日本紀略村上三〕天暦元年閏七月廿二日甲戌、藤原輔子、同等子任掌侍、

〔朝野群載朝儀四〕掌侍正六位上高階朝臣繁子誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例依當職勞被敍爵狀、

右繁子謹撿案內、依當職勞被敍爵之輩、古今之例也、就中掌侍者、是劇務無雙、何況勞積年積乎、望請

天恩、依當職勞、被敍爵者、彌竭奉公之節矣、繁子誠惶誠恐謹言、

康和二年正月十一日　　掌侍正六位上高階朝臣繁子

〔中右記〕嘉承二年十一月廿五日丙子、女官除目、頭仰云、典侍掌侍可任者、重仰宰相令書勅旨、

內侍司〇中略

掌侍正五位下高階朝臣業子先朝掌侍也、雖辭申、又被還著也、

嘉承二年十一月廿五日

〔愚管抄五〕十二月〇平治元年廿五日乙亥、丑の時に、六波羅へ行幸〇中略をなしてけり、〇中略內侍には、伊豫內侍、少輔內侍二人ぞ心えたりける、

〔山槐記〕治承四年三月九日辛酉、後聞、先有女除目事云々、藏人左衞門權佐光長奉行此事、光長示送曰、上卿藤中納言成範、宰相通親朝臣、仰詞ハ〇中略平衡子、高階秀子、藤原方子、源職子、可爲掌侍、〇下略

〔山槐記〕治承四年五月八日己未、今夜被行女敍位云々、藏人宮內權少輔親經奉行云々、

從四位下　高階朝臣仲子掌侍

〔玉海〕仁安三年二月十九日壬子、今日有御讓位事、〇中略於舊主御所、內侍一人忽以闕如、筑前內侍、成定女、俄云所勞不參、攝政被責、敢不出來、仍忽被補內侍用之云々、

〔薩戒記〕永享二年十二月廿五日辛酉、黃昏之程、中御門大納言俊輔光臨、被示合女敍位人等事、〇中略

一掌侍當時二人茂子勾當、從四位下、藤子從五位下也、同皆去春被敍了、然而於勾當內侍者、爲女工所勾當之間、若猶可加階歟、同可伺定云々、

〔言繼卿記〕天文十一年二月十九日庚午、今夜薄息女新內侍妹新參了、掌侍好子云々、

新內侍者藤內侍ニ被成候、新參新內侍云々、

〔枕草子六〕としかたの中將など、猶ないしに中てなさんと〇謂下爲清少納言爲中內侍上さだめ給ひしとばかりぞ、

兵衞の佐、中將にておはせしがかたり給ひし、

〔御湯殿の上の日記〕長享三年〇延德元年正月四日、うけどりの御てうし、こうたうの内侍どの御ちの人なり、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

内侍勾當女史、應和元五卅宣旨

〔有職問答一〕一勾當内侍事今ノ長橋也、内々取次也、内侍ノウチ第一ヲ勾當ノ掌侍ト喚候也、

是は内侍のせうの一﨟を申也、總而内侍司に三あり、かみ、すけ、せう也、尚侍はかみ也、典侍はすけ也、掌侍是はせう也、たとへば、左右衞門督佐をば、必なに衞門のかみすけと喚也、尉をば、何衞門と計よぶごとく、内侍のせうをば、只何内侍と計よぶ、何内侍トハ、藤氏ハ藤内侍、源氏ハ源内侍ト云類也、かみすけたる内をば、必尚侍のかみ、典侍のすけとならではよばぬ也、是に而心得べき由被仰出候畢、其分にて候哉、此分候歟猶巨細に被仰出度候、又常侍、内侍ノヒウニテ、當時只内侍ト喚ニテ候、かやうに書候を、見及申候、是は何れにて候哉、

〔有職問答二〕一勾當事

内侍方ノ内第一ノ掌侍ヲ勾當ト申候、是ハ内侍所ノ別當ト云心ニテ候也、御いづれの品にあたり候哉、此外にも、勾當と申人御座候哉、

〔新野問答〕一勾當内侍とは、内侍のうち、いかなるを申候哉、

答、〇野宮定基勾當内侍とは、内侍の内頭にて候、今世長橋の局と申おなじ事にて候、第一勾當内侍、源内侍、藤内侍と氏を付け申候、四人の内、後になりたるを新内侍と申候、

〔官位訓四〕勾當内侍の事

勾當内侍の事を、太平記にて聞はべりて、さまぐ\あらぬ沙汰いふ族あり、勾當内侍と申すは、内侍掌のうちの第一﨟をいふ也、又は長橋の局に居給へるゆへに、長橋殿とも申す也、天子へ公方より内々の取次は、勾當内侍主給ふ也、是ゆへ諸家よりも大かたの事は、勾當内侍取次給ふ也、内

侍、勅を奉て書出し給ふ文を、女奉書と申也、沙門醫者等の官位は、長橋殿の取次給ひて、上卿へ申傳へ給ふとかや、

〔光臺一覽 二〕内侍之中の上﨟を勾當内侍と申候、諸事の沙汰武家の執奏、古へより此局なり、長橋坊に居住なされ候故、長橋殿と申なり、長橋辭退あれば、典侍の官に上りたまふなり、

頭註　高野殿大納言保春卿之御女、中御門院之長橋に被召仕なり、御一代一人なり、長橋にて有之なり、當今御卽位之節より勅諚、院宣、大臣方依御吹擧、二度之長橋被仰付、總女中御守旁、職方幷關東御往來之譯等、女中方江指南可申旨被仰下、尤其人之器量發明、二度之長橋と申事大切なる規模なり、近年御斷立、只今典侍に被轉任御座なり、

〔山槐記〕安元元年八月十日戊午、夜半許、伊豫内侍（前肥前守保説女、實故手嶋親弘入道子、）死去、（年卅七）勾當内侍也、聊病邪氣之上炮病云々、

〔薩戒記〕應永卅三年八月廿二日癸未、前藤宰相語云、今朝以勾當内侍被仰云、主上（稱光）御夢、山門訴訟可有裁許之由有責申之人、御夢中、是爲日吉權現之由所思食也云々、則申入道殿了者、

〔薩戒記〕永享六年十二月廿六日己巳、亥終刻、著束帶（如例）參内、今間於勾當内侍局（號長橋）妻、有住吉神寶御覽事云々、

〔基量卿記〕貞享二年五月六日、一昨日於東宮御所大納言典侍局、勾當局、伊豫局等參會、退出之刻、鳥飼達興之次第、以勾當爲第一、次大納言典侍、次伊豫ト云々、此事以外之事也、典侍掌侍爲格別、且又大納言典侍東宮御母儀貴重事異他、鳥飼如何樣之覺悟亂次第候哉、過分之不調法也、依之爲長橋局沙汰、以佐野修理、件鳥飼令蟄居之旨、逹叡聞、誠過法之振舞、急度可令蟄居由、修理へ可申付仰也、則四人於男居申渡、

〔光臺一覽 二〕内侍所御守の女中は、内侍所の刀自と申、七八人も有之候、○中略　此外御物師上の御服

を仕立る仁三人、御祐筆二人、長橋殿江戸表の御奉書は多くは自筆なれども、勞煩の事あるか、又は其外官位方の奉書、又は典侍方申次の奉書など認る役なり、奉書は則彼女房奉書と申ものなり、是等は皆長橋殿御預り女中也、

頭註長橋殿は二百石なり、典侍方大方百五十石、內侍方百石位にて、皆地方洛外上所と申なり、被召仕候衆は、御年寄と申一人、御櫛上一人、御賄と申一人、御物師一人、陪從女中一人か二人、菊の間と云上働一人、食炊二人、右女中大方は八九人被召仕、局に居申也、外の侍一人每日未明に出仕、暮方下宿仕、下部一人每日御里より通ひ、奉公仕なり、御下方は百石に不足故、御藏米なり、召仕も各分限相應なり、

〔光臺一覽二〕御下之局とて御座候、是は下鴨、松尾、稻荷等之社司の女なり、名は越前、三河、大輔などと被召なり、此頭たる女中を御代々いつにても、伊豫と被召通例なり、

〔後水尾院年中行事上〕煤拂、〇中略殿上人內々の衆は、のこりなくめし出されて、かちんてんかくなど給、御乳母これをやくす、勾當內侍酌、伊與さかなにて御とほしあり、

〔後水尾院年中行事下〕一伊與〇伊與下一本有內侍二字迄は房をもつ、其外下らふは房をもたず、

女史

〔儀式七〕正月十六日踏歌儀

中務輔以上唱名賜綿各有差、但皇太子祿授坊官、所司獻祿餘於殿上、即內侍令女史賜踏歌者、各有差、

〔小右記〕天元五年五月八日己亥、今日中宮被行女官等饗祿事、其儀〇中略同殿〇弘徽殿與常寧殿南渡殿爲女史座南向敷紫端疊、立臺盤、　六月廿九日己丑、今日大祓所公卿一人不參、仍以右少辨惟成爲上代被行之、內侍等稱障不向祓所、仍以女史爲內侍代、

〔朝野群載五朝儀〕內侍所

勘申殿上女房上日夜事

一番上

正四位下藤原朝臣芳子　少將典侍　上日六十三　夜无　上等

從五位上源朝臣繁子　源典侍　上日卅七　夜卅七

從五位下藤原朝臣賴子　宰相典侍　上日无　夜无

從四位下源朝臣義子　小馬掌侍　上日七十九　夜六十一　中等

正五位下藤原朝臣業子　少將掌侍　上日七十九　夜六十七　中等

正六位上平朝臣親子　侍從內侍　上日六十三　夜五十七　下等

從五位上藤原朝臣義子　小大輔命婦　上日百七　夜十三　上等

從五位上藤原朝臣善子　宮內命婦　上日无　夜无

二番上

正五位下藤原朝臣經子　宰相御乳母　上日廿四　夜廿四　上等

從五位上藤原朝臣親子　式部御乳母　上日无　夜无　上等

一番下

從五位上藤原朝臣孝子　少將命婦　上日百六　夜百六　上等

二番下

正六位上紀朝臣忠子　式部　上日无　夜无

右從去六月迄于十一月、上日幷夜如件、

永承二年十一月五日　　女史從五位上安部朝臣長子

今案等第法、夏、上等百廿日四疋、中等八十日三疋、下等卅日二疋、冬、上等六疋、中等四

用途

藏司

疋、下等三疋、或書云、御乳母并三位各五疋、　博士命婦　得選五位三疋六位二疋　女史謂之博士命婦、

〔侍中群要 六〕月奏

抑女房等第文女史所進也、注上日不付等第、近代殿下令定等第給、雖無下等至于女房有下等給、須皆有例數、

〔花園院御記〕正和三年三月廿七日辛亥、自今夜三ヶ夜參内侍所、亥刻裝束了、〇中略到内侍所、〇中略朕入戸中、端笏著座、女史入參取幣授掌侍、掌侍傳典侍、〇註略朕把之兩段再拜、了返給幣、女史振鈴、三聲朕暫祈念、了出戸外、

〔本朝世紀〕康治元年正月九日癸卯、女敍位依先例混合、恒例女敍位行之、〇中略

從五位下藤廣子女史

〔延喜式 三十六 主殿〕諸司所請年料

内侍司、命婦已下女孺已上、十二月晦夜、雜給料油六斛五斗、二石中宮料

〔簾中抄 下 女官〕藏司（クラツカサ）

〔令義解 後宮職員〕藏司

尚藏一人、掌神璽、關契、供御衣服、巾櫛、謂巾、頭巾也、櫛、梳櫛也、服翫、及珍寶、綵帛、賞賜之事、典藏二人、掌同尚藏、掌藏四人、掌出納、綵帛、賞賜之事、女孺十人、

〔令集解 六 後宮職員〕朱云、供御衣服、謂縫司裁縫衣服、其實可在此司者未明、未知縫殿寮裁縫御衣何、可掌其實何、〇中略珍寶者、猶言寶也、大藏司藏收掌亦同物者、未知物實已在彼司、而此司預知行事一端如何、〇中略賞賜者、別勅給人物、此司收掌、又内藏注云、別勅用物事者、並此同物者、未知此司預行事何、〇中略穴云、出納謂先女司之出納、其男官物不明、知如此之類若無別者、據時行事耳、

〔唐六典 十二 宮官〕宮官〇中略

尚宮局

尚宮二人正五品

司記二人、正六品、典記二人正七品、掌記二人正八品、

司言二人正六品、典言二人正七品、掌言二人正八品、

司簿二人正六品、典簿二人正七品、掌簿二人正八品、

司闈二人正六品、典闈二人正七品、掌闈二人正八品、

尚宮掌導引中宮、總司記司言司簿司闈四司之官屬、

○按ズルニ、唐制尚宮局ノ外ニ尚儀局アリテ、司籍、司樂、司賓、司贊ノ四司ヲ總ベ、尚服局アリテ、司寶、司衣、司飾、司仗ノ四司ヲ總ベ、尚食局アリテ司膳、司醞、司藥、司饎ノ四司ヲ總ベ、尚寢局アリテ司設、司輿、司苑、司燈ノ四司ヲ總ベ、尚功局アリテ司製、司珍、司綵、司計ノ四司ヲ總ベタリ、我藏司以下ノ十一司ハ之ヲ參酌シテ、制定スル所ナリ、

又按ズルニ、内侍以外ノ十一司ハ、男官ノ寮司ト對比セルモノヽ如シ、卽チ藏司ハ内藏寮、書司ハ圖書寮、藥司ハ典藥寮、兵司ハ兵庫寮、闈司ハ中務省ノ監物、殿司ハ主殿寮、掃司ハ掃部司、水司ハ主水司、膳司ハ内膳司、酒司ハ造酒司、縫司ハ縫殿寮ト、其掌ル所相似タレバナリ、

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年八月丙午、葬高野天皇於大和國添下郡佐貴鄕高野山陵、○中略天皇自幸由義宮、便覺聖躬不豫、於是卽還平城、自此積百餘日、不親視事、群臣曾無得謁見者、典藏從三位吉備朝臣由利、出入臥内、傳可奏事、

〔日本後紀桓武八〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣淸麻呂薨、○中略姉廣虫又掌吐納、敍從四位下任典藏、○下略

〔續日本後紀仁明十七〕承和十四年十一月己巳、尚藏從二位緒繼女王薨、女王、能有妖媚之德、淳和太上天

書司

皇殊賜寵幸、令陪宮掖、薨時遺命不受葬使、于時年六十一、

〔三代實錄淸和七〕貞觀五年五月十九日辛巳、尙藏從三位菅野朝臣人數薨、○中略嘉祥二年十月轉尙侍、十一月授從三位、天安元年遷爲尙藏、

〔三代實錄淸和二十九〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、正五位下藤原朝臣御康、紀朝臣金子○金一本作全並爲典藏、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、○中略從五位上橘朝臣光子、從五位上橘朝臣貞子爲典藏、

〔延喜式中務十二〕女官雜用料

藏司

五月五日、續命縷絲五十絇、紅花大三斤、年料樻四隻、麻笥二口、樻一口、水瓶一口、大案一脚、杓二柄、

〔簾中抄下女官〕書司（フンノツカサ）

〔源氏物語繪合七〕廿餘日の月さし出て、こなたはまださやかならねど、大かたのそらおかしき程なるに、ふんのつかさの御琴めし出て、權中納言わごん給はり給、

〔令義解一後宮職員〕書司

尙書一人、掌供奉內典經籍、及紙墨筆几案謂案亦几屬也絲竹之事、典書二人、掌同尙書、女孺六人、

〔令集解六後宮職員〕朱云、內典經籍其實可在圖書寮、後度反云、此司可有者未明何、○中略從紙以下、此女官常收置耳、其所來隨物色從司々來者、

〔三代實錄淸和二十九〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、從五位下小野朝臣賢子爲尙書、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、○中略從五位下壹志篤子爲典書、

〔延喜式中務十二〕女官雜用料

書司

元日拜天地四方料、御褥一條料、絹一疋、調綿四屯、御案覆三條(二條各長六尺、一條長七尺、)料、絹五丈七尺、周帶六條(各長六尺)料、縹帛六尺、香二兩、細布三端、柳筥四合、色紙十二張、白紙十二張、高盤二基、窪坏十口、油一升、供奉行幸御琴硯綱料、緋帛四丈五尺、調布一端三尺、御琴硯案袋覆緒綱料、絁五丈八尺五寸、緋帛五丈、油絹五丈八尺五寸、調布一端三尺、並隨故損請換、

〔伊呂波字類抄 無〕〔簾中抄 下女官〕藥司(クスリノ)

〔令義解 一後宮職員〕藥司

尚藥一人、(掌供奉醫藥之事、)典藥二人、(掌同尚藥、)女孺四人、

〔令集解 六後宮職員〕朱云、供奉醫藥、謂內藥司所作之御藥也、作訖後其實可收此司者未明、後度云、供奉時預掌者何、

〔儀式 十〕進御藥儀

晦日(○十二月)卯一刻、中務宮內二省率內藥典藥寮司、持御藥幷人給藥机、共候延政門外、大舍人叫門如常、(○中略)次寮司更入舁案退却、卽付尚藥、(○註略)但屠蘇者、內藥司官人率藥生、同日午剋封漬御井、令主水司守之、元日寅一刻、官人率藥生等就井出之、卽就尚藥受案盛屠蘇、(○中略)尚藥執御盞率女孺升殿、令藥司童女(殿上所定)先嘗、然後供御、

〔續日本後紀 十六仁明〕承和十三年五月丁卯、從五位下益野女(○女原无、據一本補)王爲尚藥、

〔延喜式 十二中務〕女官雜用料

藥司

九月九日、裹呉茱萸料、緋帛一疋、緋絲二絇、(皇后宮亦同)年料、豉廿籠、細布一端、庸布一段、柳筥二合、明櫃二合、麻笥二口、杓二柄、由加一口、陶盤廿口、手洗二口、箸壺二口、筥坏卅口、甕坏廿口、瓶二口、椀廿口、叩盆

二口、已上年料、油絁一丈、兩面一丈八尺、絁一丈八尺、緋帛四丈、緋絲一兩、細布一丈六尺、調布三丈四尺、酒壺料、並隨損請換、菅案、并幄幔覆綱料、並隨損請換、

兵司

〔簾中抄下女官〕兵司ヒヤウシ

〔令義解一後宮職員〕兵司

尚兵一人、掌供奉兵器之事、典兵二人、掌同尚兵、女孺六人、

〔令集解六後宮職員〕朱云、供奉兵器、謂臨時隨召供耳、未知何司有兵器何、先云、就兵器彈弓之類者、未知何、

闈司

〔簾中抄下女官〕闈司イシ

〔名目抄人體〕闈司イシ

〔令義解一後宮職員〕闈司

尚闈一人、掌宮閤管鑰、謂宮城以内諸門管鑰、即京城門鑰亦同也、及出納、謂出納諸門管鑰、其從闈門出入雜物者、門司勘檢也、之事、典闈四人、掌同尚闈、女孺十人、

〔令集解六後宮職員〕釋云、案掌宮城以内諸門管鑰、撿本令、諸門管鑰本衞請進、然則諸門管鑰闈司掌之、不由典鑰、京城管鑰亦掌耳、○中略、穴云、宮閤管鑰、謂宮門及宮城門閤門之鑰耳、其京城門鑰、亦在此司也、問倉廩在何處、答在御所耳、問倉庫令云、置公文庫鏁鑰長官自掌、若無長官者次官掌之者、未知文庫鑰在何所哉、答可在御所、男官女官便近而共供奉耳、然則與繳等實者不必在此司、若有在事耳、跡云、宮閤謂宮門、宮城門、閤門等鑰、京城門鑰亦習此耳、古記云、宮閤門管鑰、即閤門鑰耳、但内侍司以下諸司管鑰、各於本司掌耳、○中略、釋云、除管鑰出納外、閤門出納物亦可知也、何者衞門府有門牓、兵衞府無門牓、故闈司知耳、朱云、出納謂管鑰一色之出納者未明、違釋文也、跡云、出納謂管鑰之出納、又閤門牓、故出人財物不合掌、穴云、出納謂管鑰之出納也、或云、人物之出納亦知、爲劣、

殿司

〔日本後紀 嵯峨 二十一〕弘仁二年九月庚戌、傳內舍人奏、依舊令闈司奏之、

〔內裏式 上〕會 元日 節會

闈司二人、出自靑綺門、分座逢春門南北、大舍人詣門外叫門曰、御厮進 乎 止 中務省官姓名等 謂輔以上 候門止申、闈司辭以叫門故 申 之、他皆效此、闈司就位奏、他皆效此 勅曰、令申、闈司復座、傳宣云、姓名等 乎 令申、與 大舍人稱唯、他皆效此 中務省率陰陽寮舁置厮之机、入自逢春門、他皆效此 立庭中退出、輔已上一人留奏進、○中略 奏事者出、闈司共進舁机、升殿東階、安南榮、卽降立階下西、內侍持函奉覽、訖返置机上、留御厮所、闈司升却机、安本所、○中略 大舍人叫門、闈司就版位奏云、氷様進 乎 止 宮內省官姓名叫門故 留 申、勅曰、令申 與、闈司傳宣、

〔延喜式 中宮 十三〕同日 ○正月二日 受女官朝賀

其日內侍仰闈司置版位於殿上及殿庭、○中略 闈司引六位以下以次入立於庭、

〔友俊記〕寬延元年十一月廿日午、豐明節會行る、○中略 政官砌下座につく、次開門を仰す、闈司分れを

る、

〔日本紀略 淳和〕天長二年正月丙辰、尙闈從三位笠朝臣道成薨、

〔明和新增 京羽二重 一〕女役

闈司兩人 大聖寺御抱 甘露寺家御抱

〔延喜式 中務 十二〕女官雜用料

闈司　闈司襪料、東絁五疋、細布五端、紅花八斤、

〔簾中抄 下 女官〕殿司 トノモ

〔令義解 後宮職員〕殿司

尙殿一人、掌供奉輿繖、膏、沐、燈油、火燭、薪炭之事、典殿二人、掌同尙殿、女孺六人、

〔令集解 六 後宮職員〕朱云、殿司與男官共預知耳、以下諸司亦放此也、未知此司不掌物實何、貞不明決、

乃疑云、此司亦別可掌物實也、以下諸司亦同者何、

〔禁秘御抄 下〕主殿司

六人、近代十二人、花族幽玄、遂日添時、今不取侍臣脫沓裏無候殿上沓脫、不入御殿而勤臨除目申文撰定時、進廣廂、不可說事歟、申文撰定之時、藏人一人留殿上、此藏人申文ナンドハ傳貫首例也、近日藏人不知子細、如此不可說、主殿司美麗婁也、公人內、可稱神妙之職歟、

〔延喜式 十二 中務〕女官雜用料

新嘗會〔略〇中〕　殿司燈守四人、掃司女孺十三人裝束料、〔略〇下〕

〔侍中群要 一〕上格子事

凡每日辰一刻上格子、令殿司女孺撤御燈拂拭殿上、女藏人撿察之、〔略〇中〕臨于黃昏、殿司供燈樓、

〔有職問答 五〕一刀自主殿司得選事

位何れの准に候哉、とのもづかさは女官ながら役は如何、具被仰出度候、

刀自ハ內侍所ニ候候、主殿司ハ殿上ニ候テ、藏人頭職事ナドニ宮仕候、又大臣殿上ニ著候時、褥チナチシタリナドモ沙汰シ候者ニテ候、

〔續日本後紀 十六 仁明〕承和十三年五月丁卯、從五位下路眞人氏子爲尙殿、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、〔略〇中〕從五位下紀朝臣榮子爲典殿、

〔延喜式 十二 中務〕女官雜用料

殿司

御厠殿料、兩面絹各五丈一尺五寸、緋布三丈、調布三丈、漆櫃二合、〔一合小、一合中〕床案覆料、帛黃帛各一疋一丈二尺、並隨損請換、

〔枕草子 三〕とのもりづかさこそなをおかしきものはあれ、下女のきはゝさばかり浦山しき物はなし、よき人にせさせまほしきわざ也、若くてかたちよく、なりなどつねによくてあらんはまし

てよからんかし、年老て物の例などしりて、おもなきさましたるも、いとつき〴〵しうめやすし、とのもりづかさのかほあいぎやうづきたらんをもたりて、さうぞく時にしたがひて、からきぬなどいまめかしうてありかせばやとこそおぼゆれ、

掃司

〔簾中抄下女官〕掃司カモリ

〔令義解一後宮職員〕掃司

尚掃一人、掌下供二奉牀席一、灑掃、舗設之事上、典掃二人、掌レ同二尚掃一、女孺十人、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年五月丁卯、從五位下紀朝臣岑子爲二尚掃一、

水司

〔令義解一後宮職員〕水司

尚水一人、掌下進二漿水一謂作汁爲レ漿也、雜粥一之事上、典水二人、掌レ同二尚水一、采女六人、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年五月丁卯、外從五位下飛鳥部稻子爲二典水一、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、從五位上坂本朝臣氏子爲二尚水一、

膳司

〔簾中抄下女官〕膳司カシハデ采女

〔令義解一後宮職員〕膳司

尚膳一人、掌下知二御膳一、進食先嘗、總二摂膳羞酒醴諸餅蔬菓一之事上、典膳二人、掌レ同二尚膳一、掌膳四人、掌レ同二典膳一、

采女六十人、

〔令集解六後宮職員〕朱云、内膳司職掌云、總知御膳進食先嘗者、又此司職掌一同、未レ知其別何、又進食先嘗者、若有二先後一何、答先後不レ見也、凡此司者男官造了進時、共預知許歟何、穴云、問男女兩司何司先嘗乎、答此司先嘗耳、其尚酒嘗レ醸、但臨二供御時一尚膳嘗、然先嘗不レ之狀不レ審文也、跡云、酒司正造而已、供御之時此司供奉耳、〇中略古記云、膳羞一種無レ別也、見二大膳義一、水司膳司二司必以二采女一則顯職掌之司耳、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、從五位上藤原朝臣元子爲尙膳、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年五月丁卯、正五位下伴宿禰友子爲典膳、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、○中略從五位下藤原朝臣典子爲典膳、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年六月戊寅、掌膳常陸國筑波采女從五位下勳五等壬生宿禰小家主、○中略掌膳上野國佐位采女外從五位下上野佐位朝臣老刀自、並爲本國國造、

酒司

〔簾中抄下〕女官サケ酒司

〔令義解一後宮職員〕酒司

尙酒一人、掌釀酒之事、典酒二人、掌同尙酒、

〔令集解六後宮職員〕釋云、釀酒事與男官共預知之、伴云、兼知釀醴酢也、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年五月丁卯、從五位下田口朝臣全子爲尙酒、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、○中略從五位下路眞人清子爲典酒、

縫司

〔令義解一後宮職員〕縫司

尙縫一人、掌裁縫衣服、纂組之事、兼知女功及朝參、典縫二人、掌同尙縫、掌縫四人、掌命婦參見朝參引導之事、

〔令集解六後宮職員〕穴云、問兼字其意何、答、私案此司凡掌縫衣服、而更知女功及朝參者別所加、故作兼字耳、又問女功者、他司女功皆知哉、答掌縫注命婦謂內外皆是也、朱云、知女功者、裁縫衣服女功者、未知此女何色女、答、不見、臨時取定耳、未明朝參未知何人朝參、若女功之朝參歟、命婦朝參歟何、若然者上內侍司知與此司知別何、若同事歟何、○中略朱云、命婦參見、謂別勅有召命婦等者、此掌縫可預知者未明、又命婦無對見等者也、朝會引導、謂節會之日命婦等引導也、凡女人集會見衣服令也、凡女官如男隨位色著衣乎、答、不著、不云衣服令故者也、古令云參見、謂勅引入也、朝會謂節日等也、

穴云、參見謂除朝會外是也、問衣服令、大祀、大嘗、元日、四孟、宮衞令云、元日、朔日、若有聚集及蕃客宴會辭見皆立儀仗者、未知如何爲參見、如何爲朝會、具分析、答、元日朔日朝會尋常參見耳、〈○中略〉此司無女孺者、氏女采女分配諸司之外、皆總在此司也、古記云、充諸司外餘氏女皆置此司、卽顯正官耳、

〔續日本後紀〈十六仁明〉〕承和十三年五月丁卯、從四位下橘朝臣枝子爲尙縫、從五位下小子部連諸主爲典縫、

〔三代實錄〈二十九淸和〉〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、正四位下潔子女王爲尙縫、正五位下田中朝臣保子、安倍朝臣基子、並爲典縫、

〔本朝世紀〕康治元年正月九日癸卯、女敍位依先例混合、恒例女敍位行之、〈○中略〉從五位下藤原吉子〈掌縫〉

〔名目抄〈人體〉〕采女(ウネメ)〈女公人之中花族者也、依勤陪膳〉

〔古事記傳〈四十二〉〕婇は、宇禰(ウネ)辨(ベ)と訓べし、〈○中略〉辨は部の意なり、女の意には非ず、〈○中略〉さて宇禰辨と云名は、宇那宜辨の切りたるなり、〈○註略〉宇那宜とは、物を項に掛るを云、〈○註略〉万葉十六〈二十七丁〉に、宇奈雅流珠之、〈○註略〉書紀神代巻に、其頸所嬰(ソノミクビニウナゲル)などある是なり、〈○中略〉婇は主(ムネ)と御饌に仕奉るものにて、項に領巾を掛る故に嬰部(ウナゲベ)とは云なり、〈○註略〉大祓詞に、比禮掛伴男(ヒレカクルトモノヲ)とあるも主と采女などを云りと、師〈○賀茂眞淵〉も云れたるが如し、〈○註略〉さて婇の事の見えたるは、書紀仁德巻四十年の處に、采女磐坂媛あり、これ始なり、但これ婇の始なるにはあらず、上代より有し物なるべし、

〔倭訓栞〈前編四字〉〕うねめ　采女をよめり、卯童女(ウナヒメ)の義なるべし、うねへとも書り、婇をよむは二合の邊、字書の正義にあらず、百寮訓要抄に、采女は國々より、可然美女を擇で奉る也、風俗通に采女者、采擇其容色之女也といへり、陪膳の采女あり、髮上の采女あり、或は平生陪膳を勤むるをもて、釵をして髮を上るをもて稱す、實は二役にあらずともいへり、今一の采女は刀自なり、二の采女は

御末頭にて、おあちやといふ、三の釆女はおわか、といふなり、

〔翻譯名義集三諸國〕羅閱祇伽羅(中略)大論云、昔有須陀須摩王、是王精進持戒、常依實語、晨朝乘車將諸婇女入園遊戲、

〔翻譯名義集三七寶〕晉譯華嚴經云、王得道時、於其正殿婇女圍繞、七寶自至、

〔後漢書十皇后〕及光武中興、斲彫爲朴、六宮稱號、唯皇后貴人、貴人金印紫綬、奉不過粟數十斛、又置美人宮人釆女三等、並無爵秩、歲時賞賜充給而已、

〔令義解一職員〕釆女司　正一人、掌檢校釆女等事、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、(中略)凡釆女者、貢郡少領以上姉妹及子女形容端正者、從丁一人、從女二人、以一百戶充釆女一人粮、庸布庸米、皆准仕丁、

〔令義解一後宮職員〕凡(中略)其貢釆女者、郡少領以上姉妹、及女形容端正者、皆申中務省奏聞、

〔令義解五軍防〕凡兵衞者、國司簡郡司子弟、謂郡司少領以上也、子弟者子孫弟姪也、强幹便於弓馬者、郡別一人貢之、若貢釆女郡者、不在貢兵衞之例、三分一國、二分兵衞、一分釆女、謂假令一國有三郡者、二郡貢兵衞、一郡貢釆女、若其不等者、從多貢兵衞耳、

〔續日本紀二文武〕大寶二年四月壬子、令筑紫七國及越後國簡點釆女兵衞貢之、但陸奧國勿貢、

〔續日本紀五元明〕和銅三年正月戊寅、日向國貢釆女、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年五月庚午、制、(中略)釆女者、自今以後、毎郡一人貢進之、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶七歲六月壬子、太宰府管內諸國國別貢兵衞一人、釆女一人、

〔類聚國史四十後宮〕延曆十七年三月壬申、詔曰、云々郡司譜第之選、永從停廢、取藝業著聞堪理郡者爲之、國造兵衞同亦停止、但釆女者依舊貢之、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁四年正月丁丑、制、令伊勢國壹志郡、尾張國愛智郡、常陸國信太郡、但馬國養父郡、貢郡司子妹年十六已上廿已下、容貌端正、堪爲釆女者各一人、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應改貢定額采女卅七人事

山城國一人、大和國一人、河內國一人、攝津國一人、伊勢國一人、尾張國一人、參河國一人、遠江國一人、駿河國一人、甲斐國一人、相模國一人、武藏國一人、常陸國一人、上野國一人、下野國一人、若狹國一人、越前國二人、近江國三人、美濃國二人、信濃國一人、能登國一人、越中國一人、丹波國一人、丹後國一人、但馬國一人、因幡國一人、播磨國三人、美作國一人、備前國一人、備中國一人、備後國一人、安藝國一人、周防國一人、長門國一人、紀伊國一人、阿波國一人、讃岐國二人、伊豫國一人、土佐國一人、

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、頃年點貢定額采女、或國五六人、或國無一人、尋其由緒、緣無定例、爰甲國有死闕、替用乙國之人、政之無例、競望不絕、自今以後、宜依件限、唯本數過此之國、若有其闕、更不補替、須充新加之國、漸令點進、

寛平九年正月廿五日

〔延喜式中務十二〕凡諸國所貢采女名簿者、辨官經奏下知省、訖錄其由送內侍、(若相替者、具顯其由、)

〔續日本紀九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、迺者邊郡人民、暴被寇賊、遂適東西、流離分散、若不加矜恤、恐貽後患、○中略望請陸奧按察使管內、百姓庸調侵免、○中略其國○中略采女仕女、如此之類、皆悉放還、各從本色、○中略奏可之、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年九月己卯、停安房國安房郡、出雲國意宇郡采女、令貢兵衛、

〔類聚國史四十後宮〕大同二年五月庚子、出雲國采女外從五位下勝部公眞上告、病歸鄕、便賜彼國稻五百束、　癸卯、停諸國貢采女、　十一月辛丑、停諸國貢采女、唯擇留其年老有勞者卅二人、任舊終身、若敍五位已上、及補雜色者、卽除采女名、

〔令義解一後宮職員〕水司○中略　采女六人

膳司〇中略　釆女六十人

〔西宮記臨時八〕陪膳事　節會陪膳釆女奉仕、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年四月壬辰、天皇御紫宸殿、賜餞入唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁等、〇中略于時大使常嗣朝臣欲上壽、先候進止、勅許訖、常嗣朝臣避座而進、喚釆女二聲、釆女擎御盃來授陪膳釆女、常嗣朝臣跪唱平、天皇爲之擧訖、

〔禁秘御抄中〕可遠凡賤事

南殿之儀釆女雖爲陪膳、只時不可用之、

〔春記〕長暦三年十一月七日甲午、今日初御南殿、〇中略釆女立御臺盤了、陪膳釆女著草墪、此間被仰云、陪膳備後釆女可奉仕也、而名草釆女著草墪、名草未蒙宣旨者也、備後是第二、名草是第一者也、然而備後去年蒙宣旨、尤無便事也、早可相替之由可仰者、予(藤原資房)仰之、仍備後相替著座之、名草申云、大嘗會陪膳先年與高島釆女奉仕已了、(高島第一、名草第二、)而去年依假不奉仕之間、備後蒙仰也、(高島去年死了、)今年名草已爲第一釆女、仍可奉仕也、大嘗會陪膳是永宣旨也、更又々被仰者也、太以不安事也者、予奏此由、仰云、其理頗然也、可示關白者、予參關白殿、(高島第也、自步參入、太難堪事也、)面申此由、復命云、名草已爲第一者之內、奉仕大嘗會陪膳、仍重不可蒙其仰也、去年有服身之假、仍不勤仕之間備後蒙仰奉仕、今年名草可奉仕也、早可被相替之由可奏者、予歸參、仰云、備後已候已陪膳、又更相替、尤見苦事也、後日可相定、今日備後可奉仕也者、

〔文化八年東宮御元服記元〕文化八年三月十六日甲午、皇太子(仁孝)御元服也、〇中略申半刻前宴會出御被觸、〇中略釆女并東宮釆女各自出御之節、可相廻旨、豫以表使相催置、仍自出御御跡直廻來、一二三釆女刀自等者、如例令候御膳宿、東宮釆女二人者、令候北廂東一間御膳所也、(東宮陪膳釆女者、下臈女房乙女也、)

〔大江俊矩公私雜日記〕文化六年三月廿四日甲申、立太子節會也、(儲君惠仁親王(仁孝)御歲十、)〇中略

一釆女之事、殿上饗之間、一獻之時催之、三獻之頃、一二三釆女三人廻來、候御膳宿、其後催內膳司、令大屬、少屬、權少屬、主膳正等、舁上一二御臺盤付釆女、釆女於北簀子階上取之、舁立御膳宿、(有兩面)其後又催內膳司御厨子所預等、馬頭盤以下御膳悉令付釆女、釆女等於同所取之、並置御膳宿御厨子了、各祗候其傍、

一丑剋過、御膳供進被仰出、○中略此間釆女自御膳宿、舁立御臺盤二脚於鬼間代、(先是於御膳宿、撤杷置御厨子、居馬頭盤於一御臺盤上、乍加臺舁立也、)次四種以下御膳次第運之、一釆女留候鬼間代如常、

〔西宮記〕(臨時二)釆女事(陪膳依本司解、內給云々、或依讓補之、)

依總省解文被下奉勅宣旨、(或官奏入)

〔延喜式〕(四十釆女)凡釆女無故不上一百廿日已上者、解任、但依身病及親病不仕者、雖過限日臨時聽裁、其解任之代、以當郡氏女補之、

〔朝野群載〕(四朝儀)太政官符(中務民部宮內等省別作)

應補釆女某姓某事(年　管某郡某戶)

右得備中國(某)年月日解偁、釆女(某)得解狀云々者、(某)宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

辨　　　　史

年月日

〔禁秘御抄〕(下)釆女

陪膳釆女者、尤可然事也、近代漸零落無極、尤可有沙汰事也、陪膳釆女、典侍仰之、應和例也、節折藏人依神祇官申內侍宣也、

〔女房官品〕禁裏

うねめ　女官

諸家の諸大夫の娘參る、但家により、その人によるべし、女官なりあがりは、うねめをかくる也、

〔後水尾院年中行事下〕一一采女は、內侍所の刀自を兼帶して、近代內侍所にさぶらふ、二采女は、おちやと號、三采女は、近代欠也、四采女は、あかゝと號ス、二四は今さぶらふ、

〔類聚國史四十後宮〕天長七年六月辛亥、女孺伊勢國人村主宮道、遠江國人小長直綬、並補采女、

〔類聚符宣抄七〕太政官符民部宮內兩省　外采女

應補采女大和安子年廿七城下郡賀美鄉戶主大和宿禰定道戶口

右得大和國去天慶九年八月廿五日解偁、采女大和眞子解偁、眞子奉仕公庭卅四箇年、漸及八十、難堪進退、今件安子正爲己姪、始從少年相從老身、年齒强壯、情操謹愼、加之已爲譜第、尤堪其職、望請早被言上、以己所帶職讓與安子、令勤奉公者、國加覆審、所申不虛、望請被補眞子辭退之替者、右大臣宣、奉勅依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

右中辨　　左少史

天曆元年十二月廿八日

〔日本書紀十一仁德〕四十年、是歲當新嘗之月、以宴會日賜酒於內外命婦等、於是近江山君稚守山妻與采女磐坂媛、二女之手有纏良珠、○下略

〔日本書紀十二履中〕八十七年○仁德、正月、仲皇子畏有事、將殺太子、○中略當是時、倭直吾子籠、素好仲皇子、預知其謀、密聚精兵數百於攪食栗林、爲仲皇子將拒太子、時太子不知兵塞、而出山行數里、兵衆多塞、不得進行、乃遣使者、問曰、誰人也、對曰、倭直吾子籠也、便還問使者曰、誰使焉、曰皇太子之使、時吾子籠、憚其軍衆多在、乃謂使者曰、傳聞皇太子有非常之事、將助以備兵待之、然太子疑其心、欲殺、則吾子籠愕之、獻己妹日之媛、仍請赦死罪、乃免之、其倭直等、貢采女、蓋始于此時歟、

〔古事記下雄略〕天皇坐長谷之百枝槻下、爲豐樂之時、伊勢國之三重婇、指擧大御盞以獻、爾其百枝槻葉

落、浮於大御盞、其婇不知落葉浮於盞、猶獻大御酒、天皇看行其浮盞之葉、打伏其婇、以刀刺充其頸、將斬之時、其婇白天皇曰、莫殺吾身、有應白事、〇中略故獻此歌者、赦其罪也、

〔日本書紀雄略十四〕元年三月、有春日和珥臣深目女、曰童女君、生春日大娘皇女、更名高橋皇女童女君者、本是采女、天皇與一夜而娠、遂生女子、天皇疑不養、　二年七月、百濟池津媛違天皇將幸、婬於石河楯、舊本云、石河股合首祖楯、天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫婦四支於木、置假庪上、以火燒死、百濟新撰云、己巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿禮奴跪、來索女郎、百濟莊飾慕尼夫人女、曰適稽女郎、貢進於天皇、　五年四月、百濟加須利君蓋鹵王也飛聞池津媛之所燔殺、適稽女郎也而籌議曰、昔貢女人爲采女、而既無禮、失我國名、自今以後、不合貢女、　九年三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也、天皇由是不果行、勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連談此云箇陀利小鹿火宿禰等曰、〇中略以汝四卿、拜爲大將、宜以王師薄伐、天罰龔行、於是紀小弓宿禰、使大伴室屋大連、憂陳於天皇曰、臣雖拙弱、敬奉勅矣、但今臣婦命過之際、莫能視養臣者、公冀將此事、具陳天皇、於是大伴室屋大連具爲陳之、天皇聞悲頽歎、以吉備上道采女大海、賜於紀小弓宿禰、爲隨身視養、遂推轂以遣焉、

〔日本書紀舒明二十三〕八年三月、悉劾姧采女者、皆罪之、是時三輪君小鵝鷦、苦其推鞫、刺頸而死、

〔續日本紀聖武十四〕天平十四年四月甲申、伊勢國飯高郡采女正八位下飯高君笠目之親族縣造等、皆賜飯高君姓、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年二月丙申、因幡國高草采女從五位下國造淨成女等七人、賜姓因幡造、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜八年五月戊寅、典侍從三位飯高宿禰諸高薨、伊勢國飯高郡人也、性甚廉謹、志慕貞潔、葬奈保山、天皇〇元正御世、直內敎坊、遂補本郡采女、飯高氏貢采女者、自此始矣、歷仕四代、終始無失、薨時年八十、

〔續日本紀桓武三十九〕延曆六年四月乙丑、武藏國足立郡采女掌侍兼典掃從四位下武藏宿禰家刀自卒、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年十月壬申、正四位上因幡造淨成女卒、淨成女、元因幡國高草郡之采女也、

天皇特加寵愛、終至顯位、

〔萬葉集 十六 有由縁并雜歌〕安積香山、影副所見、山井之、淺心乎、吾念莫國、

右歌傳云、葛城王遣于陸奧國之時、國司祗承緩怠異甚、於時王意不悅、怒色顯面、雖設飮饌、不肯宴樂、於是有前采女、風流娘子、左手捧觴、右手持水、擊之王膝而詠其歌、爾乃王意解脱、樂飮終日、

〔朝野群載 四 朝儀〕御膳宿

請被特蒙天恩、因准先例、以伊豫采女正六位上越智宿禰永子敍爵狀、

右永子欵狀偁、謹撿案內、拜任當職之後、番役節會、未致懈怠、爰永子拜任之後、已及十七箇年、推之傍輩、尤當其仁者、加覆審、所陳有實矣、仍勒事狀、謹請處分、

永保二年正月十一日　　正五位下播磨采女播磨宿禰德子

〔朝野群載 四 朝儀〕采女從五位上小田朝臣幸子誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例被敍一階狀

右謹撿案內、居當職之者、經年勞預加級者、不易之例也、就中幸子出仕之後、有限行幸、節會供奉、并番役、敢不致闕怠、今浴玄渙、誰謂非據、望請天恩、因准先例、被敍一階、幸子誠惶誠恐謹言、

康和二年正月十一日　　采女從五位上小田朝臣幸子

〔本朝世紀〕康治元年正月九日癸卯、女敍位依先例混合、恒例女敍位行之、〇中略

從五位下源淸子 采女

〔明和新增〕京羽二重 一 女役

一采女　二采女

〔延喜式 四十 采女〕凡采女月料、各白米四斗五升、日一升五合　鹽四合五勺、日一勺五撮

〔延喜式 三十五 大炊〕親王已下月料

采女卌七人料米十八石九斗小月十八石二斗七升

〔延喜式三十三大膳〕采女卌七人料、鹽二斗二升一合五勺小月二斗四合四勺五撮

〔延喜式三十五大炊〕御膳宿采女日米五升、次飯一斗料、○中略

右毎日料、依前件熟食充之、

〔續日本紀八元正〕養老四年五月癸酉、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行下、於理不穩、更請內印、恐煩聖聽、望請自今以後、文武百官下諸國符、自非大事、差逃走衞士仕丁替、及催年料廻殘物、并兵衞采女養物等類事、便以太政官印印之、奏可之、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年五月丁巳、始令七道諸國采女養物、不論存亡並全納采女司、

〔類聚三代格八〕太政官符

應催送采女養物事

右被右大臣宣偁、奉勅件養物應催送狀頻下符訖、而諸國司怠慢猶多未進、奉公之道何其如此、宜准未進數奪國司料、隨色辨備、依數令送、自今以後、永爲恒例、

延暦廿四年三月二日

〔薩戒記〕應永卅二年十月廿七日癸巳、左頭中將示送曰、一采女乞養料御敎書、若可書遣者、件案可注賜者、予則書遣之、可用宿紙也

采女養料任例、可令下知給之由、被仰下之狀如件、予藏人頭之時、用雲客禮紙、猶可爲地下禮也、

十月廿七日　　　　左中將某

大和守殿

山城守殿

〔上杉古文書五〕長授院

每年相定國役注文

五貫文　　采女養料〇中略

永正七年十一月十日　　神餘越前守

長授院　　昌綱花押

〔言繼卿記〕天文十三年十二月五日己亥、從福生庵采女國役之事、三ヶ國へ綸旨之事被申候間、調遣

當國采女養料任例可被致其沙汰者、依天氣執達如件、

十二月五日

相模守殿　武藏守殿　上野守殿　三通如此也

〔續日本紀 三文武〕慶雲二年四月丙寅、先是諸國采女肩巾田、依令停之、至是復舊焉、

〔延喜式 二十二民部〕凡貢采女郡者、各置養田三町、仍令郡司主帳已上作其營種、各割穫稻以充佃料所殘

春米若交易輕物送納其主、運賃便用稻內、路程僻遠、傭費雖多、勿割二町之內、

〔延喜式 二十六主税〕凡勘租帳者、〇中略采女田、〇中略未授之間、〇中略並爲輸地子田、

〔延喜式 四十采女〕凡采女卅七人、賜近宮城地、

〔拾芥抄 中末宮城〕宿所　采女町在內膳東、

〔令集解 二十四喪葬〕八十一例云、凡采女及內侍所掌女孺身死賻物並准職事、其无位者、准初位給減數、

〔續日本紀 十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略改神龜六年爲天平元年、而大赦天下、〇中略

其賜物、〇中略左右大舍人、〇中略各布二端、使部伴部〇中略各布一端、其女孺采女准大舍人、宮人准使

部、

〔日本書紀 十八安閑〕元年閏十二月、是月廬城部連枳莒喩女幡媛、偷取物部大連尾輿瓔珞、獻春日皇后、事

得選

至發覽、枳莒喩以女幡媛獻采女丁、是春日部采女也、〇下略

〔延喜式四十采女〕凡采女、各充樵丁一人、守廬丁一人、其樵丁、每月黑米六斗、鹽六合、守廬丁、春夏月別庸布一段、秋冬月別庸綿二屯、

〔延喜式二十二民部〕凡點仕丁者、每五十戶二人、采女採薪守舍不入此數

〔日本書紀二十九天武〕十一年三月辛酉、詔曰、親王以下、百寮諸人、自今已後、位冠及襅褶脛裳莫著、亦膳夫采女等之手繦肩巾、肩巾此曰比例並莫服、

〔日本書紀三十持統〕元年正月丙寅朔、皇太子、率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、〇中略於是奉膳紀朝臣眞人等、奉奠、奠畢、膳部、采女等發哀、樂官奏樂、

〔名目抄人體〕得選トクセン

〔江次第抄一〕得選者、御厨子所女官也、於采女中選其人、故得其名、

〔有職問答四〕一女官の衆之次第の候所如何、たとへば皇后、女官ノ中ヘ入カタク候常時無之候尙侍、典侍、掌侍、みこ、此稱號不聞御局、命婦、采女、女孺以下、

典侍、掌侍、命婦、女藏人等ノ女房ノサライトテ、常ハ臺盤所ト云所ニ候スベキ也、(中略)得選女官ト云者ハ、臺所ニ候シテ、朝夕ノ御膳ナド持テマイル、朝餉ナドニシタガフナリ、此得選ハヤガテ又采女ヲ兼帶セルモノナリ、

〔有職問答五〕一刀自主殿司得選事

位何れの准に候哉、とのもづかさは女官ながら役は如何、具被仰出度候、

刀自ハ內侍所ニ候、主殿司ハ殿上ニ候テ、藏人頭職事ナドニ宮仕候、(中略)得選ハ此內ニテアガリタル者ニテ候、采女ヲカケテ候間、御膳ノ手長ナドヲモ沙汰シ候、又典侍內侍ノ髮アゲナドトテ、髮ヲアグル事ナドヲモ、得選申シ沙汰スルナリ、

〔禁秘御抄下〕得選

三人也、又髮上采女兼之、近代花族過法、與女房大略無差別氣色也、行幸之時、持大袋、與內侍同車、是

氏女

不可然事第一也、但不然者不可叶公平、故無沙汰也、凡於車寄乘車、女房ダニモ近代例也、況得選不可然事ナレドモ、行幸走內侍同車之時聽之、近代事也、

〔江家次第一正月〕供御藥

御厨子所供御臺二本、〇註略得選於鬼間御障子、付女藏人、

〔日中行事〕あさがれゐのおものまいる、とくせん女官御だいをもちてたいばん所にまいりて、おものだなにをく、

〔類聚國史四十後宮〕天長七年四月甲辰朔、大和國女孺多米宿禰當刀自女預得選、

〔枕草子十〕宮司よりきて、誰々かおはすると問聞て、〇中略今はとくせんをのせんとゐつるに、めづらかなるやなど驚きてよせさすれば、〇下略

〔神樂歌〕得錢子

とくせにこが、ねやなるゐめゆふひばを、たれかたをりし、とくせにこや、たゝらこきひばや、たれかたをりし、とくせにこや、

われこそは、見ればやうれたさゝに、たをりて來しかや、とくせにこや、たゝらこきひばや、たをりて來しかや、とくせにこや、

〔神樂歌入文下〕抄曰、とくせにこは、得選也、今世にも女官に此名ある也、

〔令義解一後宮職員〕凡諸氏氏別貢女、皆限年卅以下十三以上、雖非氏名、欲自進仕者聽之、謂氏別貢一人外、別欲進仕也、

〔令集解六後宮職員〕朱云、謂氏無貴賤也、貢女謂申所部官司、令貢耳、或云、此京畿內也、不云外國者未決、古記云、其氏女、謂京畿內也、自進事、謂不限內外也、穴云、氏謂石川氏一人、紀氏一人之類是也、但擢取氏中耳、不必宗者女也、問元一氏、後別成三姓、未知尚號爲一氏、爲當成三氏乎、答不審文、宜依

別式、也、自餘依跡云、諸氏定者有別式、

〔令集解 六後宮職員〕内侍司

伴問、女孺者、本從何處來女也、答、以采女幷氏女等補也、○中略 氏女者、畢令仕縫殿寮耳、

〔延喜式 十二中務〕凡諸氏貢氏女、皆簡年卅已下卅已上時無夫者、造解文、親存共署申省作奏文、奏之畢、勅送內侍司、卽下符縫殿寮、若貢後適人、依例擇替、

〔日本書紀 二十九天武〕八年八月己酉朔、詔曰、諸氏貢女人、

〔類聚國史 四十後宮〕大同元年十月壬申、勅、凡貢氏女、事明令條、皆限卅已下十三已上、今須氏之長者、擇氏中端正女貢之、其十三已上之徒、心神易移、進退未定、宜采○采類聚三代格作採女年卅已上卌已下無配偶者、或貢後適人、必令貢替、又官途忩忙、獨難取捨、緩急之事、當有援助、宜長者相補、令得仕進、○又見令集解、政事要略、享祿本類聚三代格、

〔伊呂波字類抄 仁官職〕女孺 ニヨシウ 女官也

〔名目抄 人體〕女孺 ニヨジユ 掃部寮女官也

〔令集解 六後宮職員〕内侍司

伴問、女孺者、本從何處來女也、答、以采女幷氏女等補也、

〔女房官品〕禁裏

とじ　女じゆ　これも侍の娘など參る、とじは內侍所のまほりなり、女じゆなどもとじがゐたて丶出すなり、

〔內裏式 上〕元正受群臣朝賀式

皇后服禮服後、就御座、于時殿下擊鉦三下、二九女孺執翳、左右分進奉翳、見御高座卽奉翳、不必待皇后著御座、

〔禁秘御抄 下〕女孺

近代不著衣、只小袖唐衣也、以左道褻御殿御調度觸手上下格子奉仕、是藏人等如在不當故也、御所中掃除指油等役、女孺所知也、近代樣不可說、動失禁中禮、占便所爲家、是寬平遺誡其一也、尤可止可止、

〔後水尾院年中行事〕下一女孺は清き道具をば、とりあつかはすとて、まゐるものには手ふれず、舊院〇後陽成御脫屣の後には、女孺はあぶらをとりあつかふものなれば、御まゐり物に手觸る事を用捨することなり、此外別の子細なしと仰られて、とりあつかはせられしと、宮內卿かたりし也、

〔光臺一覽〕二女孺衆と申數多御座候、是は古へより燈の役なり、宮中一切灯明油指の事を掌るなり、禁秘抄にも記されたり、今に其ごとし、此外釆女口主殿司の女官などとて有之候、〇中略主殿司は無之間不叶官女なれども、今は男女ともに、御省略の御事なれば、おまへ女孺の內、兼帶して被相勤御事なり、女孺も官士の女多し、

〔日本書紀〕二十三舒明豐御食炊屋姬天皇〇推古二十九年、皇太子豐聰耳尊薨、而未立皇太子、以三十六年三月天皇崩、〇中略大兄王〇中略令告群大夫等曰、〇中略吾聞天皇臥病、而馳上之侍于門下、時中臣連彌氣自禁省出之曰、天皇命以喚之、則參進向于閤門、〇中略於是近習者栗下女王爲首、女孺鮪女等八人幷數十人、侍天皇〇推古之側、〇下略

〔日本書紀〕二十八天武元年六月甲申、是日發途入東國、事急不待駕而行之、儵遇縣犬養連大伴鞍馬、因以御駕、乃皇后載輿從之、逮于津振川、車駕始至、便乘焉、是時元從者、草壁皇子〇中略之類二十有餘人、女孺十有餘人也、

〔續日本紀〕二十九稱德神護景雲二年四月戊寅、授女孺正六位下百濟王淸仁從五位下、

〔延喜式〕十四縫殿凡女孺七十八月糧、不經女官厨、直受大炊寮、

〔拾芥抄〕中末宮城宿所　女竪所在桂芳坊

〔小右記〕天元五年五月五日丙申、典藥寮進菖蒲、昇立御前、○中略女孺四人、及下女四人、賜祿有差、女孺匹絹、下女布二段、

〔伊呂波字類抄〕見官職命婦

〔名目抄〕人體命婦ミヤウブ

〔倭訓栞〕前編三十みやうぶ　命婦は女の位階ある也、敍爵の官女を內命婦とし、五位以上妻を外命婦とす、○中略命婦は女の五位なれば、中﨟女房以上をば總ていふべき事なるを、中世以後、中﨟のみを命婦と稱す、敍爵の例の如し、

〔枕草子〕一うへにさぶらふ御ねこはかうぶり給はりて、命婦のおもとていとおかしければ、かしづかせ給ふが、○下略

〔論語集解義疏〕六先進王弼云、命、爵命也、

〔釋名〕三釋親屬大夫之妃曰命婦、婦、服也、服家事也、夫受命於朝、妻受於家也、

〔禮記〕三祭義君牽牲、夫人奠盎、君獻尸、夫人薦豆、卿大夫相君、命婦相夫人、

〔儀禮註疏〕十一喪服大夫之子爲世父母、叔父母、子、昆弟、昆弟之子、姑、姊、妹、女子子無主者、爲大夫命婦者、唯子不報、注、命者加爵服之名、自士至上公、凡九等、君命其夫、則后夫人亦命其妻矣、此所爲者、凡六命夫六命婦、傳曰、大夫者其男子之爲大夫者也、命婦者、其婦人之爲大夫妻者也、○中略夫尊於朝、妻貴於室矣、注、○中略夫尊於朝、與已同、婦貴於室、從夫爵也、

〔令義解〕一後宮職員凡內親王、女王、及內命婦朝參、行立次第者、各從本位、其外命婦、謂其勳位妻者、不預此色、凡令內稱五位以上者、勳位者非也、准夫位次、若諸王以上娶臣家爲妻者不在此例、謂不在於外命婦之例、其內命婦各須不雜而分別之、

〔令集解〕六職員釋云、案諸王以上不在外命婦之例、朱云、諸王以上娶臣家爲妻者、不在此例者、假准夫位將列者、則臣女可雜列女王之例也、依此不令出外命婦也、未知若不依夫位自有位者何、若依自

位立内命婦列何、答然也、又臣娶五世女王爲妻、亦不令出外命婦也、准夫位將列者、則女王可雜列臣女中、故然則貴王情耳、私案若有自位者、立女王列耳歟何、跡云、諸臣聽娶五世王爲妻、但亦不在貢命婦例、何者皇親雖無位而列參給祿故、私五世不在女王、然則可出外命婦、(中略)古記云、女王有位無位、並女王處行立、其夫雖在、不預外命婦之例、但皇親之外女王者、得預外命婦之例耳、凡諸王以上不在出外命婦之例、若妻王者參王列、有妻臣者、不得朝參也、

〔令義解六儀制〕内命婦禮服

一位、禮服寶髻、深紫衣、蘇方深紫紕帶、淺縹褶、蘇方深淺紫綠纈裙、(謂下條云、紕縹纈紕裙、此條无紕字、即知五色交綵以爲纈文也、)錦襪、綠舃、(飾以金銀、)三位以上、淺紫衣、蘇方淺紫深淺綠纈裙、自餘並准一位、四位、深緋衣、淺紫深綠紕帶、烏舃、(以銀飾之、)五位、淺緋衣、淺紫淺綠紕帶、(謂在傍爲紕也、)自餘皆准上、大祀大嘗元日則服之、(外命婦、夫服色以下任服、謂衣裙並同、)

朝服

一品以下五位以上、去寶髻及褶舃、(謂其錦襪亦去、爲與舃同類也、)以外並同禮服、六位以下初位以上、並著義髻、(謂以他髮爲飾自髮、是爲義髻、)衣色准男夫、深淺綠紕帶、縹纈紕裙、(初位去纈、)白襪、烏皮履、四孟則服之、

〔續日本紀二文武〕大寶元年十二月癸丑、制、五位以上婦不得著夫服色、但朝會之日聽著得色已下、

〔日本書紀十一仁德〕四十年、是歲當新嘗之月、以宴會日、賜酒於内外命婦等、

〔日本書紀二十九天武〕五年八月丁酉、親王以下、小錦以上大夫及皇女、姬王、内命婦等、給食封、各有差、

朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、甲子、直大肆采女朝臣筑羅、誄内命婦事、

〔日本書紀三十持統〕五年正月癸酉朔、賜親王、(親王下恐脫諸王二字、)諸臣、内親王、女王、内命婦等位、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年二月庚申、制、内命婦身帶五位、任六位以下官者、自今以後、給正六位官祿、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年正月庚戌、内命婦、正三位縣犬養橘宿禰三千代薨、遣從四位下高安王等監

護喪事、賜葬儀准散一位、命婦皇后之母也、　十二月辛酉、遣一品舍人親王、大納言正三位藤原朝臣武智麻呂、式部卿從三位藤原朝臣宇合、大藏卿從三位鈴鹿王、右大辨正四位下大伴宿禰道足、就縣犬養橘宿禰第宣詔贈從一位、別勅莫收食封資人、　六年正月己卯、授〇中略內命婦无位大市王、神社王、並從四位下、正五位下播磨王正五位上、從五位上新家王正五位下、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏
內外五位不合同等事〇中略
外五位〇中略
父妻
右其父從免課役之例、妻者得外命婦之號、不入朝參之例、〇中略奉勅、宜依前件永爲恆式、
神龜五年三月廿八日

〔延喜式四十一彈正〕凡車馬從者、〇中略內命婦一位十八人、二位十六人、三位十四人、四位十人、五位八人、〇中略六位以下四人、〇中略外命婦准夫從數、左右大臣女九人、大納言八人、中納言七人、參議六人、一位八人、二位七人、三位六人、四位五人、五位四人、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年十月辛卯、勅、五位已上禮服冠者、元來官作賜之、自今以後、令私作備、內命婦亦同、

〔內裏式上〕元正受群臣朝賀式
辰一剋、皇帝乘輿入大極殿後房、〇中略警蹕侍衞如常、〇中略褰帳命婦二人、（內親王已下三位已上爲之、若無者王氏四位五位亦得、）威儀命婦四人（三位已下五位已上爲之、各一人、同色相對、用南爲上、）服禮服、相分以次就座、

〔儀式五〕天皇卽位儀

御櫛笥殿別當

辰一刻、皇帝出レ自二建禮門一、御二太極殿後房一、〇中略　褰帳命婦二人、威儀内命婦四人、各著二禮服一、相分以レ次就座、

〔嘉永元年御卽位圖〕天皇禮服を著御ありて、後房より出御なり、〇中略　劒璽の内侍二人、褰帳の命婦二人前後に候す、兵庫寮鉦をうつの後、命婦すゝんで御帳をかゝぐ、〇下略

〔禁秘御抄　下〕下﨟

諸侍、賀茂日吉社司等女也、皆稱二候名一也、不レ及二國名一、但其中宿老者、或賀茂祭爲二命婦一渡後、或國名ヲモヨビ、或侍名モ有也、

〔侍中群要　八〕親王元服

次王卿及男女房賜レ祿、(中略)掌侍井殿上命婦各一衾、

〔源氏物語　一桐壺〕野分だちて、にはかにはださむき夕ぐれの程、つねよりもおぼしいづることおほくて、ゆげひの命婦といふをつかはす、

〔河海抄　一〕ゆげひの命婦は、左右衞門佐也、命婦は五位、女藏人六位也、

〔榮花物語　八初花〕御五十日、〇後一條　しもつき〇寛弘五年　のついたちの日になりにければ、〇中略　ひんがしのみすすこしあげて、辨内侍、中務命婦、大輔命婦、中將君など、さるべきかぎりとりつゞきまいらせ給、

〔山槐記〕治承四年五月八日己未、今夜被レ行二女敍位一云々、藏人宮内權少輔親經奉行云々、〇中略

從五位下源朝臣永子命婦

〔西宮記　臨時五〕一所々事　御櫛笥殿在二貞觀殿中一、以二上﨟女房一爲二別當一、有二女藏人一、

〔倭名類聚抄　十居宅〕殿名附出　貞觀殿在二常寧殿北一、謂二之御匣殿一、

〔禁秘御抄　中〕御匣殿別當

是ハ非女御更衣之儀、只御所中沙汰人也、上古不絶有之、內藏寮外御服ナド裁縫所也、後冷泉院御時賴宗公女候、其後絶無其人、

〔權記〕長保二年八月廿日甲子、此日御匣殿別當〔○藤原尊子〕可爲女御〔○一條〕之事、於朝餉奉勅命、

○按ズルニ、御匣殿別當ノ女御トナリシ例ハ、帝王部女御篇ニ載セタリ、

〔榮花物語〔八初花〕〕故關白どの〔○藤原道隆〕の四の御かたは、御くしげどのとこそはきこゆるを、この一宮〔○敦康〕の御ことを、こみやよろづにきこえつけさせ給しかば、たゞこのみやの御は、しろに、よろづうしろみきこえさせ給とて、うへ〔○一條〕なども忍げうわたらせ給に、をのづからほのみたてまつりなどせさせ給けるほどに、そのほどをいかゞありけん、むつましげにおはしますなどいふこと、をのづからもれきこえぬ、

〔小右記〕長和四年八月二日己卯、秉燭資平來云、參右府〔○藤原顯光〕傳宣奏奉仰事之由、今日以故右大臣道兼女、爲御匣殿別當之由宣旨下、以藏人懷信被仰遣也、先申左府、隨彼命遣藏人耳、但書下宣旨之處不覺、後日可尋下者、此事下官不覺、資平問中納言行成卿、答云、忽不覺、先年爲藏人頭之日所奉之宣旨也、定有注置歟、尋見可示也者、翌日云、書內侍宣給內藏寮、寮官給件宣旨、書告御匣殿者、是右衞門督女時例、則金吾所談、但他例等召內藏寮官人、可尋問也、後日內藏允利成申云、爲御匣殿別當之由、內々奉仰事、以宣旨書不下給於寮、寮者下給者、取其宣旨書、官人可向彼宅、而年來不聞之內、又其宣旨書不見寮底、亦納殿藏人召御服所官人、仰可度御服於御匣殿別當所之由、其外無宣旨者、又々可能尋捜事歟者、

〔名目抄〔人體〕〕刀自〔トジ〕

〔倭名類聚抄〔二老幼〕〕負〔俗作刀自〕劉向列女傳云、古語老母爲負、漢書五娼武負位引之、今按俗人謂老女爲負、字從目也、今訛以貝爲自歟、〔今按和名度之〕

〔箋注倭名類聚抄男女一〕按用刀自二字見萬葉集、又古多婦人名某刀自者、見萬葉集、續日本紀等書、蓋以無漢字可充者、故用假名耳、源君以爲負字之俗譌非是、○中略按負字見靈異記、法王帝説、及弘仁十一年田券、卽合刀自二字者、猶麻呂合作麿之類、

〔禁秘御抄下〕刀自

刀自御膳宿臺所各別也、衣唐衣袴也、結中、但近代只衣結中著唐衣、是一向御膳役者也、

〔侍中群要十〕甘苽氷魚給侍從所事

御厨子所別當、御持僧御乳母等獻物、只上刀自取之持參、

內膳御精進物等、又上刀自取進之、

〔大鏡八〕世継きいて、このおきなの女人こそ、いとかしこくものは覺え侍れ、○中略そめどのの后の宮のひすましに侍けり、母もかんのとじにてつかうまつりければ、おさなくよりまいりかよひて、忠仁公をも見たてまつりけり、

〔枕草子七〕うへ○後一條、中略やう〳〵おほせられ出て、御つかひにいきたりけるをにわらははは、だいばん所のとじといふもののともなりけるを、こひやうゑがかたらひ出したるにやありけんなどおほせらるれば、○下略

〔看聞日記〕應永卅二年八月廿三日、源宰相以狀馳申云、廿日禁裏へ庭中申物あり、○中略則所司代召捕尋之間、內侍所刀自、三條と云物彼官人也、彼刀自が夫洞院諸大夫民部少輔重季、幷庭中申男、六條中將侍、金澤ト云、其外女尼兩三人召捕被糺明之處、非伏見殿御事、○中略此御所之虛名は晴畢、御幸運珍重之由告申之間、○下略

〔光臺一覽二〕內侍所御守の女中は、內侍所の刀自と申七八人も有之候、塔之壇數之下行事官縫殿頭が一族の女中なり、○中略其行事官が伯叔母姪女抔、無夫者此刀自を勤ること也、

〔名目抄 人體〕女藏人（ニヨクラウド）

〔有職問答 四〕一女官の衆之次第の候所如何、たとへば皇后、（女官ノ中一人カタ々候、常時無レ之候）尙侍、典侍、掌侍、みこ、（此稱號不レ聞）御局、命婦、釆女、女孺以下、

典侍、掌侍、命婦、女藏人等ノ女房ノサフライトテ、常ハ臺盤所ト云所ニ候スベキ也、此內女藏人ト云ハ、常ノ御所ノ臺盤ノウヘ、夜ノオトヾノ內ナドヘハ入メヒノ也、〇下略

〔延喜式 中宮 十三〕同日〇正月二日 早朝受二群官朝賀一、中務輔引二次侍從以上一著レ座、于レ時內侍一人率二女藏人三人一、納二祿物於櫃二合一令レ持、

〔延喜式 春宮 四十三〕凡十六日〇正月 踏歌妓、自二內裏一退出、從二東南門一入、候二殿東庭一、近仗分二居東西細殿廂一、東宮朝服把レ笏、即レ座、妓出レ自レ東、踏歌畢、即於二殿上一賜二酒肴一、其祿細屯綿五百屯、（請二內裏節料一賜レ之）內裏女藏人四人在二妓中一、別給二衾各一條一、（用二坊物一）

〔江家次第 正月 三〕踏歌

天皇渡二御南殿一、內侍二人持二璽劍一、命婦女藏人各四人相從、

〔北山抄 十二月 二〕荷前事

前一日外記以二五位已上夾名一、加二書使參議已上差文一、付二內侍一令レ奏、〇註略 此夕內侍女藏人各一人、率二女孺等一、向二縫殿寮荷前殿一、調二備幣物一、藏人一人奉レ仰、向二彼寮一監二臨之一、

〔貞信公記〕天慶九年七月十一日、中使守正來云、明日爲レ奉二止雨報幣一、欲レ御二八省一、女藏人少數幸否、

〔西宮記 四月〕賀茂祭事

應和三年四月十六日、女藏人給二宣命於藏司一使、

〔小右記〕天元五年五月八日己亥、今日中宮被レ行二女官等饗祿事一、其儀弘徽殿又庇假懸二御簾一、〇中略 第三間敷二紫端疊一（東西對座）爲二掌侍命婦藏人等座一、立二臺盤一、〇中略 戌時許命婦藏人（內侍不レ著）合十一人參入（命婦五人、藏人六人）、著座、

〔永昌記〕長治二年正月七日丙子、今日白馬節也、〇中略宸儀出御南殿、頭中將獻御插鞋、內侍女藏人十人、男藏人等候式靴、

〔新古今和歌集〕雜十八延喜御時、女藏人內匠白馬節會見はべりけるに、車よりくれなゐのきぬをいだしたりけるを、檢非違使のたゞさむとしければ、いひつかはしける、　女藏人內匠〇歌略

〔玉葉和歌集〕戀十三延喜御時御硯のはこにいれて侍ける　女藏人二條〇歌略

〔本朝世紀〕康治元年正月九日癸卯、女敍位依先例混合、恒例女敍位行之、〇中略

從五位下藤有子藏人　同盛子御匣藏人

〔山槐記〕治承四年五月八日己未、今夜被行女敍位云々、藏人宮內權少輔親經奉行云々、〇中略

從五位下藤原朝臣忠子藏人　藤原朝臣顯子御匣殿藏人

〔增鏡〕十五村時雨又の年〇元德三年の春やよひのはじめつかた、花御らんじに北山に行幸〇後醍醐なる、〇中略まづ中宮行啓、又の日行幸、前右のおとゞ兼季まいり給ひて、樂所の事などおきてのたまふ、〇中略六日の辰の時にことはじまる、〇中略御すのうちにも、大納言二位殿琵琶、播磨の內侍箏、女藏人高砂といふも琴ひくとぞ聞し、

〔薩戒記〕永享二年十二月廿五日辛酉、黃昏之程、中御門大納言俊輔光臨、被示合女敍位人等事、〇中略一藏人當時一人之外無之、又去春敍爵了、重可被加階哉否可伺申云々、

〔二水記〕大永七年九月十三日、今日卿內侍可爲勾當內侍之由勅定云々、仍被移長橋之御口於局有盃酌、各傾數盃了、今度長橋局事有種々儀、高倉少納言言上之趣、近御代者坊城與高倉兩家及七代、一紙注留奧不相交他人、爲勾當內侍之條、今度以新內侍可爲其分之由、有勅許者、可畏存之由申入了、勅答之旨、近代之儀、兩家之事無紛者也、雖然禁秘御抄云、以上首可爲勾當云々、中古此定也、仍今度卿內侍爲上首、年齡聊若年也、彼是先可致堪忍之由仰也、此兩端以何可爲善哉、勅答之旨、逍遙院所存

東竪子

此分歟、近代連綿例似無其詮、如何如何、後人尙可決矣、

〔文化八年東宮御元服記 元〕文化八年三月十六日甲午、皇太子(仁孝)御元服也、(中略)主上(光格)渡御南殿之儀如例、(中略)威儀命婦、女藏人等三人也、先命婦一人持御冠筥、(在御後)女藏人一人持御笏筥、(在御右、是命婦代歟、將又以女藏人勤仕歟、其儀不可知也、)二人相並供奉、予(大江俊矩)・人扶持之、或助功扶之、次女藏人一人供奉、(空手在御左方、助功扶持之、)(下略)

〔議奏記錄〕文久元年二月二十日、春日社祠官西三位女久尾(十七歲)自今日被召出、被補女藏人、被稱今參候旨、被仰出候由、(但名字爾三日之內、被仰出之由、)大御乳人被申出候旨、中山殿御本、

〔延喜式 三十五 大炊〕女藏人(日米一斗三升、飯二斗料、)(中略)

右每日料、依前件熟食充之、

〔兵範記〕仁安四年(○嘉應元年)二月五日壬辰、今日於院殿上、有皇太后宮行啓平野社定事、(中略)

皇太后宮行啓平野社雜事(中略)

一女房飾物

女藏人六人　各絹四匹

〔延喜式 四十一 彈正〕凡車馬從者、(中略)女藏人六人、

〔名目抄 人體〕東竪子(アヅマリラワ)(三子之孫葉歟、代々同名字也、)

〔江家次第 正月 三〕女敍位

小輪轉(中略)　東竪子　　大輪轉(中略)　東竪子

〔江次第抄 三〕東竪　以三子爲東孺、按舊簿、多以紀朝臣季明、阿閉宿禰友成爲其名、自古以來以季明定爲其名、不似尋常事也、

〔年中行事歌合〕七番左(勝)　女敍位(正月八日)　爲邦朝臣

春にあふあづま童の心まで君が惠をさぞあふぐらん(中略)

樋洗

左女敍位は、正月八日女の位階を敍せらるゝ事にて侍也、其中に內侍司の被官に、あづま童と云もの有也、行幸の時、ひめ松とておかしき馬に乘りて供奉する、これが事也、是は三子を用ひらるゝとかや申侍り、三子は天子の御守にてある由緒も侍にや、毎年に申文を出して、女敍位には必五位の位を給也、是は昔より唯同じ名乘を相傳してなのる、いとふしぎなる事にや、

〔有職問答五〕一女敍位の所以、前被仰下候東豎子、闈司、主水、何れも女と見え候、勿論候式裝の樣又其役々何と被仰出度候、東豎子ハ天子ノ御挿鞋トテ、御沓ナドナモツ役者也、

〔水左記〕延久六年十二月二日、參右大殿、〇中略下官〇源俊房問申云、女敍位以何事爲故實乎、被仰曰、東童與水主女官相遞敍爵、而不知此由之輩不尋件旨者也、

〔朝野群載四朝儀〕正六位上東儒紀朝臣季明誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例依格勤勞被敍一階狀

右謹撿案內、爲東儒之者、依其勞効預榮爵者、古今之例、蹤跡多存、望請天恩、因准先例、給榮爵方仰奉公之節、季明誠惶誠恐謹言、

永保二年正月十一日　正六位上東儒紀朝臣季明

〔延喜式中務十二〕女官雜用料

新嘗會〇中略

東豎子四人裝束料、人別絲絁四丈、帛二疋、綿四屯、元日亦准此但五月五日帛一疋、貲布四丈、紅花小二斤、並依內侍司移請充、

〔倭訓栞前編二十五比〕ひすまし　五節の下部にあり、類聚雜要に樋洗と書り、物語にひすましわらは、ひすましめくものなど見えたり、をさめ、みかはなどの類なれば、乾淸(ヒスマシ)の義なるべし、ほし反ひ也、女工の職業をもて名目によべるにや、榮花にすましともいへり、

〔倭名類聚抄坐臥具十四〕楲廁　說文云、楲音威、和名比、廁也、國語注云、廁音投、行淸廁也、

〔箋註倭名類聚抄坐臥具六〕按比、蓋廁中受糞之器、今廁中猶存比婆古之名、人放糞則提去、掃淸之、司之、女官曰比須万之、

〔延喜式内匠十七〕雕木一脚、〇註略　樋一合、高九寸、徑九寸五分、虎子一合、料漆二升四合、彫木八合、樋一升二合、虎子四合、〇下略

〔宇治拾遺物語三〕今はむかし、兵衛佐平貞文をば、へいちうといふ、〇中略　思かけて文やるほどの人の、なびかぬはなかりけるに、本院侍従といふは、村上の御母后の女房なり、世の色ごのみにてありけるに、文やるににくからず返ごとはしながら、あふ事はなかりけり、〇中略　いまはさはこの人のわろくうとましからんことを見て、おもひうとまばや、かくのみ心づくしに、思はでありなんと思て、ずいじんをよびて、その人のひすまし〇〇〇〇の、かはごもていかん、ばいとりて、われにみせよといひければ、日ごろそひてうかゞひて、からうじてにげたるを、をひてばいとりてしうにとらせつ、へいちう悦て、〇中略　みればぢん丁子をこくせんじていれたり、又たきものをばおほくまろがしつゝ、あまたいれたり、〇中略　ゆゝしげに、しをきたらば、それにみあきて心もやなぐさむとこそおもひつれ、こはいかなる事ぞ、かく心ある人やはある、たゞ人ともおぼえぬ有さまどもと、いとゞしぬ計おもへどかひなし、

〇按ズルニ、今昔物語ニモ此事ヲ載セテ、かはごヲ筥ニ作レリ、

〔禁秘御抄上〕一恒例每日次第

早旦供御湯、主殿官人奉行之、近代多經九、五位也、釜殿運湯、須麻志女官二人取傳、

〔日中行事略解〕すまし　ひすましともいふ、胡曹抄御樋洗、源氏玉葛卷ひすましめくもの、枕艸紙おほやけ人すまし、大鏡后宮のすましなど見ゆ、孟津抄すましは下女なり、最下の者なりと有、

長女
御厠人

〔源氏物語二十二玉鬘〕しもなる物、わらはなど三四人、をんなばらあるかぎり三人、つぼそうぞくして、ひすましめくもの、ふるきげす女ふたりばかりとぞある、

〔宇津保物語梅の花笠〕しもづかへはかちよりあらん、ひすまし六人あをにのうへのきぬきてあゆみ、○下略

〔類聚雑要抄三〕一樋洗装束○五節

一人袙三單衣打衣袴如常、付物忌如前、

〔兵範記〕仁安四年二月五日壬辰、今日於院殿上有皇太后宮行啓平野社定事、○中略

皇太后宮行啓平野社雑事○中略

一女房飾物○中略

女官十人 樋洗二人 物部二人 主殿二人 御厠人二人 長女二人　各絹二疋

〔榮花物語八初花〕五せつ廿日○寛弘五年十一月まいる、○中略右宰相中将しやうもあるべきかぎりしたり、ひすましふとりとゝのへたるすがたぞ、さとびたりと人ほゝゑみたりし、

〔増鏡六おりゐる雲〕大きおとゞの第二の御むすめ、東二條院○後深草后藤原公子女御にまいり給ふ、○中略御童、下仕、御はした、御さうし、御ひすましなどいふものまで、かたちよきをえりとゝのへられたる、いみじう見所あるべし、

〔日中行事〕辰のときにとのもりのつかさ御湯を供す、すましといふ女官是をとゝのふ、

〔八雲御抄三下人倫〕をさめ 下女

〔宇津保物語嵯峨の院〕宮たちの御めのとのいふやう、○中略我らいかなれば、宮のおさめ、みかはやうどのしりに、たつらんとはらだつ、

〔源氏物語十二須磨〕しりをよびたまふまじきおさめ、みかはやうどまでも、ありがたき御かへりみの

〻たなりつるを、〻ばしにても見たてまつらぬ程やへんと、思ひなげきたり、

〔侍中群要 四〕上宿事

入御夜御殿之後、隨女官告(長女(ヲサメ)御厠人也)參宿鬼間、

〔枕草子 一〕ひるつかた犬のいみじくなくこゑのすれば、なにぞの犬の、かくひさしくなくにかあらんときくに、よろづの犬どもはしりさはぎ、とぶらひにゆき、みかはやうどなるものはしり來て、あないみじ、犬を藏人二人してうち給ひ、〻ぬべし、ながさせ給ひけるが、かへりまいりたるとて、てうじ給ふといふ、

〔枕草子 一〕女房のずんざども、そのさとよりくるものども、おさめ、みかはやうど、たびしかはらといふまで、いつかはそれをはぢかくれたりし、

〔枕草子 七〕例ならず仰ごとなどもなくて、日比になれば、心ぼそくてうちながむるほどに、おさめ文をもてきたり、(○下略)

〔禁秘御抄 下〕雪山

藏人進見參給祿、(○中略)刀自(各三端)此外御厠人長女、

〔小右記〕天元五年五月八日己亥、今日中宮被行女官等饗祿事、(○中略)件饗等召長□御厠人等給、

〔名目抄 人體〕半物(ハシタモノ)

〔殿暦〕康和五年十一月十五日庚寅、殿上人遊間、余(○藤原忠實)候御簾內、(○中略)齋院御方半物三人裝束白內方被進、(殿上受領勤仕、菊紅葉リウタウ、)

〔小右記〕治安四年(○萬壽元年)八月九日甲子、術黑史義光令申云、御書所雜仕女落入後町井死去、

〔枕草子 十〕里にある比、(○中略)大ばん所のざうしぞ御使(○一條中宮藤原定子使者)には來たる、

〔續世繼 四宇治の川瀨〕きさきの宮のはじめつかたも、宇治の御幸ありて、皇后宮ひきつゞきていら

女官厨

雜載

せ給し、〇中略女房の車いろ〳〵にもみぢのにほひいだして、ざうしなどもみなくるまにのりてなん侍し、さき〳〵白川院の御時は、ざうしはみな馬にのりて、すきがさ、たゞのかさなどきて、いくらともなくこそつゞきて侍しか、これ女車にて、これぞはじめて侍し、

〔平治物語〕下頼朝生捕事附常磐被落事
六波羅ヨリ左馬頭〇源義朝子共被尋ケルニ、既ニ三人出來タリ、〇中略此外九條院〇近衞后藤原呈子ノ雜仕常盤腹ニ三人アリ、〇下略

〔小右記〕長德五年〇長保元年十一月廿二日辛丑、遣余車令迎僖姫、〇中略亥始令參入、前駈有數、陪從六人、童女二人、下仕四人、上雜仕二人、無樋洗、

〔類聚雜要抄〕三一上雜仕裝束〇五節
二人各袙三單打衣帷代面白裏縹打物タヤリウシ　濃袴如常

〔光臺一覽〕二御清所御膳場迄に御末之女中なり、御末の女中と申は、御配膳一通り先表役なり、禁中の被官又は官士の女なり、

〔延喜式〕三十五大炊女官厨一百五十六石小月一百五十七斗六升二合

〔延喜式〕五十雜式凡女官厨年料雜物者、隔三年一充、

〔拾芥抄〕中末宮城諸司厨町　女官町土御門北、堀川東、

〔續日本後紀〕十一仁明承和九年三月丁酉、勅、女官〇此下恐脫厨字別當雖非職員所掌之物不異諸司、宜准侍從厨四年爲限、遷代之日責解由狀、

〔延喜式〕十八式部凡侍從女官等厨別當、四年爲歷、責其解由預亦同之、但不立歷限、

〔日本書紀〕二十九天武二年五月乙酉朔、詔公卿大夫及諸臣連幷伴造等曰、〇中略婦女者、無問有夫無夫及長幼、欲進仕者聽矣、其考選准官人之例、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜四年三月庚辰、勅、宮人職事季祿者、高官卑位依官、高位卑官依位、但散事五位已上者、給正六位官祿、

〔延喜式 十四 縫殿〕凡命婦位祿宮人職事季祿馬料等、請受須給、季祿馬料、春秋臨時有增減、

凡定額女孺已下宮人已上春秋祿、請受須給、

凡職事已下宮人已上造祿文、料紙申省、春秋各五十張、

凡宮人已下女孺已上春夏二季料米直錢一貫文、幷漬料鹽四石二斗八升、各受所司、

〔延喜式 二十一 治部〕凡宮人職事身死者、皆給賻物、其散事者不在給限、

〔日本書紀 二十九 天武〕十年五月己卯、是日詔曰、凡百寮諸人、恭敬宮人、過之甚也、或詣其門、謁己之訟、或捧幣以媚於其家、自今以後、若有如此者、隨事共罪之、

朱鳥元年五月丙辰、宮人等增加爵位、

〔續日本紀 二十一 淳仁〕天平寶字二年八年丙午、増宮人職員、事在別式、

〔類聚國史 四十 後宮〕大同二年四月癸未、勅、宮人之職所掌不輕、隨事充用必可喚名、今勘于禮家、世婦以上不喚其名、然則先朝後宮喚名不便、宜停先朝夫人已下任官者、

○按ズルニ、唐六典内官ニ妃ノ下ニ六儀アリ、周禮ノ九嬪ナリ、六儀ノ下ニ美人アリ、周禮ノ世婦ナリ、美人ノ下ニ才人アリ、周禮ノ女御ナリ、我邦ニテハ女御ヲ世婦ノ上ニ置ケルモノニテ、ノ此ニ云ヘル所ノ世婦ハ、即チ更衣ヲ謂ヘルナラン、

〔延喜式 四十一 彈正〕凡聚宮人爲妻妾者、容隱私舍不肯出仕者、依法科罪、又娶親王及諸臣等驅使婦女、不令仕其主者、令本主具錄狀送京職、量加決罰、

〔寛平御遺誡〕内侍所者、有司已存、唯宮中之至難者、是後庭之事、今須其方雜事、御匣殿、收殿、絲所等事者、定國朝臣姉妹近親之中、可堪其事者一兩人、一向行事、日給之物、等第之類總可處分、治子朝臣自

昔知絲所之事、口之間猶令兼知之、息所菅氏、宣旨滋野等者、日々出居女房之侍所、行藏人等日給之事、兼正進退禮儀、至有更衣之時、又加敎正禮節、其更衣藏人隨事給賞物、依功授官爵之事、皆悉可執奏申行也、菅氏是好省煩事之人也、宣旨又寛緩和柔之人也、激勵各身、令勤仕之、新任愼之、

〔禁秘御抄　上〕一恒例每日次第

抑御手水、近代內侍內々供之、昔女官所獻也、今前後不定之間不用之、主水司供之、御手水女官昇之、參立御手水間前、（下略）

〔禁秘御抄　下〕女官

臺所女官、御裝束物沙汰不可、口人供御、但近日兼刀自、同類諸女官等訴訟之時、群參之外無殊事、御湯殿女官奉公物也、無指俸祿、尤不便、他女官等如浮雲歟、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、祿法、（○藤原多子女御入內祿法、中略、）

典侍四人、　各女裝束一袋　衣一重（濃）　長絹四疋（絹裹、有垂、）　掌侍六人　各女裝束一袋　長絹三疋（綾裹）　命婦十二人、　各綾一重　長絹二疋（綾裹）　藏人六人　各白褂一重　長絹一疋（紙裹）

得選三人　各白褂一重

女官祿　內侍所　女史六人（博士一人、白褂一重、次五人、各袴一腰、六丈絹二疋、）　闈司十二人（各六丈絹二疋、）　理髮六人（各六丈絹二疋、）

水取十六人（五位二人、各六丈絹二疋、六位十四人、各疋絹一疋、）　御門守六人（各疋絹一疋）　硯磨一人（疋絹一疋）　內侍十人　今良

二人（各布一段）

糸所　預一人（六丈絹一疋）　女孺六人（各疋絹一疋）　刀自四人（各疋絹一疋）　官人代一人（疋絹一疋）

大盤所　長女九人（各疋絹一疋）　御厠人九人（同）

上御厨子所　刀自六人（各疋絹一疋）

下御厨子所　刀自六人（各疋絹一疋）　水守三人（各疋絹一疋）

御膳宿　釆女卅二人(四位二人、各六丈絹三疋、五位二人、各同絹三疋、六位廿八人、各同絹一疋、)　刀自廿一人(各疋絹一疋)
進物所　刀自一人(疋絹一疋)　御手水　命婦一人(各六丈絹一疋、)　女官廿人(各疋絹一疋)
書司　預一人(疋絹一疋)　女孺六人(各疋絹一疋)
縫殿　女孺十六人(五位二人、各六丈絹二疋、位十四人、各疋絹一疋、)　油守十人(各疋絹一疋)　今良十人(各疋絹一疋)
藥司　預一人(六丈絹一疋)　女孺五人(各疋絹一疋)　掃部　女官十六人(各疋絹一疋)
東豎子二人　五位一人(六丈絹二疋)　六位一人(疋絹一疋)
釜殿　仕丁四人(各布一段)　大盤三人(各布一段)
主殿司九人(各疋絹一疋)

〔江家次第十七〕立太子事

內侍司進₂差文₁

女史一人　御髮上一人　番所二人　水取二人　墨摺一人　主殿女孺三人(或六人)　厨女孺一人　洗二人　長女二人　御廁人二人　油守二人　掃部女孺六人

〔玉海〕元曆元年十一月廿二日丁未、五節事畢、舞姬已下今夜退出、大將(○右大將良通、藤原兼實子、)五節裝束已下饗祿等注文、(○中略)

一饗(○中略)
雜菓子　內侍所女官卅合　掃部女官廿五合　同男官十合　御服所女官廿合　洗女官十合
東童三十合　御手水女官十合　御匣殿女官十五合　主殿女官廿合　御藥女官十五合
御膳宿女官十五合　御湯殿部目十五合　進物所女官廿五合　水司女官十合　御樋殿女官十合　小歌女官四十合　大盤所女官卅合　上御厨子所十合　上刀自廿五合　命婦十五合
藥殿十合　書女官十合　油守十合　主水十合　御門守十合　女史十合　內膳刀自十五

合　釆女中廿合　同官人中十五合　縫殿女官十合　御井廿合　畢摺十合　闈司十合　糸所十五合　水取十合　女孺十合　當女十合　上御厨子所廿合　御厠人十合　長女十合
御服所命婦廿合　下御厨子所十合　御髮上女官廿合　主殿十合　女工所十合　女孺十合
藏人所五十合　行事所小舍人卅合　仕人中廿合　內竪中五十合　官召使廿合　木工寮十合　和德門十合　朔平門十合　脇陣廿合左右各十合　縫殿陣十合　內膳十合　六府各十合

〔類聚雜要抄三〕五節雜事 內大臣(藤原忠通)令二五節進給定文

一大破子〇中略
藥殿女官　廿合一荷
主水女官　進物所女官　闈司女官　御服所女官　絲所女官　掃部女官　硯磨女官　洗女官
主殿女官　御藥女官　御湯殿女官　小歌女官　御手水女官　油守道女　宣旨御厨子所
以上如前〇中略
大盤所女官　御膳宿女官　上御厨子所女官　御髮上女官　內膳御炊　御火女官　文女官
御櫛筥殿女官　御門守東童　比女大夫
以上同前〇廿合一荷、中略、
永久三年十月十九日
右永久三年、內大臣殿令二五節出給定文之定也、

〔古今著聞集十七變化〕建保の比、御湯殿の女官高くらが子に、七歲に成あこ法しといふ小童子有けり、

〔枕草子十〕ないがしろなる物　女官どものかみあげたるすがた

〔光臺一覽二〕典侍內侍御下に不限、女官にても天子の御前向は麻類不著、夏も白袷にて帯せず、局方は下りへ引廻し、肌の小紐にはさみ、上かへともに右に引まわし插み、下襲上の袴袍なり、袍は

身單にて綾地、襟袖口は色綾にて、十二重襲懸たる袍なり、夫を十二一重といへり、御下は十二一重は不叶なり、又典侍內侍之上貴之內御配膳にまいりたまふ衆、又は宮樣方幾方も御誕生有方など聽色とて、女中禁制の色をゆるさるゝ事也、是禁色御免の上﨟といへり、御前向は足袋は不叶、襪子も御免の衆計被召なり、此三段の女中方、かわる〴〵御宿番有之、非番には我局江被休御事なり、總別夜毎にみかうしふれとて、天子御寢のふれ無之內は、非番の局方も御休候事不叶、○中略扨又御配膳には、御下之間、鈴之間迄は、典侍內侍の色をゆりたる衆、夫より御淸所御膳場迄は、御末之女中なり、御末の女中と申は、御配膳一通り先表役なり、禁中の被官、又は官士の女なり、女孺衆と申數多御座候、○中略外に奧御賄の女中まで、第一を御阿茶の局と申、第二おたゞと申、第三をおかたと申通名なり、三女中の役は、典侍內侍お下の女中方の、御綺なされがたき事を、御沙汰申さる御事なり、尤官士の女なり、○中略凡局方は、長橋殿家領地方二百石餘勢澤山、典侍方より內侍方百五十石なり、百石より少知は無之、皆地方にて拜領ものなり、其上官途の餘勢、御配り拜領物多く有之勝手能なり、

〔後水尾院年中行事下〕一女中衣裳に近代さま〴〵の法ありて、うきおり物は、典侍已上は勿論典侍まで著用なり、ゑつめおり物は品によらず著用、是等いづれも色目は、白紅梅貫白三色の外他色をまじへず、おり物は繪やう定らず、板のものゝ大身ばかり、四かはり、八かはり、十六かはり、かた裾、七段五段十一段十三段十五段にちがへ、かたすその段は、きかけしゝらそういす等のもの也、凡すゞし品を論ぜず著用、典侍までは縫を著用、そめ物は勿論也、たゞしいづれもかたすそ也、染ものはたん四かはり等の物は地なしをも用之、本など用ふ、ないし已下はそめ物を用ふ、縫の紋は草木等の物なり、但定やうなし、染物はひしひがき等の花紋に雲ひきりやうのうは紋こいへにや、丸すゞしには紋に萌木を入也、あやは勾當ないし迄は著用、唐あや、りんず、どんす、ゑゆち

ん等の唐物、近代品によらず、下﨟といへども著用す、不審の事也、御さかづきなどのことあるときのうはぎには、必袷をきるなり、

一典侍已下は三ゑりの外はかさねず、自然極寒時なほとりかさぬといへども、ゑりをつゝみて著也、但上らふ已上は四ゑりをも著用也、年齢廿八の暮よりは、白衣裳の外を著せず、〇中略

一當時女中内々にては、髪の根を結ぶ事あり、御さかづき事、御ぜんの御はいぜん手なが等の人、これをゆるさず、或は老者、或は髪すくなき人不自由につきて、御ゆるしの事あり、さはなくても、御菓子茶風情の物は、髪の根をゆひながらもはゞからず、

一女中引眉はかつてなき事也、近比をり／＼みゆるなり、はいぜん手ながの人などは、ことにゆるしなき也、

一女中宮づかひのはじめには、むかひのものかど〇かと恐とか誤いひて、下行をたぶ、員数は時宜にあるべき歟、いかさま上﨟中﨟下﨟の差別あること也、御方の御前などにても相應のことあるなり、

一御今まゐりとかいひて、女中宮づかいのはじめつかた、きぬを著しそむる日時には、髪をあげて、だいばん所にて内侍所の方にむかひて拜せしむ、〇中略

一二親の服には、女中已下釆女、刀自、女官、女孺にいたるまで、一周忌の間出仕せず、根本は男女ともに、服の内出仕せざれども、近代男は五旬の後召出されて、職事除服を書つかはす也、女房は除服かくべきやうのなきにより、五旬の已後なほ出仕せず、一周忌の後出仕のときは、年中用たる衣服調度までをあらためて、御所にては服間用たるものをかいて不用、此ころ御人なき時は、女房といへども、五旬後口づからいひつたへて、めし出すことあり、

明治三十七年十月二十日印刷
明治三十七年十一月一日發行

神宮司廳

昭和七年十月一日印刷
昭和七年十月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一〇五四番
三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）